

---

# ゼロの使い魔 i f / ガンダールヴは夢を見る。

痴れ者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔 if / ガンダールヴは夢を見る。

### 【Nコード】

N7624I

### 【作者名】

痴れ者

### 【あらすじ】

要望により、一時再開致します。携帯用？にどうぞ。ガイドラインよりR15としております。本作品はArcadia様に投稿しております。

epilogue | bridge : ガンダールヴは夢を見る。(前書き)

Attention Attention Attention  
! 注意! Attention Attention Att  
ention

このSSは痛い痴れ物の妄想文です。それを踏まえてお楽しみ下さい。

又、本SS公開開始時において原作17巻時点までの設定でプロットを構成しておりますので

一部原作とは乖離している設定となっております。(主にワールド関係)

どうぞご留意願います。(10・01・24追加)

又、作中に一部グロテスクな表現があるので苦手な方は注意して下さい。

あと、すこしだけえちいかも。

程度はライトノベルなどで表現できる位だと思います。

Attention Attention Attention  
Attention Attention Attention  
Attention

epilogue | bridge : ガンダールヴは夢を見る。

prologue .

シオメントはイーヴァルディに尋ねました。

「おお、イーヴァルディよ。そなたはなぜ竜の住処に赴くのだ？あの娘はあんなにもお前を苦しめたのだぞ？」

3

イーヴァルディは答えました。

「わからない。なぜなのかぼくにもわからない。ただ、ぼくのなかにいるなにかが、ぐんぐんとぼくをひっぱっていくんだ。」

(スノーリ・ストウルルソン著『イーヴァルディの勇者』より)

突然だが俺、平賀才人は今まさに死のうとしている。

八十四年。

俺が今日まで生きてきた時間。

結局元の世界には帰らなかった。

異世界でその生涯を終える事に後悔はしていない。

「しかしこのルーンは凄いな。とっくに寿命が来ちまってるのに、ルイズが傍にいただけでこうやって延命できるなんて。」

横たわるベッドの傍らで哀しそうな顔をして、愛しそうに己の手を握る妻に笑いかける。

死の間際、もはや喋る事も叶わない筈だったが、この可愛い主人の想いはルーンを通して僅かな力と時間を俺に与えていた。

「ねえ、サイト。後悔してる？」

「……いや、していないよ。少なくとも地球に帰らなかったことは。

」

幾度と無く繰り返され続けた問いに、いつもの様に答える。

「……ただ、他の事で後悔してるかな？」

「……何？まさかアニエスとも隠し子を作ってたの？それともタバサの妹の方かしら？」

聖女、始祖ブリミルの再来とまで言われた先代教皇の瞳に怒りが宿

る。

信徒、異教徒、平民、貴族。全てに向けられ続けたその慈愛に満ちた姿は一瞬でなりを潜め、飼い犬を調教するご主人様へと切り替わる。

超怖い。

できるならこのまま無事に天寿を全うしたい。

「いや……随分ルイズを泣かせたな、って思ってたさ。」

「……わかってるじゃない。アンリエッタの時も、タバサの時も、ティファの時も本当に辛かったのよ?」

「しゅん……」



それはルイズのブリミル教教皇就任の時。

トリステインからアンリエッタ女王が、ガリアからはシャルロット女王が

再興したアルビオンからはティファニア女王が祝賀の為にロマリアへ訪れ、何年ぶりかの再会を

互いに喜んでいた時の事。

それぞれの国での政情不安解消の為にある提案がルイズに為された。

「英雄・ガンダールヴのサイトの血を各王家に入れ、トリステイン・ガリア・アルビオンそしてロマリアと強固な同盟を組む」

提案にルイズは怒り狂い、ニヤけた俺への「調教」が行われ、その内容に触れることは

ブリミル教最大の禁忌となった。

「ねえ、ルイズ。これは真面目な政治のお話なの。」

私たちが生きてる間はいいのよ？私とあなたはもちろん、シャルロットやティファニアはお友達だし信用だってできる。

でも、私たちの子供達がそうだとはい限らない……そうでしょう？

……あのね、王家同士を強く結びつける為には信頼だけではダメなのはルイズだってわかるでしょう？

家柄も大事だけど、今の貴族社会を維持していくときつとまた戦争が起こるわ。

だからね、王家の正統性の中に新しい制限として” サイトさんの血を引く” という掟を作ろうと思うの。

サイトさんの人気は平民の皆さんの間じゃ絶大だし、私たちも貴族達の派閥も気にする必要も無いわ。

貴族達の平民への意識改革を女王である私たちがハルケギニアに示す事にもなるのよ？

……それに皆サイトさん以上の男性がこの先現れるとはもうだれも思えないのよ……」

一月に渡るアンリエッタの説得の末、俺の妻は自分一人だとする事を条件に渋々認めるルイズだった。

この提案は功を奏し、度重なる戦争で疲弊していたハルケギニアに安定をもたらす。

更に先日俺の孫に当たるガリアの姫君（ヒルダちゃん）とつって可愛  
いんだこれが。）がゲルマニア王に嫁ぎ

”大ハルケギニア同盟” を締結した事で、更なる平和と繁栄の将  
来が約束されていた。

「それでもね、必要だったとわかってても辛かったのよ？」

「うん……あの提案は受けるべきじゃなかった。結局、アンリエッ  
タもタバサもティファもシエスタも皆辛い思いをしてたしね。」

「そうよ。サイトの血を入れるなら私達の子供の代からでも遅くは  
無かったのよ。私がどれだけ影で泣いてきたと思ってるの？」

「うん……本当にごめん……ちゃんと皆失恋させるべきだったと後悔してる。」

「……やり直したい？」

ルイズの問いに俺は目を閉じ、弱弱しくとも確かな声で答えた。

「うん。ルイズをあんなに泣かせた事を心から後悔してる。できるならやり直したい。」

俺はそう口にして目を開く。

目蓋が重い。

最後の時が近いことを実感する。

ルイズもその事を感じ取っていた。

「私のこと、愛してる?」

「うん、愛してる。」

「私のこと、守ってくれる?」

「うん、きっと守るよ。死んでも、使い魔でなくなっても。」

俺の目蓋は再び閉じられていた。

まだ意識はあるがもう開くことはないだろう。

「もし……やり直せるならまた私の為に戦ってくれる?」

「うん。……何度でも。ルイズが……笑ってくれるなら。」

「約束、して。」

もはや目は開かないが、ルイズがどんな顔をしているかわかっていた。

「約束するよ。」

「じゃあ、これは契約ね。」

唇にルイズを感じた。

次に目蓋の向こうに光を感じる。

俺は意識を手放す瞬間、愛する妻の声を聞いた気がした。

「愛してるわ、サイト。」

それは老女となった妻でなく、恋人だった時の少女の涙声だった。

そしてゼロへ戻り、ガンダールヴは夢を見る。





1 - 1 : あんた、感謝しなさいよね。

「あんた誰？」

懐かしく、聞き覚えのある声とする。

目を開くとあれ程弱っていた視力でもよく見える懐かしい景色。

走馬灯だろうか？

いや、それにしておかしい。

手足の皺も消え、ルーンの発動無しでは歩くことすらままならなかった体も軽い。

ただ、服装と頭痛はあの時と同じだった。

声の主を確認する。

「ちょっと、聞いてるの？あんだどこの平民？」

そこには妻のかつての姿があった。

見覚えのある少年少女達になにやらからかわれ、今は亡いはずの恩師に「もう一回やらせてください！」と訴えている。

間違いない、”これ” はあの時の風景だ。

あの愛しい主は使い魔の最後の願いを叶えてくれたのだろうか？

「あんだ、感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通

一生無いんだから。」

気がつくとも目の前に少女はいた。

とりあえず考える事は後にした方がよさそうだ。

そう考える内に目の前の少女はなにやら呪文を詠唱し、その唇を近づけてくる。

行われるのは契約のキス。

懐かしい感触の余韻に浸る俺を余所に、ルイズは再びクラスメイトにからかわれていた。

どうやら夢でも死後の世界でもないようだ。

本当に ” あの時 ” に戻ってきてしまったらしい。

夢で無い証拠として徐々に体が熱くなり……

「ぐっ……ぐっ……ぐっ……ぐっ……ぐっ……」

以前のように悲鳴は上げなかったが、それでも激痛はつめき声を出させる。

「すぐに終わるわよ。 ” 使い魔のルーン ” が刻み込まれているだけよ。」

「そんな他人事みたいに言っなよ、すっげえ痛いんだぜコレ。」

痛みを堪え、それでも親しげに訴える。

「あのね？」

「なんだ？」

「平民が貴族にそんな口利いていいと思ってるの？ なんだか随分馴れ馴れしいし。」

俺は苦笑いをする。

そういや初めて会った頃のルイズはこんなだったな……

それにこのルイズは自分の事を知らないのも当たり前だよな。

「申し訳ない。馴れ馴れしいのは生まれつきなんだ。それに貴族つてのも始めて見るし、よく知らないんだ。」

「まったく、どこの田舎ものよ！ 貴族を知らないなんて信じられない！」

「ミス・ヴァリエール、いい加減にきなさい。……ふむ、珍しいルーンだな。あとで調べておこう。さてと、じゃあ皆教室に戻りますよー」

いつの間にか傍にきていたコルベール先生は俺の左手に刻まれたル  
ーンを確認し、他の生徒に声をかけた。

ルイズはなにやら悪夢よ、なんでこんな冴えない生き物が……とブ  
ツブツ呟いている。

そこまで落ちこむなよ、へこむじゃないか……

周りにいた生徒たちはルイズをからかいながら次々と飛び立ってゆ  
く。

そしてその場は俺とルイズの二人きりになった。

「まったく、どこの田舎から来たのかしらないけど説明してあげる。」  
（知ってるけど、とりあえず黙ってるか。しかし、ルイズ若いなあ  
……可愛いなあ……。うん、俺こいつを嫁にしたんだよな。GJ俺  
……！）

「ここはかの高名なトリステイン魔法学院。わたしは二年生のルイ  
ズ・ド・ラ・ヴァリエール。」

今日からあなたのご主人様よ！覚えておきなさい！」

「わかった。俺は平賀才人。サイトと呼んでくれ。よろしくな、ご主人様。」

そう言うと俺はニツコリと笑う。

ルイズはその笑顔を見て顔が紅くし、少しだけうるたえている。

初めてだったんだろうな。

この学院に来て初めての貴族への恐れがなく、蔑みでなく、身分への媚でもなく、純粹な好意として向けられた笑顔ってのが。

そんなルイズを余所に俺は続ける。

「じゃあ学院に戻ろうか。俺の事は道中おいおい話すよ。ご主人様の事は……使い魔の契約の影響かな？知識としてあるからいいよ。」

「わかるの？私の事。」

「ああ。魔法が使えない事とかキュルケって子とは特に仲が悪い事とか、あとゼロのルイズって呼ばれてる事とか、ね。」

「！」

「おっと、怒らないでくれよ。別に俺がそう思ってるわけ……アダ！！そう思っていないって！！殴らないでくれ！！」

「お、おちつけルイズ！な？俺はむしろご主人様はすごい魔法使いになるってえ！いてえ！！」

「うっかり口にした「ゼロのルイズ」という言葉に反応して我を失ったルイズの折檻により」

「初めての出会いの時と同じように気絶した。」



「それほんと？」

所はルイズの部屋、すでに日も暮れ夜になっていた。

夜食のパンを手にしなから俺の話に耳を傾けるルイズ。

もちろん俺の分のパンはない。

そつえば最初は今よりもっと険悪だったなあ、と暢気に考えながら俺はルイズに地球の事を話していた。

前回と違い既にハルケギニアの知識がある俺ならもっと他に誤魔化しようがあるんだが、あえて前と同じ説明をする事にした。

その理由はパーカーのポケットに忍ばされていた一通の手紙。

ルイズと共に寮に戻った後、教室に戻る折に部屋の掃除を言い渡された後の出来事だ。

俺はパーカーのポケットに手紙が入っている事に気がついた。

どういった方法で忍ばせたのか解らなかったが、取りあえず差出人はかつて妻だった方のルイズ。

手紙は二枚あり、一枚目には箇条書きで以下のように書かれていた。

・まず、この手紙は才人の消滅後に書いている旨。

・今まで何時才人の気が変わり、地球に戻りたくなくても良いように世界扉の魔法の研究をしていた事。

・世界扉の魔法は異世界同士を繋ぐのではなく、時間を超える扉であつた事。

・ハルケギニアは地球の遠い未来、もしくは遠い過去なのかもしれないとの事。

・本当は才人のいた時代の地球に戻すつもりだった事と、最後の願いを聞いて”この時”に才人を戻した事。

・それから今度は自分以外の女は抱くなという脅し文句。

・歴史を大きく変えようとするとその時空から拒絶される恐れがあるので、大きな流れは変えようとしてはいけないという事。

・もしそちらで願いが叶っても、こっち（未来）には影響はないから子供達の事は心配いらぬとの事。（世界は分岐するものらしい。）

・そっちのルイズがこの手紙を見ないよう、見終わったら早急に処分する旨。

二枚目はルイズからの言葉で、

言っとくけど、そっちの小さなルイズは甘やかしちゃダメよ？

うんと悩ませて成長を見守ってあげてね。（ただし、浮気したら

どこにいようと今度こそ引っこ抜くからね！）

そうじゃないと、幾ら若返ってもサイト一人強だけじゃやっていけないと思うし。

それにそつちの私とうまくやってれば世界扉で今度こそチキユウに帰れるかもしれないしね。

結局、私はサイトを失う事に最後まで耐えられなかったわ。

死に行く貴方を見送れず、チキユウへも送れず、再び私の手元に送ってしまった。

ブリミル教前教皇、聖女ヴァリエール、虚無のルイズが聞いて呆れるわね。

ごめんね、サイト。

としたためられ、最期に「愛している」の一文が添えられていた。

それを泣きながら読んだ俺は、アンリエッタ達との間に子を為した事を除き

なるべく以前と同じ行動をとろうと決めたのだった。

無論、ルイズを泣かせる事も極力無しとする方向で。

「ああ。俺はこの世界の人間じゃないようだ。」

「平民の分際で貴族に嘘つくのはどうかと思うわよ？」

「嘘ついてどうするんだよ？」

「……別の世界ってどういふことよ？」

「まず、魔法使いはいない。月も一つだった。」

「信じられないわ」

「これが証拠になると思う。」

胡散臭そうな目を俺に向けるルイズ。

俺は持っていた荷物からノートパソコンを取り出して電源を入れる。

持ち物は手紙を除けば初めて召喚された時と同じだった。

「きれい……」

「言っとくけどマジックアイテムじゃないぞ。カガクっていう技術なんだ。」

「カガク？何の系統よそれ。」

「魔法じゃないって。」

「ふうん……でもコレだけじゃわからないわよ。」

「まあ、いきなり信じろって言っても無理だよな。」

俺は苦笑いを浮かべてノートパソコンをしまう。

「まあ、俺の出自なんて後から信じてくれればいいさ。大事なのはお互いの相互理解だろ？」

「そうね。でもあんた魔法使いじゃないんでしょう？平民の癖になんか特技があるの？」

「そうだなあ……俺は感覚の共有はできないし、秘薬や触媒も見つけられない。」

「はあ……ほんと最悪だわ……」

「そう言うなよ。こう見えても剣士としてはかなりのもんなんだぜ、俺。」

「あんだねえ……幾ら剣の腕が立つって言ってもメイジに敵うわけないじゃない。」

「うわ、信用しろよお。」

「できる訳ないでしょ？あんたカラスにも負けそうだし。」

「ひどっ!?!?……うーむ、やっぱり信用してくれないか。まあ、無理だよなあ……」

ルイズは頭を抱える俺の様子を見て呆れていた。

この平民の使い魔は貴族である自分にまったく敬意を払わない、それどころかやたら馴れ馴れしく接してくる。

とすこし警戒しているのか、その目が語っている。

わかりやすい娘だなあ……

なんで若い時分は気が付かなかったんだろ?

「いいわ。あなたにできる事をやらせてあげる。洗濯、掃除。その他雑用。」

「ま、いいけどさ。まさか着替えも俺にやらせんのか?」

「当然じゃない。私は貴族、あなたは使い魔の役目すらこなせない



平民。」

「恥ずかしくないのか？」

「ペットの犬の前で着替える事が恥ずかしいわけではないじゃない。」

「俺はここでも犬なのか……」

ルイズとの結婚生活の暗い部分を思い出し、俺はすこしへこんだ。

「犬の調教」モードになったルイズは本当に容赦なかった。

正直、お義母さんなんてメじゃなかった。

お義父さんと夜があけるまで酒を飲みつつ愚痴を話したのは本当にいい思い出だ。

とにかく、少なくとも俺が本当に貴族を知らないという事は信じてもらえたようだ。

そんな事を考える内にルイズはあくびを一つして、その日は寝る事になった。

痛い。

体中が痛い。

何年ぶりだろう、石の床で寝たのは。

シエスタとの間にまで子供を作った事がばれて以来？

あの時は辛かった。

一年近く冷たい教皇の執務室の床で寝泊りさせられ、教団の炊き出しに混じってスープを恵んでもらったっけ。

面会にきてたガリアの司教のおっさんが優しかったなあ。

そりゃあ流石に他の皆はよくてなぜ私だけ、と泣かれるとなあ……断れないよな？普通。

それに比べれば今のご主人様はやさしい。なんと毛布を一枚くれたのだ。

ついでに下着も洗っておけとくれた。

うん、朝から眼福眼福。まだ十代の美少女の使用済み下着が、その日最初にみた風景だったなんて。

俺はそんな事を考えながらムクリと体を起こした。

あちこち痛む体をさすりながら、軽くストレッチを行う。

動く。

よく動く。

昨日まで死に掛けた老人だった体は、若さに溢れていた。

折角だから明日から早起きして体を鍛えようと考える。

若返ったのはいいがまだ剣を振るう前の体らしく、筋肉がほとんど付いていないのはなあ。

「おい、ご主人様、朝だ。」

着替えを用意してルイズを起そうと声をかけるも反応は無かった。

幸せそうな顔で寝ているルイズを見てイタズラ心がわく。

勢いよくガバッと毛布をはぐと、ルイズは目を閉じたまますばやく起き上がり左右を交互に見る。

その様子は小動物のようだ。

うん、かわいいぞルイズ。

「え？なによ！なにになに？何事？？」

「朝だよ、ご主人。」

「え？あんただれ？」

「平賀才人。もう忘れたのか？」

「ああ、使い魔。そうね、昨日召喚したんだっけ。」

「ほら着替えるぞ。」

「……なんであんたが下着の場所まで知ってるのよ？」

「昨日学院に帰る前に言っただろ？知識としてご主人の事は頭に入

ってるんだよ。」

「なにそれ？使い魔の特殊能力？」

「かもな。ほれ、下着。」

「なんか手つきがヤラしいわね……いいわ。下着位自分で着替える。」

「そうか。後ろ向いてるからとっとと着てくれ。」

「ん、しょっと。こっち向いていいわ。服を。」

慣れた手つきで服を着せていく。

「ふうん、中々やるじゃない。あんた貴族知らないってウソなんじゃない？」

「え？」

「初めてのわりには貴族の服の扱いとかしっかりしてるし。」

「ああ、貴族……って訳じゃないけどここに来る前も身分の高い人に仕えてたからな。」

「へえ。」

「いったろ、俺は剣士だって。護衛が本職だったんだけど、身の回りの世話もかねてたからな。」

（本当はお前に仕えてただけだな。）

「ふうん……ま、それ位はできてくれないとね。それでも使い魔としては最低よね……」

「信じてくれよ……俺、結構強いんだってば。」

「いいから、朝食を摂りに行くわよ。」

俺は手を顔に当てながら前途多難だな、と呟く。

思えば彼女の好意を受けるようになったのは何時からだろう？

ギーシュとの決闘騒ぎの時？

破壊の杖を取り戻そうとした時だろうか？

ああもう、わからん！

一回死に掛けたときは既に好意を持ってくれてたと思うんだが

それ以前は犬へのご褒美なのか罪の意識だったのかハッキリしない。

あいつ意地っぱりで結婚した後も何時から惚れてたとか教えてくれなかったもんなあ……

部屋を出た俺たちは廊下でキュルケと鉢合わせていた。

何やら考え込んでいる俺をほっといてキュルケとルイズが険悪な様子で挨拶を交わしている。

キュルケは一通りルイズを馬鹿にした後、自慢げに自分の使い魔であるサラマンダーを呼ぶ。



そんなやり取りを尻目に俺は一人で悩んだり落ち込んだりしていた。  
その様子に気が付いたキュルケは才人に向かって話しかける。

「あなた、お名前は？」

「え？ああ、すまん。平賀才人って言うんだ。」

「ヒラガサイト？変な名前。」

「サイトって覚えてくれ。よろしくな。」

（うおおおお！！キュルケ若けえ！チチがメロン！チチがメロン！）

「ちょっと！よろしくしないでいいわよ！！」

「じゃあ、お先に失礼。」

内心テンションがあがる俺と食って掛かるルイズを余所にキュルケは去っていった。

キュルケが居なくなるとルイズはこぶしを握り締め、悔しそうにうめく。

「くやしいい！なんであいつはサラマンドーでわたしにはあんなのよー！」

「あのね、ご主人。……俺、結構強いんだよ？」

「うっさい！」

ルイズの平手が飛んできたがひょい、と避ける。

「避けるな！」

「命令なら。」

俺はルイズに向き合い、直立不動の姿勢で平手に備えた。

「なあ、引っぱたく前に言わせてくれ。気分次第で自分の使い魔……平民でもいい。平民をぶつたりするのがメイジや貴族なのか？」

「な、なによ！使い魔の癖に！」

「言つたる？おれはメイジも貴族の事も知らない。だから教えてほしいんだ。」

「それはあんたが……」

「俺が？」

「……なんでもない。行くわよ。」

ルイズはバツが悪そうに歩き出す。

その様子を見て才人は微笑を浮かべた。

やはりルイズはルイズだった。

素直ではないが根は優しく、聡明な娘なんだよな。

ちょっと短絡というか浅慮というか又けてるけど。

てか結婚後は俺の行いもあって、気分次第でボコられても文句言えなかつたもんな。

源氏物語じゃないけど、今の内にできれば手を打っておきたい！

むしろ浮気しないからそれ位目を瞑ってほしい！な、いいだろルイズ！！

「何してんのよ！早くついて来なさい！その……あんたが悪さしない限りぶつたりしないわよ！！」

顔を真つ赤にしながら使い魔を呼ぶその姿を見て、心から再びこの主に仕えられる事に感謝する俺だった。

1 - 2 : 俺にはわかるんだよ

「は？」

朝食（俺のはエサ）を食べ終え、授業を受けるべく教室へ向かって  
いる時に愛しいご主人様にはじめてのおねだりを試みた。

「いや、俺剣士だろ？ 剣とは言わないけど、短剣でも持たせてもら  
えないかな？」

「何言ってるのよ？メイジがそんなもの持ってるわけ無いじゃない。」

「でもイザって時にご主人守れないとなあ……」

「カラスにすら負けそうなあんたが私を？」

「信用してくれよう。俺、結構強いんだってば。」

「いいから、行くわよ。」

取り付く島もない。

まずい。ものすごくまずい。

このままではギーシュにフルボッコにされてしまう。

只でさえ老衰から寝込んで以来、剣を握る事から遠ざかっていたのだ。

それこそ若い時分は3国の王太子の父親として、結構な数の暗殺者に狙われ

その度に返り討ちにしていたので腕には自信があった。

ハルケギニア最強と言われた時期さえもある。

しかし、老いと各国の政情安定化を理由に実戦から遠ざかり、すっかり鈍っていた。

剣の素振り程度は行っていたが、それも80歳の時に腰を痛めてやらなくなっていた。

晩年では自力では動けず、ガンダールヴのルーンを発動させないとトイレにも立てない有様だったのだ。

とりあえず体は鍛えなおすとして、記憶が正しければ今日の昼にギーシユと決闘を行うはずだ。

ここは是非ルイズにいい所を見せておきたい。

しかし、武器がない。

武器がないとルーンが発動しない。

ルーンが発動しない今の俺は只の犬、ドットクラスのメイジどころかカラス以下なのだ。



という訳でルイズに武器をねだってみたのだが……

「なにボサっとしてるのよ！早くきなさい！」

取り付く島が無い。

ああ、やっぱり俺はボコボコにされないとかダメなのかなあ……  
決闘始める前にギーシュをおだてて剣でも作らせるかな？

などと考えながら俺はルイズの後を追う。

「ご主人、マントもって来たぞ。ここは俺がやっつくからとりあえず部屋に戻って着替えてこいよ。」

ルイズは無言で俺からマントを受け取り、ボロボロになった服の上から羽織る。

ルイズの魔法により半壊した教室に俺たちはいた。

授業の一環として、錬金を行うよう教師に命じられたルイズの魔力が暴発したのだ。

教師は一命を取り留めたようだが、罰として教室の修復を命じられたのだ。

「まあ、気にすんなよ。ご主人の魔力は扱いが難しいんだよ。」

部屋へ着替えに戻ろうともせず、悔しそうに俯いて唇を噛む主を慰める。

この勢いでタバサ並に無口でおとなしい子になってくれまいか。

その言葉に反応してやっと口を開いたルイズの声は低く、冷たかった。

「あんたに何がわかるのよ？魔法も使えない平民のあんたに。」

「わかるよ、ご主人の事は。ほれ、知識としてあるからな。」

はっと顔を上げ俺を見るルイズ。

そんな彼女にニカツと笑いかける俺、気分だけイケメン。

「俺にはわかるんだよ、ご主人は最高の魔法使いになるってな！」

「何を根拠にそんな事言うのよ！あんた知ってるんでしょ？！私の不名誉なあだ名の意味を！」

「根拠つてのはほら、使い魔になった時に得たご主人についての知識？それに、ゼロって言われても魔力が無いわけじゃないんだしさ。」

「じゃあ、何？どうすれば私が魔法を使えるようになるのか知ってるわけ？」

「知ってるよ。」

俺の言葉にルイズは胸に手を当てた。

トクン、と小さな胸が大きく高鳴っているんだろう。

うん、かわいいぞ未来の嫁。

「な、なななななななでそんな大事な事言わないのよ！……お、お、おおおおこららないからさっさといいなさい……！」

「いでえ……！ルイ……ご主人、いだい！髪引つ張らないで……！50まではちゃんと残る予定なんだから……！」

「ほほほほほら……この口……この口……この口がもったいぶってるの……？」

「は、はじゃふいへ……！」

でもその可愛い仕草で油断させといて、いきなり飛び掛ってくるのはどつかと思つぞ、未来の嫁。

結局ルイズが落ち着くまで様々な折檻をつける俺だった。

「はあ、はあ、とっとと話さない!」

「いつつ……わかったよ。別にもつたいぶってる訳じゃないぞ?ル……ご主人が止めてくれないのがっ……」

わかったよ、わかったから蹴らないで。じゃあ、話すぞ!」

「ええ。」

「まず、ご主人の魔力つてのは特殊なんだよ。」

「どつという意味?」

「ある条件を満たさないとコモンマジックすら発動できないようになつてるみたい。」

「条件?」

「うん。特定の魔法を発動させる事、それが鍵となってるみたいだな。」

「その魔法は？」

「わからない。俺、魔法使いじゃないし。」

(虚無って教えるのはまだまずいだろうな、やっぱ。)

「なによ！それ！肝心な所がわからないんじゃない意味ないじゃない！」

「やめて！！そんなグラップルなお仕置きはやめて！！いだ、あだだあおおおお！！！」

更に激昂して飛び掛ってくるルイズをなんとか宥める。

っていつか何でルイズが飛びつき腕十字とか知ってるんだ？

前の時は引つかくとか平手とか、もつと女の子らしい攻撃だったぞ？

結婚した後に、たしかお義父さんとスカロンさんの店にコッソリ通

つてた事がバレた時に初めて食らったし。

……ふとももの感触は良かったからよしとするか。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

「お、落ち着いたかルイズ？」

(ギロツ！！)

「とにかく！とにかくだな、と、特定の魔法が鍵となっているってわかっただけでも良かったじゃないか！」

「その魔法が成功しないから苦労してるんじゃないのよー！」

「大丈夫だ。」その魔法”については失敗はしないみたいだから。

「そう……じゃあ、今の私でも成功する魔法があつて、それを見つければ……」



「そ。ルイズの魔法使いとしての才能が開花して、コモンマジックから使えるようになるみたいなんだよ。」

「ふん！まあ、いいわ。ところで……」

「！？ 难道でしょう、その目は。僕、なにかオイタしちゃいました？いや、ははっ、褒めて貰えるんですよね？」

「私の魔法の件はいいわ。素直に褒めてあげる。でもね……」

「ひっ?!」

「な・ん・で、さつきから”ルイズ”って呼び捨てなのよ!?!ご主人様に向かって呼び捨てって何よ!?!」

「ひゃ、こへんひゃひゃい!?!ひはいひはい!?!ひゃへへえええ!?!」

「どつやらまだご主人様への忠誠が足りないようね?!あんだ今日はゴハン抜きだからね!?!」

ひどい。

折角ヒントあげたのに……ああ、でも今のルイズじゃしょうがないか。

ハルケギニアの貴族観に強く影響つけてるもんな。

むしろルイズはこれでも”ゆるい”方なんだよな……

あ、それにメシ抜きの方が都合いいか。

この後シエスタと会って、ギーシュにフルボッコにされる必要があるんだし。

やだなあ、フルボッコ。

私は高鳴る胸を押さえ、使い魔の犬とお昼ご飯を摂る為に食堂に向かう。

どうやらこの使い魔は只の平民ではないようね。

やたら慣れ慣れしいし、使い魔として連れて歩くにはすごく恥ずかしい風体してるけど。

どこか私を軽く見ている節があつて、地が出るとあろう事かこの私を呼び捨てにしてくる。

先ほども敬意の欠片もない態度を見せたので、母様直伝の関節破壊技を折るつもりでかけてやったわ。

学院では使うなど言われていたけど、使い魔の躰の為ならしょうがないと思う。

だけど……こいつは決して私を蔑ろにせず、たまにはっとするような事を語りかけてくる。

特殊能力として「私の事を識っている」事があるようで、私の魔法についてすごく大事な事を示してくれた。

まだウソだという可能性もあるけど、試す価値が十分にある。

こんなクラス以下の奴でもサモン・サーヴァントで呼び出せたのだ。

私に魔力が無いというわけではない。

魔法が成功しないだけで、平民のようにまったく使えない訳ではないのよ。

私は生まれてからずっと魔法が使えない事に苦しんできた。

この学院に入れば教師が導いてくれると希望をもった時期があったけど、それも程なく打ち砕かれていた。

少しずつ私の心を蝕んでいた絶望は、この冴えない使い魔が払拭してくれた。

魔法さえ！鍵となる魔法さえ見つけければいいのよ。

自然と私の心は弾んでくる。

ああ、そうだ。

使い魔の犬にはご褒美を上げなければ。

貴族たるもの信賞必罰はしっかりしないとイケないし。

さっき勢いでごはん抜きにしちゃったから、ごはんの量を増やすのはダメね。

それじゃあ罰が疎かになるもの。

……そうね、剣がほしいって言ってたわね。

お父様からもらった短剣があったからあとであげよう。

あれ、たまにお父様の声がするから気持ち悪いのよね。

「サイト。」

「ん、何？」

（おおお！こっちに来て初めて名前よばれたぞ！好感度が着実にあがってるのか?!）

「その……魔法の事なんだけど。」

「あ？ああ。ウソじゃないぞ。どの魔法か特定できないのは申し訳

ないけど……」

「うん。それはもういいわ。ヒントだけでも十分役に立ちそうだし。だから、ね？」

「う、うん……。」

「ご褒美をあげる。食堂に行く前に私の部屋に行くわよ。」

「おおおお！ここまで好感度がったのか！いきなりか！！いやあ、久々にがんばっちゃうぞ俺！！」

（かしこまりました、ご主人様）

「なななななに勘違いしてるのよ！このバカ犬！！！わわ、わたしをあのツエルプトと一緒にするんじゃないわよ！」

「は？！す、すみません。ご主人様からの初めてのご褒美でつい…

…」

（やべーやべーやべーやべーやべーやべー）

「そ、そう。わかればいいわ。あんたにね、短剣をあげる。」

その言葉を聞いた犬は涙を流して喜んでいた。

その様子を見て気分を良くした私は、先ほどの不埒な勘違いも見逃す事にした。

……さつき「久々に頑張っちゃう」とか言ってたけど、こ、こいつ  
けっけ、経験があるのかしら？

ともかく！余程嬉しかったのだろう、これでふるぼっこされずにすむ、とよくわからない事を呟きながら短剣を受け取っていた。

うん、こうやって使い魔を可愛がるのも中々いいものかもしれないわね。

何しろ私は身分は高いけど、私に対して心から敬ってくる者など皆無だしね……

すこし自虐的になる私を尻目に、犬は能天気になんか鼻歌を歌っていた。





1 - 3 : 下げたくない頭は、下げられねえ。

「諸君！決闘だ！」

さっきまで食堂にいたのだけど、俺はいまヴェストリの広場に居る。

予定通りシエスタに飯を食わせてもらって、デザート配膳を手伝い、食堂でギーシュと悶着を起して決闘をする事になったのだ。

ギーシュがさっきからなんか吠えてる。

生涯の親友だったけど、お前この時はホントやな奴だったんだな。

あれ程嫌ってた貴族どもと変わらんじゃねえか。

俺はルイズに食堂で言われた言葉を思い出す。

やっぱりというか、当然というか、俺が勝つとは微塵も思っていなかった。

まあ、当然だわな。

青銅のゴーレムを操るメイジ相手に平民が決闘だもんなあ。

ま、今の俺にはルイズがくれた短剣があるから余裕なんだけどね。

「とりあえず、逃げずに来た事は褒めてやろうじゃないか。」

「へいへい。」

「さてと、では始めるか。」

ギーシュはそう宣言すると弄っていた薔薇の花を振り、青銅で出来たゴーレムを作り出す。

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギッシュだ。したがって青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ！」

「ルイズの使い魔、平賀才人だ。」

俺はそう名乗るとルイズから貰った短剣を抜く。

瞬間、左腕のルーンが激しく光りだした。

「へ？」

俺は戸惑う。

なんでルーンはこんなに激しく発光してるんだ？

そついや、召喚された時前のルーンはどうなったんだろつ？

重ねて刻まれたから、ルーンの性能が上がったとか？

そんな考え事をしている内にギーシユのゴーレムが迫ってくる。

とりあえず考えるのは後だな。

俺はワルキューレを迎撃すべく、短剣を逆手に持ち間合いを一気に詰める。

ガキン、と金属音が広場に響く。

ギーシユは驚いた顔をしていた。目で追えない俺の動きに。

丁度人込みをかき分け、やってきたルイズも俺の動きの速さに目を開いて驚いていた。

でも、一番驚いていたのは俺だろう。

折れていたのだ、ルイズに貰った短剣が。

「ええええええ!!これ儀礼用かよ!!!」

俺は思わず見物人の輪の中にいるルイズに詰め寄る。

「メ、メイジが戦闘用のナイフを持つてるはず無いでしょ!ペーパーナイフが鉄を切れる訳ないじゃない!!!」

「うわぁ!うわぁ!これペーパーナイフなの?!俺、ペーパーナイフ持って決闘してたの?!」

「し、知らないわよ!!!」

そんなやり取りに気をとられている内に、俺は致命的なミスを犯していた。

ワルキューレの接近に気が付かなかったのだ。

ルイズにさらなる抗議を行おうとした所で、鈍い音とともに俺は宙に舞った。

ワルキューレの一撃が横薙ぎに胴に当たり、吹っ飛んだのだ。

「がっ！」

息ができない。

折れた短剣もどこかへ落としてしまったようだ。

ルーンも消えてしまっている。

やばい。もう気が遠くなっている。

遠くでルイズとギーシュが言い争っている。

俺は歯を食いしばり立ち上がる。

「ルイズ、君はその平民を庇うけど好きなのかい？」

「だ、だれがよ！やめてよね！自分の使い魔がみすみす怪我するのを、黙って見ていられるわけじゃないじゃない！」

「だ、だれが怪我するって？おれはまだ平気だったの。」

「サイト！」

ああ、悲鳴のような声を上げて震えながら心配してくれるルイズは可愛い。

そんな場違いな事を思いながら、俺はワルキューレの方へ一歩足を踏み出す。

まずい。

腹に食らったからか、足が思い通りに動かない。

「おやおや、立ち上がるとは思わなかったな。手加減しすぎたかな  
」?

「寝てなさいよバカ! どうして立つのよ!」

「だってさ……ムカつくだろう?」

「平民がメイジに負けるのは恥じゃないわよ!」

「ちがう。」

「え?」

ルイズが怪訝な表情を浮かべる。



「今朝ルイズに聞いたよな？気分次第で平民をぶったりするのがメイジや貴族なのかって。」

「！」

「俺はな、お前の使い魔でよかったと思ってる。それは、お前こそが貴族やメイジの理想だと思うからだ。」

「何いつてるのよ！私の事……！」

「『識ってる』って知ってるだろ？……だから許せねえんだよ、ああいう貴族は。」

「やるだけ無駄だとおもうがね。」

ギーシュが薄笑いを浮かべて俺とルイズを見ている。

俺はともかく、ルイズを負け犬のように見るその目付きにカチンときた。

「全然効いてねえよ、おまえの銅像よわすぎ。」

その言葉にギーシュの薄笑いは消える。

ざまみる！と一瞬思ったが、たしかこの後ワルキューレにフルボツ  
コなんだよな……・

「ぶ！」

顔面にパンチを食らった俺は無様に吹き飛ぶ。

それでもこのまま寝てる訳にいかず、立ち上がる。

殴られる。

立ち上がる。やっぱりルーン無しじゃ手も足も出ないな。

殴られる。

立ち上がる。それに今の体じゃうまく避けられねえか。後で鍛えな  
いとな。

なぐられた。

たちあがった。

殴

立

左目が見えなくなつた。

とりあえずたちあがろう。

ああ、さつきから鼻が痛いと思つてたが・・折れてるな、こりゃ。  
ギーシュめ、覚えてやがれ。

おっと、立たなきや。

あれ？いつ殴られた？急いで立たないと……

あがつ！いまの腕がおれたんじゃねえか？！

野郎…… 大事な俺の第二の恋人である右腕を…… 俺はこの後ルイズの下着を洗濯しなきゃならんのだぞ!!

おいこら！立つんだからゴーレムに顔を踏ませるんじゃないねえ！

あ、ヤバい。暗くなっていた……

目を開けると涙目になっているルイズの顔が見えた。

一瞬、決闘が終わってルイズの部屋で看護されてるのかとあせったが、違うらしい。

よかった。

どうやら気を失ったのは一瞬だったようだ。

「お願い、もうやめて。」

「……泣いてるのか？お前。」  
（かわいいぞ！ルイズ！）

「泣いてない。だれが泣くものですか。もういい。あんたは立派に戦ったわ。こんな平民見た事無い。」

「いつつ、すつげえ痛え。」

「痛いに決まってるじゃないの。当たり前じゃないの。何を考えるのよ！」

「ご主人様のことさ。」

「なっ」

そう呟くと俺は立ち上がろうとする。

……が、立ち上がれない。

やっぱり武器が無い俺はカラス以下だよな。

武器、武器。武器がほしい。

まあ、ほっといてもギーシュがこの後くれるんだけどな。

でもよく考えればなんか癪だよな。

せめて武器無しでルーンの発動ができればな……

……俺の肉体こそ武器だ！って出来ないもんかね？

「終わりかい？」

「……ちょっと待ってる。休憩中だ。」

「サイト！」

ギーシュの野郎、こっち見て嫌味ったらしく微笑んで剣を錬金しやがった。

それを俺のほうに放り投げる。

あいつ、錬金の腕はいいんだよな。

あっさり石畳の地面に剣が突き立ちやがった。

まったく、作るんならもつと早く作れつての。

「君。これ以上続ける気があるのなら、その剣を取りたまえ。そうじゃなかったら一言、こう言い給え。」

「ごめんなさい。それで手を打とうじゃないか。」

「ふざけないで！」

ルイズが怒鳴ってる。

この剣を取れば勝利確定なんだけど……

やっぱ一発殴つとかないときがすまんよなあ。

さっきのアレ、ルーンが反応してくれないかな？

俺の肉体は武器ですよ、俺の肉体は武器ですよ、おれにくたいはぶきですよつと。

……はは、いいぞ。本当に痛みが消えて立ち上がれる気がしてきた。



「ご主人様の事さ」

そう私の使い魔は言った。

腕は折れて、もう立ち上がる事すら難しいのに、私の使い魔はまだ戦おうとしていた。

この使い魔は私の事を理想の貴族、メイジだと言った。

コモンマジックも使えない、ゼロのルイズと蔑まれる私を、だ。

私は己を恥じた。

こいつは私を主と認め、命を懸けるほどの私への忠誠心を持っている。

なのに私が彼にした事はなんだったろう？

メイジと使い魔は強い絆で結ばれる。

だが私から彼への絆などあったのだろうか？

そう思いながら、わたしは強がる彼……サイトの名を呼び、止めようとする。

そんな私たちを見て、ギーシュが一振りの剣を錬金してなげてよこした。

まずい。

これをサイトが取ったらもう引き返せない。

「君。これ以上続ける気があるのなら、その剣を取りたまえ。そうじゃなかったら一言、こう言い給え。」

「ごめんなさい。それで手を打とうじゃないか。」

「ふざけないで!」

私は思わず声を荒げる。

ここでこの忠誠の厚い使い魔を失ってたまるもんですか。

サイトの方に目をやると、折れた右腕を剣に伸ばしていた。

「だめ!絶対だめなんだから!それを手にしたらギーシュは容赦しないわ!」

「でも……あいつは、弱い者に魔法を使って手をあげる貴族だ。」

「そつよ!でもしょうがないじゃない!死んだら元も子も無いわよ!」

「それでも俺は下げたくない頭は、下げられねえ。……知ってるか？」

「……何よ？」

「前の主の言葉だ。敵に後ろを見せない者を貴族って呼ぶらしいぜ？」

そう言うとサイトは笑いながら地面に突き立つ剣を手に取り、それを杖として立ち上がった。

って、なによ！やっぱりあんた貴族の事知ってるじゃない！

そう言おうと思った瞬間、サイトの異変に気が付いた。

左手のルーンが激しく光っている。

あれほどフラフラだったサイトが、今では杖としてすがっていた剣から”手を離し”、ギーシュを睨み付けている。

「まずは褒めよう！ここまで貴族に楯突く平民が居る事に、素直に感激しよう！」

ギーシュがそう宣言すると、ゴーレムをサイトにけしかけてきた。

ああ、だめだ。

殺される。

そう思った時だった。

ドオン！と轟音が辺りに轟く。

まるで落雷のような音だ。

周りにいた女生徒のみならず、男子生徒からも悲鳴が上がっていた。わたしも驚いて目を瞑ってしまったが、慌ててサイトの姿を探す。

……居た。

広場の中央で、空をみている。

釣られて私も空をみると、人の手足のようなものが振ってきていた。  
それは、ギーシュのゴーレムの破片だった。

サイトの周りにゴン！、ゴン！と降り注ぐゴーレムの破片。

「な、なな何があった!」

「……さあな。とりあえず、今度はお前がピンチだったことだ。」

サイトはそう言うのと落ちていたワルキューレの右腕を拾ってギーシュに突き出し、不敵に笑っていた。

わたしは思わず、その姿に見蕩れていた。……ちよっとかっこいい。  
ギーシュが慌てて六体のゴーレムを練成する。

それを見て、サイトに注意を促す為に声をかけようとしたが、その姿は消えていた。

それと同時に先程の雷音のようなものが立て続けに起こる。

轟音と共にバン、バン、と石が砕ける音を立てて、広場の石畳に大きな窪みがいくつか出来る。

その窪みの中にギーシュのゴーレムの残骸が転がっていた。

サイトはというと、呆然とするギーシュの目の前に立っていた。

「歯、食いしばれ。」

「へっ？」

サイトはそう言つと、ギーシュを思い切り殴りつけていた。

……その後で、折れた右腕を抱え転げまわっている。

……ああ、折れた方の腕で殴ったのね。すこし見直したのに……バカなのね、あの子。

じゃ、ない！怪我！怪我を見なくちゃ！！

わたしはサイトの傍に駆け寄る。

左手のルーンの輝きはわずかに光る程度のものになっていた。

「続けるか？」

サイトが私に助け起されながら、殴られて尻餅をついた姿勢のギーシュに問うた。

ギーシュは震えながら答える。

「参った。」



その言葉を聞いたサイトは、肩を貸す私の方を見てニカッと笑い、  
気を失った。

1 - 4 : 忘れないで！あなたは私の使い魔なんだからね！

「オールド・オスマン。」

場所は学院長室。

マジックアイテム「遠見の鏡」でヴェストリの広場での決闘を見ていた二つの影。

トリステイン魔法学院の学院長、オールド・オスマンと炎のメイジでもある教師のコルベールだった。

コルベールの呼びかけにオスマン氏はうむ、と答える。

「あの平民、勝ってしまいましたね……やはり彼は」  
「ガンダール  
ヴ」では……」

「うむむ……」

決闘騒ぎが起きるすこし前、コルベールは才人の腕に刻まれたルー  
ンについてある事実を報告する為、学院長室を訪れていた。

才人の腕に刻まれたルーンは始祖ブリミルがかつて使役した使い魔、  
ガンダールヴのものだとわかったからだ。

その報告の最中に当事者が決闘を行う、と報告が入ったので「遠見  
の鏡」でその一部始終を観察する事にした二人だった。

「オールド・オスマン。早速王宮に報告して、指示を仰ぎませんと  
！」

「……それには及ばん。」

「どうしてですか？これは世紀の大発見なのですよ?!」

「ミスタ・コルベール。彼の主人は誰なのかね？」

「二年生のミス・ヴァリエールですが……」

「彼女は優秀なのかね？それこそ始祖ブリミルのように。」

「いえ……むしろ無能といいますか……」

「その無能なメイジがなぜ”ガンダールヴ”を使役できたのかね？」

「それは……」

「それに、あのガンダールヴの少年の力は常軌を逸しておる。武器を使っていなかったようにも見えるのも気になる。」

「たしかに、ガンダールヴの能力は”武器を使いこなす”でしたな。」

「うむ。このような状況で王宮に報告をあげてみよ。暇を持って余した連中がぞろ戦を始めるじゃろうて。」

はつきりしない事が多すぎる。わしは可愛い生徒を戦場へ送るよ  
うな愚は犯すつもりはない。」

「ははあ、学院長の深謀には恐れ入ります。」

「この件はわしが預かる。他言は無用じゃぞ？ミスタ・コルベール。」

「は、はい。かしこまりました！」

コルベールに強く口止めをした後、オスマン氏は再び「遠見の鏡」  
で少年を見つめた。

少年は満身創痍だったが、どこか満足げに眠っていた。

「使い魔の癖に勝手なことばかりして！」

どこからかルイズの声が聞こえた。

なんだか怒ってる。

そんなに怒るなよ、俺ケガ人なんだぞ？

まったく、泣くなよ。前も大丈夫だったろ？

うおお！？今度は大きい方のルイズか……うわ！ゴメン！俺だって

泣かせるつもりはなかったって!!

あれもお前のだな、成長に必要なだったんだよ？

女がらみじゃなかったし、予定通りだからいいじゃん……ここ、こちら！やめろ！そんな顔で泣きながら腕を取りに来るなよ!!

お前どこでチキンウイングアームロックなんておぼえたんだ?! あだだだ折れる!折れる!!折れるってええ!!!

「うう……折れ、折れて…… はっ?!夢?」

目を覚ましてみると、俺はルイズの部屋で寝ていた。

朝の優しい光が窓から差し込んでいる。

痛い。

体中が痛い。

確認するとやっぱり体中に包帯が巻かれていた。

とりあえず、俺はギーシュを思いっきりブン殴った所までは覚えてる。

だけどその後の事は記憶にない。

多分、今回もルイズがここまで運んでくれたんだろうな……

「しかし、一体どうなってるんだ？」

気付いたことがある。

ガンダールヴのルーンの能力がおかしい。

自分の肉体が武器だ、と意識する事でルーンの発動が出来たまでは良かった。

ただ、身体機能の強化が半端でない。

あの時、ワルキューレに飛び掛かり、蹴り上げてその隙にギーシュへ接近するつもりだった。



ワルキューレの懐に入る為に地を蹴ると、突然視界が赤くなり、今まで経験した事が無いほど速く、それでいてゆっくりと感じる程体が動いた。

驚きつつもワルキューレを思いっきり拳で打ち上げようとする、振るおうとした腕がルーンの発動中にもかかわらず重い。

それでも無理に腕を振りぬくとふっと軽くなって、ワルキューレがプリンのようにぐちゃぐちゃになりながら空へすっ飛んでいった。

ソニックブームって奴なのか？とぼんやりその時は考えながら、ギ―シュにキメポーズを見せ付けてみる俺、気分だけイケメン。

うん、ルイズはバツチリ見てくれてたな。

で、その後新たに出現した6体のゴーレムには、また視界を赤くしながらも上から押しつぶすように腕を振るってみると

石畳の地面ごとペチャンコに。

これってアレだよな？

ウンチが光の速度で動いたら地球ヤバイ、って奴だよな？

でも、人間の体ってそんな動きに耐えられるようなもんだらうか。

周りにもっと被害も出てないとおかしいとおもっただけど、ルイズや見物してた連中には被害なさそうだったし……

やっぱりこのルーンのおかげ、なのかなあ。

ガンダールヴのルーンに同じガンダールヴのルーンを上書きしたせいなのか？

主人もおなじ「ルイズ」だしな。重複効果がでたんだろう。

うん、俺程度の頭で考えてもしょうもないし、それで納得しとこ。

うへへ、俺ってかつこいい？武器なしでも発動するとか無敵じゃん、この新生ガンダくん！

そんな風に考えながら左手のルーンを眺めていると、ノックがありドアが開いた。

「お目覚めですか？サイトさん。」

シエスタだった。

そういや、ギーシュに広場に来いって言われた後、恐怖のあまりどっかに行っちゃってたんだっけ。

手に持つてる銀のトレイにはスプの入った皿が乗っている。

「あれからミス・ヴァリエールが、ここまで貴方を運んで寝かせたんです。それから先生を呼んで

治癒の呪文をかけてもらって、それでも足りなくて秘薬を用意して……大変だったんですよ。」

あちゃあ、今回も世話かけたんだな。

「あいだ……!!」

「あ、急に動いちゃダメです!! いろんな所の骨が折れてて、腱もたくさん断裂してて、内蔵もめちゃくちゃだったらしいんですから!!」

治癒の呪文でも治しきれなくて、あちこちから秘薬をかき集めてやっと容態が落ち着いたんです!」

「そ、そうなの？」

(前よりひどくなってるな……あれだけ無茶な動きをすれば当然か。新生ガンダくんって更に諸刃の剣になってるのね。)

「はい。あ、お食事はここにおいておきますね。もし食べるのも辛かったら言ってお下さい。食べさせて差し上げます。」

「ありがとう。俺、どの位寝てた？」

「三日三晩。皆心配してたんですよ？」

「皆っ？」

「厨房の者です……あの、すみません！あの時逃げ出してしまっ……」

「あ、いって。貴族怖いもんな。謝る必要はないよ。」

「本当に貴族は怖いんです……私のような魔法も使えない平民には、でも、わたし、サイトさんを見て感激したんです！」

平民でも貴族に勝てるんだっておもったら、怖いのも少しだけ平気になったんです!!」

「はは・・・そう？でも無茶はしないようにね。」

俺はシエスタから目を逸らし、苦笑いを浮かべた。

この目はヤバい。

早急に対策を施さなければ、彼女を振る時のダメージが大きくなってしまう。

お互いに。

「ところで俺のご主人は？」

「そちらのお机でお休みになられています。」

ぎぎぎ、と痛む体を捻ると椅子に座り、机に突っ伏す形で寝ているルイズが居た。

「ずっとサイトさんを看病をされていましてので、お疲れになったのでしょうか。」

お医者様からサイトさんお体の状態を聞いたミス・ヴァリエールは、それはもう取り乱しになられて。

……サイトさんは最初の一日は本当に危なかったんですよ？

それで、ずっと寝ずに包帯を替えたり、顔を拭いたりしておられました。」

「そうなんだ……シエスタ、悪いけどルイズの分の飯も頼める？」

「はい。わかりました！」

そう返事をするシエスタは部屋から出て行った。

「……ありがとな、ルイズ。」

「使い魔の癖に主人を呼び捨てにするの？」

「やっぱり起きてたか。」

「フン。治ったらさっさとベッドから出て行きなさいよ。」

「ルーン使えば何とか動けるかな？」

「……あんたには色々と聞きたい事が出来たわね。」

「お、お手柔らかに頼むよ。とりあえず体中がまだすっげえ痛いんだ。このままでいい？」

「まあ、いいわ。まず、一つ目。あんた、やっぱり貴族知ってるんじゃないー！」

「あ……うん。ゴメン。でも異世界から来たってのは本当だぞ？」

「どじいじいよっ。」

「前に一度、こっちに召喚されてたんだよ。」

「だれかの使い魔をやったってこと？」

「そういう事。で、使命を果たしてその……俺、死にかけてね。運がいい事にルイ……ご主人に丁度その時に召喚されて、使い魔契約のおかげで一瞬で回復して一命を取り留めたってわけ。」

「今度は本当でしょうか？」

「ああ。前の主人との使い魔の契約が切れる程弱ってたからな。ご主人との契約が切れてもしたら死んでしまうかもって思ったんだよ。」

（まあ、これもウソなわけですが。）

「ふん……まあ、いいわ。次！あなたのそのルーン、一体何なの？ギーシュのゴーレムをやったのって魔法なんじゃないの？」

「いや、俺はメイジじゃないぞ。このルーンは武器を使いこなす事と身体能力の大幅な向上をさせる事が出来るんだ。」



ゴーレムをやったのは……技だよ。何度も言ってるだろ？俺、元剣士だから結構強いんだよ。」

(ただ単に思いっきりブンなぐっただけだがな！)

「じゃあ何で最初からその力を使わないのよ!!」

「いや、武器があればいいんだけど、体を武器として使うと……ほら見るよこのザマ。な？ギーシュにやられたケガより酷いだろ？

あの動きは人間に出来るもんじゃないからな、ボロボロになっちゃうんだよ。」

「あんだ、まさか前の主人の所でもこんな無茶しまくってたんじゃないでしょうね？」

「いやあ、はは……」

(鋭いな、さすが俺の未来の嫁！何度この直感で酷い目にあっただとか……)

「まったく！自分の使い魔にこんな無茶を何度もさせるなんて!!メイジの風上にも置けないわ!

どうせ私が召喚した時もこんな無茶やって死に掛けてたんでしょっ?!!」

「い、いや？前のご主人は優しかったぞ？俺が勝手に無茶してたん

だよ。」

(まさかお前だよ、お前！って言えないしな。フォローしなかったら夢に出てきそうだし……)

「……やけに肩をもつのね？」

「そりゃあ、ご主人だったからな。……なんだかんだ言っても、すごく優しい奴だったよ。」

「そりゃあ、ご主人だったからな。……なんだかんだ言っても、

すごく優しい奴だったよ。」

サイトはそう言つと、とても懐かしそうな、そして愛しそうな目をした。

わたしはなぜか内心うるたえた。

こいつの前のご主人はきつと女だ。

間違いない。女の直感つてやつだ。

こいつが女物の服の扱いに手馴れていたり、下着をみてもうるたえない所があるから間違いない！

そ、そういえばこの前「久々に頑張っちゃう」とか言ってたわね……

ままままかさかの女主人とあああああんなことやこここんなことを（ やっていました。）

「どじしたっ」

サイトが心配そうに私の顔をみている。

私は思わず指を折り曲げ、ネコの手の様な拳を作り、サイトの上唇と鼻の間めがけて打撃を加えていた。

「なんでもないわよ！この性欲発情犬！！！！」

禁じられている母様直伝の技が咄嗟に出してしまうのは我ながら恥ずかしい。

なぜだあ！と呻くサイトをなだめ、私は話を続ける。

「とにかく、そのルーンは武器があれば体もそこまで酷くならない訳ね？」

「ああ。武器があれば大分ちがうからな。」

(でも武器もってても全力出せば一緒だろうなあ、多分。)

「そう、わかった。その内剣でも買ってあげる。あんたの能力は流石に認めてるしね。」

「さんきゅうってえ……」

(よし、これでデルフを迎えにいける！あいつとは久しぶりだなあ……)

サイトがガッツポーズをしようとして悶えてる。

傷が痛むのだろう……バカな子だ。

「それとは別に、あんたになんかご褒美をあげないとね。」

「ほえ?」

「ギーシュ相手によく頑張ったご褒美。メイジより強い使い魔を従えてるなんて、わたしも鼻が高いし。多少の事なら聞いてあげるわよ?」

「マ、マジ?」

「ええ。言っただらんない。で、でもわわたしの体はただだめだからね。」

「……名前、呼ばせてもらっていいか?」

「ダメ!いくら私が魅力的だからってそんな……へ?名前?」

「うん。それも呼び捨てで。ずっと名前で呼びたかったんだ。」

そうサイトは言つと私の顔を真剣に見つめてきた。

その目は先程の前のご主人の事を語っていた時と同じものだった。

わたしの胸はなぜか早鐘のように高鳴る。

「い、いいわ。ついでにあんたの事も名前で呼んであげる。」

「ありがとう、ルイズ。」

そう言うとサイトはニカッと笑った。

それから傷が痛むのだろう、悶えている。……バカな子だ。

「じゃあ、サイト。ベッドの事なんだけど……」

「ああ。ルーン使えば動けなくもないけど、ナイフかなんかある？」

「いいわよ、そのままです。あんたの前の主人じゃあるまいし。」

「あ、ああ。ありがとうな？」

(なんだ？何気に競ってるのか？！つか、お前の事だぞ？)

「ベッドはもう暫く貸してあげる。それよりお腹減ってるでしょ？」

「あ、ああ。」

「た、食べさせてあげるわ。丁度メイドがスープ持ってきた所だったみたいだし？」

「そ、そうだな。ありがとう、ルイズ？」

「ここここも主人の役目よ、きにしないで、いいわ、サイト？」

「気まずい。」

名前でいきなり呼び合う事になったからか、なにやら甘い空気になりつつある。



「ほほ、ほおおおら！ああんしなさい！」

「あ、ああ！あ、あああ………」

その時、ノックの音が部屋に響き、先程のメイドが部屋に入ってきた。

「失礼します。ミス・ヴァリエールの分のお食事を………」

固まる空間。

「……失礼しました。」

メイドは手に持っていたトレイを机の上に素早く置くと、足早に部屋を出て行った。

廊下からきやあきやあと声が聞こえる。

わたしは無言でスープの皿を机に置くと、引き出しからちい姉さまから貰ったお気に入りのおペーパーナイフを取り出し、サイトに手渡した。

「行って。」

「えっ？」

「行ってあのメイドの誤解を解いてきなさい!!」

「ええええええ?!俺大怪我してるんだぞ?!」

「さっきルーン使えば大丈夫って言ったでしょ！！とつとつと行く！！」

私はナイフを握り、ヨロヨロと廊下へ出て行く使い魔にも釘を刺しておく事にした。

「忘れないで！あなたは私の使い魔なんだからね！」

1・5・…まじー…違っつてばー！

「説明して。わかりやすく。」

朝の光が優しく部屋を包んでいた。

ルイズはベッドにすわり、側でかしまるミイラ男のようになった俺を睨んでいる。

彼女のピンクブロンドの髪が光を受け、とても美しい。

俺の手には鳩をあしらったかわいい形のペーパーナイフ。

これを手放すとすさまじい激痛がして話どころではないので、ルイズが学院の購買で買ってきたのだ。

「いやあ……最近鈍ってたからさ。一昨日の夜、ルイズが寝た後に外で鍛錬をしたんだよ。」

「ふうん。あんたの国の鍛錬って、折角治った腱や筋肉が切れちゃつまでやるんだ？」

「い、いや！？ちがうよ？違うんだってば！！」

「じゃあ、なんでこの前みたいなケガして倒れてたのよ！！心臓が止まるかと思っただじゃない！！」

「あはは……ちょっとルーンを使ってみようと思ってさ？」

「なによそれ！」

医者も驚く程の回復力を見せた俺は、今後の戦いの為にも早速鍛錬

を開始した。

基礎的な筋力トレーニングを行った後、肉体を武器とイメージしてルーンを発動させたのだ。

無手によるルーンの発動はうまく行き、色々と試す事にした。

やっぱり自分の能力を知つとかないな！とその時は能天気にかけていた。

まず、武器無しでのルーンの発動。

これが出来れば、常に発動状態で俺最強じゃん！と考えていたが、結果として無理だった。

ある程度の集中力が必要になる為、武器を手にしている時よりも消耗がはげしい。

次に身体能力の向上。

この支援効果はその強弱をコントロール出来るようになっていた。

まあ、弱とは言っても今まで武器を振るっていた従来の能力だが…

…問題は”強”の方だ。

すごい。

それはもうすごい。

イメージが体の動きに追いつかない。

うん、俺って最強だな！

心地よい高揚感に身を任せ、どんどんギアを上げる。

思い切りジャンプをすると学院の屋根ごしに森が見えた。

浮遊感と夜空に浮かぶ二つの月の姿にさらに昂ぶった。

よし、次はソニックブーム出してみよう！

全国の男の子の憧れ、衝撃波だぞ！

そう調子付いて、適当な破壊対象物を探そうと一旦ルーンを消した時だ。

「一気にルーンの力の負荷が来ちゃってさ。いやあ、お恥ずかしい、ハハッ」

「まあ！うふふ、サイトったら……うっかり屋さんなのね。」

「あはは！ルイズが笑ってくれるならうっかりした甲斐があったよ。」

「そんな訳ないでしょうが!！」

ルイズが花のような笑顔から一瞬にして般若のような顔になり、サつとおれからナイフを取り上げる。

たまらず悲鳴をあげる情けない俺。

あ、でも怒ったルイズでも、心配してくれてる時の顔は可愛いんだよな。

「大体ねえ、夜中に外から呻き声が聞こえてそれが ” るいずう、るいずう ” とか言ってるのよ! ? オバケかと思っただじゃない! 確かめに出てみると、あんたがポロポロになってるし、次の日変な噂が立つしでもう散々だわ! 」

そこに二日間寝ずに看病した事を入れない所はルイズらしいな。



ああ、でも残念だな。

せっかく無敵のガンダくんになったと思ってたのに。

次の戦闘イベントはなんだっけ？

フーケのゴーレム？次にえっと、……ワルドか。

うーん……体削ってまで圧勝したい相手じゃないよなあ。

俺の寿命は84歳。

多分、ガンダールヴのルーンを使わなければもっと長生きできたと思う。

使用した実感として、若い頃はそんなに感じはなかったけど年を取ってからルーンを使うとよくわかった。

ガンダールヴのルーンは命を代償にしてるんだ。

ルーンで動いた後の反動はすごいけども、そもそもその動き自体が人間の動きじゃない。

死なない程度の肉体的反動で済むはずがないのだ。

俺は……一日でも長く生きていたい。

今度はルイズを泣かせないようにしたい。

「ちょっと！聞いてるの?!ご主人様が話している時は顔をあげなさい!」

「.....!!.....!!.....!!.....!!」

「.....ほら、ナイフ。」

うん、激痛でまったく動けない時でも思考できるってすばらしい!

くぐった修羅場が違ってたよ、修羅場が。.....大半はルイズが相手だったけど。

「はあああ、死ぬかと思った。」

「ホントに死に掛けといてよく言うわね。」

「う……ゴメン。」

「まったく。あんた、武器を買っただけルーンの使用禁止ね。」

「えええ？！それじゃルイズの護衛なんてできないじゃん！」

「なに言ってるのよ！いまのあんたはカラス以下よ、カラス以下！  
いいえ、カエルにすら劣るわね、きつと。」

「ひでえ……」

「とにかく！傷が癒えるまでは部屋でおとなしくしてなさい。ズツ  
ドも使っていないからね。」

ルイズはそう言うと、授業を受けるべく部屋を出て行った。

俺はおとなしくベッドに入り、脇にペーパーナイフを置く。

襲い来る激痛に耐えかね、そのまま意識を手放した。

「『我らの剣』がきたぞ！」

腹を減らした俺は厨房に足を運んでいた。

俺が無茶な鍛錬でボロボロになり、目を覚ましてルイズにルーンの使用を禁じられてから更に4日経った。

本来なら全治数ヶ月だったらしいのだが、なぜか学院長が親切にも良い秘薬を融通してくれたらしい。

それでも脅威の回復力だったらしく、医者から

「これはすごい！使い魔くん、きみの血はきつと強力な治癒の秘薬で出来ている！是非私に譲ってくれないかね？」

と血走った目で迫られた程だった。

ちなみにその医者には無手でのルーン発動（最弱）の実験に協力してもらった。

後でルイズにルーンを使ったお仕置きを極められたが、医者に血を抜かれそうになったと説明したら折るのは許してくれた。

俺の未来の妻は優しいのだ。

ともかく、暫くは医者のお世話になれなくなったから、怪我には気をつけないとな。

「こんにちは。メシ、いいですか？」

「おう、座れ！今日のシチューな絶品だぞ！」

俺は厨房内の一角に設えられた専用の席につく。

ふかふかの白いパンと暖かいシチューをトレイに乗せ、シエスタがニコニコしながら運んできた。

別にマルトー親父なりほかの調理人のおっちゃんから直接貰って、自分で席に運んでも良かったのだがなぜか厨房一丸となって断られる。

「今日のシチューは特別ですわ。」

シエスタが誇らしげに配膳をしている。

いつもより更に味に自信があるのだろう、マルトー親父も俺と目が会つと胸を張ってガハハと笑いかけてきた。

俺は早速シチューを一口ほおばる。

うん、うまい。

初日の塩のスープよりずっとうまい。

て、いうかあれは暖かい塩水だった。

「うん、うまいよ親方。こんなうまいもん、あいつら残しているんだから信じられねえよなあ。」

「ふん！あいつらの魔法は確かにすごい。ドラゴンだって操るんだからな。でもな、こうやって絶妙な味に料理を仕立て上げるのだから」

「一つの魔法さ！そう思うだろ、サイト。」

「まったくその通りだ。あ、シエスタおかわりいい？」

「いい奴だなサイト！おまえはまったくいい奴だ！おい、『我らの剣』、キスしてやろう！」

「その呼び方と接吻はやめてくれよ。あー、シエスタ？肉大目で頼める？水もお願い。」

「どうしてだ？」

「どうしてって、そりゃムズがゆいからだよ。俺、小心者なんだ。」

「お前はメイジのゴーレムを切り裂いたんだぞ！わかってるのか！」

「あ、うん、まあ……」

（本当は剣は使ってないんだけど……噂じゃそうなってるんだよな。）

「なあ、どこで剣を習った？どこで習ったらあんな風に剣を振れるんだ？」

「うーん、剣の基本はどこでも習えるって。あとは経験。みんな一緒だよマルトーさん。」



マルトー親父の質問にもそろそろ参ってきた。

厨房に顔を出すたびに聞かれるとなあ……

「お前たち！聞いたか！」

「聞いてますよ！親方！」

「本当の達人というのは、こういうものだ！決して己の腕前を誇らない！見習えよ！達人は誇らない！」

「達人は誇らない！」

「やい！『我らの剣』！おれはお前がますます好きになっただぞ！ど  
うしてくれる！」

居心地がわるい。

そもそも、俺の力はルーンのお陰だし……皆の笑顔がまぶしくて直視できない。

なんだか騙しているようで気がひけ……あ、さんきゅう、シエスタ。この肉が旨いんだよね。

……さて、俺の隣でうつとりと見つめて来るシエスタをどうしよ？

一応、タルブ村の草原で振ってるんだけどな。

でも、結局俺が81歳になるまでメイドとして仕えてくれるんだよなあ……

年を取って孫が生まれた後も、教皇を引退したルイズと一緒に俺の身の回りの世話をしてくれてたけど

結局タルブ村の子供の家に帰省した時、流行病で逝っちゃったんだっけ。

メイドとしてまた俺とルイズの友人として、なんとかいい関係にできないものか。

あんなに信頼できるメイドなんて多分、彼女以外にできないだろう

し。

……一番優しい身内だったしな。

なんとかやんわりと恋慕だけ断ち切りたい。

うーん、と腕組みをする俺。

「シエスタ！」

「はい、なんでしょう親方！」

「われらの勇者に、アルビオンの古い奴注いでやれ！」

「いやいや、親方。俺、これからルイズの授業に同行するんだ。好意だけでいいよ。」

急いでシチューの残りをかきこみ、パンを口に押し込んで水で流し込むと俺はそそくさと席を立った。

またこいよ、というマルトー親父のデカイ声とメイドの熱い視線を背に俺はルイズの元へ急ぐ。

私はイラついていた。

隣の席で私の使い魔が居眠りをしている。

本来なら床に座らせるべきなのだが、こいつは女生徒のスカートを下から見上げていたので教師に頼んで隣の席に座らせたのだ。

授業中に居眠りをすると注意される事は普通なのだが、この使い魔はこの生徒じゃない。

夜行性の生き物を使い魔にしている生徒も普通にいるので、使い魔がここで寝ても問題はない。

問題なのはこいつの寝言だ。

「うう・・・やめてくれ……泣かせるつもりはなかったんだって……」

「なんの夢みてるのよ……」

「いたい……やめてくれ、オ……オモプラッタ……どこで覚え……外してくれよ……」

「オモ？なに？」

「やめ、いた……折れる。折れ……あ……ダメ！体重かけちゃダメ……」

さっきからやたら苦しそうだ。

傷がまだ痛むのかしら？

そう思ったが、どうやらなにやら夢をみているらしい。

「もうし・・しない……しないから……・レックロックだけは……  
足だけは……」

「ちょっと！何の夢みてるのよ！！」

「おいおいルイズ！お前、使い魔に何やってるんだ？もしかして毎日苛めてるのか？すごく苦しそうだぞ？」

「待ってよ！私そんな事しないわよ！」

「お、おおお……ダメ、だめだって……・わかったから……約束するから……」

「おいルイズ！もう勘弁してやれよ！だからこいつ包帯をいつまでも巻いてるんだろ？」

「もう！違つてば！！起きなさいよサイト！！！！」

私は立ち上がり、サイトと間合いを少しあけてから顔面に向けて回し蹴りを放つ。

小さな体を補う為にわざと一回、体を回転させて腰へ力を貯めからお見舞いしてやった。

母様が言うには動く相手だと当て辛い、隙の多い蹴りとの事だが幸い相手は熟睡している使い魔だ。

ぶ、とくぐもった声をあげて使い魔は床に昏倒した。

ここでわたしは周りの視線を感じる。

やだ、パンツを他の生徒に見られたかしら？

恥ずかしい……母様の言いつけを守らなかった罰ね、これは。反省しよっ……

「な、なにすんだよいきなり?!」

「起きた? あんたの寝言のお陰でわたしはあらぬ疑いをかけれるの。」

「ほえ? 寝言?」

「夢見てたでしょ?」

「あ、ああ。」

「寝言でね、”おもぶらった”とか、”ねっぐろっく”とか言ってたわよ。それからとっても苦しそうにしてた。」

「あ、うん。それ、技……護身術の技の名前でね。とっても苦しんだ。」

「そう。でも今はそんな事どうでもいいの。あんたの寝言のお陰で、わたしは毎日使い魔を苛めているメイジと思われたわ。」



「へあ？」

「いまどんな夢を見て、わたしがあんたを苛めていないとこの場で証明しなさいって言うてるのよ、このバカ犬！！」

私はそう言つと周りを見渡す。

皆が私と目を合わないよう、サッと目を逸らす。

不愉快だ。

私はこの使い魔を理由もなく苛めたりしていないのだから。

「あの、ですね。みなさん。えっと、あ、おれルイズの使い魔の平賀才人です。どうぞよろしく。で、ですね」

「いいから！さっさと説明なさいよ！」

ビクツと体を震わせ、怯える子犬のような目で私を見る使い魔。

……ちょっと、ますますクラスメイトに誤解されてるじゃない。

「は、はい。えつとですね、俺、剣士なんです。で、昔の訓練を思い出してうなされていたんです。」

（本当は嫁ルイズが出てきてまた泣かせたわね、と俺にお仕置きしていたんだがな。）

「それで？」

「そ、そんなに睨むなよう。それですね、皆様。わたしのご主人様に向けられた嫌疑ですがそれは誤解なのです。」

わたしが大怪我をした時は、自身のベッドで傷を癒す事を許していただけますし、食事だつてご主人様の手ずから食べさせてくれます。」

決してご主人様はいわれなく私に暴力を振るったりしません。」

これでよし。

私は満足げにサイトに頷き、座席に座ってよしと許可を与えた。

……何よ。

まだなんかあるの？みんなザワザワしちゃって。

「ミ、ミス・ヴァリエール。」

「ん？何かしら？」

「先程あなたの使い魔が言った事は本当？」

「ええ、本当よ。私は使い魔を苛めるようなメイジじゃないわ。」

「いえ、そうじゃなくってね……」

「？」

「あなたの使い魔さんが言っていた、その……」自身のベッドで傷を癒す事を許す』って……。」

「そうね、それに手ずから食事を食べさせてあげるなんて……」

「あ!」

思わず声を上げてしまった。

聞きようによっては男女の関係の事を語っているようにも受け取れ  
てしまうじゃない!

このバカ犬!!と思ひ、サイトを睨む。

慌ててプイ!と顔ごと視線を逸らされた。

いい度胸ね、後で”おもぷらった”と”れっぐるっく”を  
じっくり教えてもらおう。

そんな事より今は誤解を解かなきゃ。

私は今度はピンク色の想像をするクラスメイトに説明をするはめに

なつた。

そんな私とサイトを見て、ツエルプストーがやたら楽しそうにして  
いた事が何より私をイラつかせた。

1 - 6 : 微熱はつまり情熱

「おおい、機嫌なおしてくれよ、ご主人様あ。」

困った。

教室での寝言の一件で、ルイズと俺が男女の仲ではないか、という噂が流れてしまったのだ。

無論、からかい半分なのだろうが、ルイズにとってはものすごく屈辱的だったらしい。

俺としてはむしろウエルカムなんだけど……

とにかく困った。

ルイズの機嫌が直らない。

夜になり、部屋に戻ると俺の毛布とハイジ式簡易寝台（つまり藁の寝床な）を廊下に放り出してしまった。

前もこんな事があったよな、運命って案外凶太い糸で出来ていて少々の事じゃ変わらないのかも。

さっきからフレンドリーな感じで扉越しに話しかけているのだけど、マイ・スイートには届いてないようだ。

まったく、噂位なんだって言うんだよ。

司教の娘さんとの噂の時は、部屋から閉め出して一日中扉の外から愛の言葉を言わせ続けたくせに。

……あれ？やってる事はかわんないな！ははは、これは愉快、愉快。

「……………ガンダくん、涙がでちゃう。」

どうするかな、ここ、寒いんだよな。

厨房に行くか？

でもシエスタがなあ。

部屋に連れ込まれたら手を出しちやいそつだ。

それはまずい。

どうしたものと思案に耽っていると、キュルケの部屋のドアがが  
ちやり、と開いた。

部屋の中からサラマンダーのフレームがのそりのそりと歩いてくる。

左右に揺れる尻尾がなかなか可愛い。

ああ、そついやキュルケとこんな事もあつたよな。

「よう、フレーム。お前も部屋を追い出された口か？」

きゆるきゆる

「違うのか。いいよなあ、お前は。俺さ、貧弱だからすぐ怪我する  
し暖かいベッドが無いと病気になるんだぜ。」



きゆるきゆる

「なんだよ、引っ張るなよ。折角だからほら、一緒に寝ようぜ？あ、毛布燃やすなよ。」

きゆる、きゆるきゆる

無論、俺はフレイムが何を言っているかわからない。

しかし、こいつが何の為に俺の所に来たのかは知っているので、フレイム（とその主人）をからかう事にしたのだ。

俺は燃える尻尾に注意しつつフレイムの首の辺りにがっしと抱きつき、無理矢理ハイジ式寝台へと引きずり込む。

ものすごくイヤそうなフレイム。

ははは、テレるじゃないか、などと言いながら遊んでいると、不意にフレイムの引っ張る力が強くなった。

サラマンダーって力持ちなんだな、情けなくズルズルと引っ張られる俺貧弱ガンダくん。

結局俺はフレームに引きずられる形で暗いキュルケの部屋に入った。

「と、扉は閉めて？」

俺の奇行にすこし引いているようだ。

言われたままに扉を閉める。

閉めないと未来の嫁が迎えに来てくれないしな。

適当にキュルケをあしらって、怒鳴り込んで来たルイズにむかって「君の方がずっと魅力的だよ」とでも言えばもう完璧。

あいつ、コテコテでろまんちっくな雰囲気や台詞に弱いもんな。伊達に60年以上連れ添ってねえぞ！

……俺、なんだかんだで文字通りの第二の人生エンジョイしてるよな。

肉体も若返ったから精神もそっちに引つ張られているんだろうか？

そういえばさつきシエスタの事考えてたら自然に「手を出しそうだった」って考えが浮かんだな……

ここに来る前の俺は老人で、ルイズへの想いと約束も嘘じゃなかったし、美女百人を並べられても

老女となったルイズを選ぶ自信があっただが……

精神は肉体の玩具、だっけか？

案外そうなのかもな。

可愛い子とハレムりたいのは男の子の永遠の夢の一つだし、若い体の俺にとっては本能で求めてしまうんだろうな。

腕から衝撃波と同率一位だよ、絶対。

衝撃波は使つと死にそうな目にあうけど。

……て、それじゃあ前と一緒にじゃねえか！

危ない、気を引き締めないと。

「……聞いてるっ……」

「ああ、ゴメン、キュル……ミス・ツエルプストー。すこし考え事を、ね。」

部屋はいつの間にか光が灯っている。

キュルケは悩ましい姿でベッドに腰掛けていた。

うん、色っぽい。

まさかこんなキュルケがあんな教育ママになるとは……

コルベール先生との子供たちは皆立派な学者になったのはいいんだけど、マザコンだけは治らなかつたもんなあ。

「座って?」

「うせ、JJJJ。」

「あら、つれないのね。」

「ミス・ツエルプストー、俺はルイズ・ド・ラ・”ヴァリエール”の使い魔なんだ。」

「あら、ヴァリエールに聞いたの？私の事。いいじゃないそんな事は。あと、私の事はキュルケと呼んで。」

「じゃあ、キュルケ。その、言いにくいんだけど……」

「あなたは私をはしたない女だと思っているでしょうね」

「キュルケ？」

「思われても仕方ないの。わかる？私の二つ名は」

「『微熱』、だろ？」

「そう！私はね、松明のように燃え上がりやすいの！わかってる、いけない事だって。」

「うん、やめときなよ。」

「でも、あなたはきつとお許しくださるわ。」

うづむ、手ごわい。

勤めて冷めたい物言いをしているんだけど、なかなか鎮火しそうにない。

「恋しているのよ、わたし。あなたに。まったく、恋はいつも突然ね！」

（どっしたのかな。キュルケに嫌われなくてもコルベールさんと結局はくつつくだろっし……）

「あなたがギーシュを倒した時のあの姿……かつこ良かったわ！あたしね、それを見て痺れたのよ！」

そうよ、痺れたの！情熱！ああ、情熱だわ！」

(嫌われるのもマズそうだしなあ。放置してルイズの当て馬に……いや、流石の俺もそんな事できないって。可哀相だし。)

「二つ名の微熱はつまり情熱なのよ！その日から私が考えているのはあなたの事ばかり。いつもあなたの事が気になってフレームを使って監視してみたりしてたの。わたしってほんと、みつともないわよね。でもそれもすべてあなたが悪いのよ？」

(あー、そういやタバサ。タバサどうするかなあ。何気に一番振る事が難しそうだし。)

「ねえ、お願い。わたしにその声を聞かせて？」

「うえあ？あ、ああ。えつと……？」

「もう！聞いてたの？」

「い、一応ね。つまり、君は……惚れっばい！」

「そうね……。人よりたしかに恋ッ気は多いのかもしれないわ。でもしょうがないじゃない、恋はいつだって突然で

わたしの体を炎のように燃やし尽くしてしまうの。」

ああ、これがあの教育ママと同一人物だって思えんよな。

この台詞をあのマザコン坊主どもに聞かせてやりたい。

どうせママをバカにするなっつって癪癪起すんだろうな……

……見てみたい。いい年こいた学者がママ、ママ、と叫びながら炎の魔法を無差別に撃つてるところ。

ああ、想像したら思わず噴出しそうだ。

必死で笑いを堪える俺を見て、キュルケが何か言おうとすると激しく窓を叩く音がする。

来た来た、キュルケの恋人1号。

たしかえっと……何号まで居たんだけ？

キュルケも間が抜けてる所があるんだよなあ。

女ジゴロになるなら、もうちょっとやり様があると思っただけだな。

おお、かわいいぞ。一号くん、窓ごと吹っ飛ばされたぞ？



ここ、三階だよな？

まあ、直撃してなかったしガラスの破片にだけ気をつけてれば大丈夫か。俺はかんけーないけど。

あ、二号来た。ふむ、結構イケメンじゃないかな？1号くんよりもたくましいし。

うわ、今度はまともに炎を食らってる。

あれ、いたいぞあ。一通り怪我したことあるけど、火傷って後からくるから辛いんだよな。

でも俺は骨折が一番嫌い。

一番やったからね、骨折。誰にやられたかはいわないけど。

おーおーおー、一気に三号、四号、五号が来たぞ。

右の君が3号な。真ん中の君は4号だ。あ！左の五号くん、覚えてるぞ！お前ギーシュと一緒に親衛隊にいなかった？

あーあ。フレイムに焼かれちゃった。三号くん、杖に火が付いてたけど無事かな？

……うん、五人か。

キュルケの子供達が学校に上がった時に教えてやろう。

いやあ、前の時はぼんやりとしか見てなかったから、リアリティがなくて作り話だって誤魔化されたんだよね。

「とにかく、愛してる！」

一通り元？恋人を追い払ったキュルケがいつの間にかベッドから立ち上がり、俺の首に腕を回してきた。

ふわっと甘い香りが漂う。

思わず劣情に身を任せそうになるが、廊下の方から隣の部屋の扉が開く音を聞き、踏みとどまる。

ズンズン！と音が聞こえそうな程にソレが近寄ってくるのがわかった。

「キュルケ！」

勢い良く扉が開いた。

しまった、キュルケを振りほどくのが遅れた。

どうしよう、誤解されないといいけど……まあ、今の段階じゃ激しく嫉妬はしてくれないと思うし大丈夫かな。

こう、ぐぬぬってなってるルイズはすごく可愛いんだよね。

「取り込み中よ、ヴァリエール。」

「ツエルプトー！だれの使い魔に手を出してるのよ！！」

超怖い。

ルイズに未来の妻が重なって見える。

ああ、体の底から震えがくる。

七万の軍隊に突っ込む方が余程気が楽だ。

目だ、あの怒りに燃えるルイズの目を見たからだ。

「仕方ないじゃない、好きになっちゃったんだもん。恋と炎はツエルプストーの宿命なのよ、あなたが一番ご存知でしょう？」

「来なさい、サイト。」

「ねえルイズ。確かに彼はあなたの使い魔かもしれないけど、意思があるのよ？尊重してあげないと。それに彼、あなたを見て震えているわ。」

「い、いや。キュルケ、誤解だよ。」

（その通りでございませす。）

俺はゆっくり首に回されたキュルケの腕を解いた。

彼女の目をみて俺は続ける。

「気持ち嬉しいけどさ、俺、好きな人がいるんだ。だから君の恋には応えられない。」

そう口にして回れ右をし、ルイズに行こう、事情は部屋で話すよと声をかけてキュルケの部屋を後にした。

よし、あとは部屋に戻って事情を説明して、暖かい部屋の床で寝る事を許可してもらっただけだな。

そして「君の方がずっと魅力的だよ」って一言添えればもうバツチリ。

俺の未来の嫁の部屋の床で寝る為には、この位の苦勞などメじゃないぜ。

「あんだね！よりもよってツエルプストーの部屋に！！」

「ごごご主人様、これには深い訳がっ、なにその鞭？乗馬用？ははは、ご冗談を。」

「サカリのついた野良犬には丁度いいのよ！よりもよ、よって、ツエル、プストツ、に、しっぽ、ふって！」

「いだい！鞭をあだ！！振りながッ！！ら話さないっ！！でごお！！主人さまあだだだ！！！」

超怖い。

忘れてた。

ルイズって怒ると人の話聞いてくれないんだった。

今日は最悪な一日だった。

この使い魔のお陰ですつとイライラし通した。

教室で男女の仲を疑われるような事を口にしただけでは飽き足らず、  
今度はよりもよって

ツエルプストーの部屋で、あの不倶戴天の女といちやつくなんて！

何よ、一日位外で我慢出来なかつたの？

少しはわたしの事を考えて、一晩頭を冷やしました、今夜からは部屋にいれてくれないかな？位言えないの？！

そう言えば明日からでも部屋に入れてあげたわよ！

ううん、簡単なベッドだって用意してあげるのに！

わたしの事「識ってる」んだからそれ位簡単じゃない！

わたしだってねえ、これでもあんたの事買ってたのよ！？

信頼できる使い魔だって、強い絆で結ばれた使い魔だって信じてたのよ？！

それがよりにもよってツエルプストーなんかに！！

そう思いながら私は用意した乗馬用の鞭を振るう。

このっ！このっ！このっ！わたしのお！きもちもお！しらないでっ  
！！

「いだい！鞭をあだ！！振りながッ！！ら話さないっつ！！でござ  
！！主人さまあだだだ！！」

「申し開きがあるなら聞いてあげるわ、ボロ雑巾によつになる前に。」

「



「はい、いっつつ……えっとな？」

「正座！」

「は、はい！……えっとですね？ルイズに部屋を追い出された後、フレイルがやってきたんだ。」

「で？」

「せ、急かさないで、ね？は、はぁいっつつ……その鞭とりあえずやめて！な？」

「で？」

「で、寒かったからさ、フレイルをベッドに連れ込もうとしたらあいつ力あるのな、キュルケの部屋に連れ込まれたんだ。」

「おしまい？じゃあ続きを始めましょうか。」

「マダです！で、キュルケに口説かれた後次々と窓から彼女のボー

「イフレンドがやってきてさ。」

「でえ？」

「ひっ？！そんな大きな声ださないでくれよう。でな、なんかキュルケに告白されて、どうやって断ろうかとかんがえてる内に」

「そいつ等を追い払ったキュルケが目の前に来てて、腕を首に回してたんだ。」

「おしまい？」

「もうちょっと！で、他に好きな子が居るって断ろうしてた所で、ご主人様がいらしたんです。」

「サイトが「他に好きな子が居る」と口にした瞬間、私の胸に強い痛みが走った。」

「そして更にイラつきが強くなるのを感じる。」

「ふ、ふうふうん?! あんた、私とツエルプストーの関係を”識  
つて”いながらアイツの部屋に行ったんじゃなくて  
不可抗力で行ったと言いたいよね?」

「その通りでございます。」

「……いいわ。良くわかった。この件については許してあげる。そ  
れに、この部屋で寝てもいいわ。」

「あ、ありがとうルイズ! 俺思っただけどキュルケより君の方がず  
っ

「ただし! 昼間の件は別よ!」

「つとみりよ……へ?」

「本当はあんたを一晚だけ廊下で過ごさせて済ませようと思ったん  
だけど、それも無しにしたからね。」

「昼間言っただ”おもぶらった”と”れっぐるっく”を教えて。次  
回からの”お仕置き”に使えそうな物よね?」

「い、あの、その……ご主人様のような可憐な女の子には、似つかわしくない技ですよ？」

「サイトっ！あのね、乗馬用の鞭と、このお、私のお小遣いのエキュー金貨がいーっぱい入ってる袋、どっちがいい？」

「あの、ご主人？花のような笑顔で可愛く脅迫されましても……」

「金貨の袋かぁ！サイトって常に新しい刺激に飢えているのね！」

「お教えします。是非ご教示させてください。」

「サイトが渋々”おもぶらった”と”れっぐるっく”を私に教え終わった頃、イライラは消えていた。」

しかし、胸の痛みは小さくも残り続けていた。



1・7・やい！デル公！

昨日は酷い目にあつた。

教室で寝起きにルイズから強烈な蹴りを顔面に受けたり、部屋で鞭打ちをされたりした。

ルイズの容姿と年齢なら、部屋での鞭打ちはむしろご褒美になりそうなものだけど、生憎俺にそんな趣味はない。

昨日のアレをうらやましい！なんて言う奴は、一度あいつに極められてしまえばいいと思う。

あの何食ったらこうなるんだ？って思えるほど細っそい脚で首を絞められると……いや、違う、俺にそんな趣味は断じてないはずだ。

結局あの後、オモプラッタという肩関節技とレッグロックという文字通りの脚関節技を教えさせられた。

そんな技の名前はルイズはもちろん知らないはずだが、うっかり俺が寝言で呟いていたらしい。

まあどうせ将来何処からか覚えるものだし、鞭打ちの他に金貨が入った皮袋で殴打されるより余程マシだ。

それに同じお仕置きされるなら、体を密着出来るほうがいいじゃないか。

その為なら骨の一本や二本、くれてやってもいい。

さて、本日は虚無の日。

今朝早くトリステイン魔法学院を発ち、俺たちはトリステインの城下町に足を運んでいた。

ルイズに前から俺が必要だと訴えていた剣を買ったためだ。

馬で片道三時間の移動時間が余りにヒマだったので、昨夜のドタバタの顛末や試しにオモプラッタをかけてきたルイズの

太ももの感触を反芻していたのだった。

いや、あの感触と甘い匂いは地獄の痛みに耐えた甲斐があった。

俺たちはブルドンネ街の大通りに差し掛かった。

久々に見る大通りは初めてみた時よりも狭く感じた。

まあ、実際5mも無い道幅に露天がひしめいてるもんな。

日本なら一車線しかない道路の両脇に、縁日の露店が並んでいるよ  
うなもんだ。

こういう商業の要所で王宮からの兵隊や貴族が通る道は広く作る事  
が鉄則だ。

特に貴族がこの道を馬車などで通行しているとき、簡単に暗殺され  
てしまうだろう。

あまりに狭い為、道をふさいだり接近したりする事が容易なんだ。

ここで何度も暗殺されかけたから良くわかる。

こんな道が王宮へと続く道だというのだから、この時代のトリステ  
インの為政者の無能を如実に表してるよな。

いや、案外襲撃しやすいから、ワザとこのままにしてあるのかもし  
れん。



多大な賠償金を抱え込んだガリアのタバサや、ハーフエルフというハンデを背負って即位したティファより

ゲルマニアに次いで国力を温存できてたトリスティンの女王が最も苦労してたなんて、なんの冗談だよと思ったもんだ。

アンリエッタが心労で倒れ、怒り狂った息子が大粛清をしようとするのを宥めるのは骨が折れた。

のほほん、とした雰囲気でありながら人知れずストレスを溜め込んで、頭に血が上ると大爆発させるのは母親の血だよな。

俺は深くため息をついて、懐にあるルイズの財布をスラれないよう注意しながら歩を進める。

名ばかりの大通りを外れ、ゴミや汚物が散らばる細い路地を歩く。

「ピエモンの秘薬屋の近くだからこの辺ね……」

「ルイズ、ここじゃないか？」

「あ、あった。」

ルイズは剣の形をした看板を確認すると嬉しそうに店に入っていた。

俺もはやる気持ちを抑えつつ店に入る。

「旦那、貴族の旦那。うちは真つ当な商売をしまさあ。」

「客よ。剣を頂戴。」

「こりやおつたまげた！貴族様が剣を！」

「私じゃないわ。こっちの使い魔が持つ物よ。」

「さようですか。昨今は貴族様の使い魔も剣を振るようです。」

「私は剣の事は良く解らないから、適当に選んで頂戴。」

ルイズのその言葉にしめしめとほくそ笑む店主に俺は釘を刺す。

「店主、主は剣の事がわからんと口にしたが、俺はよくわかるからな。」

「さ、さようですか。」

「以前儀礼用の装飾剣を高値で売ろうとした商人がいてな、俺がそれを指摘すると

怒った主が無礼打ちで、店ごとふき飛ばしてしまった事があるから気をつけるよ。」

「は、はい。ご親切にどうも。」

そう俺は店主に言っと、驚いて俺を見るルイズにニカッと笑ってみせた。

ルイズの方も俺の意図を理解したのか、ふっと微笑を浮かべる。

店主はなにやらブツブツ呟きながら奥へ引っ込んでしまった。

うまく騙して儲けるチャンスだと思ってたんだろっが、そうは行かない。

ま、貴族相手に変な商売をしてると、何れ痛い目にあうしな。

それに、もう買う剣は決まっている。

俺は乱雑に剣が積みされている一角へ向かう。

……いた。

久しぶりだな、相棒。

「ルイズ、予算はいくらなんだ？」

「新金貨で50よ。」

「へ？100枚じゃないの？」

「何よ、その数字どっから出てきたわけ？大体、あんたの怪我の治療でかなり使ったのよ？」

「う、ごめん。」

「まったく、週一のペースで大怪我する奴なんて見た事ないわ。」

「でも昨日のエキユー金貨の袋……」

「あ・れ・は！！わ・た・し・の、お小遣い！！貴族で、ヴァリエールで、しかも女の私はなにかと入用なの！」

「まずい。」

「非常にまずい。」

「デルフってたしか新金貨で100枚だったよな……」

ぞぞぞぞぞぞひじょひじょ…!

まずいますまずい……うー、値切れるか?!うー、うー、うー。

「なあ、ルイズ。おれ、これがいんだけど……」

「は?なんでそんなボロっちい剣を選ぶのよ?!」

「言ってくれるじゃねえか娘っ子!それに坊主!確かに見る目はあ  
るようだがな、自分の体見た事あのか?お前には棒っきれがお似  
合いだよ!」

「な、何?だれ?」

落ち着けルイズ。

久しぶりだなデルフ。相変わらず口が悪いな。

「ルイズ、この剣だよ。これ、インテリジェンスソードみたいだよ？」

「へー、珍しいわね。」

「わかったらさっさとお家に帰りな！娘っ子、お前もだよ！！」

「失礼ね！」

「口は悪いけど、いい剣だよこれ。」

そんなやり取りをしていると、店の奥から店主が血相を変えてやってきた。

粗相をすると店ごと吹き飛ばされかねない貴族に、悩みのであるあの剣が絡んでいる声が聞こえたのだろう。

「やい！デル公！お客様に失礼な口をきくんじゃねえ！」

「お客様？剣もろくに振れない小僧が？ふざけんじゃねえ！！」

「なあ、店主。これいくら？」

「へ？こんななまくらでいいんですかい？」

「あ、ああ。年季が入っていいそうだな。時を経て残る武器つてのは、いい鉄を使ってる事が多い。なまくらは絶対に長持ちしないからな。」

「ちょっと、もっと綺麗な剣にきなさいよ！」

「うるせえ！娘っ子、武器の良し悪しもわかんねえ癖に！早く帰れ  
！！」

「何よ！！」

「で、店主、これいくら？」



「そうですねえ……新金貨で百枚でいいですよ？」

「五十枚にならない？」

「お客様！いくらなんでもそれはあんまりです！…」

「だよなあ……」

「サイト！こんな鉄くずじゃなくてこっちの綺麗な方にしなさいよ！」

「貴族様、そちらは新金貨で五百枚となっております。」

「何よ！五十枚にしなさいよ！」

「そらみる！武器の目利きもできねえじゃねえか！お家でお人形でも弄ってる！！」

「き、貴族様、どうかご容赦を……」

「何よこのボロ剣！！溶かしてやるわよ?!」

「おもしれ！やってみる!!」

「き、貴族様！店の中で魔法は勘弁してください!!」

うづむ、どうしたものか。

親父の顔が悲壮に歪んでいる。

すこしかわいそうになってきたが、こっちもデルフを是非にも連れて帰らないとなあ。

このままだと折れたキュルケの剣持ってアルビオンに行き、ワルドとやりあう事になるぞ……

雷撃で黒こげになるか、ルーンの全開戦闘であいつをミンチにした後に、今度はおれが反動で死ぬかの二択はなあ。

ん？そうだ！キュルケの剣！

おれは親父の近くに呼ぶ。

ルイズの相手は暫くデルフがしてくれそうだ。

「よー！」「ここの鉄くず！私を誰だとおもってるのよー！」

「なあ、親父。あのインテリジェンスソードを新金貨五十枚で売ってくれるなら、いい儲け話を教えるぞ？」

「うるせ！どいつもこいつも威張り散らしやがって！貴族がナンボのもんだって言うんだ！」

「へ？」  
「失礼ね！私はそんな威張るだけの貴族じゃないわー！」

「最近、城下で『土くれのフーケ』が出没し、貴族の間で剣を下男に持たせる事が流行ってるだろ？」

「口だけは達者だな！上等だ、ほれ、俺を魔法で溶かしてみろー！」  
「へえ、よくご存知で。」

「うぐぐ……よく言ったわね！後悔しても知らないんだからねー！」

「俺たちは魔法学院から来たんだが、学院でもそれが流行ってるね。」

今日もう一組剣を買いに来る貴族がいる。」

「へっ、口だけなら平民だってそういえら！  
！ほら、やってみるよ！！度胸ないくせに！！」

「へえ。」

「な、なによ！！本当に溶かしてやるんだか  
ら！！」

「この貴族、剣の目利きはできない。しかも金持ちで気前がいい。  
おれが保障する。」

(ごめんなキユルケ。おれ死にたくないんだ……)

「じゃあやってみろっつてんだ！！お前みたい  
なペツタンコでチッコイ娘なんざ怖かねえや！！」

「なんと！しかし、何故また……」

「きい！！！！本当に無礼な鉄くずね！！わ  
わ、わたしの胸はまだまだ発展途上なのよ！！」

「なに、その貴族と俺の主は仲が悪い。あとは……わかるな？」

「ふん！！度胸も無ければ胸もないっつか？

！こりゃ傑作だ！！」

「な、なるほど。しかし、五十枚は……」

「な、言うに事欠いて……みてなさい！！今  
私の魔法を見せてあげるわ！！」

「はやく決めなよ。ほら、ご主人様が杖取り出したぞ？」

「お、お客様！！貴族様！！どうか落ち着いて！！わかった！わかった！五十枚でいいです！！ですからどうか、どうか落ち着いて！！」

「離して！あんたもまとめて溶かしてやるわよ？！！離しなさい！！」

「後生です！貴族様！後生ですから落ち着いてくだせえ！！」

ほ、なんとか値引きに成功したようだ。

親父、大の男がそれくらいで泣くなよ。

ルイズ相手にそんなんじゃない身がもたんど。

教皇様の特別説教に比べればそんなもん、子守唄みたいなもんだ。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

「落ち着いた？ご主人。まあさ、手持ちが足りないんだしこれで我慢しようよ。」

「とっくと帰れ！」

「ほら、お前も。」

「うるせえ！そんなヒョロい体して俺が使いこなせるか！」

「信じてくれよう、俺結構強いんだぜ？」

そう言つと俺はデルフをつかむ。

「……おでれーた。おめ、”使い手”か！」

「納得したか？」

「ああ。坊主なら文句はねえ！」

「わたしは文句あるわよ！」

「お貴族様！どうか魔法は！後生です！！！」

「名前は？」

俺は知っている。

だけど、これは儀式だ。

もう一度、共に戦う半身を確認する為に。

「デルフリンガー。覚えておけ！」

「よろしくな、デルフ。」

「よろしくないわよ！絶対溶かしてやるんだからこの鉄くず！！」

「お貴族様！後生です！！」  
「じよ、後生ですつうつう、ですから！  
！お願い！！」

ははは、泣きすぎだぞ親父。

そういつ時はさり気なくルイズを褒めるんだよ、そうすりゃ勘弁してくれるのも早まるから。

あえて挑発して怒りを引き付けるのも手だ。

ほら、オーク狩りでオークをバカにして困ったりするだろ？

あの要領だつて。



「なあ、デルフ。おれが使い手だとわかるんなら、こっちのご主人が何なのかわかるな？」

「ああ、まあな。」

「まだ ” 自覚 ” してないんだけど、すごい魔法使いなんだぜ？」

「そうか。そりゃそうだろうな。」

「だろ？デルフもそうおもっただろ？」

「な、なによ急に！」

「デルフがルイズをすごい魔法使いだって認めて、謝りたいんだとさ。……たのむよ、デルフ。」

「……すまなかったな、娘っ子。」

「ふ、ふん！わかればいいのよ！」

すごい魔法使い、という言葉が効いたようだ。

あれほど怒り狂っていたルイズを鎮めることに成功した。

親父は涙ながら新金貨50枚をルイズからつけとっている。

それから俺に抱きつき、ありがとう、ありがとうとむせび泣きから  
が礼を言ってきた。

余程怖かったらしい。

……気持ちはわかるよ、親父。

俺たちが意気揚々とその店を出た後、やがてやってきた二人の貴族  
に一時はほくそ笑んだ親父だったが

色香に負けて大損をし、自棄酒を煽る事になるのだった。

1 - 8 : 使い魔を見捨てるメイジはメイジじゃないわ！

何もする事がない、という事はとても辛い。

無事デルフリンガーを手に入れ、学院への帰路に俺は居た。

デルフとの再会は嬉しかったのだが、流石に剣を抜き身のまま持ち歩く訳にもいかない。

したがってあいつは鞘に収められ、大人しくしている。

ルイズはというと俺の前を馬で進んでいる。

前回は慣れない乗馬でそれどころではなかったが、今の俺の場合乗馬自体問題は無い。

ここは未来の妻と楽しく桃色トークが出来ればいいのだが、生憎まだ俺達はそんな仲でもない。

世間話をするにしても俺の場合余計な知識があるので、ボロが出かねない為にすこし控えている。

馬は勝手に進んでくれるし、楽といえば楽なのだが……

何もする事がない。

と、いう事はとても辛い。

若い体はいろんな意味で持て余すのだ。

……そうだな、これからの事を考えようか。

まず、早急にしなくてはいけない事。

妻であったルイズからの手紙の処分、これだな。

正直処分したくない。

思い入れが強すぎる。

しかし、いつ何かの拍子でルイズに見られるか分からないしな……

そろそろ覚悟を決めないか。

それから、未来だ。

今の所記憶にある出来事は大体”合ってる”。

これから先もきつと同じだろう。

俺はルイズともう一度生きる決心をした。

今回はその……ルイズ以外の女は抱かないというか、浮気はしないと約束した。

ルイズと共に未来に進む、という事は虚無に関わると言う事、ガリアの無能王ジョゼフとロマリアの教皇ヴィットーリオと対決するという事だ。

ルイズはあの時、俺に問うた。

「私のこと、愛してる?」

「私のこと、守ってくれる?」

「もし……やり直せるならまた私の為に戦ってくれろ？」

俺はすべて肯定し、誓った。

当たり前だ。

だれが違えるものか。

そしてもう一度チャンスを手に入れた。

だけど、勘違いしてはならないと思う。

このチャンスはルイズの為のチャンスなんだ。

俺の為でも、トリステインの為でも、ハルケギニアの平和の為でもない。

俺はルイズ唯一人の為に、身も、心も、全て捧げてここに居るのだ。

だから、皆の想いを踏み躪り、拒絶する事に迷いは無い。……躊躇しちやいそうだけど。

それで未来が変わる分には問題ないはずだ。

よく内容は理解できなかつたけど、ルイズの手紙には未来で生まれて来ていた子供達は心配要らないとあった。

それは信じる。

俺はルイズを信賴している。

問題は自分以外の女は抱くなと言う内容と、歴史を大きく変えようとするとその時空から拒絶される恐れがある為

大きな歴史の流れは変えるな、と言う内容。

これは俺がルイズとの約束を守る分には問題はないが、大きな歴史の流れを変えると”ここ”から消える恐れがある、と受け取った。

何故かはわからない。

俺は今も昔もガンダールヴ、虚無ゼロの使い魔だ。

ハルケギニアの事、虚無の事はルイズが考え、決めればいい。

俺は彼女を支え、剣を取って守り抜くだけだったし、これからもそうだ。

年食ってからもそれを貰いて、殆ど政治には関わらなかつた。

それでよかったと俺は思う。

「なあ、ルイズ。」

「なによ、急に？」

「例の魔法、見つかった？」

「……まだよ。」

「そっか。……早く見つかるといいな。」

「うん。」

「なあ、焦るなよ。じっくり行こうぜ。」

「そっね。」



「俺、信じてるからな。」

「……ふん、見てなさい。」

「ああ。そつだ、今夜からでも一緒に鍛錬しないか？」

「……考えとくわ。」

なんとなく、ルイズに話しかけてみる。

ルーンの力なのか、それだけで俺の心に暖かな物が流れ込んでくる気がした。

さて、この勇気を使ってここで決めてしまおう。

残るフーケの一件が終わればもう迷ってはいられない。

ずっと引っかかっていた事だ。

俺の持つ未来の知識。

未来の知識を使い色々と手を回したくなるけど、正直俺はそんな政争なんて出来そうに無い。

ずっと腕一本、出たところ勝負だったしな。

アンリエッタやルイズがそういうの全部やってくれてたし、思えば俺ずっと受身だったもんな。

変に引つ掻き回してルイズがあの未来から、更に不幸になりでもしたら目も当てられない。

……女絡み以外は成り行きに任せるか。

うん、きめた。

いくら”知っている”からとはいえ、俺とルイズだけで今の状況からレコン・キスタからアルビオン守ったり

ヴィットーリオ暗殺して聖戦止めたり出来そうにない。

これから戦争が起きて無数に人が死ぬ。

おれはそれを容認する事になるだろう。

だけど……最期はみんな笑顔だった。

あの笑顔は俺一人の力じゃない。

みんなで”あの未来”を潜り抜けたから勝ち得たんだ。

別に無理して変える事はないよな、うん。

戦争は止めたい。

だけど、俺にそんな力はきつとない。

俺の手はとても短い。

ルイズとほんの少しの人々しか届かない。

そもそも、おれはそんな事の為にここに居るんじゃない。

ルイズの為だけにここに来たんだ。

認めよう。

おれは自分勝手に、己の欲望の為に救えたかもしれない何万もの人をいまから見殺しにするのだ。

それでいて、手の届く範囲には出来る事をしよう。

血で染まった手で、ルイズを抱きしめて見せるのだ。

あ。

ウェールズはどうしょ？

手が届きそうだぞ？

サイトの様子がおかしい。

多分、あの時からだ。

城下町からの帰り、不意に後ろで馬を進めるサイトがわたしの「魔法」の事を聞いてきた。

わたしは前を向いたまま、まだ見つからないと答えた。

するとあいつは見つかるといいな、と言ってきた。

次に今夜から一緒に鍛錬しないか、と誘ってきた。

わたしは武器も手に入れた事だし別にそれもいいか、と思えばとくと答えた。

そんなサイトの様子が不意に気になったので後ろを向くと、あいつは下を向いていた。

寂しそうに泣いているようにも見えた。

どうしたのだろう？

念願の武器が手に入ったじゃない。

やっぱりもっと綺麗なものが良かったの？

私の事、新金貨五十枚しか出さないケチに見えたのかしら？

……それとも、未だに鍵となる魔法を見つけれない私に落胆してるの？

その時はそう思い、すこし不機嫌になり学院までそれ以上口を利かず戻った。

学院に戻った後、わたしは夕食を摂るべく食堂に向かった。

サイトは厨房に用があるらしい。

あいつ、コツソリ何か恵んでもらってるんじゃないかしら？と思いい後をつけてみると、予想通り厨房で何やら歓迎されていた。

私は現場を押さえるべくその場に乗り込もうとしたが、どうも少し様子がおかしい。

サイトはカマドの前で座り込み、二枚の紙を取り出した。

暫くそれを眺めた後、不意に一枚だけすこし破いて残りはカマドにくべて燃やしてしまった。

あいつ、何やってるのかしら？

私はそう思い、当初の予定通りその場に踏み込んでサイトに問い詰めたけれど、結局あいつは何も言わなかった。

ただ、あいつの悲しそうで、それで居て愛しげな目が酷く印象に残った。

夕飯の後、サイトはいつもの調子に戻っていた。

私の機嫌もその頃には直っていて、早速サイトと共に中庭に出て鍛錬（私は魔法さがし）を行う事にした。

したのだけど……

「で、何の用？邪魔しないでくれる？ツェルプストー。」

「あなたには用はないわ、ヴァリエール。用があるのはサイトよ。」

ツェルプストーが大きな、綺麗な剣を抱えてやってきた。

いつもあいつと一緒にいる女の子と一緒に。

「なんだい？キュルケ。この前の申し出なら……」

「あのね、今日はあなたにプレゼントがあるの。ヴァリエールがあなたにあげた物よりずっと素敵よ？」

「気持ちありがたいんだけど……」

（うおおおお！！タバサちっけえ！超ちっけえ！）

「みて？この剣。ほら、あなたが持つてる剣よりずっと綺麗よ？」

「おあいにく様。使い魔が使う道具は間に合ってるの。ねえ、サイト？」

「あ、ああ。ごめんな、キュルケ。」

「そんな……金貨千枚もしたのに……」

「せ、千枚?!バカなんじゃないの??サイトのボロ剣の二十倍なんてあんた正気?!」



私は思わず口に出していた。

計算は昔から得意なのだ。

ちなみにあの口うるさい剣は、色々とチャチャを入れてくるのでサイトには鞘を付けさせたまま素振りをさせている。

「な、ヴァリエール?! あなた金貨五十枚で買えちゃうような剣を持たせてるの?!」

「な、なによ! 私の勝手でしょ!」

「そんな剣、すぐに折れちゃうに決まってるじゃない!」

「そ、そんな訳ないでしょ! あのね、年代物は良い鉄使ってるから大丈夫なのよ!」

「ル、ルイズ? もうちょっとほら、仲良くしような? 友達なんだしな。」

「なんでよ！こいつはツエルプストーなのよ?!」

「ねえ、サイト。剣も女も、生まれはゲルマニアに限るわよ？トリステインの女なんて、このルイズのように嫉妬深くて気が短くて、ヒステリーで、プライドばかり高くて、おまけにペツタンコなんだから。」

「ちょっと！やめてよ！わたしはまだ発展途上なんだから！大体ね、あんただって唯の色ボケじゃない！どうせゲルマニアで

男を漁り過ぎて相手にされなくなったもんだから、トリステインに留学してきたんでしよう！」

ピキ！！って音が聞こえそうな瞬間だった。

その時、私とツエルプトーの間につむじ風が舞う。

ちなみに、サイトはその間ずっとツエルプトーと一緒にやって来た女の子をチラチラと見ている。

ご主人さまが揉め事に巻き込まれている時に、暢気に色目使ってるなんて……

この使い魔にはあとでしっかり教育する必要があるわね。

「もう帰っていい?」

「なによこの子、このつむじ風あんたがやったの?」

「わたしの友達よ。」

「大体なんでここにいるのよ?」

「いいじゃない。」

「や、やあ。俺平賀才人って言うんだ。よろしくう!!!」?

やだ!

思わず手刀を放ってしまっちゃった!



し、あなたが勝つたら私はあなたに土下座して

今までの無礼をお詫びし、クラスの前であなたに魔法で負けた事を宣言し、以後あなたの下僕としてこの身を捧げるわ。」

「……………！！……………！！……………！！……………」

(だめだルイズ！これは罠だよ。騙されるな！！キュルケはさり気なく「魔法で」勝負しようって言うてるぞ！)

「で？どんな勝負にするのよ？さっさと説明しなさい！！」

「……………！？……………！！……………！？……………！！……………！！……………？……………！！……………！！……………！！……………」

(うわー！即答だよ！受けちゃったよ！！お前できる子じゃなかったのかよ！？)

「そうねえ。お互いの剣をあの塔の天辺にロープで吊るして、魔法でロープを切って剣を落とした方が勝ちとしない？」

「いいけど、切るのは相手の剣のロープにしてよね！勝った後剣が折れちゃってたらもったいないし。」

「……………！？……………！！……………！！……………！！……………」

(デルフウウー！にげるー！にげるんだ！！)

「ええ。それでいいわ。タバサ、お願いできるかしら？」

果たして、塔には二本の剣が吊るされていた。

あのボロ剣は鞘に入っている癖になにやらかちやかちやと震えて、今にも鞘から抜けそうだったので抜けないようにしっかりと紐でくっつけて置いた。

変に動いて勝負の後にツエルプストーからいちやもんを付けられでもしたら、たまったものじゃないもの。

205

「じゃ、お先にどうぞ、ヴァリエール。」

ふん、みてなさい。

ファイアボールは目標に確実に飛ぶ魔法だからこれで行きましよう。



年季が入ってるから良い鉄使ってるし、多分大丈夫よね。

「どっちら私の勝ちのようね？」

それにしても……はあ、落ち込むわ。



デルフは無事だった。

もう一度言わせてくれ。

デルフは無事だった、こんちくしょう。

さすがだな、デルフ。

六千年も存在していた剣だけあるよ。

いい鉄でできてるんだな、お前。

だけど、そろそろ喋ってくれないか？

壊れたと勘違いしちゃいそうなんだ。

あの武器屋、保証書くれなかったからなあ！あはははは！

俺はデルフの無事を確認すると鞘に治め、その鞘を背中に背負った。

そして ” ソレ ” を待つ。

さっきルイズの魔法が当たった壁はこの上だから、俺がいる近所にソレは来るはずだ。

向こうではキュルケが高笑いをし、ルイズが地面の草を引っっこ抜いている。

ああ、カメラがあればあの可愛い落ち込むルイズを収めるのに！！

と、それ所じゃないよな。

ほら、きた。

キュルケの後ろの方、地響きを立てこっちに向かって歩いて来る巨大な影。

フーケのゴーレムだ。

「きゃあああ……！！」

キュルケが悲鳴を上げ、逃げ出してしまった。

仕方ないよな、いきなり後ろからあんなデツカイのが湧いたら俺でも怖い。

しかし……大きい。泥棒やらないで土木作業でもやった方がもうかるんじゃないか？

ゴーレムはまっすぐこっちに向かってくる。

俺は背のデルフに手をかけ、ルーンを発動する。そして、ゴーレムへ一気に近寄り……

「ぐ……！」

「サイト……！」

ルイズの悲鳴が聞こえた。

俺は巨大なゴーレムの歩みに突っ込む形で蹴飛ばされていた。

丁度カウンターになってしまった様だ。

まるで小石のように吹き飛び、元居た場所まで飛んで、デルフが吊られていた外壁にしこたま体を打ちつけた。

ぼて、とそのまま地面に落ちて、呻いていると今度は上から石の破片が落ちてくる。

直ぐ傍で重量物がどす、どす、と落ちる音がするのはゾっとしない。

上を見上げると、フーケのゴーレムが学院の宝物庫の壁を破壊している所だった。

やばい、さらに石が落ちて来る！

咄嗟に背中デルフに再び手をかけ、ルーンを発動させる。

「サイトー！ー！」

「来るなルイズ！いいから逃げろー！」

おれは近寄ろうとするルイズを制止し、落ちてくる石を見る。

やばい。

直撃する。

いやだ。

いやだいやだいやだ！

強く、つよく、さらに強く念じる。

知らずにルーンがさらに強く発光し、一気にトップギアまで上り詰める。

瞬間、世界は赤く見えた。

俺に直撃する石がスローモーションで近寄ってくる。

ここで動けばきっと俺の体はズタズタになってしまう。

”せつかくわざとゴーレムにボコられている”のにそれではまずい。

かといってこの状態を解くのはちょっと……。

お？

あの石、それとあの石！あれらさえ避ければ助かるんじゃない？

お、おおおお、おれラッキーだな！

助かる！助かるぞ！！

よし、さっそくルーンを通常状態に戻して……

よ、ほっ、そりゃ！っど。

よーし！生還したぜ！！

あぶねえ、慣れない頭は使うもんじゃないな。

もう少しで死ぬところだった。あは、あはは……

あたりはもうもつと土煙が舞う。

俺は壁に穴を開けたゴーレムを見上げる。

暫くすると、フーケらしき人影が壁の穴から出てきた。

これだ、これを待っていたんだ！

「待て！ドロボー！」

俺はわごと叫ぶ。

フーケと思わしき黒ローブの人物の手には破壊の杖らしき物。

月夜の為、黒ローブの人物”以外が”良く見える。

俺はある考えの基、今夜ここで破壊の杖をこの目で見る必要があったのだ。

目的は達した。

あとは……

素早くルイズと逃げようと思った所で、なんとルイズが駆け寄って来ていた。

「サイトー!!」

「ルイズ！ばか、何で逃げないんだよ!!」

「使い魔を見捨てるメイジはメイジじゃないわ!!」



俺は何か言おうとしたが、不意に月明かりが遮られる。

やばい、踏み潰される！

そう感じると左手で背中のデルフを掴みルーンを発動させ、右腕でルイズを抱いて思い切り前へ飛んだ。

ズン！と後ろでゴーレムの脚が地面にめり込む音がする。

ほ、と安堵したのもつかの間、再び月光が遮られた。

が、今度はルーンの発動をするまでも無くタバサの風竜が二人を掴んで飛び去っていた。

俺たちは空中で一度レビテーションをかけられ、風竜の背に乗る。

「サンキュ、えっと、タバサ？」

彼女はコクリと一度だけ頷いた。

一応、知らない振りしとかないな。

俺たちはそのまま月夜の空を旋回していると、フーケのゴーレムが突然土の山になった。

フーケの姿は消えていた。

俺は最期の芝居に取り掛かる。

「あいつ、壁をぶち壊していたけど何がしたかったんだ？」

「宝物庫」

「あそこが？そういや、あいつなんか持ってたな。」

「随分派手にやったものね……って！サイト！！あんた怪我は？！」

「あ、ああ。蹴りと壁に激突したのは大丈夫、アレくらいならなんとも無いさ。」

「ちがう！あんた途中で”アレ”使ったでしょ！！」

「あ、うん。でも微塵も動かなかったから。」

「そう、よかった……」

ルイズがはああ、と安堵したかのように肩を落とした。

ふと、俺の服の袖を引っ張る感触。

タバサだった。

「アレって？」

「あ、ああ。俺の必殺技さ。使つと”俺が”死ぬんだ。すげえだろ！」

俺はニカッとタバサに笑いかけると、後ろから笑い事じゃないわよ

とルイズに拳骨で殴られた。

タバサはそんな俺たちには興味なさそうにして、土の山となったゴ  
ーレムを見ていた。

1 - 9 : わたしは、無力な子供だ。

限界だったのかも知れない。

サイトと共に私の魔法への入り口を探していて、そこにツエルプス  
トーの邪魔が入った。

わたしの、ヴァリエールの宿敵とも言えるあいつは、わたしに魔法  
での勝負を挑んできた。

相手はトライアングルクラスのメイジ。

わたしは幼い子供と同じように、コモンマジックへの入り口を探し  
ている状態のメイジ。

始めから勝負になどならない。

勝負にすらならない。

平民が貴族と決闘するようなものだ。

これを受けるのは愚かで、無謀で、無茶な事だ。

勝負を断つても、わたしの体面に気にする必要が無い。

理は始めから私にあるし、あのすぐにからかってくる、風邪っぴきのマルコリヌもここには居ない。

勝負を受ける必要など始めから無いのだ。

そんな事はわたしが一番理解していた。

だが、わたしはそれを受けた。

” 敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶ”

そう私の使い魔は口にした。

腕は折れ、顔は醜く腫れ上がり、ボロボロになりながらも尚その言葉を発した。

相手はメイジ、決して平民では届かない筈の存在。

始めから勝負になどならない。

勝負にすらならない。

使い魔はそのメイジと決闘した。愚かで、無謀で、無茶な事だ。

それでも、その言葉を胸に使い魔は敵に向かっていった。

その、使い魔の、主であるわたしが、どうしてここで、敵に背中を見せられよう？

だめだ。

絶対にだめだ。

前の主の言葉を胸に戦う使い魔の目の前で、その前の主と比較されるような真似は絶対に出来ない。

比較され、評価される事など絶対に許さない。

この使い魔は私を”お前こそが貴族やメイジの理想だと思う”と口にしたのだ。

”お前の使い魔でよかったと思ってる。”とも言った。

だから、私は逃げない。

ここで逃げるのは、あの使い魔の主として相応しくない。

わたしは、勝負を受け、そして敗れた。

落ち込みもしたが、魔法を失敗する事自体いつもの事だ。

誰かから、からかわれないだけマシだ。

そう思い直していると、なんと大きなゴーレムがその場にやって来た。

ツエルプストーは悲鳴を上げて逃げていった。

当然だ、こんな大きなゴーレムは初めて見る。

わたしも使い魔を連れ、逃げようとした瞬間。

使い魔……サイトがゴーレムに挑んでいた。

あっけなく返り討ちにされ、壁に叩きつけられ、  
”アレ”  
を使って必死に戦っていた。

わたしは逃げようとした己を恥じた。

”敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶ”

この言葉の重さを理解していなかった。

先程の勝負では、負けてもせいぜいプライドが傷つく程度だった。



このゴーレムはどうだろう？

挑めば魔法の使えないわたしなど、簡単に潰されてしまったらう。

だからわたしは真っ先に逃げようと考えた。

挑もうとは微塵も思わなかった。

そして理解できた物もある。

” 敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶ”

サイトは貴族だ。

身分は平民かもしれない。

だけど、戦う彼の心に真の貴族が宿っているのだ。

そして、その彼を誇り高く突き動かしているのはわたしではなく、前の主なのだ。

その事実が強く、深く、わたしの心を抉る。

わたしは、無力な子供だ。

超怖い。

ゴーレムが襲撃してきた後、学院は蜂の巣をつついたような騒ぎだった。

教師に俺たちは顛末を話し、とりあえず今日は部屋ですごすよう指示された。

別にそれが怖いわけじゃない。

何事かと廊下に出てきていた女生徒のネグリジエとかもう眼福だったし。

怖いのはその間、ずっと俯いて無言だった未来の妻だ。

バレてないと思ったんだけどなあ……ああ、せめて破壊の杖奪還まで骨は勘弁してもらわないと。

部屋に戻った俺がルイズの着替えを用意すべく、クローゼットの前に立った時だ。

「サイト。こつちを見ず、そのままで居なさい。」

「はい?」

「こつち見るな!そのままそこで立ってなさい!……!」

超怖い。

ものすごい剣幕だ。

やっぱばれてたか。

ゴーレムに蹴られたわき腹がさっきからすっげえ痛いんだがなあ。

お仕置き、やだなあ。

これから大事な話をルイズにしなきゃならんのに。

そう思つて多分来る強い衝撃に備えると、不意にぽふっと気の抜けた振動が背中に伝わってきた。

何事？新しいワザか？こんな俺でもしらねえぞ？と少し混乱している、背中の方からすすり泣く声がある。

「ルイズ？」

返事は無い。

「むん、じ、ん……」

部屋に鼻をすする音がやけにはつきり響く。

「ど、うし、て、わた、し、魔法、使え、」

「ルイズ」

「どうし、て、あんたは、そんなにた、たたかえんの、よ、」

「どうし、てわたしは、ゼロで、あん、たは、きぞ、く、なのよー！」

まじ。

俺貴族じゃねえぞ？

魔法使えないし。

絶対に口に出せん雰囲気だけど。

「みんな、わたしの、こ、と、ゼロ、ゼロ、よん、で

「わた、し、きぞくじゃ、ない、メイジ、でも、ない、あんだ、こ  
そ」

229

支離滅裂だ。

でも、俺にはわかる。

溜まってたんだろつな、鬱憤やら劣等感やら。

宿敵はメイジとして優秀だし。

大貴族でありながら魔法は使えない。

おまけに使い魔は冴えないカラス以下と来ちゃあな。

そこに来て今夜の事で、悔しかったんだろっな、多分。

俺は暫く無言でルイズの好きにさせた。

彼女はその内言葉を発する事をやめ、しゃくりあげるだけとなった。

頃合を見て、俺はルイズの方を向く。

彼女は背中から離れ、立ち尽くして右手を胸に当て、左手の甲で目を抑えていた。

「ルイズ。」

「こっち、見ないで。あっち、向いてなさい！」

「ルイズ、悔しいか？」

「あたりまえ、じゃない!!!!!!」

「なあ、みんなを見返す方法があるんだ。」

「あるわけ無いじゃないの！わたしは魔法がつかえないのよ！ゼロの、ルイズなのよ！」

ゼロのルイズ。

それを口にした彼女の声は悲鳴のようでもあった。

「それがな、あるんだ。ゼロのルイズにできて、この学院のどのメイジにも出来ない事が。」

「どっせ、つまんないことでしょうー！」

「そうか？そんな事ないと思うぜ？あの”土くれのフーケ”をお前の活躍で捕まえるんだからな。」



そう俺が言つと、ルイズはえ？つと顔を上げる。

なにこれ超可愛い。

じゃねえ！いまは落ち着け！俺が落ち着け！！

「ほら、最近噂の盗賊だよ。知ってるだろ？てか、ルイズにこの前聞いたじゃん、教室で。」

「う、うん。知ってるわ。」

「昨日のあれ、多分そうだけ？学園の宝物庫をあんなデカイゴーレムで狙うなんて、並のメイジじゃない。」

「……そうね、あのゴーレムはそこらのドットやラインのメイジじゃ無理なもの。」

「ああ。それに、教師の連中の口からフーケって言葉を聞いたしな。」

(ウソだけど。いまはルイズに信じてもらえればいいのだ。)

「そうなの……でも、わたし……」

「ご主人様。」

俺はルイズの言葉をさえぎり、その場で片膝を付いて頭を下げる。

「どうか、私めに機会を与えてください。このゼロのルイズが使い魔、平賀才人がご主人様を最高の魔法使いだと証明して見せます。」

……なあ妻ルイズ、今の俺ってかっこいいよな？

「ご主人様を最高の魔法使いだと証明して見せます。」

思いっきり無様な姿を晒した私に、使い魔はこう言って来た。

わたしは困惑する。

あの巨大なゴーレムを操るメイジに、このわたしがどうやって？

そう思っていると、不意に使い魔は立ち上がり私をみてニカッと笑って見せた。

なんだか分からないけど、その笑顔はとても眩しくて、胸がときどきした。

サイトはそんな私を余所にその案を話し始めた。

私はその話に耳を傾ける。

何故だろう？

私はこの使い魔なら、サイトならきつとこの信じられない提案を、現実にしてくれるのだと確信していた。

それはそうと、わたしがツエルプストーと揉めてるのに暢気に色目を使ってた事や、他の女生徒のネグリジェを嘗め回すように見てた事後ろ向くよう命令したのに従わなかった事、どさくさにまぎれてゼ口のルイズって言った事についてしっかりお仕置きしなくちゃ。

はあ、睨って大変よね。

私はサイトの案を聞き、自分の役割を何度も何度も復習しながらその日は就寝した。

サイトも明日に備え、お仕置きを受けたらすぐに寝ていた。

……何よ、あんたまで泣く事ないじゃない。

器用な子ね、寝ながら泣いて謝るなんて。

すまん、そんなつもりじゃなかったんだルイズ！って、そんなに必死に謝らなくても、あの位わたしはすぐ許してあげるわよ。

失礼しちゃうわね。

そして翌朝。

宝物庫では教師達がなにやら揉めていた。

どうやら盗られたものではなくて、責任の在り処を探し回っているらしい。

特にあの厭味ったらしいギターが喚いている。

あいつが女生徒の中で、評判が最悪なのが良くわかる。

彼の事を話す時にはだれもギトー先生とは呼ばないわけだ。

あ、ミセス・シュヴリーズを泣かせた！

最悪ね、アイツ。

女性を泣かせるなんて貴族が聞いて呆れるわ。

レディを泣かせる奴は絶対に許さない。

制裁が下されるべきなのよ。

全身の骨を砕いてもまだ生ぬるいわ。

ん？コッぱげが私を呼んでる。

オールド・オスマン学院長の所に行くのね、行くわよ、サイト。

「目撃者はこの三人です。」

「ふむ……君たちか。」

……まあ、サイトは使い魔だから人数に入っていないのはしょうがないわね。

でも犯行現場の目撃者なのに、平民だからと除外するのはどうかと思っわ？

「詳しく説明したまえ。」

「はい。あの、大きなゴーレムが現れてこの壁を壊したんです。肩に乗っていた黒づくめのローブのメイジが何かを盗んで……  
……多分、”破壊の杖”だと思います。そしてもう一度ゴーレムの肩に乗って、城壁の外に歩き出して、最期に崩れて土にもどりました。」

「それで？」

「後には土だけが残りました。肩に乗っていたメイジもどこかへ消え去っていました。」

「後を追おうにも手がかりは無しという訳か……」

わたしの説明を聞いたオールド・オスマン氏はふむ、とため息をついた。

それから脇にいたコツぱげに向いた。

本人の前ではコルベール先生と言わなければならないが、女生徒の間ではもっぱら親しみをこめてコツぱげと呼ばれている事は内緒だ。

この先生、意外と人気あるのよ？

変人だけど。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその……朝から姿を見ておりません。」

「この非常時に何処にいったのじゃ？」

「どうでもいっしょ……」



ミス・ロングビル？ああ、あのオールド・オスマン氏の秘書のお姉さんね。

そんな事を思っていると、そのミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！何処に行っていたのですか、この大変なときに！」

「申し訳ありません、朝から急いで調査をしていましたの。」

「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎではないですか。それに宝物庫はこの通り。」

「すぐに壁のフーケのサインを見つけたので調査を行っていましたの。」

「仕事が早いのに、ミス・ロングビル。」

「そ、それで結果は？」

「はい、フーケの居場所が分かりました。」

「な、なんですと！」

私はしめた、と思った。

昨夜のサイトの案ではフーケを探さねばならなかったからだ。

私は運がいい。

「誰に聞いたのかね？ミス・ロングビル。」

「はい。近所の農民に聞き込んだ所、近くの森の廃屋に入っていく黒ずくめのローブの男をみたそうです。」

おそらく彼がフーケで、その廃屋がアジトかと。」

「黒ずくめのローブ？それはフーケに違いありません！」

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日、馬車で4時間といった所です。」

「すぐに王室へ報告しましょう！魔法衛士隊をの兵士を差し向けてもらわねば！」

「ばかもの！そんな事をしている内にフーケが逃げてしまうわ！これは魔法学院の問題じゃ！当然、我らで問題を解決する！」

あーあ、怒られちゃったわね、コッぱげ。

オールド・オスマン学院長は怒気を収め、悠然と周囲を見渡し続ける。

「では、捜索隊を編成する。我と思つものは杖を掲げよ」

私は躊躇なく杖を掲げた。

周りがざわめく。

なによ、随分掲げている奴は少ないわね。

……私一人じゃない。

まあ、いいけどね。わたしにはサイトがいるしその方が都合よ。

昨日のあいつの話は信じる価値がある。

「どうした？他におらんのか？フーケを捕まえて名を上げようとする貴族はおらんのか？！」

居なくていい。

ゼロのルイズとして蔑まれ続けたわたしが杖を掲げ、蔑んでいた者達が臆病にも杖を掲げようとしなさい。

この状況でこそ、この場でこそ私の胸に誇りは蘇る。

見てなさい、私が、私こそが真の貴族、真のメイジだと見返してやるんだから。

「ミス・ヴァリエール！何をしているのです！あなたは生徒ではありませんか。ここは教師に任せ……」

「誰も掲げないじゃないの！」

わたしがそう言うのと、つい、っと掲げられる杖をみた。

あれは……

「ツエルプストー！君は生徒じゃないか！」

「ふん、ヴァリエールには負けられませんわ。」

「私もいく」

「タバサ。あんたはいいのよ、関係ないんだし。」

「なに言ってるのよ！私とサイトだけで十分よ！…！」

「心配。」

タバサと言う子はツエルプストーだけでなく、私の方もみて言った。

ツエルプストーを見るといつもの強気な瞳でなく、どこか心配そうな目で私を見ていた。

私は……

「……ありがとう。キュルケ、タバサ。」

その好意を跳ね除けることはしなかった。

……私の活躍を目撃する人間が必要だっただけよ。

キュルケ、しっかり見てなさいよね！

そんな私たちを見て学院長が笑いながら側にやって来た。

「そうか、では君たちに頼むとしよう。」

「オールド・オスマン！私は反対です！！生徒達を危険に晒すなど  
！」

「では君が行くかね？ミセス・シュヴリース。」

「い、いえ。私は体調が優れませんので……」

んー、庇おうとしてくれるあたりいい先生なんだけどな。

ここでへたれなきゃ、すっごく尊敬できるのにもったいない。

「彼女達は敵をみておる。その上ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いておるが？」

「本当なの？タバサ。」

タバサはこくと頷いた。

私はその様子をサイトが間抜けな顔で見蕩れているような気がして、サイトの姿を確認する……・やっぱり。



もう、私の品格が疑われるじゃない！あとでお仕置きしなきゃ。

本当、賤って大変よね。

「それにミス・ツエルプストーはゲルマニアで優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、優秀な炎のメイジだと聞いておるが？」

（次は私の番よね。）

「その、ミス・ヴァリエール……の使い魔は先日ドットクラスとはいえメイジを倒したと聞いておる。」

「なっ」

なによ！と叫びそうになった。

それ、サイトの紹介じゃない！

……いや、いい。

今は、いい。

私にはまだ誇れるものがないのだから。

「この三人に勝てるという者がおるのならば、一步前へ出たまえ。」

三人……私とサイトでメイジ一人分よね、やっぱり。

はあ、落ち込むわ。

当然、だれも前へ出てこなかった。

「魔法学院は、諸君の義務と貴族の義務の期待する。」

そしてオールド・オスマン氏は高らかに宣言した。

私はこの時、劣等感と屈辱と希望を胸に成功を誓った。

1 - 10 : 私の為に。

さて、ここからだ。

俺は人知れず馬車の中で気合を入れなおす。

ルイズは……おーおーおー、カチコチだな。

フン、フン、って鼻息が荒いのなんの。

入れ込みすぎかな？でもしょうがないか。

フーケ、おっとミス・ロングビルだっけ、今は。

彼女が御者を勤める馬車というか荷車には俺とルイズ、キュルケにタバサが乗っていた。

ヒマを持って余したキュルケが、ミス・ロングビルに根掘り葉掘り質問をしている。

それから、それを咎めたルイズと口喧嘩を始めた。

ほんと、仲悪いよなあ……

まあ、ルイズの緊張が解けるならそれでもいいか。

「まったく、あんたがカッコ付けたお陰でとばかりよ。」

「別に頼んだおぼえはないわよ！」

「あんた1人じゃサイトが危険じゃないの。ねえ、ゼロのルイズ。」

キュルケがフフン、と笑みを浮かべる。

ルイズ、押さえて。うん、そうそう、暴発してもいいこと無いぞ。  
偉いぞルイズ。

「びびってそう思うのよ?」

「いざ、あの大きなゴーレムが出てきたら、貴女は逃げだして後ろから見ていただけでしょう? サイト1人に戦わせて。」

「だれが逃げるもんですか! 私の魔法であんな奴やつつけてやるわ  
!」

「魔法? あなたが? 笑わせないで!」

ああ、ハラハラする。

すぐそこにフーケが居るってのに、ルイズが余計な事を口にしな  
きやいけど。

タバサ、お前すげえなあ。

よくこんなぎゃーぎゃー煩い中冷静に本なんて読めるな。

今度爪の垢くれない？ルイズで試してみたいんだ。

「ケンカすんなよう、友達だろ、俺たち。」

「……ま、いいけどね。せいぜい怪我しないようにね。」

「ふん！あんたこそ！」

「ねえ、ダーリン。これ、使ってね。」

そういうと、キュルケはこの前の剣を俺に差し出した。

約束だからな、これはしょうがない。

一応デルフも持って来てはいるけど、今回ばかりはこっちを使おう。  
どうせ折れちゃうし。

しかしデルフう、いい加減機嫌直せよ。

あれから一言も話してくれないじゃないか。

電池か？電池きれてんのか？単三ならいいなあ、ロマリアの地下で  
確が見かけたし。

……帰ったらコルベール先生かオスマン学院長に見てもらおう。

やがて馬車は深い森の中に入って行き、俺たちは徒歩での移動に変  
わっていた。

森の中は鬱蒼としており、ルイズとキュルケは肩を竦めてビクビク  
している。

こうしてると年頃の女の子らしいよな。

フリーケとタバサはまあ、流石だ。

俺？



「なんだか暗くて怖いわ……いや……」

「ちょっと！サイトから離れなさいよ！！」

「あんまくつつくなよ。」

（うへへ、胸の感触が！メロンちゃんがひとつ！メロンちゃんがふたーっ！……落ち着け！昨日夢で妻ルイズに折檻されたばかりじゃないか俺！）

「だってー、怖いんですものー」

「じ、ごらー！」

「キュルケ、ちょっとそれはあからさま過ぎるぞ。しがみつく前にポタン外すのは……」

（やばい、こっちのルイズと股間が暴発しそう……し、視線戻さないっ）

「えー、ダーリンはごういうの、い・や？」

「この、バカ女っあんたなんかね、」

「んー、惚れた女ならいいんだけど、ほら、キュルケは違うからちよつと、な？」

「むう」

「！」

ルイズとキュルケは俺のその言葉に黙り込んでしまった。

キュルケはいつもより一つ多く外したボタンを留め直し、ふう、とため息を付いて俺から少しだけ離れた。

ルイズもぐぬぬ、って顔をしたまま言葉を飲み込み、少し遅れて歩いている。

俺はルイズの方を見ると、プイッと明後日の方を向かれました。

ううむ、コレばかりはわかりにくい。

俺に好意を向けてくれてはいるのは感じるんだけど、使い魔として

なの、男としてみてるのか、ルイズは特にわかりにくい。

はたして、前の時と今と、どっちがルイズの愛に近いだろう？

他の事はわかりやすいのにな……

恋愛からやり直しても、こつやって悩まされるとかお前結構すごいよな。

やれやれ、と思って視線を前へ戻そうと思ったが、彼女が震えている事に気が付いた。

緊張と暗い森の圧迫感による不安を感じているのだろう。

俺はキュルケからは死角になるようにして、そつとルイズの手を握ってやった。

その手は振りほどかれたりはしなかった。

「私が聞いた情報によると、あの中にいるとの事です。」

ミス・ロングビルは廃屋を指差してそう言った。

俺たちはタバサの立てた作戦に沿って、行動を起こす。

小屋に居るであろう、フーケを囚である俺がさそい出し、小屋からフーケが出てきた所を魔法の集中砲火を浴びせるとしたものだ。

俺はキュルケに貰った剣を抜き、ルイズに近寄って一言ささやく。

「わかってるな、準備はいいか？」

彼女は何も言わず、ただ力強く頷く。

俺はこの騒動の顛末を知っている。

別にその通りに終わらせても良かった。

だが、後から考えてもこの騒動は、その後に控える厳しい戦いとは

無関係だ。

ここでフーケを殺しさえしなければ、多少筋書きが変わっても問題は無いはずだ。

だから、ルイズにひとつ、今この時にだけ価値のある贈り物をする事にした。

俺はルーンを発動させ、小屋に近づく。

慎重に小屋の様子を伺い、窓から中に誰もいない事を確認すると以前とおなじように皆を呼んだ。

「だれもいないよ。」

「……畏もないみたい。」

「私は辺りを偵察してきます。」

「ああ、頼むよミス・ロングビル。」

「じゃあ、わたしは外を見張るわ。サイト、気をつけてね。」

「おう、ルイズも無理するなよ。どこからフーケが現れるかわからねえからな。」

俺とタバサとキュルケは小屋の中に入り、中を探索する。

前はタバサだったが、今回は俺が薪の近くに置かれていた大きな木箱から『破壊の杖』を見つけ、取り出した。

「あつたぜ。これだろ？」

「あつけなかつたわね。」

「これが『破壊の杖』……」

その時、外からルイズの悲鳴が聞こえた。

どうやらゴーレムが出たらしい。

三人がドアの方に振り向いた瞬間、屋根が消えた。

天井からは青空とゴーレムが見える。

わはは、改めて見るとなかなかシユールだ。

キュルケがすぐさま炎の魔法で攻撃を加えているが……土つて燃えないよな、やっぱ。

コルベール先生ならどう撃退するんだろう？すこし興味がある。

あ、もしここに連れてきていたらこう、かつこよくゴーレム撃退してキュルケが惚れたかも？

先生、ほんと女運ねえなあ……

「無理よこんなの！」

「退却」

俺達は屋根の無くなった小屋から出て走り出す。

そんな俺達の元へ、ルイズが爆発魔法をゴーレムに放ちながら合流してきた。

おれは『破壊の杖』をルイズに手渡す。

ルイズは初めて見る『破壊の杖』を受け取ると、きゅっと唇を噛み、コクリと一度俺に頷いて大事そうに抱え込んだ。

俺達は必死にゴーレムから逃げる。

でかいなりして結構早い。

先を走っていたタバサが、使い魔の風竜を呼び、跨りながら叫んだ。

「乗って！」



俺はキュルケの剣を収め、無手でルーンを改めて発動させ、ルイズとキュルケの腰を抱えてタバサの元へ一気に駆ける。

見ようによつては山賊だな、こりゃ、などと考えながら二人を風竜に乗せながらタバサに声をかけた。

「俺が引き付ける。タバサとキュルケは空から援護頼む！無理はするな！」

「わかった。」

「まかせて！」

「ルイズ！」

ルイズは何も言わず俺を見る。

「わかる” な？今から俺が” やり易く” してくる！いいか、合図したら俺を信じて飛べよ！」

「わかったわ！あんた、怪我しないでよ？！」

「ああ、まかせとけ。」

俺はルイズにニカッと笑いかけ、タバサに合図した。

三人は風竜ののって空へ昇っていく。

さて、と。

どれだけ実戦の勘を取り戻せるかな。

「ああ、まかせとけ。」

サイトはそういって、あの笑みを浮かべた。

一瞬私は胸が暖かくなるのを感じるも、風竜の上昇による浮遊感がそれを打ち消した。

眼下にはキュルケから貰った綺麗な剣とサイトの背中。

どこか自信に溢れているように見えた。

わたしは……

あの隣にいたい。

あいつの背中の隣に私の背中を並べたい。

視界にゴーレムが入る。

サイトがゴーレムと対峙している。

側で、キュルケとタバサが魔法を撃っている。

ここで見ると、二人の実力が良くわかる。

竜巻、炎。

学院の教師たちですらこれほどのものは出せないだろう。

わたしも魔法もどきをゴーレムに撃つ。

しかし、どの魔法もあのゴーレムには効かない。

せいぜい表面の土をぼろぼろと落とす程度だ。

サイトはというと、ゴーレムの攻撃を紙一重でかわし、斬りかかっている。

見ていて冷や冷やしてくる。

本当に紙一重なのだ。

最初はもっとゆっくり避けられていたのに、今では避けると同時にゴーレムの攻撃がサイトのいた場所にめり込んでいる。

疲れが出てきたんだろうか？

”アレ”を使わなきゃいいけど……

はやく、はやく合図してほしい。

私は杖を振り、魔法の出来損ないを放ちながら一方の手で強く『壊の杖』を抱きしめた。

ひひひひひひひひひひ

死ぬ！

だめ、死ぬ！！

やっぱり昔みたいな動きは今は無理だ！

ゴーレムのパンチにあわせて、皮一枚ちよい外って感じで避けながら懐に入って、ルーンの力で敵の重心を蹴り上げ

バランスを崩した所に体重を乗せた剣で突いて、フン、デカイだけが取り柄だな。って俺気分だけイケメンってのを良くやってたんだけど……

まず皮一枚がもうダメだ。

うん、だめだめ。

当たっちゃう。

こっ、プチってやられちゃう。

でも攻撃を俺に集中してくれるのは助かる。

”目的” を果たしやすいからな。

そう俺は思いながら攻撃をかわして行く。

余裕をもってかわすこともできるが、この後アルビオンで風のスクウエアであるワルドと戦わなければならない。

勝敗はわかっているんだけど、やっぱりさあ。

惚れた女の前でバツチリキメたいじゃないか。

ルーンのギアを上げれば間違いなく瞬殺なんだけど、あの状況でつかえば俺も死ぬ。

だから、せめて俺の五十年近い戦闘経験を少しでも取り戻したい。

散々スクウエアメイジを暗殺者として送り込まれたから、「スクウエア」ってやつ恐ろしさが良くわかる。

魔法だけじゃないんだぜ？

生身のままガンダールヴについて来たりする奴とかたまにいるんだぞ？

俺が負けててもおかしくなかった勝負もいくつかあるからな、訓練は怠れん。



そう思ってたこじやって、こいつを相手に色々やってるんだけど……

ひ？！

あぶねーあぶねーあぶねー、いまの危なかった！！

結構見切れるんだけど、体が反応しない。

やっぱ、基礎訓練からやり直しだな。

しかしこの剣ダメだなあ……突く以外使い道ない。

斬撃を繰り返したり思いつきり力込めて突くと折れそうだもん……

俺はそう一人ごちると、横薙ぎの一撃を前に跳んで回避し、目の前に迫ったゴーレムの腕を足場に後方にまたも跳ぶ。

ゴーレムの一撃は、鬱蒼と茂っていた森の木々を易々となぎ払った。

俺が着地すると、ゴーレムは先程の一撃を繰り返した方とは反対側の腕で、回転するように拳を繰り出してくる。

今度はゴーレムの足元へ飛び込み、ゴーレムの後ろへ抜けた。

さっきまで俺がいた場所は、その周辺の木々ごと派手に吹き飛ばす。吹き飛んだ木々がクルクルと宙を舞い、タバサたちの乗った風竜が慌てて回避している。

まるで台風だ、と思いつつ周囲を見渡す。

ゴーレムが暴れまわった分、木々が多く倒れちよとした広場のようになり、視界が開けていた。

頃合か。

タバサの位置を確認し、今度は拳を振り上げ、たて薙ぎに俺を潰そうとするゴーレムを見る。

今度は避けない。

ゴーレムの一撃が地面にめり込む。

「サイトー！ー！」

ルイズの悲鳴が轟音にかき消される。

俺は一瞬後ろに下がってギリギリで一撃を避け、吹き飛んでくる土砂を剣の影で少しでも弾きながら

地面にめり込んだゴーレムの手首、肘、腕と駆け上がり肩を足場にして、ゴーレムの後方へ飛ぶように空中へ大きくジャンプしていた。

目の前にはタバサの風竜がいる。

「ルイズ！いいぞ！」

そう叫ぶと、ルイズは俺に向かって飛んだ。

キュルケが思わず悲鳴をあげる。

タバサも驚いた表情をしていた。なかなか見られる表情じゃないな。

俺はルイズを抱きとめ、まだ体勢を崩しているゴーレムの後ろへ着地し、素早く広場から森の中に飛び込んだ。

それからすぐに森を目隠しにして移動し、俺はゴーレムの横方向から飛び出し、一撃を加える。

しかし、それはただ表面に傷をつけるだけの一撃だった。

ゴーレムの反撃が飛んでくる。

それをギリギリで避ける。

次撃、これもギリギリの所で回避。

まずい、攻撃の回転が速くなった。

そう思いつつも、俺はなんとか避け続ける。

少しでも時間を稼ぐために。

大きく避ける事は今はする訳にはいかない。

当然、捌ききれない一撃が飛んでくる。

そしてとうとう俺は、パンチをモロに食らった。

インパクトの瞬間、ゴーレムの拳は鉄に変わっていた。

フーケめ、結構えげつないもんつくるな……と思いつつ、俺は少しでもダメージを減らそうと後ろへ飛ぶ。

バキバキ、と音がして俺は吹き飛ぶ。

骨じゃなくて、吹き飛んだ時に当たった木々が折れた音だと思いたい。

耳鳴りがして、目もぐるぐる回る。

手足の骨は折れてないようだ。日ごろルイズに鍛えて貰っているからな！

しかし、次はもう避けられそうにない。

何とか立ち上がったものの、もう足は動きそうに無い。

目の前にゴーレムがやってきて、再び腕を振り上げた。

その時、ゴーレムの股の間から待ちわびた姿が見えた。

俺は歯を食いしばり、キュルケの剣でその一撃を受ける。

剣はあっさり折れたが、俺は吹き飛びはせずゴーレムの拳を受けた体制のまま

その場からすこし後退した状態でその拳を支えていた。

左手のルーンは激しく光を放ち、鋼鉄となったゴーレムの拳を支え今にも押し潰されそうだった俺は

じりじりと巨大なゴーレムを押し返していた。

食いしばった歯がギリギリと音を立て、視界が赤くなるのを感じながら声を振り絞って叫ぶ。

「ルイズウ！！撃てえええ！！」

瞬間、すさまじい轟音と共にゴーレムの上半身が吹き飛んだ。

赤い視界が元に戻っていく。

しかし、視界は開けない。

闇だ。

まずい、意識をなくしたか？夢か？今日は妻ルイズ出てこないよな？泣かせてないし、手握ったし。可愛かったなあ。

一瞬混乱するも、意識は保っているらしい。

ルーンがまだ、通常状態で発動しているのがわかる。

右手には折れたキュルケの剣の感触。

一瞬とはいえ、妙な体勢でルーンを強く発動させたから、迂闊にこれは手放せないな……

やだなあ。この後フーケを捕まえるまでもつかない、俺。

殆ど一瞬だったし、ちょっと大きい目のゴーレムを支えたただけだから大丈夫だよな？

しかし、なんで真っ暗なんだ？

音も聞こえん。

身動きもできん。

息も苦しいな？

そう、思っていると、遠くでルイズの声が聞こえてきた。

それは段々と近寄ってきて……

「サイトー！ー！」

俺を掘り当てたルイズの顔は土で汚れていた。



私は森を走った。

向こうではサイトがゴーレムと戦っている。

森を抜け、ゴーレムがなぎ倒した木々を利用して見つからないようにゴーレムの後ろへ回り込む為、私は走る。

『破壊の杖』の使い方は知っている。

どうやって当てるのか、どうやって使うのか、サイトに簡単な絵を書いてももらいながら念入りに教えてもらい、杖を使って何度も練習をした。

チャンスは一回、二度目はない。

あの月夜の夜、サイトはこの杖を見た時に驚いたそうだ。

自分の世界の武器だったと言っていた。

多分、ハルケギニアでこの武器を使える者はいないとも。

サイトは言った。

私があのでのフーケのゴーレムを倒せば、きっとみんな見直してくれると。

だれも打倒できそうにないフーケの巨大なゴーレムを、わたしが破壊するのだと。

サイトは同時に、自分はルイズの使い魔だから、他の誰にも『破壊の杖』の使い方と言わないとも誓った。

つまり、サイトが黙っていればこの杖を使ってゴーレムを破壊する事は”私にしか為し得ない”事になるのだ。

最初はインチキだと反論したが、使い魔として主に知識を与える事のどこがインチキなのだと言われた。

……私はどこか、納得はしなかったがそれです承した。

何も出来ないままではイヤだった。

それからサイトと、どうやって『破壊の杖』をフーケから取り戻すか考えた。

サイトはきつとフーケの搜索隊が編成されるだろうから、二人で参加して、フーケを探し出し隙をみて杖を取り戻して

私が『破壊の杖』でゴーレムをやっつけるんだと言った。

一度しか使えない学院の宝を使うのは気が引けるが、それよりも私の皆を見返したいという心の方が強かった。

正直、今でも稚拙で無茶苦茶な案だと思っているが、事態は私に都合の良い方ばかりに動いた。

サイトは私が失敗しないよう、ゴーレムの攻撃を利用して木々を倒し、視界を確保してくれてた。

今この時も私がゴーレムの後ろに回りこむ時間を稼いでくれている。

急がねば。

サイトはきつと、私を信じてどんな無茶をやっても時間を稼ごうとするだろう。

私の為に、命を賭けて戦ってくれているのだ。

私の誇りの為に、その命を削ってくれているのだ。

私の為に。

ならば、わたしはそれに応える義務がある。

私は貴族であり、メイジであり、そしてあの忠実な使い魔の主なのだ。

悪い足場に苦勞しながら、やっとの思いでゴーレムの後ろに立つ事ができた。

昨夜のキュルケとの決闘で撃った魔法と同じ距離でよい、と聞いていたのでここならば攻撃を外さないだろう。

ゴーレムを挟んで、サイトは相手を少しでもその場に留めようと、その場からなるべく移動しないようにして攻撃を避け続けている。

わたしは急いで破壊の杖を使える状態にする。

その時、ゴーレムの拳がサイトに当たった。

サイトが向こうへ吹き飛んだようだけど、私からは見えない。

ゴーレムが前へ歩み、拳を振り上げたから、まだサイトは生きているとわかった。

私は杖を前後逆に構えてないかを確認して、何度も練習したとおり、杖をゴーレムに向ける。

ゴーレムの拳は振り下ろされていた。

それと同時に”アレ”の光が見える。

わたしはサイトの叫ぶ声を聞いて、狙いを定め破壊の杖を使った。

ぽしゅ、と間の抜けた音がして、なにかが白い煙を上げゴーレムに飛んで行き、当たる。

瞬間、すさまじい轟音と爆発があり、ゴーレムの上半身は綺麗に吹き飛んでいた。

私はおもわずやった！と思ったが、残る下半身が崩れて土になった。辺りを見ると胸が張り裂けそうになった。

サイトの両腕が土の山から出ていた。

ぴくりとも動かず、折れたキュルケの剣を握り、左手のルーンは弱弱しく光っているだけだった。

焦った私はそこへ駆け寄り、急いで地面を手で掘る。

その場で崩れた土は掘り起こしやすかったが、それでもたちまち指

を擦りむいた。

そんな事もお構い無しに私は土を掘り続ける。

やがて、サイトの頭が見え、顔が出てきた。

「よう、ルイズ。やったな。」

サイトはそう言うと、ニカッといつもの様に笑った。

「あんた……はあああ、心配させないでよ……」

私は思わずその場へたり込み、下から見上げてくるサイトを見て思わず吹き出した。

バンザイをして間抜けな格好で地面に埋まるサイトも笑っていた。

張り詰めていたものが切れて、なんだか無性におかしかった。

笑いながら安堵の為か、私は泣いた。

1 - 1 1 : 敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶ

「サイト！ルイズ！」

キュルケとタバサが風竜から降りて、駆け寄ってきた。

俺はバンザイをして土に埋まりながらその様子を眺める。

「ルイズ！すごいじゃない！見直したわ！」



「きゃ、わ、何するのよ!」

キュルケがやや興奮した様子で、俺の前でへたり込んでいるルイズに抱きついた。

抱きつかれたルイズは、キュルケの賞賛にまんざらでもないようだ。

ルイズは胸を押し付けるように抱きついてくるキュルケを振りほどくと、んしょ、と可愛い声で立ち上がり

むんずと折れた剣を握る俺の右腕を掴んだ。

「キュルケ、サイトを引っこ抜くの、手伝ってくれる?」

「ええ、いいわよ。……ひゃああ!」

俺の左手を握ったキュルケが突然エロい……もとい、変な声を上げ

尻餅をついた。

俺、そんなにイケメン？……な、訳ないよなあ……

「ど、どうしたのキュルケ！？」

「どうした？お、おれ何もしてないぞ？」

「あ、え？、えっと。ダーリンの左手を握ったら急に体の力が抜けたというか、魔力が吸い取られるというか……  
ごめんなさい、それでビックリしたの。」

俺とルイズは思わず顔をあわせる。

どうやら他にも特殊能力があったらしい。

だけど、さっき二人を抱きかかえた時はなんとも無かったよな？

そう思案してルイズに目をやると、ルイズがはっ、とした顔になっていた。

ん？ルイズ？何か心当たりがあるのか？

彼女はワナワナとして、一歩後ろに下がる。

「サイト。」

「何だ？」

「見た？」

「はえ？」

「みみみみみ、みたでしょ！」

「うっ？」

「パンツ見たでしょ！！この変態犬！！！！」

超怖い。

そりゃ、位置的になあ……

だけど、俺、土の中の部分はボロボロでそれどころじゃな痛つてえええ！……

ルイズ、サッカーボールキックはダメだつて！

あ、踏まないで！お願い！つて、なんでキュルケも一緒になつて踏んでるの……！

さっきまでダーリンダーリン言つてたじゃん！

く、暗くなつてきた……ルーンを強く発動したから武器は手放す訳にはいかん。い、意識をしっかりと……

「はあ、はあ、はあ、まったく！油断も隙もないんだから。」

「ふう、ふう、そ、そうね。ダーリンも一言言ってくれば幾らでも見せてあげるのに……」

「お、お前らなあ……俺、土の中は怪我してるんだぞ？土の外も今怪我したけど。」

「と、とにかく引っこ抜きましょうか、キュルケ？」

「え、ええ。でも近寄ると下着見えちゃうから、タバサのシルフィードをお願いしましょうか、ルイズ？」

そう言うとキュルケは、後方で俺たちの様子を見ていたタバサに声をかける。

近寄ってこなかったのは俺の位置からは、パンツが見える事に気が付いていたからだろう。

うん、思慮深い子だ。

政治をやらせたらアンリエッタより凄かったもんな、タバサ。

くそう、白、赤と来たから絶対ブルーが来ると予想してたのに。

あ、シルフィード？や、やさしく囁んでね？

あだ！あだだだだだだ！！！食い込んでる！犬歯食い込んでる！！  
シルフィード、お前半分位ならとかおもってねえか？！

いくら俺でも半分も齧られたら死んじゃうぞ？だから食べちゃダメ  
だぞ！？わかった？

「食べちゃダメ。」

「悲鳴を上げながらドラゴンに齧られて引っこ抜かれるダーリンも  
素敵……」

「まるでマンドラゴラね。」

タバサ……お前の食べちゃダメ、は頭にお腹を壊すから、って付い  
ていそうだな。

俺はシルフィードに地面から引っこ抜かれて、ぺっと吐き出された。

唾液がたくさん付いてしまった。……ちょっと食いたかったのか？  
シルフィード。そんなに名残惜しそうな顔するんじゃない。

やれやれ、と思いつながら怪我の具合を確かめる。

ルーンを発動させてルイズの側に居るから、痛みはそれほど感じないんだけど……

「フーケは？」

タバサの問いに俺たちは崩れた土を探してみる。

もうすぐその辺から出てくるよ、とは流石に言えない。

当然、いない。

その様子を見ていたのか、茂みからミス・ロングビルが出てきた。

この後一応小芝居に付き合ってやらんとな。

フーケも昨日の夜『破壊の杖』を盗んで使い方分からなくて、ここまで往復してるから寝てないんだろっし。

良く見ると目にクマできてるじゃん。

寝ないとすぐ肌が荒れるぞ？

ルイズだったら怖くて近寄れなくなる位なんだから。

「ミス・ロングビル！フーケはどこからあのゴーレムを操っていたのかしら？」

「さあ、わたしにもわかりませんわ。」

「あ、ルイズ。指大丈夫か？見せてみるよ。」

「な、なによ、急に。」

「ほら、土を素手で掘ってくれただろ？ミス・ロングビル！『破壊の杖』をちよっともってて。」

俺はそう言いながらルイズから『破壊の杖』を受け取り、ミス・ロ



ングビルに渡す。

ほれ、仕事しやすくしてやったぞ。さっさと終わらせようぜ。

さっきからすこし脇腹が痛いんだ。

ミス・ロングビルは俺から『破壊の杖』を受け取ると、スッと距離をとって俺たちに突きつけた。

「「「苦労さま。」

「ミス・ロングビル?!」

「どっぴいじことですか?」

「さっきのゴーレムを操っていたのはわたし。」

「え?!じゃあ、あなたが……」

「そう、土くれのフーケ。流石は『破壊の杖』ね。私のゴーレムがばらばらにされてしまったわ。」

「くっ、俺たちを騙していたってわけか!!!」

どう？俺いい演技してる？

一度でいいから台詞のある役をしてみたかったんだよね、学芸会とかでさ。

恥ずかしいから立候補とか出来ない子だったんだよな。

推薦されるほど人気なかったし。

「おっと、動かないで。『破壊の杖』があなた達を狙っているわ。全員杖を捨てなさい。そのすばしっこい使い魔君も剣を捨てなさい。」

皆言つとおり杖を捨てる。

俺もルーンを発動させながら剣を捨てる。

すこし圧迫感を感じた。剣を持ってない分、負担がかかっているの  
だろう。

「どござしてー！」

「そうね、説明してあげる。わたしね、『破壊の杖』を盗んだのは  
いいのだけど、使い方が分からなかったのよ。」

「使い方？」

「ええ。振っても、魔法をかけてもウンともスンとも言わなかった  
もの。使い方が分からないじゃ、宝の持ち腐れでしょう？」

「それで魔法学院に戻って捜索隊を出させ、使わせる状況を作った  
という事か。」

「ええ、そういう事。あなた達が知らなかったらそのままゴーレム  
で踏み潰して、また学院に戻れば良かったしね。」

「このっ！」

「ルイズ、言わせてやれ。」

海辺の断崖絶壁で自分の罪や謀を告白するのは犯人の権利だからな。

ここ、森の中だけだ。

「サイト！」

「随分物分りのいい使い魔ね。続けるわよ？お陰で『破壊の杖』の使い方もわかったし、ほんと、あなた達には感謝してるわ。」

「俺たちをどうする？」

「残念だけど、ここでお別れね。」

フーケはそう言うのと俺たちに向かって『破壊の杖』……ロケットランチャーを肩に担いで構えた。

タバサ、キュルケは目を瞑る。

ルイズは目に涙を浮かべて、悔しそうにフーケを睨みつけていた。

なにこれ、横から見てても超怖い。

「なあ、フーケ。」

「なに？使い魔君。命乞い？」

「いいや。聞きたい事が残ってるんだ。」

「……いいわ。言うてごらんなさい？」

「お前、貴族ばかり狙う盗賊だよな？」

「そうよ。間抜けな貴族の顔を見るのがすきな。」

「そうか。お前もその間抜けな貴族がするように『破壊の杖』で、杖を捨てて何も抵抗出来ないこいつ等を殺すのか？」

一瞬、フーケが驚いたような顔をする。

まあ、知ってるしな、フーケの事情って奴も。

卑怯だけど、説得・説教パートがなければ犯人は後悔してくれないし。

「なあ、フーケ。お前も、気分次第で力のない平民に暴力を振るうような貴族と同じなのか？」

「それは……」

俺はフーケが動揺した隙を突いて、一気に距離を詰め腹に拳を突き立てる。

フーケはうぐ、と呻いて気を失った。

ゴメン、監督。やっぱ説得とか説教とかめんどくさくなっちゃった。俺、そんなに頭よくないし。息子も説教よりもブン殴って怒る事が多かったしなあ。

あ、娘には手をあげた事はないぞ？

今ならルイズがあんたに口で説教するよりも楽だからと言いながら、肉休言語でお仕置きしてた気持ちがちよっとわかる。

……まじめな話、フーケをここで説得し、味方にしようと思われないし味方になるとも思えない。

政争の末、家族を殺され家を潰され貴族を憎んでいる彼女は、孤児院の子供達を支援するような善良な一面もある。

ティファニアの事もあるし、仲良くしたいのも確かだ。

だが果たして彼女は今の俺たちの説得を聞き入れるだろうか？

俺がもしアルビオンでワールドにルイズを殺され、どこかで初めて会

う同じレコン・キスタのメンバーに

俺はワルドと違うと言われて、その言葉だけで納得するだろうか？

ティファの立場のように、レコン・キスタに狙われている子を保護  
していて、戦っているメンバーの相手がその存在を知っていると聞  
かされ

相手を始末するならともかく、味方だという言葉信じられるだろ  
うか？

下手するとティファの隠れ家を変えられ、二度と会えなくなるのか  
もしれない。

結果、ヴィットーリオの手に落ちたりする事も十分考えられる。

しかもフーケは凄腕のメイジで、今、俺たちは命のやり取りをして  
いるのだ。

現に彼女は『破壊の杖』を躊躇なく俺たちに向けてきた。

もたもたしてる内に彼女に杖を持たせ、再びあのゴーレムを錬金さ  
れると目も当てられない。

ここで捕まえても後で逃げおおせる事もわかってるし、アルビオン  
の時も犠牲はでないし、放っておいても後で和解出来るフーケを

今この場で出来るかどうか分からない説得を行うのは、俺の自己満  
足でしかない。



そんなものの為にルイズ達を付き合わせて、これ以上危険に晒す訳にはいかないしな。

俺は悪いな、と心で詫びながらフーケから『破壊の杖』を取り上げて、ルイズに差し出した。

「サイト？」

「フーケを捕まえて、『破壊の杖』を取り戻したぜ。」

俺はニへへと笑い、三人を見た。

三人は顔を見合わせると、歓声をあげて抱擁しあつた。

俺は捨てた折れた剣を拾って学院までの帰路、ルーンが維持できるかなあ、と一人肩を落とした。

「死んだ方がいいのでは？」

私もそう思う。

オールド・オスマン学院長が、ミス・ロングビルことフーケを秘書として雇っていた理由を聞いた感想だ。

まさか居酒屋でおしりを触らせてくれたからだなんて……

一瞬どこの関節から外してやるうか真剣に悩んだじゃない。

あ、コッぱげ先生、オスマン学院長に説得されちゃった！

なんか幻滅……

そんな私たちの冷たい視線に気付いたのか、コホンとひとつ咳払いをしてオスマン学院長は続ける。

「さて、君たちは良くぞフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り戻してくれた。先頃、フーケは城の衛兵に引き渡したし

『破壊の杖』も学院の宝物庫に無事戻った。一件落着じやな。フーケの奴も観念したのかえらく大人しかったとの事じゃ。」

オスマン学院長はそう宣言すると、私たちの頭を優しくなでてくださった。

先程のフーケの話聞いていなければ、今日は髪を念入りに洗おうとは思わなかっただろう。

そう言えば、森からの帰りにサイトのルーンの能力を調べる為、フ

ーケを実験につかっちゃったのよね。

ずっと左手で触らせてたら、フーケの奴みるみる弱って……

あいつのルーンって一体何なのだろう？

珍しい、というか見た事ないルーンよね。今度じっくり調べましょ。

「そこでじゃ。ミス・ヴァリエールとミス・ツエルプストーには『シュヴァリエ』の爵位申請を宮廷に出しておいた。

ミス・タバサには『精霊勲章』の授与申請をな。追って沙汰があるじやろう。」

「本当ですか？」

「本当じゃ。君たちはそれだけの事を成し遂げた。胸をはりなさい。」

私はその言葉にとっても感激した。

やっと、やっと認めてもらえた！

そう思うと涙が再びこみ上げてきたが、あることに気が付いた。

「オスマン学院長、サイトにはなにかないのですか？」

「残念ながら彼は貴族ではない。」

「でも！サイトは命がけで戦ったわ！誰よりも真つ先に敵と剣を交え、誰よりも傷を負ったわ！なのに貴族じゃないからって……  
魔法が使えるから貴族と呼ぶんじゃない！敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶのではないのですか！」

わたしは思わず声をあらげ、学院長に詰め寄る。

「いいんだ、ルイズ。俺はお前の使い魔だろ？俺の手柄はお前の手

柄さ」

「でも！……いいわ。オスマン学院長、失礼しました。」

「うむ、気にする必要はない。彼には私から何かお礼をしよう。さて、今日は『フリッグの舞踏会』じゃ。」

『破壊の杖』も戻ってきた事だし、予定通り執り行つ。今日は君たちが主役じゃぞ。」

オスマン学院長は目を細めてそう言った。

私たちは礼をして部屋を後にしようとしたが、サイトは残った。

なんでも大事そうに抱えているボロ剣が喋らなくなったとかで、オスマン学院長とコッぱげ先生に相談するのだとか。

不良品じゃないのそれ？と言うと、誰のせいだよ！と怒られた。

まったく、ちょっと見直したというのに八つ当たりするなんて失礼しちゃうわ。

あとでしっかりお仕置きしとかなきゃ。

はあ、寝ってほんと、たいへん。

そう思いながら部屋を退出し、教室へ戻ると皆が私たちの話を聞こうと待ち構えていた。

そこにはもう私に嘲る目を向ける者はいなかった。

その夜。

『フリッグの舞踏会』が食堂の上のフロアで予定通りに開かれた。入り口の扉の向こうでは皆、煌びやかに着飾り豪華な食事や音楽、ダンスや男女の語らいに時が経つのを忘れている。

暗い廊下に立ち、衛士が私の名を叫ぶのを待つ。

ここから見る光景は見慣れたはずだったのに、今居る場所からはまるで別の世界のようにもみえた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなああああいいいいいい！」

わたしはその声を聞き、会場へ足を進めた。

皆が私を見る。

昨日までは嘲笑、侮蔑、あざけり、悪意、憐憫。

今は羨望、好意、憧憬、嫉妬。

まるで違う。

世界が違う。

人の目をみると、いつも己の誇りを守ろうとしていた。

そうしないとすぐに誇りが瓦解し、劣等感が丸出しになってしまうからだった。

今は、胸に抱いた誇りを守る必要さえ、ない。

男の子たちが好意の目をむけ、わたしをダンスに誘ってくる。



女の子たちが羨望の眼差しで、私とお話をしようと囲んでくる。

邪魔だ。

邪魔しないで。

わたしは彼を探さなければ。

彼に会わなくてはならない。

彼に一言、お礼を言わなければ。

本来会場内に貴族でも無い彼が入れるはずはなかったが、わたしが掛け合って参加できるようにしておいた。

だが、彼はいない。

どこよ？

どこに居るのよ？

もくもくと食事をしているタバサの側にもいない。

男の子達に囲まれてダンスの予約をこなしているキュルケの側にもいない。

私がイラつきながらサイトを探し、ふとキュルケと目が合うと、彼女は微笑みながらバルコニーの方を指差した。

いた。

知らず胸が高鳴る。

中には居辛いのか、バルコニーの手すりにもたれかかり、外を眺めていた。

手すりにはワインのグラスと簡単な食事を盛った皿が置いてあり、抜き身のボロ剣が立てかけてあった。

……どうやらまた喋るようになったようね。

「楽しんでるようね。」

「まさか。服もボロボロの土だらけ、体は包帯まみれだぜ？」

私はサイトに声をかける。

胸の高鳴りが更に加速していた。

ボロ剣が「馬子にも衣装じゃねえか！」とちやかしてくる。

うるさいわね、今度はお風呂につけるわよ、と返したららそれきり黙ってしまった。

冗談なのに失礼しちゃうわ。

「傷の具合はどうなの？かなりうなされて、夜まで寝込んでたけど。」

「ああ、もう大丈夫だ。寝てる間にルーンの秘密もわかったしな。」

「そつなの？」

「ああ。後で説明するよ。ま、今は忘れようぜ。今夜はお前が主役だろ？お姫様。」

サイトはそう言うとニカッと笑った。

私も同じように笑ってみせた。

「ほら、向こうでこっちをチラチラ見てるぜ？行ってダンスの相手をしてこいよ。」

「いやよ、あんたわかってて言ってるでしょ？」

「ばれたか？はは、さすが俺のご主人様だな！」

「当たり前じゃない。私を誰だと思ってるのよ？ほら、ご主人様の右手がお留守になってしまってるわよ？」

「踊っていただけですか？レディ。」

サイトは私の手を取り、こつべを垂れた。

すこしキザっぽい仕草のあと顔を上げてふたたびニカッと人懐こく

笑う。

なによ、こいつやれば出来るじゃない。

きつと前の主人に仕込まれたのね……すこしムカつくわ。

「よくつてよ、ジェントルマン。私の足を踏んだらあとでお仕置きだからね。」

「はは、お手柔らかに。」

そしてサイトの前の主人にわたしはもう一度、嫉妬する。

彼はダンスがとても上手かったのだ。



突然だが俺、平賀才人は懐かしい夢を見ている。

『フリッグの舞踏会』が行われる少し前、夕方の時分だろうか。

土くれのフーケを捕らえ、オスマン学院長に報告をした後でルイズの部屋に戻り治療を受けた時だ。

俺は捕縛の報告の後、学院長の部屋に残り一向に話そうとしないデルフの仮病を見抜いてもらってから、自身のルーンの事を話した。

ガンダールヴである事、使うと反動が凄まじいという事、フーケのゴレム相手に使った事、そして今も発動させ続けてその反動を抑えている事。

前回と違い異常な能力である事は言わなかった。どうせ、わかりっこない。

そして学院長にフーケ捕縛の褒美として、すぐに医者と秘薬を用意してもらい、治療を行って貰えるよう交渉していたのだった。

何が何でも『フリッグの舞踏会』でルイズと踊りたかったもんな。

俺、アンリエッタにティファと一緒に必死で練習”させられてた”んだぜ？

三国の王配だから、パーティーに出ないわけにいかない事も多かったし。

作法やらレッスンやらで必死に色々覚えて、豪華絢爛煌びやかなパーティー会場へ赴いて、眠い眼を擦りながらダンスこなして

ゲストの貴族どもを笑顔でお見送り、ヘトヘトになって馬車に乗り込んで、その帰りがけに暗殺者に襲われる、ってスケジュールを

ずっとこなしてたんだ。

ちなみに暗殺者イベントが余りに面倒臭くなった時、ロマリアで何本か仕入れてた『破壊の杖』で吹き飛ばしてやった事もあった。

暗殺などを行う貴族の風上にも置けない相手には俺は一切容赦しなかったから、一部貴族の間じゃ結構な悪評だったんだぜ？



貴族向けの戯曲なんかで俺、女好きの変態で卑怯な悪党にされてたりした事もあるし。

まあ、ロケランはちょっと可哀相だったけど、その時の暗殺者がスクウェアだったお陰で暫くは狙われなかったのは良かった。

そこまでして培ったこの技術、なにも知らないルイズに見せ付けてキヤーステキ！って思って欲しいじゃないか。

閑話休題。

俺の希望通り医者と秘薬を用意してもらい、事前に許可を取っていたルイズの部屋のベッドで寝てからルーンを解除したときの事。

俺は気を失わなかった。

激痛が体中を襲い、バチン、と脚の腱が切れる音を聞き、同時にゴキーンと右腕が折れ、ぎゃあ、と情けない悲鳴を上げた。

やはり強化ルーンを使い、超速移動までは行わなかったとはいえ、あのデカイゴーレムの一撃を支えて押し返した事が不味かったようだ。

それでも以前とは違い内臓にまではダメージは来なかったようで、比較的？軽症であり意識も失わず早く魔法治療が終わったのだった。

俺を治療した医者は例の奴で、ますます俺の血が秘薬の一種だと確信を深め、治療の跡コソソリ血を抜こうとしていた。

仕方ないから適当にタコ殴りして、廊下に放り出しておいた。

多分、フレイム辺りがお持ち帰りしてくれるだろう。

次やったらシルフィードに食わせてやるからな。

そんなやり取りの後、俺は少し眠った。

大きな傷はある程度癒えていたが、やはり時間をかけて回復させる必要があるし、疲労も溜まっていた。

ま、とりあえず今日の夜の舞踏会に出席できればいいからな、動きやいいんだよ、体なんて。

寝過ぎす事だけが気がかりだったが、そこはデルフに起してもらおうよう頼んだ。

そしておれは冒頭に至り、その夢を見た。

とても懐かしく、愛しい夢を。

「どっ？調子は。まったく、随分無茶ばかりしてるわね。」

ルイズだ。

いつも夢に出てきて俺にお仕置きや調教や折檻や肉体言語での説教をする方の、妻で大人のルイズだ。

背は伸び、胸は……控えめなままだけども、凛としてスラっとした外見で。

手足は細く白く、同じく白い首筋にピンクブロンドが映えてとても美しい。……彼女が最も外見的に輝いていた時の姿だ。

「たまに見える」わよ？サイトが約束を守ろうとしてくれる事、

とても嬉しいわ。」

そう彼女は言いながら柔らかかに笑う。

ルイズ？なんかいつもと違うな？いつもならまた泣かせたわねー！  
！ってオークみたいなの怖い顔して俺の関節を獲りに来るのに。

「はあ？あんた何言ってるの？」

へ？

「わたしよ、あんたを送り出した方の。」

ええ?!” あっち”のルイズか?!

「そつよ。」

でも、おれ……

「あんだね、使い魔とその主の絆って奴、舐めてない? 異世界や時空を超えた位で切れるものですか。」

ましてやあなたは虚無のルイズの使い魔、”ガンダールヴ”のヒラガサイトなのよ?

時間を遡り、若い肉体を取り戻した位で逃げられる訳ないじゃない。

流石にいつも、って訳じゃないけどたまにね、”見える”のよ、あんだのこっちに送ってからの記憶。」

そ、そうか。……そういや以前似たような事をロマリアで言われた気がするなあ。誰に言われたっけ？

「そんな事はどうでもいいの。こうやって ” 繋ぐ ” のも堪えるのよ？わたし、ここじゃ見てくれはこうだけど  
ホントはしわくちやのお婆ちゃんなんですからね。サイト、あなたに伝える事があるわ。」

な、なに？出来れば再会を喜びたいんだけど……

「いいから！この ” 繋ぐ ” 魔法つてのは条件が沢山あってタイミングがとて難しいの。次はいつになるかわからないのよ……  
あなた、その次の時にはそのルーンのお陰で死んでるかも知れないのよ？」

げ！そうなの？て、お前、知ってるの？このルーンの正体。

「全部ではないけどね、大体は分かってるわ。いい？黙ってきくのよ？いいと言うまで返事以外口利いちゃダメよ？」

俺は頷く。

ルイズの様子がすこし、焦っていたからだ。

余程のことなのだろう。

「いい？あのね、きっかけは……そうね、あんたがギーシュと決闘をした記憶が流れてきた時ね。ルーンが変につよく反応してたでしょ？」

そして、反動と言うにはあまりに大きな怪我。その記憶を見て、色々と調べたのよ、今のサイトのルーン。」

うん

「大分仮定も混じるけど、多分間違えないと思うから信じてね？まず、今のあなたの状態ね。」

サイト、あなたはいま左手の同じ場所にわたしと、そっちのちいさなルイズの二つのガンダールヴが宿っているわ。」

へ？二つ？上書きとかじゃなくて？

「そつよ、二つ。通常は片方だけ発動してるけど、そこから更に力を求めると二つ目が発動するようね。」



そうなのか……

「問題はこの二つ目……そうね、便宜上二つ発動した状態を ”ダブル” って名付けましょう。」

「で、ダブルが発動するとお互いのルーンと共鳴して効果が相乗されるわ。」

うん、それは使った俺が良く分かる。

「ただ、問題は反動の方ね。ダブルをまともに全開で使つとまず、死ぬわ。」

だよなあ。

「でね、サイト？ガンダールヴの本来の意味、覚えてる？」魔法を操る小人” ね。いい？” 武器を操る小人” じゃないの。” 魔法を操る小人” なの。」

う、うん。おれ、魔法つかえないけどな。

「そこよ、問題は。元々、ガンダールヴの能力は身体能力の向上が主だったようね。そして、その身に宿す者はルーンの力の代償に魔力を吸われるはずだったのよ。でもあなたは魔法が使えない。」

うん。

「つまり、サイトは今までルーン発動の代償として魔力の代わりに体……命を差し出していたって事。べつに無理矢理体を動かして

その反動で体が傷ついて居た訳じゃなかったのよ。」

げ！そうだったの？！

「考えてみればおかしなもの。あれだけの動きをした後で、せいぜい筋肉痛とかで済むのって。

特にダブル発動時の耐久力とか超スピードとか、全開でないにしても人間の体で反動を受け止められるはずないじゃない。」

まあ、そりゃあなあ。

「で、調べて分かったのは、ガンダールヴは魔力を代償に、体を魔法で強化するルーンなの。身体能力を物理的に上昇させるわけじゃないわ。」

当然、相応の魔力があれば別に体に反動はこない。ま、武器の知識は歴代ガンダールヴが蓄積した、経験を利用したオマケみたいなものね。」

おお！それじゃ、無反動でルーンを仕えるのか？！

「そんなわけないじゃない。あんた、魔法使えないでしょ？」

しゅん……

「でも、手が無い訳じゃないわ。デルフリンガー、持ってるでしょ？あれ、元タルーンが賄い足りない魔力を

補う役目だったようなのよ。だから、左手用の剣だったわけね。

まあ、魔法防御も兼ねてるのも事実っばいけど。」

おおー！そっぴゃあいつ攻撃魔法を吸収できるもんな！

「それに、魔法を吸収したデルフリンガーから魔力をルーンに送る為に、ルーン的能力として魔力を吸収することが出来るはずよ。

ダブルを使うとデルフだけじゃなくて、魔法そのものやメイジからも補給できるはずよ。

ルーン同士の共鳴効果で、魔力を補給する為の経路が外にむき出しになる構造みたいね。でもこれはダブル発動後じゃないと使えないわ。」

つまり……ダブル使って、その戦闘中にデルフや左手で魔法を吸収したり、戦闘後に誰かメイジを触って、魔力を補給すれば……

「ええ、ある程度の反動は無くなる。」

やった！

「そんなに甘くないわよ？元々魔力が有る人間の為のルーンですもの。外から吸収できる量なんて知れてるわ。」

あくまで外からの補充は補助目的なのよ。一度に大量に吸収は出来ないみたいだし。それに、魔法から直接吸収するのもダメね。」

「サイト、ファイヤーボールに手を突っ込んで無事に済むと思う？」

熱いのはイヤです。

「わかってるじゃない。だからね、魔力の吸収で反動を和らげるのは気休め程度に考えておきなさい。

事前に蓄積するのもダメ。魔力を使うのはルーンであってサイトじゃないもの。サイトには魔力を貯める事はできないしね。」

そうか……ま、理屈がわかっただけでもよしとするか。

「ごめんね。だけど、少しでも力になれるわ。」

……もう、十分力になってくれるよ。

「……ありがとう。ね、サイト。左手を見せて？」

俺は左手を差し出す。

彼女は俺の手を優しく獲とり、左手の甲のルーンの中央をさえぎるように、手首から中指へかけてつい、とその白い指でなぞった。

ルーンの中央を交差するように幅1cm程度で一本の線が入る。

「ルーンの身代り魔法……というか、呪いね。」

の、呪い?! 浮気したら強制的にダブルになるとか?!!!



「……それもいいわね。次までに考えておくわ。これはね、体の任意の場所へ反動を導く魔法よ。」

……失言だったな……

「普通の反動はたとえばダブルでも”癒える”わ。だけど、これを使って反動を導かれた部位は二度と”癒えない”。」

意味ないんじゃない？

「あるわよ。たとえば、左目をこれで身代わりにしてダブルを全開にした場合、全身を引き裂かれながら死ぬより  
左目が見えなくなる方がよほどマシでしょ？それに、魔法の補充がうまく行けばすこし視力が落ちる程度で済むしね。」

ああ、なるほど。

「どこから身代わりにするのはこの魔法が選んでくれるわ。選択権はないわよ？この左手の線が真っ赤になったら  
身代わりの部位が完全に死んでしまうサインだからね。ちなみに、全開だと身代わりとなった部位が死ぬまで三秒がいいとこね。  
もうちょっと引き伸ばしたかったけど、このルーンの使用魔力を体の部位を生贄にする方法で代用するとこれが限界だったの。」

あ、最初の犠牲部位は左耳の聴力みたいね。」

よし！これでダブルは使い物になるな！

「何言ってるのよ！ふざけないで！」

ルイズの突然の剣幕に俺は驚く。

彼女は怒りを露にし、涙が頬を伝っていた。

「あなたね！ギーシユの時の記憶を見た私の気持ちができる？！」

その後、遊びで発動させて寝込んだ時の事を知った私の気持ちがわかるの？！！

いくら身代り魔法があつたって、使うたびにサイトの体を確実に蝕むわ！

普通のルーンの反動もそっちにいくのよ？！更にダブルを使うたびに確実にサイトは死に向かうのよ？！

なんの為にそっちへ送ったと思ってるの？！どんな想いを込めてここへ届けたと思ってるの？！

ふざけないで！」

ルイズはそう言うと、子供のように泣き出した。

俺はただ、ゴメンと呟くしかできなかった。

やがてルイズは顔を俺に向け、神妙な面持ちで口を開く。

「ねえ、今でも私のこと、愛してる?」

うん、愛してる。

「私のこと、最後まで守ってくれる?」

うん、きつと守るよ。最後まで、生きて。

「私の為に戦ってくれる?」

うん。何度でも、お前が笑ってくれるなら。

「約束、して。」

夢から覚めつつあるのか、ルイズの姿は消えていた。

しかし、俺には彼女がどんな顔をしているかわかっていた。

きっとあの時と同じだろう。

「約束するよ。」

「愛しているわ、サイト。」

そしてガンダールヴは夢から覚めた。



i n t e r m e d i o 1 : 狼は月夜に咆哮す1 (前書き)

幕間劇です。全四話となります。

俺は朝から上機嫌だった。

異常だったルーンの状態も把握でき、『フリッグの舞踏会』でルイズと踊ることができた。

更に今朝早く、ルーンの事をルイズに説明しているとあの医者が現れて、俺の血小瓶一杯分を百エキュール金貨で売ってくれないか

と持ちかけられ俺は今小成金となっていたのだ。

ちなみにルイズには、夢の中で初代ガンダールヴが現れて教えてくれたと説明してある。



まったく、ここの所いい事ばかりだ。

夢で妻ルイズと話せた事は正直うれいし、こっちのルイズともうまくやっている。

前よりも被害が明確に判るようになり、”ダブル”の使用を迂闊にできなくなったが、通常のルーンは俺の体を鍛えていれば

それ程反動がこなくなつてた経験から、使用後にルイズやデルフから魔力をルーンに送れば問題なかるう、と言う事で

ルーン使用後はルイズに触り続けて魔力を補給してもらえる事になった。いやっほう。

ただし、デルフ以外からの魔力補給の為には一度ダブルを発動させて、補給経路を開く必要があるけれど。

俺は医者部屋の血を抜き、エキュー金貨が入った小袋をもって小躍りしながら部屋に戻るべく廊下を歩く。

血を抜き取っていた医者の使い魔が、バカでかいヒルだった事には少し引いたがこの金貨の輝きが些細なことは忘れさせてくれるだろう。

……アレにキスしたんだよね？あの医者変態なのか？

いやな想像を振り払いながらルイズの部屋のドアを開けると、見慣れない娘が椅子に腰掛けルイズと話していた。

肩まで伸ばした綺麗な銀髪に蒼い目、小柄でルイズよりも年は若そうな子だ。

見慣れない、というか記憶にない。

俺の記憶にこの子がルイズの部屋に訪れる事はない、本来あるはずの無い出来事だった。

こうして俺は新たな経験をすることになる。

「始めまして。私は一年生のジゼール・エイムラントともうします。

」

「は、始めまして？俺はルイズの使い魔やってる平賀才人です。」

その子は椅子から立ち上がるとそう自己紹介をし、優雅に会釈した。

俺はカサササと虫のような素早さでルイズに近寄り、誰、この子と耳打ちをする。

「サイト、丁度よかったわ。一緒にこの子の話を聞いてあげて？」

「え、うん、いいけども……友達？」

「いいえ、初対面よ。さっき食堂でお願いがあるって泣きつかれたのよ。」

ルイズははあ、とため息をついた。

昨日のフーケの一件により、男女を問わず生徒から食事やトイレにまで”お誘い”が必ず付きまとい辟易しているらしい。

あまりに煩わしいので、食事をここへ運んでもらうようメイドに頼んだのだが、この子が部屋まで食事を運んで来たのだと言う。

聞けばどうしても俺とルイズにしたい話があったのだとか。

「あんたを待てたのよ。さて、そろった事だし……ミス・エイムラント？」

「は、はい。改めてですね、ミス・ヴァリエールの使い魔である、こちらのサイト様を私に貸してほしいのです……！」

「だめよ、バイバイ。さあ、サイト。授業に行きましょうか。」

「早っ……！」

「そんな！私にはもうサイト様しかすぎる相手は…………！」

ミス・エイムラントはそう言つとよよよ、とその場で泣き崩れた。

えっと、あの、その言い方辞めてくれない？

ほら、ルイズから在らぬ疑いが……やめて！違う！！手は出してない！！その笑顔はやめて！

「お、落ち着いて？ミス・エイムラント、理由を話してくれないか？でないと俺、また怪我をしちやいそうなんだ。」

「ササササアアイイトオオ？」

「グス、グス、あのですね、私……エイムラント男爵家はとても貧乏なのです。」

「ル、ルイズ？俺の首に急に手を回して……人前でそんな……ダメだつて！！」

「さあ、こつちいぢつしやい。」

「傭兵も雇うお金もなくて、凋落した家に私兵も無く、小領で細々と兄が領地経営をしていたのですが」

「ルイズ？はは、急に俺をベッドに引きずり込んだりして人が見てるってのにまったく、……ハッ？！これは！！」

「こつやつて、こつして……こつね！どう？あんたが教えてくれた”おもぶらった”ってやつ！」

「先日、領内で”ルーガル”が出没するようになりまして。お恥ずかしながら、水のメイジである為か私も兄も戦闘はまったくダメでして

傭兵を雇って退治しようにも先立つものが……」

「いででえ！ダメ！体重かけちゃダメ！肩が！！肩がいたい！！！」

「うふふふ、これ、いいわね。押し倒された体勢からこんな関節破壊技ができるなんて……」

「王宮にお願いしても、出兵には結局税をとられますでしょう？」

「あああああ！折れる！折れちゃう！！ダメ！今日治ったばっかなのに！！」

「まったく！ちょっと目を離したらすぐ女の子をいやらしい目で見て！すこしは私の使い魔としての品格を身に付けなさい！！」

「出没するルーガルも1匹ですし、とても強いと噂のミス・ヴァリエールの使い魔であるサイト様に、これを討伐してほしいのです。」

「ちがつ！違つて！この子とも初対面なんだぞ？！」

「うそおつしゃい！あんた、ちっちゃい子が好きなんですよ？？タバサをよくチラチラみてるじゃない！！」

「も、もちろんお金は……あまり払えませんが、エイムラント家は治癒の秘薬を作り出す事を得意としていますので……その、いつも怪我をしているサイト様ならと……」

「あ、あれは關心してるんだよ！あいつどんな状況でも本読んでるだろ？！」

「フン！どうだか！あんた、こういう大人しそうな子ばかり狙って口説いて回ってそうだもんね？」

「で、ですので、治療の秘薬をいくらか融通できますので、それでサイト様を……あの、聞いてます？」

「だずげで！」

「うるさい！今バカ犬の躰を行ってるの！」

ミス・エイムラントは再びよよよ、とその場で泣き崩れた。

俺は見なさい、あんたに泣かされて可哀想じゃないの！と叱られ、きつい折檻を受けてしまった。

……今日も結局酷い目にあつた。

これで4日連続だ。

ミス・エイムラントが落ち着くころにはルイズも我に帰り、俺も生傷を増やしながらも座るルイズの後ろで大人しく控えていた。



「つまり、あなたの家の領地で出没するルーガルーを、サイトに退治してほしいわけね？」

「はい。」

「で、お金は無理だけど、治癒の秘薬を報酬としてくれるのね？」

「はい。領主である兄はラインメイズですが、治癒の秘薬作りには定評がありますので品質は……良いですよ？……・多分。」

「んー、……そういう事なら私はかまわないけど、サイトどうする？」

「ルーガルーって、狼の獣人だよな？説得できないの？」

「人間出身のルーガルーなら話を通じるのですが、どうやら違うよううで理性が無いみたいなのです。」

「野生のルーガルーか……厄介だな。」

「サイト、戦った事あるの？」

「うん、前にね。すっごい素早くて苦労した。知恵も結構回るし、弱い奴から狙ってくるんだ。複数で来られると俺でもヤバい。」

「へえ。」

「ミス・エイムラント。ルーガルは一匹なんだね？」

「はい。群れではないです。もし群れだったらとっくに軍隊の出勤をお願いしてますわ。」

「自領だけでなく、トリステイン王国の問題に発展しますので。」

「ルイズ、一匹だけだから、悪い話じゃないと思うんだけどどう？」

「そうね。あんた、結構怪我するし秘薬はあるに越したこと無いものね。ねえ、エイムラントの領地って学院から馬で2時間程度よね？」

「はい。」

「サイト、ちょっと行ってきてあげましょ。」

「ああ。だけど、ルイズは授業に出ててくれよ?」

「なんでよ!私も行くわ!」

「あのなあ。さっきも言ったけど、ルーガルってのは弱いやつから仕留めにくるんだぞ?」

「だからなによ!私が弱いつていうの?!」

「ガンダールヴ並の素早さで奇襲でもされて、ルイズはどうやって反撃するんだ?」

「う……」

「ルイズが弱いとは言わないけど、戦ってたらたぶん動きの素早い俺じゃなくて、ルイズの方から狙ってくると思うぜ?」

「それに退治が目的だけど、俺だけじゃルイズを守りながらは戦えないよ。ルイズもレビテーションで避難できないだろ?」

「守るか、狩るか。二つに一つになる。」

「ううう……」

「な？悪いけど、大人しくしてくれませんか？明日には戻ってくるからさ。」

「わかったわよ。明日までにルーガルーを退治して戻ってくるのよ！それと、絶対怪我しちゃうだめだからね！」

「ああ、了解。じゃ、早速行こうか、ミス・エイムラント。」

「はい。ミス・ヴァリエール。その寛大なお心に感謝いたします。」

そう言うと、ミス・エイムラントはルイズに深く頭を下げた。

ルイズは見るからに不満そうな顔をしたまま、気をつけてねと声を掛けてくれた。

俺はデルフを担ぎ、懐のエキュー金貨の重さを改めて楽しみつつミス・エイムラントを伴って、学園の馬を借りる為部屋を後にした。

そして俺は色々と後悔する事になる。

約二時間後。

俺は絶句していた。

エイムラント家の領地、ウァンスに到着したのは日がすっかり昇った頃か。

目の前の、魔法学院の馬小屋よりも小さくてみすばらしい家……エイムラント男爵の屋敷を前にして、だ。

ミス・エイムラントは、エイムラント男爵家はとても貧乏だと確かに言っていた。

魔法学院の馬を借りる時も、代金を払えないので歩いて行かないか？と持ちかけられた位だ。

ちなみに馬代は俺が払った。帰るのが遅くなるとルイズに怒られそうだし。

それはともかく、実はそのあまりのボロ屋敷っぷりに俺は絶句していた訳じゃない。

「こつちよ、ダメ犬。さつさと来なさいよ、まったくドン臭い。」

「あ、ああ。」

「何よ？何かいいたい事あんの？貴族の屋敷には見えないとでも言いたい訳？」

「そ、そんなことはないよ。はは、は……。」

「ならさっさと馬を繋いでこっちに来なさいよ。まったく、ミス・ヴァリエールの使い魔の癖に本当にトロいんだから。」

「い、ごめん。ちょっと今の君に、いまだ戸惑ってしまっているんだ。」

俺が絶句していたのは、ミス・エイムラントがすんごい猫被りだった事に対してだ。

学園を出て途中までは”普通”だった。

道中では俺の質問にはうん、とかううん、とか返事はするものの基本的に会話はなかった。

思ってたよりも無口な子なんだな、程度に考えていたんだけど……

「……なによ、やっぱり無理なんじゃない。」

「い、いや！俺も男だ。約束は守る！男に二言はない。別にミス・エイムラントを嫌いもしないし、仕事もキチンとやる！」

「どうだか。どうせ、わたしの体をどうやって好きにしてやるうかとか企んでるんでしょ！」

「企まないよ！」

「ああ、おぞましい。あんたの目はルーガル―討伐の報酬として私の体をどうにかしようと思っっている目だわ。」

「思わないよ！」

どういふ事かと言うと、俺達がエイムラントの領内に差し掛かった時だ。

農作業をしていた彼女を見知っているらしい平民のおばちゃんにあら、帰省かい？と気軽に声を掛けられ、彼女も笑顔で応対していた。

同時に一緒にいたおばちゃんの旦那さんは、なぜかそそくさと距離を置き、彼女も旦那さんには声を掛けなかった。



俺はそんな様子に少し違和感を覚えながらも、ミス・エイムラントに結構気さくなんだね、とにこやかに話しかけてみた事が始まりだった。

彼女はおれの言葉にフルフルと頭を振って答え、無言で再び馬を進めた。

ははあ、男に免疫の無いタイプの子なんだな、とその時は思い、俺はどうにかして打ち解けてみようと思ってみたんだ。

エイムラント領まで馬で二時間。

それはそれはもう、暇だ。

暇な時間を持て余した人間は、時に余計なことをしでかす事もある。

俺もどうかしてたんだろう。

彼女と打ち解けてみよう、と行ってしまった。

魔が差した、とも言える。

俺はミス・エイムラントにもっと気軽に話しかけてくれないんだぜ？俺も話しかけるしさ！と持ちかけると

予想外にも彼女はいいえ、違うんですと答えた。

じゃあ、男が嫌いだとか？と問いかけるとこれも否定する。

どうしたものかと考え込んでいると、彼女は兄から平民の男性とは絶対に口を利かないようにと、きつく言い付けられていると呟くように言った。

しかし、先程のおばちゃんとはにこやかに話していたじゃないか？と聞くと、女性なら平民でも良いとの事。

平民の男性と話すことが絶対にダメなのだ。

ルイズと一緒に話した時も、俺ではなく努めてルイズと話しているつもりで対処していたんだそう。

なんだよそれ！！と思わず憤慨しつつも、彼女に平民の男に何か思う所はあるの？と聞くと少し怖いと思うがそれは無いと言う。

じゃあ、そんな言い付けなんて守る必要などないよ！と言うと、いえ、きっと私はサイト様を怒らせ、嫌われ、拳句にルーガルーを退治してくれなくなるからと彼女は答える。

ははあ、この子はテレているんだな。

こういう、貴族の女の子は平民の悪い虫がつかないよう、平民にはかわるなときつく躡けられることが良くある。

その手合だな、と思いながらおれは彼女に言った。

「大丈夫だよ。俺、何を言われようと平気さ。ミス・エイムラントを嫌わないし、ルーガルも退治する。」

「本当ですか？」

「ああ。本当だ。約束しよう。」

「後悔、しますよ？」

「しないさー！」

「そう、ですか。わかりました。」

「……そうね、あんたはミス・ヴァリエールの使い魔ですものね。ペットの犬みたいなものですもの、口を利いても大丈夫よね。」

「……え？今、台詞の後半からなんかおかしくなかった？」

「ああ、良かった。いつボロがでるかとか冷や冷やしたじゃない、このダメ犬。まったく、気が利かないんだから。もっと早くいいなさいよ。」

「えっと、ミス？ちょっと飛ばしすぎなんじゃないかな？俺の気のせい？ははっ……」

「なによ？やっぱりあんたも口だけの男って訳？」

「いやいやいや！そうじゃないけど！」

「なら細かいこと気にするんじゃないわよ。ホント、気が利かないっつらないわね。ミス・ヴァリエールも苦労するわよね、こんなダメ犬じゃ。」

「ひ、ひでえ……」

豹変、とはこういう事を言うんだな、うん。

ははは、俺ってルイズがいなくてもやっぱり犬扱いされる運命なのか？

ちよつとその扱いを受けるとデジャヴというか、安心するというか、慣れてきちゃったじゃないか。

もうね、あのルイズの部屋で見た可憐な乙女の面影は何処にもないね。

さすがにルイズ以外の奴が俺を、まるで汚い犬を見るかのように接してくる事にはすこしムっとするんだけど、約束したしな。

とにかく、そんな事があり俺はへこみながらもエイムラントの屋敷へ到着したのだった。

「ほら、こつちよ。グズグズしない。まさか、首輪と鎖で繋がれないと安心して中に入れないって言うんじゃないでしょうね?」

「い、言わないって! そんな趣味は無い!」

「うそおっしやい。ミス・ヴァリエールに犬扱いされて悦んでいたじゃない。」

「ちがう! 断じて違う!」

「いいから、ついて来なさいよ。ここで時間を潰してる暇なんてないのよ？ほんと、使えないダメ犬ね。」

「お前のせいだああああ！！！」

俺はミス・エイムラントと言い争いながらも、彼女に屋敷の中へ案内された。

中には当然と言うべきか、メイドや執事はいない。

歩く廊下は手入れはされていないのだろう、所々で雨漏りの為にできたシミが壁にカビを発生させている。

やがて、さして長くない廊下の突き当たりの、小奇麗な一室に通された。

どうやら客間らしい。

腐っても男爵家と言う事なのか、客間だけは質素ながらもきちんとして手入れをされた内装だった。

客を応対する為のソファにはメガネをかけた銀髪の男が座っており、俺が部屋に入るとソファを立ち上がってにこやかに握手をしてくる。

「やあやあ！君が魔法学園から来てくれた方かい？いや、よくきてくれたね！」

僕はマリク・ルック・デ・バロン・ラ・ウアンズ・エイムラントだ。マリクと呼んでくれ。」

「はあ。えっと、俺、平賀才人です。よろしく。」

「ヒルガサイト？変わった名前だね？トリステインの貴族じゃないよね？」

「ヒ・ラ・ガ・サ・イ・トです。」

「兄様。この方はヴァリエール公爵のご息女の使い魔なのですよ。」

「なんと！！ヴァリエール公のご息女の一？」

「ええ。先日、盗賊『土くれ』のフーケを捕縛した搜索隊の一員でもあり、平民ながらあのグラモン伯爵家のご子息、ギーシュ様との決闘にも」

勝利していますわ。」

「おお！メイジでもないのかい？！すごいね！それならばルーガル―退治には申し分ないな！いや、サイト殿、本当に良く来てくれたね！！」

俺の名前の訂正などなかった事のように、マリクさんはミス・エイムラントから俺の紹介を聞くと

嬉しそうに俺の手をとりぶんぶんと上下に振った。

痩せこけた体躯と青白い表情だったが、その笑顔は生氣に満ちて心底嬉しそうだ。

俺を見る目も暗いものは見えず、ミス・エイムラントの態度ともまるで違う。

なんで兄の方はこんなにフレンドリーなんだ？

「む？どうしたのだ？サイト殿、なぜそんな不可思議なものを見るような目でボクを見るんだい？」



「あ、いえ。その……妹さんとはまた、随分印象がちがうなあ、と。」

「え?!まさか……ジゼル?!」

「ええ、兄様。サイト様には私のあの悪癖を話しておりますわ。」

「あれほどきつく言っておいたのにダメじゃないか!!お前が平民の男と口を利くとロクな事にはならないってのに!!」

「いいえ、サイト様はそれを理解した上で私を嫌いもせず、仕事もきちんとやってくれると約束してくださいました。」

「なんと!それは本当かい?!サイト殿!」

「え、ええ。さすがに最初は面食らいはしましたが、約束は約束ですし。」

「すばらしい!君は実に心が広いね!尊敬してしまいそうだ!」

「……慣れてますから。」

「慣れてる？失礼だが、君はその……真性のマゾヒストかい？」

「違います！」

「そ、そうか。いやあ、真のマゾでもないのに妹の罵倒を動揺も怒りもせず、受け止める平民なんて始めて見たよ！」

「はは……俺のご主人様もそういう所がありました。いわれなき罵倒には慣れてるんですよ、ええ。」

「そうだったのか。君は苦勞してるんだね……」

「はい……あ、でもマリクさんは随分その、なんといいですか……」

「ふふふ、サイト殿。顔に出ているぞ？私が妹と違い、こんなにフレンドリーなのは何故なのかと。」

「あ、いえ、まあ、その……ははっ……」

「恥ずかしながらわがエイムラント家はそれはそれは貧乏だ。今は私の治癒の秘薬をトリスタニア城下の商人に売り、生計を立てている程だからね。」

「はあ。」

「昔は中々権勢を振るっていたらしいのだが、お爺様の代で没落してしまっただ。」

借金もあるし、領地であるウァンスの税収だけではやっていけなくてね。商人とやり取りしたり、ちょっと失敗して効果は多少あるけども

高く売れそうにない秘薬を使って領民相手に医者 of 真似事をしてるのだよ。」

「はあ。苦労してるんですね？」

「うむ。苦労しているぞ！きつとトリステインで最も貧乏な貴族だと自負しているよ！」

だからね、私は同時に最も平民に近い場所で暮らし、平民を理解していると思っっているのだ。

正直、平民だ貴族だと区別してやっていける家計でないし、わたしもすっかりこっちが板に付いてしまっただね。

今では中々気に入っている有様さ！」

「それで……でも、その……失礼ですがミス・エイムラントは……」

「ああ、ジゼルか！妹はしょうがないのだよ。何しろ、今は亡き父上がその昔、恋人が平民の男と駆け落ちしてしまっただけね！」

そのせいか母と結婚した後、妹が生まれるとなにかと平民の男は皆強姦魔だ、トロールだ、オーク鬼に劣るうじ虫だと教え込んでね。

結果妹はひどく平民の男に対して嫌悪を露にするようになったしまい、物心つくようになるや否や、どこで覚えたのか

平民の男を見るとひどい罵倒をするようになってしまったのだ。」

「迷惑なクソ親……お父様ですね。」

「ははは！まったく！おかげで、最初は領民の評判はすこぶる悪くトラブルも結構あったよ。しかし、妹も根は優しい子だね。」

父に次いで母が亡くなった事を切欠に、治癒の魔法を覚えて領民のけが人の治療を行ったりするようになったのだ。

そうしている内に受け入れてもらえてね。まだまだドットメイジだから、大した治療は出来ないんだがアレでなかなか人気があるのだよ？」

「え？でも、あの様子じゃ、男の治療は……」

「もちろん、罵倒しながら行っていた。いやあ、見ものだった！この変態だのうじむしだの言いながら懸命に治療する妹の姿は傑作だったよ。」

「……よく男の患者が怒りませんでしたね？」

「うむ。不思議なものでな、なぜかその行為が評判になってね。まあ、貴族に対して面と向かって怒る平民はいないのだが……  
妹に傷を見せにくる者達は皆、一様に罵倒しながら治療を施す妹を恍惚として見ていたよ。」

「そ、そうなんですか。」

「それにね。わたしも妹の幸せを考えると、できれば羽振りの良い貴族へ嫁がせたい。だからすこしでもチャンスを掴む為、母上の死後なけなしの財産を処分して学院に入れた時に、決して人前で平民の男と話さないように言い聞かせていた、と言う訳なんだよ。」

悪評という奴は平民の間だけで立つても、結婚やその人物の評判に影響するからね。

幸い、妹のアレは貴族相手には出てこないから、そこだけは気をつけるようにしていたって訳さ。」

「それで……」

「あ、そういう訳で気を悪くしないでくれよ？本当に妹は優しい心の持ち主なのだ。」

「……話し方はその、少々アレだが領民にだって本当に慕われているのだぞ？」

「そうですね。いや、大丈夫ですよ。理由がわかればミス・エイムラントも悪気は無いようですよ。俺も気にしませんよ。」

「ははは！そう言ってくれると嬉しいよ！」

「……マリクさん、苦勞してるんですね。」

「うむ！苦勞してるぞ！」

マリクさんはまいったな、と朗らかに笑っている。

なぜそんなに楽しそうに苦勞しているぞと言えるんだ？

いや、これはこれで結構幸せなんだろうな、うん。

俺は苦笑いを浮かべ、ミス・エイムラントを見た。

彼女は面白くなさそうにフン、と鼻息を鳴らし俺を蔑むような目をしている。

ほ、ホントはいい子なんだよな？

「兄様、そろそろルーガルについて話しませんか？」

「ああ、そうだね！サイト殿、さあ、座ってくれたまえ！」

「サイトと呼び捨てでいいですよ、マリクさん。」

「そうかい？じゃあ、そうさせてもらおう。ジゼル、悪いけどお茶を用意してくれないかい？」

「はい。」

ミス・エイムラントはそう返事をするとうちを出て行った。

「さて、サイトくん。ルーガルーの件なんだが、そうだな、最初から説明しようかな。」

「はい、お願いします。」

「えっと、事の発端はわたしの所に何日か前、ゲルマニアからあるメイジが秘薬を買い付けに来てね。」

このメイジが注文した秘薬を作るには数日かかるんだが、その間にウァンスの町に逗留してもらった事になってね。」

「はい。」

「ほら、この屋敷はあまりにボロだからね？ゲストルームは使える状態じゃないから、いつも泊まりのお客さんには町の宿を使ってもらうんだ。」

おっと、これは関係ないか、ははは！失礼！それでね、このメイジが二日目の夜……一昨日かな。ルーガルーに襲われたんだ。」

「夜、ですか。」

「うん。ルーガルーってのは月夜に活発になるだろう？まあ、一匹だけだったからはぐれ狼って奴なんだろうね。」

このメイジのお客さんは必死に逃げながら”レビテーション”の魔法を使って、上空に逃げたから助かったんだけど……」



「怪我でもしたんですか？」

「いや。怪我は無かったみたいだよ。ただ、ルーガルーがこのお客さんを気に入ったのか執拗に狙ってね。」

まあ、僕としては領民に被害が出ないのは不幸中の幸いなんだけど……」

「うへえ。狼つてのは執念深いですからねえ。」

「うん。それにいつ弱い者に狙いを変えるかわからないしね。あと、諸侯軍というか、僕の兵は常備軍じゃないんだよ。」

領民が兵士を兼任してる有様でね。昼は仕事があるし、夜は教会に女子供や老人を集めて交代で警備してるから討伐隊を組めないんだ。」

それに、傭兵を雇うお金もないし……王軍に依頼すると派遣税を取られちゃうし。」

群れだったら近隣の領地にも影響出るから支援してもらえないんだよ……一匹だけだろう？

だから、できるだけ早めにやっつけてしまいたいんだけど、僕もそのメイジも水の系統で薬作りを生業としてるから、戦闘向きじゃないんだよ。」

それに、ルーガルーってとっても素早いだろう？レビテーションをかけて拘束したり、高所から落としたりする為に魔法をかけようにも

じっと止まってくれないしね。」

「そこで俺の出番、ですか。」

「そうなんだ。お客さんももう二日も逃げ回ってね。幸い日中は襲ってこないから、逗留先の宿屋で昼は寝てるよ。」

あとで詳しい話を聞くといい。なに、メイジだけど今は貴族じゃ無いそうだから寝てても遠慮はいらないさ。」

ルーガルもそのお客さんに張り付いていればやってくると思っ

」

「わかりました。じゃあ、そのメイジの所で待ち構えていればいいんですよね？」

「うむ。そういうことだ。悪いが、報酬は成功後でもいいかい？」

「ええ、かまいませんよ。」

「ああ、よかった。今月は支払いが特に多くてね！秘薬の材料すらままならない有様だったんだ。」

治療に使う秘薬が作れるようになったら真っ先に届けるから、ま

つててくれたまえ！」

「え？！討伐後すぐもらえるんじゃない……」

「……サイトくん。今月の支払いが滞れば、あとは妹を質に金策するしかなくなるんだ。その……」

「がんばります！それでいいです！」

「ありがとう！いやあ、君は実にすばらしいね！僕なんかよりほど貴族のハートをもっているよ！」

絶対こいつ確信犯だ！！！！

きっとミス・エイムラントには学院の腕利きの、お人よしそうなのを連れて来いとか言ってるぞ！！

なんか、実は兄妹そろって腹黒いんじゃないか！？

俺が内心そう愚痴っていると、ミス・エイムラントが戻ってきた。

なんだか様子がおかしい。

頬を染め、俺とマリクさんを交互に見比べながら、ぼそぼそと口を開いた。

「あの、兄様……」

「なんだい？ジゼル。」

「お茶なのですが……その……」

「ああ！そうか！何てことだ！サイトくん、非常にすまない。どうやらお茶を切らしてしまったようだ。いや、貧乏はするものではないな！」

「い、いや、いいですよ。もう、お話は終わりましたし。」

「そうかね？いや、本当にすまん。ああ、そうだ。ジゼル、サイトくんに同行してきなさい。」

「へ？」

「ジゼルもドットメイジとはいえ水のメイジだ。君が戦って居る時は”レビテーション”で空で待機していて、もし傷を負ったら治

癒してもらおうといい。」

「いいんですか？」

「ああ。報酬をすぐに払えない分の利子だとも思ってくれ。ジゼル、いいね？」

「わかりました兄様。怪我するんじゃないわよ？このダメ犬。」

「うわあ。切り替え早いね、ミス・エイムラント。」

「ジゼルでいいわ。その呼び方、貴族の真似して言い寄る平民みたいで虫唾が走るの。」

「はっはっは！ダメ犬とは随分気に入られたね、サイトくん！普通ならうじむしからなんだぞ。」

ジゼル、早速だがサイトくんを例の宿に案内してやってくれ。十分気をつけるんだよ？」

「わかりました。兄様も気をつけてくださいね？」

「うむ。では、見送ろうか。」

マリクさんはそう言っていると俺たちを玄関まで見送ってくれた。

町の宿まではそれ程遠くはないとの事だったので、学院の馬はマリクさんの家で預かってもらう事にした。

こうして、ルーガルー討伐は俺とジゼルで行う事となったのだ。

しかし、疲れる兄妹だな……

時刻は正午をすこし回った位か。

エイムラントの屋敷から町へ歩く途中、空腹に気が付いた。

そういや今朝あの医者から血を抜かれて、なにも食べずにここへ来たんだっけ。

俺がそんな回想をしていると、ぐう、と音が聞こえた。隣からだ。

横を歩くジゼルを見ると、真っ赤になって俯いている。

「なあ、ジゼル。お腹、減ったな。」

「そうね……」

「この近くになんか美味しい飯屋とかないか？おごるぜ。」

「この先の、目的の宿屋の正面にこの町唯一の食堂兼酒場があるわ。

でも、あんたなんかにご飯を奢ってもらう程落ちぶれちゃいないわよ？」

「じゃあ、俺一人で食うぜ？どうせ例のメイジは昼は寝てるんだしな、飯位食って行っても罰は当たらないさ。」

「そんな！わたしが今お店でご飯も食べれない程貧乏なのを知ってるくせに！いいわよ！いらないわよ！！

貴族の誇りを平民のダメ犬に見せてやるわ！」

そのジゼルの言葉を強く否定するかのように再びぐう、と彼女のお腹が鳴く。



ジゼルはますます赤くなり、俯いている。

なにこれ？可愛……っていかんいかん！俺にはルイズが居るんだし！俺はブンブンと頭を振る。

こいつの悪態もどこかルイズに通じる所があるかもな、と思う余裕がいつの間にか生まれ

気が付くとまったく悪態が気にならなくなっていた。

適応した、ともいえるが。

決して罵倒され内心悦んでいるわけじゃない。

決してだ。

「気にするなよ。貴族だ、平民だどこだわってても腹は膨れないぜ？」

「それは……そうだけど。あんたもそれ程お金を持っていないでしょ？学園の馬も平民が借りるにはかなりの額だし。」

「はは、大丈夫だ。俺、今金持ちなんだぜ！」

「そうなの？さすが大貴族であるミス・ヴァリエール……。自らの使い魔に不自由をさせないようちゃんと配慮をしているとは。」

「こんなダメ犬なお心が広いわ。」

「いや、自分で稼いだんだって。学院の医者に俺の血を少しばかり売ったんだ。」

「え？叔父様に？」

「え？もしかして、親戚？」

「ええ、私の叔父よ。いくら財産を処分してお金を工面したとはいえ、魔法学院に入るにはそれなりの後見人が必要だね。」

「まあ、あなたにはそんな苦労がわかんないでしょうけど、兄様では心もとないから叔父様に頼んだの。」

「そうなのなあ。」

「ちなみに、あなたの事も叔父様から聞いたのよ。」

「な、なんて？」

「毎週のように致命傷を負いながらも、すぐに回復してしまう稀有な能力を持つ使い魔だ、と。」

「はは、それは言いすぎさ。治療の魔法や秘薬が効いただけだよ。」

「いつか絶対に瓶詰めにして研究してやるとも言ってた。」

よし、帰ったらあの医者を一発殴るところ。

あの医者の様子から絶対それは本気だ。

もしかしたらあのデカイヒルを使って、俺が油断したところで一気に血を抜き取る位はやりかねんな。

「ま、あの医者知ってるなら話は早いな。あの人にさ、血を買ってもらったんだ。」

「そ、じゃあ遠慮はいらわないわね。」

「変わり身早いな……すこしは謙虚さをみせるよ！……ま、いいけどさ。一人で食う飯なんて味気ないし、一緒に食おうぜ。」

「ええ、そこまで請われたら固辞するのも失礼だしね。」

「口が減らないなあ。もっとこう、お礼的な何かと言えないのか？」

「ありがとう」

「棒読みか。」

「妥協するのが訓練された犬よ？」

「そうか？」

「そうよ。」

「ま、いいさ。約束したしな。理由もしってるし。」

「感謝してあげるわ。そうね、ダメ犬からただの犬にしてあげる。」

「犬は変わらないのか……」

はあ、と俺がため息をつく、同時にぐう、と二人分の腹の虫がそれに答える。

程なく、俺たちはウエンスの町唯一の食堂兼酒場にたどり着いた。

ハルケギニアでは良くある、昼は食堂で夜はそのまま酒場になるといった趣の店だ。

宿のすぐ前にあるのも、典型的なハルケギニアの町並みだ。

お昼時な為か、中は混んでいて結構繁盛している。

俺たちは中に入ると、恰幅のいい女将兼給仕のおばちゃんがジゼルを見てにこやかに話しかけてきた。

「まあ！ジゼル嬢ちゃん！いつ戻ったんだい？」

「今朝です。おばさんも変わりはない？」

「ああ、元気だよ！学校はどうだい？」

「皆、良くしてくれているわ。たまにおばさんのご飯が恋しくなるけどね。」

「そちらは……ボーイフレンドかい？！ジゼル嬢ちゃんも隅にいないねえ！」

「やめてよおばさん、死にたくなるじゃない。これはヒラガ・サイトといって、今回のルーガル討伐の為

魔法学院の貴族から借りてきた使い魔なの。」

「なんだって！！ヒルガ・サイトだって？！じゃあ、お前さんがあの『我らの剣』かい？！こうしちゃいられない、あんた！あんた！」

おばちゃんは俺の名前を聞くと奥へすっ飛んでいってしまった。

『我らの剣』って……こんな所まで広まってるのか？やだなあ……  
すっげえ恥ずかしい。

程なく、ドカドカと音を立てやたら恰幅のいいおじさんが包丁片手にやってきた。

「ほんとうか?!」

「ああ！確かにヒルガサイトって聞いたんだ！」

「ヒ・ラ・ガ・サ・イ・トです。」

「おお！あんたか！あんたが『我らの剣』か！いやあ、よくきてくれたな!」

「俺のこと、知ってるんですか？」

「ああ！知ってるも何も、うちの息子が魔法学院でマルトーさんの弟子をやってるんだ。それにこの町から学院に奉公にでてる奴も多いしな。」

「それで……」

「いや、会えて光栄だよ！なんせ魔法も無しに五人ものメイジをこてんぱんにしてやったんだろ？」

「一人ですよ？尾ひれついてますよ、それ。」

「がはは！どつちだっというじゃねえか！平民がメイジに決闘で勝った事にはかわりねえ！」

「大雑把だなあ……」

「そんな『我らの剣』がルーガルーを討伐しにきてくれたんだ！これで安心だな！」

「おう、お前ら！『我らの剣』がルーガルーを退治しにきてくれたぞ！」

おじさんが店にいた客にそう叫ぶと、いっせいに他の客の視線がこちらを向く。



たちまち俺は好奇の目に晒され、昼飯を食べに来ていた鍛冶職人や靴職人、服の仕立て屋などのムサイおっさん達に囲まれてしまう。

どうやらここらじゃ俺は結構な有名人らしい。

おお、あんたが我らの剣か、などと言われながら根掘り葉掘り質問をされ辟易している時に、俺はジゼルがいなくなっている事に気が付いた。

女将のおばちゃんに聞くと、彼女は男衆がいる時は彼らを避ける為いつも食堂の裏手に設えられたおばちゃん一家の食卓で食事をするのだとか。

兄であるマリクさんが跡を継いでからは、屋敷に使用人は雇う余裕がなくなった為、ちよくちよくここへ食事をしに来ていたんだそうだ。

くそう、俺もそっちで飯を食べばよかったな、と思いつつおばちゃんには俺の奢りで好きなだけジゼルに食わせてやってくれと頼んでおいた。

おばちゃんはニヤリとしてあいよ、と景気のいい声が返ってきたが、その声もおっちゃんらの俺への質問でかき消されてしまう。

いい年をしたおっちゃんらがキラキラとした目で俺に質問をし、いい加減飯を食わせる！とやんわりとお願いしようとした所で

気をきかせたおばちゃんが俺にパンと芋のスープ、大きなブタ肉の香草焼きをトレイに乗せどいたどいた！とおっちゃんらを追い散ら

してくれた。

香辛料などの調味料は平民には高級品なので、こういった場所での食事は淡泊な味付けになるのだが、なかなかの味だ。

おばちゃんが言うには、週に何度かエイムラントの領主にただ飯を食わせてやる代わりに、一種の調味料のように使える秘薬を貰っているのだとか。

なるほど、この味付けはマリクさんの調味料を使ってるのか。

結構良い秘薬を作るってのは本当だったんだな、と食事を平らげて考えていると店の奥からジゼルが戻ってきた。

心なしかとろんとした雰囲気で、どうやら飯の他にワインも飲んで来たようだ。

「ふう、サイト、あんたも食事は終わり？。いや、久々におなかいっぱい食べたわ。ご馳走様。」

「ああ、それは良かったな。」

「折角だから兄様の分も頼んじゃったけど、いいわよね？頼めば食事を屋敷に持っていつてくれるのよ、ここ。」

「いいぜ。好きなだけ頼めよ。」

「ありがとう。おばさん、そういう訳だからおねがいね？」

「ああ！いいともさー！」

やけに素直だな。酒のせいかな？

店はいつの間にかがらんとして、客は俺とジゼルの二人だけだ。

あのおっちゃんらは俺が飯を食ってる間に、各々の仕事へ戻って行ったようだ。

「じゃあ、そろそろ宿の方に顔を出すか。」

「そうね。そろそろ行きましょつ。」

「おばちゃん、いくら?」

「あいよ! 30エキューだよ。」

「ぶ!」

「どうしたの? ブサイクな顔がさらにブサイクになってしまったわよ?」

「お前、何食ったんだよ!! 30エキューって無茶苦茶じゃねえか! 魔法学院でも一月は飯食えるぞ?!」

「なによ? 好きなだけ頼めって言ったじゃない。男に二言は無いんじゃないかったの?」

「だからってなあ! 30エキューだぞ?! 何食ったらそんなに行くんだ?!」

「べつにそんなに沢山食べたりしないわよ。レディに対してデリカシーのない発言ね。これだからダメ犬は困るのよ。」

「ちよつと兄様のむこう半年分の食事代を前払いしただけじゃない。」

「

「うわあ……他人の金だと思って……それにもうダメ犬に戻ってら。」

「あははは！！さすがは『我らの剣』だね！ジゼル嬢ちゃんとマリク様の窮状を知ってこんな粹な事をするとはねえ！」

「おばちゃん！俺は別に……」

「なんだい？『我らが剣』。いやだよ！あははは！そんなに謙遜しなさんな！あんたは若いのに本当に立派だ！あははは！」

「ほら、とつとと行くわよ。首輪と鎖が恋しいなら早めに言いなさいよね？それとも、私をみてイヤらしい想像をしたものだから立つに立てないのかしら？まったく、汚らわしいダメ犬ね。」

そうジゼルは好き放題言い残して、さっさと店を出て向かいの宿屋へ消えていってしまった。

俺はおばちゃんの感心しきった表情に一つため息をつき、渋々意に反した支払いを行うのだった。

グスン……俺の金が……

俺とジゼルが宿屋の二階で会った例のメイドは、どこか得体のしれない暗い雰囲気をもったメイドだった。

濃い紫色のローブをまとい、同じ色のフードを目深く被って、そのフードの奥も黒い仮面で顔を隠していた。

仮面も顔全体を覆うような大きさで、意匠などはなにも施されてお

らず、逆卵型の形で目の位置に丸い穴が二つ明けただけの物だ。

声は結構若く、足取りも軽やかではあったが寝不足なのか、全体的にけだるい雰囲気醸し出している。

俺達が自己紹介をすると、彼はピトフーイと名乗った。

「じゃあ、ピトフーイさん。俺達はここで見張ってるんで、ゆっくり寝てください。」

「ああ、頼む。夜になったら外に出たいんだがよろしいか？」

「ええ、日が暮れたら外のできるだけ見通しのよい場所で、レビテーションを使って罔になってもらいますよ。」

「いや、それがな。消費期限付きの材料を持ち込んでいて、マリク殿に作ってもらう秘薬と混ぜるための秘薬を調合する予定なのだよ。この期限がもう迫っていて、なんとしても今夜中に調合してしまわねばならんだ。」

「今、出来ないんですか？」

「夜でないとダメだ。それに今は簡単な魔法で臭いを抑えているが、酷く臭うのでな。外でやらねばこの宿は半年は人が寄り付けなくなる。」

おそらく、その原材料の強い臭いがワーウルフ……トリスティンではルーガルか？それを呼び寄せてしまっているのだろうか。」

「そんな酷い臭いなんですか？」

「ああ。私は嫌いじゃないのだが、他人は皆ひどい臭いだと言うな。そうだ、君らにもこの薬を渡しておこう。」

強い臭いに対して一時的に鼻を麻痺させるものだ。作業が始まった時に使いたまえ。」

そう言いながらピトフーイさんは俺とジゼルに小指大の小瓶を渡して来た。

俺達はそれを仕舞い、部屋の真ん中に設えてあるテーブルセットの二脚ある椅子にそれぞれ腰掛けた。

ピトフーイさんは窓の反対側にあるベッドに横になる。

俺は彼から窓の方へ注意を移そうとしたが、ジゼルの声により再びピトフーイさんを注視する事となった。



「あの……ミスタ・ピトフーイは寝るときもそのフードと仮面をつけたままなのですか？」

「……おかしいかね？」

「おかしい、といえますか少なくとも一般的には、寝る時位はメガネや帽子は脱ぎますでしょう？」

その言葉にピトフーイさんはクツクと仮面の奥で笑う。

「たしかに。お嬢さん、あなたの言うとおりだ。そう思っても当然だな。実はね、私の顔は”無い”のだよ。」

「無い？」

「うむ。秘薬の調査中の事故だね。劇薬を作っていたんだが、当時未熟だった私は誤って顔にかけてしまっただけだね。」

顔ごと溶けて無くなったのだ。」

ピトフーイさんはそう言いながらフードを取り、カツラをとり、仮面を少しだけずらした。

ずらされた仮面の向こう側を少しだけ見たジゼルが目が大きく開き、そしてすぐにう、とえずいてしまう。

俺もその壮絶な跡に胸からこみ上げてくる嘔吐感を抑えようと、多少の努力を必要とした。

わずかに見えた顔に皮膚は見当たらなかった。

赤と白の筋が見え、まぶたに当たる箇所もただ、大きく露出した眼球が仮面に隠され半分だけ見えていた。

彼はマスクを戻しカツラを再び被り、最後にフードを被りながら続ける。

「わたしも出来ればレディには、このような見苦しいものは見せるつもりはなかったんだがね。」

見てのとおり瞬きも出来ないのも、こうやって常に水の魔法と秘薬を使って皮膚の変わりに特殊な膜を張り

仮面で顔全体を保護しておかなければ、わたしは激痛のあまり発狂してしまうだろうな。」

「う、ごめんなさい。余計な事を聞きましたわ」

「いや。気にしないでくれたまえ。」  
「コレ」は私にとっては自らの力量を見定められなかった戒めだよ。」

彼はそう自嘲気味な声色で話すと、今度こそ寝る為にフードと仮面をつけたままベッドで横になった。

俺は無性に外の空気を吸いたくなり、部屋のドアをゆっくりと開けて廊下に出る。

ルーガルーは主に夜間に活動する。

とは言っても、必ずしも日中は何もせず寝ている訳でもない。

日光を嫌い、普段は深い森の中で暮らすルーガルーは稀に日中も行

動をすることもある。

こんな街中の昼間なら問題は無いが、森の近くだったりするとたまに被害者が出たりもするのだ。

特に例のルーガルーはピトフーイさんに執着しているようだから、日中も油断しない方がいいのかもしれない。

ここは二階だが、ルーガルーの跳躍力なら易々と窓から飛び込んでくるだろうし、屋根から天井裏へ進入し上からの襲撃もありえる。

廊下に出るにあたり、不意の襲撃に対処できるよう入り口のドアは開いたままにしておいた。

ジゼルもいつでも魔法が使えるように杖をその手に持ち、俺に続く。彼女はピトフーイさんの素顔に少なからずショックを受けているようで、廊下に出ると大きく深呼吸をした。

「大丈夫か？」

「ええ。でも、しばらくは肉料理は無理かもね。」

廊下から室内に注意を払いつつ、ジゼルに小声で話しかける。

魔法による惨殺死体やオークによる拷問の跡などを何度も見たことのある俺ですら結構きつかった。

彼女にしてみれば夢に出てきてもおかしくはないだろうな。

食事の後というのもまた最悪だ。

「無理はすんなよ？ここは俺が見とくから、外に出て気を紛らわしてこいよ。」

「おおきなお世話よ。そりゃ私はあんたより繊細だけど？」

「そうか。」

「そうよ。」

しかし、それ以上会話は続かなかった。

開けたままの扉の向こうで、ピトフーイさんは身動き一つせずベッドで横になっている。

ベッドの脇には彼の荷物らしき袋や鞆が無造作においてあり、特に粗末で大きな麻の袋が目を引いた。

「なあ、聞いていいか？」

「なによ？くだらない事だったら承知しないわよ？」

「この辺ってさ、ルーガルは昔から居るのか？あいつ等はもっと北の方に住んでると思ってただけ。」

「いいえ、この辺じゃ珍しいわね。特に野生のルーガルは。」

「そうか。」

「何？何か気になる事でもあるの？」

「うん。今回の奴がいくらばぐれ狼だとしても、野生のルーガルの勢力地はゲルマニアの北の方の森だろ？」

「へえ、よく知ってるわね？」

「ああ。ルイズの部屋で戦った事あるって話したろ？その時はゲルマニアの森だったんだ。

あっちじゃワーウルフとか他の獣人とひとからげにライカンスロップとか言われてたんだけどさ。

連中は基本的に森の深い地域を好むんだ。」

「そうなの？」

「うん。人から呪いや特殊な秘薬でルーガルーになっちまうと、森に駆け込んだりするのにも習性なんだぜ？」

「へえ。自分を恥じて姿を消す訳じゃないんだ。」

「まあ、人からそうなったら、そういう面もあるとも思っけどな。

でさ、俺が不思議に思うのはこんな街中で、はぐれ狼が特定のメイジを襲うのは何故だ？って所。」

「そりゃ、お腹が減れば他の動物襲って食べるんじゃない？それが偶々メイジだったって訳で。」

ピトフーイさんの臭い材料も好みだったんでしょ。」

「ルーガルってのはな、執念深いと同時に用心深くもあるんだぞ。なんでわざわざメイジをこんな街中で何度も襲うんだよ。」

「知らないわよ。」

「俺の知る限り、ルーガルの群れが活動できる深い森はこの辺には無いし、はぐれ狼がゲルマニアからここまで旅をするにも距離があり過ぎるし、その野生のルーガルはこんな街中でもっとも獲物にしては分の悪いメイジにだけ手を出しているんだぞ。」

「だから何よ？」

「このルーガルってさ、もしかしたら元は人間出身なんじゃないか？ピトフーイさんに恨みがあるとか。」

「そうだとっても、私達に何が出来るのよ。」



「うまくいけば戦わずに済むじゃないか。説得できるかもしれない。」

「そりゃそうだけど……相手はピトフーイさんを殺しに来てるのよ？野生の奴なら問答無用だし、そうじゃないとしても

殺そうとする位なもの、きっと話なんて聞いてくれないわ。」

「そりゃあ、そうだけどさ。元は人間だし、理性も残ってるなら戦いたくはないんだよなあ。」

「じゃあ、もし元人間ならピトフーイさんが殺されるのを黙って見てる訳？」

「それはやだな。後味悪すぎるし。」

「あんだ、何がしたいのよ？バカが少ない脳みそをいくら使っても意味無いわよ？」

「うるせえ。」

「はあ、あんだ何のためにここに居るのよ？」

「ルーガルー退治。」

「じゃあ、やってくるルーガルーをやっつけねばいいじゃない。それだけの話よ。」

「そりゃ、そうだけどさ。気にな・・・?!」

そう言い掛けて俺は背中の中のデルフを抜き、目の前の部屋に戻るべく駆けた。

宿の外から遠く複数の悲鳴が聞こえ、その悲鳴の連鎖が近づいてくるのを聞いたからだ。

「ちよつと?!」

「ジゼル、部屋から離れろ！巻き添えを食つぞ！外に出てレビティションで宿の上空に上がるんだ！どうやらお客さんが来たらしい！」

「わかったわ！」

「俺はピトフーイさんを起こして避難させる。いいか？！ここに近寄るなよ！」

ジゼルは頷くと同時に部屋とは反対側に走って行った。

ルーガルーの騒ぎが起こり狙われている当人が泊まっている為、宿には他の客は居ないので他の部屋に注意を喚起して回る必要はない。

「くそ、まさか本当に昼間から襲ってくるとはな……ピトフーイさん！起きて！ルーガルーだ！」

「む……！？もう夜かね？」

「いや！昼だ！それより、早く！逃げないと！」

俺はベッドに駆け寄りピトフーイさんを起こす。

彼がガバつと起きてベッドから降りようとした所で、廊下から窓ガラスが割れる音が聞こえた。

部屋から近い。

急いで部屋の中央にあるテーブルを邪魔にならない様部屋の奥へ蹴飛ばし、入り口の扉の方を向いてデルフを構える。

「ピトフーイさん！その窓から逃げてください。」

「うむ。頼むぞ、サイトくん。」

ピトフーイさんは他の荷物には目もくれず、よいしょと粗末で大きな麻の袋を担いで部屋の窓へ進みレビテーションを詠唱した。

それと同時に開け放たれた扉をはさんでルーガルの姿が見える。

全身が灰色の毛で覆われ、人の手のような前足には鋭い爪が生えていた。

俺はピトフーイさんとルーガルーの間に素早く入り、デルフを体の正面に構える。

ルーガルーは一瞬、俺に飛び掛ろうと四つん這いの姿勢を低くしたが、何かを感じ取ったのかそのままの姿勢で唸っていた。

対する俺は左手のルーンを光らせながらすこし姿勢を落とし、上下どちらにでも突きが放てるよう身構えた。

狭い室内では長いデルフは振れない。

だから、ルーガルーが飛びかかって来た瞬間にこちらも距離を詰め、胸か頭を突き刺すつもりだった。

それを読まれたらしい。

対峙するルーガルーの目からは、すさまじい敵意が感じられた。

犬歯を剥き出しにし泡が混じった涎をたらしてグルル、と唸っている様子からは理性は感じられない。

どうやら野生のルーガルーというのは本当らしい。

わずかな時間の間にそう思考を巡らせていると、不意に背中の方から気配が消えた。

ピトフーイさんが窓の外へ無事脱出したようだ。

ルーガルーから伝わる敵意がさらに強く俺へと叩き付けられる。

室内はルーンを使って立ち回るにはあまりに狭い。デルフの刀身の長さから、攻撃のチャンスは一回だ。

初撃は外してしまった時、連突きで再度攻撃を加えようとしてもルーガルーの素早さから考えれば無理だろう。

外した瞬間、俺の喉笛にその牙が突き立てられているだろうし。

もし攻撃が失敗したら、あとは”ダブル”を使うしかない。

狙うは心臓か頭。

たった一度、ただ一撃。

俺は集中する。

音が消え、時は止まり、剣先に俺の意識が乗る。

そしてその一瞬を待ちわびる。

四肢を地に付け、唸りを上げるルーガルーの低い姿勢が一瞬更に低くなる。

来る！！

瞬間、ルーガルーの姿が掻き消えた。

俺は焦る。

見えない。

鈍ってルーガルのスピードに反応できてない?!

まずい! 攻撃が来る!!

反射的にデルフを首筋へ当てる。

そこで、俺は状況を始めて把握した。

ルーガルは元来た廊下を走り、破った窓から外へ出て退散していたのだった。

intermediol:狼は月夜に咆哮す3

そして夕刻。

俺とジゼルはピトフーイさんと町の外に移動し、畑に囲まれた見通しの良い丘の上にいた。

ルーガルーが昼間から襲撃してきた事を受け、早めに町を離れて再度の襲撃に備えることにしたのだ。

この場所ならどこから襲ってきてもすぐに察知できる。

夕暮れの空は雲ひとつ無く、太陽とは反対側から昇ってきた二つの月が夜空を明るく照らしてくれるだろうから、闇夜の襲撃は無い。



ピトフーイさんは秘薬を調合するための道具を鞆から次々と出して準備を進めていた。

あの大きな麻袋には例の材料が入っているのか、その間はまったく触れていない。

よほど大事なものが入っているのか、はたまた中身は扱いが難しいのか、決して袋には近寄らないよう注意されていた。

周りの畑は麦か何かの刈り入れが終わったのだろう、きれいに何も無くなっており四方が良く見える。

ジゼルはというとレビテーションで上空に上がり、空から周りを警戒してくれている。

俺もデルフを抜いて四方に目をやりつつ、ルーガルの襲撃に備えていた。

太陽は町の方角へ沈もうとしており、空と町の建物の屋根を赤く染めている。

その光景はとても美しく、一瞬、警戒を忘れ目を奪われた。

「なあ、相棒。」

「なんだよ？デルフ。」

「お前さんのルーンなんだが……」

「ああ、そついやさつき使ったな。」

「なんかこう、俺様から魔力を吸い取ろうとする力を感じるんだが？」

「そついやデルフには言っでなかったっけ。ガンダールヴの力ってのはさ、魔力による身体強化らしいんだ。」

「そつだっけ？相棒に会った時、ガンダールヴだって何故かわかったんだが、ソレ以外は記憶がはつきりしねえんだよな。」

「お前、元はガンダールヴの武器じゃなかったのかよ。」

「もつずっと昔の事だからな。よく覚えてないんだよ。」

「そうか。とにかくだな、このルーンってのは魔力で動くらしいん

だ。でも俺、魔力なんて持ってないだろ？」

「だな。」

「いままではそのせいで魔力の代わりに、体に反動が来てたらしいんだ。」

でもさ、それをお前が吸い取った魔力をこのルーンで吸収して反動を和らげる事が出来るらしいんだぜ？」

「へえ。俺様はそんな事できるのか。でもなんで相棒がそんな事知ってるんだ？」

「……夢に現れたんだ。」

「何が？」

俺はここで少し考えた。

夢に妻であったルイズが現れ、俺のルーンについて色々と教えてくれて制御のための魔法までかけてくれた。

こっちのルイズには夢でサーシャが現れ、説明してくれたと言っている。

当然だ。

ルイズにいやあ、実は俺未来からやってきてさ！将来結婚するお前に教えてもらったんだ！とか言えるはずがない。

そんな事を言えばどう未来が変わるか、わかったものではないしな。

でも、デルフはどうだろう？

俺はこいつを信頼している。

未来から来たと言う俺の秘密をデルフに話して、色々相談に乗ってもらうのもいいかもしれない。

正直、”やりなおせるチャンス”という物はしばしば俺の手に余ると感じていた。

俺自身、この手を血で染め、これから起こる戦争への事前の干渉はしないと確かに決めた。

戦争を回避するために暗躍するほど、力も余裕も俺には間違いなくないのだ。

せいぜいなりゆきに身を任せつつ、未来の知識を利用して目の前の問題にうまく立ち回れるようにするのが精一杯だ。

そして学院に帰って程なく、俺とルイズはアルビオンへ向かう事になるだろう。

俺はウエールズやトリステインを裏切るワルドに、未来を生きてきた今だからこそ聞いてみたい事があった。

できれば、ウエールズには生きていて欲しくもある。

裏切るワルドにレコン・キスタの正体を教え、旧態依然とした貴族体勢への改革へ乗り出すアンリエッタに協力しないかとも聞いてみたい。

いや、ワルドは今考えてもすっげえ腹立つし嫌いなんだけどな。

むしろポッコボコにしてやって最後にダブル使ってトドメ刺しちゃいそうだし。

と、話がそれたか。

多分、アルビオンで俺がどう行動するかで、歴史は本格的に大きく変わってくるだろう。

アンリエッタやタバサ、ティファと子供を作らない事を決めた時点で既に歴史は変わるだろうが、今はまだ俺がそう思っているだけだ。

具体的に歴史が大きく変わる”結果”が出るとすれば、間違いなくアルビオンだ。

ルイズは大きな歴史の流れは変えるな、と言った。

同時に、今度はルイズ以外に子供は作らず、彼女以外は愛さない目的で俺はここへ来ている。

俺の子供達はほとんど王族だ。

歴史的に見れば、その子供達が生まれなければ大きく歴史が変わってくると思う。

ルイズは大丈夫と言ったが、未来の子供達がどうなるのか気にならないと言えば嘘になる。

一体、”変えてはならない大きな歴史の流れ”とは何だろう？

きっと、俺の頭じゃわからない。

一人で考え続けるにも、そろそろ限界だ。

俺は意を決してデルフに話しかける。

「おい！おいって！相棒！なんだよ、急にだんまり決め込んでよお。」

「ああ、すまん。すこし決断が必要だな。」

「なんだよ、相棒。水くせえな。夢に誰が現れたか位、教えてくれてもいいじゃねえか。」

「ああ、それもあるんだが……えつとな？夢には”未来のルイズ”が現れたんだ。」

「あの嬢ちゃんが？何でまた。」

「なあ、デルフ。俺がさ、未来から来たと言えば信じてくれるか？」

「へ？」

「俺、未来から召喚されたんだ。」

「ははは！相棒、冗談きついで！」

「なあ、デルフ。マジメな話なんだぜ？」

「……にわかには信じられねえけど……本当か？」

「ああ。その証拠に、学院に帰ったら起こる出来事を話しておくよ。当たったら信じてくれるか？」

「ああ、お前さんは相棒だ。信じるよ。しかし、なんでまた急に……」

「もし、さ。これから起こる不幸な出来事で、それを知ってとめる事が出来るならお前はどつする？」

「そりゃあ、止めるね。」

「じゃあさ、その不幸な出来事の後にみんなそれを乗り越えて成長し、幸せになつたら？」

「うつむ……難しいな。」

「だろ？そつという事を考えるとさ、俺、身動きが取れなくなつちま  
いそつで。」



「そうか、相棒。お前さん、相談相手が欲しかったのか？」

「ああ。ルイズ所か他の人間に話すわけにもいかなそうだし。それに俺をルイズの召喚に合わせてこっちに送ったのが”未来のルイズ”なんだ。」

俺、将来ルイズと結婚してるんだぜ？」

「本当か！！？こりやおでれえた！！自分の使い魔と結婚するメイジがいるとはな！！！」

「バカ、声が大きいって。ピトフーイさんに聞こえるだろ？それに、俺が未来から来たって話より驚くなよ………」

「わはは！すまんすまん！しかし、あの嬢ちゃんが相棒となりや傑作だ！」

「うっせえ。いいか？デルフ。これ、内緒だからな。」

「ああ、わかった。俺と相棒の秘密だな。」

「ああ。じゃあ、帰ってからの事教えるぞ？」

「いや、いいよ。信じるさ。」二つある”ガンダールヴのルーンだ  
けで十分だ。」

「わかるのか？」

「まあ、な。普通は二人の主人に仕える使い魔なんてまずいないん  
だが、相棒の説明で合点がいったよ。」

「そうか。でな、話を戻すと未来のルイズとはいまだに繋がってい  
るらしくてな。」

「そうなのか？」

「ああ。で、昨日の夜夢でそのルイズが現れて、おれのルーンにつ  
いて教えてくれたんだ。」

「そういう事だったのか。」

「ちなみに、こっちのルイズには初代ガンダールヴのサーシャが現  
れたって言うてある。」

「……おめ、あの娘っこの事知ってるのか？」

「なんだよ、記憶がはっきりしない癖にサーシャは覚えてるのな。  
この先、ロマリアで過去に遡って出会う”予定”なんだ。今  
回はわからないけど。」

「相棒……何でもアリなんだな。」

「はは、虚無に関わればこんなもんなんじゃないか？」

「わはは！まあ、ちげえねえ！この先相棒と一緒になら退屈はしない  
のは確かなようだな！」

「じゃあ、改めてこれからよろしくな、デルフ。」

「ああ！こんな面白れえ相棒なんて始めてだ！こっちこそよろしく  
頼むぜ、相棒！」

俺は握手をするかのように、デルフを強く握った。

デルフもカタカタと震えてそれに答える。

うん、デルフに本当の事を話して良かった。

おっと、いかん！ルーガルーの事わすれてた！警戒しないと……

その時始めて太陽がとつくの昔に沈みきり、星が夜空に輝いている事に俺は気が付いた。

「さて、こっちは準備が出来たんだが……サイト君？」

「ええ。おーい、ジゼル！なんか見えるか？」

上空のジゼルは俺の言葉に頭上で大きく手を交差して答える。

「近くに絶対居ると思うんですが……警戒されてるのかな。」

「サイト君。一つ、提案なんだが……例の臭う材料を今から準備して奴をおびき寄せ、そこを向かえ打ってはどうか？」

「いいんですか？貴重な材料なんでしょう？もし戦いに巻き込まれて台無しになったら……」

「大丈夫だ。まず先にこの袋に入れてある材料の臭いを抑える魔法を解いて、私が上空に上がる。」

次に奴が来たのを確認したらこの袋にもレビテーションをかけて上空に浮かべればいい。」

「ああ、それならうまく行きそうですね。」

「では、早速とりかかろう。あ、例の薬は飲んでおいてくれよ？エ  
イムラント嬢にはわたしが空に上がった時に飲むようっておく。」

「頼みます。」

「できるだけ早くしとめてくれよ？今夜中にはどうしても調合して  
おきたい。マリク殿の秘薬ももう出来ている頃合だしね。」

「ええ、任せておいてください！」

ピトフーイさんは俺の返事を聞くと、例の大きな麻袋に向かってな  
にやらブツブツと詠唱を始めた。

俺は懐から薬の小瓶を取り出し、中身を飲み干す。

ものすごくマズかったが、我慢だ。

やがてピトフーイさんは、では後は頼んだぞ？と言い残して大きな

麻袋以外の道具と共に空へ浮かんでいった。

上を見ると彼から説明を受けたジゼルが薬を飲んでいる姿が見える。こうして地上には俺と大きな麻の袋が取り残された。

気を引き締めながら俺は周囲を警戒する。

空には二つの月が煌々と輝いて、大地を照らしている。

この明るさなら夜であっても、接近してくるルーガルが良く見えるはずだ。

先程から少しだけ雲が出てきたが、月を隠す程の大きさではない。

その時、上からジゼルの声が辺りに響いた。

「来た！町とは反対側！！」

町の方を向いていた俺は後ろを振り返る。

丁度、大地に池のように広がっていた雲の影から、ルーガルが飛び出して来た所だった。

結構近い！こんな近くまで接近を許していたなんて！

強い月の光が仇となって、雲に濃い影を落としていたのか！くそ！

俺は迎撃のため、デルフを構えルーガルへ突進する。

ルーガルは咆哮を上げながら大きく跳んだ。

俺はそれに合わせて剣を下から上へ突き上げたが、空を斬る。

すぐに俺は横へ飛び反撃に備えたが、意外にもルーガルは俺を大きく飛び越えただけだった。

着地したルーガルは俺には目もくれず大きな麻袋へと走って行く。

麻袋はレビテーションをかけられ徐々に上昇していたが、ルーガルの接近するスピードと跳躍力に浮いていく速度が追いつかず

麻袋の底がそのするどい爪で切り裂かれてしまった。

袋からスイカ大の何かが二つ、一瞬落ちかけたが空中で静止し、再び上昇していく。

しかし、内一つは再び跳躍したルーガルに盗られてしまった。



しまった！くそ、ピトフーイさんのレベテーションの詠唱が、間に合わなくなる程の接近を許してしまっ……

そうごちて、舌打ちをしながら再びルーガルーへ斬りかかろうとしていた俺は、ソレを見て頭が真っ白になり、その場で棒立ちになった。

ルーガルーが奪った麻袋の中身は、女の頭だった。

両手で大事そうにかかえ、腕からはウェーブのかかった髪が溢れている。

抱きかかえた女の頭を、ルーガルーは更に大事そうにうずくまる様に抱いて、次の瞬間天に向かって強く、大きく咆哮した。

その視線の先にはピトフーイさんが居る。

俺も彼を見たが、濃紫のフードの向こうは深い闇で何も見えなかった。

「なんだよ、これ。」

声が漏れる。

ルーガルは俺の目の前で、一心不乱に天に向かって咆哮を上げている。

「どついう事だよこれ!」

返事はない。

一緒に浮かんでいるジゼルも口に両手を当て、呆然としている。

「……サイト君、役目を果たしたまえ。」

「それどころじゃない! どうしてあんたは人の首なんて持つてるん

だ！？これが秘薬の材料だというのか？！  
どうしてその首をルーガルが奪おうとしてるんだ？！」

「今はそれ所じゃないだろう？そら、ワーウルフが君に八つ当たりをしようとしているぞ？」

はっ、としてルーガルを見ると脇に女の頭を抱えて、あの宿で感じたすさまじい敵意を俺に向けて来ていた。

ちがう、俺は……

そう言いかけて、俺はルーガルが涙を流している事に始めて気が付いた。

そして理解する。

このルーガルは野生ではなく、人間からなんらかの理由でルーガルになった者だと。

あの女の首は、”彼”にとって掛け替えのない存在だったのだと。

俺の逡巡を余所に、ルーガルが飛び掛ってくる。

脇に首を抱えているため、攻撃自体は単調で避けやすかったが、俺

はどうしていいかわからなかった。

「ま、まっしてくれ！！お前、元は人間だろ？！」

「無駄だよ。そいつは理性の欠片も残っていないんだから。」

上から冷たく響く声が、目の前の ” 彼 ” の代わりに答えた。

俺はルーガルの単調な攻撃をかわしつつ、叫ぶ。

「なんだよ！どついう事なんだよ！！！」

「いやな、彼を” そう ” したのは私の薬なのだ。」

「何故だ！何故そんな事を！！！」

「何故？そうだな、”仕事” だからだよ、それが私の。おっと、彼に薬を飲ませたのは私じゃないぞ？彼の政敵さ。」

私は顧客の要望に答え、様々な毒薬を作る事が仕事なんだ。まあ、直接手を下すこともあるがね。」

で、その薬の中には人を獣人へと姿を変える物もあるのだが……」

「ばかな！完全に人の理性まで奪い去る秘薬なんて、エルフでもない限り……」

「ほう、よく知ってるね。しかしだ。私にはそれが出来るのだよ？ラインメイジではあるが、毒薬に関しては誰にも負けないと自負しているよ。」

くそ、くそ、くそ……！！

俺は齒軋りをしながらルーガルの攻撃を避け、ピトフィーの言葉を聞く。

なんとか出来ないのか？！

隙を付いてデルフを上空のあいつに投げて、地上に落とせないか？！

「ちなみにその生首はそいつの奥さんでね。彼の後に違う毒薬で殺害されたんだが、メイジの死体というのも中々貴重な材料でね。」

「て、てめえ……!!!」

「こつちの彼の子供の方の死体と一緒に報酬として貰い受けたんだ。いろんな秘薬の材料になるしね。」

「しかし、”残りの部分”を取り返す為に執拗に狙われてね。まったく、まさかゲルマニアからはるばるここまで追って来るとはな。」

「いや、迷惑な話だよ。私の薬を暗殺に使うならキッチリとカタをつけて、ちゃんと後始末をして欲しいものだ。」

「ゆ、許せねえ！お前、それでも人間か?!?!」

「ははは、この顔だ。人間扱いされない事など慣れっこさ。しかし、君はすごいね。メイジでもないのによくそいつの動きについて行ってるよ。」

「うるせえ！この人を元に戻せ!!」

「無理だよ。解毒されるような毒じゃ、暗殺に使えないじゃないか。」

「くそ！ちくしょう！…おい、目を覚ませよ！お前が憎いのはあいつじゃないのかよ…！」

「無駄だつて。彼に同情するならさっさとトドメを刺してやった方がいいと思っぞ？」

俺の頭の中は怒りのあまり白濁とじていた。

なにもできない悔しさのあまり、涙を流していた。

ジゼルはそんな俺たちのやり取りを聞いて呆然としている。

彼女は宿で俺に言った。

ルーガルーをやっつければいいじゃない。それだけの話よ。

しかし、この状況で本当にそれが正しいのか？！

この目の前の哀れな被害者を殺し、空の上から高みの見物をしているアイツを助ける事が俺の仕事なのか？！

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう！！

どうすりゃいいんだよ俺は！！

「ふむ、どうやら踏ん切りが付かないようだね？では私が手助けをしよ。」

そういつとピトフィーはなにやら詠唱を行う。

直後、ジゼルがうめき声を上げてぐったりし、俺とルーガルーから離れた位置にゆっくりと降りてきた。

「何しやがった？！！」



「君たちは先程何を飲んだと思う？そう、私の薬だよ。」

「！！！」

「安心したまえ。毒じゃあない。あれは死臭を紛らわせる以外にも、わたしの魔法を利き易くする効果があるのだよ。」

「答える！！ジゼルに何をした！！！」

「眠ってもらっただけさ。君らに危害は加えるつもりは無いよ。薬を飲ませたのも単なる保険だしな。」

「わたしはただ、そのワーウルフを排除してくれればいいのだからね？」

「うるせえ！お前の思い通りにはならねえぞ！」

「しかしだね？そのワーウルフは変わり果てたかつての妻を見て、見境がなくなっているぞ？」

「そのうち本能に感情が取り込まれて、弱いものから狙い出すと思っただが……エイムラント嬢がこのままだと危険だな、サイト君。」

「くっ！」

俺はルーガルの攻撃を凌ぎながら必死でこの状況をどうするか考える。

しかし、何も浮かばない。

何の良案も浮かばない。

この哀れな狼を斬る決意さえできない。

そして、不意にルーガルの攻撃が止まった。

その視線の先には大地に倒れているジゼルの姿がある。

ルーガルは妻の頭を”放り出し”、ジゼルへ向かって走り出した。

心の隅々まで野獣に変わってしまった瞬間だった。

だめだ！

それはダメだ！！

俺の迷いが無関係な人を殺してしまう。

戦争が起こる事を知り、そこで犠牲が出る事を身勝手だと自覚しつつ、一人の女の為に黙認しようとしている俺に。

せめて手の届く人は守ろうと身勝手に誓う俺に。

俺の迷いが無関係な人を殺してしまうと悩む資格も、彼を斬る資格も俺にあらうはずもないけれど。

それだけはダメなんだ！！

赤い視界の中、俺はジゼルへと駆けるルーガルの胸を、後ろから追い越しざまに両断していた。

ルーガルの上半身はジゼルの手前にぼとんと落ちてそれでもジゼルへ手を伸ばしている。

俺はその目の前に立つ。

ルーガルは血泡を吹きながら唸り、俺の事など見えないかのよう  
にジゼルを見ていた。

「グ・グ・グぶっ……ペー・トラ……アヒム……」

俺は無言でルーガルーの頭にデルフを突き立てる。

”彼”が最後の瞬間、誰かの名前を口にしていた事は知っていた。

しかし、俺はそれ以上彼を直視する事ができず、トドメを刺した。

ルーガルーの生命力だと、体を両断された位では即死はしない。

彼の理性の在り処を探して、いたずらに苦しみを伸ばす事は俺には耐えられなかった。

そのままその場でしばらく立ち尽くしたが、思い出したように俺はジゼルを抱き起こした。

彼女はすうすうと安らかな寝息を立てている。

「ほ、凄いね。君は本当に強いな。どうやったんだい？最後の動きは。スクウエアメイジですら君には適わないんじゃないか？」

後ろからピトフィーが声を掛けてきた。

いつの間にか地上に降りてきていたらしい。

おれは反射的にデルフを手にして切りかかる。

しかし、その瞬間に全身がマヒしてどっと地面に倒れてしまった。

「そう、怒るなよ。私だって仕事での事なのだし。エイムラント嬢を囷にしたのだって君が仕事をしようとしてくれないからじゃないか。」

まあ、若い君には私は許せないだろうけど、貴族の政争に比べればまだ ”マシ” なものなんだよ？

私は別に君らを殺すつもりでもないし、その薬も明日には効果は切れるから安心したまえ。」

「お・・・前…………ぜ…………い、ゆるさ…………。」

「驚いたな！麻痺の魔法を薬を飲んだ状態で受けてもまだ喋れるのかい？これは早めに薬を調合して、この場を立ち去った方がよさそうだ。」

きつと君とまともにもやりあったら私など、すぐ殺されてしまうだろうな。

しかし、一応お礼は伝えておこう。あの”材料”にかけた防腐・防臭の魔法もそろそろ限界だったのは事実だね。

あんな材料だろう？迂闊に街中で調合なんてできないし、ワーウルフは執拗だしで困っていたんだ。

ありがとう、サイト君。私の名前は職業柄偽名しか言えないけど、お礼に二つ名を覚えておこう。

私は『毒水』。ラインメイジだけど、毒のことならハルケギニア一だと自負している。」

「ちく……しよ……う」

「じゃあ、また何処かで。君と直接やり合いたくはないけどね。」

ピトフーイ、いや『毒水』はそう言つと俺にスリープ・クラウドをかけた。

俺の意識はそこで途絶えた。



再び目が覚めた時は日も昇りきっていない早朝だった。

ジゼルはまだ寝ているようだ。

気分は最悪だった。

左耳の耳鳴りがひどい。

左手のルーンを見ると、抑制魔法のライン（線）が黒から赤黒く変化している。

恐らくあの時の”ダブル”の代償だろう。

1秒位の発動だったから、完全に左耳が聞こえなくなった訳じゃないさぞうだ。



しかしダメージはあるようで、耳鳴りの原因は反動だと思う。

辺りには死臭が漂い、事切れたルーガルーの死体にカラスが集まって来ていた。

俺は立ち上がり、その辺に転がっていたデルフを拾うとカラスを追い払った。

辺りを見回すと、昨日『毒水』が調合の準備をしていたあたりにルーガルー以外の”死体だったもの”が転がっている。

漂う強烈な死臭はこれが原因らしい。

近寄ってソレを見ると昨夜ルーガルーが抱えていた女の髪と子供のサイズの耳が肉の中に見えた。

俺は思わずその場で嘔吐する。

そして、涙を流しながらデルフで穴を掘った。

ソレの量自体は多くは無い。

デルフもその扱いに何も言わなかった。

穴を掘り終えた所で再びルーガルーに群がっていたカラスを追い払ってから、ソレを穴に入れて土を返していく。

心なしか死臭は和らいだ気がした俺は、すっかり汚れた手でジゼルを抱きかかえて、ルーガルの死体から離れた位置に運んだ。

彼女を起こそうとしていると、学院からここへ来る途中に会った夫婦が農作業に出る為か、近くの道を通りかかったので俺は二人を呼び止める。

簡単な顛末を二人に説明し、旦那さんには町へルーガルは退治されたと伝えに走ってもらい、奥さんにはジゼルの介抱を頼んだ。

俺はというと、農作業につかう鍬を借りて先程埋めた”死体だったもの”の隣に穴を掘りはじめた。

途中、何度もルーガルの上半身と下半身に群がるカラスを追い払いながら、泣きながら、ひたすら穴を掘った。

穴を掘り終わると、おれはルーガルの上半身と下半身を綺麗に穴の中に並べ、カラスどもが食い散らかした臓物を丹念に拾い集めた。

ようやくルーガルを埋葬し終えた所で、ジゼルが目を覚ました。

ルーガル達の簡単な墓の前で座り込む俺の後ろから、彼女は声を掛けてきた。

耳鳴りは収まっていたが、左耳の方はなんだか聞こえ辛い。

「……ピトフーイは？」

「さあ。」

「……あんた、大丈夫？」

「ああ。ジゼル、怪我ないか？」

「無いわ。」

「そうか。」

「……おばさんに聞いたわ。ルーガルー、ちゃんと退治してくれたんだってね。」

「ルーガルーじゃ無かったよ。人間だった。」

「そう。」

「奥さんの首抱えてさ、憎い、憎いって泣いてたよ。」

「そう。」

「ピトフィーってのは偽名だった。」

「え？」

「『毒水』って名乗った。最後にな。」

「そう……」

「近くに川がないか？俺、多分すっげえ臭いと思う。」

「そうね、とつても臭いわ。」

「服に付いた血、落ちるかな。」

「いい秘薬があるの。特別に洗ってあげるわ。」

「ありがとな。」

「なんだか棒読みね。」

「訓練されてない犬だからな。」

「そう。」

「そうなの。」

それからしばらく、俺たちはそのままその場に居続けた。

俺もジゼルも悔しくて、悲しくて、泣いていた。

町へ戻るとお祭り騒ぎになっていた。

『我らの剣』の新たな活躍を皆が称え、誰もが俺にその武勇伝を聞こうと近寄ってきてはすぐに逃げていく。

俺の悪臭はすごいらしい。

ジゼルは寝ている間、ずっと一緒だったせいかあまり気にならないようだ。

きつと、彼女もそこそこ臭いだろうな。

俺たちは喜ぶ人の群れを聖人の歩みのようにさあ、と割りながらマリクさんの待つ屋敷へ戻った。

屋敷に着くと、マリクさんは風呂を用意してくれていた。

人づてに俺たちの有様を聞いて、気を利かせてくれたようだ。

マリクさんに先に入るよう進められたが、さすがにジゼルに譲った。

その間に『毒水』についてマリクさんに色々聞くと、昨夜奴がここへ来て約束の秘薬を受け取り、何処かへ旅立っていったらしい。

ムカつく事に俺とジゼルによくお礼を言っておいてくれと頼んでいたそうだ。

俺は自分の不甲斐なさに唇を噛み俯く。

やがてジゼルが風呂から戻ってくると、俺を見た瞬間うっと口に手をあて逃げて行った。

風呂に入り香水をつけ、嗅覚がリセットされたらしい。

向こうの方からはげしく俺を罵倒している。

ちょっとムっとしたのでわざと聞こえない、と彼女に近寄ってやった。

ジゼルは屋敷中を逃げ惑い、追い詰めたところで本気で泣きながら謝ってきたので俺は満足し、マリクさんに風呂へ案内してもらう。

風呂に入っている間、ジゼルが俺の服についた臭いや血を綺麗に取

り去ってくれ、体を洗い終えて風呂から出る頃にはふわふわになっていた。

しかし綺麗になった服と体とは裏腹に、俺の鼻の奥ではあの死臭が、左耳の奥からあのルーガルの咆哮が離れてはくれなかった。

風呂から上がったら客間に来るように言われていたので、客間に行くtomマリクさんとジゼルがお茶を用意して待っていた。

「やあ、サイトくん、一息ついたかい？」

「ええ、服まで綺麗にさせていただいてありがとうございます。」

「なに、これ位お安い御用さ。さあ、お茶を用意したよ！飲んでくれたまえ！」

「いただきます。」

俺は一口お茶を啜る。



ルイズにたまに貰うお茶とは天地程も味が違ったが、とても美味しく感じた。

「さて、今回の件は本当に大変だったようだね。妹から詳しい事を聞いたよ。」

「ええ。」

「でも、君のおかげで町に平穏が戻ったのも事実だ。胸を張りたまえ。」

「……俺は結局、あのルーガルー……あの人を助けられなかった。」

「そうだね。それで？君はルーガルーを斬った事を後悔しているのかい？」

「……じゃないんですよ。」

「……」

「斬らなきゃ、ジゼル……ミス・エイムラントは死んでいました。」

「そうか。なら、僕は君に手放しで心から感謝すべきだね。」

「でも、斬りたくなかった。」

「サイトくん、君は何の為にあの場で剣を抜いて戦っていたんだい？」

「仕事、です。」

「そう、仕事だね。それだけかい？」

「ルーガルーに狙われるメイジを助ける為でもありました。……最後は助けたくもなかったけど。」

「そう、彼……『毒水』だけ？彼にもやましい事情があったんだってね。ルーガルーにも不幸な過去があった。」

「ええ。」

「サイトくん、人間というのは身勝手に当たり前なんだよ。」

「マリクさん？」

「いいかい？僕にはジゼルが一番大事だ。次に、領民の笑顔が大事だ。その次は……お金だね。サイトくん、君はその全てを守ってくれた。」

ああ、僕は身勝手だ。『毒水』の悪行も、ルーガルとなった人とその家族の不幸も、その事実の前では”関係ない”んだよ。

いま、僕はこんなにも幸せだ。ジゼルが無事にここにいて、領民はすごく喜んでくれる。おまけに、君が半年分の食費を浮かしてくれた！」

「マリクさん……」

「わたしは誰かからそれを身勝手だと誹られてもなんら、やましいとは感じはしないだろうね。本当の事だし、何が悪いかもわかりたくもない。」

いいかい？サイトくん。われわれの幸福は、だれかの不幸で成り立つのだ。勘違いしてはいけない。ただ幸福を掴んでおしまいなどではない。」

だれかを間接的にあるいは直接的に、不幸にしてやっと幸せになれる生き物なのだよ、我々は。」

「兄様……」

「ジゼル、お前もよく覚えておきなさい。貴族というものはただ在るだけで平民から幸せを奪っているのだ。

どんなに彼らに慕われようとも、その事実は変わらない。」

「はい、兄様」

「サイトくん。先程の質問を繰り返そう。君は剣を取るとき、何を第一に考えるかね？」

君の手は大事なものをそんなに多く抱えていられるほど広いのかね？」

「……いいえ。」

「そうだろう。君はきっと、剣を取るときは誰かの、あるいは自身の幸せの為にとっている筈だろう？」

「はい。」

「ならば、胸を張りたまえ。君は誇りを持ってその身勝手さを受け止めればいいんだ。」

幸せの為に剣を、杖を、牙をとり戦うことを、戦った事を恥じるべきでないし迷うべきでもない。

貴族も平民も、悪党も聖人も、人もルーガルもオークでさえ己の幸せの為に他人を不幸にする権利を持っているのだよ。

それを恥じる位なら、最初から君と戦い力及ばず不幸になってしまった者達にわざと負けてやるべきなのだ。」

「マリクさん……」

「さあ、本題だ！ここに『毒水』が泊まっていた宿からの請求書がある。」

「マリクさん？」

「なんとこの事だ！ルーガルが壊した窓の請求書も一緒に来てるね！！」

「あの……」

「ああ！こんな大金、僕には払えない！それに君に少しでも美味しいお茶を飲んでもらおうと、君の名を使ってツケで買っただけの物もしてしまった！」

「おい」

「ああ、このままでは大事な妹を質に入れないと支払いが……」

「こらー！あんた、絶対確信犯だろー！！」

「おお！サイトくん！払ってくれるのかー！！いやあ、君は本当にすばらしいねー！」

「無理があるぞ！その論法！説得ですらねえ！！」

「ははは！その調子だよ、サイトくん。さて、外に取り立てにきている宿屋の女将とお茶の商人を待たせているんだ。

よろしく頼むよ！ジゼル、サイトくんを案内してやってくれたまえ！僕はこれからトリスタニアの町へ秘薬を売りに行かなきゃならん。」

「はい、兄様。さあ、行くわよ？首輪と鎖が欲しいわけじゃないんでしょ？モタモタしないで、ほら。」

「うわあ。力技だな。あの語りはなんだったんだ？」

「いつまでもうじうじうじうじ鬱陶しいわね。何？私の後にお風呂に入って変な気分になっちゃったとか？やめてよ、汚らしい。」

結局、おれはジゼルを相手にぎゃあぎゃああと喚きながら各種支払いを行うことになった。

しかも『毒水』の奴は宿代も払わず、結構な額の飲み食いまでしてやがった。

今度会ったら絶対ただじゃおかねえ。

俺はそう誓い、随分と軽くなったエキュー金貨の入った袋を懐に魔法学園への帰路についた。

「おかえり。怪我はない？」

学園に帰り着いたのは夕方になってからだった。

久しぶりに見るルイズは、それはそれはもう輝いて見えた。

いや、昨日の朝に会ってるんだけどな。

なんだか何日も会っていないかのような錯覚に俺は陥っていた。

「ああ、怪我はないぜ。」





ついて行くことしたら”守れない”って言ったわね？  
なのにこの子は”守れた”んだ？！！

「ちがう！！ルイズ、それは断じてちがうぞ！！ジゼル！！余計な事を言うんじゃない！！」

「ああら！！！」ジゼル”？”ジゼル”ですって？サイト、たった一日で本当に随分仲良くなったのねえ？！！」

「サイト様……私が何を口にしても気にしないと約束してくれたのに……」

「サイトー！さあ、こっちにいらっしやい。」

うわぁ！絶対これわざとだろ！！

おいやめろ、ルイズ。お客様の前だぞ！せっかく怪我も無く帰ってこれたのに、ここで怪我しちゃつまらんだろ？！

ジゼル！そこである事無い事言つなよ！一緒に泣いて同じ風呂に入ったのは事実だが、一緒に風呂に入ったかのような物言いは良くないぞ！

る、ルイズ！頼む！アルビオンに行く前に怪我だけは……いでええええええ！！！！

俺とルイズがぎゃあぎゃあと騒いでいる中、ジゼルは再度お礼を言い、部屋を出て行った。

最後に見た彼女の蒼い瞳は、とても優しげだった。

その夜。

俺は一人で剣の鍛錬を行っていた。

ルイズは夕方の一件からスネていて、俺と一緒に”魔法”探しを行うのは今夜は休むだろう。

空には大きな月が二つ。

左耳の奥での咆哮が遠く聞こえる。

「なあ、デルフ。」

「なんだい？相棒。」

「俺とルイズは多分、明日か明後日にはアルビオンへ行く事になると思うんだ。」

「へえ。旅行かい？」

「いや。さるお方の特殊任務って奴だ。」

「はっ、相棒も忙しいな！」

「はは、まったくだ。そこでな、ある人が死んじゃうんだ。」

「そうか。」

「その人が生きてれば未来は凄く変わる。きっと、良い方向にな。」

でも、俺は歴史を変えるべきじゃないとルイズに言われている。」

「ふむ。」

「なあ、デルフ。どう思う？」

「相棒、その人は助けられそうなのか？」

「わからない。」

「じゃあ、決まりだ！そういう時はな、”自分が思うようにやってみる”だ。歴史がどうこうとか、そもそも相棒には過ぎた話たる？」

「まあ、そうだな。」

「バカがいくら頭使っても所詮バカな事しかできやしねえんだ。気楽にいこうぜ、相棒。」

「おい、デルフ。それはあんまりじゃないか？」

「そうか？俺は賢い奴よりバカな奴の方が好きだぜ？」

「はは、デルフらしいな。」

俺は苦笑いをして、今度はルイズが手紙にしたためた”歴史”の扱  
いをデルフに説明する。

デルフはほう、とかなんだそりゃ？などと言いながら話を聞いてく  
れた。

「なあ、デルフ。”歴史の大きな流れ”ってなんだろうな？」

「さあな。少なくとも、相棒が今の力と知識があっても変えられな  
い事、なんじゃねえか？」

「変えられない事……？」

「”歴史の大きな流れ”を変えると相棒は消えちまうかもしれねえ  
んだろ？」

「ああ。」

「でも、相棒は今度はそのお嬢ちゃん以外には手を出すつもりは無  
いんだろ？」

「ああ。」

「だったら、考えられる事は二つだな。”歴史は結局変えられない  
”か、”相棒が変えられる程度の歴史は大きな流れではない”だ。」

「おお！……って、歴史は変えられないってのは……」

「相棒、人間一人の力つてのは、どんなに鍛えていてもしている  
もんだぜ。」

「……そうだな。俺は無力だ。」

「まったく、第二の人生なんだろ？くだらねえ事考えてないで、若  
者らしく楽しんだらどうなんだ？」

「いいなあ、その単純な考え方。」

「うっせえー！」

「ま、消える事を恐れて前と一緒にじゃあ意味ないのも事実だよな。」

「誰が消えるのよ？」

不意に後ろから声がした。

振り返ると月の光は綺麗なピンクブロンズを照らしていた。

「ル、ルイズ?! いつからそこに!?!」

「今さっきからよ。何? あんたまだ私になんか隠し事してるわけ?」

「は、はは……そんな事無いよなあ、デルフ?」



「ああ！相棒は隠し事なんてしねえ！」

「嘘おっしやい！サイト、左手見せなさいよ。」

「は？なんの事？はは、デルフ、俺のご主人は心配性だな。」

「いいから、見せなさい！！！」

ルイズは俺の左手を乱暴に取る。

そして、泣きそうな顔になって俺の顔を見た。

「気になって確認しに来てみれば、やっぱり……少し赤くなってる。あんだ、”ダブル”使ったでしょ！」

「いやあ……あの子、使わないと死んでたし？」

「バカ！！こんな事ならサイト一人に行かせるべきじゃなかったわ！！」

「でもさ！秘薬をいっぱいくれるって……」

「何が秘薬よ！傷を治す薬の為に命削ってどつするのよ！！あなたバカなんじゃないの？！」

「いや、その……」

「話して。」

「へ？」

「何があったか、詳しく話して。」

「いや、ルーガル―退治してきただけなんだって。」

「お願いよ。私に隠し事はしないで。私はサイトの事を信頼しているわ。でも、イヤなのよ。隠し事をされるのは。」

信頼されていないみたいじゃない。」

「ルイズ……」

「話しなさい。私はサイトのご主人様よ。」

「……つまんないぞ?」

「いいから!」

俺はぽつり、ぽつりと顛末をルイズに話した。

しかし、隠し事は無くならない。

”それ”を話して何も変わらないとは思えないほど、今の俺達  
の関係は微妙で俺の心も強くは無かった。

二つの月の下、俺の左耳の奥ではいまだ狼が悲しく咆哮をあげてい

た。

2 - 1 : なんてあんななのよ！

いつか、使い魔が口にしていた言葉がある。

超怖い。

ものすごく恐ろしいという意味だそうだ。

今私が見ている夢はまさに、そうなのだろう。

「ルイズ！ルイズ！どこに行ったの！まだお説教は終わっていません

んよー！」

幼い私は母様のお説教から屋敷をまるで泥棒のようにコソコソと逃げ回っていた。

遠くから聞こえる母様の声は、恐怖の象徴そのものだ。

超怖い。

植え込みに隠れていると、顔の見えない使用人達が私の噂をしながら傍に寄ってきた。

魔法が使えないダメな子。

お姉さま達と比べてなんとダメな子。

本当に難儀な子。

使用人の顔は見えない。

私に気が付いていないのか、そのまま噂は続く。

私は悔しくて、悲しくて、とつても惨めで、思わずその場から駆け出していた。

向かうは「秘密の場所」。

今はもう誰も足を運ばない、中庭の広い池と小さな小島、一艘のボートが私だけの安息の地だった。

わたしはそのボートに乗って、用意してある毛布を包まり、そして世界から耳をふさぐ。

それだけが、小さな私ができる唯一の劣等感への抵抗だった。

気が付くと、辺りは霧の世界となり池に浮かぶボートと小島に建てられた東屋以外は消えていた。

その霧の向こうから人影が近づいてくる。

年は十六歳位、マントを羽織りつばのある羽根突き帽子を被っていた。

私はその方が誰か知っている。

「泣いているのかい？ルイズ。」

「子爵さま、いらっしやったの？」

「ああ。君のお父上に婚約の件で呼ばれてね。」

「まあ。わたし、恥ずかしいわ。」

「ルイズ、僕の事が嫌いなのかい？」

「そんなこと！でも、私、まだ小さいし……よくわかりませんの。」

「はは、ルイズ。君はもう、立派なレディじゃないか。」

その言葉で気が付いた。

私の体は今の、十六歳の私となっていた。

「さあ、晩餐会が始まる。おいで、僕のルイズ。手を貸してあげよう。」



「子爵さま……」

頬が赤く染まるのがわかる。

胸は高鳴り、そして締め付けられるように苦しかった。

わたしは差し伸べられた憧れの子爵さまの左手を自身の左手で掴み、立ち上がるうとした。

小船が揺れる。

バランスを崩した私は子爵さまの胸に身を躍らせ、図らずも抱きしめられる体勢になってしまった。

ああ、なんて素敵、と思いながらうつつとりと握った左手を見る。

子爵さまの逞しい左手に、あのルーンが見えた。

ルーンの中央に交差するように描かれた抑制魔法の印は、真っ赤に染まっていた。

はっと目を明け、子爵さまの胸に添えていた右手を見ると、べつとりと血がついていた。

子爵さまはいつの間にかサイトが変わっていた。

「な、なによ!」

「さあ、ルイズ。おいで。」

「おいでじゃないわよ!どうしたのよ、その怪我!」

「気にするなよ。さ、踊ろっぜ!」

「バカ!印が真っ赤じゃない!」

「そついやそうだな?なんか音も聞こえないし、目も見えないし、そついや鼻も利かないぞ?おい、どこだ、ルイズ?」

「なんでいつもいつもそんな無茶するのよ!」

「なんでもいいだろ?どうしてそつ怒るんだよ。あ、まさか俺に惚れたとか?」

「そんな訳ないでしょ！使い魔が怪我したら心配するのは当たり前じゃない！」

「いやあ、まいったな！」

「違っつて言ってるでしょ！もう、子爵さまじゃなくて、なんであんなのよ！」

「でもごめんな、ルイズ。気持ちは嬉しいけどさ、俺、好きな人がいるんだ。だから君の恋には応えられない。」

いつか、使い魔が口に使っていた言葉を再び聞いた。

こうして私は不快な夢を見て、夜中に目が覚めてしまった。

月の位置からまだ日付は変わってなさそうだ。

まったく、変な夢をみちゃったわね、と思いつつ部屋を見渡すとサイトがいない。

あのボロ剣も無いから、恐らく外で鍛錬をしているのだろう。

ルーガル―退治から帰ってきたばかりだというのに、本当に元気よね。

まったく、主人の傍にあまりいない使い魔というのも考え物だわ、と思っていると、ふとサイトの寝床が目に入った。

藁を集めてシーツを敷き、最初にあげた毛布を畳んで置いてある。

はあ、そろそろコレどうにかしてあげないと。

犬や猫じゃあるまいし、さすがにずっとコレじゃあね。

そう考えながらわたしはサイトの寝床に腰掛けてみる。

……あら？なにこれ。

結構気持ちいいかも。

あ、藁の香りって案外いいものね。

そういえば、あいつ結構マメに日干ししてたっけ。

藁って結構ゴワゴワしてるかと思ってたけど、そうでもないのね。

ん？

この感触は……藁じゃないわね？ゴミでも混じっているのかしら？

うん、取ってあげましょ。

私はシーツをめくり、違和感があった辺りの藁をまさぐる。

すると、藁の中から折り畳んだ紙が出てきた。

これは……見覚えがある。

それはあのボロ剣を買った日、学院に帰った後サイトがこっそり厨房で燃やしていた紙の一部だった。

あの時のサイトってなんか様子がおかしかったのよね。

これ、何かしら？

……手紙？

……いいわよね、わたしはあいつのご主人様なんだし。

私は立ち上がり、窓から差し込む月明かりの元、丁寧に折り畳まれ

た紙を開いた。

やはり、破いた手紙の一部らしい。

差出人はわからない。多分、燃やしていた方に書いていたのだろう。

ごめんね、サイト。

そして、はるか未来でもずっと愛しているわ。

ズグン、と胸が痛んだ。

次に大きな罪悪感を感じて、慌てて手紙を置く。

私はこの時、根拠もなく理解した。

この手紙はサイトの前の主人からのものだ。

きっとそうだ。

そして私は……見てはいけない物を見てしまったのだろう。

慌てて手紙を元の場所に戻し、シーツを元通りにする。

それから大きく深呼吸し、サイトの事を考える。

あいつは私の使い魔だ。

フーケの時もギーシュの時も、私にその力と忠誠を見せてくれた。

そう、彼は使い魔だ。

メイジとしての人生のパートナーだ。

だけど、恋人じゃない。

わたしも何れ……どこかの貴族と結婚するだろう。

その後、あの使い魔はどうなるの？

一生を私に捧げさせ、女の子とその……愛し合つこともさせずに傍に置く？

身勝手だけど……イヤだ。

サイトが他の女の子にとられるのがイヤだ。

だけど、サイトは恋人じゃない。

私の使い魔だ。

私の唯一の理解者だ。

この胸の痛みはきっと、私の独占欲からくる痛みなんだろう。

多分、サイトが私なんかより、前の主人の方がいいと言い出す事をどこかで恐れているのだ。

そして前の主人と比べられる事が許せないのだ。

考えをまとめよう。

私にとってサイトって？

彼は私の使い魔。

彼は私を最も理解してくれる存在。

彼は恋人じゃない。

そう、あの手紙を見て動揺したのはきっと、使い魔を独占したいという独占欲ね。

なまじ人間を使い魔にしてる分、気を使う事も多くなって訳ね。



ペットの犬だって、お嫁さん貰って子犬を授かりたいって思う事があると思うもの。

そうね、私が結婚したらあいつのパートナーの事も考えてあげましよう。

何といつても、あいつは私の使い魔なんだから。

……あいつ、す、好きな人がいるって言ってたけど、誰かしら？前のご主人？

そうねえ……サイトから話をするなら、わたしも考えてあげなくはないわね。

だって、サイトは私の恋人じゃないもの。

恋位大目にみてあげなくちゃ。

もし前の主人に恋してるなら、たまに会う位は許してあげよう。

でも絶対に渡したくはないわ。

だって、そのまま前の主人の下に置いとくと、大怪我させられてしまうもの。

きつとあんな夢を見たからよ。

子爵さまがサイトにすりかわる夢なんて見るから、寝ぼけてちょっとだけ勘違いしたのよ。

それに多分、前の主人も使い魔として”愛している”んだわ。

そりゃ、あいつはとても強いし、気も結構利くし、すごい忠誠心だし、ダンスだって上手い。

よく考えてみれば中々役に立つ使い魔だもの、好意を向けててもおかしくはないものね。

それをきつと勘違いしてるのよ。

結構トロいもん、あいつ。

サイトはまだ召喚して数週間だから、私に言い出せない事位まだまだあるのだって当然よ。

でも、これからじっくり理解を深めていけば良いわ。

見てなさい、私はあいつの前の主人みたいに、死にそうになるような怪我は絶対にさせないんだから。

絶対に前の主人には負けないわ。

絶対に誰かに渡したくない。

サイトは私だけの使い魔なんだから！

この胸の痛みはきつと、そういう事なのね。

そう、サイトは私の恋人じゃないくて、私だけの使い魔なのよ、うん。

そう考えがまとまる頃には罪悪感は消えていた。

そもそも、サイトが子爵さまにすりかわる夢が悪いのよ！

夢の中でまであんなに血だらけになって、あの印もあんなに赤く……

赤く?!

そういえば、あいつが無傷で帰ってくるなんて初めてだったわ。

それに、ミス・エイムラントを命がけで守ったらしいし。

そんな状況で ” 無傷 ” で済むの？ サイトが？

わたしはイヤな予感に襲われる。

急いで外套を羽織り、サイトが居るであろう人気の無い中庭へ走る。

サイトは月明りの下、あのボロ剣と話をしていた。

私はゆっくりと近づぐ。

「ま、消える事を恐れて前と一緒にじゃあ意味ないのも事実だよな。」

消える？何が？前と一緒に？なんの話かしら。

私はその疑問はとりあえず脇に置き、サイトに話しかけた。

「何が消えるのよ？」

「ル、ルイズ？！いつからそこに！！」

「今さつきからよ。何？あんたまだ私になんか隠し事してるわけ？」

「は、はは……そんな事無いよなあ、デルフ？」

「ああ！相棒は隠し事なんてしねえ！」

ああ、どうして言い訳するにしても、そんないかにも怪しげな態度を取るのかしら？

やっぱりバカな子なのね。

私はサイトの手を取り、確かめる。

そして、ルーガル―退治に行かせた事を後悔した。

抑制の印が赤みを帯びている。

このバカ！と思ってサイトを見ると、たはは、と目を逸らしバツが悪そうに笑っていた。

あんたは……わかってるの？

コレが赤くなった時、あんたの左耳は二度と聞こえなくなるのよ？

次はどこ？

目？

それとも声？

もう片方の耳？

”ダブル”を使うたびに、それが永遠に失われて行くのよ？

なのに、どうしてそんなに簡単に使うのよ！あんたが説明したんでしょうが！

どうして私に内緒にしてるのよ！！

そう思って激情に駆られかけたが、あの手紙の一節が脳裏によぎる。

……ここで怒るのは簡単だ。

でもわたしは、こいつの事をまだまだ理解していない。

そう、こいつにもっと信頼され、何でも話せる関係にならないといけないのだ。

私はこの使い魔の主人だ。

必要なのは今よりもっと強い絆と信頼関係だ。

恋人のようにただ、心配するだけではダメなのだ。

「話して。」

「へ？」

「何があつたか、詳しく話して。」

「いや、ルーガル―退治してきただけなんだって。」

「お願いよ。私に隠し事はしないで。私はサイトの事を信頼しているわ。でも、イヤなのよ。隠し事をされるのは。信頼されていないみたいじゃない。」

「ルイズ……」

「話さない。私はサイトのご主人様よ。」

「……つまんないぞ?」

「いいから!」

そして、私はサイトの話聞いた。

それは、悲しい話だった。

私はその夜、命を削りながら力を振るうこの使い魔を、それ以上責めることはしなかった。



俺は朝から殺気立っていた。

異様な雰囲気俺を見て、トイレや食事に誘ってくるルイズの学友は近寄りなくなり

ルイズと取るわびしい朝食エサの後にコツソリ厨房でとる真の朝食の時、マルトー親父やシエスタも俺には声をかけ辛そうだった位だ。

授業を受ける為に教室に入った時も、俺の異常に張り詰めた雰囲気は一瞬教室は静まり返ってもいたな。

「ミ、ミス・ヴァリエール……」

「何？ミス・モンモランシー」

「あの、どうしてあなたの使い魔はあんなに殺気立ったり、怖い笑みをたまに浮かべたり、難しい顔をしたりしているの？」

「さあ？朝からこの調子なのよ。でも、うつとおしい”お誘い”をしてきてた知らない子達が近寄りなくなったから、そのままにしてあるの。」

「ミス……わたし、なんだかとっても怖いわ。」

「大丈夫よ、私が ”よし” と言うまで飛び掛ったり噛み付いたりしないわ。」

「おい！ゼロのルイズ！なんとかしろよ！」

「そうだぞ！大体、そいつ平民のくせに生意気なんだよ！」

「よし」

「ううー、わん！」

俺はルイズに悪態を付いた二人の男子生徒に飛びかかって行った。

男子生徒は悲鳴をあげて教室から逃げていく。

ギーシュのゴーレムを易々とバラバラにしたり潰したりする使い魔に、戦いを挑むほどこいつらもバカじゃない。

二人が教室の外まで逃げた所で俺は追跡を止め、ルイズの傍まで戻ってきた。

そして再び俺は思考に戻る。

「ねえ、ルイズ。あなたダーリンに何したの？」

「何もしてないわよ？キュルケ。」

「でも……すごく変よ？まるで猛犬みたい。」

「まあ、そうね。でも、昨日の夜までは普通だったのよ？」

「まさか、あなた……体を使ってダーリンを骨抜きにしたんでしょ？！？だからうぶなダーリンは自分以外の男が敵に見えてこんな犬のようになってしまったんだわ！」

「はしたない！そんな、体を使ってだなんて……そんな……不潔！不潔よ！！！」

「しししてないわよ！か、体を使うなんて！やめてよ！キュルケ！モンモランシー！」

「うそおっしやい。どうせあなたが誘ったんでしょう？ゼロのルイズ。いいえ、エロのルイズね。」

下級生にダーリンを盗られかけたもんだから、焦って娼婦のように誘ったんだわ。ううん、知らないけどきつとそうよ。」

「だ、だれがエロのルイズよ！それはあなたでしょーが！って、なんであなたがミス・エイムラントの事知ってるのよ！」

「くうん？」

「うるさい！あなたのせいよこのバカ犬！！！」

「すみませんでした。」

調子に乗りすぎた。

思い切り拳骨で殴られてしまった。

キュルケが介抱と称して胸をこすりつけて来る。

ああ、なんて心地よい感じよ……ごめん、ルイズ。頼むから教室でレッグロックはやめてくれ。

ほら、みんなの恐怖の対象が俺からお前になってるぞ？

あ！てめえ！ルイズのパンツ見てやがったな！まで！こら！殴らせる！

そんな感じでバカをやっていると、教師のミスタ・ギトーが教室に入ってきた。

相変わらずイヤミな印象だ。

しかし、俺は知っている。

彼は後年、なんと同じ教師のミス・シュヴルーズと結婚するのだ！

……まあ、それだけの話なんだけどな。

意外な事だけど、それだけだなんて感想を持つ事件があるだろ？

そんな感じだったよ、当時も。

俺のくだらない記憶遊びを余所に、ミスタ・ギトーは授業を開始していた。

授業と言つよりも風系統自慢だけだ。

そんな彼の授業より、俺はもう一度気合を入れなおし、思考に戻る。

朝から考えているのはアルビオンでの事だ。

恐らく、今日か明日には出発する事になるだろう。

成り行きに任せる事に決めてはいたけど、ウエールズの事はやはり気掛かりだった。

一晩考えて俺はデルフの言つとおり、この件に関してはやりたいようにする事にした。

とは言つても、いまから出発しても王党派の全滅は免れない。

死をもって名誉を守るウエールズが、生きてあそこから逃げる事を良しとするとも思えない。

あの時、俺もルイズも一度は説得した。

それでも彼は死を選んだ。

立場的に、無理やりさらつて来る事も無理だ。

下手したらルイズに罣が及ぶ。

なら、どうするか？

ああ！くそ！くそ！くそ！

超腹立つ。

なんで俺、こんな事考え付いちゃったんだろ。

くそ、すっげえムカっ腹が立つ。

「火傷じゃ済みませんわよ？」

「かまわん、本気できたまえ。そのツエルプストー家の炎のような赤毛が飾りでないのならば。」

思考の外ではギトーがキュルケを挑発している。

たしかこの後、キュルケは風の魔法で吹っ飛ばされるんだっけ。

くそ、こんな気分の悪い時に胸糞わるいもんみせんよ。

……いい機会だからちよつと実験するか。

キュルケがデカイ火球を作っている間、おれは ” ダブル ” を一瞬だけ発動させる。

何も行動しないよう動かなければ反動はない。

ただ、これでルーンの魔力補給の経路がしばらく外にも開いたはずだ。

他の生徒と同じように机の下に避難していたルイズが、それを見て目を開いていた。

俺は通常の輝きに戻ったルーンを見せ、同じように四つ這いになりながら心配ないと目配せし、キュルケとギトーの間にさりげなく移動する。

やがて、キュルケが火球をギトーに発射した。

ギトーは嫌味つたらしく、烈風を起こして火球をかき消し、そのままキュルケに風を叩き付ける。

俺はその目に見えない風の通り道をキュルケの火球が消えた位置と勘で把握し、左手をそれに突っ込んだ。

そして風はただ強く、キュルケを凪いだけだった。



吹き飛ばしてはいない。

よし、うまく行ったと俺はほくそえむ。

俺が試したのは、ルーンによる魔力の減衰……つまり、経路を剥き出しにした左手でギトーの風を触り、威力の減衰と魔力の補給を行ったのだ。

結果キュルケを吹き飛ばす程の風を、強風程度まで威力を落とす事ができた。

デルフが覚醒すれば全て吸収できるだろうが、これでも無いよりはいい。

多分、今のデルフよりかは魔法を減衰できるはずだ。

あとは風の刃の竜巻や、炎獄の壁や、凄じ速さですっ飛んでくる氷の槍にこの左手を突き出す勇氣と根性だけだ。

……痛いのはやだなあ。

きよとんとするキュルケと、普段気に入らない生徒に恥をかかせ損なったギトーを放ってルイズの元に移動し、俺は思考に戻る。

そして、再び殺氣立つ。

くそ！

なんて考え直してもコレしか浮かばない。

いや、他に方法が……

でもなあ……

本当にあいつに頼るしかないのか？

くそ！デルフに言われたとおり、やりたいようにやりたい！！

会った瞬間、てめえ、レコン・キスタのスパイだろうが！って言いながら、”ダブル”使って五つ位にバラバラに分解してやりた  
い。

そしてルイズにキャーサイトステキーって抱きつかれ、キスしても  
らいたい！

いくらウェールズを助ける為だからって、なんでこんな事考え付い  
てしまうんだよ、俺のバカ！

そう、俺の考え付いた事は、ワルドの協力を得ることだった。

超腹立つ。

2・2…おひさしぶりね

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおなああああああ  
ありがたいiiiiiiiiiiiii!」

とうとうこの時が来た。

ギトーの授業の途中で面白カツラを被ったコルベール先生が乱入してきて、王女さまをお迎えする為に

俺達は正門前の校庭に整列させられ、儀仗隊のように杖をかがげ栄誉礼をする。

うん、なかなか様になってるもんだ。

腐ってても貴族の子弟だよな、なかなかかつこいい。

俺は手を振り礼に答える懐かしい顔を見やる。

そこには、まだ女王でもない、どこかあどけないお姫様がいた。

そしてその側にはワルドが控えている。

ちくしょう、やっぱいい男だよな。

ああ、あいつに頼るなんて考えただけで憂鬱だ。

側にいるルイズを見ると、ぼう、と頬を染めワルドに見とれていた。

……俺が必死こいて彼女の気を引いた日々は、それほど効果はなかったらしい。

ああ、へこむ。へこむね、こりゃ。

もうすこしワルドに見とれなくなる位には、俺を見てくれると思っただけだなあ……

おい、キュルケもダーリンダーリンと言ったその口をぽかんと開けて、あいつに見とれるなよ。

タバサ、俺を指差して三日天下だなんて、わざわざ指摘しないでくれないか？

ガンダくん、涙が出てしまうだろ？

はあ、やっぱりワールドを利用するのやめようかなあ。

でも、ウェールズなんかしたいしなあ……

涙目でへこむ俺を余所に、ルイズはワールドの姿を追い続けていた。

そんなルイズの心ここにあらずといった様子は部屋に帰ってからも変わらず、俺は憂鬱な気分のまま

ルイズから紙とペンを借りて一通の手紙をコツソリ書いた。

ルイズはそんな俺のあからさまに怪しい様子には気が付かない。

何をしてもし上の空で、服を着替えさせるのも一苦労だった。

よほどワールドに憧れを持っていたんだな、と再確認して俺は湧き上がる殺意を押さえながら、手紙を念入りに封をした。

それから急いで厨房に向かい、お湯やカップを借りてきてお茶の用意をする。

お茶の葉とお菓子はルイズがクローゼットの奥に隠してある奴を使えば問題は無いだろう。

一応最高爵位である公爵令嬢の隠し財産だ。

味は学院においてある物よりもいいはずだ。

今は絶対に俺の口には入らないけどな。

さて、あとは王女様を待つだけだ。

……しかし、暇だ。

ルイズがまったく相手にしてくれない。

完全に自分の世界に引きこもってしまっている。

そつだな、どうせ今は何やってもルイズは上の空だし、旅の準備で  
もしとくか。

俺はデルフを鞘から抜いて立てかけ、話し相手になってもらいながら  
荷物をもとめはじめた。

「なあ、相棒。嬢ちゃんは一体全体どうしたんだ？」

「ああ。どうやら王女さまの側にいた色男にやられちゃったような  
んだ。」

「そうか。嬢ちゃんもつれないな、相棒があんなに尽くしていたっ

てのじ。」

「だよなあ。あ、デルフ。 ”もし来客があつたら” 黙っててくれよ?」

「わかつてるよ、相棒。しかし、なんだな。内緒話もいまなら堂々とできる勢いだな。」

「だよな。……なあ、デルフ。おれ、そんなにブ男にみえるかなあ?」

「ま、色男じゃねえわな。」

「そうか。トホホ……」

「泣くなよ相棒。俺はお前が最高の男だつてわかつてるぜ?」

「ありがとよ、デルフ。今度かわいい短剣でも紹介してやるよ。」

「そうやさぐれるなよ。相棒には俺がいるじゃねえか。」



「ああ、頼りにしてるよ。はは、そうだよな。俺には剣がお似合いなんだよな。いいねえ、女でなく剣に生きるってのも。モテそうだし。」

「いけねえ、なんか積み重ねたものが壊れちまってる。こりゃ、ダメだ。……と、相棒。」 お客さん ” のようだぜ? 」

デルフのその言葉に、俺は気を取り直す。

しばらくするとコンコン、コンコンコンと遠慮がちなノックが聞こえる。

始めに二回、次に素早く三回。

ルイズはそこで初めて我に帰った。

俺はゆっくりドアをあけ、真っ黒なフードを被った女の子を中に招き入れた。

女の子はディテクト・マジックを唱え、フードを脱ぐ。

「あなたは……」

「お久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ。」

トリステイン王国王女、アンリエッタ。

この女の子の名前だ。

ああ、懐かしい。

間近で見たせいか、昔の事を思い出す。

彼女は俺よりも20年近く早く逝ったんだ。

政争に明け暮れた生涯だったと思う。

息子が後を継いだ直後……？に心労で倒れて。

そしてそのまま眠るように。

それから……怒り狂った息子が貴族に大粛清を行いかけて。

彼女の、アンリエッタの遺志は違つと諫めても中々納得してくれなくて。

最後には「瀑布の恐王」とか言われるようになってしまったっけ。

ううむ。

何でだろ？すこし、思い出しにくいな。

はは、こっちに来る時結構耄碌してたもんな。

でも、本当に懐かしい。

「ルイズ……ルイズ！懐かしいわたくしのお友達！」

「姫殿下、いけません！このような下賤な場所に……」

「やめて！ルイズ、ルイズ・フランソワーズ……私たち、お友達でしよう？ここには私とあなたの二人きり。」

「なのに貴女にまでそんな風に言われたら、わたくし、死んでしま  
うわ！」

「ま、俺とデルフもいるんだけどな。」

しばらくは好きに話してもらおう。

あ、お茶を入れとくか。

「ルイズ様、姫殿下に座ってもらってはいかがでしょうか？それと、クローゼットの奥に隠してあるお茶をお出ししたいのですが。」

「ちょ、あなたなんでそれを知ってるのよ！……あ！申し訳ありません、姫殿下の御前で。」

「もう、やめて！ルイズ、本当にわたくし泣いてしまいそう！」

「ルイズ様、積もる話はゆっくりとされては。姫殿下もこのような機会はそうそうには取れはしないかと。」

それを立ち話で済ますのは不忠の誹りを受けましょう。姫殿下、こちらへ。」

俺はアンリエッタを椅子へとエスコートする。

ルイズは普段の俺からは想像もつかない物腰に目を丸くしていた。

……そんなに驚くなよ、お前が仕込んだんだぞ？

ワールドに見蕩れている時より面白顔にならないでくれよう、へこむじゃないか。

「ありがとう。」

「今、お茶を入れます。ルイズ様秘蔵の菓子もお出しいたしますの  
で、ごゆっくりご歓談下さいませ。」

そうアンリエッタに伝えると、俺はニツコリと上品に笑った。

それからルイズをエスコートし、下座に座らせる。

ルイズはあ、ありがとう？と答えると、俺を目で追って陸に揚げられた川魚のように、口をパクパクとさせている。

ははは、ルイズ、それ初めて見るな。面白いぞ。

俺はルイズのクローゼットの奥から薄く、装飾が施された金属の箱を出して、中に入ったお茶とルイズお気に入り茶菓子の用意したお茶を入れ、二人に供する頃にはルイズも立ち直り昔話に花を咲かせていた。

話題の中にカリイ様直伝とか破壊とか関節とか出てきていたが、”今”は部外者である俺が詮索しない方がいいだろう。

むしろ耳を塞ぎたい。

暫く話し込んだ所で、ルイズが嬉しそうに切り出した。

「でも、本当に感激です。姫さまがそんな昔のことを覚えて下さっていたなんて……」

「ルイズ……忘れる筈がないじゃない。あの頃は、毎日が楽しくて、悩みなんて何一つなくて……」

「姫さま？」

「貴女がうらやましい。自由って、素敵ね。……わたくし、結婚するのよ。」

「……おめでとございます。」

アンリエッタの声色から彼女の心を感じとったのか、ルイズの声も沈んだ。

俺はすっかり冷めたお茶のおかわりを用意して、助け舟を出す。

「あら、ありがとう。ルイズ、あなたの恋人は本当に気が利くのね。」

「え?!ここ、恋人?!この生き物が?!やいや、やめてくださいませ!」

「殿下、私はそのような大それた者ではございません。ルイズ様の使い魔でございます。」

「そ、そうです!恋人だなんて冗談じゃないわ!」

「使い魔？人にしか見えませんが……」

「人です。」

「人でございます。」

「……そうよね。はあ、ルイズ、あなたは昔から変わっている所がありましたね、相変わらずのようね。」

「好きで使い魔にしたのではありませんわ。」

「私は好きで使い魔になりましたが、ね。」

俺がそう、話にオチを付けてニヤリとすると、アンリエッタは本当に可笑しそうに笑った。

ルイズはそんな俺のセリフに真っ赤になり、なななななと壊れたガーゴイルのようにわななしていた。



相手を選ぶが、こういった場ではたまに無礼に接する方がウケはいい。

ふん、さっき無視しまくってワルドに見蕩れてたお返しだ！

ひとしきり笑ったアンリエッタはふう、と一息ついてから意を決したようにルイズを見る。

どうやら本題に入るらしい。

「ルイズ、今日は楽しかったわ。本当は貴女に相談したいことがあったのだけど、こんな楽しい時を過ごす貴女には話すべきじゃないわね。」

「姫さま？おっしゃってください。あんなに明るく笑った後で、そのような表情をされるとは、なにかとんでもないお悩みなのでしょう？」

「いいえ、やはりこれは貴女に話すべき事じゃありませんでしたわ。」

「姫さま！昔はなんでも話し合った仲ではありませんか！私の事をお友達と呼んでくださったのも姫さまです。」

そのお友だちに悩みをはなせないのですか？」

「ああ！ルイズ・フランソワーズ！貴女はわたくしをお友達と呼んでくれるのね！嬉しいわ。」

「さあ、姫さま。私にそのお悩みを話してくださいませ。」

うーん、回りくどい。

この時のアンリエッタは天然なのか、腹黒いのか、後が無いのかは今でもわからないけど

友達を死地に送り出すんだからもっとこう、ズバっと腹を割って言えない物かな。

政争に明け暮れたアンリエッタにいつも守られ、心の平安だけは無くさなかった俺が

こういうやり取りを非難する資格はないし責める気もないけどさ。

貴族って本当に面倒なんだよなあ。

気心知れてても建前と本音を分けなきゃいけない。

ま、ともあれここからがアンリエッタの ”本音” だ。

しかし、予想外の事が起きた。

「いいえ。貴女を私の醜い業に巻き込むことになるわ。命もきつと落としてしまうでしょう。これだけは言えません。」

まて！

まてまてまて！！

ちがう、展開が違うぞ！！

俺は焦る。

なぜだ?!なぜアンリエッタはルイズに手紙の話をしない?!

「でも！姫さま！！」

「ルイズ、許して。私がどうかしていたのです。なんだから、とつても幸せそうな貴女を見て己の醜さ、愚かさに気が付いたの。

わたしの為に、トリステインの為に、こんなわたくしをお友達と言ってくれた貴女を、死地に追いやる事はできません。」

「姫さま……」

うわぁ！

ルイズにお願いしてた時のアンリエッタは腹黒や天然じゃなくて、後が無くて切羽詰まった末の行動だったんだ！

俺がお茶だしたりリラックスさせたりして余裕を与えたものだから、落ち着いた思考ができたってことだ！

悔ってた！

アンリエッタは俺が考えてるよりずっと思慮深かった！

やばいやばいやばい！

歴史が結構変わるか?!

そ、そうだ!

おれはコッソリと抜き身で立てかけたままのデルフの元へ近寄る。

(デルフ!デルフ

!緊急事態だ!)

「しかし!姫さま!私は姫さまの臣下でもあるのです!」

(なんでえ、相棒。

話とちげえじゃねえか。)

「いいえ、ルイズ。あなたは臣下である前にわたくしのお友達よ。」

(ああ!だから緊

急事態!いいか、ごによごによ……)

「そんな!」

(わ、わかった!

だけどよあ、多少の事は目をつぶれよ?)

「ルイズ。わたくしのお友達……貴女だけには幸せになって欲しい……」

(たのんだぞ!俺

がやっても信じてくれないだろうから、お前だけが頼りだ！)

「姫さま……」

『それで良いのか？あわれな人の姫よ。この者らはそなたの苦悩を掃う運命の者ぞ。』

「だれ?!」

「ボロ剣！黙ってなさい！姫さまに失礼よ！」

「ボロ剣？これは……インテリジェンスソード？」

『左様。我が名はデルフリンガー。魔を断ち、未来を紡ぐ剣也』

「まあ……」

「姫さま！申し訳ございません！すぐこのボロ剣を溶かして罰を…

…

「いいのよ、ルイズ。デルフリンガーと申しましたね？先程言った運命とはなんですか？」

よ、よし！

デルフに今日起こる事のあらましを話しておいて良かった！

あとはデルフ次第だ！

頼むぞデルフ！

『我が力は魔を払い予知をする事。あわれな姫よ。”手紙”を取り戻して欲しいのだろうか？』

「！……なぜそれを。」

『我が力は予知。未来を紡ぐ力となる。滅び行く白の国？の皇子の手紙、この者ら以外には託せはしまい。』

「手紙？」

「……すべて、わかるのですか？」

『いや、わかるのはその……いや！うむ、分かるぞ。調子がよければな。』

(でるぶつづつ！たのむぜ？マジたのむぜ？)

「では……道を、この哀れな女に道を示して下さいませ。」

そいとうと、アンリエッタはデルフに向かって跪いた。

ルイズがやめたと悲鳴を上げ、アンリエッタはそれを制する。

うわぁ……俺やりすぎちゃった？

『では……我が運命を司る者、あいば……その男に聞くが良い。我が力を授けておる。我は……再び眠る。』



ぎゃあ！俺に丸投げしやがった！

あとで覚えてろよ、デルフ！

アンリエッタは俺の顔を見ると、どうか、と目の前で跪いた。

ルイズはそれを見て、静かに怒髪天を付く勢いで怒っている。

や、やややばい。とりあえず、落ち着こうな？ルイズ！アンリエッタ！

で、で、で、どうしようもない。さっさと話さない！

「どうか、道を……」

「と、とりあえず落ち着いて！座ろう！な？！座ろう！ほら、お茶も！」

「サイト……」

「どうか、道を……」

俺に紳士を気取る余裕はすでになかった。

しどろもどろになりながらも二人を座らせ、ゆっくりと説明（作り話）をはじめた。

「えっとだな、デルフの能力には”予知”ってのがあるよっなんだ。」

「まあ。」

「聞いてないわよ……！」

「お、おれも今知ったんだよ！で、今急にデルフから情報が流れてきてな？」

「胡散くさいわねえ。」

「それで……その内容とは？」

「ルイズが姫さまに手紙を渡す映像が見えました。」

「なんと！」

「あと、”アルビオンのウェールズ皇太子” にルイズが手紙を受け取る映像も。」

「……」

「姫さま？」

「ルイズ、今から話す事は決して誰にも話してもいけませんよ。」

はああああ。

ヤバかった。

な、なんとか凌いだぞ！

アンリエッタは事の次第をルイズに説明している。

要約すると、内戦中のアルビオンに行つて、ウェールズ皇太子から私の手紙を取り返して来て！つて内容。

ルイズはなんか盛り上がってるし、アンリエッタも忠誠よ、これぞ忠誠よ！と感極まってる。

おれは……ああ、いかん。ワルドの事考えると頭痛い。

それになんかデルフに余計な設定増やしちゃったな……

「では、姫さま。アルビオンに赴き、ウェールズ皇太子にその手紙を取り戻してくればよいのですね？」

「ええ。くれぐれも気をつけてね。」

「一命に変えましても。早速明日には出立したいと思います。」

「姫さま。よろしいですか？」

「何？頼もしい使い魔さん。」

「その、俺とこの剣の事は内密にお願いします。誰に悪用されるかわからないので……」

「わかりました。使い魔さん、どうかわたしの友人を守ってくださいね。」

「は。」

俺はそう言って跪く。

これでとりあえず、臨時に誤魔化した余計な嘘が広まる事は……多分無いと思う。

アンリエッタはそんな俺に左手を差し出して来た。

俺は迷う。

ここで臣下の礼を取って良いのか？

ルイズが俺を睨みつけながら、姫さま！いけませんとか言ってる。嗜めている。

なんだよう、ルイズ。

お前ワールドにあんなに見蕩れてた癖に、俺は姫さまの手にキスするのもダメなのかよう……

ふん、みてる。ここは大人の余裕でカツコつけてやる。

ま、大人つつつても八十四歳のおじいちゃんだけだな。

「殿下。無礼をお許してください。」

「使い魔さん？」

「私のこの身と心、忠誠、そして剣はすべて我が主、ルイズ・フランソワズ様に既に捧げられています。」

その主の目の前で、殿下に忠誠を誓う事はできません。謹んで殿下のお慈悲を辞退いたします。」

「このバカ犬！！姫さま！申し訳ありません！使い魔の不始末は私の不始末です！」

なんだよ……どつちに転んでも怒るのかよ……お前難しいな。

アンリエッタは予想外の事にきよとんとしていたが、それなら仕方ないですわねと微笑んだ。

はあ、上手く収まった……と思っていると、今度は決闘だああ！と叫びながらギーシュが部屋に乱入してくる。

アンリエッタとルイズが思わずきゃ、と短い悲鳴を上げた。

いい加減、予定外な出来事やルイズが思っていたより俺に靡いてくれている事実にはイラ付いていた俺は

格好のウサ晴らしの相手の出現により、嬉々とルーンを発動させて一瞬でギーシュをボロ雑巾のようにしてやった。

それに俺はまだ、二度目も腕をへし折られた恨みは忘れていない。

俺の気が済んだ所でギーシュの立ち聞きを咎め、彼は任務への参加を懇願し、アンリエッタもそれを了承する。

最後に彼女はルイズにペンと紙を借りてウェールズ皇太子へ手紙を書き

あ那时的ように少し迷いながら最後に一文を書き加えて手紙に封をした。

俺はその様子を見て、ウェールズをなんとか生かして彼女に会わせてやりたいと考えていた。

こうして、俺達のアルビオン行きが再び決定した。



2・3…では諸君！出撃だ！

十歳の時、母が死んだ。

厳しい父親とは対照的に、とても優しい母だった。

熱心ななブリミル教徒で、トリスティン王立魔法研究所で聖地について研究をしていた。

ある夜、母は門と鍵を見つけたかもしれない、と書斎で興奮していた。

当時父は遠征に出ており、私はその留守に普段甘えられない母の側に居る為に、書斎にまで毛布を持ち込んで寝ていた。

「あ、ごめんなさい、ジャン。起こしてしまったわね?」

「いいえ、母上。そろそろ、母上も寝ては如何ですか?もう三日もこの部屋で朝を迎えるようでは、お体も悪くしますよ。」

「ふふ、ありがとう、ジャン。そうね、折角だからお茶にしましよ  
うか。」

「しかし、父上の言い付けでは……」

「いいのよ、お父様は今はいないのだし。ジャンも連日の魔法の訓練が忙しくてお茶も楽しむ暇がないでしょう?」

「……では、お言葉に甘えまして。」

「まあ、ジャンったら。もっと母と居るときは子供らしくしなさい  
な。」

母はそう言って微笑むと、メイドを呼びお茶と菓子の用意を命じていた。

菓子は私が大好きな焼き菓子で、先日父から女々しいからと禁じられていたのでとても嬉しかった覚えがある。

わたしは母にそんな事で喜んで、と思われないよう努めて無表情を装ったが、きつとこの時はそれを見抜かれていただろう。

「母上、先程おっしゃってた門と鍵とは一体なんなのですか？」

「そうねえ。ブリミル教の聖地の事をエルフ達は門、と呼んでいてね。最近、エルフの書物が手に入ったから調べていたのよ。」

「すごい！それがわかったの？、……ですか？」

「ええ、大発見ね。もしかしたら過去に旅行して、イーヴァルディの勇者やブリミル様に会えるかもしれないわよ？」

母は微笑んでそう答える。

私はわが事のように興奮して母を褒めた。

そして、その日は久々にベッドで母と一緒に寝た。

優しく聡明な母。

私はメイジとしての腕を磨くよりも、母のように聡明になりたいと思っていた。

次の日、興奮冷めやらぬわたしはメイドや使用人達に自慢して回る。

母が、聖地の秘密を解いたと。

母が、大発見をしたのだと。

そしてその夜、母は殺された。

奇妙な毒を盛られたのか、目や耳や口から大量に血を流していた。

書齋で倒れている所を発見した私が抱きかかえた時には、まだ息があつた。

しゃ、しゃん、ひえいひ（聖地）を……と呂律も回らずに言いかけて、母は十歳の私の腕の中で事切れた。

書齋は荒らされ、後でわかったがエルフの書物が無くなっていたらしい。

誰がやったのかは今でもわからない。

他の研究者の嫉妬で雇われた暗殺者だとか、門の秘密を守る為にエルフに殺されたのだとか、色々と言われていた。

ただ、幼いながら私は理解した。

母が殺された原因。

私があちこちで触れ回ったからだ。

泣いた。

後悔し、誰よりも自分を憎んだ。

そして自分を徹底的に痛めつけた。

不思議と、この日を境に私の魔力は一気に向上した。

母の死に悲しみながらも、それには父上は喜んでくれた。

傍目には「母の死を乗り越えて才能を開花させる将来有望な少年」と映っていただろう。

しかし、実際は私は自身に罰を与えていただけだった。

父の日頃の訓練でさえ、私には生ぬるい湯船に漬かるようなものだった。

15の時、皮肉にもそんな私の行いが隣領のヴァリエール公爵の目に留まり、三女のルイズと婚約を求められた。

もつとも、息子のいない公爵は私か私たちの子供を跡継ぎにしたいとの考えだったようだが。

父は喜んでくれた。

私も、幼いルイズには母がしてくれたように優しく接していた。

しかし、その行為は私には辛いものでもあった。

私は母の死を切欠に、誰かを想うことができなくなっていた。

人としての心がどこか、欠けているのを日を追うことに実感していく日々だった。

そして一年後、父がランスの戦いで戦死した。

わたしは泣かなかった。

悲しいとも思えなかった。

父の兵も殆ど失われたが、私はある目的の為に王宮の軍務に付くことにした。

母を殺したトリスティンの貴族を探し、復讐を行う為だ。

エルフに殺されたとの噂もあったが、対応の速さからどう考えても国内の貴族だ。

恐らく、子爵という低い地位でありながら大発見をした母に、つまらない嫉妬でも抱いて暗殺したのだろう。

先代陛下の厚意で魔法衛士隊に入ることになったが、そこで母を殺した貴族を知ることはいかにできなかった。

いつの間にかスクウェアメイジになり、階級も上がっていったが私は壊れたままだった。

そしてある日、レコン・キスタの情報を得た。

仕事上の資料で見た内容が、私に転機を告げる。

レコン・キスタはハルケギニアを支配し、聖地を取り戻す事を目的としていた。

聖地、という言葉に私はあの日の母の言葉を思い出す。

「ええ、大発見ね。もしかしたら過去に旅行して、イーヴァルデイの勇者やブリミル様に会えるかもしれないわよ？」

母を救えるかもしれない。

自分の過ちをなんとかできるかもしれない。

そう思い私はレコン・キスタの司令官と接触する。



驚いた事にレコン・キスタの指導者はあの”虚無”の使い手だった。虚無の力を使って聖地に至れば、あらゆる奇跡が起こせると言った。そして、無能な貴族を駆逐し、ハルケギニアにあらたな秩序を生み出すのだと話していた。

私は嬉々としてレコン・キスタに身を投じる。

復讐を行う為でもあった、それよりも母を救いたいという願いが大きかった。

そしてもう一つ、司令官が言うには虚無の使い手は他の魔法が一切使えないと言う。

その時、私の脳裏には一人の少女の姿が浮かんだ。

彼女も、一切の魔法が使えなかった。

もしかしたら……そう思い、事あるごとに彼女を調べた。

彼女は最近、奇妙な使い魔を召喚したらしい。

その使い魔のルーンを調べたとき、始祖ブリミルの使い魔にたどり着いた。

そして確信する。彼女もまた、虚無だ。

私は神に感謝をする。

虚無をこの手に入れ、聖地へ至り、そして母を……

明日、とうとう私は聖地へ至る道を進み始めるだろう。

うまくマザリーニ枢機卿に取り入る事ができた私は、先程王女から”手紙”の奪還しに行くルイズの護衛を命じられた。

私は彼女の婚約者だ。

道中彼女を籠絡し、アルビオンで式を挙げ、そのままレコン・キスタと合流すれば一気に聖地へ近づく事ができる。

私の申し出を断るような事があれば、そのまま彼女を殺して手紙を奪えばいい。

うまく行けば、ついでにウェールズ皇太子も暗殺できるかもしれない。

レコン・キスタの司令官に与えられた任務はアンリエッタの”手紙”の奪取だ。

彼女とウェールズ皇太子を殺した後、レコン・キスタにそのまま合流して母を殺したトリステイン貴族へ復讐してやる。

もしルイズも手に入るならば、そのままレコン・キスタを抜けて聖地を目指してもいい。

虚無の力で聖地に至ってわたしは過去へ行き、母を救えばいいのだ。

かわいいそうだが、彼女への愛は無い。

わたしは目的の為には何でもやると誓った。

この手を母を殺した貴族どもの血で染めて、染めて、染め上げてやる。

邪魔をするならたとえ女子供でも容赦はしない。

誰かを愛するという感情はあの事件が起きた時に死んだ。

母を救う為なら私はなんでもしよう。

そう決意していた所で部屋のドアがノックされ、学院のメイドが一通の手紙を私に届けてきた。

王女を含め随行する家臣共々今日はここ、魔法学院に逗留していた。

わたしは先程アンリエッタ姫殿下から、明日早朝にルイズ達とアルビオンへ同行するよう命じられている。

手紙には差出人は書かれていない。

ディテクト・マジックを唱えたが、手紙そのものには別に怪しい所はなかった。

手紙の封を開け、内容を確認する。

ウェールズが持つ手紙を求める哀れな裏切り者へ

レコン・キスタはガリアの傀儡。虚無の使い手も偽者。聖地を求めるならば、決してウェールズを殺すな。

虚無を知り未来を生きた者より

私はこの時、大きな衝撃を受けた。

ばれている！

ばかな!!

それに、この内容は……いや、ありえない!

もし私の正体がばれているならば、すでに捕縛されているはずだ。

少なくとも、手紙の回収任務になど王女直々に命令されるはずはない。

任務は何かの罠?

……いや、ありえない。

ではレコン・キスタ側から試されている?

……それならば ” ウェールズを殺すな ” はおかしい。

レコン・キスタの戦況から皇子の命など数日中には奪えるはずだ。

その場合、 ” 手紙を諦めろ ” とか、 ” トリステインを裏切るな ” としなければ意味は無い。

しかし、内容はあまりに……レコン・キスタはガリアの傀儡、虚無の使い手も偽者……だと?

それに決してウェールズを殺すなどという事は、私があわよくば彼を暗殺しようと企んでいる事まで知っている?

ばかな!暗殺など指示はされていない!私がそう、考えていただけ

だ！ありえない！！

私はつろたえる。

誰だ？

一体誰がこの手紙を？

得体の知れない恐怖が体を包む。

恐らくは差出人はトリステインの人間ではない。

レコン・キスタの人間でもない。

ウェールズの暗殺を恐れるアルビオン王党派でもないだろう。

” ウェールズが持つ手紙を求める哀れな裏切り者へ ” とある。

あの手紙を取り返す為にアルビオンへ向かうことを差出人は知っている。

つまり、アルビオンの人間ならばこの手紙でなく、例の手紙をアンリエッタに送って来れば済む話だ。

更に、その時に私の正体をトリステイン側に伝えてくるはず。

その場合、わたしは牢獄に居なくてはおかしい。

では誰だ？

ガリアの傀儡？

ガリアの人間か？それともゲルマニア？

いや、それも恐らく違う。

おそらく、あのメイドに聞いてもわかるまい。

この差出人は私がトリステインを裏切り、手紙を奪いレコン・キス  
タに渡す任務を帯びていると知っていて

その情報をトリステイン側には漏らしていない。

更に私にしか知りえない事を知り、その上でウェールズを殺すなど  
だけ要求してきている。

何者だ？

虚無を知り…… 未来を生きた者？

未来がわかる者が居ると言うのか？

いや、もしかしたら未来から来たのか？

しかしなぜ私にこのような手紙を？！

わからない！

一体何が起こっているんだ？！

只一つ、わかるのはこの手紙の差出人はウェールズを殺されたくない、という事だ。

それはレコン・キスタの人間ではない。

これだけは確実だろう。

しかし、ガリアの傀儡とは……それに司令官は虚無の偽者……

激しく混乱する私を置いて、夜はただ静かに更けて行った。



「お願いがあるんだが……」

朝もやの中、ギーシュは神妙に切り出した。

すこし俺を見てビクビクしている。

昨日、一瞬でボロボロにしてやった事が結構効いているらしい。

「なんだ？」

「僕の使い魔を連れて行きたいんだ。」

「いーぜ。」

「あ、ありがとうー！」

「ちょっと、サイト。勝手に決めないでよ。」

「どうせこいつは端から数に入れてないし、気にすんなよ。いざとなったら困にするんだからさ。」

「お、困……」

「それもそつね。で、どこに居るのよ？あんたの使い魔。」

「いーぜ。」

「いーぜ？どこにもいないじゃない。」

そんなルイズにギーシュがニヤつとして足を鳴らして合図すると、地面からデカイモグラが出てきてルイズを押し倒した。

のわあああと言いながら押し倒されたルイズは、スカートが捲れ、パンツを丸出しにしながらモグラとくんずほぐれつとされている。

「なあ、平民。美少女とモグラが絡む姿というのは中々倒錯的で官能的だね。」

「ああ、貴族。だがご主人のパンツを見たお前の罪は重いぞ。あとでミス・モンモランシに言いつけてやるから覚えてるよ?」

「はは、それは勘弁してくれないか?」

「貸し一つ、な。」

「いいだろう。」

押し倒されたルイズは、このおおお！と雄たけびを上げ必死にモグラの腕をとり肩の関節を取る。

……おい、ルイズ。いくらなんでもそんな動物にまで関節技をかけなくてもいいじゃないか。

ほら、ヴェルダンデが可哀想だろ？きゅーきゅーと苦しんでいるじゃないか。

ギーシュ、ごめんな。

俺が余計なもん教えたばかりにあいつ、結構近接格闘術に幅が出ちゃってるんだ。

まあ、sonだけでかいモグラの筋力ならすぐに技を ” 切れ ” するさ。

ほら、切れた。

……ギーシュ、泣くなよそれ位で。おれなんて日常茶飯事なんだぜ？

「まったく、なにすんのよ！サイト！見てないで助けなさいよ！！  
ギーシュ！あんたに似て女好きなんじゃない？その使い魔！」

「グズ、ヴェルダンデ、痛かったかい？」

「泣くなよ、ギーシュ。みっともないぞ？なあルイズ、その指輪が原因じゃないか？そいつに向かって突進していたようだし。」

「これ？姫さまに頂いた水のルビーに？」

「グズ、ああ、きつと、それだよ。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね。」

「はは、ルイズ、道中に盗られない様にしないとな。」

俺達がそんな感じで談笑し、出立の準備をしていると一人の貴族が現れた。

ワルドだ。

よし！ ”ダブル” を使っ……って落ち着け、俺。

俺達に挨拶をしてルイズを爽やかに抱きかかえるワルドは、俺の手紙が効いたのかすこし眠そうだった。

目の下にクマができています。

よほど悩んだのだろう。

うはは、せいぜい迷うがいい！

俺としてはウェールズをお前に殺されなきゃいいんだからな。

お前の正体も、企みも、レコン・キスタの黒幕も知っている第三者を仄めかしておけば、そう簡単にはウェールズには手を出しはしないだろう。

出来ればこいつの洞察力に頼ることなく、俺の力だけで何とかしたかったんだけどなあ……

他の案は土壇場勝負しか思いつかん。

そもそも、こいつの目的は手紙だ。

あの戦況では、ウェールズをあそこで暗殺する意味はない。

多分、ついでに殺したただけだったんだ。

俺がウェールズを説得するか、もしくはあの場に飛び込んだ時に彼が生きていれば一緒に脱出する事もできるはずだ。

その為には、ワールドがウェールズに手をかける事を躊躇させないといけない。

致命傷でなければいいんだ。

確実とはいえないけど、俺に思いつく策略はこれで限界だ。

できれば、こいつを今すぐにミンチにして……じゃない、こいつの裏切りを思いとどまらせ、ウェールズと一緒にアルビオンを脱出！

ルイズは俺に惚れてみんなハッピーめでたしめでたし、ってなればいいんだけど、ワルドをこっちに引き込むのは多分無理だ。

前に対峙した時、こいつは目的の為には手段を選ばないと言っていた。

事実、ルイズの心を利用してなびかないと見るや躊躇なく殺そうとした。

今回もそうだろう。

俺は……そんな奴を認めたくはない。

決して、これは嫉妬じゃない。

「彼らを紹介してくれたまえ。」

「えっと、ギーシュ・グラモンと……使い魔のサイトです。」

「君がルイズの使い魔かい？人だとは思わなかったな！僕の婚約者がお世話になっているよ！」

「そりゃ、どうも。ん？婚約者？と、すればあんたは俺の主人の夫になるんだ？」

俺はそう白々しく言うつとルイズを見る。

彼女の反応を見たい。

うれしそうに”そうよ！”と言われるのか、しどろもどろになるのか確かめたい！

俺、ここまで結構がんばってカツコつけてきたんだ、コレくらい確かめたいじゃないさ。

……ルイズ、赤くなって俯くなよ。

へこむじゃないか。



「まあ、そういう事だね。よろしく頼むよ！」

「んー、俺としては主人を他人に盗られるようでイヤかな？」

「さ、サイト！失礼でしょ！あんた、私の使い魔でしょうが！」

「はは、随分と使い魔に慕われているようだね、ルイズ。」

「ま、安心しなよご主人。気に入らなくはあるけど、だからってワルドさんにつっかかるような子供じゃないさ。」

「では、君に認めてもらえるよう努力をしよう。ルイズの為にね。」

「俺もご主人の為にせいぜい仲良くするさ。」

ルイズの先程からの態度に俺は少し拗ねていた。

くそっ、せめて名前じゃなくてご主人って呼んでやる。

ああ、考えると拗ねる八十四歳のお爺ちゃんって情けないな。

俺、なんでこんなに余裕ないんだろ？

ほっといてもアルビオンでルイズはワルドを拒絶するんだぞ？

どうしてこんなに焦っているんだ、俺？

ううむ、謎かも。

そういえば昔の事を思い出す回数は減ったよな。

知識は在るんだけど、沢山あるはずの思い出までが知識みたいな感触だ。

でも、ルイズへの想いは間違いないし……

”ダブル” みたいに何かあるんだろうか？

すこし注意しとこ。

とりあえず、前回のアルビオンへの道中は……俺、情けない男だったよなあ……

前と同じようにワルドを拒絶してもらうには、前回みたいに嫉妬しながらルイズに接する方がかえっていいのかもしれないな。

そう考え込んでいると、ワルドは言った。

「どうした？もしかして、アルビオンに行くのが怖くなったのかい？なあに、何も怖いことなんてあるものか！  
君はあの『土くれ』のフーケを捕まえたんだろ？その勇気があればなんだってできるさ！」

「ワルドさん、どうしてそれを？『土くれ』を捕まえたのは、三人の”貴族”ですよ。俺の手柄なんて公式には……」

「ふふ、平民の噂話を聞いたり、ルイズが召喚したという奇妙な使い魔の事に興味があつてね、調べたんだよ。」

「そうですか。その割には俺のこと”人間”だつて知らなかつたみたいですけど……それに、活躍したのはご主人ですよ。  
平民の俺が貴族様がケンカしてる所へ行くなんて普通は怖いもんですよ？」

「ならば、ここに残るかい？ルイズは私がしっかりと護衛するからね。」

「サイト！あんたも来るのよ！」

「と、言う訳ですからね。ご主人が行く所は例え火の中、水の中、空の上ってね。」

俺はそう言って肩を竦める。

ルイズはそんな俺の様子が当然気に入らないのだろう、怒りを露にして俺をにらみ付けてきている。

ちよつと怖い。

ワルドはそんな俺とルイズを余所に、自慢のグリフォンを呼んで跨った。

そしてルイズへ手を伸ばし

「おいで、ルイズ」

と爽やかに言った。

くそ、なんてイケメンなんだ。

やっぱ今すぐミンチにしてや……いかん！抑えろ、俺！

嫉妬のあまり我をわすれているんだ！

ここでこいつに手をあげても、俺が反逆罪で捕まるだけだ！

ルイズはもじもじとしていたが、ぐぬぬ、とワルドを見ていた俺をチラと見てグリフオンに乗った。

俺は精一杯虚勢を張る為、ルイズには肩を竦めて見せた。

ああ、情けな。

「では諸君！出撃だ！」

グリフオンが駆け出した。

なんだろうね？

どうしてイケメンって何やっても様になるんだろうな？

結果がわかってて、ほっといてもルイズは手に入るのに俺、あいつを目の前にするとどうしても自信が無くなる……

平賀才人八十四歳、嫉妬の炎に焼かれる。

ああ、本当に情けないったらねえな。

せめてこっちに来る時に全盛期の体だったらなあ……

遅しさなら負けないぞ！

全盛期なら！

……む、むなしい。

ガンダくん、涙がでちゃう。



## 2 - 4 : 勘違いしないで

疾駆するグリフォンは私の心とは裏腹に軽快だった。

ワールドと雑談をしていると、彼にに請われて砕けた物言いでおしゃべりをするようになった。

彼のグリフォンはとても速く、サイト達の馬を交換する為に二度ほど途中の駅で馬を交換した位だ。

私は後方のサイトを見る。

彼は馬に疲れてぐったりとするギーシュとは違い、しっかりとした調子で馬を操っている。



しかし、グリフォンの速度に付いて来るのはさすがに無理があるらしく、馬に無理をさせないように配慮をしているようだった。

私は視線が合わないよう前を向き、先程の事を考える。

サイトがはじめて見せる嫉妬。

私を名前でなく、ご主人と呼んでいた。

その様子はなんだかくすぐったくて、同時に異体の知れない罪悪感が少し、胸に疼いた。

わたしは……間違えていない。

サイトは使い魔だ。

わたしはそのご主人様。

ワルドは……婚約者。

そう、婚約者なのだ。

この素敵な憧れの人は私の……

そう考えるとすごく、うれしかった。

でも、なぜか、同時にサイトが気にかかる。

一昨日の夜、あいつについては考えをまとめたばかりなのに、まだ引っかかる。

憧れの人と共にいる喜びに震えるはずの胸は、なぜか沈んでいた。

私はそれを否定するように、ワルドに話しかけた。

「ちょっとペースが速くない？ギーシュがへばってしまっているわ。馬も辛そうよ？」

「ラ・ロシエールの港町まで止まらずに行きたいんだが……」

「無理よ。普通は馬で二日かかるのよ？」

「へばっているならば、置いて行けばいい。」

置いて行けばいい、と言われ私は少しムっとした。

「だめよ、仲間なんだし。それに使い魔を置いて行くなんで、そんな恥知らずな真似は私はできないわ。」

「やけにあの二人の肩を持つね。どちらかが君の恋人かい？」

「こ、恋人じゃない。」

「はは、よかった。婚約者に恋人が居ただなんて聞いたらショックで死んでしまうよ！」

「お、親が決めたことじゃない。」

「おや？ルイズ、僕の小さなルイズ！もしかして僕のこと嫌いになっちゃったのかい？」

「もう小さくないもん。」

「僕にとっては小さな女の子さ。」

「……嫌いなわけではない。」

「よかった！じゃあ、好きなんだね。」

それは本当だ。

だけど、胸は震えない。

ワルドは昔話を始める。

彼からは私の表情が見えないので、今のわたしの様子を気取られる事が無いのは幸いだ。

「私は家を出る時に決めたんだ。立派な貴族になって、君を迎えに行くってね。」

「嘘でしょう？あなたモテそうじゃない。私なんてあなたに相應しくないわ。」

「旅はいい機会だ。一緒にいればきっと昔のような懐かしい気持ちになるぞ。」

「まあ。私たちは重要な任務を帯びているのよ?」

ワルドはその言葉にまいったな、と笑った。

私はもう一度サイトを見る。

あいつはへばったギーシュにロープをくくりつけ、レビテーションで浮かばせて馬で引いていた。

なるほど、ああやっていれば馬を交換しながら走り続けられるわね

……

ギーシュはひゃっぽうなどと歓声を上げ、サイトは次は俺だからな、とがなっている。

……はあ、わたしがあんたのせいでこんな気分なのに随分お気楽なのね……

宿についたらちゃんと躑をしなきゃ。

ほんと、躑って大変。

私は暗澹となった気分を払おうと、前を向いた。

疾駆するグリフォンは私の心とは裏腹に軽快だった。

その日の夜、俺たちはラ・ロシエールの港町の入り口に到着した。

途中、ギーシュのレビテーションで浮いた俺を引っ張っていた時に

魔法が切れ、地面を引きずられて酷い目にあつた。

それを見てギーシュが大笑いし、ルイズからは冷めた目で、ワルドからはゴミを見るような目で見られた俺は、ギーシュと取っ組み合いをした。

俺はルーンを使わない。

ギーシュは魔法を使わない。

何度か道中ケンカしたお陰で、殴り合いをする時はそういう不文律のようなものが出来上がっていた。

そういつた事が何度かあり、その度にワルドからおいていくぞ！と言われ、ルイズからは汚い犬を見るような目で見られながらの到着だった。

「や、やっと着いたなギーシュ。」

「あ、ああ。あんな長時間グリフォンを駆れるなんて魔法衛士隊の連中は化け物だね。」

「まったくだ。おれ、あいつキライ。」

「ぶ。もしかして、きみ、やきもち焼いてる？」

「ああ、焼いてるよ。悪いかよ？」

「ぶぶぶ！ご主人様に叶わぬ恋をしたのかい？悪いことは言わないよ、身分の違う恋は不幸の元だぜ？君も哀れだな！」

「なあ、ギーシュ。俺たちはもっと拳で語る必要があると思うんだ。」

「受けてたとう。……これで何回目だっけ？」

「四度目じゃねえか？あ、服は破かないようにしろよ？これ一着しかねえんだから。」

「うむ。君もできれば顔面パンチを控えてくれたまえ。」

へばった俺たちが馬から降り、お互いに拳を握った時だ。



松明が馬へ向かって投げ込まれ、驚いた馬が前足を上げた。

「ギーシュ！奇襲だ！ワルキューレを出せ！崖の上、矢が飛んでくるぞ！馬は任せろ！」

「わ、わかった！」

ギーシュは急いでワルキューレを錬金する。

すでに何本か矢が飛んできていたが、幸い俺にもギーシュにも当たらない。

俺は馬を落ち着かせ、無数に飛んでくる矢をギーシュのワルキューレを矢よけにして凌いだ。

ワルドのグリフォンの方は……さすがだ。竜巻を起こして矢を弾いてる。

俺はデルフを抜き、ワルキューレの影から飛び出した。

崖の上から矢が飛んでくる。

誰かが悲鳴を上げた気がした。

俺はルーンを輝かせながらデルフで矢を払い、矢を避け、一気に崖の上まで駆け上がった。

浮き足立つ傭兵達が弓を捨て、急いで剣や槍を構えようとしている。

おれは手近な男にギーシュの時とは違い、一切の手加減も無しに顔面へ拳をたたき付けた。

ぶべ、と唸って男は昏倒する。

おれはデルフを地面に突き立て、柄尻に左手を添えてその場で傭兵達を睨む。

「怪我してもつまんねえぞ?」

「うるせえ! てめえ、矢を避けて崖を駆け上がるなんてバケもんか!  
!くそ!」

ふん、わるいがお前ら、俺の八つ当たりの相手をしてもら……  
そう言いかけた時、目の前で小型の竜巻が起こり男たちを崖下へ吹き飛ばしていった。

上を見ると、シルフィードがタバサとキュルケを背に乗せ、羽ばたいている。

やれやれ、役者がやっと揃ったなと呟いて俺は崖を降りた。

くそ、ちょっと暴れ足りない。

「おまたせ。」

「お待たせじゃないわよ！何しにきたの？」

「助けに来てあげたんじゃないの。朝方、あなた達が学院の外に出て行く所を窓から見えたのよ。」

「で、タバサに頼んでここまで来たってわけ。」

「あのねえ、キュルケ。これはお忍びなのよ？」

「知らないわよ、そんなこと。それに、勘違いしないで。あなたを助けに来たわけじゃないのよ？」

……ねえ、お髭が素敵よ？あなた、情熱はご存知？」

そう言っつてキュルケはワルドにしなだれる。

情熱、それは微熱、だろ。

キュルケ、本当に見境がないのな。ちょっと関心してしまう。

あ、ワルドに押し返されてやんの。

婚約者に誤解されたくないっつてね。あー、はいはい。

ルイズ、頼むからそんな顔しないでくれよう、なにさ、俺の時はミツチリとグラップルなお仕置きだったのに。

何？この差。

イケメンとバカ犬の差か？

それとも若い奴と八十四歳のおじいちゃんの差か？

くそう、世の中つてやつは時空を超えても不公平なんだな。

そう人知れずイジけていると、キュルケが今度は俺に近寄ってきた。

「ホントはね、ダーリンが心配だったからよ！」

「うそツケ。お前もイケメンがいいんだろ畜生……」

「何？焼いてるの？かわいい！焼きもちを焼くダーリンも素敵！」

「違うよ、全然ちがう。」

「ごめんね、あたしが冷たくしたものだから怒っているのね！」

「ああそうさ、どうせ俺は野良犬さ。イケメンが食い散らかしたもんを必死に拾ってるのがお似合いな哀れな犬さ。」

「許してちょうだい！ちょっと余所見をしたけれど、あなたが一番なのよ！」

俺はしゃがみこみ、地面にのノ字を書きながらルイズをチラと見る。

彼女は……ワルドに肩を抱かれていた。

なんか、本当に大丈夫か？

本当にアルビオンではワルドを拒絶してくれるのか？

俺、すっげえ不安になってきたよ。

そ、そうだ！

こんな時はルイズとの甘い日々を思い出して、彼女を信じる心を取りもとそう！

え、えーと……

初めて結ばれた時！

うへへ、これはもう、忘れようにも忘れられない、甘い思い出だぞ！

……いやだ。思い出したくもない。

俺、アレから立ち直るまでに結構時間かったもんなあ……

さすがにアレは……い、いかん！えっと、他の甘い思い出……・そう、新婚旅行！

楽しかったなあ、あちこち回ってさ！

ん？あれ？……えつと？

なんで毎晩俺は宿の部屋の前で正座してたんだっけ？

あれ？

あれれ？？

お、思い出せない。

なんで？

俺は混乱する。

「子爵、あいつらはただの物取りだと言っています。……どうした？平民。」

「あ？ああ、ちょっとな。頭でも打ったかな？ちょっと忘れっぽくなってる事に気が着いたんだ。」

「む？そんなに何度も君の顔を殴ったっけ？」

「いやあ、そうでもないぞ？ほら、お前顔殴るとムキになるから、控えてたたる？」

「うむ。ぼくも貴族だ。殴られた回数しか顔を殴ってないはずだぞ。」

「だよなあ？なんでだ？」

「ちょ、サイト！あんたどっか怪我したの？！飛んでくる弓矢に突っ込むようなバカするからっ！」

「いや、怪我はない。ただ、記憶が……うまく思い出せなくてな、混乱してるのだ。」

「そっ？まあ、怪我がないならいいけど……」

「ああ、心配してくれてありがとうな、ルイズ。」

俺はうーん、と腕組みをして唸る。



大まかな出来事についての記憶は……うん、大丈夫。

ルイズやみんなの記憶もある。

だけど……

なぜだ？所々抜けている。

忘れてしまったとかそついうんじゃなくて、こつ、虫食いのように抜けている。

なぜ？

歴史を変えてしまった分の記憶が無くなっている？

いや、それなら俺が『破壊の杖』でフーケのゴーレムを倒した記憶があるのはおかしい。

ううむ……

「ただの物取りなら捨て置こう。今日はラ・ロシエールに一泊して明日の朝一番の便でアルビオンに向かうとしようか。」

ところで……ルイズ、君の使い魔くんは本当に大丈夫なのかい？さつきから考え事をずつとしているようだが。」

「え、ええ。サイトはたまにああなるのよ。気にしないで行きましょ。」

「ほら、いくぞ平民。」

「ダーリン、いじけてないではやくう」

「あ、ああ。」

俺は心ここにあらずといった調子で返事をして、夢遊病者のようにのろのろと歩く。

まさか、脳は八十四歳のままでボケが始まったとかじゃないよな？

いや、さすがにそれは……

不安は宿に着いても無くならなかった。

『女神の杵』亭は貴族用の宿だけあり、豪華なつくりだった。

俺たちはその一階にある酒場でくつろいでいた。

ギーシュは一日中馬に乗ったり、俺と取っ組み合いをしていたもんだからぐったりとしている。

キュルケはワインを飲み、タバサは黙々と食事をしていた。

俺は84年間の記憶を丹念に思い出し、思い出せなかった事をまとめて何か共通点があるか考えていた。

そこへ棧橋からワールドとルイズが戻ってきて、明日は出航できない旨を皆に伝える。

続いてワールドが俺とギーシュ、キュルケとタバサ、ワールドとルイズを同室とする部屋割りを発表した所で、俺はある人物に話しかけられた。

「もし……」

「はい？」

「ヒラガ・サイト様ですね？」

「ええ、そう、ですけど……」

白いローブに白いフードを被り、顔は見えないがまだ若い女の声だった。

「その、少々お時間を頂けませんでしょうか？」

「えっと、どちら様？」

「私とは初対面ですね。実は、ある方から頼まれてサイト様へ内密の言伝がありました。」

「え、いや、ちょっといま立て込んでるから……」

「使い魔くん、我々は先に部屋に行っているよ。」

「だ、だめよワルド！私達まだ結婚してないし……」

「ルイズ、二人きりでしたい大事な話があるんだ。」

「ダーリン、先に部屋に行ってるわよ？ほら、タバサ、いきましょ  
う。」

「平民、あまり遅くならないようにな。」

各々がそう好き勝手に別れの言葉を口にする、皆部屋に引っ込んで行ってしまった。

くそう、ルイズとワルドの同室だけはどうしても阻止したかったのに……

だれだよ、こいつ。

初めて……会つよな？

こんな出来事は前回なかったし……

「「ちらへ。」

女はそう俺を宿の外へと誘った。

とりあえずついて行くと、少し歩いた所で彼女は俺に向き直る。

「この当たりでいいわね。」

「あなたは一体、俺になんの用……」

女はちらりとフードをめくる。

中に見えたのは、夢で逢った ” あの ” ルイズだった。

「！！る、るるるる……」

「静かに。」

「でも！！お、俺お前に会いつつたああああ！！」

驚く俺に不意打ちでルイズの張り手が飛んできた。

「こんのバカ！！あんなに ”ダブル” を使っなって言っ  
たのに、早速使うなんてどういうことよ！！」

「ひ？！！」

「あんだね、死にたいの？！このままじゃわたしと結婚する前に死  
んじゃうじゃない！！」

「うー、うー、うーめん！でも、あれは仕方ないんだよ！」

「何が仕方ないよ！じゃあ、代わりにあんたが死ぬのも仕方ないの？！」

「い、いや？そうじゃ、ないけど……」

「まったく、あんた、記憶に欠落している部分とか出てない？いや、出てるでしょ！」

「な、なんでそれを……」

「はあ……やっぱり、”新・世界扉” を使うんじゃないのかもね。」

「俺を過去に送った魔法って、もしかしてなんか問題でもあるのか？」

「術式そのものは問題ないわよ。むしろ上達してるわ。こうやって私も”イリユージョン” を送れてるでしょ？問題はあんたの精神の方。」



「どづいづことだ？」

「あんたは十七歳のサイトの肉体に宿った、八十四歳のサイトだつてわかるわね？」

「あ、ああ。」

「じゃあ、今のあんたはどっち？十七歳のサイト？八十四歳のサイト？」

「……八十四歳のサイト、だ。」

「じゃあ、十七歳のサイトの精神は？死んじゃった訳？」

「お、脅かすなよ！」

「そいよ……」

「どづいづことなんだよ？！」

「本当ならね、十七歳のサイトにあなたの精神を書き込んで、融合

するはずだったのよ。」

「それ、なんか危なそうだな。」

「他人同士なら危ないけど、同じ存在だしね。それに、あの召喚の瞬間まではあんたも十七歳のサイトもまったく同じ人生を歩んできてたでしょ？」

精神の融合による影響なんて殆どない筈だったのよ。」

「よくわからん……」

「つまり、きちんと融合出来ていれば記憶は完璧だし、あんたも精神や記憶に変調を来たす事はなかったってわけ。」

「へ？おれ、どこもおかしくねえぞ？」

「……あんたね、八十四歳のおじいちゃんが、ワルドごときにあんなみつともない嫉妬する？」

「うぐー！」

「最初はおんたの精神が若い肉体に影響を受けて、強い性欲や肉体

の活力によつてはしゃいでいると思つてたわ。

でも、この所のあんたを見ると、感情の動きが精神を凌駕しすぎて……まるで、何もかもが初体験のようだね。」

「お、俺そんなに落ち着きがないか？」

「ええ。まるで、”十七歳”のサイトのようにね。というか、十七歳のサイトそのものね。」

八十四歳のあんたは、若いサイトの精神に飲み込まれかけているわ。」

「うお?!………そのどろろが悪いんだ？」

「悪いわよ。八十四歳のあんたが完全に飲み込まれた時点で、十七歳の召喚されたばかりのサイトの記憶しか残らないわ。」

「……つまり？」

「ハルケギニアの知識のない、まっ白な状態で、十七歳のあなたがここに放り出されるわ。」

「……マジ？」

「ええ。今日までの記憶も、八十四歳の方のサイトに記憶されているみたいだし。日頃から未来の事を考えながら行動してたでしょ？ たぶん、そのせいでそっち側に記憶しているのね。」

「……………どうして飲み込まれるんだ？」

「はあ……………」ダブル”よ。」

「それが……………」

「一旦はちゃんと融合して、一つの精神に一つの記憶としてまとまって安定してたはずよ。」

「だけど、”ダブル”を使うことで、本来一つの肉体に同居しないはずのルーンがそれぞれの主となる精神を探し始めたのよ。」

「もともと、使い魔のルーンは一つの肉体・精神に一つだけでしょうっ？」

「結果、せっかく融合した精神をそれぞれのルーンが主を求めて、再び二つに分けようとしているようなね。」

「そして……………皮肉にも、二つのルーンは十七歳のサイトを主として取り合い、結果あんたの精神は徐々に十七歳のサイトに飲み込まれていくわ。」

「……………」

「力の源となる”心の震え”が、若いサイトの方が圧倒的に強いからよ。あんただって年増より若い子の方がいいでしょう？」

あんたは、自分が今まで持っていたルーンに裏切られたのよ。」

「ひでえ……」

「わかる？あんたの精神は、二つのルーンによって徐々に切り離され、若い十七歳のサイトの精神に飲み込まれていく。」

その後、若いサイトはハルケギニアの記憶を失った状態になって、二つのルーンの主となるわ。」

「ん？結局二つのルーンは一つの精神の物になるのか？」

「ええ、だってそれ以上精神を分け様がないじゃない。一つしかない物は二つにはならないわよ。二つも精神があったから起こる現象ね。」

「はあ……最悪なんだな。」

「だ・か・ら、使っなくなって言ってるんじゃない！心配しなくても、”ダブル”を使わなきゃ今からでもまだ間に合うわ。」

「それをこの前に一緒に教えてくれよう……」

「し、仕方ないでしょうが！時間がなかったんだから……前回もそうだったけど、月が重なる『スヴェル』の月夜が近づかないと時空を超えてあなたに連絡を取る事は難しいの。

これでも上達したのよ？このとおり、夢じゃなくてイリユージョんで話もできてるんだし。」

「……ま、何はともあれ逢えてうれしいよ。」

「……わたしもよ、サイト。」

「しかし、よく俺の状態がわかるよな、お前。」

「一応、使い魔として繋がっているからね。結構わかるのよ、あなたの事。虚無の研究成果の見せ所でもあるわね。

まあ、それだけ絆が深いって事よ。」

「はあ、ワルドの部屋に居るルイズともこんなに深い絆ならなあ……」

「……」

「何？あなた、そんな事気にしてるの？勘違いしないで。ちょっとは私の事信用しなさいよ。」

「自信がないんだよう……主に俺自身に。」

「まったく……安心さない。言い寄られたり、君は本当にすてきだとか言われたけど、何もなかったわよ。」

「そりゃ……うへへ、俺がよく知ってるけどな！」

「……あんだ、”私の” サイトじゃないわね？」

「ち、ちがう！！俺はお前の夫の方だって！！やめろ！杖をしまえ！ってか、いつの間にイリュージョンが魔法使えるようになったんだ？！」

「修行の成果？とは言っても、今はある魔法使いの弟子になってるんだけどね。」

「弟子？お前が？」

「私の他にね、いたのよ。時空魔法を使える魔法使いが。虚無でも四系統でも先住魔法でもない魔法を使うんだけどね。」

あんたを送った後、尋ねてきて、世界の理も知らずに術式のみで

魔法を使うとはなんと無謀な！って怒られたワケ。

結構危ない行為だったらしいわ。それでね、その人に色々教え  
てもらってるのよ。

まったく、八十を超えて誰かの弟子になるとは思っても見なかつ  
たわ。」

「へえ。その姿だから違和感違和感無かったけど、よく考えればお  
互い八十超えてるんだよな。なんだが変な感じだ。

それにお前、相変わらず無茶するんだな。」

「あんたに言われたくはないわよ、バカ。」

「しかし……悩み事が増えたなあ……」

「 ”ダブル” を使わなきゃいいだけよ。」

「そうだけだよ。」

「はあ、あんた絶対使いそうよね……」

「はは、なるべく使わないようにするよ。」



「なるべく、ねえ……ま、いいわ。くれぐれも気をつけてね?」

「ああ。」

「……ワルドなんかに負けたら承知しないんだから。」

「ああ。まかせろ!」

「あと、別に”わたし”に本当の事を話してあげてもいいからね?信頼されてないと感じるのはとても辛いんだから。」

「ああ。思い切って話せることは話すよ。」

「ええ、もっと私を信じてあげて。じゃあ、そろそろ時間だわ。」

「次、いつ会えそう?」

「ばかね、いつも逢っているでしょう?じゃ、行くね、サイト。」

「ああ。……ルイズ!」

「ん？」

「變じてる。長生きしろよ。」

彼女は微笑みながら消えていった。

2 - 5 : 俺は不器用だから

翌朝、まだ日も昇りきらない時刻から俺は宿の外でデルフを振っていた。

動く。

体が羽のように軽い。

ゆっくりと、すばやく。

緩く、激しく。

ルーンは発動させていない。

それでも、イメージ通りに体は動く。

はやく、速く、さらに速く。

自分が求める速さに、体が応える。

ルーンや ”ダブル” を使った時とは違い人の能力の範囲での速さだったが、俺にはそのどれよりも速く感じた。

朝起きると、今まで心の何処かにあった迷いは綺麗になくなっていった。

きつと昨夜、妻であったルイズと会えたからだろう。

俺はその事で、一つの決心をする事ができた。

すべてルイズに話そうと決めたのだ。

記憶の事、俺の事、これから起こる事。

結果、歴史が変わるのかもしれない。

まったく変わらないのかもしれない。

それでも、俺は話すことにした。

デルフの言とおおり、俺がいくら頭使っても所詮バカな事しかできないやしない。

84年生きてきた俺という存在も、下手すればそのうち消えてしま  
う。

ならば、後悔の無いように。

この先起こる事にあわせて行動をする事は、やめようと決心した。

昨日までは歴史に極力干渉をしないよう、ただルイズだけを見てい  
た。

今でも基本的にはそのつもりだ。

しかし、未来を知っているという事にいつの間にか頼ってもいた。

流れに身を任せていれば、放っておいてもルイズは手に入る。

そこに安住していたと気がついた。

そして、だからこそ、すこしでも前と違った展開だとルイズを信じ  
きれない自分も居た。

俺は、何かを変えたらルイズが振り向いてくれる未来も変わると、  
知らず大きく怯えていたのかもしれない。

これからの歴史に縛られず、おれは生きる。

だから、すべてルイズに話そうと決めたのだ。

記憶の事、俺の事、これから起こる事。

そして、俺の気持ち。

俺はルイズを信じる。

俺は不器用だから、それしか出来ない。

剣を振る。

大きく、鋭く、速く剣を振る。

心が羽のように軽かった。

鍛錬を終え、部屋で汗を拭いているとノックがした。

多分、ワルドが尋ねてきたのだろう。

ルイズの目の前で俺を完膚無きまでに叩きのめし、アピールするつもりだ。

ホント、思い出すのも嫌な出来事なんだよなあ。

ルイズに慰められ、俺はいじけて、すっげえ情けなかった覚えがあるんだよ……

「おはよう、使い魔くん」

「おはよつす。俺、いま鍛錬が終わったんで、これからゆっくり寝ていたいんですけど？」

「君は、伝説の使い魔『ガンダールヴ』なんだろう？」

「そうですね。ルイズには訳あって昨日まで詳しくは内緒にしてましたけどね。」

「あの『土くれ』を捕まえた腕がどれ程のものか知りたいんだ、ちよっと手合わせ願いたい。」

「手合わせ？」

「つまり、『土くれ』」

ワルドが杖を示す。

「つまり、殴りっしょ？」

「そのとおり。」

「いいですよ。」

数刻後、俺とワルドは宿の中庭にある元錬兵所に居た。

ワルドが先程からこの場所の成り立ちを話している。

俺はそれを聞き流し、静かに集中を高めていた。

心が、静かになった。

それでいて、大きく強く、震えている。

いつ以来だ？



こんな境地に立てたのは。

そして、あの時と同じようにルイズがやってきた。

「ワールドが来いって言うから来てみれば、何をする気？」

「彼の實力を試したくなってね。」

「もう、そんなバカな事はやめて。今はそういう事をしている場合じゃないでしょう？」

「そうだね。でも貴族と言う物は厄介だね。どちらが強いか、それが気になるとどうにもならなくなるんだ。」

「サイト、やめなさい。これは命令よ。」

「ごめん、ルイズ。お前の前で格好付けたいんだけど……ダメ？」

「な?!」

「ははは、使い魔くんも言うつね！」

「はじめよつか、ワルドさん。」

「かまわぬ、全力でこい！」

ワルドは杖を構えた。

魔法は……使つてこない。

俺は左半身を前にして、左手のデルフを逆手に持ちそのまま静かに立つ。

聞こえ辛くなった左耳の奥でキン、と金属のような音が聞こえた気がした。

ルーンは光っていない。

ワルドは刺突剣のような杖を俺に向け、間合いを詰めてくる。

俺は動かない。

ああ、そうだ。

この感覚だ。

幾多の修羅場を潜って来た感覚。

二の太刀は無い。

勘が取り戻せなかったんじゃない。

心の、問題だったのだ。

俺は微笑む。

心は静かに、大きく、強く震える。

ワルドが間合いに入った。

しかし、俺は攻撃をしない。

ただひたすら、意識を一点に集める。

そして、ワルドの間合いになる。

俺の喉元目掛けて、烈風のごとくワルドが突きを繰り出す。

次の瞬間、逆手に持ったデルフの柄がワルドの腹にめり込んでいた。

「ぐー！」

「……っと、ごめん、ワルドさん。強く入れすぎた？」

「い、一体何が……」

「いや、別に？ただ、見て、避けて、突いただけさ。」

俺は腹を押さえて片膝をつくワルドを助け起こす。

体術や剣術に優れた相手と一対一で戦う場合に、俺が良くやっていった方法だった。

相手の初撃にあわせ、攻撃の瞬間にだけルーンを発動してカウンターの取る、それだけの攻撃法だ。

ルーンを使った動きに慣れてない相手に、ルーン無しの動きから一気にルーンを使った最高速の動きをする。

それだけの事で相手は俺の姿を見失うのだ。

初撃を見切れないと大怪我するのが難点だけだな。

「ワルド！」

「ぐ、……ルイズ、君の使い魔くんは強いな。」

「サイト！どうして命令を聞かないのよ！！」

「ごめん、嫉妬してるんだよ、俺。」

「な?!あ、あんたは……」

「使い魔、さ。ルイズのな。後で話があるから、ワルドさんを介抱したらちよつと付き合ってくれないか?大事な話なんだ。」

俺はそう言い残してその場を後にした。

後に残ったルイズは、怒ったような、それでいて悲しそうな顔をしていた。

私は一体どうしてしまったのだろう。

昨夜、ワルドと部屋でワインを飲んでいた時の出来事だ。

「ルイズ、姫殿下に預かった手紙はちゃんと持っているかい？」

「……ええ。」

「心配なのかい？無事、任務が果たせるのか……」

「ええ、心配だわ。」

「大丈夫だよ、私がついているからね。」

「そうね。あなたが居れば、きっと大丈夫よね。あなたは昔から頼もしかったもの。それで……大事な話って何？」

「覚えているかい？あの日の約束。」

「中庭の池の小船？」

「君はいつも」両親に叱られるとあそこへ言ってたね。」

「もう、意地悪ね。」

「それに、君はいつもお姉さんと比べられて出来の悪い子だと言われていた。」

私は俯いて唇を噛む。

今でも私の事を心から認めてくれているのは、一人しかない。

そいつは、初めて会った時から私を認めてくれた一人だ。

「でも、それは間違いだと私は思っていたよ。君は確かに不器用で魔法もつかえないけれど。でも、誰にも無い、オーラを纏っていた。きっと君は偉大なメイジになるって思っているんだ。」

「まさか。」



「その証拠に、あの使い魔だ。彼は伝説の使い魔、『ガンダールヴ』だ。」

「ああ、サイトがそう言ってたわね。そのうち調べようと思っていたんだけど、そのままだったわ。でも、伝説のって……大げさじゃない？」

「大げさなものか！『ガンダールヴ』はね、始祖ブリミルが使役したと言われる使い魔だ。誰もが持てる使い魔じゃない。」

私はそんな、と口に手を当て驚く。

あのバカ犬がそんな大層な使い魔だなんて到底信じられなかった。

「君はそんな凄い使い魔を従えているんだ。きっと始祖ブリミルのような偉大なメイジになるだろう。」

ルイズ、この任務が終わったら結婚してくれないか？」

突然の言葉に私は困惑する。

使い魔の、『ガンダールヴ』の事。

いきなりのプロポーズ。

私は……

「私は魔法衛士隊の隊長で終わるつもりはない。いずれは国を……ハルケギニアを動かす貴族になる。」

「でも……わたしはまだ……」

「君はもう十六歳だ。一人で決める事ができるはずだよ？父上だつて許して下さるはずだ。確かに、ずっとほったらかしだった事は悪かったよ。」

「婚約者だなんて言えた義理じゃないけど、私には君が必要なんだ。」

私は席を立ち、窓を開けて夜風に当たる。

混乱する頭をハッキリさせるため、酔いを覚まそうとしたのだった。

そして、外では使い魔がああ白いローブの女と話が終わったのか、宿へ戻って来る姿が見えた。

私の心はざわめく。

一体あの女は使い魔とどういう関係なのだろうか？

何者か、どんな話をしたのか、それをすぐにでもここから声を掛けて聞いたかったかった。

だけでも、ワルドと同室であると言つ事がどこか私の引け目となり、その衝動を抑える。

憧れの人にプロポーズをされる。

幼い頃から何度も夢見た状況だ。

しかし、今の私の脳裏にはやがて来る憧れの人との幸せな生活ではなく、今日の夕刻に矢の嵐の中を突っ込んでいった使い魔の姿が浮かんだ。

まったく、どうしていつもいつもあんな無茶をするのだろうか？

そう考えて、盗賊をやった直後にワルドに肩を抱かれてしまい、使い魔に怪我が無いか確かめに近寄れなかった事と

キュルケが使い魔にちよっかいを出しているのを見て、すごく胸が今と同じようにざわめいた事を思い出す。

私は……彼を束縛し、独占したいのだ。

それは使い魔として。

いつの間にか、ワルドのプロポーズではなく、あの使い魔は自分にとってどんな物であるか、そればかりを考えていた。

無言で外を眺める私に、ワルドのやさしい声が低くかけられる。

「ルイズ……どうやら君の心には、誰かが住み始めたようだね。」

「ちがう！ちがうの！」

「いいさ、私にはわかる。わかったよ、さっきのは取り消す。今は返事はしなくていいさ。」

「……今日はもう遅い。そろそろ寝よう。」

ワールドがそう言って、私の腰を抱き寄せ唇を近づけて来る。

私は……無意識に顔を背けていた。

「ごめんなさい。」

「急がないよ、私はね。」

彼は苦笑いをして、私の腰に回していた手を離れた。

わたしは後味が悪い思いで、自分のベッドへ潜り込む。

それは、ワールドを拒絶したからなのか、心に誰かが住み始めた事を否定したからなのか、私にはわからない。

結局、私たちは別々のベッドで朝を迎えた。

そして、今朝。

晴れない心を抱え、サイトに昨日の事を聞こうと思っていた時だ。

ワルドに宿の中庭に朝食の後で顔を出してほしいと頼まれた。

私は朝食を摂り、町へ観光に出かけるキュルケとギーシュを横目に中庭へ足を運ぶ。

そこではサイトとワルドが剣と杖を抜き、決闘をしようとしていた。

私はギーシュの時の一件を思いだす。

いくらサイトが強いからといって、魔法衛士であるワルドに敵うはずがない。

きつと、大怪我をしてしまう！

すぐにやめるよう命令したが、サイトはわたしの命令に初めて逆らった。

その理由がよりにもよって……嫉妬してしていると言った。

私は動揺し、それ以上サイトを制止することができなかった。

勝負は……意外にもサイトがあっさりと勝ってしまった。

一瞬の出来事で、ワールドが少しずつサイトに近寄っていたかと思うと、次の瞬間サイトが消えて、ワールドに一撃を当てていた。

”ダブル” も、ルーンが光る所も見えなかった。

私はとても驚き、そしてサイトに違和感を抱いた。

彼の物腰は昨日とはまるで違う。

勝負が終わった後のサイトの顔は、初めて見るような顔をしていた。

そして彼は大事な話があると言い残して、その場を去った。

ワールドを介抱していると、彼はサイトをさすがは伝説の使い魔だと褒めていた。

そしてそんな使い魔を使役している私は、間違いなく偉大なメイジになると私を褒め称えていた。

しかし、その言葉にも私の心は晴れず、むしろかかるもやは深くな  
って行くのだった。

結局、ワルドに付き合っている内に夜になってしまい、サイトの話を聞きそびれていた。

私は……どこか様子のおかしかったサイトから、逃げていたと思う。

いや、婚約者と共に居る所をサイトに見せ続けた事に、どこか居心地が悪かったのかもしれない。

一階の酒場ではキュルケやタバサ、ギーシュ達が酒を飲んでいる。

サイトも誘ったらしいが、部屋に籠ったまま出てこないのだそうだし、きっと、私を待っているのだろう。

私はサイトの元へ行く事にした。

なんとなく、この私の気持ちに決着がつく様な、それでいて彼との関係が決定的に変わってしまうような気がしていた。

得体の知れない不安に怯えながら、彼の部屋のドアをノックする。

どうぞ、と声が聞こえて私は意を決して中に入った。

サイトは石造りのベランダの手すりに持たれかかりながら月を見ていた。



『スヴェル』の月は赤い月が隠れ、白く大きな月が天に輝いている。

「よ、遅かったな。」

「話って何よ。」

「その、昼間はごめん。命令聞かなくてさ。」

「……早く言いなさいよ。」

「ああ。その、さ。昨日、ここに来た時に俺を尋ねてきた人、居た  
だろっ?。」

「ええ。それが?……私には関係ないわ。」

「なんだよ、凄く機嫌がわるそうだな。」

「早く言いなさいってば。下にワルドを待たせているのよ。」

私はしまった、と思った。

思わずワルドの名前を出してしまっていた。

なぜか、サイトの話の聞くと、胸がざわめいて来る。

聞きたいと思っていたあの白いローブの女の事も、関係ないとい  
言ってしまった。

しかしサイトはムっとする様子も無く、微笑みながら続ける。

私もこの動揺を悟られないように勤めながら彼を見つめた。

「そうか。でも、大事な話なんだ。もう少し我慢してくれな。」

「……………で？」

「その人な、俺の前のご主人様だったんだ。」

「！……なんの用だったの？」

「俺のルーン……」ダブル” についてさ、わかった事を教えに来てくれたんだ。」

「どついう事よ。」

「……ルイズ、俺、さ。実は未来から召喚されたんだ。」

「は？」

「チキユウから一度、今のハルケギニアに召喚された後、六十年位生きてからもう一度” 今” のお前に召喚されたんだ。」

「何？何の事？」

「つまり、俺は未来人で、これから起こる事を知っているって事さ。」

「はあ？！バツカじゃないの？！」

「……本当なんだ。信じて欲しい。最初に召喚したのはルイズ・フランソワーズ。お前さ。そして、前のご主人様でもある。」

「あんた何言ってるの?! ふざけないで!」

「俺はお前と六十七年間、共に過ごした。そして、俺の死に際に、お前が俺をもう一度召喚の儀の瞬間に送喚したんだ。」

「サイト? そんな冗談、いくらなんでも怒るわよ?」

「“ダブル”はその影響さ。ルーンの二重所持。主も、使い魔も同一であったからこそ起こった現象なんだとか言ってた。

ただ、その影響で俺、八十四歳で死んだ筈の平賀才人の精神は消えつつあるんだそうだ。」

「あんた、私のことバカにしてるの?! ……いくらなんでも、信じられないわよ。」

「まあ、そうだな。でも、本当の事なんだ。頼む、信じてくれないか? あ! この前夢で初代ガンダールヴが現れて教えてくれた、つてのは

ウソなんだ。……ゴメンな。実は未来のお前が教えてくれたんだよ。

その……今までは歴史の事を他の誰かに教えると、何が起こるか

わからなくてさ。本当の事を言うべきかずっと迷ってた。」

「あんだ、正気？」

「その、さ。俺、お前と……結婚までしたんだぜ？だけど、もう一度召喚された時にいきなりそういう事言おうと嫌われて、未来が変わるかも知れないだろ？だから、ウソをつくしか無かったんだ。」

「な、なななあんだ何言ってるのよ！！なんで私があんだと結婚するのよ！！」

「で、さ。昨日、未来のお前にもっとお前を信じろ、って言われてさ。俺もどこか信じきれなかった所があった事に気がついて。それで、すべてを話そうと決心したんだ。」

「あんだ、本当にどうかしちゃっているんじゃないの？！」

「信じられない事はわかる。だから、これから起こる事を教えるよ。もうすぐ、ここにフーケが襲撃してくる。」

「うそ！？だってあいつはトリスタニアの牢獄に……」

「誰かが手引きして、俺たちの妨害に雇ってるんだよ。昨日襲われただろ？で、フーケの襲撃はタバサ達にまかせて俺とお前とワルドは船着場に移動する。それで、道中風のメイジが襲ってくるな、確か。」

「……………」

「で、その後船でアルビオンへ。ここで、空賊に襲われるんだ。でも、この空賊は王党派の船で、船長はウェールズ皇太子。」

「そんな都合のいい事が……………」

「まだ、あるぜ。うまくウェールズ皇太子と接触できた俺たちは、そのままニューカッスル……………だっけ？の城に招かれ、無事手紙を受け取る。」

そして、ウェールズ皇太子を亡命するよう説得してみるんだけど、彼はあそこで死を選ぶ。」

「そんな……………」

「で、な。そこでお前はワルドと結婚式を挙げる。その時、お前は……………土壇場で結婚を拒否し

逆上したワルドがウェールズ皇太子を殺してお前に襲い掛かる。」

ワルドは……レコン・キスタのスパイなんだ。」

「……サイト！あんたって奴は！」

「本当なんだ。」

「見損なつたわ！！私とワルドが結婚するかも知れないからって、そんな嘘をついてまで邪魔しようとするなんて……！」

「違う！本当の事なんだ！」

「いいわ！私、ワルドと結婚する。だって、婚約者ですもの。平民で、使い魔のあんたに言い寄られるなんてたまつたものではないわ。丁度さつき正式にプロポーズもされたしね！」

もうあんたの顔なんて見たくも無い！

この旅が終わつたらキュルケの所にも行きなさい！それがダメなら前の主の所に行けばいいわ！

前の主はあんたの事愛しているんでしょ？丁度いいじゃない！」

「信じてくれルイズ！……ってなんでそれを？」

私は裏切られたと感じた。

サイトは私の事は何でもわかってくれていると考えていた。

多少秘密を抱えているとは知っていたが、彼との絆を深めればそれも話してくれると信じていた。

しかしこの使い魔は私を独占するために、荒唐無稽なウソをついて来た。

よりもよって、アンリエッタ姫殿下直々の任務にあたる、私の婚約者であるワルドをスパイと呼んだのだ。

わたしはサイトの心は貴族のように誇り高いものと信じて疑わなかった。

彼の忠誠は、ほかのどんな使い魔でも敵わないと感じていた。

そんな私の信頼を、この男はくだらない作り話で粉々に砕き、汚したのだ。

こいつはなんて下衆で、汚い行為をしたのだろう。

到底許すことは出来ない。

絶対に許さない。



私は激昂し、踵を返して部屋に戻り退室しようとした時、不意に月光に影が差した。

それは、新たな運命を告げる始まりの影だったのかもしれない。

## 2 - 6 : 絶対泣かないもん

はあ、泣けてくる。

多分、ルイズにプロポーズした時以来の一大決心で、本当の事をちゃんと真摯に話した。

ウソをついていた部分も謝った。

朝はワルドとの決闘をばっちりキメました。

ルイズは怪我とか嫌うから、ちゃんと双方怪我をしない方法で勝った。

さっきまでは俺は自信に満ち溢れ、一切の迷いを振り払い、かつて

の自分を取り戻した気分だった。

それもこれも、ルイズを信じる、信じきってみせると決心できたからだ。

そして、あいつと向き合って真実を伝える。

なにも恐れる物などなかった。

ところが……嫉妬に狂った俺が嘘を並べ立てて、ワールドを貶めようとしている風に思われてしまった。

そりゃ、嫉妬は正直してるけどさあ……

俺の気持ちとは真逆に、目の前でルイズが逆上している。

お前なあ、すこしは信じてくれてもいいんじゃないか？

ああ、ほんと、泣けてくる。

不意にルイズの怒鳴り声が止んだ。

月の光も何かに遮られる。

俺は肩を落としたまま、時計のカラクリ人形のようにギギギと振り向いた。

目の前には巨体なゴーレムが立っており、月の光を遮っている。

……ああ、フーケね。来たのね。おひさしぶりい。はは、楽しそうだな？俺は今天国からドン底まで墮ちた気分さ。

そうつぶやいて、死んだ魚のような目でゴーレムの肩に乗ったフーケを見やった。

その隣には白い仮面を被った男が立っている。

ワルドの ” 偏在 ” なのだろう。

「フーケ！まさか、そんな！」

「感激だわ！覚えていてくれたのかい?!」

「はあ、脱獄ごころうさん。……できれば明日にしてくれないかなんだか今日は泣いて夜を明かしたい気分なんだ。

できればワインとチーズでも差し入れてくれるとうれしい。」

「ご生憎さま。私は今、あんたらに用があるのよ。わざわざ素敵なバカンスをありがとって言うために来たんだから！」

フーケが凄惨な笑みを浮かべると、呼応するようにゴーレムの拳が振るわれる。

岩で出来ていたベランダは簡単に粉碎された。

今度のゴーレムは土ではなく、岩で出来ていてその分攻撃力も上がっているようだ。

俺はルーンを発動してベランダから脱出すると同時に、デルフとルイズを抱えて一階の酒場まで降りる。

一階でもフーケの傭兵が襲撃を仕掛けていて、ギーシュ、キュルケそしてワルドが応戦していた。

おおっ、タバサ。こんな時にまで本を読まなくてもいいだろう？

抱えていたルイズを下ろし、矢盾にしている倒された岩のテーブルまで走る。

傭兵達は魔法を使わせないよう、間断なく魔法の射程外から矢を射掛けて来ていた。

とてもじゃないが、魔法を放てる隙はない。

どうしたものか、と悩むワルドにタバサがワルド、俺、ルイズを指差して今すぐ棧橋へ、と短く提案をする。

「悪いな、タバサ、キュルケ、ギーシュ。先に行くぜ。怪我しないようにな。」

「ええ、ダーリンまってね。すぐこいつ等を片付けて追いつくわ。」

「タ、タバサ！僕が困かい?!」

「ギーシュ、タバサの言う事聞いとけよ。シュヴァリエ持ちだから頼りになるぜ。」

「早く。裏口へ。」

「ああ、任せた。」

俺達は手短に別れの挨拶を済ませ、裏口から外へ出て棧橋へ走る。

ルイズはキュルケ達に一礼をして、俺とワルドに続いた。

彼女の表情は、硬かった。

……と、言っただけ。

俺は今、前回と同じように空賊の船に囚われている。

ルイズは船倉の隅でうずくまりシクシクと泣いていて、それをワルドが慰めていた。

一方、バツが悪そうに部屋の反対側で膝を抱えて座る俺。

そう、それは前回の時と同じ状況だ。

誰のせいか？

そう、俺のせいだ。

なぜか？

そう、俺が調子に乗って大怪我をしたからだ。

棧橋でワルドの偏在に襲われ、そこそこに圧倒した俺は調子に乗ってあいつの”ライトニングクラウド”に

魔力補給の経路を開いた左手を突っ込むというバカをやらかした。

今日の朝、ワルドに快勝したのがいけないんだ、きつと。

とっさの事で、すっかりデルフに魔法を吸わせる感覚で使ってしまった。

当然ただでは済まない。

多少威力は減衰したが、やっぱり左半身は結構ひどい事になっていた。



すごく痛んだけども、その場ではどうにかなるものでもない。

そのまま船に乗りそして空賊に襲われ、ここに放り込まれた所でルイズが怪我を見せてみなさい、と俺の服の袖をまくり怪我を見たのだ。

ルイズがえらい勢いでなんで隠しているのよ、ひどい怪我じゃない！と俺に詰め寄り

俺が無神経にもはは、大丈夫さ、 ” 前も ” そうだったしと答えると、すごく動揺させてしまった。

大方でたらめだと思っていた俺の言葉に真実味が出てきて、混乱しているんだろう。

それから船員に治癒を求めても断られ、どうしよう、どうしようと焦るルイズに、そんな事はいいからさっさと皇太子に会おうぜ、と持ちかけた所でこのバカ犬！と俺をひっぱたいて部屋の隅でうずくまり、鼻をすすり出したのだ。

お、おい、泣いてるのか？と聞くとあっちいけ！あんたの前じゃ絶対泣かないもん、とか、なんかかわいい事を言われて今に至る。

正直、すこしだけ投げやりになってしまっていたのかもしれない。

ルイズに本当の事を話して、あそこまで否定されるとは思わなかった。

いや、大丈夫って信じているけどさ。

でも……泣けてくる。

なんか空回りしっぱなしな気がするな。

……いや、実際空回りしてるか、こりゃ。

しかし、だ。

こんな所で止まっていられない。

ルイズには本当の事を話してあるし、別にワルドに俺の事がバレても問題はない。

それに……ルイズがワルドに俺の話した内容を伝えて、一緒になって俺を排除する可能性も無いだろう。

俺はルイズを信じる。

今は、この状況を早く前に進めて、俺の言った”真実”をルイズに認めて貰う事が先決だと判断した。

ルイズが落ち着くの見計らって、おれは丁度食事のスープを持ってきた男に声を掛けた。

「すみません、ちょっといいですか？」

「ああん？なんだ？」

「俺達、トリステインの大使なんです。船長のウエールズ皇太子に面会できませんかね？アンリエツタ殿下からの親書を渡したいんですけど。」

「はあ？」

「なっ、サイトー!!」

「ばかな！気でも狂ったか?!」

「大丈夫、大丈夫。まかせとけて。」

「何言ってるのよ！あんた……」

「坊主……何もんだ？」

「使い魔だよ。平民のね。それより、結構重要なんだぜ？頼むよ、話だけでもいいからさ。」

皇太子にラブレターを受け取りにトリスティンから来た、と言え  
ばわかるよ。」

「サイト！やめて！！あなた何を言っているのかわかっているの？  
！」

「大丈夫だよ。ロシエールの宿で話したろ？あれ、証明してやるよ。  
あ、一応内容は俺とお前の秘密だからな。」

俺はルイズにニカッと笑いかけ、ワールドにはグヘへと嫌な笑い方を  
してやった。

なんだかこうやってルイズに無邪気に笑いかけるのも久々な気がす  
るなあ……

男はちょっと待ってると言い残して出て行った。

ワールドはなにやら俺を睨んで、考え事をしているようだ。

もしかしたらあいつに出した手紙の差出人が俺だと気付かれたかも  
しれない。

「ただ、俺のがなぜ」 ウェールズを殺してほしくない」 かまでは分らないはずだ。

俺にウェールズとの接点はないからな。

多分、アルビオンについたら何らかのアクションを俺に起こして来るはず。

そこでウェールズは実は聖地への生きた鍵で、虚無の使い魔である俺にはわかるんだ！とでも適当な事を吹き込んで

殺せないように仕向ければいい。

もしウェールズが生きて脱出するつもりになるのならイーグル号で逃げ果せるはずだ。

死ぬつもりなら……どうしていいか、俺もわからない。

やがて男は戻ってきて俺達を船倉から連れ出した。

連れて行かれたのは船長室。

すごく立派な部屋だ。

ルイズは怯えているのか、俺とワルドの後ろに立っている。

室内には空賊の、恐らくはウェールズの側近の貴族が扮した手下達がずらりと並び、下品な笑いをあげてこちらを見ていた。

おまえら、本当に王党派の貴族か？

どっからみても本物にしかみえん……

そして、部屋の中央に設えられたおおきなディナーテーブルの向こうに、ウェールズが座っていた。

「お前ら、頭に挨拶しろ。」

「あの、まだ空賊ごっこするんですか？ 皇太子さま。かつらも眼帯もヒゲもよく似合っています。が、トリステインの大使を迎える格好じゃないですね。」

同室していた周りの手下がざわめく。

その様子に、ルイズとワルドは俺の言葉が真実だと悟ったようだった。

ウェールズは少しの間ポカン、としていたがやれやれといった様子で変装を解いた。

同時に下卑た態度を取っていた手下どもがいつせいに姿勢を正す。

……やれば出来る子の集まりらしい。

でも、絶対空賊のフリを楽しんでいたと思う。

「……まいったな。なかなか自信のある変装だったのだが。君は一体？」

「私はトリステイン王国アンリエッタ姫殿下より遣わされました大使、ルイズ・フランソワ・ズが使い魔、平賀才人と申します。

皇太子殿下の事を見破ったのは、私の使い魔としての特殊能力です。」

「ほう。そうだったのか。にわかには信じられないが……きみらがトリステインの大使だと言う事がもし本当ならばそれも真実なのだろうな。」

「は。詳細はこちらの我が主、ルイズ・フランソワーズより密書をお受け取りください。」

俺はそう言つと、恭しくかきずいて一步下がった。

見えない位置でルイズを突付き、仕事を行うよう促す。

ルイズはおずおずと前に出て、まだ状況についてこれていない頭を下げて自己紹介をはじめた。

「お初にお目にかかります。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します。

トリスティン王国王女アンリエッタ姫殿下より、大使としてアルピオン皇太子ウエルズへの密書を言付かってまいりました。」

「ふむ、密書とな。そちらの御仁は？」

「わたしはトリスティン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長ワルド子爵と申します。こちらのルイズ様の護衛として随行しております。」

「ほう、なるほど。……む？大使殿、その指に嵌めているのはもはや ”水のルビー” ではないかね？」



「はい。アンリエッタ姫殿下より、何かあった時に旅費の足しにするようにと賜りました。」

「な！アンは……アンリエッタ姫はそのような事を？いや、すまない。それを売らなくて幸運だったな。それはこの世に二つとない秘宝なのだ。」

「なんと！」

「丁度いい。私の持つ ”風のルビー” と共鳴させる事ができればお互いに身分の確認になるな。こちらへ。」

その言葉にルイズはウェールズの側へ移動し、お互いの指輪を近づけた。

指輪は共鳴し、小さな虹がかかる。

ルイズは息を呑み、ウェールズはすこし懐かしそうに微笑んだ。

「まったく、アンリエッタ姫は困ったものだな。大使殿、数々の無

礼をお許し頂きたい。何分、戦時中でね。

改めて自己紹介しよう。私はアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ。」

「い、いえ。心中お察し致しますわ。では、密書をこれに。」

ウェールズはアンリエッタの手紙を受け取り、手紙の花押にキスをしてから開封して手紙を読み始める。

そして沈黙が船長室を支配した。

カン、カン、と船内のどこかで作業を行っている音がすこし耳に障る。

やがてウェールズは顔を上げ、息苦しそうに口を開いた。

「姫は……結婚するのか。私のかわいいあの従妹は……  
大使殿、遠路はるばるよく来てくれた。姫はあの手紙を返して欲しいとお考えのようだな。あれは私にとって何にも変えがたい宝ではあるが

姫の望みは私の望みだ。お返ししよう。だが、生憎手元がないの

でな、ニューカッスル城までご同行ねがえるだろうか？」

「わかりました。」

「すまないがご足労願うよ。しかしこの船は軍艦で客間はないのだが、船倉にお戻り頂く訳にもいかんな。

うむ……トット・ハル卿。卿は帰還までワッチ（航海当直）であつたな。卿の部屋を使わせてもらつぞ。」

「御意。」

「大使殿。個室ではないがニューカッスルまではゆっくりと休んでくれ。」

「お心遣いに感謝致します。」

「ハル卿、大使殿と随行の方々をご案内して差し上げる。」

「は。大使殿、こちらへ。」

俺達はウェールズの側に控えていた片目に眼帯をしたもじゃもじゃの髭面の、どう見ても小汚い空賊にしか見えないいかつい爺さんに案内をされて小綺麗な一室に通された。

その風体とは対照的になかなかの趣味らしく、部屋においてあった調度品や小物、それに茶器のデザインはかなり洗練された物を置いてある。

俺は爺さんに甲板に出る許可を貰い、外に出ることにした。

軍船の個室に三人もいると、さすがに狭い。

それに、ワルドの前ではルイズも色々俺に話しかけづらだろう。

多分、俺に問い正したい事があるはずだ。

そつ気を利かせて甲板に上り手すりにもたれかかって多分、来るルイズを待つ。

しかし、意外にもやってきたのはワルドだった。

「やあ、使い魔くん。ここだったか。」

「……ルイズは？」

「部屋で何か悩んでいるよ。それより、私ではイヤかね？」

「イヤではあるけど……まさかここで俺を口説いてもつまらないでしょう？」

「単刀直入に問おう。あの ” 手紙 ” の差出人は君だな？」

「ま、ね。どうする？ ばらされない内にここでケリをつけるか？」

「場合によってはね。実は君に聞きたいことがある。」

「俺にはねえよ。」

「ふん。君は……なぜこの船が王党派の船だと分かった？ なぜ皇太子が乗っていると分かったのだ？」

「手紙にお前の事書いてあっただろ？ それと同じ理屈さ。」

「君は ” 虚無を知り未来を生きた者 ” と名乗った。それは本当

かね？」

「うるせえ。裏切り者に言えるか。」

「随分とつれないんだな。」

「恋敵だからね。」

「はは！君はルイズに恋をしているのか！これは傑作だ！あの高慢な娘が君に振り向くとも思っているのか？」

「うるせえ。お前には関係ねえよ。で？どうしたいんだよ。ここで俺を消したいのか？」

「私の正体を知る以上はそうしたいのだが……腑に落ちぬのだ。」

「何がだよ？」

「なぜ出発前に私の事を姫殿下に言わなかった？それだけで事足りた筈だ。」

「時間がなかったしな。それに、平民の俺がそんな事言ってもだれも信じちゃくれないさ。」

「なぜレコン・キスタの事を知っている？」

「そりゃ秘密に決まっているじゃねえか。」

「……書いてあることは本当なのか？」

「さあな。今すぐグリフォン呼んで確かめに行けよ。涙を流して見送ってやるよ。」

「……君は虚無を知っているのか？」

「俺は『ガンダールヴ』だ。誰よりもルイズの虚無の事を知ってるぜ。」

「ならば！そうならば！君は聖地の事を知ってるのか！」

「ああ。でも、お前には関係ないだろ？ガリアの歌で踊りながら世界征服ごっこをやってるレコン・キスタの連中には縁のない話さ。」

「 ” 虚無を知り未来を生きた者 ” と君は名乗った。君は……未  
来から現在へやって来たのではないのかね？」

最後の問いに俺は無言でニヤリと笑って答える。

ワルドはどこか、焦っている風に見えた。

回りには誰も居ない。

しかし、俺に襲いかかってくる気配は感じられなかった。

「これから俺を消すんだろ？関係ないと思うね。」

「頼む！教えてくれ！虚無は、聖地は人を過去に送れるのか?!」

「さあな。」

「君の望みはなんだ？」



「は？」

「私はなんでも君の言う通りにする。頼む、教えてくれ。」

「はい？」

「レコン・キスタを抜け、トリステインに戻れと言っのならそうしよう。」

ルイズから手を引けと言われればそうする。

皇太子に手を出すなどというのならそうしよう。」

「はいい？ちよ、ちよっとまで！」

「頼む、聖地は人を過去に送れるのか、君はどうやってここへ来たのか教えてくれ！」

「おいおい、どういう風の吹き回しだよ？」

「私は、なんとしても過去へ行きたいのだ。己の過ちを正す為に。その為にレコン・キスタに身を投じ、虚無を聖地を追ってきた。」

目的のためなら私は何でもやる。必要ならば神をも裏切るだろう。」

俺は考えた。

こいつはどうかやら虚無の奇跡の為にレコン・キスタに居るのであって、貴族とかハルケギニアの支配とかは興味がないらしい。

何もかも話してやれば味方に引き込めそうだけど……

いや、それは危険だ。

俺はこいつの事を理解はしていない。

ワルドは確か、ルイズの虚無には気付いていた。

俺が誰の力でここへ来たのか位は教えてもいいだろう。

その代わりにウェールズを殺さないよう、釘を刺せばいい。

そして、その上でここで殺し合いになるのならそれはそれで仕方ないか。

「ルイズだ。ルイズの虚無の力で俺はここへ来た。」

「何?!それは本当か!?!」

「ああ。ただしそれを使えるようになるのは今から約六年後だけだな。お前らがウェールズ皇太子を手にかけたから、会得に手間取ったんだよ。」

「彼が関係しているのか?」

「さあ?ルイズがそう言っただけだ。俺には魔法は専門外でな。」

「そうか……ルイズを手に入れば……私は過去に……」

「で?もう質問は終わりかい?」

「まだまだ!まだ、ある。なぜ私が裏切り者だと誰にも言わない?」

「昨日ルイズにだけは伝えたよ。信じてくれなかったけどな。」

「他には?」

「しつこいな、言ってねえって。平民の戯言ですめばいいが、不敬罪かなんかで投獄されるのがオチだろうしな。」

「そうか。では……」

「やるか。」

「いや。私は裏切る事を辞めよう。以後、トリステイン王国に忠誠を尽くす。」

「は？」

「これで君と争う理由はなくなったな。私の目的は過去へ行く事だ。ルイズを手に入ればそれができるのだろう？」

「まあ、な。ルイズは渡さねえけど。」

「ルイズが手に入れば君も自動的に私の手の中だ。君は私を嫌っているようだが、ルイズは違う。彼女の言う事なら君は聞くだろう？」

「だから、わたさねえって。それに何でも俺の言う事を聞くんじゃないかよ。」

「ふん、ルイズさえ手に入れればいいのだろう？君がわたしの願いを叶えてくれるならば別だが。悪いが、彼女を諦める事だけではない。」

「うわ、きつたねえ！」

「心配しなくとも、皇太子には手をださんよ。それでいいのだろうか？手紙には裏切るなども姫殿下の手紙を諦めるとも書いてなかった。」

「言つとくが、ルイズを泣かしたら唯じゃおかねえぞ？俺はその為にここにいるんだからな。」

「平民風情が。おとなしく見ているがいい。」

ワルドはそういい残すと部屋へ戻っていった。

俺はその真意を測り損ねていたが、どうやらルイズさえ手に入れば

あとはどうでもいいらしい。

しかし、トリスティンに忠誠を尽くすって言われてもなあ。

ルイズに拒絶されたらどうするつもりだ？

その土壇場でやっぱり裏切ってレコン・キスタに戻る？いや、入り直す？つもりか？

ええいくそ、ややこしい。

出たり入ったり節操の無い奴だ。

頭を振り、空を見上げると雲の合間からレコン・キスタのデカイ船がニューカッスルを攻撃している様が見えた。

こちらは雲に隠れて向こうからは見えていないようだ。

よくやるよ、と呟いて砲撃の音を聞きながら俺は目を瞑る。

ワールドにやられた左半身の傷が疼いた。

痛、と思わず口に出す。

「やっぱりやせ我慢してたのね。」

いつの間にか後ろにはルイズが立っていた。

手には膏薬の入っているであろう小瓶を持っている。

「いつからそこに？」

「今さっきよ。ワルドと途中すれ違ったけど、彼すごく上機嫌だった。仲直りでもしたの？」

「する訳ないだろ。あいつ、裏切り者なんだしさ。」

「あんた！まだそんな事を！！」

「ここまでは”当たって” いただける？」

「それ、は！」

「ま、いいさ。信じてもらえないって結構つらいよな。少しお前の気持ち的理解できた気がするよ。」

「……傷、見せなさい。皇太子様に頼んで、薬を貰ってきたわ。戦争をしているだけあって、結構いいものつかっているよね。」

「わるいな、毎度毎度。」

「まったく、あなたはちょっと目を離すとすぐ怪我をするんだから。」

「ははっ痛い！もうちょっと優しくたのむよルイズ。」

「うるさい！わたしがどんな気持ちでいたと思ってるのよ！」

「もうあなたの顔なんて見たくも無い！って言われたし、どうでもいいのかと。」

「あなた……わかってて言ってるでしょ？」

「はは、バレた？まあさ。俺の言った事を信じる気になったら言っ



てくれ。改めてその時に話すよ。」

「ふん。」

「一つ、いいか？」

「何よ。」

「“ダブル”の影響で俺の記憶が消えつつあるのは信じてくれ。使わなきゃいいけど、どうしても使ってしまった場合、最悪俺は消える。」

「消えるって……」

「えっとだな、ここに来てからの記憶がなくなるらしいんだ。あ、心配しなくても居なくなる訳じゃない。」

「ただお前の事もハルケギニアの事も知らない俺になっちまう、って事さ。その時は面倒見てやってくれな。」

「ばっ、バカ！どうしてそうあんたはいつもいつも他人事なのよ！」

「そんな事言ってもな？」

「そんなあなたの面倒を見るこっちの身にもなってよ！」

「いや、なんにも知らない俺も結構いい奴なんだぜ？ちよつと思  
が弱くてバカでスケベだけど。」

「そういう事を言ってるんじゃないの！」

「ゴメン……」

「もう、いい加減にしよう、なんなのよあなた。怪我して心配さ  
せるし、未来とか、私の事全部わかった風な事言ってる。」

「いい、かげん、に、して。わたし、わけ、が、わからないわよう」

ルイズは薬を俺に投げつけて、そのまま泣き出してしまった。

俺は何も言えず、何もできず、彼女の前に立ち尽くすしかなかった。

「泣くなよ、気をつけるからさ。」

「知らない！わたしは泣いていないもん！あんたの前で、絶対に泣かないもん！」

ルイズは泣きじゃくりながらしばらくは俺を罵倒していた。

船はやがて浮遊大陸の下部に開いた、ニューカッスルの港へ続く秘密の穴を上昇していった。

彼女の涙声での罵倒はの間、ずっと続いた。



2 - 7 : あんたなんかきらい

なんだか、最近泣いてばかりだ。

ひとしきり泣き、サイトを罵倒した後私は部屋に籠ってだれとも口を利かなかった。

ワルドがいつもよりずっと優しく慰めてくれたが、とても邪魔に思えて一人にしてと頼んだら外へ出て行ってくれた。

やがて秘密の港に到着した私達は、お城の皇太子の私室へと案内され、いよいよ姫殿下の手紙を受け取ることになった。

ウェールズ皇太子は小さな箱の中から姫殿下の手紙を取り出し、封筒に入れて私に手渡して下さった。

あとはこの手紙をトリステインに無事持ち帰るだけだ。

ウェールズ皇太子は明日の朝、非戦闘員がイーグル号……私達が乗ってきた船で脱出するからそれで帰るようにといわれた。

私は無礼と知りつつ、どうしても聞かすには居られない事を口にした。

「あの、殿下。王党派に勝ち目はあるのですか？」

「いや、無いね。こちらの兵は五百。敵は五万だ。我々に出来る事は、勇敢に戦って死ぬところを見せ付けてやるだけだ。」

「殿下もその中に含まれるのですか？」

「当然だ。私は真っ先に死ぬつもりだよ。」

「恐れながら……アンリエッタ姫殿下とウェールズ皇太子殿下は」

「ああ、恋仲だったよ。その手紙も恋文さ。」

やはり。

わたしは思わず叫んだ。

「殿下！亡命なされませ！どうか、トリステイン王国に亡命を！お願い致します！」

「それはできんよ。」

「殿下！お渡しした姫様の密書にもその旨、書かれているのではありませんか？どうか、お願いでございます。」

「そのような事は書かれてはいなかった。」

「殿下！」

「アンリエッタは王女だ。自分の都合を王国の国事に優先させるよ  
うな事はしない。」

「ウェールズ皇太子殿下、俺からもいいですか？」

使い魔が口を開いた。

魔法学院ではあれほど分を弁え、余計な事には口を挟まなかった使  
い魔がこの旅ではなぜかしゃしゃり出てくる。

多分ロシエールの宿であの話をした時からだ。

いやきつと、あの夜前の主人と会った後からこいつは変わってしま  
った。

「殿下は……名誉の為に死のうとしているのですね？」

「ああ。そうだよ、使い魔君。」



「同時に、もし亡命してもそれを理由にトリスティンへ罫が及ぶ事を危惧されてもいるのですね？」

「……まあ、否定はしないね。」

「殿下、率直に申し上げますと……あなたは王と言つものを勘違いしておりませんか？」

「何？」

「サイト……やめなさい……！」

私は彼を制止する。

だが、彼は止まってはくれなかった。

「貴族ならそれでも良いでしょう。しかし王ならばそれはしてはならぬ、と思えます。」

「なぜだね？」

「殿下、そのお召しになっている服、指輪、靴、そして煌びやかな調度品。これらは殿下が貴族であり、皇太子であるからこそその物です。」

「む？何がいいたいのだ？」

「そのすべては、平民の血と、汗と、苦しみの末に出来ております。同時に王への忠誠を誓う貴族達の願いでもあります。」

「うむ。」

「王として生まれ、生きて来た者には死に場所を選ぶような贅沢は認められないかと。」

「王族の義務は政と子を成し、次の世代へと国を、政を託す事にあります。」

「うむ。」

「アンリエッタ姫殿下もそれゆえ、望まぬ婚約に身を捧げておりま

しょう。殿下、よろしいですか？

殿下には勇敢に戦って死ぬという選択肢は許されないので。それは殿下に尽くした平民、貴族を裏切る行為なのです。

王には貴族のように勇敢に戦い、討ち死にをする権利などありません。

ただひたすらに生きて、無様でも生きて、その血を繋ぐこそが今の殿下の役目なのではないのですか？

望まぬ結婚をしてきた歴代の王族達は、そんな殿下のわがままを許して下さるとは思えません。」

「サイトー！！」

私は使い魔の頬を打った。

ぱしんという音が静かな部屋に響く。

「殿下！失礼致しました！どうか、どうかお慈悲を！」

「いや、いいんだ。彼の言うとおりで。しかしトリスティンへの亡命はあまりに……使い魔君、わたしは……」

「お決めになるのは殿下でございます。

……まあ俺も偉そうな事言っても、好きな女の為だったら道理が通らなくても何でもやりますんで、偉そうな事はいえませんがね」

サイトはそう言つと、よりもよって殿下にニシシと笑いかけた。

殿下もそれを見て君は面白いな、と笑つた。

私はグーでサイトを殴り、ひたすら殿下に無礼をわびた。

殿下はとても愉快だと笑い、私とサイトの無礼を快く許してくださいました。

きつと、前の主人と会ったもんだからサイトは私の躰を忘れてしまつたんだわ。

そうよ、きつとそう。

帰ったらいっぱい、いっぱい躰直さなきや。

前の主人に取り返されてはたまらないもの。

……でもこいつの話が本当なら前の主人も私なのよね。

いや！それはきつと嘘よ！

ワルドに嫉妬してついたウソなのよ。

そう、こいつは嫉妬しているに決まっているのよ、私のように。

しかし、サイトもいい事言うわね。

これで殿下が亡命の事を考えてくださればいいんだけど……

私達が退出しようとする、今度はワルドまでが殿下にお願いがあると云ってその場に残る事になった。

まあ、彼はサイト程バカじゃないから心配は要らないと思うのだけど、すこしイヤな予感はした。

それからお城ではパーティが開かれた。

明日貴族派の総攻撃が行われる為、城に残って最期まで戦う者と『イーグル号』に乗って脱出をするその家族の今生の別れのパーティだった。

年老いたジェームス一世国王陛下はパーティの挨拶で、皆それに乗って逃げるようにとおっしゃった。

しかし、貴族の方々は皆口々にそのお言葉を ” 聞こえなかった ”

と云って勇敢に最期まで戦うと笑っていた。

どうしてそんな風に笑えるのだろうか？

会場を見渡すと視界に入ったウエルズ皇太子殿下も、にこやかに笑いながら臣下の方と話している。

年若い貴族の男性が綺麗な恋人とキスをしている。

年老いた貴族とその息子さんであろう貴族は、若い奥さんが抱きかかえている生まれてその日が経ってはいなさそうな赤ちゃんを覗き込んで

幸せそうに笑っていた。そこへ、ジエームス陛下がやってきて赤ちやんを泣かせてしまい、慌てていらっしやる。

私はその光景に涙が出てきてしまった。

どうして愛する者と逃げないのだろう、と激しく怒りをたぎらせる。

どうしてこんな幸せそうな人たちが死ななくてはならないのかと、哀しみがそれを沈める。

気がつくやうに廊下に飛び出してしまっていた。

涙が後から後から溢れてくる。

私は……ここでは泣く事しかできない。

何も彼らにしてあげられない。

腹立たしくて、哀しくて、そして無力な自分が悔しかった。

しばらくその場で泣いていると、サイトがやってきた。

わたしはこいつの前では泣きたくは無かったけど、意地を張る心がすでに残っておらず彼の胸に飛び込んで泣いた。

「何で泣いてるんだよ？……ゴメン、もしかして俺のせい？」

「ちがうわ。……あの人たち、どうして死ぬとわかってて残るの？  
姫様が、恋人が、逃げてって言うてるのにどうして……」

「大事なものを守るためだって言うてた。」

「何それ。愛する人より大事なものなんてこの世にあるわけ？」

「さあな。金が大事だっけ言う奴もいるし、信仰が大事だっけ奴もいる。」

「私、ウェールズ様を説得する。もう一度説得する。」

「言葉じゃ届かねえよ。それにお前は姫様の元にその手紙を届けなきゃ。それがお前の仕事だろ？」

「何よ。偉そうにお説教してたくせに。無礼討ちされちゃうかと焦ったんだからね。」

「いや、説教じゃないよ。言っただろ？一度説得したんだよ、前もな。その時も駄目だったけど。」

で、俺なりに思い留まってくれそんな言葉を考えていたんだ。」

「そうだったの……」

「さっきも皇太子と少し話したんだけど、やっぱり意思是硬かったな。」

……アンリエッタ姫殿下に、せめて指輪だけでも共に居させてくれと伝えて欲しいって言われてさ。風のルビーを渡されてしまったよ。」

「そんな……どうして。死なないでって愛する人が言っているのに、どうしてみんな死んじゃうのよ！」



「敵に後ろを見せないものを貴族と言う。ってやつなんだろ？」

「え？」

「あの人たちは、愛する人たちを守るために戦って死ぬのさ。ここでレコン・キスタに簡単に後ろを見せると、次に攻めてくるのはトリステインだ。」

自分が誇りに思っている王家の為、他の国の王家の為に勇猛に戦って死のうとしているって事だな。

貴族の意地って奴もあるんじゃないか？」

「そんな！私、そんなの納得できない！」

「ああ、俺も理解出来ないね。名誉だとか意地だとか犬にでも食わしちまえて思うよ。」

だけどさ。あの人たちには命をかける価値があるんだよ。そこはわかってやれよ、お前も貴族なんだろ？」

「もういや！こんな国、居たくない！みんな、自分勝手よ！誰も彼もみんなバカよ！」

「ルイズ……」

「……サイト、傷、大丈夫？」

「ああ。ありがとうな、大分いいよ。」

「そう、あんたは……死んじゃ駄目だからね？」

「当たり前だろ。お前を守ると誓っているからな。そう簡単に死んでたまるか。」

「そうよ。あんたは私の使い魔なんだから。」

「ああ、そうだ。で、ルイズ。明日の事を話しておきたいんだけどさ。」

「何？」

「俺の記憶”では明日お前はワルドと結婚式を挙げて、そこで……あいつを拒絶する。」

「ワルドはその時に逆上して、ウェールズ皇太子を殺し、お前を殺そうとするんだ。」

「サイト、あんたまだ……」

「ルイズ。信じてくれなくてもいい。ワルドも裏切らないかもしれない。ウエルズも殺されないかもしれない。」

お前は……結婚してしまうかもしれない。」

「じゃあ、何よ！」

「だけど、前はそうだったんだ。気をつけてくれ。怪我だけはして欲しくない。」

サイトの言葉に胸がざわつく。

先程までの怒りや哀しみといった感情は薄くなり、変わりに落胆と不安が心を占めた。

お前は……結婚してしまうかもしれない。

この言葉に私は落胆してしまっていた。

どうして、どうして結婚すると言わないの？

そう思うと苛立った。

この、意気地なし。

わたしは思わず彼を罵倒していた。

「サイト！あなた、まだそんな事を言っ！いい加減にして！あんななんかきらい！だいつきらい！！」

683

そう叫んで私は走り出していた。

私は自覚している。

サイトに放った言葉は、何一つ自分の本意ではないとても身勝手な言葉だ。

使い魔という垣根を土壇場になっても乗り越えようとしなさいサイトに、わたしは苛ついていた。

いや、ちがう。

それをさせないのは私自身なのだ。

私が必死に使い魔という垣根を作り、彼を心のこの場所へ近づけようとしていないのだ。

そして、その事に私はこの時はまだ気がついてはいなかった。

それ故、自分自身に苛ついていた。

何のことはない、私はサイトに何もかも無自覚に甘えているのだ。

そして私はその事に気がつかない。

私はこの夜、あてがわれたゲストルームの大きなベッドで一人、この日最期の涙を流して眠りに落ちた。

ああ、あなたはアルビオンへの旅を始めてから本当に泣いてばかりね、ルイズ・フランソワーズ。

私はどうすべきか、決断を迫られていた。

明日、ウェールズ皇太子の立会いの元でルイズと結婚式を挙げることにした。

彼と、ルイズと、私だけでひっそりとだ。

もしかしたら使い魔の平民も参加するかもしれないが、適当な理由をつけて遠ざけておけばいいだろう。

明日の私の任務の仕上げにどう対処をしたものかと思案に耽っていた。

与えられた個室の机の上には一通の手紙がある。

この旅の間ずっと私が悩みの種としていた物だ。

ウェールズが持つ手紙を求める哀れな裏切り者へ

レコン・キスタはガリアの傀儡。虚無の使い手も偽者。聖地を求めるならば、決してウェールズを殺すな。

虚無を知り未来を生きた者より

トリステイン魔法学院で私宛に届いた手紙だ。

差出人はルイズの使い魔だと昼間わかった。

彼の真意はまだわからない。

だが、彼が未来からやって来たという事は確かだろう。

あの使い魔の行動はそう思わせるのに十分だった。

私はあの平民の使い魔に問うた。

どうやって時間を越えてここへ来たのかと。

彼は答える。

ルイズこそがそれを可能にしたのだと。

そしてウェールズ皇太子を殺された為、時間を移動する魔法の完成が遅れたとも言っていた。

しかし彼が何故、ウェールズを殺されたくないかまでははっきりとわからない。

ウェールズが死ねば魔法の完成が遅れる。

ならば、死ななければもっと早く魔法が完成する？

それをあの平民は望んでいる？

なぜ？

もしや、帰る為か？

その為にルイズを求めているのか？

いや、必ずしも本当の事を言っているとは限らない。



結論を出すには早すぎる。

それにレコン・キスタの裏にはガリアが居るといふ事、あの司令官が偽者の虚無だという内容は気にかかる。

フリーケにはロシエールの宿で邪魔な連中を妨害した後、ガリアとレコン・キスタの関係を探るように伝えてある。

まあここが陥落する様を見たがっていたから、本格的に調査をするのはそれからになるだろう。

まず、私が望む結末とはどういうものか。

それは虚無の魔法で過去へ行き、母上を救う事だ。

次に母上を暗殺したトリステイン貴族への復讐。

明日、私が望む結末とはどういうものか。

第一に、ルイズを手に入れる事。

そして、あの使い魔の言葉を信用するのならウェールズの存命。

だが使い魔の言葉を信じ彼を生きながらえさせるのならば、私はレコン・キスタには居られないのではないか？

私が悩むのはここだ。

あの平民の言うとおり、レコン・キスタがもしガリアの傀儡でありあの男が偽者であるならば、私はトリステインを裏切る事は避けた方がいい。

しかし、何もかもが嘘ならばこのままレコン・キスタに居たほうが万一ルイズを手に入れ損なっても虚無を利用できる可能性が私に残される。

つまり、あの使い魔の言葉を信用するか、しないかなのだ。

私は考える。

あの使い魔が、ウェールズの存命以外でトリステインを裏切るなども、ルイズの仕事を妨害するなども書かなかった理由。

それは、私がレコン・キスタに属する事を良しとしたくはないからだろう。

たしかに、ルイズを手に入れてのレコン・キスタへの合流は難しいと思う。

もしかしたら、あの男の力で洗脳をしてもらう必要があるかもしれない。

あの娘は案外、流されない。

それにウェールズを殺されたくない、という事もレコン・キスタでいるにはまずい。

つまり、実は私に裏切られたくはないのだ。

なぜか？

私がレコン・キスタに属する限り、ルイズとウェールズに危害を加える可能性があるからだ。

使い魔の危惧している所はそこだろう。

あの使い魔は言った。

言っとくが、ルイズを泣かしたら唯じゃおかねえぞ？俺はその為  
にここにいるんだからな。

これは本音であろう。

つまり、ルイズが泣きそうな事を阻止したいはずだ。

ウェールズの死。なるほど、彼女は泣きそうだ。

私の裏切り。これも、落胆するだろう。それに、洗脳でも施そうならあの使い魔は怒り狂いそうだ。

ガリアの情報も、あの男が偽者であるという事も、多分私がトリステインを裏切らないように仕向ける為の情報だ。

しかし、私がトリステインを裏切らない場合、あの使い魔はルイズを失う事にもなりかねない。

あの様子から私を恋敵として激しく嫌悪していると思う。

彼にとっての最良の展開はなんだ？

ルイズが私と結婚をせず、ウェールズは生きており、私が……レコン・キスタとして排除される事か。

もしや、明日ルイズに私は拒絶される？

いや、まさか。

だがしかし……ルイズは私がレコン・キスタのスパイだとあの使い魔に聞いても、疑うそぶりはみせなかった。

つまり、わたしはそれだけの信用をされている。多分大丈夫だとは

思うのだが……

そうか。

拒絶された時、わたしはルイズを手につけようとするだろう。

きつと、ウエールズも。

それはレコン・キスタに虚無の使い手が居るからだ。

これを否定されると、わたしはルイズを手につける訳にはいかなくなる。

だから、レコン・キスタの悪い情報も書かれていたのか。

では拒否された時、素直に引き下がればどうだ？

わたしは過去にさえ行けばいい。

たった一度、魔法をかけてくれさえすればそれでいいのだ。

なにも無理にルイズと結婚する必要はない。

親しく付き合い、たった一度彼女に理解と協力をしてもらえれば良いのだ。

私の選択肢は絞られた。

あの使い魔の言葉を信じて、トリステイン王国を裏切らないようにするのか。

あの使い魔の言葉を否定し、レコン・キスタに殉じるか。

この二つにかかってくる。

使い魔の望みはルイズが私と結婚をせず、ウェールズは生きており、私がレコン・キスタとして排除される事。

しかし、これではあの手紙は否定される事を前提となる為意味がない。

やはり、ウェールズの生死が鍵なのか？

トリステインを裏切らないという選択肢を選ぶならば、あの使い魔の事を信用するという事だ。

悩む必要はない。

ここで新たな選択肢を作り出してみよう。

それはあの使い魔の言葉を否定し、レコン・キスタに殉じる場合でもウェールズを殺さない、という物だ。

とりあえず生かしておき、ガリアとレコンキスタの関係とあの男の

力の真偽が分かってから対処すればいい。

どうせ戦況はレコン・キスタが圧倒的に有利だ。

この連中は遠からず全滅する。

それまではどこか適当な場所で理由をつけて匿えばいいだろう。

ルイズは結婚をして私についてくればそれでよし。そうでないのならなるべく殺さないようにして、手紙だけを奪うとしよう。

もしあの男が偽者だった場合、ウェールズを助ける為にレコン・キスタの命令で仕方なく、といった具合に説得すれば後からでも利用できる。

ガンダールヴは……危険だな。

ルイズには悪いが、処分した方がよさそうだ。

あの使い魔の言う事が信用するか、しないかで悩むが確証が得られない以上、信用するわけにはいかない。

だが、ウェールズの事だけは信用しても影響はなかるう。

こうして私の選ぶべき選択肢は決まった。

私はレコン・キスタを選ぶ。トリステイン貴族への復讐の為に。

ただし、ウェールズは取りえず生かしておく。力づくでも死なせはしない。過去へ行く為に。

ルイズも結婚を受けようが受けまいが手は出さない。だが手紙は必ず頂く。レコン・キスタの為に。

そして、あの使い魔は必ず排除する。私の為にだ。



2 - 8 : 認めたくはない

認めたくはなかった。

今朝早くワールドが部屋を尋ねてきて、昨夜の事でいまだ沈んでいる私は礼拝堂まで半ば強引に連れて来られた。

私は何度か聞いたサイトの予言を振り払いながら、これは何かの間違いだとひたすら念じていた。

またサイトの虚言が当たってしまった。もしかしたらあの話は本当の……サイトは本当に未来から……

そう混乱する私に、ワールドは優しく笑いながら新婦の冠を取り出す。

まさか！そんな！これは夢？だとしたら悪夢？それとも、憧れの人と結婚をするとても素敵な夢？

私の混乱は更に大きくなり、急に現実が遠くなった気がした。

新婦の冠を頭に乗せられ新婦が身につける純白のローブを着せられても、どこか他人事のように感じられる。

「ルイズ、僕達はこれから結婚するんだ。」

ワルドの言葉を私はただ呆然と聞いていた。

礼拝堂の扉は開かれ奥に安置してある大きな始祖ブリミルの像の足元で、立会人の格好をしたウェールズ皇太子殿下が私たちを待っていた。

堂内には皇太子殿下以外に誰もいない。

サイトの姿もない。

一瞬、夢の中で位は男らしく結婚するなど言いたい事を言ってみなさいよ！と思った所で私は気がつく。

認めたくはないが、これは現実だ。

そして現実なのに、私が結婚をしようとしているのに、サイトは姿を現さない。

思い出すのは彼に言い放った言葉の数々。

いい加減にして！あんなにかきらい！だいつきらい！！

昨夜、私はサイトにそう言い放った。

平民で、使い魔のあんに言い寄られるなんてたまったものではないわ。

もうあなたの顔なんて見たくも無い！

この旅が終わったらキュルケの所にも行きなさい！それがダメなら前の所の所に行けばいいわ！

前の主はあなたの事愛しているんでしょ？丁度いいじゃない！

ロシエールの宿で、確かに彼に言った。

だから彼は来ないのだろうか？

サイトはロシエールの宿で何度も口にしていた。

信じてくれと。

私は信じていない。

今、この瞬間も信じていない。

サイトが予言した事がすべて当たり、その通りに現実が進んでいる  
今も信じようとしていない。

だから彼は来ないのだろうか？

お前は……結婚してしまうかもしれない。

私の事を諦めてしまった？

だから、彼は来ないのだろうか？

気がつくつくと、私はワルドと共にウェールズ皇太子殿下の前まで歩いて  
いた。

この心の外は相も変わらず現実感がない。

遠くから皇太子殿下の音がする。

「では、式を始める。新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。

汝は始祖ブリミルの名においてこの者を敬い、愛し、そして妻とする事を誓うか？」

「誓います。」

隣から聞こえる声も随分と遠かった。

サイト、早く来ないと本当に結婚してしまっわよ？

今なら、まだ間に合っわ。

「新婦、ド・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。汝は……」

まだ？サイト。

まだ、間に合うわ。

そう、今ならまだ間に合う。

さあ、はやく。

おねがい。

「新婦？」

「ルイズ？」

仕方ないわね、少しだけ私が待ってあげる。

あんたは私の使い魔。

たまには甘やかしてあげないと、拗ねちゃうものね。

「どうしたね？ルイズ。気分でも悪いのかい？」

「日が悪いなら、帰国して改めて式を……」

まったく、本当に困った使い魔ね。

ちよつと目を離せば大怪我するし、ちつとも私の思い通りにならないし、その癖私の事は何でもわかってくれるのよ、あの使い魔は。

だから、待っていてあげる。

あんたが来るのを。

「新婦は……この結婚を望まぬのか？」

「……緊張しているんです。そうだろ？ルイズ。君が私との結婚を望まぬはずがない。」

サイト。

どうして来ないの？

こんなに待っているのに。

あんたは分かっている筈よ？

私があんたを信じないから来ないの？

……いいわ、今だけは信じてあげる。

それに使い魔をほったらかしてこんな大事な式を上げるのも、メイジのやる事じゃないわよね。



「子爵。まことにお気の毒だが……花嫁が望まぬ式をこれ以上行うわけにはいかぬ。」

「ルイズ！私のルイズ！君にはすべてを、世界のすべてを捧げてみせるよ！だから」

「私、世界なんて知らない。」

「ルイズ！いつか言った事を忘れたか！君は始祖ブリミルに劣らない、偉大なメイジになるんだ！私には必要なんだ！君の力が！」

「ワールド、あなたは……」

「子爵、君はフラれたのだ。」

「黙れ！」

「ワールド？」

「ルイズ！君の才能が私には必要なんだ！」

「私、そんな才能なんてないわ。」

「気がついていないだけだ！ルイズ、私と共に来い！」

ワルドはそう言って、強くわたしの肩をつかんだ。

すごく痛い。

なぜこんな乱暴な事をするの？

私の才能、力が欲しい？

そんな物、あればこんなに苦労してないわよ。

これは侮辱だわ。

神聖な式を挙げようとしておきながら、この礼拝堂に入ってから一度も愛の言葉も口にしないで才能？力？そればかり。

サイト、早く来なさい。

「子爵！今すぐその手を離したまえ！これ以上の侮辱は許さん！」

「……ここまで言ってもダメかい？ルイズ。」

「いやよ、離して。結婚は絶対にイヤ。あなた、才能とか力とか、そればかりじゃない。」

「この旅で君の心を掴もうと随分と努力したんだが……」

「ワルド。貴方は憧れだったわ。恋をしていたのかもしれない。だけど、今は違う。」

「こうなっては仕方がない。」

ワルドは私の肩から手を離し、いきなり詠唱を行いながら杖を抜いた。

そしてウィンドブレイクをウェールズ殿下に放ち、殿下は派手に吹き飛びブリミル様の像に叩きつけられて気を失った。

瞬間、私はサイトの言葉がすべて真実だと確信する。

それから激しい後悔に苛まれた。

ごめんね、サイト。

お願い、早く来て。

「本当に……本当に貴方は貴族派の……裏切り者だったのね！ワルドー！」

「そうとも！いかにも私はアルビオンの貴族派『レコン・キスタ』のメンバーさ！」

「どうして！トリステインの貴族であるあなたが、どうして！」

「月日と運命は人を変える。それを君に今話すつもりはないよ、ルイズ。」

「昔の、私の憧れたあなたはそんな人じゃなかった！一体何があったというの、ワルドー！」

「ルイズ、君に語る事は何もない。さあ、手紙を渡すんだ。」

私は杖を取り出そうとしたが、ワルドにそれをはじかれてしまった。どこかに杖が飛んで行き、次の瞬間ウインドブレイクが私を襲った。派手に吹き飛んだ私はしたたかに背を打ったためか、呼吸ができず嗚咽も上げられない。

……こんなの、いやだ。

「さあ、手紙を出すんだ。手荒な事はしたくはない。」

恐怖と悔しさで涙がこみ上げてきた。

助けて。

「ルイズ、さあ。だれも君を責めはしないさ。」

早く助けなさい。

あなたは言ったわ。

当たり前だろ。お前を守るのが俺の仕事だからな。

あれは嘘じゃないんでしょう？

「さあ、ルイズ。あまり困らせないでくれ。」

こみ上げてきた涙は、後悔をきっかけにしてこぼれ出していた。

お願いよ、私の使い魔。

わたしは自分勝手に、怒りっぽくて、素直じゃないわ。

信頼して欲しいと言いながら、私はあなたを信じもせず酷い事を言  
ったわ。

でも、それでも、あなたは言ってくれたじゃない。

私を守ると。

だから、お願い。

「早く出せ！もう一度ウィンドブレイクがほしいのか！ルイズ！」

「助けて！サイトー！！」

瞬間、雷のような轟音と共に礼拝堂の入り口近くの壁が外から内に  
向けて吹き飛んだ。

もうもうと立ち上る土煙の中、”ダブル”の強い輝きと共に待  
ち焦がれた使い魔の姿をわたしは見た。

こうして私の願いは叶えられ、使い魔は誓いを守ってくれた。



認めたくはないな。

早朝、ワールドが俺の部屋に訪ねてきた。

なんでも、結婚式に出席して欲しいらしい。

そして、自分のトリスティンへの忠誠をその目で確かめると言って来た。

ルイズは既に式場にいるそうだ。

俺はデルフを持ってワールドに連れられ式場へ向かった。

なんでもウエールズ皇太子とジエームス一世国王陛下のご好意で、昨日のパーティー会場にブリミル像を持ち込んでの式だそうだ。

まだ非戦闘員の脱出までは時間はあるしホールも港に近い位置にあるので、楽団による演奏や料理が振舞われるとにこやかに話している。

ふん、どうせフラれるのにご苦労なこった。

トリステインに忠誠を誓い直そうが裏切るうが、もしルイズに手を出そうとしたらただじゃおかねえからな。

そう思いながら俺はホールの扉を開く。

ホールは無人だった。

俺は騙されたと思うより早く、ホールの中へ一気に駆けた。

瞬間、さっきまで俺がいた空間にライティングクラウドがバチバチと音を立てて出現していた。

俺はワルドを睨む。

ワルドはいつの間にか白い仮面を付け、黒い杖をその手に持ち二人になっていた。

多分、両方偏在だ。

本体はルイズの側にいる。

俺はまんまと騙された訳だ。

そして、これが意味する事は明確だ。

ワルドはやはり、トリステインを裏切るつもりなんだろう。

認めたくないが、俺の企みは失敗したようだ。

それだけじゃない、俺があいつの邪魔をしないよう逆に嵌められて、間抜けにもここへ誘き寄せられてしまった。

よりもよつて今日、ワルドを一瞬でも信用するなんて俺はなんて間抜けなんだ！

くそ、普通気がつくぞ？！

ギリ、と齒を鳴らして俺は偏在を睨む。

二体の偏在はホールへ悠々と入ってきて、その杖にエア・ニードルをかけた。

杖は青白く光る。

これである杖は刺突剣も真つ青の威力を持つ武器になったわけだ。

俺はワルドの偏在に前後に挟まれる形で対峙した。

早くこいつらを始末してあの礼拝堂に行かないと、ルイズとウエー  
ルズが危ない！

そう焦りながら前方の偏在に切りかかる。

暫くは剣を切り結んでいたが、やがてふわりと宙に逃げられそのまま降りて来ずに再びライトニングクラウドを唱えだした。

後ろの偏在も俺の剣が届かない宙に浮いて同じくライティングクラウドを詠唱している。

慌てて回避する為に走ったが、二発目のライティングクラウドを右足に食らってしまった。

「どうした？ ガンダールヴ。伝説とは言っても所詮その程度か？」

「ぐ、うるせえ！ せめて下に降りてきやがれ。」

「それは出来ない相談だ。」

二人の偏在は今度はすこし距離を取って俺の前方に移動し、エア・スピアーを詠唱した。

どうやら俺の足を封じた事を確認して、なぶり殺しにするつもりらしい。

目に見えない槍を複数作り上げたのだらう、偏在が俺に杖を向ける

と ”何か” が飛んでくる気配をいくつか感じた。

痛むというよりかはじんじんとする右足を無視して思いっきり横に飛ぶ。

俺の後ろにあった、昨夜の豪華な食事を並べられていたでかいテーブルが、派手な音を上げてバラバラになった。

壊れ方から見て四本程度の槍を作ったらしい。

「そら、もたもたすると次が飛んでくるぞ。」

その言葉と共にもう一体の偏在がエア・スピアを放ってくる。

今度は思いきり前へ飛んだ。

槍の内の一本が左肩を掠めたのか、ぱっと肩がはじけて血が舞った。

「相棒！」

「くそ、デルフ。なんかいい方法を思いつかないか？」

「ううむ、ああやって上に昇られるとな。うかつに飛び込めば串刺しだなあ。」

「ほう、その剣はしゃべるのか。インテリジェンスソードとは中々珍しいな、ガンダールヴ。」

「しかしそんなポロボロの剣では私は倒せんぞ？」

ふふふ、と偏在は声を合わせて笑う。

ひどく耳障りだ。

俺はまだ昨日のパーティの為に出されたテーブルをひっくり返しながら室内をとにかく走った。

止まれば的にされる。

偏在は笑いながらエア・スピアーやエア・カッターを俺に飛ばしてきた。

そのたびに椅子やテーブルが砕け、宙に舞う。

時たま俺の腕や、足や、背中を掠めて血が舞った。

「ははは！いいぞ！そうやって平民らしく這いつくばって逃げ回れ  
！」

「うるせえ！このロリコン！ルイズみたいな小さな十代の女の子は  
な、同じ年頃の男の子しか口説いちゃいけないんだぞ！」

「相棒、そんなの初耳だぞ？本当なのか？」

「俺がいた国じゃ問答無用で捕まるぜ？」

「ふん、その減らず口をいつまで叩けるかな？」

飛んで来る魔法は更に激しさを増す。

これが英雄クラスの実力と言われるスクウェアメイジ。

これがワルドの力。

ガンダールヴを圧倒する戦闘力。

偏在でこれだ。

本体がもしここに居て俺をあらゆる手段で殺そうとするなら多分、俺は殺されているだろう。

飛んでくる見えない槍を、見えない刃を必死に避ける。

ホールにあった無数のテーブルと椅子は、いつの間にかすべてバラバラの木片になっていた。

719

「どうした！手も足もでないではないか、ガンダールヴ！」

「相棒！このままじゃ……」

「デルフ、ちっと黙ってる、な？」

「ちょ、相棒?! いったい」



俺はデルフを鞘に収め、背中に担いだ。

左手のルーンは鈍く光る。

「ふん、観念したのか？」

「いんや、こっからさ。」

俺は再び駆け出し、そして散乱している椅子やテーブルの脚を片っぱしから拾って偏在に投げつけた。

ガンダールヴの膂力で投げつけた木片は、それなりに凶器となる。

二体の偏在は竜巻を起こして大量に飛んでくる木片を吹き飛ばす。

俺はルーンを全開にしてデルフを抜きながら一気に片方の偏在との

距離を詰め、跳んだ。

いくら偏在とは言え、詠唱する口は一つだ。

加えて木片に気を取られ、俺の急激な接近に気がつくのが遅れている。

ど、っと乾いた音を立て偏在の背中からデルフの刀身が生えた。

血はついていない。

そのまま着地する頃には胸を貫かれた偏在は霧散した。

残るは一体。

おのれ、と叫びライトニングクラウドの詠唱を始める。

俺はホールを駆ける。

右足も、左半身の傷も、先程体中を掠めた傷も痛くはない。

体は羽のように軽かった。

急がねば……

そう思ったとき、左目の視界が霞んだ。

目に映るのはワルド。

俺の両肩を掴んでいる。

これは……ルイズの視界だ！

ワルドは血相を変え、なにか口を動かしている。

やばい、もう時間がない！

そう思った時、視界が流れた。

ぶたれたのか、魔法で吹き飛ばされたのか。

おれはデルフを強く握る。

激しい怒りが、ルイズがやはりワルドを拒絶したという喜びが、心を震るわせる。

そして、デルフが光りだした。

「相棒！思い出した！思い出したぜ！！俺はデルフリンガー！ずっと昔も今もガンダールヴの剣だ！」

「遅えよ、デルフ。いそごう、ルイズが危ない！」

「ああ、相棒！心を震わせる！もっと、もっと震わせる！」

俺は言われるがまま、心を震わせる。

耳の奥でルイズの声が聞こえた。

だから、お願い。

わかってるよ。

今、行く。

視界が赤くなる。

偏在のライトニングクラウドの詠唱が終わり、俺に杖を向けようとしていた。

俺は跳んだ。

すさまじいスピードで、立っていた位置から一直線に偏在へと体が飛んでいく。

飛んで来た雷撃は、まるでケシゴムで消したかのように俺の周囲から消えた。

そのまま俺は偏在へと突っ込む。

まるで水風船を割ったかのように、偏在は四散して消えた。

音は聞こえない。

きつと、俺に追いついていないのだろう。

そのままの勢いで壁に体当たりをすると、紙のように破れて俺は外へと出た。

礼拝堂はたしか、あっちだ。

俺を導くように耳にルイズの声が続く。

助けて！サイトー！！

俺は跳ぶ。

ルイズの視界から、礼拝堂のどこに居るのかは外からでもわかった。

一息に礼拝堂の入り口に近い壁を砕く。

まるで紙細工のようになんの抵抗もなく壁は破れた。

勢いあまって礼拝堂の中央に俺は転がり込んだ。

土と岩で出来た壁を砕いたせいか、土煙がひどい。

しかし、その先に確かに見えた。

俺が守ると誓った少女はそこで泣いていた。

2 - 9 : ルイズ、泣いているのかい？

赤い視界が元に戻っていく。

左耳がバキンという音を聞いた。

左手の抑制魔法のラインは真っ赤になっていたが、再び黒くなってゆく。

多分おれの左耳はもう使い物にならないんだろうな。

砕いた壁の土煙がゆっくりと晴れていく。

「サイトー!」

「貴様……私の偏在を倒したと言っのか?」

「ワルド。お前、結局裏切ったんだな。」

俺はワルドを睨む。

遠くで砲撃の音が聞こえて来た。

どうやら貴族派の攻撃が始まったらしい。

ブリミル像の下でウェールズが倒れている姿が見える。

「よくここがわかったな、ガンダールヴ。」

「前もここだったからな。まったく、なのにテメエに騙された自分



が本当にムカつくよ。」

「ふん。主人の危機が目に映って、急いでやって来たというわけか。」

「ルイズは……お前に憧れていた。幼い頃からずっとだ！それにお前を信じていたんだぞ！最後までお前が裏切らないと信じていたんだ！」

「ふん、信じるのは勝手だがね。」

「言った筈だ。ルイズを泣かしたらただじゃおかないと。」

俺はデルフを構える。

ワールドはふん、と失笑してライティングクラウドを詠唱し俺に放った。

しかし、電撃は俺に届かない。

構えたデルフがそれを全て吸収していた。

「ほう、面白い物を持っているのだな。」

「いいだろう？おまけに喋るんだぞ。」

デルフを一振りして、俺はワルドを睨む。

ワルドは動揺もせず、なにやら呪文の詠唱を行う。

呪文が完成するやワルドは分身した。

本体を入れて全部で五体。

本体以外は仮面を付けている。

それぞれが自身の杖にエア・ニードルを唱え、四体の偏在が襲い掛かってきた。

俺は後退し、横へ跳び、距離を置き、距離を詰め、それぞれと切り結ぶ。

ワルドは確かに剣も舌を巻くほどの使い手だ。

しかし今のデルフは魔法を吸収する。

何度か切り結ぶ内に杖にかけたエア・ニードルが消えるのだ。

その為、魔法をかけなおす必要がある。

ロシエールの錬兵所の一件でわかったが、剣術においては俺に分があった。

ワールドもそれを理解しての事か、先程の偏在も魔法中心に攻撃を仕掛けてきていた。

スクウェアといえど、魔法が使えなければ互角以上に戦える。

これが体術や剣術中心の暗殺者とかなら話は別だが、ワールドは軍人だ。

今までも ” 綺麗な ” 戦い方しかなかったのだろう。

つまり、メイジらしく魔法を中心とした戦略しか立ててこないのだ。

その魔法を俺はデルフで封じている。

この偏在と先程の偏在で魔力ももうそれ程多くは残っていないだろう。

デルフが吸収出来ないほどの特大のカッター・トルネードなどの派

手な魔法はもう詠唱できないはずだ。

やがて、俺は一体の偏在を切り伏せた。

残るは三体。

ワルドと偏在達に動揺が走る。

その時ボゴンという音と共に残っていた偏在の内の一体に爆発が起こり、その偏在は消えていった。

ルイズの魔法だ。

「き、効いた！わたしの魔法が！」

「ばか！逃げろ！」

俺の叫び声と同時にウィンドブレイクがルイズに襲い掛かる。

壁に強く叩きつけられたルイズは呻きながら激しく咳き込んだ。

その側にワルドが立ちエア・ニードルを纏った杖をルイズに突き出す。

「やめろ！ワルド！！」

「動くな。ガンダールヴ。わかるだろ？」

「ぐ……！！」

「さあ、ルイズ。手紙を渡すんだ。」

「ケホ、い、嫌よ！！」

「そんな事を言わずに、ほら君の使い魔を見てごらん？」

瞬間、俺の左肩は偏在の杖に貫かれた。

「が！」

「サイトー!!」

「動くなよ？ガンダールヴ。ルイズ、わたしもこんな事はしたくない。仕方ないんだよ。」

「やめて!!」

「素直に手紙を渡してくれさえすれば誰も死なない。ほら、ウエールズ皇太子殿下も別に殺した訳じゃないからね？だから、さあ。」

今度は俺の太ももが貫かれた。

俺は思わずデルフを放り出してしまい、その場へたり込む

残った二体の偏在は俺を挟むように立つ。

「ぎーぐ、う、」

「わかったわ！わかったからー！」

「や、やめろ！渡すんじゃないルイズ！」

「ほう、さすがは伝説だな。なあ、ルイズ。君もあんなすばらしい使い魔を失いたくはないだろう？さあ、早く……」

ルイズは俺を見て泣いている。

そして悔しそうに手紙をワルドに差し出した。

ワルドは手紙を左手で受け取り、満足げに頷く。

「ありがとう、ルイズ。君を傷つけてしまった事は本当に悪かった  
と思っているよ。この通りだ。でも、仕方がないんだよ。」

「さあ、サイトを開放して。」

「それは無理だ。その瞬間、私はあの使い魔に殺されてしまう。悪  
いけど君にはもう少しこのままでいてもらうよ?」

「そんな!やめて!」

ルイズの悲鳴が静かになった礼拝堂に響く。

俺は跪き、下を向いたまま口を開いた。

「……なあ、ワールド。」



「なんだい？ガンダールヴ。命乞いかい？」

「いや。お前さ、己の過ちを正す為に過去へ行きたいって言ったよな？」

「ああ。私はそのためなら何でもやる。悪魔に魂だつて売るよ。」

「そうか。じゃあ、なんで俺を信用しなかったんだ？俺は未来から来たとわかっていただろう？」

「君が本当の事を言っているとは限らないだろう？」

「本当か？」

「何？」

「俺も、過去の過ちを正す為にここへ来た。気に入らないけども、お前の気持ちはわかるんだ。」

「それがどうした？」

「ウェールズ皇太子を生かしていたのも、俺の事をどこか、信用し  
たかったからだろう？」

「本当は皇太子を生かしてここから逃がすつもりなんじゃないのか  
？」

「……だからどうしたと言っただね？」

「だから……手紙を返せ。今ならルイズを泣かせた事も”許して  
やる”。

「皇太子連れてとつとグリフォンで逃げる。そうするなら”何  
もしない”。」

「ふ、ふははは！ガンダールヴ！お前は何を言っているんだ！」

「はやくしろよ。お前に刺された傷が痛まないほど、今の俺は……  
怒っているんだ。」

「ふん、平民！口の利き方に気をつけろよ。君は今そんな事を言え  
る立場ではないだろう！」

「ダメか？」

「そんな事をする必要がどこにある？まったく、死の恐怖で気が狂

「ったかガンダールヴ！」

「……そうか。じゃあ、次にもし会う事があればよく覚えとけ。」

「何をだね？」

「ルイズを、泣かせるな。」

俺はそう言って顔を上げた。

世界は赤く染まっていた。

ルーンは強く、激しく輝いていた。

最初は下を向いたままのサイトを見ていた。

あのボロ剣を放り出してしまい、肩と脚から血を流している。

サイトはワルドにぼつり、ぼつりと抑揚のない声で見ようによっては暢気に語りかけていた。

私はある事に気がつく。

だんだんと、ルーンが強く、より強くと輝きだしていた。

そしてサイトが顔を上げた瞬間、両脇にいたワルドの分身がまるで綿毛を吹くように、バラバラになりながら吹き飛んだ。

ワルドが何か声を上げようとした瞬間、すでにサイトは側に来てい

た。

その手は手紙を持つワルドの左手を握っている。

「返してもらっぜ。」

次の瞬間、サイトはワルドの左手を ” 千切った ” 。

ワルドは獣のような悲鳴を上げ、必死に私達から離れようと歩を進めている。

サイトは……ワルドにとどめを刺そうともせず、丁寧にその手に持ったワルドの左手から手紙を取り上げて私に差し出した。

「取り返したぜ？」

差し出された手紙を持つ左手の抑制のラインはすこし、赤くなっていた。

わたしはサイトにかける言葉が見つからない。

信じてあげなかった事。

そのせいで、こんなに傷つくまで戦わせてしまった事。

足手まといになってしまい、何度も ”ダブル” を使わせてしまった事。

そして……そんな私を最後まで守りきってくれた事。

私はサイトの手紙を差し出す左手を両手で握った。

涙は止まらない。

それどころか、さらに沢山あふれだしていた。

”ダブル” を使った影響か、魔力が吸い取られる感覚がする。

「バカ……」

「はは、すまん。ワルドの見え透いた罫にはまっちまってな、遅くなっちまった。」

「本当に、バカ……」

「どつか痛い所とかないか？ああ、クソ。せつかくの新婦のロープが真っ黒だな、こりゃ。」

助かったはずなのに、手紙を取り戻したはずなのに、私の涙は止まらない。

今の私に出来る事は泣く以外には何も無かった。

再び静かになつた礼拝堂に遠く、砲撃の音や魔法の炸裂する音が聞こえてくる。

貴族派の攻撃はいよいよ城内に及んでいるらしい。

不意にサイトが立ち上がり、壁にあけた大穴の方を見た。

そこにはいつの間にか皇太子を抱えたワルドが逃げて行くうとしていたのだ。

私は待ちなさいと言いかけて、サイトに制止された。

「ワルド！」

ワルドはこちらを向く。

顔は土気色になり、息も絶え絶えだともここからでもわかる。

「いいか？」  
”次”  
はないからな。俺は、嘘は書いていない。」

ワルドは何も言わず、さっさと穴から外へ出て行った。

礼拝堂には私とサイトだけが残された。



私は泣きながら、サイトの ” ダブル ” による反動を少しでも和らげようとサイトの左手を握り続ける。

サイトは照れ臭そうに右手で頭をかいていた。

不意に魔力が吸い取られる感触が消える。

それと同時にサイトは床に崩れ落ちた。

いくら身代わりの抑制魔法があるからといっても、一日に何度も ” ダブル ” を使ったからだろう。

体力の限界が来ていたようだ。

当然、ルーンは消えて魔力の補給も出来なくなる。

私は暫くは混乱したが、ボロ剣を使って新婦のローブを裂いて礼拝堂の聖水で洗い、それを包帯代わりにしてサイトの応急手当をした。

その時、わたしは息を飲む。

一昨日、ライトニングクラウドの傷を見たときよりも遙かに酷い状態だった。

体中が傷だらけで、白かったシャツが真っ赤になっていた。

私は必死に手当てをする。

幸い、致命傷となるような傷はなかったようだ。

サイトはこんな怪我をしているにもかかわらず、すうすうと寝ている。

たまにつぐお！と唸るけども、とりあえず死にそんな雰囲気ではない。

やがて遠くで聞こえていた戦闘の音が近くなってきた。

わたしは杖を拾い、入り口を見る。

サイトは私が守る。

たとえ相手が五万の軍勢だとしても、守ってみせる。

そう決意して入り口を覗んでいると、突然わたしの脇の地面が盛り上がり見覚えの在る大きなモグラが顔をだした。

「な、ななななによあんた！」

「こら！ヴェルダンデ！どこまで君は穴を……おお！ルイズ！ルイズじゃないか！」

「なんでギーシュがここにいるのよ!」

「いやあ、あの後『土くれ』のフーケに勝利した僕らは、寝る間も惜しんで君達の後を追いかけたんだよ!

でも、君達がどこにいるかわからないだろう?だからヴェルダンデに頼んで穴を掘ってここまで……」

「ここ、雲の上よ?!一体どうやって?」

モグラの穴から頭を出していたギーシュの後ろで今度はキュルケとタバサが顔を出した。

「タバサのシルフィードよ、ルイズ。」

「キュルケ!」

「ねえ、聞いて？わたし、もう少してフーケに勝つ所だったのよ！でもあいつ、逃げ出しちゃって……」

「話は後！逃げるわよ！もうすぐここに兵隊が来る！」

「え？え？」

「ギーシュ！サイトをお願い！！」

「このミイラ男みたいモノ、あの平民かい？」

「ねえ、ルイズ。子爵さまは？」

「裏切り者だったの！でも任務は達成したわ！早く逃げないとここも戦場になる！」

「なあんだ。もう終わっちゃったのね。つまんない。」

「うひゃあー！！」

状況を説明していると、突然ギーシュが悲鳴を上げる。

振り返るとサイトが目を覚まし、デルフを背に担ぎながら立ち上がっていた。

サイトは私が頭に巻いた包帯をずらしながら顔を出して言った。

「さあ、さっさと帰ろうぜ。トリスティンへ。」

そういつて彼は私にニカッと笑いかけた。

私もそれを真似して笑って見せた所で、張り詰めた気持ちが切れたのか今度は私が気を失った。

いつか、使い魔が口にしていた言葉がある。

超怖い。

今私が見ている夢はまさに、そうなのだろう。

「ルイズ！ルイズ！どこに行ったの！まったく、私の大切なぬいぐ

るみを勝手に持ち出して！」

幼い私は今度は姉さまから、またも屋敷を泥棒のようにコソコソと逃げ回っていた。

遠くから聞こえる姉さまの声は、怒りに満ち溢れている。

超怖い。

きつと捕まるとほつぺたを引っ張られてしまうわ。

私はいつものように「秘密の場所」へ向かう。

今はもう誰も足を運ばない、中庭の広い池と小さな小島、一艘のボートがある私だけの安息の地。

わたしはそのボートに乗って、用意してある毛布を包まり、そしていつもの様に世界から耳をふさぐ。

小さな私ができる、唯一の反抗。

気が付くと、辺りは霧の世界となり池に浮かぶボートと小島に建てられた東屋以外は消えていた。

その霧の向こうから人影が近づいてくる。

「子爵さま？」

いや、違う。

彼のはずがない。

「ルイズ、泣いているのかい？」

人影は私の使い魔だった。

そして、私の体は十六歳の私となっていた。



「誰だ？だれがお前を泣かしたんだ？！ワールドか？」

「いいのよ、サイト。」

胸は高鳴り、そして締め付けられるように苦しかった。

サイトの逞しい左手に、あのルーンが見える。

ルーンの中央に交差するように描かれた抑制魔法の印は、みるみる内に赤くなっていく。

「や、やめなさいよ！ルーンを使っちゃだめ！」

「ルイズ、お前は俺が守るよ。」

「いいから、少しは自分の事かんがえなさいよ！いつもいつも怪我ばかりして！」

「気にするなよ。あ、お前に話があるんだった！」

「バカ！印が真っ赤じゃない！」

「そついやそつだな？なんか音も聞こえないし、目も見えないし、そついや鼻も利かないぞ？おーい、どこだ、ルイズ。うん？記憶も曖昧だな？」

「なんでいつもいつもそんな無茶するのよ……！」

「お前を守るって誓ったからな！これ位メじゃないぜ！」

「バカ言わないで！あんたが死んでしまったら元も子もないじゃない！」「い！」

「わはは！大丈夫だって！」

「もう、いい加減にして！私の気持ちも考えてよ！」

「怒るなよう。取って置きの未来の話があるんだからさ。」

「何よ！まさか今度はトリスティンが滅ぶとか言い出すんじゃないでしょうね?!」

「その、さ。俺、お前と……結婚までしたんだぜ?」

いつか、使い魔が口に使っていた言葉を再び聞いた。

そして誰かにキスをされたような気がしてすこし、胸がざわめいた。



i n t e r m e d i o 2 : 閃光の選択(前書き)

幕間劇です。全二話となります。

私の望みは過去へ行く事。そして母を殺したトリスティン貴族への復讐。

その目的の為には私はなんでもやる。

ロンディニウムの酒場でフーケを待ちながら、右手に持ったエールのジョッキを傾けていた。

左手は昨日まではあったが今はない。

先程治療が終わったところだった。

戦時中であつた為か、あの城には高価で貴重な秘薬がたっぷりとあ

ったのであれほどの傷も治ってしまった。

ただ、水のスクウェアメイジはレコン・キスタには居ないので腕を元通りには出来なかった。

あれからニューカッスルはすぐに陥落した。

戦闘に参加した貴族の話から、抵抗は激しかったものの ” 化け物 ” のような奴はいなかったらしい。

恐らくはどうにかして上手く逃げ果せたのだろう。

そうでなければ、あの使い魔の力を目の当たりにして噂にならないはずが無い。

再びエールのジョッキを傾け、先日己の選択を思う。

トリステイン王国を裏切り、レコン・キスタへ身を投じた事に後悔は無い。

すでに心が死んだ私に忠誠心などは無いが、何れトリステインにも侵攻し聖地を目指すレコン・キスタとは利害が一致していた。

しかし、わたしは大きなミスを犯した。

一つは、あの使い魔の力を完全に侮っていた事。

そのせいで左手を失ってしまった。

もう一つは……

ウェールズが持つ手紙を求める哀れな裏切り者へ

レコン・キスタはガリアの傀儡。虚無の使い手も偽者。聖地を求めるならば、決してウェールズを殺すな。

虚無を知り未来を生きた者より

この手紙を信じる事が出来なかった事だ。

手紙を信じられなかった故にウェールズを殺さないという安全策を取りつつ、私は任務通りに手紙を奪おうとした。

しかし大きな誤算により私は任務に失敗する。

ルイズが私を選ばなかった事に加えて、あの平民の強さは異常だったのだ。



結果として私は片腕を失い、任務も失敗してしまった。

敗れ去り逃げようとする私にあの使い魔は言う。

俺は、嘘は書いていない。

確かにそう言った。

あの状況で言われれば、これはもう信じる他はない。

フーケに調査を頼んではいるが、恐らくはレコン・キスタはガリアの傀儡でありあの男……司令官は偽者の虚無であろう。

私は選択を間違えたのだ。

ルイズとレコン・キスタの虚無をあの使い魔によって同時に失ってしまったと言うわけだ。

まったく、無様なものだ。

恐らくあの時、私の正しい選択肢はルイズに全てを話し協力を願うトリステインに戻って許しを請う事だったのだろう。

しかし、それは選ぶ事ができない。

トリステイン貴族への復讐も諦めるつもりは無かった。

母をあのようになされた連中を許すつもりは無い。

必ずその報いを受けさせてやる。

私は現状を考える。

恐らく、レコン・キスタにはそう長くは居られないだろう。

トリステインへの攻撃は魅力的だが、後ろにガリアが居るとなれば何れどこかで ” 捨てられる ” 筈だ。

ガリアは飼い犬に食い殺されるような国ではない。

また、トリステイン王国に戻る事も困難だ。

ルイズとの関係も決定的に悪化しただろうし、何より私はトリステイン貴族を憎んでいる。

……まったく、状況はかなり不利だな。

唯一、私に有利に働きそうな材料と言えばウェールズ皇太子だ。

今は秘密裏に運び込んだニューカッスルの港の倉庫で眠って貰っているが、司令官がこちらに到着し彼の存命を知れば処刑されてしま

うだろう。

彼をうまく利用できないだろうか？

例えば、彼に協力してレコン・キスタが飼い主に切り捨てられた機を見計らってアルビオンの再興に助力する。

ウェールズ皇太子はアンリエッタ姫の想い人だ。

うまく取り入る事が出来れば、彼女を経由してトリステイン貴族について内偵を頼める可能性もある。

長い期間を置けば、ルイズへとりなして貰える可能性だって出て来るだろう。

……うむ？

これはそう、悪くは無いかもしれん。

ウインドブレイクで無礼を働いた事や、礼拝堂の一件をごまかせるならの話だが。

いや、恐らくはごまかせまい。

あの皇太子は聡明で清廉だ。

邪な企みを持って近くに仕えるのは恐らく無理だろう。

もし彼に取り入るならば、私の目的を話して過ちを詫び、その上でお互いの協力関係を築くことがか。

はは、我ながら青臭いな。

これでは何処かの使い魔と変わらないではないか。

私は一人苦笑を浮かべ、空になったエールの代わりに蒸留酒を頼んだ。

病み上がりなのでエールにしていたが、どうも弱い。

今は強い酒を飲みたい気分だった。

やがて、蒸留酒と共につまみの木の実も運ばれてくる。

蒸留酒に手を伸ばすと脇からエールのジョッキを握った女の手がにゅっと現れて、もう一方の手で木の実をつまみあげた。

「なんだい？随分とこっぴどくやられたようね、旦那。」

「フーケか。」

フードを深くかぶり、エールを片手に持った女はフーケだった。

彼女はつまんだ木の実をぽりぽりと齧りながら私の隣に座る。

「ふん、だから言っただろ？あのボウヤは私のゴーレムの拳を受け止めたんだ。弱いはずが無いじゃないのさ」

「ああ、身をもって体験したよ。ところで、ニューカッスルはどうだったか？まだお宝が眠っているのかもしれないぞ？」

「冗談じゃない。貴族があたふたと慌てる様が見たくてやっていたのに。盗賊にも盗賊なりの美学があるって事さ。」

「そうか。だが、ジエームス国王の遺体はどうしたのかね？それを見届けに来たのだろうか？」

「……玉座で果てていたさ。不思議なもんだね、あれ程憎んでいたのに嬉しくはなかったよ。」

「そうか。」

私は蒸留酒のグラスを傾けた。

フーケも手にしたエールを一気に喉に流し込む。

「私もそっちの強い奴にしようかしら。」

「ああ、なかなか旨いぞ。アルビオンは水がいいからな。」

「おやまあ。旦那、誰に蘊蓄を垂れていると思っっているのかしら？」

「ふん、そうだったな。お前はここの生まれだったという事を失念していたよ。」

「そうさ。家名も名誉も無くしてしまったけど、故郷はそうそうには無くさないもんだよ。」

「私の故郷は憎悪の対象でしかないがな。」

「おや、そう。」

私は木の実をいくつか口に放り投げ、一気に残りの酒を開けた。

それを見計らったようにフーケは新たに二つの蒸留酒を給仕に頼む。

「しかし、随分としおらしくなったじゃない。そんなにあのボウヤにやられたのが堪えたの？」

「そうみえるか？」

「男がそんな飲み方してりゃ、わかりそつなもんよ。」

「ふ、覚えておっじ。」

「で、旦那。」

「ワルドでいい。」

「そう、じゃあ、ワルドの旦那。私は次はレコン・キスタの裏を調査して、司令官の素性を洗えば良いのかしら？」

「ああ。恐らくはレコン・キスタの親玉はガリアだろうがな。」

「へえ。しかしまたトリスタニアの牢獄で会った時とは随分態度が違うじゃないさ。」

「私もいずれ処分される飼い犬にいつまでも付いて行く気はないからな。そら、今回の報酬だ。調査を終えたら好きな所にも行くがいい。」

「……ワルドの旦那はどうするのよ？」

「すこし試してみたい事が出来てな。さる囚われの高貴な方に肩入れしてみようと考えていたところだ。」



「ふうん……旦那、私もついて行って見ていいかしら？」

「いや、お前に復讐として殺されてはかなわん。おとなしく調査をしておけ。」

「いいじゃない、ワルドの旦那。すこしあなたのやる事に興味が出てきた所なのさ。それに……復讐なんてもう忘れちゃったよ。」

「うらやましいな、『土くれ』。私には真似出来そうにない。」

「ふん、真似なぞして欲しくもないわね。」

フーケは肩をすくめ、残り少なくなった木の実を全て口中に放り込む。

それを見計らったように給仕が蒸留酒を二つとつまみの木の実を持ってきた。

「ところでワルドの旦那、あんたは一体何の為にレコン・キスタに居たんだい？」

「ふ、まだレコン・キスタだ。」

「ふふ、そうだったね。だが、ワルドの旦那は他の貴族とは違うよ  
うだねえ。」

「まあ、ハルケギニアの支配だとか共和制だとかは興味はないな。」

「そうみたいね。だから不思議に思うのさ。旦那、どうしてレコン・キスタに居るんだい？ トリステインで隊長してれば良かったじゃないの。」

「……聖地が目的だ。」

「おおやだ。ワルドの旦那は案外信心深いんだねえ。」

「ふん、勘違いするな。目的があるのだ。最近、それが可能だと確証を得てな。」

「へえ。」

「ただ、やり方を間違えた。信じるべきものを信じなかったおかげでこの有様だ。」

「ふ、ふふふ。」

「どうした？」

「いや、旦那。ワルドの旦那。あんた、結構泥臭いんだねえ。もつとこう、貴族様らしい色男だと思っていたよ。」

「……ふん、酒のせいだ。」

「いいじゃないか。私は『土くれ』。泥臭いのは嫌いじゃない。牢獄で会った時の旦那よりずっといい男だよ、あんた。」

フーケはあははと楽しそうに笑う。

私は慥然として残りの蒸留酒を一息に飲み干し、席を立った。

「おや、気を悪くしたのかい？」

「いや、頃合だ。例のやんごとなきお方の許に行く。明日は司令官殿が戦跡検分の為にロンドン・ニウムへやって来るからな。

処刑でもされたらたまらん。今夜の内に決着をつけておきたい。」

「そうかい。じゃあ、ここは私が奢らせてもらおうかしらね。いやあ久々に楽しかった。」

「レディにおごらせる訳にはいかんさ。……おい、この女の分と俺の分の代金はここに置いておくぞ。」

「あ！はい、貴族の旦那様、ありがとうございます。またお越しください！」

「いくぞ、フーケ。」

「まっどくれよ、ワルドの旦那。ああもう！久々の故郷の酒くらいゆっくりと飲みたいもんなのにねえ。」

私は酒場の外に出ると、グリフォンに跨がった。

おっとり刀で出て来たフーケに乗るか？と訪ねると無言で後ろに乗り込んでくる。

それを見た回りにいる酔っ払いの連中が野次を飛ばしてきた。

そんなものは捨て置いてグリフォンを走らせようとした瞬間、フーケが人間大のゴーレムを作り出し全員伸して置くんだよ！と指示を出していた。

考えているよりも激情家らしい。

苦笑いを浮かべ、私はフーケにいくぞと声を掛けてグファイフォンを走らせる。

腰に回されたフーケの手はやけに暖かった。

「へえ、こんな所に港があっただねえ。」

「ああ、レコン・キスタの連中にはまだ見つかっていないがな。連中はニューカッスルの宝を漁る事で忙しい。」

「ふん、貴族様が聞いて呆れるね。」

「貴族とはそんなものだろう？ 貪る相手が平民から一時的に滅んだ王家になっただけだ。」

「ワルドの旦那、なかなか言うねえ。」

「ふん、自分の事だからな。それを自覚しているか、していないかの差でしかないさ。……ここだ。」

私は目の前の扉にアンロックをかける。

『イーグル号』が停泊していた港の狭い倉庫に杖を取り上げた皇太子を眠らせて放り込み、ロックをかけてとりあえずは軟禁していたのだ。

扉をゆっくり開けると奥でだれかが立ち上がるのが見えた。

勿論ウェールズ皇太子だ。

薬が切れ、目を覚ましていたらしい。

私はライトを唱え、部屋に光を灯す。

ウェールズは急に現れた光に手を当て口を開いた。

「だれだ?!」

「……ワルドです。ウェールズ皇太子殿下。」

「うぬ?!ワルド!一体なぜ!ニューカッスルはどうなった!」

「陥落しました。」

「なっ……なぜだ!なぜこのようなことを!!」

「殿下、私はレコン・キスタだったのですよ。」

「そんな!では貴様はトリステインを……アンリエッタ姫を裏切ったのか!」

「はい。」

「許さん!許さんぞワルド!」

「ええ、許して頂けなくても結構ですよ、殿下。しかし、これからどうするのですか?」



「なんだと!」

「杖は奪われ、国は滅んだ。死に場所も失った。あなたは、これから処刑を待つのみ。」

「いや、下手をすればトリステインとの外交のカードにされますな。」

「

「うぬぬ……」

「殿下……すこし落ち着いて。私の話を聞いていただけますか?」

「何を今更! さっさと殺せばよからう。汚い裏切り者め!」

「ええ、その通りです。私は汚い裏切り者です。しかし、殿下のお心一つでわたしはレコン・キスタをも裏切る事になるのです。」

「どづいづことだ!」

「殿下。私の目的は……聖地とトリステインへの復讐です。」

「それがどうした!」

「私は幼き頃、トリステインの貴族に母を謀殺されました。十歳の私の目の前で。」

「……」

「そしてその原因となったのも、他ならぬ私でした。」

以来、私はトリステインの貴族を憎み、母が謀殺される原因となった行為をやり直せる可能性を聖地に見て生きてきました。」

「それがどうしたというのだ。だからアンリエッタ姫を裏切り、レコン・キスタにその身を投じたとも言っただけか？」

「左様です。」

「ふん、それは卿の勝手だ。そんな理由で許しを請いたいのか？そんな事をせずにさっさと私を殺したらどうだ。」

「殿下、私は別段アンリエッタ姫殿下をお恨みしているわけではありません。」

母を殺したトリステイン貴族への復讐をなし、過去へ行きたいだけなのです。」

「過去へ？はは、卿は中々の夢想家だな！」

「いえ、夢物語ではありません。ルイズが……あの、ヴァリエール公爵の娘がそれを可能にするのです。」

「ふん、冗談にしてはつまらんな。」

「恐れながらこれをご覧ください。」

私はあの使い魔の手紙を皇太子に渡す。

彼はそれをひつたくるように受け取り、不機嫌な表情のまま読み始めた。

「これは……ふん、卿に宛てた手紙だな。レコン・キスタはガリアの傀儡？虚無は偽者？？私を殺すな？」

「それは私とあの二人がトリステインを発つ前に私へ送られて来た

手紙です。」

「何?!」

「差出人はあの使い魔の少年でした。彼は……ルイズの力で未来から来たと言っております。」

「なんと!では彼は全てを知りつつここへ赴いたというのか?!しかし、彼はなぜ卿を出発前に告発しなかったのだ?」

「恐らくは、平民という身分の為でしょう。それに……その手紙の内容からしますと、本来殿下は私にあの礼拝堂で殺されていたようなのです。」

「ではなぜ卿は私を殺さない?」

「彼は言いました。殿下が過去へ行く魔法を早く完成させる為に必要なのだと。」

「しかし、信じられん。」

「彼は『イーグル号』に拿捕され、船倉に押し込まれた時に殿下の

存在を知っておりました。そして殿下の変装も……」

「うむ……」

「私もなかなか信じる事が出来ませんでした。今では確信しております。」

「それで私を殺さないか！はは、そういう事ならば納得がいった。生憎私は何も知らん。それに卿に協力などしない。さあ、殺せ！」

「殿下、お怒りはごもつともです。しかし、考えてください。この後、トリステインがどうなるのかを」

「うぬ?!私を脅すのか！」

「いいえ。その手紙が書かれている事が事実ならば、レコン・キスタはガリアの犬です。」

そして、ガリアは飼い犬に噛まれるほど間抜けではありません。」

「うむ……」

「いずれレコン・キスタはどこかで飼い主に捨てられるでしょう。」

その目的は？犬が手に入れた獲物は飼い主が懐に入れるのが通常です。」

「つまり……」

「ええ。ガリアはアルビオンを手に入れるでしょう。レコン・キスタを追い払った国として。」

「同じ方法でトリステインもレコン・キスタに攻めさせ、手に入れるかもしれませんが。」

「おのれ！」

「しかし、殿下がもし生きておられれば、ガリアの企みは阻めるかと。」

「領地はある程度は失うかも知れませんが、イーグル号で脱出した方々が再びこの地で暮らせる位にはなんとかありません。」

「だが！トリステインは！」

「先程も申しました通り、私自身は別段アンリエッタ姫殿下をお恨みしているわけではありません。」

「恨んでいるのはトリステイン貴族です。そして……レコン・キスタに通じているトリステインの貴族の情報を私は知っております。」

「……卿は何が言いたいのだ？」

「殿下をここから逃がして差し上げます。そのかわり、私に協力をして欲しいのです。」

ウェールズ皇太子は無言で何かを考えだした。

恐らくは激昂し混乱した頭を鎮め、思考をめぐらせているのだろう。

やがて、考えがまとまったようだ。

「卿は……忠誠ではなく利で動く男のようだな。」

「左様です。その利とは、先程申し上げました目的です。そして、目的の為ならばわたしはなんでもやります。」

「この手紙は本当なのか？」

「はい、恐らくは。確証を深める為に裏を取りますが間違いは無いでしょう。」

「卿の利とは、トリステインに居る母の仇を討つ事、過去へ行く方法を得る事だな？」

「はい。私が殿下に提供するはこの場の脱出、トリステイン貴族の裏切り者の情報、それと殿下の影となり杖を振るう事です。」

「しかし、私は過去へ行く手がかりなど知らぬぞ？」

「鍵はルイズが持っていきます。私は知っての通り、彼女との関係をかなり悪くしてしまいました。」

殿下にはいずれアンリエッタ姫を経由して取り成して頂ければ結構です。それと、もし魔法の完成に協力を求められたならば応じてください。

それと私の仇も姫を通じて内偵をしていただければ、私が殿下を裏切る事は無いでしょう。」

「つまり私はアンリエッタ姫に卿の仇の内偵とルイズ嬢へのとりなしを依頼し、過去へ行く魔法の完成を依頼されれば協力してやればよいのか」



「左様です。」

「卿が裏切らないとの保障は？」

「ありません。しかし、利害が一致している限りは殿下に忠を尽くします。」

暫くは室内を沈黙が支配した。

どれくらいの間が経っただろうか、ウェールズ皇太子は搾り出すような声を出した。

「……ふん、死に損なうものではないな。こんな屈辱は初めてだよ、ワルド子爵。裏切り者の汚い手を借りる事になるとは。」

「では……」

「君がそうするように、私も姫の為なら何でもやるさ。子爵以外に

レコン・キスタの内通者がトリステインに居るのならそれを排除せねば。」

「契約成立ですな。」

「いいや、まだだ。私の杖を返したまえ。」

私はフーケに持たせていた皇太子の杖を受け取りゆっくりと渡した。

ウェールズ皇太子は杖を受け取ると、突然ウンドブレイクを唱え私に杖を向ける。

私は強く壁に叩きつけられ床に倒れて呻きながら、杖を構えようとしたフーケを急いで制止する。

皇太子を見上げると、ニヤリと笑いながら杖をしまう所だった。

「これで礼拝堂の一件はチャラだな、子爵。」

私は苦笑いして立ち上がり、恭しく一礼する。

「そこに私のグリフォンを繋いであります。路銀もここに。今ならロシエールの港に『イーグル号』が停泊しているはずですよ。私はこのままレコン・キスタに残り、内偵を進めます。」

「わかった。連絡方法は？」

「私の ” 偏在 ” を使います。」

「驚いた！子爵はスクウェアメイジだったのか！」

「はい。以後その力を殿下にささげましょう。」

「ふん、私と君の利害が一致する限り、だろ？」

「左様です。」

「聞きたい事はまだあるが、それは後にしよう。」

「は。」

「では数日はロシエールの街にいるから連絡しろ。」

皇太子はそっくり残すとグリフォンを駆り、かつて『イーグル号』が出航した穴から出て行った。

私は服についた埃を払いながらずっと無言だったフーケに声を掛ける。

「フーケ、やけに静かだったな。」

「あら。余計な事を言って邪魔して欲しかったの?」

「いや、生きた復讐相手を前に随分大人しかったものでな。不思議に思ったのだ。」

「ふん、親の罪を子供に償わせる程腐っちゃいないさ。まあ、仲良くはできっこないけどね。」

「そうか。」

「あんたも大変だねえ。あつちいたりこつちについたり。愛する女を取られてまで良くやるわね。」

「別にルイズを愛していたわけじゃないさ。全ては目的の為だ。」

「おや、まあ。酷いもんさね。」

「ところで、フーケ。お前はどつするんだ？名目上はレコン・キスタに所属しているだろ？」

「私の事を話せば出世できるかもしれんぞ。」

「バカ言っつんじやないよ。うんとここで言えばそれこそあんたに殺されるじゃないか。」

「ここについて来る事を決めた時から、レコン・キスタから抜けるつもりだったさ。」

そんな私の面倒を見てくれる位の甲斐性は、ワルドの旦那にはあるんだろっ?。」

「ふん、金なら幾らでも用立ててやる。何しろ、陥落前にたっぷりと良い宝石やら装身具を頂いていたからな。」

「呆れた! あんたはそんな真似もするんだねえ。」

「言っただろう? わたしは目的の為ならなんでもやると。」

「ふふん、やっぱり旦那は泥臭いね。気に入ったよ。ねえ、ワルドの旦那、飲み直さない?。」

「そうだな。 ”ワルドの旦那” と言っのを辞めれば考えないでもない。」

「ははは、じゃあ、ワルド。いきましようか。いい店を知っているのよ。」

「ふん、期待しよう。」

フーケが笑いながら元来た道に戻っていく。

私はその背中を追って歩き、首から下げたペンダントを握り締めた。

壊れているはずの心がすこしだけ疼いたからだ。

intermedio2:告白の既視感

「説明して。わかりやすく。」

朝の光が優しく部屋を包んでいた。

アルビオンから俺達が戻って、二日目の朝での事だ。

ルイズはベッドにすわり、側でかきこまるミイラ男のようになった俺を睨んでいる。

彼女のピンクブロンドの髪が光を受け、とても美しい。

俺の手には鳩をあしらったかわいい形のペーパーナイフ。



あれ、なんかデジャヴ。

前もこんな事あったよな？

「な、何をだい？」

「あんたがラ・ロシエールで私に話そうとした事の全て。あの時は信じられなかったけど今なら信じられるから。」

それに、これからの事を話しあっておかないと。」

「それには俺も賛成だけどさ……今夜じゃだめか？授業があるんだろ？」

「午前中は時間をたあっぷりと取ったわ。夜からだとあんた、それまでに無茶して怪我しそудなものね？」

「はは、心配すんなよー！」

「あなたね！私が何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も結局無茶して大怪我するじゃない！」

姫殿下に手紙の事を報告して学院に帰って来てから丸一日寝込ん

どいて、信じられるわけないでしょ！」

「う……」

ちなみに寝込んでいる間妻ルイズが夢に出て来て、泣あかあせえたああわあねえ！！と鬼のような形相でお置ききされてずっとうなされた。

一切の弁明も通じず、ひたすら俺を蹂躪する内容の夢だったから本物じゃなくて純粋な夢なのだろう。

きっと俺の罪の意識がそうみせているんだ。

そう、思いたい。

「……本当に死んじゃうかと思ったんだから。」

「ゴメン……」

「怪我を治す秘薬だって、とうとうお金が足りなくなって完治させられなくなるし。もう散々だったわ。」

「だからさ、さっき来た医者申し出を受けて血を買い取ってもらえばよかつたんじゃないか？」

「いやよ！ただでさえ一昨日はあんた血をドバドバ流してたじゃない！私ミイラを使い魔にするつもりは無いわよ！」

「今だってミイラ男みたいなもんだけどな！わはは」

「笑い事じゃないでしょ！この……！」

ルイズはサッとおれからペーパーナイフを取り上げる。

たまらずいでで、と悲鳴をあげる情けない俺。

床にうずくまり、痛みに悶える俺に取り上げたナイフを投げてよこして彼女は続けた。

「はあ。昨日ミス・エイムラントに聞いた話じゃ、今日にでも約束の薬が届く事がせめてもの救いよね。」

「おお、痛。でもさ完治しなかったってだけで、大怪我した分は小怪我にまで治ってるしあとは包帯でいいんじゃない？」

「秘薬が勿体無いと思うんだよなああああいででで！！ナイフ返して！お願い！！！」

「うふふ、小怪我なのにそんなに痛いのか？ねえ、痛いんだ？」

「ごめん！本当にごめん！」

「ほら、わかればいいのよ。じゃ、話して。」

ルイズはそう言って再びポイっとペーパーナイフを投げてよこした。

「学習しないわね、とその目は言っ。」

「おれは脂汗をかきながら必死でナイフを捨つ。」

「えっと、まず俺の事からだな。俺は未来から召喚された。前の主はお前。で、出身はチキユウっていう異世界。」

「そこから既に胡散臭いのよねえ……」

「なんだよ。信じるんじゃなかったのかよ？」

「信じるわよ。ただ、胡散臭いってだけ。続けて？」

「ああ。今まで本当の事を言わなかったのは、ルイズがこれから歴史に大きくかわり過ぎてうかつな事が言えなかったって事が一つ。もう一つは……俺とお前ってさ。その……結婚するんだ。その未来を守りたくて。」

「ななななななんであんと私が！それが一番胡散臭いのよ！」

ルイズは真っ赤になりながら俺の持つペーパーナイフを奪いに来た。

ナイフを高く掲げ、必死に渡すまいとしながらルイズをなだめる。  
背の届かない位置にあるナイフを必死に奪おうと、こら！よこしなさいよ！と言いながら両手を挙げるルイズの姿はとてもかわいい。

「おちつけ！まだしていない！い、いいか？これ、話す上で結構重要なんだぞ？最後まで聞けないならここでお終いだ。」

「わ、わ、わかってるわよ！とりあえず置いておく事にしてあげるわ。かか感謝しなさい！」

「お、おう。でな、……そうだな、結婚関係は最後にしよう。お前が歴史にどうかかわるかから話そうか。」

「そ、そうね。」

「ルイズ、お前が魔法を使えるようになる条件って前に話したよな？」

「ええ。 ”ある魔法” をきっかけにして使えるようになるんで

しょ？……まさか、それウソだったの？！」

「いや、ウソじゃない。ただ、その魔法の系統が ” 虚無 ” なん  
だ。」

「へ？」

「お前は ” 虚無 ” の系統なんだよ、ルイズ。」

「は？」

「 ” 虚無 ” の使い手は他の系統魔法は使えない。コモンマジックも一度 ” 虚無 ” を使わないと使えようにならないんだ。」

「まさか……私が……」

「 ” 虚無 ” の力は凄いららな。当然それを利用しようとする連中がわんさとやってくる。……ワルドみたいにな。」

「ワルドはその事に気がついていたの？」

「ああ。俺のルーンを調べていて知ったらしい。俺は『ガンダール  
ヴ』だ。虚無の使い手だった始祖ブリミルの使い魔だからな。」

「あんたが、ねえ……」

「で、お前が虚無に目覚めるのはそうだな……今日から一月後くらいだったと思う。レコン・キスタが攻めてきて、その戦いの中で目覚める。」

「そんな！レコン・キスタが攻めて来るなんて！早く姫殿下にその事を伝えなきゃ！」

「まあ、待てよ。話を全てしてからだ。」

「……わかったわ。」

「いいか？これから先ハルケギニアのあちこちで戦争がおきて、俺達はその中心になる。」

「なんでよ？」

「虚無がそこにかかわるからだ。」



「！」

「わかるか？」 虚無” の力のせいで俺達は戦争に巻き込まれるんだ。」

「そんな……」

「……心配すんな。俺はその全てからお前を守りきった。今度も絶対に守ってやる。」

「サイト……」

「いいか？大まかな流れを言うぞ？」

ルイズはきゅっと拳を握り、神妙に頷いた。

俺のおぼつかない説明を熱心に聴く。

アルビオン戦役の事、ロマリアの事、そしてガリアの事。

ルイズは時に激昂し、時に悲しみながら俺の話聞いた。

タバサの母ちゃんの話話し終えた所で扉がノックされ、シエスタが朝食を持ってきてくれた。

ルイズが頼んでおいてくれたらしい。

続きは朝食の後にしましょうと言うとルイズは立ち上がった。

慌てて俺は椅子を引き、彼女を座らせる。

テーブルにはなぜか貴族用の食事が二人分並ぶ。

俺のいつもの塩のスープと蒸した芋<sup>エサ</sup>は無い。

おもわず床を確認したが、やはり無い。

ははは！シエスタ、間違えてキュルケの部屋のフレームん所に行っただろ？

やだなあ！あれ俺んだぞ！

食べられない内に取り返しに行ってくれないか？

「何してるのよ?」

「俺の……飯がない。シエスタ、間違えてフレイムの所に置いて来た?あ、もしかしてギーシユのヴェルダンデの所?」

「サ、サイトさん。いくら私でもそんな間違いは……」

「あんたの朝ごはんは目の前にあるじゃない。」

「え?床のどこにもないぞ?やだなあ!いくらガンダールヴでも埃は無理だぞ?はは、ルイズ。俺の事誤解してるな!」

「誤解しているのはあんたよ!さっさとテーブルにつきなさい!」

「へ?これ、人間の食い物じゃん。」

「今までのだって人間用よ!……そりゃ、ちょっとはケチってたけど。」

「い、いいのか?」

「良いに決まってるでしょ！ほら、とつと食べるわよ！まったく恥ずかしい……」

ルイズはバツが悪そうにそう言って食事の前のお祈りを始めた。

俺も慌てて席に着き、形だけお祈りの真似をして食事を摂る。

いつもならば塩のスープと蒸した芋か岩のように硬いパンがおれの朝食だ。<sup>エサ</sup>

ところが今日は高嶺の花だった朝食が目の前に並んでいる。

食前酒のスパイス入り赤ワインと白いフワフワのパンにアーモンドのポタージュ、軽い果実酒とガチョウのローストにゆで卵。

デザートはオレンジの皮のシロップ漬だ。

ちなみにハルケギニアでは鳥肉、豚肉、牛肉の順番で高級になる。多分、日本と正反対だ。

これは牛を食用に飼育するという発想が無い為だ。

牛は食べごろになるまでに何年もかかり、もっぱら平民の労働力と

なっている。

加えて労役につかって働けなくなった牛は食用としては確かに貴重なのだが硬く、脂も乗っていない上高齢なのでまずい。

一方豚はというとその辺の山や森に放っておけば勝手に育ってくれる。

秋口に雄と雌を少し残してあとは食用にしてしまう事が一般的だから、結構ポピュラーな肉だったりする。

その点、鶏やガチョウは飼育がしやすく、品種改良も進んでいて貴族に供されるものは専用に育てる事ができる。

豚も貴族専用に育てられてはいるが、敷地内飼育では穀物事情に左右されやすく結構難しいらしい。

従来のやり方の場合専用の森をあてがう等の方法になるのでこれはいまいち脂の乗りが悪い。

と、いうわけで目の前にはその最上級の肉がある。

「良かったですね、サイトさん。」

「ああ！ああ！俺、ついにやったよ！ついに鳥肉を食べたよシエス

「タ！」

「うふふ、あとで食器を取りにきますからゆっくりと味わってくださいね。では、ミス・ヴァリエール。失礼します。」

そう言ってシエスタは一礼して部屋を出て行った。

ルイズは不機嫌そうに彼女を睨み、それから俺にさっさと食べと促した。

俺があまりにうまいうまいと肉を食べていると、彼女は呆れたように自分の分を差し出してくれた。

ああ、幸せだ！

目の前に美少女、そしてうまい肉！

他に何もいらん！

俺は瞬く間に肉を平らげる。

やがてルイズも食事を終え、一息ついた所で目を泳がせもじもじとしながら俺に問いかけてきた。

「そ、そそれで。あ、あのね。」

「ああ。」

「わ、わわ、私たちが結婚したって話は……」

「本当だ。」

瞬間、彼女は真っ赤になりつつむいた。

なによ、そんな、でも、身分がなどとブツブツ呟いている。

やべ、押し倒したい。じゃない、超かわいい。

「えっとな、ルイズ？」

「わわわわ、わたしこころの準備がままままだ！」

「いや、あのな？意識しないでくれるとうれしいんだ。」

「そん、そんなの無理よ！」

「確かに俺が来た未来もそうだった。俺だって……その、結婚した  
いさ。だけど、それは絶対じゃない。」

「どういふことよ！まさか、イヤになったとか言っんじゃないでし  
ようね?!」

「いや、あくまでお前がその気になったらの話でいいんだよ。未来  
がそうだからって理由でさ、変に意識するのってイヤだろ?」

「まあ、そうだけど……」

「だから、結婚してたって話はあくまでもそういつ可能性があって、  
そうなってたって程度に考えてくれ。」

「え、ええ。そうね。そうよ、未来がそうだからって、必ずその通



りにしなきゃいけないなんて事はないものね。そうよ、うん、そうよ……」

「でもま、そもそも俺はお前と一緒にになる為だけにここに来たんだけどな。」

そういつて俺はニカッと笑って見せた。

ルイズは真っ赤になり、なにやら聞き取れない言葉を発しながらわたたと手を振っている。

ほら、落ち着けよと手をつけていなかった俺の果実酒を渡すと、彼女はそれを一気に飲み干した。

「ぶはっ、はあ、はあ、」

「落ち着いたか？」

「そんな訳ないでしょうが！あ、あんな事サラっと言ってるんじゃないや

ないわよ!」

「ははは、悪い。」

「まったく、心臓にわるいったらないわ。」

「まあ、この件は置いとこう。今話して何らかの決断をしなきゃいけないって訳でもないだろ?」

「そうね。」

「続けるぜ? でな。俺……八十四歳の俺がお前に十七歳の姿で召喚されたのは偶然じゃない。」

「どづいうこと?」

「俺が老衰で死に掛けてた時に、未来のお前が虚無の魔法で送ってくれたんだ。」

「そう……」

「で、十七歳のサイトと俺の精神が融合されてお前に召喚されたって事だったんだけど、誤算があつてな。」

「うん。」

「まず、未来のお前との使い魔契約は切れていない。だからおれのルーンは”ダブル”になった。」

「それがこの前聞いた内容ね。」

「ああ。次に、”ダブル”を使った影響で融合したはずの精神が再び八十四歳と十七歳に分離しようとしている。」

「?よくわからないわ。」

「二つあるルーンがそれぞれの主を求めて、精神を二つに割ろうとしているんだそうだ。」

「へえ……大丈夫なの?」

「いんや。酷いことにな、二つのルーンは揃いもそろって分離した精神の内、若い方の精神を主にしたいらしい。」

「どうしようかと？」

「俺、八十四歳のサイトは若いサイトの精神に飲み込まれ何れ消える。」

「なっ?!」

「お前と会ってから消える瞬間までの記憶は、その時に一緒に消えるんだ。勿論、未来の知識も。」

「なんでよ!」

「ダブル」を使った影響だって。あれを使うほど俺の精神は飲み込まれ、記憶は消えていくってロシエールの宿で言われた。」

「……飲み込まれるとどうなるの?」

「お前が本来、あそこで会はずだった俺になるだけさ。未来の記憶のない、普通の奴だ。」

心配すんな。もしそうなくても、ちょっとバカでスケベだけどいい奴だと思っぞ?」

「いや……」

瞬間、ルイズはテーブルを叩いて立ち上がった。

「いやよ、そんなの。」

「心配いらねって。それにこれは決まったことじゃないんだから。」

「そんなのイヤよ！あんだ、いつも無理して ”ダブル” すぐ使  
うじゃない！」

それに、いくら死なないからって記憶が無くなるなん……今まで  
の事すら忘れちゃうなんて絶対イヤよ！」

「おい、落ち着けよ？」

「いい？！今後絶対 ”ダブル” を使わないで！約束して！」

「……わかった。約束する。」

「足りないわ。」

「足りないって……」

「あんた、私を守るって何度も言ったわよね？」

「ああ。」

「その心に決して違えないと誓って。二度と使わないと。」

ルイズは不安げに俺を睨む。

少し泣きそうな顔は白く、ピンクブロンド髪はどこまでも綺麗だった。

一瞬、見蕩れながら自覚する。

彼女に悲しい顔をさせているのはまぎれもなく俺だ。

それから、何度も確認してきた自分の目的を思い出す。

俺はゆっくりと、自分に言い聞かせるように答えた。

「わかった。誓うよ、ルイズ。お前の使い魔として、二度と使わな  
いと誓う。」

「絶対よ?」

「ああ。約束に加えて誓う。使わない。それに、目的も果たさない  
といけないしな。」

「目的?」

「その……俺さ。未来じゃトリスティンとガリアとアルビオンの…  
…王配もやってたんだ。」

「……え?今なんて?」

「王妃……正確にはただの妾だったけど、さ。」

「えっ？え？理由わかんない。」

「信じられないだろうけど、俺、王家の礎？になる為にその……ア  
ンリエッタと、タバサと、さっき話したティファニアって娘との間に  
子供を作ったんだ。……ついでにシエスタとも。」

「はああああああ？！なな、何してんのよあんだ！！」

「度重なる戦乱で、各国の繋がりを強くする為に王家同士の婚姻を  
繰り返せるよう、虚無の血筋以外にもう一つ血筋を入れる為だった  
んだ。」

「よよよ、よりもよってアンリエッタ姫殿下とも！わわ、わたし  
というものがありながら！

それに何よついでにシエスタともって！なに？ついでにって何な  
のよ？！」

「で、さ。死に際にそれを後悔してるって言ったらやり直すチャン  
スをお前に貰ったってわけなんだ。……ルイズ？」



「ジュ、ジュジュジュジュジュジュ」

「こ？鶏の物まねか？おいおい、まじめに聞いてくれよ。」

「殺す！絶対殺す！！」

この後、ルイズが飛び掛って来た所までは覚えている。

その後の事は覚えていない。

デルフに聞いてもカタカタと震えるだけだった。

食器を片付けにきたシエスタが、半狂乱で口に出す事もはばれる事を俺にしていたルイズを止めてくれたらしいが一体俺の身に何があつたんだろう？

今、俺はあの医者部屋の床に転がっている。

小怪我になっていた怪我が大怪我に戻っているそうだ。

ちょうどジゼルが約束の秘薬を持ってきてくれたので、今からそれをつかって治療をすると医者は言った。

おい。

その使い魔デカイヒルは必要ないだろう？

どうして俺の腕に吸い付かせているんだ？

あ、また意識が……

気がつくと、俺は再びルイズの部屋のベッドで寝ていた。

ルイズが心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

窓からは赤い光が差し込んでいる。

もう夕方らしい。

全身に巻かれていた包帯は無くなっていった。

「気がついたようね？」

「……ああ。よく覚えていないけど、なんか酷い目にあつた夢をみたよ。」

「……謝らないわよ。」

「はは、いいえ。怒ってくれるのはいい傾向だとおもつからな。」

俺はそう言って体を起こし、ベッドから降りた。

どこも痛むところはない。

傷も綺麗に治っていた。

マリクさんの調合の腕は本当に良いらしい。

ふう、とむくれて俺が寝ていたベッドに腰掛けるルイズに笑いかけ、朝の話の続きをする。

俺が、一番言いたかった事だ。

「その、おれがここに来た理由なんだけどさ。」

「ふん、なによ。口説き足りなかった女の子でもいたわけ？」

「いや、逆なんだって。お前だけを愛する為にここに来たんだ。」

「な?!」

「前の時はさ。俺、流されてその、子供をあちこちに作ったさ。その子や、母親になったみんなもそれなりに愛した。

だけど、さ。誰一人、本当に幸せにできていなかったんだ。俺が

本当に一緒に居たいって思っていたのはお前だったからな。」

「な、あんたは何を……」

「お前もそれを受け入れていたんだ。その分、泣いていてさ。だから、後悔してたんだ。」

「サイト……」

俺はルイズの目の前に立ち、彼女の瞳をまっすぐに見る。

「で、今度こそはお前だけを見るためにここに来たんだ。それが、あいつとした約束なんだ。」

「あ、あんたの生まれてくる筈の子供はどつすんのよ!」

「ルイズは心配いらなと言っていた。俺はそれを信じてる。」

優しく彼女の両肩に手を沿え、俺は微笑んだ。

添えられた手を払おうとはせず、ルイズは鳶色の瞳で俺をただ無言で見つめていた。

差し込む夕日が彼女の頬と髪を赤く染めている。

「俺はルイズが笑っている所が見たいんだ。だからルイズ、俺はお前を守る。お前の為に戦う。お前を……愛している。」

そう言って、ゆっくりと唇を近づけた。

びくん、と一瞬彼女が震えた事が伝わってくる。

俺は構わず唇を進め、目を閉じた。

次の瞬間、すさまじい衝撃を顔面に受け俺は昏倒した。

おごごと呻きながらルイズをみると、おでこに手を当て涙目で俺を睨んでいる。

差し込む夕日の光が相変わらず暖かだ。

「ふ、ふん！騙されないんだから！」

「る、ルイズ？」

「治療したあんたをここに運んできたシエスタってメイドとエイムラントが、あんたを熱っばい目で見てたの知ってるのよ！」

「ご主人？」

「あんた、どうせそう言っただけで口説いてるんでしょ！わ、私は騙されないんだから！」

やっぺ、間が悪すぎたみたい。

超怖い。

ああ、そっぴやルイズってこういう奴だった。

嫉妬深くて、怒りっぽくて、人の話聞いてくれなくて、すぐ勘違いして、疑り深くて、それでいて可愛いんだ。

「今は、ね。」

「勘違いしちゃだめよ！私はあんたと結婚するつもりは、今はないんだからね！」

「なによ！なによなによなによ！」

「なんでもない。さ、飯食いに行くっぜ。そろそろ夕食だろ？」

「待ちなさいよ！まだ聞きたいことあるんだから！」



「ほら、食堂が混むぜ？話なんて後からでもできるだろ。」

俺はイシシと笑ってルイズを促した。

彼女は深くため息を一つつくと、そうねといって俺と同じように笑った。

それは既視感を感じるような、彼女の屈託のない笑顔だった。



3 - 1 : 立派なメイジになりたい

超怖い。

別におイタをしたわけじゃない。

大怪我をしたわけでもない。

お説教をされるような事も何一つしてないし、理不尽な言いかけりをつけられて蹴られたわけでもない。

ルイズの生理だってまだ先だからイライラしている様子に怯えることも無い。

え？

どうして知っているのかって？

そこは聞かないのがエチケットって奴だ。

では何が超怖いのか？

それは……

「おい！ルイズ！そこは僕の席だぞ！どうしてその平民を座らせるんだ！」

「うるさいわね。あんたは他所で食べてればいいじゃない！この風邪っぴき！」

「『風上』だ！お前記憶力もゼロなのか？おい、平民。さっさとそこを退けよ。」

「なあ、ルイズ。俺、同じメニューを食わせてもらえるなら別に床や厨房でもいいぜ？わざわざ朝からケン力することはないさ。」

「だめよ。ここに座っていないさい。これは命令よ。」

「あ、ああ。わかった。命令なら仕方ないな。」

「こら！平民！さっさと退けよ！その汚いナリで僕の席を汚すんじゃないブヘー！！」

言い終わらない内にルイズの拳がマリコルヌの顔面に突き刺さる。

脇を閉め、最短距離を奔る見事な一撃だ。

お、おい、やりすぎなんじゃないか？と言いかけて慌ててルイズから目をそらしてしまう俺。

超怖い。

こういう時は絶対に声を掛けてはいけない、と記憶している表情だったからだ。

「マリコル又、『ゼロ』と私を呼ぶのは構わないわ。ううん、むしろ”言い得て妙”だとも思うの。いくらでも言うといいわ。だけど、私の使い魔を侮辱する事は許さないからね？」

ルイズはそう言うつと何事も無かったかのように席に着いた。

その仕草は大貴族の淑女にふさわしいものだ。

周りの席からおい、どうなってるんだよ？という視線が俺に突き刺さる。

俺は床に転がり鼻に手を当てるマリコル又を助け起こしながら小声で悪い事言わん、椅子持ってこいな？な？と少し焦った調子で囁いた。

マリコル又はコクコクと頷いて椅子を取りにすっ飛んでいく。

いつもと違うルイズの事は置いといて俺はとりあえず周囲の視線は黙殺し、食事前のお祈りを済ませて黙々と食事を進める事にした。

今日はカボチャのポタージュにいつもの白いパン、スクランブルエッグにハシバミ草のサラダ、そして肉汁たっぷり厚切りのベーコン。

ちくしょう、うまいったらありゃしない。

ハシバミ草の苦さがベーコンの脂っこさを和らげるって寸法だ。

こりゃ、たまらんね！

うまいうまいと食っていると、不意に隣の席から皿がつついと移動してきて視界に入った。

驚いて顔を皿がやってきた方向に向けると、ルイズがベーコンをくれると合図らしき事をしてきた。

俺は目を開いて彼女を見る。

ルイズは少し頬を染め、眉根を寄せてうぬぬっといった調子で俺を睨んでいた。

「いいのか？無理すんなよ？」

「なによ。ご主人様の厚意が受けられないって言うの？！」

「いや、そうじゃないけど、な？」

「あんたが美味しそうに食べているからあ、あげたくなったのよ！

悪い?!」

「い、いや。ありがとうな?」

礼を言うとルイズはフン!と鼻息を鳴らして俺の皿にベーコンを移し、自分の食事に戻った。

俺はドギマギとしながらも旨いベーコンに舌鼓を打つ。

その様子を目を丸くしながら周りの連中は見ていたが、なによ?とルイズが睨むとすぐに各々の食事を再開していた。

831

そういや、朝からルイズがおかしい。

一人で着替えたがるし、顔も一人で洗っていた。

洗濯も俺に言い付けるのではなくメイドを呼んで頼んでいたし、掃除もしなくていいととまで言い出したのだ。

俺、仕事無いんだけど?と聞くと、あんたの仕事は私の使い魔でしょ!と怒られた。

いや、雑用全般が使い魔としての俺の仕事だってお前が言った事な



んだが……と言いかけてやめた。

別に火竜の尾を踏む必要はないしな。

「えつと、じゃあルイズ。俺、鍛錬してるから授業頑張れな？」

「え？だめよ！サイトは私と一緒にいるの！」

食事を終え、食堂を出るときに意外な事をルイズは口にした。

これまでの彼女なら絶対に言わないような台詞だ。

「え、いや？あの、その、な？俺”ダブル”封印の為に強くならないといけないだろ？」

「そんなの、夜やんなさいよ！」

「そりゃ、そうなんだが……」

「あのね？私、昨日考えたの。」

「おっ？」

「サイトはいつも大怪我をしているでしょ？」

「べつに、そんなことは……無いと思う。」

「それに、きっと私の知らないところで女の子口説いているわ。」

「そん、そんなことないぞ！」

「うそおっしやい！昨日私に言ったように、あのメイドやエイムラントにも言ってるのよ。お前を守る、お前だけを見る、お前を愛してるって……」

「言わない！言わないよ！……守る位はちょっとは言つかもしれないけど。」

「そらみなさい！そしてあんたは大怪我すんのよ！」

「しないって！」

「だからね？あんたをずっと目の届く所に置いておくことにしたの。」

「

「うげー！」

「うげってなによ！大体ね、いくら私とはけ、けけ結婚するとは限らないからってあんたは未来の私とは結婚してるんでしょ！？」

「あ、ああ。」

「なのに浮気をしてる所をこの私が見逃してたら、未来の私はきつと悲しむわ！だから私が代わりに見張るのよ！」

「あ、あの？言ってる意味が……」

「とにかく！あんたはずっと私に張り付いていればいいのよ！」

なんだこれ？

可愛い。

うん、可愛いんだが……なんだこれ？ちょっと行き過ぎなんじゃないか？

なんだかトイレにまで付いて来そうな勢いだぞ？

あ。

そっか。

多分、ルイズ自身も俺への好意はあるんだ！

元々独占欲や嫉妬心は強いから、そういったものをまだ恋人でもない俺に発揮するには使い魔って立場が便利だったんだよな。

そこに未来の自分の夫であるあんたを監視するという大義名分を得たって事が。

ふふふ、よーしよし。

着実に俺に靡いてくれてるってことか！

いやあ、ワールド相手に痛い思いをした甲斐があつたぜ。

電撃で焼かれたり、斬られたり、刺されたり、左耳が聞こえなくなったり、ルイズには内緒だけど左目がたまに霞むようになったりと散々だったからな。

ふふ、可愛い所があるよな。

これからは四六時中いっしょかあ、ドキドキしてくるぜ！

……ん？なんでだ？すっごく重い気もする。

こっ、なんだ。

前に浮気の疑惑が持たれ、激しいお仕置きの後には真実が伝わり「あなたの脇があまいからよ！」と四六時中あいつの側に居る様命令された時のような？

そっぴやルイズって極端だからなあ……

これ、エスカレートしたらトイレやフロの中まで付き合わされるんじゃないか？

いや、風呂は大丈夫だけどさ。

むしろウェルカム、一緒に入りたい。

あ！そっぴや風呂まだ作ってないや。後でマルトーさんに大釜をもらおう。

「ほら、いくわよー」

「へい。」

いつものように考え耽っているとルイズに促されてしまい、あわてて教室に向かった。

教室に入ると先に入っていたルイズはクラスメイトに囲まれ、質問攻めに会っていた。

どうやらアルビオンの一件が噂になり、ルイズが何か王女様の密命を果たしたと知れ渡っていたのだ。

だれだよ漏らした奴はと思いつつながらキュルケとギーシュをにらむ。

タバサはあり得ないから除外。

キュルケは首を振り、ギーシュはプイッと目を逸らした。

お前か、ギーシュ。

ルイズとクラスメイトの会話から、昨日の午後はどうやら授業には出ていなかったらしい。

結局俺の看病を一日中してた、って事か。

「ねえ、ルイズ。一体どんな任務だったの？ギーシュに聞いても肝心な所は教えてくれないの。」

「教えられる訳ないじゃない、モンモランシー。密命だったんだし。」

「いいじゃない、ちよつと位。」

「だめよ。いいわね？キュルケ。ギーシュ。もし漏らしたら打ち首よ？」

ギーシュとキュルケはコクコクと頷く。

取り付く島もないルイズの様子にクラスメイト達は不満を漏らし、

今度は負け惜しみを口にした。

「なんだよ。まあ、どうせ大した事じゃないんだろうさ！」

「そうよ。だって、ゼロのルイズだもの。魔法が使えないルイズに大した事できるわけじゃない。」

危険な事はその使い魔がきつと全部やってくれたんだわ。だって、あんなに強いのにいつも大怪我しているものね？

まったく、いいわね。自分は安全な所において危ないことは全部その使い魔がしてくれるんだから。」

モンモランシーのその言葉にルイズは何かを言いかけたが唇を噛み、悔しそうな表情を浮かべる。

別にルイズは安全な所から俺を危険な目に会わせている訳じゃないが、そう見られてもおかしくはない部分もある。

言い返せない彼女がすこし可哀相だったので、代わりにおれが反論する事にした。



「それは誤解だよ、ミス・モンモランシ。使い魔がご主人を体を張って守るのは当たり前だろう？」

俺が大怪我してしまうような任務だったんだ、ルイズが安全な所にいたんなら俺も体を張る必要がないじゃないか。

フーケの時だって、ご主人が真っ先に杖を掲げただぜ？少しは評価する度量をみせてやれよう。」

「ふん、生意気な平民ね。あんたはすっこんでなさい。何よ、きつたないなりして……何？」

気がつくくと、ルイズが俺とモンモランシーの間に割って入り彼女を睨み付けていた。

その様子を見て怯えるマリコルヌ。

おう、気持ちにはよくわかるぜ？怖いよな。

「ミス・モンモランシ。いい？覚えといて。私の使い魔を侮辱しな

いで。それは私への侮辱でもあるわ。

サイトは平民かもしれないけど、わたしの使い魔でもあるのだからね？」

なにこれ？

いくらなんでも、いきなりやさしくなりすぎなんじゃないか？

こっ、意中の殿方を庇う女の子って感じじゃないぞ？

その気迫にうろたえながらも、ふん！と言い残してモンモランシーは自分の席に戻っていった。

周りの空気が重い。

視線も痛い。

居心地の悪さを我慢しながら、やがて来たコルベール先生の授業が始まった。

そしてコルベール先生謹製の愉快なへび君をルイズが爆散させ、いつかのように俺達が後始末をすることになったのだった。

そしてその夜。

やっぱりというか、当然というかルイズは俺の鍛錬にまでついて来た。

虚無に目覚める為には虚無の魔法を一度唱える必要がある事をルイズはもう知っている。

だからもう「きっかけの魔法」を探す必要はなく、彼女が鍛錬に付き合う必要性はない。

無心にデルフを振るう俺を眺めながら、ルイズは人気のないヴェストリの広場の隅で膝を抱えてちよこんと座っていた。

「サイト、暇。」

「じゃあ部屋に先にもどってなよ。」

「あんたも一緒じゃないといや。」

「んなこといったってさあ。俺、強くならなきゃいけないんだし。」

「今でも十分強いじゃない。スクウェアメイジだったワルドに勝つ

てるのよ？あんだ。」

「ダブル”使ってな。」

「前はどうかだったの？負けちゃってたの？」

「なんとか勝てた。」

「ならいいじゃない。」

「よくねえよ。前もボロボロだったんだし。これからも何度かボロボロになるんだぞ？」

「う、それはやだ。」

「だろ？前と違って俺の戦闘経験はあるけどさ、そんなもん今のまじじゃ殆ど役にたたねえんだよ。」

「どうしてよ？」

「体がついてこない。ルーンの身体能力強化は素の俺を基準にして

るみたいだからな。鈍ってるままじゃ意味はないさ」

「今のままでも十分なんじゃない？」

「あのな。今の俺はルーンの力無しじゃ何もできないも同然なんだ。そりゃ、前と違って技や経験はあるさ。だけどそれらは体が出来上がって初めて使えるんだ。」

「ワルドはルーン無しでも俺の動きについてきた。つまりな、鍛えれば今の動きはルーン無しでもある程度は出来るって事だ。」

「素の俺がワルド並みに動けるようになれば、ルーンを使った時の効果はずっと上がるはずだろ？」

「そんな事できるの？ひよろっちいあんたに。」

「全盛期の俺って結構凄かったんだぜ？」

「信じられないわね。」

「信じてくれよう。俺、今よりもっと強くなるんだってば。」

「今でも十分強いわよ。」

「だめだ。」

「なんでよ？」

「確かに今なら俺はどんなメイジにも負けないだろうさ。 ” ダブル” が無くてもな。」

「だけど、その強さは魔法の無効化ができるデルフとルーンがあつて初めてもてる強さだ。」

「そんな動くマジック・ウェポンなんて俺は嫌だ。」

「いいじゃない、それで。」

「じゃあ、今のままルーン使いまくって怪我した方がいいのか？」

「やだ。」

「だろ？だからこうして鍛錬しておくんだよ。強くなれば怪我をす  
る事もなくなる。」

「それに体さえ作ればあとは思い出しながら、なんとか取り戻して  
いけるだろうしなつと。」

そう言っつて俺は思いっきりデルフを薙ぎ払う。

止めの位置でピタリとさせるつもりだったが、体は流されて泳いでしまった。

やっぱりまだまだだよなあ、と苦笑いを浮かべた。

「……ねえ。」

「なんだ？」

「虚無ってどんな魔法？」

「そうだな……お前の失敗魔法あるだろ？あんなかんじなんだぜ。エクスなんとかっつて名前の。」

「爆発？それが虚無？」

「いや。他にも幻影を作り出したり、瞬間移動したり、記憶を消したり、いろいろできるぜ？」

「そうなんだ。」

「どづした？」

「……あのね、ワールドが言ったの。あんたは伝説の使い魔だって。」

「ま、な。だけど俺が凄いいんじゃないぞ？ このルーンとデルフが凄いだけさ。それがイヤだからこつやって鍛錬してるんだけど。」

「なのに、そんなあんたを使い魔にしている私は魔法ができないわ。」

「今はな。」

「あのね、私ね？ 立派なメイジになりたいの。強く無くてもいいから、きちんと呪文使えるメイジになりたい。」

「もうちょっとの辛抱だ。もうすぐ使えるようになるぞ。覚えようとして覚えられるもんじゃないし。」



「うん。」

ルイズはそれつきりで黙り込んでしまった。

俺も再び鍛錬に集中する。

それからすこし経ってから俺は鍛錬を切り上げた。

ちなみにデルフは先日ルイズが我を失って俺に飛び掛った時の事を見て以来、何も話さなくなっていた。

お前、一体何を見たんだ？

どうしてその事を聞くとカタカタと震えるんだ？

「じゃ、サイト。部屋にもどりましょうか。」

「ああ、先に戻っててくれ。」

「……何よ？私に内緒でどこかに行くの？」

「違うって。ほら、俺汗かいてるだろ？だから洗濯場で体を拭いて服を着替えるんだ。」

ちなみに俺は厨房の見習いの兄ちゃんからズボンとシャツを分けてもらい、鍛錬する時や一張羅を洗濯した時に着ている。

ああ、そついや俺の一張羅もそろそろ限界だよなあ。

ワルドの奴に穴をばこぼこ空けられたし。

同じデザインの服を作りたいけど金がないんだよなあ……

アンリエッタ女王からのアルビオン行きのご褒美は、個人的な密命だったからあの水のルビー貰っただけだし。

王子の風のルビーは王女にあげちゃったし、どうしようかなあ。

……また血を売るかな。

「な、ななにしてんのよ。い、いくわよー！ほらー！」

「ん？」

「洗濯場！そこで体を拭くんでしょー！？」

「あ、ああ。だけど……」

「ついでいく。」

「ええ？！はずかしいよー！」

「な、何がはずかしいよ！あんだだつて散々私の服を着せるときに下着姿見てたじゃない！」

「あれはお前がそうしろつて命令だったし仕事だったろ？それに今は着替える時は廊下に出ているじゃないか。」

「私だつて仕事よ！あんだが浮気しないように見張らなくちゃいけないんだし！」

「い、いや、浮気って、俺たちまだ……」

「勘違いしないで！未来の、そう！未来の私のためなんだから！ほら、いくわよ！」

ルイズはそう言ってズンズンと洗濯場の方へ歩いて行ってしまった。夜目にも分かるほど耳が真っ赤になっており、がに股で手と足が同時に前……というか横に出ている。

音にするとギーコ、ギーコと歩く彼女の後ろで俺はやれやれ、とかぶりを振ってせかすルイズに続いた。

洗濯場では案の定、服を脱ぎ体を拭く俺に変なモノを見せるな！と桶を投げつけてくる。

だったら見なきゃいいのに。

そりゃ、上半身だけですむならいいけどさ。

アッチの方も拭いておかないと、ルイズと同室で暮らすにはいろいろとまずい。

っていうか、その顔を覆う手はなんだ？目を塞いでいるつもりか？

指の間から瞳が見えているんだが、見たくないのか？見たいのか？  
どっちなんだよ？

何度も後ろをむけよ！と言っても向いちゃくれないので、俺がルイズに背を向けてかまわず体を洗う。

後ろからきやあきやあと声が聞こえるが無視だ。

あ、ついでに脱いだ服も洗っておこう。

粗方体を拭き終わり着替えを終えて後ろを振り返ると、ルイズは俺に背を向けしゃがんでなにやらブツブツと呟いていた。

……何がしたいんだお前は。

「おーい、終わったぜ？」

「お、お、お」

「戻って来おい、ルイズう」

「お、お？おわ、終わった？え？」

「ああ、終わった。……お前、熱でもあるんじゃないか？ちょっとおかしいぞ？」

「きゃあ！あんな所触った手で触らないで！！」

「ああ、もう。わかった！分かったから騒ぐなって！」

「はあ、はあ、色々と刺激が強すぎるわね。」

「そりゃ、男の入浴？を堂々と見りゃな。」

「……入浴？私が？」

「ああ、そういう事だろ。……まさか、そこまで頭が回ってなかったのか？」

「……いやあ！ちがう！わわわた、私はそんなつもりじゃ！」

「じゃあ、どういづつもりだったんだよ？」

「あんたが浮気しない、ように、その……」

「もしかして、そればかりになっちまってほかの事まで頭が回らなくなったのか？」

ルイズはコクリと頷いた。

大きくため息をついてからルイズの目を見て俺は続ける。

「なあ、ルイズ。一体どうしたんだ？」

「な、何がよ？」

「お前、変だぞ。」

「変じゃないわよ……」

「いや、変だ。雑用はしなくていいとか言い出すし、こんな所までついて来るし。」

「……なんでもないわ。気にしないで。」

「まあ、いいけどさ。でも、風呂とトイレ位は一人にしてくれよ？」

「……そうね。私、どうかしてたわね。ゴメン、サイト。」

「いいさ。なんか思うところがあんだろ？気にすんな、部屋に帰ろうぜ。」

俺はそう言っつて部屋に帰るよう促す。

ルイズはすこし恥ずかしそうな顔をして、そうねとぼんやり答えて俺の後ろをついてきた。

その帰路、彼女は呟くような声で話の続きを始めた。



「……あのね？その……アルビオンから帰ってきてからね？今までの事考えてる時に、私、サイトに何もしてあげて無い事に気がついたのよ。」

「いいよ、気にするなよ。怪我の看病とか色々してくれてたじゃないか。デルフも買ってくれたし。」

「あんなのはメイジとして当たり前よ。それに、あんにロシエールで酷い事を言ったわ。」

「あれはしょうがないさ。嫉妬してたのも本当だったし。」

「でね？急にあなたに愛想つかされるんじゃないかと怖くなったの。目を離すと、どっか行ってしまいそうで。」

「あ、でも未来の私の為に監視しようと思ったのも怪我しちゃうと思ったのもホントだからね？」

「そっか。」

「そ。」

「まあ、心配すんな。できれば、今まで通りにしてくれろと助かる。」

「あら？ご飯は今までの奴がいいの？」

「いや、それは今の待遇で。」

悪戯っぽく笑うルイズに俺もニヤリとして答えた。

なんだか、無性に胸が弾んでくるのを感じる。

既に寮内に入って静かな廊下を歩きながら話していたが、こんな会話をずっとしていたかと思いはじめた。

しかし、目的の部屋はもうすぐそこだ。

伝えなかった事を言えて気が晴れてきたのだろう、ルイズは俺の前を歩き出して話を続ける。

今度はいつものご主人様の声だ。

「寝床も考えてあげるわ。」

「あ！そついや、お前どうしてロシエールで前の主人の事……」

「ごめん。手紙、読んじゃった。」

「それで……」

「悪かったと思ってるわよ。」

「まあいいけどさ。こつして全部話したし。」

「だから、そのお詫びと言っちゃなんだけど、今日からあんたベッドで寝ていいわ。」

「なぬ？」

「だ、だから！何度も言わせないでよ！私のベッドで寝ていいって言うてるのよー！」

「ば、ばか！こんな所で大声出したら！」

瞬間、ネグリジエ姿の女子生徒達が一斉に各々の部屋のドアを開けて声の主を注目する。

惚れた腫れた寝ただの振られたあの、色恋沙汰は彼女たちの大好物だ。

即座に俺はルーンを発動させてルイズを担ぎ上げ、猛然と元来た廊下を走り出した。

無理だ。

あれをフォローするなんて無理だ、ルイズ。

しばらく部屋に戻らないほうがいい。

もしかしたら良く顔を見られていなかったのかもしれない。

その後で説明してルイズと共に深夜遅くまで外で過ごしてから朝方コッソリ部屋に戻ったが、その甲斐も無く見事なまでの速さで噂は広まってしまった。

当然、誤解を解いて回るのは主に、寝不足の使い魔の役目となったのだった。

3 - 2 : いい気分だ。

ゲルマニアとトリステイン王国の同盟が無事締結され、アンリエッタ姫殿下の婚約が正式に発表されたと聞いた日。

私は学院長室に呼ばれ一冊の古めかしい本を渡された。

アンリエッタ姫殿下たつての希望で、来月行われる結婚式で詔を詠む巫女に私が指名された為だ。

本の名は『始祖の祈祷書』。

私の魔法そのものと言ってもいい存在。

手の中にあるそれは思いの外小さく、重く、厚かった。

オスマン学院長に姫殿下の式までは肌身離さず持ち歩くようにと念を押され、私ははやる気持ちを抑えながら部屋に戻って本を開く。

サイトの言っていた通り中はすべて白紙で、水のルビーの指輪をしていても読める箇所はない。

しかし私の心は何処までも踊る。

時が来ればここに十六年間待ち焦がれた ” 私の魔法 ” が記されるのだ。

そしてその時はもうすぐそこだ。

自然に笑みが零れる。

ほんの一月前は私は惨めな ” ゼロのルイズ ” だった。

私が持っていたモノは両親の地位とこの痩せっぽちな体だけ。

僅かに残った貴族としての誇りと日々自身を塗りつぶしていく劣等感。

心を磨耗し汚泥のような周りの評価の中で、足掻きながら日々を過ごしていた。

そして、使い魔召喚の日。

そう、その日こそきつと私の運命の日だったのだ。

喚んだ使い魔は強力で忠誠に厚く、未来の知識を持ち誰よりも私に優しかった。

最初は彼の事を理解できず、まるで動物のように扱っていた。

それでも彼は私に優しかった。

フーケの巨大ゴーレムを彼の導きでこの手で倒せた。

アルビオンではこれまでの私の人生で最大の大舞台であった姫殿下の密命を果たす剣として、強大な敵にその身を投げ出して勝利と成功をもたらしてくれた。

『ガンダールヴ』

始祖ブリミルが使役したという伝説の使い魔で、彼が刻むルーンの名前だ。

彼ははにかみながら言う。

自分は未来からやってきたのだと。

お前は伝説の系統 ” 虚無 ” であり、目覚めは近いのだと。

そしてその未来で私は……彼の伴侶だったのだと。



ロシエールで聞いた時は信じず、あるうことか彼に罵倒を浴びせた。  
ニューカッスルの城で聞いた時も罵倒してしまった。

だが、学院に帰ってきて聞いた時は、信じるしかなかった。

そしてその時、彼が私の中で大きく育っていた事に気が付き動揺した。

見苦しく狼狽もした。

途端に彼の価値が代えがたく、貴重な物だと強く思うようになる。

誰かに盗られるのではないかと不安に駆られ、守銭奴の商人のように彼を側に置いて盗まれまいと彼を見張った。

彼は未来の私という ” 他人 ” と結婚している。

だから、その事を知る私が浮気をしないようにしっかり見張らねば。

そう今は自分に言い聞かせ、彼を追いかける理由にした。

いつまでも使える理由ではないだろうが、素直でない自分にはこうして理由を付け彼を束縛する手段しか取れないのだ。

さすがに彼の水浴びまで見張っていた時にその行為の醜さに気が付いたが、それでも彼がいなくなるのではないかという恐怖は無くない。

同時にそんなくすぐったい関係はとても暖かで居心地が良く、幸せに感じていた。

彼はそんな身勝手な私に今日も微笑んでくれるのだ。

召喚の儀式から一月経った今、私はどう変わったのだろうか？

ほんの一月前は私は惨めな”ゼロのルイズ”だった。

今は強力な使い魔を従えて目覚めの時を待つ虚無のメイジだ。

何もかもが変わった。

それも良い方に。

変わらないのはあの使い魔の優しさと”ゼロ（虚無）のルイズ”  
という呼び名だけだ。

私は何も知らない級友からゼロと呼ばれても気にならなくなり、むしろ喜ぶようになった。

（なにも出来ないと誹られるのは相変わらず悔しいけどね。）

始祖の祈祷書をめくる。

何も書かれていない。

使い魔の話によれば、来月の婚姻はレコン・キスタの侵攻と私の  
”虚無” が目覚めた事で破談になるそうだ。

だから結婚式で詔を詠む事はないのだろうが、歴史が変わらないと  
は限らないので一応詔を考えておく事にした。

もしレコン・キスタが攻めてこなければ私の ”虚無” も目覚め  
ず結婚式は行われることになる。

その時に詔が無いなんて、想像するだに恐ろしい。

私はその恐ろしい想像をして軽く身震いしてから、ふと今は使われ  
ていない藁の寝台を見ると外へ鍛錬に出ている使い魔がいつも着て  
いる上着が目に入った。

流石に昨夜の事は反省し、今日はサイトに自由行動を許している。

無論今朝から学院中を駆け巡る『ミス・ヴァリエールは使い魔をベ  
ツドに誘っているが拒否されてしまった』という

不名誉な噂を否定して回るといふ任務を持たせた上で。

まったく、こんな風に脱ぎ捨てて。皺になったらどうするのよ。

そう思い、きちんとたたんであげようとその上着を手を取った。

……なにこれ。

肌触りが凄くいい！

縫い目も見えないほど細やかで……これ、誰が作ったんだろう？

平民の職人？ううん、こんな仕上げはメイジのアーティザン（職人）でも無い限り無理ね。

裏地は……へえ、気持ちいいわね。

なんだろう。毛皮……にしては毛足は短すぎるわ。羊毛？山羊？毛織物にしてはこつちも縫い目が見えないし……

表地も良く分からない材料を使ってるみたい。

……着心地がすごくよさそうだわ……

ちよつと位いいわよね。

ん、しょ。

あ、中々いい着心地ね。

ちよつと暑いかな？

そういえばサイトは肌着の上にこれ着てたわね。

シャツを脱いで着てみよつと。

ん、しょ、んしょつと。

……すごくいい着心地ね。

これ、ハルケギニアのアーティザンの作かなあ？チキュウって所の服だったら手に入らないわよね、やっぱり。

後で聞いてみよう。

その着心地に関心しながらもサイトの上着を脱ぎ、さっき脱いだシャツを再び着る。

僅かに残る彼の匂いがすこしだけ名残惜しい気がした。

両手で上着を持ち、目の高さに持ち上げると結構あちこち穴が開いていた。

うーん、いくら着心地がいいからって流石にコレを着続けさせるのは可哀相よね。

新しいのを買ってあげなくちゃ。

でも、お金がなあ……

考えてみればあいつ、秘薬をじゃんじゃん使う使い魔よね。

お父様から毎月頂く身の回りに使うお金の中で予算を考えてるけど、

もう来月の分まで手をつけちゃったし。

クックベリーパイに使うお金まで手をだしてしまって、もう後はお風呂や洗顔に使う秘薬代しか出せる所がないわ……どうしよう？

……そうよ！無理に買わなくてもいいじゃない！

私が編んであげましょ。

なんたって私の趣味は編み物だもの！

昔は父様に小物入れやちい姉さまに小物入れを、それに母様にも小物入れを編んでたし！

あれの応用で服位すぐ作れるわよ。

ふふ、サイトの喜ぶ顔が浮かぶわ。

我ながら名案ね、ルイズ。

サイトは喜んで、私は主人としての器の大きさを示し、その上お財布にも優しいわ。

伝説の系統である ” 虚無 ” (ゼロ) の二つ名は伊達じゃないわね、流石よルイズ・フランソワーズ！

ああ、なんだかとってもいい気分！

私はつきつきとしながらクローゼットの奥にしまつてあつた編み物道具を取り出し、計りで手に持ったサイトの上着の採寸を始める。

その寸法をノートに書き込んで行き、すべて取り終えた所でふんとひとつ大きく息を鼻から抜いてサイトの上着をたたみ、ベッドの上に置いた。

開かれたままベッドに放り出していた『始祖の祈祷書』を閉じてノートと一緒に抱え、購買に材料を買う為に私は部屋を飛び出す。

多分、初めてだろう。

この日は、私が一年前に学院に来てから初めて無邪気に心を躍らせた日だった。

「平民、これでいいかね？」

ルイズがオスマン学院長から『始祖の祈祷書』を受け取った頃。

俺はギーシュにマルトー親父から貰った大釜の改造と設置を手伝わせていた。

アルビオンへの出立時にヴェルダンデがルイズを押し倒し、それを楽しんでいた事の口止めの貸しとクラスの皆に自慢して回った罰を兼ねての事だ。



「ああ、いいぜ。バッチリだ。」

「しかし君は本当に妙なことを考えるね。平民用の奴があるだろうに。」

「あるんだけどさ、アレはちょっと俺には合わん。やっぱり風呂はこつ、お湯にゆっくり浸かりたいんだ。」

「ふむ、気持ちは分かるな。君が貴族であつたら僕と同じ風呂に入れるんだろつがなあ。」

「お前も使つか？」

「ヴェルダンデも一緒にいいかい？」

「ブン殴るぞ？」

「ちえ、ケチ。」

「ま、とにかく助かったよ。」

「気にするな。対等な取引だったしな。しかし、釜の下にカマドを作ったまではいいがどうやってコレに水を張るんだい？」

「そりゃ、桶を使うのさ。俺の修行も兼ねてる。」

「へえ！じゃあ、水を出すのも？」

「いや、流石にそれはな。こつやって……」

俺はルーンを発動させ、大釜をひょいと持ち上げる。

コレに水を張っていても恐らくは問題ない。

「なるほどね、そういえば君は結構な力持ちだったな。なにせ僕のワルキューレをバラバラに引き裂けるんだもの。」

「そついつ事。」

「それにしても君は意外と神経質なんだねえ。」

ギーシュはそう言ってヴェストリの広場の隅っこに作られた石の壁を見る。

俺がギーシュをコキ使って作らせたのは、大釜を固定し火をかけるカマドと周囲の目を避ける為の壁だった。

壁の高さは俺の身長よりすこし高い位で、この壁のお陰で広場からこの風呂を見られても見た目に違和感が無い。

まあ日本を知る俺の感想としては、公園の隅にひっそりと佇む屋根の無い公衆トイレって感じだけだ。

壁はぐるりと周囲を囲い、入り口が一箇所。

中は風呂場と薪置き場、ベンチ付きの脱衣スペースと充実させている。

脱衣所は入り口から見えないよう工夫し、風呂場は錬金させた石を隙間無く下に敷き詰め、きっちり水抜き穴もあけて中々の仕上がりがりだ。

「そんなに神経質じゃないさ。俺の国の人間は風呂にはこだわるんだよ。」

「そついや、君は何処の出身なんだい？」

「東方さ。砂漠を越えて、さらに東の。」

「へえ。遠いんだな。」

「ま、な。……なあ、ギーシュ。」

「なんだい？平民。」

「たまにでいいから俺の鍛錬に付き合わないか？」

「ふむ？」

「相手がいないんだ。お前も何れ親父さんの後を継いで軍に入るんだろ？」

「まあ、そうだね。」

「俺は魔法は使えんが、その辺のメイジよりも強い。お前の戦闘訓練の相手には不足じゃないはずだぜ。」

「うーむ。」

「なに、お前には攻撃しないさ。ワルキューレを相手にしたいんだ。お前もゴーレムの連携の研究になるだろうし、おまえ自身が俺に魔法で攻撃してくれてもいいぞ。」

「悪くない話だね。……絶対僕には攻撃するなよ？」

「ああ、しない。あ、でも剣を打ち込むフリ位はするからな？俺にとっちゃメイジ本体への攻撃の訓練でもあるんだから。」

「了解だ。いいよ、付き合おう。」

「ありがとうよ。」

「気にするな。僕と君の仲じゃないか。」

「そんな仲だっけ？」

「傷つくね。あんなに殴りあったのに君は僕を目の敵にしたりしない。不思議と僕も君を憎めないし、いい関係じゃないか。」

「……俺と決闘した時のように、平民に気分で力を振るう奴を俺は好きにはなれないぞ？」

「ふん、見損なうなよ平民。僕は君に破れた。あの時の君の力は心底恐ろしかった。そして悟ったんだよ。」

メイジを見る平民はこんな気持ちだったのかと。僕は反省したよ。あんな恐怖をふりまいて悦に浸るような愚かな貴族だったのかとね。だから、僕はもう二度と罪無き平民にこの力を向けないと誓ったんだ。」

「そうか。だったらその平民つてのをやめろよ。」

「ふん、友達になりたいなら自己紹介をするのが筋だろう？僕はまだ君の名を敵としてでしか名乗られてないぞ。」

俺達は互いになやりと笑いあう。

右手を出しながら俺は名乗る。

「ルイズの使い魔、平賀才人だ。」

「ギーシュ・ド・グラモン。『青銅』のギーシュだ。これで晴れて君を友と呼べるよ、サイト。」

「ああ、よろしくなギーシュ。」

俺達は握手をして笑いあう。

それから軽く別れの挨拶をしてギーシュは部屋に戻っていった。

残された俺は早速風呂釜に水を張り、火を起こして風呂の用意をする。

水を目一杯入れた桶を運ぶのはなかなかの重労働だったが、コレも鍛錬だ。

風呂が沸くまでの間にデルフを振っていると、一匹の黒猫がとてと風呂の方へ歩いてきて脱衣所のベンチの下で丸くなった。

どうやら風呂を沸かす火の熱がいい塩梅にそこに伝わるらしい。

誰かの使い魔なのだろうか？と思ったが、首輪もしていないから恐らくは只の野良猫なんだろう。

すこし猫をあやそうとちっちとちっちとやってみたが無視をされたので、再びデルフを振るう。

いい感じで汗をかいた頃には湯が沸いたので、早速服を脱いでデルフを脱衣所に立てかけ大釜の落し蓋を利用して風呂に浸かった。

「あー、いい湯だなこりゃ。」

「いい気分みてえだな、相棒。」

「ああ、いい気分だ。お、そっぴやデルフ。やっと喋ったな？心配したんだぞ。」



「……思い出したく無い事位あるさ相棒。」

「そつかそつか。案外大変なんだな、伝説の剣つてのも。」

「相棒程じゃねえさ。あの娘っ子に肩入れして毎回ボロ布みたいになってるじゃねえか。」

「そりゃ、ご主人様の為だからな。」

「その点、伝説の剣なんて気楽でいいや。なんせ相棒のように誰かを守る必要は無いしな。」

「はは！言えてら。」

「相棒のその能天気な所がたまに羨ましくなるぜ。……おっと、だれか近寄ってくるぜ？相棒。」

デルフのその言葉に耳を済ませると、確かに誰かが近寄ってくる。

あら？なにかしらこれ？と言う声が聞こえ、次ににゃあと脱衣所にいた黒猫の鳴き声がした。

声からしてどうやらシエスタのようだ。

「まあ、あなたここに居たのね。ご飯を食べに来ないからみんな心配したのよ？」

にゃあ

「シエスタ？」

「え？サイトさん？どこですか？」

「その奥だよ。あ、来ないでね。俺裸なんだ。」

「え？！どう、どうして裸なんですか？」

「こっ、俺の風呂なんだ。」

「お風呂?!、こんな所にですか?」

俺はシエスタと壁越しに話す。

ふっふっふ。

こうすればシエスタが風呂に入ってくる事など無くなると読んでこの壁を作ったのさ!

「ちょっと見てみよっと。行きますよ、サイトさん?」

「え?あ?ちょ、ちょっと!」

甘かった。

よく考えたら俺の前でも躊躇なく裸になれる子だったっけ……

「わあ！すごい！結構丁寧に作ったんですね！これ、サイトさんが？」

「い、いやあ。ギーシュに……この前決闘した奴にさ。あいつと仲良くなったから手伝ってもらったんだ。」

「そうだったんですか。」

「所でシエスタ。どうしてここに？」

「あ、あのですね！とても珍しい品が手に入りまして！サイトさんにご馳走しようと思っていたんですが、こここの所厨房に来なくなりましたでしょう？」

それで毎晩ここで鍛錬をしているって話を聞いたので、持ってきたんですよ！」

「ご馳走？」

（確か、緑茶だったかな。）

「はい。ロバ・アル・カリイエから運ばれた珍しい品だとか。『オチャ』と言っらしいです。」

「ふーん、どね。」

俺は身を乗り出してシエスタからオチャを受け取る。

シエスタは俺の上半身を見てわ、わ、と焦っていた。

受け取ったオチャを一口すすると、懐かしい味がした。

「うん、うまいねコレ。ありがとうシエスタ。」

「い、いえ！喜んでいただけるとうれしいです。……あ、あの。」

「..?」

「私もその、そのお風呂に入って見たいなといいますが……」

「おれ、俺が出てからでいい?！」

「やった!ええ、サイトさんの後でいいです。やっぱりサイトさん  
って優しいですね!！」

「はは、はは……」

「私向こうで猫ちゃんと遊んでますから出たら言ってくださいね。」

「あ、あの猫知ってるの?」

「ええ。数日前から学院に迷い込んで来ていまして、厨房やメイド  
の皆でエサをあげたりして面倒見てるんですよ。」

「そっかあ。誰かの使い魔じゃないんだな。と、お湯が冷めると悪  
いからもう出るよ。悪いけど、体拭く布をこっちに投げってくれる?」

「「これですね。それ!」」

脱衣所の方からヒラヒラと布が飛んでくる。

俺は風呂から出てそれで体を拭き、シエスタに今度は着替えが入った籠を風呂場の方へ押ししてもらい素早く服を着た。

それから脱衣所と風呂場の用途を説明して、俺はごゆっくりと言いつつ残して立ち去ろうとしたのだが……

「サイトさん、何処にいくんですか？」

「え？部屋に戻るごと……」

「えー！サイトさん居なくなっちゃったら、私一人でこんな所で裸になっちゃうんですよー!？」

「そ、それもそうだね、はは……」

「お願いしますよ？サイトさん。ちゃんと脱衣所の方で待っていてくださいね？」

「ああ、まかせときなよ。」

自分の迂闊さに呆れながら俺は脱衣所のベンチに座り込む。

足元から先ほどのネコが「やあ、と鳴いて身を寄せて来た。

のど元をコリコリと人差し指でかいてやると黒猫はゴロゴロと音を鳴らす。

「はは、かわいいじゃないか。」

そうやって心を落ち着けていると、風呂場の方からシエスタが声をかけてきた。

「ねえ、サイトさん。」

「ん？なんだい？」



「サイトさんの国ってどんな所なんですか？」

「そうだな、月はひとつで、貴族……というかメイジはいない。」

「え？！月が一つ？それにメイジがないんですか？！一人も？！」

「ああ。その代わり、お金持ちの平民が政治をしているな。」

「お金持ちが、ですか？」

「そ。で、そうじゃない平民もとりあえずは何かに怯える事なく暮らしてる。」

「平和なんですね。」

「まあね。隣近所の国はちよつと危ないけど、それでもそこそこには仲良くやってるんじゃないかな。」

オークやゴブリンみたいな危ないモンは居ないし、盗賊や山賊もいないかな？あ、暴走族って見ようによっては山賊みたいなもんかも。

ドロボウもいるな。それでも、ここらよりかはずっと安全だと思っよ。」

「もう！私の事村娘だと思ってからかっているでしょ！いやだわ。」

「ウソじゃないって！」

「じゃあ、ちゃんとホントの事をおっしゃってくださいな。」

「んー、じゃあ、食い物の話でも。俺の国ってさ、程度はあるけど牛肉が一番高級で鳥肉……鶏の肉が一番安価なんだぜ？」

「へー。以外ですね。」

「だろ？だからさあ、この国に来てからもう後悔しまくって！」

「あはは！確かにここじゃ貴族様用の鳥肉は私たち平民の口には入りませんものね。」

「ああ。それにな、香辛料とかも平民だろうが誰でも手に入るんだ。当然、味付けはいい。」

「いいなあ。私一度でいいから香草や香辛料をたっぷり使った鳥肉を食べて見たいんですよ。」

「ああ、俺もだよ。ああ！なんで故郷じゃあのフライドチキンを味わって食べなかつたんだ！」

「ぶらいどちきん？」

「えっと、鶏の肉を大ぶりに切つてな、骨が付いたまま小麦粉をまぶして豪快に油で揚げて香辛料をたっぷりとかける食い方なんだ。」

「うわぁ……聞いたこと無い料理ですね、それ。油で揚げるって、どういふことなんですか？」

「んと、鍋に油をなみなみと入れて火で熱するんだ。その中に食材を入れると焼くのはまた違った火の通り方になるんだよ。」

「ちょっと想像が付きませぬね。」

「とりあえず、カリカリになるよ。」

「う、美味しそう……」

「多分昨日食ったあの鳥料理より美味いぜ？好みもあるんだろうけど。」

「うわあ！いいなあ。ロバ・アル・カリイエの人はいつもそんなものを食べているんですか？」

「いつも、じゃないけど大概の人は食べたい時に食べられるんじゃないかな？そんな高級品じゃないし。」

「うづうづ、羨ましいです……」

ぱしゃり、と湯面を叩く音が聞こえた。

シエスタはそれから俺の話を一瞬懸命に聞いていた。

不意ににゃあ、と猫が鳴く。

ああ、話に夢中でほったらかしだったなと猫を見ると、シエスタが脱いで籠の中に入れた服の中に潜り込もうとしていた。

こらこらだめだぞうと籠から引つ張り出そうとしたら、猫はすこしだけ抵抗をしようと爪を立てた。

そんな事もお構い無しに猫を引つ張り出すと、爪に引っかかる布がある。

やけに薄く、かわいいリボンが左右についたズボンだった。

ん？ズボン？

シエスタはメイドで、スカートを着用していて、ズボンなんて穿いてないはずだぞ？

白いこれは……

ば、バカ！！おパンツじゃないか！しまえ！早くしまっただガンダくん！

一度変態の烙印を押されたら一生付きまとうんだぞ！

わたわたと猫の爪からシエスタのパンツを外そうとすると、猫はひよいと俺の手から抜け出し走っていく。

こら！まて！！

そう思っただけ追いかけた時だ。

「……………あ。」

「え？サイト、さん？」

猫が逃げた先は風呂場だった。

間の悪い事にシエスタは鍋から上がったばかりだった。

運の悪い事にそこへ俺が踊りこんだという寸法だ。

ポカンとするシエスタ。

啞然とする俺。

明るい月光の下、すべてが見えた。もう、全部、見えてしまった。

止まる時間。

その時間が動き出した次の瞬間に、シエスタはクスリと笑って足元を擦り寄ってきていた猫から優しく下着を取り上げ

俺の前をペタペタと足音を立てて脱衣所へ歩いていった。

ごめん！と言いながらあわてて体ごとシエスタに背を向ける。

彼女が脱衣所へ行った事を確認すると、悲鳴を上げられなかった安

心感からはああ、と息を吐いた。

それを見計らったようにシエスタが脱衣所から頭だけ出してきて一言。

「サイトさんのえっち。」

と言い置いて再び脱衣所に頭を戻した。

真っ白になる俺。

足元でにゃあ、と鳴き声。

白く灰になりかけていた俺に、服を着たシエスタが追い討ちをかけてくる

「サイトさん、今日は楽しかったです。お話も、お風呂も素敵でしたけれど、一番素敵だったのは……あなたかも。」

そんなクサイ台詞を残して、彼女はきゃあきゃあ黄色い声を上げて走り去った。

後に残るのは黒い猫を抱いて自失している俺と、甘くピンクな世界から辛い現実に取り残されたインテリジェンスソードだった。

俺を慰めるかのように猫はにゃあ、と鳴く。

最悪な事にその一部始終を、上空から見つめていた双眸があった事を俺は知らない。

まったく、私はツいているわ。

そう呟いてその影はクスクスと笑った。





### 3・3・いやだわ

熱病のように浮かれる、とはきつとこころいつ気持ちの事を言っただろう。

今の私は自覚できるほど浮かれていた。

ベッドに腰かけ二つの編み棒を手にして、はやくはやく！と急かす指先を落ち着かせ規則ただしく糸を絡ませていく。

絡ませた毛糸はやがて模様となり、大切な使い魔の為のセーターとなるはずだ。

私は出来上がったセーターを受け取り、満面の笑みでありがとうと口にする使い魔の姿を想像した。

うふふ、きつとすごく喜ぶわね。

それにキュルケが悔しそうな顔をして、慌てて自分も服を編み始めるに違いない。

でもきつと手遅れ。だって……

傍らに沢山転がっているサイトの上着と似た色の毛糸を見て私はほくそ笑む。

購買で売っていたサイトの上着と同じ色の毛糸の在庫はわずかで、そのすべてを私が買い求めたのだ。

サイトのお気に入りの上着と同じ色のセーターを、キュルケは編むことができない。

違う色の毛糸で編んだり、購買に再び毛糸が入荷したり、トリスタニアの町に買出しに行けば済む事だったが

宿敵を出し抜いていると感じる事実が、たとえ今だけの物だとしても私を大いに満足させていた。

夢中になって編み物をしていると、いつの間にか窓から差し込む月光がランプの光が満ちた室内からでもわかるほど強くなっていた。

そろそろサイトが日課の鍛錬から戻って来る頃ねと思い、編みかけのセーターをクローゼットの奥に隠してベッドに寝そべり『始祖の

祈祷書』を開く。

その時にふと、先程わたしがたたんであげたサイトの上着が目に入った。

……そうね。

セーターを編むためにもサイトの上着の着心地を一晚じっくりと確かめて編んだほうが、より良い仕上がりになるかもしれないわね。

そうこじつけて、私は着ていた部屋着を脱いだ。

それからメイドを呼び、すべての部屋着を渡して洗濯を頼む。

明日になりますかよろしいですか？と問われ、別に時間はかかってもかまわないわよとわたしは上機嫌で答えた。

メイドはあまり見せる事のない私の笑顔に、ドギマギとしながら洗濯籠を手に部屋を出て行った。

これでよし。

これでサイトにも部屋着が無いから仕方なく、と言いつ訳が立つ。

そうよ、部屋着がないんだもん、しょうがないわよ。

私は少しドキドキとしながらサイトの上着を着る。

頭を出すとき、ふわりと彼の香りがした気がした。

部屋着はすべてあのメイドに渡したので、この上着を脱ぐと私が身に着けているものはあとは下着だけだ。

さすがにサイトもこんな私から上着を筆り取るような無調法者ではないと思う。

……もももし強引に脱がせられるとしたらどど、どっしようかしらっ。

そ、それでもし、もしその気になられてもしたら私は……

いやいやいやいや、いやだわ。さすがにそれは考えすぎよね。

まったく、キュルケじゃあるまいし。私、どうかしてるわ。

そうよ、もし寒いと言うならベッドで毛布を包まらせればいいのよ。

昨日きちんと許可をしてあげたんだし。

私の胸はなぜか高鳴った。

ありえない、と頭ではわかっているけども色々な想像をしてしまう。

考えても見れば父以外の男性と同じ寝台を共に使うなんて初めてだ。

(まあ、これは当然だけど。)

耳まで赤くなっているだろうと自覚した私は、ふわふわとする気持ちを落ち着かせようと再びベッドに寝そべって『始祖の祈禱書』を

開いた。

何も書かれてはいないが、眺めているだけで不思議と心が落ち着いていく。

最初のページから順番にめくり、真っ白なページを見つめながら私は編みかけのセーターの事を考えた。

どうせなら何か ” 私ならではの ” という事をしてみたい。

そうだわ、折角だからワンポイントにヴァリエールの紋章でも編みこんでみようかしら？

そう考えている所へ不意に部屋のドアノブが音を立てた。

バクンと跳ね上がる心臓を押さえつけて、私は平静を装い帰ってきた使い魔の顔を見ずにそっけなくおかえりと声をかける。

もうすこし胸が落ち着くまでは、彼の顔を見ないほうがいいだろう。

私はテレ隠しの代わりに足をゆっくりパタパタと上下させた。

やがて自分の上着の在り処に気が付いたサイトが声をかけてくる。

「なあ、俺の上着を返してくれないか？」

「イヤよ。これ、着心地いいもの。」

「頼むよう。」

「ベッドに寝て毛布被ればいいんじゃない。それに、私の部屋着は全部洗濯に出しちゃった。」

「そうか。じゃ、よそ行き着なよ。」

「やあよう。」

サイトがはあ、と肩を落としている事がわかる。

しかし私は彼との気安いやり取りの中に、なんだか絆のようなものを感じて無性にうれしくなった。

ドキドキしていた胸が落ち着いて来たのでサイトをチラと見ると、あいつは私の脚に目を奪われていた。

……まったく、こいつ本当に八十四歳のお爺ちゃんなのかしら？

すこし高揚したこの気持ちが台無しじゃない。

ま、いいわ。

まったく興味を示さないのも困りものだもの。

コイツはそれなりに自制できるし、その辺は信じてもいる。

私の色香に負けて襲うような奴だったらとつくの昔に押し倒されているわよ。

……ペタンコだから襲わないって訳じゃあないと、思う、わ。

そんな考えを振り解こうと目を強く瞑り、もう一度開いてサイトをみると今度はなにやら考え事をしていた。

シャツ一枚で流石に寒いのかしら？

「どうしたの？どっか具合が悪そうよ？」

「ああ、冷えたからかな？なあ、ベッドに入っていていいか？」



「もち、もちろんよ！昨日許可したんだし。ほら、こじこじっちにきなさい！」

私はどもりながらベッドの奥へ本を持って移動し、使い魔が寝るべき位置をパンパンと手のひらで叩いた。

……なによ、生唾なんか飲み込んで。

勘違いしてるんじゃないでしょうね？

すこし警戒してジットリと使い魔を睨む。

サイトはそそくさとベッドに潜り込んできた。

私以外が起こすわずかな布が擦れる音と、サイトが乗り込んだ時にいつもより余分に沈むベッドの感触がやけに生々しく感じられる。

再び高鳴る胸と赤くなる顔をこまかすため、もう寝ましようと言っ  
て私は『始祖の祈祷書』を閉じ布団の中に潜り込んでから

部屋を灯していたランプに呪文を唱えて明かりを消した。

（ランプはお父様から頂いた魔具で、魔法が使えなくても言葉に反応して火を灯したり消したりできる品なのよ？。）

部屋には二つの月から届く月光だけが満ちる。

サイトに背を向け、私は胸の音を悟られまいと目を閉じてゆっくりと息を吸いそれから大きくはいた。

そのまま暫くすると、背中の方から規則正しい寝息が聞こえてくる。

私は上半身を起こして彼の顔を覗き込むと、月の光は優しい寝顔を映し出していた。

彼の睡眠を確認した時、私の口から落胆が知らず漏れた。

「寝てるし。」

その言葉は同時に己がなにかを期待していたのだと自覚させた。

私はいやだわと呟いて今度こそ寝ることにした。

あたしの情熱は『微熱』となって体をめぐるはずが、いつの間にか熱病のように熱く心に渦巻いてこの身を焦がしていた。

まったく、どうかしている。

あたしは親友の使い魔の風竜の背の上でひとりごちた。

こうも夜な夜な彼を監視するかのようにはヴァリエールの部屋の窓から覗きをするなんて、本当にどうかしている。

二つ名の『微熱』が泣いているわ、キュルケ・ツエルプストー。

気になる男は必ず手に入れてきた。

いままでどんな男にも拒まれたことが無い事があたしの自慢だ。

だれも私の『微熱』を消せない。

故郷のヴィンドボナ魔法学校を中退した時も、どこその公爵様との縁談の時も、私の『微熱』を消すことはできなかった。

私は常に恋をする。

そしてこの胸に宿る恋の火は『微熱』そのものだ。

その火はとても甘美な味わいで、禁断の秘薬のようにやめる事ができない。

いつの間にか一人を相手するだけではこの甘美を維持できなくなり、気になる男を次々と籠絡して火種として『微熱』へ放り込んでいた。

この火は油断するとすぐに消えてしまう。

気を抜くとすぐに弱弱い火となってしまふ。

あたしはそれを恐れた。

甘い菓子をねだる子供のように、家畜を襲う狼のように、聖人に救いを求める愚者のように新たな火種を求め、そして新たな男達も喜んで『微熱』にその身を捧げていた。

誰もあたしの胸に宿る恋の火を消す事はできない。

しかし、誰もあたしの恋の火を激しく燃え上がらせる事もできない。恋の火はただただ、激しく燃えることも無く消え去る事も無く、同じ大きさで燃え続ける。

よって『微熱』。

あたしの情熱は微熱となり、ゆっくりとこの身をめぐるのが常だった。

” それ” を始めて見たのは使い魔召喚の儀式の次の日。

ツエルプストーの宿敵であるヴァリエールの名を背負う、宿敵たりえない者が喚び出した使い魔。

噂ではただの平民だった。

初めて見た時も、特にこれといって強い印象は抱かなかった。

”それ” は平賀才人と名乗り、他の男と同じようにあたしの胸に視線を落としていた。

次に彼を見た時はヴェストリの広場だ。

男どもが平民でありながらメイジと決闘を行う者がいると騒ぎたて、あたしはそれに興味を抱いて見物した時のことだった。

彼は主人であるヴァリエールの制止も聞かず、見る見る内にボロボロになっていった。

当然だ。

メイジと平民では勝負になるはずが無い。

彼の相手をしていた貴族はみてくれは良かったが、力のあるうはずの無い平民に向かって笑いながら杖を振るっていた。

無礼討ち、という奴なのだろう。

ゲルマニアでも当然あるが、トリステイン貴族程これをやりたがる者はいないだろうと私は思っている。

この国の男達のそういったプライドの高い所は、あたしにしてみれば侮蔑の対象だった。

そのせいか、ここでの火種はすぐに消えてしまうのだ。

あたしはそんな事を考えて、これだからトリステインの貴族はと呟いた。

そして、あわれな平民を見る。

腕の骨を折られ、立ち上がることも困難になり主人が泣きながら制止していた。

この時ばかりは普段バカにしていた彼女に同情をした。

それからあたしはその場を立ち去る事にした。

平民とはいえ、貴族に殺される所はみたくは無いし、みっともなくごめんなさいと言わされてあの主人共々野次馬にバカにされる姿を見て楽しむ程悪趣味でもないからだ。

しかし、広場に背を向けた時に突然雷音が辺りに響き渡る。

何事かと振り返ると、さっきまであの平民を黽っていたゴーレムが雨となって降っていた。

それからは……よくわからない。

ただわかったのは、彼が圧倒的な力をふるってゴーレムを屠り、尚且つメイジにはたった一発の殴打で参ったと言わせた事実だ。

その姿を見て、あたしは新たな『微熱』の火種を見つけた喜びに震えたのだった。

次に彼を見たのは自室だった。

あたしは彼を籠絡すべく、いつもの様に体を見せ、甘い言葉で誘う。  
しかし彼は言った。

気持ちは嬉しいけどさ、俺、好きな人がいるんだ。だから君の恋には応えられない。

断られるのは初めての経験だった。

それから事あるごとに彼を口説いたが、一向にあたしに靡く様子が無い。

驚いた事に、彼は『フリッグの舞踏会』ですら主人以外の者と踊ろうとはしなかった。

私はこの時、理解した事がある。

ツエルプストーの宿敵であるヴァリエールの名を背負う宿敵たりえないはずの者が、いつの間にかあたしの宿敵になっていた。

あたしは認めざるを得なかった。

彼女の名前はルイズ・フランソワーズ。



あたしが欲しい火種を唯一奪えなかった存在。

そしてもう一つ。

彼はルイズに忠実で強力な使い魔であり、今まであたしが出会った事のないようなすばらしい火種なのだ。

気が付けば、あたしはいつも彼の姿を追うようになっていた。

彼が主人であるルイズと仲が良くなるにつれ、あたしの心は得体の知れない炎が渦巻いた。

特にアルビオンへなにかの密命で向かった折、あの主人と彼の距離が大きく縮んでいる事に焦りを感じた。

その焦りがこうして夜な夜な彼を観察させているのだ。

……まったく、あたしはどうかしているわ。

「なによー、本当に仲良くなってるじゃない。」

”らしくない” 私の行動をごまかそうと、本を読む親友にわざと聞こえるように言った。

「まったく、あたしだって本気じゃないわよ？でもあそこまでアップローチを拒まれると気になるじゃない？

だからね、陰謀は得意じゃないけれど作戦を練ろうと思うのよ。ねえ、タバサ？」

「嫉妬」

「い、言ってくれるじゃないのよ！あたしが嫉妬するわけないじゃない！これはゲーム！ゲームなのよ！

ふん、みてなさい。さっき偶然つかんだダーリンの秘密を利用してやるんだから！」

「嫉妬」

あたしは思わず親友の首をしめてガクガクと振った。

耳まで赤くなっているのがわかる。

親友にあたしが頬を染めている事を悟られなければいいけど……

いやだわ。

これだけ月の光が強いならきつと、ばれているわね。

その翌日。

昼食を食べ終えたあたしは『作戦』を実行すべく、彼の主人を探していた。

そしてアウストリの広場でその姿を見つけた。

彼女……ルイズは広場のベンチに座り憂いを秘めた表情をしてなにやら手を動かしている。

どうやら編み物をしているようだ。

あたしは後ろからそっと近づき、声をかけた。

「ルイズ、何をしているの？」

「み、みればわかるでしょ？読書よ！」

ルイズは手にしていたナニカを傍らに開いていた本の下に隠し、あからさまに怪しい言動を行った。

その本の開かれたページは何も書かれておらず、真っ白だ。

そこを指摘すると、『始祖の祈祷書』という国宝でアンリエッタ姫殿下の結婚式で詔を詠む巫女に選ばれた為所持していたんだとか。

ふと、先日のアルビオンでの事を思い起こす。

「あたしには教えてもらえないだろうけど、ソレもこの前のアルビオンに行った事と関係してるんでしょうね。」

まあ、これで二人の祖国は同盟関係になった訳だしわたし達も仲良くしなきゃね、ルイズ？」

あたしはそう言ってルイズの肩に手を回し、男にいつもやる様に優しく吐息混じりに耳元で囁いた。

ルイズはすこしだけピクリと反応したが、それだけで特にあたしを振り解こうともせずいつものように敵意を向けてきたりもしなかった。

「それに聞いた？アルビオン新政府は各国に不可侵条約を持ちかけてきたそうよ。あたし達がもたらした平和に乾杯！」

「そんなの、嘘に決まってるじゃない。絶対にそのうち攻めて来るわ。」

「あら。あなたは悲観的なね、ルイズ。」

「違うわ。 ” 確信 ” しているのよ。」

「ふうん……それより、さっきは何を編んでいたの？」

「編んでないわよ！何も編んでない！」

「嘘。ほら、ここに。」

そうやって本の下にあった編みかけのナニカをひよいと取りあげる。返しなさいよ！と頬を染めてバタバタと手を動かすルイズを押さえながら、ナニカを目の前に持ち上げた。

……なにこれ？

マフ……ラーじゃないわね。

セーター？ううん、それならこんな所に袖なんていらぬはず。

帽子？それにしてもデザインがおかしいわ。

あ、もしかしてぬいぐるみ？

「じゃ、じゃ何？」

「……セーター。」

「セーター？ヒトデのぬいぐるみじゃなくて？」

「違うわよ！そんなの編むはずじゃないじゃない！」

「あなた、セーターなんて編んでどうするの？」

「あなたには関係ないわよ！」

「ふふ、いいのよ。ルイズ、あたしはわかっているわ。」

ルイズは気が抜けたあたしから編みかけのセーター？を引ったくり、大事そうに胸に抱え込んで睨んで来た。

あたしは彼女の隣に移動して、もう一度優しく首に手を回す。

「あなた、使い魔さんにセーターを編んでいるんでしょ？」

「編むわけないでしょ！ばかね！」

「ルイズって本当にわかりやすいのね。好きになっちゃったんだ？」

「すき、好きになるわけないでしょ！好きになっちゃったのはあんなでしょうが！あんなバカの何処がいいんだか……」

「あら。ダーリンの良さはこの国の貴族が持つていない物を全部持つている所じゃない。一緒にいるのにわからないの？  
それにあなた気付いてる？嘘つくにあなたって耳たぶが震えるのよ？」

あたしのかけた ” カマ” にルイズはバツと耳たぶをつまんで答えた。

……本当、わかりやすい。

こうして見ると、この子結構かわいいわね。

あ、嘘って気が付いて睨んできた。



ホント、わかりやすい子。

「と、とにかくよ！あなたには渡さないんだから！サイトはわたしの使い魔なんだからね！」

「独占欲が強いのはいいけど、あなたが今注意するべきはあたしじや無いと思うわよ？ルイズ。」

「どづいという意味よ？」

「ほら、あの厨房のメイド。なんて名前だっけ？」

ルイズの険しい表情がさらに険しくなる。

心当たりがあるんだろう。

「あたし、この前見ちゃったのよ。」

「何をよ!」

「知ってる?ダーリンね、ヴェストリの広場の隅っこに専用のお風呂を作ったのよ。きつと、誰かさんがこの前ダーリンの裸を見たからだわ。」

「あ、あああああれはしょうがなく!って、キュルケ!あんたどうしてそのことを?!」

「そんな事はどうでもいいじゃない。でね?そのお風呂を例のメイドが借りていたのよ。ダーリンを見張りに立てて。」

「な、なんですってええ!」

「ダーリン優しいから断れなかったんでしょうねー。でも、問題はそこじゃないの。あのメイド、猫を使ってダーリンをお風呂場に誘って……」

「なななななな」

「自分の裸を見せていたわ。あれは中々のモノだったわね。ダーリンじゃなければきつとその場でメイドを押し倒していたわよ。」

「サイト！サイトはその時どうしていたのよ?!」

「ダーリン、初心だからねえ。後ろを向いてゴメン！って謝っていたわ。」

「そんなの当たり前よ！サイトが、他の女の子に手を出すはずが…」

「あら。健全な男の子ならそういった色香に負けちゃうのはしょうがないわよ。

あなたは知らないだろうけど、あたし達の同年代の男の子は”やりたい” 盛りだからね？それに……」

「それに何よ!」

あたしはニヤリと笑って勿体ぶった。

それからルイズが動きやすいよう、肩に回していた手を解いて立ち上がる。

『作戦』の仕上げに先程確認した、とびっきりの情報を効果的に与える為だ。

「それに、今あなたの部屋にはダーリンとそのメイドが二人っきりで居るのよ？今部屋に戻れば面白いものが見れるかもね。」

ルイズはババっと手早く荷物をまとめた。

「どうやら『作戦』はうまく行きそうだ。」

「あら？好きでも無いのに戻るの？」

「忘れ物よ！それにわたしのベッドを使って破廉恥な事でもされた

「らたまらないわ！」

そう言ってサイトオ！と叫びながらルイズは部屋へ走って行く。

ホント、わかりやすい子。

おしとやかで素直だったらきつとすごくモテていただろうに……勿体無いわねえ。

ライバルの背中を見てあたしはそう思った。

ライバル？

魔法の使えないルイズが？

……そうか、彼女はあたしの初めてのライバルなんだ。

あの焦がれる程手に入りたい火種をめぐるライバル。

うん、そういうのって初めてだけど悪くは無いわね。

あたしはツエルプストー。

あいつはヴァリエール。

こうなるのは当然なのよ。

そうよ、恋という物はこうでなくては！

歡喜の為か、自然と笑みがこぼれる。

あたしの『微熱』は生まれて初めて激しく燃え上がっていた。

胸に灯る恋の火は炎となっていたのだ。

3 - 4 : e x t r a | e p i s o d e / メイド人形は恋をする 1 (前書き)

オリジナル挿話です。全四話となります。

泣けてくる。

俺はギーシュに作ってもらった風呂場の隣に、テントを張っていた。

テントの中は藁を敷きつめており、まるで鶏小屋のような雰囲気だ。

……うん、これでとりあえず生活はできそうだな。

あ、後でシエスタに頼んで毛布もわけてもらおう。

なんたって今日からここが俺の部屋なのだから。

どうしてこんな事になったのかというと、今からすこし時間を遡っ



てお昼過ぎ位の話になる。

俺は手持ち無沙汰で、ルイズの部屋の掃除をしていた。

するとシエスタが俺の昼飯を持って部屋にやってきたのだ。

その光景は記憶にあった。

あの時はシエスタに迫られている所にルイズがやってきて、シエスタを押し倒したと誤解され追い出されたんだっけ。

それを思い出して、俺はそんな不幸を回避すべく厨房で食べるよ！と爽やかに伝え、シエスタを連れ立って部屋を出ようとした。

……で、血相を変えて帰ってきたルイズと鉢合わせになったんだ。

「あ、あああああ！」

「よ、ルイズ。」

「あああああんだ！」

「ん？どうした？」

俺の問いに、ルイズは突然ポロポロと涙を流しはじめた。

何？！

俺なにもやらかしてねえぞ？！

「ど、どうしたルイズ？！」

「や、やっぱりあなたは、そのメイドとデキてたのね！」

「え？」

「わたし！知って、るもん！あなた、その、メイドにいつも、ご飯もらってて！」

「え？ルイズ？！」

「昨日だって！その！メイドの、はだ、つか！みたん、でしょ！」

ルイズは泣きじゃくりながら俺を責め立てる。

なぜだ？

なぜ昨日の事まで知ってるんだ？？

そりゃ、見ちゃったけど……あれは事故だぞ！

そう主張しようとしたが、泣きながら俺を責めるルイズには聞いてもらえそうにない。

「どうせ、私がない間に、そのメイドと楽しんでいたので、しょ  
「！」

「そ、そんな事しないよ！」

「うつさい！あんななんかクビよ！こっから出ていけえ！！」

そう叫んで、ルイズはまだ処分していなかった俺の藁の寝台を廊下に放り投げて、ボタン！とドアを乱暴に閉めた。

それから力チャリと鍵を閉める音がする。

……取り付く島もないとはこの事だ。

一体何が悪かったんだ？

俺は何か重大なミスを犯したか？

前みたいに一緒に風呂に入ったならともかく、事故でシエスタの裸を見ちゃっただけだし……

今日だって誤解されるような事を部屋で見られた訳じゃない。

前の時だって俺の前で泣くほど取り乱しはしなかったし……

うつむ。

なぜかはわからんが風呂の一件の事がばれている事、シエスタと一緒に部屋から出て来る所を見られた事。

この二つだけで、ああも取り乱すか？普通。

単なる嫉妬？

シエスタとデキていると疑われた？

でも、あいつからは好意は感じてまだまだ俺たち恋人だよなー！って関係じゃないしなあ。

一緒に部屋から出てきただけで、いきなり泣かれるものだろうか？

むしろこの場合は泣くというよりも、殴られる方がしっくりくる。

多分、他にも何か原因があるんだろうな……トホホ。

「あの、サイトさん？」

「……はは、俺、クビだったさ。」

「と、とりあえず、厨房でご飯食べませんか？その、ここは周りの視線が……」

気がつくともルイズとキュルケの部屋以外のドアが開いていて、住人  
たちである女生徒達がじい、と俺を注視していた。

ふん、もうそんな視線はなんともないもんね。

慣れちゃったよ、ハハッ。

俺は肩を落としてシエスタに行こうか、と声をかけルイズの部屋に  
背を向けて厨房へと向かう。

その瞬間にルイズの部屋からカチャリと鍵が開く音がして扉が開き、  
デルフが飛んできて俺の後頭部に当たった。

思わぬ衝撃で俺が倒れるのと同時に再びルイズの部屋のドアはバタ  
ンと乱暴に閉まり、それからもう一度カチャリと拒絶の音がした。

……どうやら扉の向こうでこちらの様子を伺っていたらしい。

俺がしつこく許しを請い、誤解だと扉の外から訴えるのを期待して  
いたようだ。

今からでも遅くはないだろうけど……よく考えたら俺、全然悪くな  
いぞ？

シエスタの裸を見たのは事故だし、部屋から出てきた所を見られた  
のだからルイズが勝手に勘違いしただけだし。

なんだか少しだけ腹が立ってきた。

ここは年長である俺が折れてやるべきなんだろうけど、今ここで彼女の希望を叶えてやるのも少ししゃくだ。

よし、ここは俺が飯を食う間はルイズなんて放置してやる！

ガンダくん、初めての反抗だぞ！

……なんかしょぼい反抗だな。

はあ、どうしてこううまくいかないんだ？

答えを見ながらテストをやっているのに、もっといい答えを思いついて結果ペケを貰っているような感じだな、こりゃ。

ああ、泣けてくる。

俺はデルフと藁の寝台を拾い上げ、シエスタと共に今度こそ厨房へと向かった。

その時、ルイズの部屋からはバカア！と言う声が聞こえた気がした。

と、言うわけで。

気をつけていたつもりだったが、前と同じように俺はルイズの部屋を追い出されたわけだ。

昼過ぎの出来事で、今は夕刻。

さっき部屋の前まで戻り、おーい、機嫌直ったかーと声をかけたが返事は帰ってこない。

どうやらまだ機嫌は直っていないらしい。

前もたしか……

ん？いつ仲直りできたっけ？

ううむ……思い出せん。

でも、結局仲直りできた事は覚えている。

とりあえず毎日こうやってドアの外から話しかけていれば、その内話を聞こうと言う気になるだろ。

そう思ってその日はテントに戻り、鍛錬を行ってからシエスタから差し入れてもらった酒を煽って寝たのだった。

ちなみに寝る前にもルイズの部屋の前で声をかけたが反応は無かった。

翌日。

俺のテントに朝から意外な訪問者がやってきた。



「だれかと思えば君か、サイト。」

「誰だよ？こんな朝早くから……ギーシュか。」

「うわ！酒くさいねこの中。」

「……なんの用だよ？いまちよつと俺凹んでいるから、急ぎじゃないなら後にしてくれないか？」

「用、って程じゃないんだけどね。ヴェルダンデを探していたら妙なテントを発見してね。その中に君がいたって訳さ。」

「そうか。ああ、ヴェルダンデならここに……」

俺がかぶっていた毛布を剥ぐと、中からヴェルダンデが出てきた。

昨夜は妙に寒かったので、その辺をうろうろしていたヴェルダンデを強引にテントへ連れ込み一緒に寝たのだ。

ギーシュは悲鳴のような声を上げる。

「ああ！ヴェルダンデ！昨夜なかなか帰ってこないから心配したんだぞ！」

もぐもぐもぐ

「え？サイトが主人に捨てられて可哀相だったから一緒にいたんだって？ああ！君はなんて優しいんだ！」

「どうせ俺は……」

「サイト、何があったんだい？僕に話してみたまえ。」

「実は……かくかくしかじか、という訳なんだ。」

「おいおい、そりゃルイズだって怒るよ。二股なんてかけるから……」

「ちがう！二股なんてかけねえよ！お前と一緒にするな！」

「やめたまえ！過去の事はもういいだろ！僕だっていまだにモンモランシーから口も利いてもらえないんだ……」

君は誤解を解けば済むだけ楽じゃないか！」

「まあ、な。事実二股なんてかけてなかったし。はあ……すまん、お前に当たっても仕方ないよな。」

ちよつとルイズの部屋のドアに朝の挨拶をしてくる。」

「……君は想像以上に逞しいね。そこまでしなくとも、別に君は悪くはないのだろう？」

「まあな。でもとりあえず話をしようぜってこっちから歩み寄らないと、前に進まないんだよ。特にルイズは。」

「彼女は難儀な性格だね。」

「ああ、同感だ。だけど、惚れた弱みってやつだね。自分は悪くなくとも折れてやるのも愛情さ。」

「ふむ。君は中々いい事を言うな。」

「あ、なあ。よかつたら今日にでもこの前話した鍛錬の相手してくれないか？いつもより暴れたい気分なんだ。」

「別にかまわないけど、僕はちょっと所要で今日から学院を離れるから無理だぞ？」

「何処かに行くのか？」

「ゴーレムの自動制御の事で、ある貴族を訪ねに行くんだ。父の紹介でね、参考になるから見学に行くんだよ。」

その貴族はゴーレムを扱わせるとなかなかの人物らしい。」

「へえ。」

「なんだつたら君も来るかい？」

「いいのか？」

「僕の従者という事なら大丈夫だろう。父上にはヴェルダンは置いて行くよう指示されているし、一人じゃ寂しいしね。」

折角だから親交を深めようじゃないか。」

「おお！じゃあ、ついていくよ！いつ出発するんだ？」

「これからヴェルダンの世話をメイドに頼むつもりだったから、それからすぐに。」

「じゃあ、俺はその間にルイズの部屋のドアに行ってきますよと言ってくるよ。」

「……君は本当に遅いね。」

話がまとまった俺とギーシュは、それぞれの用事を済ませる為にテントの外へ出た。

そしてそこで俺を待っていた人間がいた事にはじめて気がついた。

シエスタがテントから俺が出てくるのを待っていたのだ。

彼女はきゅっと唇を結び、胸に手をあてて必死の形相で俺とギーシュに訴えてきた。

「わたしも連れて行ってください！」

メイドといっても色々がある。

貴族のお嬢様方の身の回りの世話をするレディースメイドや、洗濯を行うランドリーメイド。

厨房で下ごしらえや仕込みに火おこしなどの雑務を行うキッチンメイドに、お皿やお鍋を洗ったり厨房の掃除を行う見習いのスカラリーメイド。

あと、デザートやお茶の管理を行い一手にこの学院で出されるお菓子を作るステイルルームメイド。

それに専門職のメイドになる前の見習い、トウイーニー。（この頃が一番きついよね。）

メイド・オブ・オール・ワークという何でも行うメイドもあるけれど、この学院にはいない。

この学院は国内の貴族様の子息が集まるだけあって、それぞれ専門のメイドが割り振られている。

ハウスキーパーと呼ばれるメイド長を頂点に、雑事全般の各種メイドと見習いが組織されていた。

それとは別に、独立してコック長……マルトーさんを頂点としたキッチンメイドとその見習いが続く組織がある。

わたしの働くトリスティン魔法学院はこの二つの使用人の組織で切り盛りされているのだ。

わたし自身はキッチンメイドだけど、最初は厨房も洗濯もお掃除もこなさなくてはならないトウイーニーからだった。

元々家事全般は得意だったので、激務ではあったがそれほど苦労はしなかった。

その仕事ぶりがマルトーさんに認められて、ある日から厨房で働くことになった。

厨房のみんなはとても優しく、仕事もそれほどつらくはないし、何より貴族様の部屋のお掃除をしなくて良いのはうれしかった。

貴族様のお部屋の掃除は、平民である私たちにとってもとても危険。

何かを誤って壊せば無礼討ちされてしまうだろうし、男性の部屋なら……押し倒されても泣き寝入りをするしかない。

貴族様にも平民と関係を持つなどと噂が立つ事を恐れ、そうそうには手は出してこないけれどそういう事はやはりあることはある。

だからわたし達メイドができる自衛は、とにかく”噂”を何でもいいからすぐに広め、体裁を気にする貴族様への抑止とする事だった。

わたし達平民は、そうやって知恵を使って自衛しなくてはならないほど貴族様の力には敵わない。



最後にはいつも平民は泣き寝入りするしかないのがこの世界だと思  
っていた。

ところがその世界を否定するかのようになり、ある日彼がわたしの心に  
住み着いた。

目を閉じれば彼がゴーレムを蹴散らし、あの貴族様を殴りつけた光  
景が鮮明に映る。

耳の奥には彼が雄雄しく「続けるか？」と言った声がいまだに木霊  
していた。

その時の彼を思い出すだけで私の胸は張り裂けんばかりに痛くなる。

彼はその後も何かと大怪我をして、その度に主人であるミス・ヴァ  
リエールは泣きながら看病をしていた。

私はマルトーさんに頼み込んで、彼の為に食事をを部屋まで運んだり  
本来の仕事ではないけれど身の回りの世話をさせて貰った。

日が経つにつれて、彼への思いは尊敬から憧れへ、そして恋へと変  
わっていく。

時間が空いた時はいつも理由を見つけては彼が居そうな場所へ  
お仕事” をしに行つて、『我らの剣』を遠巻きに見ていた。

そしてわかつた事がある。

彼は主人であるミス・ヴァリエールの事を愛しているようだったのだ。

いつも彼女に優しく微笑み、彼女がクラスメイトに蔑まれると慰め、そして見たことはないが彼女の為に戦って大怪我まで負っているようだった。

それを裏付けるかのように、幾度も彼とミス・ヴァリエールの浮名が学院に流れた。

わたしはその噂を聞きたびに、激しい嫉妬の炎を燃やし諦めの気持ちでそれを打ち消していた。

ある夜、わたしにチャンスが訪れる。

彼が一人で手製のお風呂に入っていたのだ！

久しく厨房に顔を見せなくなっていた彼の気を引こうと、『オチャ』を持って彼を探していた時に偶然その場に居合わせたのだった。

わたしには、これはブリミル様がくれた機会だと思えてならなかった。

彼が入浴中にもかかわらず、わたしは強引に『オチャ』を彼に振舞う。

ちらりと見た彼の上半身はとても……遅しかった。

それから彼に頼み、お風呂に入らせてもらおう頼んでみる。

彼も年頃の男の子だ。

目の前で女の子が裸になり、お風呂に入っていればきっと覗きたくなるにちがいない。

もし覗いて来るならば誘えばいいし、襲ってきてくれるなら好都合だ。

彼と一つになれるならわたしは……

胸を高鳴らせながら頭ではそう打算を働かせて、お風呂で彼を待つ。

彼といろんな話をしながらも、わたしはずっと甘美な想像をしながらひたすらその時を待った。

しかし、彼は覗きもしなかったしわたしを襲ってもくれない。

諦めてお風呂から上がった時に猫とジャレあう勢いでお風呂場に乱入してきたけれど、わたしの裸を見ても押し倒したりはしてくれなかった。

ただ、真っ赤になりながらゴメンと言ったその声がひどく愛しく、寂しかった。

この夜、彼への思いはさらに強まってしまった。

次の日に彼が部屋に一人で居る時を狙って、わたしはとうとう彼を押し倒すつもりで食事を持って行く事にした。

貴族様の部屋でそんなことをすればどんな仕打ちを受けるか、想像するだに恐ろしい。

だけど彼の事を考えているともうどうなってもいい、とさえわたしは思うようになっていたのだ。

部屋のドアをノックし、彼の姿を確認した瞬間わたしの胸は痛い程高鳴る。

さあ、あとは隙を見つけて彼をベッドに押し倒すのよ、シエスタ！

そう思っていると、彼は厨房で食べようと言い出した。

……彼の爽やかな笑顔が憎くて、とても愛しかった。

彼を押し倒す事を諦めて廊下に出た所で、部屋の主であるミス・ヴァリエールが血相を変えて戻ってきた。

それから彼女は泣きながら彼を責め立て、なんと彼を部屋から追い出してしまった。

浅ましいと今でも思うが、正直うれしかった。

これで彼がミス・ヴァリエールの事を諦めてくれるならとさえ思った。

しかし、その喜びもすぐに落胆に変わってしまった。

あれだけの事を言われて行くあてもないのに部屋を追い出されても、彼は優しい顔でミス・ヴァリエールの事を考えていたのだ。

彼の剣を投げつけられた時も、食事の為に厨房へ移動した時も、外でテントを設置して馬小屋から藁を運んでいる時も、落ち込んでテントの中でお酒をがぶ飲みしている時も。

その顔は変わらず優しく、そして憎らしかった。

わたしはその夜初めて叶わぬ恋だと思い知り、泣いた。

同室の子に慰められながらも、わたしは精一杯泣いてそれから考えた。

恋敵は貴族様だ。

わたしは平民。

彼は平民で、恋敵である貴族様の使い魔。そして貴族様に惚れ込んでいる。

貴族様も彼の事をきつと愛している。

わたしは身分でも、向けられる愛でも敵いはしないだろう。

勝ち目など最初から無いのだ。

……胸は負けないと思うけど。

そして一つの結論を出してある決心をし、その日は寝た。

しかし、涙はなかなか止まらなかった。

翌朝。

彼……サイトさんの様子を見ようとテントへ足を運ぶと、テントの中から話し声が聞こえてきた。

サイトさんの相手をしているのはどうやらあの怖い貴族様らしい。

そういえば、お風呂であるの貴族様と仲良くなったとサイトさんは話していたっけ。

何を話しているのかと聞き耳を立てると、どうやら二人でどこかに行こうとしているらしい。

これはチャンスだ！

今、サイトさんの傍らにはミス・ヴァリエールはいない。

当然、サイトさんについていけばいくらでも口説く機会があるだろ

う。

この機会を逃す術は無い。

わたしはテントから出てきた二人に、思わず声を上げて叫んだ。

「わたしも連れて行ってください！」

「シ、シエスタ？」

「君は……たしか厨房のメイド？」

「シエスタと申します。サイトさん！わたしも行きます！」

「いや、でも……ギーシュのお供だしなあ？」

「僕はかまわないぞ？」

「ほ、本当ですか？貴族様！」

「ギーシュだ。」

「ギーシュ様、本当ですか?!」

「ああ。平民とはいえ、こんな可愛らしいご婦人が同行を申し出て  
いるんだ。断る道理なんてないだろう?」

「やった!ありがとうございます、ギーシュ様!」

「……なあ、ギーシュ。お前そんなだからモンモランシーに袖に  
されるんだぜ?」

「はは、サイト。……君は口が堅いんだろ?」

「貸し一つな。」

「君は本当に遅しいな。」



二人はそう言って無邪気に笑いあう。

サイトさん、どうして骨まで折られた相手にそんなに親しげにできるのかしら？

男の人のそういう所ってすこしうらやましいかも。

ギーシュ様も噂に違わず女の子には優しい方でよかった。

もし押し倒されそうになっても、きっとサイトさんが守ってくれるだろうし。

わたしは笑う彼を見て昨夜の事を思い起こす。

彼が手に入らなくてもいい。

ミス・ヴァリエールに勝つ必要はない。

わたしは平民のメイドだ。

だからこそ、受け入れられる ” 立場 ” があるんだ。

貴族様には妾などという立場は受け容れられはしないだろう。

愛されもしないのに側で愛する人を見続ける事もできないだろう。

妾にしてもらえれば、それが最高なのだ。

そうじゃなくてもただ、側にさえいらればいい。

それが平民のメイドができる、貴族様相手に行く恋の戦い方だ。

もし彼が振り向いてくれたならと、空想するだけで満足できる者ができる戦い方だ。

それに彼は貴族じゃない。

もしかしたらミス・ヴァリエールは側に置いてはおけなくなるのかもしれない。

その時は、胸を張って彼を奪えるはずだ。

私は負けないわよ？ミス・ヴァリエール。

だって、最初から負けているもの。

その敗北の屈辱に耐えることができる、力のない平民ですもの。

いつまでも落ち込んではいられないわ。

「じゃあ、わたしはマルトーさんに出かけるサイトさんのお供をしてくるって伝えてきますね。」

「大丈夫なのか？シエスタ。」

「ええ、マルトーさんならサイトさんの世話をする為って言えば大抵の事でも許してくれるんですよ？」

「でも……勝手にそんなの許可したら罰を受けないか？」

「サイト、君は知らないだろうけどあのコック長はこの学院でオスマン氏に次いで立場が強いんだぞ？」

「げ、マジ？」

「貴族の胃袋を満足させる者は、平民であっても大切にされるのだよ。」

「ああ、そういう事か。マルトーさんの飯はうまいもんなあ。」

「うむ。じゃあ諸君。馬小屋の前に集合でいいかい？」

「はい。」

「あいよ。はあ、ルイズ機嫌直ってるかなあ？」

「僕に聞かないでくれよ。」

「まあ、あと二・三日もドアに話しかけ続ければ機嫌も直ると思うんだけどね。」

そうやって彼はあの優しい笑みを浮かべ、ミス・ヴァリエールの部屋へと歩いて行った。

遠ざかる彼の背中が、すこしだけ憎らしかった。



トリステイン魔法学院から馬でヌヴィー街道を西に進んで三時間程進むと、ヘザックの村に差し掛かる。

この村は人口数百人程度の小さな村で、領主であるクレール・アダ  
ン準男爵は村を一望する丘の上に館を構えていた。

ギーシュの目的地はこのクレール・アダ<sup>ン</sup>準男爵の館だ。

館まであと一息の距離まで来ていたのだが、ヘトヘトに疲れた俺の  
提案でヘザックの村の宿兼食堂に俺達は立ち寄る事にした。

ある事情で俺は精も根も尽き果て、とてもじゃないがこのまま貴族  
の館に訪問する余裕が持てなかったからだ。

俺達は食堂の入り口近くのテーブルに陣取り、軽い菓子やワインを給仕をしていた女将に注文する。

「ふう、さすがにここまでずっと馬に乗りばなしだと疲れるね。」

「ああ……もう俺、へトへト。」

「うふふ……」

「サイト、君は別にいいじゃないか。そのメイドとずっと馬上で一緒だったんだから。」

ギーシュが羨ましそうに半目で俺をにらむ。

シエスタは馬を操れない。

よって、ギーシュか俺の馬に乗る事になる。

必然、というか彼女の的には当然俺の馬を選ぶわけだ。

しかもわざわざ俺の前に乗り込んできた。

彼女のお尻と俺の腰が密着して三時間。

ずうっ

っ

っ  
と暴れん坊にならないよう、ガンダくんを抑える事に集中していた。

ギーシュにとっては羨ましいだろうが、俺にとっては地獄だった。

もう、ヘトヘトだ……。

ちなみに後ろに乗ってくれと訴えても、彼女は頑として譲ってくれなかった。

「なあ、ギーシュ。もし逆の立場だったらお前は平気なのか？」

「さあ？そっになって見ないとわからないね。」

「しっふぶ……」



「だったら、次はお前がシエスタを乗せてやれよ。」

俺の言葉に一瞬、ギーシュは好色な笑みを浮かべた。

と、同時に夢心地だったシエスタが突然我に返り、そんなひどい！  
サイトさんの馬がいい！と訴える。

懸命にシエスタを宥め、後ろに乗るかギーシュの馬かと迫りなんと  
か説得に成功した所で注文した品がやってきた。

香料が入ったワインと簡単な焼き菓子だ。

「お待ちどうぞさま。」

「さ、これを飲んで一息ついたら、アダン準男爵の館まではもうち  
よっとだ。」

「おや、貴族様。アダン準男爵様の館に行かれるので？」

ギーシュの言葉に女将が反応する。

そうだと答えると、女将は血相を変えた。

「貴族様、悪いことは言いませんからこの村から出ているアダン準男爵様の馬車で行った方がいいですよ。」

「どうしてだい？」

「途中の森でオーク鬼が出るんですよ。アダン準男爵様が討伐をして下さっているおかげで、準男爵様の紋章が入った馬車は襲われません。」

「オーク鬼ですって？いやだわ、怖い、サイトさん……」

「なるほど、そういう事か。」

「馬はうちでお預かり致しますから悪い事はいいけません、馬車でお向かいになって下さい。」

「シエスタも居ることだし、そうした方がいいんじゃないか？ギーシュ。」

「うーん、そつだな。そうするとしよう。女将、じゃあ馬を頼むよ？明日までには帰れると思っから。」

「はい、お気をつけて。」

そう言つて女将は注文した品の代金とは別に、馬の預かり賃をちやっかりギーシュから受け取る。

なかなか商魂たくましいオバちゃんだ。

「ところでギーシュ、アダン準男爵ってどんな人なんだ？」

「ん？ああ。ここの領主で元はゲルマニアの貴族だったのだけど、父上の部下となって大きな功績をあげたんだよ。」

その折トリスティンでの爵位とグラモン家の領地だったここを褒章として与えられてね。」

「へえ。」

「父上が言うには、ゴーレムの自動制御をやらせたら彼の右に出るものは居ないらしい。」

土のトライアングルだそうだが魔法よりも、ゴーレムを作りだして何かやらせる方がもっぱら得意なんだそうだ。」

「そうなんだ。お前のゴーレムの扱い方と似ているのかもな。」

「そうだね。だから父も僕に紹介したんだと思う。」

ギーシュはそう言って笑った。

シエスタはというと、貴族が頼むような良い焼き菓子をお口に幸せそうにしている。

俺はため息をついて、これ以上大きく成長したがるガンダくんを必死で抑える必要が無い事に安堵を覚えるのだった。

それからしばらく宿の食堂で休憩をとり、女将に馬車が出る場所を聞いて駅に移動した。

駅といってもアダン準男爵の館に向かう為の馬車専用であるらしく、質素な作りとなっていた。

駐留する兵士も馬の世話を行う馬番もない無人の駅だ。

しかし、駅を発見した俺達は停まっていた馬車を見て大いに驚いた。

馬車の御者がゴーレムだったのだ。

フーケのような土や岩製でも、ギーシュのような青銅製でもなく、木製の人形といった方がしっくりくる。

間接部が球体となっており、顔は無かったが丁寧にも服を着せられ遠目には人間に見えるだろう。

駅では俺達の他に先客がいて、栗毛の女の子が大きな荷物を一生懸命に馬車の荷台へ乗せようとした。

髪を三つ編みにして纏め、年の頃はシエスタと同じくらいか。

その姿と顔を確認したギーシュはバラの杖を口に咥え、さりげなくその子に近寄ってレビテーションをその大きな荷物にかけた。

「きゃー！」

「驚かせてしまったかい？お嬢さん。」

「あ、え？」

「君があまりに大変そうだったので、つい魔法を使ってしまったんだ。そのきれいな顔が曇るなどと、とても許せなくてね。」

気障ったらしい台詞を口にしてから、ギーシュは少女にウインクをした。

……懲りないやつだ。

でもあの距離からこの子が結構かわいい子だと判別できるその視力は、素直にすごいと思う。

少女もまんざらでもないようで、頬を染めてギーシュに近づくと微笑んだ。

「ありがとうございます、貴族様。私、ルネって言います。」

「僕はギーシュ・グラモン。ギーシュと呼んでくれ。あ、こちらの二人はオマケさ。」

「まあ、サイトさん。私達オマケですって。」

「しょうがないさ。こいつの金でついて来てるんだから。あ、俺がオマケ一号な。」

「まあ。うふふ、ギーシュ様って貴族様なのにとっても気さくなのですね。」

「ふっ、綺麗な薔薇には笑顔が似合うだろう？だから僕は薔薇には優しいのだ。」

「あ、ずるーい。私が二号だなんて……うふ。なんだか私、サイトさんのお妻さんみたい。」

「あは、はは……やっぱりシエスタが一号でいいよ！」

「薔薇？」

「君のことだよ。ほら、君の頬はさっきからバラの様な朱が差しているだろう？」

「ええ！サイトさん、私を一号にしてくれるんですか？！……うれしい……」

「まった！シエスタ、酷い勘違いをしてるんじゃない……」

「……」

「うふふ、ギーシュ様ってお上手なのね。」

「ふふ、ところで君は……」

「ルネって呼んでください、ギーシュ様。」

「では。ルネもアダン準男爵の所へ行くのかい？」

「はい。私、アダン準男爵様の屋敷に奉公に上がる事になりました。」

「



「そうなのか。」

「あ、じゃあわたしと一緒にこれからメイドになるんですね。」

「え？あ、ごめんなさい。ギーシュ様にしか挨拶しなくて……」

「いいよ、気にすんな。俺、平賀才人な。」

「わたし、シエスタって言います。」

「ルネです。よろしくお願いしますね。」

彼女はそう自己紹介をし、もう一度ニッコリと笑ってお辞儀をした。

どこか、暖かい気持ちになれるような笑顔だった。

薄暗い森を抜け、丘を登ってたどり着いたアダン準男爵の館は、どこか無機質な印象を受けた。

馬車から降りて、人の気配がほとんどない入り口の扉へと御者が先導する。

どうやら彼？は館への案内役も兼ねているようだ。

ギギ、と重苦しい音を立てて開いた両開きの扉の向こうでは、来客を迎える為にメイドが整列して頭を下げていた。

驚いた事に彼女達はみな御者と同じゴーレムのように、御者と違いそれぞれには愛らしい顔まで作り込まれている。

数は六体程だったが、こうしてメイド服を着込み整列されると中々  
壯観だ。

その列の奥に初老の男と俺達より少し下くらいの年齢であろう少女  
が立っていた。

初老の男はでっぷりと太っており、深い緑色の髪に口ひげとモノク  
ル（片眼鏡）、そして神経質そうな表情が印象的だった。

一方、少女の方は黄金の髪を腰まで伸ばし、トパーズのような大き  
な双眸は吸い込まれそうな程美しくそして神秘的だ。

使用人ではないらしく、豪華な黒いドレスを身に着けている。

皮肉な話だが傍らに並ぶゴーレムのメイド達よりも彼女こそが”  
人形” のようで、俺やギーシュはもちろんシエスタやルネまでも  
彼女に見蕩れていた。

「ようこそ、我が館へ。ギーシュ・グラモン殿のご一行でよろしい  
ですか？」

初老の男の言葉に俺達は我にかえり、ギーシュが一步前へ進み出た。

「いきなり押し掛けてしまい、申し訳ありません。私はギーシュ・グラモンと申します。」

父、グラモン伯爵の紹介で本日はアダン準男爵のゴーレムを見学させて頂く為、参上致しました。」

「おお、君がグラモン元帥の……いや、目元などよく似ているな。お父上は息災ですか？」

「はい。アダン準男爵によろしく伝えておくようにといわれております。」

「ははは、そうですか。いや、よくいらしてくれましたなギーシュ殿。事前に話は書状で伺っております。」

私がクレール・ル・ヴューナンセ・ド・アダン準男爵です。」

そう言って初老の男……アダン準男爵はにこやかに歩み寄り、ギーシュの手を取った。

浮かべている笑顔は第一印象とは異なり中々愛嬌がある。

「今日はじっくりと私のゴーレムを見ていてください。……ところで、そちらは？」

「ああ、こっちは僕の従者です。剣を背負っているのがサイト、メイド服を着ているのがシエスタと言います。」

もう一人は今日からこちらで奉公に上がるとかで、馬車を同乗して来たのですよ。」

「そうでしたか。しかし従者でもない平民と同じ馬車に乗せてしまうとは……御者のゴーレムがとんだご無礼を働いたようですね。」

アダン準男爵はギーシュに詫びると、さっと小さな杖を取り出して御者に向かってかざす。

するとガシャと音を立てて御者はバラバラに崩れてしまった。

「イヴォンヌ、ヴェロニク。片付けておきなさい。……お前、名は？」

「は、はい！ルネと申します！今日からこちらで奉公させて頂く事になりました！」

イヴォンヌとヴェロニクと思われる二体のメイドゴーレムが、バラになった御者を片付けはじめる。

その脇でルネはアダン準男爵の聲に緊張した様子で質問に答えた。

ギーシュに向けられた物よりもずっと冷たい声だったからだ。

「道中ギーシュ殿に粗相はしなかったらどうな？」

「アダン準男爵、ルネは粗相所か道中はずっと僕を楽しませてくれましたよ。」

「ほう。そうなのか？ルネ。」

「はい、アダン準男爵様。」

コクコクと頷くルネ。

貴族への、メイジへの恐怖で体を強張らせている。

そんなルネにギーシュは助け舟を出した。

「しかし、見事なゴーレムですね。動きなんて普通のメイドと変わらないとは……初めてみましたよ。」

「ははは、驚かれたでしょう？」

「ええ。どうやって彼女、らを維持しているのですか？」

「なに、マジックアイテムを作る要領である程度出来上がった体を操っているのですよ。」

私の魔力をあらかじめ込めておいて、後はたまに補給するといった感じで操るのです。」

「なるほど。」

「メイドが人形ですと色々と楽でしてな。一日中働かせても疲れもせず、文句も言わず黙々と動き続けるのです。」

ここにいるメイドだけでこの屋敷の運営が間に合うほどですからな。」

「それはすごい！」

「しかし、人でないとどうしても手が入れない場所もでてきてしまう。だからこうして新たに奉公人を雇った訳ですよ。」

そう言ってアダン準男爵はルネを見る。

ルネはすこしだけ肩をすくませた。



「さあ、立ち話もなんですからこちらでじっくりと私の ” 作品 ” を見て頂きましょうか。」

お連れの方々は別室で休んでいただこう。オデット、案内して差し上げなさい。それと、ルネを頼むぞ。」

「……はい。」

「では、行きましようか。お前たち、ついて来なさい。イヴォンヌ、ヴェロニク。ソレを片付けたら私の部屋に来るように。」

俺たちを置いて、アダン準男爵に促されギーシュは彼の私室へと案内されて行った。

その後をメイド人形達はゾロゾロとついて行く。

玄関ホールには俺たちとオデットと呼ばれたあの美しい少女、そしてバラバラになった御者を片付ける二体のメイドが残った。

……うすうす感じていたんだが。

どうやら俺は、アダン準男爵の他のゴーレムがどんなものか見物で

きないらしい。

そりゃ、従者にまで懇切丁寧に関心する作品を見せる貴族はいないよなあ、普通は。

目を落とし、御者だったゴーレムを片付けているメイド人形を見る。彼女？達は御者が着ていた服を綺麗にたたみ、木片を拾い集めていた。

木片といっても破壊されたわけではなくて、球体の間接が外れバラバラになっただけのようだ。

御者は集めてくっつければ再び使えそうなほど綺麗に分解されていた。

メイド人形はスカートを風呂敷代わりにして、バラバラになり床に散らばった御者のパーツを集めている。

スカートを風呂敷として使っている為、太ももまで丸出しにしての作業となる。

丁寧にも膝上丈のドロワーズを履いていて、俺が立っている位置からは球体の関節で出来ている膝が見えた。

木片を集める指先もすべて同じようにつくりだ。

その動きは人間のものと寸分もたがわず、一種気品のようなものを感じるほどの上品さがあった。

くそ、このゴーレムの話をもっとよく聞いてみたかった……

確かにこれだけのゴーレムはそうそうにはお目にかかれない。

俺は恨めしそうにアダン準男爵と共に屋敷の奥へ進むギーシュをにらむ。

しかしギーシュは反対に俺を羨ましそうな視線で睨み返してきた。

ルネやシエスタ、そしてオデットと呼ばれた少女に囲まれてどこぞへ消える事が気に入らないらしい。

俺はルイズがいるからと思いつつも、ギーシュを悔しげらせようとわざとニツコリと微笑んでやった。

「……ではお供な方はこちらへ。ルネ、あなたもついてきて。」

オデットと呼ばれた少女の声は、抑揚はないが鈴のような美しい声で俺達を促した。

「はい。」

「あ、はい。サイトさん、いきますよ？」

「おう。あ、ルネ。俺が荷物持ってやるよ。」

「わあ、ありがとうございます。」

少女に連れられ、俺達は屋敷の使用人が使うであろう部屋が散在する一角に案内された。

使用人が使う部屋がある区画には装飾や飾り物は無く、倉庫や質素な風呂があるのでわかりやすい。

メイド人形達には必要が無いのかもしれないが、貴族の来客で俺たちのように随伴する平民の為にこういった部屋が用意してあるのだろう。

やがてルネはある部屋に通され、俺とシエスタはその隣の部屋に案内された。

……「おめが」……

「えっと、オデット、さん？」

「はい。」

「できれば、女性とは別室がいいんだけど……」

「……なぜですか？」

「サイトさん、わたしなら気にしませんよ。」

「ほら、間違いが起ると、な？」

「むしろ間違っしてほしいです、サイトさん……」

「し、シエスタ！落ち着け！」

「……なるべく同室の方がいいと思いますが。」

「どうしてね？」

「……この辺りは物騒なので。」

「物騒？」

俺とシエスタは声をそろえてオデットを見る。

彼女は表情を変えずにその理由をゆつくりと口にした。

「……この辺りはオーク鬼が出ますので。本宅である屋敷の中は安全なのですが、この使用人の部屋がある一角は過去に何度か襲われたことがあるのです。」

「げー！」

「そんな！わたし怖いわ、サイトさん……」

「……勿論お客様ののお供の方に危害が及ばないよう、こつこつ時は武装させたメイド人形が夜を徹して警護に当たりますのでご心配はいりません。

しかし万一という事もありますので、できれば同室をお願い致します。」

彼女はそう話してゆっくりと頭を下げる。

その仕草は優雅で彼女の美貌と併さり、どこかの姫君のような気品が溢れていた。

「わ、わ、頭を上げてください！貴族様にそんなことされたらわたし……」

「いや、そつこつ事ならわかったよ。無理を言ってゴメン。」

「……いえ。本来ならルネも同じ部屋にしたかったのですが、流石にお客様と同室とはいきませんから。」

「まだ日も高いですが、どうかなるべく外へ出ないようにして下さい。では、失礼します。」

「そう言い残してオデットは部屋を出て行った。」

「さわさわと彼女のドレスがこすれる音が聞えるほど静かな動作で、扉を閉めるその動作にすら俺とシエスタは見蕩れてしまっていた。」

「すごく……綺麗な人でしたね。」

「あ、ああ。あんな綺麗な子は初めてみたよ……」

「わたしも……。学院にも綺麗な人は沢山いますけれど、あんな人間離れした方は見たこともないです。」

「まったくだ。アダン準男爵の娘さんかなあ？」



「サイトさん……?」

ふとシエスタの視線に気がつく。

言葉の上ではお互いオデットの美貌を賞賛していたが、シエスタは俺が彼女を褒める事で不機嫌になっていたようだ。

「はは、ご、誤解すんなよ!確かにオデットさんは綺麗だけど、俺にとってはルイズが一番なんだぜ?」

「……じゃ、わたしは?」

「へ?」

「わたし、サイトさんの、その、一番に……なれますか?」

「あう、その、え?」

シエスタが悪戯っぽく笑う。

さりげなく ” 俺はルイズが好きなんだ！ ” と主張したのに、彼女は落ち込む様子はない。

しかも、よりもよってに、にに二番だと？！

「はは、し、シエスタ！俺なんかよりもっと良い奴が現れるんじゃないか？」

「うふふ、わたしは別に妾でもかまいませんわ。だから、だからですわね！サイトさんにナニをされても、責任を取れだなんて……言いません。」

「は、早まるな！シエスタ！！」

俺の訴えは届かない。

シエスタは目をとろんとさせて目を白黒させている俺の首に腕を回してきた。

彼女の甘い香りが鼻をくすぐる。

「サイトさん。時間はたっぷりとあります。ギーシュ様もお忙しいでしょうし、ミス・ヴァリエールも……ここには来ません。」

「え、あ、やめよう?」

「いいんです。サイトさん。わたし、妾で。二番でも、三番でも。遊びでもかまいません。ただ、この時だけわたしのモノになれるのならそれで……」

「あ、あ、あ、」

「サイトさん……」

シエスタの唇が近づいてくる。

俺は……

「ごめん！シエスタ！」

「キヤ！」

咄嗟にシエスタを突き飛ばしていた。

彼女はよろよろと後ろへバランスを崩しながら後退し、壁に背中をぶつけてしまう。

シエスタはいたーい、と口にしながら怒りもせず、それどころかどこかわざとらしく唇を尖らせ頬を膨らませて俺を愛らしく睨んだ。

一体どうしたって言うんだ？

俺の記憶によればもうちよっとな大人しい子だったと思うんだけど……

「サイトさんのいぢわる！」

「はは、お、おれ鍛錬に行ってくる！」

「外は危ないって行ってたじゃないですか。」

「大丈夫だよ。あ、で、でもシエスタは危ないからここにいるよ？  
じゃー！」

すべて言い終わらない内に俺は逃げるように部屋を出て、使用人が使う勝手口から外に出た。

それからサイトさんのいぢわる！と言う声が、耳の奥で響かなくなるまでひたすら荼化してくるデルフを振るうのだった。

俺を物陰から見つめる、美しいトパーズの瞳の存在にも気がつかず  
に。

目が覚めた時は夕方だった。

サイトさんが部屋を出て行った後、わたしは硬いベッドに倒れこみ枕に顔を埋めて少しだけ泣いてしまった。

彼の心にはあの貴族様がいると分かっているながら、なりふり構わず彼に迫ってみただけれどあっさり拒絶されてしまったからだ。

どんなに拒否されようとも彼をあきらめない、どんな形でもいいから彼の側にいたいと思っただけでもやはりこうやって拒絶されるのは辛かった。

酷く心が傷ついたが、それでも彼への想いは揺るがない。

わたしが持つ最大にして唯一つの武器は耐える心。

あの貴族様……ミス・ヴァリエールに対抗する為の唯一の武器。

耐えるのよ、シエスタ。

どんな形でもいい、彼がほんの少しだけわたしを見てくれさえすれば、それがわたしにとっての勝利となるのだから。

だから、こんな事で泣いてちゃだめ。

どんなに拒絶されようと、何度でも砕けた心を拾い集めて何度でも彼にぶつけるの。

そう何度も頭の中で自分を奮い立たせている内に、わたしは寝てしまっていたようだ。

浅い眠りから覚めた時はもう夕方だった。

窓から差し込む赤い光は、優しくわたしの体を温めていた。

部屋を見回してもあの憎らしい背中は無い。

どうやらサイトさんはまだ鍛錬をしているようね。

他にする事はないし、側に居て彼を眺めてみようかな？



……あの真剣な表情はとても素敵で、見ているだけでドキドキしてしまうのよ。

夢心地で彼の事を考えていると、隣の部屋の扉が開く音がした。

どうやらルネさんが部屋に戻ったらしい。

わたしはあのメイド人形の事を思い出し、彼女はもしかしたらお仕事の事を教わる時にあの人形のことを教えてもらったのかもしれないと考えた。

そう思うと好奇心が大きく膨らんで、サイトさんの元へ行くよりも彼女に話を聞いてみたいと感じていた。

そうね、外は危ないしサイトさんが帰って来た時に、メイド人形の話をしてあげればきっと喜ぶわ。

わたしはゆっくりと部屋を出て人気のない廊下を見渡す。

それから誰も居ない廊下でオーク鬼の話を読み出して、少しだけ怯えながらお隣のルネさんの部屋の扉をノックした。

中から返ってきたどうぞ、と言う声を確認して扉を開くと、そこにはルネさんと信じられない程美しい人が居た。

「あ、す、すいません！オデット様も居たのですね！」

「……気にしないで。」

「シエスタさん、どうしたんですか？」

「えっと、その……サイトさんが外で鍛錬してて、わたしは部屋に居ただけでその、暇で……ルネさんとお話でもと思って。」

「わぁーうれしいー！」

「でも、オデット様の邪魔をしちゃ悪いからわたしはこれで……」

「……構わないわ。もう、仕事の話は終わったし。」

「そうですね！丁度今オデットさんとおしゃべりをしていた所なんです。さ、中に入ってくださいな！」

ルネさんはニコニコしながら座っていた椅子から立ち上がり、ベッドに腰掛けた。

部屋はわたし達が使っているものと同じで、ベッドが二つ、それからテーブルが部屋の中央に置いてあり椅子が二組あった。

彼女ははこの部屋に帰ってきてから、早速オデットさんと椅子に座っておしゃべりをしていたらしい。

オデットさんって意外と気さくな方なのかしら？

貴族様なのにこんな使用人の部屋の椅子に座ってお話をするなんて

……

わたしは扉を閉めて部屋の中へ入り、ルネさんが譲ってくれた椅子におずおずと座った。

その間、どうしてもオデットさんから目を離す事ができなかった。

近くで見ると本当に綺麗……

呆けるわたしの様子を見てか、ルネさんが楽しげにおしゃべりを再開する。

「ふふ、オデットさんって本当に綺麗ですよね。」

「え？あ、はい。ごめんなさい、オデット様。見つめてしまつて。」

「……気にしないわ。」

「シエスタさん、わたしも油断するといつオデットさんを見つめちゃうんですよ?」

「わかります、それ。オデット様って本当に綺麗で……きっとアドン準男爵様の奥様も綺麗な方なんでしょうね。」

「……アドン準男爵には妻はいない。」

「え?」

「実はオデットさんは養子なんですって。」

ルネさんの言葉にわたしは驚いてオデットさんを見た。

彼女は特に表情を動かす事も無く、わたしを見て僅かに頷く。

「そうだったんですか。ごめんなさい、変な事を言ってしまったて…」

「……気にしないわ。」

「オデットさんって、とってもやさしい方なんですよ？シエスタさん。本当はオデット様って呼ばなくてはいけないのに、二人の時はさんでいいって言うてくれるし」

「お仕事も親切に教えてくれるし、本当に綺麗だし……私、嫉妬してしまっ位。」

「まあ。あ、そう言えばルネさんのお仕事ってどんなもの？やっぱリトウイーニー（雑用見習い）から？」

「いいえ！それがですね、なんとあのメイド人形さんの管理なんですよ！」

「え！いきなり？！それって、ハウス・キーパー（メイド長）じゃないですか！」

「はい。私もびっくりしちゃって……。なんでも、このお屋敷はあ

のメイド人形さん以外にはメイドは居ないそうなんです。

いままではオデットさんが色々と作業の指示を出していたらしいんですけど、やっぱり貴族様でしょう？

だから私が雇われる事になったんですって！」

「すごい！羨ましいです、ルネさん！」

「えへへ。でも一応メイドの勉強は必要で、暫くはメイド人形さんに混じってお仕事をするんですけどね。」

「あ、でもどうやってあのメイド人形さんに指示を出すんですか？  
ゴーレムって確か、主人以外の命令は聞かないんでしょう？」

「……これ。」

そう言ってオデット様は綺麗な手を私に差し出した。

差し出された右手の薬指には質素な指輪が鈍く光っている。

ルネさんも同じように手を差し出して、その薬指にも同じ指輪が光っていた。

「……この”操りの指輪”にはアダマン準男爵の魔力が込められているの。」

「で、この指輪をかざして命令すればいいってワケなんです！」

「へえ。いいなあ。魔法学院にもほしいかも。」

「ねね！シエスタさん！そんな事よりもですね！」

「え？なあに？」

「シエスタさんとあの、サイトさん、恋人同士なんですか?!」

年頃の女の子の話題は、とっても変わりやすい。

それも突然に。

いつか聞いて見たいと思っていた事なら尚更だ。

ルネさんもそうなのだろう。

顔を一瞬で赤くしたわたしをみて、口の端を持ち上げ半目で流し目を送りながら質問を続けた。

「私の見立てでは、シエスタさんがサイトさんにベタ惚れって感じですよね！」

「あは、はは……。実は、片想いの。」

「きゃあ！やっぱり？ねね、聞かせてくださいよう！」

「そんな、恥ずかしい……」

「……彼、もしかして元貴族なの？」



意外な人が会話に参加してきた。

オデット様、こういった話は苦手だと思っていたのだけれど……

もしかしてサイトさんに？

イヤだわ、もしそうならわたし所かきつとミス・ヴァリエールでも敵わないじゃない……

「まあ！オデットさんもあの方に一目惚れ？」

「……いいえ。さっき彼が裏庭で剣を振って居る所を見て、疑問に思ったことがあって。」

「疑問、ですか？」

「……彼、所作が平民の物ではなかった。口調は碎けてはいたけれど、一緒に居たハンサムな貴族の彼よりも完成されていたわ。」

「オ、オオオデットさん！もしかして、サイトさんじゃなくてギ―シュ様の事が好きになっちゃったの?!」

「あら。うふふ、どうやらわたしより先にルネさんに聞かなくてはいけない話題が出来てしまったわね。」

「な、なんの事でせう!」

わたしは先程のお返しとばかりに悪戯っぽく笑ってルネさんに詰め寄る。

オデット様はその様子を見て……無表情だった。

どうやらサイトさんにもギーシュ様にも興味は無いようだ。

……すごくホっとした。

彼女のような人までライバルになられたら、流石にわたしもくじけてしまう。

かも。

「ルネさん、隠しても無駄よ?あなたギーシュ様の事好きになっち

やったんでしょっ?」

「それは、その……」

彼女は真っ赤になって俯いた。

どうやら図星のようだ。

ギーシュ様は見てくれもいいし、コテコテな台詞ばかりなんだけど女の子って結構そういうのに弱いしね。

学院の貴族様なら慣れもあってそうでもないけれど、こついった田舎の子ならイチコロなんだろうなあ。

それからわたし達は時が経つのを忘れて、お互いの恋を議題におしやべりを続けた。

窓から見えていた沈む太陽は森の向こうに隠れてしまい、昼と夜の狭間の時間は終わりを迎えようとする頃になって初めて

オデット様がわたし達の話に割り込んできた。

「……ルネ、そろそろ夕食の時間。お料理はまだいいけれど、ロズリー又と一緒に配膳をしないとアダン準男爵に叱られるわ。」

「あ、そうですね!」

「……それにシエスタさん。ゾエとイヴォン又がそろそろ外周りの警備につきますが、オーク鬼はここを襲おうとする事もあるの。気をつけて下さい。」

「え、ええ。わかりました。でも、その……以前襲われた時はここにいた方は大丈夫だったのですか?」

「……死んだわ。」

「え?!」

「そんな!」

「……その時は森でオーク鬼を討伐してて、屋敷を守る者はいなかったの。」

「そう、なんですか……」

「……今は大丈夫。ゾエとイヴオンヌが常に目を光らせているし。」

「その、ゾエとイヴオンヌって……」

「あのメイド人形さんの名前ですよ、シエスタさん。」

ルネさんが得意げに答える。

どうやら先ほどから出てくる名前はメイド人形達の名前らしい。

詳しい話を聞けば、彼女たちはかなりの強さでオーク鬼では相手にならないほどだとか。

わたしはその話に安堵して、サイトさんに声をかけて部屋に戻ろう  
と思ひ席を立った時だった。

不意に部屋の扉がノックも無しに開いた。

「オデット、ルネ、ここに居たか。夕食の前に少し手伝ってほしいことがある。」

アダン準男爵はそう言って二人について来るように促した。

わたしは一瞬、ノックも無しに女性の部屋に入ってくるなんて思いムっとしたが顔に出せるはずも無い。

それではわたしはこれで、と二人に声をかけて、アダン準男爵と共に去っていくオデット様とルネさんを廊下で見送った。

部屋に戻るとサイトさんはまだ帰ってきてはいなかった。

裏庭の方で大きな音がしているから、恐らくはそこだろう。

ギーシュ様の楽しげで大きな叫び声がここまで聞えるし、きつとじやれあっているんだわ。

はあ、ああいう無邪気に笑い合える関係って羨ましい……。

それから裏庭に居るであろうサイトさんに声をかけようと、使用人が使う勝手口から外に出てあの憎い背中を探した。

この時既に日は沈みきり、長い夜が始まるうつとしていた。

「やあ、ここにいたのかサイト。」

日も沈みかけた頃、ギーシュが戻ってきた。

戻ってきた、というか俺たちの部屋を訪ねて来たと言った方が正確だな。

コイツはゲストルームでゆっくりと出来るはずだから。

ちくしょう、ぜったいコッソリ泊まりに行つてやる。

……シエスタに夜這いでもかけられちゃたまらんし。

「君達の部屋に行つただけで、誰も居なくてね。探したよ。」

「あれ？シエスタは居なかった？」

「居なかったよ？」

「おかしいな。この使用人の部屋がある辺りは何度かオーク鬼に襲われるらしいから、部屋から出るなって言つといたんだけど……オデットさんかルネさんと一緒なのかな？」



「ああ、そう言えばこの辺りは本宅から別棟になって森にも近いね。」

「昔襲われた事があるんだそうだ。オデットさんに聞いたんだ。」

「その……ミス・オデットは何処だい？」

「ふーん、モンモランシーの事はあきらめるんだ？」

「な、何をばかな事を！」

「これで貸し二つな！」

俺はそう言ってニヤリと笑った。

ギーシュは肩をすくめてやれやれとため息をつく。

「あの子は部屋を案内されてからそれっきりだったよ。それより…  
…どうだった？ゴーレム。」

「うむ、非常にすばらしかった。得たものは大きかったよ。」

「へえ。」

「それに、だな……」

「なんだよ？そんなに顔を赤らめてモジモジして。気持ち悪いぞ？」

「う、うむ。その、だな。各部の構造も教えて貰ったのだが……」

「おう？お前、お人形の服を脱がせて興奮するタイプなのか？」

「い、いや。そうではないんだが……」

「なんだよ、はっきり言えよ。」

「そうだな。え、っとだな？その。しっかり作りこまれていたのだ。」

その、女性として。」

「うっ。」

「その、だな。胸や、じょ、じょじょ女性自身というか……」

「ああ、そういうことか。ま、あれだけのもんだからな。流石だよな、アダン準男爵は。」

「き、君！何ともないのかね？は、恥ずかしくないのかね？！」

「別に？そりゃ、生身の女が目の前で裸になりや慌てるけど。それに、あれだけ自然な所作のゴーレムなら性器まで作りこんでいておかしくないって。」

「せ、せせ性器だなんて大っぴらに口にするのはよしたまえ！大体、なぜそこまでするんだ！？」

「おいおい、ゴーレムはお前の方が専門だろ？まったく。当然”使う”為に決まってるじゃねえか。」

ああいった非戦闘用みたいなもんは鑑賞や愛玩用も兼ねてるからな。その証拠にメイド人形の顔は作りこまれていただろ？」

「うむ。簡単な表情も浮かべることが出来ていて、顔だけなら人を見分けがつかなかった。」

「人形は年をとらねーからな。そういったもんを好む貴族も居るんだよ。夜の相手をさせたりも、な。俺の故郷でもそういう趣味の連中は居たぜ。」

「なるほど。君は平民の癖に中々の物知りだな。」

「ま、ルイズに召喚される前も貴族の従者みたいな事をしてたからな。偏っちゃいるがそこそこ知識はあるぜ。」

「ううむ……もしかして君はその、女性との……経験が豊富だったりするのかね？」

「ま、な。」

それを聞いてギーシュはうめつと悔しそうに俺を睨んだ。

同年代として、いかに ” 経験 ” を早く多く積むのかは大きな問



「人数なんて関係ねえよ。……結局、一人しか選べないんだしさ。」

「う、うむ。なんだ、その……君は大人なんだな。」

「うはは！そうかもな！まあ、”わからない” 事があれば教えてやるよ。」

「うむ。モンモランシーとの仲が修復できた暁には頼むよ。」

ギーシュは消え入りそうな声でそう言って、恥ずかしそうに笑った。

……おいやめろ。

そんな可愛い仕草を男のお前がするんじゃない。

背後にバラが浮かんできそうじゃないか。

「ところでさ、他に得るもの無かったのか？ゴーレムの操り方とか。」

「ふふ、よく聞いてくれたね！じつはそれを試そうと君を探していたのだよ。」

「お、じゃあ今から試すか？」

「うむ。そのつもりだ。」

「おし、かかってこい！」

俺はデルフを正面に構え、ギーシュと距離を空けた。

ギーシュは先程の様子とは打って違って、不適に笑い薔薇の杖を振るう。

地に落ちた花弁は七枚。

錬金された七体のワルキューレの姿はいつもと違っていた。

三体は長槍と身の丈もある盾を持っている。

残りの四体は短めの剣と小さな盾を手にしていた。

槍を持つワルキューレはすばやくギーシュの前に出て盾で壁を作り、槍を前に構える。

その三体の後方に二体の剣を持ったワルキューレが控えて、さらに後方に立つギーシュの両脇に残る二体のワルキューレが立っていた。

俺から見るとまるで要塞のような布陣だ。

……なんか教科書とか映画で見覚えがあるな、この布陣。

たしか、こうやって守りを固めて……

「ふふふ、今度は遅れを取らないぞ、サイト。準備はいいか？行くぞ？ワルキューレ！」 チャージ（突撃）」 「！」

考え込む俺を余所に、ギーシュの大きな掛け声で槍を構えたワルキューレとその後ろにいた二体のワルキューレがすごい勢いで向かって来た。



がちゃんがちゃんがちゃんと鉄が擦れ合う音を立てて突っ込んでくる。

その圧力は相当なものだった。

俺はルーンを輝かせながら初撃の槍をかわし、懐に入り込みデルフを振るおうとした。

しかし、ワルキューレはそんな事もお構い無しに前進をやめない。

壁のような盾が目の前に迫り、俺は弾き飛ばされそうになって慌てて横に飛び青銅の一撃を避けた。

ドドド、と音を立ててそのまま前進し続け、ある程度距離をとってからワルキューレは止まり再び俺の方を向いてまたあの陣形を組む。

「……なあ、ギーシュ。結構えげつなくないか？」

「ふふふ、アダン準男爵が戦場でやっていた方法だそうだ。地上戦では負け知らずだったらしいぞ？」

「ずりいぞ！あんなの決闘用じゃなくて戦争用じゃねえか！」

「ちなみに横から攻撃しても無駄だぞ。そのために後ろに剣兵が控えているんだからな。」

「で、そっちの二体は予備兼お前の護衛、か。」

「そうだ。こうやって役割分担をはっきりさせて、ワルキューレの維持時間や精度を上げる手法なのさ。」

「一体が何でも出来るように判断能力をつけて錬金すると、結構疲れるからね。」

「本体の強度を下げて強い盾を持たせたりもしてるんだ。この方法なら武器までセットに出来るんだぞ？ふふふ、ここへ来た甲斐があったよ。」

「考えたな……」

「ふん、戦いは数だよサイト！今度は僕の勝ちだな！いくぞ、チャージ（突撃）」

再びワルキューレが地響きを立てて迫ってくる。

俺はため息をついてデルフを構えてギーシュに言った。

「残念だけど……これ、数揃えなきゃ意味無いぞ。」

光るルーン。

先程と同じように初撃の槍をかわし、それと同時に今度は上へ高く跳ぶ。

先頭のワルキューレを跳び越すと、後方のワルキューレが剣を振って来たが短いので俺の位置まで届かない。

俺は突進するワルキューレ達を大きく飛び越し、後方に着地していた。

同時に反転し、一気にワルキューレ達に追いついて体制を立て直すうとしていた剣のワルキューレ二体を一瞬で切り伏せる。

「な?!」

「あと、盾は俺には無意味だ。 ”盾ごと” 切り伏せるからな。」

槍のワルキューレを返す剣でさらに両断する。

当然だ。

ギーシュのゴーレムは青銅。

それを初めてルーンを使った時の俺でさえ両断したんだ。

そのゴーレムが同じ材質で多少厚い盾を持つと、デルフを経験を得た今の俺には問題はない。

鈍い音を立ててワルキューレは地に倒れた。

「な？陣形組むってのはいいと思うけど、役割がはっきりする分弱点もはっきりしてくるからな。」

「戦場じゃそれを数と指揮で補うんだろうが、数体のゴーレムだけじゃ効果は薄いと思うね。」

「うつむ、そうか……」

「でも悪くはないかもなあ。武器と盾をそのままで、もっと本体を弱くして数を増やしてみたらどうだい？それかもっと素早く動けるようにするとか。」

お前がアース・ハンド　なんか唱えて足止めしたりして援護に回るとかもいいな。空飛ぶ相手には苦戦しそうだけど。」

「うつむ、それもいいかもしれん。だが、君のように青銅（銅）ことなき払う相手にはあまり意味はないだろう。」

「うーん、かもなあ。」

「まあいいさ。ただ七体出して戦わせるだけじゃダメだって理解できただけでも、よしとしようじゃないか。」

「お前、お気楽だなあ。」

「ふふふ、見ていたまえ！いまに君をぎゃふんと言わせてみせるよ。」

ギーシュはそう言って笑った。

自身の魔法が再び平民に敗れたというのに、快活に笑っていた。

俺も心から笑う。

こいつがこうやって笑うって事は、本当に俺を認めたと言うことなのだから。

それが無性にうれしかった。

笑い合っていると、遠くからシエスタが呼ぶ声が聞えてくる。

俺達はこの時初めて日はすっかり暮れていた事に気がついて、屋敷に戻る事にした。

「なあ、ギーシュ。腹、減ったな。」

「心配するな。同席はできんだろつが、同じものを食べられるよう取り計らうよ。」

「おお！お前いい奴だな！」

「サイトサー……あ、いた！サイトさん、もうすぐ夕食ですよ。ギーシュ様もお屋敷に戻ってください。」

「おう、シエスタ！喜べ！ギーシュが俺たちにも貴族用のメニューを振舞ってくるれるらしいぞ！」

「わあ！本当ですか？ギーシュ様！」

「うむ。友人なのだから当然だろう？ただ、従者という話でここに居るのだから待遇には我慢してくれたまえ。」

「おう、気にしないぞ！」

「でも、ここ、オーク鬼が……」

「何、夜になったら二人でギーシュの部屋に押し掛ければいいんだ  
」

「わあ！サイトさん頭いい！」

「……君達は本当に遅しいんだな。僕は貴族なんだぞ？」

「友達なんだろう？」

「うむ。」

「じゃあ、決まりだ。」

俺はギーシュの肩を抱き、いやあ友達っていいなあ！とワザとらしく口にした。

ギーシュは複雑な表情を浮かべながらも、はにかんでいた。

シエスタも口には手をあてて笑っていた。



その時、屋敷の方から女の悲鳴とアダン男爵のものであろう叫び声  
が辺りに響き渡る。

まだ薄明るい空には青白く輝く月と血のように赤い月が昇るつと  
していた。

女の悲鳴と男の叫び声が聞こえた後、どうやら屋敷の中で火の手が上がったようだ。

オーク鬼の事もあるので、ギィシュにシエスタをまかせ、俺は一足先に屋敷の中を駆けていた。

声は二階から聞えた。

玄関ホールから二階へ一気に駆け上ると、長い廊下に面していた沢山の扉の一つからもくもくと煙が上がっている。

俺は警戒しつつもその部屋に駆け込み、絶句した。

部屋はとても広く、そして赤く染まっていた。

部屋の奥には巨大ななにかの像がそびえ立ち、その足元にはアダン準男爵の ” ような ” ものが転がっている。

まるで筆を振り回し、床、壁、天井と擦り付けてその位置に置いたかのように、横たわるアダン準男爵から太い血の線が走り部屋中をあかく染め上げていた。

火はナニかに振り回された拍子に燭台が倒れたのだらう、入り口から向かって右手の方にある机を燃やしていた。

その灯りに照らされて部屋の中央にルネとオデットが倒れている姿が見えた。

俺が素早く二人を助け起こそうと近寄った時、不意に炎の灯りに影がさす。

それを感じるよりも早く後ろへ跳ぶ。

恐ろしい風切り音を立てて何かが目の前を通過した。

続く攻撃に備えてデルフを構えるが、追撃は来なかった。

どうやら ” 相手 ” は今立っている場所までは攻撃が届かないらしい。

その相手とは……

「なんだよ、これ……」

轟、と机を燃やしていた火が壁にかかる布飾りに燃え移る。

炎となった灯りは、部屋の奥にあった巨大で得体の知れない像を照らし出していた。

ソレはムカデのように沢山の節を持ち、沢山の手を持っていた。

いや、手だけでなく、足も沢山くつついている。

そして、沢山の……愛くるしい顔をした女の頭も。

いくつも見覚えのある顔もあった。

恐らくはメイド人形達の成れの果てなのだろう。

胴から胴が生え、そこから足が、頭が、腕が生え、そして巨大で異形なゴーレムを作り出していた。

混乱する頭をそのままに、俺は敵を観察する。

よく見ると、腕の何本かは巨大な鎌のような物も付いていた。

恐らくは、オーク鬼討伐などで必要に応じて取り付ける ”腕”  
なのだろう。

さっき攻撃してきたのはアレか、と考えながら床に倒れている三人  
を見る。

……アダン準男爵は血まみれた。

体中が血で真っ赤に染まり、投げ出されている手も奇妙な方向に曲  
がっていた。

それから、背中に大きな穴も開いてある。

あの、鎌の腕と同じ位の。

どうやら既に事切れているらしい。

他の二人は……アダン準男爵の返り血を浴びて居る様だが、ここか  
ら見る限りでは怪我はないようだった。

「サイトー！」

「サイトさん！」

「ギーシュ！うかつに中に入るな！」

俺は押取り刀でやってきたギーシュに注意を促す。

ギーシュは異変を察知し、ワルキューレを四体錬金した。

その内二体をシエスタの護衛につけて下がらせる。

「な、なんだこいつは！あれは……アダン準男爵！」

「ギーシュ！準男爵はもうだめだ！俺が囷になるからワルキューレにあそこの二人を抱えさせて、シエスタと一緒に外に逃げろ！」

「わかった！サイト、無理はするなよ？」

「おまえもな。じゃ、いくぞー！」

デルフを強く握りなおし異形の、恐らくは元メイド人形達へと俺は突っ込んだ。

左右から鎌が次々と襲い掛かる。

それを下、右、左と避け続け、隙をみて腕や胸、足にデルフを斬りつけた。

意外にもアツサリと斬りつけられた腕や足は吹き飛んでいったが、すぐに元の位置に戻っていく。

いや、吹き飛んだ腕なんかは元に戻る時についでに、燭台や椅子を握っていてソレを武器に振り回すものだから尚性質が悪い。

「サイト！こっちは大丈夫だ！」

「よし、じゃあ後は頼むぞ！」

二人を回収したギーシュが声を掛けてくる。

俺は異形のゴーレムが投げしてきた椅子をデルフで弾きながら、ギーシュに行けと叫んだ。

それから少し距離を空けて、ゆっくりと呼吸を整える。

異形のゴーレムに沢山くつついているメイド人形達の頭は、その愛くるしい顔を俺に向けて不意にクスクスと笑い始めた。

「くそ、一体どうなってるんだ？」

クスクスクス

「暴走？いや、主人を殺すゴーレムなんて聞いたことが無いぞ？」

クスクスクス、ねえ？あなたもわたしの、あたしの、わたくしに酷い事をするの？



……初めて聞くメイド人形達の声は、鈴のように綺麗で不快だった。彼女達は足元にあつたアダマン準男爵の足を掴み、ひょいと持ち上げて複数の頭が一斉にそれを見る。

クスクスクス。コイツみたいにな、わたしの恋の邪魔をする？あの人を想うあたしに酷い事をする？

「なんのことだ！」

クスクスクス。ああ、愛しい。愛しい。愛しい。逢いたい。逢いたい。逢いたい。あの人に、逢いたい。

「逢いたい？」

俺の言葉に、メイドの顔達は今度は一斉にこっちに振り向く。

大きな瞳は炎の光を反射して、狂気に似た歓喜を連想させた。

異形はべっと人形を捨てるようにアダン準男爵の死体を壁に投げつけ、ゆっくりと前へ動き出す。

炎は部屋中に回り、メイド人形達にも燃え移っていた。

そろそろ俺も脱出しなければ、屋敷に充満しつつある煙にまかれてしまう。

メイド人形達は自身を燃やしていく炎も気にせず、クスクスと笑いながらそれぞれが言葉をつむいでいた。

クスクスクス。そうよ！逢いたいの。あの人に逢いたいの。あの人  
がやっと逢いに来てくれたの。もう一度あの人に出逢えたの！

「なんだよ！どういふことだよ！」

彼女達は、歓喜の声を上げて俺の問いに複数の声で同時に答えた。

ああ！グラモン様！やっと、  
逢えた！

僕はワルキューレにシエスタとルネ、オデットを抱えさせて急いで屋敷を出た。

一体のワルキューレに先導させ、階段を降り玄関ホールを抜け、正面玄関の先に広がる前庭まで移動して後ろを振り返り屋敷を見た。

先程までいた部屋では炎が激しく上がり、窓からは竜の舌のようにちらちらと火の手が上がっている。

サイトは無事だといいいのだが……

僕はそう思いながら、ルネとミス・オデットの様子を見る。

二人とも怪我はなく、ただ気絶しているだけのようだ。

ルネがうう、と唸って目を覚ましかけていたので、シエスタにミス・オデットをまかせて彼女を抱きかかえてその名を呼んでみた。

「ルネ、ルネ！すっかりしたまえ。」

「う……ギーシュ、様？」

「ルネ！大丈夫か？一体何があつたのかね？」

「ギーシュ様！」

ルネは意識を取り戻した途端、がばつと僕に抱きついてきた。

乙女の甘い香りと胸に感じる予想以上の双丘の感触に、思わず頭が混乱するが唇を噛んで僕は彼女を引き離れた。

「ルネ、落ち着いて。一体どうしたというんだ？何があつたのかね？」

「ああ、ギーシュ様。怖かったんです！私、とつても……怖かった

「！」

「ルネ、一体何が？」

「その、私もよく……わからないんです。シエスタさんとお話していると、アダン準男爵さまに呼ばれあの方の私室へと連れて行かれました。

あ、オデットさんも一緒に、です。

それから、『これからお前の感情を人形に複写するから、なんでもいい。人を強く愛する気持ちを思い浮かべるように』といわれて……」

「それから？」

「えっと、それから……突然メイド人形さん達が苦しむように動き始めて、その……一つになり始めました。お互いの腕を外したり、胸をくっつけ合ったりして。

アダン準男爵さまは必死に止めようとして……それからオデットさんの方を見て何か言おうとした所で……うつつ、あんな事に！」

そう言ってルネは泣き出してしまった。

恐らくは、アダン準男爵が殺害される瞬間を見てしまったのだろう。

不意に、屋敷のほうから大きな音がする。

火の手が上がっていた部屋の隣室の窓が次々と割れ、それからその部屋も火の手が上がっていた。

どうやらサイトが派手に暴れているらしい。

「ギーシュ様！オデットさんが目を覚ましました！」

「何？本当かね？」

「……「JJ」、は？」

僕は今度は泣きじゃくるルネをシエスタに頼み、上体を起こしたミス・オデットの元へと駆け寄る。

改めて近くで見る彼女は……信じられない程美しかった。

こんな時でなければ、一晩かけて愛の言葉を伝えたい位に。

彼女の側で片膝をついてしゃがみ、美しいトパーズの瞳と同じ目線にして問いかけた。

「ミス・オデット！一体何があつたのですか？」

「……アダン準男爵は？」

「僕らが駆け付けた時には恐らく……死んでいました。」

「……そう、ですか。それも当然の報いなのかもしれません。」

「報い？一体何を知っているのですか？ミス・オデット。」

ミス・オデットは少し哀しそうに目を伏せ、それからおもむろに黒いドレスの袖を捲り上げる。



その動作は何処までも優雅で、さわさわとシルクであろうドレスの布が擦れる音が耳に付いた。

そして……そこにあったのは、むき出しの球体関節だった。

「ミス……きみ、君は！」

「……人形、ですわ。」

「そんな！オデットさんが！」

「ばかな！こんな人のように話すゴーレムだなんて！そんな物を作れるメイジなんて聞いたこともない！」

「……可能ですわ。人の魂を込めれば。もっとも、私は人ではありませんでしたけれど。」

「オデットさん……あなた……」

呆然とする僕達を見回して彼女は目を伏せた。

それから、哀しい話を語りだしたのだった。

彼女は元々は今は没落した貴族の娘だったそうだ。

ある日家を取り潰しになり、この館でメイドをする事になったのだから。

当時この領主だった貴族は僕のひいひいお爺さんで、本家の領地を継ぐ前にここで領地経営の勉強をしていた。

オデットは……やがて本家に帰り広大な領地を継ぐひいひいお爺さんに恋をしていたそうさ。

そしてある日。

ひいひいお爺さんが森のオーク鬼討伐に出ている時に、屋敷がオーク鬼の別働隊に襲われた。

その折、魔法が使えるオデットが他の使用人を庇って戦った。

そして……彼女は死んだ。

ひいひいお爺さんへの想いを残して。

それから彼女はシルキーとなった。

シルキーとは屋敷に憑く幽霊のようなもので、使用人に紛れて家事を行ったり主人の世話をしたりする妖精の一種だ。

一般的に強い情念を残して死んだ人間がシルキーとなり、彼女達が居つく屋敷は、富と成功を約束されると言い伝えがある。

屋敷の主人もいちいちメイドの顔も覚えていない事もあり、主人がよく働く使用人だと思っていたメイドがシルキーだった、なんて御伽噺もある位だ。

オデットはシルキーとなつてまで、ひいひいお爺さんの側に居たかったのだと言った。

しかし、そんな彼女の想いは叶えられる事はない。

やがてひいひいお爺さんは、本家の領地を継ぐためにこの屋敷を離れてしまった。

彼女は悲しみ、愛する男の帰りをずっと待ちつづける事にした。

百年近くも。

そして、アダン準男爵がここへやってきた。

彼はある夜、オデットを見て彼女に一目惚れをしたらしい。

彼女の為に体を作り、いろんなマジックアイテムを使って彼女をそこへ押し込めた。

だが、彼女は既に人ではない。

人の精神の為に組まれてい術式が彼女には適用されず、結果彼女は感情を失った。

文字通り、動く人形となっただけだった。

アダン準男爵は悲しみ、せめてもの慰みにあのメイド人形達を作り出したのだと言う。

それから、メイド人形達にオデットの無いはずの心を複写してそれぞれを ” 繋いだ ” 。

彼女の言うことを聞くように。

彼女の代わりに感情を取り戻させる為に。

メイド人形達の一体でも何かしらの感情を取り戻せば、オデットにもその感情が流れ込むようにしたのだ。

アダン準男爵は感情を植えつけるため、オデットや他のメイド人形達にあらゆることをした。

愛の言葉を囁き、罵倒し、着飾り、衣服を破り、かしずき、組みし  
だいた。

しかし彼女達は怒りも愛情も、涙も笑顔も取り戻さなかった。

ある日、準男爵は思いつく。

だれか他の人間の感情を複写すればよいのだと。

オデットと同じ年頃の少女を雇い、操りの指輪を経由させて愛情だ  
けを複写すればよいのだと。

そしてルネが雇われた。

「……彼は『愛する感情』を思い出せ、といました。」

「それがなぜ！」

「……ルネの『愛する感情』が流し込まれ、メイド人形達は暴走し  
たのです。自我を持たず、私の壊れた心だけを持つ故に。」

「そんな……」

「……私の心にあつたのは、あの方への燃える想い。あの方への甘い憎しみ。そして……私を蹂躪したあの男への復讐心。

皮肉にも、私は心の他に理性もあります。だから暴走などはしません。

しかしルネの感情を流し込まれた事をきっかけに、あの哀れなメイド達は心の赴くままに行動し始めました。」

屋敷の方でさらに大きな音がする。

二階は完全に燃え上がり、床が抜けたのか一階の窓が割れて炎が下に移動していた。

オデットは閉じていた目を開いて、屋敷を見ながら続けた。

「……恐らくはあの哀れなメイド人形達は心の赴くまま、彼を求めているでしょう。」

ギーシュ様はあの方にそっくりだから……貴方を呼ぶのです。悲鳴に似た叫びが繋がった私の心から伝わってきます。」

「なんと?」

「……逢いたい。グラモン様、と。」

僕はゆっくり立ち上がり、杖を手にした。

忠実な戦乙女達は、僕の心を知ってか屋敷の方に向き直り横一列に並ぶ。

その時大きな音を立てて、玄関の扉を破壊しながら異形のゴーレムが外へ吹き飛んで来た。

その姿は醜く、全身が炎で燃え、大きな鎌が付いた腕は半ばで切断され、そして哀しく見えた。

炎はすでに屋敷全体に燃え移り、辺りを煌々と照らしている。

二つの月も既に空高く昇っていた。

「くそ、手こずらせやがって！ギーシュの所には絶対え行かせねえぞ！」

クスクスクス、グラモン様！いた！グラモン様！グラモン様！ぐ  
ラもんさま！GRAMONSAMA！

僕は素早く四本の長槍を錬金し、ワルキューレに持たせる。

あのメイド達は奇妙な動きで僕に向かって突進して来た。

後ろでシエスタやルネが悲鳴をあげる。

サイトが必死にメイド達を止めようとその背に乗り、何度も長剣を  
突き立てている。

「……いくぞ、哀れな乙女達。僕は『青銅』のギーシュ・ド・グラ  
モン！君たちが求めるこの名を忘れるな！」チャージ（突撃）  
「！」

ワルキューレ達は一斉に槍を掲げ、炎に包まれた異形のゴーレムへ



猛進した。

バキン、と鈍い音がして槍が彼女たちを貫く。

メイド達の前進は止まったが、勢いで一体の胴がはずれて僕の足元に転がる。

その胴には一つの頭が付いていて、プスプスと煙を上げて焦げている。

僕はその胴を抱え上げてやる。

ああ！やっと！やっとこの時が！ グラモン様！        どうか！  
どうか！

「君は何を求めていたのかね？」

グラモン様！わたしは！        ずっと        あなたの  
事を

「……もついいんだ。ゆっくりと目を閉じて。」

わたし  
あな  
の事を  
憎いと  
愛しいと

「……すまなかつたね。随分、君を待たせたんだね。」

僕はそう言って、人形の額に接吻をしてやり抱きしめた。

瞬間、ワルキューレ達が押し止めていた異形のゴーレムが音を立て崩れ落ちる。

抱きしめていた人形からも頭がボトリと落ちて、慌ててその頭を拾い上げるとその顔は幸せそうに笑っていた。

理由はわからないが、この時僕は泣いていた。

すべてが終わってサイトが怪我は無いか？と僕やシエスタに聞いていると、突然ルネが口に手を当てそんな！と叫ぶ。

オデットがいつの間にかただの人形に戻っていたからだ。

シルキーが宿る屋敷が燃えたからなのか、あのメイド人形達と繋がった心が満足して一緒に天に召されたからなのかはわからない。

ただ、彼女は幸せそうに笑っていた。

僕らは彼女とメイド人形達と一緒に燃やしてやる事にした。

炎はパチパチと音を立て、美しい彼女の顔をたちまち焼いてしまう。

暫くそこで立ち尽くしていると、サイトが帰ろうと促してきた。

それからルネが僕にハンカチを手渡してくれる。

どうやらまた僕は泣いていたらしい。

僕は何度も屋敷を振り返りながらヘザツクの村へと続く道を歩いた。

二つの月はやけに哀しそうに輝いて見えた。

ヘザツクの村に辿りついた時、僕らはボロボロになっていた。

途中の森でオーク鬼に襲われ、尽きかけていた精神力に発破をかけてワルキューレを作り二人を護りながら必死に戦ったからだ。

……もつとも、丁度真相を聞いていたサイトが物凄い形相でお前らのせいで！とオーク鬼に斬りかかって行き、殆ど彼一人でやっつけてしまっていたが。

僕はあの時、すこしだけオーク鬼に同情してしまった。

アレではあまりに一方的だ。

彼は僕の友達なのだから、もうすこし優雅に戦うと言う事を知ってもらわねば。

そうでないとか何かの拍子に彼を怒らせたなら、僕があんな目に会う事になる。

それだけは避けたい。

やっこの思いで宿にたどり着くと、女将が驚いた顔をして出てきた。

ここから屋敷が燃える様が見えていて、駆けつけようにもオーク鬼の森のせいで近寄れずどうしたものかと村の住人が食堂で話し合っていたらしい。

僕は大雑把に事情を説明し、少ない小遣いから二部屋分の金を払い宿の部屋を取ってそこで死んだように眠った。

そして翌日。

宿の馬小屋の前で僕らは腕組みをしていた。

ルネの行き場所が無いのだ。

「さて、僕たちは学院に帰るとして。」

「私、どうしよう……」

「奉公先、雇い主ごと燃えちゃったしなあ。」

「うっ、一体これからどうすれば……」

「ああ、ルネ、泣いてはだめだよ。」

「でも!」

「そっだ! ルネさん、魔法学院に来てはどうですか?」

「え?」

「ああ、それならいいかもな。」

「待ちたまえ。学院のメイドを勝手に雇うなんて……」

「じゃあお前が雇ってやれよ。元はといえばお前のひいひい爺さんが悪いんだぞ？」

「そうですよ！オデットさん一人でお屋敷を護らせるような真似をするから！」

「それは！僕には関係ないじゃないか！」

「ひつく、ギーシュ様、わたしの事なんてどうでもいいって思ってるのね！」

「そんな事はないよ！」

「いいじゃねえか、お前んちで雇ってやれよ。」

「そうですよ。」

「ぼ、僕の家はそんな余裕は！」

「えぐ、ひつく、いいんです。私魔法学院で死んでシルキーになつて、ギーシュ様のゴーレムに取り付いて一生お側にいますから！」

「……あ、それもいいかも」

「シ、シエスタ?!」

「や、やめたまえ! わかった! 父上になんとか掛け合うから！」

「お、さすがギーシュだな。貴族の鑑だ。うははは」

「うふふ、本当にギーシュ様は女の子には優しいんですね。」

「ギーシュ様、うれしい！」

ルネに抱きつかれ、僕はだらしなく笑った。

はあ、父上にはなんて説明しよう？

アダン準男爵の一件を説明するついでに彼女の再就職先を頼んでみるか。

……それに学院には置いてはおけないしね。

モンモランシーにこれ以上誤解をつけてはたまらない。

ん？サイト。

君はなぜそんなにうれしそうにニヤついているんだ？

……ああ、そうだな。

学園の馬は二頭だな。

君は当然シエスタとだが、僕は……

「さあ…ギーシュ様、行きましょーっ」



ルネ。頼むから僕の前に座らないでくれないか？

そ、その……うれしいんだがよかったら後ろに回ってくれ。

そうじゃないと僕の、その……『青銅』が火のように熱くなってしまっじゃないか。

おいサイト、そんな目で見てないで助けてくれよ。

友達だろうか？

サイトとそんなやり取りをしながらヘザツクの村を出る時に、僕は誰かに呼ばれた気がして後ろを振り返った。

そこには誰も居らず、遠くに見えるアダン準男爵の屋敷の辺りからはまだ煙が立ち昇っていた。

それから僕はずっと「まあ！ギーシュ様だったらこんな昼間から……」  
とルネに言われながら学院まで戻る羽目になるのだった。

3 - 8 : 彼はあなたのおもちじゃない

自分の感情をこれほど持て余した経験は、いままで無かった。

キュルケにサイトの事を聞いて急いで部屋に戻ると、私のバカ犬がにこやかにあのメイドと一緒に部屋から出てくる所に遭遇した。

頭の中が怒りによって一瞬で白濁する。

ここ数日彼へ向けていた好意や期待、胸の高鳴りをすべて裏切られたと感じたからだ。

私は涙を流し、彼を罵倒し、話も聞かず彼を部屋から追い出してしまふ。

それから彼が扉の向こうから言い訳をしてくれると期待して泣きながらも廊下の様子を伺っていたが、サイトはそのまま何処かへ行ってしまった。

なによ。

なによなにによ。

私の事が好きだと言っておきながら、コレ位で諦めちゃうっていうの？！

泣きながら編みかけのセーターをベッドに投げつけて、そう口にした所で気が付いた。

私は……アルビオンの時と同じように、彼の話に耳を傾けようともしていなかった事に。

それから、取り返しの付かない事を言ってしまった事に。

どうしよう、あんたなんてクビよだなんて言ってしまった。

嫉妬で簡単に我を失う自分を嫌悪し、彼に言ってしまった言葉をもし本気にされたらどうしようと怯え、わたしは泣いてしまった。

それから暫くして、サイトが戻ってきた。

激しい自己嫌悪に陥っている私を逆撫でするかのように、おーい、ルイズう、機嫌なおったかぁーと能天気な声を掛けてくる。

きっと今の私の心情を理解してくれてのことなのだろう。

しかし私はなんとなくバツが悪くて、扉を開ける事も返事をする事も出来なかった。

同じように夜もやって来たが、先程よりもさらに返事をし辛くて結局扉を開ける事が出来なかった。

その翌日の朝。

扉の向こうでサイトはギーシュと出かけてくると言い出した。

私も行くわ！

そう言いかけて、気まずくてやっぱり声を掛けることができない。

それでも急いで準備をして、彼が居るはずのヴェストリの広場に走る。

広場の片隅には話に聞いたサイトのお風呂と、テントがあった。

だがテントの中は無人だ。

何処？そうだ！馬小屋！

馬小屋で待っていればきっと合流できる！

私は急いで馬小屋に走ったけれど、間に合わなかった。

サイト達はとつくの昔に出立していたのだった。

はあ。私、何してるんだろう。

昨日までのウキウキやドキドキは何処に行ったのかしら？

部屋へ戻りそう考えていると、一層落ち込んでしまった。

そろそろ授業が始まる時間だったが、私は休むことにした。

とてもじゃないが教室で授業を受ける気分になれない。

私はベッドでうずくまり、幼い頃そうしていた様に毛布にくるまってサイトのバカとつぶやき、目を瞑った。

毛布からはサイトの匂いがした。

さらに翌日。

朝からキュルケが部屋にやってきた。

いきなり開いた扉に私はサイトが返ってきたものと勘違いをして、声をすこし弾ませながら叫んだ。

「バカ！今さら……」

「あら？今さらなあに？」

「……なによ、キュルケ。何しに来たのよ？」

てっきりサイトだと思って声をかけたので、すこし恥ずかしい。

私はうーと枕を噛んで憎つくき宿敵を睨む。

キュルケはふふん、と笑って燃えるような赤い髪をかきあげた。

「一昨日はあれからどうなったのかなーって思って。あなた、アレ以来授業に出てこないじゃない。」

「……あなたには関係ないでしょ。」

「あるわよ。貴女に貴重な情報をあげたんだから、どうなったか知る権利あると思うけれど？あ、そういえばダーリンは？」

「居ないわ。」

「居ない？あ、わかった！ケンカしちゃったのね！」

「……追い出した。」

「え？」

「私が追い出したって言うてるのよ！ー！」

「はあ？！あなた何考えてるの！？」

「そんなの、私が聞きたいわよ。」



呆れた表情を浮かべるキュルケから思わず顔をそらす。

彼女はため息を一つついて、腰に手をあて私を見下ろした。

「はあ、まさかあなたがそこまでバカで高慢ちきで嫉妬深くて冷たいとは思わなかったわ。

そりゃあたしだってあのメイドの事を教えて、あなたとダーリンがケンカでもしてくれればって思ってたわよ？

でもいきなり追い出すなんてあんまりじゃない？」

「だって！あいつ、メイドと一緒に部屋から……」

「え?!現場を見たわけじゃないの?!」

「……見てないわよ。でも……!」

「呆れた……あなた、どうせダーリンに何もさせてあげてないんでしょう?なのにそこまで怒るなんて。」

「でも!あいつは言ったわ!私の事が好きだって!」

「あのね？だからってダーリンのすべてを、あなたの好きにしてい  
いわけじゃないのよ？」

私は俯いて唇を噛む。

そんな事、分かっているわよ。

頭じゃ分かっているのよ。

でも、どうしようもないじゃない。

サイトが他の女の子と一緒に居るだけで、冷静じゃいられなくなる  
んだから。

「ラ・ヴェリエール、あなたつまらない子ね。キスもしてあげてい  
ない相手に嫉妬して怒ったり、泣いたり。

あたし、初めての恋のライバルだっと思っていたのよ？でも、あ  
なたがそんなんじゃないわ勝負にもならないわ。

……いいわ。サイトはあたしがなんとかしてあげる。

初めはあなたから取り上げてくれてちょっかい出していたけれど、  
一途にあなたを想うダーリンが殴られたり、蹴られたり、追い出さ

れたりしてなんだか可哀相。

彼はあなたのおもちゃじゃないんだからね？」

「う、ぐ……」

「メイジにとって使い魔は大切なパートナーよ。それを大事にできないあなたはメイジ失格ね。」

キュルケは冷たい声でそう言い放って、部屋から出て行ってしまった。

私は悔しくて、悲しくて、昨日したようにベッドの毛布にくるまって泣いたのだった。

毛布からはもうサイトの匂いはしなかった。

どれ位経っただろうか。

不意に部屋の扉をノックする音が響いた。

サイトが戻ってきてくれたのかもしれない。

もう、体裁なんてどうでもいい。

彼に謝りたい。

サイトの話を知りたい。

仲直りしたい。

そう思い、私は急いでベッドから起きて扉を開いた。

しかし扉の向こうには、サイトはいなかった。

かわりに、ロシエールの宿で見かけた白いローブの女……サイトの前の主人がそこに立っていた。

そう、未来の私が。

「なによ、結局サイトは ” また ” 追い出されちゃったの？」

サイトの前の主人…… 未来のわたしはあっけに取られている私を余所に、ずかずかと部屋に入って来て深くかぶっていたフードを外し呆れたように言った。

それから部屋の中央にあるテーブルの席について、わたしに対面の椅子に座るよう促した。

「さ、扉を閉めて座って？時間があまりないの。」

「あ、あ、あなたは……」

「ふふ、はじめまして、じゃないわね。ロシエールでちょっとだけ会ったものね。」

「わ、わたし？」

「そ。ねえ、あまり他人に見られたくないの。せめて扉を閉めて？」

私は慌てて扉を閉める。

それから何年後の姿かはわからないが、未来の自分を見つめた。

美しいピンクブロンドの髪、端正な顔立ちと細い体。

背も今より少しだけ高くて……見蕩れてしまうほど綺麗だった。

……胸は……ちい姉さまのようには行かなかったようだ。

こんちくしょう。

「い、一体どうして……」

「ちょっとね。まずい事になっちゃって、大事な話をしに来たの。ま、座って？」

「サイトは今……いないわ。」

「知ってるわよ。」私” の時も追い出しちゃったもの。」

そういって ”私” はバツが悪そうに笑った。

私はとりあえず椅子に座り、彼女を見る。

そして、これ本当に私？と自問を始めた。

「そんな目で見ないでよ。正真正銘、私はあなたよ。」

「え、ええ。ちょっと、びっくりしてるだけだから気にしないで。」

「そぞ。ならいいわ。」

「それで？何の用？」

その問いに、  
”私” は表情を曇らせて私を強い眼差しで見つめて言った。

「……単刀直入に言うと、今のままじゃサイトは近い内に必ず死ぬわ。」

死ぬ、という言葉にバクンと心臓が弾けた。

一瞬で喉がカラカラになり、声がでない。

そんなことはさせない、そう言いたかったが何一つ言葉を出すことが出来なかった。



「……まあ、無理も無いわよね。ねえ？あなた。サイトからアルビオンとの戦争の事聞いてる？」

「え、ええ、まあ。」

「その結果は？」

「え？ええ。えっと、私の虚無魔法である程度は有利に進むけれど、最後は劣勢になって撤退してしまうんでしょ？」

「それだけ？」

「うん……あ！ガリアが参戦してきて、一緒にレコンキスタをやっつけてしまつとも聞いてるわ。」

「……あのバカ！」

”私” はやっとの思いで搾り出した私の言葉に、苦々しくそうつぶやいた。

どういう事？

まさかサイトが話していない事実があるというの？

先程までの悲しみや後悔や自己嫌悪はなりを潜め、ただ不吉な予感だけが疫病のように私の心を占めていった。

恐る恐る私は尋ねる。

「どっぴいっ、じやっ。」

「アルビオンとの戦争は、トリステインにとっても不利な戦況になるのよ。」

「そんな！」

「……やがて、浮遊大陸から撤退することになるわ。その時、追撃してくる七万の軍隊を押し止めるよう”虚無”の私に命令が下

されるの。それも、たった一人でね。」

「そんなの、いくらなんでも無茶よ!」

「そうよ。だけど、私は ” 貴族 ” よ。国の命令に逆らえないし、みんなを……サイトを救うために私はその命令を遂行しようとしたわ。そして……」

「そして?」

「私の代わりにサイトが一人で七万の軍隊と戦って、彼は死ぬの。」

私はその言葉に目の前が真っ暗になった。

体が震え、息は荒くなり、開いた目を閉じることも出来なくなつた。

サイトの今までの行動を思い起こすと、それ位の事は笑いながらでもやりそうだと理解したからだ。

「幸い、強い治癒の指輪を持ったテファ……は聞いてるわよね？彼女に助けられて一命は取り留めるんだけどね。」

「いや、蘇生に成功したって言った方がいいかな。」

「なら、今度はそうならないようにすれば……」

「無理ね。アレはサイトだからこそ出来たのよ？七万の軍隊相手に一人や二人突っ込んで押し止められるわけないじゃない。」

「今からそうならないようにすれば……」

「アンリエッタに今からそう言うの？それとも戦争が起きた後、総司令官に『この戦いは負けます！』とでも言うの？だれが信じると思っのよ。」

私は言葉を失う。

未来の事を知っているとは言っても、他人が簡単に信じてはくれない事はよくわかる。

現に私自身がそうだったではないか。

「それに、事はもつと深刻よ。」

「え？」

「 ”ダブル” よ。あいつ、何度忠告しても使って……多分、この先も使うわね。」

「そんな事は絶対にさせないわ！」

「無理よ。あいつ意外とバカで頑固なんだもの。多分軍隊に突っ込むのをやめて二人で逃げてって言っても無駄ね。」

「ギーシュや戦場で知り合った友達が死ぬことになりかねないから。だからあなたに会いに来たの。今のままじゃきつとあいつは私の言う事も聞かず七万の軍隊と戦って死ぬでしょうし。」

「え？でも、さっきは蘇生に成功したって……」

その言葉に ”私” は眉をひそめ、唇を結んだ。

それから一息を吐いて、何かを確かめるように言葉を続ける。

「あいつの精神の事は聞いてる？」

「え？あ、うん。えっと ”ダブル” を使うと、十七歳の何も知らないサイトの精神に今のサイトの精神が飲み込まれちゃうんですよ？」

「そう。でね？サイトが蘇生された時、一度ルーンが消えるのよ。当然よね、一度死んじゃってるんだから。」

「うん……」

「知ってる？使い魔のルーンは持ち主が死ぬ、もしくは死んだと勘違いするほどの状態になると消えるのよ？」

「そうなんだ？」

「そうなんだ、じゃないわよ。いい？今のサイトの精神は”ダブル”のルーンと共にあるの。それが一度消えるのよ？」

「それってつまり……」

「蘇生しても何も知らない十七歳のサイトが生き返るだけで、今のサイトはそのままよ。二つのガンダールヴのルーンと共に消滅するわ。」

「そんな！」

私は思わず立ち上がり、叫んだ。

それじゃ……

それじゃ ”私のサイト” は近い将来、確実に消えてしまつて事じゃない！

いやよ、そんなの絶対！

「ここで、あなたに質問。」今のサイト” は元々私のサイトよ。あなたが本来召喚するはずだったサイトじゃないわ。」

「何が言いたいのよ!」

「……あなたには選択肢があるわ。十七歳のサイトとやり直すのか、今のサイトを助ける為につらい道を歩くのか。」

「……どういう意味?」

「あのね?私の身勝手であなたに取り返しが付かない事をしてしまったと、後悔しているのよ。だから……」

”私” はそこで一旦言葉を切り、視線を逸らした。

それから苦虫を噛んだように険しい表情を浮かべて、逸らしていた視線を戻して意を決したように続けた。



「だから、選んで。」

私の力であなたをあの召喚の儀式の日に送り、『本当の』歴史をやり直すのか。

それとも、このまま今のサイトを助けるために本来はしなくていいような辛い思いをするのか。」

「もし、召喚の日に戻ったら ” 今は ” どうなるの?。」

「…… ” この世界 ” は私のサイトが召喚された事を基点とした世界よ。当然、消えるわ。そう、夢のようにね。」

「そんな!じゃあ、みんなは……。」

「一緒に消える。正確には、私のサイトと過ごす筈の未来が無くなるっただけで、死ぬわけではないわ。」

「そもそも、 ” この世界 ” 自体が無かった事になるのよ。」

私は ” 私 ” を睨み付けた。

あまりに身勝手なその物言いに。

この女が考える事はサイトと、自分の事ばかりじゃない！

そう思うと無性に怒りが沸いてきた。

「あなたは……卑怯よ。そんな、簡単に世界は消えるとか、サイトが死ぬとか。全部あなたのせいじゃない！」

「……そうよ。すべて私の身勝手のせいよ。」

「卑怯よ！あんな素敵な使い魔を送り込んで、自分の思い通りにしようなんて！なによ！その為にサイトがどれだけ傷ついたと思ってるのよ！」

”ダブル” で思い出や、左耳を失って、ううん！いまだってどこか失っているのかもしれない！

そこまでして護ろうと、愛そうとしている未来を、放つという最初からやり直すなんて！よくも言えたわね！」

私の言葉に ”私” は俯いた。

他でもない、私自身だ。

きっと自覚はしているのだろう。

「そうね。私は卑怯よ。でも……仕方ないじゃない！彼を、私のサイトを失うことに我慢出来なかったのよ！」

「うるさい！何が私のサイトよ！サイトは私のものよ！あんたみたいな性悪に渡すものですか！」

「なによ！私だって……こうなると分かっていたらサイトを過去に送ったりしなかったわよ！」

「ぶざけないで！サイトはおもちゃじゃないのよ…！」

「ぶざけてやったんじゃないわ！現にこうやって私のサイトの為に色々と手を尽くしているじゃない…！」

「ちがう！サイトは私のものよ…！」

私たちはそこで取っ組み合いを始めた。

お互いの髪の毛を引っ張り、テーブルをひっくり返して母様直伝の技を繰りだし、袖を破りながらぎゃーぎゃーと罵倒しあう。

やがて私達は互いに体力も気力も底を尽き、肩で息をしながらあられもない姿となりながらも部屋の中央で睨み合っていた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、いいわ！」私” の不始末は私がつける！」

「はあ、はあ、はあ、じゃあ、どっち選ぶのよ？はあ、はあ、はあ、」

「ぜえ、やり直すわけないじゃない。ぜえ、ぜえ、このままこの世界もサイトも守って見せるわ！ぜえ、」

「はあ、はあ、やり直しても、はあ、私のサイトはルーンと一緒に、はあ、私が連れて行けるから、はあ、いいのよ？」

「ふざけないで！ぜえ、サイトは、ぜえ、私のものよ！あんたには

渡さない！」

私は呼吸を整えながら更に強く彼女を睨んだ。

”私” も呼吸を整えて睨み返してきたが、ふっと視線を落とす。て肩を落とす。

「……………ごめんね、私のわがままのせいで。あなたやみんなをこんな目に合わせるつもりは無かったのよ……………ただ、サイトに生きていてほしくて。」

サイトやこの世界がこうなっちゃうって本当に送ってからわかったのよ……………」

「ふん！どうせサイトを助ける方法も用意して来たんでしょ！さっさと言いなさい！」

「ええ、あるわ。ただ……………辛いわよ？」

「うるさい！サイトはもっと辛いわよ！とっくと話す！」

それからしばらくは沈黙が部屋を支配した。

その間 ”私” は目を伏せずと口を開く事を躊躇っていたけれど、やがて意を決したように顔を上げて真っ直ぐに私を見る。

「サイトがある人に預けるの。」

「だれによ?」

「私に今、時空間移動や世界の構造を教えてくれている人よ。」

「……信用できるの?」

「少なくとも約束は守ってくれるわ。」彼女” の交換条件としてサイトを貸す代わりに彼を……死ななくて済むようにしてくれるそうよ。」

「どの位の期間預ければいいのよ？」

「あなたが、アルビオンで七万の軍隊と対峙する頃までには返して  
くれるって。」

「なによそれ！」

「大体遅くなっても、今から半年位までには……戻してくれると思  
う。」

「……イヤだけど、それでサイトが消えなくて済むのね？」

「ええ。でも、それだけじゃないわ。」

「どっぴいっことっ？」

「今度は貴女がその時までサイト無しでレコン・キスタと戦わない  
といけないの。」

「うぬー！」

「勿論、その為の準備位はしてきたけれど……生半可な覚悟じゃ死んでしまうような事が起きるわ。」

再び部屋に気まずい沈黙が満ちる。

”私” が辛いと言ったのはサイトを預けた後、私が何度も死んでしまうかもしれないような目に遭うからなのだろう。

私を見る彼女の眼光が不意に和らぎ、「いいのよ？やり直しても」と伝えてくる。

……こんな身勝手な女に負けて、たまるか。

「いいわ、それで。そうすればサイトは死なずに済むんでしょう？」

「ええ。」

「やってやるうじゃない。私は逃げないわ。たとえ魔法がつかえなくても。そう、敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶのよ！」



高らかに宣言して私は胸を張った。

一時的にサイトは居なくなるけれど、彼は死ななくて済む。

それだけで十分よ。

その分私が危険な目に遭うらしいが、そんなもの知ったことじゃない。

敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶ。

私は彼がくれたこの言葉を胸に、誇り高く戦い抜いてみせる。

そしてもう一度、彼と逢えばいいのよ。

「わかったわ。じゃあ、貴女に三つの贈り物があるから受け取って……これから必要になるものよ。」

彼女はそういって、杖を取り出し振った。

するとサモン・サーヴァントの時のような光の門が現れて、門の内から見覚えのある杖を持った一体のゴーレムが現れた。

ゴーレムは木製で、サイトの上着と同じものを着ている。

「サイトが居ないとヒコウキが使えないからね。このゴーレムには、ガンダールヴの ” 武器を使いこなす ” 能力をもったルーンを付与しているわ。」

ま、魔力の補給ができないから戦闘は無理なんだけどね。ヒコウキの操縦位は大丈夫。それと……。」

「あなた、使い魔はサイトじゃないの？」

「あのね。始祖ブリミルは四人の使い魔を使役していたのよ？  
元々使い魔のルーンは呪いみたいなもので、それなりに魔力は必要になるけれど使役する数に制限なんて無いわよ。」

今使われているサモン・サーヴァントとコントラクト・サーヴァントは虚無じゃなくても使えるように制限した魔法って事。」

そう説明をしながら彼女はゴーレムから杖を受け取り、私に差し出した。

「私特製の ” 虚無の杖 ” よ。昔使っていた……今あなたが使っている杖を元に作ったから、契約はしなくても使えるはずよ？」

私が会得した虚無の魔法が使えるようになるわ。

もつとも、時空間魔法やアレンジした魔法は使うとろくな事になりそうにないから封印してあるけどね。」

私は杖を受け取り、握ってみる。

時を経たであろうその杖は、紛れもなく私のものだった。

「いい？レコン・キスタの艦隊がタルブ村に攻撃してくるまでは魔法はつかっちゃダメよ？」

今のあなたの精神力じゃ、その艦隊をギリギリやつつけられる位

しかないんだから。

それと、ゴーレムはヒコウキを動かす事に専念させるのよ？ほかの事に使っちゃだめだからね？壊してもしたら目も当てられないから。」

「わかったわ。」

「魔法そのものは杖を握って強く念じれば、呪文と一緒に頭に浮かんでくるはずよ。」

「一応状況に応じて最適なものから浮かんでくるようにしてあるからね。」

私は試しに杖を強く握り、目を閉じて ” どんな魔法があるの？” と念じた。

頭に浮かんだものは……

- ・ エクスプロージョン（爆発）
- ・ デイスペル
- ・ イリユージョン
- ・ 世界扉ワールド・ドア
- ・ 忘却
- ・ 加速
- ・ 瞬間移動

- ・記録リコード
- ・犠牲
- ・使役

の十種類だった。

その一つ一つの使い方も頭の中に入り込んでくる。

「すごい……」

「イリュージョンはただの幻影だから気をつけて。今私が使っているイリュージョンは”偏在”に近いものだけど、本来は幻影は魔法も使えないから。」

あとは、これ。反響の指輪。半分の精神力で魔法を行使できるよ  
うになるわ。」

そうやって”私”は左手にしていた指輪を取り、私の左手を取  
って薬指にその指輪を嵌めた。

銀色のシンプルな指輪で、なにやらいろんなルーンが掘り込まれて  
いる。

「……これ、あの人の結婚指輪なのよ。大切にして、ね。」

”私” は寂しそうに目を伏せながらそう呟いた。

思わず私は指輪を返そうとしたが、彼女は首を振ってそれを押し止めた。

「いい？これだけのマジックアイテムと虚無の魔法をもってしても、これからあなたがサイト抜きで挑む事は危険なの。」

絶対に無理はしちゃダメよ？サイトが戻って来るまでくじけちゃダメだからね？」

「あたりまえよ！私はあんたとは違うんだから！」

「……そうね。じゃあ、最後に。サイトが戻ってきたらこの場所に

行くように伝えて。”彼女”が待ってるわ。

あ、ちゃんとヒコウキをシエスタの実家から貰って来てからよ?」

「わかったわ。」

彼女が差し出した紙を受け取り、私は頷いた。

「じゃ、そろそろ時間だから。この特製イリユージョンを維持するのも結構きついよね。」

あんたとケンカしたから予定より維持できる時間が短くなっちゃった。」

「もう行くの? サイトに会っていかないの?」

「あら。”あなたのサイト”　なんでしょ?」

「う、それは……そうだけど。」

”私” はゆっくりと消えていく。

その表情は申し訳なさそうで、寂しそうで、悲しそうだった。

「サイトの事、お願いね。それと……本当にごめんなさい。」

「あ、まって！ ”彼女” の名前は？！」

「本人は ”時の魔女” って名乗ったわ。」

そう言い残して ”私” は完全に消えてしまった。

荒れた部屋にはサイトの服を着た木のゴーレムと、やたら古い杖、そして……左手の指輪が残された。

私は一人残され、まだぐちゃぐちゃになっている心を落ち着かせようと目を閉じた。



……サイトが今のままでは死ぬ。

それだけはなんとしても、何を失っても、何が何でも避けたい。

その気持ちだけは強く、確かだった。

しかし、その他に次々と湧き出る感情は手に余った。

不安、後悔、悔しさ、愛しさ、焦燥、寂寥、自己嫌悪、僅かな希望。

左手の薬指に嵌められた指輪を眺め、心を落ち着かせようとした。

私は自分の感情をこれほど持て余した経験は、いままで無かったのだ。

一体何がどうなっているんだ？

ギーシュのお供から学院に帰り着いたのは昏も過ぎてからだった。

シエスタと一緒に厨房に寄ってマルトー親父にメシを食わせて貰い、ルイズの部屋の扉にタダイマの挨拶をした時の事だ。

声をかけると突然扉が開き、にゅっと白い小さな腕が出てきてすごい力で室内へ引っ張り込まれた。

腕の主は教室か食堂に居るものかと思っていたルイズで、室内に引っ張り込まれた勢いそのままベッドに押し倒された。

混乱している俺を置き去りに、ルイズは覆いかぶさってきて胸に顔を埋めている。

小さな肩は震えていて、尋常な様子ではなかった。

「る、ルイズ？」

「……”ダブル”、使った？」

「うん？いや、アルビオン以来使ってないよ？」

「左手、見せて。」

俺は言われるままに左手を差し出す。炎の中、人形と戦ったからか少し生傷が目立った。

胸に埋めた顔をあげ、ルイズは両手で優しく俺の手を取り抑制のルーンを見る。

ふと、彼女の左手の薬指に見覚えのある指輪を見つけた。

……どこで見つけた？

いつもはこんなのでなかったよなあ？

「……よかった。使っていないみたいね。でも……かなり取り込まれてしまっている。」

「ルイズ？わかるのか？」

「うん。」

「そっか。」

「あんだ、このままじゃ ” 消えるわ ”」

「げ！マジ?!……でもさ、そのときは十七歳の俺を頼むぜ？スケベでバカだけどいい奴なんだ。」

「いやよ。」

ルイズは握っていた俺の左手をぎゅっと強く握った。

それからぼつりと、呟くように小さな声であのね？と口にする。

何かに怯えているような声で。

「その、ごめん。話も聞かずに追い出して。」

「あ？ああ。きにすんな、慣れっこさ。俺は気にしてない。一応言っとくが、シエスタとは何にも無かったからな？風呂の事も事故だったし。」

「……クビだなんて、ウソなんだから。」

「そうだな。お前に捨てられたら俺、行くところないし。」

「あんたは私の使い魔よ。」

「そうだ。俺は虚無セロの使い魔だ。」

その落ち着いたやり取りで頭の混乱は収まり、室内の異常にやっとな気が付いた。

まず、得体の知れない木の人形がベッドの脇に立っている。

しかも俺と同じ服を着て。

アダン準男爵の所で見た物と比べると見劣りするが、なかなかのゴレムだとわかった。

それから、テーブルが無い。

上体を起こして床を確認すると、椅子もろともバラバラになっていた。

他の調度品も床に散乱していて、まるでオーグル鬼でも暴れたかのような有様だ。

「なあ、ルイズ、何があった？」

「未来の私が来たの。」

「うげ！な、泣かせたからか？！どどどどどどうしよう！」

主人の叱責に怯える犬となった俺を見て、ルイズはクスリと笑う。

それから体を起こして握っていた左手を離し、違っわよと言った。

「あんだ、”私” の忠告を聞かずに ”ダブル” を使ったで  
しょ？」

「ああ、まあ……でも、アルビオンで使ったつきりだぞ！」

「それに、この先のレコン・キスタとの戦争で私の代わりに死んじ  
やう事も……内緒にしてたでしょ。」

「うぐ！で、でもあれは死ぬんじゃないやなくて瀕死で……」

「その時にルーンが消えて生き返るのは十七歳のサイトだけで、あんたはルーンと一緒に消えるって分かってたわね？」

「……ごめん。薄々、な。」

瞬間、俺は頬を打たれていた。

何度も何度も打たれたが、避けることはしなかった。

ルイズの気持ち分かるから。

やがて頬に飛んでくる痛みは止み、代わりに首に腕を回されて抱きつかれる。

俺は再び押し倒される形でベッドに倒れこんだ。



「……”私”が言っていたわ。私を召喚の儀式の日に送って、今度はあんたじゃないサイトと最初からやり直すのか  
それともあんたを助けるために辛い道を歩くのか、選んでって。」

「うん。」

「ほんと、性悪よねあの女。反吐が出るわ。」

「はは、お前自身なのにひどいな言い草だな。それに身勝手な所はあるけれど、可愛い所もあるんだぜ？」

「あんなの私じゃない。私は絶対ああはならないわ。」

「別になってもいいけどな？俺はそんなお前でも愛したよ。」

少しだけ首に回された腕の力が強くなった。

「……あんたを助けるわ。」

「どっやって?」

「あの性悪の魔法の先生にあんたを預けるの。」

「ほえ?どの位の間?」

「わからない。私が七万の軍隊と対峙する頃までには返してくれるって話。」

「さて!それじゃ、それまでお前一人でレコン・キスタと戦うのか?!アンリエッタ王女の誘拐も起きるかどうかわからないんだぞ!危険だ!」

「もう決めたの。」

ルイズは腕を解き、上体を起こす。

じっと美しい鳶色の瞳で俺を見つめ、真剣な表情をした。

俺が帰ってくるまでに泣いていたのか、よく見ると白い頬には涙の跡があった。

「 ”時の魔女” ってあの性悪は呼んでいたわ。あんたはそいつの所にいくの。」

「でも！ゼロ戦……ヒコウキはどうするんだよ！」

「性悪が幾つかいいものを持ってきてくれたの。ほら、そのゴレムがあんたの代わりにヒコウキを動かしてくれるわ。」

「それだけじゃねえよ！だれがその間お前を守るんだよ！虚無の魔法はギリギリの状況にならないと覚えられないんだぞ！」

「もう覚えたわ。この杖でね。」

「バカ！どれだけ精神力を使うと思ってんだ！」

「この指輪で消費する精神力を抑えられるわ。」

ルイズは淡々と俺の言葉に答えた。

その様は決意の固さを表しているのだと痛感する。

心配する俺にルイズは壊れそうな笑顔を浮かべて、俺の頬に手を当て大丈夫よと続けた。

「瞬間移動” も ”加速” もあるわ。タルブ村で特大の奴を打たなきゃいけないらしいから、今は使ってみせられないけれど。」

「お前、どうかしてるよ！危険なんだぞ！？」

「あんたはその何倍も危険な目に合っただけじゃない。」

「俺はお前の使い魔だ。神の盾、ガンダールヴだ。」

「私にあんたのご主人様よ。言っ事を聞きなさい。」

「いやだ。」

「だめよ。なんだったらここで ” 忘却 ” をかけてもいいのよ?」

俺は言葉を失った。

ルイズはどうやら本当に虚無の魔法を覚えたらしい。

それに言葉に迷いはまったく感じられない。

本気でそう言っているのだろう。

「……いつから行けばいいんだ?」

「ヒコウキを手に入れてからでいいわ。タルブ村へは私一人で行く。」

「……地上にも兵士がいたから精神力に余裕を持たせておけよ？で  
きるんだろ、その指輪で。」

「わかったわ。一応、ヒコウキを手に入れるまでの事、教えてくれ  
る？」

「お前に追い出された俺を、キュルケが誘いに来て一週間ほど宝探  
しをするんだ。ギーシュと、タバサと、シエスタと一緒に。」

最後に寄ったシエスタの実家で、あいつのひい爺さんが俺と同じ  
国の出身だとわかって。

ひい爺さんの遺言でおれはヒコウキを譲り受ける事になる。」

「そう。じゃあ、悪いけどこの後テントに戻って。」

いつものルイズなら絶対に私も行く！と言っていた俺は、あ  
っけに取られた。

一体何がどうなっているんだ？

今日のルイズはすごく変だ。

俺がルイズ抜きでキュルケ達と出かけることを、こんなにあっさり

と認めるなど考えられない。

「いいのか？」

「しょうがないじゃない。付いて行きたいけれど、魔法を使うわけにはいかないし足手まといになるわ。

それにあんたがテントに居ないと、キュルケが誘いに来ないかもしれないでしょ。それで？他に注意する事はない？」

「あ、ああ。ヒコウキには燃料がいる。”ガソリン”という名前の燃える水だ。それをコルベール先生に頼んで沢山作ってもらわなければならない。」

「そう。じゃあ、がそりんはあんたに任せる。それが一段落したらすぐに”時の魔女”の所に向かって。」

「もう少し後でいいんじゃないか？なにもそんなに急がなくても、アルビオンとの本格的な戦争は何ヶ月も後だぞ？」

その問いに、ルイズは俺の頬に置いていた手を目の前にかざした。  
それから手の甲を俺に向ける。

白く細い薬指には先程の指輪が鈍く光るのが見えた。

どうしたというんだ？

これ、さっき説明を受けた消費する精神力を抑える指輪だろ？

「ね？多分あなたにはもう時間は残されていないのよ。」

「どづいづことだよ？」

「……この指輪はあなたと”私”の結婚指輪よ。」

ルイズの言葉に俺は頭を殴られたかのような衝撃を受けた。

まさか、ここまで取り込まれていたとは思っても見なかったからだ。



急いで記憶を、昔の記憶を思い出す。

息子達の名前。

娘達の名前。

孫達の名前。

……思い出せない。

一番可愛がっていた……ガリアの姫、息子？が……ゲルマニア？いや、トリステインに嫁いだと言んだ記憶が……

「わかった？あなたにはもう時間がないの。」

……きつと”私”はそんなあなたに会うのが怖かったのね。忘れられちゃったんじゃないかって思ったから、あなたに会わずに帰ったのよ。」

「まさか……そんな……」

「だから私は選んだの。あなたを助けるために辛い道を歩く事をね。その為なら私はなんだってやる。」

キュルケやあのメイドが私の居ない所であなたに言い寄ってもメ

じゃないわ。私がいて足手まといになって時間が無駄になるのもイヤなもの。」

「ルイズ……」

ルイズは俺の上に馬乗りになり、両手で俺の頬を優しく挟む。

そして見蕩れてしまうような綺麗な顔で、柔らかく微笑んだ。

「私は絶対に諦めない。やり直すなんて論外よ。だから……早く帰ってきて。」

「わかった。」

「必ずよ?」

「ああ、必ずな。なんたってお前は俺のご主人様だからな。」

「そうよ。あんたは私の使い魔よ。……じゃあ、これは言う事を聞いたご褒美ね。」

そう言って、ルイズは俺に掠める様なキスをしたのだった。

それから一週間と数日が経った。

あの日あの後、俺は再びテント生活に戻って前の時と同じようにヴェルダンデとフレイムを拉致し、強引にギーシュをテントに連れ込んで

酒を飲みながらキュルケが宝探しに誘ってくるのを待った。

程なくキュルケとタバサがやって来て俺とギーシュに宝探しにいかないか？と勧誘された。

俺は申し出を受け、強引についていたシエスタと一緒に一週間程あちこちに連れ回され、最後に寄ったタルブ村で竜の羽衣……ゼロ戦を見つけた。

それからシエスタのひい爺さんの墓碑を読んだ俺は、遺言通りにゼロ戦を譲り受けて学院に帰って来ることになった。

今はアウストリの広場にタルブ村にあったゼロ戦がでん！と鎮座してある。

コルベール先生に村からの運送費を出してもらい、興奮する彼にガソリンの事を説明すると早速再現してくれた。

その少量のガソリンを使って目の前でエンジンをかけて見せると、今回もいたく感動して目を輝かせながら現在ガソリンを大量生産中だ。

寝不足は頭皮にあまりよくないと言うのに、そんな事も構いなしに真夜中まで夢中になって作っている。

一方、ルイズはというと俺が戻って来てからもいつもと変わった様子はなく、淡々と朝起きて朝食を済ませ、授業に出て昼食をとり

午後は『始祖の祈祷書』を眺めて夕食を食べお風呂に入ってストレッチをして寝る、という生活を繰り返していた。

あれほど俺を側において離れたがらなかったのに、帰ってきてからの数日間はずっと自由にしていいと言うだけになっていた。

そんなルイズの豹変にキュルケはさつきから部屋に押しかけてきて、ずっとルイズに何があったと問い詰めている。

ルイズはそんなキュルケを意に介さず、テーブルに置いてある『始祖の祈祷書』を開いて何も書かれていないページを眺めていた。

時刻は夜。

二人とも入浴を済ませた後で、二種類の香水と二人の乙女の風呂上の甘い体臭が部屋に広がっている。

「ねえ？ルイズ。本当に何があったの？あなた、すごく変よ？」

「なにがよ？そんな事どうでもいいじゃない。それよりもあんた、他の男とデートに行かなくていいの？」

「ふん、今のあたしはダーリン一筋よ。そんなことより、あの日何かあったの？」

「あの日ってなによ。」

「あなたがダーリンを追い出して、ピーピー泣いていた日よ。あの後派手に部屋で暴れてたじゃない？私の部屋までぎゃあぎゃああと声が聞こえたわよ。」

「う。泣いてなんか、ないわよ。……別にあの日は何もなかったわ。」

「嘘おっしやい。あの次の日もあたしとダーリンが一緒に出かけるっていうのに、付いて来る！とか言うならまだしも見送りに来たりなんかしちやって。」

あのメイドまで居たのにあんた、怒ったり喚いたりする素振りすら見せなかったわ。絶対ダーリンと何かあったでしょ！」

「もう。無いって言うてるでしょ。」

「あやしい……まさか、隠れてダーリンを誘惑してヤっちゃったんでしょ！このエロのルイズ！」

「や、ややややや、やらないわよ！あんたと一緒にしないで！」

ルイズは真つ赤になってキュルケの言葉を否定する。

そうだよな。

一瞬だけキスしたただけだもんな。

……でもちよつとだけあの時 ” その後 ” を期待しちゃったのは内緒だ。

本当にい？とルイズを半目で流し見ていたキュルケが、今度はうんうんと頷く俺にその矛先を向けてきた。

「ダーリン！正直におっしゃい！ルイズとヤっちゃったんでしょ！  
ずるいわー！」

「ぶーや、やらないよ！」

「うそよ！宝探しをした一週間、私だけじゃなくてあのメイドがどんなに誘惑しても上の空だったじゃない！」

裸見せても慌てなかったし、絶対なんかあったに決まってるわよ  
「！」

「サイトお？」

「ご、誤解だルイズ！それも事故だった！キュルケ、あれは俺が水汲みをする為に川と往復しているのを知っててお前、水浴びしてた  
だろー！」

「……ならいいわ。」

信じられないことに、俺のその言葉でルイズはあっさりと引き下がった。

細い眉根をすこしだけ寄せはしたものの、ふんと鼻息をならして再び『始祖の祈祷書』に目を落とす。



その様子を見てキュルケは目を丸くし口をあんぐりとあけていたが、ふと我に返り俺にヒソヒソと語りかけてきた。

「ね、ねえ、ダーリン。さっきの反応からやってないってのは分かったんだけど、本当に何があったの？」

「いや、普通にまあ、仲直りしただけだぞ？はは、は……」

「ふうーん、”普通に仲直り”ねえ。それだけであんなに嫉妬深くて、高慢ちきで、すぐ怒るルイズがこんなに物分りがよくなるのかしら？」

「聞こえているわよキュルケ。」

「……なんだか面白くないわねえ。まいいわ。今日のところは退散してあげる。」

ルイズ、どんな心境の変化かは知らないけど、あたしはダーリンの事まだ諦めないんだからね？」

キュルケはそうはき捨てて、俺にウィンクをしながら扉を閉めて部屋を出て行いった。

それを確認してルイズはパタンと『始祖の祈祷書』を閉じ、俺を見てため息をつく。

「はあ。能天気でいいわね、あいつは。」

「なあ、ルイズ。お前”あれ”以来なんか変……だぞ？」

「あにがよ。」

「変に俺と距離を置こうとしてるっていうか、冷た、くはないけどこう、突き放されてるって言うか……」

「ふん、練習よ！」

「練習？」

「あんたがしばらく居なくなっても大丈夫なように、使い魔が居ない生活に慣れないと。」

「ああ、そっか。なるほどな。」

「……それに、すこし怖いのよ。いくらいつでも魔法を使える状態になったとはいえ、私は虚無に目覚めたわけじゃないわ。」

「……やっぱりお前が」目覚める” まで一緒にいようよ。それからでも遅くないって。」

その言葉にルイズは笑って首を振った。

笑っているはずなのに、すごく不安そうに見える。

いや、事実不安なのだろう。

信頼する使い魔を得体の知れない相手の下へ送り、自分はこれから戦争に駆り出されるのだ。

まだ魔法も使えないのに。

「サイト、もう決めたの。」

「お前、本当に強情だよなあ。」

「あんたに言われたくないわよ。」私” や私の言うことも聞かないで”ダブル” 使うからこうなったんじゃない。」

「う。そりゃ、そうだけどさ。」

それから暫く重い沈黙が部屋を支配した。

ルイズは椅子に座って杖を握り、目を閉じて瞑想をしている。

なんでもそうやって虚無魔法を思い浮かべると、いろんな使い方が頭に浮かんでくるのだとか。

今は試す事ができないが、そうやって少しでも魔法に慣れておくつもりなんだろう。

俺はベッドに腰掛け、そんな彼女の横顔を眺めていた。

月の光はいつものようにやさしく部屋に入り込んでくる。

どの位の時間が経っただろう？

ルイズが口を開いた。

強い決意を込めて。

「……………ねえ、サイト。そろそろ準備して。」

ルイズに促され、俺は無言で ” 時の魔女 ” の所へ向かうべく簡単な荷造りを始める。

虫が沸くと困るので藁の寝台は昼のうちに処分し、中に隠していたルイズの手紙は懐の中だ。

なけなしのお金で買った治癒の秘薬を、ルイズ手編みの小物入れに入れて腰にぶら下げ、デルフを背負う。

荷造りはたったそれだけで終わった。

この日は俺がルイズの元を離れ ” 時の魔女 ” の所へ行くと二人で決めた日だった。

深夜に出発するのはキュルケやシエスタに見つかって余計な詮索をされないようにする為だ。

準備が終わった俺に、ルイズは折りたたまれた紙を差し出した。

「ここに ” 時の魔女 ” がいるはずよ。中身を見なければ学院からかなり近いわ。」

「わかった。」

俺は紙を受け取り書かれていた地図を見て場所を確認し、もう一度折りたたんで懐に仕舞う。

そして意を決して行って来るよと言おうとした時だった。

不意にルイズが抱きついてきた。

胸に顔を埋めているのでその表情は見えない。

小さな肩は震えている

少し躊躇したが、俺は左手で胸にあるピンクブロンドの髪を優しく撫でてやった。

赤黒くなった抑制魔法のラインがやけに目に付く。

「絶対帰ってくるのよ。」

「お前も絶対に死ぬなよ。」

「寄り道するんじゃないわよ。」

「はいよ。まっすぐお前ん所に帰ってくるわ。」

会話はそれだけだった。

長い沈黙の後、ルイズが突き飛ばすようにして俺から離れ満面の笑みで最後に言った。

いってらっしゃい。

月光を背にしてそう言ったルイズを、俺はその時心底愛しいと思った。





E - 1 : e x t r a | e p i s o d e / イーヴァルディの勇者と白い賢1 (前書

オリジナル挿話です。全八話の中編となります。

イーヴァルディは竜の住む洞窟までやってきました。  
従者や仲間達は、入り口でおびえ始めました。

獵師の一人が、イーヴァルディに言いました。

「引き返そう。竜を起こしたら、俺たちみんなしんでしまうぞ。お前は竜の怖さを知らないのだ。」

イーヴァルディは言いました。

「ぼくだって怖いさ。でも、怖さにまけたらぼくはぼくじゃなくなる。そのほうが、竜に噛み殺される何倍も怖いのだ。」

(スノーリ・ストウルルソン著『イーヴァルディの勇者』より)

猫だ。

ルイズに渡された紙には、学院から近い位置にある森へ向かうようにと地図と共に書かれていた。

目的地までは徒歩でもそれ程時間がかからない距離だ。

俺は月明かりを頼りに草原を歩く。

程無く目的の森を見つけた所で黒い何かが俺の前に現れた。

闇の中を動くそれをもしかしたら危ない獣かと思い少し警戒したが、動くたびにコロコロと妙な音がする事に気が付き猫だと気づいた。

多分、学院に居ついていた野良猫なのだろう。

シエスタにでも付けられたのか、小さな鐘が取り付けられた首紐を巻いている。

気を緩め握っていたデルフの柄から手を離してなんだ、お前かと口にする、黒猫はなんだとはなんだと答えた。

ああ、そりゃ悪かつ……

「ふん、随分待たされたぞ。『ガンダールヴ』。」

「あ、え？」

「なんじゃ、相変わらずマヌケな顔をしとるのう。」

黒猫は闇の向こうで目を光らせながらくつくつと笑う。

……猫だ。

猫が喋っている。

その上人のようにくっくと笑っていなさる。

「ほれ、何時までも呆けるでない。わしが誰かわかるであろう?」

「もしかして……あんたがルイズの先生の ” 時の魔女 ” なのか?」

「左様。今は使い魔の体を使って話しているがな。」

そう言って黒猫は俺の足元までやってきて、ちょこんと座り欠伸をした。

白い牙と薄いピンクの舌が、月明かりの下でやけにハッキリみえる。呆気にとられていた俺は、頭を振って我に返りしゃがみ込んで猫に顔を近づけた。

「さて、とりあえず自己紹介から始めるか。ここに来たと言う事は交換条件を飲む、と受け取っていいのじゃろ？『ガンダールヴ』。これから仕事をしてもらう仲じゃしな、わしは……ノルンとでも呼べ。」時の魔女」でもいいがちと長い。」

「あ、ああ。俺はルイズの使い魔をやつてる平賀才人だ。交換条件を飲むよ。とりあえず、何をすればいい？」

「ほ！お主は取引をする相手に、自分が何を貰えるかも聞かずに何をしたらいい？」と聞くのか！いや、聞いた通り中々のお人よしだのう。」

「何をして貰えるのかは聞いている。俺の体……と精神の問題とか諸々をあんたがなんとかしてくれるんだろ？」

「うむ。わしはお主の主人のように未熟ではないからな。綺麗さっぱり問題を解決してやるぞ。」

「なら問題ない。さ、俺に何をして欲しいのか言ってくれ。少しでも早くルイズの所に帰りたいんだ。」

「やれやれ、せっかちじゃのう。そんなんだから主人と初めていたす」 時にあのような事になるんじゃ。」

うげ!?

なんでそれをお前が知ってるんだ!

ああ、思い出したくもない!

「うん?なぜ知っていると言いたい顔じゃなあ。くつく、他にもたあんと知っておるぞ?なんせわしは ”時の魔女” じゃからの。」

「わかった!わかったからやめてくれ!」

「そうか?ここからが楽しい所なんじゃが……」

「俺は楽しくない!」



「当たり前じゃ。わしが楽しむんじゃから。」

「おい。もしかして……そうやってお前の相手をする事が俺の仕事か？」

俺の問いに今度は犬歯をむき出しにして笑いはじめる。

……動物もがんばればいろんな表情ができるんだな。

初めて知った。

今度ヴェルダンデに笑う練習をさせてみよう。

「くく、じきにそうであるならどんなに良かったかと思うようになる。」

「危険な事、なんだろうなあっぱり。」

「まあ。ついて来い。ここは人の世に近すぎる。」

黒猫……ノルンはそこで立ち上がり俺に背を向けてにやあ、と今度は猫の声で鳴いた。

森の奥へ入って行くのかと思って俺もよっこいせと立ち上がると、いつの間にか目の前には信じられない物が出現してる。

一人人がくぐれる程度の、白く光る門。

見覚えがあった。

これは ”世界扉” だ！

”時の魔女” は虚無の使い手？！

ばかな！虚無の使い手は四人、ルイズとティファと教皇、そしてガリアのジョゼフのはずだ！

「ほね、早ようこんか。」



超怖いルイズをどこか連想し、俺は身震いを起こす。

こういった時は即相手が望む行動を行うに限る。

モタモタしていると張り手が飛んでくる環境にいた俺が言うんだから間違いない。

光る門の側で何度も何度もまだ愚痴っているノルンを置いて、俺は先に門をくぐった。

瞬間、強い光が俺を襲い視界すべてが白一色となる。

思わず腕を翳して影を作り、目を強く閉じる。

やがて光は弱まりゆっくりと目を開けると、薄暗い石造りの小部屋に俺は立っていた。

周りを見渡せば壁際に沿って雑多に物が置かれており、唯一の出入り口である扉の小窓から光が差し込んでいる。

小部屋の中央には薄汚れた作業台が置かれ、そこにはノルンとは違う黒猫がちょこんと座っていた。

この黒猫は首輪をしておらず、先ほどの猫よりも大きな体格で毛も長い。

後ろを振り返ると、俺がくぐったはずの光の門は綺麗に消えていた。

「ふむ、ではまず何から話そうかの。」

当然のようにこの猫も喋りはじめる。

それも先ほどと同じ声で。

……もしかしてこいつが本体ってオチか？

「聞かれる前に言っておくが、この猫もわしの使い魔の猫じゃ。本体は時間のはるか彼方におるでな。」

ちなみにスケベなお主が泣いて喜びそうな程の美貌じゃぞ？」

「そんな事聞いてねえよ。なあ、使い魔ってそう何匹も契約できるのか？初代の虚無の使い手は、四人の使い魔を使役してたって聞いたけど……」

あんたもやっぱり虚無なのかい？」

「まさか。わしは……まあ、お主には関係の無いことじゃ。少なくとも

とも虚無ではないな。」

「でもアレは ” 世界扉 ” は虚無魔法だぞ？」

そう、あれは確かにロマリアで見たあの魔法だった。

少なくとも系統魔法じゃない。

ノルンはフサフサの尻尾を不機嫌そうに上下させ、眉根をよせて俺を睨む。

猫にこんな表情で睨まれるなんて生まれて初めてだ。

「しつこいのう。ブリミルの小僧が今の魔法体系を構築する前だつて、魔法はあったのだぞ？ましてや六千年も経っておるのじゃ。まったく別種の同じような魔法を綿々と研究している者位、居てもおかしくは無かる。」

「そりゃ、そうだけどさ。でもそんな奴が居るなんて聞いたこともないぜ？」

「でもでもと本当にしつこい奴じゃな。いいか？ブリミルの系統魔法は杖を必要としておる。わしはそんな物は必要ないし、扱う魔法も別種じゃ。」

そんな姿を見られてみい、エルフかなにかと思われて迫害されるのがオチじゃ。」

「そりゃ、まあなあ。」

「ふん、お主が納得なぞせんぞでよい。わしはお前に講義してやりにここへ連れて来たんじゃないからの。」

そう吐き捨てるように言つて、ノルンは尻尾をパタパタとさせながらプイッとそっぽを向いた。

中々愛嬌のある仕草に、俺は思わず笑みがこぼれる。

そうだ、ノルンが虚無かどうかは今はどうでもいい。

俺は一刻も早く仕事を終わらせ、ルーンの問題を解決してルイズの元へ帰らないといけないんだ。

「そりゃ、そうだな。じゃ早速仕事の話をしてくれ。」

「うむ。簡単に言つとな、お主に ”ミヨルニル” を手に入れてほしいのじゃ。」

「 ”ミヨルニル” ？ 」

「強い魔法がかけられた槌じゃ。どんな生物も必ず一撃で打ち倒し、投げれば相手を打った後に必ず手元に戻って来て、掲げれば雷を操ると言われる」

古代のアーティファクト（遺物）じゃ。」

「うわ、なんだそれ？そんなの持ってたら無敵じゃねえか。」

「そうじゃろ？そういつた危なっかしい代物を、あちこちの時空を駆けずり廻って回収するのがわしの仕事じゃ。」

得意げに胸を張るノルン。



見た目が猫だけになにかの芸にしか見えないが、本人は威厳を醸し出しているつもりなのだろう。

それから彼女は、周りにあるものはそういった物ばかりだから決して触るなよ？とさりげなく付け足した。

「仕事って……あんたみたいなのが他に居るのか？」

「さあ？居るとは思うが、会ったことは無いな。まあ仕事とは言ってもこれはわしが自発的にやっている事じゃ。」

まったく、位階が高くなるところも苦労するとは思わなんだ。」

「位階？」

「存在の高み、とでもいうのかの。ま、気にするな。お主に説明してもわからん。」

「だろうな。とにかく、その ”ミヨルニル” って槌を持ってくる事が俺の仕事だな？」

「うむ。在り処もわかっておるから、迷う事はないじゃろう。それに喜べ、前払いでお主の体を治してやる。」

「本当か?!それはありがたい!いやあ、左耳が聞こえないわ左目が霞むわで結構辛かったんだ。」

「ま、正確には治すんじゃないくて、”移す”んだがの。」

へ?

移す?

何を?

治療してくれるんじゃないくて?

「お主の精神と二つのルーンをわしが用意した器に移して、若い方の体と精神は元居た場所へ送り返すのよ。」

「えええ？！俺、人間じゃなくなるの！？器って何？！」

「まあ、生物かどうかと言われれば返答に困るな。」

「ヤダよ！そんなの！」

「じゃ、このまま消えるか？そして何も知らん若いお主に二つのルーンと傷だらけの体を残して、ハルケギニアに放り出すのか？」

「それは……」

「なに、心配するな。なにも岩と土で出来たゴーレムにしようってわけじゃあない。姿もまったく変わらないし、飯も食べるし、子供も作れる。」

「人間と同じ……って事？」

「いんや。なんと云うべきかの……『ガンダールヴ』本来の姿になると思ったらいい。」

「本来の『ガンダールヴ』？エルフにでもなるのか？」

「うづむ、なんと言ったらいいか……おま、聖地の門の事は知っておるか？」

「ああ。一応な。」

聖地の門。

サハラ（砂漠）に住むエルフ達が、シャイターン（悪魔）の門と呼んで封印している門だ。

こいつを巡って、人間とエルフは六千年の間ずっといがみ合って来た元凶でもある。

「アレの本来の役目はガンダールブの”槍”を召喚する為でな。ヴァリヤリーグとの戦いの時に始祖ブリミルがどこぞと繋いだんじやが……」

時間も越えて繋ぐからか、一番最初にとんでもない物を召喚してしまっただんじや。」

「とんでもない物？」

「うむ。そいつのせいでエルフ達はあわてて門を封印して、サハラに住み着いてまで監視する位じゃったからな。」

「そんなにおっかない物なのか？」

「おっかないのう。その ” 槍 ” に比べれば ” ミヨルニル ” なんぞ可愛いものじゃぞ？」

おかげでヴァリヤリーグとの戦いには勝てたが、危うく世界を滅ぼしかけおった。わしがあわてて回収した時は見渡す限りの砂漠になっけしもうとってな。

サハラはその名残じゃ。」

「そりゃ、とんでもねえもん召喚したんだな……。で、それと本来の『ガンダールヴ』とどう関係があるんだ？」

「まったく、お主は本当にせっかちでいかん。少しは年寄りの話をきちんと聞こうとはおもわんのか。」

「俺だって一応年寄りだぜ？」

「ふん、わしからすれば精子と変わらん。」

「せ、精子なんて言うなよ……」

こいつ一体いくつなんだ？

聞いたら酷い目に合わされる気がするが、あとで聞いてみよう。

「何じゃ、その目は。わしの年なら教えてやらんぞ？まあ、スリーサイズなら考えといてやる。

いいか、続けるぞ？あの聖地の門はガンダールヴに使わせる槍……  
…というか最強の武器をあらゆる世界から探し出して召喚する門じゃ。

で、一番最初に召喚した ” 槍 ” が……たしかここに……お、あつたあつた。」

ノルンはそう言って近くにあつた大きなタルの中をゴソゴソと引っかき回し、中から何かをくわえて来て作業代の上に

ぺっと真っ黒なサイコロのような物を吐き出した。

大きさは親指の先程で、正立方体の黒い金属質の物体だった。

俺はそれを手に取り、目の前に持ってきてまじまじと見つめた。

……なんの変哲も無い、サイコロのような黒い金属だ。

とてもエルフ達が怯えるような代物には見えない。

というか、そんな恐ろしい物をあんな所に無造作にしまい込むなんてありえるか？

普通はさあ、もっと嚴重な封印をしてその上にでっかい神殿を建てちゃったりして、それで湖の下に沈める位はするだろ？

「なんだ、これ？」

「グリムニルの槍」と呼ばれておったな。」

「これが、武器？」

「うむ。最悪のな。」

どう見てもサイコロだ。

ために作業代の上に転がしてみるが、何も起こらない。

おっかない精霊が出てくるわけでもなく、デルフのようにしゃべるわけでもなく、神秘的に光るわけでもない。

「ただのサイコロにしか見えないけど……」

「バカに説明してもわからん……といたいが、それがお主の体になるぞ。説明しないわけにはいくまいな。」

「ええええ！俺、こんなサイコロになるのか?!」

「ええい、何度も言わせるな！話は最後まで聞けい！」

「はい……」



「よいか？それは万物を構成する粒を操る武器じゃ。一見ただの金属片じゃが実際は非常に小さな……ゴレムの様な物が集まって形作っておる。」

粒理論位は知っておろう？その粒を自在に組み替え作り換え、己の数を増やし、集まり、自在に姿や大きさを変えることができるのじゃ。」

「……よくわかんねえけど、こんなもんでどうやって世界を滅ぼせるんだ？」

俺の質問に、ノルンは心底あきれたようにため息をついた。

なにやらこれだからバカはとブツブツ呟いている。

「あんな？そいつが万物を構成する粒を操って、己の数を増やすと言ったである？」

「うん」

「例えばだな、この机にそいつを置いて ”己を増やし続ける” と命令するでしょうか。」

「うんうん」

「まず、机を材料に己を増やすであろうな。で、増えた奴らも参加して鼠算式に床、壁、この小屋、この辺りの土地を材料に己を増やすであろうな。」

「それって……」

「わかったか？放っておけばこの大地もその内すべて ”グリムニルの槍” になると言う事じゃ。当然、そこに生きる生命すべてもな。」

こいつを使ったガンダールヴは武器を使いこなす能力で ”グリムニルの槍” を体に取り込んで操り、言葉通り神の盾としての役目を果たせるよう

どんな傷を負ってもたちどころに治癒してしまい、腕を振るえば千の兵をなぎ倒し無敵の力を発揮しておったのだが……」

「だが？」

「こいつの制御にルーンの能力が追いつかなくてな。最後には体に

負った傷を修復しようとして増殖していた ”グリムニルの槍”  
が無秩序にどんどん増えて

星を飲み込みかけたんじゃ。持ち主だったガンダールヴが最後の力をふりしぼって、制御したが…… ”サハラ” はその名残じゃ。

「

おいまして。

サハラってあのサハラか？

あの砂漠地帯がどんだけ広いと思ってるんだよ！

「うわあ！そんな危ねえもん、俺の体にするんじゃねえよ！やだよ俺、ヤダヤダ！」

「何を言うか！お前だからこいつを使いこなせるんじゃぞ！光栄に思わんかい！」

「嘘つけ！そのガンダールヴだって制御しきれなくて世界を滅ぼしかけてるじゃねえか！」

「ふふん、お前は特別じゃ。なにセルーンが二つあるんじゃぞ？内  
一つを制御専用割り当ててやれば問題ないわ。」

恐らくはお主が歴代ガンダールヴの中で、初めて最強の槍である  
”グリムニルの槍” を使いこなして本来の『ガンダールヴ』の  
強さを発揮する者となるうな。」

「う、そういうのには男の子としては惹かれるが……うーん、でも  
なあ？制御できる、暴走しないって保障は無いんだろ？」

「言つとくが、この仕事を請ける以上他に選択肢は無いぞ？」

なにせ相手は長く生きたとんでもなくデカくて強くて、オマケに  
凶悪な韻竜じゃからな。そいつが”ミヨルニル” をガメとるん  
じゃ。」

おい。

今なんつった？

凶悪な韻竜？

俺、そいつから”ミヨルニル” を奪って来るの？

「今のままなら間違いなく最初のプレスで死ぬぞ、『ガンダールヴ』  
。年老いて偏屈になった韻竜という物は厄介だからの？  
このわしでさえ手を出せずについて、お主に世界を滅ぼしかねん武器を渡してまで頼みごとをする位だからの。」

「韻竜なら話せば……」

「ふん、それが出来るならとつくにやっとなるわ。あれの気まぐれで  
どれだけの村や町が焼き払われた事か。」

「そ、そうだ！俺じゃなくて『ヴィンダールヴ』に……」

「韻竜に近づく前に焼き払われるな、骨も残らず。多少の魅了の効  
果も効かんだろうな。なにせ知能が高いからのう。」

「 ”ミヨルニル” を諦めるってのは……」

「諦めるわけにはいかな。アレも ”グリムニルの槍” 程でも  
無いにしろ、封印しとかねばならん代物じゃ。」

それに ”時の魔女” のわしが、お主を選んでおる時点で他に

人材が居ないと考え付かんか？」

ノルンはそう言ってくつくと笑う。

俺は手にしたグリムニルの槍を眺めながら考えていた。

どの道このままじゃ俺は消える。

そして何も知らない十七の俺を、ルイズが居るとはいえハルケギニアに放り出すのか？

今、俺はどうするべきだ？

俺の目的はなんだ？

何のためにここにいる？

………そんなの、決まっている。

「………その顔は決心したようじゃな。」

「……ああ。」

「じゃ、早速はじめるか。」

「聞かせてくれ。どうやるんだ？俺はどうなるんだ？」

「ふむ。まず、その左手の抑制のルーンを外す。そうすれば失った体の機能を奪っている。”呪い”が消えるからの。」

で、”グリムニルの槍”にお主の二つのルーンを移す。詳しい仕組みは省くぞ？言っても理解できやせん。」

無事にお主の精神を移し終えたら、”グリムニルの槍”にお主の体を模写させるのだ。なに、難しい事じゃない。」

ただ、願えばいい。心の震えを感じ取って力を発揮するルーンを通して、お主が望む姿・力を”グリムニルの槍”が与えてくれる。」

「元の肉体と十七歳の俺はどうするんだ？」

「”グリムニルの槍”の力で失った体の機能を再構成してやれ。その後わしがチキユウにでも送ってやるよ。」

ただ、お主の消えた記憶や影響を受けた精神は元には戻らん。心や思い出は、神でもない限り作り出せはしないからのう……。」

俺は複雑な思いでノルンの説明を聞いた。

遠い昔あれほど帰りたかった故郷、そしてもう帰る事も無いと結論を出したはずの故郷に平賀才人は帰れるのだ。

自分自身の事では無いにしても、両親の事を考えるとなんだかうれしくなった。

「これで満足したか？」

「ああ、始めてくれ。」

「では、”グリムニルの槍” を口に含んで作業台の上に寝転べ。」

俺は言われた通りにする。



見える天井がやけに高く感じた。

頭の上で、さあ願え、己の姿をという言葉を聞く。

それから黒い猫の姿が視界に入った時、俺の意識はぷつぷつりと途切れた。

最後に見た黒猫の瞳は、なぜかルイズの美しい鳶色の瞳を連想させた。



夢を見た。

ルイズが空を飛ぶゼロ戦の風防を開けて立ち上がり、目を閉じて魔法を唱えている夢だ。

唱えている魔法は ” エクスプロージョン (爆発) ”

紡がれる長い呪文は、夢の中であっても俺の心を激しく揺さぶり昂ぶらせてゆく。

ゼロ戦は群がる竜騎士を機関砲で蹴散らしながら、ルイズの事など気にも留めていないように上昇し下降し旋回し回転する。

その様子を見て振り落されやしないかとハラハラしたが、完成へと近づく呪文の詠唱がそれよりも強く心の昂ぶりを更に加速させてい

た。

そんな俺の心を表すようにゼロ戦はレコン・キスタのものと想像される戦艦からの砲撃を、狂おしそうに身をよじってかわし続け空を駆け上がっていく。

そして、完成する呪文。

閃光。

虚無の白が世界を染め上げていく。

ただ一点、光の向こう側に小さくピンクブロンドの髪の少女が見えて、聞こえるはずの無い声が聞こえた。

サイト、やったわ。

俺はその声を確かに聞いた。

目を覚ました時、俺は作業台の上でなく床の上に寝かされていた。

顔の前まで左手を持ってきて、甲に見慣れたルーンが刻まれている事を確認する。

ただ、ルイズがくれたあの抑制魔法のラインは跡形もなく消え去っていた。

「目が覚めたか？ガンダールヴ。」

俺の位置から見える作業台の裏の反対側から、あの黒猫がひよいと顔を出した。

ノルンの顔を見て俺の身に何が起きたかを思い出し、上体を起こして体のあちこちを触る。

どこにも異常はない。

左耳も再び聞こえるし、かすみがちだった左目もスッキリとした感覚で見える。

「ふむ、成功したようじゃな。立てるか？」

俺は手を付き、よっこいしょと立ち上がった。

視界が上から下に流れる。

そして立ち上がった時に、作業台の上にあるものを見て驚いた。

そこに横たわる ” 俺 ” とその脇でちょこんと座るノルンを見て。

「どっじゃ？鏡を使わずに初めて己の目で見る己は。」

「……なんか、複雑。」

「くっく、じゃるっのう。」

黒猫は楽しそうに笑う。

作業台の上に横たわる自分をまじまじと見て、それから両手の平を握ったり開いたりしてみる。

違和感らしきものは何も感じなかった。

室内は相変わらず薄暗い。

唯一差し込む扉の光も、作業台の上を照らす程度の物でしかなかった。

「ほれ、いつまで呆けておる？無事」グリムニルの槍” に体を  
移し終えたんじゃ、もつと喜ばぬか。」

「……実感がわかねえよ。それに、とうとう人間まで辞めちまった  
んだ。喜べるワケないだろ？」

「ふん、元々未来から過去の自分の体に憑依融合しようとしておっ  
た時点で、人間と胸を張って言える存在でもなかるうに。」

「う、そう言われるとそうだけどさあ。」

「くく、そう落ち込むな。 ” 何をもって人間とする ” かなんぞ  
バカが気にした所で答えなんぞ出はせん。」

今のお主は力があり人とは違う組成の体ではあるが、ちゃんと飯  
も食えるし傷みも感じる。子供も作れるし、老いて死ぬこともでき  
るのだぞ？」

「本当か？」

「嘘をついてどうする？わしとて ” グリムニルの槍 ” のような危ない代物を他人に貸してやるのだ。保険位用意しておく。

いいか？お主の体は人と同じ生理現象を忠実に再現してくれる。そうでないと、感情や思考も人のそれと段々かけ離れていくからの。」

「うーん、そういうもんなの？」

「そういうものじゃ。体と精神は密接に結びつくからの。わしとて猫の体を借りた時に迂闊にも発情期だったりすると ” もてあます ” じゃ。」

「それは……すこし違うと思うんだけど？」

「違いはせん。ふん、どうでも良い事をぐちぐちと……すこしはもつと自分の新しい体の事を知ろうとは思わんのか？」



ノルンはそう吐き捨てた。

それから耳の裏を後ろ足でひっかく。

……ノミでも居るんだろっなあ。

よくみると結構薄汚れているし。

痒い思いはしたくないから、なるべく近寄らないでおっつ。

「とにかくな、お前の体は基本的には人間と同じじゃ。人とは違う所を説明した方が早い位のの。」

「どこが違うんだ?」

「まず、ルーンじゃな。”ダブル”はもう使えん。二つある内の一つを体の制御に割り当てたからの。」

「じゃが、身体的な強度は人のそれとは比べものにならん。心の震え方次第でどこまでも強くなれるぞ? ”ダブル”と遜色無い程にの。」

「おお!本当か?!」

「本当じゃ。ルーンの反動を幾らでも受け止められる体じゃからの。」  
”ダブル” 並の反動でも死ぬ事は無い……というか、むしろ  
”死ねない” と言った方がいいか。」

「死ねない？」

「その体は人のそれとは違う。勿論、傷を負えば血液を吹き出し、大量に血を失えば気を失う。風邪も引くし、下痢もしよう。」

「だがある程度……平たく言うと、普通の人間が死ぬ程のダメージを受けると強く体の再生が始まる。」

「無論、そうでもない怪我にもゆっくりとじゃがその作用は働くがの。」

「わかるか？お主は死ねないのじゃ。無論そのまま永遠に生きることも可能だが、わしはお主の体に”寿命”を設定した。」

「お主が死んだ日が訪れると、自動的に死を再現するようにな。わしは不老不死の最強の存在なんぞ創り出す程悪趣味ではない。ま、逆に言えばその日以前なら死ぬ事は無いと言う事じゃな。」

”死ぬ程” 苦しい思いをするだけじゃ。」

「うーん？」

「まあ、おいおい分かるさな。」 丈夫な体になった” とでも覚えとけ。いいな？」

「わかった。とりあえず、八十四歳で死ぬ日までは大丈夫だって事だよな？」

「うむ。」

「それに、”ダブル”は使えなくなっただけで、”ダブル”並に動けるようになったって事だろ？  
最高だよそれ！！俺、無敵の戦士になった気分だ！」

「阿呆。心の震え次第とも言ったじゃろが。上限が無くなっただけの話で、ほいほい”ダブル”のような動きを出来るようになったわけではないわ。」

お主は『ガンダールヴ』じゃ。心を震わせ、主の側で戦ってこそ初めてすべての力を引き出せる。」

むしろ今まで心の震えも無しに、いつでもあの力を発現できていた事の方がおかしかったのじゃ。」

うーむ。

つまり、ルイズの側にいて初めて力を発揮できるって事か。

で、今までのルーンの使い方と同じように心の震えで力を得る、と。

ただ上限が無いって事は心の震えが大きければ際限無く大きな力を取り出せて、その反動も受け止める体になったワケだな？

「そうじゃ。思ったよりかは阿呆でな無いようじゃな、その認識で間違いではない。」

「で、基本的に大怪我はするけれど死なない体って事だよな？」

「うむ。尤も怪我があまりに酷ければ回復にもそれなりに時間はかかるが。いいか、過信はするなよ？火山の中にも落ちれば目も当てられんからのう」

ノルンはそう言って意地の悪そうな表情を浮かべ、ひっひと笑う。

思わず想像して、俺は背筋に冷たい物が走るのを感じた。

……冷や汗もかけるのか。

なかなかよくできた体だな、これ。

「あとな、これはブリミルの趣味なんじゃが……お主、槍をイメージしながら右手を床に当ててみい？」

俺は言われた通りにしてみた。

するとボコボコと音を立てて、床に一振りの槍が現れる。

イメージしていた手投げ用の小さな槍が。

まるで石畳の床を材料にして槍を作ったかのように、その周囲は陥没していた。

「グリムニルの槍” は万物を構成する粒を操る。

本来はお主に触れる物すべてを微塵となるまで分解し、または別の何かに構成し直して変える事ができるのじゃが当然、制限をつけた。

危なっかしい事この上ないからのう。ブリミルの趣味と同じく、右手に触れた生き物以外を槍に変えるという物じゃ。

槍を投げたりその手から話すとその内元の材料に戻るがの。」

「……俺、結構すごいもんもらっちゃった？もしかして。」

「今頃実感するか、お主はやはり阿呆じゃのう。これではルイズの奴が苦勞するのも頷けるわい。」

「よいか？そこまで制限をかけても」グリムニルの槍” を使っていたガンダールヴは暴走させてしまっておった。

「お主の場合はまあ大丈夫だろうが、くれぐれも過信はするなよ？」

「わかったよ。でも、本当にすげえ体だな！これならでかい韻竜と戦っても勝てそうだ。」

「当然じゃ。勝って貰わねば困る。あ、”グリムニルの槍” は貸しただけじゃからの？」

”死んだら”返せよ？何、取りに行くから死に場所に気を遣う必要はない。だがくれぐれも火山の中や海の底でくたばらんようにな。

流石のわしも火の海や水の中は無理じゃ。……うむ、説明は以上じゃな。

後は使いながら慣れていけ。

”それでは、次。この何も知らん”お主”を送り返す前にお主が潰した左耳と左目を治すから手伝え。」

「手伝うってどうやるんだ？」

「そっじゃな、まず手を出せ。どちらでもいいぞ。」

少々不穏な空気を感じつつも、おれはノルンに右手を差し出した。

瞬間、シャー！と声を上げてノルンが俺の右手の平をその爪で深く  
挟む。

熱い痛み思わず引つ込めた右手の平には、深いひっかき傷が出来  
て血がドクドクと吹き出ていた。

「いでえええええええ！何するんだよ！」

「決まっておろっ？お主が潰した左耳と左目を治すんじゃ。」

「治すんじゃ、じゃねえ！俺が怪我しただけじゃねえか！」

「お主の体は万物を構成する粒を操る小さなゴーレムの集まりじゃ。」

その血も、髪も、すべて、な。」

「それがどうしたんだよ、おお、痛え。」

「体……正確にはルーンと繋がった体から離れたお主の一部は、見た目の通りの物になる。つまり、血は血に、髪は髪に、夜な夜なコツソリ進らせておる精は精に、の。」

「……だからなんでそういう事知ってるんだよ。」

「だが、その体から離れなければお主の血は強い治癒の力を持つんじゃない。ほれ、傷が塞がらぬ内にお主が潰した左耳と左目に手を当てい。」

「無視かよ、まったく。……ごうか？」

言われたとおりに自分の顔や耳に手を当てる。

血がべつとりと顔や髪に付いて、傍目には怪我でもしているかのように見えた。



実際は俺が怪我してるんだけどな……

「ま、その位でよからう。恐らくは治癒は成功しておるう。そのために抑制の魔法を外したのじゃからう。」

「本当にこんなもんで治るのか？」

「多分な。どれ……ふむ、ほう、うむ。よしよし、うまく治っておるぞ？」

「本当かあ？すつげえ胡散臭い。」

「疑り深い奴じゃのう、ホントに。きちんと治っておるわ。さ、元居た場所へ送り返すぞ。ほれ、手を顔から離して台から離れておれ。」

「あ！ちよつと待ってくれ！」

俺は急いで横たわる自分からルイズが持たせてくれた小物入れと手紙を取り、作業台に立てかけられていたデルフを手にして離れた。

ノルンも作業台から降りて、にゃあと一声鳴く。

すると横たわる俺の上にあの光の門が平行に現れ、ゆっくりと下へ降りてきた。

俺……十七歳の俺はその門に飲み込まれて行き、やがて門は消えその姿は完全に掻き消えた。

「ふう、これでよしと。……くく、どうやらお主がこっちに来て一週間後に送り返せたようじゃな。おうおうおう、こつてりとシボられておるわい。

あ、泣いた。くっくっく、なんと間抜けな面よな？」

「見える、のか？」

「見るか？」

その問いは予想以上に心を揺さぶる。

遙か過去にあきらめた故郷。

死に目にも会えなかった両親。

それを、見せてやると目の前の ” 時の魔女 ” は言ったのだ。

「いや、いい。変に里心が付きそうだし。それに……そこに見える  
両親は ” あいつ ” のもんさ。俺にはルイズがいるし、な。」

「そうか。意外とあっさりしておるのだな、お主は。」

「そうか?」

「うむ。それになかなか良い顔をする。なるほど、ルイズの奴がわ  
しに会わせたがらないのはこういう事か。」

「ルイズが?」

「そうじゃ？あやつにはわしの本体を見せておるのだが、お主の前には使い魔の姿で会うようあるう事が師であるわしに脅しをかけてきよった。

くく、なかなか見物じゃったぞ？使い魔にしておった黒猫を人質にして杖を当て、わなつきながらお願い！先生！ときたもんじゃ。」

「なんでまた……」

「大方わしの美貌を見て取られるとでも思ったのじゃろう。こつ見えてわしはばいんばいんで可憐で傾国じゃからな？」

「あー、はいはい。性悪つてのはよくわかったよ。」

「……信じておらぬな？残念じゃ。わしの本体を見ればきつとこの場で作業台の上に押し倒されておるうにの。」

「そんな事はやらねって。」

「ふん、せいせい夜の慰みの供を逃してしまったと後悔するがよいわ。」

「……お前、ロクな事言わねえな。出歯亀ばっかしてるんじゃないかねえのか？」

「しとるよ？それが ” 時の魔女 ” としての唯一の楽しみだな。ひっひ。」

ノルンは心底楽しそうに笑う。

この様子からすれば、恐らくは俺が決して他人に見せたくはないと思う姿を把握しているのだろう……

あまり考えたくはない。

むしろ、忘れ去りたい。

きれいさっぱりと。

「さて。これでお主の問題もすべて解決したの？今のお主なら七万の軍に突っ込もうと死ぬ事はあるまい。

ではいよいよわしの仕事に取りかかって貰うぞ？」

「ああ。韻竜と戦って、 ” ミヨルニル ” を奪って来ればいいの

か？」

「うむ。多少手順を踏まねばならんが概ねそうじゃ。」

「手順？」

「ただ竜の巢に突っ込んで行って、戦って、宝物を持ってくる、といった類の物ではないのじゃ。」

うん？と首を傾げる俺。

どうやら力尽くで行う仕事でもないらしい。

「なんだよ？俺、そんな難しそうな事はできねえぞ？」

「なに、難しい事はない。ある少女の世話を焼いてやればいいんじゃないよ。」

「少女？どどういう事だ？」

「因果律という物があってな。その少女は例の韻竜の元に赴く事になつておるのじゃ。」

お主が”ミヨルニル”にたどり着くためには力尽くでなく、その少女について行き韻竜と対峙しなければならん。」

「なんかめんどくさいな。もうちつと単純な内容にできねえのか？」

「ふん、わしはルイズとは違う。後世に影響が出るようなやり方はせん。むしろ、そうする方が必然なんじゃぞ？」

「んーわかったよ。仕事だしな、言われたとおりにするぞ。」

「うむ、大分聞き分けが良くなってきたのう。良い事じゃ。」

くつくつとノルンは笑った。

その含みのある笑いから、他になにかを隠しているような気がした。

薄々気がついていたが、こいつはトラブルを眺めては楽しむタイプだ。

絶対に間違いない。

「で、その少女ってのはどこにいるんだ？」

「うむ。その扉から外に出ると、とある村の外れに出る。そこに住んでおるよ。」

「じゃ、早速行ってくるよ。」

「あ、まで。まだ話は済んでおらん。」

扉のノブに手をかける俺を見て、焦った調子で背中からノルンの制止の声がかけられる。

その声の調子は初めて聞くノルンの焦った様子だった。



どうやら大事な話がまだ残っていたらしい。

ノルンはちとまっとれよ？と言って先ほどの大きなタルの中を再びごそごそと漁りはじめ、やがて小さな櫛を加えて作業台の上に戻ってきた。

その様は生ゴミでも漁っている野良猫のようだ。

櫛を手に取り見てみると、普通の物よりもかなり小さくて歯も幅厚で、櫛目も細かい。

なんだこりゃ？

どんなマジックアイテムだ？

俺が櫛に気を取られている間、ノルンはその辺から鍋を引っ張り出してきて軽々と作業台の上に引っ張り上げにやあと鳴く。

すると作業台の上に置かれた鍋の中に水が張られた。

「なんだよ？まだ何かあるのか？」

「なに、今度は難しい話ではないぞ？その櫛でわしの体からノミを取ればよいのだ。」

え？とあっけに取られる俺。

ノルンはもう一度同じ内容の言葉を口にした。

冗談ではないらしい。

むしろ、これだけは絶対にやって貰うぞ！と気迫が込められている。

”ミヨルニル” や ”グリムニルの槍” の話をしていて時のような、どこか淡々としていて他人事のような雰囲気は消え去っていた。

今のノルンの態度はエサをねだる猫のそのようで、どこかソワソワとしていて喉をグルグルと鳴らしていた。

「はあ？何でだよ？」

「わしは使い魔の契約せずともあらゆる場所の黒猫を、一時的に使い魔として使役できるんじゃない。しかし、これには条件があつてのう。

体を使った黒猫に礼として餌を与えたりノミを取ってやつたりしなくてはならんのだよ。」

「なんだそれ。」

「と、言うわけで頼む。あ、ノミ取りの櫛は持って行け。何かあったら黒猫を探せばわしに繋がるからもう、連絡を取る都度ノミ取りをして貰わねばならんしな。」

「……わかったよ。ほれ、じっとしてるよ？……」ううして、「ううやうて、……おい！エロい声を出すなよ！」

「くく、劣情をもよおして来たか？くあぁっ、そこ！そこが痒かったのじゃ！くう、たまらん！」

「……おい、これくらい魔法で何とかならんのか？」

「馬鹿者！あらゆる時代を生きてきたわしが、最後にたどり着いたん、快楽の境地ぞ？そんな魔法ごときでアツサリと、あう、処理なんぞできるかいや。」

「……使役の条件じゃねえじゃねーか。」

「いや、条件には間違いはない。ただ、実益っつんん！……はあ、

お主なかなか上手いの。今は頭の芯までしびれた。！！はぁん！」

「……頼む、黙っててくれ。」

「ひっひ、股間を膨らませて良く言っ。本当に男という物は悲しい生き物じゃな？くく、ルイズには黙っておいてやるから安心せい。」

俺はそれから暫く悶々としながらも櫛でノミを梳き取り、それを鍋の中の水に放り込んでいった。

櫛で梳く度にこいつのあられもない嬌声を聞かせられ、元気になったガンダくんをからかわれる。

絶対わざと声を出しているんだろうな、うん。

くそ、覚えているよ？純情な八十四歳のオトコノコをからかった仕返しを、いつか絶対してやる。

「もう、この位でいいか？そろそろノミも取れなくなってきた。」

「うむ、よかる。中々気持ちよかったわ。」

「うるせえ！最後だけ甘えた声色を使ってるんじゃないやねえよ！」

「色々切なそうじゃのう。くく、いや愉快。」

「……じゃ、もう行くぞ？」

「うむ。外は何かと危険じゃ、気をつけてな？まあ、お主をどうかできる存在などそうそうにはおらんがのう。くっく」

俺はルイズの小物入れと手紙を懐にしまい、デルフを担ぐ。

そこで初めて自分の服装に気がついた。

前とかわらない。

いや、あれほど痛んでいたパーカーなどは新品同様だった。

ノルンに聞くと、”グリムニルの槍”で俺の体を再現する時に一緒に作ってくれたのだとか。

「そっぴゃお前、ガンダールヴのルーンも無しにどうしてニルの槍” を使えたんだ？」グリム

「……ああ、そっぴゃだ。バカな俺に説明してもわからねえもんな。

「言わなくてもわかるよ、その目を見てりゃ。

「俺、多分いま世界で一番猫の表情を読める人間だと思っ。

「悪意限定、だけど。

「ほ、中々分ってきたではないか。」

「うっせ。とりあえずお前が持つてる俺の評価ってのはよく分ったよ。」

「なんじゃ、つまらんいう。言っておくがわしはお前の事を高く買っつておるのじゃぞ？」

「嘘付け。」

「ちと疑り深いのは確かにつまんが……いや、それでもお主は面白い。うむ、”グリムニルの槍”を貸してやるだけの価値がある。」

お主を眺めておると本当に退屈しないからのう。」

「ああ、そうかい。そうやって手の届かない所から見物してるよ。」

「くく、怒るな怒るな。なんじゃ？さつきからかった事を根に持っておるのか？ん？なんじゃったら、わしの本体でお主の劣情を受け止めてやるつか？」

「あ、いや、その……」

「おっと、それではルイズの奴との約束を破ってしまうか。いや、残念。くっく、許してくれ？」

やっぱりこいつは性悪な女だ。

黒猫は慌てた俺を見て楽しそうにくっくつと笑う。

またからかわれたと理解した俺は頭をボリボリとかいて、さっさとこの場を立ち去ろうとノルンに背を向け恐らくは出口であろう扉の

ノブに手をかける。

そしてそのままの姿勢で最後の質問をした。

「で、この扉の向こうは何処の村で、少女はどうやって見つけるんだ？」

「村の名はブレケ。今で言うとゲルマニアの北部の村じゃな。」

「今で言うところ？」

「この当時はゲルマニアなど存在せんしな。言わなかったか？ここは数千年前のハルケギニアじゃ。」

思わず扉のノブを握ったまま後ろを振り替えり、ノルンを見る。

あいつはあの笑みを浮かべていた。

楽しそうで、悪戯っぽい黒猫の笑みを。



「聞いてねえよ！」

「そうか、まあ気にするな。些細な事じゃ。仕事が済めばきちんと戻してやるわい。」

「……頼むぜ、本当に。で、少女は？」

「白い。」

「へ？」

「白い。」

「それだけ？」

「それだけで十分じゃ。さ、はよ行け。」

ノルンはそう言って、それっきり喋らなくなった。

欠伸をして差し込む光が当たる場所に移動し、丸くなる。

どうやらただの黒猫に戻ってしまったらしい。

数千年前のハルケギニア、ゲルマニア北部のブレケ村、そして白い少女、ね。

”グリムニルの槍”、韻竜に”ミヨルニル”か。

正直頭が追い付いてこない。

まだ夢の続きを見ているかのような感覚だ。

ルイズ、俺思ってたよりずっと遠くに来ちまったみたいだ。

でもな、必ず帰る。

だから待っていてくれよ？

扉を開け放つと、夢で見た虚無の白のような強い光が世界を支配した。

思わず目を瞑ったおねは夢で聞いたあの言葉を思い出す。

サイト、やったわ！

その言葉は夢の中で聞いただけでも関わらず、不思議と心が昂ぶった。



腹減った……

あの扉を開けると、俺は森の中に出た。

無論魔法学院の近くの森ではない。

森はそれほど深くはなく、眩しい光が木々の間から差し込み馬車の轍が続く道があった。

俺はその道の脇に立つ山小屋かなにかから出て来たらしい。

開けていた扉を振り返ると、小屋の中は一変して何も無くなっていた。

さてどうしたものかと思案にふけっていると、森の奥から馬車がやってきました。

俺は馬車に乗っていたおじさんにブレケ村までの道を聞こうとしたのだが、無視をされてしまう。

どうやら山賊かなにかの罠と思われたらしい。

馬車は止まるどころか速度を上げ、俺から逃げるように走り去ってしまった。

とりあえず、あの馬車は荷物を満載していた。

長距離を往復する商人にも見えなかったし、近くに町か村があるのだろうか。

おそらくそこがブレケ村だ。

そう判断して、俺は馬車が走り去った方角へ歩き始めた。

そして三日後。

フラフラになりながら街道を歩く俺がそこにいた。

馬車の後をついて行った後、程なく俺は町を見つけていた。

ゲルマニア地方の町らしく、ぐるりと周囲を城壁で囲んで中と外の境目がはっきりとしている”城塞都市”だ。

都市と言うには随分と小さな物だが、元々都市国家群が多くあったゲルマニア地方ならではの町の姿だろう。

ましてここは数千年前のゲルマニアだ。

恐らくは統一国家など無く、こういった一つの都市が一つの国のような感覚で居た方がいいのかもしれない。

そう考えながら城塞都市の入り口に立っている、いかつい門兵にここはブレケ村かと訪ねた。

帰ってきた答えは……違った。

「はぁ？何言ってるんだお前。怪しいやつだな。」

「いや、俺ブレケ村に用があつてさ、遠くから旅をしてきてその……ここがそうだと教わつたんだ。」

「それにしても偉い軽装だな。」

「はは、途中で山賊に襲われて慌てて逃げて来てね。」

「あー、町の外は物騒だからな。隣のオーフィーと戦争が始まるって話だし。」

「オーフィー？」

「この隣の都市さ。ここはヨールって言うんだ。ブレゲはあっちほら、行った行った！」

そんな感じで無下に追い払われ、門兵の指さした方角へと続く街道を歩き始めて早三日。

街道は平原の真ん中を貫くようにどこまでも続いていて、見渡す限りの草原以外にも見えない。

すれ違う馬車にはすべて無視され、夜はデルフに話し相手になって貰いながらの野宿をしながらの道程だ。

その間何も食べてないし、水も飲んでいない。

超腹減った……



ちくしょう、あのバカ猫め。

なにが「とある村の外れに出る」だよ。全然ちがうじゃねーか！

絶対わざとだ！

きつと今の俺の状況をみてニヤニヤしながら眺めているにちがいない。こんちくしょう。

それにこの体！

造り物のはずなのになんで腹がこんなに減るんだよ！

あいつ、実は地球に帰した俺の方に ” グリムニルの槍 ” を使ったんじゃないかねえだろうな？

ああ、ちくしょう、怒ったらもつと腹が減ったぞ。

もう足に力が入らなくなってきた。

俺は体力も気持ちも萎えて、なんだか何もかも投げ出さなくなり道端で大の字になって寝転んだ。

” グリムニルの槍 ” の力で餓死する事はないだろうが、同時にその力は三日間にも食べていないという体を忠実に再現している。

ああ、腹減った。

太陽の高さからもう昼頃だよなあ。

あ、あの雲おいしそう。

なんかでかい肉の塊に見えてきたぜ。

あっちは……エールのジョッキだな。

くう、マルトー親父の飯が食いたい！

「あの……」

大地に寝転がり、雲をみて旨そうだとブツブツとつぶやく危ない俺に声をかける者がいた。

若い、女の声だ。

ふて腐れていた俺は声の主の方を見もせず、そのまま空を眺め続ける。

この三日、道行く人や馬車に声をかけてもことごとく無視をされるか露骨に追い払われていたので、いくらピュアなハートを持つ俺でも

この時ばかりは心が相当すさんでいた。

「こんな所で何をしているのですか？」

「ああ、腹が減ったんでな。今お昼時だろ？だから雲を飯に見立て食った気になっている所。」

「どうしてそんな事に？」

「知るかよ。気が付いたら ” ころ ” になっていたんだ。ブレゲの村にすぐ着くって話だったのに、もう飲まず食わずでもう三日も歩きっぱなしさ。」

「まあ。」

「あんたもころやって寝転がっている奴に、そんな簡単に話かけてるんじゃないよ。」

野盗なんかがころやって注意を引いて、油断したところで襲うなんて良くある話だぞ？」

「本当？お兄さんも野盗なんですか？」

「俺はただのマヌケな行き倒れ。バカ犬で、ダメ犬で、エロ犬って呼ばれていたな。」

女はまあ、ともう一度言っけてコロコロと笑う。

それからどこかへ走って行く足音を聞いた後、再び戻ってきて寝転がる俺の隣にすんと座った。

そこで何事かと彼女の方を見ようとすると、視界に堅そうなパンが映る。

どうやらくれるらしい。

俺はがばっと起き上がり、パンをひったくると夢中でかじりついた。

堅く、岩のような歯ごたえだったがかまわず夢中でかじりつく。

……旨い！

何せ三日ぶりの食事だ。

味はしないし堅いしすこしカビ臭くもあったが、ものすごく美味しいと思えた。

あわててパンにかじり付いて食べた為か、喉にパンを詰まらせてしまう。

うぬ！これくらい、がんばって飲み込んでやる！と苦しんでいると、木製の水筒が差し出され俺は今度はそれをひったくってごくごくとう喉に流し込んむ。

「ぶは、あ、ありがと！生き返った気分だよ。」

「そう、よかった。」

水筒を返そうとした俺は、ここで初めて彼女の姿をみた。

白い。

それが第一印象。

白い髪。

白磁のような頬にさす薄紅色。

純白の指。

赤い目。

粗末なフードやマントで体中を覆っていたが、その隙間から見える彼女はまるで造り物のように白かった。

地球にいた頃、何かのTVで見た事がある。

白子症<sup>アルビノ</sup>って奴だ。

「……気を悪くしました？わたしが忌み子で。」

「忌み子？何それ。」

「え？知らない？白い子供は忌み子としてこの辺りじゃ疎まれてい  
るんですよ。」

「俺、この辺りの人間じゃないからなあ。」

「そう、ですか。普通なら忌み子から食べ物を買ったと知ったら、

相手を殺しかねない位怒るんですよ?」

「なんだよ、それ。ワケわからねえ。なんで命の恩人の君を殺さなきゃいけないんだ?」

「……本当に何とも思っていないんですか?」

「ああ。特になにも。あ!ありがとな、こんな旨いパンを食ったのは生まれて初めてだったよ。」

俺はそう言ってニカッと笑う。

彼女はそんな俺を見てどきまぎとした。

「あ、いえ。あの、その、わたしもまさかそんな言葉をかけてもらえるとは思いませんでした。」

「変なの。どうしてそんな嫌な思いをするかもしれないのに俺を助

けたんだ？」

その問いに、彼女は俯いてしまう。

俺は首を傾げてその様子を見守った。

やがて彼女は顔を上げ目に意志を込めて言った。

「お願いがあるんです。」



これがご都合主義って奴なのかもしれない。

俺はノルンが言っていた ” 白い ” が特徴である少女の話を思い出していた。

恐らくは隣でロバに跨っている少女がそうなのだろう。

彼女はルーと名乗った。

ルーについて行けば多分 ” ミヨルニル ” を持つ韻竜と会えるはずだ。

道端で腹を空かせ不貞寝をしようとしていると、なんと彼女の方からやってきて、それから彼女は俺にパンを分けてくれ

その上旅の目的地まで一緒について来てくれないかと言い出した。

きつととんとん拍子、ご都合主義ってのはこういう事を言うんだろ  
うな。

「なあ、ルー。 ”ミヨルニル” って知ってる？」

「みよる？え？なんですか？それ。」

「やっぱり知らないか。いや、俺ね？それを探して居てさ。」

「それでブレゲの村に？」

「うん。正確にはその村にいる ”白い少女” が手がかりだって教えて貰ってて。」

「それって……」

「そ、多分ルーの事だと思う。でも、知らないならしょうがないよなあ。」

「しめんなさい。」

「ん、いいよ。それを教えてくれた奴は胡散臭い魔女だったし。多分、ルーについて行けば見つかるんだと思う。」

「あ、それで私のお願いを聞いてくれたんですか？」

ルーのお願いとは、ここから数週間程歩いた所にある町までの護衛だ。

ブレゲの村のしきたりで、忌み子が生まれた場合その子供が十五になった時にその町まで巡礼に行つて、災厄を落として貰う必要があるのだとか。

しかし忌み子として疎まれた彼女の為に道中の護衛を申し出る者はおらず、唯一人で村をでた彼女は道端で倒れていた俺を助けてダメ元で代りに護衛を頼んできたのだった。

「そそ。だから気にしないでいいよ。」

「ありがとうございます。わたし、とても心細くて……」

「しかし、そんな遠くの町まで女の子一人を歩いて行かせるなんて酷いな。なあ、ルーは生まれてからずっとブレゲの村でそんな風に疎まれながら育ったのか？」

「いえ、わたしは数年前にフレゲの村の外れに住んでいた老夫婦に拾われたんです。それ以前の記憶は無くて……」

「へえ。いい人もいたんだ。」

「はい、そのご夫婦はとても良い方でした。でも、この前村を襲った流行病で亡くなって……」

「……そっか。」

「その病は私のせいだって事になってですね、それでこうやって巡礼の旅をする事になったんです。」

「ごめん、なんか……」

「いえ、いいんですよ！」

彼女はそう言ってフードの奥でニッコリと笑った。

恐らくは花のような綺麗な笑顔なのだろうが、俺にはよく見えなかった。

何もかもが真っ白な彼女は、日光に当たりすぎると簡単に体調を崩してしまう。

だから昼間からこうやって深くフードをかぶり、なるべく太陽の光に当たらないようにしているのだとか。

荷物を乗せ跨っているロバも老夫婦が飼っていたロバで、虚弱なルーが旅ができるよう老夫婦の財産を村の皆で分けた時に唯一ルーの手元に残ったものだった。

「しょうがないですよ。真っ白な忌み子であるわたしがおじいさんとおばあさんの家に来て、そんなに時間が経っていなかったんですし。」

「でもな、村の連中でおじいさん達の畑や財産をわけちまうなんて……」

「どのみち体の弱いわたし一人じゃ畑仕事は無理だし税も払えませんよ。それよりも、巡礼をやり遂げて……村のみんなに受け入れて貰った方がいいんです。」

ルーはすこし寂しげにそう言った。

そこで、ロバがヒーハーヒーハ！と五月蠅く鳴いて、立ち止まる。

……またか。

このロバがルーに残された理由は、もう一つあった。

「もう！さっき休んだばかりじゃないの！ほら、がんばってロシナンデー！」

ヒーハー！ヒーハ！

それは、こいつが酷い怠け者だったからだ。

しかもそのくせ知恵が回る。

ルーの話によると、以前重い荷物を運ばせた時に川に落ちて荷物をダメにしてしまい

おじいさんがその場でダメになった荷物を捨てて、結果荷物を軽くして帰って来た事があるのだとか。

それ以来ロシナンテは重い物を運ぶと、必ず川に飛び込むようになってしまったのだとルーはため息混じりに言った。

……まるでおとぎ話みたいな話だ。

そう思い、俺が一度砂袋でも括り付けてお置きしてやればいよいよ川に落ちると重くなるだけだと教えてやると

彼女は感心して今度やってみますねとお礼を言われてしまった。

きつと、この提案は実行されるだろう。

話を聞いた時のルーは天啓を受けた聖女のように感動し、ロシナンテがそれで反省してくれるならとても喜んでいたからだ。

「もう！ロシナンテ、動きなさい！怠けちゃダメ！逃げちゃダメ！」

「ルーが重いつて訳じゃない……ですね、はい。あの、ニラマナイ  
デ？」

「サイトさんたら！失礼しちゃうわ。」

ヒーハー！ヒーハ！

「うーん、テコでも動きそうにないね。」

「ううう、どっしり。」

「むー、仕方ない。ルー、いくつかロシナンテが持つてる荷物貸して。持ってあげるよ。」

「そんな！悪いです……」

「いっつて。ほらほら。」



俺はそう言って荷物をひょいと一つロシナンテから荷物を取って肩に担いだ。

ロシナンテはすこし軽くなった事に満足したのか、再び歩き始める。

そして、一時間程歩いた頃。

「……ロシナンテ……」

「……お前、もしかして……」

ヒーハ！ヒーハ！

ロシナンテは再び立ち止まっていた。

そうすれば俺が荷物を持ってくると学習したらしい。

前歯を向いて小馬鹿にしたようにヒーハ！ヒーハ！と五月蠅く鳴き

ながら俺を見ている。

てめえ……

「こゝ、こゝら！ロシナンテ！だめ！もうダメだってば！」

「こゝいっ、こゝいで旅の食料にしてやるっか……」

「さ、サイトさん！ダメですって！わたしロシナンテ無しじゃ一日中歩けないですし！」

「それもそっか。」

ヒーハ！ヒーハ！

「それに、非常食はなるべくギリギリまで手をつけないようにしないよ……」

「お、お。お。」

ヒー！？ヒー？！

この時はルーの一言が効いたのかロシナンテは動き始めたが、それでも暫くすると立ち止まりその度に俺が荷物を少しずつロシナンテから受け取る事になったのだった。

日が暮れる頃にはロシナンテが持っていた荷物は、すべて俺が担ぐ羽目になっていた。

「さ、サイトさん。その、本当にごめんなさい。」

「いや、いいさ。ハハッ、悪いのはこのロバなんだし。」

ヒーヒー！ヒーハ！

「手前には言っただねえ。覚えてるよ？」

ロシナンテは毒づく俺をあざ笑うかのように歯を剥く。

ああ、可愛くねえ！こんちくしょう。

バチでもあたらねえかな。

その考えを神様は聞いていたらしい。

ひゅつと音がして、どこから飛んできた矢がロシナンテの尻に刺さった。

ヒー、ヒー、とロシナンテが暴れ、短く悲鳴を上げて振り落されたルーを抱き留める。

急いで矢が飛んできた森の方を見ると、数人の野盗らしき人影が森から出てきて弓に矢をつがえていた。

数は……三人。

それほど規模の大きな盗賊団等ではなさそうだ。

三本の矢が放たれる。

俺はルーを抱きかかえたままルーンを発動させて矢をよけようと、駆ける。

この時、気がついた。

今までと違う体。

ルーン力なのか、 ”グリムニルの槍” の力なのかは分らない。

ただ、俺はその速さに戸惑った。

それは記憶に残る全盛期であった俺の動き。

ルーンを抱えたまま盗賊達を迂回し、一気に森の中へと走る。

「ルーン、ここに居る。合図したら森の外へ出てきて良いからな？」

「え？サイトさん？え？どうやって、いつの間ここに、え？」

状況に付いてこれていないルーンを大木の根元に降ろして、盗賊達がいちどりへ森の方から迫っていく。

地を駆け、木を蹴り、空へ飛びながらも凄まじい速さで移動する。

盗賊達は俺の動きに困惑して森の中へ矢鱈滅多に矢を射てきた。

当然、当たるはずもない。

俺は自然に笑みがこぼれていた。

動く。

動く！

動く！！

体が、イメージが、すべてが合一して思い通りに動く！

それはずっと求めてやまない境地だった。

心が震え、昂ぶる。

左手のルーンは強く光輝いていた。

ひゅんと音をたてて飛んでくる矢を、鼻歌交じりに避けながらデルフを抜きはなつ。

「相棒！久々の出番だな！はは、随分とご機嫌じゃねえか！」

「ああ、デルフ！こんなに調子がいいのは久しぶりだ！」

「まったく、”グリムニルの槍”を体にしちまった時はどうなるかと思っただが、問題なさそうでよかつたぜ！」

「なんだよ、お前知ってたのか、よっと！」

デルフと会話をしながら盗賊の一人に襲いかかる。

一瞬で手に持っていた弓を真つ二つにし、腰に下げていた剣の柄を根本から斬り、顔面にパンチを入れて昏倒させてからデルフを肩に担いで残る二人と対峙した。

その動作に遅れてがぁ！という悲鳴とドサリと倒れ込む音が続く。

「今なら見逃してやる。こいつをつれて失せろ。」

「うるせえ！こっちだってなあ、生活かかってるんだ！おい、出番だ！」

その言葉に男達の後ろの森から、五メートルもある巨体が現れた。

大きな牙を持つ、亜人のオグル鬼だ。

どうやって手懐けたのかは分らないが、 ” 仲間 ” らしい。

俺が移動してきた方向とは反対側の森の中に控えていたようだ。

手には巨大な棍棒を持ち、それを振り上げて襲いかかってくる。

「なあ、デルフ。」

「なんだい、相棒。」

「お前、あの棍棒の一撃を受けて平気か？」

「は、舐めるんじゃないぞ、相棒。びくともしねえぞ。」



オグル鬼の棍棒は暴風のような勢いで俺を潰そうと、目の前までに迫っていた。

デルフを横にして右手を添え、脳天へと振り落されるその必殺の一撃をまともに受ける。

ごきん、と鈍い音がして一瞬辺りを静寂が包んだ。

それからすぐに鈍い音と共にオグル鬼が ” 浮いた ”

俺が下から上に向かって勢いよく腹を蹴り上げたからだ。

グオオオ！と叫びながら森の外の街道の方へ吹き飛び、地面に叩きつけられるオグル鬼。

デルフを地に刺し、柄に手を添えて呆けている残る二人に俺はもう一度言った。

「今なら見逃してやる。こいつとあのバケモンをつれて失せろ。」

今度は何も出てこなかった。

男達は伸びている仲間を抱え、そそくさと森の奥へと逃げていく。

腹を押さえ呻いていたオグル鬼もそれを見て分が悪いと感じたのだろう、俺に怯えたような目を向けながら男達の後を追った。

デルフを鞘に収め、森の中に居るはずのルーに声をかけようとした時ルーが森の中から出て来た。

どうやら一部始終を離れた場所から見ているらしい。

まったく、危ないから声をかけるまで動くなつて言つといたのに。

肩をすくめる俺にルーは駆け寄り、興奮したように言った。

「サイトさん！あなた、イーヴァルデイだったのね！」

「イーヴァルデイ？あ、おれはそんな大層な勇者じゃないぞ。」

「え？勇者？なんですか、それ？」

「イーヴァルディの勇者じゃないって意味なんだけど……」

「もう！からかっているんですか？イーヴァルディって言ったなら  
” 大力無双の者 ” って意味の妖精じゃないですか！

その妖精に憑かれている者はもの凄い力持ちになれるんです！そ  
う、今のサイトさんのように！

ああ、すごい！すごいです！

普通は貴族のメイジに取り付くって言われているのに、平民であ  
るサイトさんに憑くななんて！」

どうやらこの時代の ” イーヴァルディ ” は力持ちの人間の事を  
指す言葉らしい。

同名の妖精に取り憑かれていると見なされ、中々のあこがれの対象  
となるようだ。

ルーは興奮した面持ちで話を続けている。

「しかもオグル鬼を蹴り飛ばすイーヴァルディなんて聞いた事もな  
いです！

普通は重い石を持ち上げたり、馬と綱引きをしたりする位なのに！

きつとサイトさんは特別なイーヴァルディなんですね！わたしの荷物もあんなに軽々と持ち上げていたんですもの！」

「あ、あの、ルー？落ち着こう。ロシナンテを探さないで。」

「あ、そうでした！」

すこし離れた茂みで震えるロシナンテを見つけ尻の傷を洗って消毒してやり、そこから離れた場所で俺とルーは野宿をする事にした。

その間も質素な食事を済ませた後も、中々ルーの興奮は冷めない。

ずっと俺がいかにすばらしいイーヴァルディかと語り続け、そんな俺に護衛をしてもらえる自分がとても誇らしいと喜び続けていた。

最初に見た儂げな雰囲気の彼女はすでにそこに無く、己の憧れを語る普通の女の子の姿がそこにあった。

ルーの話は二つの月が高く昇った頃まで続いていたが、この時俺は彼女が胸の中に抱えている物にはついぞ気がつかなかった。

旅は凄く辛い。

ルーと一緒に旅をする事を最初は結構楽しんだが、それも長続きせず多くのトラブルに俺たちは悩まされる事になった。

まず、ルーの旅に俺が加わった事で路銀がすぐに尽きてしまった事。

ルーが忌み子である為、道中の町に入れてもらえずに旅の行商人から割高な買い物を行う羽目になった事も路銀が底をついた原因だ。  
(この時も忌み子であるルーの足下を見られていた。ムカついたので商品の山の中にロシナンテの糞をこっそり放り込んでおいた。)

この辺りの都市国家間の緊張の為か治安が本当に悪く、酷い時は日に何度も傭兵崩れの盗賊やオーク鬼に襲われて時間を取られた事。

そして何より、ロシナンテの野郎が荷物を持つ所か前に進む事すら

決して決して決して決して決して、もう決り倒したので中々前に進めなかった事だ。

特に路銀がすぐに尽きてしまった事は、とにかく辛かった。

お金が無くなってしまったと、フードの奥の白い顔を真っ青にかえて申し訳なさそうに宣言するルーの言葉を聞いた時などは

本気で次に出会う馬車を襲おうと考えた位だ。

更に悪い事は重ねて起きる物で、丁度その時に盗賊が来襲してきて俺は胸に広がる不安と怒りの矛先をそいつらに向けたのだった。

「ふう、追い払ったぜ。ルー、怪我ないか？」

「はい、サイトさんもお疲れ様でした。」

「まったく、勘弁してほしいよな、わざわざ貧乏な平民を襲って来やがって。」

襲うんなら金持ちのメイジにすりゃいいのにさ、それでなくともこっちはそれどころじゃないって言うのに。」

「うう、どうしましょう。お金が無いと旅が続けられません……」

「うーむ、弱ったな。いつそこっちが盗賊になって路銀を稼ぐ？」

「だ、ダメですよ！そんな事したら手配書が各都市に回って城塞都市ガンビクにも入れなくなっちゃいます！」

「ガンビクまであとどの位？」

「……ロシナンの足で今の調子ならあと二週間、です。」

「食料、どの位持ちそう？」

「……あと、一日分……です。」

「よし、襲つか。なあと、命までは盗りやしなうて。おとなしく金さえ出せばな！」

「だ、ダメですって！」



ルーと出会って一週間。

その間何度も何度も来襲者に聞かされた言葉を口にして、悪い笑顔を浮かべる俺を必死に宥めるルー！。

しかし、現実問題として旅の完遂の為には他に方法がなかった。

町や村に入る事もできないし、すれ違う旅人や馬車の数は少なく慈悲を請う事もできない。

むしろ、盗賊の類に遭遇する事の方が多いくらいだ。

……ん？盗賊に会う方が多い？

「なあ、ルー。俺、良い事思い付いちゃった！」

「本当ですか？」

「ああ、まあまかせとけ！」

どうするんですか？と聞いてくるルーにいいからいいからとこやかに答えながら、とりあえずは街道を進む俺たち。

次の日、とうとう食料も尽きて絶望するルーを尻目に俺は鼻歌を歌いながら荷物を担いでいた。

サイトさん、いったいどうしてしまったの？とルーが話しかけて来た時だ。

すっかり日課となった盗賊の来襲が起きた。

俺は笑う。

とびつきり邪悪に。

ルーとロシナンはすでにそうだった事態には慣れてしまい、日頃の態度とは打って変わって名馬のような速さで

背にしがみつくルーを乗せたまま逃げるロシナンテ。

で、後は俺がその間に森から出て来た盗賊の何人かを一瞬でボロ雑巾のようにして追い返す、といった作業をするだけだったがこの日は違った。

「よく来たな！なあに、命までは盗りやしなつて。おとなしく金と食いもん出せ！女は置いていけよ……っど、これは必要ないか。」

「へ？」

「いいから、出せつて。次はぶつた斬るぞ？」

俺はそう言つてその辺の木々をデルフの一振りでなぎ払う。

ざざざと音を立てて何本もの木が倒れた。

それを見て盗賊達の顔から一気に血の気が失せる。

やがて俺はほくほく顔で、両手にいくばくかのお金と携帯食料をかかえてルーの下に戻った。

「ただいま！ルー、今日は腹一杯食べるぞ！」

「サ、サイトさん……まさか盗賊から奪うなんて……」

「はは、やだなあ！人聞きの悪い。悪い事してゴメンナサイ！って事でコレをくれたんだよ？」

「さっき思いつきりお金と食べ物と女性を要求していませんでした？ここまで聞こえて……」

「いや！女は勢いで言っちゃったけど、撤回したぞ！」

そう言うてにししとルーに笑いかけると、ルーもぷつと吹き出して心底おかしそうにフードの奥で笑った。

その日からは暫くはロシナンテの歩みの遅さを除けば比較的快適な旅が出来た。

なにせ、食料やお金は向こうからやってきてくれるのだから。

俺はこの名案を誇り、しまいには盗賊の来襲を今か今かと待ちわびるまでになってしまっていた。

ところがある日を境にパツタリと襲われなくなってしまふ。

悪党どもから巻き上げたお金も底を尽き、最後の銀貨で道行く行人から買ひ物をしている時だった。

「ほい、ニシンの干し魚とタラの塩漬けね。水は二袋でいいのかい？……しかしうらやましいねえ、お兄さん。新婚旅行かい？」

「あ、ああ、まあ、ね？」

「奥さん、随分と白い指をしているねえ。うらやましいもんだ。きつとフードの奥は美人なんだねえ。どれ、見せてくれないかい？おまけしてあげるからさ。」

「あつ」

俺の制止も間に合わず、行商人のおっちゃんが俯いていたルーのフードの中をのぞき込む。

まずい、ルーが忌み子だとばれたら下手すると何も売ってくれなくなる！

「あ、あんた忌み子だったのか！」

「あっ……」

「おっさん、なんか文句あんのかよ！」

「文句も何も、忌み子に売るもんは……ん？ロバと忌み子に、黒髪の剣士？もしかして、あんたら噂の連中か？」

「噂？」

「今街道沿いに流れている噂さ。」 忌み子とロバを連れた黒髪の男はとんでもなく強いイーヴァルディだ。手を出せば尻の毛まで抜かれてしまう” ってね。

嘘か本当かはともかく、盗賊どもはロバを連れた二人組を襲わないうって俺たちの間でも噂になってるぜ？おかげでロバと白粉がよく売れてな。」

「なんだよ、ちくしょう。それで襲ってこなくなったのかよ。」

「……信じられねえな、あんたみたいなひよろい奴がイーヴァルデイだなんて。」

「あの！サイトさんはすごいイーヴァルデイなんです！なんたって何匹ものオグル鬼を投げ飛ばしちゃう位なんだから！」

ルー、嘘はよくないぞ？

俺も他人の事はあまり言えないけど。

そりゃかばってくれるのはうれしいけどさ。

「ルー、そりゃ大げさだ。腕には自信はあるけどな、俺は普通の間だよ。多分。」

「あ、あの、盗賊をたった一人で日に何度も追い払う普通の人なんて居ないと思います……」

「ふうん、人は見かけによらねえって事なのか？信じられねえな。」

「いいから、とっとと食いもん売ってくれよ。ほら、金だ。」

「足りねえな。」

「てめえ！さっきはこれで……」

「悪いが、忌み子にはその値段じゃ売れねえ。」

「買うのはルーじゃない！俺だ！」

「同じぢや。」

行商のおっさんはそう吐き捨てた。

俯くルー。

俺は勝手にしろこのくそつたれ！と捨て台詞を吐いて、ルーを促し



立ち去るうとする。

「まあ、まてつて。」

「なんだよ、こっちは物売らねえ商人にや用はねえんだよ！」

「最後まで話は聞くもんだ。なあ、兄ちゃん。取引しねえか？」

「取引い？」

「見たところガンビクの方に行くんだろ？忌み子の巡礼つて奴でな。」

「ああ、そつだが？」

「おれもそつち方面に行くんだ。どうだ？次の町まで道中飯も食わせてやるし、物も普通に売ってやる。かわりに俺の馬車の護衛やらねえか？」

「うるせえ。俺はルーの護衛なんだよ。」

「飯も金ももうねえんだろ？そのまま忌み子と一緒に居ても良い事なんてなにもねえぜ？俺についてこいよ。」

その言葉にルーはぴくりと肩を震わせた。

俺はおっさんに向き直り、睨み付けながら言い放つ。

「そんなの関係ねえよ。いいか？ルーは道端で倒れていた俺にパンをくれたんだ。それまでだれも、そう誰一人俺を助けてくれなかったのに」

忌み子とさげすまれるかもしれないのに、俺を助けようとしてくれたんだ。絶対にてめえについて行くもんか。」

行商のおっさんは怒気を孕んだ俺の言葉につぐっとひるみ、少し考えてバツが悪そうに頭をかいた。

俺は再び踵を返してルーに行こうと声をかける。

フードから覗くルーのピンク色の唇は、嬉しそうに結んでいた。

「お、おい、まてつて。わあつた！わあつたよ！そつちの ” 嬢ちやん ” も一緒に良い。だからな？一緒に行こうぜ？」

「なんだあ？やけに必死だな、おっさん。」

「ああ、ちくしょう、本当の事を話すとだな。この先の街道は盗賊もオーク鬼も結構出るんだ。最近も行商団が襲われてな。」

「ほほう？」

「腕の立つ護衛が欲しいんだ。俺みたいな個人の行商人が今この街道を超えるるとすぐ儲かるんでな。な？な？頼むぜ？」

「そんなこと言ったってなあ？ルー。俺たち、自分らの分の飯もないし、物も売って貰えねえし。」

わざとらしくルーに語りかけると、ルーも俺に合わせてくれたのが深刻そうにええ、わたし忌み子ですもの……と返してきた。

俺は意地悪な笑いを浮かべておっさんにじゃあ、がんばってとたのみかける。

おっさんの様子から、「ここで昏上手くふっかければおいしい思いが出来るのかもしれない。」

「わかった！わかったから！」

「あにが分ったんだよ？」

「お前達の要求はなんだ？出来る範囲でなら答えてやる。」

「そうだなあ。まず、この金で飯を売ってくれ。さっき言っていた金額の半分。それと、道中の飯もおっさん持ちな。」

「わかった。それだけか？」

「んなわけねえだろうが。俺の護衛賃もしつかり貰うぜ？なに、ガ  
ンビクまでの路銀になりゃいい程度だ。安いもんだろ？」

「あ、ああ。それだけなら……」

「ああん？誰がそれだけだと言ったんだ？」

「まだ、あるのか！？もうこれ以上は無理だ！商品を売りさばかな  
い内からそんなたくさん条件は飲めん！」

「なに、金じゃねえって。ルーが乗ってるロバは怠け者でな、ルー  
だけが乗っても歩くのを渋るんだ。

だから荷物とルーを馬車に乗せてくれ。それだけだ。」

「なんだそりゃ？そりゃ、そっちのお嬢ちゃんが重……おい、そん  
なに睨むなよ。悪かったよ。わあつた！わあつたから。それでいい  
よ。」

「よっしゃ、交渉成立。ほれ、さっき売ろうとしたもんを倍にして  
出せ。これ、金な。」

後でもいいじゃねえかと渋るおっさんをせつついて、強引に魚の干物を受け取り金を渡す。

こうしておけば次の町に着いた時に約束を反故にされたりはしない。

それから俺は担いでいた荷物をおっさんの馬車に乗せ、荷台にルートを座らせた。

さあ、行こうぜとにこやかにおっさんを促して俺たちは次の町へと向かうべく街道を進み始めた。

幸か不幸か、それから三日間街道を進んでも盗賊の類は襲ってはこなかった。

出発時のおっさんの話によれば、次の町まで二日もあれば到着する距離らしい。

で、その話を聞いてから今日は三日目。

予定が合っていない。

なぜか？

ヒーハ！ヒーハ！

「あー、まってくれ。まただ。おっさーん、止まってくれ」

「なんだってんだちくしょう！またかよ！」

「ロシナンテ……もうあとは毛を剃り上げるしか体を軽くできないわよっ。」

そう、この怠け者のせいだった。

なんと何も乗せていないロシナンテが、馬車のスピードにすらついてこれずすぐに根をあげて止まるのだ。

おっさんの馬車は申し訳程度に幌がついた物だったが、馬は老馬でありそれほどスピードは出ない。

にもかかわらず、若い？ロシナンテはそのスピードにすらついてこれず、すぐに足を止めてしまうのだった。

「まったく、どうにかならんのか？この分じゃ町に着くのは明日になっちまう。」

「んなこと言ったってさあ。」

「ロシナンテ、あなたまだ十歳だっておじいさんに聞いたわよ？そんなに辛く無いはずよ？もう、怠けちゃだめよ……」

ヒー！ハー！ヒーハー！

「……嬢ちゃん、今日はロバ鍋にしねえか？」

「だめよそんな！道中のご飯はおじさんが出してくれるって約束じゃない！コレはわたしの食材よ？！」

それにこんな所でシメちゃったら、干し肉にする前に痛んでダメになっちまう。」

「あ、やっぱりルーもそういつ扱いるんだ？」



ヒ―?!ハ―?!

日もすでに大分傾いており、町まではあと一息だそうだがこの分だと野宿する事になりそうだ。

ロシナンテも最近はかなりワガママになってきているのか、休憩する回数も増え動かなくなったらテコでも動かない。

ルーはそんなロシナンテを（ああは言っているが）悲しそうに怠けてはダメ、と諭している。

「おっさん、今日はここで野宿になりそうだぜ？」

「はあ。まさか二倍の時間がかかるとは……とんだ貧乏くじだったようだな。」

「そういうなよ。俺たちがいるお陰で盗賊に襲われてないだろ？」

「そりゃそうだがね。おい、嬢ちゃん。飯の用意してくんな!材

料はいつもの所から持って行っていいからよ！」

「は！おっさん、最初は忌み子の作った飯なんざ食べねえとか言うてたくせによ。」

「ふん、あれは忌み子じゃねえ。フードをかぶった」嬢ちゃん  
さ。俺はなんも知らねえ。……それに初日に食ったアレは旨かったからな。」

「素直じゃねえな。あれはルーが気を利かせて作ったんだぜ？もっ  
たいねえからって結局食べてるし。大体な、忌み子忌み子ってなん  
だよ。」

体が白いだけじゃねえか。」

「お前、本当に忌み子の意味を知らねえのか？」

おっさんはいそいそと食事の準備をしているルーを横目で見ながら、  
小声で俺に訪ねた。

コクリと頷くと顔に手を当て、ため息をつく。

「本当に知らねえんだな。あのな？忌み子ってのは、なにも他人と肌や髪の色が違うから疎まれてるんじゃないやねえ。」

「じゃ、なんでだよ？」

「ここらにや、”北の暴君”って呼ばれてるでっけえ韻竜がいるんだ。そいつが忌み子を嫌っていて、忌み子が居る村や町を焼き払うんだよ。」

「はあ？何でまた……」

「知らねえよ、理由なんざ。だが本当の話だ。忌み子も子供の内ならなんもしてこねえが、大人になるとどんなに巧妙に隠していても何処からか聞きつけて来て、住んでいる場所ごと焼き払うんだ。」

「そりゃ、ひでえな。でもさ、忌み子よりも竜をなんとかする方が早くないか？」

「できるもんか！メイジどころかエルフ達の力を借りても、どうしようもないってのに。」

俺は一度奴が空を飛んでいる所を見たが、まるで山が空を飛んで

いるようだった。

そうだな、最初はアルビオンの浮き小島がはぐれてこんな所へ流されたのかと勘違いした位だったぜ？

韻竜もあそこまでデカくなると、もう人間やエルフには手も足も出せなくなるね。

そんな理由もあつてな、忌み子は大概は十五になると巡礼と称してガンビクの町に送られるんだよ。あそこは何故か忌み子が居ても焼かれないからな。」

「そうだったのか。俺、てっきり迷信かなんかがあるのかと思ってた。」

「ガンビクから遠い田舎の村じゃ、たしかに忌み子にまつわる迷信も多いな。病気や不作は全部忌み子のせいとされる。」

「だがな、巡礼中の忌み子を泊めたばかりにあの暴君に町ごと焼かれて、一晩で全滅した都市も実際あるんだ。嫌うなっていうのも無理な話だぜ。」

おっさんはそう言って、もう一度ルーを盗み見た。

彼女は一所懸命に火を起こし、鍋に水を張って食材を放り込んでいく。

水は貴重だったが、明日の昼には次の町に到着するので今日はすこ

し警沢をするつもりらしい。

……おっさんの食材だしな。夕飯が楽しみだ。

ルーを眺めながら、俺はこれからの事に思いを馳せる。

先ほどのおっさんの話からすると、おそらく”ミヨルニル”を  
持っている韻竜ってのは北の暴君とか呼ばれている奴だろう。

ノルンは言っていた。

お主が”ミヨルニル”にたどり着くためには力尽くでなく、  
その少女について行き韻竜と対峙しなければならん。

あの言葉は白い姿の忌み子と北の暴君の関係の事を指しているんだ。

このままルーについて行けばきっと何かしら道が開ける。

根拠のない考えだったが、その予感はある物として感じていた。

夕飯は刻んだ干し魚と堅いライ麦のパン、そしてミルクを鍋に入れて粥のようにした質素な物だった。

味は……当然、マズい。

この辺りの食材は基本塩漬けで、何もかもが塩からかった。

元々寒い地方だからなのだろう、携帯食やルーが作る料理の味付け自体もかなり塩気が濃い。

その証拠におっさんは旨い旨いと食っている所から、ルーはこのマズさであってもそれなりに料理が上手いのだろう。

単になんだかんだで貴族食に慣れきっていた俺の味覚がここでは場違いなんだ。

何よりガリガリと干し魚をかじって、岩のようなパンを冷たい水で適度な柔さに戻しながら食べるより

こうやって鍋で煮込んだ暖かい粥をすすする事は、確かに贅沢だと思えた。

しかしまさか召喚された当時にルイズから与えられていた、あの暖かい塩水クラスの飯がこっちでの常食になるとは夢にも思わなかったぜ。

……くすん、マルトー親父の飯が恋しいよっ。

「サイトさん？あの、お口に合いませんでした？」

「あ、ああ、違うんだ。」

「いっぱい食べてくださいね。もし余ったら見張りの夜食にしますから。」

ルーはそう言いながら、自分の椀に四杯目のお粥を注いだ。

どうやら彼女にとってはすごいご馳走らしい。

きっと忌み子として過ごして来たもんだから、ロクな物を食べてこなかったんだろうなあ。

鍋に目を落とすと、まだまだ大量に白い粥があった。

俺は味の事は忘れてとにかく沢山食べて、夜の見張りに備える事にした。

その夜。

二つの月が夜空に高く昇った頃、俺は目を覚ました。

ルーと見張りを交代するためだ。

俺たちは行商のおっさんの馬車を街道からすこし離れた見晴らしのいい草原の丘に移動させ、そこで野営をしていた。

護衛は俺が請け負った仕事なので、おっさんは見張りに参加しない。

しかし、流石に俺一人ですっと盗賊が襲ってこないか見張りを行う訳には行かず、ルーに少しだけ夜更かしをして貰っていた。

白子症<sup>アルビノ</sup>であるルーの赤い眼は、あまり良くない。

しかし月の光に照らされた草原を見張る程度なら、問題は無いらしい。

念のために俺はデルフを抜いてルーに持たせ、何かあったら呼んでくれと二人？に頼んで今まで仮眠を取っていたのだ。

俺はまだ眠い目をこすりながら、ルーの姿を探す。

彼女はデルフとなにやら話していたので、すぐに居場所はわかった。

「ルー？交代だ。」



「よ、相棒。」

「あ、サイトさん！もうそんな時間？もうちょっと位寝ててもいいですよ。」

「いや、もう十分だよ。」

「そう、ですか。」

ルーからデルフを受け取り、俺は彼女の隣に座った。

強い月の光の為に彼女が深く被るフードは、深い闇色となりその表情が見えない。

代りに月光を浴びている口元は何処までも白く、染みのような唇の朱が目を引いた。

「折角だから、すこし話して行っても良いですか？わたし、他人と気軽に話せるのって初めてだと思っから。」

「ああ。いいよ。」

「あの、ね？サイトさん。その、ずっと言いたかったんですけど…」

ルーはそう言ってモジモジとした。

その仕草は、年頃の女の子のそれだ。

「その、あの、ですね。行商のおじさんに『そんなの関係ねえよ』って言うてくれたじゃないですか？」

「あ？えっと、おっさんと初めて会った時？」

「そう。あの時、すごく、嬉しかったんです。その……ありがとう。」

「はは、気にすんな。友達だろ、俺たち。」

その言葉に彼女は口をぽかんと開けて両手を胸に当て、信じられないといった調子で端から見ても分るほど動揺する。

俺は二カッと笑って見せ、当たり前だろ？と続けた。

ルーはその言葉を嬉しそうにかみしめていたが、不意に俺に向き合っ  
つていつも深くかぶっている粗末なフードを外した。

月夜の下、白い髪が流れる。

彼女は癖の無い、とても長くキメの細かい髪の持ち主だった。

肩に掛かるかどうか位の長さの美しい髪がキラキラと月光を反射し、  
同じように白い頬が朱を指しながらも照らされている。

薄いピンクの唇は、不意に目に入ったその白い髪と肌に強調されバ  
ラのように赤く感じた。

そう、彼女は思わず息を飲むほど美しかった。

突然目の前に現れた予想外の美女に俺がどきまぎとしていると、彼女は俺の目と鼻の先に顔を近づけて来る。

「動かないで。」

そう言われ、俺は硬直する。

その言葉はまるで強制力のある魔法のような響きだった。

キ、キスでもするつもりか？

だめだ！俺にはルイズが居るんだぞ！

これ以上近寄られたら顔を背けるか、突き飛ばすかしくはなくてはい

彼女の吐息を唇に感じながら俺は目の前にある二つのルビーのような瞳を見つめ、顔を背ける機会を伺う。

少しの間の沈黙。

それから、ルーはゆっくりと顔を遠ざけていった。

「うん、コレでいいわ。サイトさん、ありがとう。」

「へ？一体……」

「うふふ、わたし眼が悪いでしょう？月明りだけじゃ見えにくいし。だから、初めてのお友達の顔をしっかりと覚えようと思って。」

「あ、ああ！そうね、そう言う事ね！はは、ははは。」

「……あのね、サイトさん。」

「はは、はは……ん？何、かな？」

「わたし、巡礼が終わっても帰る場所が無いんです。もし帰ると…  
…村ごと焼かれちゃうかもしれないから。」

「……うん、夕飯の前におっちゃんから聞いた。北の暴君、だっけ？そいつにやられるんだよね。」

「……ごめんなさい、黙ってて。」

ルーは悲しそうに頭を下げた。

今まで言い出せなかった事を後悔しているのだろう。

「いって。気にすんな。」

「でも、もしかしたらサイトさんがあの暴君に焼かれていたのかもしれないのに……」

「気にすんなよ。実際、まだルーは暴君に襲われる年じゃないんだろ？」

「それにだな、えっと前に”ミヨルニル”って物を探してるって話をしたろ？おれもルーを利用しようとしてるようなもんだしお互い様さ。」

「え、ええ。胡散臭い魔女さんに、わたしが手がかりだつて聞いていたんですよね？」

「そうそう。でき、もう一つあるんだよ。その意地悪な魔女に教えて貰ったことが、さ。」

「それはなんですか？」

「白い少女について行けば、”ミヨルニル” を持っている韻竜に会えるって。」

「そ、それって!?!」

「ああ、多分暴君だな。結構おつかないって話だけど、お陰で手がかりが手に入ったんだ。だからルーが謝らなくていいんだよ。」

「ダメです!」

そう叫んでルーは立ち上がった。

月を背にして立っている為かその表情は伺えない。

「ダメです。サイトさん、死んじゃう……」

「死にはしねえって。ほら、俺結構強いんだぜ？」

「ダメだったらダメですよ！相手はあの暴君ですよ？！いくらイーヴアルデイだからってそんな、無茶です！

大きな町も一瞬で火の海にしてしまう恐ろしい韻竜なんですよ？  
！」

「でもなあ。そいつから”ミヨルニル”を譲って貰うか奪うかしないと、俺帰れないんだ。」

「帰る？」

「ああ。俺さ、魔女と取引して、んー……呪い？病気？怪我？諸々を治して貰う代りに”ミヨルニル”を持ち帰る約束をしたんだよ。」



「そんな約束……破ってしまえばいいじゃないですか。」

絞り出すような声だった。

彼女と共に旅をしてきて、始めて聞くようなとても辛そうな声だった。

「はは、そうはいかない。俺を待っている奴が居るんだ。そいつを一生かけて守るって誓っているからな。」

「その人は、サイトさんの……」

「……ご主人様さ。我が儘で、傲慢で、意地っ張りで、強情で、泣き虫で、俺が……惚れている、な。」

俺はその言葉を口にしながら左手のルーンを眺めた。

彼女に刻まれた、絆と言うべきルーンを。

ルーンはしばらくは必死に何か言葉を探していたようだが、結局それ以上はなにも口にしなかった。

そんな彼女に俺は努めて明るく助け船を出す。

「ま、気にするなって。俺だって死ぬつもりはないんだ。それにさ、上手くいけば忌み子達は狙われなくて済むようになるかもしれないじゃないか。」

「……もう、冗談はやめてください。いくらわたしが忌み子だからって、そんな同情はいららないですよ。」

「へ？どうした？急に。」

「サイトさん、優しいからわたしが韻竜に怯えなくて済むように、嘘をついてくれているんだわ。でも、そんな見え透いた嘘はすぐにはれますよ？」

「だって、人間がああ暴君に敵うはずなんてないもの。」

「いや？俺本気なんだぜ？信じてくれよう、俺、結構強いんだってば。」

「……いいんです。あのね？サイトさん。優しい嘘をつくなら、ばれないようにしてね？そうでないと嘘をつかれた方は……すごく傷つくんです。」

わたしも寝ます。おやすみなさい！」

ルーはそう言って走り去った。

後に残された俺は、言いようのない罪悪感を胸に覚えて思わず左手を強く握りしめる。

「ふん、相棒も中々罪な男になっちまったな。ありゃ泣いてたぜ？」

デルフのその言葉に俺は何も言い返せなかった。

二つの月は天高く地を照らしている。

月光はなぜか得体の知れない罪悪感を強く意識させた。

その夜はそれ以上何も起こらなかったが、俺には旅を始めて最も辛い夜となった。



イーヴァルディはシオメントをはじめとする村のみんなに止められました。

村のみんなを苦しめていた領主の娘を助けに、竜の洞窟に向かおうとイーヴァルディが言ったからです。

(スノーリ・ストウルルソン著『イーヴァルディの勇者』より)

「まったく、おでれえたぜ！兄ちゃん、本当に ” イーヴァルディ ”  
” だつたんだな！」

気まずい夜から一夜明けて、俺たちは目的の町に到着していた。

最後の道中で噂とは無縁のオーク鬼達に襲われ、まだ胸にもやもやを抱える俺が八つ当たり気味に連中を斬り伏せる姿を見てから

おっちゃんはずっと興奮して俺を褒め称えていた。

「だから言ったじゃないですか！サイトさんはすごい」イーヴァルデイ” なんですよ！オグル鬼を素手でちぎってはなげ、ちぎってはなげ……」

「ルー、大げさになってるぞ？」

「ははは、謙遜はいけねえや！ほら、兄ちゃん報酬だ！色つけといたぜ？なに、いいもの見せて貰った礼だ！」

行商のおっちゃんはそう言って上機嫌で俺に金貨を数枚手渡し、別れ際にはにこやかに手を振りながら町の中へ入って行った。

俺はロシナンテが背負う筈の荷物を担いで、怠け者のロバに跨るルーに行こうかと声をかける。

町に入って一休みをする事は俺たちにはできない。

かといって町の入り口で休んでいても縁起が悪いと追い払われる事



が目に見えているので、とりあえず移動をするしかないのだった。

ルーは今朝から昨夜の事など無かったかのように俺に接してくれていて、今もにこやかに話しかけてくれる。

「サイトさん、この町の隣がガンビクだからもう一息ですよ。あと二日もあれば到着できると思います。」

「そうかぁ。この旅もやっと終わりが見えてきたな。」

「はい。これも護衛をしてくれたサイトさんのお陰です。」

ルーは少し寂しげに言った。

その言葉は俺自身に、この子との別れが近いのだと自覚させる。

寂しさを紛らわせようと、俺は少しだけ話題を変える事にした。

「なあ、ルー。巡礼つてそもそも何をするんだ？村には帰る事が出来ないんだろ？」

俺の問いにルーは黙り込む。

知らないのだろうか？

それとも、巡礼後の生活のあてが無いのだろうか？

「私たち忌み子は、巡礼を終えた後はガンビクの町から出る事を禁じられるんです。」

「暴君がやつてくるから？」

「はい。ガンビクの領主の元で皆働く事になると聞いているのですが……」

「が？」

「その領主の城から再び出て来る忌み子を、誰も見た者は居ないと噂されているんです。」

消え入るような声だった。

俺は思わずじゃあ巡礼なんて辞めるよ！と言ってルーに詰め寄る。

「ダメですよ。わたしが居ると、それだけであの韻竜が焼き払いに来てしまうんですよ？わたしはガンビクの町に行くしかないんです……」

「じゃ、せめて領主の世話になんかならないようにしないと……」

「サイトさん……体の弱いわたしが、忌み子のわたしが、何も知らない町に行つて何が出来ると言つんです？」

「それ、は……」

「体の弱いわたしは畑も耕せません。忌み子ですから給仕や仕立てもさせてはくれないでしょう。」

「後は体を売る？この痩せっばちの忌み子を買う男の人なんていやしませんよ。」

「サイトさん。始めからわたしには……ガンビクの領主様の所へ行くか、周りの人ごと韻竜に焼かれるかのどちらかしか選べないんですよ。」

「だったら！俺がその韻竜をどうにかしてやるよ！」

ルーはその言葉を聞いて、昨夜とは違い落ち着いた様子でゆっくりと首を振った。

深くかぶったフードのせいで表情は見えない。

「いいんです、サイトさん。」

「嘘じゃない！見てろ、必ず」

「やめてー！」

今度は強い調子でルーは俺の言葉を遮った。

わずかに見える口元はぎゅっと結ばれている。

そのピンクのかわいらしい唇は、わなわなと震えていた。

「嫌よ！初めてのお友達をそんな危険な事に……わたしの為にあの恐ろしい韻竜と戦うなんて絶対に嫌！」

「ルー……」

「サイトさん、わたしはいいの。お願いだから……」

なんとか絞り出したその言葉を残して、ルーはそれっきり喋らなくなった。

気まずい沈黙が続く。

そんな俺たちを見てか、ロシナンテが足を止めた。

その日はそれ以上進む事が出来なかった。

二日後。

俺とルーはほとんど喋る事もなく、気まずい関係を修復できないままとうとう城塞都市ガンビクへとたどり着いた。

遠目に見えるガンビクの町は高い壁に囲まれ、領主の城らしき背の高い建物の向こうには更に険しく高い岩山が見える。

やっと着いたな、と感慨深くまた少し寂しくその景色を見てみるといつものようにロシナンテが足を止めた。

ロシナンテはまるでその町へ向かう事を拒否するかのようになり、頑なに一步も動こうとはしない。

それ所か引き返そうとさえしている。

流石にこんな事は今まではなかった。

「もう、あと少しだというのに……ロシナンテ、お願いだから前に進んで。ね？」

ルーがいつものように優しくロシナンテに語りかけている。

ここ数日、ロシナンテの怠け癖は目も当てられないほど酷くなっていた。

しかし、後ずさりしたり引き返そうとはした事はない。

”怠ける”のならそんな非効率な事は絶対にしないのだから。

俺はここに来て初めて、その怠け癖がガンビクへと近づく程に酷くなっていた事に気がつく。

「ロシナンテ、お前まさか……」

「……」の子、とっても賢いから。」

「ルー、お前気がついてたのか？ロシナンテが……ルーを行かせまいとしていた事にさ。」

彼女は優しく微笑んでコクンと頷いた。

ロシナンテが悲しそうにヒー、ハーと鳴く。

「なあ、ルー。やっぱり……」

「サイトさん。その話はどうしようもないって説明したはずですよ？」

「でも俺、納得できねえよ。それにさ！どのみち俺は韻竜から  
ミヨルニル” を手に入れないといけないんだし。」



「……”ミヨルニル” という物があればサイトさんは帰れるんですか？その、待っている人の下に。」

「ん？ああ。約束だからな。心配すんなって！ついでに韻竜をとっちめてルーや他の忌み子達が、みんなと同じように暮らせるようにしてやるよ。」

俺の言葉にルーは無言でローブの中から首飾りを取り出した。

銀のチェーンと真鍮のような色のTの字を逆にしたような飾りが一つ付いているだけのシンプルな首飾りだ。

ルーはその首飾りを外して俺の首にかける。

ふわりと香る彼女の甘い体臭に、少しだけ心臓が早く動いた。

「これ、幸運の首飾りなんです。サイトさんにあげます。」

「あ、ああ。ありがとう。」

「お願い、サイトさん。約束してください。」

「ん？何をだ？言つとくけど、韻竜に会う事はあきらめないぞ？  
”ミヨルニル” 無いと帰れないし。」

「……韻竜に挑む前に、その魔女さんに会って欲しいんです。」

「何でまた？」

「その首飾りは記憶を無くす前から持っていた物で、村の祈禱師の方が言うには魔力を込めると魔法や韻竜の炎からですら身を守るそうなんです。」

きつと、わたしの本当の両親が忌み子であるわたしに持たせてくれていたんでしょう。」

「そんな！そんな大事な物、もらえないよ！」

首飾りを外そうとする俺を遮るように、ルーは突然抱きついて来ていいんですと耳元でささやく。

身長差があるので俺はルーの体当たりを受け止める形となっていたが、彼女の体は想像以上に軽く体勢を崩しはしなかった。

「いいですか？ サイトさん。 かならず韻竜……北の暴君に会う前にその魔女さんの所に行って下さいね？」

「……わかったよ。 黒猫を探せば会えるから、一緒にガンビクの町に入ったら黒猫を探して魔力を込めて貰う。」

「必ず、必ずですよ？」

「ああ、必ずだ。」

その言葉に安心したのか、彼女は腕をほどいて改めて俺の前に立った。

それから日中だというのにフードを脱いだ。

白い髪がざあ、と吹いた風に揺れている。

彼女は眩しいような、寂しいような笑顔で言った。

「サイトさん。わたしたち、ここでお別れしましょう。」

「なんだよ？町の中まで……領主の城までは送るぜ？」

彼女は微笑みながら首を振る。

その仕草は何度も見てきた筈だったが、とても強い意志を感じさせた。

「わたしね、ルーじゃなくて忌み子として旅を終えたいんです。それに……サイトさんに謝らなくちゃ。」

「俺に？」

「わたし、あの夜サイトさんが韻竜をやっつけてくれるって言った時、それが本気だってわかってたんです。なのに……」

「いいよ、信じてもらえないのも無理ないし。ほら、俺って見た目カラスにも負けそうだしな！ははっ」

「それと……初めて声をかけた時。あのね？わたし、サイトさんに……殺してもらおうって思ってた声をかけたの。」

「え？！なんでまた……」

「だって。忌み子としてたった一人で旅に出るなんて自殺行為だし、盗賊に襲われたら何をされるかわからないじゃないですか。

おじいさんとおばあさんも死んでしまっって、恐ろしい韻竜に狙われるし、ガンビクは遠いし。

……わたし、とても怖かったんです。

もう、生きていく事もイヤになっっていたんです。

だからせめて最後に誰かを助けて、『忌み子の飯を食べてしまった！こいつ、殺してやる！』って感じで斬ってくれればっていいやっと思っただけです。」

「そんな……俺、そんな無茶苦茶な奴に見えた？」

彼女はニッコリと笑って首を振った。

俺もつられてたははと笑う。

「サイトさん、とっても楽しかったです。ずっと、ずっとこのまま旅を続けたいって思うくらいに。」

「……俺も楽しかったよ。」

「だからね？その首飾りはルーとしてのわたしだと思って、持って行って欲しいんです。そうすれば、もっともっとルーはサイトさんと旅が出来るから。」

そして、ルーだった忌み子はここ城塞都市ガンビクの城で……サイトさんと同じ空を見て生きていこうと決めたんですよ。」

「ルー……」

「だから、ここでお別れ。ね？わたしの大事な、初めてのお友達。」

”イーヴァルディ”のサイトさん。」

ルーはそう言って、初めて幸せそうに満面の笑みを浮かべた。

頬を伝う一筋の涙と共に。

俺はその笑顔の前に、頷くことしか出来なかった。

彼女はフードをかぶり直し、あつけないほど簡単な別れの挨拶をそ  
てロシナンテに歩くよう促した。

ロシナンテは一声鳴くと、素直に足を進めてガンビクの町へ向かう。

ルーは別れ際に俺の方を向いてごめんねと言い残し、ロシナンテを  
連れてガンビクの町の中へと消えていつてしまった。

そして彼女を見送っていた俺には、大きな寂寥感とルーからもらっ  
た首飾りだけが残った。

「なんか、随分とあつけないもんだな。」

そう呟いて、俺はなんだか何もする気になれずその場に座りこんでしまっ。

そのまま暫くその場で呆けていると、周りが突然騒がしくなった。

何かと周囲を見渡すと、門兵やガンビクに出入りしていた農民や商人達が一斉に空を指さし始める。

俺も空を見上げると、大きな、とても大きな黒い竜が悠々と高い空を飛び領主の城の向こうにある岩山の方へ飛んで行く姿が見えた。

それが初めて見る ” 北の暴君 ” の姿だった。



城塞都市ガンビクはかなり特殊な町だ。

黒猫を探しながら韻竜とこの町について門兵や酒場のねーちゃんに話を聞いてみると、それが良くわかった。

まず、誰でも町の中に入れる。

普通なら他の都市の間者や得体の知れないゴロツキを町に入れないようにする為、通行証のような物を発行して厳しく門兵が取りしめるのだけどそれが無い。

この町は、忌み子だろうが盗賊だろうが誰でも自由に出入り出来る町だった。

その理由に領主の方針もあるのだろうが、安全保証上他の都市国家に襲われない保証がある事が大きい。

ここを攻め落とすと、忌み子の受け入れ先が無くなってしまっただ。

勿論生まれた忌み子を間引く事も考えたりもするのだろうが、白い髪は秘薬や薬草で簡単に染められるからか隠して育てる親も少ない。

過去、それでいくつもの村や町が暴君に焼き払われたそうだ。

だから他の都市国家の領主にしてみれば、隠して育てられ危険な目

に遭う位なら堂々と育てさせ

年頃になると巡礼と称して忌み子をこの都市へ送った方が安全だと言っわけだ。

それでも過去にこの都市へ攻撃をしようとした領主も居たらしいが、その度に ” 北の暴君 ” がやってきて進軍中の軍隊を丸ごと灰にしてしまうのだとか。

どうやらこの町とあの韻竜の間には何か繋がりがあるようだ。

忌み子を各地から集め、それでいて暴君に焼かれる所か町を守られるなんて絶対なんかある。

そう考えをまとめながら俺は町を歩く。

道は狭く、門に近い区域ほど薄汚れて治安が悪そうだったが活気はあった。

誰でも町の中に入れるという事が、様々な人を呼び商人達もそれを目当てに集まってくるからだろう。

そして、路地裏などにゴミもそれなりにたまる。

それを狙う野良猫、野良犬もまた……

「じらーまで！」

ふぎゃー！

「いてえ！引つ掻くな！……くそ、お前良く見たら茶色かよ！まったく、路地裏は暗いから良く見えねえな。」

シャー！

「わかった、わかったって！お前のエサなんてとりやしなってる！」

日も暮れかけた頃、俺は宿の裏、薄汚い民家が密集する路地裏を駆けずり回って黒猫を探していた。

まだ日が高い内から探していたが、案外黒猫というものは見つからない。

カラスならいくらでもいるんだがなあ……

そろそろ日も暮れるし、宿を取って明日また探そう。

肩を落とし、俺は町の奥の方にある宿屋に向かう事にした。

門の近くにも宿はあったが、あの辺りは今日初めてこの町に来た俺でも分るほどあまりに治安が悪い。

強盗など暴力で訴えてくる連中ならいいのだけど、スリや窃盗なんかはどんなに注意していてもこちらの上を行かれる場合がある。

今この状況でこの前稼いだこのお金（半分はルーにあげた）を失うわけにはいかん。

それに俺の懐には妻ルイズの手紙や治癒の秘薬を入れた、ルイズの手編みの小物入れがある。

これだけは絶対にスられるわけにはいかんからな！

そう意気込んで、すこし上等な商人が使う宿に部屋を取ったのだった。

あてがわれた部屋の扉を開けると、どつと疲れが襲ってきて俺はその場に膝をついてしまった。

別に昼間ずっと猫を追いかけて疲れていたわけではない。

原因は……

「遅かったのう、待ちくたびれたぞ。」

部屋の中央にしつらえられている、テーブルの上にちょこんと座っていた黒猫が原因だったのだ。

俺は静かに扉を閉め、半目で黒猫……ノルンを睨む。

「どっから入って来たんだよ。それに俺がここを借りる事をどうやって知ったんだ？」

「くく、わしは ” 時の魔女 ” じゃぞ？その位造作もないわ。」

「…………随分探したんだぜ？」

「ふむ。あそこの猫は薄汚いからのう、できれば体として使いたうはないのじゃ。ノミや寄生虫だらけの体を一度でもつこうてみい？たまらんぞ。」

次からはもっと綺麗な場所を探すがよい。黒猫という物は、わ

しに似て綺麗好きで高貴なのじゃ。」

ノルンはそう言って呵々と笑った。

相変わらず猫の体で表情豊かに話す。

「で、俺の前にお前から姿を現したってことは……用件を分っているんだろうな？」

「うむ。お前以上にな。いやあ、まさかこんなオチになるとはわしでも予想しておらなんだ。」

「ん？どういう事だ？」

「なんじゃ、気がついておらなんだか。ま、仕方ないのう。なにせお主はバカ正直のお人好しじゃしな。」

「一体何の事だよ！」

ノルンは呆れたようにため息をついて、とりあえず座れと言った。

俺はノルンが乗っかっているテーブルと一緒に置いてあった椅子にどっかと腰掛け、目線の高さが合った黒猫を睨む。

それを確認したノルンがよいか？と前置きをして話を続けた。

「忌み子とこの城塞都市、そして ” 北の暴君 ” の関係はお主が思う以上に根が深いのじゃ。」

とりあえずお主が知っている事を言ってみい？」

「北の暴君が忌み子を嫌って、村や町ごと焼き払う。んでこの都市は例外で忌み子もこの都市にやってくる。あと領主がうさんくさい。」

「それだけか？やれやれ、もっと色々と気かけようとか調べてみようとか思わなかったのか？」

「そんな事いってもさあ。ルーに根掘り葉掘り聞くわけにいかねえだろ。忌み子としてずっと蔑まれてきたんだぞ？」

「ふん、そんなんだから未だにルイズにヤキモチを焼かれるんじや。まったく、優しいというか間抜けと言うか……お主は冒険家にはなれん性分じやのう。」

器用に目を細め、ノルンは俺をジツトリと睨んだ。

その言葉に俺はいい知れない不安に襲われる。

何か間違ってしまったのか？ルーにもっと何かをしてやるべきだったのか？あの時、俺はルーに何か他の事を言っただけでやるべきだった？

「娘に貰った首飾りを出してここに置け。それが答えじゃ。」

俺は言われたとおりにルーから貰った首飾りを出してノルンの前に



置いた。

ノルンはその首飾りをくんくんと少し匂いをかいで、ふん！と鼻息を出し俺をまっすぐ見つめた。

そして、信じられない言葉を吐いた。

「随分と好かれたようじゃの。この首飾りが何かわかって……おらんよなあ。はあ。」

「なんだよ。お守りだろ？魔力を込めると随分と強力なマジックアイテムになるようだけど。」

「そんな”優しい”ものではないわ。これはな、お主が探しておった”ミヨルニル”じゃ。」

「へ？」

「お主の仕事は終わりだとゆうたんじゃ。まったく、こついうカラクリだったとはのう……流石のわしでも分らんかったわい。」

「どづいっ事だよ!」

「理解できんか?あの忌み子はお主を暴君のエサにせぬよう、その役目を投げ出したというわけじゃ。いや、中々どづいっして思い切った事をする。」

「なんだよ!役目って!」

「”ミヨルニル”を暴君から守る、という役目よ。」

どづいっ事だよ?

一体ルーは何を知っていたんだ?

”ミヨルニル”と暴君もなんか関係があるのか?

この時、頭の中に雷光のように思い出した言葉があった。

別れ際にルーが言った言葉。

”ごめんね”

あれは……あの意味は……

「まあ、考えても仕方なかる。何はともあれ、お主は役目を果たした。喜べ、これでルイズの元へ帰れるぞ？」

「まだ、だ。」

「む？」

「まだ、終わってねえ。教えて！一体どうなってるんだ！」

「なんじゃ。お主にはもう関係無い事じゃろうに。心配せんでも”ミヨルニル”は図らずもあの忌み子の望み通り、暴君の手の届かぬ場所へ安置される事になる。」

「そんな事はどうだっていい！ルーは、ルーは一体何を知っていたんだ?! どうして”ミヨルニル”なんか持っていたんだ?! 忌み子と暴君はどんな関係なんだ?!」

「ふん、疑問に思う事が遅すぎるのう。うむ、何もかも遅い。だから間抜けなのじゃ。」

「答える！」

嫌な予感を払拭しようとする様に、俺は声を荒げテーブルを叩いた。

ノルンは目を細め、口をいといと三日月のような形にして笑う。

その表情は残忍で、それでいて楽しそうな印象を受けた。

そう、まさに ” 魔女 ” のような笑いだ。

「知ってどうする？」

「ルーを助ける。」

「あの韻竜と戦う事になるぞ？年経たあの竜は、半端ではない強さじゃ。スクウエアメイジやエルフとは ” 桁違い ” じゃ。」

「最初からそのつもりだったろ？問題ない。」

「勝てると思うてるのか？」

「うるせえ！勝つんだよ！」　グリムニルの槍　「はそれが可能なんだろ？いいからさっさと話せ！」

ノルンは魔女の笑みを浮かべたまま、嬉しそうに言った。

「くく、だからお主はいい男なのじゃろうな。うむ、ルイズがベタ惚れしとるのもようわかる。いや、気に入ったよ。わしはお主のようなバカが大好きじゃ。」

因果を大きく動かすのはいつもお主やルイズのような身勝手なバカじゃ。その度に苦労させられるが……これが中々退屈せん。

いいじゃろう、教えてやろう。真実をのう。」

ノルンはひっぴと笑い、真実を話し始めた。

俺はその内容の理不尽さに怒り、もっと早く気付くべきだったと後悔し、黙っていたノルンを罵倒し、ルーの安否を頭を抱えて気にしながら聞いた。

そんな俺を見てノルンはずっと残忍に笑い楽しんでいた。

そしてすべてを知り、血相を変えて部屋を出て行くこうとしていた俺に魔女は言った。

「なんじゃ？話はまだ続くのじゃぞ？」

「もう十分だ！俺はルーを助けに行く！早く行かないと……」

「まったく、せっかちな奴じゃのう。」

その言葉を最後まで聞かず、俺は部屋を飛び出した。

ルーを救う為に。

魔女が最後まで勿体ぶっていた秘密を聞かずに。

後に残された黒猫は、心底楽しそうに誰もいない部屋で呟いた。

「くっく、なんと楽しい事か。本当に因果という物は良くできてお  
るのう。なあ、お主もそう思うよな？」イーヴァルディの勇者”

「よ。」





イーヴァルディは竜の洞窟の中に入っていききました。付き従うものではありませんでした。

たいまつのみかりに中に、コケに覆われた洞窟の壁が浮かび上がりました。

たくさんのコウモリが、松明のみかりに怯え、逃げ惑いました。

イーヴァルディは怖くて泣きそうになりました。

皆さんが、怖い洞窟にたった一人で取り残されてしまったことを想像してください。

どれほど恐ろしいことでしょう！

しかもこの先には、恐ろしい竜がひそんでいるのです！

でもイーヴァルディはくじけませんでした。

己に何度も、イーヴァルディは言い聞かせました。

「ぼくならできる。ぼくは何度も、いろんな人間を助けたじゃないか。今度だってできるぞ。」

「いいかイーヴァルディ。力があるのに、逃げ出すのは卑怯なことなんだ」

(スノーリ・ストウルルソン著『イーヴァルディの勇者』より)

それは、忌み子と韻竜の物語。

この地方で生まれるは白子症アルビノの子供は、そのすべてが女の子として生まれてくる。

ブリミル教が興るより遙か昔、彼女たちは ” 巫女 ” として土着の神に仕えていた。

白い子供たちは十五になると、神殿がある町へ送られそこで神器を守る仕事に就く事になる。

神殿では荒ぶる神とされていた韻竜と、その神を沈める神器 ” ミヨルニル ” が崇められていた。

ある時、この韻竜は考える。

” ミヨルニル ” さえその手に収めれば、我には何も恐れる物がなくなる。

何故力のある我が人などを守ってやらねばならない？

何故力のある我が人に気を遣っているのだ？

……そうだ。

すべては ” ミヨルニル ” が人の手にあるからだ。

これさえ我の手にあれば……

その韻竜の意志を察した巫女は、 ” ミヨルニル ” を持って逃げ出した。

韻竜は怒り、そして焦った。

もしかしたら人は ” ミヨルニル ” を手に自分を滅ぼしにくるのかもしれない。

韻竜はこの時、残された人々に要求した。

巫女を出せ。さもなくばすべて焼き払うぞ、と。

何も知らされていなかった人々は自分達を置いて逃げた巫女を恨み、  
韻竜の要求に応えた。

こうして巫女は忌み子となった。

当時の巫女は結局見つからず、以来韻竜の要求に従い生まれた白<sup>アル</sup>子<sup>症</sup>の子供は十五になるまで育てられ神殿に送られるようになった。

やがて時が経ち、神殿があった町は城塞都市ガンビクと呼ばれるよ  
うになり、荒ぶる神の韻竜は ” 北の暴君 ” として

今もこの地に君臨し続けている。

巫女が逃げ出してからしばらくして、ブリミル教が興り数百年が経  
った。

その間、ずっと罪なき憐れな少女は白い贄として暴君に捧げられ続  
けてきたのだ。

そして今日も一人の忌み子が、贄となるべく城塞都市ガンビクにや  
ってきた。

魔女は、忌み子と韻竜の物語を笑いながらそう語った。

人の愚かさをあざ笑うかのように、その醜さを慈しむように。

「ま、あの韻竜も流石に巫女を捜して、片っ端から人の町を焼く訳にもいかんかったと言う事じゃな。

奴にしてみればいつ追い詰められた人間が ” ミヨルニル ” を手に自分を殺しにくるかわからんからのう。

それよりも、 ” ミヨルニル ” を隠しもっておるであろう巫女を人間に差し出させてあわよくば……とでも思ったんじゃろ。」

「そんなの、さつさと他の人間に ” ミヨルニル ” を渡して韻竜を倒せば良かったじゃないか！」

「そう簡単にはいかん事情があるんじゃ。あの暴君や人間達は気付いておらなんだが、 ” ミヨルニル ” を使うには他にも特殊な道具が必要での。」

『ガンダールヴ』でもない限りそれ無しじゃなんも役にたたん。

巫女はそのことが露見しないよう、逃げたんじゃろつて。」

「でも、でもさ！生まれてくる忌み子達にはそんなの、関係ないじゃないか！」

「まあ、この地の人々にしてみれば ” 巫女を出せ ” と言われておるだけじゃからの。

大方当時の連中は生贄に出せと受け取ったんじゃろ。

” ミヨルニル ” の事は人間にも伏せられておったしの。

そういった物が風習となり年月を経て本義が失われるなんて良くある事じゃよ。

ほんに人というものは皆が愛を求めながらも、痛みと憎しみを振りまく難儀な生き物じゃて。」

「くそ、じゃあ今までここに来た忌み子は……ルーは」

「うむ、大方あの暴君のエサになるんじゃろうな。そして ” ミヨルニル ” が手に入るまでそれは続くこうて。

もつとも、 ” ミヨルニル ” が暴君の手に渡れば今度はこの辺りの人間がエサになるうがの。ひっひ、それも中々見物かもしれん。いままで忌み子にしてきた仕打ちが、そのまま自らに降りかかるのだからの。さぞ胸がすく光景じゃろうな。」

猫の姿をした魔女は、心底楽しそうに笑っていた。

俺はそんなノルンに苛ついて食ってかかる。

「てめえ、何が楽しい!」

「うむ?お主は楽しくないのか?

あの哀れな白い娘を己の保身の為に差し出し続けてきた者達が、  
相応の報いを受けるのじゃぞ?」

「そんなわけあるか!」

「ふむ。中々立派な心がけじゃのう。

その大層な慈悲は今まで斬った亜人や食った豚や牛、殺した羽虫  
にはむかんのか?」

「それ、は……」

「よいか?命に尊いも糞もないのじゃよ。皆、時の因果の中で結局  
どこかで何かを殺しながら生きていく。

そこには力と運命の差があるだけじゃ。

なに、お主にくだらん説教などくれてやるつもりは無いぞ。

ただの?

ありきたりに言えばわしとお主とでは価値観が違いすぎるのじゃ。永劫を生き、高い位階からなるべく世に交わらぬよう眺めるだけのわしと、世の因果に縛られて生を謳歌するお主とでは見る物が違う。

感じる空気すらちがう。わかるか？ん？

それはな、絶望的に価値観が違うということなんじゃよ。」

「く……」

「ま、お主も一度魔女として拷問にかけられたり、火あぶりにされたり、永劫の闇を彷徨ってみればすこしはわしに近づけるかもものう。いやいや、そうでなく快樂に身を任せ、何処までも心を墮としてみるのもまた一つの手じゃな。

うん？くく、そうじゃ。その体をもってすればそれも可能じゃのう。

その気になれば永遠の命も再現できるしの。

お主、ルイズからわしに ” 乗り換える ” なら考えてやらんでもないぞ？ふふっ、それも面白いかもしれん。」

魔女は、笑う。

悪魔のように。

俺はノルンの言う事には、なにも言い返せなかった。



こいつにとっての命の価値は、人も韻竜もオーク鬼も家畜もすべて等価値だと分ったからだ。

それでいて、人に肩入れをし、人を愛し、人を激しく憎んでいるのだとも。

目の前の黒猫はなんだか人間その物に思えて、俺は強く目を閉じて頭を振った。

……そうだ。

今はこんな事を議論している場合じゃない。

「わかったか？ああ、無理に理解してくれなくともよいぞ。

わしにとつては人の憎しみも愛情も等価値じゃ、受け入れられなければ好きなだけ罵倒するがよい。

遠慮はいらん、別に臍を曲げてここに置き去りにしたりはせんよ。ま、もし置き去りになつてもお主が死んだあの時までには生きられるから、数千年の時を過ごせばいずれルイズにも会えようがな。

くく、しかし残念じゃのう。

借り物の体でなければ殴らせてもやるし、激情にまかせての陵辱もさせてやったのに。」

「しねえよ、そんなこと。」

「そうか、それは残念じゃ。

お主のようなハナタレに、手取足取り快樂と苦痛を教えてやるのも中々楽しいんじゃないの。

……それにしても、どうしてあの忌み子がミヨルニルを持っておったんじゃないの？

知っておればいくらわしでも事前にお主に教えてやった物を。

まあこれは本人に聞いてみるとわからんが、恐らくはあの娘は逃げた巫女の直系かなんかなんじゃないの。

どれ、ちと調べてやるう。ふむ？ふーむ……ほほ、これはまた…

…」

場違いにも思える程暢気な魔女の様子に、俺は乱暴に椅子から立ち上がり部屋から出て行く事にした。

もうこれ以上この魔女に付き合いきれなかったからだ。

それにノルンの話が本当ならばルーが危ない。

早く助けに行かないと……

「なんじゃ？話はまだ続くのじゃぞ？」

「もう十分だ！俺はルーを助けに行く！早く行かないとルーが……」

「まったく、本当にせっかちな奴じゃのう。」

その言葉を最後まで聞かず、俺は部屋を飛び出した。

ルーを救う為に。

宿の外に出て、ルーンを輝かせ領主の城まで駆ける。

心は激しく震えていた。

あの白い娘を死なせてたまるかと胸が叫んでいた。

速く、速く、速くと震える心が叫び、体はその要求にどこまでも答える。

くねくねと曲がる道を走るのがまどろこしくて、上へ飛び民家や商家の屋根を城の方角へ一直線に走った。

橋を探す暇などあるかと、町に横たわる川を一息に飛び越す。

ルー。

今行く。

だから……

対岸へ着地した俺は、震える心が ” グリムニルの槍 ” から際限無く力を引き出していくのを感じとる。

顔を上げ、再び全力で駆けた。

石畳の道は城に向けてまっすぐ伸びている。

足を出す度に移動する速度が上がっていく。

駆ける。

ルーの身を案じる焦燥と、わき上がる力の高揚感に身を任せ兎に角足を動かした。

耳に聞こえる風切り音が大きくなり、視界が狭くなる。

やがて領主の城が見え、大きな城門が狭い視界に入った。

城へまっすぐ続く石畳を走りながら姿勢を低くして、地面に手のひらをこすらせるように当てる。

右手に意識を集中して、頭の中で一本の槍を想い描いた。

するとごりごりと音を立て、右手に少しずつ槍が出現していく。

出来上がった槍に目をやるとその穂先の向こうには、手を当てた場所から排水路のような小さな溝が石畳の地面にできているのが見えた。

槍は最初に作ったあの投擲用の短い物だ。

俺は右手に持つその槍を、迫る城門に思いきり投げつける。

巨大な門に対してたった一本の小さな投げ槍が一体なんの効果があるろうか。

しかしその時俺には ” それ ” ができるとわかっていた。

左手のルーンが、今の俺に出来ることを教えてくれる。

そして、槍は空気を激しく震わせながら城門を打ち砕かんと飛んで行く。

” ダブル ” を使った時のような雷鳴に似た音を立てて、槍は厚い扉と太い鉄の格子で出来た城門に当たった。

瞬間。

まるで積み木を蹴飛ばしたかのように、城門はあっさりと吹き飛んだ。

重厚な壁を造り出していた周りの巨大な花崗岩も、門と一緒にまるで紙細工のようにパラパラと宙に吹き飛び

重苦しい音を立てて城門の内へ降り注ぐ。

月下に立ち上る土煙。

その中に身を投じて、ルーの名を叫んだ。

何事かとわらわらと兵士達が集まってくる。

彼らを見捨て、何処だルーと再び叫んだ時だ。

遠くから聞き覚えのある口バの悲痛な鳴き声が聞こえた。

俺は迷わずその鳴き声がする方へ走る。

流石に高い塔が連立する城を飛び越せないで、城壁沿いに鳴き声が聞こえてくる城の裏手へ回った。

正面からは見えなかったが、城の後ろには背後にそびえる岩山へと続く道が麓の森をぬって延びていて

その道の奥からロバの鳴き声が聞こえていた。

道は細く両脇に朽ちかけた花崗岩の柱が奥へと導くかのように立ち並んでいる。

恐らく城内ではなく、この先にルーはいるのだろう。

走りながらそう判断して、その細い道を進んだ。

列柱が視界を流れ、城の後方にあつた岩山の切り立った崖が目の前に迫ってくる。

やがて崖の手前で視界が開け、広場のような場所に出た。

崖には竜も入れそうなほど大きな洞窟の入り口がぼつかりと開いており、その手前にはロシナンテと三人の男が立っている。

男の内二人は槍を携え、内一人が必死に動こうとしないロシナンテを引つ張っていた。

残る一人はスラリとして背は高く、豪華なローブを身に纏いロシナンテではなく洞窟の入り口の方を見ている。

「ロシナンテ！」

ヒー！ヒー！

ロバの名を叫び、その場に立ち止まる。

俺の声に男達が反応し、武装した二人がロープの男の前に立ちはだかり手にしていた槍を構えた。

「何者だ！」

「貴様！ いったい何処から……」

「ルーは、ルーは何処だ！」

「ルー？ あの忌み子の事か？」



俺の問いにローブの男が答える。

立ちはだかっていた兵士を押しつけ前に出て来る男を見て、俺は初めてその男がエルフだと気がついた。

この時代はまだ人とエルフはそれ程いがみ合っではいなかったのか？

そんな考えが、焦る頭によぎる。

「シオメント様！」

「よい。」

エルフは兵士達を制止して、俺をじっと見つめた。

長い金髪の髪に尖った耳、そして美しい青い瞳は神秘的な印象を受ける。

兵士の態度からそれなりの地位を持っているようだと思いつつも、ルーが居ないことに強く焦りを感じてもう一度彼女の名を口にした。

「ルーを、ルーを出せ！」

「君は一体どうやってここに来たのだ？」

「そんな事はどうでもいい！ルーは何処だ！」

「……この奥だ。ファフニル……北の暴君の下にいる。」

そう言つて、エルフは洞窟を見る。

俺は迷わず彼らを飛び越え、洞窟の中へと駆け込もうとした。

しかし跳躍しようとして地を蹴った時、見えない何かに襲われて猛烈な勢いで後方に吹き飛ばされてしまう。

とっさに体勢を立て直して着地し、片膝を立てて顔を上げる。

そして、何が起きた理解した。

デルフを抜き、俺に先住魔法を使って行く手を遮るエルフを強く睨む。

「邪魔をするな！」

「……君こそ、何をしようとしているのか分っているのか？」

「ルーを助ける。」

「だめだ。あの韻竜を刺激したくない。」

俺は片膝を立てた体勢のまま、右手を地に当てた。

ポコリと音を立てて、地面をえぐりながら城門を破壊したあの投げ槍が手の平の下に現れる。

それを握りながら立ち上がり、エルフに静かな声で要求した。

「そこを、どけ。」

低い声でそう言って、更に強く睨む。

エルフの先住魔法、  
”カウンター反射” はあらゆる魔法・物理攻撃を跳ね返してしまう。

確かに強力な魔法ではあるが、跳ね返せる力にも限度がある事は俺は知っていた。

先程破壊した城門の様子から、恐らくは ”グリムニルの槍” の投擲には抗えないはずだ。

ロシナンテを巻き込まないように立ち回る必要はあるが、カウンター反射を無効化できると知れば引いてくれるかもしれない。

それに、話し合っている暇などない。

ルーはすでに韻竜の下にいるのだ。

急がないと、ルーが……

俺は逸る心そのままに、デルフを強く握った。

デルフを握る左手のルーンは、激しく光輝いている。

一方、エルフは地面から槍を造り出した俺を見て目を開き驚いていた。

「その輝く左手は……聖者アヌビスの左手か！それに、大地から魔法も使わずに槍を造り出すなど……まさか君は」

「……そこを、どけ。」

エルフの言葉を遮り、先程と同じ言葉を繰り返した。

低くゆっくりとした言葉とは裏腹に、自身の心には焦りが満ちていく。

一刻でも早くルーを助け出さなければならぬという焦燥が、俺の体を支配していた。

こんな所でモタモタしているヒマなどない。

力尽くでもここを通り、洞窟の中へと入っていかねば。

冷たい空気がその場に満ちていく。

……よく知らない相手を殺したくはない。

しかしルーを助ける為に、俺は右手の槍を投げるつもりでいた。

絶対に助ける。

その思いが焦りを生み、そして強く心を震わせ自身を駆り立てる。

俺とエルフの間で緊張が膨らんでいく。

張り詰めた空気が弾けかけたその時、がさがさを近くの茂みから音がして聞き覚えのある声がある。その場に投げ込まれた。

「やれやれ、そう焦るでないわ。それでは勝てるものも勝てんぞ？  
本当にせつかちな奴じゃの。何、あの娘はまだ無事じゃやて。  
暴君はな、そのエルフが作る秘薬を贅に飲ませ”ミヨルニル”  
の行方を知っているかどうか聞いてから贅を食らうでな。」

緊迫するその場に間延びしたような、呆れたような、暢気な声が響

く。

不意にかけられた声の方角に俺たちは同時に首を向け見やる。

視線の先には茂みが暗く広がっており、列柱の陰となつて月光が届かず闇が濃かつた。

茂みはがさがさと音を立て草が揺れており、やがてその中から一匹の黒い子猫が現れた。

宿に居たはずのノルンだ。

先程見た猫とは違い、まだ子猫の姿だから恐らくはこの辺りにいた猫を体として間借りしたのだろう。

「くく、秘薬を常備せずそれを作る間の数日間贄の命を延ばしてやるとは。」

なかなか残酷な事をするではないか？のう、シオメント。」

「……魔女か。」

「久しぶりじゃの、お主には……数十年ぶりか？」

「この者はお前の手引きか？」

シオメントと呼ばれたエルフは、子猫を見て露骨に不快な表情を浮かべた。

どうやらノルンとは知り合いらしい。

いや、それよりも……

「本当かノルン！ルーは……まだ大丈夫なのか?!」

「うむ、多分の。暴君の目的は”ミヨルニル”じゃ。

何も聞かずにいきなり娘を躍り食いなどしまして。のう？シオメント。そうである？」

「……ああ、その通りだ。」



エルフのその肯定に俺は胸をなで下ろした。

体中を満たしていた焦燥感が一気に醒めていくのを感じて、右手の槍を手放す。

がらんと音を立てて地に転がり、暫くして槍は砂に変わってしまった。

ノルンはそんな俺をみてニヤリと笑う。

「聞いたである？領主がそう言うのだから間違いなかる。そう急かんでもあの贄はまだ無事じゃ。」

「領主?!このエルフがか?」

「ふん、ここらはまだ人とエルフは下らぬ争いをしておらんな。ここのような辺境ではエルフの領主など珍しくもないんじゃ。それよりシオメント、邪魔せんとこ奴を行かせてやれ。」

黒い子猫は威厳たっぷり俺の問いに答え、エルフに道を開けるよう促した。

その様子を見て、兵士二人は信じられない者を見るような目で俺とノルン、そして主であるエルフを見つめている。

……まあ、状況について来られないのもよく分るよ、うん。

まさかこんな状況で子猫が偉そうにしゃしゃり出て来て、領主と不審者の前で偉そうに話し始めるとはだれも予想できないもんな。

エルフの領主はそんな兵士二人に先に帰るよう指示を出し、俺の側に来てちょこんと座るノルンを見下ろしながら静かに口を開いた。

「まさか、この者がお前が言っていた ” 竜殺しの勇者 ” となる者なのか？とてもそうは見えないのだが……」

「ひっひ、随分な言い草じゃのう。折角約束通り ” 勇者 ” を連れてきたと言うのに。」

大丈夫じゃ、この者は唯一 ” グリムニルの槍 ” を従えさせる事ができる者じゃて。

あの、サハラを生み出した『大災厄』の原因をの。くく、エルフのお主ならこの意味がわかるう？」

「なっ」

シオメントは『大災厄』の原因と聞くや顔を真っ青にしてうるたえる。

まるで竜より恐ろしい魔物を見るかのような顔つきで俺を見つめ、悪夢を振り払おうとするように頭を振った。

ノルンはシオメントのその様子を見て、楽しそうに笑う。

他人の不幸を楽しむ悪魔のように。

「なんじゃ、その顔は。そもそも、お主が暴君をなんとか出来る者を連れてこいと言ったのじゃぞ？」

だからほれ、約束通り韻竜だろうがヴァリヤグだろうがエルフだろうが、誰の手にも負えん奴を連れてきてやったんじゃ。

ひっひ、それもとびきりお人好しの勇者を、な。

ほれほれ、もっと喜ばぬか。」

「し、しかし……」

「うむ？まだ何かあるのか？まったくこれだからエルフは心配性で  
いかなのじゃ。」

「言っただけじゃ、こ奴は唯一 ”グリムニルの槍” を使いこな  
せる者だとの。」

「この者が……本当に……」

「そうじゃ。少々せつかちで青臭いがの。」

何、もしこ奴があゝの暴君を倒せなんたら後は ”グリムニルの槍  
” を暴走させて、あゝの韻竜ごとこの辺りもサハラにしてしまえば  
良いんじゃない。

ひっひ、ここらが焦土になるのも砂漠になるのも一緒であろう？  
あゝの暴君が居なくなればそれ以上の害は起こるまいて。」

……なんかとんでもねえことを言ってるな、こいつ。

俺は魔女がこれ以上物騒な事を口にしないよう、会話に割ってはい  
ることにした。

変に心変わりでもされて、確実に暴君を倒す為だとか言いながら知  
らない内に特攻兵器にでもされてはかなわないからな。

こいつならやりかねん。

「ノルン、一体どういう事なんだ？その……この領主とは知り合  
いだったのか？」

「なに、元々はこのシオメントから北の暴君を何とかするよう頼ま  
れておったのじゃ。

”ミヨルニル” を扱う為の秘宝と引き替えにの。

ふふん、これなら ”ミヨルニル” と一緒にそれを扱う秘宝も  
封印できるんじゃない。中々良い手じゃろ？」

「それで俺を……」

「そういうことじゃな。『ガンダールヴ』のルーンを二つ持つ人間  
なんぞ、一つの時代を探しても居りはせんしいう。

それこそ時を駆けずり回ってやっとお主一人が見つけられる程じ  
ゃ。」

「すこし、いいか？」

俺とノルンの会話に、今度はシオメントが割って入って来た。

「君は……その輝く左手は……本当に聖者アヌビスなのか？」

「聖者アヌビス？」

「エルフはガンダールヴの事をそう呼んでおるのじゃ。英雄の代名詞みたいなものかの。」

「……聖者アヌビスってのがガンダールヴの事を指すならそうだ。」

「たとえ聖者アヌビスと云えど、あの暴君には勝てるかどうか分らない。」

「それでも君は本気である竜と対峙するつもりなのか？」

その問いに、無言で頷く。

続けてシオメントは何故だ？と問いかけてきた。

「ルーを助ける為だ。」

「しかし何故そこまでしてあの娘を君が助けなければならぬのだ？」

「そんなの、決まってる。」

俺は胸を張って答える。

この時、心にあのピンクブロンドのご主人様の姿が浮かんでいた。

その、誇り高い姿が。

「俺の主人は貴族だ。このまま帰って、胸を張ってあいつの顔を真っ直ぐ見れるかよ。」

いいか？力があるのに、逃げ出すのは卑怯なことなんだ。俺には力がある。

そして、ルーには恩がある。

あいつは俺の事を大事なお友達とも言った。

そのルーがその洞窟の奥で俺の助けを待ってる。

だったら、助けに行くしかねえだろう？」

淀みない俺の返答にノルンはくつくつと笑い、本当にいい男じゃのうと茶化す。

シオメントは意外そうな表情を浮かべた。

「ノルンが連れてきた ” グリムニルの槍 ” を操る聖者アヌビスとは如何な人間かと思っただが……

いや、君は中々の人物だな。あの恐ろしい暴君にただ友の為に挑むとは……」

「ふん、敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶんだ。お前も領主をやってるんなら覚えとけ。」



「くく、シオメント、わしの言ったとおりじゃろ？こやつは本当にせつかちで青臭くて、いい男じゃ。」

ほれ、さっさと道を開けぬか。美姫を竜から助ける事が昔から勇者の仕事じゃからのう。

邪魔するのは野暮というものじゃ。」

ノルンの言葉にシオメントは苦笑を浮かべて洞窟への道を開けた。

俺は彼を一別してから無言で洞窟へと走る。

後には口バと人語を喋る子猫、そしてエルフが残された。

「魔女よ。」

「ん？なんじゃ？」

「彼は……大丈夫なのか？」

「ふん、当たり前じゃ。韻竜ごときがアレを滅ぼせるなら、サハラ

なぞ始めからできんわ。」

「そうか。では、城で彼らの帰りを待つとしよう。宴の用意をしてな。」

「ああ、待て。」

「なんだ？」

口バを引き、城へ戻ろうとしたエルフを子猫が制止した。

ノルンの深刻な様子にシオメントは眉根を寄せる。

「お前の部下に櫛を持たせて、川向こうの宿によこせ。」

その黒猫のノミをとってやらんとならん。当然、この子猫はお主が取るんじゃないぞ？

まったくあのせつかちめ、折角櫛を渡したというのにノミの一匹も取らずすぐに飛び出して行きおる。」

エルフはその言葉に再び苦笑をうかべ、了承したと言って子猫を抱き上げた。

そんな彼を笑うかのようにロバがヒー！ハー！と鳴く。

「ふふふ、楽しみじやのう。お主も中々ノミ取りが上手いからのう。ああ、年甲斐もなくときめくわい。くく、あの韻竜を倒して帰って来たらあの坊主にもノミとりをさせてや……あああああ！……！」

「どづした？」

「わ、忘れておった。」

「何をだ？」

「いや、の？韻竜の事を伝えるつもりじゃったんじゃ。……まあ、よいか。どのみち知ることになるんじゃないの。」

「大事な事なのではないのか？」

「なに、勝敗には影響はせんよ。ほれ、行くぞ。そんなことよりもノミ取りじゃ。」

抱える子猫の傲慢な物言いにため息を付きながら、エルフはロバを連れてとぼとぼと城へ戻って行くのだった。

そんなやりとりがあったと、後日俺はノミを取りながら聞く羽目になる。

黒猫が発するやたら艶っぽい女の嬌声を聞きながら。



力があるのに、逃げ出すのは卑怯なことなんだ。

あのエルフの領主に向かって啖呵を切った時、思わずその言葉が出ていた。

なんだかとても馴染みがあったような言葉だったが、今は思い出す事ができない。

多分消えちまった記憶の中に答えがあるんだろうな、ととりあえずは納得して

暗い洞窟を左手のルーンの強い輝きを頼りに奥へ奥へと駆ける。

この時、頭に思い浮かんでいたのは別れ際にルーが見せた笑顔と”ごめんね”の一言。

そして涙。

恐らくはあの時首飾りが ” ミヨルニル ” だとルーは気がついていたんだろう。

何故、彼女が ” ミヨルニル ” を持っていたのかわからない。

何故、神器を守る役目を持ちながら忌み子としてここまで旅をしたのかもわからない。

だけど、バカな俺にもわかる事がある。

彼女は俺の事を ” 大切なお友達 ” と言った。

ルーは俺は韻竜と戦わずに済むように、神器を守るといっ役目を放り出してくれた。

大事な神器を誰に渡すかもハッキリしない俺に、理由も聞かず ” ミヨルニル ” をくれたのだ。

俺の為に。

そう考えて、デルフを強く握る。

呼応するように左手のルーンの輝きが強くなり、洞窟を更に強く照らした。

「まってる、ルー。」

そう呟いて走る足を更に早める。

奥からごう、ごう、と風が吹き抜ける音に混じって風切り音が強く耳に響く。

闇に染まっている洞窟内を眩いルーンの光が俺を先導した。

不意に視界が開け、上から光が落ちてきて足を止める。

とても広く、明るい大きな空間が目の前に広がっていた。

その広場はトリスタニアの城が丸々収まってまだ余るであろう程広く、天井からは強い月の光が差し込んでいる。

見上げると大きな穴が開いていて、二つの月の姿が見えた。

恐らく暴君はあの穴からここへ降り立っているのだろう。

床には石畳が敷き詰められ、森の中で見かけた列柱がその広場とも言える大きな空間の壁際に沿い建っている。

月光が差し込む巨大な広場の奥には、闇がどこまでも広がっていた。



……月光が差し込んでいるのに闇が広がっている？

その異変に気が付いた時、俺は言葉を失う。

闇だと思っていた物は大きな、とても大きなナニカの影だった。

洞窟の奥から吹き抜けていく風の音は、目の前の影が発する呼吸音だと気が付く。

巨大な体躯を覆う鱗はわずかに月光を反射し、まるで黒鋼のようだ。不意に頭上の月光が遮られ、視線をずっと上に向けるとそこには巨大な鎌首をもたげた竜の頭が見えた。

口の端からはちろちろとまるで蛇の舌のように炎が漏れ出し、その光が一对の黄金の眼を闇の中に光らせている。

これが、暴君……と理解するよりも早く、その黄金の双眸と目があった。

瞬間、造り物の背中には冷や汗がとめどなく溢れ、喉が一気にカラカラになる。

息が出来なくなるほどの強烈な圧迫感と恐怖の為、足がすくみ体が知らず震えていた。

殺される。

この時の俺の思考は、それだけだった。

今までに修羅場はそれなりにくぐってきたつもりだ。

七万の軍勢に死を覚悟して一人で突っ込んだ事もある。

しかし目の前の恐怖その物に対しては、今までのどんな経験も役に立たなかった。

俺はただただ本能から来る怖いという感情に体が支配され、蛇に睨まれた蛙のように動く事も出来ずにいた。

それほど暴君は大きく、暗く、圧倒的なまでの威圧感でそこにあった。

「小さきものよ。立ち去れ。ここはお前が来る場所ではない」

地の底より響いてくるかのような低く、大きな声を暴君が発する。

体の震えが一層激しくなる。

怖い。

怖い怖い怖い。

逃げ出したい。

ここから今すぐに立ち去りたい。

歯の根が合わず、カチカチと鳴らしながら暴君の眼から視線を外せずに立ち竦む。

「  
！  
おい、相棒！ 聞こえているのか！ しっかりしろ  
！」

デルフの声に俺は金縛りが解け、やっとの思いで口を開いた。

しかし、恐怖は依然と体を支配している。

「あ、ああ」

「頼むぜ相棒。さっきまでの威勢はどうしたんだ？」

「はは、まったく情けねえ。アレみて竦んでしまった……」

「相棒、そりゃしょうがねえよ。これだけの韻竜なんざ俺だって初めて見らあ。」

「だがな、こいつぶっ飛ばしてあの白いお嬢ちゃん助けるんだろ？」

「シヤンとしろよ、相棒！」

その言葉に再び我を取り戻した。

「そうだ、俺は何をしているんだ！」

「ルーを助ける為にここに来たんじゃないか！」

なのに相手を見ただけで恐怖のあまり逃げだそうだと考えるなんて

……

恐怖をなんとか押しつけ、再び闘志に火をつけ逸らせなかった視線に力を込める。

「さんきゅ、デルフ」

「いって事よ。だが……本当にアレとやり合つのか？」

「場合によってはな。話してわかるならそうしたい」

「分りそうにねえよな……はあ、短いときあいだったが楽しかったぜ、相棒」

「うっせ。やってみなくちゃわかんねえだろ」

「さっきまでガタガタ震えていた奴が何言ってるんだ？」

デルフと軽口を叩く内に、胸の内に灯った闘志が再び大きく膨らんでいく。

相手の強大な威圧感に飲まれていた心は、徐々に元に戻りつつあった。

「聞こえなかったか？ 小さきものよ。立ち去れ。ここはお前が来る場所ではない」

再び地の底より響いてくるかのような大きな声が出た。

先程よりも更に低く威圧的ではあったが、今度は体の震えは大きくならなかった。

歯を食いしばり、闇に光る黄金の双眸を睨んで俺は叫ぶ。

「ルーを返せ！」

「ルー？ あの忌み子の事か？」

「そつだ！」

「それは無理だ。なにせ、やっと見つけた ” 巫女 ” なのだ。ブリュンヒルトは返すわけにはいかぬ」

「ブリュンヒルト？」

「うん？ 小さきものよ、お前は巫女の真の名も知らずにここへ来たのか？」

「うるせえ！お前がルーを食っちゃまう事くらいはわかる！」

フーケのゴーレムを遙かに凌ぐ大きさの韻竜は、その言葉にニィと口を裂いて笑って見せた。

口中から漏れていた炎が更に大きく吹き出し、ズラリと並んだ白い剣のような歯が見える。

「ふふふ、アレを食うかはともかく確かに聞き出す事を聞き出せば命は貰う。」

今度こそ本物のブリュンヒルドであって欲しいが、はて……」

くつくつと巨大な闇は笑った。

その楽しげな様子とは裏腹に威圧感が増し、恐怖を伴う圧迫感が強く俺へと叩きつけられてくる。

闘志は取り戻しはしたものの、体の震えはまだ止まらない。

暴君から視線を外す事ができない。

本能が恐怖に負け、早く逃げ出すよう訴えてくる。

それでも俺は体中から勇気を集めて、もう一度暴君に要求した。

「ルーを返せ！」

「ふむ、随分とブリュンヒルドに執心しているな。もしかして、あの娘はお前の妻となっていたのか？」



「違う」

「では、お前とどのような関係があるのだ？」

「真の名も知らぬ、妻でもない者を取り戻す為にわざわざここへ来るなど……」

暴君の言葉に俺は思い出す。

彼女の笑顔を。

その言葉を。

ルーがこの後どうなるのかを。

彼女は、この恐ろしい韻竜にたった一人で対峙したんだ。

「ルーも、”グリムニルの槍”も何も身を守る物は持たず、たった一人で。」

なのに今の俺のこのザマはなんだ？

メイジやエルフを凌ぐ力を持っていながら、あれほどの啖呵を切りながらこのザマはなんだ？

そう思うと体の震えが小さくなっていき、今度は落ち着いて暴君の

問いに答える事ができた。

「ルーは……俺の友達だ。」

「それだけか？」

それだけか？

それだけで俺はこんな化け物と戦おうとしているのか？

俺は再び恐怖に体と思考が支配されないよう、他の理由があればと  
考えを巡らせる。

そして、もう一つだけ見つける事ができた。

とても小さな恩を。

目の前の恐怖に立ち向かうには、あまりに小さな恩。

友情の他にこれを理由を挙げるにしても、あまりにバカバカしい内  
容だ。

でも何故だろう？

恐怖が薄れていく。

わずかに残る体の震えが収まっっていく。

力が湧いてくる。

こんな下らない、こじつけのような理由に。

心が再び震えていく。

小さくなっていたルーンの輝きが、再び強くなっっていく。

「……ルーには恩がある。」

「ほづ？命をかける程の恩とは一体なんだ？」

……俺、こんな状況で何言おうとしてんだろ。

ホント、恐怖のあまり頭がどうかしてしまったんだろうか？

なんだか可笑しくて、笑みがこみ上げてきた。

心が激しく震える。

戦える。

この恐怖と、この暴君と俺は戦う事が出来る。

場違いなニヤケ顔を造りながら、俺は答えた。

「パンだ。」

「パン？」

「パンを食わせてもらった。」

不意にあれほど強烈だった圧迫感と殺意が消え去る。

暴君は絶句していた。

デルフはカタカタと震え、おもしれえと呟いて楽しそうに笑っている。

「……………それでお前は命を捨てるのか？」

「ああ、それで俺は命を賭けて戦うんだ」

俺はニヤリと笑ってデルフを構えた。

体の震えは止まり、恐怖はすべて消え去っていた。

暴君は凄まじい咆吼を上げ、炎のプレスを俺に向かって吐く。

恐ろしいまでの火炎が視界一杯に広がった。

どうやらあの韻竜は、これ以上話しをする気は無いらしい。

迫る炎を避けようと慌てて横に走る。

しかし炎を吐く韻竜は確実に愚かな人間を焼くべく、頭を振って逃げる俺にその猛烈なブレスをけしかけた。

壁際を高速で駆ける俺の直ぐ後ろに炎が迫り、その勢いで列柱が次々と倒壊する音が洞窟に響く。

「あ、相棒！ やべえぞ！」

「うるせえ！ 黙ってる！」

慌てるデルフに声をかけながら、必死に炎から逃げるべく壁際を走った。

暴君のようなデカイ相手には、足下に飛び込んだでの回避が有効だと経験上知っていたが

あえて大回りになってしまふ壁際の旋回回避を行うには理由がある。走りながら手を壁に当て、前に何度かやったように槍をイメージする。

ポコポコと音が手元から後方に流れ、槍が手中に現れた。

槍は短槍ではなく、軍などで使われる長槍だ。

隙を見てこいつを暴君にお見舞いしてやる！ と考えていると、ブレスが不意に止んだ。

流石の韻竜も息継ぎが必要らしい。

その機を逃がさず、渾身の力を込め槍を投擲しようと思えた時だ。

「相棒！」

「がっ！」

突然、目の前が真っ暗になった。

暴君はブレスで俺を追い立てながら、反対方向からその尾を振っていたようだ。

巨大な韻竜の尾は体長の半分程もあり、何千年も生きてきた樹木よ

りも太い。

その尾が極悪な勢いで列柱をなぎ倒しながら俺へと振られていた。

槍を投擲しようとしていた俺はそれをモロに受け、まるで埃を吹くような勢いで宙を舞いむき出しの岩壁に叩きつけられる。

ボギボギと嫌な音が体中から聞こえ、激痛を感じる間もなく地に叩きつけられる。

声にならない悲鳴を上げ、なんとか顔を上げ暴君を見ると今度は大きな岩がいくつもその周りに浮いていた。

韻竜の操る先住魔法だろう。

「おい、やべえぞ相棒！さっさと起きろ！」

デルフの言葉を合図にしたかのようなタイミングで、その大量の岩が俺へと向かって降り注ぐ。

慌てて立ち上がり、尾の一撃を受けても手放さなかった槍をその岩目掛けて投擲した。



槍は轟音と共に飛んでくる岩を粉碎しながら飛んだが、韻竜の手前で鈍い音を立てて弾かれる。

どうやらあの韻竜は ” 反射 ”<sup>カウンター</sup> まで張っているらしい。

あの堅そうな鱗を持っているというのに、まったくえげつねえ……

あの体躯、ブレス、先住魔法と来て一体どうやって倒せって言うんだよくそつたれ。

そうごちた頃、全身に激痛が襲ってきた。

先程のダメージの痛みが今頃自覚症状となって襲い来たようだ。

もともと、本来なら槍を投げる所か立ち上がる事も不可能なダメージの筈だがこうやって動けるのは

グリムニルの槍の再生能力のお陰なのだろう。

……  
どうせなら痛みも感じない様にしてほしかったぜ、あの性悪魔女め

激痛に耐えかね、片膝をつく俺に暴君は口を開け炎を ” 溜めた。

”  
そのゾロリと長剣のような歯が並ぶ裂けた口の前に火球が現れて、まるで風船のようにみるみる膨らんでいく。

まずい！

今の状態じゃ ”アレ” は避けられない！

慌てて迎撃の為に槍を作ろうと地に手を当てるが、何も起こらない。

どうやらグリムニルの槍は体の再生を優先させているらしい。

焦る俺の視線の先で、火球はさらに大きくなっていく。

さながら太陽の様に燃えさかり、その炎の光は月光を打ち消し広い洞窟を照らしていた。

歯がみをしながらデルフを杖にして立ち上がるが、激痛はいまだ無くない。

とてもじゃないがああ火球を避ける事など出来そうになかった。

「くそ、何か……何か方法はないか！」

「うっむ……相棒、ちょっと思ったんだが……」

「なんだ！？ デルフ！ 何か案があるのか?!」

「いや、”アレ” な？ 韻竜のプレスだよな？」

「そんなもん、見りゃわかるだろうが！」

「いやな？ さっきと違うよな？」

「何が！」

更に大きくなり火球を見ながら暢気な物言いのデルフにいらつき、思わず怒鳴る。

デルフは俺の苛つきを無視するかのように話を続けた。

「さっきのはフーって吐くようなプレスで、”アレ” は火球のようになめ込んで打ち出すようなプレスだろう？」

「だから、それがどうしたって言うんだよ！」

「いや、アレってもしかして魔法なんじゃねえか？ もしそうなら俺が何とか出来るかもしれないぞ？」

「ほんとか?! デルフ！」

「ああ、流石にあんなデカイもんを吸収するのは無理だが、弾く位はなんとか……」

「よ、よし……」

よろけながらも立ち上がり、デルフを正面に構える。

それと同時に暴君は咆吼を上げ、巨大な火球を俺に向けて放った。

恐ろしい音を立てて太陽のような炎の塊は、俺だけでなく全てを焼き尽くさんといった勢いで迫る。

デルフを上段から火球に向けて思いっきり叩きつけると、轟と音を立てて火球はその場に止まった。

俺はデルフを火球に斬りつける体勢で、炎を押しとどめている。

しかし炎の勢いの方が強く、徐々に手元から焼かれ体も後方に押されていった。

じりじりと後ろに押される体を支え、手を炎に焼かれながらも必死にデルフを握りしめる。

「じ、のおお！」

渾身の力を込めて炎を支えてはいたが、ついには勢いに負けて後方にはじき飛ばされてしまった。

幸い火球は軌道をそらされ、無様に尻餅をつく俺の真上に飛んで行く。

それから広場の天井に当たり、凄まじい音を立てて洞窟を揺らした。

魔法か何かで堅い岩盤をくり抜いた洞窟なのだろう、落盤は起こらなかつたが

よろよろと立ち上がろうとする俺へ、天井から大小の石が降り注いだ。

火傷の痛みで痺れる腕と先頃岩の壁に叩きつけられ痛む体に鞭打つて、必死に地を這って逃げたが

人の頭ほどもある岩に背中を強打され、思わず呻く。

「相棒！しっかりしろ！」

「か、は……………」

「次が来るぞ！」

デルフの焦ったような叫びに暴君を見ると、再びあの火球を造り出している姿が見えた。

だめだ、体が動かない。

ちくしょう、ここまでなの……………か？……………

「相棒！ あきらめるな！」

「デル、フ……もう、体が……」

困難になった呼吸の合間に絞り出した言葉は、絶望だった。

グリムニルの槍の効果か、手に負った火傷や全身の痛みは徐々には回復しつつあった。

が、あの火球を避けられるようになる程の回復は間に合いそうにない。

「相棒！ そりゃねえぞ！ あの白い嬢ちゃんを助けるんだろっつが！」

「ル……」

白い少女の笑顔が浮かぶ。

俺はまだ赤く火傷が残る左手でデルフを強く握りしめ、必死に体を起こす。

「そうだ相棒！ あの嬢ちゃんを助けて、ご主人様の所に帰るんだろっが！」

「ル、イズ……」

今度はあのご主人様の、不機嫌そうな顔が浮かんだ。

そうだ。

ルーだけじゃない。

俺が帰らないと、あいつは……ルイズは死んでしまいかもしれないじゃないか！



こんな所で寝ている場合じゃねえ！

歯を食いしばり、死力を振り絞って立ち上がる。

暴君が作り出している火球は、先程よりも更に大きく膨らんでいる。

「そつだ！ 思い出せ相棒、心を震わせるんだ！」

「俺は……ルーを助け出す。」

デルフの叱咤を聞きながら、俺は目的を自分に言い聞かせるように呟いた。

韻竜は咆吼を上げる。

先程よりもさらに巨大な火球が猛然と迫ってくる。

だが恐怖も絶望も今は感じない。

もう一度火球にデルフを叩きつける。

先程と同じように火球は俺が支える形で静止し、押しつぶし燃やし  
尽くさんと少しずつ轟炎は体を焼いた。

「俺は……」

じりじりと体ごと後退していく。

デルフが焦ってもっと心を震わせるんだと叫んでいた。

この時、頭に思い浮かべていたのはあのピンクブロンドの少女の顔。

その顔が笑顔に変わると、心が激しく震えた。

左手のルーンが強く、激しく光る。

火球の照らす光をルーンの眩い白光が飲み込んだ。

「俺は……」

「相棒！」

「俺は、ルイズの元に帰るんだあ！」

瞬間、ルーンの光がデルフに集まり火球を支えていた全身が軽くなつた。

いや、それだけでなく全身の痛みも消え去っている。

勢いに任せデルフを振るうと火球は暴君へと飛んで行き、  
” 反射カウンター  
を突き破り黒い巨体を焼いた。

ウオオオオオ！と凄まじい絶叫が洞窟に響く。

俺はその機を逃さず暴君へと駆けた。

体が羽根のように軽い。

イメージが体の動きに付いていかない。

自身のとんでもなく速い動きに戸惑う暇もなく、俺は姿勢を低くして手に槍を造り出す。

作ったのは騎士が使う突撃用の円錐型の物だ。

走りながら炎に包まれ苦しむ韻竜にむかって、ありったけの力を込めて槍を投擲する。

それに気が付いた韻竜は再び ” 反射 ” カウンター を張ろうとしたが間に合わなかった。

一筋の光のように槍は韻竜の胸へと飛んで行き、なにかが爆発したかのような音を立てて黒鋼の鱗を貫いた。

暴君にしてみれば針のような大きさの槍だったが、その威力は尋常なものではなく胸にポツカリと大きな穴が開き滝のように血が吹き出た。

さらなる絶叫が洞窟に響き渡る。

槍を投げて足も止めず暴君へと駆けていた俺は、肉薄した韻竜の頭へと飛び移る。

宙を飛ぶ俺へ暴君が小さな火球を吐いたが、デルフでそれを弾く。

そのまま巨大な韻竜の頭に着地し、振り落される前に眉間に向けて渾身の力を込めデルフを突き立てた。

三度目の絶叫と共に暴君は激しく暴れる。

所かまわず火球を吐き、その尾で洞窟内の壁、床、天井とかまわず打ち付けた。

俺は兎に角振り落されないように、突き立てたデルフの柄にしがみついでこのおと叫ぶ。

やがて暴君は四度目の咆吼を上げると、そのまま轟音を立てて地に倒れ伏した。

その衝撃で地に投げ出され、したたかに背中を打ち呻く。

「や、やったか?!」

慌てて立ち上がり、暴君を見ると倒れた姿勢のままピクリとも動かない。

どうやらなんとか倒せたらしい。

静寂を取り戻した洞窟の中、勝利の喜びは不思議と湧いてはこなかった。

ゆっくりと韻竜の頭に近寄り、突き立てたままとなっていたデルフを引き抜いて辺りを見渡す。

暴君が暴れた為か、俺が来た道は完全に岩で埋まってしまっていた。

安堵した俺は思わずその場にへたり込む。

グリムニルの槍の効果か、全身の痛みや腕に負っていた火傷は綺麗に無くなっていた。

「……相棒、とうとうやったな！」

「ああ。なあ、デルフ。お前平気か？ 結構無茶な使い方したと思うんだけど」

「ふん、これくらいどって事ねえって。あの炎全部吸い取れっつてい  
うんなら唯じゃ済まなかっただろうが……」

「はは、お前碎けてしまいそうだな。俺もあんなでっかい火球  
なんて初めて見たぜ」

「俺もだ。六千年生きててあんなでっけえ炎浴びせられるのは初めてだ。

もつとも、あんな化けもんに打ち勝つ使い手なんてのも初めてだ  
がな！ わはは」

そう言って笑うデルフに釣られ、俺も笑った。

ひとしきり笑った後、立ち上がって岩に埋まってしまった入り口への道を見ながらルーの姿を探し始めた。

こりゃ帰りは他の道を探さないとな、などと考えながら暴君の居た方向に改めて目をやると建物のような物がある事に気がついた。

月明かりを頼りに目を凝らしよく見ると、洞窟の入り口とは反対側の壁には神殿のような建物が直接彫り込まれ

綺麗なエントランスと入り口が設えられている。

今まで暴君の影になって洞窟の入り口側からは見えなかったようだ。

恐らくルーはそこにいるのだろう。

俺はデルフをしまい肘から先が燃えてしまったパーカーをパンパンと払って土埃を落とし、神殿の奥へと歩を進めた。

入り口からの廊下はかがり火に照らされ一本道で、突き当たりの部屋は先程のホールと同じくらい広かった。

どうやらここが拝殿か何かだったらしい。

そこら中に豪華な装飾があしらわれ、無数の魔法のランプで部屋中

が照らされていた。

しかしルーの姿はここにもない。

何か手がかりがないか、辺りを見渡す。

部屋の中央には何かを捧げる為の台があり、血の跡のような染みを見つけ一瞬悪い考えが浮かび思わず目を瞑る。

……大丈夫。

暴君の口ぶりからルーはまだ無事な筈だ。

彼女はかならずここに居る。

何処だルーと叫びかけた時、誰かがすすり泣く声がわずかに聞こえた。

かすかな声がする方に目を向けると、広大な部屋の隅に木の扉がありそこから鳴き声が聞こえてくるようだ。

俺はその扉の前に立ち、ゆっくりと開ける。

鍵はかかっていない。

室内は神殿と同じように魔法のランプで照らされ、寝台もテーブルも何もない殺風景な部屋だった。

その隅で真っ白な髪の女の子が蹲り、膝を抱えて震えながら泣いている。



「ルー。」

俺の声に少女はがばつと顔を上げた。

涙でくしゃくしゃになった顔を一瞬歡喜にそめ、再び涙を流してくしゃくしゃにする。

「サイ、ト……さん？ 来てくれ、たんです、か？」

彼女は信じられないといった様子で両手を口に当て、ルビーのような瞳から大粒の涙を流して言葉に詰りながら言った。

俺はルーに近寄り、手を差し出す。

「ああ。ゴメン、結構待たせたよな。だけでもう大丈夫だ」

歓喜と恐怖が入り交じった泣き顔の彼女を安心させようと、俺はルイズにしてみせるようにニカッと笑った。

それから彼女に一番伝えたかった事を口にする。

「暴君をやっつけたぜ。君は自由だ。」

ルーは差し出した俺の手を取り、今度は声を上げて泣いた。

泣きながら、笑っていた。

ボロボロに焼け焦げた上着のコゲ臭いにおいと共に、覚えのある彼

女の甘い香りが鼻をつく。

その泣き笑いを見て、俺は始めて思い出した。

”力があるのに、逃げ出すのは卑怯なことなんだ。”

あれはいつだったか、ガリアまでタバサを助けに行った時に彼女が読んでいた本の一節だ。

名前はなんだっけ？

あの本を子供達に繰り返し読んで聞かせ、皆にここが大事だーって力説した覚えがうっすらと思い出される。

はは、なんの事はないな。

あんだけ偉そうに切った啖呵が、子供用の本の台詞だったとはお笑いだ。

……黙っていよう。

あの時の俺って結構カッコよかったもんな？

うん、あえて自分を貶めることもないじゃないか。

そう考えながら苦笑いを浮かべ、腕にしがみついて泣きじゃくるルーの頭でも撫でてやろうとした時だった。

遠くで暴君の咆吼が聞こえ、同時に轟音がいくつか響き地が激しく揺れた。

イーヴァルデイは洞窟の奥で竜と対峙しました。

何千年も生きた竜の鱗は、まるで金の延べ棒のようにきらきらと輝き、硬く強そうでした。

竜は震えながら剣を構えるイーヴァルデイに言いました。

「小さきものよ。立ち去れ。ここはお前が来る場所ではない。」

「ルーを返せ」

「あの娘はお前の妻なのか？」

「違う」

「お前とどのような関係があるのだ？」

「なんの関係も無い。ただ、立ち寄った村で、パンを食べさせてくれただけだ」

「それでお前は命を捨てるのか」

イーヴァルデイは、ぶるぶると震えながら、言いました。

「それでぼくは命を賭けるんだ。」

(スノーリ・ストウルルソン著『イーヴァルディの勇者』より)

ルーと共に広場に戻ると、息を吹き返した暴君が炎を吐き尾を振り  
暴れていた。

俺が胸に空けた穴からはおびただしい血を噴き出させながら、巨大な尾を壁に叩きつける。

揺れる地と響く轟音。

落雷のような咆吼を上げ、火球を吐く。

広場の天井を砕いて大きな岩が降り注ぐ。

神殿の入り口でデルフを抜きながら怒り狂う暴君を睨み、怯えて俺の腕にしがみつくルーに下がるように伝える。

「くそ、しぶといトカゲだな。ルー、下がっ」

「相棒！」

デルフの叫びに再び暴君へ視線を戻すと、あの火球を俺たちの方に向け放つ所だった。

轟炎が眼前に迫る。

咄嗟に両手でデルフを構え、火球に力一杯斬りつけると今度はあつ

さりと暴君の方へ跳ね返った。

韻竜は派手に暴れているが、もうそれ程力は残っていないらしい。

「カウンター反射」 も張れないようで炎は再び暴君を焼いた。

咆吼。

俺とルーは思わず耳を塞ぐほどの絶叫が洞窟に響き、地を揺らす。

やがて暴君は糸の切れた操り人形のようにフツと動きと咆吼を止め、次の瞬間ゆっくりと地に倒れ伏した。

こちらを向いて必死に迫り来る死に抵抗する韻竜は、その巨大な鎌首をもたげ血泡混じりにうなり声を上げる。

口の端からは炎が漏れ相変わらず黄金の眼を輝かせていたが、あの恐ろしいまでの威圧感はずでに無かった。

「……………もう、終わりだ暴君」

近くにあった石柱に手を当て、円錐型の馬上槍を造り出す。



それから神殿の入り口から広場の方へ歩き、最期の槍を投げようと逆手に持ち替え高く掲げる。

しかし韻竜を屠る最後の槍は、果たして投げられなかった。

槍を持つ右手を振ろうとした刹那、何者かにボロボロの上着の裾を弱々しく引っ張られたのだ。

振り向くとルーが下を向いて俺に手を伸ばしている。

「ルー？」

彼女は呼びかけに応じず、俺の前に歩を進めた。

それから顔を上げ、瀕死の暴君へ視線を向ける。

俺からは彼女の表情は見えないが、何度か見た彼女の強い決意のよ  
うな物がその背中から感じられた。

「もっ……いいでしょう？ ファフニル」

「……ブリュンヒルドか。」

「ルー？」

彼女は振り向かない。

暴君の弱々しくも荒い息が洞窟内に響く。

そんな中、彼女の言葉は不思議と良く聞こえた。

「 ”ミヨルニル” なんか無くて、貴方は人に敗北したわ。だからもっ……いいでしょう？」

「……我、いや我々に大人しく滅べと言うのか？ 真の巫女よ」

暴君の言葉にルーは首を振った。

ルー、お前暴君と一体……

そう言いかけて、言葉を飲み込む。

何故かこの時の俺はルーを問いただせなかった。

「ファフニル……”ミヨルニル” は韻竜の滅びの原因なんかじゃないわ」

「ふん、我は忘れぬ。あの武器を手にした小さき者が、仲間を、友を討ち滅ぼした事を！」

小さき者があの力を手にした時、何をやったかお前も知っているだろう！

その報復に韻竜達が何をしたか、誰よりもよく知っているだろう！

「だから！ だからわたしが韻竜にも人にもあれを渡さないよう、守護していたんじゃない！」

「だまれ！ 裏切り者が何を言うか！」

暴君の怒気を孕んだ声が洞窟に響く。

ルーは思わずびくつと肩をすくめたが、それでも気丈に言葉を続ける。

「……私がミヨルニルを守る巫女となり、ここで貴方と人間達の間を取り持っていた時は平和だったわ。

人も、韻竜も、誰も無益な争いをしなかった。貴方は神の眷属としてそれなりの扱いを人から受けていたはずよ」

「そんなもの！ 我にあったのは小さき者への憎悪とミヨルニルへの恐怖だけだ！」

「ファフニル……」

「お前が！ お前が大人しくミヨルニルを渡しさえすれば人間など  
全て焼き滅ぼせたのだ！」

あんな物さえ無ければ、韻竜達は小さき者などに狩られずに済んだのだ！」

「でも、貴方は結局ミヨルニルではなく人間に負けたわ。この、イ  
ーヴァルデイ（大力無双の者）の勇者に！」

その言葉に暴君の凄まじい怒気は萎んでいく。

黄金の瞳が忌々しそうに俺へとその視線を移していた。

しばしの沈黙。

それから暴君は今度は静かな声で再びルーに語りかけてきた。

「何故だ？ お前はなぜそこまで小さき者に肩入れする？ 記憶を  
封じ、今までどこぞ遠くの地を流離い暮らしてきたのだろうか？」

忌み子としても暮らした事がある筈だ。自らの命惜しさにお前や  
関係のない娘を差し出し続けた憐れな小さき者に……何故だ？」

「……おじいさんは優しくったわ。おばあさんは暖かった。ロシナ  
ンテだつて居たし、サイトさんはこんな私を命を掛けて守ってくれ  
た。」

それだけでも十分、信じられる」

静かなルーの言葉は、広い洞窟に響いた。

後には暴君の荒い息遣いだけがその場を支配する。

「何故だ？ 何故、ここに戻ってきた？」

「……偶然よ。記憶を取り戻したのがガンビクについてからですも  
の、気が付いたら逃げられない状況だったの」

「そして偶然お前を助けとなる ” 竜殺しの勇者 ” が一緒だった  
と？ ふん、出来すぎた話だ。」

それにミヨルニルはどうしたのだ？」

「彼を通じて……魔女の手に渡ったわ」

「その魔女がアレを悪用したらどうするのだ？」  
「ミヨルニル」  
を守る巫女よ」

「……大丈夫よ。ミヨルニルを操る二つの秘宝の内一つはもうこの世にないもの。」

南の地の火山に放り込んだから」

ルーの言葉に暴君は血を吐きながらむせた。

辺りは巨大な竜の吐く反吐と流れる血、肉の焼けた臭いで満ちている。

「クク、グ、ゴブツガツ、ゼエ、我は……怯える必要のない代物にずっと怯えていたと言う事か」

「ファフニル……今ならその傷は癒せる。だから、もうやめよう？」

「……断る。ブリュンヒルド、真の巫女よ。  
お前はどこまでも人と共に歩む道を選んだように、我は人とは相  
容れぬ道を選ぶ」

そう言つて暴君は再び立ち上がった。

胸に空いた穴からは滝のように血が噴き出し、その口からも炎に混  
じつて血が流れ出る。

韻竜はフーケのゴーレムを遙かに凌ぐその巨体を弱々しく揺らしな  
がら、血まみれの口を開けあの火球を作り出した。

火球は轟炎となり、風船を膨らますかのようにみるみる大きくなる。

「ルー！ どけ！」

「ファフニル！」



俺は叫ぶルーを押しつけ、槍を投擲した。

やはり”カウンター反射”を張る余裕は無いらしく、あっさりと暴君の右肩の付け根に槍が当たる。

金属が打ち付けられる様な音を立てて巨大な腕が血しぶきを上げて弾け飛び、地鳴りを上げて地に落下した。

しかし暴君はそんな事もお構い無しに声を上げるでもなく、ひたすらに火球を大きくしている。

「くそ！ こつなつたらもう一回跳ね返してやる！ ルー、下がれ！」

ルーは俺の言葉が聞こえないかのようにその場に立ち尽くす。

もう一度彼女の名を叫ぼうとした時、暴君は火球を放った。

俺やルーではなく、神殿の方へ。

入り口の上部に火球は命中し凄まじい爆風と共に柱を、壁を、通路を瓦礫へと変えていく。

吹き飛んでくる石や岩からルーを守るべく、咄嗟に彼女を押し倒していた俺はやがて起き上がると

事切れた強大な韻竜と瓦礫と化した神殿の入り口を見て呆然とした。

う、と可愛いらしい声を上げてルーも立ち上がり、暴君を見て息を飲んだ。

「フアフ、ニル……」

「ルー……」

呆然とするルーに近寄ろうとした時、地面が激しく揺れ出す。

あれほど暴君が暴れてもビクともしなかった洞窟が音を立てて崩壊し始めていた。

天井からは次々と大きな岩が落ちてきて、わずかに残っていた列柱

を押しつぶしていく。

「な、これは……」

「ファフニル！ サイトさん、ファフ……暴君と精霊の契約が切れ  
たんです！」

「何でそれで洞窟が」

「神殿です！ あの神殿は元々大地の精霊を祭る要石が入り口にあ  
ったんです！

” その要石を暴君が壊したものだから、精霊が怒ってここを ” 元  
” に戻そうとしているんだわ！ ”

「元について！」

「岩と土の大地に！」

「い、生き埋めになるって事かぁあ……」

俺の叫びにルーは真剣な表情で頷く。

「逃げましょう、サイトさん！ 神殿の抜け道はもう使えないから、後は入り口だけです！」

「だめだ！」

「どうして…！」

「入り口は暴君に塞がれちゃった！」

「そんなっ、きゃあ！」

ルーの直ぐ側に大きな岩が落ちて来て、彼女は思わず悲鳴を上げ俺

の腕を抱きかかえた。

普段の俺なら鼻の下を伸ばすんだろっが、状況が状況だ。

上を見上げ振ってくる小さな石や岩はデルフで切り払い、大きな物はルーを先導しながら避け続けた。

「くそ、どうすりゃ……このままじゃ本当に生き埋めだぞ」

「ああ、魔法が使えりゃなあ。相棒、そうすりゃあの穴から外に出られるのに」

デルフの言葉に暴君が出入りしていた天井の大穴を見る。

ぽっかりと開いた穴からは、地鳴りと共に崩壊する洞窟とは無縁にうつすらと明るくなっている夜空が見えた。

不意にしがみつかれていた腕が軽くなる。

ルー、危ないぞと声を掛けようと彼女を見ると、信じられない物が目に飛び込んできた。

丁度ルーは上服を脱いで居る所だったのだ。

気が付かなかったが、あのボロいローブの下は何も……着て居なかったらしい。

未発達な双丘が二つ、もうバツチリみえてしまった。

思わず視線を落とすと、なにも履いていない丸見えの下半身が目に見え込んでくる。

こ、こここんな時にいいいいったい?!

と固まっている俺を余所に、彼女は靴も脱いでローブと一緒に俺に手渡してきた。

「……サイトさん、これもってて」

「ル、ルルルル? ルル、ルー? その、あの、俺、見て……見ちゃったけど、あの」

「いいから! はやく!」

慌てる俺の胸にルーは服と靴を押し込める。

そうしている間にどごとんと二つ、大きな音を立てて俺たちの直ぐ側に巨大な岩が降ってきた。

「時間がないわ、サイトさん。……お願い、剣をしまつて少しだけ目を閉じていて」

「は、ひゃい！」

言われるままにデルフをしまい、ぎゅっと目を閉じる。

もう、閉じるしかないじゃないか！

全裸の女の子の頼み事だぞ？！

あいや、俺にはルイズが居るんだった！

いくらこんな時だからって……

「サイトさん？　ちゃんと目を閉じてますね？　じゃ、もうすこしだけそうしててくださいいね？」

目を閉じ混乱する俺に、ルーの声が崩壊の地鳴りと共に頭上から聞こえてきた。

同時に腹と背中に何か堅い物が当てがわれ、音が少しだけ遠くなる。生ぬるい風が上から頭に当たり、え？　なんだコレ？　と考える間もなく凄まじい力で体を横にされて浮遊感を感じた。

足下から冷たい空気が流れてきて、頭上の生ぬるい風と混ざり合う。

……すごく生臭い。

横に倒された体はやがて逆さまにされ、なんだなんだと思わず目を開けた俺の顔に暖かい濡れた柔らかいナニカが押しつけられた。



「わっぷ！　なんだ、これ！　ルー！」

ばたばたと暴れるが、腹と背中を固定しているナニカはびくともしない。

目を開けて状況を確認しようにも、大きな柔らかい物が押し当てられ何も見えない。

しかも押し当てられている物はすごくべとついて、生臭い。

しきりに俺の顔に押し当てられる柔らかい物を押し返そうと、うぬれええと声を上げ押しつけていた時だ。

ふっと腹と背中を固定していた堅い物が、俺を解放した。

視界が一気に開け、浮遊感は落下する感覚に変わった。

岩が大地に叩きつけられる音はせず、かわりに風切り音はびゅおと耳に五月蠅く響く。

暁に染まる紫の空に、大きな影が一瞬見えそして視界から消えた。

あれは……

しかし、背中に大きな衝撃を受けその思考は途絶える。

「いっしょ……」

強打した尻をさすりつつ、べとべとになった顔をぬぐって目を開けるとそこは洞窟ではなく空の上だった。

足下には純白の竜が俺を背に乗せ、悠々と翼を広げている。

「大丈夫ですか？ サイトさん」

足下の大きな竜が聞き覚えのある声で俺に話しかけてくる。

「ルー、なのか？」

「……ごめんなさい。わたし、実はその、韻竜だったんです」

「ぎょじって……」

「……日が昇ります。話は降りてからにしましょう」

そう言ってルーは大きく旋回し、あの領主と対峙した洞窟の入り口へと降り立った。

それから再び俺の目の前で人の姿に変わる。

……もちろん、全裸だ。

彼女は慌てる俺からひったくるようにロープを取り、いそいそと着て靴を履く。

「うわ！ こね、ベットベット！ うっ、うっ、サイトさん……………」

「しょ、しょうがないだろ？！」

「そりゃ、そうですね……………」

ルーは半目で俺を睨んでいたが、やがてぷつと嘔き出した。

俺もつられて笑う。

安堵の為か、緊張の糸が途切れた為か、兎に角なんだか無性に可笑しくて俺たちは笑った。

そうしていると朝日が昇り、ルーを照らしだす。

彼女はもうローブを深く被ろうとしない。

白く輝くその美しい姿は、とても幸せそうだった。

城に戻るとルーの世界は一変していた。

それはもう凄まじい歓迎ぶり、黒い子猫を抱えた領主が俺たちを出迎え

兵士やどこから入って来たのかガンビクの街の人々が、皆一様に笑顔で俺たちを取り囲む。

領主のシオメントが結果を待たずにある程度の事を周りに説明し、宴の用意もしていて人の波にさらわれるように

俺達は城の中庭に半ば強引に押しやられる。

その間人々は口々に俺を ”イーヴァルデイの勇者” と称え、ル一の事も ”白き聖女” と呼び勇気を褒め称えていた。

……その手の平返しに結構ムっとして口を開いたが、ルーが視線を合わせてきてゆっくりと首を振る。

中庭にはかがり火が炊かれ、沢山のテーブルの上には大量の料理が所狭しと置かれていた。

俺達は先導する領主と共に一番奥の、少しだけ高い位置に設えられた席に座らされる。

それを確認したエルフの領主が兵士や領民の方に振り返り、大きな声で宣言した。

「皆の者、今日は遂に待ちに待った日となった！ここに居る白き聖女の導きにより、このイーヴアルデイの勇者が

長年我々を苦しめていたあの恐ろしい暴君を打ち倒したのだ！」

わあ、と歓声が上がりますが領主はまだ早いとばかりに手を挙げ、その叫びを制する。

それからおもむろに俺達を前に出るよう導き、何か一言民に掛けてやってくれと小声でささやかれた。

俺は……忌み子の事で何か言ってやろうと口を開くが、言葉を吐き出すよりも早く隣のルーが先に群衆に語り始めた。

「み、みなさん！」

ルーが語り始めるとしん、と水を打ったかのように静まる群衆。

「暴君は……もう居なくなりました。これで、あの炎に怯えて暮らす必要はありません。」

白い子供が生まれても忌み子として嫌う理由も……なくなりました。」

群衆の人々は ” 忌み子 ” という言葉に皆、バツが悪そうに下を向く。

彼らは解っている。

自分達が何百年もの間、何をしてきたのかを。

そして目の前にいる少女は、そんな彼らを責める資格のある者だと。

「皆さんが命を散らしてきた忌み子達に今まで何をしたのか、今何を思っているのかわたしにも解ります。」

わたしも……みなさんと同じなんです。

わたしは、真の巫女は、暴君の目が届かない遙か南の地、プリミ

ルの子供達が興したという国で吟遊詩人の真似事をしていました。  
今から数百年前の話です」

その言葉に群衆はざわめき出す。

しかし、ルーが言葉を続けると再び人々は黙って彼女の言葉に耳を傾けた。

「わたしがある日酒場でいつものように詠っていると、遙か北からやって来ていた客の一団がわたしを見て騒ぎ始めました。

聞けばトリステインの北、最近国としてまとまって来ていた都市国家群よりさらに北の……北の暴君の支配地からやって来た

商人達でわたしのことを”忌み子”だと言ってなぜここにいるのかと騒ぎ立てていたんです。

……わたしはこの時初めて、憐れな忌み子の存在を知りました。

そして、自分のせいで何の関係もない白い少女達が、韻竜への生贄になっている事を知ったわたしは……

魔法の薬で記憶を封印してしまいました。

わたしも又、皆さんと同じように逃げたんです。

自分の代わりに何の罪もない少女達が暴君に殺されているという現実から、逃げ出してしまったんです。」



ルーはそう言っつて、赤い瞳から大粒の涙を流した。

下を向いていた人々は皆顔を上げ、そんな白い少女を無言で見つめている。

「わたしは、暴君と同じ韻竜です。韻竜の ” 忌み子 ” だったんです。

みなさんよりずっと力のある存在なのにわたしは……あの暴君から逃げ続けていました。

何百年も逃げ続けて居ました。

わたしは、聖女などではありません。

真に聖女と呼ばれるべきは、暴君の贄となつた少女達なんです。

わたしは、皆さんと同じ ” 咎人 ” なのです……」

涙は流れ続ける。

しかし、ルーは大きな声でハッキリと自分も咎人だと宣言した。

自分の罪の重さに耐えようとするように。

後悔を込めて。

「お願いです。どうか、どうか忌み子が、白い子供が生まれたら、  
今までそうしなかった分愛してあげてください。」

みなさんの為に、わたしが身代わりにしてしまった少女達の為に、  
どうか幸せにして上げて下さい。」

群衆は沈黙を続けている。

ルーはその言葉を最後に両手を顔に当て、静かに泣いた。

俺はルーの隣に立ち、肩を抱いてやりそれから人々の方を見る。

彼らは胸に罪悪感と後悔を抱えて ”イーヴァルデイの勇者” の  
言葉を待っていた。

「あー、えつと。俺が言いたい事はルーが言ってくれたから、もう言わない。ただな？その……」

群衆からは固唾を飲む音が聞こえてきそうだった。

「腹、減ったな。お前等が忌み子を差別してきたお陰で、俺ここん所まともなもん食ってねえんだ！

さっさと朝飯にしようぜ！

もう忌み子を差別しない奴だけ残って飯を食って行っていいぞ！」

そう言っつて胸を張る。

人々は皆ぼかんと口をあけてあっけに取られた。

領主のエルフと抱えている子猫も、間抜けな顔をして目を開いている。

肩を抱かれ、しくしくと泣いていたルーもえっ？と顔を上げ俺を見

ていた。

……なんだよ。

俺、そんなにおかしい事……言ってるけどぞ。

ルーのあんな演説の後じゃ何も言えないじゃないか。

勇者らしくこれでもう世界は平和だー！とか言えば良かったのか？

それこそなあ……恥ずかしいじゃないか。

俺が周りの反応にむくれていると、くっくと笑い声が聞こえてくる。

領主が抱える黒い子猫……多分、ノルンだ。

ちくしょうあの性悪め。

更にむくれる俺の表情を見て、今度はルーがクスクスと笑い始めた。

ルー、お前までそんな……落ち込んだらどうなる？

つられて群衆にも笑いの波が広がり、波はやがて大きくなつねりとなつた。

どつと笑いの渦が起ころ。

それからイーヴァルディの勇者万歳！ 白き聖女万歳！ と声が上がり始めた。

「くくく、本当に、本当にいい男じゃろ？ まったく、ルイズには勿体ないわい。のう、シオメント？」

「う、うむ……あのような者はエルフにも居ないな。さすがは竜殺しの勇者」

「ひひ、それもとびきりお人好しの、な。ああ、こんなに楽しい思いをしたのは何千年ぶりじゃ？ くく、楽しい、楽しいのう」

エルフの領主は魔女とそんなやりとりをしながら俺達の前に進み出てきた。

そして、宣言する。

宴の始まりを。

人々は更に大きな歓声をあげ、それを合図に城の中から酒樽と焼きたてのデカイ豚の丸焼きをコック達が運んできた。

その旨そうな臭いに、俺とルーの腹はぐうと大きく鳴る。

腹の虫が鳴く音は、むくれていた表情を笑顔に変えるには十分だった。

ガンビクのお城で一日中乱痴気騒ぎを行い皆が酔いつぶれてしまった頃、わたしのイーヴァルディの勇者は帰って行った。

お城での食事は、いままで見た事も無いようなご馳走だった。

豚の丸焼き、野ねずみや野ウサギの丸焼き、新鮮なお野菜にあんなに大きな魚の干物。

豆の塩ゆでスープに柔らかいパン。あと、あと、とても美味しい葡萄酒！

その全てがわたしの前に並べられる。

食べても食べても新しい料理が目の前に出され、わたしは生まれて初めておなかいっぱい料理を食べた。

本当は本来の姿で食事をしたかったのだけれど、流石に人前で服を脱ぐのは憚られたのがすこし悔やまれる。

ああ！

豚を何十頭もまるまる食べられるなんて！

これもサイトさんのお陰だわ。

領主のシオメントさんはすこし引きつった顔をしていたけれど、お祭りだもの。

きつと怒ってないと思う。

サイトさんかというと、どうやらこのご馳走はあまり口に合わないらしい。

木の板の上にでん！と置かれた豚や野ねずみの丸焼きを、ナイフで直接切り取ってそのまま口に運ぶのが人間の食べ方なんだけど

あまりその食べ方は好きじゃないみたい。

……あのネズミの丸焼き、美味しいのに手もつけないなんて本当にもったいないわ。

素直にちょうだいって言えばよかったなあ。

結局サイトさんはワインを飲みながら、パンとウサギの丸焼きを一匹分食べただけだった。

きつとお腹がいたかったのね。



宴がある程度落ち着いた頃、わたしは自分の今までの事を話し、サイトさんの事を改めて聞いた。

サイトさんの話はるいずって子ののろけ話ばかりで、その幸せそうな顔は凄く見てて心が暖かくなり少しだけ妬けてしまう。

それから彼がどうやってあの洞窟まで来たのか、どんな風に暴君と戦ったのかを詳細に聞いた。

その話はすぐくワクワクして、胸がドキドキして、わたしはずっと興奮していた。

気が付くとわたしはサイトさんから聞いた ”イーヴァルディの勇者” の活躍を、皆に触れ回っていた。

人々はその活躍を語るわたしの話に目を輝かせながら聞き入り、やがて他にもないのかとせがまれ

ガンビクまでの旅で見た彼の活躍も話してきかせた。

オーグル鬼の軍勢を蹴散らした話。

盗賊を改心させた話。

そして、か弱い女の子を美しい月夜に優しく励ます話。

そのどれもに皆聞き入ってくれた。

一緒にいたサイトさんは謙遜していたけれど、皆口々に彼を褒め称えていた。

にもかかわらず……わたしのイーヴァルディ勇者は、この時少し寂しそうな顔をしていた。

やがて夜になり、皆は酔いつぶれてお料理も出てこなくなった。

わたしもおなかいっぱいだったけれど、もうちょっとあのブタの丸焼き食べたかったな。

そう名残惜しそうにネズミの丸焼きをほおばっていると、サイトさんに呼び出された。

連れて行かれたのは、領主様の部屋だった。

ちょっとだけドキドキして期待してしまっていたけれど、室内には領主様と黒い子猫がいて ” 違う ” と感じた。

……そしてなんとなく、わかった。

サイトさんとの別れの時だと。

わたしは……今度は泣かなかった。

笑顔でサイトさんを見送ることができた。

黒猫の姿をした魔女さんが白く輝く鏡のような物を出し、サイトさ

んも別れの言葉を残してそこをくぐっていく。

わたしのイーヴァルディ勇者は、あっさりと居なくなってしまった。ふっと消えるその不思議な鏡を見て、別れ際に交わした言葉を思い出す。

「ルー、これからどうするんだ？」

「そうね。ロシナンテと一緒に旅をするわ。記憶が戻ったから魔法も使えるし。」

それにね、こう見えてわたし歌が上手いの。吟遊詩人をして、世界を回るうと思ってるのよ？」

「そっか。いつか、どこかで再会できるといいな。」

「ええ、そうね。ルイズって子を見てみたいわ。」

「はは、結構おっかないぞ？」

「ふふ、わたしだって”おっかない”でしょう？ 体の大きさ

だけなら暴君に負けてないもの。

忌み子だから、韻竜にしては力は弱いけどね。」

「そっか。あ！ 知り合いにも韻竜いるんだぜ？ もし再会できたらさ、そいつにもあつてやってくれよ」

「うん、わかった。……さ、早く。ルイズさん、待っているわよ？ サイトさん、本当にありがとう」

「ああ、じゃあ、ルーも元気でな」

その言葉を最後にサイトさんは光の鏡の中へ消えていく。

別れはとても寂しかったが、今のわたしには新たな使命がある。

吟遊詩人として、イーヴァルデイ勇者の物語を語り伝えるのだ。

そして広い世界を旅して、いつかサイトさんと再会しよう。

そう決心をしながら魔女さんのノミを取っていると、彼女はその礼としてわたしに良い物をくれた。

再会のまじないが込められているという、人の名。

スノーリ・ストウルルソンと言つ名を。

わたしはこの名をつかつて、物語を紡ぐ。

その終わりはこうだ。

イーヴァルディは竜に向けて剣をふるいましたが、硬い鱗に阻まれ、弾かれました。  
竜は爪や、大きな顎や、噴出す炎で何度もイーヴァルディを苦しめました。

イーヴァルディは何度も倒れましたが、そのたびに立ち上がりま  
した。

竜が止めとばかりに、炎を噴出したとき、驚くべきことが起こりま  
した。

イーヴァルディが握った剣が光り輝き、竜の炎を弾き返したのです。

イーヴァルディは飛び上がり、竜の喉に剣を突き立てました。

どろ！と音を立てて竜は地面に倒れました。

イーヴァルディは、倒れた竜の奥の部屋へと向かいました。

そこには、ルーが膝を抱えて震えていました。

「もう大丈夫だよ」

イーヴァルディはルーに手を差し伸べました。

「竜はやつつけた。きみは自由だ。」

(スノーリ・ストウルルソン著『イーヴァルディの勇者』より)



Information Information Information  
Information お知らせ Information Information  
Information Information

今回のこのお話は、タバサのキャラクターをつかみきれて居ない作者の確認用SSです。

基本、「ガンダールヴは夢を見る」の設定を使った別作品の短編だと思って下さい。

一応は同じ作者同じ作品なので、新スレではなくここでの公開としました。

設定は本作のアフター物で、しかもIF設定です。  
すこし説明が曖昧な部分があります。

できれば、その辺のあらは見なかった事にしてもらえると嬉しいです。

(主目的がタバサのキャラクター確認なので。)

もし宜しかったら、タバサのキャラクターについてももっとこうだ！とか、こういうキャラなんじゃね？

とかの感想をいただけるとすごく助かります。

Information Information Information  
Information Information Information  
Information Information Information



午後九時。

季節は冬。

その夜 x 市上空にはシベリアからの寒気が流れ込み、この地方では珍しい雪がしんしんと降り始めていた。

中心街では年末の各種イベントへむけてイルミネーションが煌びやかに点灯し、歓楽街からのタクシーの往来は途切れる様子もない。

すこしまばらになった道行く人々の口からは、白い吐息が漏れている。

ある者は一人、または恋人同士で肩を寄せ合い、そのけばけばしい色の光る看板を掲げたファーストフード店の前を

皆一様に二度見しながら通り過ぎていく。

その視線の先には一組の男女が居た。

道路に面したファーストフード店の席は、元々一人掛けの椅子が並ぶ席だ。

そこに腰掛け外の様子がよく見えるように、座席の全面がガラス張りとなっている。

男女はそこに座り食事をしていた。

いや、食事を行っているのは女の方だけか。

その彼女が兎に角通行人の目を引いていた。

年の頃は二十前後、眼鏡をかけた童顔で体軀はかなり細い。

グレーのクルーネックニットの裾から白いブラウスが見え、恐らくはミニスカートをはき膝上までの黒いタイツと

ブラウンのブーツが店の外から確認できる。

とりわけ通行人の目を引くような格好をしているわけでもなく、勿論店の外からスカートの中の下着が見えているわけでもない。

表情から冷たい印象を受けはするものかなりの美人と言えば美人だったが、それも通行人の注意を強く引くような要素ではなかった。目を引いていたのは目が覚めるような青い髪と、山のように積み上げられた各種ハンバーガー、ポテトの空箱、そして黙々と食事をすすめる彼女……

タバサの姿だった。

「なあ、タバサ。もっと旨い食い物あるんだからさ、そっち行こうぜ？」

「……いい」

「はあ。折角 ” こっち ” に来る許可をルイズに貰ったって言うのに、何だってまた……」

「……貴方の国の食べ物なんでも美味しい。  
迂闊にこの国の ” とても美味しい ” 部類の食べ物を口に入れると、もう帰ってから普通の食事が出来なくなる」

「そりゃ、そうだけどさ。案内する身としては、もうちょっとこつかな？」

「いいいいいい」

サイトははあああ、と大きくため息をついた。

ため息は通りに面した目の前のガラスを、ほんの少しだけ曇らせる。

そんな様子には気にも留めず、タバサは黙々と食事を続けていた。

てりやきバーガーを頬張り、続いてフィッシュバーガーを二つ平らげ、更にこの冬限定のチーズスペシャルトリプルビッグミートバーガー

という名の仰々しい特大バーガーを信じられない速度でその小さな口中に納め、オレンジジュースで胃に流し込む。

まばらになった店内ではタバサの健啖ぶりを観察していた店員が、三つ目の特大バーガーに齧り付く青髪の少女を遠慮がちに指さし

厨房から男の店員やマネージャーを呼んで、ヒソヒソと聞こえないようになにやら話している。

タバサはそんな視線には気にも留めず、ひたすらハルケギニアでは

味わえない珍味を堪能していた。

切っ掛けはガリアの南部で起きた流行病。

平民の間で流行りだしたこの病は、凄まじい勢いでガリア国内に広まっていった。

体のあちこちが赤黒くこぶし大に腫れ上がり、凄まじい痛みを伴って高熱にうなされ水メイジの助けが無ければ

十人中七人は死んでしまう病気だ。

とにかくその広がり方は凄まじく、貴族の中にも発病者が現れる程でとても平民救済には間に合わない程だった。

この事態に友好国であるトリステイン、アルビオン、ゲルマニア、ロマリア、そしてエルフ評議会までからも

治癒の魔法使いで編成された医師団が派遣された。

首脳部にとっては純粹に友情の証と平民救済の為であったが、それを後押しした貴族達にもその病をガリア国内に

封じ込めておきたい思惑もあった。

しかし、事態は中々好転しない。

派遣され平民を治癒していたメイジ達にまで病が襲いかかったのだ。

ほとほと困ったガリア王は、先の女王であるタバサをハルケギニアの聖女 ” 虚無のルイズ ” の元へ派遣し知恵を請う事にした。

今ではトリステイン貴族であり『我らが剣』の二つ名を持つサイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ・ド・オルニエールの館を訪問した

タバサの説明を聞いて、聖女は腕を組み美しい眉根をよせて考え込む。

「うーん……虚無には正体不明の流行病の治癒魔法はないのよねえ」

「なあ、タバサ。どうやってたら病気になるか解っているのか？」

「不潔にしていると病気にかかる」

「それだけ？」

「それだけ」

再びうーんと唸る聖女と傍らに立つ我らが剣ことサイト。

「なあ、タバサ。どんな症状なんだ？」

「発病すると赤黒い大きな腫れ物が出来る。強い痛みと高熱が出て  
何もしなければ十人中七人は死んでしまう。」

中には腫れ物だけでなく、全身が黒いあざだらけになってしまい死亡する者もいる」

「うわ……話には聞いていたけれど、十人中七人は死んでしまうのは初耳だわ」

「混乱を防ぐ為、一部の人間以外には極秘になっている」

「うーむ……」

「あによ、なんか言いたい事あんの？」

「ああ、ちょっとひっかかるんだ。なあ、タバサ。全身が真っ黒くてさ、黒い斑点が沢山出るのか？」

タバサはコクリと頷いた。

彼女の肯定に頭をガシガシと引っ掻きながらサイトは唸りをあげ、部屋をウロウロとする。

その様はまるで檻に閉じ込められたノラ犬のようだ。



「サイト？」

「うう、お、」

「お？」

「思い出せん。たしか、黒死病って奴で世界史で習ったような……」

「な？！ あんた知ってるの？！」

「多分、な」

その言葉にタバサは座っていたソファから立ち上がり、サイトの手をとってじっとその目を見つめた。

その動きは優雅で、それでいて剣術の試合のように素早くしなやか

だ。

「おねがい。どうやったら治るのか教えて」

「そこなんだよお……すまん、タバサ」

「あによ。なんか問題でもあんの？ それとタバサ。気安く触らな  
いでくれる？」

「それがな、その授業受けたのもうずっと昔の事なんだ。何せお前  
に召喚される前だ。正直、覚えていない」

「うっわぁ……役に立たないわね。私でさえ一度習った事は忘れな  
いわよ？ それとタバサ。聞こえてるんでしょ？  
手をは・な・し・な・さ・い。」

「うっせ。どうせ俺はバカだよ。あと、タバサ？ そろそろ身の危  
険を感じるから、な？」

「大丈夫。わたしが守る。あと、役に立たないならわたしにちょう  
だい」

「いやよ。あんたもいい加減諦めなさい」

「あー、久々に会ったんだし、な？ 今はやめとこ？ な？」

「うっさい！」

「だまって」

聖女と先代ガリア女王の声が重なる。

サイトはその声にビクッと肩を竦ませた。

二人の淑女はお互いに杖を取り出し、その鬼気せまる圧力は場の空気を歪ませていく。

控えていたメイド長のシエスタとメイド達は、手慣れた様子で室内の調度品を軍隊のような規律と手際の良さで運び出し

手早くバトルフィールドとなるであろう室内から退出していった。

まずい！ また俺の屋敷が壊される！ 前回の支払いがまだ残ってるんだぞ、ちくしょう！

「だから！ 二人とも止めるって！ タバサ、こうしている間にも病気にかかった人がバタバタと死んでいるんだろ！

あとルイズ！ …… 今日はその、お前の…… 言う事を何でも聞いてやる。いいか？” なんでも” だぞ！

「だからな？ 落ち付けって。」

その言葉に二匹の獣は手にした牙をしぶしぶと収める。

それからピンクの方は餓狼のように歯を剥きながら、青い方は雪豹のように涼しげな表情の裏に闘志をしまい込んで

再びそれぞれが座っていたソファへと戻って行った。

サイトは胸をなで下ろし、室外へ退出していったシエスタを呼び戻してお茶のおかわりと茶菓子を四人分持ってくるように頼む。

やがて持ち出されていたテーブルと共にアルビオン産のお茶と、サイトがルイズのお使いでコッソリ地球から買い溜めておいた

チョコレート菓子が運ばれてきた。

しばし、無言のお茶会が催される。

コリコリとチョコレートをかみ砕く音が室内に響き、先代ガリア女王とハルケギニアの聖女に甲斐甲斐しくお茶のお代わりを供するのは館の主で『我らが剣』こと英雄サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ・ド・オルニエールその人だ。

「それで……どうやったたら治るか思い出せそう？」

心ゆくまでチョコレートを食べ、心を落ち着かせたタバサが真剣な表情を浮かべて再び話題を流行病に戻した。

ルイズもその甘い幸せに、先程まで顔に張り付いていた険は払拭されている。

「すまん。多分無理だ。ただ、地球に行けば方法はわかると思う」

「どっしょって？」

「図書館だよ。ほら、ルイズ、新婚旅行の時に行つたる？」

「ああ、あの平民でも使える本の屋敷ね」

「そうそう。そこに行けば多分わかるさ」

サイトの言葉にタバサの滅多に綻ばない口元がゆるむ。

普段クールな彼女が、殆ど見せる事のない笑顔だった。

しかしその貴重な笑顔はすぐに消え、かわりに真剣な眼差しで彼女は懇願をする。

「お願い。そこへ案内して」

「うーん、ルイズ？」

「……気に入らないけど、ほっとけないしね。病気の事を直接見ているタバサもついて来た方がいいと私も思うわ」

「あ、ルイズ。タバサが同行するならお前、留守番だぞ?」

「なんでよ!」

「目立つ。俺の故郷にはお前やタバサみたいな髪の色した奴はウロウロしてなかったろ?」

「ぐ……ぼ、帽子かぶれば」

「美女二人を連れて歩くだけでもかなー……り目立つんだって。」

” 買い出し ” を俺一人で行く理由もそれで納得してたじゃないか、お前。」

「ぐぬぬ……」

ハルケギニアの聖女は、白く美しい歯を野獣のように剥いた。

その姿を彼女に心酔するブリミル教の司教達が見れば、きつと卒倒するにちがいない。

「おねがい、ルイズ」

「おれからも頼むよ。な？　これは人助けなんだって」

「わ、わかったわよ！　だけど、今日だけだからね！　指定の時間までに必ず戻ってくるのよ！」

「おう、さんきゅ」

「……………ありがとう」

「ふん！　サイト！　浮気したら承知しないからね！　あと、その

……………

さっきの、何でも言う事聞いてくれるって約束、わすれないでよ

「？」



「よし、じゃタバサ、いくか。……あー、シエスタ！ アレ持ってきてくれないか？」

ほら、デルフを包んでいた……そうそう！ その袋！ ほれ、これで杖隠しとけ。さすがにそのまま持ってたんじゃ目立ちすぎるしな。」

「ありがとう」

「いい？ はやく、帰って来てね？ モンモランシに貰った、とっておきの香水つけてまってるからね？」

「じゃ、さっそく……おっとタバサ、そのままのナリじゃ不味いから向こうで服を着替えてくれ。シエスタ、頼む。あ、冬服な？」

「わかりました、サイトさん。さあタバサさん、こちらに」

「わかった」

「俺も着替えてくるわ。ルイズ、先に地下室で待っていてくれ」

「え？ もつ？ まったく、気が早いんだから……せめてお風呂に

……あ、そつだわ。この前買ったアレ、着てみよつと。  
ちよつと、はずかしいけど……」

シエスタに連れられ、部屋を出て行くタバサ。

後を追うように脱兎のごとく自室に走るサイト。

それから熱病にうなされフラフラと歩く病人のように、夢心地で部屋を出て行くルイズの姿がそこにあった。

その後、地球の服装に着替えたサイトとタバサは ” 世界扉 ” を作り出す時に使っている地下室へ入った時

スケスケのネグリジエの下に奇天烈な衣装を身につけていたルイズを見て、揃って絶句するのだった。

当然、自分の世界から帰還を果たしたルイズの怒りの矛先は『我が剣』が余す所無く受け止め

無事タバサの地球行きの扉は開かれた。

「あ、そういえばシルフィード居なかったわね？ シエスタ、知ら

ない？」

「シルフィードさんなら、ルーさんの所に居ましたわ」

「げ！ 今日ルーが来る日だっけ？」

「はい、いつものように領内警備のお駄賃として豚の丸焼き十五頭を、今日はシルフィードさんと一緒に食べていますよ。」

この館のもう一人の女主人が吐く青色吐息が、再び薄暗くなった地下室に響く。

それに釣られるように、うら若いメイド長のため息も続いた。

「あいつが居れば傭兵なんて雇わなくて済むし、この前だって領内に出たオーク鬼をやっつけてくれたのは助かったけれど……  
何もオーク鬼が住み着いてた遺跡ごと灰にしなくてもいいと思わない？」

しかもその後、王立魔法研究所から姉様がすっ飛んできて凄い剣

幕で怒られるわ

その上サイトを駆り出されて、妙な遺跡の調査に連れ回されるわでもう散々だったんだから。

それに、あの勢いで家に来て食事をされると流石に……」

「はい……今月も赤字です……」

「はあ。こりゃ、年明けにでも又貴族相手に説法巡礼でもして、お布施を集めなきゃね。」

ついでにガリアまで足を延ばして慰安もしましょうか。」

「元教皇様といっても結構大変なんですよねえ。あ、今の内に用意はしておきますね」

「ええ、頼むわシエスタ」

「あー、でもいいなあタバサさん。向こうはそろそろ”くりすます”でしょう?。」

「あ！ そういえばそうね」

「わたし、あのキラキラした街をもう一度みたいなあ」

「……しようがないわね。シエスタ、私と貴方と、あとルーの分の衣装を用意しといて。」

二人が戻ったら、コッソリ私達も向こうへ遊びにいきましょうか。今年もルーも連れて行ってあげましょ。

勿論、サイトには内緒よ?」

ルイズはそう言ってニッコリと笑う。

両手の指を胸の前で絡ませながら、シエスタはその言葉に文字通り小躍りしながら喜んだ。

「はい！ だから、ルイズは大好よ!」

「ふふふ、でも向こうの物を持って帰っちゃダメだからね?」

「はい！ 思い出とお食事だけで十分です! >Font Size  
e" 1" <……これでサイトさんを夜貸してくれたらもっと好き  
になるのに>/Font<」

「だめよ」

「ちっ」

先程の和やかな雰囲気はそこにはない。

冷たい刃のような聖女の言葉。

女の悪意を全て込めるかのような舌打ちの音がそれに応えた。

当然、メイドの不遜なソレをこの誇り高い女主人は見逃しはしない。

「何よ今の舌打ち！ いけないメイドね！ あなたそれでもこの屋敷のメイド長?!」

「きゃあ！ ルイズが怒った！」

「待ちなさい！」

きやあきやあとかましいい声を上げ、地下室の階段を駆け上がって行く二人。

後に残るは無人の地下室のみだった。

冷たいその地下室は、誰もいなくなった後もどこか暖かさを感じさせた。

捜し物はあっさりと見つかった。

地球に着いた二人は早速図書館へ足を運び、サイトは丁寧に図説が入った書物を見つけタバサにその写真を見せ確認する。

彼女はその写真をじっと凝視し、表情を強ばらせながらこくりと一度だけ頷いた。

ガリア南部で流行っていたのは、やはり黒死病のようだ。

黒死病はネズミやノミなどを媒介して広がり、患者の体液などの接触感染で人から人へうつる病気で

貴族に発病者が少ないのは日頃清潔にしているからなのだろうとタバサは予想した。

日本語の読めないタバサにかわり、サイトは手早く予防法や注意事項をメモに残していく。

地球には黒死病の発病者を助ける薬はすでに存在する。

しかし、これを大量に入手する事はハルケギニアに生きる彼らには不可能に近かった。

サイトとタバサの目的は、あくまで病気の正体を突き止めこれ以上の流行を防ぐ事にある。



薬を入手して水メイジに大量生産させる手もあったが、世界扉の存在を知る者達はなるべく地球の技術や物を

ハルケギニアに持ち帰らないよう配慮する事を方針としていた。

その理由として、急激な科学技術の発達はハルケギニアの社会に混乱をもたらすという判断をルイズがした為だ。

地球とは違い良くも悪くも魔法によって社会を形成しているので、平民でも扱える力の急激な流入はそのまま

貴族と平民の軋轢を増大させる恐れが高いのだ。

だからこそ、地球から知識を持ち込むのではなく、コルベールのような存在を見出して徐々に科学を定着させ

同時に貴族側の意識を改革していく事が大事だという事が、ルイズの考えだった。

この考えにコルベールとキュルケは最初こそ渋っていたが、地球の歴史書（翻訳：ヒラガ卿　ブリミル教により禁書指定）や

核爆発の写真を見せると、流石に地球技術の持ち帰りをしない方針に折れた。

今回のような事態やそれ程影響がないと判断できる場合に限り、こっぴど地球の知識を求めようと平賀夫妻は決めていたのだった。

もっともアンリエッタやウエールズなどは、貴族社会の改革を進め  
平民と貴族が共に歩む社会を作り出し

いつかはハルケギニアと地球の交流を実現させるつもりでいるよう  
だったが。

かくして、現在ハルケギニアと地球の交流は平賀サイトが偶にルイ  
ズを連れての里帰りを行う事と

ルイズの為に深夜のコンビニエッコッソリお菓子を買いに戻る事が主  
となっていた。

「よし、メモ終わったぜ」

「ありがとう。これで多くの人が救えるわ」

時刻はすでに閉館の少し前。

仕事を終えた二人は、ルイズが世界扉を開く約束の時間まではまだ  
間があったので適当に散策する事にした。

街はイルミネーションに着飾られ、吐く息はとても白い。

「できれば、みんなに薬を持って帰ってやりたいんだがな……」

「それはしょうがない。だけど、病気の拡大を防げればあとは水メ  
イジを総動員すればなんとかなると思う」

「それにしても、なんでガリアでネズミが大発生したんだ？」

「……多分、持ち帰ったジャガイモのせい」

「げー！」

「唯一、食料問題の解決のために持ち込んだあの野菜のお陰で、平  
民は大分豊かになった。

「辺境の地でも臣民が餓死するような事は殆ど無くなったけれど、  
かわりにネズミも増えてしまったよね。」

「あー、結局地球の物のせいかな。そういや、うちの領内でも残飯と

が増えたって聞いているもんなあ」

「多分、人口もこれから爆発的に増えていくと思う」

「ジャガイモ一つでそうなるなら、不作や飢饉に備えて食料備蓄の問題も出てくるってことだよなあ。」

あ！ なら、他の国でも同じ事が起きるかもしれないって事でもあるよな？」

サイトの隣を歩くタバサは無言で頷いた。

もうすっかり日も暮れ、空からは雪がはらはらと舞い落ちてくる。

タバサの無表情な白い貌はその雪のようだったが、淡い朱が走る唇から漏れ出る白い息だけが

彼女の感情を強く宿しているようにサイトは感じていた。

「じゃ、タバサ。帰ったらガリア王政府から他の国に親書を送るよ  
うに話してきてくれ。」

病気の正体が分つたから、これでやっとルイズも慰安巡礼に行けるしな。俺も帰ったらそのお供だ。

道中平民の間にもこの話を広めとくよ」

「おねがい」

「まかせとけ！」

そう言ってサイトはニカッと歯を見せ、氷のような表情を浮かべる青い娘に笑いかける。

タバサはほんの少しだけその笑顔に見とれ、何かを振り払うかのようになり再び前を見つめた。

丁度その時、様々な電子音で裝飾された流行歌のオルゴールが辺りに響く。

二人が歩く歩道に面した商店の一角にあるクリスマスツリーの飾りの一つが、時を伝えたのだ。

「あー、もうこんな時間か。タバサ、帰る時間までもうちよつとあるから、飯食っていかないか？　まだ地球の食事はした事無いだろ？」

「いいの？」

「ああ。格式ばつた奴は時間かかるから無理だけど、天井とかうどんとか色々あるぜ？」

「じゃあ、あのお店でもいい？」

タバサが大通りの反対側にあつた、けばけばしい色の光る看板を掲げたファーストフード店を指さした。

先程から何組かの若い男女が腕を組み、店内にひっきりなしに出入りしている。

小遣いの少ない若者にとって、こういった店は気軽に入れる上財布にも優しいので非常に人気がある。

とはいえ、すでに夕食を取るには遅い時間なので食事と言うよりも、店内でくつろぐ事が彼女達の目的であるのだろう。

「いい、けど、アレはちゃんとした飯屋じゃないぜ？ どっちかって言えば、屋台に近いかも」

「かまわない」

「そか？ じゃ、いこうか」

二人は光の河のようにも見える大通りを渡り、カップルに混じってファーストフード店に入っていた。

売り物のスマイルを忘れた店員の目が大きく見開くほどの注文をして番号札を受け取り、通りに面した一人がけの席に陣取る。

食事が来る僅かな待ち時間の間、唯一手渡された飲み物を手にサイトとタバサはぼんやりとその車の流れを眺めていた。

「貴方の国は豊かね」

タバサがぼつりと呟いた。

「それに、とても綺麗」

「まあな」

「どうしてハルケギニアに留まったの？ ルイズと結婚したから？」

「それもあるんだけどな、俺の友達はみんな向こうに居るしな」

「……ここなら、イヤな権力闘争も無い」

「そだな」



「疫病もない」

「ああ。貴族も魔法使いもない」

「夢のような国ね」

ズズ、とサイトがコーラをすすする。

音を立てないように食事をするよう育てられたタバサは、内心その音に少しだけ眉をひそめた。

次いで、その手に持っている紙のように軽いカップに取付けられた小筒に口を付け、サイトのようになオレンジジュースをすすする。

その甘さと濃さは、ハルケギニアでは味わえないような物だった。

「だけど、不幸な人はいるんだぜ？」

「どうして？」

「決まったら。どんなに豊かに見えていてもな、結局誰かの不幸の上に幸福があるんだ」

「どっぴりじゃっ?」

「豊かなのはこの国だけで、その分他の国は貧しいってことね」

「……そう」

眩くように返事をして、もう一度甘いジュースをすすする。

この世界にも今手にしている飲み物の甘さの為に、飢えて死んでいく者がいるのだろうか。

「まあさ、考えても仕方ないよ。知っておく事は大事だけど、結局俺達は自分の分を弁えた行動しか出来ないしな」

「そうね」

「それに俺もお前も、ここよりもハルケギニアの人間の方がより多くの人を幸せに出来るだろう？」

サイトはタバサの胸に僅かに湧いた罪悪感のような物を払うかのよう、優しく笑いかける。

そうね、と努めて無表情を装いながらタバサは胸を躍らせ答えた。

……まったく、この男は卑怯だ。

いつか酷い目にあわせてやろう。

いっそ、あの胸糞の悪くなる魔女に相談してみようかとタバサが考えていると、その思考を阻む者が現れた。

女の店員がうわずった声でおまたせしましたあと言いながら、目一杯トレイに山積みしたハンバーガーをタバサの前に置いたのだ。

彼女は早速封を開け、かぶりつく。

甘いソースが肉汁とからみ、野菜の歯ごたえと爽快感が中々美味だった。

脳裏に浮かんでいたサイトへのささやかな復讐の計画はとりあえず奥へしまい込み、さし当たっては目の前の食事に集中する事にした。

「なあ、タバサ」

隣に座る憧れの、憎らしい勇者が光り輝く通りを眺めながら話しかけてくる。

タバサは特に頷きもせず、手にしたハンバーガーを齧り付きながら視線だけを送った。

「今さ、こっちはクリスマスって祭りをやってるんだ」

もぐもぐと咀嚼をしながら、今度は顔をサイトに向ける。

どこか遠くを眺めているようなその視線は、過去を見ているのだろうか？ とタバサは内心で思っていた。

「来年はさ、みんなで来ないか？ いや、飯は用意しとくから俺ん家でクリスマスをやらねえか？」

「どっして？」

「だってさ、こんなに綺麗な街に居るよりもさ。薄暗いランプと月明かりだけのあっちの方が、ずっと好きなんだ、俺。」

先程のサイトの視線は、ハルケギニアでの未来を見ていたのだとタバサは気が付いた。

彼女は手にした食べかけの珍味を見つめ、僅かに微笑んでそうねと答え再び頬張る。

その隣でお人好しの英雄ははにかんでいた。

タバサは何となく暖かい気持ちになりながら、目の前の美しい通りを見やる。

いつの間にか止んでいた雪は再びしんと降り始めていた。

店内に流れる音楽はどこか物寂しげであり人恋しくなるような曲だったが、タバサの心は弾んでいた。

これはクリスマスという祭りの効果なんだろうか？

手の中に残ったハンバーガーの包装紙をくしゃりと握り潰し、一際大きな包みに手を伸ばしながらタバサは考える。

いつか、ガリアのヴェルサルテイル宮殿でクリスマスを皆としてみたいと。

そしてきつとそれは素敵な物になるだろうと思えて、僅かに雪の頬に朱を差させるのだった。

そんな風に思いを馳せると、タバサは弾む心が更に温かくなっていくのを感じ取った。

#### 4 - 1 : 風吹く夜に水の誓いを

運命とは、なんて気まぐれなのだろう。

始まりはきつと、あのラグドリアン湖での出会い。

湖畔で連日行われていた園遊会に辟易していたわたくしは、夜中人気の無い湖でコッソリ水浴びをしていた。

そこへあの方……園遊会に出席していたウェールズ皇太子が偶然やっできて、わたくし達はすぐに恋に落ちた。

それから毎夜園遊会を抜け出し、合言葉を決めて何度も秘密の逢瀬を重ねるようになっていく。

美しい湖は湖底に水の精霊たちが城と街を作り暮らしている場所で、



精霊達は ” 誓いの精霊 ” と呼ばれている。

迷信とも言われたその誓いの精霊に、わたくしとあの方は永遠の愛を誓った。

芸術品に例えられる程美しい湖と、二つの月。

そしてあの方のはにかんだ笑顔が、今でも凍てつくわたくしの心を内側から暖かに灯している。

数年後あの方の故郷、白の国アルビオンで内乱が起こる。

王党派と貴族連合レコン・キスタの戦いは、トリステインにも大きな影響を与えた。

やがて王党派の不利が伝えられると、ゲルマニアとトリステイン王国の同盟の話が持ち上がる。

わたくしとゲルマニア皇帝の婚約の話有条件に。

これは王党派に支援をしようとする各国の申し出を、他ならぬ王党派自身が断ってきた為だ。

理由は ” 貴族の誇り ” の為だとか。

たったそれだけの為に差し伸べようとする手を振り払い、多くの人が勝てぬ戦いにその身を投じて命を落としていた。

あの方への想いを抱くわたくしにはとても辛い事だったが、王族としての義務は果たさねばならない。

わたくしはせめて、あの時の誓いを胸に生きていこうと覚悟を決めていた。

この身をトリスティン王国の為に捧げ、ゲルマニア皇帝の子を産むのだ。

しかし、心だけはあの方に捧げ続けよう。

せめて心だけはあの湖での美しい思い出と共に羽ばたけるよう、生きていこう。

そう考えてわたくしはこの話を自身に納得させた。

残された時も無く信頼できる者が居ない中で、苦し紛れにかつての親友を頼ったのだ。

今やゲルマニアとの同盟に影を落としかねないあの方への恋文を、レコン・キスタに渡さぬ為に。

あの方が国元を離れ、わたくしの元へ逃げてくれるよう僅かな希望を……いいえ、わたくしの浅ましい未練を伝えるために。

そして親友は、死地に赴いてくれた。

不思議な使い魔を従えるかつての親友は、四日程で無事任務を果た

し戻って来てくれた。

驚いたことに護衛に付けた魔法衛士隊隊長は、レコン・キスタのスパイだったと親友は言った。

この報告にわたくしは、いよいよ自身が信じられる者などこの城には居ないのだと思い知らされる。

前国王……お父様が死に喪に服すためにお母様は政治の舞台から去った後、国内の貴族を纏める事は至難だった。

わたくしが形式上王家を取り仕切っていたが、成人もしていない十七の小娘に何が出来るだろう。

実際、政はすべて宰相であるマザリー二枢機卿が切り盛りしていた。

わたくしは、”鳥の骨”と揶揄される彼の言うことに、うなずくしか出来ない人形でしかなかったのだ。

母は女王になろうともせず、臣下はわたくしではなく宰相に政の決を求めている。

そのようなおかざりの王族に、一体誰が本当の忠誠を誓ってくれるだろう？

唯一忠誠を示してくれた親友を死地に送るにあたり、彼ならばと選んだ人選はよりもよって裏切り者だった。

わたくしは、困難な任務に付いてくれた親友の足を引っ張っただけだったのだ。

その事実が暗澹たる気持ちにさせたが、報告の続きを聞いてさらに奈落へと落とされてしまう事になる。

王党派最後の砦、ニューカッスル城の陥落。

伝え聞いたあの方の、決意の言葉。

そして、親友の使い魔から手渡された ” 風のルビー ” 。

かつてあの方に送った恋文と共に手の中にある風のルビーは、わたくしの涙を受けて鈍く輝いていた。

その日、わたくしが愛した方と共に白の国アルビオン王国は滅びたのだと思い知らされた。

やがて正式に国王ジェームズ1世の討死と、レコン・キスタによる神聖アルビオン共和国の樹立の報がハルケギニア中に流れる。

…… 皇太子ウエールズ様は、生死不明との事だった。

アルビオン新政府は戦後すぐに、トリステインとゲルマニアに不可侵条約の締結を打診してきた。

両国は協議を経てこれを受け、相互不可侵の条約を結ぶ事になる。

しかし、王政を打倒し貴族による共和制を謳うレコン・キスタの次なる標的は、隣国であり小国のトリステイン王国なのは明白で

以前から進めていたゲルマニアとの同盟も取り急ぎ締結された。

同時にあの方への想いを残すわたくしと、ゲルマニア皇帝の結婚の日取りも決まる。

式は同盟成立の日から一月後。

わたくしはただひたすらに、時が過ぎる様を眺めてすごしていた。

緩やかな絶望にその身を任せ、あの美しい湖の思い出を反芻しながら。

結婚式の約一週間程前。

ゲルマニアの帝都ヴィンドボナの式場へ向かうため、ウエディングドレスに身を包み

共に式場へ向かう予定であったアルビオン新政府の要人の到着を、トリスティンの王宮で待っていた時だ。

やってきたのはアルビオン新政府の要人などではなく、かの国からの宣戦布告だった。

混乱する臣下と共に続報を待っていると、やがて詳細な情報が伝えられた。

報告によれば、表面上は友好関係を保っていたアルビオン新政府の

要人を迎える為に派遣した

トリステインの空中艦隊がラ・ロシエール上空でアルビオン艦隊と礼砲を交えた時

アルビオン艦隊が放った礼砲に対して、トリステイン艦隊が放った

” 答砲 ” が相手の艦隊に居た補給艦を撃沈してしまい

アルビオン艦隊はその答砲に ” 応戦 ” してきたとの事だった。

先の宣戦布告はそれが理由だとしている。

無論、答砲を実弾で行うような恥知らずはハルケギニアには居ない。

宣戦布告は最初から仕組まれていた、アルビオン新政府の言いがかりなのだ。

わたくしは悔しさと共に、国の危機に直面して尚攻めてきたアルビオンへ真意を問おうとする臣下を見て齒噛みした。

場を会議室に移し、対応を協議するが皆それぞれが勝手なことを言い一向にまとまらない。

そんな状況をあざ笑うかのように、次々と続報が入ってくる。

先の戦闘で、旗艦『メルカトル』を始め主力艦と艦隊司令長官を失ったトリステイン艦隊は全滅。

アルビオン艦隊はそのままラ・ロシエール近郊のタルブ村に降りて、ここぞとばかりにトリステイン侵攻を開始したらしい。

応戦に赴いたタルブ領主、アストン伯は戦死。

その報に、ゲルマニアに援軍の要請を提案する者。

アルビオンに特使を送ろうと主張する者。

どう相手に攻めるか議論を始める者。

会議室では多くの貴族が思い思いにどうすべきかを主張していた。

しかし。

これだけの貴族たちが居ながら、誰一人戦火に晒される民の事を口にする者はいない。

誰一人戦場となった国土に赴こうとする者もない。

ただただ、貴族たちの口だけが動く。

わたくしはウエディングドレスに身を包んだまま、左手に嵌めた

”風のルビー”を見つめていた。

脳裏に浮かんでいたのは、親友の不思議な使い魔が伝えてくれたあの方の言葉。

”勇敢に戦って死んだと伝えてくれ”

その言葉を音にならぬ声で呟く。

眼に映る臣下達は果たして、この王宮が炎に包まれたときそう言うだろうか？

わたくしも、このままの方……ウェールズ様を殺した相手に、この場所で殺されるのだろうか？

「タルプの村、炎上中！」

会議室は相変わらずにぎやかだ。

その報も臣下達の喧騒に飲み込まれていく。

まるでとるに足らない報告であるかのように、皆それぞれが自分の意見を声高に叫んでいる。

そしてとうとうわたしの中で何かがぶつり、と切れた。



「あなた方は、恥ずかしくないのですか」

あれ程騒がしかった会議室がこの一言で静かになり、皆がわたくしを一斉に注視した。

どうやらわたくしは、考えていたよりも王族としてそれなりに注意を払われてはいたようだ。

「国土が敵に侵されているのですよ？　同盟がなんだ、特使がなんだと騒ぐ前にやる事があるでしょう？」

「しかし……姫殿下、誤解から発生した小競り合いですぞ？」

「誤解？　どこに誤解の余地があるのですか？　礼砲で艦が撃沈されたなど、言いがかりも甚だしいではありませんか。」

それに、我がトリスティン王国はいつから小競り合いなどで領地の占領を許し、旗艦を始めとした主力艦隊を失い

その上戦地の領主がこうもあっさり戦死する情弱な国に成り下がったのですか？」

一際声高にアルビオンへ特使の派遣を主張していた貴族が一瞬、言葉に詰まった。

それでも自分の娘ほどの年の、政治もわからないと思っている者に言いくるめられる事が癪に触ったのだらう。

苦々しげに、そして慇懃に一度詰まった言葉を吐きだす。

「アルビオンとは不可侵条約を結んでおったのですぞ。事故です」

「今、わが国土を侵しているのはそのアルビオンです。

焼かれたのはトリステインの村です。

死んだのはトリステインの貴族です。

事故？ 誤解？ そのような事は我々ではなく、アルビオンの方々がよくご存知でしょう。

彼らにしてみれば不可侵条約など最初から守る気はなかったのでしょうかね。」

「しかし……」

「そもそも、わたくしの此度の婚儀とて彼らに対抗する為ではありませんか。

まさか貴方は、アルビオンが本気でトリスティンとの友好を望んでいたと思っていたのですか？

共和制を掲げ、自ら戴いていた王家を攻め滅ぼしたあの恥知らずな貴族の方々を」

再びざわめき始める会議室。

わたくしの言葉を受け、ゲルマニアに援軍の要請を提案する一派と軍事作戦の立案を提案する一派がこぞと騒ぎ始めたのだ。

その論調を制しようと、アルビオンに特使を送ろうと主張する者が再び加わる。

ざわめきは喧騒となり、再び会議室は主の居ない暴れ馬のように無軌道に彷徨い始めた

ゲルマニアの援軍が到着してから共に迎撃すべきだ。

とりあえず、竜騎士隊全騎で上空から奇襲を仕掛けてみては？

いや、すぐに残りの艦をかき集める！

いやいやいや、特使を派遣しましょう！ 攻撃したらそれこそ全面

戦争になりますぞ！

飛び交う怒号。

次々と入ってくるアルビオン軍の情報。

そんな中、誰一人……そう、誰一人として民を救おうと杖を取り会議室を出て行く者は居なかった。

わたくしは、思わずテーブルを叩いて立ち上がる。

「お黙りなさい！ わたくし達がこうしている間に、民の血は流れているのです！

彼らを守るところが貴族の務めなのではありませんか？！  
我らは何のために王族を、貴族を名乗っているのですか！

この様な危急の際に彼らを守るからこそ、君臨を許されているの  
でしようー！」

会議室は再び静寂を取り戻す。

しかし、わたくしの怒りは収まるどころか自らの怒声により更に大きくなっていった。

「あなた方は怖いのでしょうか。  
アルビオンは大国です。戦となればわが国の勝ち目は薄いでしょう。」

「そうならば戦後、軍を動かした者は責任を取らされてしまいますものね。」

「それよりも隙を見て恭順してしまった方が、確かに命も領地も安堵されるかもしれません。」

「姫殿下」

「わたくしを窘めようとする宰相のマザリーニ枢機卿を無視して続ける。」

「怒りの炎は果てがないと思えるほど、燃え上がっていた。」

「あなた方はここで会議をしていなさい。わたくしは軍を率います」

よう。

誰ぞ！ わたくしの馬車を！ 近衛！ 参りなさい！」

「姫殿下！ 大事なお輿入れ前のお体ですぞ！」

マザリーニを無視したまま、わたくしは会議室を出て走った。

中庭に向かう途中、ドレスの裾を何度か踏みそうになったので裾を破く。

一瞬裂け目からガーターベルトの留め具が見え、すこし破きすぎたかしら？ と後悔したが

その考えはわたくしを追ってきたマザリーニ枢機卿の制止する声を聞いて、再び燃え広がった怒りにより駆逐された。

破いたドレスのスカートの一部を鳥がらのような宰相に投げつけ、あなたが結婚なさいと罵倒し再び走り始める。

中庭に出ると聖獣ユニコーンが引くわたくしの馬車が既に用意され、魔法衛士隊と近衛隊が集まって来ている所だった。

わたくしは馬車からユニコーンの一頭を外し、鞍も装着していないその白い背に飛び乗る。

スカートの裂け目から今度ははつきりとガーターベルトが見えていたが、激しくわたくしを突き動かす

怒りと誇りと高揚の前に羞恥などすぐに霧散した。

「これよりトリステイン全軍の指揮はわたくしが取ります！ 各連隊を集めなさい！」

魔法衛士隊の隊長は、わたくしの言葉に見慣れた栄誉礼ではなく軍礼で答えた。

たちまち城のあちこちから幻獣に跨った魔法衛士各隊の兵が中庭に集結してくる。

彼らの集結をまっぴらに城を出ようと思っていた処へ、マザリーニが息を切らせながら中庭に出てきた。

その後ろには先程会議室にいた貴族達の顔も見える。

……このままここに居ると、きっとまたくだらない事で大騒ぎをしそうですわね。

そう思い、わたくしは跨っていたユニコーンの腹を思いつきり蹴飛ばす。

聖獣はたかく前足を上げてから、猛烈な勢いで駆け始めた。

ユニコーンは主の心を知ってか、馬車に繋がれている時からは想像も出来なかったほど荒々しく疾く駆けてゆく。

振り落とされまいと強く手綱を握り前かがみになると、不意に手に光る風のルビーが目に入った。

”勇敢に戦って死んだと伝えてくれ”

伝え聞いた言葉が、あの方の声で耳に響いた。

わたくしはその言葉を聞き、はめている指輪に対して立てた誓いを思い出し呟く。

「ウェールズ様、わたくしは勇敢に生きてゆきますわ」

言葉は風に掻き消されたが、再確認した決意は色濃く胸に残り続けた。



その翌日。

戦いはあっさり終結していた。

結果はわがトリステインの圧勝。

というよりも、謎の光が突如アルビオンの艦隊を包み壊滅させたのだ。

わたくしと従えていた魔法衛士の連隊がタルブの村郊外に急行し、陣を張っていた時だった。

すでに何処かに所属しているであろう竜騎兵が応戦しているとの事だったが、突如眩い閃光がアルビオンの艦隊を包み込んだのだ。

不思議なことに光は敵艦隊の動力のみを消失させ、誰一人殺さなかった。

しかし、この光をトリステインの秘密兵器だと思い込んだ敵軍兵士は戦意を喪失し、次々と投降してくる事となる。

結果わたくしの率いるトリステインの軍は、たった一日でアルビオンの軍を撃退した事になった。

実際は戦意を失った相手の投降を受け入れ、タルブ村にて抵抗を続ける残党を排除して死亡した領主に代わりに

壊滅した村の復興を行ったりと事後処理が殆どだったが。

そんな実情を余所に、この勝利に国中が沸き立ちわたくしの風評も国内外を問わず強固なものとなる。

ゲルマニアにもこの戦いの結果を材料として、軍事同盟の見直しを迫ることができた。

そして全てがこの日より変化していく。

たった一日で、わたくしが予想していた未来はすべて消えてしまったのだ。

もつとも、新しい未来はわたくしが望ましいと思えるような物ではなかったが。

まずゲルマニアとの軍事同盟は、わたくしとゲルマニア皇帝との婚約という条件は廃され

対等の同盟へと変わった。

これは、援軍要請をしたにも関わらず戦闘終結までにその援軍が送られなかった事と

トリスティーン一国だけでも大国アルビオンに対抗できると力を見せた事が大きい。

それからわたくしの女王即位。

永らく空位だったトリスティーンの玉座に王が、それも過去数例しか

ない女王が座る事になった。

この決定には宰相マザリーニ枢機卿、お母様、そして多くの臣民の支持もあり、わたくしは渋々ながら戴冠をする事となる。

……そう、わたくしは女王になどなりたくはなかった。

できる事なら、政治などに関わらず深窓の姫君のまま生きていたかったのだ。

あの会議室で見たような、醜い貴族たちに囲まれその心を磨り潰して行くような世界など二度と関わりたくはない。

本心からそう思っていたが、この戦勝はそれを許してはくれなかった。

今、トリステイン王国には王が、それも強い王が求められている。

わたくしは大国アルビオンの軍勢をたった一日で退けた女王として、この国に君臨する事を求められたのだ。

政略結婚の道具と、絶大な支持を得る女王では比べようもないだろうが、それでも私にとってはどちらも重荷でしかない。

ああ、アンリエッタ。

あなたの幸せはきつと、ウェールズ様と共に消えてしまったのね。

そう嘆きながら自嘲的に笑い、わたくしはあの方の面影を追って風のルビーを見つめる。

大粒のルビーには、乾いた笑いを浮かべる女の顔がうつすらと映し出されていた。

それから更に数日後。

戦勝記念式典と戴冠式を行うため王都トリスタニアのブルドンネ通りを華々しくパレードを行なっていた時。

わたくしは傍らにいたマザリーニ枢機卿に戴冠などしたくないと愚痴を吐き、返ってくる小言を聞き流しながら

想いは王冠ではなくある一枚の報告書に馳せていた。

それは謎の光についての報告書だった。

報告によれば謎の光が出現する少し前、所属不明の竜騎兵……正確にはタルブの村に伝わる『竜の羽衣』という

マジックアイテムを駆り次々と敵の竜騎士を撃墜していった者が居たそうだ。

直にその者が親友とその使い魔だと調べがかったが、謎の光は彼女達の技であったかまではわからなかったようだ。

報告書はその親友も大貴族の子息である事から、わたくしの直接の裁可を求める旨をもって締め括られていた。

謎の光はわたくし自身も目にしている。

その光は勝利の光だった。

まるで辛い道を歩むわたくしの暗い未来を照らしてくれるかのよう  
な、強い光だった。

あの光を思い出すと不思議と胸が熱くなる。

わたくしはこの時、祝福を声高に叫ぶ民達の事を一時忘れ指に鈍く  
光る風のルビーを見つめて、何故か親友の名をつぶやいていた。

予感がしたのだ。

運命はわたくしの予想を大きく超えて、再び目の前に現れるのでは  
ないかと。

そしてその予感の的中する事になる。

女王に即位してから暫くたったある日、予定をやり繰りしてやっと  
親友とその使い魔を王宮へ招くことができた日の事。

わたくしは侍女に案内され、部屋に入ってきた親友を見るや思わず  
彼女に抱きついていていた。

連日の政務に加え、女王としての重圧から開放され待ちに待った友  
人と心休まる一時の訪れだったからだ。

欠々に見る親友は張り詰めた雰囲気纏い、どこか危うさすら感じ  
させる印象を抱いた。

余所余所しい口ぶりの彼女をなじりいつものように姫さまと呼ばせながら、わたくしはある事に気がつく。

一緒に招いた筈の彼女の使い魔が居ない。

あの、未来を予知するという不思議な剣を携えた彼が。

親友……ルイズは、そんなわたくしの心情を察してか寂しそうに笑いながら疑問に答えた。

「姫さま、私の使い魔はその、怪我をしまして。本日はここに連れては来れませんでした」

「まあ！もしかして、タルブの村で戦った時に怪我をしたのルイズ！？」

「え……」

わたくしの言葉にルイズは意外そうな表情を浮かべる。

その表情はなんだか滑稽に思えてクスリと笑い、彼女に例の報告書を差し出した。

彼女は報告書を一通り読むとハアと小さくため息を付き苦笑いを浮かべて、居心地が悪そうに少し首をかしげてみせた。

「……………ここまでお調べになったんですか」

「わたくしには隠し事なんてしなくても結構よルイズ。だって、親友じゃない」

「申し訳ございません。その、色々と組み合った事情がありました……………」

「まったく。あれだけ派手な戦果を上げといて隠し通せる訳ないじゃないの。」

ルイズ、あの光は……………貴女なのね？」

わたくしの問いに、彼女は少し躊躇してはいと答える。

「ああ、なんてお礼を言えば良いか……貴女はこの国を救ってくれた英雄よ。本当にありがとう、ルイズ」

「そんな！ 姫さま、ひいては祖国の危機に杖を取らぬ者など貴族ではありませんわ」

彼女のその言葉はとても頼もしく聞こえ、同時にあの会議室を思い出させた。

あの場にいた者の中に、いったいどれ程彼女のような純粋な忠誠を持っている者がいたことだろう。

ああ、いけない。

今だけはあの暗くおぞましい世界を忘れるべきではありませんか。

そう思い表情を暗くしたわたくしを見つめるルイズに笑いかけて、話題を元に戻すことにした。



「ねえ、ルイズ。一体、あの光は何だったの？」

「姫さま……ここからの話は、その……」

「他言無用にして欲しいの？」

「はい。……実は、わたしの系統は虚無だったのです」

「まあ……」

思わず口に手を当て、声を上げてしまっただたくしは驚いてしまった。

それからルイズとわたくし以外誰もいよう筈のない室内をキョロキョロと見渡し、慌てて”サイレント”をかける。

女王の私室を盗み聞きを行う不届き者は、この城中に居ようはずもないとは思わなかった。

が、この時のわたくしは城中の者は誰一人信用することができず、軽い人間不信に陥っていたのだ。

ルイズの話によれば、彼女の手元にあった『水のルビー』と『始祖の祈祷書』が虚無の目覚めとなったのだとか。

『水のルビー』はアルビオンへの密使を頼んだ時に礼として彼女に渡し、『始祖の祈祷書』はゲルマニア皇帝との結婚式で

彼女を詔を詠む巫女に指名した時に、儀式で使うからと貸し出していたものだ。

「虚無の魔法は、見ての通り非常に強力です。私自身、姫さまと祖国への忠誠は揺ぎ無いものですが、それでも如何なる者に利用され、つけ込まれるかわかりません」

「……そうね、ルイズ。何も敵は国の外だけではないわ。貴女の方の事が知れ渡ればきつと

この城の中からも私欲のために利用しようとする者が現れるでしょう。

ああ、でも残念ね。

そういう事ならば、わたくしはあなたの戦功に報いる事が出来なくなってしまうた。

本来ならば領地……いいえ、小国を与えて大公に封じてもおかし

くはない戦功なのに……」

「いいのです、姫さま。

私は姫さまと祖国にこの身をささげ、常々力になりたいと考えておりました。

両親からもそう躰られ、そう教えられて育ってまいりました。

しかしながら、私の魔法は失敗するばかりで付いた二つ名もご存知のように『ゼロ』。

いつも口惜しさにこの身を震わせておりました」

「ルイズ……」

「しかしながら、神はそんな私に力を授けて下さいました。それだけで、十分なのです。

ふふ、運命というものは皮肉なものです。

あれほど不名誉に思っていた『ゼロ』の二つ名が、まさかこれ程意味のある物になるとは。

姫さま、恩賞など今の私にはどうでもよいのです。

恐れながら、私の虚無を姫さまにささげとっございます」

彼女はそう言って、恭しく頭を垂れた。

その様子は最初と変わらず張り詰めた雰囲気の中得体の知れない危

うさも感じさせたが、彼女の気持ちは紛れもなく

わたくしへの忠誠から来るものだと感じ取れて、気がつく嬉しさのあまりもう一度ルイズを抱きしめていた。

「ああ、ルイズ。わたくしの一番のお友達！ 本当に、本当に嬉しいわ。」

思い返せば、ラグドリアンの湖畔でも貴女はわたくしを助けてくれたわね。

わたくしの身代わりにベッドに入ってくれて……

ルイズ、貴女のその忠誠はわたくしにとって何よりの宝です。

これからもわたくしの力となってくれと言っのね」

「当然ですわ、姫さま」

小さな親友はそう言うと、遠慮がちにわたくしを抱き返してくれた。

その僅かにかげられた力が何よりも暖かく、嬉しかった。

しばしそのままヒシと抱き合っていたが、いつまでもこうして侍女にでもこの姿を見られるわけにもいかない。

サイレントをかけた部屋で、女王と私的に呼び出された貴族の娘がひしと抱き合っている。

何気にこの状況と言うのは、なかなか倒錯的な光景かもしれませぬわね。

……ああ！ わたくしはなんてはしたない事を考えてしまったのかしら！

不意にそんなくならない事を脳裏に浮かべ、少し気まずそうに抱きしめたルイズを開放する。

改めて向き合った親友の顔は、少しだけ上気していた。

……だめよ、ルイズ。

わたくし、その……そのような趣味はないのよ？

あ、いや。

ちがう、ちがうちがうちがう。

まったく、わたくしは何を考えているのかしら。

「お、オホン。ルイズ、ならばあの『始祖の祈祷書』は貴女に授け

ましよう。

それに、貴女の『虚無』の事はわたくしは誰にも口外しないと誓います。

わたくしと貴女の友情に誓って。」

「姫さま！」

「だ、ダメだつてばルイズ！ …… あ、いや。気にしないで？ うん、その……勘違い？

と、とにかく！ この事はわたくしと貴女の秘密にしましょう。誰にも口外しないように。いいわね？

それとルイズ、これからは貴女をわたくし直属の女官と言う事に致します。

そうしておけば、何時でも会えるし力を貸して欲しい時に直ぐに呼べますもの」

「かしこまりました」

ルイズはそう言って、再び恭しく頭を垂れる。

わたくしは感激して思わず先程と同じように彼女に抱きつきかけたが、今そのような事をする

何か取り返しの付かない事になりそうな気がしたので、出しかけた手をぐっと押さえて机に向かった。

羊皮紙を取り出し、羽ペンを走らせて必要な事を綴り花王を押す。

「ルイズ、これをお持ちなさい。これは女王であるわたくしの許可証です。」

国内外と問わずあらゆる場所への通行と、警察権を含む公的機関の使用を認めています。

もし貴女に何か頼みごとをした時に自由がきけば、その仕事もやりやすくなるでしょう」

「ありがとうございます」

「貴女にしか解決できない問題が起これば、必ず相談いたします。」

表向きは今まで通り、魔法学院の生徒としてふるまってちょうだい。

それと、これは使い魔さんに……」

ルイズに許可証を手渡ししながらそう言って、宝石や金貨を手近な袋

に詰めようとした所でわたくしははっとなった。

すっかりルイズの不思議な使い魔の怪我の具合を聞く事を失念していたのだ。

「ごめんなさい、ルイズ！ あなたの使い魔さんの事をすっかり忘れていたわ。

彼は今どうしているの？ やはり先の戦いで怪我をしてしまったの？」

その問いにルイズは視線を落として口の端を強く結ぶ。

具合は良くはないのだろうか？

もしそうならば、王家に伝わる秘薬でも用立ててなんとかしても助けなければ。

「あいつは……私の使い魔は今、とある魔法使いの元で療養中です。



命の心配はありません」

「そう、良かったわ。それじゃあ、これを治療費の足しにして」

「あのような使い魔にそんな、勿体無いお言葉です」

「いいのよ、彼があのもジックアイテムを操っていたのでしょうか？  
ならば彼もまた、救国の英雄ですもの。これ位は当然です」

そう言って、わたくしはルイズに手近にあった宝石や金貨を袋に詰めて手渡した。

彼女は丁寧にそれを受け取り、結んでいた口の端を緩める。

それから暫く行った歓談は、本当に楽しいものだった。

だがルイズの張り詰めた印象は、最後まで払拭されはしなかった。

その夜。

寝室で小さな親友との楽しいひと時を反芻し、久々に幸せな気持ち

で眠りにつこうと目を閉じていると

ふと誰も居ないはずの部屋に人の気配を感じた。

いやだわ、わたくし疲れているのかしら？　と思いつつ上体を起こし  
”ソレ”　を見ると思わず声をあげる。

そこに……部屋の入口近くに長身の白い仮面をつけた男が立っていたのだ。

僅かに差し込む月明かりが、男の輪郭と白い仮面を闇から映し出している。

「誰ぞ！」

その声に反応する者はいない。

どうやら　”サイレント”　が掛けられているらしい。

男はわたくしが起きたのを確認し、一步前に歩み出た。

その隙のない動きを見て、背中に冷たい汗が吹き出る。

男から視線を逸らせない。

ほんのすこしだけ闇の中から月光が差し込む窓に近づいた為か、先程よりも男の姿が良く見えた。

男は……左腕が無いようだ。

残った右腕は刺突剣のような杖を握っている。

きつと暗殺者だ。

恐怖のあまり、心臓が激しくノックしその音が耳に響く。

一瞬で喉がカラカラに乾き、頭の中は真っ白になった。

わたくしは、己の杖をまさぐる事すら忘れるほど動揺していたのだ。

「いけませんな、女王陛下。身内から裏切り者が出たのですよ？  
まさか警備体制が私が居た頃と同じだとは思ってもみませんでした。」

男は聞き覚えのある声を発した。

「夜分遅く、レディの寝室に忍び込むような無粋をお許し下さい、女王陛下。」

何分、我が主の命は陛下に直接……それも人知れず謁見するようにと厳命されております」

「貴方は……ワルド子爵！」

「おお、このような薄汚い裏切り者の名を覚えていただいていたとは、光栄至極」

「子爵。貴方はレコン・キスタに祖国を売るだけでは飽き足らず、わたくしの命も売ろうという魂胆ですか？」

問いに、ワルド子爵は無言で恭しく礼をする。

その仕草にじわりと絶望が体に染み入って来た。

しかし、次の瞬間に予想外な返答を子爵はした。

「レコン・キスタなど所詮哀れな道化にすぎませぬ」

子爵はそう言い放つと風を操り、どこから取り出したか二通の手紙をわたくしの手元に運んだ。

一通はごく普通の手紙で、もう一通はなにやら豪華な装飾を施されている。

「一通は我が主から陛下に。もう一通はマザリーニ様と御覧下さい」

「……これは何ですか？ 子爵、あなたはわたくしの命を狙って来たのではないのですか？」

「命など。そのような真似を我が主は決して許しはしないでしょう。」

手紙には、かつての私のように祖国を裏切ろうとしている者のリストが書かれております」

「なんと！……しかし、裏切り者のお前の言う事など、だれが信じるものですか！」

「ふふふ、私を信じる必要はありません。」

ただ、我が主の名を聞かば……その手紙を読めば内容を信じる価値は出てまいりましょう」

「子爵の主？」

「主からの伝言でございます。『風の吹く夜に水の誓いを』」

聡明な陛下ならば、この言葉の意味をよくご存知だと主は言っております」

ワルド子爵はそう答えると、再び恭しく一礼をしてうっすらと消えていく。

どうやら彼の操る偏在だったようだ。

「ま、まちなさい子爵！ その、その言葉は！」

慌てて子爵を制止するも、偏在はあっさりと消え去ってしまつた。

部屋に掛けられたサイレントもいつの間にか解除されており、わたくしの慌てた大声に何事かと衛兵と侍女が寢室にやってきた。

なんでもない、と彼らを追い返し寢室の明かりを灯して二通の手紙を見つめる。

『風の吹く夜に水の誓いを』

それは、あのラグドリアン湖であの方と逢瀬を重ねていた時に使っていた待ち合わせの符牒だ。

あの方が『風の吹く夜に』と口にし、わたくしが『水の誓いを』と答える、秘密の合図だ。

他に誰も知りようもないその言葉を、あの裏切り者はこの手紙をわたくしに渡してから口にした。

主からの伝言だと言って、それを口にしたのだ。

ならば、子爵の主とは……

「……生きて、生きておりますの？ ウェールズ様……」

眩きは実感を伴って手紙を開けようとする指を震わせた。

焦るその指先を、思わず手紙を開封するナイフで傷つけてしまう。

わたくしは落ち着こうと一旦ナイフと手紙を置いて、ベッドの脇においてあったワイングラスに ” コンデンセイション ” で

空気中の水分を集め水を満たし、それを一気に煽った。

それから改めて手紙を開封していく。

今度は指は震えなかった。

そして、一心不乱に二通の手紙を読む。

特に、わたくしに宛てた豪華な装飾の手紙は夜があけるまで何度も何度も読み返した。



運命とは、なんて気まぐれなのだろう。

いつだったかそう考えて絶望に打ちひしがれたが、今回は違う。

わたくしは、目に隈を浮かべて朝日の中幸せと希望を胸に抱きしめるのだった。

4 - 2 : e x t r a | e p i s o d e / 秘密のトリックロール(前書き)

オリジナル挿話です。

私は少しだけ悩んだが、やはり彼女達を頼ることにした。

アンリエッタ女王陛下……いや、姫さまに王宮へ呼ばれた日より、  
数日前。

丁度、戦勝パレードがトリスタニアで行われていた日。

柔らかな日差しが残るのどかな午後、私は自室のベッドで俯せに寝  
て枕を抱き考え事をしていた。

先程まで着ていた制服は床へ無造作に脱ぎ捨てており、代わりにあ  
の性悪が置いて行ったゴーレムが身につけていた

サイトが着ていた物と同じ服を引っぺがして身につけている。

ゴーレムは部屋に置いておくとジヤマになるので、あの『竜の羽衣』と一緒にこっぴげ先生に預けておいた。

サイトから「壊さなければ好きに調べて良い」と伝言を伝えるように言われていたので、先生に伝えると

喜んで『竜の羽衣』とゴーレムを引きとってくれたのだった。

外からは時折、男子生徒の歓声が聞こえてきてくる。

トリステインに侵攻してきたアルビオン軍を蹴散らしたとはいえ、未だ戦時中だ。

にもかかわらず、学び舎は平時と変わらず授業が行われ生徒たちも普段と変わらない放課後を過ごしていた。

『竜の羽衣』に乗りタルブに行つて生まれて初めて戦場を見てきた私にとっては、いつもと同じその雰囲気は

なんだか別の世界のように感じられて、寂寥感すら覚えた。

私は、虚無に目覚めた私は、これから大きな陰謀や戦争に否応なく巻き込まれて行く。

もうアウストリの広場で無邪気に遊んでいる男の子達のように、それぞれグループを作ってお茶会を開いている女の子達のように

明日のギトーの授業を思い憂鬱になったり、食堂のメニュー予定表

を見てデザートに一喜一憂したり

こっぴげ先生の多すぎる課題（すぐ授業が脱線するから、課題で力  
リキュラムを消化する事になるのよね）にげんなりしたり

変な噂話が広まって悩んだりする事はきつと、できなくなるだろう。

何より、今の私にはサイトがない。

頼れる者が、誰も居ないのだ。

と言うよりも、頼ればその人物はこれからのトラブルに巻き込まれ  
るかもしれない。

状況からして迂闊に頼れない、という事が現状なのだろう。

その事実が寂しさに拍車をかけて、沈んだ気持ちにさせるのだった。

何度目かのため息を付いた時、扉がノックされコンコンと遠慮がち  
な小さな音が部屋に転がる。

気怠い体を起こして扉を開けると、見慣れた顔がまるで月のように  
二つ並んで見えた。

キュルケとタバサだ。

「やっほー、ルイズ。ダーリンいる？」

「いないわ。ちょっと療養の為に学院から出かけているの。じゃ」

そう言つて扉を閉めようとしたが、コツンと何かに引っかかり閉められない。

視線を落とすと、タバサが素早く扉と建柱の間に足を差し込んでいた。

「まあまあ、そう邪険にしないでよ。用があるのはルイズ、貴女の方よ。」

珍しくタバサの方から貴女に話があるって言い出してね、あたしはその付き添い」

「タバサが？ 私に？」

「話がある」

簡潔にそう言って、タバサは私をじっと見つめた。

サイトにちょっかいを出したいキュルケはともかく、タバサが私に話？

一体何だろうと思いつつも、ゆっくりと扉を開け二人を部屋に通した。

タバサに椅子をすすめて、私はその向かいに座る。

この部屋のテーブルには椅子が二脚しかないの、キュルケは勝手にベッドに腰掛け足を組みながら部屋を見回していた。

「あー、ダーリンがまた居ない。まったく、また喧嘩して追い出しちゃったわけ？」

「喧嘩なんてしてないわよ、お生憎さま。」

「なあんだ、つまらないの。あ、じゃあなんでダーリンは今いないのよ?」

「言ったでしょ? ちょっと療養の為に出处ているの」

「ふふん、どうせ愛想尽かされて何処かに行っちゃったんでしょう?」

「違うわ。本当に……病気だったのよ、命に関わる程の」

キルケは半目で私を睨み、赤い唇を尖らせたが軽口はそこで止まった。

「どうやら私の話を信じたらしい。」

まあ、病気つてのは嘘だけど命に関わる事を出かけているというのは本当だしね。

少しだけ重い空気が漂いかけたが、それを振り払うように私はタバサに向き直った。

なんだかんだで、この子には色々と借りがある。



それにサイトからは彼女の正体や生い立ち、そして私よりもさらに過酷な運命を背負っている事を聞いていた。

彼女の真実と運命を聞いた時から、私はある決意を胸に秘めていた。それは私にできる事があれば、彼女の力になってあげようというもののだ。

何年もの間、たった一人で無慈悲な現実には耐え続ける事はとても辛い。

毎夜襲い来る絶望にただ一人で戦わなければならないからだ。

私は魔法が使えなくて、何度も何度も人知れず打ちひしがれ泣いていた。

そんな私を救ってくれたのはサイトだ。

今の私には、サイトという希望がある。

だからこそ、魔法が使えない事よりもさらに辛く困難な未来を聞かされても現実と戦えるのだ。

しかし、目の前の女の子にはそれが無い。

一見無表情なこの子は、ずっとその希望を探してもがいているはずだ。

その辛さは、よくわかる。

少なくとも、この学院では誰よりも理解してあげられると思う。

だからこそ、近い将来にこの子がサイトに想いを寄せるようになるかもしれないと知っていても

サイトから遠ざけるような真似をするつもりは無かった。

例えこの先サイトを盗られる可能性があるとしても、それとこれとは別問題だと割り切ることにしていたのだ。

……もちろん、”その時” が来ても大人しくサイトを渡すつもりは無いわ。

というか、たとえ世界一不幸な女の子が相手だろうと絶対にサイトは渡さない。

そこだけは譲る訳にはいかない。

だってアレは私のこ、こここ……使い魔ですもの。

あのメイドだろうと、たとえ姫さまだろうとそこだけは変えるつもりはない。

あ、キュルケは……見ている限りすごく不安になるけれど、一応誰とくつつくのかは聞いているから少しだけ安心してるのよね。

ほんの少しだけだね。

……油断はできないけど。

それに、どんな相手だろうと私が負けるはずがないのよ。

だって、未来では私とサイトは……

「大丈夫？」

いつの間にか頬に両手を当て真っ赤になりながら体をクネらせていた私は、タバサの声で現実に戻される。

はっとして二人を交互にみやると、それぞれが違う表情と違う瞳で同じように冷たい視線を私へ送っていた。

「ルイズ、あんた熱でもあるんじゃないの？」

「う、うるさいわね！ 何でも無いわよ！ ……そ、それで？ 私に用って何？」

「……夢を見た」

「夢？」

「貴女がわたしの夢に出てきて、助けになってくれると言った」

「へ？」

「タバサ？」

私とキュルケは目を開いてタバサをしげしげと見る。

彼女は表情を変えず、じつと私と視線を合わせるばかりだった。

そりゃ力になりたいって思ってはいたけれど、タバサの夢に出た覚えはないわよ？

「ちょっと、タバサ。あなたまで熱があるんじゃないの？」

「……………それを確かめる為にここへ来た。」

「どっぴいっ事？」

「これを見て欲しい」

そう言っつて彼女はテーブルの上に右手を差し出す。

手の甲には見覚えのある線がまるで刺青のように入っていた。

……………サイトにかけていたダブル制御用の魔法だ。

”犠牲” という名の虚無魔法で、体に負う傷や負担をどこか特定の部位に指定するものだ。

もっとも二つのルーンを持つサイト専用で作られた魔法だから、タバサにかけても印が出るだけで効果は現れない。

こんな真似ができるのは……………

「な！ それって」

「なあにこれ。ぶつけて出来るアザじゃないわね。タバサ、どうしたの？」

「朝起きたらこの印が浮かんでいた。そして、あなたの話によれば夢が真実だという証拠になるらしい」

「あんの、性悪……」

「え？ え？ どういう事？ ルイズ、あんた何か知ってるの？」

私は怒りに歪んでいるであろう顔を左手で隠しながら右手を強く握りしめ、この前会った未来の自分を思い起こし

苦虫を沢山噛み潰した。

どういっつもりか分からないが、未来の私はタバサの夢に現れてなにかしでかしたらしい。

「……ムカつくけど、思いつきり心当たりがあるわ。タバサ、先に夢の内容を聞かせてくれる？」

「ちよつとお。あたしを無視しないでよ」

「わかった」

「あとでね、キュルケ。今ものつつつすごく大事な所なの。」

場合によっては他の誰にも知られてはいけない内容になるわ。悪いんだけど、席を外してくれる？」

「なによう。タバサはあたしの親友なのよ？」

「タバサ、場合によっては貴女の事を”すべて”ここで話す事になるわ。席を外してもらった方がいいでしょう？」

タバサはすべてという言葉に少しだけ体を強ばらせた。

それから少しだけキュルケを見て、その視線を私に戻す。

そして彼女は一言、かまわないとだけ口にした。

「そこなくちゃ！」

「……本当は私も構うんだけど、しょうがないわね。何せ”自分”のしでかした事だもの。」

それにいずれあんた達にも説明する必要があるみたいだしね、し  
ょうがないかあ」

「さあ！ ルイズ！ 貴女は何を隠しているの？！ さっさと吐き  
なさい！」

キュルケはそう言いながら、後ろから私の首に手を回してその無駄  
に栄養が行き渡っている胸を押し付けてきた。

その感触に黒い殺意が胸に広がる。



ちくしょう、わたしだって……あんな未来は絶対に認めないわ。

「あ・と・で！　まずはタバサの夢の話からよ。ちよ、は、離しなさい！　苦しい！　苦しいわ！」

「……昨夜、夢にあなたが現れた。そのあなたは未来からやって来たと言い、”今”のあなたがとても危険な状況にあると言った。そして、わたしに助けて欲しいと願った」

じゃれあう様に口論する私達を無視して、タバサは淡々と話し始める。

キュルケがいつもこんな調子だから、きつと無理にでも話を進める必要があると思ったのね。

まったく！

私はタバサより年上なのに、落ち着きが無いって思われちゃったじゃない！

それもこれもキュルケ、あんたのせいよ！

口ではなく目で訴えキツと睨むと、キュルケはふふんと不敵に微笑んだ。

思わずぐぬつとなり、宿敵を睨み殺さんと更に目に力を込める。

歯を剥いて威嚇する私をもっと挑発しようとした赤い髪の女が口を開いた時、突如氷の礫が飛んできて見事に私とキュルケの額に当たった。

「あだ！」

「いたーい！」

「続けるなら話の後にして」

手にしていた杖を置きながら、タバサは淡々とした表情で私達を窘めた。

ほらみなさい！

あんたのせいで私まで落ち着きがないって思われ……ごめんなさい。  
ちゃんと話を聞くから杖はそっちに置いて？ タバサ。

「続ける。……夢の中でわたしに助けを求めたあなたは、かわりに  
その力をわたしに貸してくれると言った。

そして、わたししか知り得ない名前や秘密を次々と言い当てて、  
最後にこの手に印を残し”あなた”に解除してもらえば  
現実だと信じるでしょう？ と言って消えた」

「で、起きたらそのアザが浮かんでいたのね？」

キュルケの言葉に無言でタバサは頷いた。

……そうか、そういうことか。

つまりサイトが居ない間は、タバサを頼れるよう手回しをしたと言  
う事ね。

そりゃこの子はすごく成績も良いし、なんといつてもシュヴァリエ  
ですもの。

もし力になってくれるならすごく頼りになると思っわ。

でも……私の為に危険な目に合わせるわけにはいかない。

まったく、あいつ本当に余計な事をしてくれたわ！

「で、ルイズ？ 心当たりがあるんでしょう？」

「……ものすごく、ね。」

「説明して」

「いいわよ。 ”私” の責任でもあるしね。それに、いずれこっちから話す事もあったし。

そうね、どこから話そうかしら……」

「夢の内容からお願い」

「わかったわ。あのね、夢の内容は本当よ。

今わたしはすごく困っているし、貴女の本当の名前も、一番の生きる目的も知っているわ。」

夢に出てきた ”私” は未来の私で、これから私や貴女がどうなるかすべて知っているの。

……ただ、今ちよつとその未来が変わってきていてね。

私、すごいピンチなの。でね？ 未来の私が気を利かせたつもりで、貴女に助けを求めたんだと思うわ。

どう？ 信じられる？」

「全然」

「ルイズ、あなたやっぱり熱があるんじゃない……」

「……そうよねえ、普通はそう思うわよねえ」

肩を落とし、ため息を深く吐く。

自分が今どんなに荒唐無稽なことを言っているのか、自覚しているだけにすごく心が沈んだ。

しかし、私は知っている。

タバサが私の話を信じざるをえない秘密を。

「でも本当の事なのよ、ミス・シャルロット」。  
私は貴女のお母様の事も、叔父へ復讐を誓っている事も  
知っているわ」

滅多に表情を変えないタバサは、私の言葉に目と口を大きく開いて  
驚いた。

その表情からキュルケも私の話が与太話でないと悟ったようで、茶  
化した雰囲気は消え真剣な眼差しになる。

「何故それをつて思うわよね。でも、話はここからよ。ここから先  
はもつと信じられない話になるわ。」

いい？ タバサ。それと、キュルケ。引き返すなら今よ？

この話を聞いたら貴女達の未来は、変わるかもしれないんだから」

「……話して」

「……なによ、そんな言い方されたら聞かない訳にはいかなくなるじゃない」

「そ。じゃあ、遠慮なく。」

本来の未来は、もうすぐ姫さま……アンリエッタ女王陛下の誘拐未遂事件が起きて

トリステインとアルビオンの全面戦争が始まるらしいのね。

そしてその戦いは、私とサイトの力で勝つの。

その後、タバサは本国の命令で私達を襲撃するんだけそここれは失敗に終わる。

で、その後貴女はお母様と同じ薬を飲むことになるのよ。

それを私達が助けに行つて、ついでにあなたのお母様も助ける事になるわ。

もちろん、心を壊す薬の解毒剤も手に入るそうよ。

それから、ロマリアとガリアが戦争になるの。

結果、ガリアは敗北して王は死ぬらしいわ」

まくし立てるように一気に近い将来に起こるであろう出来事を口にし、大きく深呼吸をする。

同時にガタン！と椅子を倒しながらタバサは立ち上がった。

初めて見る、少しだけ明るい表情で。

「お母様は元に戻るの?!」

「ええ、元に戻ったって聞いているわ」

「聞いている？ 誰に？」

「私も最初は信じられなかったんだけど……サイトよ。あいつ、未来の人間なのよ。」

そしてその未来では一度 ”私” に召喚されていて、ここにいる人間と深く関わってどうなるかを知っていたのよ」

部屋は非現実的な私の話により、まるでサイレントがかけられたかのように静かになった。

外から聞こえていた男子生徒の歓声も今は聞こえない。

タバサが倒れた椅子を元に戻し、再び席に付く。

その白い顔は無表情に戻っていた。



「そう、お母様が元に……」

やがて、少しだけ続いた静寂を破るかのようにタバサが呟く。

表情は無かったが、声はどこか明るく感じられた。

「ちよ、タバサ！ あなた、こんな話を信じるの？！

そもそも、魔法も使えないルイズのお陰でトリスティンがアルビオンに勝つなんて、大ボラも良い所じゃない！」

「あら。魔法ならもう使えるわよ？」

「また……いいことルイズ？ そんな嘘をついてタバサを騙すなんて最低よ？」

あたしはこの子の事情は知らない。

けれど、あんたが言っている事が嘘ならきつとタバサはすごく悲

しむわ。

そんな嘘はあたしが許さない」

「嘘じゃないってば。……いいわ、見せてあげる」

そう言っつて私は杖を取り出し、”イリユージョン” を唱えてみせた。

すると部屋の入口にいつか見たネグリジェ姿のキュルケが現れる。

二人はその幻影を見てとても驚いた。

私はその表情を確認して、内心胸をなでおろす。

イリユージョンはその時初めて唱えたからだ。

どうやらこの魔法は規模がそれ程大きく無い物なら、詠唱も短くて済むようね。

ほっとする私と驚いて口をパクパクさせるキュルケ、そして少しだけ表情を崩したタバサの目の前で

あられも無い格好をしたキュルケの幻影は、うっきっきーと場違いなほど陽気に猿のモノマネを始めた。

その様子を見て、まず我に返ったのはキュルケだった。

「ちょっと！ ルイズ、なんであたしなのよ！」

「あんたが嘘だって言うからよ。これで信じてくれた？」

「わかったわよ！ 貴女が魔法を使えるようになったのは信じるわよ！」

「だからさっさとコレ消して！」

「うっきー！ うきやつ？ うっきやつきやつ？」

「ちょっと！ そんな格好するんじゃない！ うきやつ？、じゃないわよ！ めくつちやダメだって！」

「燃やす！ 絶対燃や……うわあああそれだけはダメえ！ そんな所搔いちゃだめえ！ もおおお、ルイズ！」

キュルケの悲痛な声を無視して、私は幻影に猿のモノマネをさせ

て腹を抱え笑っていた。

タバサも顔を伏せ肩を小さく震わせている。

キュルケは顔を真赤にして怒り、必死に幻影に猿のモノマネを辞めるようになっていた。

そのまま暫くは一方通行のやりとりを行っていたが、言葉が通じないと理解するや胸の谷間から杖を取り出す。

そして杖を振りかざすキュルケを見た所で、私は慌てて幻影を消した。

もうちょっと慌てるキュルケを見ていたかったけど、部屋ごと幻影を燃やされてはたまらないわ。

……ホント、残念。

「はあ、はあ、それにしてもあんた、変わった魔法使えるようになったのね。何の系統？ 風？」

「虚無よ」

「はあ？」

「虚無。伝説の系統ね」

いい加減見慣れてきた驚く二種類の顔を眺めながら、私は部屋の暗さに気がついた。

外はいつの間にかすっかり日が暮れてしまっている。

魔法のランプに合図を送り、部屋に明かりを灯しながら私は話を続ける事にした。

サイトに聞いた未来の経緯や虚無について、できるだけ詳しく二人に説明していく。

虚無の事。

これから起こる事。

ガリアやロマリアの事。

サイトの事。

二人はそのすべてに驚愕し、キュルケはもっと早く言ってくれれば良かったのにと私に詰め寄った。

「しょうがないじゃない！ 私だって最近までは……今だって自分の事だけで精一杯だったんだから！」

「でも、ずるいわ」

「……わたしは、お母様が元に戻るとわかったただけでもよかった」

「ゴメンね、タバサ。すぐに治してあげたいんだけど……」

「いい。時がくれば元に戻せるのでしょうか？ それも近い内に」

「ええ。歴史がこのまま変わらなければ、ね」

「ならいい」

「本当に？」

「……今までは希望すら見つからなかったから」

タバサは僅かに固い表情を綻ばせて、小さく言葉を紡いだ。

その言葉に込められた喜びはよく理解できるだけに、私自身もすこく嬉しく感じて

自然に両手がテーブルに載せていたタバサの右手を取り、優しく包んでいた。

「それでね、夢の話の続きなんだ……」

「わたしは信じる。それで、何をすればいい？」

「何もなくていいわよ。

もともとの歴史じゃこんな事なかったようなんだけど、色々あってね。少し”変わった”ようなの。

で、未来の”私”はサイトが居ない間、タバサにサイトの代わりをして貰ったんだと思うんだけど……」

「わたしがあなたの使い魔になればいいのね？」

「ううん、だから何もしなくてもいいわ。

そもそも、虚無魔法はものすごく詠唱時間が長い。本来は使い魔であるサイトが盾となつて

詠唱中はわたしを守るんだけど、タバサにそんな事をさせるわけにはいかないじゃない」

「あ、そうだ。ねえ、ルイズ。ダーリンの病気つてもしかして関係があるの？」

「なんでも、こっちに来た時の影響で、能力を使えば使うほど記憶が消えてしまうようになってたの。

他にも命に関わる能力の欠陥があつてね。

で、サイトはその治療の為に今 ” 時の魔女 ” とかいう奴の所に居るわ」

「あんた、何度も大怪我させていたものねえ。それに、 ” 時の魔女 ” ってなんだか胡散臭い名前」

「わかった。彼が帰ってくるまで、わたしがあなたを守る」

「だからそれはいいの、タバサ。未来の私は貴女に助けて欲しいと考えたようだけど、私はちがう。」



これ以上タバサに重荷を背負わせる訳にはいかないもの。

大丈夫、アルビオンの件が片付いたら必ず私とサイトが貴女もお母様も助けてあげるわ。

あ、貴女の妹も助けないとね。

大体、サイトの代わりなんて命がいくつあっても足りないわよ」

そう言つて微笑み、タバサの右手を包んでいた両手から左手だけを外し杖を手にとる。

そして ” デイスペル ” を詠唱し、タバサにかけられていた ” 犠牲 ” を解除した。

私の右手の中でタバサの右手の甲からすうとアザが消えていく。

「でも、あなたかダーリンが死んじやつたら、タバサのお母様を助けられる歴史も狂っちゃうんじゃない？」

「勝手に殺さないでよ。私もサイトも死なないわ」

「わたしが守る」

「だからいいのよ、タバサ」

「大丈夫、わたしが守る。それがわたしの希望に繋がるから」

タバサは添えていたわたしの右手をその右手で握り返し、立ち上がった。

その顔は相変わらず無表情だったが、生気に満ちていて力強く感じられる。

なぜだろう？

この時急に私はサイトが側に居ないという事実を強く実感して、胸が苦しくなった。

その息苦しさを、握られた右手の温かさがゆっくりと払拭していく。

ああ、そうか。

私は心細かったのか。

寂しいだけでなく、不安でたまらなかったんだ。

自覚しながらタバサを見ると、彼女は優しく一度だけ頷いた。

右手から伝わる力と熱が体中に広がっていくような錯覚を覚える。

気がつくともたしもし立ち上がり、握られた右手を握り返していた。

そう、握手をするような形で。

「……ありがとう、タバサ」

「あーあ、仲良くなっちゃって。少し妬けるわね。

ねえ、ルイズ。あんたやタバサの事情は後でゆっくり聞くとして、

あたしには何か無いの？ 未来の秘密とか」

手を握り合う私達を見て、キュルケが少し拗ねたように茶々を入れてきた。

頬を少し膨らませ、なんだか面白くなさそうだ。

少し考えて、私はサイトが言っていたある事実を思い出す。

「あるわよ?」

「えっ、何々?!」

不機嫌そうだった表情を一変させ、目を輝かせながら私へと詰め寄るキュルケ。

私は意地悪く笑い、キュルケではなくタバサにそっと耳打ちした。

キュルケが未来に誰と結婚するのかを。

その伴侶の名を耳打ちしたのだ。

タバサはその名を聞くと、再び顔を伏せて今度は先程よりも大きく肩を震わせた。

「な?! 何でタバサにだけ言うのよルイズ! 何なの、タバサ!

あたしの秘密ってどんなもの?!」

「い、いま……はそっとして」

「ちょっと！ タバサの様子が尋常じゃないわよルイズ！ 何言っ  
たの!?!」

「あなたの未来の ”秘密” よ」

「何なのよもう！ 教えなさい!」

「タバサに聞いて。ああ、もうこんな時間。わたし先に食堂に行く  
ね」

「ちょ、待ちなさいルイズ！ タバサ、教えて？ ね?」

「! !!」

「そんなに笑うなんて……一体なんなのよ!」

二人を部屋に残し食堂に向かうべく廊下を歩く私は、キュルケの大声を背にしながら少し悩む。

本当にこれで良かったのかと。

彼女達を私の戦いに巻き込んで良かったのかと。

歩きながら私は悩んだが、やはり彼女達を頼ることにした。

背に聞こえるキュルケの大声や、タバサが一瞬見せたあの表情をなぜか手放したくなかったからだ。

何より、右手の暖かさが嬉しかった。

夕食後、私の部屋で誰にも知られてはいけない会話が深夜まで続いた。

改めてタバサの口から過去が語られ、私やタバサの身の振り方やこれからどうすべきかを三人で話しあったのだ。

結論としてはサイトが帰ってくるまでは、何か事件があったら三人で当るうと言う事になり

今夜の事は三人だけの秘密と言う事で纏まった。

ただ私とタバサが知る赤の秘密だけは、最後まで当事者が知ること  
はなかった。

4 - 3 : e x t r a e p i s o d e / そして三重奏は学び舎に響く (前書き)

オリジナル挿話です。



超強い。

月の下、ヴェストリの広場。

姫さまに呼び出される前日での事。

私とタバサは杖を構えて対峙していた。

ガリア本国からタバサの元へ至急一時帰国をする旨の知らせが届き、  
帰国の前に

私の虚無魔法を使った戦闘訓練をしようと言う事になったのだ。

本当はタバサと一緒にガリアへ行きたいと思ったが、私も明日は姫さまに呼び出されているので流石について行くのは無理。

だから、タバサにはキュルケがついて行くことになった。

タバサ自身は私の護衛をキュルケに頼みたかったようで、一緒にガリアへ行く事には渋った。

しかし、今の私 ” 達 ” の目標は、タバサのお母様とどこかに居るらしい双子の妹の救出だ。

その目標を遂げた後は、ハルケギニアの裏で狂気の陰謀を巡らせているガリア王ジヨゼフ一世との戦いが待っている。

タバサにとっては叔父にあたり、彼女のお父様を暗殺し、お母様に心を壊す薬を飲ませ、タバサ自身に辛苦の道を歩ませている

張本人であり復讐すべき相手だ。

私にとっても裏でレコン・キスタを操り、アルビオンとトリステインを戦火に巻き込みながらロマリアの教皇と謀略戦を繰り広げ

多くの犠牲者を生み出していく ” 虚無 ” を操る敵となる相手だ。

そのあまりに強大な相手と戦う為には、サイトが知る私達が勝利した歴史を変えないようにする必要がある。

その為には少なくとも、今の状況下で私達の内誰一人として欠けるわけにはいかない。

つまり、私だけが安全であれば良いという問題ではないのだ。

昨夜の話し合いでも、どうせ関わりを持つのなら私の虚無の問題もタバサの問題も、すべて共有しようと言う事にした。

あ、あとついでに赤いのが何か困った事があつたら、私達が全力で助けてあげる事にもなったっけ。

キュルケにはまだ少し……そこそこにわだかまりがあるけれど、憎い訳じゃない。

ツエルプストーだと言う事や、散々揶揄された過去がある分まだ打ち解けきれない部分があるのだ。

理性では面倒見のいい気さくな人だとみ……認めているわ。

ちなみに、タバサの過去の話を詳しく聞いた時私たちは、彼女のことをシャルロットと呼び直そうとした。

しかし彼女本人の意向により、いままで通りにタバサと呼ぶことになったのだった。

理由は ” 本名を名乗るのはお母様の心を取り戻した時 ” としたらしい。

閑話休題。

そんな訳で、当分は危険な事が無さそうな私より、恐らくは危険な任務が待ち受けているであろうタバサの方にこそ

キユルケがついて行くべきだと私と赤いので彼女を説得したのだ  
た。

しかしあの子も意外と頑固で、私の自己防衛能力を理由にそれを受  
け入れようとしない。

それじゃあこうしましょうと言う事になり、その夜人気の無い月下  
のヴェストリの広場に私達は杖を持って繰り出した。

こうして見慣れた二つの月の下、戦闘訓練と称した模擬戦を私と夕  
バサで行うことになったのだけれど……

「あいだ!」

超強い。

きっとサイトならこういう時にはこう言うわね、うん。

タバサのウィンドブレイクであっけなく私は吹き飛ばされ、しこた  
まお尻を石畳に打ち付けていた。

それも何度も何度も。

手も足も出ないとはまさにこの事で、模擬戦が始まってからずっと虚無魔法である”エクスポージョン（爆発）”を詠唱する間もなく

彼女の手加減した魔法によって吹き飛ばされ、無様にお尻を強打してばかりだった。

「ちょっと、ルイズがんばりなさいよ。あんたも結構修羅場をくぐってるんでしょう?」

「う、うっさい! 魔法を使った実戦なんて殆ど無いんだからしょうがないじゃない!」

「一応聞くけど、ダーリン抜きで魔法使って戦った経験ってある?」

「あるわよ! この前だってアルビオンの艦隊をまるごと吹き飛ばしたんだから!」

「……事実だけに何も言えないわね」

「对メイジの経験は？」

「……無いわ。」

正確にはアルビオンで姫さまの手紙を守るため、ワールドとほんのちよつとだけ戦った事があるけれど……

あれはきつと経験の内に入らないわよね。

私の返答にキュルケがあちゃあ、と額に手を当ててため息をついた。タバサは構えていた杖を下ろし、そんなキュルケにむかって一言、居残り決定と口にした。

「ちょ、待って！ 私だってやれば出来るわ！」

「でも、戦い方も知らないんじゃないかねえ？」

「無駄」

「お願いよ！ タバサ、戦い方を今からでも覚えれば……」

「そんなにすぐ覚える事ができれば、誰も苦労はしない」

「そうよねえ。あんだ、魔法を使う事に関しては一年生より経験がないのよ？」

「そんな事ないわよ！ 私は伝説の系統 ” 虚無 ” なのよ！ 誰にも負けはしないわ！」

私のその言葉にキュルケではなく、意外にもタバサが反応した。

彼女は早足で目の前までやってきて、なによ？ と思う私の頬をいきなり平手で打った。

パシン、という音がヴェストリの広場に響く。

私もキュルケも呆然としてタバサを見たが、彼女は表情を変えずじつと私を見つめていた。

打たれた頬はすこし熱かったが、痛みは無い。

「タバサ？」

「あなたはこのままでは確実に死ぬ」

「え？」

「覚えておいて。メイジの ” 強さ ” とは扱う魔法の系統やクラスの高さなんかじゃない。

強者には知恵をもってあたり、弱者には驕りを廃し、絶対強者には暗殺が有効。

そう、決して ” 無敵 ” など存在しない。

ドットメイジや平民にスクウェアメイジが殺される事だつてある」

「タバサ……」

「二度と ” 伝説の系統 ” を理由に強さを誇らないで。

これから先誰かと命のやりとりを行うのなら、それは必ず死に繋がる」



彼女はそう言い放つと、再び元いた場所に移動し杖を構えた。

私はしばし呆然として打たれた頬に手を当てていたが、遅れて彼女の言葉と気持ちを理解し杖を構える。

視界の端では赤いのがニヤリとしていた。

こういう時に口を出してこないあたり、あいつは大人なんだろう。

……そういつ落ち着いた所がすこし羨ましい。

「ありがとう、タバサ」

「わかればいい」

そして、今度はタバサの方から積極的に攻撃を仕掛けてきた。

先程よりも強い、それでいて手加減がされたウィンドブレイクが私

に襲いかかる。

次の瞬間私はさっきよりも更に遠くへ吹き飛ばされ、気がついた時には冷たい石畳の感触を背中で感じていた。

立ち上がるうとした時にやっと全身に打撲の痛みが襲ってくる。

「いつ、たああ……」

「考えて。

勝つためにどうするか。敵わないのならどうすべきか。攻めるのか。守るのか」

そう言ってタバサは杖を私に突き出す。

ああ、どうやら戦い方は教えてくれるつもりなのね。

ありがたいわ。

見てなさい！ 私の……

瞬間、視界が回る。

再び彼女の風を叩きつけられたのだ。

今度はうまく受身が取れなくて、背中を強打してしまい呼吸が止まった。

私は石畳の上を這い蹲り、肺に空気を入れようと大きく口を開け喘ぐ。

何とか視線だけを上げて見たタバサの小さな体からは、猛烈な圧力を感じた。

「敵は待つてはくれない」

「はっ、はっ」

まずいわ、次がくる！

か、考えなきや！

詠唱が長い魔法は論外！

えっと、えっと

えっと、えっと、えっと、えっと

あ

あ、あ、あ、あ、来る！ 来る来る来る！ ダメ、避けられない！！

あだ！！

視界が再び回る。

今度は派手に吹き飛ばされたのか、浮遊感が終わらない。

時間がゆっくりと流れるように感じながら、思考だけは目まぐるしく頭の中を駆け巡る。

ああ、もたもたしてたから、又ウィンドブレイクを受けてしまったわ。

まずこれを受けないようにしなくちゃ駄目ね。

やだな、また地面に叩きつけられるのは。

明日はきつと体中アザだらけね。

次はとりあえず避ける事に専念しよう。

ディスプレイで魔法を消す……には詠唱が間に合わあいだあ！！  
そこまで考えた所でやっと浮遊感から開放され、地面に叩きつけられた。

再び背中から全身に向かって強い衝撃が走り、感じていた時の流れが元通りになっていく。

私はとうとう広場の外にはじき出されてしまい、隅にあった植え込みに落下したらしい。

背の低い植物の上に落ちたのか今度は息は止まらなかった。

全身の打撲による痛みの為、暫くはそのままうめいていたかったが、すかさず上体を起こしタバサを確認する。

果たして彼女は予想通り、すでに次に放つ魔法の詠唱を始めていた。

いけない！

何とかしなくちゃ！

逃げる？

無理！ この体制じゃ起き上がろうともがく内に魔法が飛んでくる！

ディスプレイを唱えて打ち消す？

ダメ！ 詠唱時間が間に合わない！

じゃあ、じゃあ、えっと、移動！ とにかくここから移動！

それもすぐに移動！ そう、”瞬間移動” ! あるじゃない、いい魔法が！

詠唱なんて途中までいいわ！ ここから一マイル、一サントでも移動するのよルイズ！

”瞬間移動” のスペル、最初の二節は……

「えっ？」

「あっ」

「いちち……ほえっ?!」

後ろでぼひゅんと鈍い音が聞こえた。

つい先程まで私がいた植え込みに、強い風が叩き込まれた音だ。

しかしその光景を確認することはできない。

今、私の目と鼻の先にタバサの驚いた顔があるからだ。

三者三様に驚きの声上がり、私はあわててもう一度 ” 瞬間移動 ” を唱えた。

「わわわ、う、 ” ウリユ ” !」

視界にあつたタバサの顔が消え、彼女から6メートル程離れた位置に私は再び瞬間移動する。

タバサは考えるより先に体が動いていたらしく、私がいた場所へ横薙ぎに放った蹴りが空を切っていた。

……あ、危なかつたわ。

それにしてもあの子、澄ました顔してかなり容赦無い性格のようね

……

「……虚無の魔法？」

「う、うん」

タバサは攻撃の手を一時止めて、ポツリと質問してきた。

先程から感じていた圧迫感のようなものはもう感じられない。

私が戸惑いながらも彼女の質問を肯定すると同時に、キュルケが後ろから抱きついてはしゃいぐ。

「すごいわ、ルイズ！ 短い詠唱で済む魔法もちゃんとおあるんじゃない！」

「うわわ！ は、離しなさい！ あのね、本当はもつと詠唱は長いのよ？」

ただ、殆どの虚無魔法は途中で詠唱を辞めちゃっても一応発動はするの。その分効果は落ちるけど」



「へえ。すごく便利なのね」

「へ？ 便利？ どうして？」

「だってそうじゃない。普通の系統魔法はどんなに急いでいても、詠唱だけはキツチリ唱えないといけないわ。」

”発火” だってウル・カーノって最後まで唱えないといけない。ウル、だけじゃドットだろうとスクウェアだろうと発火を成功させたりはできないもの」

「あ、そうか。確かにそこは虚無と系統魔法は違うわね」

「ちょっと確認したい」

珍しくタバサが会話に割り込んできた。

忌々しい胸を押し付けてくる赤いのを、必死で振りほどこうとしていた私は

キュルケを背負うような格好でなあに？ と応じた。

「他にどんな魔法が使える？」

「そうね、瞬間移動の他に爆発と幻影以外には移動用の ” 加速” と ” デイスペル” ……これは魔法解除ね。

それと記憶を奪ったり書き換える ” 忘却” 、同じく他人の記憶を誰かに見せる ” 記録”

あとは……サイトの世界と行き来する ” 世界扉”<sup>ワールド・ドア</sup> に、サイト専用の ” 犠牲”

任意の相手を使い魔に出来る ” 使役” ね」

「うわ！ なにそれ、とんでもない魔法ばかりじゃない！」

「でも ” 犠牲” や ” 使役” は使えないわよ？ 私の使い魔はサイトだけだし、アイツが戻ってくれば犠牲も必要無くなる。

” 世界扉”<sup>ワールド・ドア</sup> や ” 忘却” 、 ” 記録”<sup>リコード</sup> は戦闘向きじゃないし瞬間移動や ” 加速” は移動用でしょう？」

「……はあ。タバサ、やっぱりこの子は ” 魔法初心者” ね」

「宝の持ち腐れ、オークに宝石」

「な、なによ二人して！」

二人のまるでダメな子を評価するような呆れた声に、私は思わず声を荒げた。

伝説の系統、虚無。

それを奢る愚は先程タバサに窘められたとは言え、初心者と揶揄される程自分が未熟だとは、思っても見なかったからだ。

1562

「いいわ、今度はあたしが説明してあげる。

いいこと、ルイズ？ 魔法を戦闘用とか移動用とか区切るの辞めなさい。

たとえば、相手が強力なスクウェアメイジがいたするでしょう？」

呆れたように言って、キュルケは私を開放した。

真顔で私に正対する彼女に怒りを一旦鎮めて、真剣にその赤い瞳を睨むように見つめる。

「うっ」

「ドットメイジがそのスクウェアメイジを倒すにはどうしたらいいと思っ？」

「そりゃ、頑張っって同じスクウェアメイジになれば……」

「頑張っってスクウェアになれるなら誰も苦労しないわよ。まったく、アンタたちトリステイン人はどうしてこう、頭が固いのかしら」

「猪」

「な、ぬわんですてええ！」

……沈めた怒りが再び私を支配した。

い、猪ってどついつ事よタバサ！

ていつか、さっきから何気にあんたの方が酷いわよ？！

「いいから。怒る前に聞きなさい、あなたの為なのよ？」

「う、ぐ……悪かったわよ。つづけて」

「お願いします、は？」

「お、おおおお願いします！」

「よろしい。でね？」

ドットメイジがスクウェアメイジに勝つにはね、不意打ちで杖を奪ってレビテーションでもかければいいの。

で、高い所に浮かべてから落とせばいいわ。

そうね、食事やおトイレ、お風呂に睡眠中、性交中を襲うなり盗むなりすればいいわ。

眠り薬やしびれ薬を仕込んだ手紙を使うのもいいかもね。とにかく隙をみつけて魔法を使えないようにするのよ。

どう？ 別に特別強い魔法も使わないし、実力も必要ないわよ？」

「毒殺も有効」

「なによそれ！ そんなの、貴族の戦いじゃないわ！

それに、今みたいに正面切って戦わないといけなくなったらどうするのよ！」

私の感想にキュルケは両手を軽く上げて首を振りながら、ヤレヤレとため息をついてみせた。

いつの間にか彼女の隣に移動していたタバサも、キュルケとまったく同じ動作をまったく同じタイミングで行う。

ただしタバサはあくまで無表情で、だ。

自分の為に色々と教えてくれていると分っているんだけど……すごく、腹が立つ。

「正対しててもその時は逃げればいいじゃない。そりゃ、私だって正々堂々と決闘して勝てれば良いとは思わよ。」

引く訳にはいかない事だつてある。

だけどね、埋める事ができない力の差は、結局他の所で埋め合わせるしか無いの。

勝たなければ自分が殺されるのよ？」

「でも、そんなの、貴族の誇りは……」

「ルイズ、タバサがずっとくぐつて来た修羅場はそういう世界なの。いいえ、タバサの場合は逃げることにすらできない物ばかりだから、まだつらいわ。」

それはあたしでも理解出来る。

貴族の権謀術数が渦巻く世界ではね、あたし達の常識なんて通じないの。

あなたも昨日一緒にタバサの話聞いたから理解できるはずよ？それに……これからはあなたもそういう世界で生きて行くことになるのよ。」

キュルケの言葉に私は何も言い返せず、唇を噛んだ。

その言葉は真実であり、改めて自分の問題でもありと再確認したか

らだ。

先程までの自分の考え方の甘さを恥じて、それでいて何処か認めたくなくて、思わず視線をキュルケから逸らす。

「いいこと？ ルイズ。」

あなたが無理に貴族の誇りを捨てる必要は無いけれど、相手はあなたに合わせるはくれないという事をまず理解しなくちゃ。

その認識の違いはメイジと戦う場合、如実に現れるわ。

メイジとの戦いは正面から正々堂々と、威力のある魔法の腕比べをする必要はないんだからね」

「……わかったわ」

「そうね、まず第一に死なない事を考えるといいんじゃない？」

あなたの魔法はとても強力だから、きっとそれが出来るわ。いいえ、使いこなせばタバサの助けにだってなれるはず。

例えば、瞬間移動だけでもどれだけ恐ろしい魔法になるか。

一瞬で相手の背後に移動し、毒を塗った短剣でたった一度斬りつけるだけで勝てるのよ？」

「別に毒じゃなくてもいい。痺れ薬や眠り薬でもかまわない。

連続で瞬間移動を使って逃げる事も有効」



そうか、そういう使い方もあるんだ。

命をかけた戦いには、それくらい柔軟な考え方をしなくちゃだめなのね、きっと。

……そして、これからはそれ位の事を考えていないと厳しいって事でもあるのか。

「理解したようね。まあ、逃げる訳には行かない、正面からぶつかる戦いがある事も事実だけど、滅多にそんな事は無い筈よ。

じゃタバサ、次で最後にしましょ。

ルイズの戦いぶりを見て、あたしが学院に残った方がいいかどうか判断してちょうだい。

あたしは、あなたの方がキツイと思うからついて行くつもりだけだね」

タバサはキュルケに短く返事をして、広場の中央へと進み出た。

そして私に杖をむけ、構える。

彼女の小さな体からは、再び強烈な威圧感にじみ出る。

私はキュルケの言葉とタバサに打たれた頬の熱さを反芻しながら、杖を手にとって構えた。

そう、これからの戦いは貴族の決闘なんかじゃない。

死んでは元も子もないのだ。

今持っている常識は捨ててしまおう。

だけど、誇りまでは捨てる必要はない。

私はただ、サイトが返って来るまで生きていればいいんだ。

生き伸びる事を第一に考えていれば、きっとそのうちアイツは戻ってくる。

……いや、ちがう。

ただひたすらに彼の帰りを待つだけではだめだ。

いつか誓ったではないか。

敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶ。

彼がくれたこの言葉を胸に、誇り高く戦い抜いてみせると。

そしてもう一度、彼と逢うのだと。

きつと誇り高く戦う事と、アルビオンで見た人達のように誇りを持つて死ぬことは違う。

私にとって誇り高いとは……胸を張り、彼の横に立てることだ。

彼の隣に立ち、共に戦うことだ。

その為には、彼の留守中に一人で死ぬことは許されない。

己が被る一時の無様を気にして、膝を折るわけにはいかないんだ。

再びサイトの前に立ち、今度は彼の隣で共に運命に立ち向かう為に、今は生き延びる必要がある。

そうだ。

私はこんな所で、こんな理由で、立ち止まるわけにはいかないんだ。

彼の帰りをただ待つだけじゃダメなんだ。

強く。

強くならねば。

手にした杖を更に強く握り、半ば自分に向けて宣言した。

「いくわよ」

「きて。容赦はしない」

心が激しく震える。

自らを鼓舞し、私は短く ”瞬間移動” を唱えた。

視界が一瞬歪むが直ぐに元に戻る。

正面から見据えていたタバサは、私に背を向けていた。

いや、彼女の後方へ私が瞬間移動したのだ。

それを予測していたのか、タバサは素早く後ろへその小さな体には不釣合な大きな杖を降った。

同時に彼女の風魔法、ウィンドブレイクが発動する。

私は体術による反撃を恐れてタバサから離れた位置に移動していたので、杖は体に届かなかったが ”ウィンドブレイク” は違った。

再び ”瞬間移動” を唱える。

今度は少しだけ長めの詠唱で。

そして、私が消えた空間を標的を見失った暴風が薙いだ。

「……………広場から消えた？」

月の下、ヴェストリの広場の中央でタバサは一人杖を構え呟く。

私の姿を探し奇襲に備え前に後ろに、そして上に注意を払う。

学院の塔の屋根からそんな彼女の様子を確認して、私は虚無の呪文をゆっくりと唱えた。

やがて、五人の ”私” がタバサを囲むように現れる。

”イリュージョン” だ。

幻影達は、一斉に杖を構えタバサに向かって走った。

内、一体の私に向かってタバサも地を駆ける。

不意に彼女は走る勢いのまま上体を寝かせて、地面を滑るように飛び幻影の足を蹴りつけた。

地面すれすれのその蹴撃に、幻影は勢いもあってよけきれず足を取られ履き消える。

私の幻影を一体消したタバサは間髪居れず立ち上がり、一所にまとまってしまった幻影達をウィンドブレイクでなぎ払う。

その強烈な風によって一斉に消えてゆく幻影達。

しかし、私はその隙を狙っていた。

魔法の発動を待つて瞬間移動を唱え、タバサの背後に飛ぶ。

詠唱し魔法を発動させた直後。

その瞬間だけはいかなるメイジでも動く事ができず、次の詠唱も間に合わない。

そんな無防備な状態では、たとえ短く詠唱し未完成な ” エクスプロージョン（爆発） ” でも、至近距離で放てばただでは済まない。

そう、この瞬間、タバサと比べ実力では遥かに劣る私の勝利は目前にあった。

そして……

「えい！」

間の抜けた声が、緊迫した冷たい空気を暖めた。

「……離して」

「……ルイズ。あなたやつぱり”初心者”ね」

「よ、よこしなさい！ タバサ、大人しくそれをよこしなさいってば！」

必死にタバサの大きな杖を奪おうとする私を見て、二人の冷たい声が誰もいない広場に響く。

張り詰めていたタバサの緊張と圧力はしほみ、両手で彼女の杖を取り上げようとする私をタバサは難なく引き剥がした。

「この子私と同じくらい細いのに、どうしてこんなに力があるのよ！」

「はあ、タバサ。やっぱりあたし残った方がいいかもね」

「……いい。もし短剣でも使われていたらわたしの負けだった」

「あら、甘いよね」

「経験の問題」

「あ、一回死ねって事なのね」

「そう」



ちよっと！

死ねって何よ、死ねって！

青いの！

そこで肯定してるんじゃないわよ！

それと赤いの！

私を見てニヤニヤするんじゃない！

今度は食堂であんたの幻影に猿の真似をさせるわよ？！

……なによ二人ともその目は。

タバサ、あんた普段は表情をほとんど動かさない癖に、こんな時ばかりキュルケと同じような目つきで

じつとりと私を見つめたりしないで！

「な、なによ、しょうがないじゃない。

大体私、今短剣持ってないし、あのタイミングで手加減した  
エクスプロージョン（爆発）” 使って”

明日から危ない任務に出かけるタバサに怪我でもさせたらどうするのよ！」

「ま、そういう事にしときましようか。」

「うん」

「しときましようか、じゃない！　そういう事なの！」

がなる私を無視して、二人は寮に戻るべくわなつく私と広場に背を向けた。

それから背を向けつつ、キュルケは先程したように両手を軽く上げて首を振りながら、ヤレヤレとため息をつく。

タバサもその隣で、まったく同じ動作をまったく同じタイミングで行ってみせた。

まるで双子の姉妹のように息の会ったその動きは、私に少しだけ嫉妬をさせる。

そんな二人の背を追いながら、私は部屋に戻るまでずっと弁解を試みたのだった。

彼女達が、私の力を認めてくれたような実感を手にして。

4 - 4 : 惚れられて、困るもんじゃないでしょ？

味方が増えると言う事は、すごく心強い。

姫さまに呼び出され、王宮へ赴いた日。

私は王宮から戻り学院の自室で一人考え事をしていた。

タバサとキュルケは、私が王宮へ行っている間にガリアへ発ったよ  
うだ。

姫さまにもらった許可証とサイトに貰った金品が入った袋をクロ  
ゼットの奥へしまい込みながら、代わりに一振りの短剣を取り出し  
た。

それから椅子に腰掛け、おもむろに鞘から短剣を引き抜く。

ザリツと革製の鞘と短剣が擦れる音がして、現れたその刀身は白かった。

短剣は私の護身用にとタバサがくれたもので、刀身は細く湾曲し杖よりも短く、大きさは羽ペンよりも小さい。

ピローナイフ（護身用枕短剣）という代物で、本来は貴族や平民の商人が枕にこれを忍ばせ、暗殺者などからその身を守る為の武器だ。いつも身につけているようにと再三タバサに念を押されていたが、この日ばかりは学院に置いて王宮へ出かけていたのだった。

何故かというと、このピローナイフは絶対に王宮へは持って行つてはいけない代物だったからだ。

短剣の刀身は別名 ” 毒竜の牙 ” と呼ばれている物で、暗殺に用いられる事が多くトリステインでは禁制品となっていた。

その名の由来となる白い刀身は、ガリアの火竜山脈に生息するウイヴルと呼ばれる飛竜の牙を削り出して作られる。

この飛竜は宝石の瞳にコウモリの翼と鷲の足、そして毒蛇の尾を持つ変わった生き物だ。

美しい宝石の瞳は結構価値がある為、一攫千金を狙う傭兵や貧乏貴族、それに宝飾デザイナーが血眼になって探している飛竜だけれど

一般には魔獣の中で最強クラスの毒を持つ飛竜として知られている。その為、欲に目がくらみ命を落す者が後を絶たない。

ウイヴルの牙は芯が空洞になっており、その空洞から葉脈のように小さな穴が無数に牙の表面へと伸びている。

その穴に毒液を流し、牙の先端だけでなく表面全体に毒を分泌させて、欲に目がくらんだ獲物に食らいつくのだ。

もともと、その牙で噛み付かれる前に大半のハンター達は猛毒のブレスであっさり命を落とすそうだけど。

”毒竜の牙”の白い刀身はこの牙の芯を残すように刃を削り出し、柄の中に毒などを貯蔵しておいて

使用時に柄を強く握ると、ウイヴルと同じように刃全体に毒が行き渡る仕組みになっている。

普通の短剣に毒を塗る事とは違い手間がかからず非常に軽い為、暗殺者達にもかなり重宝された品だった。

だから現在では禁制品という扱いになり、王宮に持ち込もうものなら問答無用で投獄されてしまう。

鞘から引き抜いた短剣は飾り気こそ無かったが、シンプルな黒い革製の柄と黒い革の鞘に白く反った刀身がはえて中々美しい。

ガリアでは有名なアーティザン（職人）の作らしいが、暗殺からその身を守る為のピローナイフに暗殺用の刃を取り付けるなんて随分と皮肉な話よね。

私は短剣に込められたデザイナーのセンスに苦笑し、柄尻の蓋を開け毒を入れる為の小瓶を柄の中から取り出した。

小瓶の中身は空だ。

どうしたものかと小瓶を眺め、私は腕を組んで思案にふける。

……これに水に溶かした毒を入れれば良いのだけど、そもそも大半の強い毒は禁制品なのよね。

短剣そのものは後で姫さまに特別所持許可証を頂けばいいとして、問題は中身になるわ。

エキスプロージョン（爆発）以外で直接攻撃に使えそうな魔法は無いから、タバサに言われたように ” 加速 ” や ” 瞬間移動 ”

を使ってコレで攻撃するしかなさそうだけれど……強い毒なんて使ったら確実に相手は死んでしまう。

でも弱い毒だと意味ないし、そもそも毎回相手を ” 必殺 ” しなさいといけないとは限らないわ。

殺してはいけない相手とも戦う必要が出てくるかもしれない。

だとしたら、しびれ薬や眠り薬がいいわね。

あと、間違っつて味方を傷つけた時に解毒薬も必要になるわ。

眠り薬だとうまく飲ませられるかわからないから、しびれ薬の方がいいのかも。

でも私には……

そこまで考えて、ため息を一つ付いた。

私にはそういつた秘薬を作る技術は無い。

かといって、どこかで買い求める訳にもいかない。

”しびれ薬を買い求めた女王陛下直属の女官” など、この先姫さまの誘拐事件が起きてしまった時

真つ先に私が誘拐犯の仲間ではないかと疑われてしまう。

よつて、しびれ薬とその解除薬を求めるなら、自力で作るかだれか信頼のおける者に頼むしか無い。

「うーん、どうしよう……タバサならこういつた事をそつなくこな



せると思っただけど、今居ないし。

でもまあ、こんな貴重なものをもらってその上中身まで作ってちようだいつて言うのも図々しいわよね。」

誰もいない室内で一人唸り、もう一度ため息を吐く。

困った。

信用が出来そうな水メイジなんて姫さま位しか知らない。

後は……モンモランシーと面識は無いけれどジゼルのお兄様位か。

姫さまは当然頼めないから、モンモランシーに相談してみよう。

そうよ、毒じゃないんだしサイトに使わせるとか適当な事を言ってお誤魔化せばいいんだわ。

あの下級生に頼む手もあるけれど、作るのはきつとお兄様になるだろっし時間がとられそうだから除外。

よし、早速モンモランシーに聞いてみよう。

私は手にしていた短剣を鞘に収め、普段杖を仕舞う為の鞘を吊る腰の吊り具に、新たに取り付けた留め具で固定した。

とても軽い筈の短剣だったが、不思議と重く感じられる。

この重さはきつと、一人でこの身を守らねばいけないという重圧なのだろう。

そう感じて私は知らず緊張を覚えるのだった。

モンモランシーの部屋をノックした所で、中から悲鳴が聞こえた。

どたばたともみ合い暴れるような音がその悲鳴に続く。

私はためらい無く扉の把手に手をかけた。

鍵はかかってはいない。

杖を抜き、不意打ちに備えながら私は一気に扉を開け放ち中へ躍り込む。

杖を前に構え、部屋の奥、何かが蠢くベット、扉の影、テーブルの下、天井へと視線を素早く移し、最後にベッドへ視線を戻す。

果たして、ベッドで蠢いている何かは悲鳴と騒音の主だった。

モンモランシーがギーシュに押し倒される形でベッドでくみしだかれている。

「ああ！ モンモランシー！ 僕のモンモランシー！」

「ちょっと！ やめ、な、どこ触っているのよ！」

「……ごめん、モンモランシー。すぐに出て行くね」

「あ！ ルイズ、良い所に！」

「じ、じじ、じゃ、じゅっくりっ？」

「愛してる！ モンモランシー！ 愛しているんだ！ そう、僕は君を愛しているんだ！」

「待つて！ お願い！」

回れ右。

私は何も見なかった。

うん、これぞ淑女ってやつよね。

しかし、モンモランシーも見かけによらず大胆だわ。

まさかギーシュを部屋に連れ込んで、あ、あんな事を……

あとでじっくりと話を聞かせてもらおう。

私の時の参考になるかもしれないし。

「違うの！ ルイズ、お願いよ！ 助けて！」

「愛している！ なんとって、愛しているんだモンモランシー！  
僕のモンモランシー！」

「えっ？ だって、ねえ？」

「お願い！ とりあえずっわ、わわ、ダメ！ ギーシュ！ やめて  
！ いやっ！！ お願い、ルイズ！ 助けて！」

なんだか様子がおかしい。

とりあえず折角杖を取り出ししていたので ” 加速 ” を唱え、ベッドにモンモランシーを押し倒し狂ったように愛していると連呼している

ギーシュの脇腹に、高速で助走をつけた膝蹴りをお見舞いしてやった。

ドゴツと鈍い音がして、まるで豚のような悲鳴を上げながら派手に窓際まで吹き飛ぶギーシュ。

…… あらやだ。詠唱を完成させていないにも関わらず ” 加速 ”  
って結構すごい威力がだせるのね。

これ使い方を研究する価値あるわ、うん。

一人ほくそ笑みながら、ベッドの上で衣服の乱れを直すモンモランシーに手をさしのべる。

彼女は助かった安堵よりも、突然すごい勢いで視界からギーシュが消えた事に驚いていた。

「大丈夫？ モンモランシー」

「あ、え？ うん、大丈夫よルイズ。ありがとう、本当に助かったわ」

「一応確認するけれど、”お互いの合意”なんて無かったのね？」

「え？ ……うん、まあ」

なんてこと！

ギーシュの奴、女たらしのバカだとは思っていたけれど、まさか力づくで女の子をモノにしようとするような奴だったなんて！

貴族として、乙女として、一人の人間として、激しい怒りの炎が一瞬で胸に燃え広がる。

「よーーーーーくわかったわ、モンモランシー」

「え？」

「大丈夫、辛かったわね。私が間に合ってよかった。ええ、大丈夫よモンモランシー」

「ルイ、ズ？」

優しくモンモランシーを抱擁し、背中をさすってあげる。

そして、今だに部屋の隅で咳き込んでいる乙女の敵に、射殺さんとはかりに鋭い視線を送った。

モンモランシーを背にしてギーシュへ向き直り、杖を左手に持ち変え”毒竜の牙”を抜く。

毒は入っていなかったが、ナイフとして機能はするはずだ。

そう、ケダモノに慈悲など一切必要ないのよ。

「覚悟しなさい、ギーシュ。私が全霊をもってモンモランシーの名

誉を守って見せるわ」

「ちよ、ルイズ！」

「髪の毛一本、塵一つ。灰となったならその灰をもこの世に残しはしない！　いくわよ！」

「まって！　ルイズ、まって！」

「大丈夫よ、モンモランシー。すぐ終わるわ」

「違うの！　お願いよ、騒ぎを大きくしないで！」

「……ああ、モンモランシー。心配しないで。貴女の貞操は私が証言するわ。」

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの名にかけて、貴女は汚されてなどいないと。だから、安心して」

「だからちがうってば！　これにはわけがあるの！　お願い！」

「うつつ、ゲホッ、ゴフツ、いった、い、何が……」



「モンモランシー？ どうしてこんなケダモノを庇うの？ ……もしかして、そ、そそそそそういうプレイだったと、ととか？！」

「ちがう！」

モンモランシーはそう叫ぶと、私を押しつけ素早くギーシュにスリープ・クラウド” をかけて眠らせ”

開いたままの入り口の扉を閉めるべく、肩を怒らせ私の前をいそいそと歩いてゆく。

扉の向こうから幾人かの女子生徒が部屋を覗き見していて、モンモランシーは彼女たちにポケットから何か取り出して手渡した。

女子生徒達は手渡された物が学院内で最も人気のある、モンモランシー謹製の香水だと確認すると

その意味を理解したのかコクンと一度首を縦に振り、無言でそれぞれの部屋に戻っていった。

状況を未だ理解出来ていない私だけを残して、パタンと静かに扉は閉められる。

扉を背にして、モンモランシーはいくつも縦にロールした美しい金

の髪を揺らしながら、深く深くため息をついた。

安堵、というよりもこれから更に困難が待ち構えているような、そんなため息だった。

「どづいつ事？ モンモランシー」

「どづにもこづにも……まあ、とりあえず座って？」

モンモランシーに勧められ、椅子に座る。

テーブルにはワインの瓶とワインが注がれたグラスが二つあり、私の目の前にあるグラスのワインは誰かが飲んだのか

もう一方のグラスより少なかった。

そのもう一方のグラスがある席にモンモランシーは座り、青い瞳を私ではなくテーブルに向けてモジモジとした。

「……大丈夫よ、誰にも言わないわ。要件を済ませたらすぐにこの部屋での事を忘れて出て行く」

「要件？」

「解毒薬と一緒に、しびれ薬を作って欲しいの。短剣に塗るような奴で」

「なんだか物騒ね。何に使うの？」

「サイトに使わせるのよ。ほら、あいつすぐ怪我するでしょう？  
今だって怪我して療養の為に学院外の医者所にいるし。」

あいつ、大怪我は良くするけど傭兵みたいな真似は上手くて、揉め事の処理をする仕事をたまにやらせているのよ。  
そのお仕事に使う秘薬が欲しいの」

「そんな事させているから怪我するんじゃないか？」

痛い所を抉られ、思わずなによ！ と吠えそうになるが言葉を飲み

込んだ。

私のそんな様子を見て、モンモランシーは一瞬何か天啓を受けたかのようにぱっと明るい表情になり

それからすこし意味深な笑みを浮かべ、テーブルに両肘をつけて両手の指を絡ませた。

「ねえ、ルイズ。取引をしない？」

「取引？ 何を？」

「わたしね、今困っているの」

「私もよ」

「ええ、そうね。短剣に塗るようなしびれ薬が必要なよね？ 解毒薬と一緒に。そんなの、すぐに作れるわ。」

ええ、他ならぬルイズの頼み事ですもの、すぐに、今すぐに作ってあげる」

「本当に?!」

「だから、ね? ちょっと、わたしも助けて欲しいのよ」

そう言ってモンモランシーは目を細めた。

モンモランシー、すごいよ……とギーシュの寝言が聞こえる。

彼女は寝言に表情は変えなかったが、露になった白いおでこの隅に血管が浮き上がった。

「そりゃ、構わないけれど……」

「わぁ! ありがとう!」

「で、何して欲しいの?」

「難しい事じゃないわ。今からしびれ薬と解毒薬の材料をトリストタ

ニアに買いに行くから

その間ギーシュをこの部屋から決して出さないように見張って居て欲しいの。

それと、薬の代金として三百エキューを」

「じゃ、私行くね。秘密は約束したから守るわ、安心してねモンモランシー」

三百エキューという言葉聞いた瞬間、私は席を立った。

法外にも程がある値だ。

モンモランシーは足早に部屋を去ろうとした私の袖を慌てて掴み、引き止めた。

「まって！　お願い！　助けて！」

「悪いけど、そんな大金払えないわよ」

「お願いよ、ルイズ！ 他に頼めそうな人が居ないのよ！」

「大体ね、なんでしびれ薬を作るのにそんな大金が必要なのよ？ 私でも五エキューもあれば良い物が作れるってわかるわよ？」

「それは、その……」

「助けて欲しいなら正直になるべきよ、モンモランシー。意地を張ったりプライドを守ろうとしても誰も助けてはくれないわ」

そのセリフは、半ば自分にも向けられていた。

思わず苦笑を浮かべ今までの自分を振り返り、なんて愚かだったんだろうと思いつつモンモランシーに昔の自分を重ねる。

彼女はその言葉に何かを言おうとしたが、形の良い唇から出てきたのはため息だけだった。

「わかったわ、全部話す。ルイズ、もう一度座ってくれる？」

「ええ、いいわよ」

もう一度席に付き、肩をすくめて唇を尖らせているモンモランシーを見据える。

躊躇いながらも、彼女はゆっくりと顛末を語り始めた。

「わたしが香水作りが趣味なのは知っているわよね？」

「ええ、そうね。貴女の香水はとても素晴らしい香りだって皆褒めているもの。わたしも好きよ？」

「ありがとう。でね？ 香水という物は何の為にあるとおもっ？」

「何？ 藪から棒に。そうね……香りを楽しむもの？」



「違うわよ。香水は元々悪臭漂う街の匂いや、昔の不潔な貴族の体臭を誤魔化するための物なのよ」

「あ、ソレは知ってる。歴史の授業でやったもの。でも、今は違うでしょう？」

私達は毎日お風呂に入っているし、平民だって何日か一度サウナや水浴びをするわ。

それに悪臭もえっと、何千年前のガリアの王様が専用の役所を設置して、水メイジの傭兵を雇って

処理する方法や罰則を制定、各国がそれを取り入れて、大分マシになったってこの前の授業で習ったわね」

先日行われた授業を思い起こしながら、半ば説明口調でノートに書き込んだ内容を口にする

モンモランシーは眉を少し上げ、意外そうな表情をした。

「あら、アナタあのギトーの授業をちゃんと聞いていたのね。あんな奴の授業を真面目に聞く生徒なんて居ないと思ってたのに」

「あんなのでも一応先生ですもの。それに、魔法はともかく筆記の試験の成績は実家に知られるとひどい目にあつのよ」

「ふうん、あんたも苦労してるのね」

教師であるミスタ・ギトーは女子生徒の間での嫌われっぷりは半端ではない。

中には傲慢な彼の授業をすべてサボタージュする猛者までいるほどだった。

猿の使い魔にノートを取らせている生徒が同級生にいたので、彼の声をじっくりと聞きたくない大半の女子生徒は

その子にノートを写させてもらったりしている。

その為かミスタ・ギトーの授業の内容が頭に入るのは、数日後となるのが常なのだ。

モンモランシーもそんな生徒の一人なので、ちゃんとノートを取っていた私が意外に見えたのだろうか。

私だって本当はあんな奴の授業はゴメンだけれども、もしそれで成績が落ちて姉さまやお母様に知れたら……

背中に悪寒が走り、身震いを一つする。

想像するだに恐ろしい考えを頭を数回振って払い、私は話を続けることにした。


「そんなこと、どうだっていいじゃない。それで？」

「わたしはね、香水は殿方を誘惑してこそその物だと考えているの。いいえ、殿方だけじゃなくて、異性も同性もすべて誘惑できるほどのすばらしい香水を作ってみたいのよ」

「それで何が困っているのよ？ まさかその香水が完成して、ギーシュに押し倒されてしまう程のものだったとか？」

彼女は視線を下に落とした。

再びモジモジとして指先を遊ばせている。

もしかして、星？

「うっん、少し違うわ。その……誘惑する効果を研究したくて、あの秘薬を作ったの」

「秘薬？」

「ええ、とつても貴重な材料で作る秘薬。

香水をコツコツ作っては売って何ヶ月も貯めたそのお金とお小遣い全部を使って、先日やっとその材料が買えたの」

「ふーん、どんな秘薬？」

「……惚れ薬」

「はあ?! 禁制品じゃない!」

思わず声を上げてしまった。

惚れ薬の製造や販売は固く法律で禁じられている。

惚れ薬だけでなく、人の精神を操る強い秘薬は大概の国では禁止されている代物だ。

人の精神を操る事ができる薬はすなわち、貴族の政争を激化させる要因になる。

その為、この法を破ると罰も厳しいものになるのだ

「しい！声が大きいわよ！」

「あ、ごめん」

「……でね、その効果を試したくてその、えっと、浮気っばいこいつで試してみようかなーって。

言っとくけどわたしは別にギーシュの事、何でもないと思っっているわよ？」

すぐ浮気するし、服のセンスもダメダメだし、愛の言葉なんて殆どワンパターンだし」

「へー、てつきりあんた、ギーシュに愛想尽かしちゃったって思ってたけど中々よろしくやってたのね。

別にいいじゃない、このままで。惚ねられて、困るもんじゃないでしょ?」

「ちよっと！ 何聞いてたの！ わたしは」

頬を染め、声を荒げるモンモランシー。

思っていたよりも、わかりやすい子らしい。

何故だろう、なんだか身に覚えがある光景ね。

と、いけない。

これじゃ話が前に進まないわ。

「いいから、それで？ 秘薬を飲んだギーシユがまるで盛りつついた犬のように貴女を押し倒しちゃったってワケ?」

「そつなのよ……」

「解除薬とか一緒に作ってなかったの？」

「……お金が無かったの。惚れ薬の材料を買うだけで精一杯で」

「あんたん家、領地の干拓に失敗して火の車らしいものねえ」

「ええ。だからお小遣いが少なくて、それで香水を売ってたんだけど……」

そこでモンモランシーの話が途切れた。

先程の事を恥じているのか、モジモジとなにやら口ごもっている。

どうやらこの問題は、お金があれば解決するらしい。

うーん、私だってお小遣いは少ないし何百エキュールもポンとは出せないわよ。

他にアテがあれば別だけど……

あ、あった。

サイトのアレがあったわね。

……モンモランシーにはしびれ薬を急いで作って貰わないといけなし、ちよっと貸す位いいわよね、うん。

「それで？ 本当は幾ら必要なのよ？」

「金貨でも、百や二百じゃ足りないわ」

「いいわ、ちよっと待ってなさい」

私はそう言い残して、一旦モンモランシーの部屋を後にし自室へ急いで戻った。

クローゼットの奥に仕舞ったサイトへの報奨品が入った袋を引っ張り出して、中から金貨を取り出す。

姫さまからあいつに貰ったお金に手を付けるのは気がひけるけれど、人助けの為ならしょうがないわよ。



私の為にもなるし、それにあいつには私もかなり治癒の秘薬とかで  
お金を使っているわ。

ちよっとくらい、いいわよ、うん。

サイトの報奨品が入った袋には宝石だけを残し、金貨すべてを別の  
袋に入れ替え私はもう一度モンモランシーの部屋に戻った。

そしてモンモランシーの目の前で、テーブルの上に金貨を派手にひ  
っくり返す。

ガラガラと音を立てちよっとした山になった金貨を見て、モンモラ  
ンシーは目を丸くした。

「うわ！ どうしたのルイズ、この金貨。全部……エキユー金貨じ  
ゃない！すごい、五百エキユーはあるわ！

……羨ましいわ、ヴァリエール家は思っていたよりもお金持ちな  
のね」

「違うわよ。これはサイトの……ヘソクリ。いいこと？ 絶対返し  
てよね」

「あなたの使い魔の？ ああ、そういえば揉め事の処理をする仕事  
をたまにやらせているって言ってたわよね」

「詳しい内容は聞かないで。そんな事より、これで秘薬の材料は買えるわよね？」

「え、ええ」

モンモランシーは戸惑いながらもうなづいた。

「ギーシュはこのままこの部屋で縛っておきましょう。貴女が買い物に行っている間、私が見てあげるので」

「え?! 本当に!? いいの?!」

彼女はぱあ、と一瞬で花のような笑顔になり、私の手を取る。

青い瞳と強くカールした髪の毛が心なしか先程よりも輝いて見えた。嬉しそうに私の手を握るモンモランシーを見て、優越感と善行を行う幸福が胸に広がる。

「その代わりに、しびれ薬と解毒薬をお願いね？ しびれ薬は話せ無くなるほど強力で即効性があって、ネバつかない奴が良いわ」

「うん、わかった。ああ、ルイズ……本当に助かるわ！」

「お礼は後。早く行って。あ、ついでに厨房に寄ってメイドのシエスタって子をここに呼んでくれる？」

おトイレや食事やお風呂なんかあるし、私一人じゃ無理なもの。大丈夫、その子は信用できるから。それと、ギーシュを縛る縄を持ってくるように伝えといてね」

「わかったわ。……でも、意外ね」

「何が？」

「今のアナタ、とっても頼り甲斐があるわ」

「貴女の知らない所で、色々あったのよ」

「そうみたいね。最近のアナタ、なんだか急に大人びて来ているもの、何かあったのはわかるわ。

ねえ、一体何があったの？ 昨日は女王陛下に呼ばれて王宮へ行ってたし、信用できるメイドなんて知ってるし。

前は平民どころか貴族さえお友達の一人も居なかったのに、いつの間にか下級生に大人気で、女王陛下とも面識があつて

その上使い魔が妙に強いし。魔法だけは相変わらず上達しないけど」

「ふふん、上達はしているわよ？」

私はそう言つて得意げに笑い、杖を取り出しレビテーションを唱えて見せる。

ちよ、なにすんのよ！とモンモランシーは叫びながら反射的に机の下に避難した。

しかし、爆発は起きない。

代わりに一枚のエキュー金貨がふわふわとテーブルから浮いていた。

恐る恐るテーブルの下から顔を覗かせたモンモランシーは、目を開いて驚いた。

「ルイズ、あなた……魔法……」

「最近やっとコツを掴んだのよ。コモンマジックしかまだ使えないけど」

そう言ってニッコリと私は笑ってみせた。

モンモランシーは信じられない物を見るような目つきで私を見つめ、ゆっくりと立ち上がる。

「何時まで惚けているのよ？ さっさと行って」

「あ、ええ。わかったわ。メイドの名前はシエスタでいいのね？」

「ええ、そうよ」

「じゃあ、お願いね、ルイズ。

ギーシュには強くスリープ・クラウドをかけたから、きっと私が帰ってくるまでは寝ているとはおもっけど……」

「起きてもいいように、縛って猿ぐつわでもしとくわ」

「ありがとう。じゃ、行ってくるわね」

そんなやり取りを最後に、モンモランシーは金貨を袋に詰めて小さくさと部屋を出て行った。

私はこの時、縦にロールした彼女の金髪を見送りながら、やがてやってくるシエスタに”どこまで話そうか”と考えていた。

恐らくはサイトは何処に居るのかと聞かれるだろうし、妙な噂話を学院内に流れぬようにする必要がある。

なにより、タルブ村でサイトがああ『竜の羽衣』に乗っていない

事を知られ、いつか説明することを条件に固く口止めしていたのだ。

この学院内でキュルケやタバサ以外に信頼出来そうな者は他に心当たりはないし、いい機会だからこの場でじっくりと

私やサイトの事を説明しようと考えていた。

モンモランシーやギーシュも私の未来に大きく関わってくるらしいが、この二人は口が軽そうだし今はやめておいた方がよさそうだし。

その点あのメイドは、サイトの話によれば私にとってもかなり信頼できる人間になるって話なのよね。

だとすれば、今の内に仲良くなっておくのは良い事なのかもしれない。

味方は多いほどいいし、なにより彼女自身もいずれ深く私達に関わってくるのだ。

……ただ、あからさまにサイトに手を出そうとしている事が気に入らないわ。

未来の私は一体、どういふつもりでそんなメイドを側に置いていたのかしら？

話し合いで解決した？

それとも、ま、ま、まさか、一緒にベッドで……

いや、いやいやいやいや！

流石にそれは無いわよ、うん。

顔を赤くしながら淫靡な想像を振り払い、ふとギーシュを見ると幸せそうな顔で寝ていた。

しっかりと眠りの魔法が効いているようだ。

その、悩み一つなさそうな能天気な寝顔にため息を付いた時、遠慮がちなのツクの音が聞こえた。

どうぞ、と声をかけると神妙な顔をしてロープを持った見覚えのあるメイドが、おずおずと部屋に入ってくる。

こうしてモンモランシーが部屋に帰ってくるまでの間に、私の味方がまた一人増えたのだった。





4・5…どっぴしてこんな所にいるのよ！

最近とつてもツいてない。

ごちて私は荒い息を落ち着かせ、太い樹木の陰に身を隠し息を潜める。

二つの月が雲に隠れ、闇の濃い夜。

濃い闇が更に濃くなるラグドリアン湖岸に近い森の中。

敵は二人、背の高いメイジと背の低いメイジの二人組。

息のあった恐ろしいまでのコンビネーションで、徐々に私は追い詰められつつあった。

まったく、本当にツいていない。

ラグドリアン湖岸で、私が奇襲を仕掛けるまでは確かに気付かれていなかった。

にもかかわらず、一矢報いる暇も無くあっという間に劣勢に立たされていった。

”瞬間移動” で背の高い方の背後に飛び、しびれ薬を仕込んだ短剣を斬りつけようとした時だ。

なんの躊躇も時間差も無く、背の高い方の隣を歩いていた背の低い方が突如現れた私を蹴り飛ばしたのだ。

私の奇襲は失敗した。

蹴りは打撃というよりも私を遠ざける目的だったのかそれほど痛くはなかったけれど、小さな体躯の私は数メートルも吹き飛ばされる。

宙を舞いながら私は短く ”瞬間移動” を唱えた。

目の端で、背の高い方がもう杖を取り出し火の玉をつくり出している姿が見えたからだ。

私は背を大地に打ち付けるより早く、背の低い方の背後にあった木の上に ”飛ぶ” 。

ほっとしたのもつかの間、背の低い方が間を置かず私に向かって  
”エア・ハンマー” を唱えた。

巨大な不可視の槌は轟と音を立て、私が立っていた木を根こそぎ薙  
ぎ倒す。

かろうじて少し離れた他の木に ”瞬間移動” で逃げおおせてい  
た私は、冷たい汗を額に感じながらその光景を確認した。

しかし、その光景に戦慄する暇はない。

まるで最初からわかっていたかのように、今度は無数の氷の矢  
”ウインディ・アイシクル” が私に向かって正確に飛んでくる。

それに合わせるかのように、 ”ファイアー・ボール” も飛んで  
きた。

”ファイアー・ボール” には弱いを対象を追尾する効果もある。

恐らくは氷の矢を避けた所で炎の球を追尾させ、仕留める意図があ  
るのだろう。

だけど、今度もかろうじて ”瞬間移動” の詠唱が間に合った。

離れた場所まで聞こえる程恐ろしい風切り音をあげて、無数の氷の  
矢は私とその枝に止まっていた樹木を貫く。

……というか、幹の途中から上が抉られるように破壊された。

そんな樹木を照らすようにファイアー・ボールが空へと消えていく。

今度は樹木の上でなく、太めの幹の根元に飛んでいた私は念のためもう一度少し離れた場所へ”飛ぶ”。

緊張と恐怖の為、心臓が痛いほど鳴る。

今の私の位置はバレなかったのか、攻撃が止んだ。

気が付かなかったが、暴れる鼓動と同じように私の息は荒くなっていた。

これが、メイジの戦い。

これが、私の初めてのメイジとの魔法戦闘。

今更ながらにその実感が、暴れ馬のような鼓動を抑えようとする胸に広がる。

まったく、ツいてないわね。

どうしてこうなってしまったのかしら？

独りごちて私は荒い息を落ち着かせ、太い樹木の陰に身を隠し息を潜める。

それから、深く後悔するようにケチの付き始めを忌々しくも私は思い起こした。

「はあ?! 買えなかったですって!?!」

数日前、モンモランシーの部屋。

素頓狂な声を私が上げ、トリスタニアから帰ってきたばかりの部屋の主は申し訳なさそうに肩を落として俯いていた。

ベッドでは先程目を覚まし、二発目の”加速ニーキック”を受け悶絶していた所で、丁度帰ってきたモンモランシーに再び

眠りの魔法をかけられたギーシュがぐーぐーと寝息を立てている。

その脇で厨房のメイド……シエスタが柔らかな表情で私とモンモランシーの給仕を行っていた。

外はすっかり日が暮れ、月明かりが窓から差し込んでいる時刻。

モンモランシーがトリスタニアに秘薬を買いに出かけている間、私は一緒にギーシュを見張ってもらうことにしたシエスタに

粗方の ” 私の ” 事情を話し終えていた。

サイトの事、私の事。

そして、未来の事。

もつとも、未来の事はシエスタがサイト付きのメイドになると言う事までしか話さず、彼女がサイトとの間に子供を作る事までは

教えていない。と、いつかタバサにもそこら辺は教えていない。

そもそも、教える必要が微塵も、これっぽちも、僅かな可能性すらも必要ないじゃない。

サイトはその未来を変えるために、ここに来んだから。

そうよ、アレは私の使い魔なんだから。

私だけのサイトなんだから。

……話がそれちゃった。

とにかく、事情を知り喜んで私……というかサイトの為に力を貸してくれると言ってくれた彼女は、今は私とモンモランシーの為に

食堂からこの部屋に食事を運んできて、給仕を行っている。

彼女の存在に最初はモンモランシーも警戒したが、私が既に事情を彼女にも話してしまった事を知ると渋々ながらも同席を許した。

最初、彼女……シエスタは私とサイトが結ばれるという未来（まだ認めた訳じゃないのよ？）に唾然とし悲しそうに私の話を聞いていた。

しかし、いずれサイト専属のメイドになると知るや、今度は鳥のように窓から飛び立ちそんな勢いで喜んだ。

更にそれが（サイトに話を聞いた限りじゃ）一生仕える事になると知ると、感極まって平民でありながら貴族の私に

あるうことが抱きついてキスまでしてきたではないか。

その喜びように少し疑問に思った私は、きゃあきゃあと声を上げて喜ぶ彼女に問うた。

私とサイトが将来、け、結婚する事がそんなに嬉しいの？ あんた、サイトの事が好きなんじゃないの？ と。



彼女はすこしソバカスのある愛くるしいその顔に、愛嬌一杯の笑顔  
を浮かべて答える。

「そんな事！ 大した問題じゃありませんわ、ミス・ヴァリエール  
！ サイトさんに、あのサイトさんに一生お仕えできるだけで  
わたしは幸せなんです！ あの方のお側にいられるだけでわたし  
は満足なんです！

ああ、夢のよう！ そんな未来がわたしを待っていたなんて！」

彼女は歌でも歌いだしそんな勢いで、くるくる器用に狭い室内で踊  
った。

なるほど、憧れってやつなのね。

……うん、そういう事ならちょっとくらいサイトの側に居ても目を  
瞑ってあげてもいいわ。

信頼できるメイドって、意外と作るのは難しいもの。

特に私やサイトはこれから先、ドス黒い政争に巻き込まれる可能性  
が高いのだ。

身の回りの世話をする人間で、心から信頼できる者を得ることは重要だと思うし。

……サイトに手を出そうとしたら容赦しないけど。

それにしても、彼女がさっきから口ずさんでいる ” にじじ ” って何かしら？

そんな歌詞の歌なんてあったっけ？

といった具合に、私はシエスタを味方に付けることができたまでは良かったのだけど、そこからはどうも上手くいかなかった。

トリスタニアから帰ってきたモンモランシーの話によれば、惚れ薬の解除薬に必要な秘薬は売り切れていたらしい。

その秘薬とはガリアとトリステインの国境にあるラグドリアン湖の『水の精霊の涙』の事だとか。

モンモランシーのしょっぱい報告を聞きながら、私達はとりあえずは夕食を摂ることにした。

時刻は既に夕食の時間を過ぎてている。

私もモンモランシーもお腹がペコペコだったのだ。  
(シエスタは先程厨房で済ませてきたとのこと。)

私達は黙々と食事を行い、デザートのカークを平らげ、シエスタが食器を片付け始めた所で再びこの話題を続けた。

「それで、次の入荷はいつなの？」

「それが……どうやら入荷は絶望的なようなのよ」

「もう二度と手に入らないって事？」

あ、シエスタ。話によっては何か頼むかもしれないから、食器を下げたら戻ってきて頂戴」

「はい、わかりました」

「そうなの。困ったわ……なんでも、水の精霊達と連絡が取れなくなってしまうたらしいの」

シエスタが扉を閉める音とモンモランシーのため息が重なる。

そのまま沈黙が続き、ギーシュの脳天気な寝息が室内に一時満ちた。

「うーん、で？ ギーシュこのままにしておくの？ 言っとくけど、惚れ薬使ったってすぐバレると思うわよ？」

「だ、だめよそんなこと！ それにいやよ、わたし。ギーシュとずっと一緒に居るなんて！」

「いいじゃない、別に。貴女もまんざらじゃないんでしょう？」

「そ、そんな事無いわよ！」

「じゃ、このまま放っておく？ まさかこのままずっと眠らせておく訳にはいかないでしょ」

「……埋めちゃう？」

「あのね？ モンモランシー。私、女王陛下直属の女官になったの。言っただけ？」

私の判断で警察権の使用も認められているのよ」

「そんな事、初耳よ！ ルイズ、わたし達お友達よね?!」

「 ”今は” ね。でも、惚れ薬を飲ませたあげく相手を殺して埋めようとするような恥知らずなお友達はいらないわ」

「冗談よ、冗談に決まっているじゃない！ うう、でも一体わたしはどつしたら……」

「とりあえず、ラグドリアン湖に直接『水の精霊の涙』を貰いに行くというのはどう?」

「ええええ!?! 学校はどうするのよ！ それに水の精霊は滅多に人前に姿を表さないし、ものすごく強いんだよ！

怒らせでもしたら本当に大変なんだから!」

「学校なんて休めばいいじゃない。それに、あんたの家は代々水の精霊との交渉役をしていなかったっけ?」

モンモランシーは露骨に眉根を寄せ、少しだけ頭を後ろに下げた。

どうやらあまり触れられたくない話題のようだ。

一瞬、淑女としてモンモランシーの気持ちを察し、この話題には触れぬようすべきかと思っただけけれど

よくよく考えてみれば、秘薬を得るためには水の精霊と会う必要がある訳で避けては通れない話題よね。

その事は彼女も承知しているようで、やがて苦虫でも噛み潰しているような表情で事情を語り始めた。

「今は色々あってやってないのよ。ほら、うちは干拓に失敗したって話は知っているでしょう?」

「ええ、知ってるわ」

「失敗の原因は干拓に協力してくれたた水の精霊を、父上が怒らせたからなの」

「どっして?」

「父上が言ったのよ、水の精霊に。『歩くな、床が濡れる』って」

「……バカなの？ 貴女のお父様」

「ええ、バカだと思っわ」

ああ、この子のお父様もバカなのね。

それも信じられないくらいの。

母様が良く言ってたっけ。

誇り高い事と、傲慢になることは違う。

傲慢に振舞う事を誇り高いと勘違いした者はただのバカ。

そして残念ながら、トリスティンの殆どの貴族はそのバカになっちゃっているのよ、ルイズって。

ああ、それとそのバカを直すためにも貴族は男も女も一度従軍する制度を作って、鉄の掟の元徹底的にしごかなくては

とも言っていたわね。

……あのお話をしている時の母様の目は子供心ながらにホント、恐怖その物だったわ。

「だから、ムリ。絶対に行かない」

「じゃ逮捕ね、モンモランシー。罪状は禁制品の所持及び使用。ああ、思えば短い付き合いだったわ」

「まって！ ルイズ、まって！」

「行くの？ 行かないの？ これが最後よ？」

答えはわかりきっている。

だけど、こういう事は本人に決めさせなくちゃ。

私としても、流石にこの状況を見て看過はできない。



「……行く」

「じゃ、決まりね。大丈夫よ、私もついて行ってあげるから。  
ギーシュは……どうしよう？ とびきり強い眠りの秘薬でも作っ  
て数日間寝かしく？」

「だめよ！ そんな強い眠り薬なんて作って飲ませたら、そのまま  
永眠しちゃうわ」

「うーん、どうしよう……」

「ねえ、ルイズ。あのメイドも協力してくれるんでしょう？」

「ええ、まあね。平民だから魔法は勿論使えないけど、仕事はでき  
る子だと聞いているわ」

「じゃあ、こうしましょう。半日は眠り続ける秘薬に栄養のある秘  
薬を混ぜて数日分作っておくの。」

それをギーシュが起きる度にあのメイドが飲ませるのよ」

「一度に飲ませなければいって事なんだ？ でも、暴れるんじゃない？」

「大丈夫よ、こいつたとえ平民でも女の子に暴力をふるうような奴じゃないし。」

「そういう優しい所だけは本物なもの。それに惚れ薬飲んでるから、わたし以外の子を押し倒す事もないわ」

「あ、それは良い考えね。で、そうやって眠らせている間に私達がラグドリアン湖まで行けばいいのね」

「そういう事」

話はまとまり、早速私達は翌日の早朝に学院を発つことにした。

丁度その時にシエスタが厨房から帰ってきたので、彼女にギーシユの事を説明する。

モンモランシーはその間、一心不乱に私のしびれ薬とその解毒薬を調合していた。

それが終われば今度は数日分の眠り薬と栄養剤を調合する必要がある。

恐らくは、今日は徹夜になるんでしょうね。

ま、自業自得だから同情はしないけど。

「と、いう訳なのよ。やってくれる?」

「はい、大丈夫ですわ」

「ありがと、シエスタ。秘薬の扱いは……ちょっと待っててね。  
今モンモランシーが秘薬を作っているから。

一組出来たら扱い方を説明するわ」

「はい、お願いします」

「でね、私達が出かけている間にギーシュが起きたらなんとか秘薬を飲ませて欲しいの。できそう?」

「えっと、ギーシュ様はそちらのモンモランシー様の事を惚れ薬の力でそれはそれはもう

ベッタベタのドロドロに惚れておられるのですよね?」

「ええ、そうよ。薬が無くとも惚れていたようだけど」

「なら、大丈夫です！ このお薬はモンモランシー様の人には言えないアレで作ったとか、中身はモンモランシー様の唾液です！とかモンモランシー様のおしょう」

「ちょっと！ わたしそんな変態じゃないわよ！」

「でもギーシュなら喜んで飲みそうよ？」

「ギーシュもそんな変態じゃないわよ！」

モンモランシーは立ち上がり、声を荒げた。

ギーシュをさり気なくかばう辺り、やはりまんざらでもないんだろ  
う。

あ、思わず庇った事に気がついた。

顔を赤くしてプルプルと震えているわ！

ふふ、いつもは澄ましている癖に結構可愛い所あるじゃない。

案外わかりやすい子なのね。

「大丈夫です、モンモランシー様。ギーシュ様はいつもの何倍もモンモランシー様に惚れて居られるのでしょ？」

だったら、その位普通ですよ」

「ふ、普通なの？ シエスタ」

思わず質問をした私に、シエスタは胸を張って得意げに答える。

「ええ、普通ですわ。この位、序の口の序の口。初歩の初歩の、初歩、ですわ」

「ちょ、ちょっと！ ……それ、本当？ えっと、シエスタ、だっけ？」

「はい、ミス・モンモランシ。実際、メイドの間でそういった事”を経験してる子も少なくないですし。」

それに、貴族様はどうか存じ上げませんがわたし達は結構……その……下世話なお話はよくするので

……わたしは経験はないんですが、それでもこの通り耳年増になつちゃうんですよ」

「……ねえ、シエスタ」

「ちょっと、モンモランシー。手を休めないでよ！」

「だって……」

「言いたい事位わかるわよ。わ、私が代わりに聞いといてあげるからあなたは秘薬をとつと作る！」

「うう、後で詳しく話さないよ？」

「まかせておきなさい。さて、シエスタ？」

「は、はい？」

モンモランシーの恨めしそうな視線をいなして、私はシエスタに向き直り両肩をがしりと掴む。

それから最高の笑顔を浮かべて、彼女ににこやかに語りかけた。

「ちょーっつと、いや、じっくり聞かせてもらおうかしら、そのお話」

「あの、でも……」

「大丈夫、食堂のマルトーだっけ？ コック長。それとこの部屋で寝泊まりする許可を学院にも届けておくから」

「えええ?!」

「だから、ね？ あ、そうねえ、お茶でも飲みながらお話した方がいいわね！」

「その棚に秘蔵のハーブティーがあるわ、ルイズ」

「じゃ、後はお茶請けね。シエスタ、”三人分” の茶器とお菓子、お願い」

「へ？ ギーシュ様はまだ……」

「あなたの分よ？」

「えええ？！ き、貴族様とお茶なんてわ、わわ、わたしがあ、ですか？！」

「そうよ。貴重なお話を聞かせてもらうもの、ねえ？ モンモランシー？」

「当然よ。その代わりに、洗いざらい教えてもら……話してもらおうわよ？」

「ちょっと！ 手を止めないでよ！」



「ううう、ルイズ、聞き逃した部分は後でちゃんと聞かせてね？」

「わかっているわよ。さ、シエスタ？」

「は、はい、すぐに準備致します」

その夜、外がほんの少し白むまで私とシエスタの話は続いた。

モンモランシーは結局夜を徹して秘薬を作っていたが、刺激的な話を盗み聞きしていたおかげで睡魔に襲われる事は無かったようだ。

そして、場面はラグドリアン湖に戻る。

シエスタに秘薬の扱い方を説明し、学院事務局の衛士をたたき起して各種申請を行い

眠い目を擦りながらも予定通りに学院を発った私達は、お昼過ぎにはラグドリアン湖にたどり着いていた。

そこで私達は、ラグドリアン湖の異変を目の当たりにする。

湖の水かさが、かなり上がっていたのだ。

途中で会った農夫の話によれば、二年ほど前からラグドリアン湖の水位が上がりが始め、近隣の村や畑が湖に飲み込まれてしまい

ほとほと困っているのだとか。

その原因には心当たりがないが、誰がそんな事をしているのかはすぐに分かったそうだ。

犯人はラグドリアン湖に住まう水の精霊。

何故そんな事をしているのか疑問に思いつつ、取りあえずは当初の目的である『水の精霊の涙』を得るため

渋るモンモランシーに発破をかけて、水の精霊を呼び出してついでに事情を聞くことにした。

果たして、水の精霊は私達の前に姿を表してくれた。

交渉役の血を持つモンモランシーの体をかたどり、水で出来た人間の姿が湖面に浮かぶ。

彼女？ の話によれば何者かが数年前に、アンドバリの指輪と呼ばれる水の精霊の秘宝を盗み出したらしい。

アンドバリの指輪とは伝説のマジックアイテムで、死者に偽りの命を吹き込む魔法の指輪なんだそうだ。

で、それを取り返すために水かさを上げていたのだからか。

気の長い話で、長い年月をかけてハルケギニア中を水で覆えば、指輪がおのずと見つかるかと水の精霊は言った。

……本当に気の長い話。

ていうか、誰よ盗んだ奴は。まったく迷惑な話だわ。

そう内心で憤る私の隣で、モンモランシーはもっと切実な願いを水の精霊にしていた。

すなわち、『水の精霊の涙』を貰えないだろうか。

その願いを笑顔で断る水の精霊。

……中々気難しい精霊のようね。

モンモランシーの方もそこで引き下がっては後は牢に入るしかなくなるので、必死に何度も頼み込んでいた。

やがて精霊はしつこく頼み込むモンモランシーの熱意に負け、ある交換条件を提示してきた。

なんでもここ数日、水の精霊を襲っているとんでもないメイジがいるらしい。

メイジは二人組で、一人が空気の球を作り出しその中に入って水の中を移動し、もう一人が水の精霊に攻撃をしているのだとか。

空気の球がある限り水の精霊は手も足も（あるのかは微妙だけど）でないの、ほとんど困っていたんだそうだ。

水の精霊は、この二人をなんとかしてくれただなら『水の精霊の涙』をくれると言った。

増水の件はとりあえず置いて、私達はこの条件を飲むことにした。

と、どうか条件を飲む以外に選択肢はない。

精霊の話によれば二人のメイジは、ガリアとトリステインの国境に跨るこの湖の、ガリア側の岸からやって来るらしい。

早速ガリア側へ湖を迂回して移動している間、モンモランシーは「や、やるしかないわよね」と呟きながらずっと杖を見つめていた。

その肩は震えている。

考えてみれば、私達位の年で実戦を経験する事など殆どない。

まして、女の子がこうやって他のメイジと戦うことなど皆無だ。

私はタバサとの訓練を思い出し、モンモランシーにどこかに潜んでいるよう指示した。

目を開いて驚くモンモランシーに、不意打ちで「爆発」を仕掛けるから巻き添いを食うと危ないわ、と適当な理由をつけて納得させる。

この時の私はすこし自信があった。

”瞬間移動”で相手の背後を取り、しびれ薬を塗ったナイフでほんのすこしずつ傷つけければそれで終わる。

ふふん、そんなの簡単よ。

そう考えていた。

そう、慢心していたのだ。

そうして、その二人のメイジをやっつけるべく待ち伏せしていたのだけれど……

「はあ、はあ、強いわね。あのちっこい方は風のメイジ……それも多分トライアングルだわ。

氷の矢” ウィンディ・アイシクル” って確かトライアングルスペルよね？

しかし、どうしてわたしの位置が何度もばれちゃったのかしら

音に出さないよう呟いて、辺りを伺う。

メイジの攻撃は無い。

どうやら今回の ”瞬間移動” は移動先がバレなかったようだ。

でも何で……

……さっきまでは木の上にはかり飛んでいたわね。

あいつ、もしかして頭の上にも目があるのかしら？

いや、さすがにそれは無いわよ。

うーん……あ！ 音！ 木の上に飛ぶと枝が揺れるわ！

風のメイジは音に敏感だから、それできっとバレてたのよ！

でも、参ったわね。

見通しの良い場所じゃないと、上手く ”瞬間移動” なんて出来ないし……

こんな森の中で使ったらその内木の中に移動しちゃいそう。

どうしよう……

あ！ 加速！ ”加速” を使えばいいんだわ。

そういえば、 ”瞬間移動” で奇襲をしても対応されちゃったものね。

きつと、間合いを一気に詰めることができても、私の動作が遅いから対応されちゃうんだ。

あの二人……いや、あのちっこい方だけかもしれないけど、多分すごく実践経験を積んでいるんだわ。

よおし。

右手の ” 毒竜の牙 ” を強く握り締める。

じわり、と透明の液体が白い刃から滲み出してその表面をぬらぬらと濡らした。

モンモランシー特製のしびれ薬だ。

闇は濃く、相手の位置は把握してないが、どの辺りに居るのかは大体わかる。

じっくりと隙を探したくもある状況だけど、モタモタしていたらどこかに隠れているモンモランシーが見つかってしまうだろう。

私は覚悟をきめて ” 加速 ” を詠唱した。

結構距離があつたのか、小声での詠唱にあの小さな風のメイジは反応しなかった。

そして、詠唱が終わる。

耳に聞こえていた風や湖面の波打つ音が一斉に消えた。



同時に駆ける。

景色が信じられない速度で流れた。

まるで、高い崖から飛び降りたかのように。

あは。

なにこれ。

すいー！

すいすい！

すべてが止まって見える！

落ち葉なんて空中で止まっているわ！

これがきちんと詠唱した ” 加速 ” なのね。

あ！ いた。

よし、いくわよ、ルイズ！

あの二人が視界に入ると、まるで冗談のようにゆっくりと、本当にゆっくりとこちらを振り返ろうとしていた。

私は足を止めず、大きい方とすれ違い様に ” 毒竜の牙 ” をそのお尻に軽くちくりと刺す。

” 毒竜の牙 ” の刀身は骨製なので、これだけ高速で動いている時に斬りつけると、折れてしまうかもしれないと思ったからだ。

押っ取り刀で小さい方がゆっくりと杖を私にむける。

恐らくは本来ならとんでもなく早い動作なのだろう。

しかし、今の私は ” 加速 ” の影響下にあった。

向けられた杖を避けるように大きく横へ旋回し、小さい方の背後へ回る。

その間、まるで人形のように大き方も小さい方も殆ど動きはしなかった。

否、それだけ私の動きがそして意志が ” 速い ” のだ。

やった！

私の勝ちよ！

そう思い、 ” 毒竜の牙 ” を小さい方のお尻にでも刺そうとした時。

ふと、月が雲の間から顔を出し優しい光が降り注いだ。

背の高いメイジの、赤く燃えるような瞳と目が合う。

「キュル、ケ？」

バスン！ と音を立てて ” 加速 ” が解けた。

そして、時間の流れは元に戻る。

「え？ 、ルイズ？ あんたなの？ どうしてこんな所にいるのよ  
！」

「え？」

「へ？！ あんた達、なんでここに……」

三人の間の抜けた声はその場に転がった。

同時にそれぞれの杖を構えていた腕がだらりと垂れる。

その光を遮る無粋な雲から開放された二つの月は、芸術品に例えられる湖をより美しく照らし出すべく大地を照らした。

月光に燃えるような赤と、目も覚めるような青が煌めく。

キュルケとタバサだった。

私はガリアに向かった筈の二人と知らず戦っていたのだ。

お互いに状況が飲み込めず、場に気まずい空気が流れる。

暫くして、その空気を打ち破ろうと口を開いたキュルケが突然奇声を上げて倒れた。

「ルルル、なななな、あばば、あたたたた」

「……何をしたの？」

「お尻をチクつと。ほら、これにしびれ薬を仕込んだのよ、強い奴」

タバサに ” 毒竜の牙 ” を見せ、私は視線を泳がせる。

彼女は只一言、なんとかして、とだけつぶやいた。

私は急いでキュルケに解毒薬を飲ませたが、何故か中々キュルケは回復しなかった。

……きつと、シエスタの話聞きながら作ってたから、品質が落ちちゃったのね。

タバサの冷たい視線とキュルケの怒りに満ちた視線が痛いわ。

ああ、でも私なんでこんな事になってるんだろう？

ちよつと人助けをしようとしただけじゃない。

お金をモンモランシーに貸して上げて、それからシエスタが味方になっけてくれて。

で、いつの間にかここに来てキュルケとタバサの二人と戦って。

一体何が悪かったのかしら？

……づづん、きっと私がついてないだけよ。

私は悪くない。

うん、悪いのはモンモランシーだもん。

だから、「どうしてわざわざ危険な事をしたの？」ってそんな目で  
尋ねないでくれる？ タバサ。

今の貴女、すごく怖いわ。

ああ、本当にこここの所の私ってついてない。



4 - 6 : 仕方ないじゃない

超怖い。

さっきからタバサが私を睨みつけてくる。

一見無表情なんだけど、私にはわかる。

あの目は睨みつけている目だ。

あの顔は怒っている顔だ。

うっ、殺気すら感じるわ。

何故彼女がこんなに怒っているのか。



それは私が彼女達がいけない間に、自分から進んで危険な事をしたからだ。

もし、ラグドリアン湖の精霊討伐がタバサでなく他の者の任務だったら、私は命を落としていたのかもしれない。

そうなるトすべては水の泡だ。

タバサのお母様が助かる歴史すら変わってしまう。

それだけじゃない。

ハルケギニア全土を巻き込むガリア王の狂気とロマリア教皇の狂信を、止める者が居なくなってしまう。

サイトの言う歴史が正しいのなら、私はハルケギニアを戦乱から救う鍵となる虚無だ。

タバサは、そんな私が軽率にも一人で敵に挑んだ事を怒っていた。

私とモンモランシー、キュルケとタバサは誤解から発生した戦闘を辞め、ラグドリアン湖の岸で焚き火を囲みながら

お互いの状況を説明しあっていた。

まず最初に私達の事情を話し、それからタバサ達の事情を聞く。

タバサ達の話によれば、ラグドリアン湖の増水に困っていたのは何もトリスティンの領民だけではなかったらしい。

タバサの ” 実家 ” はこの近くにあるらしく、増水に苦しむ領民を助ける為にラグドリアン湖の水の精霊を討伐しに来たのだそうだ。

……と言つのは表の話。

モンモランシーがいるので言えないのだろう、真実は多分違う。

恐らくは、タバサが所属するガリア北花壇警護騎士団の任務でこの地に赴いたのだと思う。

タバサの本名はシャルロット・エレヌ・オルレアンと言う。

かつて現ガリア王と王座を争い、そして謀殺されたオルレアン公シヤルル殿下の娘の名だ。

現在は毒を盛られ心を壊した母親を人質に取られ、ジョゼフ王の娘である王女イザベラ率いる非公式の組織ガリア北花壇警護騎士団配下の

騎士として死を目的としたような危険な任務に従事させられている。

その事実を知る私は、ここへ来たのもはその ” 死を目的とした任務 ” なのだろうと予想した。

事実、水の精霊を相手に戦うなど正気の沙汰ではない。

何しろ彼女達（彼ら？）と敵対して、一瞬でもラグドリアン湖の水

に触れてしまえばたちまち精神を乗っとられてしまうからだ。

パチッと音を立てて、焚き火にくべた薪が炎の中少しだけ転がった。

相も変わらず炎の向こうに座るタバサの視線が痛い。

と、というか怖い。

月は再び雲の向こうに隠れ、闇を照らす焚き火の向こう。

珍しい青い髪的美少女が無表情でありながら、焚き火の向こうから私を睨みつけて来るのだ。

怒気をこめて。

とても、怖い。

「しかし、惚れ薬ねえ。まったく、自分の魅力を信じられない女って最悪ね」

「うっさいわね！ 仕方ないじゃない、ギーシュの浮気癖は病気になるだから！ 治療薬よ、治療薬！」

……モンモランシー。あなた、勢い余って思いっきりギーシュの事好きだと認めているわよ？

あ、気がついた。

ふふ、ほんと、わかりやすい子。

ね、タバサ。この子、わかりやすいわよね！

そう機嫌を伺うようにアイコンタクトをタバサに送ってみたけれど、反応はなし。

あ、ううん、ちがう。

表情は変わらないけど、反応は少しあったわ。

怒気がすこし強くなった。

どっちら機嫌はさっきよりすこし悪くなったみたい。

「でもまいったわねー。あなた達とやりあう訳にはいかないけれど、水の精霊を退治しないとタバサの立つ瀬もないわ」

「どうして退治しないといけないの？」

「増水を止める為」

「あー、あれね。アントニオの指輪ね」

「アンドバリの指輪、よルイズ」

「あれ？ そうだっけ？」

よしー！

よくぞ突っ込んでくれたわ、モンモランシー！

ほら、タバサ！

私、マヌケな間違いをしたわよ？！

これで機嫌を直して！

……だめかあ。

かえってタバサから感じる怒気がもっと強くなっちゃったわ。

これも逆効果だったようね。

「なあに、そのアンドバリの指輪って」

「水の精霊に会った時、それとなく増水させてる理由を聞いたのよ。そしたらね、アンドバリの指輪っていう秘宝を盗んだ奴が居て、それを探すために水かさを上げていうそうよ。

……ところでタバサ、私クッキー持ってきたの。食べない？

…そ、そう、いらなのね」

「へえ」

「迷惑な話よね。それが見つかるまでたとえハルケギニア中を水の底に沈めてでも探すつもりみたい。

ほんと、うちの干拓の時といい水の精霊は気難しくて困っちゃうわよね」

「その指輪を見つければ、増水を止められる？」

やっとタバサが口を開いた。

声色にまだ私への怒りが見え隠れするような気がするけども、取りあえずは問題解決を優先してくれるようだ。

私はこの好機につとめて明るく答える。

「多分ね。そうだ！ 明日、もう一度水の精霊に会うから交渉してみましようよ。」

「指輪を代わりに探すからって？」

「そうそう！」

「信用してくれるかしら？」

キュルケはそう私に合いの手を入れて、チラとタバサを見た。

彼女はタバサの意見に同調するつもりらしい。

あ、勿論私もタバサの意見に同調するわよ？

もう、機嫌を直してくれるならなんだってしちゃう。

だから、その怖い目をやめて？

「ダメなら実力行使」

「そうね、うん。タバサの言うとおりにしましょう！ どのみちこのままにしとく訳にもいかないし」

「ちょ、だめよ！ トリステインの王家は代々水の精霊の力を借りて干拓なんかしてるのよ?!」

「……それをあんたん家の父上が台なしにしたんじゃない」



「うぐ！」

大げさに仰け反るモンモランシー。

まったく、余計なことを言うんじゃないわよ。

こっちはタバサの怒りを少しでも和らげようと必死なんだから。

この子、怒らせるとすごく怖いのよ！

「まあ、とにかく明日水の精霊に会ってみましょう。タバサもそれでいいわね？」

「問題ない」

誰が決めたわけでもなく、年長者でもあるキュルケがその場をしめた。

しかし、相変わらずタバサの視線が痛い。

……キチンと私から謝っておいた方がよさそうね。

でも、仕方ないじゃない。

私にしてみれば人助けのつもりだったし。

まさかこんなに大きな危険が待ち構えていたなんて、思っても見なかったから不可抗力よ。

とは思うものの、タバサにしてみれば納得がいかないというのもわかる。

その辺、キュルケはタバサにも私にも何も言わないし触れもしないから、暗に私達の間で解決するよう示しているのかも。

こいつはこう言った所がつくづく大人で、ほんと憎たらしい。

「……………ねえ、タバサ」

「何？」

「怒ってる?」

「怒っている」

「……ごめんね。でも私、放っとけなかったの」

私は素直に謝罪した。

勿論、自分の言い分もあるけれど、タバサにしてみればずっと切実だったのもわかるつもり。

なんたって、ともすれば自分の母親の未来をその手で刈り取っていたのかもしれないのだから。

それは彼女にとって耐え難い事だ。

私でもわかる。

それに多分口論になれば、私の体はハルケギニアの未来にとっても大事なのだと彼女は言うだろう。

自分の目的は後回しにして。

しかし、口論はしない。

彼女自身、そんなものは望んではない。

現に彼女はこの事について直接私を責めるようなことはしなかった。

ただ無言で怒っていると意思表示するだけに留めていた。

それは彼女なりの優しさ。

なぜなら、未来を理由に私の体の安全を心配し行動を詰ることは、未来を知っていなければ、自分の母親や叔父への復讐の件が無ければ私を助けはしないと言う事の裏返しになるからだ。

それは私にしてみれば、利害のみの関係だとはっきり言われる事に等しい。

わかりやすく言えば、本質的に、私は一人ぼっちに戻るということなのだ。

そう受け取れてしまう程、私とタバサとの関係は希薄で友情のような物は育めてはいない。

知り合ってそれほど時間も経っていないし、行動も殆ど共にしてはいないしね。

この事は以前から私……多分タバサも感じ取り、お互いに気を使っていた部分なのかもしれない。

だからなのだろう、彼女は私を直接責めはしない。

”まだ” 口論をしようとしなさい。

今はまだ、利害関係でしか繋がっていられないから。

希薄な関係を埋め、利害のみの関係でなく、友人になろうとしてくれているから。

違う形で味わった、同じ孤独を知る者として。

私はその気持ちを、彼女の青い瞳から不思議と感じ取っていた。

以前の私ならこんな事、わかりはしなかっただろう。

誰かと信頼関係を築くなんて考えもしなかったから。

でもサイトがいなくなって、タバサやキュルケに手を差し伸べられて、色々見えてきた物があった。

きっとこうというのが成長するという事よね、ルイズ。

……って、ノンキに感慨にふけて居る場合じゃない！

口論できないかわりに、謝りやすいようタバサの怒りを少しでも和らげようとしてたのに、怒気はどんどん強くなってたんだっけ。

うっうっ、睨んでる。

あの目は絶対、怒って睨んでいる目よ。

オドオドとしながらの謝罪の言葉に、タバサはただじっと私の顔を見つめ沈黙を守っていた。

一種の緊張が走る私達を、キュルケは微笑み、モンモランシーは昨夜の疲れをあくびに出して観察している。

やがて、ふっとタバサの視線は逸らされ、殺気に似た怒気が消えた。

「もういい。あれだけ戦えるなら、あとは経験だけ」

「あ、それって一回死ねってことよね」

「そう」

「ちょっと!」

だから死ねって何よ、死ねって!

私のちよつといい感じのモノローグが台なしじゃない！

そんな私の抗議など耳には届かないとばかりに、やたら可愛い声を作りそろそろ寝ましょ、そつねと声を掛けあつて二人は寝具を取り出した。

どうやら許してくれるようだ。

あ、いや。別に私が全部悪いとは認めるつもりはないけれど。

悪いのはモンモランシーだし。

でも、取りあえずタバサは怒りを収めてくれたみたい。

それだけで良しとしなくちゃね、うん。

……それにしても、一回死ねはあんまりよ。

そう、失言だわ。

そこは今度は私が怒ってもいいわよね！

しかし、がなる私を無視して二人は寝具にくるまって横になってしまった。

連日水の精霊と戦っていたので結構疲れているらしい。

それでもお構いなしに声を荒げる私に、モンモランシーは眠たげな表情のまま声をかけてきた。

「ねえ、ルイズ？」

「ちょっと！ 聞いているの！ 私は……なに？！ モンモランシー。  
今忙しいの！」

「あなた、そんなにキュルケやタバサと仲がよかつたっけ？ 一体  
何があつたの？」

彼女の問いは意外な、そう、意外なものだった。

「仲がいい？ 私が？ キュルケやタバサと？」

「ええ、とつても。以前のあなたからは想像もつかないくらい」



「きつ、気のせいよ！ ……多分」

「ふうん？ ま、わたしにはどうでもいいけど。」

ふわああ、昨日は徹夜で秘薬を作ってたから流石に眠いわ。

わたしもねよつと」

そう言つて、彼女も寝具を取り出し体を毛布でくるんで横になった。

私はキュルケとタバサへの糾弾を忘れ、一人焚き火を見つめる。

パチン、と燃やしていた薪が弾ける音がした。

炎の向こう、横になっているキュルケはきつとニヤついているんだろつな。

そんな風に考えながら、その夜は私も寝る事にしたのだった。

翌朝。

私達はラグドリアン湖の畔で、水の精霊を再び呼び出していた。

朝もやの中、精霊は以前と同じようにモンモランシーの姿を型取り

湖面に立っている。

モンモランシーは彼女？ の前に進み出て、やがて二度目の交渉が始まった。

「水の精霊よ。もうあなたを襲う者はいなくなつたわ。

さあ、約束通りあなたの一部『水の精霊の涙』をちょうだい！」

その言葉に精霊は何も言わず、代わりに水でできた体を細かく震わせた。

ぴつと大きめの水滴が一滴、ゆっくりとモンモランシーの方へ飛んでいく。

モンモランシーは慌てて用意していた小瓶にその水滴を収め、しっかりと蓋をして安堵の溜息をついた。

あの水滴こそが『水の精霊の涙』らしい。

『水の精霊の涙』をくれた水の精霊は別れの言葉も無く、もう用はないとばかりにその体を崩し湖の底へ沈みはじめた。

それを見た私は慌てて引き止める。

まだ用は済んではない。

「まって！ まだ話はあるの！ アンドバリの指輪の事よ！」

声は届いたのか、精霊は崩しかけた体を元に戻し再び湖面に立った。水の精霊の怒りを買うのではと怯えるモンモランシーと入れ違いになるように、私は水の精霊の前に立った。

場合に寄っては戦闘になるのでタバサとキュルケもそれに続く。

ここ数日水の精霊を襲っていた二人が同席するのはまずいと思ったけれど、タバサが言うには精霊には敵味方という識別は無いらしい。敵意があるか、無いかが重要なので、先日まで殺そうとしていた彼女たちが敵意を抱かなければ一緒にいても大丈夫なんだそうだ。

「単なる者よ。汝は失われし我らの秘宝アンドバリの指輪の事を知っているのか？」

単なる者。

水の精霊は私達人間の事をそう呼ぶようだ。

「いいえ、知らないわ。でも、その事で交渉したいの」

「交渉？」

「私達が指輪を取り返してくるから、湖の水かさを元に戻して欲しいの」

「……お前たちを信用して良いものか、我は悩む」

「お願いよ！ 貴女達がこのまま水かさを上げ続ければ、私達人間

は住む場所がなくなってしまふ。

そうなるかと又、誰かが貴女達を襲うことになるわ」

「単なる者よ。指輪を盗んだのは汝の同族だ」

「ええ、そうよ。私達人間が指輪を盗んだわ。だけど、その為に貴女達と争いたくはないの。」

指輪は私が代わりに探すからお願い、湖を元に戻して」

モンモランシーの形をした水の精霊は、表面を波打たせてしばし沈黙を守った。

私の言葉を聞いてどうすべきか迷っているらしい。

「……お前達は我との約束を守った。だから、汝の言葉を信用しよう。湖の水かさは元に戻す」

「ありがとう！ それで、いつまでに指輪を持ってくればいいの？」

「汝の寿命が尽きるまででよい」

「そんなに長くていいの？」

「かまわぬ。我と汝では時に対する概念から違うからな」

「気の長い精霊さんなのね。ね、精霊さん。指輪を盗んでいった奴の名前とか知らない？」

「それがわかればぐっと早く取り返せるかも」

気をきかせてか、キュルケが指輪を盗んだ犯人について何か知らないかと口を挟んだ。

後ろでバカ！ 水の精霊を怒らせたらどうすんのよ！ とモンモラ  
ンシーが小声で諫めようとしているが

彼女の耳はどうでもいい事は聞こえないらしい。

とっても羨ましい耳だわ。

水の精霊は記憶を探るようにほんの少し体を波打たせていたが、怒りもせずすぐに犯人についての情報教えてくれた。

「一人はわかる。『クロムウエル』と一緒にいた個体に呼ばれていた」

「ふうん、それが聞き間違いじゃなければ、アルビオン新皇帝と同じ名前よね」

「そんな都合のいい偶然なんてそう無いわよ。でも、名前が分かっただけでもぐっと探しやすくなったわね」

「水の精霊よ、もう一つ聞きたい」

今度は水の精霊と私の交渉を今まで少し後ろで見守っていたタバサが前に進み出た。

湖の増水の件は解決し、戦う必要も無くなった。

アンドバリの指輪を盗んだ犯人の重要な情報も得たんだけど、まだ何か気になる事があるのかしら？

「なんだ？」

「あなたは私達人間の間で『誓約』の精霊と言われている。その理由を聞きたい」

「単なる者よ。我とお前達では存在の根底が違う。お前達が世代を重ねる間、我は変わらずここに居る。

変わらぬ我故、お前達は変わらぬ何かを我に祈りたいのだろう。

お前達とはそもそもからして違う存在の我には、理解する事などできぬがな」

タバサは精霊の言葉に頷くと、目を閉じて祈るように両手を胸の前であわせて跪いた。

敬虔な修道女のように。

胸には恐らく、焦がれるような切実な想いと激しい復讐の炎を抱いて。



キュルケはそんなタバサの肩に手を置き、優しく微笑む。

それから躊躇していた私の手を取り、タバサの空いた方の肩へと導いた。

この時、彼女のそんな大人の部分がとてもまぶしく見えて、すごく……暖かだった。

大騒ぎしながら無理やりギーシュに解除薬を飲ませ、ずっと面倒を見てくれていたシエスタを労って

いくらかの（サイトの）エキュー金貨をお礼に手渡したあとでの事。

その夜ヴェストリの広場にて、私とキュルケ、そしてタバサは昼間のギーシュとモンモランシーの様子を話の肴に

実践形式での私の戦闘訓練をすることにしたのだ。

先程まではシエスタもこの場において、お互い秘密を知る者同士、これからの事について話し会ったりしていたのだが

彼女は私達と違い仕事があるので、今では厨房に戻ってしまっていた。

先日の誤解から生じた私と二人との戦いは、タバサに言わせればかなり ” 良い感じ ” だったらしい。

しかし、やはり相手のメイジとの近接戦闘がかなり雑らしくて、暫くは体術などを中心に戦い方を教えてもらえる事になった。

学院では魔法を使った戦い方は教えてくれるが、体術はまったくと言って良いほど教えてはくれない。

正確には男子生徒のカリキュラムにちょこつとだけあるのだけど、女子には無い。

っていうかね、男子生徒は外で剣術の真似事を和気あいあいとやってんのに、女子生徒は食堂でテーブルマナーや淑女の立ち振る舞いあと、エスコートのされかたやお茶菓子の品評会ってバカにしていると思えないわよね。

何が悲しくて今更そんな基本的なことを、学院で復習しないといけないのよ。

あの、お母様から受けた血が滲んだ……そう、血も滲むような、ではなく血が滲んだ特訓を受けた私の苦労はなんだったのよ。

学院でこんなに優しく優しく教えてくれるなら、あの時さっさと教えてくれればよかったじゃない。

今更、今頃、もう二度とそんな事はしたくはないっていうのに。

……と、とにかく！

そのせいか、学院にいる生徒の大半のメイジの戦い方に対する認識は、”魔法比べ”だという物だった。

私も最近まではそう思っていたし、平民の認識もそうなのだけど、実際はちがう。

例えば魔法衛士隊に入ると、徹底的に体術や剣術を教え込まれる。

魔法は戦闘メイジにとって、武器の一つに過ぎないのだ。

勿論魔法中心の戦術の組み立ては重要なんだけど、剣や槍、体術を

使いこなせるメイジと魔法のみのメイジでは大きな差が出る。

魔法のみを頼りに戦うメイジは、武器の一つとして魔法を捉えているメイジには絶対に勝てない。

ましてや、サイトのように魔法が使えない人間がワルドのような高位の戦闘メイジを圧倒する事は、普通ならばありえない事なのだ。

……まあ、あいつの場合はすこし特別なんだろうけども。

だからこそ、戦闘メイジはたとえドットだろうと油断できない。

それがスクウェアならば尚更だ。

スクウェアのメイジと、スクウェアの戦闘メイジでは戦闘力において天と地程も差があるのだ。

二つの月の下、広場の真ん中で私は柔軟体操をしながらタバサからレクチャーを受けていた。

そして、さあこれから訓練を始めようかというタイミングで唐突に邪魔が入った。

「精が出るね、ルイズ。しかし、そんな事をしている暇は無いと思

うのだがね」

声の主を確認するまもなく、神速の速さでタバサは反応した。

杖を声が出た方へ向け、他に誰かいないか気配を探る。

キュルケもいつの間にか私達の側に寄ってきて、タバサに背を向け杖を構えていた。

遅れて私も杖と ” 毒竜の牙 ” を抜く。

「ふむ。そちらのお嬢さんはあの時の子だね。ルイズ、あの使い魔の少年はどうしたんだい？」

あの、恐ろしく強い ” ガンダールヴ ” は

タバサが杖を構えた前方、広場の端に植えてある樹木の影から声の主が出てきた。

樹木の作り出す闇でシルエットしか見えないが、背の高い男で右手は刺突剣のような杖を持ち左腕は ” 無い ” ようだった。

その声に、その姿に、私は見覚えがある。

「ワルド！ 貴方なの?!」

「ふふ、久しぶりだな、ルイズ」

闇の中の男は、樹木の陰を抜けて月光が振りそそぐ広場へと出てきた。

その顔には見覚えのある白い仮面があった。

スクウェアスperl、彼の ” 偏在 ” だ。

「生きていたのね！ よくものこのこと私の前に!」

「つれないな、ルイズ。かつての婚約者に」

ワルドはくく、と笑い肩をすくめた。

悪びれない態度は私を更に不快にし、いらつかせる。

「ふざけないで！ この、裏切り者！」

「ふふふ、その言葉はつい先日女王陛下にも言われたよ。まあ、当然の事だが」

「なっ、貴方、姫さまに何かしたの?!」

「まず、誤解を解いておこうか。私はもうレコン・キスタではない」

「嘘おっしやいー」

「まあ、別に信じてくれなくてもいい。今はさるやんごとなき方の下で働いているんだ。」

その方はアンリエッタ女王陛下に痛く入れ込んでいてね。

まだ表立って動くわけにもいれないから、こつこつと君の元へ女王陛下に迫る危険を知らせに来た訳なのだが……」

「な?! そ、そんなこと」

「言っただろ? 信じてくれなくてもいい。女王陛下の身に何かがあるうと、少なくとも私には関係のない事さ」

主からは怒られるかもしれないけども、君に私の言葉を信じさせるなんて土台無理な話だと誰もが思うだろうよ。

しかし、困ったな。

マザリーニ殿にも忠告していたんだが、どうやら信じてはもらえなかったようだ。」

「なんの話よ!」

そして静寂。

もったいぶるように、ワルドはそこで会話を区切った。



タバサは変わらず私をかばうかのように無言でワルドの偏在に杖を向けている。

その実力を察しているのか、珍しく表情は険しいものだった。

後ろのキュルケも他に偏在はいないか、辺りを警戒しているようだ。

私もいつでも ” 瞬間移動 ” を唱えられるようにして、奇襲に備えた。

そんな私達を見てとり、ワルドは再びくぐもった笑いを零す。

「ふ、レコン・キスタによるアンリエッタ女王誘拐計画の事だよ、ルイズ。

私は主の命でその情報を、私以外の裏切り者の名簿と一緒に、女王陛下とマザリー二殿に伝えていたんだ。

勿論、祖国を裏切った私の言葉を信じられるだけの ” 証拠 ” と一緒にね。

だけど、その ” 証拠 ” は陛下にしか通用しないから、どうやらマザリー二殿は信じてはくれなかったようだ」

「そんな、そんな話……」

「で、困った私は君のあの強い使い魔くんの事を思い出してね。仕方ないじゃないか、他に方法は思いつかなかったのだ。それに彼なら信じて……いや、”知って”いそうだから、こうやって今夜陛下が誘拐されると教えにきたのだが……」

「今夜ですって?!」

「ふ、信じてくれる気になったかい？ ルイズ。そう、今夜だ。私は手引き役でね、今頃城に忍び込んでいる頃合だろう。」

ふん、折角忠告したと言うのに警備体制は殆ど昔と変わっていない。

いや、これは衛士隊の問題だな。おざなりに少しだけ変えてあるだけか。

応用力は相変わらず幼稚なようだ。

恐らくは事が終われば、隊長は首倉入りになってしまっだろう」

「ワルド、あんたやっぱりレコン・キスタなんじゃない!」

「勘違いしないでくれ、あんな道化供とは違う。」

クロムウエルは妙な指輪の力で虚無を語ってはいるが、私は騙されはしない。

レコン・キスタにまだ居るのは彼らの情報を集めるためだよ、ルイズ。

君が今夜彼らを止めてくれたなら、晴れて私は主の元に帰れるのだがね」

「妙な指輪って?」

タバサが口を差し込んできた。

姫さまの誘拐の話は私達も ” 知っている ” 。

ワルドが私を襲いにきたのか、それとも彼の話が本当なのかを探るつもりなのだろう。

不意に偏在はこれ以上私達を刺激しないようにするためか、刺突剣の杖を収めた。

まったく隙のない動きで。

「ふむ、アンドバリの指輪とかいうマジックアイテムらしい。死人を操る能力で、今回の作戦にも死んだアルビオン貴族がわんさと支援の為に来ている」

「数は?」

「実行犯は一人。クロムウエルが最近どこからか見つけてきた  
元” 水のスクウエアメイジだ。  
あと、逃亡経路に追っ手を迎え撃つ ” 元” アルビオン貴族達  
が数十」

「全部死人」

「ああ、そつだ。君は中々賢しいな」

ワルドの偏在はタバサの問いに答えつつも、すうっと音もなくその  
体が透けていく。

どこかで聞いたことのある、マジックアイテムの名を口にして。

「あ、まで！ この！」

「はは、さらばだ。ルイズ、気をつけてくれよ？ 君にはまだ ”

用”がある。

まあ、あの使い魔がいれば物の数ではないだろうがな。

いずれ再び君の前に現れるだろうから、楽しみにしておくとい

「うっさい！ 二度とそのヒゲ面みせるんじゃないわよ！」

果たして、私の罵倒は彼に聞こえただろうか。

二つの月が照らすヴェストリの広場には、一方通行の緊張が漂い静寂が満ちた。

やがて何者も襲撃して来そうにないと判断したタバサとキュルケが杖を降ろし、お互いの顔を見る。

それから、私の顔を同時に見た。

二対の赤と青の瞳が、これからどうするの？ 語りかけてくる。

ふん、そんなこと決まりきっているわ。

「行くわよ、タバサ、キュルケ。姫さまを救いに」

二人は当然のように強く頷いてくれた。

ワルドの話を鵜呑みにするならば、かなり危険な相手が姫様を誘拐しようとしている筈だ。

サイトから聞いていた、姫さまが誘拐されるといふ未来の話とも一致している。

ならば、どんなに危険でもこの事は私達が乗り越えるべき”未来”なのだろう。

そして月夜の空に、タバサの使い魔である風竜を呼ぶ口笛の音が響き渡るのだった。



#### 4 - 7 : 寝言は寝てからいいな

見慣れた二つの月が、不吉な程強く地を照らしていた夜だった。

今は亡きお父様の寝室に一人ベッドに腰掛け、わたくしは日々の激務と心労を僅かでも癒す為

いつの間にか日課となっていた就寝前の飲酒を嗜んでいた。

薄い肌着のみを身につけ裸に近い格好でワインを煽る姿は、とても一国の女王には見えないでしょうね。

大きな鏡に映った自分の姿を目の端で捉え、ごちて苦笑を浮かべる。グラスに残っていたワインを一気に飲み干し、わたくしは豪華な天



蓋のついたベッドに腰掛けたまま

傍らの机に置いてあつた手紙を手にとつた。

そして大分くたびれてきた手紙をいつものように開き、文字一つ一つの形、インクのにじみ、大きさまでも脳裏に刻みこむように読み耽るのだ。

手紙の差出人は滅亡したアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダー様。

かつて、そして今でも永遠を誓つた方。

「ウェールズ様……」

何回目だろう。

女王になり、あの夜この手紙を渡されてからその名をつぶやくのは。

どういった事なのかはわからなかったが、トリステイン王国を裏切

リアルビオン王国を滅ぼしたレコン・キスタに通じていた

ワルド子爵が、ウエールズ様の使いとしてこの城に忍び込んで来た夜。

渡された二通の手紙の内、一通には彼が言っていた通り何人ものトリスティン貴族の名前が書かれていた。

あの裏切り者の言葉が正しいならば、そこに名を連ねている者はレコン・キスタと通じている筈だ。

中にはお父様の代から忠実に仕えてくれていて、わたくしが幼い頃遊んで貰った者まで書かれていた。

普通ならば裏切り者の言う事など信じない。

これはレコン・キスタが仕掛けた罠だと疑うでしょう。

しかし、彼はわたくしが信じられるだけの ” 証拠 ” を提示した。

誰も知らない、あの符牒を……

その手紙に書かれた裏切り者については、ウエールズ様の指示通りに早速宰相のマザリーニに相談を行い対応を検討した。

彼も最初はレコン・キスタが仕掛けた罠だと疑っていたけれど、わたくしの……少し、恥ずかしい告白を聞いて呆れながらも

ある程度の納得を示してくれたのだった。

ただ、ここで問題が持ち上がる。

手紙を信じることができたとして、裏切り者の名前だけがわかって  
も、証拠を掴まなければ処断できないのだ。

身分の低い者ならまだなんとでもなるが、残念な事に身分のかなり  
高い者ばかりがそこに名を連ねていた。

王宮の中、権力の中枢に裏切り者が居る場合内偵は極めて危険で困  
難な物になる。

なにより、信頼できる者でないと調査は頼めない。

ここが一番の問題となった。

今のわたくしに信頼できる貴族の存在など皆無だ。

宰相であるマザリーニであってもそれは同じらしい。

元々平民出身である彼は、信頼できる部下など持つてはいない。

皮肉な話で、わたくしの安住の住処である王宮の中の方が、外より  
も味方は少ないのだ。

小さな親友であるルイズに頼む事も少し考えたりしたが、それには  
大貴族の子女とは言え権謀渦巻く王宮の調査などをさせても

いたずらに命を落とすだけでございます、とマザリーニが反対した。

”未来を知る剣” を持つ彼女の使い魔に期待して頼もつかと考え

ただけれど、確かにこんなくだらない下衆な者に関わらせたばかりに

親友を失うのはバカバカしい。

わたくしはそうね、とマザリーニに同調し再び誰に頼もうかと味方のいない自分を嘆く。

長い相談の結果、女官のアニエスに内密の調査を進めさせ、まずは裏切りの証拠を掴む事となった。

最近ルイズと同じように腹心に加えた彼女は、元々平民の王軍歩兵隊長で ”メイジ殺し” の異名を持つ銃と剣の達人だ。

お母様の紹介もあり身辺警護役として直属の女官に加えたが、その忠義は目を見張るものがあり

なによりメイジ（貴族）でない所がわたくしに彼女を信用させた。

今では王宮内にあつて唯一信頼できる者だ。

窓の外、強い月の光の先にはトリスタニアの城下町が広がっていた。

今頃アニエスはあの街の闇に紛れ、裏切り者の調査を行っているの  
だろう。

再び手紙に目を落とす。

暗澹となる気持ちを慰めるかのように、愛しい文字が目飛び込んできた。

私に宛てたもう一通の手紙には、愛の言葉から始まり、思い出が綴られ、一度捨てようとした命を拾いあげた経緯が書かれてあり

近況がしたためられ、再び熱烈な愛の言葉で締められていた。

ウェールズ様は今、ゲルマニアに居るらしい。

脱出した貴族の中にゲルマニアから嫁いで来た者がいたらしく、その方の実家が所有する港町を拠点にしているのだとか。

ニューカッスル城陥落時に夫と息子を失ったこの元ゲルマニア貴族の婦人は、合流したウェールズ様と共に実家へ戻り父親に頼ったそうだ。

父親のゲルマニア貴族は西方伯であり跡継ぎは無く、いずれ自分の孫がゲルマニアの自領を継ぐ約束での縁談であったそうで

婿と孫の戦死に嘆き、怒り狂い、全面的にウェールズ様への支援を約束してくれたとのこと。

今ではその貴族の方に私掠許可を出してもらい、脱出に使った軍船を駆って神聖アルビオンの船を襲いながら王国再興の機会を

伺っていると書かれていた。

表立って自分が生きていると公表しないのは、支援してくれているこのゲルマニア貴族の方に配慮している為。

ゲルマニアがウェールズ様を匿い私掠行為までさせたと知れわたれば、この方のゲルマニア国内での立場が危うくなってしまふ。

そんな近況の最後に、まったく、本物の空賊皇子になるとは夢にも思わなかったよと軽い冗談で締め括られていた。

もう！

この方はわたくしが毎日どんな気持ちでいるのかきつと、わかって下さってないのだから。

幾度味わったかわからない甘美な苦しみが胸に広がる。

そして、何度も何度も思うのだ。

ああ、早くわたくしに会いにいらして。

そんな状況じゃない事はわかっている。

合理的な考えではない。

愚かな妄想でしかない。

絶対に実現などしない。

馬鹿げた話だ。

だけど。

例えそれが現実であつてもだ。

わたくしは、そう想わずにはいられなかった。

そう信じるしか無かった。

そうすぎる事でしか、立つてはいられなかった。

手紙の最後に書かれた彼のフルネームにいつものように口づけをして、今日こそは彼の夢を見ようと床につこうとした時。

あの声が室内に静かに響いた。

待ちわびた、あの声。

「アンリエッタ、今日はもう寝てしまふのかい？」

幻聴かと思つたが、それは違った。

唐突に、かつて裏切り者が立っていた月の光が届かぬ暗がり、あ

の方が立っていたのだ。

「迎えにきたよ、アンリエッタ。さあ、いこう」

薄い闇の中から恋焦がれたあの姿が現れる。

間違いなくあの方の愛しい声。

あの優しい眼差し。

夢ではない。

こうして香水の ” 匂い ” までするではないか！

わたくしの願いは叶えられた。

そう理解するよりもはやく、わたくしは彼へと飛びついて首に手を  
回しキスをする。

ああ、ウェールズ様！



わたくしの、ウェールズ様！！

意識が白濁してゆく。

何も考えられない。

ただ、彼の香水の香りだけがハッキリとしていた。

「ふふ、アンリエッタ。随分と熱烈な歓迎だね。でも時間が無いんだ。さあ、これを飲んで気を沈めて。」

それから、二人で城を抜けだそう。わかるね？」

そう言つて、ウェールズ様はすがりつくわたくしを抱いたままテールブルへ近づき”コンデンセイション”を使ってグラスに水を集めた。

差し出されたグラスを夢心地で一気に煽り、再び彼の胸の中へ身を投じる。

甘い香水の香りが再び鼻に付いた。

頭の中が更に白濁とする。

わたくしは気が付かない。

風のメイジであるウェールズ様が、 ” 水の魔法 ” を使ったことに。

思考が消えていく。

愛しい人の香水の香りだけが鮮明に感じる。

「さあ、支度して。いこう、アンリエッタ。僕の国、神聖アルビオンへ」

1705

遠くからのその声に、わたくしは一度だけ頷いた。

そう、わたくしはウェールズ様にすぎる事でしか立ってはいられなかったのだ。

偽物の希望に目が眩むほど彼を愛していた。

過ちはこうして連鎖していくのかもしれない。

消えゆく意識の中、何かが違う、と思ったときには既に手遅れだった。

最後に浮かんだ思考は、小さな親友の名前だった。

不意に、自分の名前を呼ばれた気がした。

1707

タバサの使い魔の風竜・シルフィードの背の上で思わず振り返る。

当然、誰もいない。

「ルイズ？」

「何でも無いわ、キュルケ」

「降りる」

文字通り風となり凄まじい勢いで学院から王宮へ飛んだ風竜は、タバサの指示通り眼下に広がる王宮の中庭に降り立った。

素早く風竜から降りた私は、城内の様子を察して舌打ちをする。

どうやら姫さまは既に誘拐されたらしい。

城内は深夜にも関わらず、中庭まで聞こえてくるほどの喧騒に包まれていた。

丁度マンティコア隊の隊長が不審者である私達を捕縛しに来たので、姫さまにもらった許可証を提示し状況を尋ねた。

隊長は戸惑いながらも私の身分を確認し、直立不動の姿勢で状況を説明する。

王宮内において女王直属である今の私は、彼よりもずっと上の階級として扱われる。

軍属である彼が例え自分の娘と変わらない年頃の小娘が相手である

うと、上官である私の命令に逆らうことはない。

「今から二時間ほど前、女王陛下が何者かによってかどわかされま  
した！」

警護の者を蹴散らした賊は馬を駆り、ラ・ロシエール方面へ街道  
を南下しております！」

「追手は?!」

「ヒポグリフ隊が先行しております！ 他隊の幻獣では夜目が利か  
ないので、馬を集めている所です！」

「タバサ！」

風竜に跨ったままのタバサに目配せをして、再び風竜に乗り込む。

シルフィードは短くきゅいと鳴いて、翼を羽ばたかせた。

「街道沿いにラ・ロシエールへ。低く飛ぶ」

タバサの指示に、シルフィードはもう一度短くきゅい！と鳴く。

あっという間に空へ躍り出た風竜は、急降下するように低く軌道を変え街道に沿って飛んだ。

「タバサ！ 先行した魔法衛士隊のヒポグリフが目印よ！

ヒポグリフは馬よりも走るのが速いから、もう賊に追いついてい  
るかもしれない！」

私の言葉に、タバサは無言で頷いた。

王宮の魔法衛士隊には、その騎乗する幻獣によっていくつかの隊の  
分けられている。

赤い毛皮にコウモリのような翼、毒針が無数に生えたサソリのような節のある長い尾、鋭い牙を持つ獅子の頭を持つ幻獣マンティコアを駆り

かつて母様が所属し、すべての衛士隊を統括するマンティコア隊。

ワルドが率いていたグリフォン隊。

そのグリフォンと馬をかけあわせ、大人しく御しやすい性格で、夜目も大きくヒポグリフ。

姫さまを取返すべく先行しているのは、そのヒポグリフを駆る隊だ。

低く飛ぶシルフィードの背から、私達は目を皿のようにして街道を注意深く観察し賊を追う。

やがて前半分は鷲、後ろ半分は馬というまるでグリフォンの偽物のようなその姿が、見る影も無くして私の視界に飛び込んできた。

すかさずシルフィードに止まるよう指示をだすタバサ。

緊張しながら地に降り立った私達は、生きている者がいないか辺りを伺う。

そして絶句した。

風竜の背に乗っていた時は気が付かなかったが、ヒポグリフと共にその主である魔法衛士隊のメイジ達の死体が無数に転がっていたのだ。



死体は何か強力な魔法で引き裂かれてもしたのか、手足が無い者、逆に胴が無いもの、あるいは原型を留めない者もいた。

あたりにただよう猛烈な血臭と僅かな獣臭。

私はその匂いに当てられてのか、不意に強烈な吐き気がこみ上げてきてたまらず近くの草むらに駆け込み嘔吐した。

キュルケは口に手をあてて目を逸らし、タバサは変わらない表情でその惨劇を見つめている。

「生きている者がいる」

そうつぶやくと、タバサはシルフィードに上空で待っているよう手早く指示を出し駆けた。

走り出す彼女の背を見ながらキュルケが私の背をさすり、ハンカチを差し出す。

「大丈夫？　しっかりなさいな。」

「え、ええ。ありがとう、キュルケ」

「お安い御用よ。さあ、行きましょう。タバサー一人に任せるわけにはいけないわ」

嘔吐の不快感に耐えながら、渡されたハンカチで口をぬぐいキュルケの後に続いた。

タバサーの元まで駆けつけると、その足元には一人の衛士が仰向けに倒れていた。

手足の欠損はない。

しかし、胸にひどい怪我をしていた。

「大丈夫？」

「大丈夫、だ。」

タバサの問いに息も絶え絶えに衛士は答えた。

しかし、私が見ても明らかに大丈夫ではない。

「私達も賊を追ってきたの！ 直に王宮から他の衛士隊が来るわ。教えて。一体、何があったの？」

「あいつら……確かに致命傷を与えたのに……」

そう言い残し、持ち上げていた首をかしげた。

衛士は私達を見て気が緩んだのか、そこで気絶したらしい。

とりあえず応急処置をして賊を追い掛けましょうと言いかけた時、突然タバサが杖を振った。

一瞬で予め作っておいたのであろう厚い空気の壁が、私達の周りに展開する。

同時にどこから飛んできたのかわからない炎や氷の魔法が、空気の壁に弾かれ掻き消えた。

慌てて魔法の飛んできた方向……と行って全方向なのだけでも、見渡すと次々と茂みの中から人影がむくりと立ち上がっていく。

すべての影は、杖を手にしていた。

キュルケと私はここに来て、やっと思考がタバサに追いついた。

待ち伏せだ！

急いで杖と短剣を抜き、頭を切り替える。

「ふむ、今度は三人か。奇襲をかけるまでもなかったかな」

いつの間にか前方の街道に人影が二つ、立っていた。

その内の一人がそう口にしてニヤリと笑う。

私は月あかりの下、二人を見てドキリとした。

二人とも見覚えのある顔。

それは……

「姫さま！ それにウエールズ皇太子殿下！」

「む？ 君は僕を知っているのかね？」

「知っているも何も、アルビオンで会ったではございませんか」

「ふむ。そうか。君は ” 私の顔見知り ” だったのか」

「え……まさか貴方……皇太子殿下ではないわね？」

男は笑う。

ウェールズ皇太子殿下の顔のまま。

隣にいた姫さまは私の声など耳に入らないかのように、茫洋と隣の男の顔を見つめていた。

「姫さま！」

「ふふ、無駄だよ。彼女には僕特製の水魔法 ” ギアス ” をかけてある。

いまや僕の ” いいなり ” さ。ここで裸踊りをすると命じれば、喜んでやるだろう」

「まずいわね、 ” ギアス ” ってたしか禁呪じゃなかったっけ？」

「それもスクウェアスperl」

呼び掛けに姫さまの反応はない。

キュルケとタバサの情報に耳を傾けながら、私は歯噛みをした。

どうやらワルドが言っていた事は本当らしい。

あの男は恐らく、水のスクウェアメイジ。

水のスクウェアスペルには顔を変える魔法がある。

恐らくはそれを使っているのだろう。

そして、アンドバリの指輪で操られている死体でもあるはずだ。

多分、今私達を囲んでいる者達も。

「そう怖い顔をしないでくれるか？ お嬢さん方。どうだ？ 取引をしようじゃないか」

「取引？」

「うむ。我々は先の追撃で馬を失ってしまったのだよ。どうだろうか？ 先程の風竜を貸してはくれないか？」

「だれが！」

「悪い取引じゃないとは思っけどね。何、女王陛下は悪いようにはしないし君たちの命も見逃してやろう

そら、アンリエッタ。君からもお願いするんだ。

” 「

「……ルイズ」

「姫さま！ さあ、早くこちらへ！」

「道を開けなさい。それと、風竜をここに」

声は抑揚のないものだった。

「姫さま！ 目を覚まして下さい！」



「ルイズ、これは命令です。わたくしとウェールズ様の邪魔をしないで」

「姫さま！」

「無駄だよ、お嬢さん。さて、そう交渉に時間をかけるわけにはいかないんだ。どうするね？」

唇を噛み、ウェールズ皇太子殿下の姿をした相手を睨む。

こっぴなったら……

（キュルケ、タバサ。やるわよ！）

囁きに、二人は目立たないように頷く。

私は短く ” 加速 ” を詠唱した。

音が消える。

そして、あの偽物へ突進した。

視界に映るあらゆる存在は、まるで彫刻のように動かない。

難なく男の背後に周り、容赦なく背中に ” 毒竜の牙 ” を突き立てる。

ぐじゅ、と嫌な感触が腕に伝わった。

先程吐きだした吐瀉物の味が、舌の奥によみがえる。

瞬間、 ” 加速 ” の効果が切れてバスンと音が鳴った。

それを合図にするようにして、キュルケとタバサが囲んでいる敵メイジにむけ一斉に魔法を放つ。

無数の氷の矢と炎の球をまともに受けた幾人かが、音も立てずに倒れ伏す。

「ふむ、交渉決裂といった所か」

頭上から聞こえた声に、揺らぎはなかった。

考えるよりも早く短剣から手を離し、  
”瞬間移動” を短く唱えた。

視界が一瞬揺らぎ、私はタバサ達の元へ飛ぶ。

揺らいだ視界が元に戻ったとき、信じられないものを見た。

偽物はその背から事もなげに短剣を引き抜き、ぺつと投げ捨てたのだ。

からんと短剣が転がる音がして、同時に先程キュルケ達の魔法を受けたメイジ達がむくりと立ち上がった。

「無駄だよ。君らの攻撃では」

言い終わらないうちに、タバサが放った ” ウィンディ・アイシクル ” が偽物の心臓を貫く。

思わずやった！ と歓声を上げかけたが、言葉は出なかった。

「……君らの攻撃では、我々を傷つける事などできんよ」

偽物は何事も無かったかのようにセリフを続けた。

氷の矢を心臓に突き刺したまま。

余裕の表れなのか、あの笑みはずっと変わらない。

男は笑っていた。

ウェールズ皇太子殿下の顔のまま。

その隣に心を奪われた姫さまが茫洋と立っている。

「ま、まずいわね。打つ手なしじゃない？」

「 ”手” は一応あるわよ」

「何」

「虚無魔法、 ”デイスペル” 。

それさえ唱えることができれば、アンドバリの指輪の効果も姫さまにかけられた魔法も全部打ち消せるわ」

「わお！ ルイズやるじゃない！ 最初からいってよー」

「さっさとお願い」

「……ただし、詠唱がとっても長いわ」

「なによ、ぬか喜びさせてやーねえ」

「ノロム」

「なによ！ 他に方法が……って、タバサ、あんた」

「これで最後だ。どうするね？」

姦しく相談をしていた私達に、偽物は余裕を持って最後通告をしてきた。

ウェールズ皇太子の端正な顔立ちでうかべている笑みは、どこか下卑たものを感じる。

勿論、私達の答えなんて決まっている。

「……それしか無いよね。タバサ、時間を稼ぐわよ。  
”エア・シールド”を中心に防御をお願い。迎撃はあたしがやるわ」

「わかった」

「頼むわよ？」

私達は偽物の問いへの回答として、同時に呪文の詠唱に入った。

いち早く詠唱を終えたタバサの ” ウインド・ブレイク ” が最も早く呪文を唱えようとしていた死人達を吹き飛ばす。

間髪入れずに ” エア・シールド ” の詠唱を始める傍らで、キュルケの ” ファイアー・ウォール ” が発動し

タバサへむけて飛んできていた風の刃を炎の壁が阻んだ。

更に飛び交う魔法。

私は瞑想状態の中、虚無魔法 ” デイスペル ” の詠唱を続ける。

詠唱を続けている、ということはタバサとキュルケが魔法を防いでくれているという証だ。

もうすこし。

もう少しで……

「きゃあ！」

「ぐー！」

二人の悲鳴が、虚無魔法の詠唱の為に瞑想状態となっていた私の意識下に届いた。

直後に全身を不思議な浮遊感が襲う。

それからすぐに頭の中でパチン、と音がして私は瞑想状態から引き戻された。

視界は無い。

息が、出来ない。

何？

これは、一体……

そこまで考えて、状況が飲み込めた。

夥しい量の水が、私達をまるごと襲ったのだった。



「水のスクウェアスベル、”タイダル・ウェイヴ”。川の流れをも逆流させる水の流れて相手を文字通り洗い流すのさ」

地に這い蹲り、激しく咳き込む私達に偽物はあの不快な笑顔を張り付かせたまま、丁寧に魔法の解説を行った。

なんて事。

そんな魔法、どうやって防げって言うのよ！

拳を強く握り、ギリと音がする程歯を噛んで、嫌らしい笑いを張り付かせる偽物のウェールズ皇太子を睨みつける。

射殺す視線に、偽物は軽く肩を竦めた。

ずぶ濡れになった体を起こし、杖を握り締める。

その手にポツリ、と雨の粒が降ってきた。

いつの間にか月は隠れ、雨雲が天を覆っている。

「大した忠誠心だ。まだそんな眼をできるとはね。しかし、命乞いをした方が良くはないのかね？」

雨まで降ってきて、水のメイジたる僕に勝てるわけないのだし」

「うる、さい！」

「強情だなあ、トリステイン人ってのは。アンリエッタ女王陛下もそうなのかい？」

まあ、その方が”アッチ”じゃ色々と楽しめるか」

「こ、この……下衆な男！」

「いいじゃないか。クロムウェル様は、用がすんだら僕にくれるって言ってくれたんだ。」

偽物はそう言って姫さまを抱き寄せ、唇を塞いだ。

姫さまの抵抗は無い。

私達に見せつけるかのような濃厚なキスを、わざと音を立てて行う。

悔しかった。

己の無力が。

悲しかった。

キスをされ、愛しそうに偽物の背に手を回している姫さまの手が。

「姫さまを、離せ！」

「何でだ？ 今やアンリエッタ女王陛下は僕の女だ。くふ、そう、僕のものなんだよ」

「うるさい！ 姫さまの意志を奪っておいて何を！」

「何、初夜ではきちんと元に戻すさ」

「うる」

言葉が続かない。

怒りのあまり、涙が出て来た。

もう泣かないと誓った筈の目から、無念の、怒りの、憎しみの涙が流れ出た。

「じゃ、そろそろお暇してもらおうか。最後に良いものを見せてあげよう。

実は僕も遠く、アルビオン王家の血を引いていてね。こう見えても本当は ”こいつ” に負けず結構な美男子なんだよ？

まあ、だからクロムウェル様に戦の初めの方で殺された訳なんだけど。

で、だ。

こうして水の魔法でアンリエッタ女王陛下を操っているわけだが……」

その言葉を合図に、二人は寄り添い共に杖を掲げた。

二人を中心に水の竜巻が現れる。

竜巻はあれよという間に大きくなっていき、雨雲を吸い込み、天を覆い尽くした。

「なによ、あれ……」

「王家にのみ伝わる”ヘクサゴン・スペル”さ。王家のトライアングルメイジ同士が息をあわせて使う合体魔法なんだけど

僕はスクウエアだからちょっと彼女に合わせる必要があるね、これ。

「どうだい？ 本来なら息をぴったりと合わせる必要があるんだけど、こうやって支配していればそんな事、造作も無いんだ」

絶望混じりのキュルケの言葉に、偽物にはこやかに答えた。

そうしている間にも、水の竜巻がふくれあがって行く。

まるで城どころか街一つ飲み込むかのような大きさへとなっていく。

横ではしゃ、と地に貯まった水を打つ音が聞こえた。

キュルケが絶望を顔に浮かべ、膝を折っている。

彼女を励まそうと手を伸ばすと、その手を取る者がいた。

タバサだ。

彼女は私に言った。

”瞬間移動”で逃げて。

その顔は、優しかった。

私の手を握るタバサの手の上に、もう一つ手が重なる。

絶望に打ちひしがれている筈のキュルケだった。

彼女は言った。

ダーリンによろしくね。

声は、優しかった。

赤と青の髪を、巨大な竜巻により光を遮る雲を取られた二つの月が照らし出す。

私は泣きながら、言った。

「あなた達を置いて、逃げるわけないでしょうが！」

「ルイズ……」

「……お願い」

「うるさい！ いいこと？ 覚えておきなさい！」

死の恐怖に震える足を鞭打って、杖を構える。

山のようにそびえる、巨大な竜巻に向けて。

ウェールズ皇太子の偽物は、相変わらずあの下卑たニヤケ顔で杖を振った。

その動きに同調するように、姫さまも杖を振る。

こちらは茫洋とした表情で。

……いや、その類に一筋光るものが月の光に反射していた。

巨大な水の竜巻は、土砂を巻き上げながらゆっくり私達へと向かっ

てくる。

私は泣きながら、絶叫するように叫んだ。

竜巻の発する轟音にかき消されぬよう、この場に居るすべての者に聞かせるように。

「敵に後ろを見せないものを貴族と呼ぶのよ！」

涙は止まらない。

この期に及んで勝算もなかった。

ただ無力な己が悔しかった。

姫さまを救えなかった事がすごく悲しかった。

死が形を持って目の前に迫る。

その死から、私は思わず顔を背ける。



迫り来る轟音の中、不意に自分の名前を呼ばれた気がした。

聞き覚えのあるその声に、え？ と再び顔を上げた時。

瞬間、猛烈な圧力によって私……多分キュルケとタバサも一緒に後方に吹き飛ばされてしまった。

何かが炸裂したかのような凄い風と音がして、泥だらけになりながらも地面から起き上がれず目も開けることができない。

轟音が続く。

空が鳴いている。

” なにか ” が立て続けに降り注いで居るようだ。

私は雷に怯える子供のように、目を瞑り耳を塞いでただひたすらにうづくまる。

そう、轟音は落雷のような音だ。

やがて、音は止んだ。

キーンと耳鳴りがして、本当に静寂を取り戻したのか疑わしいが、取りあえずは ” なにか ” が収まったようだ。

やはり一緒に吹き飛ばされていたキュルケとタバサも、むこうで泥だらけになりながらも一緒に吹き飛ばされた

魔法衛士のけが人を介抱している。

そして、私達は驚愕した。

水の竜巻は消えていた。

ついでに道も、無い。

プディングに思いつきりスプーンを突き立てて抉ったように、大きな穴が無数に開いている。

その穴の中央には、長く大きな馬上槍が塔のように刺さっていた。

「な、なんだ！ 一体！ 僕のヘクサゴン・スペルが強すぎたのか？！」

「寝言は寝てからいいな、偽皇太子さん」

無数の大きな穴の向こう、私達と同じように吹き飛ばされていた偽物が、あの嫌らしい笑みを消して何やら喚いている。

いや、もう一人。

偽物と姫さまの前に誰か立っている。

よく、見えない。

その声は良く知っているのだけど。

声の主は偽物を無視して、こっちに振り向いた。

大きな穴の向こうからで結構な距離がある為か、その顔は良く見えない。

いや、それは涙のせいかも。

さっきから止まらないのよ、この涙。

もう、悲しくないのに。

もう、悔しくないのに。

こんなに、嬉しいのに。

「なんだ、お前は?! 一体……」

「……お前、ワルドから聞いてなかったのか？」

「ワルド？ あの男か？ 一体何を……」

「まったく。じゃあ、お前にも教えといてやるよ」

声の主は、そう言っておもむろに地面へ手を伸ばした。

何も無いはずの大地から、穴の底に突き立っている物と同じ馬上槍が右手に出現する。

ボヤける視界の先、確かに見えた。

その左手には片刃の大剣。

そして、強く輝く懐かしい光。

声の主は槍を担いで再び立ち上がり、言った。

「ルイズを、泣かせるな」

涙で見えない。

彼の姿が。

しかし、見て確認するまでもないだろう。

サイトが帰ってきた。



4 - 8 : このまま二人で

強まる雨足の中、風が吹いた。

涙と雨で滲む視界の先。

私の使い魔は光輝く左手に剣を、右手には槍を持ち、姫さまとウエールズ皇太子の偽者の前に立つ。

サイトが帰ってきた。

そう、サイトが帰ってきたんだわ！

遅れて、その事実だけがじわりと胸に広がっていく。

それから彼に伝えたい言葉の数々が、頭の中を駆け巡った。

遅かったじゃない！

一体何処に行つてたのよ？

何をしていたの？

もっと早く来なさいよね！ もう少しで死ぬ所だったんだから！

お願い、姫さまを助けて！

……寂しかったんだから。

しかし言葉は何一つ口から外へ出すことは出来なかった。

なんだか、怖かったのだ。

あのサイトが幻だったらどうしよう。

私の事を忘れてしまっていたらどうしよう。

そう思う根拠はない。

ただ意味も無く、なぜか彼に声をかけることが憚れていた。

雨足が強くなっていく。

先程の ”ヘクサゴン・スペル” によって大量の雨雲が水の竜巻



に吸い込まれたからか、余所の雨雲がここらに集まって来ているよう。

状況は相変わらず不利だ。

敵は大人数の死人のメイジ。

その首領は水のスクウェア。

更に水のメイジにとって有利な雨の中、姫さまを人質に取られている。

「ルイズ！」

不意に、声をかけられた。

サイトだ。

「 ” デイスペル・マジック ” を頼む！ 大丈夫だ、お前には指一本触れさせねえ！」

そう叫んで、サイトは私に背を向けたまま左手に持った大剣を掲げてみせた。

手の甲に光るルーンの輝きがはっきりと見える。

「こっちは任せときなさい、ルイズ。今度はダーリンもいるもの、きつと守りきってみせるわ」

「まかせて」

私と同じように泥だらけになったタバサとキュルケが、一緒に吹き飛ばされたあのヒポグリフ隊の人を抱えて側にやってきていた。

後ろに気絶した衛士を寝かせ、左右に向い杖を構える。

それぞれの杖の向ける先には、あのメイジの死人達。

いつの間にか、私達は再び包囲されつつあった。

まずい！

今魔法で集中攻撃されたら私達はともかく、この衛士の人は逃げられない！

焦りと共に、背中に冷たいものが走る。

不意に。

雨が強く降る中、風が吹いた。

風は雷鳴を伴ない、キュルケの正面にいた幾人かの死人達の足元を爆ぜさせる。

その光景はまるで、水しぶきのようだった。

水たまりの水を思いつきり蹴飛ばしたかのように、土が人がパラパラと、まるで冗談のように死人達が上空へ吹き飛んで行く。

あるいは、高く積み上げた積み木を思いつきり横薙いだような、非現実的な光景。

驚いて風が吹いて来た方向を向くと、サイトが再び地面からあの槍を取り出している姿が見えた。

地面に大穴をあけ、メイジの一团を吹き飛ばしたのはどうやらあの槍らしい。

サイトは再び作り出した槍を、今度はタバサの眼前にいたメイジ達へ投げつける。

恐ろしい風斬り音をあげ、槍はメイジ達の足元へ吸い込まれていつて爆ぜた。

先程と同じように、メイジと大量の土砂が空に向かって吹き飛び、雨に混じって落ちて行く。

私達は互いに顔を合わせて、息を飲んだ。

……何よ！ この馬鹿げた威力の槍は！

その威力を目の当たりにして、私達は暫し呆然として槍が変えた地形を眺める。

「ルイズ、早く！ 次のヘクサゴン・スペルが来る！」

少し焦りを含んだサイトの声が、再び聞こえてきた。

その声に、私は我を取り戻す。

そつだ、惚けている場合じゃない！

杖を構え再びサイトに目をやると、丁度あの偽者がもう一度 ” へ  
クサゴン・スペル ” を唱えている所だった。

まるで山のように大きな水の竜巻がうねりをあげ出現する。

サイトはあの槍を出しもせず、ボロ剣を両手で構えている。

恐らくは槍を投げて、姫さまを巻き込む事を避けたいのだろう。

でも、どうやってアレを止めるつもりなのかしら……

いや、今は考えるのはよそつ。

そつだ。

私はサイトを信じていればいいんだ。

「キユルケ！ タバサ！ 後お願いね！」

「了解。タバサ、あのアンデット達が集まってくる前に各個に足止

めしてくるわ。

ふふん、ダーリンが随分とやりやすくしてくれたもの、これ以上良い所を盗られちゃうわけにもいかないしね。

アナタは守りをお願いできる？」

「わかった」

走り出すキュルケを目の端で追いながら、瞼を閉じる。

脳裏に浮かぶ、 ” デイスペル・マジック ” の呪文。

虚無の呪文を歌うように口にし、精神を練り上げ、昂ぶらせて行く。

胸には先程飲み込んだあの使い魔への言葉が渦巻いていた。

早くアイツの顔を間近で見たい。

早くアイツと積もる話をしたい。

早くアイツに触れたい。

早く私に触れて欲しい。

早く、速く、はやく!!

想いが、感情が、昂ぶる精神と混じり合い激しく心を震わせて行く。  
そして時間が止まった。

いや、もしかしたら何度も月が空を照らしたのかもしれない。

ばかな、きっと瞬きをする一瞬の時しか経っていないわ。

……わからない。

時を感じる感覚がすっぱりと消失したように、一瞬は永遠に、永遠は一瞬に感じてしまう。

そんな感覚の中、昂ぶる心だけが確かな存在として胸にあった。

やがて、激情となった心の震えは臨界点に達し、真っ白な光となって弾ける。

そして辺りは、私の心と同じ色で染め上げられていた。

あらゆる魔法の効果を打ち消す虚無の魔法。

”ディスプレイ・マジック”の完成だ。

「ルイズを泣かせるな」



くそ、最悪な気分だ。

激しい怒りが心を揺さぶる。

やっと帰ってこれたのに。

やっと再会できたのに。

こんどこそ、 ”間に合った” のに。

先頃、ちらと見たルイズは泣いていた。

アイツは俺を確認する前から泣いていた。

ルイズは敵を目の前にして、涙を見せるような奴じゃない。

恐らくは、耐え難い屈辱を受けたんだろう。

誰に？

決まってる。

この、偽者にだ。

ぎり、と歯を噛み鳴らし、ウェールズ皇太子と同じ顔をした偽物を睨む。

こいつは偽者だと言う事は ” 知っている ” 。

なんせ、ゲルマニアで本物に会って来たばかりだからな。

解せないのは、姫さんだ。

表情からは感情が見えない。

目に光はなく、ずっと一点を見つめ続けている。

洗脳か魅了でもされてるのか？

だとしたら、どの道ルイズのあの魔法を使う必要がある、か。

「ルイズ！ ” デイスペル・マジック ” を頼む！ 大丈夫だ、お前には指一本触れさせねえ！」

偽者に槍を突きつけたまま、デルフを握る左手を空高くかざして叫ぶ。

” 何年ぶりか ” の挨拶にしては色気が無いな、と苦笑いしながら。

そんな自嘲も、目の前にいるウェールズ皇太子の顔をした偽者を見ると、再び不快なドス黒い感情に支配されて行った。

「ルイズ？ あそこにいる、小娘の事かい？」

偽者は幾らかの余裕を取り戻したのか、ニヤけながらルイズの方を指さす。

それを合図としてか、一所に固まっているルイズ達を囲むべくメイズの死人達が規則正しく動いた。

「大丈夫、すぐ君も同じ場所へ送ってあげるから」

「なあ」

「うむ？ なんだい？ 命乞いなら間に合っているよ」

「いや。あの死人達は……元王党派の貴族なのか？」

「妙な事を聞くね。まあ、いいだろう。

そうだよ、僕を含めてここに居る死人達はみんな元王党派さ」

「そっか。じゃあ、まとも当たる訳にはいかねーか。後が大変そうだしなあ」

「何をだい？」

「こいつを、さ」

答えて、振り向きざまに槍を投擲した。

槍は激しく降りつつある雨の風景を切り裂いて、赤い髪の毛のメイジ……多分キュルケと対峙している死人達の足元に向かって飛んでいく。

次の瞬間、地響きを立てほこりを吹くかのように死人達は宙を舞った。

あの哀れな死人達は元王党派だっというなら、この後せめて埋葬してやりたいもんな。

まともに当てると消し飛ぶから、後で埋める時が大変だ。

俺、バラバラになった人体を拾い集めたくねーもん。

取りあえずこうやって支援投擲でもしとけば、あとはキュルケとタバサでなんとかするだろ。

無表情なアンリエッタ姫の隣で、目を開いて驚く偽者にニヤリとしてみせ、次の標的を貫くべく再び槍を作り出す。

今度は先程とは反対側、青い髪……ありや間違はなくタバサだな。タバサと対峙している死人の一団に向け、投擲する。

二度目の雷音が辺りに轟き、地を揺らした。

「お、お前……」

「これでよし、と。さて、次はお前だ」

槍のあまりに非常識な威力を目の当たりにして偽者は自失しかけていたが、俺がデルフを向けると我を取り戻す。

その表情からは先程までの余裕が消え、焦りすら見え隠れしていた。偽者は一瞬目をつり上げ何か言おうとし、言葉を吐かないまま口を閉じる。

間を置いて、ようやく口から出てきたのは言葉ではなく詠唱のための呪文だった。

杖を素早く無駄の無い動きで天にむかって振りかざす。

詠唱はすぐに完成し、無数の氷の槍が術者の周囲に浮かんだ。

水の魔法、 ” ジャベリン ” だ。

「死ね！」

気合と共に偽者は天に掲げていた杖を俺に向けた。

合図と同時に無数の氷の槍は得体の知れない槍を使う男を貫かんと、猛スピードで一斉にこちらへ飛んでくる。

俺はデルフを構えたまま動かない。

槍は既に回避不能な距離まで殺到している。

刹那。

氷の槍達は、まるで吸い込まれるように軌道をデルフの切先に変え消えて行った。

「な?!」

「うお! 相棒、こいつ強えぞ! 吸い込んだ魔法がハンパじゃねえ密度だ!」

「問題ねえよ、デルフ。お前にとっちゃ、これ位朝飯にもならねえだろ?」

「わはは、言うじゃねえか相棒。おい、色男のあんちゃん! もうちょっとウマイもん食わせてくれや!」

「おのれ！ 言わせておけば！ アンリエッタ、こい！」

偽者は姫さんを強引に抱きよせ、杖を再び天にかざした。

その動作に呼応するように、アンリエッタ姫も杖を掲げる。

呪文の詠唱が始まると、二人を中心に巨大な水の竜巻が発生した。

竜巻は空気中の水分を、雨雲を、土砂を巻き上げていって不吉なまでに大きく育っていく。

王家にのみ許された合体魔法、 ”ヘクサゴン・スペル” だ。

「うつむ、流石にあれは吸い込めねえやな、相棒。胃にもたれちま  
う」

「うつせ、お前胃なんてねえだろうが。それに問題ねえよ。そろそろルイズの ”ディスプレイ・マジック” が完成する頃合さ」



「あの嬢ちゃんの魔法が？」

「ああ、そつだ」

「相棒。たまには後ろを振り返るって大事だぜ？ ほれ、嬢ちゃん  
惚けてて魔法唱えてねえぞ？」

「なぬ?!」

デルフの言葉を聞くや否や、慌てて振り返る。

確かにルイズは俺が投擲した槍が作り出した更地を、茫と見ていた。

うげ！

何やってんだよ！

俺のカッコイイ登場に見蕩れてくれたならともかく、そんなもんを  
ぼーっと見ているとか！

槍か?! 槍が珍しいのか?! いやいやいやいや、無い、それは  
無いぞルイズ！

一世一代の大見得切ったんだぞ、そつちに見蕩れてくれよ！

じゃ、ない！

そうじゃない！！

あのとんでもねえ竜巻を何とかしなきゃ！

槍をブチ込むには今度は姫さんが近すぎる！！

ちくしょう、この体になってからこつち、燃やされるわ裂かれるわ  
溺れるわ、拳句の果てにノルンにハメられて ” 間に合わない ”  
わで

ロクな事になりやしねえ！

「ルイズ、早く！ 次のヘクサゴン・スペルが来る！」

巨大な水の竜巻を見据えデルフを構え直し、背後にむけて叫ぶ。

一拍おいて、心が踊りだすような虚無の詠唱が聞こえてきた。

とても、懐かしい響きが。

ああ、そっか。

俺、こっちのルイズと出会って初めて虚無の歌を聞くんだっけ。

心が歓喜に震える。

詠唱の言葉の一つ一つが、空間を超えて聞こえてくるようだった。

「お、お、お、相棒！　すげえ心の震え方だな！」

「ああ、デルフ。ずっとこの時を夢見てたからな」

「お前さん、随分と遠回りしたもんなあ……」

「はは、まったくだ。でも、それも今日で終りだ」

「我が家が一番ってこつたな、相棒」

「すごい事だ、デルフ！ 久々に難しいのいくぞ！ アレを押し止める！」

「暴君の時のように弾いちやダメかい？」

「久々の大物でボケたか？デルフ。姫さんに当たるだろうが。」

「おっと、そりゃいけねえな。仕方ねえ、いつちよ頑張りますか！  
だけどな、相棒！」

「あんだよ」

「久々だから言っけどよ、きつと痛えぞっ？」

デルフと軽口を叩いている間に、偽者の ”ヘクサゴン・スペル”  
が完成しゆっくりとこちらに移動を始めた。

大量の土砂を巻き上げ、俺と背後にいるルイズ達を殲滅せんと水の  
暴威が迫る。

まるで山をひっくり返したかのような大きさの水の竜巻の根元に、

俺はデルフを打ち付けた。

地に足を踏ん張るも、たちまち竜巻の中にのみ込まれる。

巨大な力の渦は俺の全身を引き裂かんと唸りをあげる。

耳が千切れ、剣を握る指からは爪が剥げ落ち、吸い上げた大小の岩石が腕や頭、体に容赦なく叩きつけられる。

踏ん張る足が折れ、道に落ちていた小枝が太股に刺さり、岩が腹に激突して内臓を破裂させた。

しかし、俺はデルフを離さない。

巨大な竜巻をたった一振りの魔剣で支え続ける。

千切れた耳の奥で、相変わらず聞こえる虚無の歌。

その歌を聞くと、心が激しく揺さぶられる。

強く、強く。

更に強く心が震え、その震えが二つのルーンを通して俺の作り物の体に流れ込んだ。

体を引き裂く外の竜巻のように震えは二つのルーンの間で内側の竜巻となり、”グリムニルの槍”の力を発現させてゆく。

魔槍は己の主の体を元に戻し更なる戦いへと駆り立てるため、千切れた耳を、折れた指と剥げた爪を、足を、たちどころに治癒させて

しまつ。

そして、治癒した瞬間に再び力の渦による暴力で、耳が千切れ手足の骨が折れるのだ。

「ぎ、ぐ……」

「相棒！」

「デ、デルフ！ すっ

げえ痛え！！」

「頑張れ、相棒！ あと少しだ！」

「こ、の、お、おおおお！」

竜巻を支える腕と足に更に力を込める。

左手のルーンが強く激しく輝き、デルフを包んだ。

無限に続くかのような外界の痛みを余所に、愛しい声で奏でられる  
虚無の歌は俺の頭の中で響き渡る。

バキン、と腕が飛んできた岩石によって再び折れた。

メリメリと音を立て、刺さった木の枝が肉をえぐり彼方へ飛んでい  
く。

俺は待った。

ひたすらに、その時を待った。

救いの、決着の、虚無の歌の完成の時を。

やがて、遂にその時は訪れる。

視界が真っ白になって、あらゆる苦痛が消え去ったのだ。

ルイズのあらゆる魔法の効果を打ち消す虚無の魔法。

”デイスペル・マジック” が完成したらしい。

安堵のためか、意識が遠のく。

まったく、”グリムニルの槍” って変な所まで忠実に人体を再  
現するんだよな。

心地よい光の中、最後にそう愚痴って俺は意識を手放した。

後日、魔法学院。



俺が目を覚ました時はルイズの部屋だった。

部屋には誰もいない。

上体を起こし、体をチェックしてみる。

痛む箇所もなければ傷もすべて塞がっていた。

なぜか跡形もなく破れた筈のパーカーまで身につけている。

「えっと、俺……姫さんを助けるために戦って、ルイズの魔法の間稼ぎをして……そうだ、気を失ったんだっけ。

なんだよ、造り物の体なんだからそんな所までは再現しないでいいのさ」

「ふん、傷を何度も無理繰りに癒して、無茶な再生を繰り返したツケじゃ。

むしろあれだけ派手に力を使っというて、数日の睡眠で”調整”が終わる事の方が驚きじゃて。

くく、普通の使い手ならとっくにこの辺りは砂の海じゃな」

俺の独り言に答える声があった。

しかも、聞き覚えのある声だ。

声の主は今までベッドの下に居たらしい。

のそりと這い出てきて、強く伸びをしてからベッドの上に飛び乗る。

声の主は黒い猫だった。

「なんだよノルン、居たのか」

「居たのか、じゃなかるう？ そそもそ、お主は端からわしをこころへ連れてくるつもりだったじゃろつに」

「そりゃ、まあそうだけどさ」

「ま、わしとしても一度あ奴らに説明をして置きたかったしのう。面倒事を主らで回避してもらえるなら、吝かではないわ」

「頼むよ、俺じゃ上手く説明できそうにない」

「うむ、任せておけ。こちらとしても、あの無能王にその ” 槍 ” を好き勝手に使われてはたまらん。

ああ、今更お主の力不足を気にするでないぞ？ 何、お主とわしの仲ではないか。

なんなら、このまま二人で愛の逃避行でもするか？ ひひ、わたしはいつでも構わんぞ？」

「うるせえ。半分騙した拳句一年近くも引つ張りまわしやがって。大体なあ、普通は」

言いかけて、部屋の扉が開く。

外からは色とりどりの髪の色をした少女達が入ってきた。

皆、見覚えのある顔だ。

ピンクを先頭に、赤、青、黒、白。

ん？

何かがおかしい。

ルイズ、だろう？

キュルケ。

タバサ。

シエスタ。うん。

……ルー、なんでお前がここに居るんだ？

お前、ゲルマニアに帰ったんじゃないのかよ!!

「サイト！ あんた、やっと起きたわね！」

「あ！ サイトさん！」

「やつほー、ダーリンク久しぶり！ あたしが居なくて寂しかった？」

「えへへ、サイトさん、わたしについて来ちゃいました」

「ルー！ お前、ゲルマニアからこつちに俺を運んだ後は、素直に帰るって約束したじゃねーか！」

「わしが連れてきたんじゃ。面白そ……いや、こやつも少なからず関係あるからの。」

お主も二度も暴君のような韻竜と戦いたくはなかる？」

「おまえかああああー！」

「サーイートオ！ あんた、随分と楽しい ”治療” をしてきたようねえ！？」

「ん？ なーに、タバサさん。イルククウの事なら……え？ 違う？ サイン？ 本に？」

「是非。あと、詳しく聞かせて欲しい話もある」

……室内は一瞬にして原初の混沌のような空間に早変わりした。

俺は黒猫に涙目で詰めより、そんな俺を詰問しようとする鬼のような表情のルイズと、首に手を回して背中に胸を擦りつけてくるキユ

ルケ。

その脇でルーがタバサから何やら本にサインをくれとせがまれ、シエスタが恐ろしく冷たい目をしながらユツクリと扉を閉めていた。

ワケがわからない。

何が何だかわからない。

そもそも、どうしてこうなったんだ？

「そんなの、こっちが聞きたいわよ！ サイト！ 無視してるんじゃないわよ！」

「ねえ、ダーリン。いままで何処にいたの？ あの子、だあれ？ 隅に置けないわねえ」

「サイトさん……わたし、二番目でも三番目でもいいですから……ね？」

「で、その時サイトさんは数十万のオーグル鬼の軍勢を相手に勇敢にも……」

「あゝ」

……だれか、助けてくれ。

「くく、お主にはわしが居るではないか」

「うるせえ！ お前にかかわったばかりにこのザマだよ！」

「命の恩人になんちゆう言い草じゃ。大体のう、お主やルイズが時間などいじくり回さねばこんな事にはならんかったんじゃ」

「うわー、それ今言うか?!」

「サイトー！ 聞いているの?!」

部屋は姦しくも華やかな雰囲気のみちている。

そんな中、まるで花につく汚い虫のように俺は頭を抱えて小さくなつていった。

……どうやってこれ收拾をつけよう。

いつそルイズとこのまま二人でどこか遠くへ逃げようか。

あ、そういやまだちゃんと行ってなかったっけ。

ルイズ、ただいま。





**i n t e r m e d i o 3 : 三度目の既視感(前書き)**

お知らせ：今回より、作者のスキルアップを目標として、時文の三人称化を行いました。

幕間劇です。

「説明して。わかりやすく。」

神聖アルビオン共和国によるアンリエッタ女王誘拐事件より数日が経っていた。

トリステイン魔法学院の女子寮にて、才人が目を覚ました日のお昼前での事。

つい先程まで姦しく混沌の極みとなっていた部屋は、今ではルイズと才人しかない。

ルイズは腕を組み、椅子に腰掛け足を組んでいる。

その美しい顔は不機嫌な色に染められていた。

才人はそんな彼女の表情を眺め、既視感を覚えながらも少し不機嫌に答えた。

「さつきノルンから何があったか聞いたじゃないか」

「あなたの口から聞きたいのよ。あの、ルーっていう韻竜とは随分仲良かったみたいだし？」

「だから、過去に飛ばされて『イーヴァルディの勇者』の代わりに竜退治をやっただけだって」

「じゃ、なんでその『イーヴァルディの勇者』のヒロインまで連れて帰って来るのよ!」

「し、仕方ないだろ! 一回こっちに帰ってきた時はお前ら、死んでたんだもん」

「意味がわからないわよ!」

「だから、間に合わなかったんだって！」

そう。

目を覚ました才人とノルンの話は、ルイズや先程までいたタバサ達にとって信じられない物だった。

才人は、イーヴァルデイの勇者としてノルンの依頼を果たし、一度は確かに ” 現代 ” に戻ってきたのだと語った。

時期は丁度、アンリエッタ女王誘拐事件の直後。

意気揚々と光の門をくぐり、学院近くの森に出た才人はそこで信じられない光景を目撃する。

なんと左手のルーンがいきなり消えたのだ。

驚く間もなく体が急激に膨れ上がり、辺り一帯は一瞬で砂の海と化した。

遠のく意識の中で、才人は砂の館と化し崩壊する学院を眺める事しかできなかった。

意識を取り戻したのは、ノルンに ” グリムニルの槍 ” の体を与えられたあの倉庫。

傍らにいた黒い子猫がくつくつと笑う中、才人は混乱しながらも事の次第を尋ねた。

時の魔女は答える。

お主が帰った時、既にルイズはこの世にいなかったのだろうと。

故に、”ルイズの居ない時空”に出た為槍を制御していたル  
ーンが消え、暴走を起こしたのだと。

「そっからが大変だったんだ。ノルンに助けってくれて頼み込んであいつの仕事手伝ってさ」

「それはもうさっき聞いたわよ。ようは、あんたがモタモタしてるから私達が女王陛下誘拐事件の時に死んじゃってたんでしょ？」

「う……スマン」

「そもそも、最初から『ご主人様と別れた次の日に戻してください』って言わないあんたが悪いんじゃない」

「だって！……さ。まさかお前らが死んでいるだなんて夢にも思わなかったんだよ」

「悪かったわね、弱っちくて」

そう言っつてルイズはプイッと頬を膨らませ横を向いた。

もちろん、才人にはその事を責めるつもりが無かったので、慌てて取り繕う。

「大体ねえ、あの魔女も魔女よ。そうなるって最初から知らなかったのかしら？」

ううん、きつと知っていたわね。知ってて、サイトをもつと利用したくてわざと間に合わない時間に送った違いないわ！」

「ま、まあさ。ノルンも言っつたけど、あいつだつてまさかお前らが死んでいたなんて思いもしなかったみたいでさ。

色々と協力はしてくれたんだぞ？」

「どうだか。じゃ、なんで最初からトリスティンに戻ってこないのよー!」

「俺が頼んだんだよ。その、ウェールズ皇太子は生きてるかどうか確かめたいって」

「で、ゲルマニアに居たってワケね。でも、なんでまたウェールズ皇太子なのよ？」

「知りたかったんだ。ほら、姫さんの誘拐事件は元々ウェールズ皇太子の死体がやる予定だったって話したろ？」

「ええ、まあ、ね」

「で、事件は起こりお前らは死んでいた。俺、不思議に思ってたさ」

「何がよ？」

「皇太子は本当に殺されたんだろうか、って。アルビオンに行った時にワルドに渡してた情報やあいつの目的から考えると  
ウェールズ皇太子を殺すような真似をするとは思えなくて。それに……」



「それに？」

「皇太子、生きていてくれたら姫さん喜ぶ、だろ？」

才人はそう言って、少し複雑そうに笑った。

その笑いを横目でちらと見て、ルイズは怒気を収め組んでいた腕をほどき、才人に向き直る。

そして、アルビオンから帰った時に見たアンリエッタの表情を思い起こした。

ウエールズ皇太子の生死が不明だと知った時の、とても悲しそうな表情を。

「そりゃ、まあ、ね」

「で、な。ノルンの奴、俺が仕事をこなしていざ帰るって時にさ。思ってた以上の働きを俺がしたから、ある程度の便宜を図ってや

るって言い出したんだ」

「で、あんたはウェーブルズ皇太子殿下の生死を確認したワケ？」

「ああ、そしたら、ゲルマニアに居るようだから会いに行かないか？ って言われて」

「ふっん？」

「時間を超える光の門を潜るとそこに……」

「そこに？」

「ルーがいたんだ」

「ワケがわからないわ」

「お、俺もだつて！ もちろんノルンにその場で詰め寄ったぞ？！  
これはどつという事だつて」

「で、どつという事だつたのよ」

「……本人の希望で、もし機会があれば俺と再会したいってノルンに頼んでいたらしい。あいつの仕事を手伝う代わりに」

「ワケが、わからないわ」

「あいつ、初めて会った時は普通の韻竜だったみたいんだけどさ。ほら、『イーヴァルディの勇者』って何千年も前の話だろ？」

「ええ」

「ルーの奴、その間にかなり力をつけたらしいんだ。

本人はまだ先住魔法は得意じゃないとか言ってるけど、長く生きた韻竜ってのはそれだけで恐ろしいまでに強くなるらしくて」

「で、その恐ろしい韻竜が数千年もの間、あんたと再会する事を夢みてたってわけなのね？」

才人の背中に冷たいものが走った。

彼の目の前に座る可憐な美少女の姿をしたドス黒いナニカが、怒りの炎を上げつつある。

いけない！

早く話題をかえないと、俺の命が危険に晒されてしまう！

いや、既に危険だ！

過去、もしくは遠い未来、幾度もその怒りの炎でその身を焼かれてきた才人にとっては

今のルイズがいかに危険物であるか、もはや本能に刻まれた恐怖によって察知していた。

「お、お、おちつけルイズ！　そもそも、現代のゲルマニアに帰ってきて俺や猫の姿をしたノルンには移動する手段がないだろう？」

「そ、そうね。確かにそうだわ」

「だ、だろう？　だからだな、ノルンは”今の”ルーをあらかじめ呼んでいたらいいんだ。

驚いたぜ？　あいつ、すっげえデカイ韻竜になっててさ。」

「……あの子、そんなに大きな韻竜なの？」

「ああ。なんでも、自分が一番古い竜になっちゃったとか言ってたな」

「ふ、ふうん？」

「年を経た竜はそれだけで恐ろしく強く大きくなるらしいんだ。あいつの場合はアルビノだから、力を得るには更に時間が必要らしいけどもナリはもう ” 暴君 ” とかわりなかったぜ？」

「……つまり、あまり怒らせない方がいい？」

「……ああ。仕事でノルンに何匹かとんでもねえバケモン討伐やらされたけど、 ” 暴君 ” はやっぱり別格だったしな」

「……どうしよう、私あんたが寝ている間に随分とひどい事を言っただよんな気がしてきたわ」

「謝っ&#x2D;とけ。後で。」

「うん、そうする……」

ルイズは今度は顔を青くして視線を泳がせる。

才人が寝ている間になにやら一悶着があったらしい。

なんとなく想像がついた才人は苦笑いを浮かべながらも、話を前に進めることにした。

「で、な？ ルーにゲルマニアのどっかの港町に運んで貰って、そこでウエールズ皇太子と無事再会できたんだ」

「それ、本物でしょうね？」

「当たり前だろ。なんでも結局ワールドに助けられてたらしいぜ」

「そもそも、皇太子殿下はゲルマニアなんかで何してるのよ？」

「一緒に逃げた貴族にゲルマニアから嫁いでいた人が居たらしくてな。」

その人の親御さんの領地にその港町があつて、そこを拠点にレコン・キスタ相手に空賊をしていたんだ」

「あの方、そういうの好きそうだなものね。あ！ 姫さまはその事を？」

「秘密裏に伝えたつて言つてた。今は空賊をしながらワールドにレコン・キスタの密偵をやらせているらしい。」

トリステインの内通者をあぶり出しているんだそうだ」

「そう、姫さまも知つていらしたの……」

「ああ。で、な？ 皇太子と情報を交換した後、ルーに乗ってトリステインへ戻る途中でお前らが姫さんを誘拐した連中とやりあつてる現場に到着したつて訳だ。」

「え？ あの時あんた、ルーつて子と一緒にだったの？」

「ん、そうだぞ。空の上からもあのでかい水の竜巻が見えたから、場所はすぐにわかつたよ」

「それってギリギリじゃないのよ！ もっと早くきなさいよ！ 死ぬかと思っただから！」

「ま、間に合ったから良かったじゃないか！」

「良くないわよ！ 姫さまの唇が奪われちゃったじゃない！」

「し、しらねえよ！ 俺の時はそんな事はなかったんだし！」

気がつくくと、二人はお互いの顔を近づけ言い争いをしていた。

ふと、ルイズはその事に気が付き、才人もはっとなる。

才人が時の魔女ノルンの元に行くこと決めた日。

二人は掠めるようにキスをした。

はつきりと想いを伝える事はなかったが、才人もルイズも ” そういう関係なのだ ” と言う事を一応は自覚している。

特にルイズは才人が実際に居なくなっただけからは、日々自分の気持ちを繰り返し確認をしていたのだ。



そしてあの雨の日の才人の帰還。

戦闘の最中、才人は帰ってきたものの、そのまま現在に到るまで床に伏せっていた。

伝えたい言葉や想いが、不意に胸に込み上げてくるのをルイズは感じ取り頬を朱に染める。

才人の方も、実際はルイズよりも遥かに長い期間彼女の事を思いながら時を過ごして今に至るのだから、そりゃあもう、色々たまらない。

いつしか、お互いに言い争っていたはずの険悪な空気は、なんだかもどかしいピンク色の空気へと変わっていた。

まずい。

いや、すつげえいい雰囲気だと思っただけど、今はまずい。

隣のキュルケの部屋にはまだノルンやルー、タバサやシエスタがいる。

向こうは向こうで、ノルンが俺が辿った状況とか説明してくれているはずだ。

折角ルイズには自分で説明したいと事前にノルンに頼み込んで、二人きりにしてもらったんだ。

今はちゃんとしないと！

……て、というかアイツのことだから絶対俺たちの様子を覗いている気がしてならないし。

才人は頭をブンブンと振り、甘い雰囲気在必死に振り払う。

「な、なあ、ルイズ。そういやさ、俺が倒れた後、皆さんはどうなったんだ？」

「え？ え、ええ。えつと、姫さまを誘拐した人達はみんなただの死体になったわ。……あのイヤな奴もね」

「そっか」

「でね、正気に戻った姫さまは記憶があったらしくて。

シヨックを受けていらしたのだけど、それでもあんたや他の人が人の治療をしてくださったのよ？」

「そうだったのか……」

「もっとも、あんたの場合はなんか不自然なほど怪我の治りが早くてビックリしてらしたけども。」

わたしもあの猫にあんたの体の事を聞いた時は信じられなかったわ」

「そりゃ、なあ？」

「……いまだに信じられないわ。あんたの体が、造り物だなんて」

「ゴメン」

「ゴメン、じゃないわよ！ 何が ” グリムニルの槍 ” よ！

あんた、前に言ってるわよね？ 『動くマジック・ウエポンなんて俺は嫌だ』って！」

「あ、ああ。そういう事も言ったよな、確かに。ハハツ、まさか俺がマジックウエポンそのものになるとはおもっても見なかったよ」

「うふふ、本当にもう、サイトったらうっかりさんなのね！」

「あはは、ルイズ、痛い所つくなあー！」

「うふふ、サイトったら。……うふふ、う、ふ、ふえ、う、う、う」

途中まではサイトのおとぼけに、いつものように怒りの黒い炎を大きくしながら付き合っていたルイズだったが

唐突に顔をふにやっと壊して鳴き始めてしまった。

さすがに、大事な使い魔であり大事な異性となり始めていたサイトが人間を辞めて帰ってきた事が今更ながらにショックだったらしい。

才人は慌ててルイズを慰めようと、優しくその手を取った。

「な、泣くなよ！ 俺、もつどこも悪くないんだしさ！」

「だって、う、うう、あん、た、とう、とう、人間じゃなくなちゃって！」

「そりゃ、俺の体は造り物さけどさ！ 飯も食えるし、眠くもなるぞ！」

それにノルンの話によれば、ちゃんと子供だって作れるらしいし、年も取れるんだ」

「う、うう、ほ、本当？」

「ああ！ 本当だとも。それにもうケガは怖くないぞ？ なんせ、俺が八十四歳になるまで死なないって話なんだ。

最も、お前が先に死んじまうと槍が暴走してここらは砂漠になるらしいけどな」

「ほ、ん、当なの、ね？ 本当、に、赤ちゃん、作れるのね？」

さすがのように才人を見上げるルイズ。

どうやらそこが一番の悩みだったらしい。

才人はルイズなりに俺との未来の事を考えてくれていたのだな、と少し感激しながらも

泣きじゃくるルイズを優しく抱きよせ、頭を撫でてやった。

「ああ、本当だ。だから、泣くなバカ」

「泣いて、なんかな、いわよ、バカア」

しばし、室内にルイズの鼻をすする音が続く。

その間才人はずっと優しくルイズの頭を撫で続けていた。

それからどの位時間が経ったのだろうか。

気が済むまで泣いたルイズはゆっくりと顔を上げて才人の表情を見た。

目の前には何度も夢に出てきた優しい使い魔の顔がある。

ああ、帰ってきたんだ。

私の使い魔が、この場所に、私の元へ帰ってきたのね。

何回目かの実感がルイズの心に広がる。

そして、ルイズは目を閉じ唇に意識を集中した。

その仕草に才人も応じる。

互いにその心がつながってゆくを感じた。

二人の胸の高鳴りが、静かな部屋に大きく広がってゆく錯覚を人は覚えた。

二つの唇が、それぞれの想いをのせてゆっくりと近づいていく。

「やほー！ こっちはもう終わっ……あー！」

突然、部屋の扉が勢い良くぱたん！と音を立てて開いた。

キュルケだ。

キュルケね。

二人は繋がった心の中で、そう声を掛け合った。

目を瞑り、お互いの唇をあと数セントの位置でピタリと止めたまま。

「ちょっと！ この、エロのルイズ！ ダーリンから離れなさいよ！ 抜け駆けさせるために二人きりにしてあげたんじゃないんだから！」

「そ、そうですよ！ ミス・ヴァリエール！ わ、わたしだってサイトさんとお話したいのに！」

「幻滅」

「いいなあ、ルイズさん……」

「きゅい！ おばあさまを差し置いて許せないのね！」

「くく、お邪魔だったかの？ わしゃ、てつきりとつくに” 済ませた” かと思うたぞ？  
なんせ、溜りに溜まっておったのじゃ。時間はそんなにかかるまいと思うのは自然じゃろ？」

まるで彫刻のように目を閉じたままの二人。



キュルケ、タバサ、シエスタ、青髪の女性の姿に変身したシルフ  
イード、そして黒い子猫の体を借りたノルンと

その子猫を抱えたルーの順に部屋に入って来て、二人を取り囲む。

思い思いに言葉を浴びせられ、ルイズはプルプルとキスの姿勢の  
まま肩を震わせた。

才人も同様に全身を震わせている。

「ほれ、どうした？ とつと済ませんか。何、他人に見られながら  
の性交もオツなものじゃぞ？」

「あら。そつなの？」

「え？ そそ、そつなんですか？」

「変態趣味」

「わたし、人間のそつという所ってよくわからないかも。イルククウ  
は？」

「きゅい！ おばあさまと同じくなのね！」

「うむ、なんとというか、こっ、倒錯感というか ” 堕ちてゆく ” 感がものすごい快樂となっ」

「だまれ！ それ以上口を開くんじゃねえ！ このエロ猫！！」

「せ、せせせ、性こ……そんな事しないわよ！」

「なんじゃ、つまらんのう。他愛もないガールズトークという奴ではないか」

「うるせえ！ お前のはただの猥談じゃねえか！ 大体、何しにこっちの部屋に来たんだよ！」

「なんじゃ、お主がわしに説明しろと言ったんじゃぞ？」

ノルンの言葉に、才人は急に何かを思い出したような表情を浮か

べ、真顔で黙り込んだ。

その様子を見てルイズは心配そうに声を掛ける。

「サイト？ どうしたの？」

「……みんな、ちょっとノルンの話を聞いちゃくれねえか？ 大事な事なんだ」

先程の態度とは違って変わったその態度に、一同は用意していた言葉を飲み込んだ。

すこし重くなった雰囲気の中、ルーは話しやすいようにテーブルの上にノルンを座らせた。

「ふむ、本来なら干渉すべきでない話なんじゃがの。この場のすべての者にとって重大な話じゃろうから、心して聞けよ？」

「なんなのよ、話って」

「そう急かすでない。そうじゃな、結果から話すとするかの」

「ええ、お願い。あたしもルイズ程じゃないけれど気が長い方じゃないし」

「きゅい！ なんなのね！ とつとと話すのね！」

「……その青いの、その落ち着きの無い韻竜を黙らせておけ。わしの話を邪魔させなければ『イーヴァルディの勇者』の初版をやる。スノーリのサイン入り原典じゃぞ？」

「あ！ ノルンさんひどい！ それ名前を考えてくれたお礼にあげた奴じゃないですか！」

「わかった。シルフィード、もし話の邪魔をしたら一ヶ月ご飯抜き」

「きゅい、死んじゃうのね！ 一ヶ月もご飯食べられなかったら死んじゃうのね！」

「大丈夫よ、イルククウ。わたし巫女の修行時代に二ヶ月我慢したことがあるもの」

「きゅい！ おばあさまはやっぱりすごいのね！」

「修行だと思えばきつと耐えられるわ。途中空腹に耐えきれなくなつて理性を失つて暴れた拳句、止めに入った暴君に灰にされちゃつた仲間がいたけど、イルククウはきつと大丈夫。もしそうなつても私が灰に……」

「きゅい！ そんな危ない修行はイヤなのね！ 灰になるまで焼かれないのね！」

「いいから黙つてて」

ゴン！ と鈍い音が部屋に響く。

一同がえ？ と音がした方へ向くも、ただ頭を押さえて声にならない悲鳴を上げて悶絶するシルフィードの姿が在るだけだった。

誰も何をしたのかは見てないが、どうやらタバサがお仕置きかな

にかをしたらしい。

ノルンは気を取り直し、コホンと一つ咳払いをした。

「よいか？ とりあえず、結論から言つとどじやな。この世界はもうすぐ消えてしまつたじや」

「えっ？」

「へ？」

「ほえ？」

「きゅい？ どういう事なのね！」

「一ヶ月ご飯抜き？」

「もがもが」

「だから、この世界はこのままでは消えてしまつと言つとる」

「えええ!! な、なんでよ?!」

「……ダーリンが歴史を変えちゃったから、とか?」

「きゅい! 大変なの」

「一ヶ月ご飯抜」

「モゴモゴ」

「いや。直接の原因はそこのお人好しの体じゃ」

「 ” グリムニルの槍 ” 、だっけ? 」

「うむ。のう、ルイズ。お主はガリアの無能王、ジョゼフの使い魔はの事は知っておるか? 」

唐突に、魔女は質問をルイズに振った。

ルイズは腕を組み、首をかしげて以前才人から聞いた話を思い起こす。

「えっと、たしかミヨズニトニルンだったけ？」

「うむ。してその能力は？」

「あらゆるマジックアイテムを操るのよね、たしか。」

「そう」

「うむ。つまり、そういう事じゃ」

「…そういう事よー」

「わからんか？」



「わからないわよ！」

魔女はふうと見下したようなため息をついて、面倒臭そうにゆっくりと首を振った。

ワザと聞こえるような細い声で、まったく、これだからお猿は困るのうと呟く。

思わずムキ！ となるルイズだったが、いちいち反応しては話が前に進まないのどこはぐっと我慢することにした。

「やれやれ……よいか？ お主の使い魔の体は何でできておる？」

「バカにしないで。さっき聞いたからわかるわよ、ぐりむにるの槍でしょう？ 小さい……ゴーレム！」

「そういう事じゃ。槍と名前がついておるがの、武器であると同時に魔具でもあるのじゃ。」

つまり、お主の使い魔ではガリア王の使い魔には勝てぬ」

「そんな！」

「くく、皮肉な話よのう。最強の力を手にいれたばかりに、勝てる相手にも勝てなくなるとはの」

黒猫は笑う。

悪魔のように。

他者の破滅を楽しむかのように。

しかし、次に出てきた言葉は意外なものだった。

「ま、それだけなら本来はそのまま放っておくんじやが、ちとわしにもまずい事になってな」

「どしどしどしとっ」

「なに、先程ゆうた通りこの時空のハルケギニアが消滅するからじや」

「わけがわからないわ！」

「 ” グリムニルの槍 ” はいわく付の槍での。 エルフどもが住まうサハラは知っておろ？」

「ええ」

「あの砂漠を作り出したのは ” グリムニルの槍 ” が暴走した結果でな」

「な?!」

「わしが ” 見てきた ” この未来はの、そこのお人好しがミノズニトニルンに操られてガリアに連れていかれての」

「そんな事、私がさせないわ！」

「そうよ。あたしやタバサもいるんだし」

「志は立派じゃがの？ お主ら……ルイズは命を奪われはせんかったが、赤いのと青いのはミヨズニトニルンに操られたガンダールヴに、アツサリと殺されて居おったぞ？」

「そんな……」

「そして、”槍” を手に入れたガリア王はわざと盛大に暴走させ、ハルケギニアどころかこの星をすべて砂に変えてしまっくんじゃ」

「そんな！ 一体どうして！」

「さあ。狂人の考えることはわからんわい。  
わしとしては、普通に世界が滅んだり星が死ぬのは一向に構わんのだが、この槍によって滅ぼされるのは別じゃ」

「どうして？」

それまで言葉を返していたルイズやキュルケよりも先に、タバサがノルンの話に疑問を投げかけた。

その表情は無表情ではあったが、眼鏡の向こうにある蒼い瞳は僅かに動揺が走っている、

「そうじゃのう……百の時を過ぎすぎ因果が二十の時で滅ぶ事になるとどうなると思っ？」

「わからない」

「ふん、”始と終の一”に戻るべき情報が六十も戻らんようになってしまっ。

これでは次の世界を構築できんからの、今おぬしらが居るこの世界……というか歴史じゃな。この時の流れは消え失せるのよ」

「……悪いけど、その説明もよくわからないわ」

「一瞬で世界が滅んで消えるというところんじゃよ」

「なによそれ！」

思わずルイズは声を荒げた。

黙って聞いていたシエスタも顔面蒼白になり口元に手を当てて息を飲んでいる。

他の者も其々の顔に動揺を走らせて、ただ言葉を飲み込んでいた。才人とタバサを除いて。

「時間を遡ったり、速く辿る者はたしかに居る。そこのお人好しのように歴史を変え、新たな世界……歴史を創りだす者もな。ただし、決してやってはならんことがあると言う事じゃ」

「それが、世界を滅ぼす事？」

言葉を失いショックを受けているルイズやキュルケに代わり、タバサが魔女に質問を返した。

魔女は愛らしい子猫の顔をタバサに向けて、器用にニヤリと笑う。

そう、この魔女は世界の滅びを笑いながら語るのだ。

その様子は、タバサを内心苛だたせた。

「滅びるべくして滅ぶのは良い。だがの、ブリミルが異世界から召喚した”グリムニルの槍” や ”ミヨルニル” のように因果の外から強い影響を与える代物は良くないと言っ事じゃ」

「異世界の強力な武器は良くないってこと？」

「うーむ、それに近いかのう。よいか？ この世界のあらゆる物は滅びる瞬間まで因果が定められておる。ところが、じゃ」

ノルンはそこで一旦話を区切り、ぐるりと室内を見渡す。

話を聞く者たちの心を推し量るかのように。

そして、再びタバサの方へ向いた。

才人達は食い入るようにテーブルの上に座る子猫を見つめている。

「この世界の ” 外 ” からやってくるモノはその因果に縛られはせん。

これが非常に危ないのじゃ。人や物を滅ぼす位なら大して影響はないがの、これが星一つとなると話は別じゃ」

「どづいつこと？」

「流石に、大量の因果が果たされず滅びるのはまずいと言う事じゃの。

因果は始まりから終わりまで果たされて初めて ” 始と終の一 ” に戻り、次の世界の種子となる」

「外から来た強い武器は、種子になる前の因果を滅ぼしてしまうと言う事？」

「うむ。青いのは中々優秀じゃの。そうじゃ、そういう事じゃ。小さな種ならばあまり問題にはならんがの。星一つとなると見逃しては貰えなくなるんじゃよ」

「誰に？」



「さあ。少なくとも、わしよりも更に存在の位階が高い連中じゃ。世界の運営者みたいなもんかの？」

「見逃してもらえないと、どうなる？」

「この時空……おそらくは、そこのお人好しが変わえようとしている”この歴史”が”無かった事”になるじゃろつな」

「つまり、今、この世界が消される？」

「うむ。青いの、お主中々見所があるのう」

魔女はくく、と笑った。

そのくぐもった笑いは、まるで毒のようにじわりと部屋に広がる。

その雰囲気には耐えられなくなったのか、ルイズは魔女が座るテーブルを両手で叩いた。

「笑い事じゃないわよ！ そんな話、信じられないわ！」

「じゃが、事実じゃ」

「一体、どうすればいいのよ……」

「何、解決策自体はそう難しいものではないぞ？ そもそも、そのヒントをやる為にこの話をしたのじゃからな」

「え？ あるの?! 解決策が！」

「無論じゃ。要は、ミヨズニトニルンにガンダールヴの体に触らせなければ良いじゃからの」

「つまり、サイトじゃなくて私達がジョゼフの使い魔と対決すればいいって事？」

「ま、そういう事じゃな。この事をお主らに知らせておくだけで、わしの仕事はぐっと減るし。うむ、大助かりじゃ」

「なあんか胡散臭いわねえ？　あなた、すつごく性格悪そうだしちよつと信じられないわ」

「同感」

「くく、信用されておらんの」

「当たり前じゃない。大体、どう見てもあんたは世界が減ぶ様をみて喜ぶタイプよ？　なのにどうして私たちに手を貸してんのよ」

「誤解じゃ。よいか？　わしのように存在の位階が高い者はな、先に説明した”因果の外からの滅び”を防ぐ事を生業としておるんじゃ。」

「嘘おつしゃい」

「信じぬならそれでよいぞ？　わし一人、この時空から逃げれば良いのじゃからの」

「わー、ノルンさんって思ってたよりずっと外道！」

「なんじゃルー。お主まで。そんな事言うならもう”ガールズト

「ク」を聞かせてやらんぞ?」

「わ、わ、わ、ごめんなさい!」

「一ヶ月」

「きゅい! ひどいのね! まだ何も言っていないのね!」

ゴン! と二度目の鈍い音と声にならない悲鳴が部屋に木霊する。

今度はタバサがすばやく器用にあの大きな杖を後ろの方に隠している姿を、全員が確認する事ができた。

才人は緊迫していた空気が少し和らいだように感じた。

同じように感じてか、ルイズがすこし明るい口調で話を元に戻した。

「とにかく、ミヨズニトニルンにサイトを触らせなければいいのね

？ それなら楽勝よ！」

「ま、せいぜい気をつけてな？ さて、ルー。そろそろ帰るつかの

「えー！ もうちょっとサイトさんと一緒にいたいんだけどな……」

「たわけ。もしお前がヴンダールヴ辺りに操られてもしたら目も当てられん。これ以上話がややこしくなる前にゲルマニアに帰るつぞ」

「ちえー」

「ありがとな、ルー。ゲルマニアからこっちに運んでくれてすごく助かったよ」

「いえ、サイトさんのお役に立つことができて、すごく嬉しかったです！

あ、ガリアとロマリアの件が片付いたらまた来ますね。『イーヴアルデイの勇者』の続きとして書かなくちゃ！」

「ルー、頼むから大げさに書かないでくれよ？」

「えへへ、任せといてください！ 今度会ったら、お話聞かせてく

「ださいね？」

「ああ、わかった。とっておきの話になるようにしといてやるよ」

「ふん。せいぜい派手な内容にしてやるわ！」

「あら。あたしもスノーリの本に出るって事？ 中々悪くないわね」

「素敵！ じゃ、さしずめわたしはイーヴァルデイの勇者のメイド  
かあ」

緩んだ雰囲気の中、再び和やかで暖かな空気が部屋に満ちた。

白い少女はテーブルの上の子猫と視線をあわせ、柔らかに微笑む。

子猫がやれやれとため息を一つ吐いたところで、目の前に白い小さな手のひらが差し出された。

タバサだ。

「報酬」

「おお、そうじゃったな。これじゃ」

「じゃあ、と黒い子猫が鳴く。

すると、小さな光の門がテーブルの上に現れ、門の中から一冊の本がせり出してきた。

タバサはその本を受け取り中身を確認すると、一瞬目を大きく開く。

それから彼女には珍しくも、ニッコリと表情を崩して大事そうに本を胸に抱えた。

「……おっと、そうじゃ、忘れることろじゃった。ルイズ、サイト」

「あんだよ」

「あによ」

「できれば……そうじゃのう、ガリアの一件が片付くまではやらん方がよいぞ？」

「な?!」

「だまれ！ この色ボケ！」

「くく、真面目な話じゃ。ルイズの虚無の源は、心の震えじゃ。体を重ねて、心を満たしては後々苦労しようぞ？」

「ま、その時は此処に居る者全員とそこのお人好しがやればよいだけじゃがの。」 本当の未来のように” な「

「だ、ダメよ!」

「さっさと帰れ!」

「ねえ、ルイズ? ” 本当の未来” ってどういう事?」



「ミス・ヴァリエール！ わたし、その話は聞いてませんわよ？」

「い、今はそれどころじゃないわ！ こら！ 待ちなさい！」

「ひひ、ではの。ちと名残惜しいが、あとでちゃんとこの子猫のノミ取りをしておけよ？」

「またね、サイトさん」

「途中まで送る」

「きゅい！ おばあさまがここで元の姿に戻ると、大騒ぎなのね！」

「あ、ありがとうー」

目を釣り上げたキュルケとシエスタに囲まれ、ルイズは問い詰められた。

慌ててルイズと共に誤魔化す才人だったが、二人はすでに聞く耳

を持ってはいない。

そんな彼女たちを置いて、ルーと魔女はタバサとシルフィードを伴ない部屋から出て行った。

才人は急いで廊下に頭だけを出し、タバサに礼を、ルーには別れの挨拶を叫んだ。

それから、扉を閉める。

室内では未だ、キュルケとシエスタによるルイズへの尋問が行われていた。

ふと、足元に何かが擦り寄る感触。

視線を落とすと、そこに黒い子猫が頭を擦りつけている所だった。

才人はノルンの最後の言葉を思い出し、懐からノミとり用の櫛を取り出す。

そして、徐に子猫の腹をさすってやりながらノミとりを始めてやった。

「あああん、よい、よいぞー」

「うげ!! てめえ、まだそこにいたのかよ!」

「サイト! あんた、何その色情魔の、し、しかも子猫にまで手を  
出してんのよ!」

「うわっ、ダーリンってのは実は鬼畜?」

「サイトさん……韻竜に飽き足らず猫にまで……」

「ちがう! これは誤解だ!」

「ふふ、何を今さら。今まで、散々わしの体を翳ってきたというに」

「だまれ! お前はそれ以上しゃべるんじゃないやねえ!!」

「サアイト!」

「ひ?!」

「じっち、いらっしやい」

ルイズが腰に手を当て、ピッと親指を部屋の奥の方に向ける。

キュルケは優雅に腕を組み、シエスタが笑っていない笑顔でさあ、と才人の手をとった。

ククク、今度こそさらばじゃ、と子猫が呟く。

そして、才人は可愛いご主人様の肉体言語によるお説教を久々に受けるのだった。



太古の昔から変わらぬ二つの月が、変わらぬ光で空を照らす夜。

久々にルイズの部屋で夜を過ごす生活に戻った才人は、困惑していた。

ルイズも又、下着の上にネグリジェを身にまとい戸惑いの感情をその顔に表している。

ベッドを背に二人が見つめる先には青い髪の少女が、可愛らしい寝間着を着て立っていた。

その手には大きめの枕と古めかしい本、そしていかつい大きな杖

が抱えられている。

「……なあ、タバサ」

「何」

「もう、さ。ルイズをつきつきりで守る必要はないぞ？」

「そ、そうよ？ 気持ちはうれしいけど、サイトが居ればもう恐れるものなんてないもの」

どうしてこうなった？

俺は何を間違えた？

「いいや、間違っていない。何か、余計なことをしたから」  
「こうな  
った」  
「んだろうな、うん。」

はは、一体何をやらかしたっけなあ？

タバサが俺に好意を抱くのはもつと先のハズだし、そもそも、そうならないようにするつもりだったんだけど。

……なんだよ、ルイズ。その目は。

そんなに吊り上げて、何とかしなさいよバカ！ って聞こえてきそうな目だな、それ。

やめてくれよ、昼間の折檻の記憶が蘇ってきちゃうじゃないか。

俺だって、こいつやシエスタの心を変に刺激しないように、あれからずうっと一人で行動してたんだぞ？

大体、風呂に入ってくるとか言っときながら、タバサと一緒に部屋に戻ってきたのはお前だぞ、ルイズ。

俺、すっげえ期待しちゃったんだぞ？

顔を赤らめて、モジモジとしながらお前、「お風呂、入ってくるね。……サイトも水浴び、してきてくれる？」とか

言われればそりゃ、もう、たまらんだろっ？

本当なら今夜じっくりとお前とキスしたり、抱き合ったり、その、ノルンに止められたけど

あーんなことやこーんな格好をさせたり、こーんな真似までさせなかったんだぞ？！



内心愚痴を吐き、やがてもわんもわんと淫靡な想像を膨らませていく才人に、ルイズは更に目をつり上げる。

そんなルイズの様子に気がつかない才人の表情が、困惑からだしらないものへと代わり、

目に見えて現実逃避を始めた所で沈黙を守っていたタバサが口を開いた。

「わたしが守るのはあなた達二人」

「へ？」

「なんで？」

本当はシたかったピンク色の想像で頭の中を満たしていた才人と、鋭く才人を睨みつけていたルイズに

タバサは淡々とした調子で部屋に来た目的を語りはじめた。

「『イーヴァルディの勇者』をジョゼフに渡すわけには行かない」

「そりゃ、私だってそう思うけど、何もこの部屋に泊まり込む事もないんじゃない!?」

「痛っ!!　そ、そうだよタバサ。俺、こっつ見えても結構強いんだぞ?」

「ジョゼフに勇者は渡さない。それに、わたしはルイズを守るとも誓った」

中々現実に戻ってこない才人の足を思い切り踏みつけながら、ルイズはやっぱりタバサに部屋へ帰るように伝えた。

しかし、タバサはそれを受け入れようとしない。

相変わらずその表情からは真意を読み取れないが、言葉からは力強い意志が感じられた。

才人は踏まれた足を持ち上げ、片足でその場を飛び跳ねつつも主人に続いて説得に参加する。

「なあ、タバサ。ここに泊まるって言ってもベッドは一つだろ？  
まさか床に寝かせる訳にもいかねえしさ、今日からここに泊まる  
なんて無理だよ」

「そ、そうよタバサ。ベッドは私……とサイトが使うんだし。  
ガリアの王族である貴女に床になんか寝かせるわけにはいかない  
わ！」

「わたしはかまわない」

「私が構うのよ！　ね？　お願い！」

「大丈夫。少しくらいなら”大目に見る”」

「お、大目に見るってなにをだ？」

「あなたが性交をしている間、わたしはベッドの方は見ない。少  
しの間だけ”サイレント”をかけて聞こえないようにもする」

「な、なな、そんな事はし、しないわよ！ あの魔女にもガリアの件が解決するまでは止められて、い、いるんだし？」

「あ、ああ、そうだな。うん。俺たち、清い関係だもんな？ ルイ、いやご主人様？」

「そうよ、サ、使い魔さん？」

タバサが発した「性交」という言葉に対して過剰に反応しつつ、二人は顔を赤く染めながら白々しく微笑み合った。

その様子を表情一つ崩さずに、蒼く冷徹な視線でタバサは見つめている。

はは、ははは、とルイズと才人の乾いた笑いが室内に漂う。

「……大丈夫、誰にも言わない」

「だから！ ヤンないわよ！」

「なら問題ないはず」

「あるわよー！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ ルイズ、ちょっとこっち！」

少し頭に血が登りかけたルイズの腕を才人は引つ張り、部屋の隅に強引に誘導した。

ルイズをしゃがませながら二へ、とタバサに愛想笑いを送る。

部屋の角、二人はタバサに背を向け床になにか小さな虫でもいるかのようにかがみこんだ。

それから才人はルイズと肩が触れ合うほど至近距離で、ヒソヒソと小声で相談を始めたのだった。

(なあ、ちょっと思っただけど聞いてくれ)

(あによ?)

(タバサの奴、 ”前” と同じように俺にホレちゃったと思うか?)

(バツ、そんなことわかんないわよ！ あんた、自惚れるのもいい加減に)

(冷静になれ、ルイズ。俺はお前一筋だぞ？ 俺だってこの状況は何とかしたい。)

うぐ！ とルイズは小さく呻き、頬を赤く染めた。

それからギギギと音を立ててしゃがんだまま背後を見る。

タバサの表情の见えない蒼い瞳と一瞬目が合い、それから素早く元の位置に頭を向け才人に囁いた。

(ち、違うと思うわ。もしあなたに惚れ、惚れちゃってたら「性交を見なかったことにする」だなんていわないと思うもの)

(だよな。じゃ、なんでここに居たいんだろう?)

(知らないわよ!)

(絶対、なにか理由があると思うんだ)

(例えば?)

(本気で俺たちを守りたいとか?)

(にしては変よ。お風呂場の出口で待ち構えられてたけど、それ以前は別に側について離れたがらない事なんて無かったもの)

(うーん……)

今度は二人同時にギギギ、と後ろを振り返る。

そこにあるのは先程と変わらず、青い少女が無表情で大きめの枕と古めかしい本、そしていかつい大きな杖を抱え立っていた。

「あ！」

ルイズが思わず声を上げる。

それから、神速の速さで部屋の隅に視線を戻した。

（な、なんだなんだ？ どうしたルイズ?!）

（私、わかつちやったかも！）

（何をだ?!）



(あの子、今日あの魔女にもらった『イーヴァルディの勇者』を持ってるわ！)

(ん？ ああ、そっぴやそっぴやだな)

(きつとあんたにその話を聞きたいのよ！)

(あ！ そっぴなのか！)

(ほら、私は大分打ち解けたけど、あんたはそっぴでもないでしょ？)

(ああ、そっぴやそっぴかもな。前の記憶があるから、俺の方はそっぴでもないんだけど)

(きつとそっぴよ！ だから私を守る為とかあんたを渡さない為とか理由をつけて、ここに来たのよ！)

(そっぴか！ そっぴやあいつ、さっき『イーヴァルディの勇者』を渡すわけには行かないって言ってたもんな！)

唐突に、二人はすくと立ち上がった。

そして満面の笑みを浮かべ、同時にタバサの方へ振り返る。

その仕草はまるで鏡合わせのように息がぴったりと合っていた。

「なあ、タバサ！俺がさ、過去でどんな敵と戦ったか、知りたくないか？」

ピクン、とタバサは片方の眉毛をほんの少し、持ち上げる。

普段彼女と接していない他の生徒ならば見逃してしまう程小さな表情の変化だが、才人とルイズにはそれだけで

十分 ”効果がある” と判断できた。

よし、と才人とルイズは心の中でガッツポーズをとる。

「俺、竜やら巫人の軍勢とかさ、もうとんでもねえもんの手相手ばっかさせられてさ。」

その本に出てくる竜なんてとんでもねえ強さでさ！ ……興味ない？」

「興味ある。聞かせてくれるの？」

「ええ、もちろんよ！ ね、サイト？」

「ああ！ それに、その話を聞けば安心してルイズの護衛を俺に任せられる気になると思うんだ！」

俺に任せてくれる、と部分を特に強調する才人。

満面の笑顔でそう言う才人の目を、タバサはじっと見つめた。

才人は二カつと歯を剥き、笑い続ける。

タバサは無言でそんな才人の目を見つめ続けた。

沈黙。

不思議な、気まずい空気。

「……つまり、話を聞かせてやるから出て行けと」

「んな？！　そ、そんな事はないよ！　な？　ルイズ！」

「え？　ええ！　もちろんじゃないタバサ！　私たち、友達でしょう？　そんな事言わないわよ！」

「そう。よかった」

「そうよ！　ね？　サイト！」

「ああ、そうだな！」

「じつして、一瞬で二人の目論見は崩れ去る。

結局、部屋に押しかけてきたタバサの真意はわからず、申し出は

彼女自身の未来にも直結している為、二人はとうとう断り切れなかった。

ちなみに寢床の問題はと言つと……

「いい？ サイト。手え出したら殺すからね？」

「だ、出さねえよ！ 何だったら俺、また藁の寢床でも構わねえぞ？」

「だめよ！ 大体、犬や猫じゃないんだから……」

「俺、最初は犬や猫と同じ扱いだっただのか……」

「う、悪かったわね」

「気にしてねえよ。タバサ、そっち狭くねえか？」

「問題ない。むしろ広す」

「な、なんだっいたらもつとコツチにいらっしやいよ」

「お、おい、ルイズ。狭いって。」

「仕方ないでしょ！ ほら、もつとあつちについて！」

「これ以上は無理だよ」

「そんなに向こうに行かなくても大丈夫。」

端から、タバサ、ルイズ、才人の順で川の字になって寝る事で落ち着いた。

ルイズはタバサに気をきかせているのか、それとも他に意図があるのか、才人の方へぐいぐいとタバサにスペースを譲るべく移動している。

ほらもう、しょうがないじゃない！ などといいつつも、どこか嬉々としてして才人に身を寄せるようにしてタバサにスペースを譲るルイズ。

いつしか貴族用の大きなベッドの上で、タバサが三分の二のスペースを占めルイズと才人が

残るスペースで狭苦しくなる格好になったのだが、二人はそれはそれで、いやむしろそちらの方がと考えた。

こうして、三人の奇妙な寮生活が始まる。

無論、才人にとってはいつか味わった生殺しの日々の始まりでもあった。

どうしてこうなったんだ？

俺、何か間違えたか？

才人の自問は、寝ぼけたルイズに抱きつかれながらも夜通し続く。

それを不幸と見るべきか、幸福と見るべきなのか、才人にはわからなかった。

翌日。

授業があるルイズ達とは別行動を取った才人は、厨房に足を運んでいた。

厨房に入ると丁度朝食の片付けが終わらせたシエスタが、マルト―親父や他のコック達に遅めの賄い食をテーブルに並べている所だった。

マルトー親父は才人を見るや、久々に会う甥っ子に笑いかけるような笑顔で椅子から立ち上がり、こっちだと大声を上げて手招きをした。

「おお！ 誰かと思つたら『我らの剣』じゃねえか！ ちきしょう、最近来ねえからさみしかつたぜ！」

「ごめん、マルトーさん。俺、ご主人と一緒に飯食えることになつてさ。それに、最近まで病気の療養でちよつとゲルマニアの方に行つてたんだ」

「おう！ その話はシエスタに聞いたぜ！ …… もう体は大丈夫なのか？」

「ああ、お陰さまで」

「まったく、心配したぜ？ 昔から英雄は毒と女、それに病で命を落とすつてのが相場だからな！」



縁起でもない事を言いながら、マルトー親父は才人の背をバンバン！と叩きながらガハハと豪快に笑う。

才人は親父の太い腕で何度も背を叩かれ、思わず咳き込んでしまった。

「おいおい、本当はまだ調子が悪いんじゃないか？」

「ゲホ、マルトーさんが強く背中を叩くからだよ」

「おっと、いけねえ！ 悪いな、『我らの剣』」

「いいよ、それよりちょっとさ、頼みがあるんだ」

「おう、なんだ？ 飯か？！ ははは、さすがは『我らの剣』だな。貴族と一緒に飯を食っても腹が膨れねえか。おい、シエスタ！ 賄いはまだ有るよな？」

「はい、マルトーさん」

「あ、違うんだ！ 腹は今はいっぱいなんだけど……その、えっと」

「なんだ？」

「……作って欲しい食いもんがあるんだ」

マルトー親父の岩のような両肩をつかみ、才人はそれまでの態度とは打って変わって真剣な表情を浮かべ、少し血走った目で強く言った。

その様子はマルトー親父に、以前ご飯抜きのお仕置きを受けていた学院の二年生ミス・タバサの使い魔の風竜を思い起こさせる。

悲しそつにきゅいきゅいと泣く使い魔を見て、一緒に餌をコックンリあげようとした若いコックン

危うくエサごと丸呑みにされそうになった事件を連想させた。

今の才人の目は、その時の風竜の飢えた目によく似ている。

マルトー親父はいきなり隣にいた弟子のコックンがばくん！と食いつかれた時の悲鳴を思い出してしまい、思わず身震いをした。

「だめかな、マルトーさん」

「あ、ああ！ 気にしねえでくれ、『我らの剣』。ちと昔の事を思い出しちまった。

いいよ、なんでも作ってやる！ 他でもねえ、『我らの剣』の頼みじゃねえか！ なあ、お前ら！」

はい！ 親方！ と一斉に賄い食べていた他のコック達が、手に持ったスプーンやフォークを掲げて答える。

「あ、ありがとう、親方！ 俺、俺……」

「ガハハ！ どうした、『我らの剣』。飯の一つや二つ、そんなに感激するこつちや……お、おい?!」

「うっうっ、マルトーさあ……」

がっし、とマルトー親父を抱きしめ、才人は泣いていた。

遡ること約数週間前。

才人は時の魔女ノルンの元へ、その体に抱えた問題を解決する為に身を寄せた。

そしてノルンの依頼を果たすべく過去へと赴き、ここトリスティン魔法学院に帰ってくるまで彼の時間では半年以上の時間が過ぎていた。

その間、ずっとマトモな食事にはありついてはいなかった才人の脳裏に浮かんでいたのは、マルトー親父が作る料理の数々。

最初は岩のように固いパンを頬張りながら、豪勢なディナーを懐かしんでいた。

次に、シンプルでいて美しく盛りられたランチを思い浮かべ、泥のような色の粥を胃に流し込んだ。

その次は、ちよつとした軽食。

口に入るのは、白湯の方がまだ旨いと思えるほどまずい、ネズミ

がぷかりと浮いたスープ。

”グリムニルの槍” を体としている才人であっても、忠実に再現される食欲によって美味しいものを食べたいという欲求は彼を苛んだ。

やがて、時間が経つにつれ才人はある食べ物ばかりを思い浮かべるようになる。

その食べ物は、彼の生まれ故郷であるチキユウの食べ物だった。

もちろん、ここハルケギニアでも再現可能なシンプルで簡単な、料理とも言えないような食べ物だ。

「うつつ、グス、ルイズと一緒に食った朝飯、すつげえ旨かったんだけど、どうしても、アレ食いたいんだよ、マルトーさん」

「お、おお！ なんだ？ 何を作ればいいんだ？ なあ、『我らの剣』よ」

「ホットドッグ」

「なぬ？ ほつとどつぐ？ なんだそりゃ」

「うぐ、グス、これくらいの細長いパンに縦に切れ目いれて、葉っぱ……野菜を敷いて、

これくらいのポイルしたブタの腸詰めを挟むんだ」

「ほうほう。」

「へえ、妙な料理ですね、親方」

「で、で、それで、親方。根野菜の微塵切りを上にもふりかけて、挽いた芥子の実で作る調味料あるだろ？」

あれと酸味の効いた野菜のソースをかけるんだ」

「へえ。聞いたこともない料理だな、そいつは。……泣くほどうまいモンなのか？」

「いや。うまいかどうかって言われれば、マルトーさんが貴族に出してるもんの方がずっと旨いよ。」

ただ、ずつつつとマズイもんばっか食ってる時、そんな上等でなくとも美味しいもん食いたくなったりするだろ？」

「あ！ わたしそれわかります！ ダイエットしている時に限って甘いものが食べたくなくなるんですね。」

しかも、普段は食べないような変なものが無性に食べたくなるっ  
ていうか……」

「そうそう、それだよシエスタ」

「それが」ほつとどっく」なのか？ 『我らの剣』」

「ああ、マルトーさん。俺が故郷で食ってたオヤツみたいな食いも  
なんだ」

才人は思いの丈をぶつけてスッキリしたのか、顔をわしわしと拭  
ってマルトー親父から離れた。

気がつくと、シエスタと他のコックが才人とマルトー親父の周り  
に集まってきている。

先程口にしたホットドッグのレシピに惹かれるものがあるのか、  
皆才人の言葉に興味津々で耳を傾けていたのだ。

マルトー親父は腕組みをして目を閉じ、なにやら考え込んでいる。

「うーむ。おい、ケイシー！」

「はい、親方！」

「今日の昼飯はお前が仕切れ。ポドワンとブリスもそろそろ仕込みを任せられるだろ」

「わかりやした。」

「親方、今日のメニューだと、さっき『我らの剣』が言っていた酸味の効いた野菜ソースが使えるんじゃないですかね？」

「ああ、そうだな。あいつを使うか。クレマン！ パンの形は聞いてたな？」

「へい。任せてください。柔らかい奴をバツチリ焼きあげてみせませよ！」

「シエスタ。一昨日使ったホットソースを小瓶に少し位の量をもつてこい」



「わかりました」

「マルトーさん……」

「おう、『我らの剣』！俺がキツチリお前さんに”ほっとどつぐ”食わせてやる！心配すんな！」

「親方あ！俺らの昼の賄いもソレにしやしようや。『我らの剣』の故郷の食いもんなんてそうそうお目にかかれたもんじゃねえですぜ？」

「そうですよ、マルトーさん。わたしもサイトさんの故郷の料理を食べたい！」

「ふん、まあ、いいだろ。クレマン！焼くパンの数を間違えるなよ！足りなかったらためえの分はナシだ！ついでにコランタンの分もな！」

「そいつはひでえ！親方、勘弁してくださいえ」

「うるせえ！文句たれる前に、しっかりクレマンの手元をみてる  
トヨっこー！」

そう言っつて、マルトー親父はパン焼き係の見習いをポカリと小突いた。

そのやり取りを見て、シエスタや他のコック達がドッと笑う。

マルトー親父も太い腕をコランタンと呼ばれた見習いの首に巻きつけて、才人に豪快に笑いかけた。

才人もつられて笑いつつも、ルイズとはまた違った印象で学院に帰ってきたのだと、不意に強く感じたのだった。

その夜。

二つの月が空高く上り、夜空を照らす時刻。

学院の屋根の上で、タバサは一人膝を抱えて物想いにふけっつていた。

その薄い胸と細い足の間にあるのは、嘘か誠か、『イーヴァルデイの勇者』の原典。

その古めかしい本の重みは、彼女の心に最近巣食った違和感の用を感じられた。

ふと、視線をここから見える学院の寮のある窓に移す。

窓の向こうの部屋の明かりがチラチラと揺れている。

どうやら部屋の主は、また落ち着きなく部屋の中を歩き回っているらしい。

あの使い魔をいつか見たようにお仕置きでもしているのだろうか。

それとも……自分がいない間に、恋人としての時間を過ごしているのだろうか。

「『イーヴァルディの勇者』」

知れず、タバサの口から漏れたのは幼い頃より憧れた物語の主人公の名だった。

わたしは、こんな所で何をしているんだろう？

タバサは自問する。

ほんの数週間前、彼女は闇の中を歩いていた。

希望を奪われ、希望を求め、希望を探し、そして絶望する毎日。

政争、陰謀、命がけの任務。

幼い頃夢見た勇者による救済を求める余裕すら、現実とは与えてはくれなかった。

それが、今ではどうか。

きっかけはきっと、あの夢。

今でも信じられない内容を、あのピンクブロンドの女は口にした。

それを確かめようと早速行動を起こすと、今度は焦がれた希望がこの胸に転がり込んできた。

希望は日々大きく育ち、ルイズが操るあの ” 虚無 ” の魔法を見る度に確信へと変わっていった。

そして、あの雨の日。

そう、あの日、わたしが幼い頃に見た、誰でも見るであろう、いや誰もが一度は見てみたいと思うであろう勇者の姿をわたしは見てしまった。

彼こそがわたしの救い。

彼こそが、わたしの導き手。

彼は魔法が使えなかったルイズを伝説の系統の使い手に変えてしまった。

ほんの数カ月で昔の自分と同じように誰も信頼しようとしなかったあのゼロのルイズを、あの勇者はあっさりと変えてしまった。

「彼が、『イーヴァルディの勇者』」

タバサの自問は続く。

わたしは、なぜあんな荒唐無稽な話を信じるのだろうか？

あんな、冴えないアホ面の少年のどこが『イーヴァルディの勇者』だと言っただろう？

確かに、強力な使い魔だと言う事は認めている。

そもそも、わたしはなぜ彼のことを救いだと、導き手だと感じているのだろうか？

彼がわたしとお母様を救い出した未来から来から？

彼が、わたしの復讐の成就を予言したから？

足りない。

きっと、それだけではない。

……そして、足りない何かがわからない。

だけど、それなのにわたしは彼の事を信じている。

その理由が分からないまま。

だからこそ、目的もはっきりとしている。

ジョゼフに彼を渡してはいけない。

ルイズを死なせてもいけない。

これ以上、わたしの希望をあの男に奪われてたまるものか。

たとえそれが偽りの希望であつてもだ。

タバサの瞳に、暗い炎が宿る。

そして、ルイズの部屋の灯りを眺めながらつぶやいた。

「私の勇者は渡さない。もう、希望は奪われはしない」

視線の先の窓から漏れる灯りが揺れる。

才人の事を信じさせるナニカを見つけられないまま、タバサは決意を新たにした。

もやもやした気持ちが少し晴れ、胸に抱えた本を落とさぬように立ち上がり杖を掲げる。

”レビテーション” を唱え、女子寮の入り口にタバサは飛んだ。

向かう先は先程まで見ていた暖かな光が漏れる部屋。

しかし、すこしだけその部屋に向かう足は重かった。

その事にタバサは気がつかない。

あのゼロのルイズを変えた使い魔が、知らず自身を変えつつあるのだと思ひもしなかったからだ。

直接的な関わりが無い分、それはタバサには認識できなかった。

胸にどこか重さを感じつつ、タバサは目的の部屋の扉を軽くノック

クし、ゆっくりと開く。

室内は魔法のランプで柔らかく照らされていた。

しかし、居るはずの住人の姿はそこに無かった。

タバサは自問する。

何故？

何故わたしは、……今ホっとしたのだろう。

答えは見つからなかった。





E - 9 : e x t r a e p i s o d e / ふるなとよは遠きとありて1 (前書き)

オリジナル挿話です。全五話の予定。

「結構美味しいじゃない。何が気に入らないのよ」

タバサが学院の屋根の上で物思いに耽っていた頃、ルイズの部屋。

才人とルイズはテーブルにつき、昼間マルトー親父に再現してもらったホットドッグをほおばっていた。

ルイズにも地球の食べ物を味わわせたくて、マルトー親父に余分に作って置いてもらった分だ。

すっかり冷えてしまっていたが、その手軽さと意外な美味しさそして物珍しさからルイズには中々好評ではあった。

しかし才人はどこか納得をしていない様子で、首を傾げ寂しそうに頂垂れながら豪快にホットドッグを齧っている。

ばきん、と豚の腸詰めが噛み折る音がした。

「うーん、マルトーさんには悪いんだけど、これ上品すぎるんだよ。本当ならもうちょっとこつ、下衆い味というか、な？」

「何よそれ。本物はこれより美味しいの？」

「いや、多分これよりかは不味いと思う」

「ならいいじゃない」

ルイズはそう言いながら、遠慮がちに口を開けてホットドッグを押し込んだ。

パキンと豚の腸詰めに噛み切る音がする。

テーブルマナーがしっかりと身についた彼女にとって、大口を開けて食べるホットドッグはなかなか食べづらいようだ。

極力小さく口をあけて食べているせいで、ソースがその形の良い唇に付いていた。

その為、一口食べるごとにハンカチで口元を拭っている。

「それがさ、違うんだよ。『ホットドッグ』ってのはもっとこう、さ。」

マルトーさんには悪いんだけど、これ高級食材を駆使した別の食事もんになっちゃってるんだよ」

「ふうん。どっちかっていうと、庶民の食べ物なのね」

「まあ、しょうがないよな。悪り、忘れてくれ。折角マルトーさんが再現してくれたんだ。贅沢言つとバチが当たるよな」

才人はそう言って寂しそうな眼差しで、齧ったホットドッグの断面を見つめた後、一気に口中に放り込む。

今日作ったばかりの豚の腸詰めからは、芳醇な香りと濃厚な肉汁が溢れ出して、口の中に広がる。

豚肉特有の甘みとコクはミンチ肉と一緒に詰められたきざみハーブのお陰でしつこくも無く、爽やかな香りですらあった。

腸詰めと同じく今日焼いたばかりのパンの僅かにパリっとした外側の食感と、新鮮な各種野菜のシャキシャキとした歯応えが

見事な調和を織り成し、ジャンクフードとは思えない程の出来栄えだ。

肉、野菜、パン、調理人。

そのどれもが地球で才人が食べていたホットドッグを凌駕している。

味も抜群だ。

食べやすさと手軽さがマルトー親父やシエスタに受け、その味に他のコック達が感心し厨房の賄い食のメニューに加えられたほどの出来だった。

しかし、マルトー親父が作るそれは才人が求めた味ではない。

才人が食べたかったものは、もっと安っぽい味のホットドッグだったのだ。

そんな風に寂しそうにホットドッグを頬張る才人を見て、ルイズは急に胸が苦しくなり一抹の不安を覚えた。

もしかして、サイトは地球が恋しいのかしら？

前に聞いた話じゃ ” 未来 ” ではサイトは地球に帰らなかったのよね。

故郷に帰るのか、それとも私と一緒に居るのかで悩んで、結局私と一緒に居ることを選んだって言ってたわ。

……それはすごく、嬉しい。

だけど、サイトが故郷に帰らなかったってことは、お父様やお母様とずっと会わずにいたって事……よね。

もしかして、今になって帰りたくなったのかしら？

想像して、ぴくんと僅かに体を震わせた。

それから、強烈な感情がこみ上げてくる。

イヤ！

サイトが居なくなるなんて、絶対イヤ！！

眉根を寄せ、目をぎゅっと瞑り恐ろしい想像を振り払おうとルイズはぶんぶんと頭を振った。

しかし、不安は無くなるどころか急激に大きく膨らんでくる。

「ど、どうしたルイズ？」

「……サイト、もしかして帰りたくなっちゃったの？」

さすがのように、大きな鳶色の瞳を潤ませルイズは上目遣いに才人を見つめた。

その表情に思わず才人はドキドキとってしまう。

動揺はすぐに表情に現れ、それがルイズの不安を更に駆り立てた。

「な、なんだよ急に?!」

「だってあんた、『ホットドッグ』の話をしている時すごく寂しそ  
うだもん」



「あ？ ああ、そういうことか」

「……やっぱり、本当はチキュウが……故郷が恋しいんじゃない？」

「恋しいも何も、俺にはもう帰る故郷なんてないよ」

「え？」

才人はルイズの心中を察してか、優しく微笑んでそう言った。

意外な才人の言葉に、ルイズは何か触れてはいけない事に触れてしまったかのような錯覚に陥り、胸のあたりがチクンと痛む。

不安げなルイズを安心させようと、柔らかに笑う才人の表情はやはりどこか寂しそうだった。

「ほら。ノルンの所に行ったときにさ。こっちの体に俺を移した後、

若い方の俺は地球に帰っただろ？」

「あ……」

「だからさ、向こうじゃもう俺の居場所なんてないんだ」

「ゴメン、サイト……」

「気にするな。俺の居場所は ”ココ” さ。生まれは地球だけど、  
さ」

才人は立ち上がり、ルイズの隣に移動した。

なんだかんだと言っても、ルイズとの付き合いは ”前” の分を  
合わせるとかなり長い。

彼女がこういう時にどうして欲しいのか位は、今の才人にはわかって  
いた。

ルイズを立ち上がらせ、優しく抱きしめてやりながら才人は続ける。

「ごめんな、心配させちゃって。大丈夫、俺はお前の傍から離れないよ。ずっと、な」

「サイト……」

「たださ、たまに懐かしく感じる時があるんだ。あそこは、俺が生まれて育った場所だから」

「うん」

「だから、心配しないでくれ。忘れる事はできないけど、帰りたい場所じゃないんだよ。」

ルイズ、俺が帰る場所ってのは、いつだってお前の隣なんだ」

どちらからでもなく、抱き合う力が強くなる。

ルイズは才人の言葉の一つ一つを噛み締めるように、反芻した。

しかし不安が無くならない。

彼女にはまだ、才人をつなぎとめておける自信が無かったのだ。

その事実が才人の言葉を信じさせはしなかった。

故郷を忘れる事はできないけど、帰りたい場所じゃない。

才人の言葉は、ルイズの不安を払う事はできなかった。

表情を見られぬよう胸に顔をうずめ、髪をやさしく撫でられながらルイズは考える。

故郷が忘れることができないのなら、いつか才人の気持ちも変わるかもしれない。

どうしよう？

どうすればいいのだろうか？

サイトの言葉を信じたい。

だけど、今の私にはそれができない。

何か、サイトの言葉を信じられる何かが欲しい。

そこまで考えて、ふと閃きが天啓のようにルイズの脳裏に駆け巡った。

たまらずがばつと顔を上げ、優しく微笑む才人に向かって叫ぶ。

「そうよ！ サイト、私、悩むことなんてなかったのよ！」

「ルイズ？ 何のことだ？」

「どうして思いつかなかったのかしら！ そうよ！ 我慢する事なんてないのよ！」

「ル、ルイズ？！ いや、いやいやいやいや。それはマズいだろ？ もうすぐタバサも帰ってくるしさ。」

「そりゃ、俺だってその、お前が欲しいけど……」

「な？！ 何勘違いしてるのよ！」

ゲシ！ と才人の脛を蹴飛ばし、ルイズは腰に手を当て仁王立ちをして不敵に笑った。

先程までのしおらしい態度は微塵も残ってはいない。

蹴られた脛を抱えて蹲っていた才人は、目の端に涙を浮かべつつもルイズを見上げる。

そんな才人を上から見下ろしながら、ルイズは花のような笑顔で言ったのだった。

「サイト、『ホットドッグ』を食べにいきましょう！」

月が一つ、白く輝く夜空。

×市の繁華街に近いとある公園で、その奇妙な男女のカップルは外灯が照らし出すベンチに腰掛けていた。

公園の時計は午後九時を指している。

男の方はごく普通の、平凡な学生であろう若者。

すこし薄汚れたパーカーを着て、なにやら熱心に隣りに座る異質な存在と話し込んでいた。

若者の隣りに座る異質な存在……まだ少女であろう彼女の容姿は、夜の公園であつてもとにかく目を引いた。

まず、その髪の色。

薄いピンク色をしたブロンドだ。

その鮮やかな色は夜目にも分かるほど自然で、ウィッグなどではないとひと目でわかる。

次にその格好。

まるで大ヒットしたハリウッド映画、ハリーポッターシリーズに出てくるような魔法使いの見習い女学生のような服装だった。

年の頃十六、七歳の少女は白いブラウスに紺色のミニスカート、ローファーのような靴に黒い膝上のソックスを履いていた。

それだけならば別にハリポッターのヒロインを連想したりはしないだろう。

ただ、一番外側に着ていた古めかしい黒いマントが、その印象を決定付けていた。

彼女の名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

隣に座る若者の名は平賀才人。

二人は今、才人の故郷地球に居た。

「……本当に月は一つなのね」

「まあな」

「家も随分と立派ね？」

「あれは”ビル”って言うんだよ。えっと、商人が商売に使う



建物さ」

「あんな背の高い建物、魔法もなしにどうやって作ってるの？」

「俺もよく知らないんだけどさ、コンクリートっていう泥みたいなものを固めて作るんだよ」

「ふうん。あ！ ねね、さっきからたまにあつちをつるさい音立てて走る、馬車みたいなものはなあに？」

「 ”クルマ” だよ。平民の乗り物でな、えっと『竜の羽衣』と同じ原理で動いているんだ」

「あのもつと向こうに見える大きな蛇みたいな物もそうなの？」

「あれは…… ”デンシャ” だよ。乗合い馬車みたいなものかな」

「あれが乗合馬車の代わり？ …… って、あんたの国、もしかして平民が個人で乗り物持つてるわけ?!」

「ああ、まあな。都会は違うんだろつけど、ここらじゃ当たり前だ」

「……豊かなのね、チキユウって」

「貧しい国もあるさ。俺の故郷のこの国がたまたま豊かなだけだよ」

「そう。しかし……どこもかしこもキラキラとっていて、まるでおとぎ話の国みたい。」

本当に魔法がない世界だなんて、信じられないわ」

ルイズは心ここにあらずといった調子で、目に映るもの全てについてサイトに質問をしていた。

夜、繁華街に近い人気のない公園。

その一角のベンチに座ってはいても、ルイズにとっては得体のしれない物に囲まれているのだった。

これがサイトの故郷……

なんて豊かな国なんだろう。

夜も遅いというのに皆が魔具のようなものをつかって、街全体を明るく照らし出している。

向こうの道はトリスタニアのブルドンネ街の大通りよりも広い。

なのに、アレは路地だとサイトは説明していた。

一体、大通りになるとどれだけ広いのかしら？

それに、あの馬車！

馬や幻獣も無しに、あんなに道を明るく照らしながら速く動けるなんて……

このベンチを照らしている外灯もそう。

こんなに明るく照らし出す魔具なのに、どうして誰にも盗まれないのかしら？

矢次早に浮かぶ驚愕と疑問に、ルイズはここへ来たことを後悔し始めていた。

最初は不安だった。

才人に里心がついてしまい、いつか帰りたいと言い出すのではないかと。

その時、彼を繋ぎ止められるだけの自信もなかった。

そして、彼女はある事を思いつく。

帰れないから望郷の念が強くなるのだ。

いつでも帰れるとわかれば、才人は安心して自分の傍にいてくれるはず、と。

才人との関係が親しくなるにつれ、なぜか急にライバルが増えてきた事への焦りもありルイズが閃いたのは

サイトの為に地球への道を開いてあげれば、きっと今よりももっと私の事を見てくれる、といった打算めいたものであった。

その思いつきと打算から出た提案は、ルイズの予想通り才人を大いに喜ばせた。

喜ぶ才人を見て、ルイズはすっかり上機嫌になり早速 ”世界扉” を唱えて才人が指示した場所とハルケギニアを繋いだのだが

……

「どつしよつ。まさか、こんなすごい国だったなんて……。これじや逆効果だわ」

うつ、と唸りながらルイズは思わぬ誤算に頭を抱える。

彼女の計画では、才人を地球へ連れて行き適当に過ごしてある程度満足してもらい、ハルケギニアへ帰る際に

「またここへ帰ってきたかったらいつでも言っただけでね。私がどんな時でも地球へ送ってあげる！」と爽やかに伝え

改めて自分に惚れ直してもらおう、という予定だったのだ。

ルイズの認識では才人の故郷である ” チキユウ ” は魔法もない未開のド田舎であった。

ところが、現実には彼女の想像を遥かに超えていた。

世界があまりにも違いすぎる。

すくなくとも、これ程の都市はトリスティンには存在しない。

街の灯りがまるで昼間のように明るく辺りを照らし出す都市なんて聞いたこともない。

もしかしたらハルケギニアのどの都市よりも、都会なのかもしれない。

これでは逆に才人の望郷の念が強くなってしまおう！

うう、どうしよう。

頭を抱えたまま、ルイズはもう一度唸った。

「ん？ どうしたんだ？ 頭でも痛いのか？」

「あ、え？ ああ、うん、ううん、何でもないわ。ねえ、サイト。そろそろ移動しない？」

「ああ、そうだな。とりあえず、金も何とかしなきゃならんし」

「何とかなるの？ 言っとくけど、犯罪は嫌だかんね？」

「何、お前が力を貸してくれるなら直ぐにでも稼げるさー！」

お前が力を貸してくれるなら、という言葉にルイズはなんだかグツツときてしまった。

才人が私を必要としている。

そう思うとつい嬉しくなってしまう、気がつく和二つ返事で任せなさい！ と返事をしてしまっていた。

才人はルイズの条件反射に近い返事に、そう来なくちゃと返してベンチから立ち上がり、辺りを見渡す。

それからおもむろに、公園の入口にあったゴミ捨て場へと走って行って、捨ててあったゴミを漁り始めた。

ベンチで座っているルイズから見えるその背中には、まるでゴミを漁る野良犬のソレだ。

「あつた！ よし、これをこつやって……」

才人は捨ててあつた紙の束の中から大きめの紙袋を見つけ出し、中が汚れていないか確認をして穴を二つ開けながらこちらに戻ってくる。

そして、ルイズが座るベンチまで戻って来て何を考えているのか、スッポリと紙袋を被ってみせた。

「……ごめん、私あんたが何を考えているのか、まったくわからないわ。」

ふざけているわけじゃ、ないよね？」

「ちがうって。俺……もう一人の俺は、この街にいたろう？　これで顔隠してさ、お前と一緒に大道芸やるんだよ。」

知り合いにでも会おうと色々ややこしくなりそうだしな」

「私、大道芸なんかできないわ。あれって玉乗りや短剣のお手玉をしたりするでしょ？」

それに見世物になるなんてやあよ」

「たのむよ、ルイズ。別に玉乗りみたいな難しい事をする訳じゃないんだ。」

お前、もうコモン・マジックつかえんだろ？」

「うん」

「こつちの世界じゃ魔法は見たこともない力だからな。ちょっと人前に出て俺にレビテーションかけてくれれば、きつとつけると思うんだ。」

「そんな子供だましで、本当にお金なんて稼げんの？」



「ああ、俺に任せとけっ！」

才人は親指を突き出しながら被っていた紙袋を少しだけ脱いで、ルイズに歯を見せた。

その笑顔はとても無邪気で、ルイズはほんの少しだけドキドキとしました。

夜の公園のベンチで二人きり、珍しい一つの月の下でルイズは才人の言葉に耳を傾けながら思う。

考えてみれば今、この世界で私と才人は二人きりなのよね。

誰も二人の間を邪魔する者はいない。

……もしこのままここにとどまれば、ハルケギニアで待ち受ける運命やしがらみからも開放されるだろう。

もちろん、そんな事はできないんだけども。

それでも、ここに居る間は世界で二人きりの存在。

その事実は、とても幸せな事なのかもしれないとルイズには思えた。

ほんのりと幸せな気分を味わいつつも、才人と打ち合わせをしてい

たルイズは

いつの間にか先程から感じていた不安が無くなっている事にふと気がついた。

その事を自覚した途端に、なんだかこれから才人と一緒にやる金策がとても楽しい事のように思えたのだった。

所変わって、先程の公園から五百メートル程離れた繁華街の一角。

都市整備の一環で歩道を広くとりシンボルツリーが植え込まれたコミュニティエリアは、何時もとは違う賑わいを見せていた。

ギター片手に歌うストリートミュージシャンやダンスなどのパフォーマンスを行う若者に混じって、一際目立っている二人組がいる。

その二人組の周りには、界限では珍しいほどの人だかりが出来つつあった。

「なにあれ？」

「……人が浮いているね。ストリートマジシャンかなあ？」

「うわ！ あの子、結構本格的よ！ ほら、ハリーポッターに出てくるようなコスプレまでしてる！」

「おい、見るよ。あの浮いている人紙袋かぶってる。いくらなんでもあのセンスは無くな？」

「同感。でも、女の子の方はすっげえ可愛いな」

「おう、外人のコスって、マジ似合うから困る」

「あー、あの子凄く可愛い！ 外国人？」

「みたい。やっぱ外人は骨格からして違うわねえ」

道行く人々が思わず足を止めるほど、その二人組は目を引いた。

紙袋をかぶり、両手を広げて地上約五十センチメートル程の高さでフワフワと浮いている男。

その隣で、仰々しいマントを羽織り指揮棒のような杖を翳すピンク

ブロンドの美少女。

一見、奇術師の真似事でもやるのか、はたまたあの美少女は売り出し中のアイドルかなにかだろうか

立ち止まった人々は興味津々で、二人組がなにを始めるのかと注目していた。

「さあさあ、近くに寄ってタネも仕掛けもないことをご確認ください！ これぞ、天才美少女魔術師ルイズの力でございます！

これは、と思うならばどうか硬貨を投げてください。

又、千円以上包んで下さった方には彼女と握手もできます！ その場合、お心付けは彼女本人にお渡しください！」

紙袋の男こと才人がそう宣言すると同時に、後ろにいたルイズが杖を振った。

すると、見物人達を煽るかのようにスーっと才人が浮いたまま、人の輪に沿って移動を始める。

同時にわっと歓声があがり、ルイズの足元にいくつもの硬貨が投げ込まれた。

宙に浮いた才人が目の前に来ると、見物人達は足元に自分の足を差し込んだり、才人の背後に回り込んだりしてタネを探したりした。

しかし、本物の魔法で浮いているので当然タネも仕掛けもない。

もちろん、誰一人として ” 本物の魔法 ” で浮いているとは夢にも思っただけはなかったのだが。

「御覧下さい！ TVで見るマジックショーですらステージの上、しかも暗幕などの前で行われていますが

世紀の天才美少女魔術師、ルイズの実力ならばこのような事は容易いのです！

さあ、これは、と思うならばどうか硬貨を投げてください。

又、千円以上包んで下さった方には彼女と握手もできます！ その場合、お心付けは彼女本人にお渡しください！」

才人がプカプカと浮きながら見物人を煽る。

更に多くの硬貨が音を立ててルイズの足元に転がった。

中には一度投げたにもかかわらず、再び投げている見物人すらいる。

「おい、ルイズ！ 笑顔、笑顔！」

宙に浮いたまま人だかりに沿ってぐるりと移動し、再びルイズの目の前までやってきた才人が小声で指示を出す。

ルイズはその支持に従い、一步前に出てかねてより打ち合わせ練習していた笑顔を自分達を囲む人々に見せてみせた。

瞬間、黄色い歓声と野太い感嘆の声があがる。

次に群集の中から数人、千円札を取り出しながら男たちが出てきてルイズに手渡した。

ルイズは笑顔でそれを受け取り、才人に言われた通り両手で相手の手を握りニツコリと微笑む。

手を握られ、微笑まれた男はたまらず顔を赤くし、にやけながらそそくさと人の群れの中へ戻っていつてしまった。

えっと、紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て”はい、ニツコリ”。

次。

うわ、なによ。

そんな目で私を見るんじゃないわよ、鼻息も荒いし。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。

……うーっ、あの人手が汗でベトベトだったわ。

何があっても手を拭くなつて才人に言われてるけど、流石にこれはいいよね？ さい……

……わかったわよ、我慢するわ。

次。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。

さっきの人もそうだけど、あんた血色悪いわね。ビョーキなんじゃない？

次。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。

うわ！ お酒臭い！！

ちよつと、さつさと離しなさいよ！

……ふう、酔っぱらいってだから嫌なのよ。

でもこんなんで良いのかしら？

確かに大受けしてるし、いっぱい人が集まってるんだけど、私、サイトにレビテーションかけて移動させてるだけよ？

他にやってる事と言えば

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。

ただだし。

まあ、妙に独特な雰囲気な男ばかり来るからこれも理由があるんでしょっけど……

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。

ふう、しかし多いわね。

メイジと握手する事がそんなに嬉しいのかしら？

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。



あ、そろそろもう一回、才人を移動させなきゃ。

えい！

……ふふ、そんなに喜ぶなんて。

魔法がないって話は本当なのね。

……ちよつとまってね、才人がここに戻ってきたら握手してあげから。

……よし、っと。

はい、おまたせ。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。

うわ、また人が増えたわね。

ほらほら、もっと硬貨投げなさいよ。

しかし、さつきから手渡されるこの紙は何かしら？

結構溜まってきて、そろそろマントの内ポケットに入らなくなってきたわ。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て ” はい、ニッコリ ” 。

ふう、まだまだ居るわね。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て  
”はい、ニッコリ”。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て  
”はい、ニッコリ”。

紙を受け取ってから両手で相手の手を握って、顔を見て  
”はい、ニッコリ”。

紙を受け取ってから……

「はい、本日はここまで！ 皆様、応援ありがとうございました！」

ルイズが考える事を辞め、しばしの時間がたった頃。

流石に周りの店の灯りもまばらとなり、あれ程いたギャラリーも数える程となっていたので

才人はそう宣言してルイズの ”握手会” を切り上げたのだった。

「おつかれ。疲れてないか？」

「……手が痛いわ」

「はは、随分人気出てたからな」

「あんたの国って、本当にメイジがないのね。レビテーション  
つであんなに珍しがられるなんて」

「あ？ ああ、それもあるんだけど……」

才人はすこしバツが悪そうに頬を人差し指でかきながら視線を逸らす。

その仕草に、不穏なものをルイズは感じ取った。

「なによ?」

「えつとな、握手はその、お前目当てだったと思うぞ?」

「は? なんですよ?

「ほら、お前すっげえ可愛いし。この国じゃ、お前位可愛いと握手するだけで金稼げるんだよ」

「はあ?! 信じられない! 私、自分を売り物にするような真似してたの?!」

「い、いや! ちがうツて! やってたのはアイドルの真似事みたいなもんだよ!」

「なによそのあいどるってのは! 説明なさい、わかりやすく!」

「えつと、そうだな。

アイドルってのは、人前に出て歌を歌ったり、踊ったり、応援してくれるファンと握手をしたりしてお金を稼ぐ職業なんだ」

「……ジプシーや吟遊詩人みたいなもの？」

「まあ、そうかな？　ただ、この国のアイドルは見た目がすっげえ良くないとなれないんだぜ？」

「そ、それってつまり私がものすごく、可愛いつて事？」

「ああ、もちろんだとも！」

才人はそう言って、覆面にしていた紙袋を脱いでルイズの足元に散らばった硬貨を拾い始めた。

自分の容姿を才人に誉められた上、先程の男たちまでも自分の容姿を高く評価していたと知ったルイズは

つい嬉しくなってしまう、すっかり上機嫌で才人と一緒に硬貨を拾う。

しかし、拾う硬貨はどれも銀貨や銅貨ばかりだ。

見慣れた金貨はない。

ルイズは、可愛いといっても所詮はこの程度の評価なのねと少しだ

け落ち込んだ。

「おー、結構貯まったな。これ、一万円近くあるぞ！」

「それって多いの？」

「んー、俺のこの服を買ってお釣りが来るくらい？」

「……微妙ね。はあ、私の評価ってその程度だったんだ」

「何いってんだ。お前、結構お金を受け取ってたじゃないか」

「え？ お金って……この紙？」

ルイズは思い出したように、ぱんぱんに膨らんだ懐から乱暴に押し込んでいた紙幣をこっそりと取り出した。

大量の千円札の中に、茶色い紙幣も見え隠れしている。

「おおぅ……お前、結構すげえな」

「これ、そんなに価値があるの？」

「そうだな、ちっと数えるから貸してくれるか？」

才人は拾った硬貨をさっきまで被っていた紙袋に入れながら、ルイズから紙幣の塊を受け取りその場で数え始めた。

数えていくうちに段々と真顔になる才人を見て、ルイズはすこし不安になる。

うう、少なかつたらどうしよう。

私、魅力が無いのかしら？

これでもし金額がすくなくて、「タバサやキュルケだったら、もっと稼げたかもなあ」とかサイトに言われたら立ち直れないわ。

……ううん、さっき才人だって褒めてくれたもの。

もっと自信を持つよ、ルイズ！

「すっげー！ ルイズ、これ二十万はあるぞ！」

「にじゅうまん？ よくわからないわ」

「とりあえず金には困らないって事だ！」

「そ、そう？ 私の容姿がそんなに認められてたって事？」

「ああ、かなり認められたって証拠だよ！ 本職の新人アイドルでも初っ端からこんなに稼ぐ人はいないと思っぜ？」

ルイズは才人の言葉を聞いて、ほっとすると同時にすっかり機嫌をよくしたのだった。



そうよ！

胸がなかるうが、背が低かるうが、美少女は美少女なのよ！

ふふふ、流石はサイトの故郷ね。

皆見る目があるわ！

内心で勝利の雄叫びをあげつつも、とりあえず外面では「そんなわたし、こまつちゃう」と白々しく指を絡ませてみせる。

そんな風に今更ながらの内気キャラを演じるルイズの手を取って、才人はもつと自信もてよと彼女を励ました。

「あ、ありがとう、才人」

「きにすんな。それに、こんだけ金があればホットドッグ以外のものとか買えるぞ！」

「本当？ あんたが着ている服とかも？」

「ああ！ もちろんだ！」

「わ、それは嬉しいかも！ 私、それと同じ生地の方が前々から欲しかったし！」

「美味しいお菓子なんかも買えるぜ？ ハルケギニアじゃ絶対食えないよなやつ！」

「本当？！」

「本当だ！」

きゃあ、嬉しい！ とルイズには珍しく黄色い声をあげて、才人の手を取りその場で小躍りを始めた。

彼女は、幸せだった。

一時は才人をここへ連れてきた事を後悔していたとはいえ、これまでの才人の様子を思い返すと望郷の念は本当に無いように思えた。

それに、考えようによってはここで才人と二人で、二人だけで生きていくという選択肢も悪くないのかもしれない。

あとは、自分がサイトを繋ぎ止められるだけのナニカさえあれば、  
と思っていた矢先、才人やこの国の人々に自分の容姿を褒められ  
単純な話だったが、自信も持てた。

……うん、最近ハルケギニアの未来だとか、消えるかもしれない世  
界だとか変な話ばかりだったから、私自信を無くしていたんだわ。

ここへ来てよかった。

そうね、サイトの事もっと信じてあげなくちゃ。

私が一番、こいつの事信じてあげなくちゃ。

ルイズは満面の笑みを浮かべ、才人と手をとって踊る。

コミュニティエリアに植え込まれているシンボルツリーの脇にある、  
デジタル式の公共時計は夜の十一時を示していた。

流石に人や車はほとんど見かけなくなり、辺りにはルイズと才人の  
喜びの声だけが響く。

「……もしかして、平賀？」

不意に、本当に不意に、女の声が小躍りしていた二人の耳に届いた。久々に他人の口から聞く自分の苗字に、才人はゆっくりと声のした方へ振り向くと

自分たちからは死角になっていた位置に、一人の女の子が立っていた。

ついさっきまでは、ここらには俺たちしかいなかったはず。

間違いなく、あれほどいた見物人たちも、皆立ち去っていたはずだ。

「あ！ やっぱり平賀だ！」

声の主は、驚いたような顔をして才人を見つめていた。

えっと……いつの間にそこに？

いや、それよりも。

この子、俺の事を ” 平賀 ” って呼んだよ、な？

確かに ” 平賀 ” って言ったよな、ルイズ？

確認するように、女の方に向けた顔をルイズに戻した。

先程まであった彼女の笑顔は、そこにはもうなかった。



小柴勇魚は、いわゆる非行少女である。

その事は本人も十分に自覚しており、実は更正の意志すら持ち合わせていた。

父親は大の釣り好きで、自分の名前に勇魚と名付ける程。

母親はパートに出ながら家庭を守る、ごくありふれた主婦。

兄弟はいない。

当然、姉妹もない。

祖父も祖母も、ついでにペットもない。

少子化の象徴である、核家族というやつだ。

一人っ子であり、ごくごく普通に甘やかされながら育てられてきた。

一番の悩みは自分の名前。

いくら釣り好きだといっても、自分の娘に鯨と名付けるのはどうかと常々思っていた。

「いさな」と読む音は好きだが、父親のセンスには思春期特有の反発もあり、嫌悪さえ覚える。

容姿は並より少しだけ良かったのか、中学の時に彼氏が二度できた。

どちらの彼氏も結局は別れてしまったが、同級生の中でも早めに”初めて”は卒業できたので良しとした。

名前が少しだけ珍しいと言う事を除けば、ごく平凡な家庭。

釣り好きの平凡な父親。

パートに勤しむ、平凡な母親。

父親に反発しながらも、平凡に青春を謳歌する自分。

そんな、平凡に進行していた自分の人生で、ある日事件イベントが起きる。

高校二年生になりたての頃、母親の浮気が発覚したのだ。



信じられなかった。

あの、平凡な、何処にでもいそうなパートに勤しむ母が。

母が憎いとか、恨んでいるとかはないが、やはりどこか軽蔑はしていた。

それもまあ、当然だろう。

どんな関係になっても、母親は母親だと誰かから聞いた覚えがあるが、それは嘘だ。

たとえ肉親であつても、それなりの理由があれば本気で軽蔑もできるしきつと憎悪もできるのだと小柴勇魚は学んだ。

結果、平凡だった家庭は一夜にしてドラマで見たような冷めた家庭になってしまった。

両親は一応、自分が高校を卒業するまでは離婚はしないつもりなのよのだが、夫婦の仲はもはや修復不能なのは

一番身近にいる自分がよくわかった。

……高校を卒業するまで、というのがミソで、家に帰れば両親はいる。

一人娘の自分の為がまんしているつもりなのか、父親も母親も家にいる。

母親も間男の所へ入り浸ればいいものを、父親も仕事を理由に家に寄り着かなければいいものを

二人は私を心配させまいとしてか、家に居るのだ。

そして、険悪な雰囲気の中で自分の帰りを待っている。

そんなわけで。

非行女子高生、小柴勇魚は深夜まで街を徘徊するようになった。

交友関係もがらりと変わり、自分と同じ非行青少年や不良といった仲間が増えた。

かといって、特定のグループに所属していたり、援交とよばれる売春に明け暮れているわけでもない。

不思議なもので、危険は付きまとうものの非行青少年を支援してくれる仲間というものは結構な数がいるのだった。

無論、仲間の仮面を被った野獣も存在するのだが。

小柴勇魚は思う。

自分は、案外運がいいのかもしれないと。

自分と同じ非行仲間は、体も求めずに泊めてくれる奴や、危ないグループの情報を教えてくれる子

何かと世話を焼いてくれる気の弱いヤンキー ” もどき ” の面白  
い奴などがいて、兎に角退屈はしない。

多分、他の非行少女よりも仲間に恵まれているのだらうと、その夜  
はなんとなく彼女は考えていた。

それは夜空に浮かぶ白い月のせいかもしれない。

十七歳の非行少女は一般的に見れば可哀想な今の自分の境遇に、居  
心地の良さを感じつつ歩き慣れた夜の歩道を闊歩していた。

変わってしまった、自分の相変わらずの平凡な日常。

退屈、安らぎ、すこしの不安。

それに、なぜか昂揚。

ああ、月が綺麗だ。

小柴勇魚はしれず、言葉を口から漏らしていた。

その声は辺りの喧騒にかき消され、自身の耳にも届かない。

辺りにはいつもと同じ、ストリートミュージシャンの下手な歌に、  
名ばかりダンサー集団の騒ぐ声。

そんな彼らの様子を、なんとなく歩道の隅で眺めていることが小柴  
勇魚の日課だった。

しかし、この日彼女の平凡は少しだけ違っていた。

なんとなく、月に目を奪われちょっとカッコいいと思っていたあのギターの人に目もくれず空を眺める。

夜空に輝く月は、ビルの間からもよく見えた。

……今、何時かな。

随分と長い間月を眺めていた気がする。

シンボルツリーが植え込まれた歩道の一角、コミュニティエリアの時計を見ようとした時だ。

彼女の目に、見慣れない黒山の人集りが飛び込んできた。

……何かしら？

「さあさあ、近くに寄ってタネも仕掛けもないことをご確認ください！  
い！これぞ、天才美少女魔術師ルイズの力でございます！

これは、と思うならばどうか硬貨を投げてください。

又、千円以上包んで下さった方には彼女と握手もできます！  
その場合、お心付けは彼女本人にお渡しください！」

突然、人集りの向こう側からそんな男の声が聞こえた。

どうやら新入りのパフォーマーらしい。

へえ、やるじゃん。

いきなりこんなに人を集めるなんてさ。

ふふん、このストリートの隠れボスであるあたしがどんな奴か、見極めてやるうじゃないの。

少し大きさに自己紹介を誰にも聞こえないように口にして、小柴勇魚は人集りを避けてパフォーマーの後ろに回りこむことにした。

さっきの言葉からすると、新しいストリートパフォーマーはマジシヤンらしい。

……天才美少女魔術師？ とか言ってたから、二人組か。

見物人たちが作り出した輪をぐるりと迂回するうちに、ちらりと輪の中心にいるであろう声の主が見えた。

声の主は紙袋を頭から被り、なんと宙に浮いていた。

その後方に、予想外にも背の低い薄い桃色の髪の毛の外人が、どこかで見たことのあるようなコスプレをして杖を降っている。

何あの子、すごく可愛い。

なるほど、マジックにアイドル並の美少女とくればそりゃ、この界隈の目立ちたがり屋じゃ敵わないわ。

それにあの紙袋の人もいい感じでトンマな演出になってるし。

うん、とつてもシユール。

おー、おー、おー、すっごい！

皆硬貨投げまくりじゃん。

うへえ、今投げたの、五百円だった！

もったいなー、そのお金であたしに奢ってちょうだいよう。

あ。

なんかキモいのがあの子に近寄ってる。

ああ、あれか。

握手千円ってやつか。

いいわねえ、美少女ってのはそれだけでお金稼げて。

可愛いは正義ってやつ？

えーえーえー、わかってますとも。

あてくし、嫉妬してルンですわよ。

……しかし、人を宙に浮かせるマジックって一体どんな仕掛けなんだろうね？

あの紙袋の人、後ろにまで回り込ませたりしてよくタネがバレないもんだわ。

ああ、あたしも近くで見たいな。

でも、投げる硬貨もってないし。

流石に正面から見る勇氣はないな、うん。

せいぜいここから目立たないように、タダ見でもしますか。

小柴勇魚は更に人垣と離れるように移動することにした。

丁度街路樹が邪魔になり二人組が良く見えない位置があつたので、そこに陣取り様子を伺う。

その場所からは紙袋の男が、ふわふわと浮きながら見物人のすぐ側を移動しているのがなんとか見えた。

流石に今いる場所までは来てくれなかったが、見物料を払う気もない彼女にとってはかえって好都合であった。

それからしばらく二人組を見ていたが、どうやら空中浮遊以外のマジックは用意していないらしく人の数も段々と減っていき

気がつくと自分以外は誰も居なくなっていた。

いや、マジックに飽きたから人が居なくなったのでもない。

ずいぶんここから眺めていたなあ、と腕時計を覗くと夜の十一時を示していた。

うわ、もうこんな時間。

んー、家に帰りたくないなあ。

シゲルん家、今日泊めてくれないかしら？

……だめだ、あいつ最近やらせろってうるさくなってきたし。

流石に先週生理だからってやり過ぎた後だけに、断りきれる自信ない。

うー、ご飯も食ってないしなあ。

ああ、今日はずいてない。

珍しいパフォーマンスに気をとられすぎちゃった。

あ、あの子達もそろそろお開きにするようね。

いいなあ、あんだだけ稼いでるならホテルにだって泊まれちゃうんだろっな。

……ちきしょ、今日は家に帰るか。



ああ、ヤダヤダ。

そんな風に考えながら小柴勇魚は踵を返そうとした所で、紙袋の男がその覆面としている紙袋をとった。

一瞬、その顔が視界に入りつつも二人組に背を向けた小柴勇魚は、もう一度振り返る。

あれ？

今、見たことのある顔を見たぞ？

アイツ、えつとたしか。

ほら、アイツ。

先月、一月位家出して問題になってた、同じクラスのあいつに似てない？

いや、あたし、あんま学校行ってないから話したことはないけどさ。

えつと、たしか名前は……

「……もしかして、平賀？」

小柴勇魚の問い掛けに、男は驚いた風でこちらに気がついた。

その間抜け面に、彼女の疑問は確信に変わる。

そっだ、このアホ面は！

「あ！ やっぱり平賀だ！」

小柴勇魚のクラスメイト、平賀才人は返事もなく一緒にいたあの美少女の方を向いてもう一度こちらを見た。

それから、引きつった笑いを浮かべ人違いでは？ と白々しくもとぼけて見せる。

ふぶん、何かやましい事あるって事ね。

ま、いいけどさ。

や、や、それよりも！

ぱあ、っと太陽のような笑顔を浮かべつつ、小柴勇魚はまったく話したこともないクラスメイトの元へ歩み寄った。

「あは、あたしだよ、ほら、クラスメイトの小柴勇魚だって！」

「え、えっと、え？」

「まあ、結構サボってるし話した事もないからしゃーないけどさ。でもひどいよ、平賀。他人ってワケじゃないでしょ？」

「あ、いや。その」

にこやかに不自然なほどもるクラスメイトの肩に腕を回しながら、小柴勇魚は傍らの美少女を見た。

間近で見る彼女は、まるで人形のように綺麗な顔立ちをしている。

ただ、その目は敵意に満ちていた。

「なあ、平賀。この子、どこで知り合ったんよ？」

「あ、えっと、はは……」

「大丈夫だって！ 誰にも言わないよ。あたしだって深夜徘徊常習  
非行少女なんだよ？」

「こまった時はお互い様ってね」

「ほ、本当か?!」

「うん、本当。……でも、口止め料ってのは必要だとおもっけど、  
ねえ？」

ぐっと回した腕に力を込める。

小柴勇魚は笑顔を邪な笑いに変え、クラスメイトの反応を伺った。

「 \$ % & ヴタ!!! 」

しかし、意外にも反応したのは美少女の方だった。

平賀才人に回した腕を乱暴につかみ、目に怒りを込めながら強引に引き剥がしにかかる。

何を言っているのかわからないその言葉は、少なくとも英語ではなさそうだ。

「わ、わ、ごめん! 」

「お、おい、ルイズ、これは違うんだって! 」

「 \$ % & ヴタ!!! 」

美少女は小柴勇魚を引き剥がすと、今度は平賀才人と口論……たぶん、一方的な罵倒を始め

最後にはゲシ！ と彼の脛を蹴り飛ばした。

可憐な見た目とは裏腹に、中々の激情家らしい。

うが、と声をあげて蹲るクラスメイトに小柴勇魚は申し訳なさそうに声をかける。

「ごめん、その……この子があんたの彼女だとはその、しらなくて  
さ」

「 \$ %!??! 」

「うわ、ちがつ！ あたし、彼とは関係ないって！」

「小柴、とりあえず黙っててくれ！ ルイズ、落ち着け！ な?! 」

「 \$ % ! ! ! ! ! 」

ううう、なんだこの状況。

ちよつとご飯奢ってもらおうと思ったのに。

あわよくば、平賀……ん家無理だろうけど、この子の家に泊まらせてもらおうと思ったのだけなのに。

ほら、外国人の家庭って案外フランクっぽいし？

イケると思ったんだけどなあ。

いや、まさか平賀程度にこんな美少女の彼女がいるなんて思ってもみないでしょ？

ちよつとサービスして密着してあげれば、最低でもご飯は奢ってくれるとおもったんだけどなあ。

平賀、けっこうその辺ウブっぽいし。

てか、どうみても童貞？

うう、そんなキツイ目であたしを睨まないでよ。

別に平賀に気なんてないよ。

好みじゃないもん。

あ、指さされた。

感じ悪う。

ああ、ほんと、今日はずいてない。

小柴勇魚は、必死に美少女を宥めている平賀才人をぼんやりと眺めつつも、少しだけ声をかけた事を後悔し始めていた。

ただ、退屈はしていなかった。



「お待たせしましたあ！」

日付が変わる時間、とある二十四時間営業のカレーチェーン店。

ボックス席で、才人とルイズは隣り合って座りその対面には才人のクラスメイト、小柴勇魚がにこやかに座っていた。

テーブルには先程運ばれてきた、今月のオススメメニューである特製シーフード煮込みのチーズ焼きカレーが三つ並んでいる。

ニコニコとしている小柴とは対照的に、才人とルイズは仏頂面で彼女を見ていた。

「さぞ、食べようよ！　これマジうまいんだ！」

「なあ、小柴。本つつ当に俺達のこと、”見なかった”　事にし

てくれんだろうな?」

「ひょうへんひゃん。あひ、ひよねはひやくひよくひゃっひゃひ」

「……汚ねえな。パクつきながらしゃべるなよ」

「むぐ、ん、ごめんごめん。ま、心配しなさんなつて。約束は守るわよ。」

それにあたし、非行少女だからだれも信用なんてしちゃくれないし?」

「お前、不良だっけか? こうやって話すのも初めてだから聞くのもなんだけど」

「ちがう。非行少女。不良じゃないよ」

「どっちも同じだろうが」

「違うよ。あたしのこだわりってやつ。」

それに、あんただってひと月も家出してたらしいじゃん? その話、聞いてみたいなあ、なんて」

「ノーコメント。ん？ なんだルイズ」

「\$ %？」

「ああ、これはな、”カレー” って食べ物だ。」

「\$ %？」

「違う違う、泥じゃねえって。スパイスの色だよ。ほら、”向こう” にもある胡椒とか黒いだろ？」

「あはは、外人さんにはカレーは泥に見えるって話あるもんね」

「\$ %！！」

「ひ、え、えっと、ワタシー、ワルグチー、ユーテナイデスネー！」

「んだよ、それ。日本語じゃん」

「Watasi anata no Warugutti itte  
naidesune」

「……変わんねえよ、それ。えつとな、ルイズ。こいつは今、カレーって外国の人には泥にみえるもんね” って言ったんだ。別にお前をバカにしたりはしてねえよ」

「\$？」

「そ。」

「しかし……なんで平賀の言葉だけわかんのだろ」

「そ、そこはほら、恋人って事で心が通じ合っちゃってるから？」

「%……」

「それにその子の言葉がわかる平賀もなんか変だし。学校じゃそんな特殊能力ある風には見えなかったんだけど？」

「いいだろ、そんな事どうでも。さっき余計な詮索しないって約束したろ？」

「ま、ね。さ、食べよ！ 焼きカレーって冷めたら最悪だし」

小柴はそう言って、ハフと焼きカレーを頬張った。

続いて才人もスプーンをカレーに差し込んで、ふうふうと息を吹きかけてから頬張る。

そんな二人の様子を見て、ルイズはおずおずとスプーンを焼きカレーに突き刺し、ゆっくりとすくい上げた。

香辛料と米が焦げる香りと、糸を引く乳白色のチーズが食欲を刺激して何とも言えない。

唇の先でカレーがどれだけ熱いか確認し、ルイズは思い切ってスプーンを口の中に入れた。

口中に広がる香ばしい香りと、いままで食べたどんな料理よりも刺激的な香辛料の香味。

辛いスパイスを中和するかのようになり、トロトロになったチーズのまろやかさと香辛料に負けない濃い味が混じり合い

ライスの歯ごたえが香辛料のソースとチーズの味の濃さを和らげ、更に重量感のある食感を醸し出す。

美味しい！

すごく、美味しい！

なによ、これ。

香辛料を一体、どのくらい使っているのかしら！

ルイズは目を輝かせながら、二口、三口と焼きカレーを頬張る。

そのたびに、エビのぷりつとした食感や、イカのくにゅくにゅとした食感がルイズを楽しませた。

「\$ & 「！」

「そっか、お前の口にあって良かったよ」

「ふふ、気に入ってくれたみたいだね」

「ああ、すっげえ旨いってさ」

「ねえ、平賀。アンタたち、この後どうすんの？」

「ん？ この後か？ そうだな、ルイズの土産でもどっかで買って……」

「こんな時間から？」

「コンビニでもいいんだよ」

ふうん、外国人だからかえってそういう所の方がいいのかもね。

空腹を思いがけず豪華な食事で満たした小柴は、綺麗になった耐熱皿の上にスプーンを乗せながら才人の隣に座る少女を見た。

恋人の前だから、ではなく、育ちが良いのだろう。

ルイズと呼ばれたまるで人形のような少女は、スプーンに申し訳程度にカレーライスを乗せながら、ちびちびと口に運んでいる。

それを数回行い、自前のハンカチで口を拭っていた。

うーん、どうみても平賀と吊り合わないわよねえ。

でもすっごく惚れ込んでるようだし？

やっぱ、外国人の感性ってやつなんだろうか。

そう考えていると、小柴はなんだか矢鱈と二人の事を詮索してみたくなった。

「その子……ルイズ、さん？ どこに住んでるの？」

「詮索は無しのハズだぞ？」

「ケチ」

「&？」

「ああ、こいつがお前の名前言ったのはな、何処に住んでるんだ？  
って聞いたからさ」

「ねね、あんた達この後どっかにお泊りしたりしないの？」

「し、しねえよー！」



「黙ってるからさ、あ、いや、それだけじゃなくて補導員いない場所教えるからさ、あたしの分のホテル代くれない？」

「……ずるいぞ。メシおごったじゃん」

「……ごめん、あたし、今日家に帰りたくないんだ」

「友達に頼めよ」

「やー、さすがにこの時間は。今まで頼ってた奴がさあ、そろそろやらせろって五月蠅くて」

あっけらかんと何やら危なさそうな日頃の行いを語る小柴に、才人は少しだけ狼狽えた。

遠い昔の生活だったとはいえ、目の前の少女は自分とは全く違う生活を送っているのだ。

こいつ、いつもこんな感じであっちこっちを泊まり歩いてんのか？

もしかして、え、援交とかしてたり？

うへえ、 ” 昔の俺 ” の同級生だぞ？

なんか、世界がちがうっていうか……

出会い系サイトに登録までしていた俺とは大違いだな。

……いやいやいや、ハルケギニアに召喚されて剣振り回す方がよっぽど世界が違うな、うん。

「 \$ & .? 」

「ん？ ああ、えつとな、今日泊まる所が無いそうだな。で、ホテル宿代を……いくら？」

「七千八百円。お泊りコースお一人さま」

「……青い紙あんだろ？ それ八枚いるんだってさ。口止め料込で」

才人の言葉黙って聞いていたルイズは、おもむろに懐からくしゃくしゃにってしまった千円札を八枚取り出し

テーブルの上で纏めて小柴に差し出した。

それからプイッと横を向き、腕を組んで唇を尖らせる。

「&メター！」

「なんて?」

「これやるから今日見た事忘れるのよ! だつてさ」

「% \$% !% \$ &ー！」

「い、いや、それは別に…… 言い辛いよ」

「何々?」

「% % !ー！」

「……わかったよ。言えばいいんだろ」

「ルイズちゃん、なんて？」

「サイトに手をだしたら承知しないんだから。とっとと消えなさい！  
だつてさ」

「&メタ！」

何かいいながら、ふん！ と鼻息も荒くピシ！ とカレー店の入り口を指差すルイズ。

小さな体に愛くるしい容姿で、精一杯威圧してくる彼女の様子を見て、小柴は思わず吹き出してしまった。

「ぶ、あはは！ 平賀、あんた愛されてるね」

「へーへー、お陰さまで」

「伝えて？ 了解、ルイズちゃんのダーリンには手をださないわつて。あと、お金ありがとね」

「あいよ。俺が言うのもなんだけど、あんまあぶねー真似はすんなよ？」

「はいよ。あ、そうそう。さっき言ったホテル、町のニコニコアーケードの脇から入ったとこだからね？」

「使うなら覚えておいた方がいいぞ、ラブラブカップルさん」

「っ、つかわねえよ！」

「そう？ でもさ、あたしら位の年齢ならすぐ補導員に捕まっちゃうし、ビジネスホテルじゃ入り口で追い返されるし。」

「お金払って泊まれる場所ってさ、ラブホ位しかないよ？ まあ、ひと月も家出してた平賀ならよく知ってそうだけど」

「その辺は余計なお世話だっつーの！」

「% ? % # ! ! !」

「おちつけ、オススメの宿情報を話してただけだって。これ食っておみやげ買ったら帰るんだから必要ないだろ？」

「ふふ、じゃ、ね。今度会うことがあればマジックを間近でみせてね、ルイズちゃん」

小柴はそう言い残して店を出て行った。

この時、小柴は意味もなくある予感が胸に差し込んでいた。

ナニカ、ドキドキするような事件が近いうち自分に起こるのかもしれない。

見上げた空に、月が白く輝いていた。

小柴と別れてから一時間後。

ルイズと才人は両手にコンビニ袋を抱え再びあの公園にいた。

コンビニ袋の中には、ホットドッグを始め色んなお菓子や飲み物がぎっしりと詰まっている。

「じゃ、サイト。 ”世界扉” を開くから、私の袋を持ってくれる?」

「あいよ」

「……満足した?」

「んー、知り合い、というかついさつきまで他人同然な奴だったけど、小柴に会っちまったからなあ。

しばらくはこっちにこない方がいいかな」

「そう」

「でもまあ、久々にこっちの食いもん食えたり、余分に金も稼げたから満足はしてるよ。」

ルイズ、本当にありがとうな」

「べ、別にあんたの為……だけど、そんな改まって」

言葉は最後まで続かない。

コンビニ袋を両手に持つ才人が、ルイズの唇を塞いだからだ。

唇はすぐに離れたが、ルイズにかけられた沈黙の魔法は消えなかった。

わなわなとしながら耳まで赤く染め上げているルイズに、才人は柔らかに笑いかける。

「ありがとな、ルイズ」

「う、あ、あ、ひ、」

「さ、帰ろうぜ！」

「ひ、卑怯よ！　今のは卑怯よ！」



「はは、怒るなよ。でもさ」

「なによー！」

「もう、不安はなくなつたら？」

うぐ、と出しかけた言葉を飲み込む。

どうやら、自分が抱えていた不安はお見通しだったらしい。

わかっていて、今のキスをしたのだ。

この使い魔は。

触れられた唇を意識すると、今頃じわりと胸の奥底から幸福が広がってきた。

卑怯だ。

この、恋人は。

私の心をこんな風にして。

そして、両手が塞がっている己の使い魔にルイズはもう一度唇を重

ねた。

「さあ、帰りましょう」

高なる胸を抑えつつ、ルイズは杖を取り出して ” 世界扉 ” を詠唱し始める。

虚無の歌は、ルイズからの二度目のキスによって踊る、才人の鼓動に心地よく響いていく。

やがて、光り輝く門が目の前に出現した。

さあ、帰ろう。

幸せな余韻に浸りつつ、才人がその門をくぐるうとした時だ。

ルイズが倒れ、  
光る門は消え去った。

夢を見た。

横殴りに雨が降る嵐の中、体中が引き裂かれる夢。

次に、巨大な韻竜の炎にこの身を焼かれる夢。

歪に組み上がる人形達と戦う夢。

強力な風のメイジに、五感を失いながらも立ち向かう夢。

悔しさに涙を流しながら、哀れな狼を両断する夢。

青銅のゴーレムに殴られ、朦朧とする夢。

そう、これはサイトの戦いの記憶だ。

私の為に、誰かの為に、戦い続けている夢だ。

浮き上がる大地を止めようとエルフと戦い。

手練の暗殺者を魔剣を砕かれながらも追い返し。

青い髪 of 虚無の使い手に腹を裂かれ。

巨大で強力なゴーレムを屠り。

エルフの先住魔法に貫かれ。

大地を埋め尽くす軍隊に命が尽きるまで魔剣を振るい。

横殴りに雨が降る嵐のような竜巻の中、体中が引き裂かれ。

強力な風のメイジに、体中を切り裂かれながら立ち向かい。

そして、青銅のゴーレムに殴られ、朦朧とする。

手に持つ魔剣で斬り、貫き、薙いで、命を奪い。

向かってくるのは刃、魔法、拳、剣、槍、岩石、鋭利な矢。

そう、これは私と出会ってから、そして”私”と出会ってから  
の、彼の記憶の一部。

「サイト！」

ルイズは思わず叫んでいた。

体中が汗にまみれ、鼓動が早鐘のように耳にうるさい。

視界に入るのは、薄暗い天井。

ぼんやりと、青白い光が僅かに室内を照らし出している。

上体を起こして初めて、大きなベッドに寝ていたことに気がついた。

「……私は……」

記憶を手繰る。

……そう、あの公園で ”世界扉” を作り出した瞬間、意識が飛んでしまったのだっけ。

原因はわかっている。

魔法を詠唱するための、精神力の蓄積が ”世界扉” を開いて維持できるほど溜まっていなかったのだ。

ルイズは唇を噛んだ。

よりもよって、こんな時に。

たぶん、一日でも魔法を使わずに大人しくしていれば大丈夫だと思うけれど……

「お、目が覚めたみたいだな。いや、焦ったぜ？」

そこまで考えた所で、サイトが濡れた頭をタオルで拭きながら部屋の奥から出てきた。

服装は変りないが、どこかで水浴びでもしてきたらしい。

「……………ごめん、私」

「いいって、わかってる。一日でもゆっくりしてりゃ精神力も溜まるだろ」

「うん……………」

「何落ち込んでるんだよ。戦闘中じゃなかったんだからラッキーじゃないか」

「うん。……………それもそうね」

「どした？ 頭でも痛いのか？」

才人は心配そうにルイズの顔をのぞき込んだ。



ルイズは無言で才人の首に手を回し、ぶら下がるように抱きつく。

「ル、ルイズ？」

「夢をみたわ」

「夢？」

「あなたが、戦う夢。きつと、あなたの記憶ね、あれは」

「ああ、そっか。……うん、俺たちやつとここまで来たんだな。」

「どづいつ事？」

「 ”前” も同じことがあったんだ。本当ならもうちょっとあとの事なんだけど。」

えつとな、虚無の使い手とその使い魔は、心の繋がりが強くなるとどづやら記憶とか共有するようになるみたいなんだ」

「……そうなんだ」

「最初は戸惑うかもしれないけどさ、段々と気にならなくなるぞ。考えようによっては絆が強くなっている証拠なんだし」

「……うん、そうだね」

「はは、最初は大変だったんだぜ？ 俺のさ、エロい妄想とかお前に流れ込んでギタギタにされたりとかしたな」

「ねえ、サイト」

「ん？ なんだ？」

「私の見たあなたの記憶、すべて戦いの物ばかりだったわ」

「……そっか」

「あんたは、こっちに来る前も必死に戦って傷ついていたのね」

「んー？ そうかな？」

「私、あんたにしてあげられる事なんて、してあげた事なんて、何も無い」

「んなこたあ、ねえよ」

「ねえ、サイト。お願い」

ルイズは、ベッドの脇に立つ才人にすがるように抱きついた姿勢のまま、首に回した腕をさらに強く力を込めた。

それから目を閉じて、以前とはまったく違う己の無力感で心を染める。

「お願いよ。私を、ひとりにしないで」

「……ああ、もちろんだ」

「私を見捨てないでちょうだい」

「当たり前じゃないか」

「私を……抱いて」

言葉は、静かな室内に音を立てて転がる。

それは愛情よりも、逃避に近かった。

無くなったはずの不安は再び、彼女を支配しつつあった。

そして次々と押し寄せる様々な不安の中、才人との確かな繋がりが何でもいいから欲しかったのだった。

あるいは、才人が辿った戦いの記憶を目の当たりにして ”あてられた” のかもしれない。

犬と蔑み、得体の知れない使い魔だと思いつつも惹かれ、恋人だと認識した今、ルイズにとって初めての感情が芽生えていた。

嫉妬ではなく、手に入れたからこそ襲われる ”不安” 。

飽きられるかもしれない。

嫌われるかもしれない。

捨てられるかもしれない。

……死んでしまふかもしれない。

だからこそ。

飽きられぬように。

嫌われぬように。

捨てられぬように。

ルイズは、初めての ” 恋愛 ” にその身を焦がし、苦しんでいた。

彼女とて年頃の女の子だ。

誰かを想い、幸せな気分になり、トリスタリアの賑やかな街を手を繋いで歩く事を夢見ていた。

しかし、いざその相手を手に入れた時思いもよらない感情まで心に芽生えてしまう。

そしてその不安は、恋を続ける限りけっして無くならないものだとルイズは本能的に悟った。

なにより。

サイトはずっと、戦ってきた。

命をかけて、私を、誰かを守るために戦って、これからもずっと傷付き続けるのだ。

その体を魔具にまで変えて。

人間を辞めてまで、私の為に戦って行こうとしている。

彼の体が不死身の物だとわかっていても、ルイズの心の奥に漠然とした不安が渦を巻く。

傷つき続けその身をすり減らし、いつか跡形もなく消えてしまうような不安が胸から無くならないのだ。

死ぬかもしれない。

いなくなってしまうかもしれない。

この、チキュウに一人で帰ってしまうかも、しれない。

この時、色々な不安は彼女の心を大きく蝕みつつあった。

其故、ルイズは才人にその痩せっぽちな体を与え、確かな繋がりを手に入れたかったのだ。

胸に渦巻く、様々な不安を追い払うために。

羞恥と不安が混じった吐息は熱く、唇に近い才人の耳に届く。

室内は僅かに空調の音がするばかりで、抱き合う二人の鼓動までも聞こえてきそうだ。

限りなく静寂に近い空気の中、しゅると衣擦れの音を立てて才人の手が上がりルイズの後頭に添えられる。

ルイズはピクンと全身を僅かに震わせてから、その身をまかせるべく体を弛緩させた。

「ありがとうな、ルイズ。……だけど、今はダメだ」

しかし、才人の言葉はルイズにとって予想外のものだった。

なぜ？ と疑問が口をつきかけたが、続く言葉によって遮られる。

「俺達はハルケギニアに帰らなくちゃならない。  
やるべき事がある。」

助けてやらなきゃならない人がいる。

お前の心を満たすのは、お前を抱くのは、その後にしなくちゃいけないだろ？」

「……うん」

ひどく辛そうなその言葉は、ルイズを押し潰すかのように容赦なく  
現実を突きつけるものだった。

もちろん、才人にはそんな意図はない。

だが、逃避を選んだ彼女にとって今は、今だけは忘れていたいもの  
だった。

ルイズの大きな鳶色の瞳に涙がじわりと浮かぶ。

そうだ。

私は何を考えていたんだろう。

己の使命も、運命も、矜持も忘れ、ただ不安から逃げ出す為にあんな  
事を言うなんて。



まったく、なんて情けないご主人様なのかしら。

やがて、後悔が一筋の涙となって頬を伝う。

そんなルイズの様子を分かってか、才人の言葉は今度は優しくルイズの耳をくすぐった。

「俺は、お前が好きだ」

「うん」

「お前を抱きたい。だけど、今はダメだ」

「……」  
「じめん」

「謝んなよ。……俺だって、すっげえ自分を押さえてるんだぞ」

才人はそう言って、ルイズの腕を優しく解いて彼女の目の前にその顔を突き出し、ニカッといつものように笑ってみせた。

その笑顔は一瞬だけルイズの不安をすべて吹き払う。

ああそうだ。

ギーシュの時も。

アルビオンの時も。

時の魔女の時だって。

サイトはいつも、この笑顔で私の元に帰ってきたではないか。

不安と後悔が荒れ狂う心に、光が差し込む。

それは、才人が投げる槍のように暴風を伴ってすべてを薙ぎ払った。

ただ一筋、一瞬の救いでありすぐにまた不安と後悔が胸を占めていったが、それでも彼女には己を取り戻すには十分だった。

ルイズは流れそうになっていた涙をぬぐい、すこしだけ悪戯っぽく笑う。

答えが分かりきっている質問をぶつける為に。

「……我慢、しなくてもいいのよ?」

「い、言うな! 言わないでくれ! ここで折れたらきつとハルケギニアに帰れなくなる!」

「いいじゃない、帰れなくなっても。私、あんとならここで生きていくのも悪くないと思ってるもの。」

それに……ここはあんたの故郷でしょう?」

もちろん本心ではない。

運命をここで投げ出すつもりなど毛頭もなかったが、この軽口は今の自分たちに必要な儀式だ。

私が、サイトと対等に話せるようになるための。

才人はルイズの意図を違わず、肩をすくめてニヤリと口の橋を釣り上げて答える。

「いや。おれの故郷はハルケギニアだよ」

「……そ。後悔しないわね？」

「  
」  
するかよ」

「そ。じゃ、ずっとさせてあげない」

「ちょ、ちょっとまって！ それとこれとは話が」

「ふふん、ご主人様に恥をかかせた罰よ」

「後生だルイズ！ それだけは……」

「何よ。カッコつけるなら最後まで貫きなさいよ。」

大体、こ、ココをこんなにして、本当に肝心な所が締まらないんだから」

そう言って、ルイズは中指でテントを張るサイトの股間の頂きを、

勢い良くデコピンの要領で弾いた。

ぺちんという音。

ぬぐを?! と声をあげて才人はその場に崩れ落ちる。

ぶるぶると小刻みに体を揺らすその姿は、先程までの男らしい雰囲気を感じさせない。

ルイズはベッドに腰掛け、足を組み少し乱れた髪の毛をかきあげて才人を見下ろした。

それから、目に涙を浮かべてやっとの事で自分を見上げる哀れな使い魔に言い放つ。

この犬には、女に……いや乙女に、いやいや、ご主人様に「抱いて」と言わせた挙句断った罰を与えねば。

……私が悪いんだけど、それとこれとは別。

もちろん、これも本心ではない。

只のじゃれあいのようなものだ。

一種、性的なプレイだとも言えるのかもしれない。

少なくとも、才人はそう思っている。

はず。

「わん”よ」

「へ？」

「罰として今日一日語尾に犬らしく”わん”って付けなさい。それで乙女に恥をかかせた事を無かった事にしてあげるわ」

「そ、それでいいんだな？！」

「聞こえない。そう、私とずっとしたくないのね」

「それでいいんですかわん？」

「ええ、良く出来ました」

「あ、ありがとうございますわん！」

必死の形相で股間を抑え、涙目で答える才人。

これで ” 儀式 ” は終りだ。

暗黙の内に二人はそう感じて、ぷつと吹き出し笑い合った。

「で、サイト。ここ、どこなの？」

「あ、いや……それがな？」

「ん？」

「ほら、小柴に教えてもらった宿なんだ」

「へー。よくこんな貴族用の部屋とれたわね」

ルイズはそう言って室内を見渡す。

窓は分厚いカーテンに仕切られ、ベッドもかなり大きい。

天井からはつつすらと青白く光が漏れ出し、調度品も見たこともないものばかりだった。

「あ、いや……ここ、貴族用じゃなくてだな」

「ん？ あ、なにこれ。変なボタンがたくさんあるわね」

才人の言葉よりも好奇心が打ち勝っていたルイズは、ベッドの枕元においてあったリモコンに興味を示し赤いボタンを押してみた。

その瞬間。

ベッドの枕とは反対側に置いてあった大きな液晶テレビの画面に灯がともり、裸の男女が映し出された。

大音量の艶かしいあえぎ声と共に。



「ひい?! な、なななな、にに、あわわわ」

「貸せ! ルイズ、そいつを貸すんだ!」

「じ、これ、じじじ、これって!」

「いいから! 早くよこせて!」

「うわ!! こ、こんな事になっちゃってる……ひ?! あ、あんな事を!! うそ、信じられない!!」

「頼む! ルイズ! いや、頼むわん!!」

才人が固まるルイズの手の中から、強引にリモコンを取り上げ電源を切る。

静寂が再び室内を覆ったが、二人の間にはとても気まずい雰囲気

漂った。

「…………チキユウの宿って、すごいよね」

「いや、この宿が特別なんだよ…………」

「ど、どゆこと？」

「小柴に教えてもらったこの宿な、いわゆる ” 連れ込み宿 ” なんだ」  
な

「んな?!」

連れ込み宿、というものはハルケギニアにもある。

地球でいう所のラブホテルとは少し違い、早い話が恋人や酒場で口説いた相手と利用できる娼館の事を指す。

娼館であるから当然、宿付きの娼婦もいる。

連れ込む相手がいない場合、部屋代の他に娼婦も呼べるといった場所だ。

平民だけでなく貴族も道ならぬ恋をしたり人目を憚り逢瀬をする為に利用される事は珍しくないで、知識としてはルイズも知っていた。

もつとも、地球の連れ込み宿を利用することになるなどは夢にも思わなかっただろうが。

「……もつと他に場所がなかったの？」

「小柴に言われたんだけどさ、ほかの普通の宿じゃ俺位の年齢の奴は泊めてもらえないようなんだ。

それに、お前抱えてその辺ウロウロも出来ないし……なにより他に当てがなかったんだよ」

「そ、それなら仕方ないわね」

「だ、だろ？俺だって初めてこんな所にくるんだけど、ホント緊張しまくってさ」

才人はリモコンを握った手で頬を掻きながら、目を泳がせた。

そんな才人の様子を見て、ルイズはすこしだけモジモジとしてしま  
う。

体を重ねる為の場所にいて、尚且つお互いに体を重ねることは吝か  
でない意思を示しているにも関わらず、体を重ねない。

その理由も明確にしているにも関わらず、今の状況はなんだか居心  
地が悪かったのだ。

「と、ところで才人。寝汗かいたから私も水浴びしたいわ。  
あんたもさつきまで水浴びしてたんでしょ？」

「ん？ あ、ああ。風呂あったからな。結構広かったぜ？」

「へ？ 二の宿、お風呂あるの？」

「おう、あるよ」

「……連れ込み宿のお風呂だなんて、私恥ずかしいわ。やっぱりやめ  
ところかな」

「心配いらねえよ。ハルケギニアの宿の風呂とは違って、こっちは  
はすべての個室に専用の風呂がついているんだ」

「うそ！」

「ホント。みてみ？ そのカーテン開くと見えるぞ？」

リモコンを元の場所に慎重に置きながら、才人はすこしぎこちない  
動作でベッドから左手のカーテンを指さした。

ルイズは言われたとおりにカーテンを開くと、そこに大きなガラス  
が現れその向こうにすこし小さめの清潔そうな浴場が見えた。

先程まで才人が使っていた為か、ガラスには夥しいほどの水滴がへ  
ばりついている。

「……これ、浴場使うところから丸見えじゃない」

「……そりゃ、連れ込み宿だからな」

「……さっきはああは言ったけど、見ちゃダメだかんね？」

「も、もちろんだよ。俺だって、できないのに見てムラムラして苦しみたくなえし。」

「ほれ、浴室の入口はこっちだ。器具の使い方説明するから、来いよ」

「あ、そうね。お願い。……ホントに覗いちゃ、ダメだかんね？」

念を押しながらルイズは才人の後を追いきまにずっとカーテンを閉めた。

この後、ルイズは浴場の便利さに驚き、シャンプーとリンスを痛く気に入り、トイレのウォシュレットに戦慄し

買い込んだコンビニの食材の内日持ちしそうにない物を食べて、才人にテレビの操作を教わりながら一つのベッドで二人は改めて寝たのだった。

ただ、才人が寝た事を確認してからテレビの電源を入れ、音量を小さくしたポルノコンテンツをコツソリと眺めた事はルイズだけの秘密である。

午後七時。

結局二人は周りが薄暗くなるのを待って、宿泊料金と延長料金を支払ってホテルをチェックアウトした。

勿論、目立つ事を避ける為である。

ホテルを出た二人は、近場にあつた服の量販店に立ち寄りいくつかの（主にルイズの）買い物を行い

再びコンビニに立ち寄って今度はシャンプーやリンスなども買い込んだ。

そんな事をしている内にすっかり日も暮れ、気がつくとも午後九時を回っていた。

これで丁度二人が地球にやってきてから、丸一日程経つ事になる。

両手に大量のビニール袋を下げ、並んで歩くルイズと才人は人気のないあの公園を目指し夜の街を歩く。

無論、 ”世界扉” を開いてハルケギニアに帰るためである。

珍しい服やハルケギニアでは手に入らない秘薬といってもシャンプーとリンスなのだけでもを思いがけず手に入れたルイズは

ホクホク顔でいるのに対して、才人の表情は浮かばない。

「うう、怒ってるだろうなあ」

「誰がよ」

「シエスタやタバサ。帰ったら何言われるか……」

「あによ、そんな事気にしてるの?」

「だってさ。絶対怒ってると思うぜ? 無断で丸一日居なくなったんだし」

「大丈夫よ、その為にお土産買ったんだから」



「こんなレトルトカレーや、コスプレ女子高生セットで喜ぶかねえ？」

才人はビニール袋の一团を、ひょいと目の高さに持ち上げてため息を付いた。

「大丈夫よ。私ならすごく嬉しいもの。」 じょしこーせいせつと” っつのは今一魅力がわからないけれど」

「ほれ、さっき見かけた海軍の制服着た女の子いたろ？ ああいうのだよ」

「あ、あれ？ ……しまった、私も欲しかったわ。アレ、可愛いもの」

「あー、もう店閉まっちゃってるから今度な。  
ん？ そいやアレなら多分ハルケギニアで作れるぞ？」

「ホント？」

「うん。 ”前” に作ったことあるし。欲しいならお前用につくるっか？ こつちに何度も扉を開くのもしばらく控えるしな」

「やった！」

ルイズは更に上機嫌になり、足取りも軽く才人の前を歩く。

耳を澄ませば、後ろを歩く才人にも彼女の鼻歌が聞こえてきそうだ。

やがて視界の先にあの公園の木々が見えてきた。

これでやっと帰れるな、と才人は思いつつほんの少し歩みを早めてルイズに追いつこうとした矢先

不意にルイズは立ち止まった。

思わずぶつかりそうになりながらも、才人は器用にルイズを回りこむようにして回避する。

ルイズは立ち止まったまま、進行方向に見える公園ではなく、歩道の脇から伸びるやたらと狭い路地を眺めていた。

「どした？　なんか珍しいもんあったのか？」

「ねえ、サイト。あんた、前言ってたわよね？」

「ん？　なにを？」

「あんたの国って、女の子が夜出歩けるほど安全だって」

「ああ、一応は、な。流石に危ない場所はあることはあるけど……  
ほら、昨日の夜も小柴に会ったろ？」

「……じゃ、女の子の悲鳴が聞こえるのは余程のこと？」

「うん。余程の事だな」

「いね、もっててー！」

「わ、わ、おい！ ルイズ！ ちょっと！」

ルイズは突然持っていたビニール袋を才人に押し付けて、杖を抜きながら路地へ駆け出した。

慌てて大量の荷物を抱えた才人もその後を追う。

人気の全くない薄暗い路地を走っていくと、やがてすぐに反対側の出口へとたどり着いた。

しかし、路地から大通りに出ることはできない。

その出口には壁のように大きな黒い車が停めてあり、後部座席への扉が開いていた。

車の手前には五、六人の男がたむろしており、その中心に一人の女の子がいるようだ。

車の向こうから漏れるわずかな光で、男達は其々ハルケギニアで馴染んだ髪の色をしており、皆若いと判別がつく。

内、一人の金髪の男が女の子の肩ほどもある黒い髪の毛と腕を掴んで、車の方へ引っ張っていた。

どうやら、車の中へと連れ込もうとしているらしい。

路地は闇ではなかったが、とても暗い。

更に、どういった事情で目の前の光景が繰り広げられているのか、異世界の人間であるルイズには分からない。

しかし、ルイズは女の子の悲鳴を確かに聞いてここに足を運んだ。

それは確かに事実であり、それ以上の理由など彼女は必要としていなかった。

状況はわからないけれど、同じ年頃の女の子が複数の男に襲われている。

ならば、私のやる事は決まっているわ。

だって、私は。

ルイズは杖を男たちに向け、金髪の男に叫ぶ。

『その子を離しなさい!』

「あん？ だれだこいつ？ 何言ってるんだ？」

「あ、あなた?! ダメ、逃げて!」

「なんだあ、お前のお友達か？」

『もう一度言つわ、その子を離しなさい！』

「おい、どつする？」

「俺、エイゴわかんねーよ」

「警察に駆け込まれると厄介だ。  
一緒に連れてくか？ 女だから ”色々楽しめる” だろ」

「ん、そうだな」

「へへ、そうこなくちな」

男たちが、一斉にルイズへと向き直る。

敵意というよりも、下卑めいた笑いが暗い路地に満ちた。

その中でただ二人、女の子と金髪の男だけが路地の出口の車のあたりで揉みあうようにしている。

あいつ、さっきからあの大きな黒いクルマに女の子を連れ込もうと  
しているわ。

きつとアレで連れ去って逃げるつもりなのね。

相手は……五人。

平民が五人なら余裕よ。

”加速” を使って一瞬でギタギタにしてやる。

ルイズは杖を構える。

あとはほんの短く、呪文を唱えればいい。

それだけで自分は目の前の（多分）拐かしどもに、身の程を教  
えやれる。

そう思っていた。

しかし。

そこまで考えて、思い出した事がある。

あ！ わ、私、今魔法使うと ”世界扉” がまた明日まで開けな  
くなっちゃう！

まずい！

とてもまずいわ！

思わず後ろを振り返るも、才人はまだ追いついてこない。

一瞬、引くべきかどうかルイズは判断に惑った。

一番近くにいた丸坊主の男は、その隙を見逃さない。

素早く動いてルイズの両手を掴み、そのまま背後に回り込んで拘束しにかかる。

魔法を知らない為、男たちにはルイズの姿はただの身長の低い女の子にしか見えていない。

当然メイジに敵対するような、慎重さなどありはしなかった。

しまった、と思う間もなくたちまち羽交い締めになされてしまう。

ちよ、離しなさいよ！

どこ触ってるのよ！

そうルイズが怒鳴ろうとした時だ。

鈍い音とともに背後の男が急に脱力して、その場に倒れた。

その顔面は暗い路地でもハッキリ分かるほど血まみれになっている。



強く握られていた手首を摩りつつ、ルイズが振り向くといつの間に才人がそこに立っていた。

「何やってんだよ、いきなり駆け出したかと思ったたらなんか羽交い絞めにされてるし」

「な、なんだてめえ！ クルア！ こんな事してただで済むとおもってぶっ！」

「うっせ。黙ってる」

凄みかけた男の顔面に、才人は再び躊躇なく拳を突き立てた。

勿論避ける暇など与えはしない。

男は血と歯をまき散らしながら、路地の壁に体ごと叩きつけられる。

それを見て、路地の男達は息を飲んだ。

見てくれはいつもカモにしている弱つちい一般人に見える男が、仲間を二人殴り倒したことにではない。

才人のまったく暴力への躊躇がない一連の行動に、目を奪われたのだ。

それは、ハルケギニアで命のやり取りをずっと行ってきた才人にしてみれば至極当然の事であったが

平和な日本に住む彼らにして見れば異質な物だった。

そう。

才人は現代の日本の価値観と照らし合わせた場合、こと荒事に関してはずっとハルケギニア側の人間となっていたのだ。

殴る事を躊躇わない。

斬る事も躊躇わない。

命を奪うことすら、必要であれば躊躇わない。

平民として生きたのならばともかく、ずっと貴族として、剣士として、ガンダールヴとして生きた彼にとってそれはむしる必然だった。

男たちは才人の纏う雰囲気、思わず懐から折りたたみ式のナイフを取り出していた。

そんな自身の行動に激しく動揺をする。

なぜだ？

なぜ、俺はこいつを見ていると震えが止まらないんだ？

目の前のコイツは、体がデカイ訳じゃない。

服だって、髪だって普通だ。

見ろ！

あんなに弱そうじゃないか！

なのに、なんで？！

なんで俺は、こいつを見てこんなにも、怯えているんだ？！

男たちには理解できない。

才人が先程から放つ敵意の中身を。

怒り、恨み、憎しみといった感情をぶつけられる事はあっても、明確な”殺意”を向けられる日本人は一体どれほどいるのだろうか。

しかも、相手は暴力を奮うことにまったくの躊躇をしないのだ。

”殺意”すら伴なう才人の敵意は、男たちに知れず確実な死を予感させていた。

しかし、憐れにも彼らにはそれが自覚できない。

平和な日本で、命のやりとりを経験することなど皆無だからだ。  
なにより、彼らはルイズにもその刃を向けていた。

その事実が理解できぬ恐怖を抱かせる原因であるとも知らずに。

『うっさいわね。ちょっと油断しただけよ。あんたも、追いついてくるのが遅いわよ?』

「う、荷物をあんだけ抱えてたんだからしょうがないだろ?!」

『あー！ そっぴやどこにおいたの、お土産!』

「向こうに置いてるよ。心配すんな、盗られやしねえって。  
それより、一体何事なんだよ?」

『ほら、あいつ。女の悲鳴が聞こえたから、こっちに来てみればってやつよ』

傍目には三人の男にナイフを突きつけられ、絶体絶命のピンチに陥ったカップルはそんな事など意に介さず呑気な会話を続ける。

相変わらず二人の目の前には、三人の男が立ちはだかり、その向こうで事態に気がついてない男女がもみ合っている。

ルイズは自分がこの場へやってきた原因を、顎で才人に指し示して見せた。

才人はルイズを背にするように歩み出て、目の前でナイフを構え震えている男たちを無視しながら示された方を見る。

「離して！ シゲル、大体、あんた、あの子はカンケーないじゃん！」

「うるせえ！ 元はと言えばお前が悪いんだろっが！」

「ケーサツが黙っちゃないんだから！」

「へっ、家出した非行少女なんて、誰が構うんだよ！ くそ、おとなしくしろって！」

おい、お前ら、一人こつちきて手つだ……え？」

遅れて金髪の男は状況に気がつく。

そして、女の子の髪と腕を掴んだまま、新たな乱入者の足元に転がる二人の間を見て瞬時に判断を下した。

「何やってんだ！ もういい、先に行くからそいつボコって口止めしとけよ！」

叫んで、なぜか呆然としている女の子を強引に車の中へ押し込んだ。女の子は才人を見て、信じられないといった様子で何かを叫ぶが同時に車のドアが閉まり同時に車は急発進をした。

金髪の男はこういった状況にある程度は慣れているらしく、その手際はなかなか手馴れたものだ。

そして路地には才人と三人の男の姿が残された。

ルイズの姿は無い。

才人は内心で舌打ちをする。

まったく、あいつは。

とっさに ” 加速 ” を唱えて車内に突っ込んだまではいいけど、一緒に連れ去られてたら世話ねえよ。

精神力ケチろうとしてたんだろっな、詠唱ほとんど一言だったし。

車内で効果切れちまうとかどんなジョークなんだ？

くそ、雑魚とはいってもナイフ持ってるから、ルイズの安全最優先のつもりだったのが裏目に出ちまった。

さっさと全員ボコボコにしとけばよかったな。

独りごちて、才人は左目に意識を集中する。

心の繋がりが強くなっている今ならば、たぶん意図的にも ” 繋がる ” はずだ。

果たして、左目から見える景色は派手に暴れる誰かのものとなった。

……よし。

一応ご主人のピンチだしな、ちゃんと繋がったか。

おー、派手に暴れてるな。

うわぁ、ありゃ痛えぞ？

……うん、杖も持ってるし暫くは乱暴されずに済みそうだ。

まってる、ルイズ。

行き先をこいつらに吐かせてすぐに行くからな。

それにしても……

あの子、暗かったから気がつかなかったけどさ。

確かに言ったよな。

「平賀！」　　つてむ。

しかし、その夜は確認する相手が側にいない才人だった。





小柴勇魚は、いわゆる非行少女である。

美少女と冴えないクラスメイトという奇妙な組み合わせのカップルと邂逅した夜の後、彼女は手にした軍資金を元に

家には帰らず一人ラブホテルで夜を明かした。

それから彼女には珍しく一度家に帰り、学校の制服に着替えてかなり遅い登校をすることにしたのだった。

時間は既に朝というよりも昼に近かったためか、自宅には父親も母親もいない。

やれやれ、小言をいわれなくて済んだわね。

あたしが ” ころ ” なった原因を巡って、目の前で喧嘩されるなんてまっぴらだし居なくてホント、よかったわ。

そんな事を考えながら小柴勇魚は、テーブルの上に置かれラップが綺麗にかけられた、おそらくは昨夜の自分の夕食を横目に玄関へと足を運ぶ。

それから少しホコリっぽくなっていたローファーを出して、久々の学校に想いを馳せた。

……平賀、いるかな。

できれば、あの子の事とか聞き出してみたい。

玄関の扉をあけ、足取りも軽く外へ出て扉を閉め鍵を素早くかける。

小柴勇魚は昨夜から続く奇妙な非日常的な予感に、すこし浮ついて自分の自転車に跨った。

学校までこの愛車で十五分。

ペダルを漕ぐ力は妙に力強かった。

午後五時半、小柴勇魚が時たま通う高校の下校時間。

彼女は一人屋上へと続く階段でぼんやりと、それでいて不機嫌そう

に持ち込んだ音楽プレイヤーを聞いていた。

比較的整った顔を忌々しそうにしかめ、結局思い通りに行かなかったその日の学園生活について小柴勇魚は思い返す。

四限目の授業の前にある休み時間に合った彼女は、早速教室で昨夜見た顔を探して、すぐに確認する事ができた。

しかし、彼……平賀才人はこちらに気付いてもまったく興味を示さず、すぐに数少ないオタクっぽい男子と

アイドルやアニメ、ネット動画の話題で盛り上げるばかりだ。

……ふうん、そう。知らんぷり、ってワケね。

まあ、一万円近く奢ってもらったからこっちも ” 見なかったこと ” にするんだけどさ。

それでも、もうちょっとこう、アイコンタクトとかしてくれてもいいじゃん。

才人の態度にすこし拗ねながら、それでも小柴勇魚は辛抱強く彼が一人になる隙を窺い続けた。

その隙を探すうちに、とうとうこんな時間になってしまったという訳である。

結局平賀才人は常に誰かと一緒に馬鹿な事を話し、白々しくも彼女がほしいーとか口にしてはバカにされ

気が付くといつのまにか他の有象無象な生徒と一緒に下校してしまっていたのだった。

ああ、結局昨日の事を聞きそびれちゃった。

耳に刺したイヤホンからは、流行しているビジュアル系バンドの歌声がすこし漏れ出している。

そのロマンチックな歌詞を頭に並べていると、小柴勇魚は唐突に昨夜の月を思い出した。

ビルの谷間から見える白く輝く月は、とても綺麗で。

月光を受けるあのピンクブロンドはまるで絹の糸のようで。

おとぎ話のお姫様のように綺麗なあの子を伴って、平賀才人は確かにあの場所にいたのよね。

……そういえば、今日見たアイツと昨夜会ったアイツとは雰囲気随分と違った。

なんていうか、昨日のアイツは大人っぽいというか。

もしかして、生き別れの双子とか？

……んなこたあない、ってね。

同一人物なのは間違いないんだろうけど、昨日と今日のアイツで切り替えているんならこりゃ、相当タヌキよね。

あ。

しまった。

せめて、メルアド聞いときゃよかったわ。

後悔しながらポケットから、かなり旧式の折りたたみ式携帯電話を小柴勇魚は取り出す。

電池がかなりヘタっており、昨夜も電池が切れていた為鞆の底で眠っていたものだ。

その携帯電話をパカッと片手で器用に開いてみせ、まずは画面の左上をチエックする。

ホテルで過ごした時に充電をしたのだが、もうバッテリーの残量表示が半分ほどになっていた。

その四角いバッテリー表記の隣に未読メールのマーク。

いつもの事だ。

小柴勇魚はすこし陰鬱な気分になりながら、受信フォルダを開いた。

親 / 未読 ・ 5 6

友達 / 未読 ・ 3

迷わず、友達のフォルダを開く。

他愛もない、非行仲間からのメールが二通。

そして、最近よく世話になるシゲルという男友達から一通。

ああ、めんどくさい。

舌打ちをしながらシゲルのメールを開く。

件名：ゴメン！

本文

この前はごめん！

俺、別にお前の体目当てで泊めてたワケじゃなかったのにな。

もう言わないからさ、今日お詫びの印に飯奢ってやるよ。

連絡求む！

内容を確認して、小柴勇魚は深く、深くため息をつく。

何気ないシゲルのメールの裏に見え隠れする下心に、気分を害したからだ。

なによ、この見え透いた言い訳は。

素直に「ごめん！ やりたいのはホントだけど、我慢するから仲直りしてくれね？ 飯おごるからさ！」とか言えないもんかしら。

変に取り繕うって態度が気に入らない。

そうイラつきながら返信のボタンを押し、もう二度とメールすんなと入力しようとした指がふと止まった。

今日はどうしよう。

……こいつを ” 切る ” のは晩ご飯を奢ってもらった後でもいいか。

なにより。

今日も ” あの平賀とルイズちゃん ” に会えるかもしれないし。

こうして小柴勇魚の指は、当初の予定とは違う文章を入力するのだった。

更に時は進み、学校でシゲルへのメールの返信を行ってから三時間



程経った、午後九時を回った頃。

小柴勇魚は大きな車の中に押し込まれ絶望に打ちひしがれていた。

夕方に立てた計画通り、平謝りするシゲルにイタリアンを奢らせた  
までは良かったが、その帰り道（と言っても当ても無く歩いただけ  
だが）

メールを打ちながら前を歩くシゲルがこちらに振り向いたかと思う  
や、急に腕を掴まれ路地へと引つ張られた。

同時にその路地を塞ぐように、近くに停めてあった大きな黒いバン  
がいきなり動きだす。

一瞬の出来事で頭が追いついて来なかったが、路地の奥からまるで  
示し合わせたように複数の男が現れた時、初めてハメられたと理解  
した。

咄嗟に声を上げようとするも、鳩尾に強い衝撃を感じて思わずその  
場に踞る。

痺れと痛みが全身に走り呼吸ができず、一緒に声どころか思考さえ  
止まった。

襲い来る苦痛に呻いていると、今度は肩まで伸ばしていた髪を強く  
乱暴に引つ張られ顔を上げさせられる。

彼女の目に入ったのは金髪の男の顔。

シゲルだ。

「折角食った飯を吐くんじゃねえぞ？ まったく、手間かけさせやがって」

「シ、ゲル？ あんた……」

「大体な、タダで居場所を手に入れようって思うのが甘めえんだよ」

「よ、く、も」

「心配すんな、今日一日で ”全部終わる” 。儲けたらお前にも分け前やるよ」

ガガ、と音を立てて路地を塞いでいたバンの後部座席への扉が開き、中からシゲルと同じ位の年齢の男が降りてきた。

蹲っていた小柴勇魚はシゲルに髪を掴まれたまま強引に立たされて、ぐいとそのまま髪を車の方へ引っ張られた。

同じ車に乗り込むつもりなんだろう、路地の奥から現れたシゲルの仲間であるう男たちも彼女を囲むように近付いてくる。

小柴勇魚の視界に入る男たちは皆下衆な笑いを浮かべ、品定めをするように自分を、自分の体を見ている。

ケダモノども。

その表現がしつくりと来るような、そんな連中だった。

「ほら、” 出演者” の方々をあんま待たせるな。さっさと乗れ  
「よ

「へへ、結構いい女じゃないツスカ」

「よろしくう、一緒に頑張っているDVDにしようねえ！ んぢは  
はー！

「挨拶は” あっち” でじっくりたつぷり体にしてやるから、ほ  
ら、早よ乗れよな？」

男たちの挨拶は果たして、その外見にふさわしいものだった。

突然現実のものとなった自身の貞操の危機を前に震える彼女を、シゲルは掴んでいた髪と腕を更に引っ張る。

小柴勇魚はここでやっと、まだ呼吸が完全に戻らないままそれ程大きく出せない悲鳴を上げることができた。

駄目だ！

あの車に乗っては駄目だ！

抵抗しないと、抵抗しないと、抵抗しないと！

誰か！

誰か誰か誰か！

小柴勇魚は未だ足に力が入らず、声も上げられる状態ではなかったが、全身で激しく抵抗を試みる。

じわり広がる絶望を振り払おうとするように。

その時だ。

「& \$ !」

路地に響く、どこかで聞いたような声。

その場にいた皆が一斉に声の主へと振り向く。

そこには、昨夜の美しいマジシャンが小さなタクトのような杖を手に立っていた。

と、いうわけで。

小柴勇魚は大きな車の中に押し込まれ、絶望に打ちひしがれている。

隣ではいつの間にか放り込まれたのか、昨夜の美少女マジシャンことルイズがつい先程まで暴れていた。

散々シゲルの金髪を引っ張ったり引っつかいたり、やけに手馴れた調子で蹴りを入れていたが

シゲルから強引に自分が居るバンの最後尾にある座席に突き飛ばされたのを機に、今ではおとなしく自分の隣に座り

気泡が沢山入り込んでいるスモークシートごしに、形のいい小さな唇を尖らせながら車の外を眺めていた。

そんな、救世主から一転自分と同じ囚われの身になってしまった彼女を横目でチラ見しつつも

車に押し込められる直前に見た、 ” あの ” 顔を思い浮かべる。

シングルに髪を引っ張られつつも必死に抵抗していたから、何時ルイズちゃんの後ろからやってきたのか気がつかなかったけれど

あれは間違いなく、平賀だった。

その瞬間は見てなかったけどさ、男をあの一瞬で二人も伸したようなのよね。

……見かけによらず、喧嘩が強いのかな？

ああもう！

だったら、もうちょっと粘ってれば助かってたかもしれないのに！！

うつつ、どつしよづ。

流石に車で拉致されたらもう、どうしようもないよね……

ああ、あたし、今から

これから起こるであろう予測に想像が至り、小柴勇魚は激しく頭を振った。

それから前の座席でルイズに引つかかれた傷を気にしているシゲルの金髪を、忌々しそうに睨む。

隣りに座るルイズは、一心不乱に車の外を眺めていた。

一番後ろの座席ということもあり、構造的に開くような窓ではない。後部ハッチの窓も何かの板で潰されている。

更に乱暴ではあるがすべての窓にスモークシートが張られており、恐らくは車外からはこちらが見えないだろう。

辛うじて車が何処を走っているのが判るが、昼ならともかく今は夜だ。

多少車内で騒いだところで、誰かに気付いてもらえるとは思えない。

今の自分たち出来る事と言えば車の外を眺めるか、携帯で誰かに助けを求める事だけだ。

しかし、携帯はまずい。

大きい狭い車内、直ぐにバレてしまう。

一か八か、駄目元でも信号で止まった時に大騒ぎをして、助けを呼ぶしか……

小柴勇魚はそう考えながら外を眺めるルイズの後ろ頭越しに見えにくい車の外へ目をやると、ある異変に気がついた。

スモークガラス越しにあれほど見えていた街の灯りが見えない。

窓の外に見える明かりは、極端に小さく遠くに移動していた。

え？　と思わず口にして、身を乗り出しルイズの小さな肩に手を置いて更に窓の外を凝視する。

車はどうやら街の郊外へと向かい、山道に差し掛かる国道を走っているようだった。

対向車も無く、道を走っているのはこの車だけ。

小柴勇魚ははつとして、その向かう先にとある心当たりが頭に浮かんだ。

街の郊外、山の奥に数年前不景気の煽りで潰れた大きな工場がある事を。

結構有名な場所で、前の市長が大々的に誘致したまでは良かったが工場の建設途中で誘致した工場の取引先が倒産してしまい

その煽りを受けて誘致した企業まで倒産してしまったのだった。

普通ならばその施設は土地ごと競売にかけられるのだけれど、誘致に伴なう土地の売買や”自称”地権者の怪しい人物にまつわる

市長の不正が発覚し、その問題が片付くまでそのまま放置されている場所だ。



地元の間人ならば誰でも知っている。

そして、その立地条件により走り屋や街のチンピラなどが、不法に利用するたまり場になっていることも。

車はやがて、街の光が届かぬ山道を疾走する。

対向車も無く、景色と一緒に流れる外灯も見えなくなった。

その車外の闇は小柴勇魚をじわりと侵食していく。

彼女は不思議と他人事のようにどこか現実味の無い絶望を抱きながら、自分の事など気にもとめず車外を眺めているルイズの肩に

つい置いていた手を力なくどけた。

足から力が抜け、とすんと座席に座り込む。

もう、逃げられはしない。

あたしはこれから……

この瞬間他人事のようにだった絶望を、実感を伴って恐怖と一緒に小柴勇魚はハッキリと認識した。

両手でそれぞれ反対側の肩を抱くと、震えていることに気がつく。

呼吸もいつの間にか荒くなっていた。

助けて

誰か

助けて。

助けて！

助けて！！

声は出なかった。

恐怖の為なのか、絶望のためなのか、それとも後悔の為なのかはわからない。

足が、体が、手が震える。

「\$ %?」

不意に、すぐ隣から声がかげられた。

思わずひっ！と声を上げかけるが、直ぐにルイズが何か話しかけたのだと気がつく。

隣で一心不乱に外を見ていた彼女は、いつの間にか小柴勇魚の方を向いて心配げに小柴勇魚の顔を見つめていたのだった。

「……ごめん、ルイズちゃん。巻き込んだじゃって。あたし……」

言葉は最後まで続かない。

ルイズを巻き込んでしまったという想いと恐怖によって流れ始めた涙が、それ以上喋る事を許さなかったからだ。

そんな小柴勇魚にルイズは優しく彼女の手をとって、柔らかく笑いかけた。

「 \$ & …… % \$ 、 サイト 」

相変わらず何を言っているのか分からない。

しかし、その名前だけは聞き取れた。

そのクラスメイトの名前だけは。

『あ、あー。聞こえるか？』

すこし時間を遡り、小柴勇魚が連れ去られたあの路地。

ナイフを手にした三人の男に囲まれながら、才人は呑気にも右目に手を当て意識を左目の景色に集中させていた。

左目の視界は一緒に拉致された？ 彼のご主人様が暴れる視点を映し出している。

主犯であるらしい金髪の男の姿しか見えない所、どうやら車の中には運転者とコイツ、そして拐われた女の子しか居ないようだ。

とりあえず車内で乱暴される事はなさそうだとほっとしていると、顔を引つかかれた金髪の男がたまらず後部座席の方に

ルイズを突き飛ばしたようで、激しく動いていた景色が安定し金髪の男ごしに運転席が見えた。

視界の端に人影が映る事から、聞き覚えのある声を上げた女の子…  
…多分小柴勇魚も同じ最後尾のベンチシートに腰掛けていているようだ。

才人はそこでもう一度 ” 呼びかける ” 。

『おい、聞こえてたら返事くれ。頭の中で、俺を意識しながら強く  
念じればいいんだよ』

『 ころっ。』

『そ。よし、聞こえるな』

『ええ、聞こえるわ。コレ、どういう事なの？』

『 “ 使い魔と繋がる ” って奴だよ。ほれ、連れ込み宿で説明し  
たろ？

前に使い魔は感覚の共有ができる奴もいるってお前だって話して  
たじゃないか。

言葉なんかは召喚した時に自動で翻訳されて伝わるようになるよ  
うだけど、虚無の場合は心の結びつき次第で

視界や意識、感覚や記憶の共有できる度合いが変わるんだ』

『へー。使い魔と “ 繋がる ” ってこんなに便利だったんだ……』

『まあな。コントロールが難しいのが難点だけだ。

そんなことより、直ぐ迎えに行くからそのまま大人しくして待つ  
てくれ。ケガでもされちゃ敵わん』

『あによ、こんな奴、私一人でも』

左目の景色の上半分が暗くなる。

どうやら強く視界の先に映る金髪の男を睨みつけているらしい。

金髪の男はひっかかれた傷を気にしながら、ルイズを指差し何かを怒鳴っていた。

男の怒声は聞こえない。

聴覚の共有はまだできないようだ。

肌を重ねると全感覚の共有が可能になるんだがな、と才人は舌打ちしながらこちる。

それからぼつりと、くそ、こんな事ならやつときゃよかったか？とつぶやいた。

『落ち着けて。とにかくだな、そのままそこに座ってるよ？』

お前が暴れて車の制御取れなくなって、事故でも起こしたらどうすんだよ』

『 “瞬間移動” で脱出するわ』

『 ……お前、何のためにその車に乗り込んだんだよ。隣に座ってる子、小柴だろ？ あいつは魔法使えねえぞ』

『 むう。わ、わかったわよ、言ってみただけだし。でも、こいつが私やこの子に何かしようとしたら』

『 ああ、その時は構わんから痛めつけてやれ。ただ、やりすぎないようにな？』

『 はいな。なるべく早めに来なさいよ？ 一応ギリギリまで待ってあげるから』

『 了解。んじゃ、車の外を見ててくれないか？ お前が見た景色を頼りに追いかけるから』

『 ……はやく来てね。それと、いい加減目の前にいるそいつらをどうにかしてくれない？ ものすごく目障り』



才人はそう言われて、初めて自分の置かれている状況を思い出した。どうやら才人の左目に見えているはずの景色も、ルイズと共有していたらしい。

左目の景色に集中するべく、右目を塞いでいた手をどけると三人の男たちが変わらずナイフを構え立ち塞がっている。

今まで襲いかかって来なかったのは、先程才人の放った敵意にすくんだのか、それとも相手を刺すだけの覚悟が足りないためか。

才人は改めて三人に向き直り、口の端を引く。

暗い路地をその左手の甲は淡く照らし出した。

「悪り。放つたらかしにしてたな」

「ンだこらあ！ てめえ、ブっ殺してやる！」

「自分が何したかわかってんのかコラア！」

「しらねーよ。お前らがイケナイ事するのが悪いんだろ？」

「舐めてんのガー!!」

才人から向かって一番左端の男のセリフは、最後まで続かない。

棒立ちであった才人がいつ動いたのか、認識すらできないまま腹に才人の拳を受けて倒れ込んだからだ。

見た目よりも遥かに強烈な一撃を意識の外から腹に受けた男は、先に地面に転がっていた男達のうめき声に混じって

激しくもがき苦しみながら嘔吐を繰り返した。

血と吐瀉物のすえた臭いが暗い路地に立ち込めてゆく。

「張り倒す前に言っとくぞ？」  
「これに懲りたら二度と悪さすんな」

「い、殺してやる！」

「うわ、うわあ！」

残る二人の男の内、背の低い方が半ば錯乱しながらナイフを才人に向けて振り回す。

袈裟に斬りつけ、体ごと突進し、逆袈裟に斬り上げる。

一見どれも素早く鋭いその攻撃は、才人にとってどれも避けやすい単調な動きそのものだった。

男の攻撃を二度三度と余裕をもって避けた後、タイミングを合わせてナイフを斬りつけてくる男の手首を掴み思い切り”握る”。

ボグン、と妙な音がして男の腕は、才人の何かを掴んでいるとは思えないほど小さくなった握り拳を境にだらんと力なく垂れた。

男が持っていたナイフが地に落ち、ちやり、と路地に金属音が僅かに反響する。

同時に獣のような絶叫が路地に響いた。

僅かとはいえ、ルーンによって引き出される”グリムニルの槍”

の体が発揮する力は、人の領域を遥かに超える。

今の才人にとって人体の一部を握り潰す事など、土くれを握り締めるように容易い事だった。

なにより、才人自身が認識しているのかは不明であったが、暴力を敵に振るう事への禁忌は皮肉にも残酷な野獣のような男たちよりも

” お人好し ” と揶揄される才人の方が持ち合わせが少ない事実こそ、彼らにとっては不幸な事だと言える。

長いハルケギニアでの戦いは間違いなく平賀才人を、日本の普通の冴えない高校生から命を奪い合う戦士へと変えていた。

そんな彼にとって、目の前の修羅場はギーシュとの模擬戦以下であるのかもしれない。

腕を粉碎され地に倒れてゴロゴロと転がりながら絶叫する男に向かって、才人は呆れたような、すこし困った声をかけた。

「うわ、そんなにピーピー騒ぐなよ。ちぎった訳じゃないんだしさ  
あ」

「あああああああああああああああああああ！！」

「ひ、て、テメえ、一体……」

「警察が来ると厄介だし、さっさと終わらせようぜ？ こっちも時間かねえしさ」

「く、くるな！」

最後に残った男は半ば錯乱しながら、自分と才人のある空間を斬りつけながら前進を始める。

無闇に振るわれるナイフの軌道は、何処かから届く僅かな明かりをたまに反射し路地の闇の中に白い筋を光らせた。

しかし。

無数の刃の筋はただの一筋も才人の体に届く事はない。

「わ、っと。そんなちっちゃいナイフを振り回すとかバカか？ お前ら。もっとこう って教えてやることもねーか。」

まあしょうがないよなあ。段平振り回す日常の方がどうかしてるもん、普通」

修羅場に相応しくない程呑気に、そして器用にナイフを避けながら肩を落とす才人とは対照的に

ただ一人残る男は半狂乱でひたすらナイフを振り回す。

この時男は恐怖の為に、逃げるといふ選択肢を思い浮かばない程我を見失っていた。

「くそ！ くそ！ 一体、どうなってるんだよ！」

「なあ。一応聞くんだけどさ、あの人攫いが何処に行ったか教えれば、お前にはなんもしないぜ？」

あれほど激しく腕を振るっていた男の動きが、ピタリと止まる。

それから才人の顔を意外そうに見つめて、肩で息をしながら男は一歩下がった。

足元からは仲間の呻き声が沸き上がってくるようで、気がつけば腕を握りつぶされた仲間の絶叫も止まっている。

男にはわずかに見えた、この得体の知れない地獄からの脱出口に飛びつくだけの理性が残っていたらしい。

「ほ、本当か？」

「時間がねえって言ったろ？ 早く言えよ」

「工場だ！ 郊外にある、工事現場の！ 市長が不正したとかいうアレだ！」

「あ、そいやそんな所もあつたっけ。そこなら知ってるけど……結構距離あるなあ。」

「これでいいだろ？！ な？！ 見逃してくれ！」

「ちと待ってる。確認するから」

才人はそう言って、再び右目を手で塞ぐ。

数瞬の間を置いてその手を降ろし、無邪気に破顔した。

男も恐怖にひきつりながらも、つられて笑った。

一拍おいて、その笑い顔に才人の手のひらが猛烈な勢いで押し当てられる。

悲鳴を上げる間もなく、男はそのまま路地の壁に顔面を叩きつけられ、才人がその手を離すとずりりと壁に赤いペイントを施しながら男は倒れた。

「すまん、いちお聞いたんだが、『容赦しちやだめ！ 何考えてんのよ！』ってご主人に怒られてなあ。

約束破るつもりはなかったんだけど……あいつ、怒るとすっげえ怖いんだ。ごめんな？」



ゆっくりと地に倒れ、細かく痙攣する男に才人はすこし申し訳なさそうに声をかける。

その様子はほんの少しの焦りはあるものの、どこか茫洋としていて剣呑な雰囲気はない。

さて、と。

急がないとな。

ビルの屋上伝いに ” 跳べ ” ば大分時間を短縮できるはずだ。

ルーの時とは違って、今度はご主人の危機だしな、一応。

ルーンの支援も強いはずだから、多分あの時よりもかなり早く移動できるはずだ。

才人が暗い路地から空を見上げると同時に、通報をうけた警官が数名路地に踊りこんで来た。

だがしかし。

そこに平賀才人の姿は既に無かった。

「降りろ」

やっと車が止まり、金髪の男がそう言いながら車の扉を開いた。

小柴勇魚はスライド式のドアが開く音に、とうとうこの時がきてしまったのだと実感して恐怖を膨らませる。

もはや暴れても騒いでも無意味だろう。

目の前の男がその気になれば、この場で自分を陵辱することができる。

素直に言う事を聞くようになるまで、何度でもだ。

その事実は小柴勇魚をとりあえずは従順にさせた。

よると半ば自失しながら小柴勇魚は力なく立ち上がり、言葉が理解できないであろう隣に座るルイズに握られていた手をそのまま引く。

金髪の男ことシゲルはそんな小柴勇魚の様子をニヤつきながら、舐め回すように確認すると先に車外へ降りていった。

シゲルの指示通りに車の外へ出ると、そこにはあの路地で見たとような品の無さそうな、複数の男たちが自分達を待ち受けていた。

シゲルを含め、全部で五人。

一人は車の運転手で、シゲルと同じくらいの年齢か。

茶髪に染めた髪が長く、鼻や唇に取り付けられたピアスが目を引いた。

シゲルはというと、なにやら一際異彩を放つ男にへつらうように頭を下げている。

男の体格は大きい。

身長が百八十センチメートルはある。

髪型はオールバックにっていて、年は三十代くらいか。

媚びるように頭を下げているシゲルに対して、威厳たっぷりポケ

ツトに両手を突っ込んで何かを問い詰めていた。

大きめのブラウンのサングラスをしたその男は、一目でこの場にいる誰よりも ” アブナイ ” 存在だと小柴勇魚にはわかった。

男の後ろには舎弟らしき若い二十代位の男が二人、直立不動で立っている。

こちらの二人も短く髪を刈り上げ、なかなかの体格だ。

ただ、共通して服装のセンスは絶望的に悪い。

黒いスーツの男は紫のカッターシャツにピンクのネクタイを締めて、その胸には小さな金バッジが光っている。

後ろの二人の舎弟も、シネマに出てきそうなアロハシャツに金ネックレス、白いスーツのズボンといかにもな格好だ。

シャツの色こそ違ったが、二人とも同じ格好をしている所を見ると案外ユニフォームなのかもしれない。

小柴勇魚は車から降りて男たちの風体の次に、辺りを見渡した。

まず視界に大きな建物が飛び込んでくる。

前の市長の汚職に伴ない中止された工場の建設現場に連れてこられた事は察していたが、目の前の大きな建物は明らかに工場ではない。

恐らくは事務所か寮として使われる予定の建物なのだろう。

車はその建物の近くに止められており、遠くに工場本体の影が見える以外は他になにも見当たらず

夜目にわかるほどひたすら広大な更地が広がっていた。

これ程広いと隙を見て走って逃げ出せても、余裕を持って車で追いかけてられてしまう。

更に、自分たちが乗ってきた車の近くにはもう一台、恐らくは三人のヤクザが乗ってきたであろう黒い高級そうなセダンが停めてあった。

運転は出来ないが、万に一つ……いや、憶に一つ車のキーを入手して逃げる事ができても、きつとすぐに追い掛けてくるだろう。

冷静に周囲を観察する行動とは裏腹に、恐怖と嫌悪で強く混乱する小柴勇魚はルイズと繋いでいた手を知らず強く握った。

そして握った小さな手からは、わずかに握り返される感触が帰ってきたのだった。

「しかし、シゲル。二人だなんて聞いてねえぞ？」

本当に大丈夫なんだろうな？ ポリに通報されるようなヘマしてたら承知しねえぞ？」

先程からオールバックの男が車から降りた二人をサングラス越しにちらと見て、シゲルにすこし険のある声で確認している。

一瞬目があつた小柴勇魚は、肩をピクリとさせた。

その、獲物を見るかのような視線は恐怖よりも嫌悪が先に立つ。

「はい、問題ないです。追って、残してきた連中も邪魔に入った奴ボコにしてここへ来ます。」

それに、もし警察に話が伝わっても白瀬さんや六産会の兄さん方には迷惑がかからないよう手配してますんで」

「つたりめえだ。いいか、シゲル。もし表にバレた時はお前らがケツ持つんだぜ？」

後の面倒はちゃんとしてやるんだからよ」

「はい。よろしくお願いします！」

「ふん、お前はいつも態度だけは一人前だな。……おい、ねえちゃん」

白瀬と呼ばれたヤクザの兄貴分が、シゲルとの会話から急に小柴勇魚とルイズの方へ呼びかけた。

それから半歩下がり顎を目の前の建物の方へ突き出す。

その動きに同調するように手下と思われる男たちと運転手が、彼女たちの為に建物への道を開けた。

「小柴、早く行け。いいか？ これはゲームだ」

「げ、ゲーム？」

シゲルが先程まで白瀬に見せていた態度を豹変させ、肩を揺らし小柴勇魚に近寄りながら言った。

顔を近づけ、馴れ馴れしく怯え震えるその肩を抱き、齒をむいて笑



う。

恐怖のため瞬きも出来ぬほど目を大きく剥いて、小柴勇魚はシゲルと視線を合わせる事しかできなかった。

そんな彼女の様子を見て持ち前の嗜虐心が刺激されたのか、シゲルはニタリと笑い楽しそうに言葉を続ける。

「ああ、ゲームだ。お前らはこれからあの建物に逃げ込め。

いいか？ 十分程したらそこにいる ”お客様” がお前らを探しに中に入る。

見つかったら……わかるな？ その後は三泊四日かけて俺らでD  
VDの撮影会だ。勿論主演はお前。

ただし、朝まで逃げおおせたら開放してやる。理解したか？」

「あんた、こんな事して……あとで警察に訴えてやる！

そのこのヤクザの名前も、組の名前も聞いてたからね！」

体中の勇気を拾い集め、僅かな望みをかけて小柴勇魚は去勢を張って見せた。

目の前のチンピラは笑いながらそんな悲壮な反撃に肩を軽く竦ませ  
て、すぐ側にある小柴勇魚の耳に小声で囁く。

「小柴あ、そりや無理だ。そんな事してみる、沈められるか、埋め  
られるかの二択だぞ？」

お前だけじゃねえ、家族もだ。

それにな、”今まで”の奴らも最初はそう言っていたんだが、  
結局皆クスリ漬けでとあるエツチなお店で働く羽目になったぞ」

「なっ」

「ひひ、いいねえ、その顔。もうたまんない」

「この、人でなし！」

「そんな事よりさあ、逃げなくていいのか？ あと八分しか残って  
ないぞ？」

あ、もしかして野外が好きなのかなあ？」

シゲルはキヒ、と笑いながら小柴勇魚の肩に回した手とは反対側の手を差し出した。

その手の中にストップウォッチが握られており、デジタルの数字が二分を過ぎて尚目まぐるしくカウントを増やしているのが見える。

小柴勇魚ははつと息を飲み、次の瞬間には脱兎の如く建物の中へと駆け出していた。

ゲームは、既に始まっていた。

「こっち！ はやく！ ルイズちゃん！」

彼女と手を繋いでいたルイズは、急に走り出したその意図を理解できず腕を引かれながら思わずよろめく。

そんなどこか呑気なルイズに小柴勇魚はすこしイラつきながらも、グイグイと引つ張り建物の中へと駆け込んだ。

ルイズは小柴勇魚に半分引き摺られながら建物に入る直前、ふと空

を見上げる。

夜空には昨夜と同じように美しい白い月が一つだけ輝いていた。

彼女は車から降りた時からずっと ” 瞑っていた右目 ” を開け、  
そして人知れず故郷の月を思い出す。

それから、再び右目を瞑るのだった。

こうして小柴勇魚の ” 忘れた夜 ” が始まった。

走る。

兎に角奥へ。

走る。

音を立てないように。

走る。

右手で引く、巻き込んでしまった唯一の仲間を連れて。

走る。

恐怖から逃げる為に。

走る。

自身の、そして右手につかむ小さな手の主の、貞操を守るために。

走る。

絶望に追い付かれないために。

走る。

残酷な現実を、忘れるために。

建物の中は建設途中とは思えないほど内装までしっかりと施工されていた。

どうやら山奥の立地という事でか、工場よりも寮を先に完成させていたらしい。

小柴勇魚は、人形のように綺麗なマジシャンの少女の腕を引きながら、必死でその建物の中を逃げていた。

一階は論外。

窓から外に出られるかとも思ったものの、防火の為に金網が窓硝子に埋め込まれている上、鍵がすべて解錠できなくなっていた。

所々で誰かが割ろうとしたのか、ヒビが入っている窓もあったがどう見ても破れそうにない。

勝手口も鍵がかかっており開かない。

二階。

食堂や浴室がある一階とは違い、小部屋が多く並んでいる。

どこかの部屋に隠れてもすぐに見つかってしまつたろう。

ベランダから飛び降りられるかも、と思ったがすべての部屋の掃き出し窓の鍵も、解錠できないようになっていた。

建物の両端にある階段の片方には非常用出入口もあつたが、やはり鍵が開かない。

三階。

二階に同じ。

ただ、ベランダへは出る事ができた。

しかし流石に飛び降りる事が出来そうにない高さだ。

下を覗くと自分たちが乗ってきた黒いバンと、白瀬たちが乗ってきたであろうセダンが見える。

玄関の辺りではシゲルらしい人影が懐中電灯を片手につろついでいて、白瀬たちの姿は見えなかった。

どうやら白瀬たちが ”ゲーム” を楽しんでいる間、シゲルとあの運転手が建物の周りを固めて

万一 ”獲物” が外へ逃げ出してもすぐに捕まえられるように警

戒しているようだ。

小柴勇魚は焦った。

建物に入ってまだ、五分も経っていないはず。

しかし白瀬たちの姿が見えないということは……

急にゾクリと背中に寒気を感じて、急いでルイズの手を引き踵を返す。

四階。

ここが、最上階のようだ。

寮という建物の用途上、二階や三階と間取りは変わらない。

非常用出入口も開かないし、ベランダには出られるものの当然飛び降りられる高さではない。

映画のように、雨水を排水する縦樋をつたって降りることも考えたが、肝心の樋が取り付けられてはいなかった。

まずい。

隠れる場所が、無い。

当然と言えば当然だけれど、武器になりそうな物すらない。

気ばかりが焦る。

「時間だあ！ 今から行くからなあ！ 精々逃げ惑って楽しませろお！」

廊下の奥から聞いたことのない声が聞こえてきた。

白瀬の舎弟のどちらかだろう。

それからすぐに、扉をあける音と、歩く靴の音がけたたましく響いてくる。

とうとう、この時が来てしまった！

策は……無い。

階段が二つあるから、あいつらがやってくる方とは反対側を逃げれば……

小柴勇魚はルイズの手を引いて、急いで今までいた部屋から近い階段まで足音を立てないように移動した。

踊り場で耳を澄ますと、誰かが階段を登って来る音が聞こえる。



よし、反対側に回って、降りていけば鉢合わせないわ！

そう思いつつ足音に気を付けながら、反対側の階段に移動した時だった。

彼女は愕然とした。

そちら側の階段からも足音が聞こえてきたからだ。

少し考えれば分かる事だったが、白瀬達は二手に分かれていた。

小柴勇魚には知る由もないが、白瀬は一階を調べた後舎弟を二手に分け二階に上がりそれぞれを階段の所で待機させ

自らそのフロアの部屋をすべて入念にゆっくりと調べた後、上の階に登るといふ作業を繰り返していたのだった。

そう。

哀れな生贄には、助かる道などはじめから用意されてはいなかったのだ。

まずい。

このままではまずい。

どうしよう。

どうしよう、どうしよう、どうしよう、一体、どうしたらいいのよー！

焦りと近付いて来る足音が大きくなっていく。

すぐ下のフロアからはドアを開ける音が聞こえ、代わりに階段を登ってくる足音は止まっている。

バタン、ガチャ。

ガチャ、バタン！

ガチャガチャ、バタン！

ドアを開け閉めする音を、小柴勇魚はこれ程恐怖に思ったことなど無いだろう。

彼女は恐怖のあまり、ベランダから空を飛んで逃げる事ができたら！ と現実逃避をしながらも当てもなく辺りを見渡す。

後ろを向いた時にルイズの左目と視線がぶつかり、それから非常用階段のドアごしに更に上へと伸びる階段の手摺が目に飛び込んできた。

恐らくは屋上へと続く階段なのだろう。

そうだ！

屋上！

それと、あの浮遊のマジック！

タネがあるかどうかはわからないけれど、もしかしたら下に無事降りられるかもしれない！

屋上から外で見張っているシゲル達の位置を確認して、見つからないように降りればきっと逃げ出す事ができる！

現実味のない光明は、それでも僅かに彼女を照らした。

小柴勇魚は急いで廊下の突き当たりに位置する、非常用階段のドアへと飛びつく。

しかし他のフロアの非常用出入口と同じく鍵が掛かっっていて、そのドアもびくともしなかった。

焦る気持ちを隠す余裕もなく、小柴勇魚はガチャガチャと乱暴にドアノブを回す。

当然、開かない。

何か！

何か、この鍵を壊せるようなもの！

そう考えながら無意味にあちこちをキョロキョロと見渡す。

廊下。

消化器一つ置いてはいない。

ずらりと並び、部屋の入り口。

駄目だ。

さっき見たけれど、使えそうなものは何もありませんでした。

部屋の入口を廊下で挟んでずらりと並ぶ窓へと視線を移し、やがて自分の側でその窓からじっと外を眺めているルイズの姿が目に入った。

その表情は緊張感の欠片もない。

いや、むしろ、どこか嬉しそうでもある。

月光が窓から差し込み、彼女の淡いピンクブロンドの髪を輝かせ小柴勇魚は一瞬だがその横顔に目を奪われてしまった。

つて、見とれてる場合じゃないでしょ、あたし！

焦りと恐怖によってすぐに己を取り戻した小柴勇魚は、ルイズの視線の先を確認する。

そこにはまだ建設途中である、工場本体の建物が見えた。

寮よりも背の低いその建物は、広い敷地内で丁度二百メートル程離れた場所に建っていた。

鋼板で葺いた屋根が月の光を浴びて白く僅かに輝いている。

窓から見える月とその工場の屋根はどこか幻想的で、確かに綺麗ではあった。

こんな時でなければ小柴勇魚も一緒に眺めていたかもしれない。

しかし、美しい景色に見入っていられる状況ではない今、小柴勇魚はそんなルイズに苛立を覚えた。

もう！ こんな時に、あんな物に見とれてるなんて、この子状況がわかっていいのかしら？！

とにかく！

今はこの非常口を開けて屋上へ……

あ！

そっか！

ここ、開ける事ができたならそのまま外へ……

いや、いやいや。

きつとこういった非常階段はシゲルがしっかり見張ってるに違いない。

やっぱり屋上に出て、ルイズちゃんのマジックで……

！ そつよ！

タネはわかんないけど、どうせ”浮いて”降りるなら、ベランダから屋上にも上がるのもいいじゃない！

あ、うっん！

それならこの、廊下の窓からでもいますぐ屋上へ浮くことも下に降りる事もできるわ！

「ルイズちゃん！ 聞いて！ あなたの浮遊マジックが今必要なの！  
お願い！ この窓からそれ使って逃げたいから手をかしてくれな  
い！？」

小柴勇魚はすこし微笑みながら外を見るルイズの肩を両手で掴み、  
激しく揺らしながら訴えた。

ガクンガクンと頭を揺らされ、ルイズははっと我に返る。

しかし、その返事は……

「 % &メ々? 」

「浮遊マジックよ、わかる?! ふ、ゆ、う、マジック!」

「\$ &」

「あああ! もう! こうよ、こう! ふわーり、ふわーりって!」

小柴勇魚は必死に説明するも、日本語が理解できないルイズには伝わらない。

仕方なくジェスチャーで浮遊マジックを使うよう説明を試みるが、当のルイズは右目を瞑ってキョトンとするばかりだ。

「だああ、もう! 何?! 目にゴミが入ったの?! それともウインク?! もう、いい加減にしてよ!」

「驚いたな。隠れもせず、こんなに大騒ぎして。お前、バカか? 俺はバカは好きじゃないんだがな」

焦りのあまり、ルイズに八つ当たり気味に声を荒らげていた小柴勇魚は、突然割り込んできた男の声にビクリと肩を跳ね上げた。

それから、ゆっくりとルイズから視線を上げて声のした方を見る。

月光が差し込む長い廊下の先、今いる階段の近くとは反対側の階段がある方角から、いつの間にかこのフロアへ上がっていたのか

白瀬がズボンのポケットに手をつ込み立っていた。

その後ろには舎弟らしい男の姿も見える。

反射的にすぐ近くの階段へと足が出かけるも、もう一人の舎弟の男が昇ってくる姿が見え、前進するはずの足はゆっくりと後退りになった。

心臓がうるさい。

目の奥が、熱くなる。

息が……できない。



「い、いや……」

意図せず、言葉が出た。

背中が非常階段へのドアにぶつかり、思わず振り返り無駄とわかっていてもドアノブに手をかけて力を込める。

当然、開きはしない。

もう一度後ろを見る。

すぐ近くの階段を登ってきていた男は、途中で立ち止まっていた。

白瀬の楽しみを奪わぬよう、配慮しているのだろう。

当の白瀬は先程の位置から丁度半分ほどこちらとの距離を縮めて、尚ゆっくりと近寄ってくる所だった。

心臓が口から飛び出てきそうなほど跳ねる。

今度は非常用のドアに体当たりを試してみた。

当然、ビクともしない。

ドアノブを回す。

当然、開かない。

もう、だめだ。

小柴勇魚はとうとう、全身を絶望に染め上げ、力なくその場に座り込んだ。

そう。

ホントは、最初から、どうしようも無いってわかってた。

夜明けまで逃げ切れれば、なんて話もウソ。わかってた。

タネも仕掛けも準備できないのに、屋上やベランダからルイズちゃんマジックで脱出できるわけなんてない。

そう、信じたかっただけ。

希望が何処かに、救いが何処かに、あるって信じたかっただけ。

ただ、逃げてたんだ。

両親の不和から逃げて、いつの間にかこんな事になってしまった。

小柴勇魚の目から、涙がこぼれ落ちる。

後悔、絶望、後悔、絶望、後悔、絶望。

「なんだ、お前。そんな棒きれで何が出来ると思ってんだ？」

すぐ近くで、そんな声がした。

あらゆるネガティブな感情で渦巻く頭を上げて、涙が流れるままにその光景を見た。

小さな背中が、自分を守るように白瀬の姿を遮っている。

黒いマント、背に流れるピンク色のブロンド。

月光がそこへ差し込み、キラキラと光っているようにも見えた。

ルイズだ。

あの、巻き込んでしまった自分よりも小さな美少女が、自分を守るかのように男たちの前に立ちはだかっていたのだ。

声は、すこしトゲトゲしくも静かで落ち着いている。

「ああん？ お前、日本語もわかんねーのか？」

「# \$ ¥ % &」

「何言っているのかわからねえが、いいぜ。お前から滅茶苦茶にしてやるぞ。」

たまには ” 洋モノの口リ ” も悪かねえ「

くっく、と白瀬が好色に笑う声。

その顔はルイズの背によって小柴勇魚からは見えなかった。

もちろん、この時彼女に背を向けるルイズの顔も。

この時、それまで瞑っていた右目を開けていたこともだ。

一步、白瀬が足を前に出す。

あと五メートル程歩けば ” ゲーム ” はクリアだ。

その後はボーナスとして、お楽しみの時間がまっている。

恐怖に震える獲物を追い詰める瞬間は、すばらしいスパイスだ。

ただ陵辱するよりも、より自分に興奮と快楽を与えてくれる。

白瀬は舌なめずりをしながら、もう一步足を踏み出した。

股間はもう、はち切れんばかりに充血している。

さあ、お楽しみの時間はすぐそこだ。

この瞬間があるからこそ、この遊びは辞められない。

そして、もう一步。

その足は出なかった。

目の前の、哀れな獲物の様子がおかしい事に気がついたからだ。

あるうことか、目の前の獲物は……

「 ¥ # @、 \$ ¥ % &。  
\* % ¥ 。 #、 S A I T O」

笑っていた。

可憐に、柔らかく、どこか嬉しげに。

月光を受け笑うその姿は、まるで教会に描かれた聖母のようだ。

その言葉はこの場にいるすべての者にとって、何を言っているのか理解できない。

ただ、最後に口にした単語は、彼女の後ろにいた小柴勇魚にだけは理解できるものだった。

その単語を、もう一度ルイズは口にする。

片方の口の端をつり上げ、小さな体で胸を張り、腕組みをして誇らしげに。

『まったく、ちょっと走った位で休憩させてくれだなんて。』

もつそろそろ助けてくれてもいいんじゃない？　ねえ、サイト』

次の瞬間、ルイズと白瀬の間にあった廊下の壁が轟音を上げて爆砕した。

ビリビリと耳に空気が猛烈に震える音がして、小柴勇魚は思わず大声で悲鳴を上げていた。

いや、ルイズを除いてその場にいたすべての者が、その爆音と衝撃に何かしらの声を上げた。

まるで地震が起きたかのように建物は揺れ、辺り一面に粉塵と内装用の壁材やガラスの破片が飛び散る。

腕組みをして不敵に仁王立ちを続けるルイズを除き、皆思わず咳き込みながら粉塵が晴れるのを待っている

やがて全員が何が起きたか理解するに及んだ。

廊下の、建物の外側に一人一人がすっぽりと収まるかのような、大きな穴が開いていたのだ。

いや、大穴を開けたナニカはそれだけでなく、廊下の反対側、その先にある部屋を貫いて再び建物の外へと突き抜けていったらしい。

隕石でも偶然落下してきたにしてはナニカが貫いたその軌道は、水

平に近かった。

否。

よく見ると水平ではなく、僅かに角度がついて下から上に向かって建物を貫いているように見える。

「な、ななな、なんだ?! 一体何が?!」

「兄貴! ケガは?!」

白瀬は轟音に驚いて思わず尻餅をつき、後ろにいた舎弟に助け起こされながら、両脇に大穴が開いた廊下の向こうを見た。

そしてそこに、更なる異変がある事に気がつく。

獲物の数が、増えている。

まだ少しだけ舞っている粉塵の向こうに、新たな人影を確認したのだ。



「白瀬さん！今の音は一体……」

「シゲルか？！俺にも、何がなにやら……」

轟音を聞いて、シゲルと運転手の男も何事かこのフロアまで上がってきたらしい。

それからシゲルが、再び立ち上がる白瀬の長身の後ろで、その異変に思わず声をあげるのだった。

「あ！て、てめえは！」

「よう、人拐い。俺のご主人様と小柴を返して貰いに来たぜ」

「一体、どうやってここに！車は俺たち以外、ここには一台も近

寄りすらしてなかったぞ！」

異変の主……才人は、ルイズと小柴勇魚の前に立って、ニヤリと齒を剥く。

その表情からは、想像もつかない程強大な敵意と共に。

白瀬はその姿を見て、得体の知れない恐怖を感じた。

「なんてことはねえよ。あいつらからこの場所聞いて、”景色を頼りに走って来ただけさ」

「っざけてんのかデメエ！」

「ま、信じちゃくれねえんだろっとな……っど！」

言い終わらぬ内に、才人は何気なく何かを払うように腕を振るった。パキン、と音がしてから続いてちやりちやりん、と金属のようなものが床に転がり、才人が開けた穴から外へ落ちていく。

才人の隣で、呆然とする白瀬の舎弟。

一番近い位置にいたこの男は、才人の姿を見るや ” 危険な敵 ” と瞬時に判断し、隙を見て懐のドスを抜き死角から襲いかかったのだった。

中々の修羅場を潜ってきていたのだろう。

躊躇なく刃物を抜き攻撃を仕掛けてくるあたり、かなりの ” 実戦 ” を経験しているようだった。

もっとも、その刃は才人に届く前に落としてしまったのだが。

男は両手で強く握っていたはずのドスを、あまりにもあっさりと落としてしまった事に驚愕し

次にドスを握っていた両手がありえない方向に曲がっている事を確認して、何が起きたかを理解する。

そして、絶叫。

何かにすぎるような、恥も体面もない声をあげつつ膝を折る男を、才人は当たり前のようにその腹を蹴り上げた。

まるで、人形のように男は宙に浮き、悲鳴が階段の下へと流れて消

え、それから直ぐに建物は静寂を取り戻した。

「まったく。あぶねーもん出すんじゃないやねえよ。ただでさえ加減が難しいってのに……」

白瀬は得体の知れない恐怖の正体に気がつき、全身で冷や汗を吹き出しながら歯を食いしばった。

こいつは、やばい。

いや、やばいなんてもんじゃねえ！

殺される。

ここにいたら、間違いなくあいつに殺される！

くそ、そもそも、一体何がおきたんだ！

どうやって、あいつがあそこに立っている事になったのかわからねえ。

どこからここに入ってきたんだ？

外はシゲルどもが見張っていたはずだ。

階段も廊下も、俺らがいた。

もしかして、あの穴から入ってきたのか？

馬鹿な！

一体、どうすればこんな高い位置の壁に大穴を……いや、建物そのものに大穴を開けられるんだ？！

ダイナマイト？

んな馬鹿な！

いやいや、そんなことはどうだっていい！

問題はさっきの、あの動きだ。

まるで、マネキンを蹴飛ばすように蹴りやがった。

そつだ。

あいつはあっさりと腕の骨を折っただけでなく、危ねえってわかって、階段の下へ大の大人を蹴り飛ばしやがったんだ！

格闘家のように、気合一閃で腕を折ったんじゃねえ。

喧嘩慣れしたチンピラが、いたぶるように腕の折れた奴を階段から

蹴り落としたわけでもねえ。

たまにいる、本当のクズがやらかす様な暴力でもねえ。

あいつは、タバコに火をつけるように ” 当たり前 ” やったんだ！

俺だって、それなりに修羅場をくぐってきたつもりだ。

チャカ（拳銃）向けられた事なんて一度や二度じゃねえ。

だから、よくわかる。

” あいつ ” は極め付きだ。

あいつは、とにかくヤバイ。

暴力を、暴力と感じちゃいねえんだ！

力に対する価値観が、決定的に俺らとは違う！

俺ら（ヤクザ）が絶対に手を出しちゃならねえ類の人間だ！

滝のように冷や汗をかく白瀬の脳裏に、逃げろ、早く逃げろと内なる声かけたたましく叫ぶ。

しかし、その足は動かない。

いや、動いてはいるのだが旋回も、前進も、後退もできなかった。

なぜならば……

「  
# \$ ¥?」

「逃げられると思うなよ、だそうだ」

白瀬の体は、いつの間にかフロアの床からわずか十センチメートル程だが浮いていたのだ。

バタバタと空中でもがくものの、その場から一步も動くことができない。

才人はそんな白瀬の元に、ゆっくりと近寄った。

先程白瀬がルイズと小柴勇魚にしたように。

「く、くるなあ！ 何をしている、ヨシオ、シゲル！ 早くこいつ

を……」

「ひ、ひい！」

「た、助けてくれえ！」

「化物！」

白瀬の命令は、もう一人の舎弟と運転手、そしてシゲルには届かない。

三人は一斉に踵を返して、脱兎の如く逃げてゆく。

才人はそんな三つの背中を見送り、ぷかぷかと浮いている白瀬を引っ張りながらルイズ達のもとへ戻った。

「\$¥%?。」



「いんや。メンドくさくなつたしな、”上” からまとめてお仕置きするんだ。」

悪いけど、もうちつとこいつを拘束しといてくれるか？

……小柴、立てるか？ 悪い、遅れたな。だけど、危ねー事するお前も悪いんだぞ」

「え、ひ、平賀？ あんた、本当に……」

「一応、平賀才人さ。学校に通っている平賀才人とは別人だけど」

才人はそう言って、いつもルイズにするように笑い小柴勇魚の手をとり立たせた。

力強く引つ張りあげられた小柴勇魚は、勢い余って才人の胸に体を預けてしまう。

あ、と彼女はルイズと同時に声を上げるも、才人は何事も無かったかのように小柴の肩をつかんでしっかりと立たせ

彼女の背後にある非常口のドアを蹴り飛ばした。

ガン、と音をたててドアは派手に外へ吹き飛び、屋上に続く階段へ才人は進む。

そして小柴勇魚に振り向き、屈託のない笑顔で平賀才人は言ったのだった。

「ついてこいよ。スカっとするもん見せてやる」

小柴勇魚は、才人のその表情を見て一瞬胸が跳ねた。

彼女は言われたまま、屋上へと足を運ぶ。

ルイズも白瀬を ”レビテーション” で拘束したまま、二人の後に続いた。

屋上になると、丁度下の方から車のエンジン音が聞こえてきた。

建物の入口側へ屋上を移動すると、あの黒いバンが猛スピードで敷地の外へと走ってゆくのが見える。

才人は走り去ろうとする車を睨みながら、おもむろにしゃがんで屋上の床に手をあてた。

その手の下からはボゴン！ と音がして、床から一・五メートル程の棒……いや、槍のようなものが現れるのを小柴勇魚は見た。

どこから出したのか、その槍を手に才人は車が走り去る方角へ投擲しよう狙いを定める。

そして才人はなんとなく、いつか感じたような気持ちを思い起こしながら呟いた。

「ファンタジー舐めんな」

轟と音を立て、槍は才人の手から勢い良く離れる。

小さな槍は暴風となり雷鳴を伴って黒いバンの方へと飛んでいった。

数瞬後。

竜をも屠るその槍は、車の前方の地に落ち、爆ぜた。

あの、建物に穴が開いた時のような音がして、月夜の下黒い大きな車が木の葉のようにクルクルと宙を舞う。

まるでCGのようなその光景は、小柴勇魚にとって幻想的でした。

やがて。

あれだけの重量物が地に落ちた割には、あっけない音が工事現場に響いた。

「はは、ザマあみる。な？ スカっとしたる？」

「え？ ええ、まあ。でも、さ、あんた一体……」

「話はあとだ。ルイズ！ おれ、連中をぶん縛ってくるから、ここ  
の入り口までそのおっさんと

さつき蹴り飛ばしたにーちゃんを連れて、降りててくれないか？」

「 ¥ #@\$ 」

「あ、そっか。そうだな、ちとまってれ」

ルイズとなにやら短いやり取りをした才人は、宙に浮きながら目の前の非現実的光景に言葉を失う白瀬に近寄る。

そして。

白瀬の股間を、勢い良く蹴り上げたのだった。

鈍い音とともに、白瀬は悲鳴も上げることができずに白目を剥いて失神してしまう。

「これでよしと。これで ”レベテーション” をかけ直せるだろ?。」

「 @\$ ……」

「さあ? 潰れたかどうかはわからねえよ。確認もしたくもないし。あ、小柴。帰りはこいつに車を運転させるから、殴るにしてもホドホドにな?。」

才人はそう言い残してそのまま屋上から飛び降りた。

ひっくり返った黒いバンの中から、男たちを回収するために最短距離を行くつもりらしい。

あまりに続く非現実的な光景を目の当たりにして我を失いかけている小柴勇魚に、ルイズは不機嫌に声をかけた。

なにしてるのよ。行くわよ。

言葉は分からないはずだったが、なぜかその時の小柴勇魚はルイズがそう言っていると理解できた。

それから、二時間後。

才人とルイズが最初に居た、あの繁華街に近い公園。

足元には大量の荷物を置いて、平賀才人とルイズは小柴勇魚と共に缶コーヒートを味わっていた。

珍しい事に、万年金欠病であるはずの小柴勇魚による驕りだ。

「しっかし、びっくりしたわ！ まさかルイズちゃんがあんな事までできるなんて！」

興奮気味に小柴勇魚は熱く、その感動を二人に語っている。

そんな彼女とは対象的に、ルイズと才人はうんざりとして露骨に嫌そうな顔でその話に付き合っていた。

結局、あの後悪党どもを一纏めに集めて、才人が適度に脅しながら余罪を吐かせてからルイズが一人一人に虚無魔法 ” 忘却 ” をかけ

才人やルイズの事が記憶に残らぬよう偽りの記憶を植え付けたのだった。

ただし、小柴勇魚には才人がルイズの催眠術だと説明してある。

偽りの記憶をヤクザやシゲルに植えつけるにあたり、地球の言葉が使えないルイズに代わって才人がその記憶を吹き込んだのだが……

「しかもさ！ あのストーリーを本当に信じこむなんてもう、傑作だったわ！

『白瀬、お前は勃起障害に陥って虚しくなり、今朝仏教に目覚めて改心したんだ。

今まで乱暴した女の子やクスリ漬けにした女の子に、心の底から謝罪しにいつて、全財産と全労力を使い彼女たちに償い

元通りの生活に少しでも近づけるよう、これからの人生すべてを掛けると誓ったんだぞ？

そして今夜、ヤクザから足を洗おうとしたら偶然手下が女の子を拐おうとしている所に出くわして、それを助けたんだ。

まず、通りの路地で五人のチンピラをボコボコにして、逃げたシゲルと手下を追いかけ、偶然もったダイナマイト片手に

見事女の子を助け出し、負傷してしまったタマタマも物ともせず、今から俺たちを街に送り届けるころなんだぞ？』

って、もうね、よくそんなに考えつくわねって思ったわけなのよ」

「いや、小柴、一から説明しなくても俺、知ってる話だし……その、あんま往来でこの事を話して欲しくないっていうか……」

「いいじゃない！ しっかし、ルイズちゃんすごいよね！ 他の連中にも辻褄合うように次々と催眠術かけるし！」

「# \$¥%？」

「お前のこと、すごいってね」

「いやあ、ルイズちゃんは絶対に売れるわよ！ だって、こんなに可愛いし、マジックも本物の魔法みたいだし！」

あたしもそんな凄いルイズちゃんの役に立ててよかったよ！」



「お前、この荷物を回収してきただけじゃねえか……」

「固い事言わないのっ！」

「わざわざ、警察が ” 暴行事件 ” の現場検証してる中、あのビルの屋上まで荷物取りに行ったんだから。」

「あ、それはそうとしてさ。」

「あんたがあ路地で張り倒した連中にも催眠術かけなくていいの？」

「必要ないだろ。もし俺の顔覚えていても、二度と近寄ってこれない位に十分傷めつけといたし」

「なんか、容赦ないことしたって何となくだけど想像つくわ……」

「つたりまえだろ？ 悪党には俺は容赦しないの。ま、あとはなるようになるさ。」

「ヤクザのおっさんも俺たちを送った後、警察に行って一緒にあの工事現場に引き返していたし。」

「被害に遭った他の子らはちょっと心配だけど、そこまで同情して何とかしてやるだけの余裕なんて俺にはないしさ」

「……案外ドライなんだね。」

「しかしあんたも大概よねえ。大体、ビルから飛び降りたり、荷物をあんな路地からビルの屋上に投げたりできるなんて」

「どんなビクリ人間なのよ。なんか、ダイナマイトみたいなのを」

マジックで作り出しちゃうし。

あれ、どこやったの?」

「企業秘密さ」

「ケチ! ……ま、喧嘩強いには助けられたけどさ」

小柴勇魚は、腕組みをして興味津々に才人の顔を見つめた。

路地でシゲルの仲間達を殴り倒した才人は、警察が喧嘩の現場を詳しく調べる事を恐れ、ビルの屋上に伝いにルイズの後を追う前に

予め山のように買っていた荷物を路地を作り出していたビルの屋上へ避難させていたのだった。

流石に荷物を持ってビルの外壁を駆け上がった、などとは小柴勇魚には説明できず、苦しくも屋上に投げたと説明しといて

後でコツソリと荷物を回収してもらった、という訳である。

もっとも、あれだけ派手に暴れた後ではその気遣いはまったくの無意味ではあったが。

案の定、小柴勇魚の熱い感動の語りは、才人の事になると俄然熱が

上がっていく。

言葉がわからないはずのルイズも、彼女が才人の話にさしかかるとやたら熱っぽくなっていると分かる程だ。

「でもさ、でもさ！　一番ビックリしたのは平賀、あんただよ！」

「そ、そうか？」

「あんだ、めっちゃ強いじゃない！　ほんと、すっごくカッコ良かったよ！」

「は、はは……」

才人はやりすぎた、と心の底で後悔しつつも照れ隠しにポリポリと頬を人差し指でかいた。

ルイズはそんなサイトを見て、不機嫌になりながらも無言で杖を取り出す。

そろそろ頃合だ。

小柴勇魚の記憶も消しておかないと、こちらのサイトにどんな影響があるかわかったものではない。

なにより、このまま放っておくとロクな事になりはしないと女の勘が働いていた。

「わ、わ！ 今度は何?! どんなマジックを見せてくれるの?!」

「\* #! サイト!」

「あ、ああ。わかった。じゃ、小柴。そついう事で」

「へ?」

「悪いけど、お前の記憶も消させてもらっちゃうかな?」

「は?」

「ここで俺達とはお別れって事さ」

「え？ え？ ちょ、ちょっとまっ」

抗議しようとする小柴勇魚に、にゅっと目の前に杖が突き出され、いつの間にかすぐ近くにルイズが居て

なにやらごによごによと呟いていた。

ま、まずい！ 本気だ！

小柴勇魚は、慌てて、咄嗟に本能の赴くままの行動に移る。

それはルイズの杖を取り上げるでもなく、その場から全力で走り去るわけでもなく。

そう、その行動は。

目を閉じながら才人に抱きついて、自分の唇を押し付けるようにキスをしたのだった。

才人は小柴勇魚の奇襲に為す術も無く、上唇を甘く彼女の唇でくわえられながら、ただ呆然と立ち尽くしその感触に戸惑う。

直後にルイズの虚無魔法、 ” 忘却 ” が完成した。

ばやける意識の中、小柴勇魚は久しぶりの恋をはっきりと認識して、消えゆくその想いを惜しんだ。

時刻は深夜一時。

彼女が忘れたこの夜、気がつくと佇んでいた公園には確かに珍妙な男女のカップルがいた。

その二人はなにやら姦しく喧嘩をしながらも、光る鏡のような門の中に消えていったような夢を、小柴勇魚はみた気がしたのだった。

ちなみに、後日。

その夜を境になぜかピタリと非行を辞めた小柴勇魚は。

無事毎日学校に通うようになり、とある冴えない男子に恋心を抱いてしまいひどく戸惑うのだった。

” 忘れた夜 ” を思い出せないまま。



5 - 1 : お休みが必要だと思っんです

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、  
伝説の系統魔法 ” 虚無 ” の担い手だ。

” 神の左手・ガンダールヴ ” と謳われ、あらゆる武器を操り、  
更に不死の体を持ち未来を知る強力無比な使い魔を従えるメイジで  
もある。

自身も、侵攻してきたアルビオン空中艦隊をたった一発の魔法で撃  
退できる程の力を秘めているメイジであった。

家柄も王族の血筋に連なる公爵家であり、トリステイン貴族に限れ  
ば恐らく、学院一身分が高い人物だ。



更に容姿も申し分なく、可憐なその外見は下級生には絶大な人気を誇りつつある。

更に更に、彼女が住む王国の支配者である女王陛下とも固い？ 友情と信頼で結ばれており、困難な極秘任務をこなすなどの実績も上げている。

表立っては魔法が使えない事になっているのだが、それを抜きにしても最近急に華麗になった彼女の生活は

他の生徒にとっては羨望の的であった。

そんな彼女が。

そんな、華麗で可憐で、実は伝説なメイジで、同じく伝説の使い魔でありしかも竜殺しの ”イーヴァルデイの勇者” を従えて

その上最近は恋人まで出来た、でも皆には内緒なのと行った具合で年頃の少女の妄想が現実になったかのような、幸せ一杯なはずの彼女が。

何かに怯えるような表情を浮かべて、夕日の差し込む自室の冷たい床にあるうことが正座をさせられていた。

彼女のすぐ隣ではメイジを圧倒し、古の竜を屠り、城一つ簡単に攻め滅ぼせるであろう凶悪な戦闘能力を持つ使い魔が

主人と同じように何かに怯えるような表情を浮かべて、肩を落としながら正座をさせられている。

恐らくはハルケギニア最強の一角と言っても差し支えないであろう二人は、共に同じ向きに正座をしながらせわしなく目を泳がせてその恐怖の対象を必死に視界から外そうと試みていた。

決して上を向くことのないその視線の先に、先程から三組の綺麗な足が見えている。

「さあて、じっくりと説明してもらおうかしら？」

「お仕置きは必要」

「そうですね！ サイトさん、わたし達に黙って一体いままで何処に行ってたんですか！」

足の主は、キュルケとタバサ、そしてシエスタであった。

小柴勇魚の奇襲のお陰だったのか、何度も”忘却”を使っていたルイズが連続して”世界扉”を唱えたにもかかわらず

今度は無事意識を保って光の門を維持することができ、魔法学院の寮に帰ってこれた二人であったのだが。

部屋に戻ってくるや、簡単に他の女に唇を許してしまった才人にルイズは激怒して、なによあれは！ と早速才人に詰め寄った。

才人に見れば青天の霹靂ではあったが、まるで怒りに我を忘れ暴走するイノシシのようになったルイズには当然言い訳など通じず直接的な制裁が行われていた所に、隣室にいたキュルケとタバサが騒ぎを聞きつけ部屋にやって来たのだ。

それからすぐに、”ルイズが極秘任務？ から学院に戻ったらしい”との噂が流れ、それを聞きつけたシエスタが

部屋に押しかけてきて説教の輪に加わったという訳である。

その間二人はずっと正座をさせられ、不在の間どれだけ心配したかキュルケにお説教をつけていたのだった。

一方、タバサはそれ程多くを口にしなかったが、一貫して「お仕置きは必要」と言っている所を見るとかなり怒っているようだ。

正座をしながら目を泳がせる二人は、決してタバサの顔を見ようとはしない。

無論、彼女が怖いからだ。

ある種、主人であるルイズにとってピンチであるらしく、才人の左目が先ほどからルイズと”繋がって”いる。

『なあ、ルイズ。タバサが超怖い』

『わたしもよ、サイト』

「ちょっとお、聞いているの？　ほんと、アンタたちが黙っていなくなるから焦ったのよ？」

「タバサなんてガリアに情報が漏れたかもしれないって、必死に行方を探っていたんだから」

「お仕置きは必要」

「サイトさん！　大体、その荷物はなんですか？！　もしかして二人で呑気に泊りがけで買い物にでも行つてたんですか？！」

「ビシ！　とシエスタが指さした先、テーブルの上には才人とルイズが地球からのおみやげとして持ち帰ったビニール袋の山があった。」

中身はコンビニなどで買い求めた飲み物や食品に、量販店で買った洋服、果てはシャンプーやリンスまでと様々な物が詰め込まれている。

そのどれもがハルケギニアでは決して手にはいらないものであり、ビニールの袋でさえこちらでは物珍しさから高値で売れるであろう品だ。

「いや、実はな？ 息抜きに、ちょっとルイズの魔法で俺の故郷に……」

「えー！ ずるい！ ずるいずるいずるい、ミス・ヴァリエール！ ずるいです！ わたしもサイトさんの故郷に行ってみたかった！」

「そうよ！ どうしてあたし達に一声かけてくれなかったの？！」

「いいじゃない、別に！ 大体、なんでアンタ達まで誘わないといけないのよ！」

「サイトだってね、たまにはご主人様とゆっくりお休みが欲しい時もあるわよ！」

それに、すぐに帰ってくるつもりだったんだから」

「お仕置きは必要」

「すぐにつて、泊まりがけのお出かけはすぐに帰ってくるとは言わないわよ？」

「そうですね！」

「お、落ち着けて！ それにはワケがあつてだな……」

「正座は崩しちゃダメ」

キュルケとシエスタに詰め寄られるルイズを庇おうと、才人が代わりに説明しようとしたところで

立ち上がるうとした彼の痺れる足をタバサはちよいと杖でつついた。

長時間正座をしていた才人の足の先から背中までに、なんとも耐え難い痺れが襲いかかる。

ぬぐあ！　と思わず悲鳴を上げ、才人が悶えた。

しかし、タバサの攻撃は止まない。

非情にも才人が正座の姿勢に戻るまで、その攻撃は続いたのだった。

『だ、大丈夫？ サイト』

『なん、とか、な。だが、今のでわかった事があるぞ』

『なにになに？』

『この姿勢で足が痺れたときはな、結局この姿勢を続けるのが一番  
しびれない』

『……不毛ね、それ』

「  
で？ ちょっとのお出かけがこんなに時間がかかったのはな  
んでよ？」

「あ、ああ。その、ルイズの精神力が原因だったんだ」

「原因？ ミス・ヴァリエールの精神に何か異常でもあったんですか？」

「やめてよ、その言い方！ それじゃ私、なんだか精神異常者みたいじゃない！」

「お仕置きは必要」

「まで！ 待つてくれタバサ！ 話を最後まで聞いてくれ！  
なあ、キュルケ。魔法つて精神力を溜め込んで使うものだろう？」

「ええ、そうね」

「ルイズの場合、その精神力を長期間に渡って蓄積しながら使うんだけど、それが無くなってさ。」

”世界扉” の虚無魔法が使えなくて、それで回復のために一泊したんだよ。」

「あら。私たちの場合は、ちょっと休めばすぐまた魔法が使えるの  
に？」

「そりゃ、スクウェアアスペルクラスになれば一ヶ月位期間をおかないとダメなものとかあるけど……」



「へえ。メイジの魔法って何でも出来そうなのに、意外と制約があるんですね」

「ええ、そうよ。お料理だって、三日間煮込むものとかあるでしょう？」

「あ、なるほど。その例えはわかりやすいです」

「まあ、そんな所だ。ちょっと休んで回復する程度の精神力じゃ”世界扉”は維持出来そうになくてな。」

「いや、まで！ タバサ、お仕置きはまだだ！」

「で、な？ 俺たちも無断で何処かに外泊したのは悪かったと思ってるからこうやってお土産をだな……」

才人はそう言って、後ろにあるテーブルの方を顎でくいと指し示した。

両手はきちんと正座をする膝の上に載せている。

これは別に深く反省しているわけではなく、少しでも大きな動きをするとあの地獄のような痺れが襲ってくるからだった。

「あら。そういう気が利く所は大好きよ、ダーリン。でもね？ お土産よりもっと簡単な話があるわ」

「な、なんだ？」

「あたし達もダーリンの故郷に連れて行ってくれればいいのよ。ねえ、ルイズ？」

「そうです！ お願いします、ミス・ヴァリエール！」

「……無理よ。ちよ、ちよっとまってタバサ！ お仕置きはまだ！  
まーだ！」

「どついう事よ？ あ、まさか……ダーリンの故郷をあなた、独り占めするつもりじゃないでしょうね？！」

「ずるい！ ミス・ヴァリエール、ずるいです！」

「そ、そんなことしないわよ！」

……簡単な話。 ”世界扉” を使ってサイトの故郷にはいつで

も行けるわ。

「ただ、私の精神力を大きく使うような虚無魔法は無駄遣いできないし、しないと決めたのよ。」

「少なくとも、タバサの件が片付くまではね」

そのルイズの言葉に、詰め寄っていたキュルケとシエスタは思わず口を噤んだ。

お仕置きをする為に杖を持っていたタバサも、その言葉を聞いて無言の怒気を和らげる。

「そういうことだ。俺も、どの虚無魔法が大きく精神力使うかまでは把握してなかったしな。」

「せいぜい、”エクスプロージョン（爆発）” がとんでもなく精神力が必要だって程度しか知らなかったし……」

「心配させたのは悪かったけど、アレは不可抗力なんだよ」

「……………どうする？」

「納得は行きませんが、そういう事なら……………」

「……そういう事ならいい」

「わかってくれてよかったよ！ いちち、ルイズ、立てるか？」

三者三様にとりあえずは怒りを鎮めたように見てとった才人は、正座を崩して立ち上がった。

タバサももうそれを咎めようとはせず、キュルケとシエスタも不満げな表情を浮かべつつも何も言わない。

そんな才人の行動を横目に確認して、ルイズも体の重心を苦しげにゆっくりと前へずらす。

足首から上へ痺れが襲ってこないよう、全神経を集中させているので才人の呼び掛けは耳に届かないようだ。

おい、ルイズ、大丈夫か？ と心配した才人が彼女の肩に手をかけた瞬間、彼女はびい！ と妙な声をあげる。

それからまるで、下手な操者に操られるマリオネットのような動きをルイズはして、目に涙を溜めながら才人を睨んだ。

「あ、あ、あ、う、うう、ちょっと、触らないで!」

「わ、わり。お前本当に大丈夫か？」

「大丈夫なワケないでしょ! いい?! 触ったら殺すからね!」

「わあつたよ、だからそんなに怒らないでくれ」

「自業自得」

「ひゃああ! タ、タバサ! お願い! 杖でつつかないで!」

「お仕置きは必要」

思う所があるのか、才人よりも若干荒々しく杖でルイズの足をつつくタバサであった。

それを見たキュルケがルイズの足をつつこうと杖を取り出した所で、才人はあわてて主人を守るべく

場を取り持つように、話題を地球からのお土産に変えた。

「と、いう訳でさ。皆納得してくれた所で、お土産に俺の国の食べ物買ってきたからみんなで食べないかな？」

「な？ どれもハルケギニアじゃ手に入らないものばかりだし！」

「わあ！ いいんですか？」

「ふうん？ ダーリンの国の食べ物ねえ。興味あるわ」

才人の言葉に、ルイズの足をつついていたタバサの杖の動きがピタと止まる。

”ハルケギニアじゃ手に入らないものばかり” というフレーズが彼女の琴線に触れたらしい。

光源が不明な反射光を眼鏡から発し、タバサはゆっくりと才人に向

き直った。

その顔は無表情な上、眼鏡のレンズが白く光っているので美しい蒼い瞳も見えず一体何を考えているのか、流石の才人も読み取れない。ただ、お仕置きを行う手が止まった所を見ると一定の興味を引いているのは確かな事のようだった。

『サイト！ 早く助けて！ 足が、足が！』

『あと少し！ タバサが興味を示してるからあと少しの辛抱だぞルイズ！』

「……………美味しい？」

「ああ、きつと美味しいぞ！ 特に菓子はこっちの物よりもずっと甘くて味が濃いはずだ！」

タバサは杖を振りかざした体制のまま、数瞬の思考に耽る。

一見茫洋とした彼女の脳内では思考が目まぐるしく行われている筈だ。

やがてタバサはおもむろに杖を降ろし、一言興味ある、とだけ呟いたのだった。

才人は思わずガツポーズを小さく取って、そそくさとまだ痺れる足をそのままにテーブルの上に載せているビニール袋から

食品を取り出して並べ始めた。

「よし、決まりだ！ 今用意するから、その辺に座っててくれ。

あ、シエスタ。悪いけど水とグラスを人数分用意してくれるか？」

「え？ あ、はい、わかりました。すぐに用意しますね！」

才人の弾む声にシエスタは先程までの不機嫌な声を一転、明るく朗らかな返事をしてメイドらしく背筋を伸ばしニッコリと笑う。

先日のホットドッグの件もあり、才人のお土産にはかなり期待して



いる様子で、足取りも軽くそそくさと部屋を後にしたのだった。

才人は食品以外の物が入ったビニール袋をとりあえずはベッドの奥の方に放り投げながら、手早く準備を進めていく。

袋からすべての食品を取り出して並べ終えた後は人数分の椅子が部屋に無いので、隣室のキュルケの部屋にある椅子を二脚借りて

ルイズの部屋に持ち込む事にした。

それからまるで執事のように甲斐甲斐しく、手馴れた様子でタバサとキュルケを椅子に座らせた所で才人は

ルイズが未だ肩をプルプルと震わせながら、正座を続けていることに気がついた。

「おい、ルイズどうした？　もうそんな格好しなくていいんだぞ？」

「なにも、好き好んで、続けてるわけじゃあ、ない、わよ！」

「じゃ、なんでだ？」

「……この格好を辞めようとしたら、すごい痺れが全身を襲ってくるの！」

「……不毛だな。でもすっげえわかるよ、その気持ち。だけどさ、受け入れなくちゃ何時までもその格好のままだぞ？」

「あんたに言われなくてもわかって、るぅっっっ、わ、よ！　しゃ、喋るのもすこし辛くなってきたわ」

「手伝ってあげよっか？」

二人の会話に、キュルケが優雅に椅子から立ち上がり割り込んだ。

赤い朱がさす唇の端を少し持ち上げて、燃えるような瞳を輝かせゆつくりとルイズに歩み寄る。

妖艶な雰囲気すら漂わせるその姿を、ルイズはこの時地獄の底から自分を燃やそうとやって来た炎の悪魔に見えた。

「い、いいわ！ 遠慮する！」

「遠慮なんて。あたしと貴女の仲じゃない。

ヴァリエールとツエルプストーの確執すら乗り越えたあたし達の間、そんなものは必要無いわよ？」

髪をかきあげながら、キュルケはうふん、と微笑む。

常日頃から多くの男達を虜にしているその仕草は、完成された色香を漂わせていたが才人の目にはどう見ても

獲物を前にした蛇にしか見えなかった。

当然同じことをルイズも感じているので、極力体を動かさないようにしながら彼女を睨みつけ、その言葉を強く否定するのだった。

「嘘おっしやい！ あんたはただ、私が苦しむのを見て楽しみたいだけでしょっ？！」

「そんな……心外だわ？　ねえ、ダーリン、酷いと思わない？　女の友情ってどうしてこうも崩れやすいのかしら？」

「わっぷ、キュルケ、いきなり抱きつかないでくれよ！」

「ちょっと！　心外だわ？　ってなんで疑問形なのよ！　て、いうかサイトから離れなさいよ！」

「うふふ、あなたが私達を引き剥がせばいいじゃない。さあ、ダーリン。あんな起伏に乏しい体のヒス持ちなんて放っておいてこっちであたしとイイコトしょ？」

キュルケはルイズを挑発しながらも、才人をズルズルとベッドの方へ引き摺る。

才人は不覚にも、腕に感じる豊かな双丘の感触に思考を奪われ、抵抗をする事を忘却してしまった。

そんな彼に意外な救世主が現れる。

不意にベッドにもつれ込もうとした二人を、大量の氷の礫が襲いかかったのだ。

「きゃあ！」

「いじでいじで…」

「盛るのはダメ」

タバサだ。

彼女もまた椅子から立ち上がり、杖をかざして二人に氷の礫を飛ばしていた。

若干キュルケにぶつける礫が多いのは先程の ” 起伏に乏しい体 ” 発言が原因なのだろう。

結局、しこたま氷の礫をぶつけられフレームと共に礫が溶けてびしょびしょになったベッドを乾かす羽目になったキュルケであった。

そんな彼女を尻目に開放された才人がタバサと一緒にルイズの悲痛な訴えを退け、無理やりに立たせた所で

シエスタが水とグラスを部屋に運んできた。

こうして準備が整い、いよいよやさやかな食事会が開かれるのだ  
たが……

「……あんまり美味しくはないわね」

「わ、わたしは好きですよ？ サイトさん」

「味は濃い。だけど、折角香辛料を使っているのに油が良くない」

マルトー親父の作る暖かな食事に慣れているキュルケやタバサには、  
コンビニ食品の食事は珍しくはあっても美味とは感じないらしい。

食事は誰かが作り、そして食べるといったサイクルが基本であるハ  
ルケギニアにおいて、保存食でもないものを長期に保存・輸送できる

コンビニ食品はただの冷めた料理でしかないのだ。

それは貴族でないシエスタですら「出来立て」を普段から食べてい

るせいか、やはり美食のご馳走には成り得なかったのである。

「うーん、やっぱりちゃんと料理したものじゃないとビックリさせられないかあ」

「ごめんねえ、ダーリン。でも、このパンはとっても柔らかくてビックリしたわ」

「この包装してある紙もすごい」

苦笑いを浮かべる才人に、キュルケとタバサは思い思いに慰めの言葉をかけたのだった。

二人の言葉に続くようにシエスタは気まずい話題を才人の故郷についてのもので変えた。

「わたしには珍しい味だし、不味くはないんですがやっぱり温かい物がいいと思うんですよね。」

「サイトさんの国では皆こういったものを食べてるんですか？」

「いんや。これはな、一人暮らしの平民………つっても貴族はいないんだけど、料理をする時間の取れない平民が買うような」

「できあいの食い物なんだ。ちゃんとした料理だともっと美味いぞ。な、ルイズ？」

「ええ。向こうで食べた”ちいずやきかれえ”って奴は本当に美味しかったわ。」

「あんな風にふんだんに香辛料が使われているお料理なんて、生まれて初めてだったもの」

予想外の才人の回答に、キュルケとシエスタは驚いた。

「たしかに不味いとは思うものの、使われている香辛料や食材、パンの柔らかさからそれなりの身分の者が食べる料理だと思っていたからだ。」

しかし、才人の話によれば、これは一般の平民が食べるようなものだと言っ事になる。

少なくとも、ハルケギニアでは平民がこれほど柔らかいパンや大量



の香辛料を口にすることは殆どない。

「へえ。つまり、いま私たちが食べているものってこっちでいう平民用の食べ物なんだ？」

「うーん、まあ、そうかな？ ルイズが向こうで食ったものも平民用というか、誰でも食べられるものではあったけどな」

才人の言葉に、ルイズが腕組みをしてふふん、と勝ち誇った方に笑う。

その鳶色の目は、才人の故郷のご馳走を食べたのは私だけなんだから！ と声高に宣言していた。

ムカツ！ としてキュルケとシエスタがルイズを半目で睨んでいると、タバサが一言杖を取り出して「反省していない？」とつぶやく。

「してる！ 反省してるわよタバサ！ だから、その杖しまつてよ！  
ね？ あ、そうそう！ 問題が解決したらみんなで食べるにいきま  
しょう？ ね？ ね？」

「あら。中々素敵な提案ね、ルイズ。じゃ、美味しいお料理を食べ  
るのは、ダーリンの故郷に行つてからつて考えるとして。  
それはそうと。ねえ、ダーリン」

勝ち誇つた態度を一変させて必死に取り繕うルイズを見て微笑んで  
から、キュルケは才人に向き直り急に真顔になった。

「ん？ なんだ？」

「もうすぐ夏期休暇でしょう？ その間、何か大きな出来事つて起  
こる？」

「んー、俺達の中で誰かが危険な目に合う、って事はなかったと思  
う」

「そう。なら、予定通りにしましょうか、タバサ」

キュルケの言葉にタバサは無言で頷いた。

「どづいつ事だ？」

「ダーリンたちがいない間にタバサと相談したんだけど、歴史の通りに事態を進めたいなら

”前”と同じ行動をした方がいいんでしょう？」

「ん、まあそうだな」

「最初、タバサと一緒に夏期休暇の間も一緒に行動しようかと思っただけだね。

それだとタバサの行動に、ガリア本国が不審に思う可能性があるんじゃないかって思うのよ」

「ああ、そういうことか。たしか ” 前 ” はお前もタバサも里帰りはしてたようだしな」

「だからね、留学組の私達は明後日ここを発つて里帰りをする予定にしたのよ。」

そういうわけで、留守の間はルイズの事頼んだわよ？」

キュルケはそう言って、才人の手を取り浮気はしないでね、ダーリンと付け加えウインクをして見せた。

はは、と乾いた笑いを浮かべその手を引き抜いた才人だったが、今度は別の白い小さな手が微熱から取り戻したばかりの手を握る。

少し冷たいその手はタバサのものだ。

一同は意外なタバサの行動に、目を白黒させた。

そんな周囲の戸惑いも意に介さず、タバサは今日みたいな事にはならないよう、しっかりと見張ってと才人に伝えさつと手を離れたのだった。

キュルケが才人の手を握った瞬間から、怒りの咆哮を上げようと隙を伺っていたルイズの胸にタバサのその一言が刺さる。

「う、悪かったわね」

「当然よ。あんたはもう、落ちこぼれの ”ゼロのルイズ” じゃ  
いられないのよ？」

もうちょっと自覚してもいいと思うわ。あたしはともかく、タバ  
サが可哀想じゃない」

「わかってるわよ。……ごめんね、タバサ」

「もう気にしていない。それよりも、しっかり護衛をお願い」

「おう、任せとけ。あ、そうそう。なあ、こっちは自信あるんだ。  
食ってみてくれないか？」

才人はそういうと、地球製のデザートの数々を勧めた。

コンビニのジャンクとはいえ、ハルケギニア製のものよりも遥かに  
甘く、濃厚な味わいの物ばかりだ。

特に年頃の女の子はこのような品に目がない。

それは地球でもハルケギニアでも、貴族でも平民でも変わりはないことを、才人はこの日確認したのだった。

それから数日後。

タバサやキュルケは既に帰郷の為に学院を発った、夏期休暇に入る前日での事。

学院の広場でルイズとシエスタは険悪な雰囲気の中、才人を挟んで睨み合っていた。

広場の向こうに見える正門には帰郷する生徒達でこった返している。

迎いの馬車がひっきりなしにやってきては、それぞれの領地やトリスタニアに向けて出立していた。

才人はその様子を、まるで現実から逃避するように眺めていた。

”グリムニルの槍” の能力なのか、遠目にもやけにはっきりと生徒たちの浮かれた顔が見える。

無理もない。

トリステイン魔法学院の夏期休暇は二ヶ月半もあり、生徒たちにとっては一大イベントでもあるのだ。

笑顔、笑顔、笑顔。

まぶしい位の、爽やかな笑顔の海だ。

手には大きな旅行かばんを抱え、初々しいサマードレスに身を包んだあの一年生なんて、すごく幸せそうに笑っている。

……いい笑顔だなあ。

故郷にカレシとかいるんだろうか。

ほんと、無邪気で幸せそうな笑顔だ。

それに比べて……

「いいじゃないですか、ミス・ヴァリエール。お願いします、わたしも一緒に連れて行ってくださいな」

「ダメったらダメ！ あんたは学院付きのメイドでしょうが！ 大人しくタルブの村にひとりで帰りなさい！」

才人は思う。

何もこんなにクソ暑い中、喧嘩しなくてもいいじゃないか。

ああ、強い日差しが目には沁みる。

「でも……夏期休暇の間ずっとサイトさんがミス・ヴァリエールの身の回りのお世話をするんでしょう？」

「当たり前じゃない。こいつは私の使い魔なんだから」

「そんなの、その、可哀想です。わたし、サイトさんにもお休みが必要だと思っんです」

「サイトは、私の護衛でもあるんだからしょうがないでしょ！」

「でも！……でも、ですよ？ いつもいつもサイトさん、ミス・ヴァリエールにこき使われていてなんだか可哀想で……」

わたしが一緒に居れば、身の回りのお世話をしあげられますし

……

サイトさんもきつとミス・ヴァリエールの護衛に集中できると思っんですよ



この日、元々は帰郷する予定だったシエスタはいつものメイド服ではなく草色のシャツにブラウンのスカートを身につけていた。

その手には大きなカバンがぶら下がっている。

そんなシエスタの一理ある説得に、ルイズは思わず出しかけた言葉を飲み込んだ。

確かにそのとおりではある。

しかし、しかしだ。

夏期休暇は二ヶ月半にも及ぶ。

その間、サイトと二人きりで一緒に過ごしたいと思うルイズは、その申し出をなんとかしても断りたかったのだ。

それに、夏は乙女を大胆にする。

折しも、地球のホテルでみたあのポルノコンテンツの記憶が、ルイズの中で色々と、それはもう、色々と妄想を膨らませる結果となっていた。

つまり、ルイズ的に夏なのだから誰にも邪魔されず ”大胆” に なりたかったのだ。

その為にはシエスタに叩きつけられた言葉を、理論的に粉碎しなくてはならない。

ルイズは必死にその言葉の穴を探る。

僅かな隙を見逃すまいと、強い日差しの下頭をフル回転させるのだった。

その結果は……

「ふ、ふうん？ 一体あなたは、私とサイトの、どっちの ” 身の回りのお世話 ” をするつもりなのかしら？」

「勿論サ、ミス・ヴァリエールですわ！」

「あなた！ 今即答でサイトって言いかけたでしょ！」

「オホホ、そそんな事はございませんわ」

「嘘おつしゃい！ そもそも、あなたはまだサイト専属メイドにもなっていないんだから、妙な行動でもして目をつけられると困るの！」

「この前そう話したでしょう?! どこにガリアの間諜が潜んでいるのかわからないんだから」

結果は、半ば子供の喧嘩じみた言い争いにしかならなかった。

少なくとも才人にはそう見えていた。

一方、ルイズはルイズでこれでうまくシエスタをやり込めたと得意げに、いつものように腕を組んでニヤリとする。

そんな彼女をシエスタは軽く睨んで、特に慌てもせずルイズに聞こえるよう独り言のようなものを口にした。

2114

「それ、ホントかなあ。ホントにそう思っているのだけなのかなあ  
……」

「な、なによ」

「べ、べーっーにー」

「言いたい事あるなら言つてご覧なさいよ！」

「最近、ミス・ヴァリエールがサイトさんを見る目がなんだかとても怪しいなつて思つんです。」

サイトさんの故郷に行った時、なんかありました？」

不意打ち、とはまさにこの事で、それまでどこか心の隅にあつたあの一夜の事が鮮やかにルイズの中に蘇つた。

主に、連れ込み宿でのことが。

さらに具体的に言つと、あの、才人には内緒で見た、裸の男女の睦み合いの映像が。

普通に「才人と連れ込み宿に入ったの！」と言える事が出来れば、シエスタに圧倒的な差がつけられるはずではあつたが

今のルイズにはそう公言するには些か無理があつた。

彼女の中で才人への気持ちははっきりとしてはいるものの、やはり世間体や身分の差などの問題は依然として解決してはいないのだ。

なにより、十六才の貴族の乙女が結婚もせず、ブリミルへの誓いの言葉も無く、両親の許しも得ないまま

「才人と連れ込み宿に入ったの！」などと公言する事は、はしたない事極まりない行為であった。

まして、他人の情事を事細かに見たなどは口が避けても言えようはずもない。

ルイズは顔を真赤にしながらも、必死に視線をそらしながら取り繕う。

「別に、なにも、ないわよ！」

明らかに何かあったな、とシエスタはその態度から読み取り奥歯を少し噛んだ。

それからじつとりとルイズを観察した後、どう反応すべきか彼女は考える。

シエスタも、ルイズと同じように恋に必死なのだ。

ヤっちゃった、風でもない、かな？

リリーの話によれば、”そういう関係” になった男女って変に  
隠そうとはしないらしいのよね。

すごい余裕があるって言うてたし、ミス・ヴァリエールのこの態  
度は……たぶん違つとおもつ。

ようし、こうなつたら……

「ふう、しかし今日は暑いですわねえ」

何を思ったか、シエスタは急に呆れて肩を落とす才人の方へ向き直  
り、着ていた草色のシャツの胸元をパタパタとさせた。

当然才人からシャツの中が見えるように。

こうなつたら、サイトさんを味方に引き込んで意地でもついていっ  
てやる、と作戦を変えたのだ。

チラチラと見える深い谷間は、男の本能をくすぐる。

つまり、才人はその魅力にあらがえず、意志に反してついその峡谷  
を覗いてしまっていたのだ。

そんな才人を見たルイズはムっとして、思わず彼の脛を蹴り飛ばし  
そうなるが

愛されているという余裕がそれを許さなかった。

ふん！

才人は、私の事を誰よりも愛してるんだから！

つい、他の女に目を奪われることがあっても、同じことを私がすれ  
ば誰も敵うはずがないのよ！

息巻いてルイズは才人の側につい、と寄り添い……

「ええ、本当に」

と言いながら自身のブラウスのボタンをキュルケがするように幾つ  
か外し、胸元をパタパタとさせたのだった。

才人からチラチラと見えるその中身は、まさに爽やかな風が駆け抜  
ける春の平原そのもので何処までも地平線がひろがるかのようだ。

ルイズのその仕草に愛らしいものを感じた才人は、先程まで見えていた峡谷の事を忘れ優しく微笑む。

しかし、その行為はただただ、ご主人様の矜持を傷つけるだけであつた。

直後、才人の微笑を誤解して逆上したルイズは、  
”加速”の詠唱と共に強烈な回し蹴りを才人の股間に放ち

くぐもつた悲鳴を上げて崩れ落ちる愛しい使い魔を、容赦なく何度も踏みつける。

その攻撃の意味を、才人はシエスタの胸元に目が行ってしまったからだと誤解して必死に弁明を試みるも

当然その言葉はルイズの怒りの炎に油を注ぐ結果にしかならなかつた。

「う、がああ、お、おちつけて！ 男ならつい、目が行っちゃうもんなんだよ！ 本能ってやつなんだよ！」

「うっさい！ くの、くの、くの！」



「み、ミス・ヴァリエール！ やめてください！」

「邪魔しないで！ こいつにはまだまだ躰けなきゃいけないことがあるんだから！」

「この、この、このお！ 私の気も！ 知らない！ で！ この！」

シエスタがその鬼気迫るルイズの様子に怯えつつも、必死にすがりつきながらなだめる。

ルイズはそんな事もお構いなしに、強い初夏の日差しの下延々と才人を蹴り続けた。

彼女にとって、普段気にしている胸を見られふつと笑われた（実際には違うが）事はなにより許しがたい事であったのだ。

「ふー、ふー、ふー」

「お、落ち着いたか？」

やがて、体力の続く限り蹴りを放ったルイズが息を荒げながらも落ち着くと、ボコボコになった才人は恐る恐る声をかけた。

そんな才人にルイズは尚も足りないといった調子でギロリと睨む。

「そ、そんなに睨むなよ」

「そうですねよ、こればかりは仕方ないんですから」

ルイズの怒りの原因を微妙に履き違えたシエスタが、勝ち誇ったかのように彼女を窘めた。

当然、鎮火しかかった火に油をくべる行為にしかならない。

「むきー！」

「ルイズ落ち着け！ シエスタも、挑発するんじゃない！」

「う、ごめんなさい……」

流石の才人もすこし強めにシエスタを窘め、迅速にルイズの胸を灼く怒りを鎮火させる為バタバタと暴れる主人を取り押さえたのだった。

ポコポコになっていた顔は、すっかり元に戻っている。

”グリムニルの槍” ってこんな時すっげえ便利だよな、などと考えつつも腕の中で暴れるルイズを抑えながら才人は木陰を探した。

日は随分と高くなりつつあり、日差しも一層強くなっていく初夏。

暑いからいけないんだ。

暑いから、みんな怒りっぱくなってるんだ。

才人は暴れるルイズを抱え上げ、シエスタとともに木陰に移動してゆっくりと、優しく彼女をなだめた。

しばしの時が流れ、ルイズの怒りも治まり、険悪な雰囲気ではあるものの広場には平穏が戻る。

才人は肩を落とし、シエスタが気を利かせて汲んできた水を受け取り、それを一気に煽った。

同じくシエスタから水を受け取ったルイズも水を一気に煽り、改めて落ち着いた声で今度は才人に険悪な声をかける。

「で？」

「ん？ 何？」

「あなたの意見として、この子どうすんのよ？」

「んー、この国が”前と同じ” 未来に向かっていているなら、シエスタは連れてはいけないかな」

「えー！ そんな！」

「どっぴいっ事？」

「今日お前にさ、極秘任務の指令が姫さんから下るんだ」

「姫様から？」

「そ。たしか、密書を携えたフクロウが来るんだけど……  
もしその出来事が起こらなければ、シエスタと一緒にヴァリエー  
ル領に帰る事にしてもいいんじゃないかな」

「やった！」

喜びのあまり、思わず飛び上がるシエスタ。

対照的に、ルイズは歯を剥きながら才人に食って掛かる。

文字通り、喉笛を噛みちぎらんばかりの勢いだ。

「なんでよー！」

「そりゃ、お前、”前” にヴァリエール領に帰る時一緒だったからだ。

極秘任務の指令が下らない場合、結構未来が変わってしまっている恐れがあるって事だろ？

だから、タバサの件に極力影響が出ないように、俺たちはなるべく”前”と同じ行動を取らなきゃ」

「う、それは、そうだけど……」

「さ！ そういう事で、早く行きましょうミス・ヴァリエール！」

弾む声をあげながら、シエスタは才人の手を引いた。

ルイズにはそれを咎める体力と気力はすでに残ってはいないらしい。

何も言わず肩を落としてところの中で、自分が夢見ていた甘い夏期休暇に一人別れを告げていたのだった。

そんな対照的な二人を前に才人は空の一角をじっと睨む。

既に人ではないその目が、何かの姿をはっきりと捉えたらしい。

「いや。そうも行かないようだぞ？」 シエスタ

「え？」

「ほら」

才人はそういうと、空を指差す。

丁度王都トリスタニアの方角であった。

ルイズとシエスタは才人が指差す先、初夏のどこまでも青い空を目を細めて睨んだ。

二人の視界の先にやがて黒っぽい点が青に浮かび上がり、徐々に点は鳥の形を取る。

鳥はまっすぐこちらに向かって飛んでいるようだ。

ルイズがその鳥がフクロウである事を確認した頃、才人は宣言する

の  
だ  
っ  
た。  
。

「  
と、  
い  
う  
訳  
で  
帰  
郷  
は  
中  
止  
だ  
な  
」





白い石造りの建物が夕日によって茜色に染められた王都、トリスタニア。

サン・レミ聖堂が夕方六時の鐘をうち、中央広場では人々が足早に家路へと着いていた。

そんな人の波に逆らい住宅が密集する地区から遠ざかるように歩く三人組の姿が、そんな人々の目をひいていたのだった。

一人は、儂げな印象を抱かせるようなうら若い娘で、三人の先頭を歩いている。

すこし短めのブルネットの髪はウェーブがかかり、夕日を浴びて赤

毛のような色に見えた。

背は低めでそのメリハリの効いた体のラインは非常に靈感的であり、遠目に彼女を見た下品な傭兵達が口笛を吹いて茶化している。

若い娘は飛んでくる口笛や野次にはまるで意に介さず、平然として住宅街のある地区とは反対の方向にスタスタとその足を運んでいた。そんな娘の背に更なる卑猥な野次が飛ぶ。

彼女が向かう先は、酒場や娼館のある歓楽街であつたからだ。

傭兵たちは彼女がそこで働く酌婦だと思い、下品な笑いを吐きながら彼女を茶化し続けた。

投げられる野次にも止めなかったその歩みはふと、背後に剣呑な気配を感じて若い娘は足を止める。

それから後ろを振り返り、困つたような表情を浮かべて後ろをついてくる人物に穏やかな、鈴の音のような声をかけた。

「トマ、やめて。あの人達はちょっとわたしをからかっただけなんだからね？」

「でも、姉さん！ あいつらは、姉さんを娼婦かなにかのように！」

「いいから。こんな往来で剣に手をかけるなんて、警邏の方に見つかりでもしたら大変よ？」

若い娘はゆつくりとした落ち着いた声で、後ろを歩いていたもう一人の人物、トマと呼ばれた少年に優しく諭すように微笑んだ。

トマと呼ばれた少年は娘よりも若干背が高く、背中まで伸ばした彼女と同じブルネットの髪を頭の後ろで縛っている。

娘も目を引く容姿でありその体つきも非常に女性的で魅力的だったが、この少年も又道行く人々の目を引いた。

主に、女性の視線を。

端正な顔立ちに、凛々しく釣り上がった眉毛。

白い肌はまるで大理石のようで、背筋も魔法衛士隊の一員のようにピンと伸びている。

細いがしなやかな身のこなしは、まるで貴族のように洗練されたものだった。

そして、その腰に一振りの剣。

少年は先程からその綺麗な顔に敵意を張り付かせ、剣に手をかけながら姉を茶化した傭兵達を睨みつけていたのだった。

傭兵たちは少年の事などまるで目に入っていないかのように、遠くで口笛を吹いたり嬌声を上げてみせたりしている。

トマは悔しそうに傭兵達を見ながらも、姉の言葉に従って剣の柄に置いていた手を退けた。

「さあ、あんな人達の事なんて放っておいて、お店に行きましょう」

「……はい、姉さん」

「頑張つて働いて借金を返さないと、死んだ父様や母様に顔向けなんてできないわ。そうでしょう？」

「そうだね。ごめん、姉さん。僕も……」

「いいのよ、トマは。元はと言えば、わたしの婚約が原因だもの」

若い娘はそう言って優しく笑ったまま、トマの頭を撫でた。

頭を撫でられたトマは険が張り付いた顔を崩して、クスリと笑い返す。

いよいよ沈みつつある夕日が、王城の塔の間からそんな二人を照らし出していた。

この日最後の夕日を受けた美しい姉弟の佇まいはまるで絵画のようで、中央広場を歩き交い家路に付く人々の目を引き足を止めさせる。

微笑みあう二人の様子は、まるでその空間だけが穏やかで柔らかかな世界であるかのように、見る者を和ませるのだった。

そんな、名画のような光景を裂くように。

いや、名画に染み付いた、スーパの染みのように。

もう一人、二人について歩いていた人物が無粋にも口を開きその光景を台無しにしてしまう。

「大体なあ、お前弱い癖になんでそんなに喧嘩っ早いんだよ？ 剣を抜いて挑むつてのは殺されても文句は言えねえんだぞ？」

「うるさい！ 大体、どうしてお前なんかが付いてくるんだ！」

「うわ！ 一昨日助けてやったのにそりやねえよ！」

俺だってなあ、仕事じゃなきゃこんな事しねえって。それもこれも、お前が弱つちいからだろ？」

「うつつうつ、うるさい！ 姉さんは僕が守るんだ！」

「わあった、わあったから、そう怒鳴るなよ。」

ほれ、早く店に行こうぜ？ 日が暮れて遅刻すると俺まで給金をスカロン店長に差っ引かれちまう」

名画を台無しにしたスープの染みのような男は、長身という程ではなかったが三人の中では一番背が高い。

顔立ちも前を歩く二人のせいか特にこれは、といった特徴を道行く人々に抱かせず

たまに女の子から黄色い声を上げられるトマの背に、男の嫉妬をまぜた視線を送りながら背を丸めて最後尾を歩いていたのだった。

ただ、違う意味ではこの男も人々の目を引いている。

トリストインでは珍しい漆黒の髪に奇妙な服装をしていて、その背には体格に不釣合な片刃の大剣を背負っていたからだ。

大剣を納める鞘は背負った状態でも抜きやすいよう、皮の留め具で保持するタイプであるらしく所々が抜き身の刃が見える為か

鞘の上から布をグルグルに巻かれていた。

「サイトさんの言う通りよ、トマ。助けてもらったのに、どうしてそんなにサイトさんを邪険にするの？」

「だって、姉さん！ こいつは……」

「だから、何度も言ってるだろ？ 俺は、ルイズ一筋なんだって」

「嘘つけ！ お前、何かと姉さんの胸ばかり見てるじゃないか！ あんなペタン子一筋なんて、到底信じられないね！」

「ちがう！ ルイズは決してペタン子なんかじゃない！ スレンダ  
ーって言うんだ、スレンダーって！ はい、復唱！」



「だれが復唱なんかするか！ いいか、僕は忘れないぞ！

お前が姉さんの自己紹介を聞いていたとき、ずっとその胸を見ていた事をな！」

「そ、それはだなあ、お前も男ならわかるだろ?!」

「いや、わからないね！ どうせお前も姉さん目当てで護衛を引き受けたんだろ！」

姉さんは騙せても、僕は騙せないんだからな！」

「トマ！ いい加減にしなさい！ サイトさんも、トマに構ってないで早く行きましょう？」

このままだと本当に遅刻しちゃうわ」

娘は言い争いを始めかけた二人にピシヤリと言い放って、再びスタスタと今度はすこし足早に歓楽街の方へと歩き始めた。

トマはギリ、と白いきれいな歯を剥いて男を一瞥し姉の後を追う。

男は、平賀才人は、はあああ、と深くため息をつきボリボリと忌々しそくに頭をかいて、二人の後を追うのだった。

魔法学院から王都トリスタニアまでは徒歩で二日。

ルイズと才人はとある任務を告げる書状を伝書フクロウから受け取り、身分を隠すために

馬車ではなく歩いてトリスタニアの街へ向かっていた。

結局シエスタは一人で里帰りをすることになり、才人と二人きりになれたルイズは上機嫌で手早く荷造りを行い

その日の内に学院を出立する運びとなったまでは良かったが、歩きの旅など殆どしたことのないルイズはすぐに疲れた、とか

お肌が日に焼けちゃう、などと愚痴を吐き始める。

才人はそんなルイズの気を紛らわせようと、いい機会だとばかりにある事を提案していた。

それは……

「なあ、ルイズ。俺、すこし考えたんだ」

「何？ 突然」

才人は大量の荷物を抱え、前を歩くルイズに声をかけた。

魔法学院を発って丁度一日が経過した、お昼すぎのことである。

ルイズは才人に沢山ある自分の荷物を持たせている事に少し引け目を感じているのか、その手には小さな荷物がぶら下がっていた。

「これからやる任務はさ、特に危険は無いしお前にとっても色々と社会勉強になるから

多少困難な状況になるかもしれないけど、俺は口を出さない事にしようと思うんだ」

「どついつ事？」

「つまり、今回は何が起るのかお前には言わないって事」

「ちょっと！　なんでよ、それ！」

「言つたる？　特に危険は無いし、お前にとっても色々と社会勉強になるからだよ。」

「事前に何が起きるか教えとくと、お前のためにならんしさ、何より……」

「何より？」

「精神力が溜まる。任務をやってる時のお前は結構悩んだりしてたからな。」

「アルビオンとの戦いを前に、それは悪いことじゃないだろ？」

「う、そりゃ、そうだけど……」

「な？　いいだろ？　こうやって、文句一つ言わずにご主人様の大量の荷物を抱えている、健気な使い魔のささやかなお願いなんだし」

「……わかつたわ。確かに、ちょっとした事であんたの”知識”」

使って困難を切り抜けるのも良くない事よね。

いつの間にか頼りつきりになっちゃうかもしれないし、それは悪くないかも。

一応確認するけど、危険な事にはならないのね？」

「ああ。 ”前” と全く同じならな。もし危険な事が起きても俺がキツチリ守るよ」

「ならいいわ。考えてみれば、変に事情を知って未来に影響が出ても困るし。」

タバサの事が解決するまではなるべく ”前” と同じようにする、って事でもあるんでしょ？」

「そ。悪いな。流石に ”危ない” 事ならアドバイスするんだけど……」

お前の障害を前もって排除しすぎるのも、後々マズい事になりそうだってこの前の ”世界扉” の件で気が付いたんだ」

「……気にならないけど、仕方ないわよね。まったく、何が伝説の系統よ。」

悩んだりして心を震わせないと精神力が貯まらないなんて！ お陰でレビテーションを使うにも気を使わなければならないわ！」

ガア！ とルイズは青く高い初夏の空に吠えた。

才人はそんな彼女の背を見ながら、やれやれとため息を付く。

それからその背にかかる眩いピンクブロンドをぼんやりと眺めながら、才人は考え込んだ。

ルイズは、 ”前” よりもずっと……そう、ずっと成長している。

前と違って、アルビオン戦役の前である今の状況で既に虚無魔法を沢山使いこなしつつあるし

俺たちの信頼関係も以前の同じ時期に比べればずっと強固だ。

俺自身、更なる力も得たしこれからの戦いも最悪、歴史通りに進めれば少なくとも負けることはない。

……デルフを失うのはいやだけど。

そうだ。

今の所は順調だと言ってもいい。

なのに……

才人はそう考えながら、自身の内にある得体のしれない不安が湧いて来るのを感じた。

不安は彼に語りかける。

足りない。

何かが、足りないと。

なんだ？ 何が足りないと俺は感じているんだ？

力か？

ルイズとの信頼関係？

違う、多分そんな事じゃない。

才人はなんだか居心地が悪いような気がして、気を取り直すキツカケにするようによっこいしょと荷物を持ち直した。

「大丈夫？ 重くない？」

そんな才人の様子を見てルイズが気遣う。

才人が抱える山のようになった荷物の殆どは、ルイズの着替えなどが詰まったカバンだ。

いくら以前とは違い、虚無魔法を多く使えて自分の気持ちに素直になり、才人との絆が強いとはいつても彼女が未だ

世間知らずのお嬢様である事実は変わらない。

そんな彼女に届いた女王陛下直々の任務は、トリスタニアの街に潜む不穏分子の存在を調べる為の間諜であった。

トリステイン王国は未だ神聖アルビオンと戦争状態であり、国境では小競り合いの戦闘が続いているのだ。

そんな中アルビオンによる女王誘拐未遂事件が起こった。

これは、見方を変えると暗殺も可能であった状況とも言える。

この事態を重く見たアンリエッタと宰相マザリーニは、城下に潜む不穏分子やアルビオンとの内通者の炙り出しに

本腰を入れて取り組んでいたのだった。

その一環としてルイズに回ってきたこの任務は、アルビオンの密偵による治安攪乱を未然に防ぐためのものだ。

身分を隠し、トリスタニアの街で不穏分子の情報や街の噂を収集する役目を与えられている。

地味だが非常に重要な任務だ。

そんな極秘任務にルイズは山のような荷物を持って挑もうとしてい



ただ。

中身は当然、彼女の綺羅びやかな衣服や装飾品の数々。

どれも平民が身につけるようなものでなく、とても目立つ。

才人は心配するご主人様の問い掛けに、深い溜息で返事をした。

「なによ！ 心配しているってのに失礼しちゃうわね！」

「あなの？ お前の任務は、なんだ？」

「何？ 急に。間諜よ、間諜。昨日説明したでしょ？ それにあんた、知っているじゃない」

「ああ、そつだ。で、このお前の荷物、どう思っ？」

「……重い？ 半分は無理だけど、もうちょっと持とうか？」

再び心配げに才人を気遣うルイズ。

やべ、超可愛い。

一瞬、才人の頬が緩みかけた。

それからすぐに、いやそうじゃなくて！ と我を取り戻す。

お前な、間諜って仕事をなんだと思っているんだ、と言いかけて才人は口をつくむ。

そうだ。

ここでうまく説明しても、ルイズの為にはきつとまらない。

平民の生活に溶け込んで間諜を行う経験は、貴族であるルイズには貴重な体験だ。

俺は黙って見守ってやるべきなんだ。

こんな、身分を隠しての間諜として常識の欠片もない程荷物を持っていくとしても。

たとえば、高級な貴族用宿に泊まろうとしても。

たとえばとえ、任務の為の金が足りない！ と愚痴を吐いても。

たとえばとえたとえ、つい手を出したギャンブルでその金をすべてスって、スツカラカンになっても、だ。

……最後の俺が最初に手をだしたんだけどな。

才人はなんだかお父さんみたいな考えだなこりゃと思いつつも、何でもないとルイズに笑いかけた。

ルイズは才人のその笑みの真意を理解できないまま、ホントに大丈夫？ と呑気に心配をするのだった。

と、いう訳で。

無事、トリスタニアに到着した二人は。

”前回”と同じようにまず財務庁を訪ね、任務を知らせる手紙と一緒に入っていた手形を金貨に換え。

口は出さないと決めたものの、前回と同じ行動ならと思いつつ貴族的思考から全く離れないルイズを見かねた才人が

仕立屋に連れて行き、粗末な平民の服を見立てて彼女に着せて。

その格好と資金不足に不満を漏らすルイズを、才人が懸命に宥めている内に言い争いとなり。

わかつちやいるけども。

結果がわかつちやいるけども、才人は自身の財布の中身をすべてルイズに使われてしまうと知りつつも、賭場に彼女を誘って。

やっぱり今回も目を獣のようにギラつかせて賭け事にハマったルイズに、活動費も自分の財布の中身も、すべての金貨をつぎ込まれ。

無一文になり中央広場で「あんた、こうなると知ってて黙ってたわね！」となじられ、惨めに座り込んでいる所で予定通り

宿兼酒場『魅惑の妖精亭』のオーナーである、スカロンにスカウトされる二人であった。

才人と同じ黒い髪にオイルをなでつけ、割れた顎とツンと尖った小意気なヒゲに厚ぼつたい唇。

派手な紫のサテン地のシャツからはモジャモジャの胸毛をのぞかせ、クネクネとしなを作って気味の悪いお姉言葉を操るスカロンは

すこし特殊な酒場を営んでいる。

その酒場は愛らしい給仕の女の子を大量に雇い、色とりどりの派手な格好をさせて酌婦として客に奉仕させるのだ。

もちろん、如何わしい行為は行われぬ。

あくまで綺麗な女の子が、綺麗な格好をして、お客様にお酌やお話の相手をしながら楽しい一時を提供する、といったお店である。

そんなお店でルイズは働くこととなり、才人も又雑用としてルイズと一緒に雇われる事になるのだった。

そこまでは才人が知る未来と同じ出来事である。

店に案内される道すがら、才人はスカロンの容姿に懐かしさを感じながらもルイズとは兄妹で、親の（本当はルイズの）博打で

一文無しになった上に行く当てもなく困っていたとこれも又、以前と同じような話をでっちあげて事を進めた。

それからルイズは派手な格好をさせられ『魅惑の妖精亭』で働く妖精の一員として、順調に”前回”と同じように

トラブルを起こしつつも、労働やお金を稼ぐ事の大変さを学んでいく。

才人はその様子を厨房の奥でひたすら皿洗いを行いながら暖かく見守り、より絆を深めるべく彼女を影から支えてやるつもりだった。

その、つもりだったのだが……

『魅惑の妖精亭』で働き始めて二日目の夕方での事だ。

「やめて下さい！　お願い！　やめて！」

店を出すワインの在庫がすこし心許ないので、スカロンに言われ才人が発注書を手にはワインを扱う商人の館まで才お使いに出ていた時。

サン・レミ聖堂が夕方六時の鐘をうち、白い壁を夕日で赤くそめた王城がみえる中央広場で才人は女の子の悲鳴と

野太い複数の男の怒号が聞こえてきて、急ぐその足を止めるのだった。

声がる方に目をやると、どこか見覚えのある女の子が屈強な男に手を引かれている。

その男の足元には剣が転がっており、刀身が夕日を反射してキラキラとその場にそぐわない美しい輝きを放っていた。

剣の光を目に受け、思わず手で遮りながらも才人は記憶を辿り、その女の子が誰であったかを思い出そうとした。

あの子はたしか、スカロン店長のお店で働いていた……

いや、そんなことより！

男と女の子の視線の先で、男の仲間らしきこちらもイカツイ男達が

四人、倒れている誰かを囲んであるうことが集団で蹴り飛ばしていたのだ。

「おい、やめろよ。よってたかって何してんだよ」

「ああ？ なんだお前。スッコんでろ！」

思わず止めに入った才人に、男たちは地に倒れ伏している者を蹴るのを辞め一斉に才人を睨みつける。

ガラの悪そうなその風体は傭兵、ではなくゴロツキの類のようだ。

チラと倒れている者の方をみると、髪は長いがその服装からどうやら男らしいと判別がついた。

「喧嘩にしちゃ、ずいぶんとみっともないな？」

「なんだあ？ お前も俺達に喧嘩売ってんのか？」

「まさか。そんな面倒臭い事するかよ。お前らが乱暴をやめればこっちも退散するさ」

「うるせえ！ 邪魔するんじゃないねえ！」

男達の一人が、問答無用で才人に殴りかかった。

男の風体が現す通り、随分と喧嘩早い性分のようにだ。

才人は慣れたような動きで男の拳を難なく躲し、ちよんと足を引っかけた

男はバランスを崩してしまい、どたんと大きな音を立てて無様に地面に転がる。

その才人の行為に、他の男たちは気色ばんだ。



「でめえ、やんのか?!」

「殴りかかって来たのはそつちだろ」

「絡んできたのはてめえだ!」

「お前らが嫌がる女の子の手を引いて、その子の連れを集団で蹴たぐっていたからだろ」

しかし、才人の言い分は男たちに聞き入れられそうにもない。

じり、とゴロツキ共は蹴り飛ばしていた男から離れ、今にも襲いかからんと徐々に才人を取り囲む。

この時意外にも才人に躍りかかろうとするゴロツキ共を、女の子の手を引いていた一際屈強な男が制止した。

どうやら彼らの兄貴分らしい。

その男は抵抗する女の子の手を難なく拘束し続けながら、才人に小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「おいおい、俺たちは被害者なんだぜ？」

「うそコケ」

「俺たちはな、このお嬢さんに借金の返済の催促をしにきたんだ。そしたらおめえ、いきなりそのガキが剣を抜いて切りかかってくるじゃねえか。」

「そんな危ねえ真似しやがるもんだから、ちよつとばかり」社会勉強” をさせてやってたのさ」

そう言つて、男は足元に転がっていた剣を倒れている男にむかって蹴り飛ばした。

剣はがらんと音を立てて倒れ伏している男の側に転がっていく。

倒れている男はうう、と呻いてわずかに顔を上げ剣を確認したがその手にとろつとはしなかった。

チラとみえたその顔と声から、倒れている男はまだ少年のようだ。

「だったら、もういいだろ？ 十分傷めつけてるじゃないか」

「よかねえ。まだ商談が残ってら。こっちのお嬢さんに、借金を返してもらわねえとならねえんだからな」

「お金は！ 今月の分はキチンと返したじゃないですか！」

「ああん？ 利子だよ、り・し！ 足りねえ分は体で稼いで貰うって約束だろっ？」

男は話は終りだとばかりに、踵を返して強引に女の子のの手を引く。恐らくは騙されてしまったのだろう女の子は、ガクンと体ごと引っ張られながらもさらに抗議の声を上げた。

「そんな話、聞いてない！」

「当たり前だ。言っ  
てねえからな。ひひ、ほら、行くぞおぐ！」

屈強そうな男は台詞も言い終わらぬ内に、手を引かれていた女の子の眼前でいきなり数メートル程吹き飛んだ。

その背中を才人が蹴飛ばしたからだ。

ちゃんと女の子の手を離してから吹き飛ぶよう、脇の下に一発ボデイブローを素早く入れてからの蹴りだったので

男は一人でくぐもった悲鳴を上げながら宙を舞う。

突然手を引いていた男が悶絶しながら吹き飛ぶ様をみて、ポカンと  
していた娘がはっと我を取り戻し、慌てて振り向くと

さっきまで制止に入った男の子に凄んでいたいかついゴロツキ共が、  
目を離れたその一瞬でポコポコにされ

まるでゴミ捨て場のゴミを山積みにするように、ひとまとめに折り  
重なっていたのだった。

ありえないその光景を目の当たりにして女の子がえ？ と自失して  
いる傍らで、才人は何事もなかったかのように両手をパンパンと打ち

ありもしない埃を払ってから倒れている少年に手を差し伸べた。

「大丈夫か？ ケガはないか？」

「う、ぐ……」

「ほれ、手をかしてやるから。まったく、ひでえ連中だな」

少年はすこし呻きながら顔を上げて、才人が差し伸べた手を確認する。

そして。

パシン、と音が鳴った。

少年が、差し伸べていた才人の手を乱暴に払ったのだ。

あっけにとられる才人を、その少年は大きなブラウンの瞳で強く睨みつける。

「トマ！」

「余計な、お世話だ！　姉さんは僕が守るんだ！」

ヨロヨロと立ち上がりながら少年は、傍らに落ちていた剣を拾い上げて女の子と才人の間に立つ。

見た目、年の頃はルイズとそう変わらない。

屈辱と敵意に歪めたその顔は、それでもギーシュよりもずっと端整な顔立ちだ。

そう、少年はいわゆる美少年である。

それも、とびきりの。

彼の顔を改めて見た才人は理由もなく、先程までの義侠心を何処かに放り投げ、嫉妬の炎を燃やす。

へーへー、ようございますね、ハンサムってやつは。

剣を構えるその姿、すごく様になってるよ。

特に、お姉さんを背に剣を構えるなんて、なんだか禁断の愛って感じで胸に迫る物があるよね。

ああ、そうさ。どうせ俺は猿ですよ、猿。

ちくしょう、腕っ節ならまけないぞ？

才人は思わず卑屈な心境に陥り、剣先を向けられているにも関わらずブツブツと何やら呟きながら地面にの字を書き始めてしまった。

「な、なんだよお前！ ふざけているのか?!」

「……………うっせえ。ちょっとハンサムだからって、エばってるんじゃないーや」

「んな?! なんだと、この!」

何やら勝手にいじけている才人の言葉に少年は過剰に反応し、あま

り腫れていない端正な顔を赤くして怒り始めてしまう。

そんな彼の怒りを鎮めたのは、意外にも女の子であった。

女の子が怒って才人を罵倒する少年の後頭部を突然乱暴にガツン！

とその小さな拳骨をお見舞いしたのだ。

少年はアダ！ と声を上げて、思わず剣を取り落とし両手で殴られた後頭部を押さえる。

それから恐る恐る後ろを振り返った少年の眼前で、女の子は両手を腰に当て眉を釣り上げて

すこしおっとりとした口調で少年にお説教を始めるのだった。

「バカ！ 助けてくれた人になんて言い草なの！」

「で、でも、姉さん……」

「でもでもでおも無い！ ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！  
この子、わたしの弟なんです！」



女の子は少年を押しつけながら才人の目の前までやってきて、今度は手を体の前で重ね丁寧にも何度も謝罪を重ねて

才人にペコペコとおじぎを始めた。

その仕草は謀らずも、非常に栄養が行き渡っている彼女の胸をとてもとても強調させ、才人の視線を釘付けにしてしまう。

女の子の後ろで殴られた頭をさすっていたトマは、思わず目を奪われていた才人の様子を見て反射的に食ってかかった。

「お前！ 姉さんをなんて目で！」

「トマ！……」

「あ、いや、ゴメン！ 俺、つい……」

「気にしないでください。仕事柄、男の方のそういう視線って慣れっこですし。」

「あ、そういうはお礼もまだでしたね。助けていただいて、本当に……あれ？」

「あ、気がついた？ 俺もスカロンさんの店で働いているんだよ。君の名前は知らないけど、顔は覚えててくれてたみたいだね。いや、偶然通りかかってよかった！ あは、あはははは……」

気まずい。

というか、女の子の豊かな胸に目を奪われてしまったなどとルイズの耳に入れば、きつときついお仕置きを受けてしまう。

才人は後悔と共に冷や汗を流しつつも、未だにその胸から目が離せないでいる情けない自分を呪った。

女の子はそんな正直な才人の視線をさして気にしてなさそうにしてクスリと笑う。

その柔らかな雰囲気はどこか強い母性を才人に感じさせるのだった。

「たしか、ルイズさんのお兄さんで厨房で働いているんですよね？ あ、ごめんなさい。お礼がまだでしたよね？」

本当にありがとございました。私、エメって言います。こっ

ちは弟のトマ

エメと名乗った女の子はニッコリと笑い、後ろで才人を睨むトマにも挨拶とお礼をするよう促した。

しかし、トマは露骨にイヤな顔をしてフン！ とそっぽを向いてしまふ。

余程才人の事が気に入らないらしい。

その憎らしい態度に才人はすこしだけムっとしながらも、改めて自己紹介を行う事にした。

「俺は平賀才人って言うんだ。よろしくな」

「ヒルガサイトさん？ 変わった名前なんですね」

「……サイトって呼んでくれ。それより、大丈夫？」

もちろん、トマの傷のことではなく、エメの事である。

男たちの先程の様子から、一度目や二度目のトラブルではないと判断しての才人の問い掛けだ。

その意図は正しくエメに伝わり、彼女は弟と同じブラウンの瞳をすこし潤ませて消え入るような声で返事をした。

「はい……」

「なんか、事情があるみたいだね」

「ええ、ちょっと……」

言葉を濁す彼女に才人はそれ以上質問を投げかける事をしなかった。

『魅惑の妖精亭』で働く者の中には、他人には言えない事情を持つ

者も少なくない。

あまり根掘り葉掘り聞くのも良くないことだと思ったからだ。

その代わり、彼女の心労をすこしでも和らげてやるべく才人はある提案をする事にした。

「物騒だし、妖精亭まで送ろうか？」

「ほんとうですか？！ それはとてもありがたいです！」

エメはそう言って、朗らかに笑う。

その後ろでは、うーとまるで番犬のようにトマが敵意むき出しの視線を才人に向けていた。

トマの敵意にすこし肩を竦めてから、行こうぜと声をかけ二人を連れて元来た道に戻る才人だった。

以上のように、長く前置きを説明したわけではあるが、兎にも角にも陰ながらルイズの成長を優しく見守る心づもりであった才人は

二人を妖精亭へと送り届けた折、ワインの仕入れの発注を終えたと勘違いしたスカロン店長に事情を説明する事になり

それならば明日からサイトくんが送り迎えをしてあげてね、うちの大事な妖精さんになにかあっては困るから、と

新たな仕事を割り当てられ困惑するのだった。

ルイズの、怒りのこもった視線を浴びながら。

才人はこの時、ただ単に多少面倒な仕事が増えたのだという認識だったのだが、後にその認識を正す羽目になるのであった。

そして場面は、才人が二人と出会った時と同じサン・レミ聖堂の鐘が鳴り、茜色の夕日が沈む冒頭に戻る。



### 5 - 3 : e x t r a | e p i s o d e / 伝説の剣と麗人の唄2 (前書き)

更新停止のお知らせ

ガイドラインが改訂され、本作はR15ないし、R18作品となるようなので今回の投稿を最後に

「小説家になろう」でのガンダールヴは夢をみる。は更新を停止することにしました。

応援してくださった方々には本当に申し訳ないのですが、曖昧なガイドラインに沿って

書き続けるには非常に難しいテーマを含んでいるための措置です。

もし、こんな私のワガママを許していただき続きが読みたい！という方が居られれば

Arcadiaで投稿をしたものか、まとめ用にブログを開設しましたのでこちらでお願いいたします。

ブログは小説用テンプレートを使っておりますので、そこそこに見やすいかも？

いただいた感想や拍手はブログの方にコピペさせて頂きたいと思いません。

本当にごめんなさい。

ブログアドレス

痴れ者ラボ

<http://tubauname.blogspot.com/>



皿洗いは無の境地に通じるものがある。

きつと何を言っているのか理解出来ないだろうが、とにかくそうなのだ。

際どい衣装を来た女の子が、次々と汚れたお皿を持ってくる。

身を乗り出してお皿を置く女の子の胸元について目が行く事に自己嫌悪しつつも、才人は素早くその皿を受け取り流し場の水桶の中に放り込んだ。

それから、軽く汚れを落として皿洗い用の布で皿を挟むようにゴシゴシと洗う。

これを何も考えられなくなるまで、繰り返し、繰り返し繰り返し、繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し繰り返し

「新人りさん、これもお願い……うわ！」

新たに汚れたお皿を運んできた女の子の声で、才人は ” 無の境地 ” からはっと我に帰った。

ついさつきまで異常なほどの量が山積みされていた皿が綺麗に無くなっている。

かわりにピカピカに洗われて綺麗になった皿が山積みされていた。

思考を停止し、ひたすらに皿洗いを続ける内に ” グリムニルの槍 ” がその行為を戦闘の一種だと判断したのか

体の疲労の再現を止め、力をずっと供給していたのだった。

才人はこの時、無限に手を動かし続けられるハルケギニア最強の皿洗いマシンと化していたのだ。

「あいかわらず凄いわね！　こんなに素早くお皿を洗える人が入ってきてくれて、本当に助かるわ」

汚れた皿を運んできた女の子が、感心しながら重ねた皿を才人に手渡した。

胸元が大きく開いた草色のワンピースに黒く長い髪、そして黒い瞳の可愛らしい女の子だ。

活発そうなイメージを与えるすこし太めの眉とその表情は、好奇心で彩られていた。

彼女の名はジェシカ。

信じがたいことに、オカマ筋肉で気持ち悪いあのスカロン店長の娘である。

レベルの高い女の子が多い『魅惑の妖精』亭においてナンバー・ワンの看板娘でもあり、ついでにシエスタとは母方の従姉妹だったりする。

「そりゃ、どうも。ほれ、こんな所で油売ってないでさっさと接客に戻れよ」

「いーの、あたしは」

「よくねえって。いくらスカロン店長の娘だからって、お前この看板娘だろ？」

看板娘がフロアに出ないでどうするんだよ」

「休憩よ、休憩。……それより、人が話しかけてるんだからこっち向きなさいよ」

才人は話しかけてくるジェシカとは反対方向を向いて、器用に受け取った皿を洗っていた。

まるでジェシカの姿を一切視界に入れまいとするように。

「やだよ。お前の方向くと ” 痛い ” 事になるし」

「は？ なにそれ。いーから、こっち向きなつて。お給金、差っ引  
いちゃうよー！」

お給金、という単語を聞いて才人は渋々ジェシカの方を向く。

そして目に入ってくるのは彼女の大きく開いた胸元と豊かな胸。

そこから視線を移動させることが、どうしてもできない。

あああ、くそ。

俺の馬鹿！ エロ犬！ 駄犬！

才人は歯を食いしばり、目を瞑った。

瞬間。

何処からかワイングラスが飛んできて、見事に才人のこめかみに直  
撃し、ぱん！ と音を立てて割れた。

才人は特に倒れるわけでも、痛がるわけでも、騒ぐわけでもなく、  
むしろまたかといった調子ではあ、とため息をつく。

「……なるほどね。ルイズがたまにグラスを投げている気がしてたんだけど、こういう事だったんだ。

グラス代、お給金から引いとかなきゃ、って！ 血！ 血が出てる！」

「いや、気にしないでくれ。俺が悪いんだ。給金も俺の方から引いといてくれ」

ジェシカは慌てて近くにあった布を取って、頭からダラダラと血を流しながらまいったなあ、と呑気に笑う才人に駆け寄る。

「あー、大丈夫、大丈夫。俺、こう見えて相当頑丈なんだ」

「バカ！ 血が出てるじゃない！」

「もう”直って”いるよ」

「嘘おっしやい！ 見せ……うそ、そんな」

「な？ 俺すっげえ頑丈なんだぜ？」

才人はそう言つて、呆然とするジェシカから布を受け取り血を拭きながら二へへと笑つた。

血を拭うと、その下からは傷一つない肌が現れる。

傷は才人の言つ通りすっかり消えていた。

才人はポカンとするジェシカを余所に手馴れた手つきで飛び散つたグラスの破片を集め、血のついた布を流しで手早く洗い

それから何事も無かつたかのように再びジェシカとは反対方向を向きながら、皿洗いの作業に戻つた。

「あなた、相当の変わり者みたいね？」

「なんだよ、それ」

「だって、普通ワイングラスを頭に投げつけられて怪我までしたらもつと痛がるか、騒ぐわよ。」

「なのにあんたは怒りもしないでヘラヘラしてて。」

「ねえねえ、あんたってさ、ルイズと兄妹って嘘でしょ？」

「そんな、事ないよ。親父が遊び人でな、俺は最初の奥さんの子供なの」

「あー、それで顔つきも髪の色も違うんだ？ でも……やっぱり怪しいわね。」

「お兄さんが他人の胸見ただけで、怒ってグラス投げつけてくる妹なんて変なもの」

「妹はブラコンなんだよ、ブラコン」

「ぶらこん？」

「異性の兄弟相手に異常に好意を抱くこと。ほら、接客に出てるエムの弟みたいなのを言うんだよ」



「へー、そういうのぶらこんって言うんだ？　あなた、結構物知りなのねえ。」

でもエメの弟……トマって言ったっけ？　いつも店の裏手で待ってるカツコイイ子。

あの子はお姉さんにワイングラスを投げつけたりしないわよ？

もしルイズもトマと一緒になら、あたしにグラスを投げつけてこないとおかしいし。

……そうねえ、ルイズの場合、どっちかっていうと嫉妬ってかんじ？

あ！　もしかして、道ならぬ関係になったもんだから駆け落ちしたとか？！」

ジェシカは好奇心が強い性格なのか、執拗に才人とルイズの関係について質問をした。

勿論、彼女やスカロンの事を覚えている才人は、本当のことを話しても大丈夫だと思っではいる。

しかし下手に協力をしてもらえるようになると、平民の間に紛れ込んで頑張るルイズの為にしないと考えたので

やはりここは適当に誤魔化すのだった。

「だからー、ちがうって！ ほら、もう行けよ。そろそろ客も増えてくる時間だろ？」

休憩はおしまい！

看板娘は店に出るから看板娘なんだしさ」

「まーまー、そんな事言わずに。このお店で働く子はみんなワケ有りなんだし？」

過去を詮索するような野暮チンは居ないから安心していいんだって」

「ここに一名、その野暮チンがいるけどな」

「あたしは口固いもん。ねえねえ、だからさ、あたしにだけ、本当の所をコツソリ教えてくれない？」

ジェシカはつい、と才人の腕を優しく取り両手で抱きしめて甘えるようにそう言った。

才人はあさつての方向を向きながら、腕を包む柔らかで弾力のあるクッションを必死に感じまいと努力をする。

ねえ、いいでしょう？

ジェシカの甘い吐息が耳にかかる。

他所を向いている事をいいことに、思いっきり顔を近づけてきているらしい。

『魅惑の妖精』亭ナンバー・ワンの称号は伊達ではなく、そのテクニクは男の心理を知り尽くしていた。

おい、やめるよ！ と才人が思わず振り向くと、目に飛び込んでくるのは彼女の顔……ではなく、己の腕を飲み込んでいる胸元であった。

あ、と声を上げると同時にジェシカは才人から素早く離れる。

そして。

ごん！

「……………ごめん」

「……………気にすんな。目を奪われる俺が悪いんだ。しかし、流石にエールのジョッキはグラスよりも痛いな。」

割れないから片付けなくていいし、給金差っ引かれないのは助かるけど」

はは、と苦笑いを浮かべ才人は先程洗った布を直ったばかりのこめかみに当てる。

傷はすぐに跡形もなく消え、手早く布を洗った才人は何事も無かったかのようにエールのジョッキを拾い上げ慣れた手つきで洗った。

そんな才人にジェシカはますます好奇心を刺激されるのであった。

さて。

何やら面白そうな相手を見つけ目を輝かせるジェシカとは对象的に面白くないのはルイズである。

先程から未発達な胸をからかっていた客と揉めて、助けに入ったスカロン店長に「ここで他の女の子のやり方を見学していなさい」と店の隅に立たされていたのだ。

何よあいつ。

そんなに、大きな胸がいいってどういうの？

私がこんなに苦勞してゐるっていうのに鼻の下なんか伸ばしちゃって。酔つ払つた客にお尻や足を触られるし、店長には怒られるし、嫌な奴にもニコニコしろって言われるし。

私の、ご主人様の魅力が一番理解しているはずのあんたが、そんなチチだけ女の胸に目を五秒も奪われるなんて！

あ！ また！

ビキ！ という音を、ルイズは聞いた。

背中が大きく開いてスカートの丈が短い、可愛くも大胆なワンピースに身を包んだ彼女は

白いこめかみに青筋を立て、肩を怒らせながらプルプルと震えさせる。

乳が。そんなにデカい乳がいいのか！ あんにやろう。

まだ見てる！ さつさと視線を外しなさいよ！ 目を瞑るとかやりようがあんでしようが！

！ なによあの女！ サイトに色目使つて！

ちょ、サイト！ そこでなんでニヤけんのよ！

うぬれえ、こ、今度はこのワインの空きビンを……

実際はルイズが思うほど才人はニヤケもしてはいないし、女の子も色目を送ってはいない。

しかし恋する乙女の目というものは、才人が他の女の子と関わるだけでもどうしてもそう見えてしまうものなのだ。

鬼の形相でルイズは、同じく店の隅にあったテーブルの上に並べられていたワインのビンを投擲すべくがしと掴む。

そのテーブルに一人ついて、遠目に女の子を眺めながら静かにワインと食事を楽しんでいた老人が、慌ててその手を掴んだ。

「こ、こら！ お嬢ちゃん！ このビンは僕のじゃ！ 投げちゃいかん！ それにまだ半分も飲んどらんぞ！」

「は、離して！ お仕置きが必要なの！」

「お仕置きが必要なのはお嬢ちゃんじゃ！ さっきから僕のグラスやジョッキを投げおって！」

「いいから！ は、離して！ 手を、離さない！」

「いや、離さん！ こ、こりゃ！ 暴れるんじゃない！ また店

長に怒られるぞい？」

「貴様！ その手を離せ！」

ワインのビンを巡ってもみ合っていたルイズと老人は、その声にビクッと肩と震わせ動きを止める。

喧騒に包まれていた店内もその大声によって、一瞬で静寂に支配された。

そんなに怒らなくても、とつい思ってしまうほど怒りと憎しみが込められた声だったからだ。

果たして声は、ルイズと老人に向けられたものではなく別の席でのトラブルが原因だった。

「離して、ください。お願いします」

消え入るような声が静かになった店内に響く。

鈴のような声の主はエメだ。

店の中央の席で体格の良い男に腕を掴まれ、今にも泣き出しそうな表情でその手を離すよう懇願していた。

男は先日才人がのした借金取りの一人で、強引に少し腫らした顔をエメに近づけている。

そんな彼女と男の隣でトマが剣の柄に手をかけて借金取りを睨みつけていた。

先程の声はトマのものだった。

「お店には、来ないでってあれほど……」

「なんだよ、客として来る分には俺の勝手だろう？」

「貴様！ 最初から姉さんが目的だったくせに！」

「なんだあ？ この店はそれが売りなんだろうが。お目当ての子が



「いや悪いってのかよ？」

「おい、店長はどこだあ！？ 店長を出せ！」

「ごおおおめええんなさああい！ お客様あん、いかなさいましたああん？」

「うおえ！ という声が店のあちこちで上がる。」

「トラブルを收拾すべく、店の奥から男の店長を出せ！ という声に反応して筋肉達磨のオカマが気持ち悪いしなを作って現れたからだ。その気持ち悪い容姿に借金取りの男は少したじろいだが、すぐに威勢を取り戻した。」

「お、おつおう！ この店は客にイヤモンと付ける給仕がいるのかよ？！」

「すうすういませえん！ この子、こちらのエメちゃんの弟なんです。ほら、トマくん裏手でおとなしく待っていようね？」

「う、うるさい！ 僕を子供扱いするな！ それに、こいつは姉さんに付きまとっている借金取りのゴロツキだ！」

「おい、坊主。今は俺はこの店の客だぞ？ なあ、店長さん？」

「そうよ、トマくん。ほら、お願いだから。お姉さんはミ・マトモワゼルにまかせて、ね？」

そう言ってスカロンはパチン、とウインクをしてみせた。

うおえ！ という声が店のあちこちで上がる。

エメの手を握る男もすこし気分が悪そうに、反対側の手で口元を抑えた。

トマは他の客の視線とお願いと言外に言うエメの表情に、唇を噛みながら剣の柄から手を離して

渋々と踵を返し、店の外へと向かう。

「さ、エメちゃんも向こうのお客さんをお願い。ここはこのミ・マドモワゼルにま・か・せ・て」

「おっと、店長。俺はこの子の酌がいいんだがな？」

「き、貴様！」

男がぐいとエメの手を引くと同時に、店の外に出ようとしてたトマが再び大声を上げて戻ってきた。

そして今度は剣を抜いて、男を睨みつける。

店のあちこちからきゃあ！ と女の子が悲鳴が上り、店内の空気はより緊迫した物へとかわった。

「おいおい、この店の給仕は客にイチャモンを付けるばかりか、客に剣をむけるのかあ？」

男はさして動じず、わざと店内に響くような大声で叫ぶ。

どうやらエメへの嫌がらせの一環として、店の営業も妨害すつもりらしい。

周りを見渡しながら他の客を鋭く睨みつけ、視線が合うと何見ているだこらあ！ と凄んだ。

そんな男をスカロンが気持ち悪いしなを作りながらも、必死に男をなだめる。

しかし、借金取りの男はますます興奮して大声を張り上げた。

巧妙にも、街の警邏を呼ばれないよう男は決して暴れたり誰かに暴力をふるったりはせず、ただ声を上げて騒ぐ。

スカロンにしても荒事には慣れているものの、相手が手を出してこない以上こちらにも乱暴な対応をするわけには行かない。

男の罵声はなおも続き、店の中はとてもではないが誰かと楽しくおしゃべりしたり、食事を楽しむような雰囲気ではなくなっていた。

楽しいひと時を期待して店にやってきていた他の客達が、居たたまれなくなつて席を立ち始めそそくさに店をでようとしたその時。

この状況を打破できる、救いの主が現れる。

「なんだ、トマ、お前俺が店終わるまで待ってるって言ったのに我慢できなかったのか？」

店の奥から片刃の大剣を片手に、場違いなほどにこやかに剣を構えるトマの元へ才人がやってきたのだ。

随分と呑気でどこか間抜けにも思えるその声は、店にいた者の視線を一斉に集めた。

「な、なんの話だ!？」

「なんだよ、とぼけちゃって。約束したじゃないか。」

お前、顔はいいのに腕っ節はからきしだから、今度剣を教えてやるってさ。さ、行こうぜ!」

笑いながら才人はガツシリとトマの肩を抱いた。

トマは顔を真赤にして怒りながら、は、離せともがく。

「サイトさん?!」

「サイトくん?」

「あ、て、てめえは!」

「さ、行こうぜ! あ、エメ、今日はもう上がっていいんだってさ。  
な? スカロン店長!」

「え? ああ、ええ。ええ、そうね、エメちゃん、今日は用事があったのよね。お疲れ様。また、明日ね!

「お客さん、ごめんなさいねえ! この子もっ今日はおしまいなんですう! ミ・マドモワゼルがお相手するからゆ・る・し・て!」

そう言つてスカロンは両手で拳をつくり、それを両頬に添えてパチンとウインクをした。

うおえ！ という声が店のあちこちで上がる。

「さ、行くつぜ」

「は、はい…」

「待て！ 俺はまだ、こいつに用が」

そう言つてエメの手を離そうとしない男の腕を、ゴツい大きな手がつかんだ。

スカロン店長の手である。

ミシリ、と音がするほど腕を強く握られ、男は思わず握っていた

エメの手を離してしまった。

才人はじゃ、あとは宜しく店長！ と爽やかに笑い、もがくトマの肩を抱いてズルズルと引きずりながらエメと一緒に店を出ていくのだった。

「ま、待てよこの！」

「おきゃくさああん！ 今日、本当に、御免なさいねえ！ ルイズちゃん！」

「は、はい？」

「厨房にいつて、『魅惑の妖精が作る素敵なステーキセット』を作ってもらってきて！ このお客様に、私からのお・わ・びよあん！」

「うっぷ、は、はい」

「それと、ジェシカちゃん！」



「はい！ ミ・マドモワゼル！」

「他のお客様にワイン一本ずつサービスしてあげて！ みなさあん！ イヤな事は忘れて、妖精さんと楽しく過ごしましょうねえ！」

思いがけぬスカロンの大盤振る舞いの宣言に、店内の客達がわあ！と一斉に湧き立つ。

それを合図として、店の女の子たちがいつもよりすこし大胆に相手をしていたお客にいやーん、怖かったあとか

さあ、飲んでくださいね！ などと語りかけ悪くなった雰囲気は巧みに修復する。

こうしてそれ程間を置かず、店の雰囲気は無事元に戻った。

借金取りの男はというと、スカロンに万力のような力で抱きつかれ何か言おうと口を開くたびに

ああああん、怒っちゃいやあああん！ と気持ち悪い声を上げる筋肉達磨に頼ずりやキスの”お詫び”をされていた。

ルイズが出来上がった『魅惑の妖精が作る素敵なおステッキセット』を持ってくる頃には、すっかりスカロンの腕の中でグッタリとして

流石の彼女もつい同情をしてしまう程の有様となっていた。

男はこの後、店長が直々にステーキを……それも口移しで食べさせてもらえるサービスを受け、息も絶え絶えに退散しする事になる。

他の客達はそんな男の背に、同情に満ちた視線をなげかけるのだった。

一方、才人はというと。

無事エメとトマを自宅へ送り届け、店に戻ろうとした所でエメに引き止められていた。

借金取り達は昼間は人の目もありあまり無茶なことはしないのだが、夜となれば話は変わる。

その事もあって、エメは身入りも良い夜の仕事を運びトマと共に『魅惑の妖精』亭へ働きに出ていたのだと才人に説明したのだった。

「だから、今夜一晩だけでもお願いできませんか？ サイトさんがいてくれるととても心強いんです」

「姉さん！ こんな」

「トマ？ 誰のせいでお店に戻れなくなったの？」

「う……」

「サイトさん、助けてもらった上に身勝手なお願いだとわかっていきます。だけど……」

「いや、いいよ。困ってる人を見過ごす程、俺も腐っちゃいないし」

「本当ですか！？ よかった！」

「かわりに、明日ルイズに俺が店に戻らなかった理由を一緒に説明してくれよな？」

「ボコボコにされるのはかまわんのけど、わだかまりは残したくないんだ」

才人はそういって、大げさに何かに怯えるように震えてみせた。

その仕草にエメはまあ、と言って朗らかに笑う。

対照的にトマは忌々しげに才人を睨みつけている。

エメはひとしきりに笑った後、じゃ、わたし着替えてきますねと言  
い残して寝室の方へ消えていった。

『魅惑の妖精』亭からそのまま才人と自宅へ戻ったので、淡いピン  
ク色の胸元が大きく開いた店の衣装のままだったからだ。

才人はというと、先程からジェシカにしていたように明後日の方向  
を向いてエメと話していたのである。

別にエメの胸元を見てしまってもワイングラスは飛んではこないの  
だが、代わりにトマが才人に食って掛かる為の措置であった。

二人の家は貸家で、かなり狭くてボロい。

入り口の扉を開けるといきなり食事などをする食堂兼居間があり、  
才人はそこでエメに引き止められていたのだった。

この部屋からは台所と寝室へと行けて、寝室の入り口にはすこし腐  
りかけた木の扉が設えてある。

おそらくはトマもそこで寝泊まりしているだろう、部屋はそれだ  
けであった。

「……変な事考えるなよ？ 姉さんには指一本触らせないからな」

「考えてねえよ。お前もあんまりエメに面倒かけるなよな」

「なに?! 貴様なんか」

「ほら、すぐそうやって怒る。今日もそれで迷惑かけただろ？ 店に大きな被害が出たらどうするつもりだったんだ、お前。」

「……だって、姉さんを守る為には仕方ないじゃないか！」

「それが原因でエメが店を追い出されたら元も子もないだろうが。あの男、俺がこの前広場で出した借金取りだろ？ たぶんそれが狙いだっただと思っぜ」

「じゃあ、僕は……」

「男の思惑にまんまと乗って、エメに迷惑をかけただけ。いんや、エメだけじゃないな。スカロン店長やほかの女の子に客にもだ。」

「……」

トマは才人の言葉にうつむいて黙り込んでしまった。

敵意を向ける相手から自分の行いをたしなめられ、自覚して後悔するあたり悪い人間ではないのだろう。

単純なのだ。

素直、とも言ってもいいかもしれない。

こいつはこいつなりに、姉さんの事を考えているんだろう。

ただ、姉さんの事しか考えていないのがマズいんだよなあ……

才人はうつむくトマの様子を見て、そう考えていた。

「借金あるんだろ？ もうちょっとさ、考えて行動した方がいいぞ」

「そんなこと！ お前なんか言われなくても……わかってるぞ」

「そっか、ならいいや。別に説教するつもりでもないしな」

トマは一瞬激昂しかけたが、その言葉尻は消え入るような小さなものであった。

気まずい空気が部屋に流れる。

やがてエメが寢室から戻ってくると、その空気を察して怪訝な表情を浮かべどうしたのとトマに尋ねた。

トマが才人になにか失礼なことを言ったのではないかと、勘違いをしたらしい。

何でもないとトマが答えようとした所で、不意に入り口の扉が外から荒々しく叩かれた。

トマとエメは、はっとして入り口の扉を険しく睨む。

扉はとてもノックとは思えないような乱暴さで、何度も何度も外から叩かれている。

二人の様子からどうやら借金取りがここに来たようだな、と才人は判断してデルフに巻いていた布をほどき始めた。

「おい、エメ！ いるんだろっ？ 話があるから出てこいよ。  
店じゃ具合が悪いらしいからな、わざわざ来てやったぞ！」

扉の向こうから、野太い男の声。

夜分にも関わらずまったくの遠慮のないその大声は、知性をまるで感じさせない。

どうやら『魅惑の妖精』亭で嫌がらせをしていた男が、エメたちが家に帰ったと仲間に伝えたらしい。

トマは舌打ちして剣に手を伸ばす。

その手を才人は布を解いたデルフを担ぎつつ遮った。

「屋内でそんなもの振り回すつもりか？ さっき考えて行動しろって言ったばかりじゃねえか」

「でも！ だからってあいつらは話してわかる相手じゃ」



「話し合いでなんとかなる相手じゃないって事は俺でもわかってる。いいか？　こういう時はな、エメ！」

「は、はい！」

借金取りの男の声に、体をすくませていたエメは突然才人に声をかけられ少しうわずった声で返事をした。

その表情は不安と動揺と、恐怖に染まっている。

「この家、裏口はある？」

「え？」

「裏口だよ、裏口。借金取りどもを家に入れるつもりはないんだろ？」

「あ、ええ、はい。台所から裏の路地に出ることができます」

「よし。そつからとりあえず逃げよう。外なら俺もデルフ……この段平振り回せるしな。」

トマ、テーブルのそつち側持て。扉にたてかけて破られないようにして時間を稼ぐんだ!」

「わかつ……僕に命令するな!」

「いいから早く! ” 考えて行動しろ ” っつの! これで三回目!」

「う、うるさい! いくぞ? 持ち上げるぞ? せえの!」

「よっ、とつと、お前力ねえな!」

「ほっ、とお、け!」

才人とトマはぎゃーぎゃーと言い争いをしながらも、居間にあった

大きなテーブルを罵声と激しいノックがする扉に立てかけた。

そうしている間に扉はノックから、何か体が当たりをしているかのような音を立て始める。

「こつちです、サイトさん！」

「わかった。トマ、行くぞ！」

「うるさい！ 僕に命令を」

才人はトマの話を最後まで聞かず、脱兎の如く駆けた。

エメの脇を走り抜けざまに彼女の手を取り、台所に駆け込んで裏口であろうすこし狭い扉を乱暴に開ける。

外にだれか待ち伏せをしていないかを素早く確認して、エメの手を引いたまま裏路地を走った。

後ろからはトマが抗議の言葉をあげながらついてきていた。

トマの抗議を無視して、才人はエメの小さな手を引いたまま狭く曲がりくねった裏路地を走り続ける。

角を左に曲がり、十字路を右に。

行き止まりのすこし高い塀を乗り越えて他人の家の庭に侵入し、番犬の吠える声に驚きながら再び反対側の路地へ出る。

やがて、エメたちの住む下町と貴族たちが住む区画の境目に流れる大きな川に出た。

上流側には橋が見える。

才人は川の土手を降り、貴族達の住む区画へとかかるその橋へと走った。

握っていたエメの手は、橋の下に来てようやく開放されたのだった。

「はあ、はあ、はあ、もう、ダメ、走れ、ない、わ」

「はっ、はっ、はっ、もう少し、姉さんを、気遣え、この、バカ！」

「そんな余裕あるか。あいつらに金を借りてるエメの立場上、あん

ま派手に暴れるわけにもいかねえだろ」

「はっ、はっ、あんな奴ら、に、遠慮なんて、必要、ない！  
それに、なんで、お前は、息切れ、してないんだよ！」

「鍛え方が違うだよ、お前とはな」

才人はいまだ呼吸が落ち着かないトマの端正な顔に自分の顔を思い  
つきり近づけて、二カつと笑う。

トマは汚い顔を近づけるな！ とその顔をはたこうとしたが、ヒョ  
イと才人に避けられてしまい

そのままバランスを崩して尻餅をついてしまった。

「それにしても、才さんは、すごく、体力があるんです、ね！」

「ん？ まあ、一応こう見えても本職は剣士だからな。

そこらのメイジよりかは強い自信があるぜ？」

「うそつけ！ どこをどう見たら、お前が『メイジ殺し』に、見えるんだよ」

「まったくだ。つまらん嘘など、つくものではないな少年」

背後で第三者の男の声。

才人は振り返りながら、反射的に背のデルフへ手を伸ばし鞘の留め具を外す。

同時に火球が視界に飛び込んできた。

”ファイヤー・ボール” の魔法か！

瞬時に判断をした才人は、背から抜きつつあったデルフをそのまま袈裟に ”ファイヤー・ボール” へ斬りつける。

火球は二つに割れながら、あっけなくデルフの刀身に吸い込まれていった。

追撃が来ないことを確認し、素早くあたりを伺う。

人影は、一つだけ。

デルフを構えながら魔法が飛んできた方向を見ると、土手の上に黒いマントを羽織った男らしき人影が二つの月に照らされていた。

その手には一メートル程のシンプルな杖が握られている。

「ほう。魔法を吸収するとは、変わった剣を使う」

「ふん、不意打ちとは随分余裕の無えこつた。何者だ？」

睨みつけた先の影は、二つの月の光を逆光に浴びてその表情は見えなかった。

背は才人よりもひと回り高く、声は低い。

才人の問い掛けに男は抑揚のない声で答えた。

「それは失礼した。大口を叩く平民につい、杖が出たのだ。しかし、メイジを前にしてはまだその態度とは恐れ入った。どうやら先程の言葉はホラではないようだな」

「質問に答える」

「いいだろう、教えてやる。どうせお前はここで死ぬのだ。」

俺は「煤火」のドニ。その姉弟に金を貸している金貸しに雇われた、用心棒みたいなものだ」

「はっ、金で働くメイジかよ！」

「今の世はそう珍しい事ではなからう。それよりも、仕事の続きをさせてもらうぞ？ 死ね」

メイジの男はそう言って、杖を才人に向けた。

先程の”ファイヤー・ボール”よりも、更に数段小さな火が杖の先からほとばしり、才人に向かってゆっくりと飛んでくる。



「ふん、バカにしてんのか?! こんな種火、デルフで!」

デルフでその小さな火を払うべく、才人がそう叫びながら斬りつけた瞬間。

種火は突如大きく膨らみ、火球というよりも爆炎を上げて才人を包み吹き飛ばした。

その炎はすさまじく、炎の尾を引かせながら才人を空高く舞い上げたのだった。

才人の視界が炎の赤一色に染まる。

「サイトさん!」

エメの悲鳴のような声が遠ざかりながら聞こえ、次いですべての音

は水音に変わった。

川の中まで吹き飛ばされ、才人は水中に落ちたのだ。

幸い川は浅く、才人はすぐに起き上がりデルフを構えることができた。

追撃は……無い。

その行動は歴戦の勇士にふさわしく、攻撃を受けたにも関わらず動揺は一切見られない。

しかし、その心中は行動とは裏腹に激しく混乱していた。

はかな！

デルフで吸収できない魔法？！

そんなもの、今までなかったぞ？！

土メイジが飛ばす岩石とかならまだわかる。

岩石をコントロールする魔力を吸い取れば、岩が元の勢いで飛んでくるだけだから。

だけど、炎は違う。

魔力を、魔法を吸い取れば炎は消える。

消えるはずなのに……あいつのあの魔法は消えるどころか、あそこ

から更に爆発しやがった！

才人は混乱しながらも、メイジを見た。

不可解な火の魔法を使うメイジは、才人の事など見向きもせずゆっくりと土手を下り

姉弟のいる橋の下を見ていたのだった。

どうやらあの魔法で才人を仕留めたと思っているらしい。

反撃のチャンスではあったが、才人の視線は別のモノに釘付けとなっていた。

駄目だ！

そいつに、剣を向けちゃだめだ！

急いで起き上がった才人が見たモノは、剣を抜いてメイジに斬りかかるトマの姿だった。



それは子供の頃誰もが見る、悪夢のような感覚だった。

体はまったく言う事を聞かず、小指一つ動かさない。

声も上げられず、誰かの叫びは遠い彼方から聞こえてくるようだ。

暗い人型の影はゆっくりとこちらにやってくる。

影は炎を操るようで、幾人もの大の男を一瞬で打ち倒す者を先程目の前で焼いてみせた。

それも、いとも簡単にだ。

精一杯の虚勢で構えた剣先は小刻みに震え、やけに重く感じる。

空には二つの月。

本来闇であるはずの夜のトリスタニアを、明るく照らしている。

しかし、己がいる場所にはその柔らかな光は届かない。

逃げ込んだ橋の下、同じようにいつも柔らかかに笑う姉もその影に恐怖と絶望を感じているのが背中越しにもわかる。

それでも姉は、恐怖によって足を竦ませたまま自分の名を叫び逃げるように声をあげていた。

「姉の方を無傷で連れてくるようにと言われていたんだが、弟は何も指示されていないしな。」

少年、今剣を引けば命だけは見逃してやる」

影はそう低くつぶやくように言った。

トマは震えながら剣を構え続ける。

姉を守るといふ強い意志の現れだけではない。

恐怖によって、それ以上動けないのだ。

カチカチと歯を鳴らし、同じリズムで「煤火」のドニと名乗ったメイジに向けた剣先が震える。

「……そうか。ならば仕方ないな。メイジに剣を向けると言う事の意味を教えてやるさ」

一歩ドニは前に出て、だらんと下に向けていた杖をゆっくり持ち上げた。

杖の先に小さな火が集まり、やがて球状となる。

火の魔法 ” ファイアー・ボール ” だ。

火球が人の頭程の大きさとなった時、ドニは杖振る。

ポウと炎は音をたててトマの体を焼かんと飛んだ。

その光景は恐怖で目も閉じることができないトマにとって、とても

ゆっくりと感じられる。

影との距離は十メートルも離れてはいない。

炎はすぐに少年の体を焼くだろう。

目も閉じる事ができないトマはささやかな抵抗を行う為、カチカチと根が合わない歯をくいしばる。

そして。

火球は少年を焼くことはできなかった。

何かが空気を斬り裂きながら川の方から飛んできて、目の前を火球を飲み込みながら通過したのだ。

え？ と混乱しながら何かが飛んでいった先を見ると、片刃の大剣が地に刺さっていた。

それが才人が持っていたデルフリンガーだと認識した瞬間、今度は川の方からどお、と大きな水音が上がる。

慌てて振り返ったトマが見たものは、斜めに傾いた巨大な水柱。

ざざと大量の水が落ちていく音と共に、今度は正面で何かが地を滑るような音がした。

めまぐるしく視線を移動させ、再び元の位置に戻したトマが見たものは「煤火」のドニが立っていた場所に



才人が一人、どこに隠し持っていたのか短槍を地面に突き刺している姿だった。

逆手に持っていた槍を地面から引き抜きながら才人は上空を睨む。

トマはその視線の先を追うため慌てて橋の下から才人の近くへと駆け出し、夜空を見上げると

赤い方の月を背にして「煤火」のドニが宙に浮いていたのだった。

「驚いたな。あれをまともに食らってそれ程動けるとは」

「俺も驚いたぜ。まさか、避けられるとは思わなかった。

お前、戦闘メイジだろ？ 当然ただの用心棒じゃねえよな？」

才人の問いに、ドニは沈黙で返す。

貴族＝メイジである事が一般的であるハルケギニアにおいて、貴族籍でありながら領地を持たないメイジは多い。

そのようなメイジ達は主に家督を継ぐ事のない次男坊や三男坊だっ

たり、領地経営に失敗して国替えを余儀なくさたり

又は何らかの問題を起こして領地を没収された者が多数を占めていた。

才ある者は各地の有力者が抱えている魔法が関係する産業への参画を求められたり、王宮へ出て役人になったりするのだが

中には才無く”落ちぶれて”行く者も出てくる。

そういった者は傭兵どころか下っ端の警備隊にも入れず、街の裏稼業での用心棒をやったりするのだが、ドニの魔法はどう見ても

”落ちぶれた”者のそれではなかった。

特に戦闘メイジならば尚更のことである。

国家にとって最も必要とされるのは直接的な軍事力である戦闘メイジであり、たとえ常備軍に就かなくともそれだけの実力者が

諸侯軍や大傭兵団へのスカウトも受けず、街の用心棒などに就くのは不自然な事なのだ。

更に、軍事費の削減を背景として近年常備軍から傭兵団の雇用を主とした非常備軍への切り替えが各国で進められており

戦闘メイジのスカウトは熾烈を極め、彼らが街で平民相手に力を振るう事などはまずない。

加えてトリステイン王国は現在、神聖アルビオン共和国と戦争中で

ある。

そんな状況下、手練れの戦闘メイジが軍務に就くでもなく、街のゴロツキの用心棒をしている。

アルビオンの間諜として、疑われても仕方のない状況だ。

才人の問いは、その事を暗に示すものだった。

つまり、お前は ” 何処の国の者 ” だ？ と。

「……ふん、答えられねえよな。逃げるなら今夜中にしとかねえと、直ぐに衛士隊がお前ん所に行くぜ？」

「……その心配はいらん。試しに衛士隊にでも街の警備隊にでも駆け込んで見るがいい。」

そら、調度良い事にあちらからやってきたぞ？」

ドニが杖を持っていない方の手で川の反対側を指差した。

才人はその方向へ警戒しながら目を向ける。

川の対岸は貴族たちの居住区であり、その向こうには白い王宮が月光に照らし出されて見えた。

月の光を白く輝く王宮の城壁が見える夜空に、黒い点が幾つか浮かび上がっている。

王宮の衛士隊か、はたまた貴族街の警備隊が駆る幻獣の影だ。

「ふん、貴族街の近くでいささか派手に暴れすぎたか。運がいいな、貴様ら。今日は見逃してやる」

「まで！　こんにゃろっ、降りてきやがれ！」

「少年、名は？　お前のような平民の手練れは初めて会った。名を覚えておいてやる」

「ふん、だーれがバカ正直に話すか。　”イーヴァルディの勇者”  
とでも覚えとけ！」

「くく、平民のおとぎ話のあれか。なるほど、言い得て妙かもしれないな。」

さらばだ、槍と剣を持つ用心棒よ」

ドニはそう言って、下町の上空を飛び去りそのまま街の中へ消えていった。

その姿が見えなくなるのと同時に、ドサと音をたててトマは座り込んでしまう。

同様にエメも安堵の為かその場にへたり込む。

才人はそんな二人を一瞥し、投げたデルフを回収すべく地に突き立ったままのデルフのもとへ足を運んだ。

「ひでえぜ相棒！ もうちょっと優しく投げてくれよ！」

「すまん、デルフ。焦ってたもんだから、ついな。それに槍だと土手ごと吹き飛ばしちまうし……」

「うわ！ 剣がしゃ、しゃべった！」

「なんだトマ。インテリジェンスソードは初めてみるのか？」

「あん？ 坊主、剣が喋っちゃ悪いって言うのか？！」

「は、話には聞いた事があるけど……初めてみた」

「いいだろう？ やんないぞ？」

「誰がそんなボロつちい剣をほしがるか！」

「おうおうおう、ボロとは言ってくれるじゃねえか！ 一体誰がためえに迫る魔法を消してやったと思ってるんだこのガキ！

大体、弱い癖にイツチヨ前に剣なんざ振り回しやがって！」

「な、なんだと！」

「いい争いは後だ。警邏か衛士の連中が来るぞ？ エメ、立てるか？」

「そりゃねえぜ相棒！ もうちつと俺にもしゃべらせもが……」

トマに文句をいい足りないとはかりにカタカタと震えるデルフを強引に鞆に収め、才人はエメに手を差し出しながら尋ねた。

しかしエメは地面にへたりこんだまま、申し訳なさそうに首を横に振る。

「ゴメンなさい……腰が、抜けちゃって……」

「そか。トマ、お前は一人で立てるよな？ エメは俺が背負うから、お前は……」

「だっ、ダメ！ ダメだ！」

「あんだよ。非常事態なんだし、背負うくらいいいだろ？ 愚図愚図してると、役人に捕まっちゃうぞぞ？」

「違うんだ！ いや、違わなくもないけど……」

「なんだよ。はっきりしねえな」

「その……>Font Size" 1"<実は僕も……>/Font<」

「あん？」

「>Font Size" 1"<だから、僕も腰が抜けちゃって……>/Font<」

「んん？ 聞こえないぞ？ なんだって？ 怪我でもしたのか？」

「だから！ 僕も腰が抜けてしまったんだよ！」

夜目にもわかるほど顔を真赤にしてトマは叫んでいた。

才人は腰と額に手を当てて、はあ、と大きく一つため息を吐く。

頭上では竜騎士隊が駆るドラゴンの翼の羽ばたきの音が聞こえていた。



どうやら貴族街の近くということ、王宮の周りを警備していた竜騎士隊の部隊が直接やってきたらしい。

仕方ない。

ここは大人しく捕まっておくか。

二人を抱えて無理に逃げても、騒動を起こしていた自宅をすぐに突き止められるだろう。

俺はともかく、エメヤトマがあらぬ疑いをかけられてしまうかもしれない。

後が怖いけど、ルイズに口利きしてもらって釈放してもらおうか。

あいつたしか、姫さんからなんか許可証みたいなものもらってたし、なんとかなるだろう。

それに……

地に降り立ち自分たちを包囲しつつある竜騎士隊など目もくれず、才人は「煤火」のドニが消えた下町の空を一睨みする。

あの用心棒もアルビオンの間諜かもしれねえしな。

才人はそう考えながら、次々と降りてくる竜騎士を見て怯えるエメとトマに心配するなと声をかけた。

結局、この後竜騎士隊によって貴族街の警備部隊に引渡された三人

はコツテリと絞られる事になる。

一応連絡と確認をするために『魅惑の妖精』亭にやってきた隊員によつて、ルイズが迎えに来た頃には朝になっていたのだった。

「なんでこつなるのよ!」

早朝。

『魅惑の妖精』亭のとある一室。

部屋、というよりも屋根裏の物置きと行った風情であるその一室で、ルイズは思わず叫んでいた。

つい一週間前までは才人の腕の中で眠りから覚め、彼の匂いを胸に吸い込みながら伸びをして柔らかな朝日を浴びるべく

窓のカーテンを開くといった爽やかで穏やかな朝を迎えていた彼女である。

しかし、その日の朝は最悪のものだった。

まず、寝ていない。

これは地味にイラついて、とても不快なのである。

それから朝方まできわどい衣装に身を包み、身を粉にして働き続けた拳客とのトラブルを重ね続けて

お給金どころか壊した店の備品の請求書を渡され、ひどく落ち込んでいた。

肉体的にも精神的にも疲労困憊になり、部屋に戻ると今度は才人がいない。

無人の部屋に足を踏み入れた時のルイズの落胆は非常に大きかった。

次いで、もしかしたらあの助けた女の子と一緒にいるのかもしれない、と妬心が湧き上がる。

あんにやる！

せめて、今日は頑張ったね、俺はルイズが頑張るところをちゃんと見ていたよって優しく慰めてもらおうと思ったのに！

あいつ、どこをほつつき歩いてんのよ！

涙目になりながらも激高して、思わず壁を蹴り上げた所でルイズの名を呼ぶ声の下から聞こえてきた。

スカロンが、一階の店の方から彼女を呼んだのである。

怒りが収まらぬまま再び店の方へ降りて行くと、今度は街の警備隊の隊員らしい若者が立っ

ていて、事の顛末に心当たりがあるか威けだかに尋ねられ、アンリエッタに貰った許可証を片手に詰所まで案内、というか連行されたのだった。

少し乱暴に詰所に案内されたルイズがそこで見たものは、才人と昨夜の二人が警備隊の隊長に取調べを受けている光景ではないか。

よっと呑気な笑顔で挨拶する才人を見て、怒りと疲労が一気に押し寄せてくるルイズ。

話を聞けば、どうやら貴族街の近くで派手に暴れたらしい。

なにやってんのよ、こいつは。

女の子送っていただけなのに、どうしてそんな事になってるのよ！

ルイズはきー！ となりそうなのを必死に我慢しつつ、慇懃に対応をしていた部隊長に許可証を見せ

自分の身分と任務を耳打ちして明かし、才人を引き取ったのだった。

人が変わったかのように恐縮する隊長以下貴族街警備隊の面々の丁重な見送りを受けながら、ルイズは才人への怒りが

押し寄せる疲労と眠気によって萎えていく事を実感する。

……もう、いいわ。

今はとにかく、サイトの腕の中で眠りたい。

抱っこしてもらって、ぐっすりとおの固いベッドで眠りたい。

タバサやあのメイドの邪魔は入らないし、キュルケもちよっかい出してこないし、そう考えればあそこは天国よ。

私の私たちの、秘密の楽園。

うふふ、そんな二人きりの場所で2ヶ月も一緒に居られるなんて、なんて素敵なのかしら。

それに……

今は私も ” 平民 ” なのよね。

貴族じゃないもの、 ” 間違い ” があっても別に不名誉な事じゃないわ。

そうよ、サイトだって毎日 ” その気 ” になっちゃって、寝てる時なんてベッドの中で私の背中に ” 当たって ” いるもの。

私がちよつと強引に誘えば、きつと拒めないわ。

うふ、ふふふ、そして、そしてそして、 ! そ、そんな事をしろっていうの?! サイト、いや、そんな……

いつの間にか妄想という名の現実逃避を始めたルイズは、頬に両手を当て顔を上気させながら

朝もやのかかる通りで独り言を不気味につぶやく。

疲労と眠気が彼女を正常でない状態に導いていたのだ。

「ルイズ? おーい、エメとトマを自宅に送るから寄り道するぞー? 聞いているかー?」

「ルイズさん、あんなに怒って口もきいてくれなく……」

「気にすんな。アレは怒っているんじゃない。たまに ” ころ ” なるんだよ」

「そう、なのか？ しかし、すごいなルイズさんは。よくあの頑固そうな隊長を説得できたなあ。」

「きちんとお礼も言いたいんだけど……元に戻らないのか？」

「そうね、わたしもちゃんとお礼を言いたいわ」

「まあ、今夜の仕事までには元に戻るだろ。さ、いこうぜ。おい、ルイズー、行くぞー」

「>Font Size” 1” <ダメ、よ、サイト、そんな……  
こんな格好、恥ずかしいわ……これじゃまるで>/Font<」

まるで、熱にうなされているかのようにブツブツとつぶやき、才人達の後に続くルイズ。

疲労と眠気が正常な思考を阻害し、器用にも歩きながら夢を見ていた彼女が現実を引き戻されたのは

『魅惑の妖精』亭に帰ってきてからである。

自室の扉を閉める音にやっと我を取り戻した彼女が見たものは、エメとトマの落胆した表情であった。

「……へ？　なんでアンタ達がいるの？」

「は？　ルイズ、お前大丈夫か？　一緒に見てたじゃないか」

「何を？　えっ？」

「まったく……。すっかりしてくれよ。エメとトマの家が借金取りどもに派手に荒らされて、大家に追い出されたんじゃないか。行く宛もないし俺らの部屋に泊めてやるうぜって俺が言ったらお前、『いい！　いいわよ！』って言ったの憶えてないのか？」

覚えてない。

というか、詰所を出たあたりから眠気と疲労で茫として記憶が曖昧



だ。

覚えているのは、才人が私の足をつかんで……あんな、あんな格好で……

「おい、ルイズウー？ 起きろー。だめだ、こりゃ。今日はこいつも頑張ったんだろうな、半分寝てら」

「……やっぱり、ご迷惑でしたら」

「いいっていいって。あ、トマ、スカロン店長に借りた毛布はそっち置いとけ。そこはネズミの巣の入り口あるから」

「うわああ！ ね、ネズミはダメ！ ダメダメダメ！」

「なんだよ男のくせに。大丈夫、食い物持ち込まない限りは悪さしやしねえよ。」

あ、コウモリの位置にも気をつけるよ？ フンが降ってくるから

「ひい?! 気がつかなかったけど、天井にあんなに沢山！

ね、ねねね姉さん！ やっぱり他を探そう！」

「他って、どこにそんな当てがあんだよ。コウモリもネズミもすぐに慣れるって」

「うるさい！ 姉さんをこゝこんな場所で寝かせるわけには」

「あら。わたしは平気よ？ トマの方が怖いんじゃない？」

「ねえええさああああん」

ぎゃあぎゃああと騒ぐトマと才人の声で、船を漕ぎ始めていたルイズがハッと起きる。

甘美な妄想の続きを夢の中で見ていた彼女は、現実に取り戻され再び落胆したのだった。

さ、最悪な朝だわ。

つぶやきは、騒ぐ二人の声にかき消されていた。

辛い任務だが、唯一の安息の場であり才人と二人きりで過ごせるのがこの部屋だ。

それが……

一夜明けると住人が一気に二倍にふくれあがり、しかも一人は女の子で忌々しい事に胸が大きい。

きつと、あのメイドよりも大きい。

下手するとキュルケよりも、大きい。

当然、私よりも大きい。

こんちきしょう。

ていうか、最近の才人の周りには常に女の影が見え隠れしているよ  
うな気がする。

こいつ、背も高くないし、顔も今ひとつだし、ヒゲも生えてないし、  
どこにもモテる要素があるのかしら？

私は好き、だけど。

いや、そうじゃなくて。

そういつ話じゃなくて！

「どっしてこうなるのよ！」

「なんだよ、ルイズ。まーた話聞いてなかったのか？」

「聞いてたわよ！ その二人が行く場所が無いから、この部屋で面倒みるって事なんでしょ?!」

「知ってるじゃねえか」

「そうじゃなくて！ せつかく、しばらくは二人きりになれると思っただのに！」

「んな事言ったってなあ……」

「やはり、ご迷惑なようですから……」

「う、ぐ……べ、別に出て行けって事じゃないわ！ ただ、私は……」

「まあまあ。ルイズ、お前疲れてんだよ。最近頑張っていたもんな？」

「そ、そうよ！ 私このところ、すっごく頑張っていたんだもん」

「だよな。なあ、エメ。今夜は店に出るんだろ？ 今日にはひとまず寝ないか？

昼頃起きて、スカロン店長に言われた店の掃除をしながら続きを話そう。

ルイズもかなりつかれてて、話聞ける状態じゃないみたいだし」

「え？ ……ええ、そうみたいです。ルイズさんさえそれでよければ……」

「それでいいよな、ルイズ？」

「……納得行かないけど、それでいいわ。今はまともな判断が出来そうにないし」

半分目を閉じ頭を前後に揺らしかけながら、ルイズは答えた。

『魅惑の妖精』亭での仕事は、つい最近まで貴族生活を行っていた彼女にとってかなりきつい。

疲労も眠気も限界であった。

才人の提案は緊張のし通しだったエメとトマにも有り難いものだったらしく、毛布に潜り込んだ二人はすぐに寝息を立て始めた。

ルイズもいつも使っている足が折れ傾いたベッドに潜り込み、才人の腕を枕にしてようやく幸せな眠りにありついたのであった。

それから。

日が高く昇り正午を過ぎて、気怠い午後となった頃。

いつもより多くの人数で掃除を行われたフロアの隅の席で、ルイズとエメ、トマそれに仕込みを手早く終わらせた才人が座り

昨夜何があったのかなどを話していた。

「つまり、借金取りのメイジの用心棒が出てきて、貴族街の近くで戦闘になったってわけね」

「そういうこと。結構強い戦闘メイジでさ、妙な魔法を使ってたんだ」

「戦闘メイジが用心棒してたの?! あんたが油断したわけじゃなくって?」

「いんや、あれは戦闘メイジだったよ。普通のメイジに俺の奇襲を避ける事ができるとはおもえないし」

「戦闘メイジ、ってなんですか?」

「文字通り、戦闘に特化したメイジの事よ。  
大概は軍属だったりするんだけど、流石にこんな下町の用心棒をやってるなんて聞いたこともないわ」

「戦争やってる今なら特に、な」

「退役したメイジかなんかのアルバイトじゃないのか?」

「いんや、それはない。退役までいったなら十分な年金も出るし、それにあいつの声は老人のそれじゃなかったら?」

「それもそうか」

「……なにせよ、報告をしとく必要があるわね」

「報告？」

「あ！ いや、こつちの話。それよりも エメ、だっけ？」

あんなんでまたそんな借金背負って危ない連中に狙われてるのよ？」

ルイズの問いに、エメは下を向いて黙り込んでしまった。

そんな彼女をトマは悲しそうに眺めている。

「言いたくないならいいさ。な？ ルイズ」

「ダメよ、サイト。こういう事はキツチリしとかないと。あんたも成り行きとはいえ、二人のために命をかけて戦ったんでしょ？」

私も自分の使い……兄が傷つけられてこのまま黙っているつもりはないわ。地獄を見せてやるんだから」



「お、おい、そんな大げさな」

「本気よ？ あんたの服、濡れてたけどあちこち燃えて出来た穴が開いてたじゃない。

あんた相手に戦って、ちょっとやそつとの火の魔法じゃああはならないわ」

「は、はは……いいじゃないか、あれ、お前の服と一緒に買った安物だったし？」

「良くない！ 見てなさい、絶対ただじゃ置かないんだから！ と、いうわけでエメ。それと、トマ。あんたでもいいわ。事情を話してもらおうよ？」

「やめとけて、ルイズ。大体、事情を聞いてどうすんだよ？」

「決まってるじゃない。そいつらの居場所を突き止めて、まるごと吹き飛ばしてやんのよ！

みてなさい、私のサイトに手えだしたらどうなるか、トリスタニア中の女の子が見えるくらい派手に爆砕してやるわ」

黒い陽炎のようなものを背にして鬼気迫るルイズの様子に、才人は戦慄した。

超怖い。

本気で怒っている。

ていうか、最後は何か別の意味に聞こえたのは気のせいだろうか。

「わかりました。事情をお話、します」

「姉さん?!」

「いいのよ、トマ。わたしのせいで、ルイズさんの大切なお兄さんが傷ついたもの。」

「サイトさんは大丈夫って言ってたけど、あんな爆発に巻き込まれて無事なはずないでしょ？」

「同じお部屋に泊めてもらうわけだし、話さないのは不公平よ」

「いいのか？ エメ」

「はい」

エメは尋常ではない様子のルイズにすこし怯みながらも、意を決したように顔を上げそう言った。

そんな彼女を心配そうにトマは見ていたが、姉の決意を察してか何も言わなかった。

「すべては、このアザから始まりました」

そう言ってエメは立ち上がり、干草のような色をした普段着のボタンを外して胸元をあらわにした。

豊かな胸ときめの細かい肌が露出し、その左の胸元に鳥のような形の小さな赤い痣が見える。

「このアザは、『ロフゾー・クイ・シャンテ・ド・シャルム・ブル  
ー（魅了の青い鳥）』というものだど、我が家に代々伝わっていま  
す。」

「青い鳥？ このアザは赤いけれど……」

「わたしの家は元々はメイジの家系でして、当時はちゃんと青かつ  
たって聞いています。」

メイジ以外の血が混じって、段々赤くなっていったのだろうとい  
う話です」

「へえ。エメとトマって元貴族だったのか」

「何代も前の話ですよ。わたしもトマも、生まれた時から平民で当  
然杖も握ったことは無いんですよ」

「で？ そのアザと借金、どんな関係があるワケ？」

「なんでも、当時の私たちのご先祖様はこのアザを持つ人間の精神  
力を使う、特殊な魔具を使っていたらしくて。」

その魔具を今も研究していらしたとある貴族様が、ある日家にや  
ってきたのです。」

どうもその魔具はこのアザを持つ人間にしか扱えない代物だったらしく、どうしてもわたしの力が必要だとか話されていました。しかし、ご先祖様がメイジだったとはいえわたしは魔法も使えない平民でしょう？

変なトラブルに巻き込まれたくないですし、それを理由にお断りしていましたら今度は結婚を申込まれました……」

「はあ?!」

「へ? なんでそうなるんだよ?」

「わかりません……。本気だったのかもしれないし、単にわたしの協力がどうしても欲しかっただけなのかもしれません。」

とにかく、結婚を申込まれ、同時に法外な結納金も持参されて……それに飛びついたのが父様でした。」

「父様、ねえ」

「ええ、腐っても元貴族といきましょうか、わたしそういった教育は一応厳しく受けてたんですよ？」

ねえ、トマ?」

「僕は男だから姉さん程厳しくなかったけどね」

トマは面白くなさそうに、エメの言葉に注釈をつけた。

一般的に元貴族が娘だけに厳しい躰を行うにはわけがある。

嫁の来てのない貴族が、貴族の血筋を持つ平民を妻に迎える事がごくまれにあるからだ。

元貴族の平民にしても、血筋が一部でも再び貴族籍の中に復帰するのでこういった事自体は珍しいことではない。

無論それではお家再興となるわけでもなく、更にその中で実際に貴族と結婚ができる者は殆いないわけなのだが。

「それで？ 親父さんが結婚に同意したって流れなんだろう？ 大金も手に入るし、借金なんてこさえる風にもみえねえが……」

「ええ。そこまでは良かったんです。

わたしも、お貴族様に嫁ぐことができれば生活も楽になるし、トマだっていい奉公先が見つかるかもしれませんから。

ところが、ある日父様が誰に吹き込まれたのか貴族籍を買い戻すなどと言い出しまして」

「貴族籍を買うって、ゲルマニアのか？」

「いいえ。トリステインのです」

「ちょっと！ それ」

「ええ、犯罪……といえますか、絶対実現できないことです。いくら元メイジの家系だとは言え、トリステインで貴族籍をお金で買う事など不可能でしょう？」

「まあ、な。平民だ貴族だって意識がすっげえ強いお国だし」

「でも父様は……」  
「確かな筋だから大丈夫だ！」  
「と言い張りまして」

「それで？ 結局買えたの？」

ルイズの問いに、エメは自嘲気味に笑って首を振った。

「もちろん、ダメでした。それどころか、ある日王宮の衛士隊がやってきて父様を連行して行きました。」

一応未遂だった事と、例の貴族様の口利きもあってお金も没収されただけで済んだのですが、莫大な保釈金を要求されまして……」

「それで借金に手を出したってわけか」

「はい……。父様を無事保釈できたのは良かったのですが、この一件でわたしと貴族様の婚約も駄目になりました」

「そりゃ、そうでしょうね。平民を娶るだけでも世間体が厳しくなるのに、その上犯罪者の娘となると」

「おい、別にエメは悪くねえぞ？」

「貴族社会ってのはそうは思わないのよ。私だってエメが悪いとは思ってないわよ」

「いいんですよ、サイトさん。ルイズさんの言うとおりで、同じこ



とを言われました。

父様はせめて婚約だけでも思い直してもらえるよう、その貴族様のお屋敷にお願いに行ったのですが」

「が？」

「……あまりにしつこく頼んだのか、無礼討ちとしてその場で……」

「ひでえ話だな」

「……辛いこと聞いちゃったわね」

気まずい空気が流れる。

特に本当は貴族であるルイズにとって、どこか居心地の悪い話であった。

そんな暗い空気を払拭するようにエメは少し明るい口調に戻して、形の良い眉をあげながら

逆にルイズを慰めるように話を続けるのだった。

「いいんです。欲に目がくらんだ父様が悪いんですから。そんな訳で、わたしたちには借金だけが残ったんです」

「そっか……」

「でも、なんかおかしくない？」

「何がだよ？」

「だって。その貴族は始めは魔具の研究をするためにエメの所に来たんでしょっ？」

「はい……」

「で、なぜか結婚の話になって。

そこからエメのお父様が無礼討ちされるまで、あまりに不自然よ」

「どじこら入んがだよ？」

「話聞いてると、結婚そのものが魔具の研究の為でしょう？」

なのに犯罪者の娘だからって婚約破棄するだけならともかく、婚約破棄を思い直すよう説得に来たお父様を無礼討ちするなんて。

それも、保釈金こそ出してはくれなかったけど、口利きまでしたそうじゃない。

いくら貴族でも、一度助けた相手を普通そんなに簡単に無礼討ちなんてしないわよ？

妾としてなら、とか借金を立て替えてやる代わりに実験に協力しろ、とかの方が余程自然だわ」

「うーん、そう言われてみれば……なあ、トマ。お前から見て、その貴族はエメに惚れていたか？」

話題を振られたトマは、端から見てわかりやすいほど不快な顔をしながら答える。

「いや、あいつの姉さんを見る目つきは、そんなものじゃなかった。他のメイジと一緒に、動物でも見るかなような印象だったよ」

「ふうん。エメ、よくそんな奴の所にお嫁に行こうだなんて決心がついたな？」

「そりゃ、どちらかと言えばイヤでしたが条件がとにかく破格だったんです。

生活も楽じゃなかったし、母様も早くに亡くなっていました父様もあまり体が丈夫ではありませんでしたし……  
父様やトマの今後の生活を考えると……」

「ってことは、相手は結構お金持ちの貴族だったのね？」

「ええ。会計検査院という所の役人だと聞きました」

「ちよっ、それすごいエリートじゃない！」

「そうなのか？ ルイズ」

「すごいもなにも、トリステイン王国の国家予算の収入支出をすべて監督する機関よ、会計検査院って。

アンリエッタ女王陛下ですら、おいそれと人事を行えないほどの独立性をもっているのよ？」

「へえ」

「一部の特権貴族や税務院の収入収支も厳しく監督するから、そこに務めている貴族ってのは余程のエリートか  
代々専属で務めている門閥貴族位ね」

「あの方、そんなにすごい貴族様だったんですか……」

「ただの嫌味なやつにしか見えなかったよ」

「まあ、会計検査院なんて余程の大貴族が税務院に関わりが無いと知らない人が殆どでしょうね。

平民がその名を聞いてもピンとこないのは仕方ないと思うわ。

でも、ますます怪しいわね、そいつ。

あそこに務めている役人が、実験の為に平民と結婚までしようとするなんてどう考えてもありえないわ」

「へえ、そうなんだ。しかし、ルイズさんは物知りだね」

「え？」

「ほんと。それにすぐく、頭がいいし。わたしなんかより、ずっと貴族様みたい」

「そ、そんな事ないわよ?! ほら、お兄ちゃんなんてこんな、バカっぽい猿みたいだし!」

「そ、そうそう! こいつ、たまに鋭いけどいつもはもっとバカなんだぜ?」

手先もおっそろしく不器用だし、たまに寝てる時歯軋りするし!」

「うそっ?! 私寝てる時そんな事してるの?!」

「た、たまにな? ストレス溜まってるとかやってるぞ?」

「うわぁ……それ、すごく凹むわぁ……」

再び、気まずい空気。

もっとも、今回は先程よりもはるかに呑気な雰囲気ではあった。

女性としてルイズに少し同情しているのか、いつもよりも更に遠慮がちにエメが話題を元に戻すべく口を開く。

「あ、あの……」

「あ、ごめんごめん。と、とにかくね？ その貴族にしても、お父様の件にしても

それに戦闘メイジを雇っている借金取りの件も、アンタたちの周りには色々と不自然な事が多すぎるわ。

私にちよつとした”ツテ”があるから調べてあげる」

「ほ、本当ですか?!」

「ええ。もしかしたら助けになるかもしれないし。

それにこつちとしても、正直何時までも部屋に居座られちゃ困るしね」

「俺は別に困らないぞ?」

「私がやなの! >Font Size"1" <折角二人きりで  
過ごせると思つた矢先にまつたく……>/Font <」

「良かったね、姉さん!」

「ええ！ これもきつとブリミル様のお導きに違いないわ！」

手を合わせ、喜ぶ二人を見てルイズは拗ねた表情を崩し、一瞬柔らかに微笑んだ。

どんなに不本意ではあっても、やはり善行は心地よい。

いい事をして感謝されるのも悪くないわね。

そう思いなんだか心が軽くなったように感じたルイズは、ある事に気がついてしまう。

「ちょっと！ あんたはいつまでエメの胸元を見てるのよ！」

「え？ あー！」

「貴様！ー！」



「ま、まで！ 誤解だルイズ！ お、おちつけ！」

慌ててはだけた胸元を元に戻し、顔を赤らめるエメ。

気色ばみ、才人に殴りかからんと立ち上がるトマ。

ただならぬ殺気を感じてトマよりも一足早く立ち上がり、逃げる体制を取っていた才人。

そんな彼の裾を神速の速さで掴んだ、少々寝不足でイライラしているルイズ。最近胸がらみの事では過敏になっているルイズ。

丁度その時店に顔を出したスカロン店長が聞いたのは、ルイズのお  
仕置きによって才人があげた断末魔の叫びであった。

平賀才人が貴族街の近くで「煤火」のドニと遭遇してから四日程過ぎた。

王都トリスタニア・チクトンネ街にある酒場兼宿『魅惑の妖精』亭では、女の子たちが客から貰うチップの額を競い合う

「チップレース」が始まり才人とルイズは其々に忙しい日々を送っていた。

才人はいつもよりも少し早めにベッドから起きだして、手早く仕込みと店の掃除を行い空いた僅かな時間を利用して店を後にする。

デルフを片手に日課となりつつある、トマの特訓の為だ。

日がそこそこに傾き、二人がいつも利用している路地裏の突き当たりは既にかなり暗くなっている時刻である。

なぜトマの特訓を行っているのかと言うと、少し複雑な状況となったが為だ。

「妙な事になったわ、サイト」

キツカケは才人がエメの胸元を凝視して、ルイズに手酷くお仕置きを受けた日の翌翌日。

王宮からの伝書フクロウから受け取った書状に目を通していた彼女は、美しい眉根を寄せながらそうつぶやいた。

時刻は夕方の六時。

サン・レミ聖堂の鐘が鳴る、中央広場である。

二人が居を構えている『魅惑の妖精』亭の二階は、現在エメとトマが一緒に住んでいる為

王宮との連絡のやり取りは、外で行うようになっていたルイズであった。

「妙なこと？」

「そうよ。一昨日あんたが言ってたメイジの事、王宮に報告したのよ。」

その顛末について、姫さま直々のお言葉でこれに書いてあるわ」

「へえ。やっぱりアイツ、アルビオンのスパイかなんかだったのか？」

「スパイ？」

「ああ、えっと、密偵の事。地球じゃそう呼ぶんだ」

「ふうん。ま、それはどうでもいいわ。えっとね、これによるとどうもわからなかったみたい」

「わからない？」

ベンチに腰掛けるルイズの前に立っていた才人は、彼女の隣に腰掛けながら片眉を上げ首をかしげた。

ルイズは書状から目を離し、険しい表情のまま才人の方を向いて頷く。

ピンクブロンドの髪が夕日を浴びて赤毛のようになり、服装も平民が着る粗末なものであったが

変わらぬ彼女の美貌に才人は思わず見蕩れてしまい、胸が一瞬だけ高鳴った。

そんな才人の様子に気付かず、ルイズは話を続ける。

「ええ。私の報告を元に、早速あの二人にお金を貸していた商人の館に魔法衛士隊を派遣したようなのよ」

「うん」

「で、違法な営業実態の証拠とか出てきて、商権や資産の没収を行

「たまでには良かったんだけど  
肝心の用心棒メイジが何処かに消えてしまっていて捕まらなかったそうなの」

「あちゃあ。逃げられたか？」

言葉に、ルイズは首をゆっくりと振った。

「うっん。それが少し変なのよ」

「変？」

「うん。そのメイジの行方を更に調査をしようとした衛士隊にね、横槍が入ったみたいなの」

「横槍？」

「そう。それも、高等法院からよ」

高等法院とはトリステイン王国の司法を司る機関である。

貴族たちの裁判なども取り扱うその性質上、表に裏に様々な権限を与えられている。

普段はあまり表立って警察権に介入する事は無いが、高等法院の介入自体は決して珍しいことではない。

「なんでそんな所から横槍が入るのさ」

「さあ？　ただ、そのメイジは法院直属の組織で追うから手出し無用とだけ一方的に通達されたようね」

「ふうん……」

「姫さまからの書状には、あっちでもう少し詳しく背後関係を調べてくださるようだけど」



私にももう少し詳しく調査をするようにって書かれていたわ」

「詳しくって、あのドニとかいう用心棒は雲隠れしちまったんだろ？  
エメとトマに金貸してた商人もしよつ引かれたんだし、これ以上  
なにを調べろっていうんだ？」

「まだエメの元婚約者の貴族の件や二人のお父様の件が残っている  
わ。」

情報が少なすぎてこの二つの調査にはかかれならしいの。せめ  
て、貴族の名前だとかわからないと。

それに、これは私の勘だけどエメ達はこれからもなんだかんだと  
理由を付けられて襲われると思うのよ」

「……だな。話聞く限りすっげえ胡散臭かったもんな」

「放っておくわけにもいかないし、何時までも私たちの部屋に居座  
られるのもヤだしね。」

私も何時までも外で文書のやり取りをするわけにもいかないし。  
だから、なんとしてももう少し詳しい話を聞き出さないと」

「そんなもん、お前が直接エメに聞けば済むじゃないか」

「だめよ。あんまり根掘り葉掘り聞いて、私の素性がバレちゃった  
ら意味ないじゃない。それに」

「それに？」

返事は直ぐには返っては来なかった。

ルイズは険しい表情に少しだけ拗ねたような感情を追加して、唇を尖らせ僅かに下を向く。

それでいてどこか、サイトに甘えるような雰囲気を滲ませた。

「……あの子、チップレースのライバルだもん。昨日だって二位になっただし。」

変に親切にしておいて、もし私が勝ったら疑われちゃうじゃない」

「……一応、聞くが。お前今何位？」

「……最下位」

「する必要のない心配なんじゃないか、それ」

「そんな事無いわよ！ 見てなさい、絶対に一位になってやるんだから！」

「わかった、わかった。じゃ、俺がどうにかして詳しい事を聞き出せばいいわけなんだな？」

「うん、そ。お願い出来る？」

「いいよ。俺がエメにでも直接聞いとくから」

「ダメよ！」

「何でだよ？」

「……あんだ、あの子の胸ばかり見るじゃない。そんなの、嫌よ」

才人から視線を逸らし、バツが悪そうに足をプラプラさせながら

イズは言った。

超かわいい。

ナニコレ？

ニヤけると確実に鉄拳制裁を受けそうな雰囲気の中、才人はルイズの言葉に感動を覚えた。

彼女が素直な物言いをする事など、あまり無いからだ。

ルイズにしてみても折角の二人きりの時間ということもあり、精一杯才人に甘えようと考えた結果でもあった。

夕刻の中央広場。

ベンチに座る男女の会話は秘密の任務についてから、いつの間にかありふれた恋人同士の会話に変わっていた。

少し間を置いて、才人ははっと我に振り返ってルイズの言葉を否定する。

「そ、それはだな！ 男として、仕方ないというか、本能だというか」

「 やっぱ、大きい方が好き? 」

才人は更に戸惑う。

それまでのルイズならば、何が本能よ! と叫びつつ蹴りの一つでも飛んできていたからだ。

痛いことは痛い、それで終わりなので才人にとっては楽なものだった。

しかし、今のルイズは。

逆上して ” 加速 ” 付きの蹴りを放ってくるどころか、なんと会話の変化球を投げってくるではないか。

やはり『魅惑の妖精』亭での労働はルイズにとって、 ” 色んな意味で ” 得るものがあるらしい。

唇を尖らせながら少し上目遣いに才人を見つめ、不安げに答えを待つルイズを見て才人は内心ドキドキとしながらもそう考えた。

それから、彼女が求めているであろう解答をいかに嘘偽りを交えずに答えられるか思考を巡らせる。

例え本心からでも大きい方が好き? と聞かれてうん、大好き! などと答えるほど、才人も阿呆ではない。

なにより、居心地の良い甘い雰囲気才人の思考をフル回転させた。

「そ、そんな事はないぞ！」

ああそうさ！ 俺は、ルイズのが一番だ！ 大きかろうが、小さかろうが、とにかくルイズのが一番！」

「ほんと？」

「ほんと！」

「えへへ、ん！」

答えは正解であつたらしい。

ルイズは嬉しそうな表情を浮かべ、遠慮がちに才人の手と自分の手をベンチの上で重ねながら微笑んだ。

そして、ご褒美とばかりに彼女は目を瞑り、口を僅かにすぼめて才

人に突き出す。

耳まで赤く見えるのは夕日のせいか。

全く余裕の無いその表情はどこか滑稽に見えはしたが、彼女の美貌を損なう要素は何処にもない。

やがて中央広場のベンチに座る男女の長く伸びた影は、ゆっくりと僅かに重なるのであった。

と、いうわけで。

エメが駄目ならば同じく事情を知るトマに聞くしか無い才人は、広場から『魅惑の妖精』亭に帰った後

直ぐにトマを捕まえて剣の特訓を申し入れたのだった。

勿論、情報入手の為の口実である。

トマはその申し入れに怪訝な表情を浮かべはしたが、思う所があったらしくこれを了承しその日から二日経った現在に至る。

特訓は夕方と宵闇の間の時刻、人気のない狭い路地裏の突き当たりで行われていた。

日はまだ沈んではいなかったが、建物が密集した路地にはうっすらとしか光は届いていない。

その暗い路地裏の突き当たりで二人はその手に獲物を持ち、対峙する。

トマは抜き身の愛剣を手に。

才人はその辺に転がっていた、折れた物干し竿か何かの棒切れを手にして。

「おい坊主！ どうせ当たりやしねえんだから振り回す事じゃなくて突く事だけに集中するんだ！」

「わ、わかってるよ！ 少し黙ってて、気が散るじゃないか！」

トマは才人から目を離さずにそう言って、強く柄を握り直した。

教師は才人……ではなく、デルフである。



才人が教えようとしても何かと反発するので、デルフが口を出し才人が練習相手になるという構図が出来ていたのだ。

二人の距離が緊迫した空気を纏ってジリと縮まる。

才人は半身で棒切れを構え、トマに向かって突き出している棒切れを僅かに上下に揺らしてみせた。

挑発するように、だ。

トマはそれを合図として、疾風のように両手に構えた剣を突き出す。気合の籠もったその一撃は、果たしてやすやすと横へ回避されてしまった。

「ここだ！」

しかし。

トマもそれを予測していたようで、回避された突剣をピタリと止め、才人が回避した方向へ横に薙いだ。

剣は抜き身。

当たれば大怪我は免れない。

才人が持つ、棒切れ程度で防げる一撃でもない。

トマの顔に浮かぶ表情は勝利の確信か、気に入らない相手を負傷させる期待か。

直後にギーン！ と狭い路地に響いた金属音が、そんな彼の表情を曇らせた。

剣が路地を構成する石造りの壁に当たったからだ。

「だから、振り回すなってデルフが言ってただろ？ ただでさえ狭い場所だったのに」

ぽこん、と音がして才人の棒切れがトマの頭に振り下ろされた。

間抜けな音の割には痛かったようで、トマは痺れる手から剣を落とす。そしてしまい頭を両手で押さえながらその場にしゃがみ込んでしまう。

「おい坊主！ アイデアは悪かなかったが、避けられる事が前提の突きなんて壁にしか当たんねえぞ！」

「うづう、くそ、殺ったとおもったのに……イテテ」

「……殺気だけは一人前だったな」

「いいか、坊主！ 最初の突きだけに集中するんだ。他は考えんな」

「で、でも……」

「でももクソもねえや！ 手前みたいな素人が考えて剣振っても才一ク鬼一匹にも勝てやしねえよ。」

「いいか？ 下手くそ程剣を振り回したがるがな、体力も力もねえ坊主が振ったところで相手をまともに斬れやしねえんだ」

「うぐ！ そ、そこまで言わなくても……」

「なんだあ？ 違うとでも言うのか？ さっきの一撃がもし相棒だ

「つたらその壁ごと相手をたたつ斬っていたぜ？」

「そんな大げさな……」

「ああん？ ド素人の癖に口だけは一人前だな坊主！ なんなら試すか？」

「その辺でやめとけ、デルフ。他人様の家の壁をぶつた斬るワケにもいかねえだろ。」

トマ、続きだ。今度はもつと腰を落として膝の位置に剣をかまえてみ？

そこから相手の胸の辺りを狙って少し上向きに突くんだ。下からの突きつてのは結構避けにくいもんなんだぜ？」

そう言つて再び棒切れを構える才人。

トマは悔しそうにデルフへと視線を投げかけながらも、才人に言われたとおりに構えて隙を窺う。

気合と敵意を表情に込め眉根を寄せて口の端を固く結んでいても、端正なその顔立ちを損ないはしない。

日がいよいよ傾き、段々と暗くなりつつある路地裏が更に暗くなっ

ていく。

緊張が二人の間に張り詰めて行き、沈黙が

「きゃあ！ トマ、がんばってえ！」

「そんな猿、さっさとやつつけちゃえ！」

「そうよ！ さっきからエラそうに威張っちゃって！」

「ああん、こっち向いてえ」

「……なあ、デルフ。俺、泣いていいよな？」

「気にすんな、相棒！ 相棒の魅力は俺が一番わかっているからよ」

「慰めになってねえよ……」

「い、こら！ 訓練に集中してくれよ！」

「そうよそうよ！ 真面目にやんなさいよ！」

「ちよっと強いからっていい気になってるのよ」

「やあねえ」

「トマくうん！ こっち向いてえ！ 今夜、アタシん所こない？」

お代はいいからさ！  
「あ、ずーるーい！」

一瞬の沈黙は、トマへの黄色い声援によってかき消されてしまった。  
それ所か張り詰めた緊張までがふにやりととけてしまう。

路地を構成する片方の建物が娼館でもあり、仕事前の娼婦達が二階の窓から才人達の様子を好奇の目で見物していたのだった。

特に、トマは紅顔の美少年である。

端正な顔立ち、ブラウンの大きな瞳に女性もうらやむようなキメの細かい肌とサラサラの髪を背に伸ばして後ろで縛り、剣を振るう。

輝く汗。

雄々しく叫ぶ気合の声。

その様は平民達の間で普遍的な英雄像である、イーヴァルディの勇者を思わせる凜々しい出で立ちだ。

もっとも、彼の相手を務めている人物こそイーヴァルディの勇者本人であるのだが。

まるで絵画のようなトマの姿は、直ぐに噂となり時を経ることに見

物人の女の子の姿が増えていた。

当然、彼への声援も増え続け、才人への罵声も増え続けている。

ちなみに才人の評価は「偉そうな猿」である。

才人はもう小一時間程も彼女たちの謂れなき罵倒に耐えながら、トマとの訓練を行っていたのだった。

あらゆる敵と対峙し、傷つくことも恐れず戦い抜いた強い心が遂にこの時折れてしまい、地面に座り込んでの字を書き始める才人。

実に惨めな姿である。

伝説の勇者となった者の成れの果てだとは、誰も思いはしまい。

2278

「いいんだ、俺にはルイズがいるんだもん……」

「お、おい！ 立てよ！ 剣の稽古付き合ってくれるんだろ?!」

「あゝ、坊主、相棒がこうなっちゃったらもうダメだ」

「そんな……」

「これでもよくもった方だぜ。今朝寝付いた時なんてコッソリ泣いてたもんな」

「うっう、ルイズ……」

トマは半泣きでしゃがみ込む才人を暫く見ていたが、不意に構えを解いてはあ、と深くため息を付いた。

この日はこれでお開きだと理解したらしい。

「まったく、凄いんだか情けないんだかよくわからない奴だな、あんた」

「凄いに決まってるだろ坊主！ 相棒をバカにすると承知しねえぞ！」



デルフがカタカタと鐸を鳴らしながら凄む。

肩を竦めながらトマは、うずくまり地にのの字を書く才人にもう一度視線を投げた。

「そりゃ、あのメイジと戦ってる姿は格好良かったし、凄いと思ってたけど……」

「つたりめえだ坊主！」

「だけど今の姿見ると……」

「ふん！ こう見えて相棒は繊細なんだ！ おめえみたいなハンサムに、ブ男の気持ちがあわかってたまるか！」

「デルフ……何気にお前も酷いぞ……」

ジロリと壁に立てかけた抜き身のデルフを睨む才人。

恨みがましい視線にデルフは先程と同じようにカタカタと鏗を鳴らして答えた。

才人は気を取り直して立ち上がり、デルフの柄を乱暴に掴んで手早く鞘に収める。

それから、トマに向き直り今日はここまでにしておこうと力なく口にしたのだった。

「なんでだよ？ もうちょっとくらい、僕に付き合ってくれたっていいだろう？」

「大分暗くなっただし、そろそろ戻らなきゃ。俺も仕事あるんでな」

「うっむ……」

「悪いな、また明日付き合っから勘弁してくれ」

「ちえ。わかったよ、『魅惑の妖精』亭に戻るっ」

「……明日は、別の路地でいいか？」

「……うん。僕もここは、居辛い」

「ああん、もう終わり？」

「トマ、また明日も来てね！」

「まってるからね！」

「なんだったら店に泊まっていってもいいのよ！」

二人は勝手気ままに投げかけられる黄色い声によって追いついてられるかのようになり、そそくさと路地裏の突き当たりを後にした。

辺りはすっかり暗くなり、狭いを作り出している建物の窓からは柔らかな光が漏れ出している。

ゴミが散らばる小汚い道を、チラホラと酔っぱらいが千鳥足で歩く姿も見受けられた。

「つちやあ。すっかり暗くなっちまったな」

「あんたが変にイジけているからだ」

「んなこといったってさあ。」

「なんだよ、女の子の声援位で落ち込んだりして。これでも少しは見直してたのに、幻滅したぞ？」

「ウソこけ。お前、俺の事最初から認めてねえし」

言葉に、才人の隣を歩いてきたトマの歩みは止まった。

数歩歩いてから同じように歩みを止めた才人が何事かと振り返ると、意外にもトマは真剣な表情で才人に視線を合わせて来たのだった。

「んだ？ どうした？ 腹でも痛いのか？」

「……確かに、僕はあんたを認めていなかった。あの、夜までは」

「ん？ ああ、あのドニとかいう用心棒とやりあった日か」

「うん。あの夜の出来事は今でも信じられないんだ……」

「あにがだよ？」

「平民が……魔法を使えない人間が、あんな強いメイジを追い払うことが出来るなんて……」

なあ、一体、どうやればあんなに強くなれるんだ？ どうやった  
らあんたみたいに戦えるんだ？」

「どうやったらって……俺の場合は特殊だしなあ」

トマの突然の質問に困惑する才人。

そんな彼にトマは更に真剣な表情で詰め寄る。

近くで見るトマの顔はどこまでも整っていて、同じ男でもどこまで

違うのかと知らず才人を落ち込ませた。

「なあ、教えてくれよ。僕はもっと強くなりたいんだ。あんたはとて強いし恐れも知らない。」

「どうやったら猿のようにすばしこく動いて、オーク鬼のような力が出せるようになるんだ？」

「ははは、ホメられているのになぜか傷つくな！」

「僕は真面目に聞いているんだ。頼むよ」

「どっやったらって、言われてもなあ。俺の場合は……うん、そうだな。俺の場合はな、トマ。呪いをかけられているんだ」

「呪い？」

「そ。夕子の悪い魔女にとっつかまってな。病気を治して貰う代わりに、妙なトラブルに巻き込まれる呪いをかけられたんだ」

「……僕をバカにしているのか？」

十人が聞けば十人がホラだと判断を下すであろう才人の話に、トマは少し気色ばんだ。

才人はそんなトマの様子になれた調子で、真面目な表情のまま続ける。

「いんや、本当の話さ。妹のルイズに聞いてみてもいいぜ？ でな、呪いの副作用でとんでもない力を出せるようになったって訳だ。

もっとも、剣自体はその前からある人から教えてもらっていたけどな」

「そうだったのか……にわかには信じられない話だけど、あの夜のあんたを見ているからなあ。取りあえずは信じてやるよ」

「それよりも、あんたってのやめてくれよ。サイトって呼び捨てにされた方が余程マシだ」

才人の意外な申し出にトマは一瞬目を白黒させたが、直ぐに我を取り戻しニヤリと笑った。

本人は意地悪く笑っているつもりだったのかもしれないが、嫌味のないその笑みはどこまでも爽やかだ。

トマは才人に詰め寄ったまま、更に近くへと身を寄せ胸を張る勢いで才人の体を押した。

それから手を腰に当て、才人よりも頭一つ低い体を反らしながら虚勢を張るように顎を突き出す。

挑発するかのようなその態度は憎らしさよりも少年の悪ふざけといった感が強く、ブラウンの瞳に映り込む建物の灯火が

その印象をさらに引き立てた。

「じゃあ、サイト。ついでに聞きたいんだけど……あんとルイズさんて一体何者なんだ？

ルイズさんが”ツテ”とやらに連絡をとった途端、あの借金取りは来なくなるし、貸金の商人は捕まるし」

「……しがない平民の兄弟さ。ただ、ちょっとした”コネ”が



あるだけの、な」

「ふうん？　なんだかすごく、胡散臭いな。大体、兄妹なのに俺はルイズ一筋だ”　とか言っちゃうマヌケだけど手練の兄に数日で悪徳商人を潰せる人物にコネを持つ妹って、怪しさ満点じゃないか」

「マヌケは余計だバカ」

「うるさい、マヌケ」

「明日、覚えてろよ。こつてりシゴいてやからな」

「ふん、余裕見せて僕に真剣を持たせた事を後悔させてやる」

「……お前、マジで刺しに来てるよな？」

「当たり前だ。サイトならそれくらいやっても問題ないんだろ？　僕にだって、それくらいわかってるさ」

いつの間にか互いの額を押し当てながら軽快に罵り合う二人。

互いに歯を剥き口の端を釣り上げながら威嚇しあうその様は、まるで仲の良い兄弟のようでもあった。

才人は弟が居ればもしかしたらこんな感じなのかもしれない、などと思いつつも頃合いかと判断して不意に一步下がる。

急に支えを失って多々良を踏むトマに、才人は今まで切り出しかねていた交渉を行うことにしたのだった。

「……なあ、トマ。交換条件といかないか？」

「とと、何をだ？」

「お前達を助けてやる。そのかわり、お前達の事を詳しく教えてくれないか？」

「いきなりなんだよ？ それに、なんでそんな事を知りたがるんだ？ サイト、あんた本当に一体何者なんだ？」

「……言えない。ただ、悪いようにはならないと思うぜ？ お前、俺に剣を習う気になったのはエメを守りたいからだろっ？」

「それは……」

「この前の話し聞いてりゃ、金返せば丸く収まるような状況じゃないって俺にでもわかるさ。」

お前のさ、一人前の男として姉さんを守りたい気持ちってのはよくわかる。

だけどな？

何でもかんでも一人でなんとかなると思うのは間違いだ」

「でも、僕は」

「この前の夜だってそうだ。あのメイジにお前が殺されてたら、誰が一番悲しむと思っているんだ？」

才人の話にトマは出しかけた言葉を飲み込んだ。

トマは視線こそ逸らさなかったが、口の端を結んで眉を寄せる。

後悔と悔しさを滲ませるその顔に、才人は柔らかく微笑みながらト

マの頭に手を置いた。

「誰かを守りたくて、無茶しちまうのもよくわかるさ。俺もそうだし。」

「だけどさ、やっぱ無理をして守りたい奴泣かせるのはすっげえ辛いんだ。」

「それに今お前が、エメが抱えている”モノ”は多少剣を覚えてどうにかなるようなもんじゃないんだろ？」

「そうだけ、ど……でも……」

「トマ、俺が助けてやる。男の約束だ」

「男の、約束……か」

「ああ、そうだ。ダメか？俺じゃ、頼りないか？」

言葉に、トマは視線を伏せて暫し考え込む。

腰に当てていた手もだらんと力なく垂れ、細い肩からは先程までの威勢が感じられない。

辺りはすっかり夜となり、狭い路地を酔っぱらいやこれから酔うであろう男達がけたたましく行き交い始めていた。

路地に多くある小さな酒場からは陽気な歌声や笑い声が聞こえてきて、トマの沈黙を一掃際立たせる。

やがて。

トマは意を決し、顔を上げた。

「わかった。あんたを……サイトを信じるよ。だから、頼む。僕らを……姉さんを助けて欲しい」

「ああ、勿論だ。詳しいことはルイズと一緒に聞かせてくれるか？」

「わかった。取りあえず『魅惑の妖精』亭に戻ろう。随分と仕事に遅れているみたいだし？」

「……ああ。みたいだな。なんせワザワザお迎えが来る位だから、

余程忙しくなっちまってるみたいだ」

才人とトマはそう言って、顔を見合わせて笑った。

二人が戻した視線の先にはルイズがお店の衣装に身を包み、必死の形相で走り寄って来る姿が見えていた。

「せえ、せえ、サイト、遅い！」

「悪い。ちつとトマと話し込んだ。だけど、収穫あったぜ？  
後で話を」

「何、呑気な事言ってるの、よ！ そんなの、あと！ エメが、ゼ  
エ、妙なメイジに」

「姉さんが?! どうしたんですか!?!」

血相を変え、まだ呼吸も整わないルイズにトマは詰め寄った。

ルイズは無理繰りに呼吸を落ち着かせながら、乱暴に肩を掴むトマを押しのけ言い放つ。

トマにとって、最悪な事態を告げるために。

エメを救うために。

「エメがメイジにさらわれたわ！」





王都トリスタニアをぐるりと囲む城壁の北西に広がる森の中、その屋敷はひっそりと佇んでいた。

貴族街から行き来できる郊外の森は、貴族のみならず王家の人間も乗馬や狩りに利用する場所でもある。

広大な森の中にはトリスタニアに居を構え王宮で働く貴族の別荘も点在しており、平民の森野への立ち入りは許されてはいない。

貴族の間ではここに別荘を持つことが一種のステータスとなっていて、エヴラール・バルビエ副伯の別荘もまたこの森にあった。

彼の屋敷は王家の狩場から比較的離れた南の端にあり、館もそれ程

大きくはない。

最も、この森に構える別荘の規模は階級によって王家から厳しく制限されており、副伯である彼の財力が乏しいわけでもない。

貴族間……特に大貴族達が豪華絢爛な別荘を建てそれが競争を呼び、著しく森の景観を損なってしまった時代があった名残である。

別荘をもつにあたり、より王家の狩場や避暑用の別荘に近い場所程高い身分を要求されるのも、王族が乗馬や狩り、避暑に訪れた際自分の屋敷に立ち寄ってもらえる栄誉を得る機会が増えるためだ。

魔法の才を認められ、異例の出世を重ねて会計検査院に抜擢されたエヴラール・バルビエは、古い家柄と高い財力を有し遂にはこの森に別荘を構えるなど貴族として申し分のない人生を送ってきた。

唯一副伯という古い系譜だが低い地位が為に、このような森の端に別荘を建てざるを得なかった事だけが彼の矜持を些か傷つけていたのだが

その夜バルビエ副伯は不本意な広さの別荘に在って、上機嫌でベッドに横たわる薄汚くも美しい平民の娘を眺めていたのだった。

部屋は狭くも豪華な装飾品に溢れ、黄金で出来た魔法の燭台により柔らかに灯りが薄暗く寝台に横たわる女の髪を照らし出している。

その傍らに立つ館の主は、ベッドで眠る彼女のウェーブがかかった短いブルネットの髪を愛しそうに一撫でした。

「エヴラール様。やはり、些か強引では無かったのでしょうか？」

声は狭い部屋の入口の方から。

豪華な室内にそぐわない黒いマントを羽織った男が、その部屋の入口の扉の前に立ち館の主に問いかけた。

女の髪を撫でるバルビエ副伯は手を止め、男に向き直る。

四十に近いその深緑の髪は白髪が混じり、体軀は太ってはいないものの入り口の男よりもずっと小さい。

副伯は細い目とよく手入れされた口ひげ、何かの薬品によって後ろに撫で付けられた髪が神経質な印象を見るものにあたる容姿であった。

一方、バルビエ副伯に声をかけた男は深く黒いローブを羽織り、その顔おるかどのような格好をしているのか判別がつかない。

「構わん。どういった経緯かわからんが、王宮が色々と嗅ぎまわり始めたからな」

「やはり先日私が報告した者が、王家の間諜であつたのでしような」

「うむ。あの日の翌日、早速例の商人の元にヒポグリフ隊が派遣されておつたしな。」

平民の申し出程度で王宮直属の部隊が動く事はまず無い。間諜であつたと見て間違いはなかるう」

「しかし、そうであれば何故殊更このような強引な手で？ 僭越ながら、娘をこのタイミングで攫うのはかなり不味かつたのでは」

「あの商人から私の名が表に出ることは無いが、この者からは私の名が表に出る恐れがある。」

それに、リュシモン殿から計画を急ぐようにと釘を刺されたばかりだしな」

「では……」

「そうだ。明日の夜、作戦を執行する。」青い鳥” でないのが残念だが、どうせ使い捨てだ。問題はないだろう」

そうやってバルビエ副伯はベッドに横たわるエメの胸元に手をかけ少し強引に引いた。

際どい『魅惑の妖精』亭の衣装に身を包んだ彼女の胸元はアツサリとあらわとなり、大きな乳房が二つ外にこぼれ出す。

男であれば誰もが鼻の下を伸ばし息を呑むであろうその光景に、バルビエ副伯は奥歯を噛み少し忌々しそうに彼女の胸元を見ていた。

そこには小さな、赤い鳥が翼をひろげている。

「 ” 魅了の赤い鳥” (ロワゾー・クイ・シャンテ・ド・シャルム・ルージュ)。シャルム・ブルーでないとは言えホンモノだ。不完全なまがい物ではあるが、 ” 血脈” を持つ事にはかわりあるまい」

「 ” 予備” の方は良かったのですか？」

「 ” 魅了の青い鳥” は甘くさえずる為、その多くは一族の女に

宿るとある。

それにどうせ一度きりの勝負だ、痣があるかどうかもハッキリしない弟にはそこまでの価値はない」

「わかりました。出過ぎた真似をしまして申し訳ございません」

「いい。お前はよくやってくれている。ドニ、それよりも気がかりは王家の間諜だ。

お前が殺し損なったのだから、かなりの使い手なのだろう?」

窓の無い室内で、ゆらりと影が揺れた。

黒いローブの男は、その影よりも暗い色の感情を吐露するかのよう  
に間をおいて低い声で主の問いに答える。

「は。メイジ……かどうか判別がつきませぬが、私の炎では傷を負  
わせられませんでした」

「ほう……あれをどうやって防いだのだ?」

「いいえ。まともを受けた上で立ち上がって来たのです」

「ふむ……体の中に水の精霊を飼っているのか、もしくは先住魔法で治癒能力を高める魔具を埋め込んでいるのかもな」

「そうだとしたら厄介ですな。」

戦闘に特化したメイジの中には体内に先住魔法ゆかりの品を仕込み、杖を持たず任務にあたる者も珍しくありませぬ故」

「なに。お前の炎を最大でくれてやれば恐らくは殺せるであろう。やりようはあるのであろう?」

更に影が揺れる。

主を前にして、影の主は激しい殺意を此処にはいない誰かへと放った。

生暖かい室内の空気は湿り気を帯びたかのように、ほんの少しだけ息苦しさをましたかのような錯覚をバルビエ副伯は覚えていた。

「は。街中では騒ぎを大きくしてしまいましたが、ご命令とあらばいくらでも」

「ならば次は確実に仕留めろ。何、騒ぎになった所で問題はない。いずれにせよ、作戦の決行は明日だ。街で多少暴れようと、次があるならばもはや些事であるうよ」

「は」

声の色は歡喜。

強敵と存分に戦えるという想い、血の匂いを欲する狂気、主の命を遂行せんとする忠義を交えて影は崩れ落ちるように跪く。

そんな影の圧力に息苦しくなたのか、ベッドに横たわり胸をはだけているエメが艶めかしくうめいた。



「ふむ。眠れる鳥が目覚ますようだ。ドニ、私はこれより仕上げに入る。」

お前は屋敷の周りを固めよ。

弟の方は私の名を知っているが、それを元に王宮が衛士隊を動かすには今暫くの時が必要となるはずだ。

万一だれか邪魔者がここへやって来るとすれば、恐らくはその腕利きの密偵であろう」

「では……」

「もし来たら必ず殺せ。目的を王宮に悟られる可能性を残す訳には行かぬ。」

弟の方も居たら殺して構わん。部下のメイジにもそれは徹底させる」

「かしこまりました。それでは、早速」

言葉を残しドニは音も立てず部屋から出て行った。

残されたバルビエ副伯はその場で体の向きだけを変え、ベッドの上で眠りから覚めつつある女の姿を凝視する。

やがてその大きなブラウンの瞳を覆う瞼がゆっくりと開かれた。

「う……うう、は……」

「目が覚めたかね？」

「あなたは、エヴラール様……ここは……わたし、えっと……  
きゃあ！」

目覚め上体を起こしたエメは直ぐにはだけられた胸元に気がつき、  
両手で胸を隠しながらバルビエ副伯に背を向けた。

ベッドの上、急いでたわわな乳房の下に潜り込んでいる服を上になぞ  
り上げるエメに、副伯は何事もなかったかのように声をかける。

「終わったらついてくるがいい。見せたいものがある」

「エヴラール様、わたしは……」

「夜が空ける頃にはすべてが終わる。お前の知りたい事にもすべて答えてやろう。」

ただし、私がお前に見せたい物を見せた後でな。 ” 赤い鳥 ”

よ、私が何を言いたいかわかるな？」

かつての婚約者に向けられているとはとても思えない冷たい声に、エメはそれ以上の言葉を紡ぐ事ができなかった。

有無を言わさぬ雰囲気の中、身なりと乱れた髪を整えた彼女はよろよるとベッドから立ち上がる。

足取りはおぼつかない。

ドニに攫われた時、強引に飲まされた秘薬の効果が残っているのだろう。

それでも彼女を素直にさせたのは、バルビエ副伯の冷たい雰囲気ではなく単純にその手に持つ杖の存在であった。

案の定、なんとか立ち上がりはしたものの強い眩暈がエメを襲い、思わずよろけて豪華なベッドの天蓋を支える柱にすがりついてしま

「ついでにい、 ” 赤い鳥 ” 」

バルビエ副伯はまだ朦朧としている彼女の様子などお構いなしに、部屋の扉を開きながら早くついてくるよう促した。

エメは気丈にもおぼつかない足取りで、副伯に促されるまま部屋から廊下へと出て壁に寄りかかりながら必死に彼の背を追う。

メイジの血筋とは言え、生まれた時から平民として過ごしてきた彼女である。

理不尽な扱いにささやかな抗議をするよりも、貴族の機嫌を損ねることへの恐怖が勝っていたのだった。

彼女が寝かされていた部屋は二階であつたらしく、広い階段を下り書斎の入り口の隣にあつた扉から更に地下へと続く階段を降りて行く。

魔具によって淡く照らし出されるその階段は、先程の寝室よりも更に薄暗くかろうじて足元が確認出来る程度であつた。

暗い階段を降りていくうちに、酩酊としていた意識は恐怖の為か少しずつはつきりとしてきて、副伯が階段を降りた

突き当たりの扉を開く頃には、足取りもしっかりと歩を進めることが出来るまでにエメは回復する事ができていた。

そんなエメの目の前でぎい、と重苦しい音を立てて開いた扉の向こう、何も見えぬ闇の中にバルビエ副伯は躊躇なく進む。

間を置かず魔法のランプでも使ったのだろう、開いた扉の向こうから突然光が溢れた。

「何をしている？ 早く入ってこい」

階段の途中で少しだけ目を眩ませていたエメに、副伯の冷たい声が投げかけられる。

エメは我を取り戻し、残り十数段となった階段を慌てて降りて僅かに光が漏れる地下室の入り口へと進む。

この時、彼女の脳裏に過ぎったのは短絡だが端正な弟の顔であった。

不安や恐怖は確かに在る。

もしかしたら、この地下室に閉じ込められて陵辱の限りを尽くされるのかもしれない。

いや、ここで ” 飼われて ” 夜な夜な誰かの相手をさせられるのかも知れない。

それとも、何かの研究の為に妙な薬を打たれるのかも。

次々とよからぬ想像が彼女を襲う。

しかし、その度に可愛い弟が無茶をしでかさないか、副伯を疑っておおきな騒ぎを起こさないかと心配してしまい

不安と恐怖を忘れるのであった。

そんなエメが様々な感情で思考を埋めながらもおそおそと地下室の中へ入るや、耳障りで大きな音を立てて入り口の扉は閉じられた。

音にエメは思わず肩を跳ね上げ、慌てて振り返るとそこにバルビエ副伯が幽鬼のように立っており彼女を更に慌てさせる。

「さて、目的を果たす前に。私も誇りあるトリステイン貴族だ。まずは約束を果たすでしょうか。」

「約、束？」

「言ったであろう。お前の知りたい事にもすべて答えてやると」

「あの……わたしに見せたいものって……」

「うむ、これだ」

バルビエ副伯はそう言って、おもむろに懐から魔具のようなものを取り出し、エメに差し出して見せた。

その手に握られていたのは、短剣ほどの大きさで鈍く銀色に光る、先が尖ったシンプルな杖のような筒である。

「それ、は？」

「魅了の青い鳥” のくちばしだ。伝説では ” 剣 ” と伝え

「られているがな」

「……これをわたしに見せて、エヴァール様は一体どのようなおつもりで……」

「なに、少々お前に協力して欲しいのだ」

「協力？」

「この伝説の剣に、魔力を注ぎ込んで欲しいのだよ」

「魔力、ですか？ でも私は……」

「メイジではないと言いたいのだろうか？ 大丈夫だ、メイジである必要はない」

副伯はここで初めて笑った。

エメにはその笑みはどこか、魔法のランプによって照らし出されている室内に落ちる影よりも暗く見えた。



笑みは二人の沈黙を加速させてゆく。

魔法をすでにかけられたと錯覚するほど、エメは息苦しさを覚えて言葉ではなく息を吐いた。

次いで新鮮な空気を胸に吸い込むが、地下室であるためかホコリっぽくて湿った、まるで墓地のようなにおいに思わず眉をひそめてしまふ。

それから悪い予感と予想を膨らませながら、彼女は質問を続けることにした。

このまま沈黙が続けばきつと良くないことが起きると感じたからだ。

「では……わたしは一体、どうやって……」

「……少し面白い話をしてやろう。お前の先祖は中々高名な魔具職人のメイジでな。

特に一族間でしか使えない、特殊で強力な魔具を使うことで有名だったのだよ」

「それが……」

「私はずっとそれを個人的に研究しておつてな。ある日古い文献からお前の痣……」 魅了の青い鳥” の事を知ったのだ。

その文献はたまたま骨董を扱う商人から手に入れた、この” うちばし” と対になっていたモノでな。

商人はどう見ても剣には見えないコレを ” 伝説の剣” だと言つて売り込んできたのだが……

その由来にたまたま興味を抱いた私は、やがて ” 魅了の青い鳥” の真実へとたどり着いたというわけだ

「真実、ですか？」

「うむ。知つておるかね？ お前の先祖はこの ” うちばし” を ” 剣” に変えて、たった一人で一軍を相手に戦い勝利したこともあるのだよ。」

最も、それが原因で当時の王家に危険視されて、長い年月をかけ表に裏に地位や財産を排除されていったようだが。

当然記録もすべて消されてしまい、 ” 魅了の青い鳥” は忘れ去られてしまったのだがね」

「そんな話、わたしには関係」

「関係ある。最後まで聞きなさい。いいか？ お前の一族の事を危険視した王家は、真つ先にこの伝説の剣を献上させたらしい。」

この ” うちばし” の力は絶大だったようだな。

更に稀代の天才と言われた当時のお前の先祖しか作れなかったよ

うで、こいつを献上させた後すぐにお前の先祖は暗殺されてしまったようだ。

くく、大方お前の父親のように公爵にでもとりたててやると唆され、愚かにも唯一の武器を手放したのであろう。

結局 ”くちばし” は一振りしかこの世に残らなかったのだが、使い手はちがったという訳だ」

「まさか……では、父様に貴族籍を売り込んでいたのは」

「私の手の者だ」

あっさりと告白したバルビエ副伯の悪びれもしないその言葉に、エメは一瞬言葉に詰まる。

父を陥れたのは自分だと、これ程あっさり告白するとは思っても見なかったからだ。

いや。

彼女の言葉を詰まらせたものは意外な副伯の態度ではなく、激しい怒りなのかもしれない。

エメは相手が貴族であることを忘れ、思わず声を荒らげる。

「なぜ……なぜそんな!！」

「すべてはお前を手に入れるためだ」

告げられた真実に、エメは恐怖をも忘れ彼女には珍しく今度は激昂した。

バルビエ副伯はそんなエメを変わず薄く笑いながら見つめている。

そんな彼にエメは更に怒りと疑問をぶつけるのであった。

「どうして! 婚約までして、黙っていても私はいずれエヴラール様の」

「ふん、そんな話を本気にしていたのか? あれは方便だ。」

どごそのバカ者がアンリエッタ女王誘拐に失敗して、城下での監

視の目が厳しくなってしまうな。

貴族とはいえ迂闊に平民をかどわかす訳にもいかなかったのだよ」

「そんな」

「幸いお前の父親は野心も欲もあり御しやすかったのでな、利用させてもらった。

もつとも、あのまま本当に結婚してしまえば私の経歴に後々汚点が残る。

そこで”無理な買い物”に手をだしてもらって一度投獄し、詳しい事が明るみになる前に釈放されるよう取り計らったのだよ。

あとはこちらが用意した貸金商人にまんまと金を借りさせて、次に借金のかたにお前を身売りさせ哀れな元婚約者を私が”妾”として

買受ける予定であったというわけだ」

「酷い！ あんまりです！！」

「ふん、何を言うか。本来ならば、例え妾としてでも平民などに手を出す真似はしたくも無いというのに。

それに元はと言えば、お前の父親の欲がすべての原因ではないか。まったく、これだから平民というものは救えん。

あの男も真実に気付きのこのこと私の前に金の無心などをしに現れて、見当違いな脅迫をしなければ死なずに済んだものを」

副伯の告白に、エメは息を飲んだ。

すべては、目の前の男が仕組んだ事だった。

自分を手に入れる為に。

巷で噂になっている、アンリエッタ女王陛下下の誘拐騒ぎさえ無ければきっと有無言わずさらわれていたのだろう。

逆を言えば、だからこそこのような事になったのだ。

父が投獄され、死んだのも。

自分と弟が理不尽な借金取りに怯えて暮らしていたのも。

すべて、目の前の男のせいなのだ。

真実は、激高するエメの怒りを更に駆り立てた。

「それで……どうして！ どうしてそんな、毛嫌いする平民相手にこんな酷い事をなさるのですか！」

「ふふん、その胸の痣だ。君の一族のだけが持ちえる、特別な力…  
…というよりも血その物にこの剣は反応するのだよ。」

つまり、ロワゾー・クイ・シャンテ・ド・シャルム・ブルー…  
”魅了の青い鳥” にな」

言葉にエメは息を飲む。

怒りで白濁する頭が、スーっと急激に晴れて行く。

かわりにじわりと再び恐怖と絶望が思考を染めていった。

聡明な彼女は悟る。

つまり、バルビエ副伯がエメに望む物とは。

副伯は暗く笑いながら続ける。

「案ずるな。文献によればシャルム・ブルーの持ち主は僅かな血液  
をくちばしに垂らすだけで力を発現できたという。」

お前の痣、シャルム・ルージュはその色が示す通り ”混ざり物  
” ではあるがまったく効果が現れないわけではないはずだ」

「い、いや……」

「手に入れた文献には ” 混ざり物 ” の血の利用の仕方もちんと載っておつてな。

なに、単純に量を増やせばいいらしい。そうだな、たしかワインの瓶一本分の血液があれば十分なのだそうだ」

暗い笑いは、残忍な冷たさを伴って目の光と歯の白さだけが暗い室内に映えた。

エメはたまらず逃げ場も無いであろう地下室の奥へと駆け出すべく、踵を返すも見えない壁に阻まれているかのように動きを止める。

薄暗い地下室にいつの間にか目が慣れ、僅かな光に照らし出されたそれらをこの時初めて見たからだ。

「ほう、意外だ。自ら苦痛を伴なう方法で私に協力してくれるというのか？」



バルビエ副伯の弾む声。

嬉しそうな明るい声をエメはこの時始めて聞き、そして始めて自分の考えは甘かったと後悔をした。

彼女が見た物とは

いびつな形の台

ピラミッド形の椅子

大量の太い針が付いた鳥かご

様々な拘束具に囚われたままの腐りかけの、白骨となってしまうた、吊るされた腕のみとなった、哀れな犠牲者達の成れの果て。

凄惨な拷問の傷痕である。

室内にある道具のすべてに褐色の染みが張り付き、そこかしこには変わり果てた人間の力ケラが転がっていた。

臭いは全くせず、その為かどこか現実味のない光景であったがエメはたまらずその場で嘔吐をしてしまう。

「む、床を汚すな。まったく、これだから平民は……」

バルビエ副伯はすこし困った声色でそう言いながら杖を振った。

地下室に立ち込めかけたすえた臭いと吐瀉物が渦を巻きながら立ちどころに消えていく。

恐らくは吐瀉物を様々な成分に分解し、別の成分へと錬金してみせたのだろう。

「エヴ、ラール様……貴方は……」

「気にするな。 ”研究” には犠牲者はつきものだ。すべては

”魅了の青い鳥” の為である」

「こんな……」

「なに、すぐに慣れる。臭いはしないだろう？ 私はきれい好きでな、まめにこの部屋の空気を入れ替えたり

”被験者” から臭いがでないよう薬品を振りまいているのだよ。

ああ、そうだ。

言い忘れていたが、 ”青い鳥のくちばし” は生き血にしか反応せん。だから、いきなり死ぬようなことはない。

なるべく、痛くしないから安心したまえ。 そう、なるべくな

エメの背後の音が、いつの間にか耳元から聞こえて来ていた。

両肩に優しく添えられた手がやたらと暖かく感じる。

体が動かない。

声も、それ以上出せなかった。

それは悪夢のよう。

抵抗しなくては。

抵抗しなくては。

抵抗、平民のわたしが、メイジに抵抗？

いいえ、逃げなければ。

はやく、はやくはやくはやく。

どうやって？

どうやって逃げる？

誰か！

誰か、だれかだれかだれか！！

まとまらぬ言葉が、一瞬の中で大量に頭の中を満たす。

そしてその全てが絶望によって消えていく。

強い絶望とシヨックの為意識を失いかける彼女を現実へと引き戻したのは、副伯の変わらぬ弾む声であった。

「さあ、始めようか。大丈夫、”殺しはしないから”」



その夜は二つの月の内、赤い月がやけに大きく見えた。

血のような赤を帯びた月光は、まるで夕日のように白亜の王城を茜色に染め地を照らす。

弱い光とはいえ、巨大な白い城壁による反射によって城に近い場所にある貴族街もまた赤く染まっていた。

そんな赤い夜の街を疾駆する馬影が二つ。

才人とルイズ、そしてトマが乗る馬である。

二人に急を告げたルイズは、『魅惑の妖精』亭へと戻る道すがらト

マからバルビエ副伯の名を聞き出すと

エメをさらったメイジの行き先に心当たりが浮かんだのか、すぐさま部屋に戻り隠していた杖と許可証を取り出してきたのだった。

流石に杖を手にした彼女を見てトマは目を白黒させていたが、せっぱ詰まった状況の中どういふ事かと聞くような真似はせず

『魅惑の妖精』亭を飛び出し再び駆ける彼女の後を才人と共に無言で追った。

ルイズが白く背中が大きく開いた妖精の衣装のまま向かった先は、果たして貴族街の警備隊の詰め所であった。

血相を変え呼吸も乱れたまま詰所に駆け込んだ彼女は、優雅に部下とハーブ・ティーを飲んでいた隊長にアンリエッタの許可証を再び提示して

馬を二頭徴発し、愛想笑いを浮かべて何事かといぶかしげる隊長を尻目に馬に跨る。

「あの、ミス、今度は一体……」

「説明は後！ いいこと？ 今夜王家の森付近で騒ぎが起こるわ。

あんたたちにはそこでの警察権なんてないんだから、大人しく馬

をよこせばいいのー！」

「は、はいー！」

「サイト！ トマ！ ”話” は付いたわ！ そっちの馬で行くわよー！」

「行ってくて、どこにだよ？」

「森よ。理由は後で話してあげる。今は急がないと！」

「あの、ルイズさん。その、僕、馬には……！」

「わかってるわよ！ あんたはサイトの後ろに乗りなさい、早く！」

焦ったような、怒っているかのような剣幕で急かされて、サイトとトマは慌てて警備隊の隊員が引いていたもう一頭に跨った。

ルイズはその様子を確認するや、すぐに馬の尻に鞭を入れ走らせる。



続いて才人も馬の尻に鞭を入れ、彼女が駆る馬の後を追った。

先頭を走るルイズの馬は、トリスタニア北西の城門へと向かっている。

その城門の先には王家が狩りや避暑に使う森が広がっており、貴族達の別荘も多く建っている。

どうやらルイズはその森に向かっていているらしいと、才人は馬を操りながら考えていた。

先導するルイズが操る馬は、彼女の特技であるだけにかなり速い。

後に続く才人とトマが乗る馬も決して遅くは無かったが、二人乗りという事もあって徐々に距離が開きつつあった。

やがてルイズは才人達よりも先に、森へと抜ける城門へたどり着いた。

門は夜分ということもあり、固く閉じられている。

彼女は馬から飛び降りると、肩をいからせながら門を守備している兵士に近寄った。

兵士はまるで商売女のような出で立ちのルイズを見て、一瞬ニヤけたがすぐに職務を思い出し手にしていた杖を構える。

「止まれ！　こんな時間に何奴だ?!」

「門を！　門を開いて頂戴！」

「なんだ、お前。門は明日の朝まで開かぬ。それにそんな格好で…  
…怪しいな、ちょっとこっちに来い！」

「いいから、今すぐ　もう！　これ！　私は！　王宮の！　女官  
なの！　いいからとっとと隊長呼んでこないとクビにするわよ！」

怒鳴りながらずい、と兵士の目の前にアンリエッタの許可証を突き出すルイズ。

兵士はその書状を暫く眺め、最後の王家……それも女王直々の署名を見るやみるみる内に顔色を青くした。

彼ら城門を守る兵士に限らず、トリスティンで働く兵士や役人はまず最初に王家の署名の見分け方を叩き込まれる。

特に女王を始め王家の者直々のサインなどはある一定のルールを孕んでおり、緊急時には末端の者に提示しても

その効果を発揮できるようになっていた。

無論、偽造防止の為に階級によって開示されるサインの見分けなど色々細かい決め事があるのだが、ルイズの持つ書状は本物である。

兵士は突然、バネ仕掛けの玩具のように直立不動で敬礼の体制を取り非礼を詫びた。

「申し訳ありません、ミス！」

「いいから！ さっさと門を開いて！」

「ミス……それが、その……」

「あによ！ クビになりたいっていうの?!」

「いえ、滅相もございません！ 実は、門を開く為の ” 鍵 ” を隊長が持っています、その、我々では……」

「その隊長はどこ?!」

「それが……今日はもう自宅に戻られました……」

「はあ?! いいわ、他に門を開ける者はいないの?!」

「副隊長ならば……しかし、副隊長殿も今日はその、私用で既に……」

「どうなっているのよ!! あんたたち、この城門の守備部隊でしょうが! まったく、隊長と副隊長揃いに揃って」

「申し訳ございません!」

「まったく、姫さまに報告しとかなきゃ。  
いいこと?! さっさと隊長か副隊長を呼んできなさい。十分待  
つてあげる。」

もし間に合わなかったら、あんたクビよ、クビ。その時はついで  
にこの門も実力行使で破るから、その責任もとってもらうからね!」

兵士は青ざめた顔を更に青くし、短く裏返った声で返事をする。ド  
ラゴンから逃げるかのようにその場から走り去った。

丁度その兵士と入れ違つように才人とトマが追いついて来て、馬から降り閉じた門の前でイラつくルイズの元へ駆け寄る。

「ルイズ、どうした？」

「どうしたもこうしたも、門を開くことが出来る奴がないのよ」

「あちゃあ……」

「そんな！ 姉さんはこうしている間にも」

「わかってるわよ。今呼びに行かせてたわ。でも時間が惜しいのも事実だしね、サイト。」

あと十分程して門が開かなかつたらこの門を例の槍で破壊しまし  
「よ」

「おいおい、流石にそれはまずくねえか？」

「いいのよ、守備部隊が機能していない門なんて必要ないでしょう」

？ 責任は隊長が取るだろうし、あんたは心配しなくていいわ」

ルイズはそう言い捨てると、黙り込んでしまった。

トマはというと、実はメイジであることがわかったルイズには近寄りがたいのか、少し離れた場所で門を焦れたように睨んでいる。

実に気まずい、ピリピリとした雰囲気だ。

ルイズもトマも、焦りに焦っている。

勿論才人にも焦りはあったが、この二人のように我を見失いかけるほどではない。

才人は恐らくはこの先待ち受ける戦いに、その焦りが大きな落とし穴になりかねないと感じて

せめてルイズの気だけでも紛らわそうと彼女に努めて、少し明るく話しかける事にした。

「なあ、ルイズ。そう焦るなよ」

「……わかってるわよ。でも、仕方ないじゃない」

「何が？」

「あの子……私の目の前でさらわれたのよ？」

「仕方ないだろ。お前、その時は身分偽ってて杖も持ってなかったんだし」

「でも！ 私は……貴族よ」

「だからなんだよ。殺されるってわかってて突っ込むのが貴族なのか？」

「敵に後ろを」

「見せてねえよ、お前は。ただその時、行動に移すワケにはいかなかっただけさ」

「……きっと、助け出して見せる」

「ああ。俺とお前……ついでにトマの力でな」

うつむくルイズに才人は優しくそう言うのだった。

彼女の焦りの正体は、エメを助けることができなかつたという罪悪感から来ているらしい。

それはルイズのせいではないと言葉の上では多少納得したようであったが、やはり気持ちが整理できないのか

ルイズは唇を噛み俯いたままであった。

才人はそんな彼女の様子を見て、話題を変えることにした。

「そついやさ、俺たち何処に向かっているんだ？ バルビエって奴の屋敷に乗り込むんだろ？ 貴族街に無いのか？」

「違うわ。向かっているのは、そのバルビエの別荘よ」



「別荘？　なんでまた……　そもそも、なんでお前がバルビエの別荘なんて知っているんだよ」

「子供の頃、一度だけ……　ワルドの別荘に招待されたことがあるのよ。婚約が決まって、その顔合わせの時にね。

バルビエの別荘にはその時の帰りに立ち寄った記憶があるの。

たしか、森の道に痛んでいた馬車の車軸が壊れて、修理させてる間に逗留したのがバルビエ副伯の別荘だったわ」

「よく覚えてるな、そんな昔のこと」

「そりゃ、王家の森でのしきたりを初めて教えてもらった日だし、それに　婚約者と始めて会った日だったしね。

大公ともなると、こうやって下の身分の者の厄介になってあげることも大事なんだって父様が言ってたわ」

「へえ。まあ、大公ともなると色々大変そう　”　だった”　しな  
あ」

「あら、そのあたりの記憶は残っているのね」

ルイズはそう言うと、悪戯っぽく笑った。

焦りは消え、花のような可憐な笑顔だ。

才人は彼女の微笑にニヤリと笑い返して、腰に片手をあてた。

「まあな。虫食いになっちまったけど、まだまだ覚えてるぜ？ た  
とえば」

「何コソコソ話しているんだよ才人！ ルイズさん、門はまだ開か  
ないんですか！」

波に乗ってきていた才人とルイズの会話は、開かない門に焦れたト  
マによって中断してしまう。

どうやら才人がルイズと会話しているのを機に会話に割り込んで、  
すこし話しかけづらかったルイズに門の事を聞きたいらしい。

焦り続けていたトマは、ずっと彼女にまだ門は開かないのかと問い  
たかったのだろう。

ルイズは再び険しい表情に戻り、トマの方へ美しい鳶色の瞳を向けた。

その表情からは焦りは大分消えている。

「門を開く鍵を持つ隊長がここには居ないのよ。今そいつを呼びに向かわせているから、もうすこしの辛抱よ」

「でも！ こうしている間にも姉さんは！ その隊長は今どこなんですか?!」

「自宅だそうよ。まったく、城門の守備部隊の隊長が詰めていないなんて怠慢もいい所だわ。報告してやるんだから」

「それよりも、ルイズ。本当にそのバルビエって貴族がエメと別荘に居るのか?」

「証拠はないけれど確信はあるわ。大体状況からいってエメを手に入れたがっている人物なんてそいつしか居ないじゃない」

「ルイズさん、別荘というのは？　もしかしたら、貴族街にある自宅の可能性があると思うんですど？」

「あのね。貴族ってのは後ろめたい事を王都の、それも王家のお膝元である貴族街の自宅で堂々と思うと思う？」

「そもそも貴族街の屋敷は大きいけれど割り当てられる土地は狭いわ。」

「貴族街にある、かのヴァリエール大公の別宅のお屋敷に入ったことあるけれど、それでもせいぜい大きな宿程度の広さしかないのよ？　そんな大貴族でさえ狭い屋敷を利用しているのに、副伯ごときがそれ以上大きな屋敷に住んでいると思う？」

「手狭なのよ、貴族街って。妙な事をしていればすぐに噂になるわ」

「それで別荘、ってわけか」

「ええ。王家の狩場でもあるあの森の別荘ならば、街からも近い上副伯程度の地位で建てる別荘なら森の外れになるだろうし。」

「なにより、人目も気にしないでいいしね」

「姉さん……」

トマはルイズの説明に納得しながらも、心ここにあらずといった様子で門を見つめた。

傍目にもかなり焦っているようである。

才人はそんな彼の肩を叩いてから、振り向いた所で絹糸のような髪をわざとくしゃくしゃとした。

「わ、な、何を！」

「落ち着けて。気持ちはわかるがな、焦ってもはじまらねえだろ」

「でも！」

才人は言葉をさえぎるように、背にしていたデルフを抜いてトマに差し出す。

ところどころ刃こぼれした厚い片刃の刀身が鈍く、赤い月光を反射して怪しく光る。

「ほれ、貸してやる」

「え？」

「おう、相棒！ 折角出番かと思っただのにいきなりそれはねえぜ！」

「頼むよデルフ。いいか、トマ。相手はメイジだ。」

あのドニとか言う奴は俺が引き受けるが、バルビエってのも貴族なんだから？」

「ああ……」

「エメを取り戻すなら、お前も戦う事になるかもしれない。もっとけ。デルフが魔法からお前を守ってくれる」

「あ、ありがとう」

トマは礼を言いながら、おずおずとその体格で扱うにはかなり大きなデルフリンガーを才人から受け取った。

ずしりとしたその重みに、受け取った直後にすこし腕が下がる。

「仕方ねえな。ふん、不本意だが今回は守ってやる。感謝しろよ？  
坊……」

「どうした？ デルフ？」

「坊主、おめ……」

「？」

「……まあいいや。いいか？ お前さんの体格と腕力じゃ俺様をとつさに鞘から引き抜くなんて無理だ。

このまま俺様を持つといて、相棒の馬に乗り込みな」

「あ、ああ。わかった」

「ちょっと才人、そのボロ剣を他人に貸してあんたは大丈夫なの？」

「ああ、俺にはこれがあるからな」

才人はそう言って、地面から槍を一本、作り出して見せた。

細く2メートル程のシンプルな形の槍である。

トマは大地からいきなり出現した槍を見て、目を開いて驚いた。

「サイト、お前もメイジだったのか！」

「いや？ メイジは”妹”のルイズの方さ。俺のは手品だ。あ、ルイズの事も含めてこの事は口外すんなよ？」

「お前たち兄妹は一体……」



「話はそこまでよ。どうやら隊長がやっと来たらしいわ。私は話をつけてくるから、あんたたちは馬に乗ってここで待ってて。」

いい？ 門が開いたらすぐさま森の道なりに馬を走らせて。

最初の分かれ道を左に進んで、まっすぐ行けば副伯の別荘へと出るわ。私もすぐに追いつくから先行して」

才人の刺した釘も何処へやら、一時焦りを忘れ呆然とするトマの台詞をルイズは遮り隊舎の方へ顎をしゃくった。

二人がそちらの方を振り向くと遠くに赤い月光に淡く照らされた人影が二つ、慌ただしくこちらに走り寄ってきている。

才人達がたむろする場所へやって来る時間も惜しいのか、その人影を見ていた二人を置いてルイズも彼らの方へ駆け出した。

恐らくは門の守備隊の隊長と彼を呼びに走った兵士の二人に合流したルイズは、二、三なにか言葉を交わした後

門からすこし離れた場所にある守備隊の詰め所の方へそのまま消えていった。

「トマ、俺たちも用意しよう。ほら」

残された才人は馬に跨りながらトマに早く馬に乗るよう促す。

トマははっと我に返り、抜き身のデルフを片手に馬によじ登ろうとしたが、片手で体を引き上げることができず手間取ってしまう。

才人はそんなトマの手を取ってやり、強引に引っ張り上げた。

その少年の体は驚くほど軽く、背にした体はわずかに震えている。

無理も無い

これから初めてメイジと戦うというのだ。

姉の事があるとはいえ、平民である彼に恐怖が無いといえば嘘であろう

「心配すんな。俺やルイズがついている」

「あ、ああ」

「デルフ、トマを頼んだぜ？」

「任せとけ相棒！ おい、か弱い子猫ちゃん！ 俺様がしっかりと守つてやるから大船に乗ったつもりで居ろよ！」

「だ、誰が子猫ちゃんだ！」

「なんだあ？ れもんちゃんが良かったか？」

「何がれもんちゃんだ！ 今時どんなにラブラブな恋人同士でもそんな恥ずかしすぎる呼び方はしないぞ！」

「おう、それでいいぜ子猫ちゃん！ いい塩梅に震えがとまったな  
！」

才人は二人のやり取りになぜか肩を落としながらも、それだけ悪態が付けるなら大丈夫そうだなと背に向かって声をかけた。

言葉にトマー瞬口を開いて何か言おうとするも結局何も言わず、か

わりに才人の腰に回した左手に少しだけ力を込める。

やがて、門は重苦しい音を立てながら開き始めた。

「いくぞ、トマ。振り落とされるなよ？」

「サイトこそ、道間違えるなよ！」

何気なく後ろを振り返った才人とトマの目が合う。

トマの大きなブラウンの瞳に赤の強い月光が入り込んで、キラキラと輝いていた。

その端正な顔を歪めさせていた恐怖と焦りもかなり薄くなっている。

何故か才人はこの時始めてトマの容姿に見とれてしまい、思わず顔に朱を差してしまった。

「なんだよ?」

「……うるせえ。だから色男ってのはキライさ」

「わはは、相棒！ 昔っから男色の英雄ってのも少なくて言  
うし、そう照れるもんじゃねえぞ？」

あの嬢ちゃんも相手が男なら許して……いや、だめだな。それで  
もブツ殺されるか」

「な?! サイト、お前そんな目で僕を……」

「なわけねえだろうが！ デルフ、茶化すなよ！」

歯を剥いてデルフに怒鳴った才人は、プイッと前を向いて再び開く  
門を見る。

高揚する心は強敵に挑む期待の為か、背後の美少年に不覚にも見と  
れてしまった為の自責か。

ゆっくりと大きな音を立て開く両開きの門は、馬一頭がやっと通れ  
る程の隙間を作り出していた。

才人は頭を一度振って張り付いた耽美な意識を追い払い、馬に鞭を入れまだ完全に開いていない門の向こう

森の闇の中へと走らせるのであった。

赤い月の光も届かぬ闇の森を走る馬は一頭。

跨る者は二人。

才人は背に片手でしがみつくとマの事など気にも留めず、闇の中とにかく馬を走らせた。

道は豪華な貴族の馬車が往来するためか意外と広く、月光により照らされる森の道を進みルイズに言われた通り最初の分かれ道を左へと進む。

それからどの位馬を走らせただろうか。

やがて進む方向にわずかな、木々から漏れる赤い光ではない人の営みの光が点のように見えてきた。

恐らくはルイズが言っていたバルビエ副伯の屋敷の灯であろう。

才人がもつすこしだ、と後ろのトマに声をかけようとした時である。いきなり眼前に赤い爆炎が広がった。

馬は突如出現した炎に慌てながらも、その勢いそのまま炎と爆風の中に飛び込んでいく。

同時に闇の森に広がる炎と共に周囲の木々が均等に地に倒れて土へと変わり、炎を中心とした広く大きな円形の広場が出現した。

巨大な炎と広場はまるで巨人が起こした焚き火のようで、二つの月をも燃やさんと夜空を照らし出す。

その広場の中心で燃え盛る巨人の焚き火の中から、薪が弾けるように一筋の火線が弧を描いて道なりに落ちた。

トマを抱いた才人である。

才人は爆炎を見た瞬間、とっさに背後の自分より小柄なトマを抱き炎から庇いながら馬から飛び降りたのだった。

地に落ち転がる才人の体はそこかしこに酷い火傷を負い、衣服にはほんの少しだけ火が残っている。

対照的に咄嗟に庇われ抱きかかえられていたトマは、多少の火傷を負ったものの殆ど無傷で

うめきながら才人の体の下から這い出し自分を庇った彼の惨状をみるや、あわてて才人の服に残る火を手で払い消した。

「いちち、トマ、怪我無いか？」

「ば、馬鹿！ 他人の心配をしている場合か！ 酷い怪我してるじゃないか！」

「いいんだよ、俺は。それよりもお前はどつなんだ？」

「ああ、サイトが庇ってくれたから少し髪の毛の端が焦げた程度で済んだ。そんなことより、じっとしてろって」

「そついつわけにはいかねーだろ。ほら」

心配するトマを押しつけながら立ち上がる才人が指差した先には、消えつつある炎に照らされて人影が三つ浮かんでいた。

あれほど大きかった先ほどの炎は見る影もなく、地面に所々小さく散らばり円形の広場となてしまった森の道にふたたび月光がふりそそぐ。



三つの影を確認したトマは、才人に抱きかかえられ地に落ちた時  
も手放さなかったデルフを構えながら生唾を飲み込んだ。

才人もまだ煙が立ち上る衣服もそのままに、トマを庇った時に放  
り出した槍の換えを作り出す。

炎は爆炎に突っ込み広場の中央で息絶え転がる馬を執拗に焼いて  
いたが、やがてすべて消えてしまった。

それを見計らったように三つ並ぶ壁の真ん中の人物が一步前を出  
て人の言葉を発した。

「また会ったな、イーヴァルディよ」

「ドニカ」

「今度は邪魔は入らぬ。お前たち、手出しはするな。横にいる者は  
任せる。確実に殺せ」

殺気が膨らみ、場に満ちる。

それに呼応した才人が槍を構え、続いて隣のトマがデルフを両手に持ち前に突き出した。

一瞬の静寂と緊張の後、まず動いたのはドニではなく彼の両脇にいた二つの影であった。

影はドニの命令に足音も立てずトマに向かって走り出し、杖を突き出す。

しかし、硬くデルフを構えるトマに向けて詠唱の言葉は紡がれる事は無かった。

一人が突然走っている途中で倒れこみ、その異変に足を止めたもう一人も糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちたからだ。

「な、なんだ?!」

「うぬ?」

困惑するトマとドニ。

唯一何が起きたかを知る才人は、その姿を確認して僅かに笑う。

はたして崩れ落ちる二つ目の影の後ろから、柔らかな月光に映える白い影が新たに現れた。

『魅惑の妖精』亭の白くきわどい衣装にその身を包んだルイズである。

杖を持っている方の反対の手には、その衣装と同じように白く輝く刀身の短剣。

”毒竜の牙” と呼ばれる麻痺の秘薬を仕込んだ暗殺用のものだ。

「悪いけど、あんたたちの相手をしている暇ないの。邪魔しないでくれる？」

ドニは ”背後” からその声を聞き取るや、考えるよりも先に疾風のような速さで身をよじった。

彼の脇を白い短剣が後ろから通り過ぎる。

いつ、どうやって移動したのか。

つい先程まで地に倒れる部下の側にいたはずのルイズに、ドニはそのまま距離をすこし開けながらも

短剣を突き出し体勢を崩している彼女に杖を向けた。

杖の先から火球がほとばしり、ルイズに迫る。

決して避けられぬ最高のタイミングだ。

しかし、火球が焼いたのは白い影でなく5マイル程先の地面であった。

「才人、あいつは任せるわよ。不意打ちを避けるくらいだから、手こずりそうだし。」

それに私の魔法も温存しときたいし、エメも心配だからね」

「おう。トマも連れて行ってやってくれ。俺たちの馬はダイナーにされちまった」

「わかったわ。トマ、ついてらっしゃい」

愛らしいその声にドニはあわてて再び才人たちの方へ振り向いた。

先程まで自身のすぐ側にあつた姿をそこに確認し、暗いローブの中で目を開く。

まただ！

一体どうなっているのか！？

たしかに、たしかにさっきまで ”そこ” に居たはずなのに……

ドニは内心、彼には珍しくも激しく混乱していた。

そんな彼の眼前では ”魅了の青い鳥” の弟が遠目にもわかるほど困惑しながらも、あの妙なメイジと共に馬に乗り込んでいる。

先程焼いた馬とは別の、恐らくはあのメイジが乗ってきた馬であるう。

普段の彼であればこの機会を逃さず魔法を打ち込むのであるが、この時のドニは判断を誤り慎重になりすぎていた。

逆に一刻でも早くエメを助きたい才人達には願っても無い、僅かな時間でも在る。

やがて馬に乗り込んだ二人が才人の隣まで歩を進め、黒く焦げたも

う一頭の馬を挟むようにしてド二と対峙した。

その馬上から前を見据えたまま、小さなメイジがその使い魔に声をかける。

「アイツの横を駆け抜けるわ。ちよっかい出してこないよう、けん制なさい」

「あいよ、ご主人様もくれぐれも油断しないようにな」

「ふふん、もちろんよ」

「お、おい、サイト」

「あんだよ、トマ」

「サイトやルイズさんが普通じゃないのはわかっているけどさ……死ぬなよ？」

「なんだ、らしくないなお前。心配すんな、どの道俺は当分」 死

ねない” しな。お前こそ、デルフ無くすなよ？」

才人はそう言って、馬上の二人を見上げニカッと笑いかけた。

歯を見せ、人懐っこく笑うその笑顔にトマは釣られて笑い、ルイズは愛しそくに微笑んで返す。

次の瞬間。

神速の速さで才人は手にした槍をドニに投擲した。

槍は、”グリムニルの槍” は甲高いうなりをあげてドニの足元へ吸い込まれ、轟音と共に派手に爆ぜた。

同時にルイズたちが乗る馬が、舞い上がった土煙とパラパラと落ちてくる土砂の中へ踊り込む。

一方ドニはというと、槍を回避する為に上空へと逃れていたが予想外のその威力に再び驚愕していた。

しかし。

彼も戦闘に特化したメイジである。

一拍間をおき、すぐに冷静さを取り戻した彼は屋敷の方を向いて土煙の中から出てくるであろう馬を狙い撃ちすべく杖を構える。

が、その思惑はあっさりと破られてしまつたのだつた。

「お前の相手は、俺がしてやるよ」

「な?!」

宙に浮く自分の目の前に、細身の槍を振りかぶつた才人の姿。

慌てて体を下に移動させ、横薙ぎの一閃をドニは避けた。

そのまま土煙の中へと一時退避する。

才人は姿をくりましたドニなどお構いなしに、今度は上空から地に向けて手にしていた槍を投擲する。

再び雷鳴に似た爆音を立てて再び土砂が水柱のように空中へ舞つた。

地へ落下しながら才人は、土煙の中を抜けバルビエ副伯の屋敷へと続く道を駆ける馬影を確認して胸をなでおろす。



それから着地と同時にもう一度槍を作り出し、副伯の屋敷へと続く道を塞ぐように移動して敵の気配を探った。

後方、屋敷の方向には気配はない。

前方の土煙の中からは人の気配こそ感じないものの、強い殺気のような物を才人は感じ取った。

しかし、相手は攻撃してこない。

こちらの位置は間違いなくバレている。

なぜだ？

なぜ、攻撃してこない？

「驚いたぞ、イーヴァルデイ。まさか、これほど強力な攻撃をしてくるとは思っても見なかった」

掛けられた声は、何処か余裕を感じさせた。

才人は声のする方角を頼りにその槍を三度投擲しようとして、ある

異変に気がつく。

声が壁に阻まれているかのように遠い。

更につつすらと晴れゆく視界の先に、大きな土の壁が出現していた。

壁は才人を囲むようにぐるりと四方にまるく作られている。

「一つ、良い事を教えてやろう。俺の系統は ”土” だ。

ガリアの火竜山脈に近い地方で生まれでな、主筋の貴族が鉱山経営をしていてよくこういった ”事故” が起きたものだ」

言葉に才人ははっとする。

夜なので良く見えないが、明らかに周囲の土煙の質が変わっている。

しかも晴れていくどころか更に濃密になっている事に気がついた。

「今度は空気の壁でなく、丈夫な土の壁で」閉じ込めた」から  
今までの比ではないぞ？ 死ね、イーヴァルディ」

しまった！

ルイズ達を追わせまいとここに陣取って動かなかった事が仇になっ  
た！！

そう胸中で一人ごちて、才人はルーンを強く輝かせながらその場を  
跳び去ろうとする。

しかし、それもかなわない。

逃げようとする才人を阻むように、地面から触手のような土の手が  
足に絡みつく。

土系統の魔法、 ”アース・ハンド” である。

慌てて才人が力任せに片足の ”アース・ハンド” を引きちぎっ  
た時、何かが足元に投げ込まれた。

それは小さなガラス瓶で中には粉状の物が入っている。

投げ込まれた時の衝撃で小瓶はあちこちひび割れ、今にも碎け散っ  
てしまいそうだ。

これから何が起きるのか理解している才人の目の前で、小瓶の中の粉状の物が激しく光を放ち始める。

やがて小さな激しい光がひび割れた小瓶を内部から破壊してしまった時。

ドニが作り出した閉じた空間の中でその火花が、蔓延する炭塵に錬金された土煙に燃え広がり、火花が火に。

火が炎に。

炎が爆発に変わる。

炭鉱などで起こる、炭塵爆発が再現されていく。

その威力は凄まじく、学院の塔ほどもある巨大な火柱が土の壁の内側、才人をすっかり包み込んだのだった。

ルイズとトマが振り返りその巨大な火柱を見たのは、バルビエ副伯の屋敷を目の前にした時であった。



爆炎の塔は王家の森の夜空を紅く染め上げ、月にまで届きそうな程高くそびえて消えた。

バルビエ副伯の屋敷にたどり着き、質素な門扉に伸ばした手を止めて天を焦がすその炎をルイズは見つめる。

唇を噛み眉根を寄せ美貌を曇らせたその表情はどこか、焦りと不安がにじみ出ていた。

彼女の隣で同様に出現した炎の塔を見ていたトマも、ルイズと同様にいやさらに焦りを色濃く顔に映して夜空を見上げる。

「ルイズさん！ あれは……」

「……サイトは魔法が使えないわ。あれは恐らく、あのメイジの物でしょうね」

「助けにいかないと！」

「サイトなら 大丈夫よ。それに目的を見失っちゃだめよ？ 私達はエメを助けにきたんでしょ」

「っ！ で、でもあんな炎を受けたら、いくらサイトでも！」

トマの言葉をルイズは無視して再びバルビエ副伯の屋敷の門扉の方を向いて、ゆっくりと伸ばしていた手を扉に当てた。

静寂を取り戻した夜の森に、錆びた鉄の擦れる音が響き渡る。

門はあっさりと開いて、館までの小さな中庭が目の前に現れた。

「ルイズさん！」

「行くわよ、トマ。エメが待っているわ」

「でも！ サイトさんの事が心配じゃないんですか？！  
姉さんだって、誰かを見捨ててまで助け出されてもきつと悲しみ  
ますー！」

「……心配してるに決まっているじゃない。そんなの、当たり前よ」  
「だったらー！」

「……だけど、それ以上に信頼してるの。そんなの、当たり前じゃない」

ルイズは小さくそう言って、自身の迷いを振り切るようにと、  
門の中へ入っていった。



トマは何かを言おうとして口を開いたがそれ以上言葉を紡げず、渋々彼女の後を追う。

しかしすぐに立ち止まってしまい、もう一度炎の柱があつた夜空を見つめた。

その表情は心配と不服で彩られている。

「おう、坊主！ 相棒なら心配いらねって。夕方に言ってたろ？  
夕子の悪い魔女にかけられた呪いのおかげで、簡単には死ねない体になってんだ。相棒は無事さ。」

それに、嬢ちゃんの気持ちも察してやれよ」

「デルフ……うん、そうだな。今は、姉さんが先だ。僕がどうかしてたよ」

「わかりや、それでいい。ほれ、はやく行かないと嬢ちゃんに」

「トマ！ はやく来なさい！ いい加減切り替えないと、置いていっちゃうわよ！」

トマがデルフと話している間に門と館の間、中庭の中央まで進んだルイズが少し八つ当たり気味にがなった。

慌てて駆け寄ろうとしたトマだったが、またもその足を止める。

今度はバルビエ副伯の館の方を見て。

「驚いたな。ドニの魔法の音を聞いて見物に出てみれば、まさかネズミが二匹入り込んでいたとは」

「バルビエ！ 姉さんを何処にやった?!」

「……薄汚い平民の分際で私に話しかけるな。口の利き方をしらん  
「ゴミめ」

ルイズがトマから屋敷へと視線を戻すと、いつの間にか開いたのか先程まで閉じられていた屋敷の入り口が開け放たれていた。

開かれた扉の向こうは薄く明かりが灯っていて、その光を遮るように少し背の低い四十歳位の男が立っていた。

逆光となりその表情は見えないが ” 両手に ” 杖を持っている事が伺える。

右手には普通の木製のよう杖。

左手には美しい銀色の杖。

館の中から漏れる光が銀の杖をキラキラと鈍く光らせる。

ルイズはとっさに杖を持っていない方の手を横に差し出して、後ろのトマに手のひらを見せた。

高圧的にゴミ呼ばわりされ、何かを言い返そうとしているであろうトマに黙っているよう暗に示す為だ。

目の前の男の物腰から、平民であるトマが何を言おうとややこしくなるだけだという判断からの行為である。

「バルビエ副伯ね？」

「いかにも。失礼だがかような夜分、ミスのような如何わしい格好

のレディの訪問を受けるような不徳はしていないつもりだが  
一体どのような要件かな？」

「私はアンリエッタ女王直属の女官よ。副伯、あなたにかどわかしの嫌疑がかけられているわ。」

アンリエッタ女王の名において、あなたとこの館に対し警察権を行使するから聞かれたことには嘘偽りなく答えなさい」

「ほう……また随分と妙な者が来たな。」

まあ、いいだろう。一体どのような見で私にそのような嫌疑が？」

「とぼけても無駄よ。さつさとエメを返しなさい！」

彼女をさらったメイジがここへ来る道中邪魔した事からも、黒幕があんただって明白なのよ！」

「これはまた、随分と乱暴な言いがかりだな。道理も何もあったものではない。」

確かに今夜、私が雇っているメイジに屋敷に近づく者を排除するようにと命令してはいるが

それ以外では彼が余所で何をしようが私が関知するところではないのだよ。」

そもそも、君が証拠として考えている事柄は、随分と根拠に弱いものだとは思わないかね？」

「……ええ、それは私も同感よ。無茶苦茶な内容で、言いがかり同然だってわかってるわ。だけどね？」

言葉を一旦区切って、ルイズはバルビエ副伯をその美しい鳶色の瞳で強く睨みつけた。

白く際どい衣装は赤みの強い月光をたたえて、彼女の薄いピンクブルンドと同様の色合いを醸し出しどこか幻想的ですからある。

肩は震え、食いしばられた真珠のように白い歯が口の端から見え、杖を握り締める左手はギリと音を立てた。

そして、トマを制する為に横へと突き出していた右手の平をぎゅっと握り締めながら、彼女は憤怒を言葉に紡ぐ。

「私の、サイトを、傷つけた奴を、許しておくはずがないでしょうが!!!」

黒幕があんたなのはわかってんのよ！ ガタガタ言わずにエメを出しなさい!」

沈黙。

静寂。

ルイズは溜め込んでいた怒りを言葉に乗せ、ここぞとばかりに外へと発露させている。

トマとバルビエ副伯は驚愕を顔に浮かべながらも、ルイズのあまりにあまりな言い分にあきれ返った。

「あの、ルイズさん？」

「うっさい！ あんたは黙っていなさい！」

「……まさか、そのような理由で今夜ここへ来たのかね？」

冷たい、あきれ果てたような両者の視線を前後から感じて、ルイズは少しだけ冷静さを取り戻した。

それから今の己の姿を取り繕うように、腕を組んで目を細めながら口を尖らせる。

「ふん、状況から行ってアンタ以外に犯人なんて居るはずないじゃない。」

証拠なんて ” これから ” 集めればいいのよ。

言っただでしょ？ 手始めにこの屋敷から検めるってね。

大体私はね！ こんな茶番とつとと終わらせて、早くあのメイジの所に戻ってポコポコにしてやらないと気がすまないの！

さつさと元の生活に、アイツと二人で水入らずの生活に戻りたいの！

わかる?! あんたが私の邪魔をしてんのよ!!

しらばっくれるなら、屋敷ごとあんたを灰にしてやるわよ!?!」

苦々しく言い放ち、最後には再び語尾を荒げバルビエ副伯を睨みながらビシッと指をさすルイズ。

副伯はそんな彼女を暫く呆れ顔で眺めていたが、唐突に含み笑いを始めた。

「あによー！」

「ク、ククク、そんなつまらん理由で今夜邪魔が入ったのか。ちと困らせてやろうと思ったが、まさかこんな小娘の逆恨みからここを突き止められていたとは夢にも思わなかった！」

「うっさいー！」

「まあ、いいだろう。どうせ屋敷を調べられたらバレてしまうし、口封じもせねばならん。時間も惜しい。」

「じゃあ、やっぱりここにエメが居るのね？」

「うむ、君の読み通りあの平民の娘はこの館の地下室にいるぞ？まだ生きてはいるが……早くいかないと手遅れになる。そら、はやく助けに行つてやれ」



副伯は意外にもあつさりと事実を認め、一步下がり屋敷の中へ入るよう顎でシヤクってみせた。

余裕たっぷりなその態度にルイズは訝しげ、何か罫があるのでと怒りで白濁させながらも思考を巡らせる。

対照的に副伯の言葉にいち早く反応したのはトマで、たまらず駆け出しルイズの脇を走り抜けて

無防備にも副伯のすぐ側を通って屋敷の中へ消えていった。

バルビエ副伯は口の端を上げながらも特にその場から動かず、両手に杖を持ったまま屋敷に入るトマの姿を見送る。

「……何を考えているの？ かどわかしの罪をあつさりと認める程正直者には見えないけれど」

「なに、罪を認めても問題ないからな」

「私達をここで口封じするからって事なんでしょうけど、お生憎さま」

「その手もあるが……」 “これ” が仕上がったのでな。

別にお前達を殺す必要もないし、明日には女王陛下すら私の意のままとなるのでね」

副伯はそう言って、両手に持った杖の内銀色の杖を掲げてみせた。

僅かな光を反射していた杖が鈍く、青白く光り始める。

何かされる？！

とっさにそう判断したルイズは、白い麻痺の短剣を副伯へ突き立てるべく ” 加速 ” を短く詠唱した。

動けるのは一瞬。

しかし、その一瞬は副伯の背後に回り込み強力な麻痺の短剣をほんの少し背中に掠らせるには十分な時間である。

果たして ” 加速 ” が発動し、ルイズに一瞬の時とガンダールヴをも凌ぐ超高速移動の力が与えられた。

虚無の圧倒的な力を発現させたルイズは、腰の短剣へ手を伸ばそうとして異変に気がつく。

体が、動かない。

否、体が段々と動かなくなっていく。

なぜ？

疑問と共にルイズに与えられた一瞬は終わり、次の数瞬の内に彼女は意識もあっさりと手放した。

最後に覚えていたものは青白く輝く銀の杖であった。

「姉さん！　姉さん、どこ？！」

一方トマは屋敷の中を走り回り、姉の姿を探し続けていた。

副伯が地下室に居ると言っていたことは覚えているものの、勝手分からぬ貴族の屋敷である。

トマは厨房や食堂へ足を踏み入れ無駄に時間を浪費しながらも、それ程間を置かず書斎の隣にあった扉を開け地下室への入り口を見つけた。

薄暗い地下への階段からは少しカビ臭い臭いが吹き上がって来る。

僅かな躊躇を振り払いつつトマは足元も確認しないまま、その階段を駆け下りた。

魔法のランプのようなものが等間隔で配置されたその階段は、深く薄暗く地下へと続いてまるで地下牢のようである。

やがて足を滑らせかけながらも階段を降りるトマの眼前に、薄汚れた頑丈そうな扉が出現した。

荒い息と転げるように階段から降り立った勢いもそのままに、トマはその扉を押す。

扉は少々重かったがあっさりと、不快な音を立てて開く。

「姉さん！」

叫びながら地下室の中へと身を滑り込ませたトマは、その光景に絶句し立ち尽くしてしまった。

心臓は暴れ馬のように跳ね上がり、重いデルフを思わず手放しそうになる。

部屋は大小のランプで照らし出され、降りて来た階段よりも明るかった。

そこにあっただのは、様々な拷問道具とそれらに繋がれたままの人間の死体とその破片。

しかし、そのどれもはトマの視界に入っていない。

トマの視界にあったのは、部屋の中央に吊るされた姉だけであった。

「姉さん！」

少し間を置いて目の前の事実がやっと意識に届き、悲痛な叫びをあげながらもトマはデルフを放り出して姉の元へ駆け寄る。

エメは両手を地下室の天井に張り巡らされた梁から鎖で吊るされており、所々鞭打たれたのか着衣が無残にも艶めかしく裂かれていた。

トマの呼びかけには反応はなく、短めのスカートから伸びる白い足には何か赤い蔦のようなものが絡み付いている。

蔦は吊るされたエメの足元にある奇妙な箱の中から生えており、箱の側面の蓋が開いてそこに彼女のものと思わしき血が滴っていた。

どうやら絡みついた者の血を抜き取る魔具か魔法生物らしい。

トマは姉の白いふくよかな足に絡みついた蔦を真つ先に外そうと試みたが、まるでエメの足の一部のようにびくともしなかった。

「姉さん！　姉さん！　くそ、離れる！　こいつ、離れるよ！」

「う……」

トマの呼び掛けにエメは僅かに呻いて答える。

息も絶え絶えではあったが、それでもその声は生きているという事実をトマに認識させるには十分なものであった。

トマはその声に焦りを強め、更に強く強引に蔦を引っ張ってみる。

鳶はメリメリと音を立ててゆっくりとエメの足から剥がれかけたが、同時にその痕から血が流れ始めた。

どうやら鳶から細い根のようなものが無数に生えていて、エメの足に深く食い込んでいるらしい。

トマは出血した姉の足を見て慌てて手を鳶から離し、次に姉を吊るしている鎖を外そうと試みた。

しかし、足に絡みつくと鳶がエメをわずかにではあるが引つ張っている事と、高い位置で固定されている為に試みは上手くいかない。

「くそ、何か、方法が……そうだ！ デルフ！ デルフで鳶を斬つて……」

「おいおい、やめとけ坊主！ 相棒じゃあるまいし、足に絡みついた鳶だけ斬るなんて芸当がお前にできるか！

それにその絡み付いている奴は恐らく魔法生物か魔具の類だ。迂闊に壊すと剥がれなくなるぞ？」

「じゃあ、せめて鎖だけでも！」

「バカ！ 斬鉄の方がもっと難しいに決まってる！ 余計なことせ

ずに嬢ちゃん呼んでいい！」

「ルイズさんを？」

「おう、嬢ちゃんならその魔具だかなんだかの魔法を解除出来るはずだ。それに鎖も魔法で何とかなるだろうしな！」

「そ、そうか！　じゃ、早く呼んで」

「…………マ…………」

デルフの助言を聞き、放り出してしまっていた大剣を拾い上げながら一目散に階段を駆け上がるうとしていたトマの背中に

かすかな、苦しげで消え入りそうな声が届いた。

声の主は朦朧と意識を取り戻したエメである。



「姉さん！ まってて、今助けを」

「ト、マ、聞いて。エヴラール様は、……副伯は」

「だめだ姉さん！ 傷に触るからしゃべらないで！」

「彼が持つ、銀の ”くちばし” は、 ”青い鳥” の血で、覚  
醒、するの」

「姉さん?!」

「トマ、わた、しの事はいいから、逃げて。お父様が恐れていた、  
事に、な」

「何を恐れていたのかね？」

聞き覚えのある声に、トマは後ろを振り返らず姉の元に駆け寄って  
デルフを地下室の入り口へ向け構えた。

やがて扉が開いたままの入り口の向こう側、暗い階段からすこし背

の低い影がゆっくりと現れる。

館の主、エヴラール・バルビエ副伯その人であった。

「バルビエ、よくも姉さんを！ ルイズさんはどうした！」

「……エメ、君の父親は何を恐れていたのかね？ もしかして、青い鳥についてあの男は何か知っていたのか？」

「エヴ、ラール様……もう、やめて、くだ、さい……」

「答える！ バルビエ！」

「うるさいな。あの娘ならほら、この通り」

そう言ってバルビエ副伯がすこし体をずらすと、その背後の階段に茫としたルイズが立っていた。

目は虚ろで空の一点を見つめ続け、そこに意志は全く感じられない。

「ルイズさん?!」

「流石は ” 魅了の青い鳥 ” のくちばしだな。詠唱も無しに一瞬で魅了できたぞ、エメ。

だがすこし ” 縮んで ” しまった。どうやら使えば使うほど元のくちばしに戻っていくらしいな、これは。

エメ、 ” 計画 ” は万全を期したのでな、悪いがまた血をもらうぞ  
「

ルイズを見るトマの視線を塞ぐように、バルビエ副伯はずらした体を元の位置に戻して

手にしていた銀の杖をエメにむけて掲げてみせた。

トマは副伯の背後に立つルイズの様子を気にしながらも、姉を守るべくバルビエ副伯に向けてデルフを構え、歯をくいしばる。

「トマ……にげ、て……」

「そうはいかない。君の父親が恐れていた事とやらを是非知りたいし、”青い鳥の生き血”もまだまだ必要だ。

君の口ぶりからその小僧も痣を持っていると見てまちがいなからうしな。

ふふ、私は運がいい。これだけ血があれば、女王陛下どころかリシュモン殿も操れるだろう」

「な?! バルビエ! お前、この国の貴族じゃないか!」

「いかにも。しかし、何れあの大国アルビオンにのみ込まれる運命を持つ国でもある。

陛下はお前達平民の為、領土の為と徹底抗戦をなさるつもりらしいが……

ふん、愚かなことだ。気高い志だけで戦には勝てぬ。

だからこそ、私のような有能な者が陛下の側で助言を行う必要がある」

「お前……」

「ふん、まあ平民のお前に言ったところで理解できまい。取りあえず私の人形となってもらおう」

バルビエ副伯はそう宣言すると、持っていた銀の杖を取り出してトマに向けた。

杖は青白く光り、その光に同調するようにトマの体もつつすらと青く光る。

「むっ？」

「……な、なんだなんだ?! バルビエ! 僕に何をした!」

「まさか……効かない?! そんなばかな!」

「おう、坊主、今がチャンスだ! とつとそいつをとっちめな!」

副伯はトマに ” 魅了の青い鳥 ” の効果が効かないと判断するや、慌ててもう片方の杖を振りかざした。

トマも一瞬の逡巡の後この機を逃さず、デルフを正面に構えたまま体制を低くして副伯へと駆ける。

先に行動が終わったのはバルビエ副伯であった。

氷の槍、 ” ジャベリン ” を三つ作り出した副伯が姿勢を低くし己に迫るトマへと槍を飛ばす。

狭い地下室、距離もそれ程離れてはいない。

しかも相手はひ弱な平民である。

氷の槍は決して避けられぬ速さで目の前の無礼な平民に殺到し、串刺しにするはずであった。

しかし。

槍はあっけなく、まるで砂に吸い込まれる水のようにトマが持つ魔剣に吸い込まれてしまった。

「 な?! 」

「い、のおおお！」

トマは石畳の床につきそうな程低く、這うように副伯へと迫る。

姿勢は低く。

剣を下から突き上げるように！

二の次の剣は考えずに、突け！！

心の端でそう叫びながら、不意の事態に慌てる副伯の喉元に向けて渾身の力を込め、トマは重い片刃の大剣を突き上げた。

副伯は咄嗟に身を振って躲そうとするも、鋭い切先は彼の肩に刺さり激痛が全身を走る。

地下室にがらん、と副伯が持っていた銀の杖が転がる音が響き、やがて荒い息遣いが二つその音を塗りつぶした。

「うが、あ、おのれ、平民！」

「や、やった！」

「あ……え？ え？ ここは?!」

副伯が銀の杖を落とすと同時に、階段の方から間の抜けたルイズの  
声がトマの耳に届く。

どうやら杖を手放すと、杖の効果が切れてしまっらしい。

バルビエ副伯は凄まじい憎悪を視線に乗せトマを睨んでいたが、ル  
イズの声を聞くや己の不利を悟り舌打ちをした。

「お、おのれ！ こんな、こんなガキに私の計画が……!!」

「観念しろ、この悪党め！」



トマの言葉に怒りが炎のように燃え広がる。

しかし状況は副伯に罵倒を投げる時間すらも与えていなかった。

魔法を封じられた上女王の密偵まで元に戻っては勝ち目はない。

ここは一旦引くべきだ。

なんとかリユシモン殿と連絡をとって匿ってもらわねば、私の立場どころか命すら危うくなる。

激痛と憎悪で表情を染め上げながらも、バルビエは冷静にそう判断して刺されたままの剣を自ら後ろへ移動して引き抜き

なんとか落とさずに握っていた自分の杖を振り上げて ”レビテ―ション” を詠唱した。

呪文は直ぐに完成し、未だ状況を呑み込めていないルイズを突き飛ばしながら副伯は猛烈な勢いで階段を上り飛んで行く。

「あー！」

「きゃあー！」

トマはバルビエ副伯が落とした杖を拾い上げ、階段から転げて尻餅をついているルイズを助け起こした。

短いスカートはまくり上げられ、無様にも両脇をリボンで固定するタイプのパンツを露にしていたルイズは

いちち、と言いながらも差し出された手を掴んでよろよろと立ち上がる。

それからすぐに先程の自分の体勢を思い返し、顔を真赤にしてトマに食ってかかった。

「み、みみみた?! 見えた?!」

「ルイズさん! そんな事よりも姉さんを頼みます!」

「え? トマ? あ、ここって……え、エメ!! トマ、これは一体……」

「話は後で! 今は姉さんを! 足に絡み付いている魔法の道具がルイズさんじゃないとダメだってデルフが言っていました。」

僕は副伯を追います！」

「あ、ちょ、トマ！ 待ちなさい！ くら！ せめて見たか見てないか位、くら！」

ルイズの制止も聞かずトマは再び走り始める。

階段を駆け上がり館の外へ出て逃げた副伯の姿を追うが、既にその姿は跡形もなく消え去っていた。

眼前に広がる森は闇を湛え、空には二つの月。

トマは悔しさに口を固く結んで何処か、副伯が逃げた痕跡を探して辺りを伺う。

もしや、逃げずに館の屋根にでも登って反撃の機会を探っているのかも、と屋敷を観察していた時である。

門の向こう、トマたちがやってきた道が伸びる夜の森の方角から、耳をつんざく様な爆音が轟いた。

突然の轟音にビクンと肩を跳ね上げてそちらを向くと、夜空に先程見た爆炎の塔が再び出現しその光と月の光を背景に

森の鳥達が夜空に逃げまどっているシルエットが浮かび上がる。

どうやらまだあのメイジと才人が戦って居るらしい。

「サイト……」

「わはは、相棒の方は派手に暴れているらしいな！」

「なあデルフ。サイトは……本当に大丈夫なのか？」

「ああ、多分な。しかし相棒も因果なもんだ。  
どうしてこう、でかいドラゴンやら亜人の軍勢やら厄介な敵ばかり抱え込むんだろうな？」

「僕がそんなこと、しるかよ！」

「ま、そうだがな。……おい坊主、取りあえず姉ちゃん取り戻した  
ことだし相棒ん所いくか？」

「え？」

「あのメイジ追うって言うても、この暗さで飛んで逃げられちゃ追  
いようがないだろ。」

相棒ん所に行こうぜ！」

「で、でも……流石にあんな炎を撃ってくるメイジ相手に僕一人が  
行っても……」

「バカ、何も坊主が戦う必要はねえよ。俺様を相棒に渡してくれ  
ばいい。」

あの槍は威力こそあるが、人間のメイジ相手だと大味すぎて結構  
やりづれえんだ。

それに相棒は槍についてはもっぱら投げるばかりだからな、多分  
手こずってるのもそのせいだろうさ。」

「そ、そうなのか？」

「ふん、最初から殺す気でやってりゃ相棒ならあの程度瞬殺よ、瞬  
殺。」

まったく、妙な体になっちまってからこっち、相棒はなにかと直  
ぐに槍ばっか使って面白くねえ！

大体、あんなものに頼るから見ろよあのザマを。昔の相棒の方が  
余程強かつたぜ。

しまいにゃ俺様をこんなヒョロっ子にレンタルする始末だし！」

「デルフ……お前、もしかして妬いているのか？」

「うるせえ！ いっちょまえの口聞くんじゃねえこのヒョロっ子！  
お前なんかお人形遊びでもしてればいいんだ！」

「お、怒るなよ、僕が悪かったよ。」

「……そうだな、バルビエの手がかりが見つからない以上、サイト  
の方に行こう。」

「あ、でも僕、馬は乗れない……」

「……なあ、坊主。その杖、お前なら使えるんじゃないかねえか？」

「え？」

「俺様は持ち主の事はある程度 ” わかる ” んだ。おめ、色々と  
秘密かかえてんだろ？ 例えば、 ” 青い痣 ” もっているのかな  
」！

「！

「理由は聞かねえから安心しろや。言いふらして面白い話じゃねえ  
しな。」

「それよりもだ、もしその杖使いりゃ ” レビテーション ” も使

えるようになるんじゃないか？」

「僕が……メイジになれる？」

「わかんね。だから試してみようぜ。そうだな、あのエバったおっさんはどうやら杖に生き血をかけていたようだし  
ちっとだけ垂らして様子見るってのはどうだ？」

「わ、わかったよデルフ。ぼぼ、僕がメイジに……」

トマは突然の話に戸惑いながらも、デルフを地に突き立てて持っていた銀の杖を見つめた。

杖は月光を反射し、トマの手の中で鈍く光っている。

暫しの逡巡の後、トマは意を決して左手の平をデルフの刀身に押し当てた。

美しい少年の眉根が歪み、直ぐに刀身を握る手を離して銀の杖を血が流れ出したその手で握り直す。

直後。

杖を中心として風が巻き起こり、青白い光がトマの体を包み込んだ。

「わ、わ、これ、なんだなんだ?!」

「坊主?!」

デルフの声は強くなる杖からの風にかき消されていく。

風は強風となりまるで竜巻のようにトマを包み込んだ。

トマは慌てて杖を手放そうとしたが、なぜか杖から手を離すことが出来ない。

うつすらとたまらず瞑っていた目をあけると、なんと銀の杖がどろりと溶けて手にまとわりついているではないか。

溶けた銀の杖はトマの左手を伝って全身に這い上がって来る。



「うわー！ うわー！ で、デルフ！ た、助け」

声は更に強くなる竜巻の凄まじい風切り音によってかき消されてしまふ。

それからどれ程時間が経ったであろうか。

やがて風もおさまり、後に残るのは静寂と一つの影。

影は、銀光煌めく出で立ちの影は、無言で側に突き立っていた剣を握るや赤い月光が強く降り注ぐ夜空へと音もなく飛び立つ。

その姿はまるで美しい鳥のように優雅で、まるで絵画を切り取ったかのようにであった。

そんな幻想的な光景を無粋な歓声で彩る魔剣の声。

「おでれーた！ 流石の俺様もこれは予想できなかったぜ坊主！」

しかし夜空に行く銀の影は、手にした魔剣の言葉に反応しない。

かわりに口を開け、声を発する。

声は言葉では無く、信じられないほどの美しい調べであった。

調べは夜の森に透き通るように響きわたり、風が走るように木々がざわめき始める。

「な、なんだなんだ?! おい、坊主! どうなってんだ? おい  
つてー!」

デルフの言葉にトマは変わらず反応しなかった。

一心不乱に美しい調べを口にのせて唄うばかりである。

もしこの場にルイズやタバサが居れば、唄の正体に気がついたのか  
もしれない。

目覚めた” 魅了の青い鳥”  
夜空を飛び続ける。

は、魔剣を手に狂おしく唄いながら

「煤火」のドニは酷く戸惑っていた。

久々に出会えた手応えのある相手の存在に、である。

まだ少年とも見て取れる敵は、彼が得意とする炭塵爆発の魔法を三度放つても未だ殺せずにした。

一度目は奇襲で。

二度目は念入りに。

三度目は混乱の最中。

敵はその度に何事も無かったかのように立ち上がり、奇妙な槍を振りかざして挑んでくる。

馬鹿な？！

これは何かの間違いだ！

何故あの炎を、爆発をまともに受けて立ち上がれるのだ？！

目の前に迫る敵が投げた槍を必死にかわし、空中へとドニは逃れた。

槍はドニが先程まで居た場所で爆ぜ、大きな土柱を上げる。

その威力に内心戦慄しながらも、次に来るであろう敵の攻撃と次の魔法の詠唱に備えた。

僅かな隙を見せればたちまち敵の攻撃の圧力に飲み込まれてしまう。

イーヴァルデイと名乗った敵は恐ろしく素早く、タフネスで、その外見に似あわぬ殺気を纏っていた。

一体何者であるのだろうか？

どうすればあんな……

思考は続かない。

魔法でも使わない限り常人では到底跳べぬ高さまで跳躍してきた敵が、眼前に迫っていたからだ。

「ちい、しつこい!」

「この! ああ、クソ! 今のは惜しかった!」

どこか余裕のある敵の言葉に舌打ちしながらも、ドニは未だ土煙舞う大地へと移動する。

その土煙を利用しもう一度燃える石の粉、炭塵を錬金して敵に四度爆炎の魔法を使うために。

化け物め。

いいだろう、お前が死ぬまで何度でも燃やしてやる!

ドニは久しぶりに味わう憔悴と恐怖を増大する殺意で塗り潰して未だ舞い散る土煙の中、空から落ちてくる怪物の姿を睨みつける。

一方、才人の方もドニと同じように酷く戸惑っていた。

相手は手練の戦闘メイジであるとはいえ、かつて戦ったワルドや暴君といった強敵よりも遥かに格下の相手である。

その相手に苦戦を続ける己の胸中に、才人は問いかけ続けていた。

何故だ？

何故俺はこの程度に相手に苦戦しているんだ？

手加減して戦っている？

いや、違う。

デルフがないから？

槍を扱う事に慣れていないから？

……いや、そうじゃない。

じゃあ、なんだ？！

答えは出ない。

……俺の戦い方が雑になっている、のか？

むー、地上戦ならすぐ終わるんだろうが、アイツもそれをわかって  
いるのか直ぐ空中に逃げやがるし。

奇襲、かけづらいよなあ。

高く宙に跳んだ才人は地に落ちながら思案にふける。

そんな彼の隙を突くように土煙舞う地面から、鉄の矢がいくつも飛んできた。

恐らくはドニが錬金で作りに出した物を飛ばして来たのだろう。

慌てて身を抜ってかわそうとする才人。

しかしドニのように空中を自由に飛べるわけではない彼は、捌ききれず脇腹に一本矢が刺さってしまう。

「ぐ、ぐ、こんなもの！」

脇腹に刺さった矢を苦悶の表情を浮かべながら引き抜き、捨てる。

傷口からは血が吹きがすぐに止まり、やがて傷そのものも消えるのだった。

その異常な自然治癒力は ”グリムニルの槍” の力による物である。

いちち、くそ。また食らっちゃった。



前と違ってこんな風にダメージ受けても直ぐ治るからいいけどさ。

……いいけど？

才人は胸中でつぶやいた言葉にはっとした。

知らず、負傷する事を肯定していた自分に気がついたからだ。

次いで己に喰食っていた不死身故の歪な余裕と慢心を見つける。

不死性は才人に ” 絶対に負けない ” という意識をいつの間にか強く深く植え付けていた。

特にメイジにはそれが顕著で、才人にしてみれば相手の魔法を受け止め続け、精神力が切れるかひるんだところで

攻撃に転じても良しとどこか考えていた節さえもあった。

この時、才人に不死身の体を与え強大な槍を作り出すこの魔具は、逆に才人にとって枷となりつつあったのだ。

その証拠に心が震えていない。

ルイズを守ろうとする時ほど、ルイズが傍らに居る時ほど、虚無の唄を聞いている時ほど心が震えては居なかった。

その事実は才人の体に如実に現れる。

ルーンを通じて ” グリムニルの槍 ” から力を取り出している為、そのルーンの力の源である心の震えが無ければ

取り出せる力も強いものではなくってしまふ。

土煙が立ち込める大地に着地した才人は、舌打ちをしながらすかさず横へと跳んだ。

同時に才人が着地した場所で爆発が起きる。

爆風は水平に近い角度で跳躍した才人の足を舐めたが、先程よりも規模は小さいものであるらしく炎が才人を襲うことは無かった。

「ふん、よく避けたイーヴァルディ！ 褒めてやる！」

「ありがとうよ！ そら、お釣りだ！」

悪態をつきながらも才人は手にしていた槍を声のする方角へ投擲する。

先程の爆音に似た轟音がして、今度は炎ではなく土柱が夜空に上がった。

才人は空中に逃れているドニを確認しながらその場を移動し、今度は奇襲を掛けること無く再び舞い上がった土煙の中にその身を潜ませる。

……俺は虚無の使い魔 ” ガンダールヴ ” だ。

力の源は魔剣・デルフリンガーでも、 ” グリムニルの槍 ” でも無い。

” 心の震え ” なんだ。

心を震わせないと勝てる相手にも勝てなくなる程弱くなっちまう。

呟いて目を閉じる。

想うはルイズの美しい顔。

さらわれたエメの安否。

闘志と戦闘の高揚で心地よく昂ぶっていた心が不安や心配、愛しさなどといった不安定な気持ちで満ちていく。

果たしてルーンの白い輝きは徐々に強くなっていった。

しかし。

足りない。

これでは、この程度ではまだ足りない。

”デイスペル” の詠唱時間を稼ぐため、巨大な水の竜巻を押しとどめた時。

ルーの救出に向かっていた時。

アルビオンの時。

ルーガルーの時。

フーケのゴーレムの一撃を受け止めた時。

いずれの時の心の震えにも届かない。

エメが心配でないわけではない。

しかし、今は ”虚無” に目覚めその強力な魔法をも習得したルイズがエメの救出に向かっている。

危なっかしい所がある彼女だったが、才人はそんな ”虚無” の担い手であるルイズを信頼していた。

皮肉にもその信頼が安心となり、才人の力を削ぐ。

”ガンダールヴ” の強大な力は主を守る為に存在し、その虚無の詠唱を背にしない限り真価を發揮出来ない。

才人は唇を噛み、誰よりも理解していた筈のその事実を改めて実感した。

同時に、ただ一つの例外が閃光のようなひらめきとなり脳裏をつく。

そうだ！

アレならば、もしや……

「どうした、イーヴァルディ。もしかして諦めたのか？」

突如投げかけられたドニの言葉に、才人は思考を一時中断し夜空を見上げた。

土煙はいつの間にか殆どおさまっており、月を背にしたドニの姿がハッキリと見える。

同様に才人の姿も相手にハッキリと見えているのだろう。

「うるせえ！ チョロチョコと逃げ回るお前をどう仕留めてやるのか考えていた所だ！」

「ふ、そうか。だがそれも無駄になったな」

「何?!」

「お前が考え事をしている間に少し細工をさせてもらってな。土煙が随分早く収まったと思わないか？」

「な、まさか」

「今度は規模がでかいぞ? 二こら一帯まるごと吹き飛ばしてやる」

空中に浮くドニはそう口にしながら発火の為の薬品が入った小瓶を取り出し、無造作に地に向かって投げた。

才人は慌ててルーンを強く輝かせ、その場を離れるべく駆け出す。

いくら不死身とはいえ、強大な爆炎を何度も受ければいつかの時のように意識を失ってしまう恐れがある。

これ以上強力な魔法を受けるのはまずい!

小瓶の落下地点から逃げるように才人は走った。

しかし無情にも小瓶は地に落ち、小さな火種が発生して炎を作り出し、炎は爆炎となって才人に迫る。

轟、という音を背に聞いて、才人はまるでスローモーションのよう  
な一瞬を振り返り見た。

爆炎がゆっくりと近寄ってくる。

自身の体もゆっくりと動いている。

実際はゆっくりではないが、才人の意識が現実と自身の体よりも遙かに速く動いていたが為に起こった現象であった。

ああ、くそ！

間に合わない！

そう感じた一瞬の最中。

すべての炎が突如、空中に向かって方向転換を始めた。

「いで！ な、なんだなんだ?!」

「む、これは一体?!」

意識の速さが現実と同じものに戻った才人は、突然の出来事にたたらを踏み転びつつも、突然方向を変えた炎の行方を追う。

一方、ドニも完成した筈の自身の魔法が突如生き物のように爆風の向きを変え、移動を始めた事に驚愕してその行先を探っていた。

爆炎はまるで身を振る大蛇のように空中の一点へと向かい、やがて丸く一纏まりになりぐるぐると回転しながら

僅か二メートルほどの球状になってゆく。

その様はまるで小さな太陽のようであり、傍らにはいつからそこにいたのか銀色の影が一つある。

影は、銀の影は、月と爆炎が凝縮された火球に赤く照らし出され、夜空に神秘的に光り輝いていた。

遠目にもわかるほど長くきめの細かいブルネットの髪。

細く白い肩が露出した、左手のみ袖のある奇妙な銀光瞬くビスチェドレス。

袖のない右手には無骨な片刃の大剣。



そして。

才人もドニも思わず見とれてしまう程の、美しいが意志の見えない顔。

「トマ、か？」

返事はない。

銀の麗人は大きなブラウンの瞳を半ば塞ぎ、夜空に凜と浮かび続ける。

「わはは、相棒！ えらい苦戦しているようだな！」

「デルフ！ とするところじゃっぴりトマか！」

「おう！　ちよいと様子がおかしくなっちまたがな！」

不意にするり、と空中に居るトマの手の中からデルフが滑り落ちた。

才人は慌てて落下するデルフの元に駆け寄り、器用にも地に落ちる前に柄をキャッチして受け止める。

「デルフ、どういう事だよ?!」

「わかんね。バルビエとかいうおっさんが持ってた妙な杖に坊主が血をかけたら、ああなっちまった」

「はあ？　なんだそれ？」

才人はデルフの全く要領を得ない説明に、すこしいらつきながらも一度宙に浮くトマを見上げた。

トマは相も変わらず茫として夜空に火球と共に浮き続けている。

絵画のようなその光景に才人は一瞬見惚れてしまいそうになるが、今はそんな時ではないと頭を振りトマに声を掛けようとした。

その時である。

いくつもの鉄の矢がトマに向かって地上から天に飛翔していった。

何時の間にか地に降り立ったドニが、トマを敵であると判断し魔法を使ったのであろう。

矢は新たな敵を排除すべく、夜空に浮かぶ麗人に襲いかかる。

「トマー！」

思わず叫んだ才人だったが、すぐにその表情を驚愕で強ばらせた。

無数の矢がトマの体を貫く寸前、一斉に停止して元来た方角へ引き返して行ったからだ。

ドニは予想外な反撃に慌てて ”レビテーション” を唱え、自身が放った矢の群れから宙へ逃れた。

トマはそんなドニの様子など気に止める風もなく、何事も無かったように夜空に浮き続ける。

「あれは…… ”カウンター” ！ なんでトマが先住魔法を?!」

「しらね」

「しらね、じゃねえよ！ どういう事だよデルフ?!」

「めんどくせえな、ほれ、青い鳥がどうだとか前に言ってる？ バルビエってのがそれ絡みの、血を垂らして使う魔具を持っててな。坊主がそれに血を垂らしたら」

「ああなった、って事か？ しかし、あの姿は……」

「わはは、おでれーたか？ 相棒！ 俺様もおでれーたぜ！」

言葉を飲み込みながら才人はすっかり変わってしまったトマを見上げた。

認めたくは無かったが、胸がルイズを想う時のように締め付けられドキドキと高鳴る。

ば、バカ！

あんな格好してるけど、あれは男だぞ？！

みる！ ルイズよりも、タバサよりも、ずっとずっと胸もないし。

女装したトマにときめいてどうすんだよ！

そもそも、俺にはルイズという大事な……

言い聞かせるようにそこまで思考を進めた時、ドキンと更に強く胸が跳ね上がる。

高鳴りはそのまま続き、息苦しさを覚えた才人は思わずトマから目を離そうと試みる。

しかし、それすらもできない。

混乱しながらも才人は頭をもう一度振って、自身に巢食った耽美で甘い感情を必死で追い出そうとした。

一方、特に女性関係については今ひとつ意志の弱い才人の他にもう一人、月夜の麗人に胸を高鳴らせている人物がこの場に存在した。

ドニである。

彼は己の魔法を跳ね返した新たな敵を同じ空中に在って、憎々しげに睨みつけながらも激しく動揺していた。

なんだ、この感情は！

ありえない！

何が起きたのだ？！

いや、”俺は何をされたのだ” ？！

戦闘中にこのような感情が昂ぶるなど、ありえない！

それに、先程のアレは……以前一度だけみたことのある、先住魔法の”カウンター”ではないか！

あの敵は、あいつはエルフなのか？

ドニの見つめる先、銀のドレスに身を包んだトマは小さな太陽と共に夜空に浮かび、涼しげに目を半分伏せて茫洋としている。

銀のドレスが月光をキラキラと反射して輝いて見えるその姿は神々しく、魂を抜かれてしまうのではと錯覚を覚えるほど惹きつけられた。

焦がれるような強い恋慕の情が心の奥底から止めどなく湧き出し、そのすべてを否定するようにドニは一瞬強く目を瞑った。

そして次に目を開いた瞬間、何かを振り払うかのように杖を振って火球を作り出す。

”カウンター” で跳ね返される事は理解している。

しかし彼を蝕む甘い感情の正体を知るために、そうせすにはいられなかったのだった。

火球はすぐに完成し、銀の麗人へと猛スピードで飛んでゆく。

果たして火球はトマには当たらなかった。

だが ”カウンター” によってドニへ向かって反射もしてはいない。

火球はトマに直撃する直前、先程の爆炎と同じように突如方向を変え、暫くトマの周りをぐるぐると回った後

小さな太陽に飲み込まれたのだった。

「一体……本当にどうなってんだ？」

「ありやあ……相棒、坊主のアレはとんでもねえ事になってるかもしれねえな」

「どづいう事だ、デルフ？」

「カウンター” ってのは先住魔法だろ？」

「ああ、だけどあれはその土地の精霊と契約しなきゃ使えねえ魔法だけだな」

「そこだよ、相棒。もしかして坊主はこの地の精霊と契約できてるんじゃないか？」

「はあ？ まさかあ。エルフ以外で精霊と契約できる人間なんて聞いたこともない。

それにあいつメイジですらねえんだぞ？」

「坊主が使ったもんがそういう魔具じゃねえのか？ ってことだよ相棒。

坊主が血を垂らした代物は、詠唱も無しに人を操れるようになる魔具だってバルビエとかいうおっさんが口を滑らせてたしな」

「おい、精霊は人じゃねえ」



「だから！ 鈍いな相棒は。これだから天然スケコマシは……」

「だ、だれが天然スケコマシだよ！」

「んなことよりも。アレは人どころか、精霊すらも操れる代物じゃねえか、って事さ。」

「それこそ魔法もロクにつかえないトマでさえっていう、とんでもねえな」

「うっむ……」

「ま、坊主に直接聞けばわかるさ。見ろ、決着がつきそうだぜ？」

デルフの言葉に才人はやっとの思いで視線を外せていたトマの姿をもう一度見た。

トマは相変わらず空中で茫洋としていたが、不意に袖のある左手を掲げ小さな太陽となった火球をドニに向かって飛ばす。

巨大で凄まじい密度を持った火球はドニに向かってまっすぐ飛び、

程なく何かにぶつかる事無く空中で爆ぜた。

同時に辺りが白一色に染めあげられる。

音が一瞬消え果て、その後から衝撃波と共に爆音が走った。

才人は思わず腕で頭を保護し、叩きつけられる爆風に吹き飛ばされないよう踏ん張った。

次にゆっくりと薄目を開けてその光景を目の当たりにし、戦慄する。

まるで世界樹のように空高くそびえる火柱がそこにあっただからだ。

火柱はドニが今まで作り出していたそれなど足元にも及ばず、かつて戦った暴君の猛烈なブレスを才人に連想させた。

一方トマは相も変わらず意志の見えない表情のまま、その美しい貌を炎に照らし出されながら、かざした左手をほんの少しだけ下に移動させる。

手の先、才人の槍によって酷く地形が変わった森の道には、爆炎の直撃から間一髪で地に逃れたドニの姿があった。

ドニは熱風に半身を焼かれたのか、ロープの一部がボロボロになり荒く肩で息をしながらフラフラと立ち上がるうとしている。

トマは無表情で口を僅かに開き何かを呟くと、それに呼応するようにかざした左手の銀の袖が生き物のようにウネウネとうごめいた。

二の腕の辺りまであった袖は、艶めかしく動きながらも左手の平に

集まっ行って行き、やがて棒状にその形を変えて行く。

程なくトマの手の中には、見事な細工が施された刺突剣が現れた。

トマは剣をかざしたまま、半開きになっていた口を更に開いて何か囁き始める。

囁きは徐々に大きな透き通るような声となり、やがて才人の耳にも届く程の大きさとなり夜の森に染みこんだ。

それは、唄であった。

思わず聞き入ってしまったいそうになる美しい調べは、森をざわめかせる。

いや、ただ美しい調べである唄ならば異変は起きなかったであろう。

唄を聞いた才人は突如、その場に膝を折って座り込んだ。

「相棒?!」

「あ、あ、あ」

呼吸もろくに出来ない様子の才人は、口を大きくあけ涎を垂らしながら体をブルブルと震わせる。

強烈な恋慕と極度の性的興奮。

繰り返し襲い来る、満たされた飢餓感と足りない幸福感。

欲しい！

あれが、あいつが、トマが欲しい欲しい欲しい欲しい！！

鼓動が早鐘のように飛び跳ね、頭の中が白一色となり、はち切れそうになった股間が生々しく尽きぬ性欲を駆り立てる。

僅かに、ほんの僅かに残った理性の隅で才人は理解する。

先程までトマを見て湧き出していた感情の正体を。

声だ。

あの声は、 ” 魅了 ” の効果を持っているんだ！

それもとびきりの。

恐らくトマはずっとあの唄を歌っていたのだらう。

そして、この唄は精霊さえも虜にするほどの効果を

「相棒！ おい、しっかりしろ相棒！！」

「デ、ルフ……おま、え、平気なのか？」

「はあ？ よくわからね。どついう事だ？」

「あの、唄、だ。あれ、が、すべてを、 ” 魅了 ” して、いるんだ。せい、れい、さえも」

「坊主にメロメロになっちまった精霊が、力を貸しているってのか？」

「た、ぶん……」

「へっ、そりゃすげえ！ それでか、あのメイジも唄を聞いた途端悶えだしてしまいにや倒れちまったぜ？」

「は、そりゃ、よかった……っ、デ、ルフ。悪いけ、ど、トマに、唄を辞めるよう、言うてくれないか？」

「うはは、相棒！ イきそうなのか？ 我慢だ相棒。あとで嬢ちゃんにこっぴどくお仕置きされるぞ！」

「ちゃ、かすなよ！ たのむ、コレ、すっげえキツイんだ！」

「ち、根性のねえ。男ならこの場で堂々と自慰を始める位じゃねえと」

「デルフー！ 洒落に、ならねえんだって！ 繋いでる理性が、消えそうで、そうだった、ら、ほんとにそうしちまいそうだ！」

才人の悲鳴のような声に、デルフは事態の深刻さを悟り夜空に在って”魅了”の唄を唄うトマに声をかけた。

しかし、その呼びかけにトマは反応しない。

「おい、デ、ルフ？」

「だーめた相棒。ありゃ、呑み込まれちまってる」

「へ？」

「よくあるこつた。素人が難しい魔具に手を出すと、力やら何やらに精神を呑み込まれるって話はな」

「は、あ?!」

「ほれ、相棒も趣は違うが”ダブル”の時に呑み込まれかけてたろ？ アレとにたようなもんだ」

「ど、どどど、どうすん、だよこれ！俺、イっちゃうぞ?!」

「知らね。イけばいいんじゃないの。気持ちいいんだろ？」

「そついう、問題じゃない！くそ、どうすりゃ、いいんだよ!」

「魔具の効果切れるのを待つか、一か八かあの魔具をブツ壊すかだな。精神取り込むようなもんは大概壊せば元にもどるし」

「あの、剣か？」

「いんや。銀色の部分。ドレスもだな。よかつたな、相棒！ 女の服脱がすのは得意なんだろう？」

「ん、なわけ、あるか！ トマ！！ 頼む！ やめてくれ！！」

悲痛な叫びに、トマは初めて反応して唄う事を辞め才人の方を見た。

その顔は相も変わらず表情が無い。

才人はその顔に意思の疎通が上手くいったのかと顔を強ばらせ不安になったが、やがてゆっくりと地に降りてくるトマを見て

ほっと胸を撫で下ろした。

しかし、地に降り立ったトマを確認するや再びその顔を強ばらせる。

トマは変わらず茫洋とした体で、今度は才人に向かって左手の剣を向けて来たからだ。

そして、もう一度紡がれる魅了の唄。



青い鳥のさえずりは、今度は先程よりも更に強く甘く辺りに響き渡る。

「うあ！ や、める！！」

「相棒！！！」

才人は思わず地に頭をうずめ、その場に丸く蹲った。

肩は小刻みに震え、体中からは汗が噴き出してくる。

苦痛の為ではない。

凄まじい快樂の為である。

それらが渴望となり、意識がただ一点に集約して行く。

うずめていた頭を上げ、才人は地に立ち麗しき唄を歌うトマを恍惚と眺める。

口の端からは涎が垂れ、更に甘くなって行く唄をほしがるかのよう  
に震える手をさしのべた。

「相棒！ おい、しっかりしろ！」

「あ……う、あ……」

「ええい、くそ！ 俺様の声が耳に入ってねえ！ こうなったら……」

デルフが愚痴を吐いた後、才人はもう一度頭を地に伏せた。

それを切っ掛けにしたのか、甘い魅了の唄が響き渡る中すくと足取りも確かに立ち上がる。

同時に銀のドレスに身を包み、一心不乱に唄うトマに向かって猛烈な勢いで駆けた。

まるでマスケット銃の弾丸のようなその動きは稲妻のごとく鋭い。

しかし。

次の瞬間、鈍く重い音と共にトマの少し手前で才人は派手に吹き飛ばされてしまったのだった。

「くそ！ ”カウンター” か！」

「痛い！ な、なんだ?!」

「おう、相棒、目が醒めたか？ まったく、唄の虜になるなんて情けねえ。神の盾が聞いて呆れるぜ」

「で、デルフ?! お前……」

「ふん、ちよいと体を借りたぜ」

「あ、そ、そつか。お前そんな事できたんだっけ」

「そんな話は後にしろよ相棒。ほれ、坊主が目の色変えたぜ？」

”カウンター” によつて吹き飛ばされ、地に寝そべつたままであつた才人はデルフの言葉に始めてその異変に気が付いた。

唄が止んでいる。

慌てて体を起こした才人が見た物は、トマが左手の剣を空に掲げている所だつた。

その行為に呼応するかのよう周囲の木々がざわめき立ち、枝がボキリとひとりで折れトマの周りに集まってくる。

枝の数はみるみるうちに増えてゆき、やがて空を埋め尽くす程になつていった。

「坊主はよほど相棒の事が嫌いらしいな」

「冗談言つてる場合か！ くそ、さつさとあのドレスをひっぺがさないと！」

「おう、相棒！ やつとその気になつたか。うはは、坊主も案外喜

ぶかもしねえな！」

「茶化すなって！　くるぞ！」

苛ついた言葉をその場に残して才人は横に走り始める。

その影を縫うかのように、無数の枝が地に刺さった。

トマの周りに浮く枝は、まるで生き物の様に才人目がけて飛んでゆく。

才人は一時も立ち止まらず、トマを中心に弧を描くように走りながらその距離を徐々に小さくしていった。

その間も絶え間なく枝が猛烈な勢いで飛びかい、才人を襲う。

二人の距離が五メートル程になった時であろうか。

才人はルーンを輝かせながら一気に円の中心にいるトマの方へと飛んだ。

相も変わらず茫洋としているトマは、才人を迎撃すべく枝を更に飛ばす。

枝は唸りを上げて飛び、顔をガードしていた才人の右手にいくつも

刺さり、狙いが甘かった物は脚や肩に刺さった。

しかし、才人は止まらない。

体中に枝を刺されながらも、トマへとその勢いのまま突き進んだ。

狙うはトマの着る、銀の服。

目をやられないよう、ガードしていた右手をそのドレスへと伸ばす。

二人の距離はほんの一メートル程になっている。

才人がやった！ と思った瞬間、しかしその目論見はあっさりと崩れ去っていた。

先程と同じように鈍い音を立てて、才人は一気に十メートル程も弾かれて吹き飛んだからだ。

強力な ”カウンター” によって弧を描きながら宙を舞う才人を、トマは無表情に眺めつつも剣を向けた。

そこに一切の慈悲も、感情も、表情もなく。

ざざざ、と音を立てて地に落ちた才人に無数の枝が殺到する。

銀に輝く麗人はその様を無感動に眺め続け、ただその場に立ち全てを魅了し続けるのみであった。





いつ以来だろう。

これほど体が傷ついたのは。

薄れてゆく視界の中、才人は必死に意識をつなぎ止めながらもボンヤリとそう呟いた。

わけの分からない魔具に意志を飲み込まれたトマを元に戻す為に、なんとか奇襲を仕掛けたまではよかった。

しかし、そんな才人を先住魔法である ”カウンター” が待ち構えていた。

あらゆる攻撃をはじき返す、強力な魔法である。

本来は何日もかけてその土地の精霊と契約を結んで始めて行使できる、かなり上位の魔法でもある。

そんな強力な魔法を、平民で魔法が使えないはずのトマがいとも簡単に使っていた。

全てはその身の纏う、 ”青い鳥のくちばし” という魔具の効果らしい。

”青い鳥” はその美しい唄を聞く全てのモノを、人を、精霊をも魅了し、使役するのだ。

そして……

「くそ、魅了されないモノは、問答無用で、敵扱いつてか！」

「きつと、あの魔具の防衛機能だろうさ！ しかしおでれーたぜ！ まさか相棒を ”カウンター” ではじき飛ばすたあよ！」

”カウンター”により吹き飛ばされ宙を舞いながらもごちる才人の後を、小魚の群れがついて行くように無数の木の枝が飛んで行く。

果たして、地に落ちた才人にその全ての枝が剣山のように突き立った。

その攻撃を境に、森に静寂が戻り今度は風が吹いてざあと木々をざわめかせる。

「……………相棒、生きてっか？」

デルフのおずおずとした声に反応はない。

仰向けに倒れている才人は両手を顔の前に交差させ、なんとか頭への直撃を防いでいたものの

その他の部分は隙間無く枝が刺さっており、誰がどう見ても即死間違いなしと思うであろう有様であった。

「……相棒？ ウソだろ？ おい……」

再びかけられた不安げなデルフの声に、顔を覆っていた両腕がずりりと動いた。

腕に刺さった枝が他の枝に当たり、カラカラと音が鳴る。

「で、ルフ。い、生きて、なんとか、いきている、ぜ。  
くそ、久しぶりに、意識が、飛びそう、だ」

「相棒！ さすが、そうこなくちな！」

「で、も、もう限界、かも」

「諦めるな相棒！ 追ってすぐ嬢ちゃんがここにくるからよ！」

嬢ちゃん、という言葉に才人はうっすらと開けていた目を大きく開いた。

それから何かを言おうと口を開けるも、出てくるのは血ばかりである。

ダメだ！

今のトマは見境なしだ。

もしここにルイズが来たら……

想像して、才人はまだ血反吐が出て来る口を閉じ歯を食いしばった。

左手のルーンの輝きが次第に強くなっていく。

立たなくては。

トマを止めなくては。

そうでないと、ルイズに類が及ぶ。

想いは心の震えとなり、才人に力を与える。

そして、僅かに力を取り戻した才人は、よろよると力無く立ち上がるのであった。

「あ、相棒！ 無茶すんな！」

「デ、ルフ、お前、あとの位、俺の体を操れる？」

「何いつてんだ、おめ、喋るのもやっとなえか！」

「いいから！ 試したい事があるんだ」

「……ふん、最近はそのクソ忌々しい槍ばつか使ってたからな、ため込んだ魔法もそう無え。精々あと数秒だ」

「それで、十、分だ。いいか、デルフ。今から説明する事、よく聞いてくれ、よ？」

息も絶え絶えに才人はデルフにある ” 作戦 ” を説明し始めた。

デルフはその内容を聞いて黙り込む。

その間、トマは立ち上がった才人を見て表情一つ変えず、再び左手の剣を空高く掲げ枝を集め始めていた。

森の木々はざわざわとうねるように揺れ、トマの周りにはみるみるうちに大量の木の枝が集まってくる。

「できるか？ デルフ」

「そりゃ、簡単だが……相棒、ホントにそれやって大丈夫なのか？

「やらなきゃ、ルイズが危ない。合図したら頼むぞ？」

「まったく、相棒はいつもいつも無茶ばかりしやがる。なんの為に

”戻って”きたんだか。

……心はちゃんと震わせてるよ？」

才人は答えず、苦悶に染め上げていた顔に僅かな笑みを浮かべさせトマを見た。

視線の先にいる麗人は、剣を高く掲げたまま表情もなく無言で才人を見つめていた。

その顔はどこまでも美しかったが、同時にどこか哀しげで才人の心を打つ。

大きすぎるダメージの為か、あの魅了の唄は聞き取れない。

体の再生速度もかなり遅くなってきた。

「……トマ、折角強くなれたのに悪いな。その服と剣、壊すぜ」

血泡混じりにかけた言葉に返事はない。

やけに赤い月の光が、銀の影を淡く照らし出している。

銀の剣を掲げ、同じく銀のビスチェドレスに身を包んだトマは赤く鈍く月光を反射し、まるで絵画のように美しくその場に立っていた。

……まるで、なにかの物語の一場面だな。



才人は半ばその姿に見惚れ直しながらそう呟いて、意を決し最後の攻撃に移った。

視界が外界と同じように赤く赤く染まってゆく。

同時に荒れ狂う力が心の内から湧き出て、体が軋んだ。

デルフを掴む左手のルーンの光は不吉なまでに激しく赤く輝き始める。

知らずうめき声が口から漏れ力が全身に満ちていくと同時に、体中に刺さっていた無数の枝が全て勢いよく抜けた。

やがて才人に起きた異変は彼自身に留まらず、足下の土や雑草に広がってゆく。

水に小石を投げ入れた時の波紋のように、才人を中心として数メートル程の大地が一瞬で砂に変化して行っただ。

ぎぎ、と声を漏らしながら才人は赤くなった視界の中、下を向いていた頭を上げてトマを見据え叫ぶ。

「いくぞ、デルフ！」

絶叫と同時に、才人の姿が消えた。

突如消えた相手にトマは一度、瞬きをしてその姿を追おうとした瞬間。

ゴキン、という重苦しく凄まじい音がして、気が付くと目の前に居るはずのない才人の姿があった。

赤い月光やドニの火柱よりも遙かに禍々しく赤く輝く左手は、デルフを強く握ったままトマの細い腰に回され

右手はつい先程まで才人に向けていた刺突剣を握りしめ血を滴らせている。

その光景をもし見た者がいたならば、ダンスを踊る男女のシルエットの様であったと答えるだろう。

無論、そのような暢気な状況ではない。

ドレスを着るトマを抱き寄せる才人の顔は、無理矢理 ” カウンター ” を抜けた時に傷を負ったのか血まみれであった。

才人はトマの腰に回した左手のルーンの輝きを元の白い物へと変えながら、無表情で暴れるそぶりも見せないトマに

血まみれの顔をずいとな近づけ、二カつと歯を見せ笑い宣言をする。

「俺の勝ちだ」

同時にバキン、と言う音。

トマの持つ剣がまるで生き物の様に才人の手の中でうねっている。

そのうねりを無理矢理に鎮めるかのように、才人の手の中から幾重にも赤く光る筋が這い出して剣に絡みついた。

トマはたまらず剣から手を離れたが、才人は右手の中の剣を今度はトマのドレスに押しつけ、挟むように光り輝く左手でトマを強く抱きかかえる。

麗人は抱きかかえられながら激しく暴れたが、やがてくたりと力無く才人の胸に倒れ込んだのだった。

「……相棒、終わったか？」

「ああ、終わった」

答えて才人は胸に抱き止めているトマの背中越しに、右手に握る品を見つめた。

そこには一筋の銀の槍が握られている。

”グリムニルの槍” の力で槍に変えられた、 ” 青い鳥のくちばし” である。

トマの ” カウンター” を破り懐に潜り込む為に才人が取った行動は、 ” ダブル” を使う事であった。

勿論 ” グリムニルの槍” を制御するルーンを使う以上、その間は全意識を槍が暴走しないように向けねばならない。

過去に一度槍を暴走をさせた事があった才人は、これまでも意識さえしっかり持つ事が出来れば

ルーンが無くてもある程度は暴走を押さえ込めるのではないかと踏んでいた。

事実、過去にこの槍を扱っていた ” ガンダールヴ” は結果はどうであれ、一定の期間は一つのルーンで扱っていたはずである。

しかし強い意志の力で暴走を押さえ込む行為は長くは続かないと体

感的に知る才人にとって、 ”ダブル” での戦闘行為は無理な話でもあった。

そこで ”ダブル” を使っている間、デルフに体の操作を預け ”カウンター” を無理矢理突破した後

すぐにルーンを制御に戻すという荒技を試したのである。

「まったく、相棒は本当に無茶ばかりしやがんな」

「は、こつやってお前と、無茶やるのも悪くないだろ？」

「わはは、言っじゃねえか相棒！ 惚れ直したぜ！」

「うるせえ、剣に惚れられても嬉かないや」

「なんだ、坊主にはドキドキし通しだったくせによ」

「うつせ。ほら、トマ起きる。おい」

才人はそう言って胸の中のトマの頬をぺちぺちと叩いた。

しかし、トマはまるで人形のように眠り続けて居る。

その寝顔は相も変わらず美しく、才人は思わず妙な気分になりそうになり、デルフを握ったままトマを抱いていた左手の力を抜いた。

支えを失ったトマは、その場に崩れ落ちるように倒れ込む。

ほんの少しだけ頬が熱くなるのを感じながらも、才人は倒れ伏したトマを見下ろしふんと鼻息を一つ鳴らしたが

ある事に気がついてうげ！ と声を上げ一歩後ろへたじろいだ。

地に横になり、尚意識の戻らぬ美少年が全裸であったが為だ。

否、それだけではない。

僅かに、ほんの僅かだが、胸がある。

ちがう！

あ、あれは横向きに倒れているからそう見えるだけだ！

必死に目の前の事実を否定しようとして頭を振る才人の足下で、意識を取り戻しつつあるのかトマはうん、と呻いて仰向けに体を転がした。

その行動は混乱する才人を更に追い込む。

無い。

男に有るはずのアレが、ない。

ない？

うん、無いな。

もしかして、こいつ……

「なんだ？ 相棒、もう辛抱たまらねえのか？

襲うんなら嬢ちゃんが出来ない内にしとけよ！ とぼっちりで俺様

まで灰にされちゃかなわねえからな！」

「で、ででで、デルフ？ こ、こいつ、と、トマは……」

「ああん？ 坊主がどうかしたのか？」

「お、おん、お、おおお」

「女だな。それがどうかしたか？」

「でええええるふううー！！ お前、知ってたのか？！」

「ああ。相棒がこいつに俺様を貸した時からな」

「言ってくれよー！！」

「あん？ まさか相棒、気が付かなかったのか？」

「普通気がつかねえよー！」

「いや、普通気が付くだろ。

相棒、坊主があんなナリになってまで相棒を助けに来たつてのに、そりゃあねえぜ？」

「いやいやいや、そもそも、こいつ魔具に操られていたじゃねえか  
！」

「……はあ、ちつとは気が利くかと思えばこれだ。嬢ちゃんも苦勞するわな」



デルフはあきれ果てたようにそう言って、カタカタを鏗を鳴らした。

才人は暢気に笑うデルフに己の行為の不可抗力を訴えて、必死にしようがないじゃないか！ と食ってかかる。

やがて言い争いに発展してゆく二人の足下で、意識を取り戻しつつあつたトマが艶めかしく呻いた。

その呻きに才人はデルフとの口論を止め、慌ててボロボロになつた上着を脱いで ”少女” の男と殆ど変わらない、青い痣のある

胸元にかけて注意深くその目覚めを見守つた。

やがてトマは目を覚まし、ぼやける目をこすりながら上体を起こして辺りをキョロキョロと伺う。

才人がかけた上着は無情にも体を起こした際、何処にも引つかかる事もなく、はらりと下に落ちてしまっている。

まだ意識が混濁しているのか、トマはそんな事も気がつかずボンヤリとしたまま口を開いた。

形の良いその口から出て来たのは、あの唄ではなく人の、しかし凜とした美しい声であつた。

「こっ、は？」

「おう、坊主！ 目が醒めたか？」

「デルフ……僕は……、ん？ サイト？」

「よ、よよようー！」

「なんだよ、そんな面白い顔して」

「わー！ わー！ 立つな！ こっち来るな！」

才人は立ち上がるトマを全力で拒否するかのように両手を振って、慌てて回れ右を行う。

そんな才人にトマは段々とハッキリしてくる意識の中で怒りを覚え、いつものように気色ばみすこし乱暴に才人の肩を掴んだ。

少女はまだ、気が付かない。

「おい！ 折角助けに来たって言うのに失礼な奴だな。こっち向けて」

「わはは、相棒！ 坊主がこっち向けてよ！ 向いてやんなよ！」

「五月蠅い！ トマ！ 服！ 服だ！」

「ふくう？ 服が一体何だつて……」

美しい声でさえざる青い鳥は、突如沈黙する。

やがて、自身の体を見ていたトマはゆっくりと顔を上げて、掴んでいた才人の肩を更に強く握った。

「……見た？」

「みてないみてないみてないみてない！」

「うはは！ 相棒、嘘はいけねえや！ 『無い、トマにアレが無い』  
」 って大騒ぎしてたじゃねえか！」

「んな?!」

「し、ししししてねえ！ 断じて見てねえ！」

「ひでえ男だな、相棒！ さっきまで坊主見て涎垂らして股間膨ら  
ませていた男の台詞とはとても思えねえぜ」

「な、ななななななな」

「馬鹿！ そんな誤解を受けるような事……大体俺はな、ダメージ  
受けすぎて今にも意識があ！」

ごん、という鈍い音が辺りに響いた。

才人は台詞を最後まで口にすることなく、その場に倒れ伏してしま  
う。

崩れ落ちる才人の背後には、全裸のトマが拳大もある石を手に顔を  
真っ赤にして立っていた。

その日、散々魔法攻撃を受け続けていた才人は、トマの攻撃によっ  
て遂に意識を手放す事となったのであった。

後日。

開店前、『魅惑の妖精』亭にて。

才人とルイズは、店の片隅にあるテーブルを挟んでエメとトマの  
”姉妹” と数日ぶりに再会を果たしていた。

「よう、久しぶりだな。エメ、その後の傷の調子はどうか？」

「はい、ルイズさんに塗っていたいただいた秘薬が良く効いたらしく、お医者様も痕も残らないだろうって」

「そりゃよかった！ ルイズ、お前ほんと用意いいな」

「そりゃあ、すぐ怪我する”お兄ちゃん” 持っていればねえ。もつとも、お兄ちゃんはそんな心配も余所にすつごくお盛んなよっただけ、どー！」

ゲシ！ とテーブルの下で強く足を踏まれ、才人はおぐ、と思わず呻く。

あの夜以来、ルイズはずっとこの調子なのである。

理由は勿論……

「る、ルイズさん。僕とサイトはあの夜、別に何も……」

「ふうん？ あんなに嫌っていたサイトを庇うんだ？　ますます怪しいわね」

「いちち、だーから！　ルイズ、信じてくれよう」

「し、信じられるワケないでしょうが！　なんとかエメの応急処置を終わらせて、引き返してみればあんたは上半身裸！

” エトマール ” は全裸でそこにいたのよ？！」

エトマールとは、トマの本名である。

事件の後改めて問い正されたエメの説明によれば、” 青い鳥 ” の痣の伝説はエメ達姉妹の家に代々伝えられてはいたのだったが

その中でも青い痣を持つ女子が生まれた場合、決して世に出ないよう殺してしまう習わしがあったと言う。

これは痣と ” くちばし ” がもたらした一族の没落が原因で、これ以上王宮に目を付けられぬようそうしていたのだらうとエメは語った。

元々かなりメイジとしての血は薄まり、ここ数代は痣が出て赤い物ばかりで特に問題は起き無かったが、とうとうトマの時に青い痣

が現れ

殺すかどうか迷った両親はトマを ” 男 ” として育てる事にしたのだった。

以来、トマの秘密を知るエメは何かとトマの面倒を見、トマもまたその影響かエメによく懐いた。

そしてある日、バルビエ副伯が姉妹の元に現れる。

父親はトマの事を話すか悩み、その苦悩を察したエメは赤い痣を持つ自分ならば王宮に目を付けられる事もなく

何事もなく貴族に輿入れして、家族に良い生活を送らせる事ができると父親を説得した。

勿論トマは反対をしたのだが、そもそも青い痣の事がその貴族から王宮に漏れれば何をされるかわからない身分である。

結局エメの強い意志に折れ、バルビエ副伯にはエメの事だけを話す運びとなった事が姉妹の真実であった。

「大体、エメもエメよ。どうして最初から本当の事を話してくれなかったの？」



「その……ルイズさんは王宮の方と繋がりが有りそうだったので……」

「あー、言えないわな」

「うむむ」

「でも！ そんな僕らの為に色々と世話を焼いてくれた事は凄く感謝しています！」

相も変わらず男装をしたトマが、慌ててルイズを庇う。

髪もいつものように背に纏め、トマの事を知らない者がみれば美少年であると認識するような出で立ちだ。

「……わかったわよ、信じてあげる」

「あ、ありがとうございます……」

「それより、トマ。隊舎の住み心地はどうだ？ 二人じゃ狭くないか？」

「その辺りは大丈夫だ。むしろ、今まで住んでいた貸家の方が狭いくらいさ」

「そりゃよかった。……ここだけの話、アニエス隊長には昔、俺に剣を教えてくれた人だからな。お前もこっぴりしごかれとけよ？」

「本当か?!」

「ああ。だが、これは本人にも内緒だからな？ 口外すんなよ？」

「わ、わかった！ そうか、サイトは隊長に……」

トマは嬉しそうに何かを呟き、下を向いてしまった。

そんな彼女の様子を見て、エメは柔らかに微笑む。

それから、改めてルイズの方を向き直り礼を重ねて口にした。

二人は事件の後、ルイズの紹介で最近設立されたアンリエッタ女王の近衛隊である『銃士隊』に抜擢されていた。

『銃士隊』は先の誘拐事件により、メイジ不審に陥った女王が魔法衛士隊を再編して設立された隊で、隊員は全員平民出身の女性である。

その銃士隊にトマは銃士として、エメは隊の補給を司る輜重隊に配属されたのであった。

無論アンリエッタによる、二人の素性を知った上での采配である。

ルイズはあの夜の事件の事を、才人の力の事を除いてすべてありのままにアンリエッタに報告していた。

その上で報告書の最後に、二人を銃士隊へと推薦したのだ。

憐れな姉妹がこれ以上苦しめぬよう、そしてあの薄汚い安住の部屋にこれ以上姉妹が居座らせないようにする為に私情をちよっぴり含ませて。

二人の素性は王宮にとってあまり好ましくない物であるとは理解していたが、そんな事を気にするような

アンリエッタではないという信頼もある。

果たして、アンリエッタからの返事は二人を銃士隊へ配属させる旨の内容が書かれていた。

同時に手紙には二人へ王家を代表しての謝罪の意を添えられており、言伝を聞いた二人は目を丸くして驚き

エメなどはその場で卒倒してしまい、ちょっとした騒動となつてしまつ有様である。

結局事件自体は逃げたバルビエ副伯の行方は知れず、酷く荒れた森は魔具を使って女王陛下への反乱を企てた副伯によるものとして

一応の決着を見ていた。

ちなみに森で涎を垂らしたまま気絶していたドニは、目を醒ましよるよると立ち上がった所で追つてやつて来たルイズに発見され

半裸で寝転ぶ才人と全裸でおろするトマを見て、頭に血が上つている状態のルイズから八つ当たり同然に ” 加速 ” 付きの拳でポコポコにされ

なかば何をされたのかと同情される程の状態で、王宮の兵士に引き渡されていた。

「まあ、いくつか疑惑が残ってるけど、これで一見落着いて事ね。バルビエを逃したのは痛いけれど、後は王宮の方で上手くやつてくれるそうよ。」

ま、何はともあれあんた達がちゃんと王宮での生活に慣れてきて

るよつで良かったわ」

「はい、おかげさまで。ところでルイズさん、あの ” 青い鳥のくちばし ” はその後どうになりましたか？」

「気になる？」

「ええ、まあ」

「安心なさい、その角を曲がった所にある鍛冶屋に持って行って、装飾品の材料にしてやったわ。

只であんな銀の塊を手に入れられるとあって、すごく喜んでいたらわよ。

しかもお礼にあんたが今ぶら下げている刺突剣までこさえてくれたし、万事めでたしってワケ」

「よかった……」

「まあ、一応元はあなたの一族の宝だったし？」

その剣の装飾に例のくちばしの一部を使ったけれど余計な事だったかしら？」

「い、いえ！　ほんと、お心遣いに感謝してもし足りません」

「いいのよ、エトマール。それよりも、ほんっっとうにあの夜、サイトと何も無かったのよね？」

「だ、だから！ 俺を睨むなよルイズ！」

「ぼ、僕を睨まないでください、ルイズさん！ 本当に！ サイトとは何も無かったんですってば！」

暫くは身を乗り出して、再び才人とトマを交互に睨み付けていたルイズであったが

やがてわかったわよ、信じてあげるともう一度先程の言葉を口にすると、腕を組んでドカと椅子に座り直した。

明らかに納得しては居ない様子である。

そのまま気まずい空気が場を支配しかけたが、エメが場を取り持つように再びルイズへ感謝の言葉を口にした。

「本当に……ありがとうございます、ルイズさん」

「ふん！ 私もこれでチップレースに本腰を入れる事が出来るわ！」

「あ、たしかレースって今日まででしたね。ルイズさん、頑張ってくださいね」

エメの朗らかな言葉にルイズはプイッと明後日の方を向いて、唇を尖らせた。

白く背中が大きく開いたいつもの衣装を身につけてのその仕草は、子供っぽくもあり彼女特有の愛らしさもある。

「エメが居なくなっただから余裕よ！」

「……ルイズ、嘘はいかんど、嘘は」

「今何位位なんですか？ 姉さんが居なくなつて余裕つて事はもしかして、ダントツ一位?!」

「……まあ、ダントツつてのは合ってるな。だがトマ、それ以上聞いてやるな」

なんとか場の空気を居心地の良い方向に持って行きたいと、ルイズの自慢話に過剰に食いついたトマは

才人の言葉にはっとして口を押さえた。

相も変わらず明後日の方向を向いて腕組みするルイズの美しい眉はピクピクと痙攣を始めている。

「最下位よ！ 文句ある?! これから逆転するんだから何位でも一緒よ!」

「あは、ははは、が、頑張つて下さい……」



「ルイズ、俺はお前がナンバー・ワンになれると信じているからな  
！」

「うっさい！ この、浮気者！ わ、私ともまだなのに、こんな男  
女とだなんて！」

「ルイズさん、設定！ 設定！ お店でそんな大声で ” 浮気者 ”  
だなんてダメですよ！」

「いつ、してねえ！ 浮気してねえし！ お、俺だつてこんな男っ  
ぽい奴よりも、ルイズみたいな可愛い子が良いに決まってるだろ！」

「…………ホント？」

ピタリと激昂しかけていたルイズの動きが止まる。

その顔は怒りから、僅かに頬を桜色に染めた美少女のそれに変わっ  
ていた。

対照的にトマは才人が思わず口走った言葉が少々矜持を傷つけたら  
しく、すこしムっとして才人を睨んだ。

才人はそんなトマの視線に気付く風でもなく、主の怒りを一刻でも早く静めるべく首を何度も縦に振り続ける。

「ああ、本当だとも！　この中でルイズが一番可愛いし！」

「そんなこと、私が一番可愛いだなんて……」

「そんな事あるぞ！　ここにいる、誰よりもルイズが可愛い！　うん、間違いない！」

才人の言葉に、ルイズは怒りを忘れ両頬を手で押さえながらイヤン、としなを作り始めた。

その誰がどう見てもバカップルぶりに、エメはニコニコと不思議な圧力のある笑みを浮かべて才人を眺め

対照的にトマはジツトリと才人を睨み続ける。

そんな二人の様子的事などお構いなしに、才人は必死にルイズの機嫌を取り続け、ルイズもルイズで手放しに褒める才人の言葉を聞く

度に

イヤンとまるでスカロン店長のようになと作り、悶えた。

その様はだれがどう見ても完全無欠なバカップルである。

ワケありの兄妹にすら見えはしまい。

やがて、目の前のバカップルにあきれ果てたのか、エメとトマは申し合わせたかのようにすつくと立ち上がり、ではと口にした。

「さて、トマ。そろそろ戻らなくちゃ。わたし、隊のみんなの食事の準備があるもの」

「そうだね、姉さん。僕も今日は訓練を頼み込んで抜けてきたんだ。もう戻らないと」

「あ、そうなの？」

「ええ。ルイズさん、重ねてありがとうございます。このご恩は一生忘れません」

「サイトも。本当にありがとう」

トマはそう言って、才人に右手を差し出した。

才人は少し寂しげに笑い、その手を握るべく右手を伸ばす。

その手を横から掴む手がある。

エメだ。

エメは才人の握手をしようとする右手を取り、そのまま豊かな胸に抱え込んだ。

「んな?!」

「才人さん、トマを……いいえ、エトメールを守ってくれてありがとうございました。」

他にお礼は出来ませんが、その……」

顔を赤らめながら口ごもるエメから、才人の手を取り返す手がある。

トマだ。

「ダメだよ、姉さん。サイトはペタン子が好きなんだ。ほら、中央広場で僕が復唱させられてただろう？」

胸の大きな姉さんじゃ、サイトは見向きもしないさ」

「あら……残念ね」

「サイトはね、胸の無い子が好きなのさ。 ” 僕のような ” 、ね」

トマは いやエトマールはそう言ってウインクをし、エメと共に悪戯っぽく才人に笑いかけた。

才人は今度はエトマールに右手を抱きかかえられながらも、言葉一つ口にすることなく冷や汗をかいてその場に固まっている。

隣にいるであろう、何故か無言の主を直視できずに。

その後ささやかな復讐を遂げた姉妹は、どす黒く気炎を上げるルイズと恐怖に凝り固まっている才人にそれじゃと言葉を残して

軽やかに『魅惑の妖精』亭を後にした。

それから間を置かず、二人と入れ違いに店にやって来たスカロン店長が見たモノは、いつものようにボロ雑巾のようになった才人であった。

結局、その日のチップレースはルイズが奇跡の逆転を遂げ、才人は普段より強くルイズに”魅了”される事となる。

”以前”と同じように、薄汚い屋根裏部屋で行われたささやかな二人だけの晚餐にて、ルイズがチップレースの景品でもある

”魅了”の魔法が掛けられた、魅惑の妖精のビスチエを身に纏っていた為だ。

この時、ルイズを見て才人は”魅了”状態であるにも関わらず、ほんの少しだけ本意ながらも不貞を犯してしまう。

美しい衣装に身を包むルイズを前にして、つい月夜に浮かぶ銀の麗人の唄を思い返してしまっていたからだ。

あの時の自分はその姿に、その歌声に、目の前の愛しい少女を忘れ去ってしまう程の感情を覚え魅了されていた。

アレは、果たして不貞となるのだろうか？

他人に強制された気持ちであっても、不貞であろうか？

俺は、この先本当にルイズだけを見つめ続けて居られるのだろうか？

意志は、堅いはずの俺の意志は、本当に……

突如湧いた疑問は、目の前のルイズを見ると音もなく消え去っていく。

才人はその事実にも、胸を撫で下ろして改めて自分が愛した少女のいつもと違うドレス姿と会話を堪能する。

僅かな不安を心に残したまま。

そんな才人の心を悟ってか、壁に立てかけられた伝説の剣は人知れ

ずため息をつくのであった。



## Interval | episode / ガリアの蒼い星は瞬に瞬く (前書き)

はじめに

このお話は、まとめに使っているブログの10000HIT記念に書き下ろしたものです。

過去のIFものと同じように「ガンダールヴは夢を見る。」の設定を使った別作品の短編だと思って下さい。

設定は才人が死んだ世界でのアフター物で、IF設定です。すこし説明が曖昧な部分があります。

突然で悪いのですが、私は天才だと思つたのです。

名前はアンネロゼ・シモーヌ・オルレアン。

ガリア王国の由緒ある公爵家の姫君。

虚無の系譜と ” 剣の系譜 ” を併せ持つ由緒正しいメイジの家柄です。

百年くらい前までは始祖の系統 ” 虚無 ” というのは伝説でしか無く、よく一族の恥みたいに言われていたらしいけれど今は違います。

特に我が家のように虚無と剣の系譜を持つ家の場合、魔法が使えない子供が生まれると諸手を挙げて喜ばれないのです。

それはもう大切に育てられるのです。かく言う私も虚無の使い手であり、いずれはガリアの女王となるのかもしれませんが、とりあえず今は

只の一留学生という身分を楽しんでおります。

留学、と先程口にしましたが、私は今トリステイン王国のトリステイン魔法学院に留学中です。

ここは元々その名の通り、トリステイン王国のメイジ達を集めてちよつきよ……教育をする場であるのですが

なぜ外国人の私がここにいいのかといいますと、それは ” 虚無 ” であるからなのです。

どうということなのかと申しますと、ここでしか虚無の魔法は学べないからなのです。

更に更にどういふことか、と申しますとここに居る虚無の講師は元アルビオン女王であり、 ” 剣 ” を王配にしていた虚無の使い手の一人

ティファニア・テューダーその人が教鞭を振るって居るからなのです。

元々アルビオンで女王として君臨いた彼女は、ハーフエルフと言う事もあり王位をその子供に譲るところへ教師として赴任して来ました。

今から大雑把に数えて六十年程前の事です。

人間ならとつくにしわしわのミイラになっている筈なのですが、あんちくしょう、未だに若若の水水しいお肌のバインバインです。

エルフの血を引く彼女の血のお陰で嘗ては一度滅んだ王家が復活し、なおかつ生まれてくる子供達は皆超美形のナイスバディな上長命が保証されて実に妬ましい限りです。

正にちーと言っ奴です。

一応同じ ” 剣 ” の血を引く親族として、すごく不公平な感じ

でも、アルビオンにいるいとこの美形兄弟を見ると、なんだかすごく耽美な妄想をかき立てられ、思わずヨダレが出て来てしまいます。

ともかく。

” 虚無 ” の系統を持つ者は、ここトリステイン魔法学院で

”虚無”の魔法を習うのです。

私以外は。

私ことアンネロゼ・シモーヌ・オルレアンの場合は、ちょっと違います。

なぜならば、私は天才なのです。

かの始祖の再来と言われた”虚無のルイズ”が遺した書を極秘に入手し、入学前に全ての虚無魔法を会得していたからです。

美しい金髪やでっかいおっぱいが取り柄のあんにやるうとは、出来がちがうのです。

私の家系は胸に栄養が行かない分、頭に栄養が行くのです。

”ガリアの蒼”はあんな雑魚とは違うのです、雑魚とは。

でもそこは王家、美姫というポイントは必ず押さえて生まれてくるシステムなので御安心下さい。

ではなぜ、私のように美姫で天才な虚無の使い手が今更こんな辺鄙なエロマン学院長の居る学校に留学してきたのか。

それは実家に半ば放り出されたわけでは決して無く、虚無の魔法の研究の為なのです。

なんでも”虚無のルイズ”の代で虚無魔法が復活したのは良いのですが、彼女だけが突出した才能を持っており

各国のパワーバランスが著しく崩れた時期があったとか。

そこは彼女の伴侶であり使い魔であった”剣”を当時のトリステイン、アルビオン、そして我がガリアの女王の王配とする事により

王家の繋がりを密接にして虚無魔法の共有をここ、トリステイン魔法学院で行う協定が出来たのだそうです。

……早い話、”剣”のチコで全部つなげちゃったというワケなのです。

全ての虚無を会得し、新たな虚無を生み出すべく学院に留学した私の使命は三つ。

この学院で新たな虚無の研究に励む事。

虚無と比べて今一進まない、かつて最強と謳われた ” 剣 ” の研究を行う事。

卒業までに決して実家に寄りつかない事。

以上三つの事柄のみが天才公爵息女アンネロゼ・シモーヌ・オルレアンを拘束できる枷なのです。

「……それが宝物庫に忍び込んだ いや、宝物庫の扉を吹き飛ばした理由ですか？ ミス・アンネロゼ」  
そうですミス・コルベール。

「ミス。貴女は先日もグラモン君に暴行を加えて問題になったばかりでしょう」

あれはあの優男が私にキモい言葉で口説いてきたからなのです。あの手の輩には肉体言語で言い聞かせないとわからないのです。

「だからって、いきなり顔の形が変わるまで殴る事はないでしょう」  
チ コには容赦など必要ないのです。

「チ コはやめなさい、チ コは。」

……ともかく、貴女は研究者である前にここの生徒でもあるのだから、正規の手続きを行って中の物を取り出すようにしなさい」

エロマン学院長が扉を開きたいならチキュウ製のエロ本が必要じゃ、などと妄言を口にするのが悪いのです。

「あのクソ……失礼。そう、そういう事だったのね、ミス。よろしい、今回の事は不問にしておきます。」

それにいまからあたしが特別に宝物庫の中から必要な物を取ってきてあげましょう。そのかわり……」

他言無用ですね？ わかります。ガリア王家の者ならばこの位の駆け引きなど兎戯にひとしいのです。

「よかった、話が早くて助かるわ。それで貴女は何が必要だったのかしら？」

虚無の系譜と ” 剣の系譜 ” を合わせ持つ、私<sup>わたくし</sup>天才公爵息女アンネロゼ・シモーヌ・オルレアンが必要な物とは……

「おでれーた！」

天才である私の手にかかれば造作もない事なのです。

「お嬢様、この喋る剣は一体……」

何ですかアラン。剣の系譜であるあなたが ” デルフリンガー ” を知らないとは、なんとも嘆かわしいのです。

「デルフ……って、たしか ” 我らの剣 ” が暗殺者に狙われた時に砕けた魔剣じゃないですか。これどう見てもレイピアですよ？」

黙らっしゃい、このネズ公。チン のくせに生意気言っんじやないのです。

「チン はおやめ下さい！ 大体、お嬢様が 『学院には執事を連れて行けないから』 などと言いつつ

僕を自作虚無魔法でネズミの姿に変えちゃったじゃないですか！

コレ、本当に元に戻るんでしょうね？！」

私専属執事であるお前が一緒に来なくてどうするのです？

「執事って、こんな姿じゃ身の回りのお世話などできやしませんよ！」

細かい事は気にしないのです。お前もコッソリ私の着替えを覗けて幸せそうではないですか。

それともなんですか？ ネズミではなくゴキブリがいいですか？

「……このままで結構でございます、お嬢様」

お前は素直で本当に良くできた執事なのです。褒美に、この剣の事を教えてあげるのです。

確かに、デルフリンガーは一度砕けました。

しかし、私の研究の結果それによって ” 彼 ” の記憶や人格が消えたりはしていないとわかったのです。

そこで、天才である私とその記憶を ” リコード ” をアレンジした魔法で吸い出し、実家からちよっぱって来たこの剣に焼き入れたのです。

この学院に保管されていたかつてのガンダールヴの愛剣は、今ここに蘇ったというわけなのです。

「まったく、おでれーた！ おう、嬢ちゃん、俺様が気を失ってからどれ位時間が経ってんだ？」

ざっと百年位なのです。

「そうか……じゃあ、相棒は」

相棒？ 虚無のルイズの使い魔、ガンダールヴことヒラガ・サイトの事です？

「ああ。そうか……百年もか……。なあ、嬢ちゃん、相棒はその後どうなったんだ？」

それを今から研究しに ” 戻る ” のです。

「戻る？ お嬢様……また妙な魔法を開発したんじゃ……」

なんですか、アラン。妙な魔法とは心外なのです。乙女のグラスハートが傷つくのです。

これだからデリカシーの無いチンコは嫌いなのです。

「！ お嬢様、せめて一文字位隠して下さい！！」

お前も本当にお父様やお母様のように口うるさいのです。

「取り込み中に悪いが嬢ちゃん、相棒のその後を知る為に ” 戻る

” ってどういうことだ？」

良い質問なのです。さすがは伝説の魔剣。

インテリジェンスソードの ” インテリジェンス ” は伊達ではないのです。

特別に優しく説明してあげるのです。

かの虚無のルイズが遣した魔法の内、禁呪とされた魔法がいくつあるのです。

中でも大魔法として嚴重に封印されていたのが ” 時間移動 ”  
なのです。

それが記された書物はいくつかの断章にわけられ、各国の王家が  
嚴重に保管しているのです。

いかに天才である私わたくしであっても、その魔法だけはまだ会得してい  
ないのです。

更に、王家に見せてくれと頼み込んでみてもけんもほろろに門前  
払いなのです。

「そりゃあ、お嬢様の悪名はハルケギニア全土に知れ渡っておりま  
すからねえ……」

うるさいのです。

大体、その悪名も元はといえばお父様が、私のラブリーな悪戯の  
数々を記した書物を各国の王族に送って

『娘がそちらに現れたら大変危険だから速やかにあらゆる手段を  
講じて領内から追い出して下さい』 などと注意するのが悪いので  
す。

「ノイマン様のお屋敷を全てお菓子に変えたり、モーガン夫人を裸  
でパレードさせたアレらの何処がラブリーなんですか！」

モーガン夫人は私の胸の成長を鼻で笑ったのがいけないのです。

ノイマン伯父様だって、一度で良いから甘い物をたっぷり食べた  
いと仰ったからこそ、望みを叶えてさしあげたのです。

「ノイマン様は糖尿病です！ 知っているじゃないですか！」

おかわいそうに、ご自慢の名画まで巨大なビスケットにされてしま  
い十日も寝込まれたのですよ?!」

お陰でダイエットに成功したのです。

ともかく、その時間魔法を書物で会得出来ないのならば自分で作  
ってしまえと思ひ立ち、つい先日遂に完成したのです。

「嬢ちゃん、おめ、そんな事ができるのか？」

私は天才なのです。

” 世界扉 ” と ” 加速 ” 、 ” 瞬間移動 ” それと ” サ



モン・サーヴァント” の原理を利用したら思ったより簡単に作れました。

自分の才能が怖いのです。

「へえ、そいつはすげえ！」

もつとも、過去に戻る為には魔法だけではダメなのです。

戻りたい地点にまつわる物が無いと、逆行時間座標が上手くわりだせないのです。

因果と言う奴なのです。

「それでデルフリンガーを……」

アラン、ねず公の割には鋭いのです。褒めてあげます。

「僕はネズミじゃないです！ お嬢様が僕をネズミに変えたんじゃないですか！」

「へえ。嬢ちゃん、色々できるんだな。これも虚無魔法かい？」

そうです。私は天才わたくしなので、私にしか使えない究極の虚無魔法だつて使えるのです。

「おでれーた！ そんな担い手、見た事ねえぜ！」

照れるのです。

「よう、究極の虚無魔法つてどういふのだ？」

” 確率操作 ” です。

「確率？」

先程の因果の対になっているような存在なのです。

つまり、全ての事象をコントロール出来るようになるのです。

我々人間には原因があつて結果が起きるといふ、” 因果 ” を普段観測しています。

しかし、実際はすべて ” 確率 ” によって起きたそれらの事象を観測しているに過ぎないのです。

1 + 1 は2である ” 確率 ” が限りなく百パーセントに近いと  
いうだけで、実は2と言う答えは

因果によって定められているわけではないのです。

” 確率操作 ” はこの確率に干渉し、1 + 1をゼロにも十にも

してしまつのです。

どんな出来事もゼロパーセントを百パーセントにだってできます。「そいつはすげえ！でも、そんな魔法があるならわざわざ俺様を復活させたり、新しい時間移動魔法を作る必要がないんじゃないかねえか？」

”確率操作” はそれこそ、大魔法なのです。

いくら私が天才だからといって、そうそう使えるものでは有りません。

大体、週一回が限度なのです。

「……ちなみに先週はご自身の体重を六リーブル（約3k/g）程軽くするのにお使いになられました」

「……坊主、おめ、苦労してそうだな……」

「アランと申します、デルフリンガー様。ちなみに僕のこの姿もお嬢様の ”確率操作” で変えられてしまいました」

仲良くするのです。

デルフ、アランも一応はヒラガ・サイトの血を引いているのです。

「そうなのか？」

「ええ。僕は彼が手を出したメイドの子孫なので、魔法は使えないんですけどね」

本当にアランのご先祖は節操のない ンコなのです。

「お、おお、お嬢様！ で隠してさりげなく僕の ”剣” でない方のご先祖様の悪口言わないで下さい！！」

冗談なのです。

ただ、その胸の大きさに嫉妬した私のご先祖さまのメモを思い出して、ちよつと悪態付いただけなのです。

ともかく、今から当初の目的通り私の研究<sup>わたし</sup>の為、過去へ遡行します。

「研究？」

虚無と比べて今一進まない、かつて最強と謳われた ”剣” とヒラガ・サイトの研究が今の私の目的なのです。

「お嬢様、今から過去へ行かれるのですか？」  
「そうなのです。」

王配となつてからの ” 剣 ” の記録はある程度残っているのですが、それ以前……ド・オルニエールでの生活の記録が何故か殆ど残つて居ないのです。

「ティファニア殿下にお訊ねすれば十分なのでは？」

「まったく、これだからネズミは浅はかなのです。」

「僕をネズミにしたのはお嬢様です！」

小さな事をちゅうちゅうときにするなのです。

いいですか？ アラン。

” 剣 ” が没してすでに数十年が経っているのです。

彼を直接知る王族も、もはやあのおっぱいのみ。

世は再び貴族によるものとなり、彼に関する記録も徐々に消失し、酷い場合は改竄されたりもしているのです。

特にもつとも彼にゆかりあること、トリステイン王国ではその傾向が強いのです。

先代国王 ” 瀑布の恐王 ” ことアンリ王が崩御して、それまで苛烈だったトリステイン貴族達への支配は今や百年前よりも酷く、緩くなつてしまっているのです。

それに伴い、平民出身であった ” 剣 ” の歴史改竄や隠蔽が行し始めている昨今、正しい記録を権威ある者が纏める事は急務と言えるのです。

そしてそれこそが虚無の系譜と ” 剣の系譜 ” を持つ我々王族の使命なのです。

そんな重要な使命を、あのような胸にばかり栄養が行く者に任せただけでは心許ないのです。

この大役は私のように天才でなくてはならないのです。

「権威ならティファニア殿下の方が……」

「だまらっしゃい。」

そもそも、あのおっぱいは甘すぎるのです。

チキユウ製のチョコよりも甘すぎるのです。

彼女が ” 剣 ” の歴史を編纂した所で、貴族達に良いように言われてしまうのがオチなのです。

その点、私ならば安心なのです。

なぜならば、私が書いた物に文句つけようものならば、その場で素粒子まで分解してやるからなのです。

「…………お嬢様ならやりかねませんね」

だからこそ、伝聞ではなく直接行って確かめる必要があるのです。誰にも文句の言わせない物を書くには、真実をこの目で確かめる必要があるのです。

「なるほど、そのようなお考えでいらっしやったのですか。僕、お嬢様の事を誤解していました」  
もつと褒めるのです。

「僕はてつきり、過去に戻ってティファニア殿下の弱みでも握るおつもりなのかとばかり…………」

それも目的の一つなのです。

あのおっばいがどんな格好で ” 剣 ” と睦んでいたか、じつくりと観察して記録に残してやるのです。

「お、お、お嬢様！それはまずいです！ ものすごくまずいです！」  
大丈夫なのです。

百年もすれば立派な学術書なのです。

その間も、話題性に引き寄せられた平民達がこれを買いあさり、識字率も上がり ” 剣 ” の真実もきちんと世に広まるのです。

「理論武装は完璧だと思うのですが、またいつかのように殿下を本気で怒らせるような羽目になりませんか？」

…………その時はアランを私の姿に変えて逃げるのです。

「非道い！ 僕が殿下に殺されちゃうじゃないですか！」

心配するなです。その時はお前に ” ガンダールヴ ” のルーンも刻んでやるのです。

それを使って、おっばいが我を取り戻すまで凌ぐのです。

「やですよ！ そんなの！」

まったく、ぐだぐだと五月蠅いネズ公なのです。

もついいです、ここでお前と議論してもらちがあかないのです。さっさと過去へと出発するのです。

華の乙女に与えられた時間は有限なのです。

「あの……お嬢様が過去へとお出かけになられている間、僕の工サ……じゃない、ご飯は誰が？」

何言っているのですか。お前も来るのです。

「えええ？！ 僕もですか？！」

お前は私の身の回りの世話をする執事なのです。

「だから！ 今は無理です！」

大丈夫なのです。もし猫にでも食べられちゃっても ” 確率操作 ” ですぐ生き返らせてあげるので。

「いやだ！ 絶対にいかないからな口ゼ！ 僕を共犯に仕立てて殿下のお仕置きの身代わりにする気満々じゃないか！」

おお。久々にアランの地が出たのです。

懐かしくも甘酸っぱい思い出が蘇り、ちょっと照れてしまうのです。

「五月蠅い！ 行くならお前だけで行けよ！ 僕を巻き込むな！」

私の執事がつとまるのはお前だけなのです。

帰ったら何でも一つ ” 確率操作 ” で願いを叶えてやるから大人しくついてくるのです。

「……本当？ あ、でも元の姿に戻してやるとかいうオチじゃないだろうな？」

安心するのです。それはカウントしないのです。

おっぱい対策も別の方法を考えるのです。

お前に危害を加えられる事のないようにするのです。

「信じてもいい？」

信じるのです。ガリア王国第五王位継承者である私、アンネロゼ・シモーヌ・オルレアンの名にかけて、約束は守るのです。

「……ロゼが権威に誓うなんて信じられない」

では、秘蔵のチキユウ製ビーエル本にかけて誓うのです。約束を違えたのなら、二冊程火竜山脈の噴火口に投げ入れるのです。

うつつ、想像しただけでもおぞましい光景なのです。

「さあ行きましようか、アンネロゼお嬢様」

相変わらずアランは頭の切り替えがすばらしいのです。

それでこそ私の執事わたくしなのです。

それじゃ、さっそく ” 時間遡行 ” を使います。用意はいいです  
すね？

「勿論です」

それでは。

じゅげむじゅげむごころのすりきれ……

「なんだそれ？ おいアランとやら、いったいお嬢ちゃんは何を口にしてるんだ？」

「これはお嬢様の呪文の詠唱です」

「なんだか妙な響きだな」

「なんでも最近のマイ・フェイバリットだとか。お嬢様の場合、詠唱の文言はあまり意味がないそうなんです」

「はあ？ どういうことだ？」

「なんでも、魔法の詠唱とは精神の集中をもつて ” 確率 ” と

” 因果 ” に働きかけるのが本義らしく

それらに直接アクセスできるお嬢様の場合、詠唱などしなくても

” 結果 ” が引き出せるのだとか」

「……よくわかんね。おめ、頭いいんだな」

「僕もよくわかりません。この説明も、お嬢様に丸暗記させられた  
だけですので」

「おめ……苦労してんだな」

「慣れですよ、慣れ。考えようによってはデルフリンガーの方が  
厳しい状況かもしれませんか？」

「どうしてだい？」

「デルフリンガー様は剣ですから、お嬢様から物理的に逃げる事ができません」

「……意味がわからねえが、絶望するような事だとは伝わったぜ」「恐縮です」

「話題を戻そうや。寒気がして仕方ねえ。で、結局お嬢ちゃんは詠唱無しに呪文を使えるんだろう？」

「なんでまい・ふえいばりつととかいう呪文を唱えてるんだ？」

「さあ、私はお嬢様の執事です。そのような理由など、検討もつきません」

「いや、でも……」

「デルフリンガー様。一つ、ご忠告を。お嬢様の行動に意味を見出そうとしてはいけません。すぐに精神を病みますよ？」

ぼんぽこびーのぼんぽこなーのちようきゆうめいの……

「なあ、アランとやら。もしかして、俺様すぐくヤバイ奴にとつつかまったのか？」

「さあ。私はお嬢様の執事ですのお答えのしようがありませんね。あ、でも安心して下さい。こう見えてもお嬢様は他者の命を奪うような非道を行ったりはあまりなさいません。根はお優しい方なのです」

「そうか、なら一安心だ」

「お嬢様は非道ではなく外道なのです。」

命を奪って手打ち（おしまい）にするような事は、ガリア王家の伝統に反すると常々申しておられます」

「……なあ、アランとやら。なに遠慮はいらねえ、ちよいと俺様をブチ折ってくれねえか？」

「私はお嬢様の執事です。そのような真似はできません。ゴキブリにでも変えられてしまったら目も当てられませんからね」

ちようすけ！ ふう、成功なのです。さあ、この光の鏡をくぐるのです。

「お嬢様、デルフリンガー様をお忘れ無く」

おおつ、よく気が付くのです。危うく忘れ物をしてしまう所でした。

「これがないと時の狭間に落ちかねないのです。」

「いつそ落ちた方がよかったかもな」

ふふ、デルFRINGガーは中々良い事を言うのです。

それもなかなか楽しそうなのです。今度グラモンで試すのです。

「いけませんお嬢様。オルレアン様より、決して学院の生徒を実験材料にするなどあれほどきつく申し渡されたではないですか」

ケチ。もういいです。そんな事より、早く鏡をくぐるのです。さ

あ、デルFRINGガー。お前はこの鞘に収まっていなさい。

アラン、お前は特別に私の肩に乗る事を許すのです。

「では失礼して」

「やれやれ。……お前さんに関わってからこっち、本当に退屈しねえな相棒。」

と、言うわけで。

私<sup>わたくし</sup>アンネロゼ・シモーヌ・オルレアンは過去へと旅立つのです。

” 剣 ” こと、ヒラガ・サイト事を知る為に。

己のルーツを辿る為に。

なによりも、この胸を震わせる好奇心を満たす為に。

「しかしお嬢様。出歯亀も趣味だったなんて、流石の僕も初めてしましたよ？」

アラン。向こうに着いたらゴキブリにかえてやるのです。





はじめに

このお話は、まとめに使っているブログの20000HIT記念に書き下ろしたものです。

過去のIFものと同じように「ガンダールヴは夢を見る。」の設定を使った別作品の短編だと思っして下さい。設定は才人が死んだ世界でのアフター物で、IF設定となります。

また、すこし説明が曖昧な部分があります。

本話は次回投稿時に「外伝」へと移動予定の為一端削除します。なので直リンは避けて下さい。

突然で恐縮ですが、私はよく出来た従者だと思っております。

名前はアラン・シュヴァリエ・ド・ヒラガ。

” 剣の系譜 ” の祖にして、ハルケギニアの英雄ことサイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガの直系でございます。

ただし、彼が遺した王族とは違い、私の家系は魔法の使えない平民の家系である

のですが。しかしそれでも ” 剣の系譜 ” は並の貴族以上に価値があるらしく、今現在では再興したガリア王国のオルレアン家の庇護の元、代々当家の執事として、また剣の血筋がむやみに拡散しないよう一定の政治の具として、その身分を保障されているのです。

さて。

私のどこが ” よく出来た従者 ” かと申しあげれば、我がヒラガ家のしきたりを説明するところから始めねばなりません。それはどのようなものと申しますと、

古のご先祖様、サイト・

シュヴァリエ・ド・ヒラガがかつて ” 虚無のルイズ ” を守る使

い魔だったように、オルレアン

家での虚無の顕現があった場合、その者に仕えるといったものがあるのです。

勿論、ご先祖様のように特別な力のないヒラガ家ですので、仕えるとは言っても武門をくぐ

るのではなく、あくまでも従者として、執事として、メイドとして仕えるのですが。

それでも、現在では各国の王位継承権の条件の一つである、ヒラガ家の血は他のどの貴族の爵位よりも……言い過ぎました。並の貴族の爵位などよりも、ずっと価値と権威があり、それ故平民ながらオルレアン家の庇護と監視の下、婚約と自由が制限され、貴族並の教育を受けてその繁栄と虜囚のような一生が約束されるのです。

ですので、虚無の顕現が無い場合、一般的にヒラガ家の者は何も自由無い、しかし不自由な一生をオルレアン家に与えられた邸宅で過ごす事になります。勿論、来客は皆無。外出許可などは年に数度。結婚は、オルレアン家が用意したどこかの王族か、もしくは身寄りのない者が相手。

つまりは、ヒラガ家に生まれるという事は、虚無の顕現が無いかぎりはともまともな一生は送れない運命にある、という事でもあります。

もともと、代々のオルレアン当主様は皆気さくな方で、家臣の方々の目を盗んでは我が家の者を息抜きの名目で連れ出し、王都リュティスへと繰り出して派手な女遊びをなさっています。

ともあれ、そういった背景からか、ヒラガ家では虚無の顕現が非常に喜ばれます。

何せ虚無の担い手に仕えるという事は、その従者として色んな地域に足を運ぶチャンスがあるという事だからです。

そしてどういった巡り合わせか、私、アラン・シュヴァリエ・ド・

ヒラガが生まれたその日

オルレアン家でも魔法の使えない女の子が生まれ、それからたった3年後に新たな虚無が顕現するのでございます。

その女の子こそが稀代の天才、虚無のルイズの再来と呼ばれる程の才を持つ、アンネロゼ・

シモーヌ・オルレアンその人であり、私の主でございます。

彼女は聡明で、快活で、見た目も麗しく、その上伝説の魔法使いの系譜を持ち、ガリア王国の王位継承権まで持つお姫様で。

「おい、ネズ公。覚悟は良いですか？」

自作虚無魔法で私をネズミの姿に変えた挙げ句、今、正に、そして当たり前のように私の命を危険にさらそうとしている恐ろしい悪魔でもあるのです。

「出歯亀も趣味などと、よくもこの可憐な少女に言えたものなのですよ」

誤解です、お嬢様。

「何処をどう受け止めれば誤解になるのです？ 覚悟なさい、今”確率操作”でアランがゴキブリである確率を100%にして差し上げます」

おや、おやめ下さい！ それにその虚無魔法はお嬢様でさえ、週に一度しか仕えない大魔法じゃないですか！ そんな事の為に使うのはやめて下さい！

「この怒りを鎮めるには、幼なじみを守るために派手な死に様を見せる男の子の存在が必要なのです」

なんですかそれ！ 私をゴキブリに変える事と全く関係無いじゃないですか！

「関係はあるのです。私とお前のご先祖様ことヒラガ・サイトの真

実をこの目で見るため ” 時間移動 ” でこの時代にやって来た今、私はキツカケを欲しているのです

……キツカケ、ですか？

「そうなのです。よいですか？ ここ、トリステインのクソ田舎のド・オルニエールには今の

時間軸では彼が領主になり色んな縁者と暮らしている筈なのです。

したがって、私は彼の屋敷

にメイドとして潜入し、あのおっぱいがどんな格好で ” 剣 ” と

睦んでいたか、じっくりと観察

してこのチキユウ製はんでいかむで記録に残してやる必要があるのです

「やっぱり出歯亀目的じゃないですか！ そんな物まで用意して！

「心配するなです。ちゃんと闇の中でも撮影出来るよう、改造済みなのです」

「ちがう！ そういう事じゃなくて！」

「ああ、そうでしたね。つまりは、ヒラガ公の目の前で凶悪なゴキブリに襲われる美少女を演

出し、それをキツカケとして屋敷に潜り込む算段なのです。各地の王族をチンコで纏めたその

気性から、きつと私はかれの眼鏡にかなうはずなのです」

「その何処が『幼なじみを守るために派手な死に様を見せる男の子』なんですか！ あとチ

ンコはおやめ下さい、チンコは。

「美しい、しかし手が届かぬ幼なじみを好色エロ魔神な英雄から守らんとその身を差し出す…」

…ああ、素晴らしいシチュエーションなのです」

今この場で私を危険にさらしているのはお嬢様で、その身を差し出させようとしているのも

お嬢様で、あとついでにご先祖様を悪く言うのはおやめください。

「問答無用。二度も私の事を覗き魔扱いしたその不敬、決して許されぬ物と知れなのです」

「……何やってんだ？ タバサ？」

恐らくは、時間と空間の壁を越える光の壁をくぐり、ネズミの姿の私とお嬢様、そして刺突

剣にその意志を移されいまは鞘に収まっているデルフリンガー様が、在りし日のド・オルニエ

ールの地に降り立ち、いつもよりは少々、穏やかな口論をしていた所に。

なんと我々の背後から、掛ける声がございました。

そこに、ネズミの身で見あげるにはあまりにも巨大な馬影が二つ、穏やかな朝の逆光の向こ

うにあつて、恐れ多くも……否、恐れ知らずもお嬢様を見下ろし、声をかけて来て居るではありませんか。

「あらタバサ。ジョゼットが新婚旅行にいきたくからって、女王代行しに帰ったんじゃないかっ

たの？」

「……人違いではないのです？」

「はは、何いってんだよタバサ。そんな、ジョゼットみたいに髪の毛を伸ばした変装までして

本人に成り切ってるのか？ ……いや、でも結構似合ってるよなソレ。ルイズもそう思うだろ？」

「……くやしけど、よく似合ってるわ。まったく、折角久しぶりに二人きりでサイトと朝の

散歩が出来ると思ったのに。あ、そういえば。タバサ、あんたなん

で地面あるしてるの？ シ

ン、アラン 聞こえますか、アラン

うわ！ お嬢様？ いきなり念話なんてどうしたのですか？ ま

さか！ 私が意識せぬ間に  
もうゴキブリに?! ひどいよロゼ!!

違うのです。聞きなさい、アラン。どうやらこの馬に乗って  
いる人物こそ、” 剣の系

譜” の祖にして、ハルケギニアの英雄ことサイト・シュヴァリエ・  
ド・ヒラガのようです。

へ？

恐らくは、私の事を同時代に生きたご先祖様と見間違っ  
ているようなのです。これはチ

ヤンスなのです。適当に理由をつけて屋敷に潜り込みますから、  
アランはさりげなくその辺に  
寝転ぶのです。

それは……構わないけど……やだなあ、僕、汚れるの好きじゃな  
いし

ネズ公の癖に何を言うかなのです。さりげなく踏みつぶして  
も良いのですよ？

「タバサ？ どうした、急に後向いてしゃがみ込んだりして」

「……この子、怪我してる」

「え？ なになに？」

「あ、ネズミか。へー、金毛のネズミって結構珍しいな」

「屋敷に連れ帰って治療してもいい？」

「そりゃいいけど、あんた水の系統も使えるんでしょ？ ぱぱと  
直して早くガリアに戻って

あげた方がいいんじゃない？ ジョゼット待つてるわよ？」

「ジョゼットの旅行は一月程延期になったってさっき連絡があっ  
たのです」

「うそ！ じゃあ、フェルタン村の花妖精の祭りには間に合わない  
じゃない。ちい姉様、訪問

を結構楽しみにしていたらしいのに残念ね……」

「まあ、予定が変わったんなら仕方無いよ。それはそうとタバサ、



いつも持つてる杖はどうした？」

「シルフィードがどこかに持って行った、のです。まったく、悪戯つこ。後で制裁、なのです」

「はは、そういやあいつ、最近ルーと遊び回ってるしな。妙な事を覚えただらう。ま、程々にしといてやれよ？」

「躰は重要、なのです」

ルー？ アラン、聞き覚えがありますか？

いいえお嬢様。我が家に伝わる年代記には、そのような名は……

シルフィードというのはタバサこと、シャルロット・エレエヌ・オルレ안의使い魔で

す。という事は、だれか他の者の使い魔、でしょうか？

お嬢様にわからぬものは私になどわかるう筈が。デルフリンガー様ならば何かわかるかと。

む。しかし流石に彼の目の前でデル公を抜くわけにはいかないのです。

「そっか、じゃあ杖がないんじゃ仕方無いな。屋敷には今シエスタしかないし」

「もう、折角徐々にサイトと二人きりになれると思ったのに。タバサ、私達は先に帰ってその

子の治療具を用意してるから、押っつけ戻って来なさいよ！」

「あ、まっしてくれよルイズ！ シエスタにリリーばあちゃんの所で野菜買ってくるよう言われてたんだから！」

「じゃ、私が買っておくわ。あんた、いつも要らない物まで買うもの。タバサー！ 早く戻っ

てその子に治療をしてあげるのよー！」

……行ってしまった。あれが……僕、じゃない、私のご先祖様で、ハルキゲニアの英雄かあ

「ふふ、アラン。感動したのです？」

……お嬢様にネズミに変えられた上、怪我したフリまでさせられていましたからね。馬の顔しか見えませんでした。

「おおう、なんと不幸な。私にはちゃんと見えたのです、ハルキゲニアの英雄の顔が」

それはようございました。して、感想はいかがでしょう？

「猿です。いかにも女好きのしそうな、好色な面でした。先程も、私のまだ青い肢体を視線で

犯そうと、上から下までねめ回すように見られて、最早私はお嫁に行けない躰となつてしまいました。

ました。美しさは時に不幸でもあるのですね」

……お嬢様がお美しいのは否定しませんが、その過剰に搭載された自信はいかがな物かと。

「だまらっしゃい、ネズ公。折角この私が傷心に沈み、そこに付け入ってどうせ汚れたのだからこの瑞々しい身体をめちゃくちゃにできるワザと隙を見せてあげたのに。お前には男の甲

斐性という物はないのですか。すこしはあのエロご先祖を見習ってはどうですか」

そのようなお言葉使用はおやめ下さい！ それにネズミの格好でどうやってお嬢様を籠絡し

て男の甲斐性を発揮すれば良いんですか！ て、いつかご先祖様を悪く言うのはヤメテ下さい！

いくらなんでも、片っ端からそんな目で見るはずがないでしょう？！

「それは今夜になればわかります。ヒラガ公はどうやら、この私をシャルロット・エレヌ・

オルレアンと勘違いしている様子。となれば今宵、さっき一緒にいた虚無のルイズと共に淫ら

で果てのない、めくるめく寝物語に参加させられるはず。ああ、ア

ラン、残念です。お前が密かに想いを寄せるご主人様の純潔は、今夜、他の男の腕の中で散るのです」

それはありません、お嬢様。ヒラガ公があちこちに種を飛ばし始めるのは、虚無のルイズが

ロマリアで法王になってからです。二人ともまだド・オルニールにいて、ジヨゼット女王の治

世である所から、この時代はお二人が結婚する前後のはず。

「……では、あの忌々しいおっぱいとエロご先祖の交尾はこのはんでいかむに収められないのです？」

左様でございます。

「……ち。ネズ公の癖に賢いのです。というか、躊躇無く否定されるそれはそれで傷つくのです」

だってそうでしょう？ それにお嬢様は私が守ります。そのような事には絶対なりません

「え？」

覚えていますか？ 5つの頃、『イーヴァルディの勇者の冒険』に影響されたお嬢様が私と冒険の真似事をした時の事を。

「……覚えています。お前はあの時、イーヴァルディの役をやらせてくれとせがんで、そのあ

げく父上の目の前で身分を弁えず 『僕はロゼを一生守ってみせる！』と口にしたのです。

あの時の事は今でもよく覚えているのです」

そうです。オルレアン様はそんな私の言葉に怒る所か、にこやかに、しかし涙目で娘をよる

しく頼む。本当に、君がそう言ってくれて嬉しいよなどととても嬉しそうなお言葉をかけて頂

いて、以後私はお嬢様専属執事として生け贄　　否、取り立てて頂  
きました。あの時の言葉は  
いまでもこの胸にしまっつてございます」

「アラン……お前……」

何より、お嬢様は何でも一度味を覚えると身体が壊れるまで食べ  
続けるタイプです。ですの  
で、このような場所でそのような秘め事の味を覚えてしまえば、帰  
るに帰られなくなるじゃな  
いですか。　　あれ？　お嬢様？　如何なさいました？　そのよう  
な恐ろしい形相になられ

**i n t e r m e d i o 4 - 1 / 復讐は夜風となり（前書き）**

携帯で読んでくれている方から、小説になろうでないと言文が全て読めないで再開してほしい、との要望を頂いたので暫定的に投稿再開致します。

エヴラール・バルビエ副伯は、夜の森を ”レビテーション” で  
低く木々の間を縫うように飛翔していた。

右手で押さえた左肩からは血が滲んでいる。

食いしばった歯は白く、口はしかし苦痛ではなくどちらかといつと、  
忌々しそくにその端が歪められていた。

彼の脳裏によぎるものは憤怒。

無理もない。

トリステイン王国と戦争中の敵国、神聖アルビオン共和国と通じて

アンリエッタ女王を操る計画が台無しにされてしまったからだ。

しかも無力で浅ましく、愚か者だと日頃蔑んでいる平民に怪我まで負わされての事である。

今頃屋敷の地下に繋いでいた平民の女から、女王直属の女官が全てを聞き出して居る頃だろう。

忌々しい。

あの女、後でじっくりと”楽しもう” などと思わずさっさと殺しておけばよかった。

それにあの女の弟のガキ。

ああ、忌々しい。

まさかあのような魔法を無力化する魔剣を携えていようとは！

副伯の脳裏に平民の姉弟と女王の女官だと名乗った、妙な格好のピンクブロンドの小娘の笑顔が浮かんだ。

三つの笑顔は自身に向かい、声高に嘲笑を始める。

くそ！ くそ！ くそ！

何がおかしい！

俺はエリートだ！

お前達のようなゴミとはちがう！

忌々しい！ 本当に忌々しい連中だ！

脳裏に浮かんだ幻影を罵倒する為に、とびきりの言葉を探して副伯は呻いた。

しかし、浮かんでくる汚い言葉はすべて足りない。

お前は娼婦だ、キチガイだ、屑だ、淫売だ、家畜だ、非人だ、オー  
クだ。

思い付く限りの罵声を口にするも、どれも彼の怒りの度合いに相応しい物ではなかった。

腹の底が、まるで煮え立った大鍋のように熱い。

眼球が痙攣し、思考は白濁している。

程なく、行き場を失った怒りが臨界を超え絶叫となって副伯の口から飛び出た。

同時に轟音が遙か遠くから響く。

バルビエ副伯はぎょっとして、”レビテーション”での移動を一旦辞め木の陰に隠れて辺りを伺った。

人の気配はない。

空を見上げると、巨大な火柱が夜空を焦がしている。



どうやら彼の部下が未だ、誰かと戦っているらしい。

その事実は副伯を更に苛立たせた。

ド二め。

あの、無能め！

大口を叩いた割に苦戦しているではないか！

お前がさっさと仕事をこなし館に戻って来なかったから ” ころ ”  
なつたのだ！

左肩の痛みも忘れ力の限りに握った拳で、副伯は背にしていた木の幹を殴りつけた。

ぺし、と情けない音と共に肩の痛みがぶり返す。

副伯は思わず呻いて、杖を軽く振り治癒の魔法を紡いだ。

魔法の効果はすぐに現れ、左肩の痛みがみるみるうちに消え去ってゆく。

しかしそれに呼応するかのよう痛みが占めていた部分へ、怒りが染みこんできた。

忌々しい！ くそ！ なぜどいつもこいつも俺の邪魔をする！ 無能だ！ 無能だらけだ！

ドニの奴も無能だ！ 戦争を継続したがる女王も無能だ！ 俺の邪魔をするあいつらも無能だ！

くそ！ くそ！

「くそ！ よくも！ この恨み、決して忘れはせぬぞ！」

「同感だ」

怒りにまかせた独白に応じたのは男の声であった。

副伯は肩を跳ね上げながらも、声のした方角へ弾かれたように振り向いた。

いつからそこに居たのか、暗い夜の木々の合間に立つ長身の影が見える。

影は静寂を纏い、顔には銀の仮面。

背は高い。

刺突剣を握る右腕とは対照的に、だらんと垂れた左腕の袖が隻腕である事を示していた。

バルビエ副伯はそれが誰であるかと考えるよりも早く、”レビテーション” を唱えながら影とは反対側に身を翻す。

しかし。

いつの間にか自分の背後に出来ていた ”闇” を見て、 ”レビテーション” の詠唱を途中で辞めてしまった。

闇は空高く、森の木々を超えてそびえ月光を遮っていたからだ。

それが巨大なゴーレムであると副伯が気が付いた時、背後から隻腕の影が再び声を掛けてきた。

「エヴラール・バルビエ副伯だな？」

「だ、だれだ！」

「 ”風” 。理由あって、本名は名乗れぬのだ。それよりも……」

どん、と足に軽い衝撃を受けてバルビエ副伯は突然姿勢を崩し、その場に倒れ込んでしまった。

なんだ？

何が起きた？

くそ、無様にも木の根に足を引っかけたか？！

ええい、くそ！ くそ！ くそ！

なんと、なんと無様な！

内心で一人ごちてすぐさま立ち上がるうとするも、なぜか立ち上がることができない。

鳶でも絡まっているのかと思いきの足の方を見やると、其処に有るはずの物が無かった。

バルビエ副伯がその現実を受け入れる間も無く、背後の隻腕の影が抑揚の無い声で台詞を続ける。

「杖も。逃げられると私が大目玉なのでね」

今度は杖を持っている右手にどん、と軽い衝撃。

副伯は眼前で右手が消失する様を見て、目を開いた。

自身に加えられた危害にショックを受けたわけではない。

今までにこれほど鮮やかな ” エア・カッター ” を見た事など無かったからだ。

バルビエ副伯の僅かに残ったメイジとしての矜持がそうさせたのか、この時真っ先に脳裏に浮かんだのは

屈辱でも、敗北感でもなく、メイジとして相手の技量に目を奪われるほどの驚嘆であった。

すこし離れた位置でほとり、と音を聞き副伯はやっと我に返る。

そして悲惨な現実を直視する事となった。

遅れて両足から、次いで右手から痺れに似た鈍痛が這い上がってくる。

やがて間を置かず鈍痛は激痛に変わり、この時バルビエ副伯は自分が何をされたのか初めて理解した。

たまらず悲鳴を上げようと口を開けた瞬間、今度は口内に粘土のよ

うな土の塊が出現する。

「うー！　おおおー！」

「うるさいねえ。大声出すんじゃないよ、みつともない。立派なお貴族さまなんだからさ」

今度は若い女の声である。

声は副伯の頭上、遙か高い位置から聞こえてきた。

それがゴーレムを作り出した本人の物であると気付く余裕すらなく、両足と右手を失った副伯は悶絶し悲鳴を上げる。

そのくぐもった悲鳴をかき消すように、先程とは比べものにならない程巨大な火柱が轟音と共に遠く夜空にそびえた。

「……相変わらず派手に暴れるな、あの使い魔は」

「うあああああ！」

「副伯、貴方は運が良い。恐らくはあの使い魔の主人を」泣かした”りしなかったからだろうが  
アレと敵対して五体満足で逃げおおせたのは、誇るべき事である  
と思うね」

「何言ってるんだか。あんたの左腕は自業自得だとわたしは思っけどもね」

「そう言うな”土”。あの使い魔を見てまさか、あのような力を秘めているとは誰が予想しえるのだ？」

お前だってそれで以前痛い目をみているではないか」

「そりゃまあ、そうだけどさ。

ええい、ピーピーと五月蠅い！ ちよつと”水”！ さ

つさと黙らせなさいよー！」

いつの間にかゴーレムから降りてきた女は、悪態をつきながら地に

倒れて激痛の為に暴れているバルビエ副伯を軽く蹴飛ばした。

そんな彼女の脇にもう一つ暗く人影が現れて蹲り、暴れる副伯に手を伸ばす。

するとピタリとバルビエ副伯の動きが止まり、口に粘土を詰められたまま上げていた悲鳴も聞こえなくなってしまった。

蹲った影はそのまま仰向けに動きを止めた副伯の顔をのぞき込む。

濃い紫色のローブを纏いまるで森の闇そのもののような影は、隻腕の男と似たような銀の仮面を付けていた。

「旦那、聞こえるかね？　痛みはもう感じないはずだ。おっと、自己紹介がまだだったな。」

私は ”水”。まあ、水と言っても ”毒水”　なのだけどもね。

旦那には恨みは無いのだがこれが ”報酬”　なんでね、勘弁願いたい」

「 ”水”　、余計な事は喋るな。それに ”報酬”　はまだまだ私の用事が済んでいない」

「これは、失礼。薬は効いているから、じっくりとどうぞ。」



ただし、くれぐれも反応が無いからといってこれ以上傷つけないで下さいよ？

前も似たような依頼をしてきた癖に、反応がないもんだから激昂して滅茶苦茶にした依頼人が居たのでね」

「わかっている。こんな状態になっても、きちんと耳は聞こえているし目も見えているのだろうか？」

「ええ、そうです。血もちゃんと止めましたから、失血死の心配もないですよ」

「なんでもいいから、早く済ましておくれよ。」

あの使い魔の戦闘に巻き込まれでもしたら目も当てられないよ」

少し苛ついた声で ”土” と呼ばれた女は ”風” と名乗った男を急かした。

隻腕の男はそんな女の様子など無視して、蹲り副伯を覗き込んでいた ”水” を押しのけ屈んで

バルビエ副伯にその顔を近づけ仮面を外した。

その間、副伯は只一言も口にもすることも動くことも許されず、ただ

ただ三人のやりとりを動かぬ眼球で観察するしかなかった。

唯一彼にとつての救いだったのは、つい先程まで全身を襲っていた激痛が綺麗に消えていたことである。

「お初にお目にかかる。私はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドと申します。」

裏切り者の元魔法衛士グリフォン隊長と言えばピンとくるかな？  
」

返事はない。

辺りにはワルドの言葉だけが木々のざわめきに混じるばかりである。

「ふむ。薬がきちんと効いているならば、苦痛はもう無いはずだ。副伯、貴方は以前トリスティン王立魔法研究所に籍を置いていたことがありましたな？」

腕が！ 私の足が！！ おのれ貴様！ 何故お前がここに居る？  
アルビオンに寝返ったのではないのか？

遠くに出現していた火柱が消え、暗闇が戻った森の中。

人形の様になった副伯の瞳に宿る感情を読み取ったのが、ワルドは  
口の端を僅かに上げて深くゆっくりと鼻を鳴らした。

「ああ、そうでしたな。何故私がここに居るのか、それから説明し  
て差し上げましょう。

何、簡単な話なのです。

卑怯な裏切り者の常と申しますか、今はレコン・キスタではなく  
トリステイン女王アンリエッタ陛下に肩入れをしている

さるやんことなきお方にお仕えしているのですよ」

それがどうした！ なんの事だ！？

「その方の命令でね、私はこの国に巢食うアルビオンへの内通者の  
” 掃除” を行っているのです。

なんせレコン・キスタの内部について最近まで居たものでね、名簿の作成など実に簡単な物でした」

「そんな事、何も反応できないそいつに話してもしょうもないだろ、”風”。

とつとといつもの恨み言を言って済ましておくれよ」

なんの事だ?! 私には関係の無いことではないか! ああああ

! おのれ! おのれおのれ! よくも、私の手足を!!

「直ぐ終わる。失礼、連れは少し気が短くてね。

そんなワケで、皮肉な巡り合わせか裏切り者の私がこの国で掃除屋をやっているのですが、実はこれにはもう一つ

私の個人的な理由があるのですよ、副伯。

つまり私はその理由の為に祖国を裏切り、レコン・キスタを裏切り、恥も無く再びこの国に舞い戻って薄汚い仕事に勤しんでいるのです。

時に副伯。貴方は先程も言ったように、トリステイン王立魔法研究所に勤めていた時期がありましたね?」

それがどうした! くそ、殺すならさっさと殺せ!

罵倒は目と口を開き、仰向けに倒れている体から外には出なかった。手足を襲っていた激痛は既に感じては居ない。

無論、暴れることすらできない。

何をされたのか皆目見当がつかなかったが、意識と体を切り離されたのだとは理解していた。

この時バルビエ副伯は地に倒れ、己を見下ろす三つの影をただただ、見つめることしか出来なかった。

その内の一つ、もっとも近い位置にあるあごひげを湛えた若い男の瞳に暗い感情がゆらりと灯る。

「調べは付いている。貴方は、そこである暗殺計画に関わった筈だ。下らない、そしてつまらない嫉妬の為にとある発見をした女性研究員を暗殺するため、当時の貴方は暗殺者の手引きを行った。違いますか？」

し、しらん！ そのような昔のことは

「暗殺者の名はギョーム。貴方の同僚だ。これは本人に直接聞いた事です。」

ここまでお話しすれば察しが付くでしょう？

そうです。私はその女性研究員の息子なのですよ、エヴラール・バルビエ副伯。

これは任務である前に、私の復讐なのです。

直接母に毒を盛ったギョームの方は、この手で既に復讐を遂げてみせました。

まだ幾人か、黒幕が残っては居ますがいずれ……」

「風」の旦那、私の報酬の話をお忘れしないで下さいよ？」

「分かっている、水」。

副伯。貴方も憎き母の仇の一人ではありませんが、この者との契約もあります。

直接手を下せないのが非常に残念ですが、精々この世で長く、地獄を味わっていただきたい」

ワルドはそう言い放ち、すくと立ち上がってその場を後にした。

その後を「土」と呼ばれた女性が追う。

そしてその場には物言えず手足を切り落とされたバルビエ副伯と、

”水” と呼ばれた濃い紫色のローブを纏った男だけが残された。

ざあ、と森がまるで生き物のようにざわめく。

まるで残された二人を遠ざけようとするように。

「それじゃあ、旦那。始めましょうか？」

な、何をする？！

「そんな不安そうな顔をしないで欲しいね。何、”簡単には死にはしない”。

さっき旦那に注入した秘薬は意識と体を切り離す他に、生命活動をギリギリまで抑える効果があつてね。

切り落とされた手足の感覚ももう感じないだろう？ ああ、心配しなくていい。血もちゃんと止まっているよ。

生きたままのメイジの肉体は、凄く良く効く秘薬の材料になるんだよ。

まずは生命活動にあまり影響のない部位から頂くとしようかね？」

や、やめろ……やめてくれ！

「大丈夫、痛みは感じないはずさ。狂死されてはこちらが困るからね。」

出来る限りやさしくするから、すこしの間辛抱して欲しい、副伯

の旦那。

……おっと、作業の前に私の顔につける秘薬を塗っておこうかな。そろそろ効果が切れる頃合いだ。

ふふ、副伯。私は夢中になるとつい、時間を忘れてしまう性格だね。すこし不快だろうが、辛抱してくれたまえ」

”水” と呼ばれた男はそう独り言のように呟くと、おもむろに銀の仮面を外して見せた。

その素顔を見た副伯はたまらず声にならぬ悲鳴と絶叫を上げる。

しかしその音無き叫びは、魅了の唄が止んだ森のざわめきに掃き散らされてゆく。

副伯が見た ”水” の素顔は、皮膚のない人の顔であった。

それはまるで、死に神と言うよりも残酷な悪魔のような顔であり、副伯にとってまさしく悪夢その物を形にしたかのような存在であった。

”水” は副伯の声にならぬ絶叫を感じ取ったのか、すこし不快な表情を浮かべながらもやがて任務の報酬を受け取るべく

作業に取りかかるのであった。



一方ワルドはそんな、凄惨な現場から半ば逃げるかのように距離を置き ” 水 ” と呼ばれた男の作業が終わるのを待っていた。

腕を組み、背を木の幹に預けて目を閉じてはいたがどこか落ち着かない様子である。

そんな彼が背を預けている木の幹を挟んで、 ” 土 ” と呼ばれた女 ” 土くれ ” のフーケも又、ワルドと同じように背を木の幹に預けていた。

こちらも腕を組んでいたが、その美しくもきつい印象を持たせるつり上がった目は、背後のワルドへと注意が向けられていた。

「……………顔色が優れないね？」

「ふん、見もせずによくもそのような事が言えるな」

「見なくてもわかるさ、ワルド。」

まあ、復讐とは言えアレに悪趣味な方法で始末をさせる気持ちは、

わからないでもないけどさ」

「ふん、当然の報いだ」

「しかし、よくあの鶏ガラの宰相が裏切り者のあんたを使う気になったもんだね？」

「他に汚れ仕事をこなせそうな者が居ないのだろう。」

皮肉な話、いまのトリステインの王宮には信用に足る強力なメイジが居ないのだ。

それこそ、裏切り者を使った方がまだマシに思える程にな」

「ふうん、其処まで腐っていたとはねえ。麗しき女王陛下がメイジ不審に陥っている噂は、あながち間違いでないって事かね」

フーケの言葉にワルドはふん、と鼻を鳴らして嘲るような笑みを浮かべた。

そんなワルドの態度に応じるように、フーケも又ここには居ない誰かを嘲るように微笑む。

「我らの後ろ盾がウエルズ皇太子殿下だと言うこともあるぞ。

それにこういった仕事は外部の人間の方が使いやすい。

今のトリステイン王国の内情では尚更だ。

いざとなれば私をアルビオンの暗殺者として処分する事もできる。何より、私の場合は忠誠でなく”利”で動いていることをあの宰相も皇太子も承知しているからな。

忠誠に燃える人間よりも扱いやすいと判断したのだろう。

特に今回は内通者の名簿と引き替えに、マザリーニが独自に調べ上げた母の事件の容疑者のリストが出て来たから

裏切る心配は無いと踏んでいるのだろうさ」

「は！ なかなかどうして食えない宰相じゃないか。鶏ガラとは良く言ったもんだね」

「鳥の骨だ。……このリストを握りつぶしていたのはリッシュモン

高等法院の長だ」

「そいつが次のターゲットなのかい？」

「いや。こいつは女王陛下への生け贄にするらしい。見せしめという物が必要だと言うわけだ」

「へえ。あのお姫様も結構やるじゃないか」

「ふん、大方我らの事は知りはしまいさ。其処までは ” 汚れて ” はいまい」

「ワルド、あんたはそれでいいのかい？」

「何、あの世間知らずのお姫様の事だ。取り逃がす事もあるだろう」

「獲物を横からかつさらうってわけかい」

「そうだ」

ワルドの短いその返答を聞いたフーケは、暫く黙り込んでいたが不意に背にしていた木を回り込みワルドの正面に立った。

それからおもむろに身長の高いワルドを見上げながら、彼の残った右手を両手で握り大事そうに抱え込む。

普段の彼女からは想像もつかない、かなりらしくない行動ではあったが、ワルドは特に驚きもせずその行動を注意深く見守っていた。

果たして、次に紡がれたフーケの声はどこか苦しそうな物であった。

「ねえ、ワルド。 ”復讐者” の先輩から言わせて貰うけどさ」

「うむ?」

「思っている程、スッキリしないもんだよ」

「……知っているさ。だが、いかに後悔しても後戻りはできん。  
”知っているだろう”?」

「……ああ、知っているさ。痛い程に、ね」

フーケはそう呟いて、握った手を離した。

それから何かを振り払うかのように、乱暴にワルドの唇を己の唇で塞ぐ。

夜風が吹き抜け、森の木々が狂おしく何かを求めるかのようにざわめいた。

ワルドはそんな彼女の行動に、ほんの少しだけ背に回した右腕の力を込めてやるのであった。

『魅惑の妖精』亭はその日も繁盛していた。

チップレースが終わり一区切りがついたものの、店にやってくる客にしてみればそんな区切りなど関係無いのは当然で

相も変わらず才人は皿洗いに、ルイズは接客に忙しい毎日だ。

そう、二人は”青い鳥”の姉妹が屋根裏部屋を出て行ってからこっち、事件らしい事件も起きず実に平和で穏やかな日常を

満喫する事ができたのである。

もっともルイズにしてみれば次々と起こる才人が”以前” 経験

した事件を初体験し、それなりに刺激的な毎日でもあったが。

すなわち、店にたかりにやって来た徴税官の一言で、キレたルイズが魔法を使い店の者にバレバレであった身分が改めてばれてしまったり。

たまたま店に遊びにやって来たタバサとキュルケ、ギーシュと彼と仲直りしたモンモランシーがやって来て店で働くルイズが茶化されたり。

キュルケとタバサの友情の始まりの物語を皆で聞いたり。

そこへ久々の休暇でハイになった王軍の士官とその手下が店にやって来て、傲慢に振る舞いながらキュルケに絡み、決闘騒ぎになったり。

結局決闘はタバサが引き受け、王軍の士官を手下もろとも ” エア・ハンマー ” で吹き飛ばしアッサリと勝負がついたり。

しこたま飲み食いしたキュルケが眠いから泊まると言い残し、お代をルイズにツケてタバサと共に『魅惑の妖精』亭の二階へと消えたり。

そこへ先程の士官が決闘の仕返しの為、一個中隊を引き連れてやって来て大乱闘騒ぎになったりといった具合である。

もっとも最後の乱闘騒ぎでは、 ” 前回 ” はボコボコにされてしまった才人とルイズであったが、 ” 今回 ” はその圧倒的な力の差を



余す所無く發揮し、逆に一個中隊全員をボコボコにしてしまつのであつた。

そんな、一見順調に ” 同じ未来 ” へと進みつつある日常の中で、才人はある悩みを抱え込んでしまつていた。

タバサの母親救出の為、未来をそれまではなるべく変えないようにすると決めた才人であつたが

一つ引つかかる ” 事件 ” がこれから起こるからだ。

「なあ、ルイズ。いい加減、機嫌なおしてくれよう」

「うるさい！」

喧噪に包まれる店内、厨房の片隅で転がる才人をゲシ！ と踏みつけるルイズ。

白いこめかみに青筋を立て、非常にご機嫌ナナメといった様子だ。

” 青い鳥 ” の姉妹が才人にささやかな復讐をした日からずっと

この調子なのである。

無論、彼女達の真意をわかっているルイズではあったが、苛つきの原因はそれだけではなかった。

先日の王軍士官が連れてきた一個中隊との大立ち回りの一件で、店の女の子達の間で才人の株がうなぎ登りになっていたからだ。

徴税官をこっぴどく痛めつけて追い返した自分の評価もかなり良い物に変わってはいたが、才人は ” 特別 ” であつた。

何せ魔法が使えない平民である才人が、メイジも混じっている王軍の一個中隊を素手で全員叩きのめしてしまったのだから。

平民であればその事実は誰が聞いても心躍るような出来事であろう。

ましてや年頃の女の子がその現場に居合わせたのである。

それも、複数人で。

案の定、才人の圧倒的な強さを目の当たりにした店の女の子達が、日頃の才人とのギャップも相まって

夢中になってしまったのも無理もない話である。

あれ以来店に出ている女の子達が何かと才人につきまとい、世話を焼きたがり、あまつさえルイズに彼、どんな女の子が好みだろうかなどと

いった相談がよりもよってルイズの元へ、ひっきりなしに舞い込

んできていたのだ。

それがルイズにとって非常に面白くない。

というか、常に噴火寸前の火山のように怒りのマグマが渦巻いている状態となっていた。

そしてそのルイズの状態こそが、才人の悩みの種となっていたのである。

「あ、あんた……最近妙にモテるからって、調子にのってない?!」

「滅相もございません」

「今日だって、私以外の女の子を五十三回も見たわ! それに、ジエシカやジャンヌの胸の谷間を二十六回も見たりして!」

声を震わせ台詞と共に、グリッと才人を踏みつけた足に力を込めるルイズ。

ミシリという音を才人は耳にしながらも、どうやってルイズの機嫌を直して貰おうかと途方に暮れていた。

なにせ、ルイズの言葉通り女の子（の胸）につい目が行ってしまったことは事実だったからだ。

事実は引け目となり、自己嫌悪として才人を苛む。

しかし、それ以上に男としての本能に打ち勝てない自身が情けなくなる才人であった。

だからこそ、ルイズの行き過ぎた嫉妬にも才人は特別不快に思うことは無い。

むしろ愛情表現の一種として捉え、他の女性に目をやってしまった自身への罰も兼ねて嬉々として受け入れている節もある。

なまじ ”前” の人生の中でルイズと共に過ごした時間もあり、彼女の欠点すらも易々と受け入れてしまえる土壌もあった。

そんな才人の態度は、彼を注意深く観察する女の子達に大人びた、余裕ある物にみえてしまい、知らずますます株を上げてしまう。

その様子をルイズは間近で見聞きし、更に嫉妬の炎を燃え上がらせる。

そして才人に当たる。

耐える、というか余裕を持って受け入れる。

女の子達の株が上がる。

ルイズが更に苛つく。

悪循環であった。

「わたしの、気も、しらないで！ このこのこのこのー！」

「うげ！ ル、ルイズ！ 痛い！ 落ち着け！ 実は、大事な話が  
ああ！ いでえ！」

「何が、大事な！ 話よ！ 私の、方が！ 大事、でしょうか！」

取り付く島もないとはこの事である。

ぐりぐりぐりぐりぐりと踏みつけられながら才人は、これから起き  
る『魅惑の妖精』亭で起きる最後の事件についての説明を

この時とごとく諦める事にしてしまつたのだった。

このような状態のルイズに、これからアンリエッタとキスをするような状況になるとは、口が裂けても言うわけにはいかない。

間違いなく逆上してしまい、”爆発”を店の中で見境無く唱えだしてしまつたろう。

無論、キス自体はなんとか阻止するつもりではある。

しかし、今の才人がまったくルイズに信頼されていないのは明白であつた。

なにせ、先日デートとしてトリスタニアの劇場へ足を運んだ際、ルイズは演劇などそつちのけで周りの女の子の視線を伺い

視線が合おう物ならばまるでエサを手に入れたばかりの餓狼の様に唸り、時にはしゃー！と威嚇をする始末であつたからだ。

「お、おちつけって！ パンツ、パンツみえてんぞ！」

「いいのよ！ パンツでも！ 私だけ見てればそれで！」

「サイトー、これ、おねが……うわ！ なにやってんの？！ そんなプレイ、お店でやっちゃだめよ！」

「ちがう！ ジェシカ、断じてそれは違う！」

「うっさい！ 取り込み中よ！」

「ルイズ？！ ……まったく、仲がいいのは結構だけど今は仕事だよ。はやくフロアに戻んなさい」

「そんな事言つて、あんた私が居ない間、サイトに言い寄るつもりでしょう！」

「知ってるのよ、厨房に入る子はみんなシャツのボタンを一つ、外して入っているの！」

「う、ちゅ、厨房は暑いからよ！」

「元々胸元が大きく開いているじゃない！ あ！ もしかして私への当てつけ？ 当てつけなの？！ きー！」

「そんなつもりはないって、考えすぎよ？ ……そりゃ、武器になる物は有効に使う主義だけだよ」

「やっぱり！ うぬれえ！」

「ちよ、落ち着いて！ 杖こっちに向けないでよ！ てか、どこにそんなもの隠し持ってたのよ！」

「る、ルイズ！ 落ち着け！ 流石にそれはマズイ！」

「あんたは黙ってなさい！ 敷物は敷物らしくそこで大人しくしてればいいのよ！」

ぐりぐりぐり、と才人を踏んづける足に力が更に籠もる。

ぐえ、と潰れたカエルのようなうめき声を上げて、イーヴァルディの勇者は手足をバタつかせて苦しんだ。

ジェシカはそんな二人を見て、腰に手を当てはあと深くため息をつく。

「ねえ、ルイズ。あのね？ みんな、必死なのよ」



「なにがよ!」

「だってさ、ルイズはいつもサイトと一緒に居られるじゃない。屋根裏部屋にさ、二人きりで過ごして彼と同じベッドで寝ているんでしょ?」

「そりゃ、まあ……」

「それ、すつごい有利よねえ。店の女の子……ナンバーワンの私でさえも覆せない程有利な状況じゃない。

ねえ、ルイズ。みんな、そんな貴女が羨ましくて仕方がないの。貴女にすこしでも追いつきたいと必死なのよ」

「私が羨ましい? みんな、私に追いつこう?」

「そうそう!」

すげえ……

才人は厨房の床に倒れ伏せながらも、逆上したルイズをなだめつつあるジェシカの手腕に思わず感嘆の言葉を口にしかけた。

いつの間にか踏みつけられていた足は降ろされ、多分、本気ではないだろうがジェシカに向けていた杖もだらんと下げられている。

見上げるルイズの背からは、怒気がみるみるうちに萎んで行くのがよくわかった。

ルイズを持ち上げ、いかに才人に近い位置にいるかその有利性を冷静に指摘しつつ、さりげなく自身や店の女の子達にも

才人を射止めるチャンスがある余地を作り出してゆく。

実に見事でしたたかな論調である。

才人はそろり音を立てないように立ち上がり、暫くはジェシカの説得に聞き入っていたが、ふと彼女がアイコンタクトを

送ってきている事に気がついた。

どうやら今のうちにどこかへ逃げるよう、合図を送ってきているらしい。

すげえ……

ルイズを宥め、自身にもチャンスを作り出す一石二丁の説得が、俺を逃がす事によってポイントも稼げる一石三丁になった！

これが『魅惑の妖精』亭ナンバーワンの実力か！

思わず、ルイズの後ろでぐっと親指を立ててジェシカの手腕を褒め

称える才人。

およそ、争いの元凶となっている人物とは思えない程暢気な感動である。

そんな才人にジェシカは器用にもルイズを褒め称えつつも、怒りの合図を送ってくる。

才人は彼女の合図を受けてやっと自分の置かれた状況を思い出し、慌てて音も立てず店の裏口から逃げ出したのであった。

ルイズに気取られぬようそつと裏口に扉を閉めて外に出ると、すっかり嗅ぎ慣れた裏通りの悪臭と共に気持ちの良い風が吹き抜け

才人の黒髪を撫でた。

ルイズの折檻から解放された才人はその風に一瞬、ほっとした表情を浮かべたが次の瞬間険しい表情を浮かべる。

空気がいつもと違う。

どこか張り詰めたかのような、剣呑な気配が街を覆っている。

才人は少しの間、警戒するように辺りを伺ったがだがしかし、すぐにその警戒を解いてしまった。

ある人影を確認し、これから何が起きるかを全て理解したからだ。

人影はすっぱりとフードを頭に被った女性で、暗い裏路地のむこうから才人の姿を確認するといそいそと駆け寄ってくる。

「あの、もし。この辺りに『魅惑の妖精』亭というお店がありますか？」

「ありますよ、”姫さま”。」ここがそうです。」

才人の意外な返事に影はびくん、と体を震わせ動揺した。

それからすぐに踵を返して逃げるように去っていく。

才人は慌てて女性を引き留め、女性に自分の姿がよく見えるようフードに顔を近づけた。

「あ、ま、まって！俺ですよ、俺！ルイズの使い魔の！」

「え？あ！貴方は……」

「お久しぶりです、姫さま。ここでは何ですから、俺達が逗留している宿の部屋へあがりませんか？」

「え？ え？、ええ。でも何故……あ！ そうでしたわ、貴方は”未来を予知する剣”をお持ちになっていたのですわね」

「そついつ事です」

「ふふ、わざわざ出迎えてくれていたなんて、ますます頼もしいですわ」

「恐縮です。さあ、こちらへ。ここに居ては兵士に見つかりますよ。用事があるのは、ルイズでなく俺でしょう？」

「まあ。そこまで知っているのならば、話が早くて良いですわね。ええ、そうです。お願いします」

才人はまだジェシカとなにやら話し込んでいるルイズに見つからぬよう、こっそりと『魅惑の妖精』亭の二階にある屋根裏部屋に

女性…… トリステイン王国女王アンリエッタを案内した。

アンリエッタは屋根裏部屋に通されると、粗末なベッドに腰掛けかぶったフードをめくりながらほう、とため息をつく。

そんな彼女のすこし疲労の色が見えるその美しい横顔に、水の入った木のカップが差し出された。

「どうぞ。ワインではありませんが、一息つきますよ?」

「あら、ありがとう。貴方は本当に良くできた使い魔さんね。ルイズがうらやましいわ」

アンリエッタは微笑みながら才人が差し出したカップを受け取り、一気に煽った。

ぷは、ともう一度今度は先程よりも大きく息を吐いてカップを才人に戻すと、彼女の顔に現れていた疲労がほんの少し和らいだ。

その様子を見た才人は頃合いと判断し、早速アンリエッタがここ

へやって来た目的の話が始めるのであった。

「まったく。」狐狩り” の護衛を俺に頼む為、こっそり視察の公務から抜け出すなんて無茶も良い所ですよ？」

「 本当に何でもお見通しなのですね？」

「何でも、と言っわけでは無いですけどね」

「うふふ、流石に ” 未来から召喚された ” だけがありますわね」

アンリエッタの言葉に才人はぎょっとした。

それから悪戯っぽく笑う彼女をしばし見つめた後、ある事に気がついてあちゃあと頭に手を置く。

「ウエールズ皇太子殿下から聞いたのですね？」

「うふふ、当たり前。まったく、ルイズも貴方も人が悪いですわ。わたくしだけのけ者だなんて」

「すみません、騙すつもりはなかったんです。あの時は、ああでも言わないと信じてもらえないと思ひまして」

「あら、そうかしら？ わたくし、そんなに暗愚に見えまして？」

「普通、僕は未来からきました！ なんて話、誰も信じませんよ。ルイズだって信じてもらえるまでかなり時間がかかりましたしね」

「そうかしら？ なんとも、素敵な話ではありませんか」

「思っただけの事じゃある程ロマンチックではありませんよ。」

「さあ、姫さま。ここにお召し物がございますので、着替えて下さい。すこし、小さいかもしれませんが」



才人は苦笑いを浮かべつつも、ルイズがカモフラージュ用に買ったおいた平民の服を取り出した。

本来ならば今日の為にアンリエッタの体型に合わせた物を用意したかったのだが、ルイズの機嫌を伺っている内にこの日がやって来たので

”前” と同じようにルイズの服を着て貰うほか無い。

「……本当、貴方のような部下がもつと居れば、トリスティン王国も今のようにならなかつたでしょうね」

「俺のは気が利くんでなくて、”知っている” から出来る行動ですよ」

「そうかしら？　なんとなく、ルイズが夢中になる気持ちもわかりますわ」

「からかわないで下さい。ささ、お早く。俺、あっち向いていますから」

そう言つて、アンリエッタに服を渡すと素早く後ろを向く才人。

人前で着替える事が当たり前の王族は、才人達が持つような羞恥心が無い。

目の前でいきなり着替えられると、いかに ” 見慣れた ” 才人とて目のやり場に困るのだ。

程なく背中の方から、しゆるしゆると衣擦れの音が才人の耳に届き始める。

音はふと時の遡行者に ” 前 ” の記憶を呼び起こす。

王配として、最初に伽の相手をしたのがアンリエッタであった。

思い出されるのは甘く淫靡な快樂と、心を引き裂かんばかりの罪悪感。

目的を洩々ながら理解しつつも、いくなと無言で訴えるルイズの涙。想い人と遂に結ばれた、アンリエッタの後悔混じりの涙。

かなり虫食いとなつてしまったかつての記憶は、鮮明に才人の心の内に蘇り嫌悪・悦楽・後悔・愛情とあらゆる感情と感覚を呼び起こす。

才人はそれらを二度頭を振って追い出し、側にあったデルフリンガーを手に取りながら気を紛らわせようと

後ろのアンリエッタに声を掛けることにした。

「姫さま、ちょっと小さいかもしれませんがご勘弁を」

「かまいませんわ。少し、胸が、苦しい位であとは、大丈夫です」

「一応確認しますけれど。今夜の ” 狐狩り ” は高等法院の古狐なんですよね？」

「……ええ、そうですわ」

「よかった。じゃあ、俺の知る未来と同じです」

「貴方が知る未来では、わたくしは無事狐を狩れまして？」

「結果を他人に話すと、未来が変わる恐れがあるのであまり言いたくは無いのですが……無事、狩れますよ。  
その内劇場での演目に成る程見事に」

「まあ！ ……もうこっちを向いても大丈夫ですわ」

アンリエッタに促され、才人は再び彼女の方を向いた。

……やはり前回と同じように、胸のボタンがはち切れんばかりとなっている。

ごくり、とつい生唾を飲み込み才人はどうしても ”そこ” から目が話せない自分に嫌悪を覚えた。

いかん！

こんなんだからルイズを苛立たせてしまっただ！

しっかりしろ、俺！

ブンブンと今後は先程よりも頭を大きく降り、気を取り直して才人は言った。

「では移動しましょうか。ここに居てはルイズがその内やってくるでしょっしょ。」

姫さまのそのようなお姿は、見られたくはないんでしょう?」

「ええ、そうですね。貴方は本当、よく気が付く使い魔さんのね」

「言ったでしょう、”前”に姫さまからそう聞いたんですよ」

「うふふ、それはそれでなんだか奇妙な感じですね。ねえ、使い魔さん。これからわたくしはどうなるのですか?」

質問に、才人はギクリとした。

このまま”前”と同じように事が進めば、恋人同士に偽装し、恋人同士のように肩を寄せ合い

果ては兵士の目を欺く為にキスマでする事を思い出したからだ。

なんて答えよう?

ありのまま話すか?

いや、でも……

「？ 使い魔さん？」

「あ、し、失礼。姫さま、それがその……前回は皇太子殿下はお亡くなりになっていました……」

「……ええ、あの方のお手紙で、本来ならばそうだったと書いておりましたわ」

「それが、今は喜ばしい事に生きておいででしょうか？ だからその……」

「？ どういう事ですか？」

「その、殿下がない前回では、恋人同士のフリをしまして……」

「まあ、名案ね！」

「肩を寄せ合い、兵士の目を欺く為に唇を重ねる羽目に……」

「目的の為には仕方ありませんわ」

「ひ、姫さま?! しかし、それでは……」

「お国の為ですもの、上辺のキスぐらい些事ですわ。

それに皇太子殿下に貴方が遠慮する必要はありませんわよ?

お優しいあの方ならば、きつとわかって下さいます。

使い魔さんの事もかなり買っておいででしたし、だいじょうぶでしよう。さあ、そろそろ行きましょうか?」

どぎまぎする才人を余所に、アンリエッタは再びフードを深く被って屋根裏部屋の入り口の扉に手を掛けた。

その表情は明るく、希望に満ちている。

才人の知るウエールズを失い、政争に明け暮れ、未曾有の国難に当たっていた前回の彼女とは似ても似つかぬ表情であった。

年相応の生氣と華やかさに満ちあふれ、瞳は夜にも関わらず輝いている。

才人はそんな彼女を見ながら、せめてキスだけはなんとか回避しようとして胸に誓い屋根裏部屋を後にするのであった。



やけに雨音が耳に五月蠅い夜であった。

その、雨が降り出すほんの少し前での事。

才人とアンリエッタは『魅惑の妖精』亭を抜け出した後、兵士達の目をかいくぐって木賃宿に身を隠し

粗末な部屋に二人、他愛も無い話を ”前” と同じように交わっていた。

壁も屋根もあまり上等な宿ではないようで、外の様子がよく伝わってくる。

部屋は暗く薄汚れ、『魅惑の妖精』亭の屋根裏部屋よりも更に酷い有様であった。

そんな暗い部屋を仄かに灯すランプは、ベッドに腰掛けるアンリエッタと軋む椅子に腰掛ける才人を照らし出す。

「ねえ、使い魔さん。ルイズは元気？」

「はい、すごく。貴族として育ったあいつにとって、平民に混じっての生活は中々刺激的であるようです」

「あら。それはなんとも、羨ましいですわね」

「姫さま程ではないですが、気苦労もそれなりにあるようですけどもね」

「うふふ。その様子ですと、貴方が知る”前のわたくし”は相当愚痴を貴方に聞かせたようですわね」

部屋と同じように粗末なランプの炎が、ゆらりと揺れる。

照らし出されていたアンリエッタの顔に影が妖しく動き、少し悪戯っぽく笑うその表情は美しくも妖艶に見えた。

「ええ、かなり。」

王宮では”狐”のような連中が跋扈し、姫さまの女王としての資質を問う声が満ち溢れ、頼れる者はごく僅か。

信頼できる者に至っては、ルイズと銃士隊隊長のアニエスさんだけ、まったく女王になどなるのではなかったと

よく愚痴を漏らしておいででした」

「アニエスの事まで……て、今更ですわね。貴方は未来から召喚されたもの。」

ねえ、使い魔さん。お名前は？」

「才人と申します。ヒラガ・サイト。俺の国では姓が先に来るので、名はサイトです」

「サイト……変わった名前ですわね。」

ではサイトさん。こうして二人で居る時は貴方はわたくしの事をアンと呼んでください」

「わかりました。兵士達の前で ” 姫さま ” だなんて、すぐには  
れてしまいますからね」

才人はそう言って、ルイズにするように歯を見せて笑った。

屈託のないその笑顔にアンリエッタも微笑みを浮かべてまあ、と口  
に手を当てた。

ランプの炎が再びゆらりと揺れ、部屋の影を踊らせる。

芯の調節ネジが壊れているのか、どうにも炎が安定しないようだ。

「……本当、女王になどなるものではありませんわ」

「名君ほどそう思うものらしいですよ？」

「あら。お世辞でもうれしいわ。」

でも、ルイズが毎日送ってくれる報告書のお陰で、平民達の声や

考えていることはよくわかるけれど

その内容を見ているとわたくしが名君だなんてとても思えないですわ。

遠征費の捻出にしても、貴族達は協力的ではありませんし、どうしても増税に頼らざるを得ませんし。

そうなると平民達にも負担が……」

「遠征……やはり」今回も」アルビオン本土に攻め込むのですか？」

問いに、アンリエッタはじっと才人の顔を見つめた。

揺れるランプの炎は彼女の美しい瞳に光を照らし出す。

「……このまま本土防戦を続けては、いつか国力の差にトリスティン王国は押しつぶされますわ。

幸いアルビオンの主力艦隊は先日壊滅したばかり。攻め込むならば今しかありませんもの」

「外交で解決、と言うわけには行かないのでしょうね」

「ええ。条約を破って我が国に不意打ち同然に攻め込み、一国の女王を誘拐しようなどと企む国を相手に

今更外交など、誰が信じる事が出来るでしょう？

アルビオン政府は信頼どころか、一言の言葉すら信用出来ませんもの。

最低限の約束すら守らぬ相手に外交など、妄言も甚だしいですわ。貴族は領内を荒らすオークには言葉が通じないからこそ、杖を持つて当たるのです」

「……きつと、恨まれますよ。敵にも、味方にも」

「……それが女王の仕事です」

呻くような、アンリエッタの声。

年端もいかぬ女王は、苦しげに仕事だと答えた。

彼女以外にだれも代わってやれることのない、仕事。

トリステイン王国の王。

一度戦争を行えば幾千の兵士や貴族の命を机の上で散らせ、それを

恐れば今度は幾万の平民の命を机の上で失う仕事。

アンリエッタの頭の上に乗る冠は、それを強要する呪いの品であった。

才人も状況的に遠征は変えられぬと良く理解している。

しかし、 ”前” と違う今どうしても知りたい事があった。

アンリエッタが遠征についてどう考えているか。

もしかしたら、ウェールズの領地を取り戻す為の戦いを仕掛けようとしているのではないか。

もしそうであるならば、それは間違いだと伝えたかった。

避けられぬ戦だとしても、一人の女が一人の男の為に幾千の命を捧げるなど才人には許せるものではないからだ。

それ故、才人の言葉は更に幼い女王の心をえぐるように続く。

つめの甘い、暢気な普段の彼からは想像も付かない程鋭く。

「……………」 ”前” は、殿下を失った姫さまが、殿下の死体を使った誘拐事件をキツカケに復讐心に取り付かれての遠征でした」

「……貴方は、わたくしが殿下の為に遠征をしようとしていると？」

「俺が知るあなたの本質は、愛に生きる人でしたから。……」前  
”はその事実が一生あなたを苦しめていましたよ「

ジリ、とランプの炎が揺れた。

陰影濃く浮かぶ才人の寂しげな、それで居て懐かしむような表情に  
一瞬侮辱されたのかと怒りがこみ上げかけたアンリエッタは

胸の奥底が熱くなるかのような錯覚を覚えた。

才人の言葉は侮辱ではない。

心の底から、自分を心配してくれての物なのだと理解したからだ。

アンリエッタはこみ上げてくる不思議な気持ち之余所に、胸の奥に  
ある感情を一つ一つ整理していく。

ウェールズの為の戦。

その言葉を自問するために。

しかし。



彼女の口から出た言葉は、意外なものであった。

「ねえ、サイトさん。貴方は剣をその手に戦うのでしょうか？」

「え？ ええ、そうです。俺は魔法が使いません」

「ではその剣で、人を殺めた事がありますか？」

アンリエッタの質問に、才人は口を堅く結んで目を閉じた。

”前”の人生の中で殺めた者達を思い起こす為に。

やがてその目はゆっくりと開かれ、揺れるランプを映し出す黒瞳は真っ直ぐにアンリエッタの姿を映し出す。

「あります。

戦いの最中で、不意打ちの応撃で、こちらから不意打ちで、助からぬ者への慈悲で、色んな場所で幾人も」

「そう……もし、よろしかったら教えて下さいまし。

その方々の大切な人々の恨みを、貴方はどう受け止めましたか？」

アンリエッタは才人を見据えて、真剣な面持ちで質問を重ねた。

才人は息苦しそうに息を一つ吐いて遙か昔、いつか答えを出した物を胸の内に探る。

その孔だらけになった記憶に在って、何一つ消えなかった苦々しい思い出と共に。

「俺が殺めた者を想う人々の恨みは、そのまま受け止めました。

罵声をじつと浴び、殴られるままに殴られ、しかし命までは差し出してやらず卑怯にも幸せに愛する人と生きてゆきました」

「それが、奪った者の答えなのですか？」

わたくしは、机の上で散る幾千の命にそうやって報いを受ければよいのですか？」

「……いいえ。奪った者に答えなど、そもそも用意されてはいませんでした。」

答えは奪われた者にのみ用意され、奪った者には終わらぬ後悔と懺悔が待つのみです」

才人が口にした答えに、アンリエッタは目を伏せて膝の上にある己の手を見つめた。

奪った者に答えなど、用意されてはいない。

当たり前だ。

理由はどうあれ、大切な人を永遠に奪われた人々の怒りや悲しみを注ぐ手段などありはしないからだ。

そして自分が今下している決断は、そんな人々を大量に生み出して行くだろう。

しかし、決断を覆してもそういった人々は増えていくのは目に見える。

タルブ地方で家を焼かれた人々、戦死した領主の家族。

自分はそういった人々の怒りや悲しみも、同時に背負っているからだ。

アンリエッタは無言の内、己の頭に乗る王冠の重みに改めて戦慄する。

王とは、そういった人々の想いを背負う者なのだ。

王とは、そういった人々を生み出していく者なのだ。

救いのない、暗黒の夜道のようなその運命にアンリエッタは更に想いを馳せた。

そんなわたくしにとって、唯一の光。

もしあの方を失いでもしたら、きっと……

そこまで考えた所で、アンリエッタは顔を上げて再び才人を真っ直ぐに見つめた。

先程の才人の問いに答える為に。

王として、奪う者として、一人の女として。

「……」  
「前」  
のわたくしは復讐に取り付かれ、遠征を行ったの

かもしれません。

今だつて、あの方の事と遠征を切り離して考えているとも言いきれませんが。

しかしたとえそうであっても、我が国は現実に先程申し上げた通りの状況です。

私情は私情。遠征は国の事情を鑑みた、女王としてのわたくしの判断なのです。

それに ” 今の ” わたくしは、貴方が知るわたくしではありませんわ

「……失礼しました」

「いいのですよ。 ” 今回 ” は『恋するアンリエッタのわがままで行われた遠征』だと言われるでしょう。

うふふ、たとえ真実がどうであれ、わたくしは暗愚な王としてそしられる運命なのでしょうね」

「姫さま……」

「今はアン、でしょうか？ サイトさん。

気にしないでください。わたくしは大丈夫。

なんと说着ても、 ” 今回 ” は大切な半身とも言える、ウエールズ様が生きておいでですもの。

どんなに辛い事があるうと、耐えて見せますわ」

アンリエッタはそう言って、ニッコリと笑って見せた。

しかし。

気丈に笑う彼女の心を映すかのようにジリジリとランプの炎は大きく揺れた。

才人がそんな、どこか悲痛な笑顔を浮かべるアンリエッタに何かを伝えようとした時である。

ぽつ、ぽつ、と屋根の方から何かが落ちてくるような音がした。

どうやら雨が降り始めたらしい。

「……雨、降ってきたようですね」

「ええ。      ねえ、サイトさん。ちょっと、こっちにいらして？」

先程の会話からどこかバツの悪さを覚えていた才人は、雨をキツカケに話題をかえたのであったが

アンリエッタの言葉に再び胸をざわめかせた。

彼女がこちらへ、と示した手は同じベッドの上だったからだ。

「あの、えっと……」

「どうかしまして？ ふふ、大丈夫。襲ったりはいたしませんわ」

「い、いえ！ そんなつもりは……」

才人は慌てて彼女の隣に移動する。

そんな才人の手をゆっくりとアンリエッタは取り、そのまま彼の手を見つめたのであった。

「……………姫さま？」

「じゅめんなさい」

「え？」

「先日の誘拐事件の事ですね。操られていたとはいえ、サイトさんにわたたくし酷いことを……………」

「ああ、そんな事でしたか。大丈夫、俺、こう見えてもすごく丈夫ですから」

「……………雨の音を聞いて、今思い出したのです」

「もの凄く忙しい毎日ですからね、仕方ないですよ」

「……………仕方ない、ですか。誰かを傷つけて、仕方ない、で済ませているのでしょうか？」



アンリエッタの呟くような台詞に才人はぎょっとする。

どうやら先程の話を引きずっているらしい。

才人は握られた手を握り返しながら、残る手をアンリエッタの肩に置き彼女の目を真っ直ぐに見つめた。

「そのお気持ちを忘れなければいいのです。

誰かを傷つけてしまったのなら、出来ることをしてそして謝ればいいじゃないですか。

過ちを犯さない人間なんていません。

失政を一度も犯さなかった王だっていません。

俺の場合は俺自身、姫さまを恨んだりもしていませんし何も問題  
ないですよ」

「しかし、死んだ衛士達は……」

「あれは姫さまではなく、アルビオンのメイジがやったことです」

アンリエッタは才人の言葉に暫く黙り込んでしまった。

やがてふつと自嘲的な笑みを浮かべて握っていた才人の手を離し、今度は肩に添えられている手にその手を当てた。

「……ごめんなさい。わたくし、卑怯な女ですわね。

きつと誰かに慰めて 貴女は悪くないって言うて欲しかったのですわ」

「いいんですよ」

「え？」

「俺やルイズ、アニエスさんが姫さまについています。

それに ” 今回 ” はウエールズ皇太子もいらつしゃいます。皆、姫さまの支えとなりたいのです。

愚痴ぐらい、俺達の前では気軽に吐き出せばいいじゃないですか」

才人はそう言いながら、先程のようにニカッと笑ってみせた。

そんな屈託無く笑う親友の使い魔に、アンリエッタは何かの糸が切れたのかふにやりと顔を歪めて

才人の胸に王冠の乗っていない頭を投げ出してしまふ。

才人はルイズにいつかしたように、そんな彼女の頭を優しく撫でてやった。

やがて狭く粗末な部屋に響くのは、誰か鼻をすする音。

先程から降り始めた雨は、まるで声にならぬ少女の泣き声を外へ漏れぬようするかのように強く激しく屋根を打ち付け始めている。

その夜はやけに雨音が耳に五月蠅い夜であった。

トリステイン王国の西部海岸には、ダングルテールという地方がある。

アルビオン訛りではアングル地方と呼ばれるこの辺境は、つい百年前まではアルビオンからの入植者による自治区であった地域だ。

しかし現在では見る影もなく、ぼろぼろに朽ちかけた漁師の村ばかり

りが点在しているにすぎない。

かつての繁栄を色濃く残しているものは、入植者を祖とする住人達の独立独歩の気風のみである。

土地は痩せており農作物の収穫は多くはない。

ここで暮らす者達の命を繋いでいるのは漁業であり、僅かばかりの魚を捕りながらなんとか餓死者を出さずに冬を越す有様だ。

通常このような土地では、領主が貴重な財産である ” 平民 ” 達が余所へと流れていかぬよう手を打つのが常である。

しかしこの地方の領主は暗愚なのか、それとも他に理由があるのか何も手を施さず領地が荒れるがままとなっていた。

トリステインに限らず貴族と平民の間には確たる身分の差があり、平民を蔑む貴族も少なくない。

しかし一方では両者が協力して産業に当たること珍しくはない。

漁業も例外でなく、漁師達は通常ならばメイジによって作られた船や漁具を使つて漁に出る。

夜海面を強く明るく照らす魔具や、自動的に風を捉える帆やマストなど備えた漁船。

魚を大量に引き寄せる秘薬入りの撒き餌や、魚群を探し出す魔法の地図。

どれも普通の平民には一生かけて稼いでも、買うことの出来ないような代物ばかりだ。

そんな高級品を領主は漁業に当たる領民に漁に出る許可証と共に貸し与え、不漁が続くなら対策に自ら奔走する。

嵐にあった船が戻らぬ場合は先頭を切って捜索に当たる領主も珍しくはない。

なぜならば、領地に住まう平民こそが税收を生み出し、ひいては領主の繁栄に直結しているからだ。

王宮に勤めるメイジは才覚一つでどこまでも昇って行ける為、平民を蔑む傾向が強くはあるが

逆に地方に領地を持つ貴族で平民を強く蔑む者は、実のところそれ程多くは無かったりする。

無論、比較の話であり身分差意識は大概の貴族には大なり小なりは抱いている。

とは言え、こういった領地を持つ貴族にとっては税の収支はそれだけ重要であり、平民を無闇に搾取するような統治は

むしろ己の無能をさらけ出し、恥であると考える事が一般的であった。

しかしここダングルテール地方はそのような一般的な領主による統治は行われず、荒れ放題であった。

漁師達はボロボロになった粗末な船を漕ぎ出し、孔だらけの網を海に投げ入れ、僅かばかりの収穫に一喜一憂する日々を送る。

時には海魔に怯え、時にはオークの襲撃で村一つ丸ごと略奪される場合もある。

酷い時には領主に頼るのではなく、有志を募って自分達でオーク退治を行う有様だ。

そんなダンゲルテール地方の住人達も、二十年前まではそれでもよりかは”まし”な生活を送っていた。

”ダンゲルテールの虐殺”。

公式には疫病による住民の全滅とされている事件の、別の呼び名である。

この事件によりこの地方の住人の殆どは秘密裏に、そして無差別に殺されてしまったのだ。

その理由はブリミル教総本山のあるロマリア連合皇国で起きた宗教改革、「実践教義」を信仰する新教徒にあった。

当時のトリステイン王国はロマリア連合皇国との密約により、この地方に多く住む新教徒達を虐殺し村々を燃やし尽くしたのだ。

無論如何に為政者である貴族達の権力が強大であるとはいえ、このような暴挙が許される筈はない。

表向きには疫病の蔓延による焼却処分として記録されている。

眞実を知る者の多くは炎に焼かれ、生き残った僅かな者達も痩せた土地で目立たぬように暮らす他なかった。

余所の土地に移ろうにも、疫病の地の出身と言ふことでもそも受けて入れて貰えない上に、普段から領主の目が光っているからだ。

そう、この地はまるで巨大な監獄であった。

眞実を知る住人達は何処へも逃げる事もできず、領主の目に怯え、過去に憎悪し、明日をも見えぬ生活に絶望しながら生きてゆく地。

それが現在のダンゲルテール地方の姿である。

アンリエッタが最近設立した近衛隊『銃士隊』隊長であるアニエス・シュヴァリエ・ド・ミランは、そんなダンゲルテール地方の生まれだ。

どういった経緯で監獄を抜け出し近衛隊隊長になったのかは不明だが、『メイジ殺し』と呼ばれるその戦闘技量は確かな物であった。

今年で二十三才になる彼女は、短く切った金髪と薄いグリーンの瞳、そして何よりもその鋭い眼光と凜々しい佇まいが印象的である。

そんな元平民である彼女はアンリエッタの ” 狐狩り ” の夜、その人生の中で一つの節目を迎えていた。

トリステインの地下に秘密裏に掘られた地下道にて、アニエスは一人自身の荒い息づかいを耳に苦悶する。

はあはあと細い呼吸音が暗い地下道内に反響し、辺りには血と何かが焼けたかのような臭い。

ガシャンと音を立てて膝を折ったアニエスの体には無数の傷が刻まれており、着込んだ鎖帷子が熱く焼け彼女の白い肢体を焼いていた。息も荒く四つ這いになり、呻く彼女の傍らには男の死体。

トリステイン王国高等法院の長であり、”ダングルテールの虐殺”の黒幕の一人であるリツシユモン卿の変わり果てた姿だ。

彼こそアンリエッタの”狐狩り”の獲物であり、アルビオンと通じ女王の誘拐事件を引き起こした張本人の一人である。

今宵、アンリエッタが張り巡らせた罠にかかったリツシユモンは本性を現し、隙を突いてこの地下道へ逃げ込んだ。

そしてアニエスは一人、地下道でリツシユモンを待ち構えて復讐を遂げてみせたのである。

憎い仇の血でその手を染めた彼女の胸に去来するのは、復讐の歓喜ではなく苦い罪悪感であった。

絶大な忠誠の下、アンリエッタの手足となり誘拐事件の内偵を進めていた彼女だったが、唯一主に不義を働いたのが

この地下道の存在であったからだ。

つまり彼女はここで復讐を遂げる為、あえて地下道の存在をアンリエッタに報告しなかったのだ。



全てはこの瞬間の為に。

そして、彼女は傷つきながらも本懐を遂げた。

アニエスは暗い地下道の中直ぐ側の死体に目をやると、ぺっと血混じりの唾を吐き捨て再び立ち上がる。

同時に激痛が体中を襲い、思わず声が漏れた。

「くそ、こんな所で死んでたまるか。まだだ。まだ、残っている。」

2584

声は地下道に反響し、まるで彼女の心の闇に吸い込まれるようでもあった。

足がぶるぶると震え、体中が血まみれだ。

歩を進める足のかしゃん、と鳴る拍車の音が耳につるさい。

息が遠く、遠くなってゆく。

前がよく見えないのは暗い地下道の為か、血が足りない為か。

死んでたまるか。

アニエスの脳裏に赤い光景がよぎった。

燃える家。

燃える畑。

燃える男。

燃える女。

燃える友人。

全てが燃えている。

村が、畑が、家が、人が、故郷が炎に沈んでいく。

脳裏に残る炎はそのまま復讐の炎となり、彼女を内側から焼いた。

かしゅん、と拍車が鳴る。

死んでたまるか。

死んで、たまるか！

まだ、残っている！

私のすべてを焼いた、あいつらが残っている！

かしゅん、と拍車が鳴る。

殺す。

必ず殺す！

憎悪は生へと渴望となり、彼女の足を進めさせた。

その度にかしゅん、と拍車が鳴る。

音はまるで、彼女を縛る枷が鳴るようでもあった。

しかし。

傷は深く激痛は彼女の憎悪をかき立てはしたものの、それ以上に意識を繋ぐ気力と体力を奪っていた。

やがてアニエスは力尽き、再びガシャンと鎧が鎖帷子と擦れる音をたてて膝を折らせる。

くそ、こんな所で……死んで……

意識が遠のく。

足は、腕が、まぶたさえ思うように動かせない。

「ふむ。どうやら私は先を越されたらしいな」

男の声。

敵か？

反射的に銃へ手を伸ばそうとしたが、忠実であるはずのその手はピクリとも動かなかった。

アニエスに出来ることと言えば、暗闇の向こうにいつの間にか現れた人影をうっすらと確認する事だけである。

男は長身。

銀の仮面。

…… 隻腕。

何、者、だ？

そう口にしようとして、彼女は意識を手放してしまった。

アニエスが次に目を開いたのは、隊舎の自室であった。

傷ついた体はすっかり治っておりベットの脇で看病をしていた、最近入隊したばかりの見習いに状況を聞くと

なんでもチクトンネ街の排水溝に血まみれで倒れていた所を、通りがかった市民に発見されたそうだ。

何故？ と一瞬疑問に想ったが、意識を失う寸前の記憶を掘り起こし恐らくは最後に見た人物が助けてくれたのだらうとアニエスは考えた。

あの男は一体誰だったのだらう？

あの地下道の事は報告していなかった。

てつきり、リッシュモンの手の者だとばかり思ったが……

そういえば先を越されたと言っていたな。

もしかして私と同じ地の出身の者か？

いや、しかし……

「隊長？ まだ、どこか傷の具合が悪いのですか？ 医療メイジの方を呼んでみましょうか？」

「ん？ ああ、その必要はない。すこし、考え事をしていただけだ」

「そうでしたか」

「それよりエトマール。お前、訓練は良いのか？」

「ミシエル副隊長の命令で僕ら訓練兵が交代で隊長の看病をしているので大丈夫です。」

それに、もうすぐ交代がやって来ますし」

「そうか」

「僕、隊長が意識を取り戻したとミシエル副隊長に報告してきます」

「ああ、少し待て。水を一杯、飲ませてくれないか？」

ア二エスはベッドから上体を起こし、看病をしていた見習い兵にテーブルの上にあった水差しを指さした。

エトマールと呼ばれた見習いは、ハイと返事をして水差しから木製のカップに水をなみなみと注ぎ、注意深くア二エスに手渡す。

病み上がりの人間が飲むには多すぎる水が入ったカップを見て、ア二エスは少し苦笑いを浮かべたが何も言わず一気に煽った。

水は美味であり、彼女に人心地つかせ同時にやっと生の実感を覚えるのであった。

今度こそ副隊長の下に報告をするため、部屋を出て行く見習いの背を眺めながらア二エスは呟く。

「これで、一つ。だが、終わりではない。始まりなのだ」

つばやきは、暗い炎となり胸を焼いた。

炎の中には闇の中で見つめた、男の無念の死相。

夢にまで見たその顔は、意外にも酷く後味の悪いワインのようであった。

ワインはアニエスの心の中、野焼きの炎の様に広がる。

なぜか胸が悪くなってしまった彼女は、再び水を飲もうと手にしていたカップを煽り、すぐに先程一気に飲んでしまったのだと思いついた。

アニエスは空になったカップを見つめながら、水でなく酒を次ぐように言えば良かったと後悔するのであった。

それから数日後。

主であるアンリエッタと共に、お忍びで『魅惑の妖精』亭に訪れた彼女は ” 狐狩り ” の夜に知り合った少女と再会し

妙にソワソワする主君と何処か間の抜けた、ひ弱そうな少年が居心地の悪そうに頭をかく姿を目にする。

その出会いは彼女の人生にとって一つの区切りとなるのだが、当の本人がそうであると気が付くのは今回も遙か未来

いくつかの区切りをつけ続け、 ” 奪われた者 ” として答えを出した後となる。



果たしてそれまでは、ダンゲルテールの炎は彼女を焼き続けるのだ。

王宮からトリステイン魔法学院にアルビオン侵攻作戦の発布がなされたのは、夏休みも終わり二ヶ月が過ぎた頃である。

同盟中の帝政ゲルマニアはこれに同調、ガリア王国は中立声明を宣言し世はいよいよ本格的な戦争へと動き始めていた。

間諜の任務を終え、『魅惑の妖精』亭から学院に戻り表面上は普段と変わらない生活を送っていたルイズと才人は

発布から一月も経ったある日、”予定通り” やって来たルイズの姉であるエレオノールを出迎えていたのであった。

つまり、ルイズは侵攻作戦へ参加の旨を実家に手紙で報告し、それ

を知った父親であるヴァリエール公爵から

軍に参加するのはまかり成らぬと強く手紙で反対され、無視していたらルイズの姉が彼女を実家へと連れ戻すべく

魔法学院にやって来たというわけである。

勿論、この事は事前にキュルケやタバサを交えてどう対応するかを相談していたのだが、いくつか悩ましい問題が残り

ルイズと才人は頭を抱えていた。

一つ、ルイズの虚無の事を家族に話しても良いか。

一つ、”以前”よりも親密になっている、才人の事をどう報告するか。

前者はアンリエッタに口止めされている事もあり、又侵攻作戦前でもあるのでこれは満場一致で黙秘することとなったのだが

後者はルイズにとって、非常に重要な問題でありしかしキュルケやタバサには到底相談出来ることではなかったのだ。

無論、相変わらず”護衛”と称して広すぎるルイズのベッドに潜り込んでくるタバサの隙を突いて才人と二人で

どうすべきか相談したルイズだったが、結局時期も時期でありまた才人が武功も名声も得ていない今は恋人としての紹介は

辞めておこうということを決着がついた。

もちろん、ルイズはそのことについては不満しきりではあったが。

そして、その日がやってくる。

非常に気位の高いエレオノールは朝早く学院にやって来るや否や、ルイズを捕まえて従者用の馬車を用意させ

良くできた従者を演じる才人と身の回りの世話をさせるメイドとして、” たまたま ” その場にいたシエスタを

強引に馬車に押し込み、自身はルイズと共に乗ってきた二頭立ての豪華な馬車に乗り込んで、強い口調でお説教を始めたのであった。

エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。

ヴァリエール公爵家三姉妹の長女であり、ルイズが苦手とする人物の一人。

今年二十七才になる彼女は、モデルのような長身で父親譲りの金髪とルイズと同じ鳶色の瞳の持ち主だ。

ちなみに胸も、ルイズと同じくスッキリとしている。

美しい顔立ちは高貴な印象を抱かせるのだが、ルイズよりも更にきつくつり上がった目が彼女の気位の高さを物語っていた。

実際、そのきつい性格が仇となり先日婚約者から「もう無理」という言葉と共に、婚約解消を言い渡されてしまった程である。

馬車が向かう先は勿論、ルイズの実家があるヴァリエール領。

道中ヴァリエール公爵家三姉妹の次女であり、姉と妹とは似ても似つかぬ程穏やかな性格のカトレアと合流した一行は

彼女が所有する大きな馬車に乗り換えての移動となり、結局公爵家に到着したのは夜もふけてからであった。

トリスタニアの王城もかくやと思わせる程立派なヴァリエール城では、留守にしている公爵に代わり公爵夫人が姉妹を出迎え

才人とシエスタには ”前” と同じように納屋のような部屋をあてがわれ、その夜これまた ”前” と同じようにシエスタが酒を飲み

性格を豹変させ、従者として扱われている才人の様子を見に来たルイズと一悶着を起こしてしまう逗留となるのであった。

ここまでは才人にとっては ”予定通り” である。

もつとも、シエスタとルイズの喧嘩などは予定通りに行かせたと言っよりも、そんな事があるとはすっかり忘れてしまっていて

何も対策を行わなかったただけであったが。

それから日付も変わり。

一見、才人の知る未来へ向かい順調に進んでいたルイズの里帰りは、意外な方向へと向かい始める。

早朝、アルビオン侵攻に際して軍団編成の指令を王都で受けたヴァリエール公爵が城へ帰ってきた。

公爵は非常にご機嫌ナナメと言った様子で、何ヶ月ぶりかの家族との朝食の席にて愚痴を口にしていた時だ。

侵攻作戦に反対する公爵がルイズに自宅謹慎を申しつけたのだが、これにルイズは ”前” とは違い激しく反発したのである。

国力の差、兵力の差、なにより娘を戦場に送りたくはないという親心を理由としての公爵の言ではあったが

作戦の結果を知るルイズには、例えそれが正論であっても受け入れる事は到底出来るものではなかったのだ。

何より。

ワルドの一件で自棄になっていると思われ、婿をすぐ取るよう言われた事が彼女の矜持を傷つけた。

激昂したルイズはテーブルを叩きながら立ち上がり、目を白黒させる家族の前で如何に自分の使い魔が有能であるかを口にする。

本当は自分は虚無であること、強力なメイジとなった事を言いたかった。

しかし、アンリエッタの言いつけもあり、それを口にする事はできない。

必然、才人と一緒ならば戦場に出ても問題ないといった論調となつていく。

曰く、才人の力は万軍に匹敵する。

曰く、才人にはスクウェアメイズが束になつても敵わない。

曰く、アレに敵う者は人おろかドラゴンでさえも、このハルケギニアには存在しないだろう。

ルイズはそれはもう、才人を褒めた。

褒めて褒めて、褒めちぎった。

恋人としての色眼鏡もあつたし、実際に才人と過ごした冒険の思い出もある。

怒りで頭に血が上っていたこともある。

更に言うならば、演説する自分の言葉に酔つてしまい、燻っていた城に到着してからの才人の扱いへの不満も相まって

周囲が見えなくなつてしまつていたこともある。

何よりも、恋人として紹介をしたいが出来ない反動としての行動であつた。

早い話が、” やらかした ” という奴である。

制止するエレオノール、片眉を上げて黙って話を聞いていた公爵夫

人とカトレア、目を白黒させる公爵を余所に

ルイズの使い魔を讃える演説は更に続き、暫くして我を取り戻したルイズがその場の空気に気付いてハタと口をつぐんだ。

皆、奇異な目で自分を見ている。

家族の、使用人達の視線が痛い。

感じ取れる感情の色は、同情、驚愕、心配。

朝の穏やかで気持ちよい日差しが朝食をとっていたサロンに満ちて、静寂が場を支配していた。

が、ルイズにはその心地よい雰囲気かいたたまれないものへと変わってしまった。いた。

時間にしてほんの少しの間を置いた後であろうか。

うおほん、と公爵が取りなすように大げさに咳払いを一つし、それを合図にルイズはすこすこと自分の席に腰を降ろす。

同時にエレオノールが激しくルイズをなじり始めたが、意外にもそれを制止したのは公爵その人であった。

公爵は席を立ち、十メートル以上もあるテーブルの脇をゆっくりと歩いて娘の下へと向かう。

バツの悪そうに、それでいて不満げな表情を浮かべているルイズを公爵は優しく抱きしめてから、ニッコリと笑いかけた。



公爵の笑みにルイズは自分の想いが父に届いたと思わず感激して、花のような満面の笑みを浮かべる。

やった！

サイトの事が、父さまに伝わったんだわ！

この様子ならばいずれきつと、サイトとの交際……ううん、結婚だって許してくれる！

ニコニコと笑いかけてくる父親に、ルイズはとても嬉しくなりぎゅ、と父親を抱きしめ返してその胸に頭を埋めた。

公爵はそんなルイズの頭を優しく愛しそうに撫でながら、私の小さなルイズがそこまで言うならば、と口にして……

「で、俺は今からお義父……公爵の部下とこうして決闘する羽目になってるわけか」

「う、ごめん……」

「まったく、なんの為に前にも未来の事話したと思ってるんだよ……」

……」

才人はため息を一つついて、バツが悪そうに視線を逸らすルイズから公爵の前で跪いているメイジ ” 達 ” へと視線を移した。

一人ではない。

綺麗に四角の陣形を組んでいる、公爵子飼いの二個中隊である。

妄言としか思えない娘の言を真に受けて、本当に軍を相手に決闘させる公爵も大概だなと、才人はごちた。

中隊を構成するのは全てメイジであり、その数は百五十八名。

丁度、公爵家が擁する常備軍の直属士官の数でもある。

トリステイン王国の軍制はその身分によって一応の基本構成が決められており、諸侯はそれに沿った常備軍を編成する義務があった。

とは言っても、すべての諸侯が平時は金食い虫でしかない常備軍を維持できるわけではない。

必然、有事に兵となる傭兵や義勇兵、民兵を除いたトリステイン貴族による士官を中心とした構成となる。

特に公爵ともなると軍団クラスの維持・編成能力を求められる為、平時から擁するメイジの数も多くなるのであった。

無論、人口の違う他国とはその編成数はかなり違ってくるのであるが、王国の一般的な軍とは以下のようになる。

まず、魔法の使えない兵士の分隊が五名。

五名からなる分隊が四つ集まり、それをメイジの指揮官が一人ついて小隊となる。

二十一名からなる小隊が四つ集まると中隊となり、中隊長としてメイジが一人。

これに副官のメイジと衛生兵兼軍医として水メイジが一人。

更に八十七名の中隊が四つ集まると大隊となり、そこそこの家柄の貴族が隊を率いることとなる。

三百七十一名からなる大隊は、指揮官として最も家柄の良い貴族を筆頭に副官とこの貴族専従の麾下支援小隊が配属されるのだ。

トリステイン王国の貴族であるならば、軍属となった場合あるいは有事には殆どがこの組織のどこかに配置される。

そして、大隊より先は王族や一部の高級貴族によって編成されることとなる。

大隊が四つ集まると連隊となり、辺境泊や侯爵クラスがこれを率いる。

規定兵数は千八百五十八名。

メイジの数は最低でも百五十八名は必要となり、指揮官である貴族には副官、事務官、専従の麾下支援中隊が配属される。

更に王家の者や元帥、公爵ともなればこの連隊を五つ集めた軍団を編成する事が出来、副官が一名、事務官三名、参謀が五名配置されるのだ。

実際には兵科により配置されるメイジの数や系統、身分などはかなり変わるのだが、以上がトリステインの軍制の基本であった。

これはトリステイン王国正規軍の話であり、戦にもなれば同数の補給部隊である輜重隊が編成され数の上では二倍にふくれあがる。

又、傭兵や志願してきた義勇兵が正規軍に編入される為、あくまでも数字は基準ではない。

さて。

才人の目の前の二個中隊は、果たして全てメイジからなる部隊であった。

彼らは別に一兵卒に甘んじているわけではない。

常備軍として魔法の使えない兵士や傭兵を常に雇うわけには行かない諸侯は、有事には指揮官となるメイジ達を

平時には城を守る兵として、あるいは己の子飼いの兵として編成し、オーク討伐や治安維持部隊として利用しているのだ。

軍団を編成する必要のある公爵ともなると、その数は八百にも上る。

無論、平時から全てのメイジを兵として扱うわけにはいかない。

大多数の常備軍のメイジ達は、普段は主の領内の各地に散らばり拝領した土地の統治を行っているのだ。

かといって彼らを兵として全く手元に置かないわけにはいかない。

有事にすぐに対応できる部隊を用意しておくのは当たり前前の話でもあった。

必然、戦闘に特化した精鋭を手元に置くこととなる。

そういったメイジ達が、才人の目の前にいる二個中隊なのだ。

才人の視線の先では公爵の指示が終わったのだろう、やたら気合いの入った答礼する声が聞こえ、ザッと音を揃え

一糸乱れぬ動きで跪いていた者達が立ち上がり、遠目にもわかるほど血走った視線を向けてきた。

殺気が二十マイルも離れた才人とルイズの所にまでビリビリと伝わってくる。

どうすんだよ、あれ。

あの人たち、みんな俺を殺る気マンマンじゃねえか。

才人はじっとりとルイズを睨み、それから練兵場の脇に作られた閑

兵用の櫓やぐらの方を見上げた。

櫓からは公爵夫人とルイズの二人の姉、そしてシエスタがこちらに視線を投げかけている。

何故シエスタがヴァリエール家の者と櫓に居るのかというと、朝、慣れぬ昨夜の飲酒で二日酔いになった彼女が

何度目かの洗顔をしようと邸内を歩いていた所、突然エレオノールに呼び止められ、近くで見学しては危ないから特別にと

練兵場の閲兵櫓に連れて行かれ、そのまま給仕をさせられていたからであつた。

最初は才人やルイズを交えて、ここで何か素敵な催し物でもやるのかしら？ と笑顔であつた彼女だったがやがて物々しい雰囲気となり

兵士の殺気がこもつた声に怯え始め、対峙する才人を見つけて今では涙をうかべている。

才人はそんなシエスタに同情しながらも、すべて自分に向けられているメイジ達の敵意に肩を落としてつつ

陣を組むあちらと比べてやけに寂しい自陣を見渡した。

何も、無い。

当然といえば当然だが、味方の兵士一人すらいない。

只一つ、才人の後方にいつも魔法の的にされている人形が一つ据え

られて、この日ばかりはルイズの着物が着せられていた。

決闘のルールは単純明快。

この人形をルイズに見立て、眼前の二個中隊の攻撃から見事守って見せよとの事であった。

もつとも、相手は人形ではなく、主君の娘をたぶらかしたと思われる才人を殲滅対象として捉えているようだが。

才人は肩を落としたまま人形から隣にいるルイズに視線を移した。

何も語らなかったが、勘弁してくれよ、とその目で語りかける。

ルイズはそんな才人の目を見てたはは、と引きつった笑いを浮かべた。

「ご、ごめんね？ でも……でも！ 私、がまんできなかったのよ。わかって……ほしいな？」

「かわいい口調で甘えてもダメ」

「う……でも！ あんたなら、あのくらいの人数何でもないでしょ？」

「殺す訳にはいかねえだろ。オークの群れじゃないんだぞ？ 怪我させないで打ち負かすってすっげえ難しいんだぞ？」

「う……」

「まったく。……あつちに水メイジもいるな。なあ、ルイズ。公爵の部下にスクウエアの水メイジは居ないよな？」

「え？ えっと、スクウエアメイジなんて、王軍の精鋭にもそういないわよ。」

「たしか……父さまの軍医もやってる水メイジはトライアングルのメイジで、他の衛生メイジはライン位だったと思う」

「そか。なら、あまり派手な怪我はさせらんねえな。そら、そろそろ離れて。あつちはしびれを切らしてるぜ？」

「……きをつけてね？」

「心配いらねえよ。いざとなったら ”前” みたいに前かつさ  
らって逃げるから、杖とか身につけていてくれよ？」



才人の言葉に、ルイズは頬を染めた。

なんだか、自分が囚われのお姫様で才人がここから連れ出してくれる、といった類の妄想が頭によぎり

それもいいわねとつい考えてしまったからだ。

「ルイズ！ そろそろ始めるぞ！ そこから早く離れて早くこっちに来なさい」

いつの間に練兵場から移動したのか、公爵が夫人らと共に閲兵櫓からルイズに声をかけた。

遠目にもルイズが才人に随分執心している様子が公爵に伝わったように、その声は苛ついた物であった。

急かされ慌てて、しかし名残惜しそうに才人を見ながら櫓の方へと走り去るルイズ。

……かわいい。

才人はそんな彼女には珍しい、しおらしいその様子に思わず頬が緩んだ。

だが、ルイズの後ろ姿を見送りながら閲兵櫓にいる公爵の顔を確認するや、緩んだ頬は引きつり笑いになってしまう。

激しい敵意に満ちた目。

苦虫を何十も噛みつぶしたような表情。

食いしばった歯が口の端から見えている。

それは、愛しい娘の心をたぶらかした、憎き馬野骨に対する父親の憎悪の表情であった。

才人の背中に怖気が走る。

あの顔は、本気で怒っている顔だ。

うつつ、心証良くなるまで目立たないようにしたかったんだがなあ。

才人はルイズにプロポーズし、両親の元へ結婚の許可を貰いに行つた日のことを思い出して暗澹とした気持ちになってしまった。

孔だらけの記憶に残る、辛い一夜。

三日三晩怒り狂った公爵に追い回され、その間にルイズやカトレア、エレオノールに説得された夫人の取りなしでやっと認めて貰えた日。

あの日も公爵はあんな顔していたな、と才人はぼんやり考えながら知らず落とした肩を更に落とし、ため息をつくのであった。

「双方用意はいいな？　では、これより始めよ！」

肩を落とす才人の様子を遠くから確認したのか、公爵は今更後悔しても遅い、決して許さぬとばかりの口調で

娘の使い魔の”力試し”の合図を宣言した。

同時に、ザツ！と規則正しい軍靴の音を立て殺気立った二個中隊は閲兵櫓の公爵から才人の方へ向きを変え

杖を掲げて一斉に魔法の詠唱を始める。

次に後方で指揮をとる隊長の号令の下、長く横に伸びた陣から一步、火球を作り出していたメイジ達が何十も陣の先頭に進み出た。

才人はと言うと、ゆっくりと背にしたデルフを抜いて左手に持ち、右足を半歩下げて半身に構え、困ったようにメイジ達と対峙している。

双方の距離は二十マイル程。

最初に攻撃を仕掛けたのは、メイジ達だった。

火球を作り出していたメイジ達が、隊長の号令で一斉に才人に向け

”ファイアー・ボール” を放ったのだ。

何十もの火球は、その一つ一つが人一人焼き殺すには十分な威力が込められており、まるで吸い寄せられるかのように只一点

左手で片刃の大剣を持ち、情けない表情を浮かべて茫洋と立つ才人へと殺到してゆく。

炎達は次々と互いを押し合い、あるいは重なって膨れ、主君の愛娘をたぶらかした愚かな平民を焼き尽くす筈であった。

轟、と炎が燃え広がるかのような音と共に、才人が立っていた場所に大きな火炎が渦巻く。

閲兵櫓に居たシエスタが小さく悲鳴を上げ、釣られてエレオノールとカトレアは眉をひそめた。

公爵は最前列で冷たくその光景を眺め、ふん、と鼻を鳴らす。

隣に座る公爵夫人はちらと満足げな夫を見やって少しだけ眉根を寄せた。

次に夫人がその視線を動かした先は、憐れな平民ではなく娘のルイズであった。

一番下の、わがままで泣き虫である末娘がさぞ悲しんでいるのだろうと考えたからだ。

だが当のルイズは、意外にもあれほど入れ込んでいた使い魔が消し炭になったにも関わらず、無表情であった。

おや？ と感じたその時。

夫人の脳裏に、ピリピリと何かが瞬く。

どういう、ことかしら？

あれほど声高に誇っていた己の使い魔が、あれほどの炎に包まれ死んでしまったというのに。

なのに、この子は……

そこまで考えて、脳裏に瞬く感触がいつか幾度も感じた物であると夫人は思い出した。

それは、戦いの記憶。

決して油断してはならぬと己にささやきかけてくる、一流の戦士だけが持ち得る予感。

まさか！

そう思わず口に出しかけ、かつて、そして今もトリスティンで最も強いメイジは、初めて娘の使い魔の方を見た。

あれほど燃え広がっていた炎は、徐々に小さくなっている。

夫である公爵はまだ気が付いては無いが、アレは魔法が効力を失い消えて収束しているのでは……ない。

やがて渦巻いていた炎はそのうねりも早く、水が瓶に吸い込まれるかのように一点へと消えていく。

そこには、片刃の大剣を左手で持ち直つ直ぐに付きだしている黒髪の少年の姿。

ばかな！

公爵夫人は思わず身を乗り出し、信じられぬその光景を確認しようとした。

しかし、先に立ち上がり櫓から落ちんばかりに身を乗り出した公爵に阻まれ、視界がさえぎられてしまう。

「ばかな！ そんな、たしかに！」

珍しくも激しく動揺して驚愕を口にする公爵を夫人は押しつけながら、ちらと見えた娘の使い魔をもう一度、よく確認する。

使い魔は、メイジでもないあの平民の少年は、まったくの無傷であった。

そんな、ばかな。

もう一度、今度は夢に見るように呟く。

瞬間、背に重みを感じて夫人は我に返った。

普段から、いや子供の頃から決して乱暴にじゃれついたり、まして自分の背にのしかかるような粗相をしなかった長女と次女が

はしたなく自分と夫の背にのしかかり、あの少年の姿を確認しようとしていたのだ。

二人のその表情は、形は違えど浮かぶ感情は一つ。

夫や、自分が浮かべているであろうものと同じ驚愕である。

動揺は閱兵櫓の上だけでなく、訓練場に展開する多くの精鋭メイジにも見られた。

みな口々にそんな、ばかな！ などとお互いの顔を見合わせている。

普段ならば激しく叱責すべき様相であるが、この時ばかりは公爵も夫人も彼らを見咎める余裕など持ち合わせていなかった。

否、この場に居る全ての者が目にした現実をそのまま受け止められる余裕など、持ち合わせてはいないであろう。

唯一人、大人しく公爵の隣に座り、少し不機嫌な顔で座るあの使い魔の主以外は。

「落ち着け！ 馬鹿者ども！ 次！ 風！」

動揺が広がる隊へ怒号のような命令が飛ぶ。

どうやらいち早く驚愕から立ち直った隊長が、声を張り上げたらしい。

彼は有事には公爵の副官として軍団を指揮し、共に戦場に立つ優秀なメイジである。

主君の前に見苦しくも動揺した隊員と自身を恥じつつ、目の前の敵に激しい敵意を再び燃やす。

おのれ！

如何なる手品を使ったかはしらぬが、よくも公爵様の前で我らに恥



を！

怒りは彼だけでなく、隊全体へと広がり一団は再び秩序と落ち着きを取り戻す。

だが、彼らはこの時大きな過ちを犯していた。

あれほどの火球を凌いだ相手が、この期に及んで力無き平民だと未だ認識していたのだ。

号令に素早く反応した風のメイジ達が前に出て、燃やし損なった相手を切り刻むべく”エア・カッター”を繰り出そうとした時である。

彼らの視界から、少年が消えた。

いや、正確には消えたわけではなく、真っ直ぐに中隊へと走っているだけなのだが、見る者の意識が視界に追いつかなかったのだ。

まるで矢が己に向かって飛んできているのを、眺めるかのよう。

ただその左手を赤く赤く輝かせる光だけが、見る者の目に付いた。

赤い光の筋は、真っ直ぐに陣形を割り、一気に隊長の下へと伸びた後、白い輝きに変わる。

「ごめん、ちょっと、痛いかも」

少年は白く強く左手を輝かせ、右手で隊長の足を掴みながら上を向き、小さくそう口にしてバツが悪そうに笑う。

その言葉を隊長と閲兵櫓の夫人は聞き、一瞬呆気にとられた。

なんだ？

どうしてあいつが、ここに、いるんだ？

陣の間を、どうすり抜け……

足を掴まれた隊長は、まるで少年の動きのように意識の中、疑問だけが脳裏に飛び交う。

しかし、少年の言葉の意味する所は果たして夫人だけが理解する所となる。

次の瞬間、才人は隊長の足を持ち上げ無造作に振った。

近くに居た副官やら護衛兵やらが、まるで人形のように振り回される隊長によってなぎ払われる。

貴族用の軽鎧同士が鈍く大きな音を立ててぶつかり合い、木の葉のように次々と人が宙に舞う。

才人はそのまま二度三度と隊長を振り回し、魔法を使おうかと躊躇う一団へ目を回し気絶した彼を小石のように投擲した。

うわぁ！ と悲鳴があがり、精神を集中して逃げて遅れた数名を巻き込みながら才人に投げ飛ばされた隊長は練兵場の木壁を破つてよく手入れのされた植え込みの中へと消えて行ってしまった。

難を免れた者は、仲間と共に猛烈な勢いで投げられた隊長を見送り、ただ目を丸くして立ち尽くす。

そんな彼らの隙を逃さず、矢のような動きで一気に距離を詰め手当たり次第にメイジ達を殴り倒していた才人は

今度は手近にいたゴツい大男を蹴り倒して足を掴み、その足を引き抜いてしまわぬよう注意を払いながら再び振り回し始めた。

メイジ達は陣形を組んでいたことが災いしてか、同士討ちを恐れあらかじめ唱えていたスペルを発動させることが出来ずに

ただあり得ぬ光景を目の当たりにしながら、暴風のような才人の力に次々と吞まれていく。

「散れ！ 散開して距離を置くのだ！」

誰かの叫びにメイジ達の反応は素早かった。

隊長を失い混乱の中にあっても、一斉に才人から四方へ距離を取り始める。

すばやいその動きは精鋭たる所以ではあったが、黒髪の使い魔は信じられぬ方法で距離を置くメイジ達に追撃を加え始めた。

「うわあ!」

「うそだろ?!」

「わ、わ、わ、あが!」

才人の容赦ない常識外れの追撃に、メイジ達は避ける間もなく先程の隊長のように練兵所の外へ次々と木壁をぶち破りながら吹き飛ん

でゆく。

悲鳴が、絶叫が、何よりばかな！ と信じられぬ物をみたかのような叫び声が練兵場に木霊した。

無理もない。

才人は追撃として、手当たり次第に気絶し地に倒れているメイジを投げつけていたのだ。

それも恐ろしく正確に。

間断無く。

人のそれとは違う ” グリムニルの槍 ” が成せる技であったが、その場に居合わせた者にとってはただ、あり得ぬ光景にしか見えな  
いだろう。

魔法の使えぬ少年が、鎧を着た兵士達を小石のように投げている。

逃げ惑う、ヴァリエールの精鋭。

閲兵櫓の上に在って、公爵は悪夢のようなその光景に唇を震わせ眺めていた。

ばかな。

そんな、ばかな。

驚く公爵の目の前を ” レビテーション ” で空中に逃れた者に向

かつて、副隊長が弾丸のように飛んで行く。

なんだこれは！　これは一体、あの者は一体何なのだ？！

こんな、でたらめな戦い方など、ありえない！

拳を握りしめ、国内でも有数の練度を誇っていた自慢の隊がボロボロにされていく様を、公爵は夢の中にいるかのように眺めていた。

一方、夫人の方も公爵と同じ種類の驚愕を覚えてはいたが、少し違う感情を抱いて眼下の光景に驚愕していた。

才人は一見、只闇雲に暴れている風に見えていたが、その動きがメイジとの戦い方をよく熟知している事に気がついたのだ。

すなわち、魔法を唱えようとしている者への攻撃を優先して行い、武器の投擲が間に合わぬ場合は恐ろしいまでの素早さで

距離を詰めて相手を昏倒させ、更にその者を盾とし、他のメイジに魔法の発動を躊躇わせ隙を作り出す。

そこから盾にした、気絶しているメイジを相手に投げつけて再び文字通り目にも止まらぬ速さで縦横に練兵場を駆ける。

動きは疲れなど存在しないかのように、息継ぎの間すら無い程目まぐるしく緩急が繰り返され、ここから目で追うのがやっとですらあった。

夫人はそんな才人を見て戦慄する。

あの者は、ただ力が強く素早いだけではない。

どうやったのか、何度できるのかわからないが、魔法を無効化する術を持っているだけではない。

メイジ……それも多くのメイジを同時に相手にしての戦いに、慣れているのだ。

きつと、この場に居るだれよりも実戦を経験しくぐり抜けているのだらう。

信じられない。

あれがルイズの使い魔？

夫人はふと、”メイジの実力を計るには使い魔を見る” という言葉を思い出す。

あんな、怪物のような強さを持つ者を使い魔として従えられるメイジが居るといふの？

夫人は思わずもう一度、末の娘を見やった。

使い魔の主は相も変わらず口を尖らせて不機嫌そうに、眼下に暴れる少年を見つめている。

とてもあんな怪物を従える強力なメイジには見えない。

メイジとして、「烈風」としての自分から見ても、そんな恐ろしいメイジには見えない。

公爵夫人は一度強く目を瞑り、動揺気味に揺さぶられてしまった心の内を鎮めた。

目の前の、非現実的な光景をありのままに受け入れる為に。

結果はもう出ている。

ルイズが戦争に行くにしろ、行かないにしろ、アレがルイズの使い魔であるという事実は覆らない。

なれば、これからも自分はこの者と関わりを持つことになるだろう。

ヴァリエールの者として、ルイズの母として、「烈風」としてあれ程の力を持つ者にどう接するべきか。

受け入れるのか。それとも、なんとかして排除すべきなのか。

今日の出来事によってすくなくともこの先、彼の存在を無視してルイズと接する事は出来なくなってしまうた。

答えを夫人は胸の内に探し出す。

公爵夫人が次に目を開いた時、練兵場での決闘は既に終わりを迎えている。つつあった。

立っている者が数える程となってしまうっており、その僅かに残った者達も魔法を詠唱する間もなく少年が持つ剣ではなく拳で

次々と昏倒させられていく姿が見えた。



もはや彼らの敗退は免れないだろう。

才人は一度も手にした大剣を振るってはおらず、現実離れた光景ではあったが誰の目にも、手を抜いている事は明らかだった。

しかし、彼らもトリスティンにあって数少ない精鋭でもある。

鎧を着た人を投げつけられ、地に昏倒しながらも何とか意識を保っていた数名が、才人の後方、守るべきわら人形に向かって

”ファイアー・ボール” を詠唱したのだ。

アレを燃やせば、いや、傷の一つでもつけることが出来れば、我々の勝ちだ！

この ” 決闘 ” でのアイツの勝利は、我々に勝つ事ではない。

あの、ルイズお嬢様に見立てた、人形を守る事なのだ。

アレに毛筋ほどでも傷を負わせれば、それでよい。

” ファイアー・ボール ” を唱えた兵士達はヨロヨロと立ち上がり、勝利を確信して口の端を上げる。

そこに名誉も矜恃も無く、しかし戦士としての執念だけが勝ちへとむかわせていた。

しかし。

いつ、その手にしたのか。

どこから取り出したのか。

使い魔の右手の中に、ハルケギニアでは珍しくなった長い馬上槍。

少年はあらぬ方向へ高く跳躍し、見る者が槍についての疑問をさて置き、才人が何処まで高く跳んだのか確認する頃には

その槍は既に投擲された後であつた。

槍は速く恐ろしい唸りを上げて奔り、人形の五メートル手前で火球を阻むように地に落ち……爆ぜた。

その音はまるで、雷鳴。

水に大岩が落ちた時に上がる水柱のように舞い上がる土砂。

閲兵櫓の上で見守る者達。

練兵場の木壁の隙間から遠巻きにコツソリ見物していた使用人達。

練兵場で地に伏せる者達。

夫人とルイズを除き、その場に居合わせた者が思わず悲鳴を上げるほどの轟音と爆風が辺りに広がった。

土煙が練兵場に立ちこめ、すぐに計ったかのように風が舞い起こり綺麗に払う。

恐らくは夫人が起こしたであろう風により、視界がクリアになるとそこに現れたのはわら人形の前を深く大きく横たわる

谷のようにえぐれた地面が姿を表した。

丁度わら人形を横切るように裂かれた大地は、才人の投げた槍の威力を如実に物語る。

その光景に皆、息を飲む。

目の前の現実を否定していた公爵も、もはや言葉すら出せずにいた。勝利を確信しヨロヨロと立ち上がったメイジ達は、あり得ぬ光景に我を忘れ、結局次の詠唱を行う前に

いつのまにか接近してきたのか、才人を視界に捉えることなく念入りに昏倒させられてしまう。

決闘が開始してから、僅か数十秒での幕切れであった。

「ね？ 言った通りだったでしょう？」

言葉に、閲兵櫓にいた全ての者が練兵場に出来た谷から視線を外す。

夫人が、公爵が、エレオノールが、カトレアが、才人の事を知るシ  
エスタまでも皆一様にルイズの声に振り向くと

腰に手を当て誇らしげに立ち上がった彼女の姿が見えた。

皆の視線を一身に集めたメイジは、使い魔がいつもするようにニカ  
と笑ってみせたのである。



「なんでこんな事に……」

馬の手綱を引きながら、才人は知らず愚痴を口にした。

見上げると、二体の巨大なゴーレムが同じく巨大な跳ね橋を降ろすべく、極太の鉄の鎖をゆっくりと送り出している。

間近で聞く、重い鎖が擦れ合う音と跳ね橋と鎖を繋ぐホイール音がガラガラと鳴り響いた。

時刻は昼過ぎ。

才人の ” 決闘 ” から数時間経った頃であった。

跳ね橋はどおんと大きな音を立てて、城内と堀の向こうを繋ぎ、才人は道が出現したことを確認して振り返る。

そこにはルイズの姉であるカトレアが微笑みを浮かべて立っており、その後方には心配げな表情のシエスタが見えた。

場にルイズの姿は無い。

彼女は今、城の自室で大人しく謹慎しているのだ。

今頃は父親である公爵と、色々と話をしているのであろう。

才人はその様子を想像して、今度は胸の内では今朝から何度も呟いた言葉を反芻した。

どうしてこうなったんだ？

無論、答えは返ってはこない。

「父さまの嘘つき！」

広いヴァリエール城の食堂に、ルイズの怒りに満ちた叫び声が響く。時刻はようやく朝から昼の日差しに変わろうかという頃か。

非現実的な ” 決闘 ” の後、公爵と夫人、エレオノールとカトレアは一度食堂に集まり、お茶を用意させてそれぞれの心を落ち着かせていた。

ルイズはというとその席には着かずシエスタと共に才人を労う為、けが人を救護する軍医と公爵家常駐の水メイジを横目に練兵場に残り才人やシエスタと他愛も無い話や痴話喧嘩に興じていた。

それは案外楽しい一時であつたらしく、そのまま小一時間程三人は練兵場で話し込んだのだが、使用人がやって来たのをキツカケに歓談は中断され広い城の食堂へと移動することとなつたのである。

広い城内を移動中ルイズは常に笑顔で、まるで羽根があるかのよう  
にその足取りは軽い。

これで父さまが才人の事を認めて下さる。

思い出しても痛快だったわ！

あの父さまの、母さまの、姉さまの、ちい姉さまの顔！……ついで  
にシエスタも。



ルイズは才人の戦いぶりに痛く満足し、上機嫌で城内を歩く。

練兵場までやって来て公爵様がお呼びです、と口にした年若い女性の使用人は決闘の光景を見ていたのか、食堂へと案内する最中

しきりに才人の事をチラチラと盗み見をし、頬を染めついと才人にさりげなく近寄り色々と尋ねてきたのだったが

それを咎めたりしないほどこの時の彼女の機嫌はよかった。

かわりにシエスタが才人の腕を取り、必至にこのメイドから守ろうと激しい口論を繰り広げようとも一向に気にしない程に。

やがて食堂の入り口にたどり着き、案内するためなのか才人を口説くためなのかよく分からないが三人を呼びに来たメイドが

お連れしました、と扉に声を投げかけると、ぎいと音を立てて両開きの大きな食堂の入り口はゆっくりと開く。

扉の向こうには十数メートルもある長い食卓が据えられており、上座の公爵を筆頭に夫人と姉達の姿が屋内にもかかわらず遠目に見えた。

壁沿いには何十人者使用人が傅き、三人を出迎える。

ルイズは一刻も早く才人を認める言葉を貰う為、才人とシエスタを置いて足早に公爵の元へと近寄り

父さま、私の使い魔は如何でしたか?! と声をかける。

公爵は愛しそうに娘を見つめながら立ち上がり、ルイズを抱きしめ

ニツコリと笑った。

「ルイズ。私の可愛いルイズ。お前の使い魔が、すばらしい力を持っていることはよく分かった。疑ったりして悪いことをしたね、父を許しておくれ」

「いいのです、父さま！ 普通、サイトを見てあんな力があると気付ける者は居ないでしょうし」

「ほう、サイトと言う名前なのかい？ お前の頼もしい使い魔は」

「はい、父さま。何度も私の命と名誉を守ってくれた、かけがえのない名前ですわ」

「そうか。ならば、後で礼をいわねばな」

「うふふ、きつとサイトも喜びますわ。でも私、嬉しい！ 父さまがサイトを認めて下さって、これで胸を張って戦場に征けます」

「その話なんだが、ルイズ。……やはり、お前を作戦に参加させる

訳にはいかん」

言葉にルイズの表情は固まり、空気が凍る。

帰って来た返事は彼女の期待とは正反対のものであった。

沈黙。

だれも言葉を口にはしない。

いや喋らないのではなく、誰もが次の発言者の叫び声に備えていた。

2634

「父さまの嘘つき!」

「ルイズ!」

「約束したじゃない! 決闘に勝てばサイトの力を認めてくれるって!」

「たしかに。お前の使い魔の力は認めるよ、ルイズ。  
何せ私の自慢の部隊を叩きのめし、死者こそ出なかったが重傷者が五十名以上も出して名実共にたった一人で壊滅させたのだからね。ふふ、お陰で私はこの後、責任を取って自害しようとした隊長と離隊届けを提出した六十名を説得せねばならぬ。  
ああ、隊長の事は心配しなくてもいいよ？ 魔法で今眠らせているから大丈夫」

激昂し、父親に食ってかかるルイズをエレオノールはたしなめた。が、力無く笑う公爵の様子にルイズと共に出しかけた言葉を思わず引っ込めてしまう。

よく見ると公爵は、自慢の部隊がああも無残に蹴散らされ、暗く濃いオーラを背負ってどよんと肩を落としている。

白くなりかかった金髪も、いつもよりもずっと白っぽく見えた。

「そ……そう。隊の方々には、ちょっと気の毒でしたわ、ね？」

「ふふ、ルイズは優しいな」

「さい……サイトはあれでも手加減してたのだけれど、もっとするよう、言うておくべきだったかもしれないわ、ね？」

「わかってたよ、ルイズ。お前の使い魔は、あの大きな剣を一度も振るわなかったじゃないか」

「わ、わかってくれるなんて流石は父さま！ サイトも父さまに認められたくて、つい張り切っちゃたの、よ？」

「そうかそうか。つい、張り切っちゃったのか。そんなノリで私の自慢の隊は壊滅しちゃったのか」

「げ、げ、元気だして父さま！ ワルドなんて私を裏切った時サイトを怒らせて、虫の羽根をむしるように腕を千切られたのよ？ それに比べれば今朝の事なんて、じゃれあいみたいなものなのよ、サイトには」

「ルイズ、それ、もしかしてフォロー？ それともトドメを刺してるの？」

「も、ももももちろん、父さまをお慰めしているのですわ、エレス姉さま」

「ふふふ、本当にルイズは優しいな。そうか、お前の使い魔はあの不埒者にもきちんと罰とあたえてくれていたのか。  
なるほど、スクウエアメイジのあ奴でさえ、そのような扱いができる化けも……使い魔なのだな」

「そうよ！ だからね？ それ程強いサイトが側にいるもの、きつと戦場に出てもだいじょうぶよ！ ね？ いいでしょう、お父様？」

「だめだ」

「父さまの嘘つき！」

「ルイズ。そもそも私は従軍を認める約束はしていないぞ。勝てばその力を認めるとは言ったが、人となりはわからぬ。

それにもしかしたら、子爵のように寝返るやもしれん。なにより、彼は貴族ではない。

トリステインに忠誠を誓っていない彼が、金や地位でアルビオンに釣られないという保証はないではないか」

「サイトはそんな人間じゃない！ あいつは、頼りがいもあるし、私に忠実だし、いつも命をかけて守ってくれるもの！」

「とにかく、駄目なものは駄目だ。行くならあの使い魔一人だけで行かせなさい。

お前も随分あの使い魔の力に魅せられているようだが、婿でも取ればすべて丸くおさまるだろう。

今朝の話した通り、謹慎をしてすぐに婿を取れ。これは命令だ」

公爵の強い口調に、ルイズは更なる抗議の言葉を思わず飲み込んで悔しそうな表情と涙を目に浮かべた。

その様子を才人は遠く、広い食堂の入り口に立ち黙って眺めながら、まあ親ならそんなもんだよなあ、等と暢気にも呟く。

”結果” から言えばルイズは確かに従軍すべきだ。

しかし、親としての気持ちを考えれば公爵の言も理解できる才人であつた。

こりゃ、説得は無理だな。

今夜にでも様子見てルイズを連れ出すしかねえ、か。

才人がそうボンヤリと考えて居た時である。

目に涙を浮かべ、俯いて黙り込んでいたルイズが不意に才人の方へ僅かに向いた。

悔しそうなその表情のまま、キッと才人を睨む。

別に才人に八つ当たりしているわけではない。

美しい大きな鳶色の目は語る。

才人！

今すぐ、ここから私を連れ出して！

要求は、正確に才人に伝わった。

どうやら父親への当てつけに、目の前で城を立ち去りたいらしい。

それも力尽くで。

本気かお前？ と困惑気味に目で返事をする才人に、ルイズの表情は更にきついものとなる。

彼女の要求はどうやら本気らしい。

やれやれと才人は頭をぽりぽりとかき、さりげなくシエスタを抱えて走り始められるよう一歩下がり、広い食堂内を見渡した。

……うん、ルイズの背後、あの窓を破って外に出ればいいのか。

たしか馬小屋は……えっと……くそ、思い出せねえ。

ま、いいや。ルイズに誘導してもらおう。



でも、本当にいいんだな？ 本当に わかったよ、そんな目で睨むなって。

鬼のような表情となりつつあるルイズに急かされ、才人は呼吸を整え主の無言の命令を実行に移す。

つま先に力を入れ、茫洋とした表情に意志を込めたその時である。

公爵夫人がついと優雅に、しかし一分の隙も無く才人の方を振り向いた。

完全に不意を突いたつもりであった才人は、思わずびくんと僅かに体を震わせてつま先に力を入れたまま、その場に立ち尽くす。

夫人は才人が僅かに発した闘志に似た強い意志に反応し、こちらに振り向いたらしい。

未来のルイズとよく似たその顔立ちは、一種凄みを感じるほど美しく険しい雰囲気を纏っている。

やばい！

読まれた！

才人は今、自分が何をしようとしたのか完全に読まれてしまったと理解し、このまま強引に事を進めるかどうか迷った。

シエスタとルイズを抱えて、あの公爵夫人の追撃を逃れられるか？！

……無理。

そこはかとなく、死の予感がする。

死なない体になってるけど、あの公爵夫人ならそこをどうにかしそ  
う。

俺、死にたくない。

それにルイズを盾になんかしたくねえし。

ごめん、無理。だからそんな目で急かさないでくれないか、ルイズ？

再び茫洋とした表情に戻りながら、才人は体の力を抜いてまだなの  
？！ と急かすルイズに無理っす、と合図を送る。

そんな才人を確認して、夫人は何事も無かったかのように公爵の方  
へと視線を戻す。

それからほんの少しの間続いた食堂の沈黙を破るのであった。

「ちょっとお待ちになって下さいな、あなた。」

「なんだ？ カリーヌ」

「それではルイズがあまりにも可哀相です」

意外な夫人の言に、食堂に居た全ての者の顔に驚愕が張り付いた。

ルイズもまさか母が庇ってくれるとは思ってもおらず、信じられないと行った調子で顔を上げる。

「お前まで……何を言い出すのだ？」

「そ、そうですね母さま！」

「エレオノール、あなたは黙ってなさい」

弾かれた様に公爵の言に乗って会話に入って来たエレオノールに夫人は冷たい、鉄のような言葉でぴしゃりとたしなめた。

性格なのか、研究員を仕事としている彼女の職業柄なのか、なにかと首を突っ込みたがる彼女を早めに牽制する夫人。

強くたしなめられたエレオノールは、まるで叱られた子犬のようにしゅんと小さくなってしまふ。

彼女の事を ” よく知る ” 才人はその様子を遠目に見て、いつもああなら義姉さんもすぐもてるだろうになどと

不埒な事を考えながらも苦笑いを浮かべる。

「あなた、確かに今のルイズの様子は貴族として、母親として、引かかるものがあります。

しかし、よく考えても見て下さい。

今のこの子は ” 誰にも止められない ” のですよ？

もし、一時の気の迷いを起こしてあの使い魔に「ここから連れ出せ」と命令したら、誰がアレを止めることが出来るのですか？」

「それは……おま」

「まあ！ 公爵様は引退したこの私をあてになさいますの？」

「い、いや、そんなことはないぞ？ うむ。その時は私が……」

「あなた、お年を考えてくださいな。現役の戦闘メイジの精鋭が束になってすらあの有様。」

まして、彼が最後に投げた槍の一撃をどう防ぐのですか」

夫人の言葉に公爵は黙り込んでしまう。

その言は確かに一理あったが、それよりもルイズに対して覚えていた引け目が公爵を沈黙させた。

きっと、あの使い魔が娘を連れて逃げ出せば手も足も出せないだろう。

先の決闘の件も、よもやあんな形でルイズの使い魔が勝利するとは思わなかったし、はつきりとはしてないが

”約束” を反故にしてしまったような形で娘を城に止めるのは心苦しいのも事実だ。

しかし。

目に入れても痛くないほど可愛い我が娘を、戦場に笑顔で送り出すような真似が出来る親など、何処にしよう。

恨まれても良い。

嘘つきとそしられてもいい。

嫌われても……いや、ルイズはそんな子ではない。

一年前、私の声が届くペーパーナイフをプレゼントした時あんなに喜んでいたではないか。うむ。

しかし、最近急に声が届かなくなったようなのだが、おかしいな。

壊れたのだろうか？

いや、そうではなく。

兎に角、これは道理よりも感情が先に立って良い話なのだ。

公爵は考えを整理し、もう一度父親としてのエゴを取り戻し口を開く。

「しかしだな、親として娘を戦場になど……その為には命など惜しくはない。

それにカーリヌ、ではどうすべきだとお前は言いたいのだ？

よもや、お前までルイズを戦場に送れと言い出したいわけではあるまい」

「もちろん、私もこの子の母親です。出征には反対ですわ。しかし、この子の意にそぐわぬ形で作戦の不参加、城への謹慎、婿取りを同時に行ったとあらば、この子の性格ですもの。きつとあの使い魔に命じて城から力尽くでも飛び出してしまつにちがいありません。」

その時、誰にも止められないと申し上げているのです」

夫人はそう口にしてチラリと才人を見た。

ギクリ、と才人とルイズは同時に肩を跳ね上げる。

そんな二人を小さくなっているエレオノールの隣で、カトレアは興味深げに眺めていた。

まあ、そうなの？ といった調子で僅かに微笑んで。

「ふむ……」

「ですから、お互い納得の行くよう、きちんとお話しになるべきではと申し上げているのです」

「いや、しかしだな……」

「父さま、母さま、すこしよろしいでしょうか？」

公爵の困ったようにどもる言葉を遮る、小さい鈴のような声。

普段はおしとやかで、思慮深く、まして決して両親の議論に割って入らないカトレアが珍しく話に入って来たのだった。

彼女の人徳の成せる技か、エレオノールの様に夫人にたしなめられもしない。

カトレアは優しい顔でルイズと食堂の入り口に立つ才人を一別し、それから夫人と公爵を見て話を聞いて貰えないかと目で訴えた。

「なんだ、カトレア」

「父さま、仮にも命をかけて ” 決闘 ” をさせた者に対して、先の翻意は私も些かどうかと思えますわ」



「カトレア、お前まで！」

「先程からお話を伺っていましたが、どうやらルイズは出征の許可よりも使い魔の彼を父さまに認めて欲しいのではないかと。」

父さまの先程の言ですと、要は力だけで無く彼の人となりも知りたいのでしょうか？

ルイズだって、父さまにお気に入りの使い魔の事を力だけでなく、人間性も認めて欲しいようですし。

わたしは難しい事はわかりませんが、父さまが彼の全てを認めて差し上げれば、ルイズの心も大分落ち着くかと思えます」

「うん？　そういう話だったのか？　ルイズ？」

「そう！　そうな……ううん、出征に参加する許可が欲しいの、父さま」

「おお、おお、そういう事だったのか！　うむ、お前の気持ちを察してやれぬ鈍い父を許しておくれ、愛しいルイズ。」

うむ、うむ、いや、幼き頃より魔法が使えなかったお前が、とうとうあのような力強い化け……使い魔を従えられたのだ。

皆に認めて貰いたい気持ち、父はわかるぞ。うむ」

「違う！　出征の許可を……」

「うむ？ 違うのか？ しかし、許可は断じて出すわけには……」

「父さま、続けて良いでしょうか？」

「あ、ああ。うおほん。続けなさい、カトレア」

「ですから、先程母さまがおっしゃったように、このままではルイズが暴発するのは目に見えております。

その時、彼を止める術は恐らくは無いでしょう。

そこで戦の事は私が口出しできませぬが、使い魔の人間性を確かめるのならば、一つ良い案がございますの」

「む？ どういう事だ？」

「つまりです。父さまがああの使い魔を認めて差し上げれば、ルイズの心の重荷が一つ減ります。

しかし、今ここで上辺だけ認めると言ってもこの子は信用しないでしょう。

ですから、彼の人となり確かめる試験のようなものを執り行い、その間戦についてはじっくりとお話になられてはいかがでしょうか？

もし彼の人となり証明され父さまがお認めになれば、ルイズの心は軽くなり父さまのお言葉も届きやすくなるかと」

「……ふむ。一理ある。ルイズ、それでどうだ？」

ルイズは公爵に尋ねられ、カトレアの言葉を反芻し、む……と考えるんだ。

そもそも ” 決闘 ” に勝ったんだから、こんな案は必要ないじゃない！

……でも、もしこれを呑めば、父さまやみんなにサイトの全てを認めて貰える、のよね。

……全てを認めて貰える。

みんな、サイトの事を？

認めて？

それってつまり？

恋人として?! あ、いやいやいや。落ち着くのよ、ルイズ。

認めて欲しいのは出征の方！

……でも、 ” 前 ” は結局認めて貰えなかったようなのよね。

どうせ、強引にここを出て行くなら、サイトの事だけでも……

上手くいけばこ、こここ、恋人として公認してもらえるかも?!

皆の視線を集め、眉間に皺を作り出しながら考え込んでいたルイズは、しばし沈黙を続けた後不意にふへへ、と表情を崩してしまった。

「決まりのようね、あなた」

夫人がそんなルイズを見て、少し呆れたように家族一同共通の感想を口にした。

かくしてカトレアの提案は採用され、又一つ才人の知らぬ未来へと世界は進み始める。

才人はと言うと、ルイズが不気味に微笑んだ瞬間あちゃあ、と額に手を当て肩を落とすのであった。

そして、冒頭に戻る。

ラ・ヴァリエール公爵家の三姉妹の次女、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌは侯爵でもあった。

病弱な彼女を不憫に思った公爵がその領地の一部を分け与えたからだ。

よって、カトレアは厳密にはヴァリエール家の者ではなく、ラ・フォンテーヌ家の当主であり立派な領主でもある。

ラ・フォンテーヌ領の主である侯爵と言う肩書きはいかにも厳めしく聞こえるのだったが、実際の彼女はルイズと同じ桃色の髪に

儂げで可憐な容姿、そしてヴァリエールの女達の中にあつて唯一良く栄養が行き渡った胸の持ち主だ。

幼い頃より病弱で、医者曰く ” 芯が良くない ” らしく、その原因が分からぬまま今日に至る。

その為か幼い頃より一步も領地を出たことが無い彼女は、母親や姉妹とは違い非常に大人しい性格であった。

柔らかかで不思議なその雰囲気はルイズにとって憧れであり、また動物などにもよく懐かれ彼女が連れ歩く生き物は日増しに増えていくのである。

そんな、彼女がルイズに出した。”才人の人柄を見極める課題”  
とは、自身が普段常用している薬を用立てて来るといふ物であった。  
ただの薬ではない。

妖精が作るという、魔法の薬である。

カトレアの説明によれば、ここ数ヶ月薬を手配している領内のとある村からパツタリと音信が途絶えてしまい

そろそろ手持ちの分が切れそうだったのだとか。

村はラ・フォンティーヌ領の外れにあり、そう危険な土地でもないのだが薬の入手自体は難しく、村の者もかなり気難しいので

村人達と交渉し無事薬を持って帰ることが出来れば、才人の人柄も信じてよいのではなからうか、といった内容であった。

無論、才人が城に帰ってくるまでの間はルイズには外出禁止の措置がとられるのであるが。

この課題、実はそれ程難しくはない。

村はヴァリエール城から一日程馬を走らせれば辿りつける距離であるし、公爵とは違いカトレアは

対象を排除する事を前提とした試練を、他人に課すような事は決してしないと誰もが知る所である。

しかし、公爵や夫人はその提案を一にも二にも賛意を示し、ルイズ

モカトレアの提案とあつては

無下にして強引に城を出て行くことも出来ず、渋々とながら従う事にしたのだつた。

公爵としては才人を一時的にでも城から追い出すことが出来るし、戻ってくるまでの数日間じっくりとルイズを説得することが出来る。

夫人の言う通り、今の様子ならばもしかすると本当に使い魔に命じて、強引に城を出て行くかもしれない。

それならば、と言うことでとりあえずはカトレアの案を飲む事にしたのであつた。

さて。

どうしてこうなるんだ？ と頭を傾げる才人は蚊帳の外、とんとん拍子に ” 課題 ” の為の準備がなされ、あれよあれよという間に

才人は馬を引いて、巨大なゴーレムが操作するヴァリエール城の城門の前に立たされていた。

時刻は昼過ぎ。

ルイズは城の本館の外に出たの見送りは許されず、才人を城門まで見送りに出て来たのはカトレアとシエスタのみである。

「じゃ、行つてきます。フェルタン村の村長にこの書類を見せればいいですね？」

「ええ。気難しい方が多い村だけど、みな善人です。」

話せばきつと分かつて貰えると思うし、ルイズの為に早く帰つて来てあげてね。」

可哀相に、あの子あなたを見送れない事を酷く悲しんでいたわ」

「はは……まあ、仕方ない事です。シエスタ、悪いけど俺が居ない間ルイズ……お嬢様の事頼むな？」

「はい、分かりました。サイトさんもお気をつけて」

シエスタの返事はいつもの彼女の物であったが、その表情は不満と心配で彩られていた。

朝の決闘騒ぎや先程の公爵とルイズのやり取りを見て、貴族への反感が高まり何故サイトさんが、という思いを抱いていたからだ。

才人はそんなシエスタの気持を察してか、俺の事は心配いらないと口にして馬に跨がろうと鐙あひまに足をかける。



しかし、そんな才人を呼び止める声。

カトレアである。

「あ、ちょっとまって。そういえば、名前もまだでしたわね。あなた、サイトって言う名なの？」

「ええ、ヒラガ・サイトと申します。俺の国では姓が先に来るので、サイトが名前です」

「サイト……珍しいけれど、良い名ですね。トリステインの人間ではないみたいね、あなた？」

「ええ。ここから、ずっとずっと遠くの国の出です」

「やっぱり。わたし、こっから見えても結構するどいのよ？」

カトレアは鎧に足をかけたままの才人を見ながら、コロコロと笑っ

た。

出発に際し、彼女の突然の雑談に才人は心中で首を傾げながらもその笑顔につられて微笑む。

この人は無意味に他人に語りかけるような人じゃない。

一体、なんだろう？

才人の疑問を余所に、カトレアはゆっくりと言葉を紡ぎ続けた。

細く、消え入るような声であったが、何故か良く通り優しげな声で。

「ねえ、サイトさん。本当に早く、帰って来てあげてね？

わたし、わかるの。あの子、今朝女王陛下に認めていただいて、直々の女官に任命されたり頼りにされているって言ってたけれど、そうだったのもきくと、あなたの助力があったからだと思うの。ルイズにはあなたが必要なのよ」

「ルイズ、お嬢様は俺が居なくても立派な貴族ですよ。

いつも ” 敵に後を見せない者を貴族と呼ぶ ” とか言って、俺が居なくてもどんな相手に立ち向かうんです。

俺はそんな彼女の後について歩いて、魔法避けの盾となるだけで  
す」

「まあ！ 素敵！」

「は？」

カトレアは突如、瞳を輝かせその豊かな胸の前で両手を合わせながら満面の笑みを浮かべた。

どの辺りが素敵だったのか、才人は計りかねて間抜けな声を上げ首を傾てしまう。

「あなたとルイズはまるで、お姫様とそれを守る騎士のよう！  
わたし、思うんですよ？」

貴族の条件とは、大事なお姫様を命がけで守れる人だつて。  
知ってる？ このお城やヴァリエールの領地は、かつて王様の娘  
であるお姫様を命がけで守ったご先祖さまが頂いたものなの」

「はあ」

「あの子は凄く強情だし、自分で決めたことは頑として曲げないわ。だからきつと、父さまの説得には応じないでしょう。ずつとずつと、あなたが戻ってくるのを首を長くして待っていると思うの。」

……あのね？ 私はルイズが決めたことならば、戦に行くことを止めるべきではないと思う。

勿論征つて欲しくは無いけれど、それとこれとは別。

もっと、姉さまもお父様も貴族としてのあの子の自立を見守ってあげるべきなのよ」

カトレアはそう言って、再びゆったりとした雰囲気へと戻り優しげに微笑む。

つまり、ルイズの為に早く戻って来いと言うことか、と才人は考えた。

どうやらカトレアは場を取りなす為、荒事を避ける為に自分が提案した事が、結果として二人を引き裂いてしまった事を

彼女なりに気にしているらしい。

才人はそんな彼女の心情をキチンと汲み取り、心配ないとばかりにニヤリと笑いながら軽やかに馬に跨がる。

「出来る限り、早く戻ってきます」

「そうしてあげて。もたもたしていると、婿までとらされてしまうわ。」

「そんなの、お姫様を守る騎士としてはおいやでしょう？」

馬に跨がる才人を見上げ、カトレアは少し羨ましそうな表情でそう言った。

才人は歯を見せながら笑い、答える。

”前” は気が付かなかったが、いつも大人であったカトレアが案外お姫さまとそれを守る騎士といった構図に憧れる

少女のような一面を発見し、つい気取った口調で。

その言葉はカトレアの心に深く留まり続け、ルイズへの羨望と騎士への憧れを育てる結果になるとは知らずに。

カトレアは才人が残したその言葉を反芻し、いつか自分も誰かにそう言っただけ欲しいな、などと考えながら小さくなっていく馬影を眺めた。

それから、城で謹慎しているルイズがまるで本当のお姫様のように思えてきて、嫉妬を覚える。

いやだわ。

わたし、何を感じているのかしら。

可哀相なのはルイズなのに。

……でも、ほんと、一度でいいからあんな風に言われてみたいな。

そう思いながらカトレアはこれが最後とばかりにもう一度、才人の去り際の言葉を思い返した。

「もちろん、俺のご主人様は誰にも渡しません。俺は、あいつを守るしか能の無い使い魔ですから」



「なんでこんな事に……」

パキン！ と地に落ちた枝を踏み折りながら、才人は知らず愚痴を口にした。

ここ数日よく口にするようになった台詞。

そのせいか、既視感を覚えた才人は何となく辺りを見渡した。

夏の盛りが過ぎ秋も深まっているとは言え、周囲の木々は生命力に溢れつつそうとした葉を茂らせている。

視界と行く手を塞ぐ枝を才人は乱暴にかき分け、細く下へと伸びた



僅かに轍のように筋が伸びる獣道に歩を再び進めた。

何かの鳥がギャアギャア！ と警戒信号の鳴き声を上げ羽音も近くに飛んでく。

才人は飛び立つ鳥につられて上を見上げた。

空はやけに高く青く見え、雲の合間から南を目指す渡り鳥の群れが見えてなんとものどかだ。

それから改めて視線を進行方向に戻すと、どこまでも続く急な坂道……というよりも崖に近い傾斜がついた名ばかりの道が

蛇のようにうねって藪の中を伸びる。

才人はため息を一つついて、背中のデルフリンガーの鞆をあちこちに引っかけながら再び崖を降り始めるのであった。

フェルトン村に才人が到着したのは、ヴァリエール城を昼前に出立してから翌日の昼過ぎ程であろうか。

幾度か馬を休ませながらも夜を徹しての旅程である。

隣国ツエルプストー領から最も遠い位置にあるラ・フォンティーン

領の中でも、更に外れに位置するフェルタン村は

風光明媚な丘陵地で畑と農家が点在する非常にのどかな場所だ。

カトレアが言っていたように気難しい者が多いらしく、道行く年老いた農婦に村長の家への道を尋ねると

ムスっとした表情のままある方角を指さして、わかったか？ とばかりにジロリと睨まれ、才人は思わず先行きに不安を覚えた。

しかし一応道を教えてくれるあたり根は善良な者ばかりなのだろう、才人はその後何人も村人に睨まれながらも

無事村長の家にたどり着くことができた。

村長の家は他の村人の家よりもほんの少しだけ大きく、それ以外は特に変わった所がない比較的質素な造りで

畑が直ぐ近くにあるらしく、丁度昼食を終えて畑仕事に戻ろうと家から村長が出て来た所であった。

村長と鉢合わせた才人は馬から降り、挨拶もそこそこに早速カトレアから預かった書類を渡し、薬について尋ねる。

村長はかくしゃくとした痩せた老人で、始めはほかの村人と同じく無愛想に才人の話を聞いていたのだが

書類を受け取りカトレアの名を聞くや否や、人が変わったかのようにこやかになり、半ば強引に才人を今出て来た家に招き入れたのだった。

村長の家の屋内は特に変わった所も無く、さして大きくも無いテーブルの席へと座るよう促された才人は、急にフレンドリーになりすぎた

村長に戸惑いながらも言われるがまま腰を降ろす。

それから気難しい村人がこれほど豹変するほどカトレアは領主として慕われているんだな、などと才人がボンヤリ考えていると

村長が対面に座りながらにこやかに、しかし少しぎこちなく薬の件でいらしたのですね？ と切り出してきた。

「ええ、カトレア……様が使う、妖精が作る魔法の薬をいただきにきたのですが……」

「左様でしたか。いんや、遠い所わざわざ……お疲れになったですよっ？」

「はは、このくらい。しかし、安心しましたよ。

音信不通になったと聞いていたものだから、オークにでも襲われたのではと心配していたんですよ？」

「いや、その……連絡入れなかったのは申し訳ないんですが、その……」

バツの悪そうに口ごもる村長に才人は首をかしげた。

丁度その時、村長の妻であろう老婆がお疲れになったでしょう、村特産のハーブ茶です、と言いながら木のトレイに

白い湯気の立つ木のカップを二つ載せて、家の奥から運んできて才人と村長の目の前に置いた。

村長は一口そのハーブ茶を口に含み、ほう、とため息をつく。

才人もつられてハーブ茶を一口すすると、なんとも言えない甘く華やかな香りが口中に広がり、本当にこれハーブ茶なのか？！

と内心驚いて二口、三口と続けてすすった。

そんな才人を見て村長はニヤリと笑い、ずい、とテーブルごしに顔を近づけて来る。

「ぶぶ、旨いでしょっ？」

「ええ、すごく。ハーブ茶というよりも、何か甘い飲み物のような香りと味ですね」

「この村特産の乾燥ハーブで入れたお茶でしてな。丁度昨日乾燥が終わったもんで、味も格別ですよ。」

「……もつとも、それが原因でカトレア様にご迷惑かけてしまっておるわけですが」

「？ 薬と何か関係があるのですか？」

「ええ、実は……このハーブ茶に使う乾燥ハーブと、”ラ・カンパネラ” という花を原料にカトレア様に献上する薬を作っております。」

「両方ともこの辺りでしか取れない材料なのですが、特にこの”ラ・カンパネラ” という花が厄介でしてな」

「厄介？」

「ええ、この花は昔から”妖精花” とも呼ばれておりましてな、この村から西に少し行くと深い谷があってそこでしか取れんです。更にこの谷は村では”囚われ谷” と呼ばれております。ドライアドっちゅう、これまた厄介な木の精霊の住処になつとるんですわ。」

人間には近づくことが出来ない場所なもんで、ほとほと困って  
おったんです」

「え？　じゃ、今まではどうやってその、”妖精花”を？」

「この乾燥ハーブと引き換えに、持って来ていたんです」

「誰が？」

「その、ドライアド本人が。毎年この時期にやって来て花と乾燥ハ  
ーブと交換して行くんですよ。」

ところが今年はどうしたもんか、いつもより早く先月にふらりと  
やって来て交換してくれと言われましてな。」

残念だがハーブは採りいれたばかりでまだ乾燥も終わってないか  
らもう一月待ってくれと頼むと、それっきり音沙汰なくなっても  
うて……」

村長はそう言うと、肩を落として申し訳なさそうに身を縮めた。

どうやら妖精花は木の精霊から入手する以外、他に術が無いらしい。

才人はラグドリアン湖の水の精霊を思い出し、腕を組んだ。

人と精霊とでは時間の概念自体が違う。

精霊が「今はダメなのか。じゃ、ちょっと待つか」と思っている、そのちよつとが百年、二百年である事は十分考えられるのだ。

更にプライドも高く、モンモランシーの実家の例はともかく、ちよつとした事で怒って姿を消すことも珍しい事ではない。

「うあ……先住は色々難しいですからね。」

「いんや、ドライアドに限っては恐らくになりますが大丈夫ですよ。愛想がいいと言っか、精霊というよりも妖精に近いとか本人がゆとりました。」

ただ縄張り意識が強くてですな、アレの住処である ” 囚われ谷 ” に人間が入り込むと生きては出てこれんちゅう話です。そこが唯一の欠点といえますか、ドライアドの厄介な所です。」

「じゃ、なんで……ヘソを曲げたって話じゃないようだけど。」

「恐らくはなんかあったんでしょうて。」

こんな年もたまにありますな、そんな時は谷を少し降りた所まで乾燥ハーブを持っていくとドライアドが出てくるんです

だけんど、ちと今は時期が悪くて……なにせ今年はヒユイルが大発生しとりましてな。

作物を荒らされん内にと言うことで、こここの所ずっと村人総出で刈り入れを行っておるんですわ」

「ヒユイル？」

「これくらいの、砂粒ほどの大きさの害虫です。

ほら、季節の花々の茎なんかによく何匹も張り付いている、あの緑色の」

「ああ、見たことあります。あれ、農作物にもつくんですね」

「ええ、アレはああ見えて中々の悪食でして、何でも食い荒らすんですわ。

今年みたいに大発生した時にほっとくと、一晩で作物がダメにされる事もあるんですよ。

いんや、村のもんが北の森でそれを早めに見つけることができてるほんに良かった。

お陰で虫の大群が村に来る前に、村総出で刈り入れをやっておる真っ最中でして。

連中、羽は無いもんで移動はゆっくりですから、なんとか間に合いますよ」

「それで連絡も寄越さずに……」



「そういう事になります。いや、ほんに申し訳ない。」

” 囚われ谷 ” までは中々道が険しくて、老人ばかりの村のも行かせるかと時間もかかりますし。

カトレア様には本当に申し訳ないんですが、わしらも作物が食い荒らされれば税も納められないし、冬も越せなくなりますでな」

村長はそう言うと、一口ハーブ茶を啜ってもう一度今度は大きくため息をついた。

才人も同じようにもう一度ハーブ茶に口をつける。

芳醇な甘い香りが口いっぱいに広がり、どこか焦る気持ちが安らぐ。

「村長さん、薬は作るのに時間がかかるのですか？」

「え？ いんや、材料さえあれば薬自体はすぐに出来ます。」

「といいますかな、効用自体は ” ラ・カンパネラ ” の花の成分だけなんです。」

ただ、味というか臭いというか、とにかく不味くて。」

その為に乾燥ハーブを追加しとるようなもんで、その由来から  
”妖精が作る魔法の薬” という触れ込みになっとるんですわ」

「じゃ、その ”ラ・カンパネラ” とかいう花があればいいんで  
すね？」

「ええ、ええ。 だけんど、先程申した通り人が近づけぬ谷にしか花  
は……」

「じゃあ、話は簡単ですよ。俺が行ってきます」

「そんな、カトレア様の使いの方を行かせるなど……後数日で刈り  
入れが終わるで、それまで村の宿でお待ち頂ければ……」

「悪いんですが、俺、急いでるんですよ」

「まさか！ カトレア様のお体の具合が」

「ああ、いや。俺の都合です。どうしても早く薬を持って帰りたい  
んですよ。」

村長さん、俺に行かせてくれませんか？ この通りです」

才人はそう言って、深々と頭を下げる。

村長は慌てて才人に頭を上げるよう言いながら、そこまで言うのならばと ” 囚われ谷 ” までの詳しい道筋と

木の精霊・ドライアドの呼び出し方を説明し始めるのであった。

” ラ・カンパネラ ” は釣り鐘のような花を咲かせる釣鐘草の一種で、鮮やかな紫色をした小さな花であると村長は言った。

地球ではバラ科のピンクの花であるのだが、花の名に疎い才人が地球での花の名など覚えている筈もなく、すんなりと花の特徴を覚えて

フェルタン村の西、 ” 囚われ谷 ” へと足を踏み入れたのはそれから一時間程経った頃であった。

ヴァリエール城から乗ってきた馬は村長の家に預けて、徒歩での移動である。

背に大剣、手には乾燥ハーブが入った袋を持ち至って軽装で森を抜け谷の入り口までやって来た才人だったが

既にその道程の厳しさにげんなりとしていた。

何せ、森の道は荒れ放題で木々の枝が道をふさぎ、それらをやっとの思いで”避けながら”進むと今度は細い獣道のような道が

谷底に向かって藪の中を伸びていたからだ。

ドライアドは木の精霊である。

それ故、道中は決して木の枝や植物を無闇に切り落としてはならな  
いと才人は村長に何度も注意を受けていた。

道に生える草や落ちているちよつとした枝を踏む程度なら問題はな  
いようだが、夏の間目一杯伸ばした木々の枝を避けながらの移動は  
非常に骨が折れる作業である。

「なんでこんな事に……」

パキン！ と地に落ちた枝を踏み折りながら、才人は知らず愚痴を  
口にした。

その辺から飛び立つ鳥につられて上を見上げると、空はやけに高く青く、雲の合間から南を目指す渡り鳥の群れが見える。

そこに厄介な障害物など何一つ無い。

折ってはいけない小枝も、切り倒してはいけない木も空には無い。

視線を進行方向に戻す。

折ってはいけない小枝や、切り倒してはいけない木が視界一杯に広がる。

なんの嫌がらせなのか、細く足場の悪い崖のような谷を降る道はそんな障害物の足下を縫うように伸びていた。

才人は幾度目かのため息をついて、慎重に歩を進め始めた。

”目的地” まであとすこし。

村長の話によれば、谷を少し降ると大きな木が生えた台地のような場所に出るらしい。

そこが精霊と人の世界の境界であるらしく、ドライアドの住処への入り口を示すのだそうだ。

そこから先は再び下へと降りる谷となるのだが、人が立ち入ってはいけない領域なので決して足を踏み入れぬよう

重々才人に注意を促していた村長であった。

果たして、時には木によじ登り道を迂回し、時には這いつくばって枝を避けていた才人はその台地へなんとかたどり着く。

崖から張り出すように現れた小さな広場には、今まで行く手を塞いでいた木々の枝や藪が全くなく、ぽつんと一本だけ木が生えていた。

「ふう、どうやらここが終着駅らしいな。あとはこの木の根元で座ってまってるればいいんだよな？」

誰に向かってでもなく、才人は手順を口にして広場の木の根元に腰を下ろし、乾燥ハーブは入った袋の口を開けた。

甘く爽やかな香りが広がり、これまでの道程の厳しさを忘れさせりラックスした気分になる。

背にした木の枝の合間から漏れる太陽の光がなんとも心地よい。

ほんと、良い匂いだなこれ。

ルイズにお土産として持って帰ってやろう。

これだけ良い匂いだもん、精霊もわざわざ村まで交換しにやって来るのもうなずけるな。

……匂い袋というか、芳香用の小瓶に入れて部屋に置いてくといいかも。

だけど……

眠く、なるから、

柔らかな香りと木漏れ日は、徹夜で馬を駆って村まで来た才人をうとうとさせる。

辺りに人や動物の気配はない。

野鳥のさえずりと、冬が近い季節にも関わらず春風のような心地よい谷風。

思考はいつの間にか夢にかわり、才人はとうとう眠ってしまった。

”グリムニルの槍” で再現されている体には、本来睡眠や食事など必要ない。

しかし ”人” としての才人を維持するためには、なるべく人間の生理現象を再現する必要があった。

つまり戦闘状態でないかぎり、才人は人と同じようにものを食べ、女性の裸に欲情し、年を取り、目を閉じて夢をみるのである。

その寝顔はルイズと同年代の青年になりかけた少年の面影を残し、

とても安らかだ。

メイジを片手で一蹴し、巨大な韻竜を屠り、亜人の軍勢を蹴散らす伝説の使い魔だと、その主と一部の人間を除けば誰も信じはしないだろう。

才人が寝台とした木の上では小鳥がチチチと鳴き、枝がざわめく。

心地よいそれらの子守唄を、才人はどれほど長い間夢心地に聞いただろうか。

不意に、音が消える。

僅かな変化であったが、頬にヒリヒリとした空気を感じ取った才人は目を醒まし辺りをうかがった。

広場は相変わらずのどかな情景であったが、何かが違う。

なんだ？

寝ぼけてるのかな、俺。

太陽は……まだ高いな。

長いこと寝てたわけじゃなさそうだな。

……妙な夢でも見たかな？

才人がそう考えて、伸びをした時である。



広場から更に谷下に伸びる道の先、あるいは才人が背にした木の向こう、崖の下から女の悲鳴が木霊してきた。

「いやああああ!! だ、だれか!」

悲鳴は切実に、しかし誰も居ないとわかりきっている諦めも混じって何度も上げられる。

才人は慌てて崖からせり出した形で広がる広場の端から身を乗り出すと、眼下に谷底が見えてそこを女性が走って行く姿が確認できた。

多分、若い。

髪は長く、キュルケよりも青みが差した赤毛だ。

足に怪我でも負っているのか、すこしぎこちない動きで走っている。

その後をくさび形にオークの群れがゆっくりと追いかけていた。

恐らくは女性に悲鳴を上げさせている原因であろう。

オーク達は手に様々な武器を持ち、獲物を蹴るつもりなのかゆっく

りと逃げる女の後を追っているようだ。

なぜここに人が？

なぜ、オークの群れが先住の住処に？！

先住の住処を荒らす亜人なんて、聞いた事もないぞ？！

俺、道を間違え　いや、それよりも！

まずい、あの子、このままじゃ……

寝ぼけた才人の頭に様々な疑問が瞬時に湧き、思考が混沌とする。

いくつもの問い掛けが目まぐるしく耳の奥に聞こえたが、次の瞬間には体が勝手に動く才人であった。

大地に右手を当てシンプルな投げ槍を作り出し、力を加減しながら谷底へと投擲する。

全力で投げて崖崩れでも起こしてはたまらないからだ。

槍は唸りを上げて逃げる女とそれを追うオークの群れの間に着ち、ズドンと大砲の様な音を立てる。

”グリムニルの槍”　としてその威力は見る影もない物であったが、オーク達の足を止めるには十分であった。

才人はオーク達の足が止まったのを確認し、まだ谷底まで十メートル以上もある崖へその身を投げ出す。

耳に風切り音が響かせ落下しながらも、背のデルフリンガーを保持する鞘のボタンを外して一気に大剣を抜き放ちルーンを輝かせる。

大地が迫り来る中、才人はオークの数と女の位置を確認した。

女は槍が巻き起こした音と衝撃によって前のめりにこけてしまっているようだ。

あちゃ、もうちょっとオーク寄りに投げれば良かったかなどと暢気に考えながらも、着地した才人は落下のスピードを維持したまま

向きを水平に変えてオークの群れの中に飛び込んだ。

数は十五。

一匹、デカいのがいる。

多分、オーグル。

断片的な思考とは裏腹に、才人は稲妻のような動きで瞬く間にオーク達を斬り伏せていった。

堅い竜の鱗を、ゴーレムを、大地を槍の投擲で爆砕させるその膂力で振るう剣撃はすさまじく、才人がデルフリンガーを振るうたびに

オーク達はまるで紙細工のように両断され、宙に舞う。

身の丈もある大剣を軽やかに横に薙ぎ、縦に振り、袈裟に切りつけ、しかしその剣筋は見えず瞬く間に亜人を屠っていく。

切り上げられたいくつかのオークの半身や武器を持ったままの腕は、  
クルクルと空中を飛び文字通り血の雨を降らせた。

その雨の合間を才人は疾風の様に駆け抜ける。

オーク達はいまだ、何が起きたのか理解していない。

ナニカが降ってきて地に落ち弾けて、気が付けば前に居た仲間がバラバラになって飛び散っていた。

一体、なにが

疑問と状況が脳裏に浮かんだ次の瞬間には、己が雑に両断される。

視界が激しく回転し、ふわりと体が浮く。

遠のく意識の中、最後の記憶に在るのは白い光と黒髪。

た、ぶ、ん、にん げ……

才人に斬られたオークの認識はそのような物であった。

白痴なのではない。

意識が追いつかないのだ。

あまりの疾さに。

あまりに鮮やかな剣閃に。

人の領域を遙かに超えた、その力に。

痛みを、怒りを、恐怖を、闘志を、絶望を抱く前にただ疑問だけを抱いて絶命する。

オーク達にとって不幸だったのは、才人が ” 躊躇 ” するのは人間だけだということであろう。

それは身勝手な博愛であるし、才人もよく理解している。

しかし。

ここ、ハルケギニアでは人とオークは決して相容れぬ存在であった。

一方が略奪者。

一方が被害者。

互いにそのどちらかにしかなれぬ存在。

その認識を違えば、大事な人を骨も残さず略奪し尽くされることを才人は知っていた。

領地を得て経営した経験のある才人にとって、オークとは大事な領民を襲う災害以外の何者でもない。

昨日向けられていた笑顔が消える。

老若男女関係無く。

それも村ごと。

かつての悲しみが、怒りが、決意が才人の胸に蘇り激しく心を震わせていく。

更に疾く。

更に剣閃は鋭く。

左手は強く強く輝く。

血の雨は肉を伴って更に激しく大地に降りそそぎ、しかしただの一滴も剣士を濡らすことはなかった。

才人がデルフをどれほど振るった頃か。

時間にしてほんの数秒であつたのかもしれない。

群れの後方にいたオーグルを縦に両断した所で、その後に居たオーグの一匹が声を上げた。

恐怖ではなく、警戒の合図だ。

ナニカがいる、注意しろと。

しかしその合図に答える者はいない。

既に”彼”を除き、ある者は首を跳ねられ、ある者は血の雨と一緒に空から降ってきていたからだ。

割れるオーグルの向こう、凄惨な光景を目の当たりにしてそのオー  
クは唯一、敵の姿を目にする。

それは小さな人間。

ハルケギニアでは珍しい黒髪で、左手に握られている大きな片刃の  
大剣。

その手の甲は白く輝いて、対照的にその背後では赤い血と肉がバタ  
タと音を立てて降り注いでいる。

一体、お前

思考は続かない。

視界にあるはずの少年の姿が消え、すぐに視界が激しく回転して、  
浮遊感の後大地に叩きつけられた。

そのオークは他の仲間と同じように、そのまま疑問だけを胸に絶命  
したのだった。

「こんなもんかな？」

べっとデルフを振って付着したオークの血を払いながら、才人は辺りを見渡した。

敵意や気配は感じない。

他の群れの斥候がどこかに居た場合、なるべく派手に殲滅した方が牽制効果を生むので”雑”に戦った才人であったのだが

どうやらその気配りも無駄であったようだ。

才人はオークの死体からなるべく綺麗な布きれを千切り、デルフを拭いて鞘に納めて改めて未だ転けたままの女性の元へと歩み寄った。

「大丈夫？ 足に怪我してるようだけど？」

先の戦いぶりから怖がられているかも知れないと考えながらも、恐る恐る手を伸ばす才人。

女性はまだ幼さの残る少女といった年の頃であった。



青みが混じった赤毛は紫に近く、長く伸びて上体を起こしても地に着いている。

肌は白く、手足も細い。

顔立ちもどこか気品があり、平民の娘ではないようだ。

女の子はさしのべられた手には目もくれず、ただ呆然と才人とその向こうの光景を交互に眺めていた。

やべえ。

もしかして、俺、化け物かなんかと思われてるか？

この後きゃああ！とか叫ばれちゃう？

十分すぎるほど発揮した自らの怪物性の事などすっかり忘れ、才人はさしのべた手もそのままに不安に駆られる。

沈黙は続く。

その間、不安はますます大きく膨らみ、いたたまれなくなつてつい返事を急かしてしまうお人好しであった。

「ねえ？」

「あ、え？ ああ！」「ごめんなさい！ あなた、すごく強いのね！」

「ま、ね。立てる？」

女の子は慌てて才人の手を掴み、立ち上がるうとするが少し体を浮かした所で眉根を寄せ、つ！ と呻いて手を引っ込めた。

引っ込められた手は足へと伸び、よく見ると薄く刃物がかすったかのような傷が、白いくるぶしに赤い筋を作り出している。

「いたた、ごめんなさい。くじいたわけじゃないから、すこし時間をおけば立てると思うわ」

「オークの剣か矢かなんかが掠った傷？」

「うん」

「まずい！」

才人は血相を変えて女の子の足をつかみ、くるぶしに顔を埋める。

きゃあ、と再び谷に女の悲鳴が上がった。

しかしそんな彼女の様子などお構いなしに才人は暴れる女の子を無理矢理押さえつけながら傷口に口を付け始めた。

「ちよ、何すんの！ この、変態！ ロリコン！ ブサイク！」

容赦ない罵倒と反対側の足による蹴りが才人の頭に猛襲する。

血を吸い出す為に足に顔を近づける度に細い指でバリバリと引っ掻かれる。

端から見れば変態その物だ。

だが才人は、そんな事もお構いなしに変態行為を続ける。

傷口に口を付け、血を啜り吐き出す。

オークの武器には毒が仕込まれていることが多い。

僅かなかすり傷でも命取りとなる。

説明している時間は多分無い。

走っていたから体中に毒が回ってもおかしくないけど、こうやって元気があって事は傷を受けて間も無いはずだ。

今ならまだ間に合うかもしれない。

才人は焦りつつも、女の子の罵声と抵抗に必死に耐えた。

「やめて！ そりゃわたし、すつごく可愛いけれど、まだおっぱいも小さいし、経験もないし、こんな所でなんて絶対いや！

まして人間とだなんて絶対に、いや！！ 離して！ この淫獣！  
ケダモノ！ むしろゲテモノ！ 臭いのよアンタ！」

「いでえ！ これ位でいいだあ！ やめ、ほら辞めたから！」

「この！ これだから人間は！」

「ちがう！ 毒！ オーいだだ！ 引つ掻くなつて！ オークの武器には毒が塗ってるうううだああ！ 蹴るな！」

「え？」

ピタリと止む、罵倒と暴力。

顔中に赤い筋を作り出しながらも、はあと肩を落とす才人。

そうなの？ とその瞬間全てを察していながら ” あんたが悪い！” と目で訴える少女。

焦ったとは言え、説明しない自分も悪いのだけど、もうちょっと俺の行動を観察して欲しかったと目で訴える才人。

仕方ないじゃない！ と目で更に訴える少女。

じっとりと目を細める才人。

沈黙。

暫くして、少女は才人の視線の圧力に負け遂にプイっとそっぽをむいて、小さくごめんなさいと口にした。

「ま、俺も悪かったしな。おあいこって事で」

「そ、そうね。でもありがとう。お陰で助かったわ。えっと……」

「才人。ヒラガ・サイトって言うんだ、俺」

そう自己紹介し、いつものように才人は笑った。

笑顔に女の子は安心したのか、ふにやりと柔らかく花のように笑顔を浮かべた。

そして、才人と同じように自己紹介を始める。

しかし。

彼女の言葉は才人の笑顔を凍り付かせるのであった。

「あたしはドリアーヌ。ここらを支配しているドライアドの僕であるニンフ（妖精）よ。」

しかしあんた、度胸ある人間よね。もう二度と人間界には戻れないってのに、谷底に降りてくるなんて」

「なんでこんな事に……」

つぶやきは力無く、穏やかで暖かい谷風に掃き散らされていった。

前を歩く十才位の女の子の、ふくらはぎまで伸びた青みが差す鮮やかな赤髪が目になっていた。

木の先住、ドライアドの領域である ” 囚われ谷 ” の谷底はその道程からは予想だにしない程広く、花が一面に咲き誇り

小川が流れ、柔らかな光が差し込む非常に居心地の良い場所であった。



「じつちよ、お兄さん」

「ああ……」

快活な少女の声に、才人はこの世の終わりを迎えた者のような声で応じた。

声だけではない。

その表情も、雰囲気もどよんと暗い影を纏っている。

少女はそんな才人にぶうと頬を膨らませて、腰に手をあてた。

「もう！ いつまでしょげてんのよ！ ヤっちゃったもんは仕方ないでしょ？」

「だって、さあ。

なあ、本当に、本当に、ほんっつとつとつに、あそこから上に登っても帰れなかったのか？

今ならお前が ” 冗談でした ” とか言い出しても、俺、怒らないぞ？ むしろ大喜びしちゃうぞ？」

「本当よ」

少し不機嫌に即答した少女の言葉に、才人はガクつと肩を落とした。

そんな彼をドリアーヌと名乗った少女は、冷たく目を細めて一つ小さく鼻を鳴らす。

それから腰に当てていた手をひらひらと降り、トドメとばかりに口を開いた。

「信じられないって言うなら確かめてきたら？

もっとも、この谷の上は世界の境界しかないからね。そこに足を踏み入れたら今度こそ帰れる保証なんてないわよ？」

「う……そんなつもりじゃ」

「じゃ、大人しくついてきなさいな。

折角助けてくれたお礼に、このわたしがドライアドに掛け合ってあげるって言っているのに失礼しちゃうわ」

「なあ、ドライアドって木の精霊なんだろう？ 世界間の移動とかできるのか？」

「……あんた、そんな事も知らずにドライアドの領域に進入してきたの？」

強くて勇気のある人間ねって思ったのに、実はただのバカなのね。

あーあ、幻滅しちゃった」

「うっせ。お前だってあそこで死ぬよりは良かったらうが」

才人の言葉にドリアー又はうぐつと出しかけた悪態を飲み込んだ。

そのままぐぬぬと唸り、少しの間必死に言葉を探していたが、やがてぶいっつと前を向いてスタスタと歩き始める。

慌ててその後を追う才人。

彼女の不機嫌さを物語るかのように長いその髪が左右に揺れる。

まずい。

怒らせてしまったか？

ちょっと、言い過ぎた、かな？

「わ、悪かったよ。この通り、あやまるから怒らないでくれよ」

「……ま、いいわ。バカでも根は良さそうだし。

根が腐っていると、良い葉は生えてこないものね。

どんなに小さくて頼りない種であっても、しっかり愛情をかけてあげるからこそ、強く育つもの」

「へ？ なんの話だ？」

「お花の話よ。それで？ 一応、ドライアドの事を説明しておいた方がよさそうね？」

「あ？ ああ、頼む。ドライアドってさ、木の精霊なんだから？ 縄張り意識が強いとは聞いてたけど」

「うーん、まあ、そうなんだけど。」

ほら、 ”外” だとしても他の先住や人間と干渉しあう事になるでしょ？

ドライアドは極端にそういうの嫌うのよね。

だから、こうやって住処を世界の狭間に作って引きこもっているの」

「あれ？ フェルタン村で聞いた話じゃ、友好的で乾燥ハーブを自分で取りに来てたらしいけど？」

「ああ、あれね。それ、わたし。ドライアドの名代としてお使いに出ただけ。」

先住です！ て言っとかないと、人間に何されたもんかわからないし。」

最近の人間界は幼女趣味の奴が増えたって噂だし、ほら、わたしって愛くるしい女の子でしょう？」

「……いや、えっと、それは」

「あ、そもそもあんた何しにここに来たのよ？」

次々と話題が変わるドリアーヌの話に、才人は少々困惑しながらも懐にしまっていた袋を取り出し掲げて見せた。

ドリアーヌは袋を見ると、あ、それはと口に出して驚きの表情を作る。

「乾燥ハーブを持ってきたんだ。俺、妖精花で作る薬がどうしても欲しくてさ」

「ふうん？ どっか具合悪いんだ？ どこも悪く無さそうにはみえるけど。あ、もしかして頭が悪いとか？

「まいったわねえ、妖精花はバカにはきかないわよ？」

「ちがう！ 俺の具合が悪いんじゃないわよ、知り合いが必要なんだ」

「！ あんた、もしかして、それ、その知り合い、恋人だとかじゃないでしょうね？！」

返答に突然、ドリアー又は才人に詰めより背伸びをして、その幼い顔を才人の鼻先にまで近づける。

才人は鼻先に彼女の吐息を感じながらも、その氣勢に少し驚いて一歩後ずさった。

ドリアー又はそんな才人を追い詰めるかのようにもう一歩足を踏み出し、どうなの！？と更に問い詰める。

「その、その人とはそんなんじゃないよ」

「その人」とは「あ?!」

「こ、恋人の姉さんなんだ」

恋人という単語を耳にした瞬間、ドリアー又はあっちゃあ！と声を上げて頭を抱え蹲った。

才人はその行為が何を意味するのかさっぱり理解出来ず、座り込む  
ドリアーヌにどうした？ と恐る恐る声をかける。

もしかしてこいつ、俺に気があったのか？ とお気楽な考えが脳裏  
によぎったが、どうも様子がおかしい。

やがてドリアーヌはその長い髪が地にとぐるを巻いて触れてしまう  
事もお構いなしに、座り込んだまま才人をじっとりと見上げた。

「……あなた、やっぱり帰れないわよ」

「なんでだよ！」

「ドライアドはね、すっごく欲しがりで、嫉妬深くて、惚れっばい  
の。」

特に恋人が居る人間の男を見かけると、 ”領域” に引つ張り  
込んで死ぬまで困ってしまう程なのよ？

……ま、大概のドライアドは引きこもってるから見かける事すら  
ないんだけど」

「うげー！」



「あなた、大人しくしてればそこそブサイクだし、引き合わせて助けて貰ったの、だから出してあげて、って言えば  
ドライアドも許可してくれると思ったんだけど……」

「誰がブサイクだ！ 誰が！」

思わずガウ！ と噛みつく才人に、ドリアー又はやれやれと肩をすくめ首を振った。

それからすくと立ち上がったが、その視線は相も変わらずじっとりと半目で才人を見つめており、小さな口の片端を上げて

呆れたような、バカにしたような声色でため息混じりに言葉を続けるのであった。

「……そんな細かい所気にする余裕、あなたにあるわけ？」

「……無いです」

「はあ……最悪だわ。前回迷い込んで来た人間も恋人だか嫁だか居てね。」

案の定ドライアドが気に入っちゃって、そのまま情夫にされちゃって。

たしか、三百年位囲われてたわね」

「へ？ そいつ、人間なのに、か？」

「時間の流れが違うのよ。ドライアドの領域じゃある者は速く、ある者はゆっくりと時間が流れるの」

「うわ！ じゃ、俺は……」

「外に出てみないことにはわからないわよ？ 百年経ってるかもしれないし、一瞬しか経って無いかもしれないし」

「うっ……で、その、囲われてた人、どうなったんだ？」

「死んだわ。二十年位前かな？ ヤリすぎでね、衰弱死しちゃったの。」

ほんと、人間って儂いもんよね。

そりゃ、毎日昼夜時間を問わず激しかったけども。まったく、ドライアドも困ったものよね。

毎日毎日汗と欲望が染みついたベッドのシーツを替える、私達二  
人の身にもなつて欲しかったわ。

……ま、最後の方はシーツの上で ” いたす ” 事は殆ど無かつ  
たから、ちよつとしたお掃除で済んだのだけでも。

マンネリしてくるとすごいのよ？

私達二人の中から年長者が何人が選抜されて一度に……」

「わかつたわかつた！ ドライアドがどんな奴なのかわかつたから  
さ、どうにかならんのか？

俺、なんとしても帰らないといけないんだ」

ドリアーヌの肩を掴み、必死に訴える才人。

腕を組み、眉根を寄せて目を瞑りながらドリアーヌはうーん、と唸  
る。

花畑のような草原に佇む二人に暖かい風が吹いて、才人の黒髪と長  
いドリアーヌの青が差した赤髪を揺らした。

のどかで心地よい情景であつたが、才人の心中は暗く澱んだ空気に  
満ちていった。

どれほどの時間そうしていただろうか。

不意に組んでいた腕を降ろして、難しい表情をニパッと笑顔に変え

たドリアーヌが、何とかなるわよと言った。

「ほ、本当か?!」

「ええ。いい案が浮かんだわ!」

「た、助かったあ。俺、どうすればいい?!」

「簡単よ。発想の転換、って奴ね。うん」

「おお! それで?!」

「あんた、諦めてドライアドの男モになっちゃいなさいよ。それで問題解決!」

「してない! 解決してないぞそれ!」

才人は思わず掴んでいた小さな肩をブンブンと前後に揺らし、それではダメだとばかりに訴える。

ドリアー又は激しく体を揺さぶられつつも、めんどくさい男ねえ、と目で語りながらも再びうーんとそのまま考え込み始めた。

再びのどかな沈黙が続く。

暖かい谷風が吹き抜け、どこかで鳥が鳴いた。

静寂は焦る才人一人をじわり圧迫する。

そんな無音にたまりかねて、才人はドリアー又を急かそうと言葉を探し始める。

しかし、その沈黙を破ったのは才人でもドリアー又でもなく、第三者であった。

柔らかな谷風が吹き渡る花畑に二人、考え事をしている所へドリアー又が先導していた方角から、女性の何か叫び声が聞こえてきたのだ。

才人とドリアー又は同時に声の方へ振り向くと、遠く草原の向こうに誰かが手を振っている姿が確認できた。

人影は背は高かったがドリアー又と同じ髪の毛の持ち主で、顔立ちもよく似ており一目で彼女と同じニンフという妖精だと才人にもわかった。

恐らくは先程ドリアーヌがちらと言っていた ” 年長者 ” というやつである。

走り寄って来る彼女は良く張った胸と細い手足、才人よりすこし低いドリアーヌよりも遙かに高い背の持ち主であり

それらを除けばドリアーヌとよく似た、というよりも同じ容姿である。

そんな大人になったドリアーヌと表現できよう女性が、必死の形相を浮かべながら才人達の目の前まで走り寄ると

強い調子でドリアーヌになにやらまくし立て始めるのであった。

「ドリアーヌ！ こんな所に！」

「ドリアーヌ？ どうしたの？」

「何を暢気な事を言ってるのよ！ …… だれ？ そいつ。人間？」

まあ、ドリアーヌ。まあまあまあ、小さなドリアーヌ。

だめでしょ、そんなの拾って来ちゃ。ドライアドに見つかったら、また乱痴気騒ぎに駆り出されるじゃない。

私、やあよ、ソレとくんずほぐれつに睦み合うの。捨ててらっしやい」

「もう、違えば。コレね、わたしを助けてくれたの。なぜかドライアドの領域にオークの群れが紛れ込んでね」

女性の名も少女と同じドライアドと言っらしい。

才人はまるで小さな子供に拾われてきた汚い生き物のような扱いに、少々憤りを感じて唇を尖らせたのだったが

とりあえずは二人のやり取りを黙って見守ることにした。

ドライアドの様子と話から察するに、ドライアドの領域と呼ばれる谷底は、地球は勿論ハルケギニアの常識が通用しないかもしれない。下手に会話に介入して、予想だにしない理由で彼女達の機嫌を損ねてしまつては元も子もない。

そう判断しての事である。

ただし、じつとりと隣の小さなドライアドにはなんだよその言い草、と冷たい視線は送つての判断だったが。

「あんだ、オークに襲われてたの?!」

て、そうそう! はやく戻ってらっしゃい!

そのオークの大群が村に向かってやって来るって話になってるのよ!」

「なんですって! それ本当なのドリアーヌ?!」

「ええ。村じゃみんな、その対応で蜂の巣をつついたような騒ぎになってるわ!

わたしは乾燥ハーブをフェルタン村に取りに行ってくるから、あんたも早く村にもどんなさい!」

「えっと、あの、そのハーブなら俺が……」

ここで初めて才人は二人の会話に割って入った。

どうもかなり切羽詰まっているようで、用途はわからないがフェルタン村の乾燥ハーブが必要であるらしい。

才人が懐から乾燥ハーブが入った袋を取り出し掲げてみせると、大人のドリアーヌは目を丸く開いて才人をじっと見つめた。



しばらくまるで値踏みするかのように上から下まで眺めた後、はつと状況を思い出したのか口元に両手の先を当てて

驚いたように、それとすこし大きさに感謝の言葉を口にする。

「まあ！ まあまあまあ！ あんた、それをわざわざ？　ありがとういわ！　ありがとう！」

「えっと、俺、妖精花が欲しくて」

才人の言葉は最後まで紡げず、かわりに台詞を遮るように大人のドリアー又はべつと素早く才人の手から袋を奪い取った。

え？　と呆気にとられる才人の眼前で、大人のドリアー又は袋の中身を確認すると、満面の笑みを浮かべて小さなドリアー又に向かい嬉しそうに語りかける。

「やった！ このハーブがあればオークが村にやって来る前にあれ” が作れるかも知れないわ！」

ほんと、ありがたいわ！ これでわざわざ人間界に行かなくて済むわね！」

「あの、それと俺、人間界に帰りたい」

「ドリアーヌ！ さあ、帰るわよ！ みんなコレを持って帰るのを首を長くして待っているんだから！」

「そうねドリアーヌ。でも、今までこんな事なかったのに……」

「あなたはまだ若いからそう思うんでしょうけど、たまにこんな事があるのよ？ 原因はわかんないけどね」

「へー、そうなんだ？」

「あとう、俺……」

「あら。何コレ？ 人間？ もう、ドリアーヌ。もうもうもう、小さなドリアーヌ。」

だめでしょ、そんなの拾って来ちゃ。ドライアドに見つかったら、

また乱痴気騒ぎに駆り出されるじゃない。

私、やあよ、ソレとがっぷりしっぷりに絡み合っの。捨ててらっしやい」

「おい！」

才人は思わず声を荒げてしまった。

その剣幕に大人のドリアー又はえ？ 何この人？ といった様子で首を傾げ、きよとんとする。

どうやら冗談ではなく、本気でこの短時間で才人の存在を一度忘れてしまったらしい。

才人は出しかけた罵倒の言葉を飲み込みながら、隣に居た小さなドリアー又にどういうことだ？ と言外に尋ねた。

「ドリアー又はね、いつも ” ころ ” なのよ。

醜い物や好みじゃない物、イヤな事はすぐ忘れちゃうのよね。

まあ、そんなだからよくドライアドの ” お楽しみ ” に駆り出されるのだけねど。

あ、誤解しないで、わたしはそうじゃないから」

「……すっかり、イヤだって言ってたドライアドの乱痴気騒ぎのこととは覚えているようだけど？」

「本音はイヤじゃなかったんでしょ。ノリノリだったって話だし」

「……なあ、俺、そんなにブサイクなのか？」

「あら。意外と繊細なのね。人間のくせに」

「何々？ どういうこと小さなドライアーヌ？」

「あ、こっちの話よ。えっと、この人オークに襲われていたわたしを助けてくれたの。」

外に出たらしいから、お礼に村へ連れて行ってドライアドに外に出してあげてっってお願いしに行く所だったのよ」

「ふうん？ そうね、コレならドライアドも欲しがりはしないわよね。」

「じゃ、特別にあんたも村に入れてあげるから、はやく来て！ オークの群れも結構近い所まで来てるし！」

そう言つて、大人のドリアー又は踵を返して乾燥ハーブが入った袋を手に元来た方角へと走つていつてしまふのであつた。

後に残されたのは、小さなドリアー又とイジけて蹲り、地面にノの字を書く才人である。

小さなドリアー又はもう一度腰に手をあてて、すんと鼻を鳴らし惨めつたらしく座り込む才人を見下ろして一言

いくわよ、と才人に声をかけるのであつた。

暖かい風が言葉に合わせたかのように吹きわたる。

柔らかな日差しは花々が咲き乱れる谷底の草原をキラキラと光らせた。

しかし、才人の胸の内は暗くどんよりと曇っていたのであつた。

”囚われ谷”に住むニンフ達の村へは、それから小一時間ほど歩いた場所にあつた。

村は谷の両側の崖が特に狭まった場所に作られており、岩を積み重ねた城壁のような壁と厚い木の門が村の入り口を守っていた。

妖精の住処と呼ぶには中々物々しい外観で、高くそびえる城壁のよ  
うな壁の上ではドリアーヌと同じような容姿をしたニンフ達が

弓を携えて慌ただしく行き来している。

村と言うよりもまるで要塞だな、という感想を才人が抱いていると  
ゴゴン、と目の前の門が重苦しい音を立てて内側へ開き

門番をしていたニンフがさっさと入れとばかりにあごをしゃくつて、  
二人を中へと招き入れた。

門の内側の村は特に変わった所もなく、木と石で出来たハルケギニ  
アでよく見る平民の家が点在する光景が広がっていた。

あわただしくニンフ達が行き来する門から続く道の向こうには、貴  
族が住むような立派な屋敷が見える。

恐らくはドライアドの住処なのであろう。

「なあ、ドリアーヌ」

「なあに？」

「もしかしてドライアドってあの屋敷に住んでいるのか？」

「ええ、そうよ。あんた、そこまで説明しなくちゃダメなほどバカじゃないと思ってたけれど？」

「うっせ。いや、そうじゃなくてさ。木の精霊なんだろう？ ドライアドって」

「え？ やっぱりバカなの？ 今まで何度もそう言ってるし、あんたもドライアドは木の精霊って知ってるんじゃないの？」

「だあ！ だから！ なんで！ 木の精霊が！ あんな屋敷に住んでるんだよ！」

普通はさ、こう、すっごいでかい大樹に住んでいたりして、ぼうと光りながら出てくるとかするんじゃないかねえのかよ！」

「はあ？ なんでそんな所に住まなきゃならないのよ？」

「木の精霊だろ！」

「わたしはそのしもべの妖精よ」

「お前じゃねえ！ ドライアドの事だ！」

「まったく、人間ってほんと、無知ねえ。精霊や妖精だって、心地よいベッドに眠りたいに決まってるじゃない。」

木の精霊が大樹に住処を作らなきゃいけない理由でもあるわけ？

あ、あのお屋敷は木造だし、見方を変えれば木の中にすんでるかもね」

とめどなく続いていくドリアーヌの台詞を余所に、才人は顔を引きつらせながら一人暗澹として思う。

うすうす気が付いていたのだけど。

こいつ……いや、こいつらとは微妙にコミュニケーションがとれない。

会話が噛み合わないことがしばしばある。

人間ではない、妖精だからか？

才人は思わず額に手をあてながら、隣で一方的に喋り始めたドリアーヌの言葉を聞き流しつつも、現在の状況を整理することにした。



彼女と会話をしていると、どうも頭が混乱してきて落ち着かないからだ。

えっと、まず。

俺は妖精花を貰いにここに来たんだよな。

で、オークに襲われてたこいつを助けて、ドライアドの領域に入っ  
てしまっ。

ドライアドの領域は一度入り込むと外には出られないらしくて。

助けたこいつは、ニンフとかいうドライアドのしもべの妖精である  
らしい。

あと、ニンフは年齢の違いこそあれ皆同じ容姿と同じ名前を持って  
いて、ちよっと会話が成り立ちにくい。

それから、外に出してくれとドライアドに頼むためにこの村に来て。

で、今この村はオークに襲われようとしているらしくて。

そうそう、あの大人ドリアーヌが言ってたけれど、その対策に乾燥  
ハーブが必要らしい。

あ！

乾燥ハーブ……あの子に持って行かれてしまった！

うわぁ……俺、何やってるんだよ……

と、凹んでる場合じゃない！

才人は慌てて、隣で得意げにドライアドと木の関係について勝手に喋り始めていたドリアーヌに声を掛けた。

「なあ、ドリアーヌ！」

「でね、ドライアドはその体に……ん？ 今度はなによ？ 言っとくけど、ドライアドは人面大樹じゃないからね？」

「あ、そうなんだ？ いやいや、そうじゃなくて。

俺、外に出たいんだけど、元々は乾燥ハーブと妖精花を交換して貰いにきたんだよ」

「ふうん？ そういえばそんな事言ってたわね」

「……さっきの子に乾燥ハーブ渡しちゃったんだけど、妖精花は誰に貰えばいいんだ？」

「妖精花はわたしがもってるわよ。わたし、こつ見えてもニソフの中じゃ一番お花を育てるのが上手いの」

「そうなんだ？　じゃあ、乾燥ハーブも渡したんだし、くれよ、妖精花」

「……いいけれど、今は無理よ？」

「え？」

「はあ、これだから人間は無知で困るのよね」

ドリアー又は吐き捨てるようにそう言って、肩をすくめてゆっくりと首を振った。

仕草は非常に憎らしい物であったが、まだ幼さの残るその容姿のせいかどちらかと言えば才人を苛つかせるというよりも

不安にさせる仕草であった。

そして、その不安は的中する。

目の前の妖精は、既視感を添えてすんと鼻を鳴らしながら呆れた様子で才人の心に闇を落としたのだった。

「妖精花はね、妖精しか触れないから  
”妖精花”  
なのよ？」

「なんでこんな事に……」

無意識に口をついて出た言葉は、すっかり馴染みつつある愚痴であった。

時刻は夜。

才人は一人、豪華な天蓋のついた巨大なベッドに腰掛け、薄暗く部屋を照らすランプを見つめる。

ランプはごく普通の仕組みで明かりを灯すものであったが、真鍮と金の装飾が施されなんとも見事なできばえである。

部屋は広く、ランプを始めとした調度品もそのどれもが、他では見ることが出来ないような品ばかりであった。

まるで象でも寝られそうな程広いベッドに一人腰掛ける才人は落ち着かないのか、何度も見渡したはずの部屋をもう一度見渡し

ベッドの脇にあるナイトテーブルにその視線を止め、腰を上げた。

ナイトテーブルには銀の水差しとカップが置いてあり、落ち着かない気持ちを静めるべく才人はカップに水を注ぎ一気に煽る。

同時に、ぶは！ とカップに煽った水を戻してしまった。

水差しに入っていたのは、強い強壯用の酒であったからだ。

才人は激しく咳き込みながらヒリヒリとする喉をさすり、足早にバルコニーへの扉を開くべく窓の方へと移動する。

ランプに照らされ、あるいは自然に妖しく発光している薄絹のカートンを押しのけながら扉を開けると

心地よい谷風がびゅおと音を立てて室内に入り込んできた。

部屋に充満していた香が新鮮な空気によって散らされ、あれ程強く香っていた甘い芳香が薄まっていくのを実感して才人は胸を撫で下ろす。

しかし、先程の酒の効果かすぐに喉と胸が熱くなるのを再確認して、才人は思わず眉をしかめた。

「まったく、ドライアドの奴……夜這いかける気満々じゃねえか」

愚痴と言つべきか、それともどこかで聞いている誰かに聞かせたいのか、才人の咳きは誰かと話しているかのような声であった。

それから眉をしかめたまま目を瞑り、左手のルーンを僅かに輝かせる。

たちまちルーンの輝きを察知した ”グリムニルの槍” が、強壮酒の成分を分解し才人の体を万全な状態へと導いた。

才人は胸と喉の不快感が消えたことを確認すると、ルーンを鎮めて落ち着かない室内からバルコニーへと足を進める。

どうも部屋の中に居る気にはなれなかった。

これからされるかもしれないドライアドの誘惑や、香炉から染み出る官能的な芳香から逃れる為ではない。

深くえぐられた心が重く、窒息しそうな程暗い影を噴き出していたからだ。

バルコニーの手すりに手を掛け、才人はドライアドの屋敷から一望できる ” 囚われ谷 ” の村へと目を向ける。

眼下の村は所々にかがり火が焚かれ、昼間と同じようにニンフ達が慌ただしく行き来していた。

才人が視線をゆっくりと上げると岩で出来た高い塀の向こうに、草原を埋め尽くしている無数の明かりがみえた。

群れ、というよりも軍勢と言えるほどの数のオークである。

かがり火の数から判断するに、数千程の規模になるうか。

恐らくは夜の内に総攻撃を行う為であろう、オーク達は後続の群れが到着するのを待っているようであった。

一体、誰があんな軍勢を……しかもオーク達を統率しているんだ？

一体、どうしてこんな軍勢が？ カトレアの領地に数千ものオークが居たとは考えられないし……

一体、どうやってドリアー又達はアレを追い払おうって言うんだ？

疑問がいくつも湧き、すぐに胸の闇に吸い込まれていく。

闇は ” 些細な疑問 ” など簡単に飲み込みながら激しく渦巻いて才人を苛む。

植え付けられた ” 闇 ” の種は見る間に生長し、今や宿主である才人を飲み込まんとするほど大きくなっていった。



才人はバルコニーの手すりに手を突いたまま俯いて小さく呟く。

「ルイズ、俺は……」

呟きに答える者はいない。

才人の脳裏に浮かんだ笑顔はこの時、なぜか手の届かない気がした。

「妖精花はね、この領域に満ちるドライアドの魔力を吸って花を咲かせるのよ。

このドライアドの魔力というのは、変化を好んでね。

わたし達ニンフなら問題ないんだけど、”外” からやって来たあんたが触るとたちまち魔力があんたに流れ込んで

花が枯れちゃってわけ」

妖精花に自分は触れないと聞かされ、呆然とする才人にドリアーヌは更に言葉を続けて説明をした。

それからすん、と小さく鼻を鳴らしてもういいでしょ、行くわよ？と才人を促す。

「ちよ、まってくれよ!」

「なあに？ さっさとドライアドに掛け合って外に出ないと、オークの襲撃に巻き込まれちゃうわよ?」

「そんなことより、なんで俺が妖精花に触れないんだよ!」

「は？ あんたバカ？ バカなの？ もう一度説明しなきゃダメな程バカなの？ ああそう、バカなのね」

「うっせ！ そうじゃなくて、妖精花が妖精しか触れないなら、なんでフェルタン村の人間に渡せるんだよ!」

「そりゃ、渡す前……というか、領域の外へ出る時に花の魔力が固定されるからに決まってるじゃない。」

「ここじゃ不安定な花の存在が領域外に出ること……て、おバカなあんたに説明してもわからないでしょうね」

ドリアー又はそう言うと、もう一度今度はバカにするように鼻を鳴らし才人をじっとりと睨んだ。

そんなのわかるか！ と才人は叫びそうになったが、台詞を遮るようにドリアー又は踵を返し再び屋敷の方へ

スタスタと歩き始めてしまったので、渋々出しかけた怒りを飲み込み後を追う。

険悪な感情と残った疑問を胸に抱いたまま、才人が屋敷の前に立ったのはそれから半刻も歩いた頃である。

屋敷は大きく、ハルケギニアの貴族のそれのような造りではあったが、他にこれといった特徴はみられなかった。

「さ、こじよ。いい？ 余計な事口にしちゃだめよ？」

「ああ……」

「なによ、まだ怒ってるの？」

「まーな」

「やあねえ、心の狭い男つて。だから人間つて嫌いよ」

「うつせえ。なあ、兎に角花は貰えないのか？」

「……あんたが外に出れたら、わたしが日を置いて持って行ってあげるわ」

「日を置いてって……どれ位なんだ？」

「うーん、今年の方はアレで十分だから来年つて事になるわね。

ドライアドは私達ニンフであっても、無闇に外に出ることは許可しないし。

ああ、大丈夫。来年はあんたの分も余分に持って行ってあげるか

ら

「そんなに待てるか！ どうしても今必要なんだ、頼むよ」

「……そんな事言っただって、ドライアドの許可がないとどうしようもないんだし」

「じゃあさ、ドライアドがいつて言えば良いんだな？」

「まあ、そうなんだけど……辞めた方がいいわよ？」

「なんでだよ？」

「なんでって……んー、どう説明したらいいかなあ？」

ドライアー又は屋敷の門の前でうーんと腕組みをしてなにやら考え込み始めてしまう。

どうやらまだ何かドライアドには問題があるらしい。

しかし、一刻でも早く妖精花を持って帰りたい才人はやってみなく

ちや分らないだろ、早く中に入ろうぜと声を掛けながら

考え込む彼女の前を通り生け垣で出来た門を潜った。

そんな才人を見てドリアー又は、考え事を中止して大きなため息を一つつき、足早に門を潜って才人を追い越すのであった。

彼女はそのまま屋敷の扉まで歩くや大きな扉を叩き、中から出て来たメイド姿のニンフに何やら話しはじめた。

恐らくは才人に助けられたことなどを話しているであろう。

会話は短く才人がドリアー又には追いつく頃には終わり、メイドとドリアー又は屋敷の扉を改めて開け放ちながら

才人について来てと声をかけ屋敷の中へと招き入れた。

彼女達に連れられて客間と思われる一室に通された才人は、僅かに緊張を覚えながらもソファに腰を下ろす。

……なんとかドライアドに頼み込んで、妖精花を貰い元の世界に戻る必要がある。

その為にはルイズの存在を悟られてはならない。

知らず体が強ばる。

ぎゅ、と拳を握りしめながら室内を見渡していると、程なくガチャリと音を立てて部屋の入り口の扉が開いた。

「まったく、この忙しい時に来客だなんて……あなた？ ドリアー  
又を助けてくれた人間というのは」

「は、はい！ 俺、平賀才人と申します」

「名前なんてどうでもいいわ。あたしは外にいるオーク鬼共を何とかするのにいそがしいの。」

「どーせ外に出たたって話なんでしょ？ んー？」

現れたのは妙齡の女性であった。

目も醒めるような深緑の長い髪に、体のラインがくつきりと浮かび上がるビスチエドレス。

グリーンの瞳が印象的な顔立ちは大人の女性の色香に溢れ、垂れた目元は見る者にゆったりとした印象を与えられるもの

どこか圧迫感に似た息苦しさを感じさせる雰囲気を纏っていた。

恐らくは彼女が屋敷の主であり ”木の精霊” であるドライアド

なのであろう。

水の精霊とは全く違う、というよりもドリアーヌと同じようにどこからみても人間としか思えないようなその姿に

慌ててソファから立ち上がっていた才人は内心本物か？ とついにぶかしげるのであった。

そんな才人を値踏みするように、ドライアドは柳のように細い腰に手を当てながら顔を近づけ上下にせわしく視線を動かす。

あきらかに香水ではない、新鮮なバラのような花の香りが才人の鼻をつんとくすぐる。

それは彼女の体臭であろうか。

「あ、あの……」

「んー………いらない。好みじゃないわね、あんた。いいわ、出て行きなさい」

「本当ですか?! 俺、ここから出られるんですか?!」



「ええ、いいわよ。良かったわねえ、ブサイクで。体もそんなにた  
くましくないし。」

「やっぱオトコは顔と体よねー」

ドライアドはそう言ってカラカラと笑った。

才人はあまりにあっけなく出た領域の外へ出る許可に喜ぶよりも、  
ブサイクと断じられたくましくないと評価されたことに

肩をガツクリと落としてしまう。

しかしそれも僅かな間での事であり、すぐに気を取り直してもう一  
つの目的を遂げるべく顔を上げるのであった。

「あの！ それとですね……」

「なあに？ あたし忙しいって言わなかったっけ？」

「すみません、すぐにすみませんから。」

えっと、俺、元々乾燥ハーブと妖精花を交換して貰いにここへ来

たんです」

「あら、そうなの？ でもハーブはさっき戻ったドリアーヌが持ってきたけれど……」

「それ、俺が持ってきた奴です。お願いします、どうか妖精花をくれませんか？」

「彼の言葉は本当ですわ、ドライアド」

必死に頼み込む才人の言葉に合わせて、ソファの後に立っていた小さなドリアーヌが言葉は真実であると助け船を出す。

ドライアドは二人の言葉にふむ、と口元に人差し指を曲げて当てて甘噛みをした。

仕草は優雅で色香に満ちたものであったが、苛立ちも多少混じっていて才人の心中を粟立たせる。

沈黙。

じっと才人を見つめるドライアド。

じつとドライアドを見つめる才人。

そんな彼の表情を読み取ってか、ドライアドは突如ふふんと妖艶な笑みを浮かべ、少し待ってなさいと言い残り部屋を出て行ってしまった。

残された才人はソファから立ち上がったまま、後にいる小さなドリアーヌの方を向いて無言で花を貰えるのか？ と尋ねた。

ドリアーヌは軽く肩をすくめながら、さあ？ とジエスチャーを行って答える。

どうやら才人に渡す花を取りに行ったわけではないらしい。

そもそも、妖精花はその魔力を固定しなければ領域の外からやって来た才人には触ることができないとドリアーヌは言った。

花の魔力が固定されるのは領域の外へ出る時だとも。

つまり、ここで手渡されることはまず無いと判断できる。

じゃあ、何をしに部屋を出て行ったんだ？

ルイズの事、ばれた……とか？

それともやっぱり花を取りに行っていて、ドリアーヌに手渡しながら「外までついていってあげなさい」とでも言うのだろうか？

疑問は希望的観測と悪い予感を伴って次々と才人の胸の内に湧き出る。

しかし、それらの予想は全て当たりはしなかった。

戻って来たドライアドが手にしていたのは、花ではなく何か透明の液体が入った小瓶であったのだ。

ドライアドは部屋に戻って来るなり才人にまあ、お掛けなさいなと口にして座らせ、自身も才人と対面するようにソファに腰掛けて

足を大きく組んだ。

ビスチエドレスから白い足がゆっと露わになり、才人からは太ももから臀部まで艶めかしく見えるような足の組み方である。

う、と思わず目を逸らす才人を見てふふんと口の端を上げながらドライアドは、手にしていた小瓶をソファテーブルの上に置いて

満足げにソファの背もたれに上体を押し当てるのであった。

「飲んで?」

「え?」

「これはね、あかし特製の魔法のお薬。飲んで?」

「あの、俺、花……」

「ニブい子ねえ。」

さつきちよつとあと十年位困えばマシになるかな？ っと思っちやっただけど、辞めといて正解だったようね。

いいこと？

いまあたしは忙しいの。外で集結しつつあるオーク鬼どもをさっさと追い払う必要があるの。

妖精花をあげるのは良いけれど、あなたじゃ触れないのよ？」

「それは、聞きました。あの、厚かましい話なのですが、ドリアー又……ニソフの誰かに外まで送って貰えれば……」

「ええ、厚かましいわね。さつき忙しいって言ったでしょ？」

このあたしが忙しいんだから、ニソフも忙しみに決まってるじゃない。

それにあなたを送った後、その子はどうやって帰るの？

またオークに追われるかも知れないのに」

「あ……」

「だから、飲んで？」

「えっと、あの……これは？」

「あなたおバカ？ おバカなの？ もう一度説明しなきゃダメな程おバカなの？ ああそう、おバカなのね。

まったく、しょうがない子ねえ。これだから人間のブサイクはヤなのよ。

良い？ わかりやすくう、説明するとお、これはあ、あたしがあ、作ったあ、魔法のお、お薬。

さっき言ったでしょう？」

「おい！ そうじゃな そうじゃなくてですね、何の薬なんですか？ これ」

「簡単に言えば、あなたがあたしの領域の一部となる薬ね。

これを飲めば花に触れる事ができるようになるの。ただ……」

「ただ？」

「あたしやドリアー又達に、あなたの ” 全て ” が伝わっちゃうけどね。

領域の一部になるって事は、この世界を作り出したあたしやドリアー又達と一体になるって事だもの。

まあ、他に害は無いから安心なさいな」

そう言つて、ドライアドは悪戯っぽく微笑んだ。

対照的にうげ！ と顔を引きつらせる才人。

背後では深く深くため息をつく小さなドリアーヌの気配。

再び沈黙。

いやその沈黙の中、才人と背後のドリアーヌは無言の内に顔も合わせず会話を行われていた。

すなわち、そら見た事かと唇を僅かに尖らせながら薄目で才人を睨むドリアーヌ。

仕方がないだろ！ と引きつった表情の才人。

あらあ？ なあに、何か問題でもあるのあ？ と無言で会話に参加してくるドライアド。

静寂に支配された室内は、無言の罵倒と愚痴、好奇心に満たされる。

そんな中、才人はどうすべきか一人考えていた。

目の前の薬を飲めば、ドライアドにルイズの事がバレる。

ドリアーヌの話だと、ドライアドに惚れられて引き留められるかも

知らない。

しかし、飲めば領域の外に出ることが出来る。

そうだ。

いざとなれば、力尽くで出ていけばいい。

妖精花は隙を見てドリアーヌに取ってきて貰い、それからコッソリとルーン全開であの崖まで走れば済む話ではないか。

うん、そうだ。

カトレア義姉さんには悪いけれど、花の調達がもし無理でも諦めて手ぶらで外に出てもいいんだ。

”前” はこんな事は無かった。

薬を持って帰らなくても、カトレア義姉さんの命に関わる物ではないだろう。

ルイズだって ”前” と同じようにヴァリエール城から連れ出せばいい。

……それだとすっげえ情けない話になってしまうけれど、このままここで一生を過ごすよりははずっとマシだ。

うん。

花が手に入るかはともかく、これを飲んでも本質的には事態の主導



権は俺に在り続けるな。

うんうん、そうだよ。

飲んでも 問題ない。

才人はソファ―テーブルに置かれた小瓶を眺め、ゴクリと一つ生唾を飲み込んだ。

決心は付いた。

ゆっくりと小瓶へ手を伸ばす。

そんな彼に前後からどうすんの？ 飲むの？ と好奇心混じりの視線が注がれ続ける。

テーブルへ伸ばした手は小瓶をつかみ取り、反対側の手は封として差し込まれている木製の栓を引き抜いていた。

ぽんと音が鳴り、何とも言えぬ甘く濃い香りが立ちこめる。

一拍おいてもう一度ゴクリと生唾を飲み込む才人。

次の瞬間、才人は一気に小瓶の中身を煽った。

鼻の奥から濃縮された花の香りのような芳香が立ち上り、視界が白く染まってゆく。

不快感は無い。

むしろ気持ちがあらぎ、心地よい香りが意識を見る間に薄めてゆく感覚であった。

うたた寝をしているような、又は疲れ果てて泥のように眠ろうとする時のような強烈な眠気と浮遊感。

おい。

まさか。

起きたら何年も経ってました、ってオチじゃ

僅かな不信任を乗せ、変わらず妖艶に微笑むドライアドの美しい顔を睨んでる内に視界が白くなっていく。

いや、それだけではない。

部屋が、ドライアドの笑みが、視界が歪んでいく。

グネグネと曲がり、あるいは上と下が融合し、そして視界が一気に白から青へと変わった。

あんた誰？

忘れようもない、愛しい声。

視界を埋める青を遮るように現れたのはルイズの怪訝そうな表情。

覚えている。

これは俺が召喚された日の景色だ。

才人は気が付くと、広い草原と青空の下仰向けに寝そべっていた。

これは、夢か？ やけにリアルだな、と考えながらまだボンヤリとする頭を振り上体を起こす。

同時にギン！ と音を立てて剣が側に突き立った。

「君。これ以上続ける気があるのなら、その剣を取りたまえ」

声の主はギーシュ。

やれやれ、今度は……ギーシュと決闘をした時の記憶か。

才人は立ち上がり、剣を握る。

しかし握った筈の剣は ”破壊の杖” へと変わり、同時にギーシユが風船のように膨らんで三十メートルもある巨大な土のゴーレムに変化した。

フーケのゴーレム、か。

ルイズは……いた。

んだよ、その顔。

うーん……どうやら ”これ” は ”最初の” 記憶らしいな。

才人は一人納得しながら、いつの間にそうしたのか ”破壊の杖” を肩に担いで狙いを定めた体勢のまま

フーケのゴーレムに向けてトリガーを押してみせる。

”破壊の杖” から白い煙を上げてロケット弾が飛び、爆音を響かせた。

爆風に思わず目を瞑っていた才人が次に目を開くと、そこはアルビオンであった。

今度は随分と飛んだな、と才人が考えている間にも目の前の景色が目まぐるしく変わっていく。

雨の中、ウェールズの生きた死体と共に魔法を唱えるアンリエッタ。

目の前に広がる七万の軍勢。

立ちふさがるエルフ。

巨大なゴーレム。

砕け散るデルフリンガー。

裸で噴水に腰掛ける、ルイズの美しい背中。

年老いたルイズの泣き顔。

風景はやがて消え、記憶にある人物の顔だけとなる。

ルイズの笑顔、泣き顔、怒り顔、様々な表情。

いや。

タバサのも、アンリエッタのも、ティファニアのも、キュルケのも、  
ギーシュやマリコルヌ

それからコルベールといった面々の様々な表情もあった。

そんな中見覚えのない顔がいくつもあり、その内の一つがついと進み出て才人の前に立つ。

「ねえ、貴方は今満足してる？ 幸せ？」

顔は才人と同年齢程で、どこかタバサに似ていた。

君は……

才人はそう尋ねようとして、ハッとする。

辺りはいつの間にかどっちが前でどこが分からないほどの闇に包まれており、才人は愛らしいドレスを着ている

タバサによく似た少女と二人きりになっていたのであった。

「ねえ。黙ってないで、答えてくれない？」

「あ、ああ。ごめん。君は……」

「……貴方は今、幸せ？」

「え？ えっと、うーん……わからないよ。幸せになることもがいてる所だし」

「そう？       ”私達”       を否定するために戻った割に随分と楽しそうじゃない」

「え？       君は」

「貴方と母さん……タバサの娘よ。名前は       。まさか忘れちゃう程薄情な父親だとは思いたくないけれど？」

「父さん！」

混乱する才人に突如、背後から少年の声がかけられた。

声に振り向くと、腰に小さな衝撃を受け才人は思わずよろけてしま

視線を下に移すと、そこにどこかアンリエッタの面影を残す少年が才人に抱きついて二へへと齒を剥き笑っていた。

「父さん！ 父さんは僕のこと、覚えているよね！」

「あ、え、君は……」

「僕だよ！ だよ！」

「ねえ、父さん！ 父さんに貰った『瀑布の恐王』って二つ名、僕は凄く気に入っているんだ！」

「国民や臣下のみんなは凄く怖がっていたけれど、それでも僕はこの二つ名が大好きだったんだよ？」

「ふーんだ！ お父様に頂いたあたしの『 』の方がずっとかっこいいもん！」

「……パパ？ わたし、 の事も忘れちゃったの？」

闇の向こう、才人に抱きつく少年の脇に金髪の少女と黒髪の少女の姿も現れる。



皆十歳程の少年少女であり、どの顔も見覚えのある面影を残していた。

俺は、知っている。

この子達の名を、顔を、知っている。

なにしろこの子達は俺の……子供達なのだから。

君の名前は……

しかし、才人はパクパクと口を開き少年の名を出そうとするも、何も出ては来ない。

記憶に残っていない名を、口にする事はできないからだ。

原因は果たして、以前精神が ” 若い才人 ” に取り込まれかけた時の後遺症か、それとも……

「無駄よ。その人は覚えてはいない。私達のことなど、何もね」

「えー！　なんでだよー！」

「ちよつとお、何て事言ひのよ！」

「パパ？ そう、なの……？」

才人の背後で一番最初に現れた少女　タバサとの間にもつけた年  
長の娘の言葉に、少年達は一斉に声を荒げもしくは

不安げな言葉を才人にかける。

俺は……

「……ごめん、俺……」

「その人はね、私達の事、いらないうって思ってるのよ」

「ちがう！　俺は　」

「違う？ ” 今度” はたった一人、ルイズおばさましか愛さないのでしょうか？」

それはつまり、私達は ” 生まれてこなくてもいい” って事じゃない」

「えー！ そうなの？ 父さん？」

「お父様……それ、本当なのですか？」

「いやあ、パパ、わたしの事嫌いにならないでえ」

少女の言葉を強く否定した才人に、少年達は群がりすぎるような目で才人を見上げた。

才人は少女に反論できぬまま、少年達の顔を見た。

その顔は、よく知っているはずの顔は、先程まであった顔は。

よく見えない。

なにも、ない。

ただ、ぼんやりとぼやけて見えるだけである。

俺は……

「ちがう、俺は……」

「違う？ 何が違うの？」

「酷いよ父さん！」

「酷い！ お父様！」

「パパ、ひどい！」

「俺は……俺は！ ただもう一度、ルイズを泣かさないように……  
それに！」

未来で生きていたお前達が消えたりしないって！」

「理由になってないわ。」

ルイズおばさまが泣かないならば、私達はこの世界で生まれなくとも良いって事？」

「それ、は……」

そこから先の言葉は出なかった。

才人にしがみついていた子供達はいつの間にか消え去り、暗闇の中  
タバサの娘が立っているだけである。

俺……

「俺は、別にお前達が生まれなきゃいいって思っているわけじゃない……」

「じゃあ、”今度も” お母さん……タバサを愛してくれるのね？  
アンリエッタ姫を、ティファニアを、シエスタを抱くのね？」

ああ、そうそう、そうよね。

貴方を愛する女の人全てを抱いてあげないと不公平よね。

ふふ、”今度” は兄弟姉妹が沢山増えそうで凄く楽しみだわ」

「いや、それは……」

「何？　じゃやっぱり私達が生まれてくる必要はないって事？」

青い髪の少女の言葉に、才人は全身の力が抜けていく気がした。

少女の顔は既に　”わからなく”　なっている。

いや、顔だけでなく姿その物がぼやけてみえた。

ちがう。

そうじゃない。

俺は只、ルイズを泣かせたくなかっただけだ。

泣かせ続けた人生をやり直すチャンスを与えられて、縋っただけだ。

ただ、それだけなんだ……

気が付くと才人は音もなく膝を折って、その場に座り込んでしまっていた。

少女の姿は既に闇の中へと消えている。

闇は才人を押し潰さんと重く背にのしかかり、鼻から、口から、あらゆる場所から才人の体内へ侵入してきた。

それは後悔、嫌悪、慚愧、憎悪と変わり、黒く汚らしく才人の心の中で荒ぶっていく。

「う、俺、俺、俺はただ……」

「くく、何を今更。」

あれ程派手に ”過去” に干渉しておいて、未来をほんの少し変える程度で済むはずがなかるうに「」

闇の中、痛み無き痛みについ漏れ出た声に答える者がいた。

蹲っていた才人が顔を上げると、暗闇の向こうからチリンと鈴のような音を立てながら黒い子猫が歩み寄ってくる。

「……ノルン？」

「どうした？ 伝説の勇者。イーヴァルディの勇者。神の左手。神の盾。伝説の使い魔。我らの剣。ハルケギニアの英雄。」

「うーむ、どれも捨てがたい呼び名じゃの。」

「しかしそのどれもに相応しくない、随分と情けない顔しおって」

「なんで、お前が……」

「さて、何でじゃろうな。そんな事よりもほんに、情けないのう。」

「お主、まさか『未来を変える』と言うことは『変えなかった未来』を捨てると言うことだと認識しておらなんだか？」

「これは……これは！！ お前か！ お前がこんな」

「くく。わしに当たるでない、このバカタレ。」

「そんなわけなからう？ わしはお前の記憶に棲む、”時の魔女”の残骸にすぎんよ。」

「それよりも、じゃ。」

「どうじゃ？ お主やルイズの都合で”時をいじくる”とはどんなに罪深いか、よく理解出来たかの？」



闇色の子猫はそう言ってくつくつと笑った。

くぐもった女の笑い声は、小さく大きく才人の耳に残る。

うるさい！

お前に、お前なんか俺の何が！

そう叫ぼうとして、才人は口を開いた。

しかしやはり、それ以上言葉が出てこない。

何よりも、言葉をぶつける為の相手は既に消えていた。

暗闇の中、才人は一人あぐらを組んでじっと下を見つめ続ける。

丸めた背が闇の中に溶けていってしまいそうな程小さく、惨めに思えた。

それからどれほどの時間そうしていただろうか。

「あなた、気に入ったわ。

うふ、なかなかどうして、所々虫食いになってるけれど結構魅力的な人生歩んできてるじゃない」

突如かけられた声に才人はハッと頭を上げた。

視界が漆黒から目に痛いほどの白へと変わっており、思わず手をかさしてしまふ。

しかし、光避けにかざした手を柔らかな誰かの手によって取り払われ、代わりに何かが才人に覆い被さってきたのだった。

何かはどうやら人のようで、自身の体に跨がっているらしく胴体に重みを感じる。

同時に頬に髪の毛と思われる感触と、甘いバラの花の香りのような匂いが鼻を付いた。

才人はその香りに、あぐらを組んで座っていたはずがいつの間にか仰向けに寝ている自分に気が付いた。

相変わらず眩しくて目が開けなかったが、次第に五感がハッキリと生きて今まで見てきた物が夢か幻のような物であったと実感する。

「すべて……とは行かなかったけれど、あなたの事は十分理解出来たわ。」

ヒラガ・サイト。いいえ、私のサイト……  
うふふ、なんて面白い人間なの、あなたって」

「う…… ドライアド、か？」

「そう。あたしはドライアド。あなたの半身であり、あなた自身であり、この世界の主。」

同時に、あなたもこの世界の主なのよ？

だって、あなたはあたしの一部をその体に宿したもの」

「おまえの…… 一部？」

「そう。大丈夫よ、サイト。」

ここで全てを忘れましょう。

あなたの闇も、希望も、罪も、愛も、全てを忘れてここに居ましょう。

ここにはあなたを苦しめる者はいないわ。

あるのは永遠の安らぎと快樂。ねえ、目を開いて？ あたしの勇者様」

才人はドライアドの声に促されるまま、目をゆっくりと開いた。

驚いたことに、あれ程眩しかったにもかかわらず時刻は既に夜となつているようで、暗い室内をランプがボンヤリと照らし出している。覆い被さつて来ているドライアドの向こう側には、今才人が寝ている寝台の天蓋が見えた。

「ここは、何処だ？」

ハッキリしない頭で才人は辺りを見渡そうとしたが、才人に覆い被さっているドライアドの手によって強引に正面を向かされてしまう。

「あたしだけを見ていなくては、あなた自身の闇によってすぐに押し潰されるわよ？」

甘い花の香りが増す。

目の前には、木の精霊ドライアドの妖艶な笑み。

体に覆い被さる彼女は一糸纏わぬ姿で、まるで蛇のように艶めかしくくづめいている。

才人は状況を理解するや、慌てて覆い被さっているドライアドを押し

しのけた。

「きゃあー！」

「な、なな、なにすんだよ！ いや、俺になにをした?!」

狐に追い立てられるウサギのように素早くベッドから飛び降りた才人は、ドライアドに向かって叫ぶ。

一方突き飛ばされたドライアドは、ベッドの隅で起き上がり裸のままぶうと頬を膨らませじとりと才人を睨んだ。

「何って、飲んだでしょう？ あの薬」

「お、俺を騙したのか?! あの夢は、お前が仕組んだのか?!」

「まさか。あれは正真正銘、この領域と一体になる為の魔法の薬よ？  
飲んだ者の全てがさらけ出されるから、潜在的に避けてた現実も  
見えてしまうけれど……」

それはあたしのせいじゃないわ」

ドライアドはそう言うと、裸のままベッドに腰掛け足を組み妖艶に  
笑った。

才人は珍しくも目の前の美女の裸には特に反応せず、もてあました  
負の感情を何処にぶつけるべきか迷い続ける。

そんな才人の鼻を甘い花の香りがくすぐった。

先程よりも強い。

ふと、側にあつたテーブルの上に置いてある香炉が目飛び込んで  
きて、香りの元がそれであると理解した。

どうやらドライアドが発する香りと同じ匂いの香が焚かれているら  
しい。

匂いは甘く、部屋に満ちている。

一瞬、香炉をドライアドに見立ててどこかに投げつけ、負の感情を  
ぶつけようかと考えたがすぐに何をバカな事をと我に返った。

ドライアドはやり場のない感情をもてあます才人の様子を余裕たっぷりに見つめながら、まるで全てを見透かしたかのようにクスクスと笑う。

「うふふ。大丈夫、あたしに全てを委ねて？」

領域と一体になったのだから、普段押し込んである知られたい、知りたくない事を無理に見せられて

心が一時的に混乱してしまっただけよ。

大丈夫、その痛みはすべてあたしを取り除いてあげる。

永遠に、ね。

さあ、なにもかも忘れましょう。

争いも、使命も、痛みもないこの世界にずっと居ましょう」

「うるさい！ 兎に角、薬は飲んだ！」

俺はもうこの世界から出て行けるんだから、お前とはこれでお別れだ！」

「あら、残念ね。でも、今のあなたの状態で果たして戻って幸せになれるかしら？」

「何を」

「タバサ、だっけ？ あの子との娘、お母さんにそっくりね。彼女、なんて言っていたっけ？」

激昂した感情が一気に冷める。

やっぱり私達が生まれてくる必要はないって事？

夢現に言われた言葉が、胸を深くえぐる。

怒気を萎ませ、下を向く才人にドライアドは変わらず微笑みながらすくと立ち上がり、意外にも部屋の出口へと裸のまま歩き始めた。

2767

「今夜はそつとしておいてあげる。

外にいるオークどもをなんとかしないといけないしね。

「一晩じっくりと考えなさいな」

「何を、だ？」

「あなたの子供達に問いかけられた事への答えを、よ。」



勿論、ここで全てを忘れるっていう選択もあるわよ？ 今夜は  
” なにもしない ” から安心なさい”

苦しげな才人の問いに、ドライアドは扉を開きながら愛しそうな眼  
差しを才人に送り答える。

それからパタンと扉が閉まる音と濃い花の香りを残して、ドライア  
ドは部屋を出て行った。

才人は力無く、ヨロヨロとベッドに腰掛けて頭を抱え込む。

やっぱり私達が生まれてくる必要はないって事？

問いは時を経るにつれ、鮮明な声となって頭に響いていった。

才人は答えを見いだせずに、ただ頭を抱えて息を吐くばかりである。

部屋に満ちる甘い香りは、まるで才人を蝕む闇のように感じられた。



昔からそうだった。

母親や、友人。

ハルケギニアに召喚されてからはルイズやタバサに、何かとあなたはどこか抜けているわねと良く言われていた。

その言葉はいつも半ば諦め混じりに発せられ、自身もそんなもんか、しょうがないといった感じで受け入れてきた。

最初の人生を終え、二度目の人生を手に入れた後もそれは変わらず、しかし望んだ未来が手に入るのならばと

全く気にも止めないでここまで歩いて来た。

今夜。

そんな自分がこれほど情けなく、惨めで恨めしいと思うなど誰が予想できた事だろう？

やっぱり私達が生まれてくる必要はないって事？

夢、あるいは幻の中で娘に問いかけられた言葉。

自分がここにいるのは、ただルイズを泣かしたくない……ルイズが泣かない人生を共に歩みたかったただだけだ。

娘や息子達を愛していなかったわけではない。

いや。

今だって、愛している。

ルイズもこちらに来た時の手紙で彼らが消えてしまうことは無いと……一度歩んだ未来とは別の未来が生まれるだけだと言っていた。

その言葉を信じて安心してさえ、いた。

しかし。

やっぱり私達が生まれてくる必要はないって事？

問い掛けは深く才人の心をえぐる。

そんな事はない、と親であるならば誰もが答えるであろう。

生まれ変わっても、お前達の親として生きたいと人の親ならば誰も  
もが答えるであろう。

「じゃあ、” 今度も ” お母さん…… タバサを愛してくれるのね？  
アンリエッタ女王を、ティファニアを、シエスタを抱くのね？  
ああ、そうそう、そうよね。

貴方を愛する女の人全てを抱いてあげないと不公平よね。

ふふ、 ” 今度 ” は兄弟姉妹が沢山増えそうであつて凄く楽しみだわ」

鮮烈に蘇る、娘の言葉。

本人の物ではないが、今の才人には娘が本当にそう言ったのかどうかなどは問題ではない。

ルイズの為に生きれば ” この世界での ” 子供達の存在を否定してしまう。

子供達の親で在ろうとするならば、 ” 前 ” となんら変わらないルイズを泣かせる人生となってしまう。

どうじゃ？ お主やルイズの都合で ” 時をいじくる ” とはどんなに罪深いか、よく理解出来たかの？

次いで記憶の残滓によって現れた幻であろう ” 時の魔女 ” ノル  
ンの言葉が蘇る。

才人は一人、ドライアドの屋敷の二階にあるゲストルームのベランダで、夜風に当たりながら己を見失いつつあった。

眼下には村の内外で焚かれるかがり火が点在して見え、慌ただしくニンフが、オークが行き来している。

特に村の入り口を守る岩の壁の上では、弓を携えたニンフたちが集結しつつあり刻一刻と緊迫した状況になっているのが

ここからでも見て取れた。

普通の才人ならば、義に駆られ率先してデルフ片手に村の防衛に参加したであろう。

しかし。

心を闇に沈め、己の内に湧いた　いや、”避けていた現実”を目の当たりにした才人はとてもそんな気にはなれなかった。

ドライアドやドリアーヌ達も、才人の力を　”理解”　している筈なのだが助力を求めてくる様子はない。

恐らくはあのオーク達の襲撃は自分達のみで十分対処できる事柄なのだろう。

その事に気付いて、己の闇とじっくり向かい合える事は今の才人にとって唯一の救いであった。

「ルイズ、俺は……」

眩きに答える者はいない。

びゅお、とかがり火のコゲ臭い香りを孕んだ暖かい谷風が吹き抜ける。

風は心地よい物であったが、才人にはそう感じるだけの余裕など与えられてはいなかった。

「あ！ いたいた。おーい、あんた！ こっち！ こっちだってば  
」！

谷風に当たりながら血を流し沈む心を眺め、娘の幻の問い掛けに苦悶していると、下から脳天気な声が聞こえてきた。



才人は身を乗り出しベランダの下を覗き込むと、何かを抱えたあの小さなドリアーヌが立っているのが見える。

どうやら彼女も又、オーク対策に駆り出されたのか何やら道具の運搬を任されているようであった。

才人はすこし八つ当たり気味に不機嫌な声で、ドリアーヌの呼びかけに応じる。

「……なんだよ？                   ” 知ってる”                   だろ？                   俺は今一人になりたいんだよ」

「知ってるって言っても、感情までは共有したりしないんだからそんなこと分らないわよ。

ねね、それよりも。

あんた、もう領域の外に出られるようになってるんでしょ？

花、持ってきてあげたわよ！

もうすぐオークの攻撃が始まりそうだから、ちゃっっちゃと脱出しちゃいなさいよ」

ドリアー又は才人の不機嫌な態度など気に留める様子もなく、無邪気な仕草で懐から一輪の花を取り出し

ずいとベランダにいる才人の方へ差し出した。

夜の為か花の色までは分からなかったが、少女の手の中で釣り鐘のような形の花弁が見える。

「……明日でいいよ」

「は？　なんでよ。あんなに帰りたがってたじゃない。ルイズって娘も待ってるんじゃない？」

「そう、だけどさ……今は、あいつの顔をまともに見る自信がねえんだよ」

「どづいじつとよっ」

「……知ってたんだろ？　俺が未来から”やり直しに”来たこと」

「んー、まーね。私達ニンフも、この領域の一部だし」

「夢の中でさ、昔の……子供達に 『私達が生まれてくる必要はない？』 って聞かれちゃって。」

俺、答えられなくて」

「んー、よくわかんない。わたし、人間じゃないもの」

才人は苛つきながらも、ドリアーヌに悩みを打ち明けた。

なぜ、ドリアーヌに話したのかは分からない。

記憶を共有しているからか、それとも特に理由もなく誰かに吐露したかったのか。

理由はいくつも用意できたが、この時の才人にとってそれは些細なことであった。

愚痴に近い形でも闇を吐き出したからか、幾分か心が楽になった才人はほんの少し笑顔を取り戻して

先程までの態度をを恥じるかのように、バツが悪そうな表情を浮かべ、ベランダの下にいるドリアーヌに言葉を続ける。

「だよな。忘れてくれ。花、ありがとな。取りに降りようか？」

「いや、その辺を飛んでるフクロウにお願いするからいいわ。そのままそこにいて？」

あ、それとね？

もし……もし良かったらオーク鬼を追い払うの、手伝って貰える？」

「！ 攻撃が始まったのか？！」

「ううん。まだ。」

あの乾燥ハーブを元にオーク鬼を追い払う魔法の香をいつも作って焚くらしいんだけど、ほら。

ドライアドがあんたに構ってたものだから、作るのに手間取っちゃって。

もうちよつとで出来るんだけど、多分オーク鬼の集結の方が早く終わっちゃういそうなのよねえ」

「あのごつい門が突破されそうな程、オーク鬼どもが居るのか？」

「うーん、多分、大丈夫。」

だけどあつちはなんか妙なもん持ち込んでるのよ。見た事のない、

へんな荷車みたいなの。

年長のドライバーも見た事無いって言っててね。

だから、こっちも一応、万一に備えてあんたに声かけてるわけ」

「……わかった。もう少し心が落ち着いたら俺も行くよ。

でも今は勘弁してくれないか？」

「ええ、良いわよ。あんたの力は心の昂ぶりに依存するみたいだし？

見えた記憶は最初から一度死ぬまで、それ以降は何故か見えなかったけど……いまでもそうなんでしょ？」

「俺がこっちにもう一度やって来てからの記憶が見えなかった？」

ドライバーの言葉に、才人は怪訝そうな表情を浮かべた。

虫食いとなった記憶以外に ” 見えなかった ” 記憶があるって事か？

どういふことだ？

「ええ。正確には、あんたの体をなんとかするう〜ってルイズって娘が泣いていて

”時の魔女” とやらに会いに行くあたりまでだけど。

まあ、たいした問題じゃないわよ、安心して？

今のあんたは心配しなくても、ちゃんと領域の外に出ることができわ。

じゃ、わたしはこの辺で。もう、行かなくちゃ。フクロウはすぐに見つかると思うから、そのままソコにいてね？」

そう言い残して、ドリアーヌは慌ただしく走り去ってしまった。

どうやら、才人に万一にそなえての助力を頼むことが彼女の目的であつたらしい。

小さいながらも、人間との交渉を任されているだけあつてちゃっかりしてら、と才人は考えながらも

先程僅かに引つかかったドリアーヌの言葉を思い出す。

俺の記憶が……ノルンに会ってからの記憶が見れなかった？

体を ”グリムニルの槍” に変えてからの記憶は見れないって事か？

どういう事だろ。

人、というか生物でなくなつたからと言ふことだろうか。

……いや、いまはそんな事、どうでもいいか。

才人は少しの間心の闇を忘れかけていたものの、すぐにあの問いを思い出し再び深く気持ち沈んでいくのを実感する。

そして、今夜幾度となく繰り返してきた自問が再び才人を埋め尽くす。

自分はどうすればいいのか。

どうすべきなのか。

親として、もう一度王配としての未来を歩むのか？

馬鹿な！

ここに来てそんな道選ぶのなら、そもそも過去に戻って来たりはしない！

でも……

自問は堂々巡りであった。

「くく、どつじゃ？ お主やルイズの都合で ” 時をいじくる ” とはどんなに罪深いか、よく理解出来たよつじゃの？」

聞き覚えのある声と台詞に、才人は慌てて振り向く。

そこにはいつの間降り立ったのか、一羽のフクロウがバルコニーの手すりの上にとまっていた。

くちばしには小瓶付きのヒモがくわえられている。

小瓶の中身は先程ドリアーヌが持っていたであろう、可憐な花がいくつか入っていた。

恐らくフクロウはドリアーヌが寄越した使いと見て間違いない。

しかし、先程の声は……

「まったく、なんてなさけない面をしとる？

やけに ” 未来 ” が不安定になってしまったと思って調べて見れば……

お主、何をこんな所で悠長な悩みを抱えこんどるのじゃ」



「ノルン！ お前……」

「ふん、お人好しめ。お主を探し出し、連絡を取るのにこのわしが黒猫以外の生き物に頼ることになるなど……」

ほんに、世話の焼ける男じゃのう。

くく、まあいい。そこがまた、ソソられるのであるうな。

しかし、伝説の使い魔よ。随分とつまらぬ事で悩んでおったようじゃが？」

「な?! 何がつま」

「あー、あー、反論はせんでよいぞ？ 言い分など、とうの昔……いや、未来かの？ ええい、どっちでもよいわ。

頭の悪いお主の言い分など、既にお見通しじゃ。

ほんに、英雄やら伝説の勇者やらは昔からおなごの奸計に弱いう。

まんまと木の精霊などの術中にはまりおって」

フクロウは器用にも小瓶がぶら下がったヒモをくわえたまま、これまた器用にも嫌みたっぷりな雰囲気のため息をつく。

その仕草は間違いなく ” 時の魔女 ” と呼ばれるノルン（……と

いっても猫の姿ではあるが）であると才人に示していた。

「……どういうことだ？」

「くく。お前を引き留めておく為の方便じゃよ、あの夢はな。心の闇を無理矢理引きずり出して、繰り返し見せ続け心が疲弊した所につけ込む。」

中々えげつない方法じゃが実に効果的じゃて。ひひひ、昔はわしもよく使った手法じゃよ」

「でも……あの問い掛けは、娘の言葉は無視できない」

「なんじゃ？ どのような問い掛けなのじゃ？」

「……『私達が生まれてくる必要はない？』 って奴さ。俺は……」

「ふん、くだらんもの。親であるべきか、恋人であるべきか、今頃悩んでおるのか。」

まったく、そんな理由で新たな未来の行き先をポコポコと作られてはこっちがたまらんわ。

大方一穴主義を貫きたいが、かの子供達も生まれ出でるようにしたいなどと、都合の良い方法を模索しておるのじゃろ。

大体じゃな、悩んで悪戯に時間を浪費するくらいならば、本能の赴くまま節操なくあちこちに種をまけば良いではないか。

ひひ、その時はご相伴にあずかりたいものじゃて」

「そ、そんな事出来るわけないだろ！」

「ならば、答えは出ておるっ？」

「……そんな簡単なもんじゃねえよ」

「そうかの」

「そつだ」

「……ふむ。ま、わしとしては何でも良いがの。ただ」

フクロウはそこで一旦言葉を句切り、バルコニーの手すりを伝って才人のすぐ側まで移動した。

それからくわえていた小瓶のヒモを才人へ渡しホウ、と咳払いする  
かのように鳴いてみせる。

仕草はノルンには珍しく、どこか照れを隠すかのようなわざとらしい物であった。

「お主、何の為にここに居る？」

ここで悩むのは良いが、足を止めておれば全て丸く納まるわけでもあるまいに。

考えて結論が出るのならば、幾らでも考えるがよいぞ」

何の為ここに？

新たに加わった自問は、なぜか暖かかった。

俺は、ルイズの為に……いや、妖精花を手に入れる為にここへやって来たんだ。

少なくとも、こつやって悩む為じゃない。

「くく。そうじゃ、その意気じゃ。

おお、おお、乱れておった” ”この未来” がまとまり始めたわ。

まったく、あれほど多くの分岐を増やされる此方の身にもなって欲しいものじゃて

「ノルン……」

「礼には及ばんよ、わしの愛しいお人好しよ。

ひっひ、なにせそう遠くない未来にわしはお主の身を危険に晒す事になるからの。

これはその”埋め合わせ” じゃ。ま、わしの都合もあつたのじゃがな。

くく、精々高く買っておけよ？」

「え？ それは一体」

出しかけた才人の問いを遮るようにノルンはホウ！ と一つ大きく鳴いて、翼を羽ばたかせ夜空へと消えて行ってしまふ。

どうやらそれ以上は話す気が無いらしい。

残された才人はバルコニーで一人、ノルンが残した言葉を反芻する。

”時の魔女” はいくつか気になる言葉を残していったものの、才人はその中から希望を一つ手にしていたのだった。

そうだ。

ここで立ち止まっても、なんの解決にもならない。

どうしたらいいか、まだわからないけれど……

俺がここに、この時に戻った目的はルイズを泣かせない為だ。

それが子供達を ” ここではいらぬ ” と断じる行為なのかも知れない。

それでも……

このままここで悩んでも、何も解決はしない。

今は只、前にしか道は延びていないんだ。

……俺はいずれ、選択を迫られるだろう。

そしてその答えは……そう、あの日に戻った時から出ている。

今はそれを、あの子達を目の前にして押し通すだけの強さは俺にはない。

押し通そうとしてもきつと、心が自責の念で潰れてしまっただろう。  
でも。

いつかはそれを、子供達を前にして口にしなければならぬ。

例えここにはいない、幻であつても俺は内に棲む子供達にハッキリ  
と言わなくてはならない。

そう。

これはケジメだ。

俺がワガママを貫いたが為の。

生まれてくるはずのあの子達が居ない未来を選択しようとしている、  
人でなしである俺のケジメなんだ。

それができるのかどうかはわからない。

単なる自己満足でしかないのかもしれない。

しかし、それでも俺は前に進むしかないんだ。

そこから目を逸らしたまま、前に進んではいけないかったんだ。

醜い、己のエゴを直視して前に進まなくてはいけないかったんだ。

才人は胸に闇を灯したまま、いくつかの答えを導き出していた。

気が付くと、知らず握りしめていた左手の甲が輝き始めている。

光は心に巢食った闇を払えはしなかったが、不思議な暖かさを伴って次第に強くなっていた。

びゅおと音を立てて、かがり火のコゲ臭い香りを孕んだ暖かい幾度目かの谷風が吹き抜ける。

風を頬に感じながら才人は部屋の方へと踵を返して、ベッドの脇に立てかけてあったデルフリンガーを手に取り

妖精花の入った小瓶を大切に懐にしまった。

室内の甘い香は長時間バルコニーへの扉を開いていた為か、すっかり消え去っている。

その時であった。

遠く村の入り口の方から響く、怒号のような声。

どうやらドリアーヌが予想した通り、オーク鬼の攻撃が始まったらしい。

才人は左手を輝かせたまま再びバルコニーの方へと戻り、そのまま軽やかに大地へ飛び降りるのであった。



「うわわわわわ！ きた！ きたきたきたきた！ ドリアーヌ、オ  
ーク鬼共が来たわ！」

「ダメよドリアーヌ！ 落ち着いて！ ほらほら、弓を射るのよド  
リアーヌ！」

多少の年の差による違いがあるとはいえ、同じ顔と言っても差し支  
えのないニンフ達がこれもまた同じような弓を一齐に構えた。

場所は村の入り口にある、岩を積み重ねた城壁のような壁と厚い木  
の門の上。

堅く閉ざされた門の外には、無数のオーク鬼が蠢き村の中へ侵入し  
て略奪の限りを尽くさんと壁をよじ登ろうとしている。

「ほらほらほら！ 射るのよ！ 弓でよじ登ってくるオーク鬼を射  
るの！」

「怖い！ 怖いわドリアーヌ！」

「もう少しの辛抱よ！ ドライアドの香が完成するまで持ちこたえるの！」

「ふええええん、もうやだあ！ 数が多すぎよう！」

「泣く暇あったら、弓を射るのよ！」

「いい？ あんたたち。魔法で直接攻撃しちゃだめよ？ すぐにバテるから。」

魔法は、矢の補充や傷の手当てなんかに使った方が効果的なの。わかつたら、バテてきているドリアーヌと交代してオーク鬼を射つて！」

あ！ そのあなた！」

「は、はい…！」

門の上で戦闘経験のない者を指揮していたニンフに、頭上から呼び止められた小さなドリアーヌは弾かれた様に空を見上げた。

その手には火矢が使われた時の為の水桶がぶら下がっている。

「水桶はもう良いから、矢をありったけ持ってきて！ この勢いだ  
と足りないわ！」

「わ、わかりました！！」

小さなドリアー又が急いで、しかしよたよたと水の入った思い水桶  
を邪魔にならぬ位置に置き

矢束を取りに村の倉庫へと駆けようとした時である。

門の上が突如一層慌ただしくなった。

その様子は尋常ではなく、何かとついでドリアー又は足を止めてし  
まう。

「みて！　みてみてみて！　あれ！　何あれ！」

「大きな荷車に、大きな丸太！ 先があんなに尖って……まさか！」

「え？ 何々？ 分かつちゃったの、ドリアーヌ？」

「あれ、門にぶつける気よ！ すごく、すごくすごくまずいわ！ みんな、あれを攻撃して！」

誰かの叫びに、突如出現したオーク鬼の攻城兵器へ向かって一斉に矢が放たれる。

無数の矢は破城槌に集中したが、徐々に門へと迫る勢いを削ぐことは出来ずガコン！ と恐ろしい音を立てて門にぶつかってしまった。

オーク鬼の破城槌は雨のように降り注ぐ矢などお構いなしに、一旦そのまま後方へと下がり再び城門目がけて前進を始める。

先住魔法である ” 反射 ” を門にかける事が出来るだけの術者はニンフの中にはいない。

彼女達は先住の精霊とは言え、妖精に近い下位の存在である。

従って、戦い方も人間に近い物であった。

「止めて！ あれを止めて止めて止めて！ みんな、射て！ ほら、あそこ！ アレを動かしてるオーク鬼を射るのよ！」

矢が破城槌を押すオーク鬼へと集中する。

しかし、オーク鬼達も事切れた仲間を盾にしながら破城槌を構わず押し続けた。

ガコン！ と城門に破城槌がぶつかる音。

同時に、めきやりと音を立てながら破城槌の先端が門の向こう側に頭を出していた。

恐らくは、次の一撃で城門は破られてしまっただろう。

ニンフ達も精霊の一種であり、魔法が使えはする。

だが、数では彼女達を遙かに凌ぐオーク鬼の侵攻の前では、魔法による優位性などあてには出来なかった。

それ故彼女達は高い岩の壁と門で村を防衛しながら、ドライアドの

香でオーク鬼を追い払うと言う作戦を何百年も続けてきたのである。  
今回も、その作戦で上手くいくはずであった。

「もう持たない！ ドライアドの香はまだなの?!」

「さっきお手伝いしてるドリアーヌの報告じゃ、あと三十分くらい  
だって！」

「だめよ！ だめだめだめ！ そんなに待てない！」

「きた！ 見て！ アレが門に向かってきたわ！」

「いやあ、オーク鬼に捕まるのだけはいやあ！」

「泣かない！ みんな！ 攻撃！ 直接魔法つかって攻撃してもい  
いから、とにかくアレを止めるの！」

号令の下、一斉に矢と魔法が飛び交う。

しかしどの攻撃も破城槌の前進を止めることができない。

そして遂に、バガン！ と一際大きな音を立てて門が破られてしまった。

小さなドリアー又はその瞬間を目の当たりにする事となる。

先程頼まれた矢束を取りに走り、戻って来たタイミングで門が破られたからだ。

眼前に巨大な門をなぎ倒しながら、オーク鬼達の破城槌が姿を現す。立ちこめる埃の中、破城槌の足下からわらわらと無数のオーク鬼が駆けてきて、まず目に付いた小さなドリアー又へと殺到する。

手には鈍器のような巨大な鉈やメイスが握られており、それらを振りかぶりながら向かってくる無数のオーク鬼は悪夢のようであった。小さなドリアー又は矢束を抱えたまま、恐怖のあまりに足を竦ませてその場で立ち尽くす。

十メイル、五メイル、三メイルと徐々にオーク鬼達が近寄ってくる。そしてついに、振り上げたメイスが届く距離にまでオーク鬼が接近してしまう。

オーク鬼は憐れな最初の犠牲者の血を想像してか、ニタリと下衆な

笑いを浮かべメイスを振り下ろすべく獲物を握る手に力を込めた。

「ドリアーヌ！」

誰かが叫んだ。

その叫びは、小さなドリアーヌの耳には届かない。

彼女の目には時間が止まったかのように全てがゆっくりと流れていった。

恐怖で足が竦んでいる。

そんな恐ろしい光景とは裏腹に、柔らかな谷風が砕かれた城門から吹き込む。

風はオーク鬼達を追い越し、小さなドリアーヌの頬を優しく撫でて後方へと吹いた後、猛烈な勢いで吹き戻って来た。

戻って来た谷風は冷たく、目の前の悪夢をいつか見たようにバラバラにしながら門から外へと吹いていく。



それは、まるで何か幻のような光景であった。

嵐は小さなドリアーヌの目の前で、嵐と変わっていったのだ。

嵐は門を打ち壊した大きな破城槌を、小枝のようにへし折りバラバラにしながら夜空高くまで吹き飛ばし。

まるで竜巻を横に寝かせたかのような嵐の暴風は、門から中へと殺到していたオーク鬼を残らずなぎ払った。

遅れて、耳をつんざく雷鳴。

小さなドリアーヌは思わず目を瞑り、両手で耳を塞いでしまった。

そんな彼女の肩にぽん、と優しく触れる手の平の感触。

うつすらと目を開ける彼女が見たものは、輝く左手と身の丈もある片刃の大剣を持ち、ゆっくりと門の方へ歩いて行く少年の背中であった。

「何？ 一体、何がおきてるの?!」

「みて！ あれ！」

小さなドリアーヌと同じように、突如巻き起こった暴風と雷鳴に思わず悲鳴を上げて目と耳を塞いでしまっていたニンフ達は

岩を積み重ねた城壁のような壁と厚い木の門の上で、村の外の異変に目を丸くしてその光景に見入ってしまった。

彼女達が見た物とは、門から一直線に大地ごと無数のオーク鬼達の群れをなぎ払った ” 痕 ” であつた。

それは、まるでそこだけ道が出来たかのように。

ケーキを真つ二つにわつたかのように。

ただ一筋、何か全てをなぎ払いながら通過した ” 痕 ” がそこにあつた。

その光景に驚いていたのは、ニンフ達だけではない。

オーク鬼達も又、何が起きたのか理解出来ず攻撃の手を休めて一時呆然とする。

「悪いな、ここは立ち入り禁止なんだ」

双方の驚愕によって起きた静寂の中、茫洋としたなんとも暢気な声が響く。

オーク鬼とニンフの視線が、声がした破られた門へと注がれる。

無数の視線の先、声の主は一人門の前に立ちはだかっていた。

片刃の大剣を握るその左手は闇を裂くように強く輝き。

その右手には銀色の槍。

闇色の髪が谷風に揺れる。

その姿は、小さな非力な少年であった。

その姿は、伝説の勇者そのものであった。

次の瞬間、わあ！ とニンフ達の歓声が沸き上がる。

ぐおお！ と数千ものオーク鬼達の雄叫びがそれに続く。

そんな光景を夜空からフクロウが優雅に翼を広げながら、どこか楽しそうに眺めていた。

くつくつとくぐもった笑いを器用に発しながら。

「くく、これでよし。そうこなくては、お人好しのイーヴァルデ  
イ。」

その言葉はどこか、冷たくも愛しそうであった。



「なによ、これ……」

高くそびえる岩壁の上、誰かが咳く。

村を守る城壁のような壁は、よじ登ろうとし弓で射られたオーク鬼の血で所々赤い染みが雨垂れのように筋をなっていた。

そんな壁の上でニンフ達は弓を構えたまま、矢を射かけることも忘れ眼下の光景に息を飲む。

そこに、圧倒的なまでの力が在ったからだ。

ヒラガ・サイト。

彼女達が一番最近に手にした ” 記憶 ” の持ち主である。

チキユウという別世界に生まれ、魔法によってここハルケギニアに召喚された者。

幾多の戦いを経て、八十四才で一度はその生涯を終えた男。

彼は一人の女にもう一度その人生を捧げる為、死の淵より時を超え再び剣を取った使い魔。

その生涯は、力は、伝説に相応しいものであった。

やり直しの人生を歩む彼の記憶を見ても、強力な力を持つ人間のメイジ以上の剣士であった。

いや、 ” 人間のメイジ以上の剣士 ” でしかなかった。

だが。

目の当たりにした彼の力は、そんな生やさしいものではない。

白い筋のような剣閃が幾重にも奔り、彼に肉薄していたオーク鬼が数体まとめて細切れになりながら剣圧に弾かれ吹き飛ぶ。

振るう剣筋が文字通り見えないどころか、彼の姿を視認するだけでもやっただ。

いや、恐らくは ” 門より内側にオーク鬼を入れない ” という目的が無ければ、その姿を確認する事すらできなくなるであろう。

オーク鬼達もそれがわかつているのか、数で攻め寄せ砕いた門の内へ彼ごと押ししてなだれ込もうと、先程から攻め手の密度を増している。

二メートル程のでっぷりとした巨大な亜人が歪な武器を手に、何十も束になって押し寄せる圧力は如何ほどのものか。

村を守る門はとうの昔に砕かれ、弓と魔法を多少使える女ばかりのニンフ達は醜い豚のようなオーク鬼に数で押し切られ

体を、命を、すべてを蹂躪されるのは時間の問題であるはずであった。

そんな、力の摂理を鼻で笑うかのように。

門を守る彼は、容易く ” 肉の壁 ” のように押し寄せるオーク鬼の群れを押し返す。

手にした槍の末端を握り、棒きれを振るように横に薙ぐとオーク鬼達は弧を描きながら、草刈りの草のようにアツサリと押し寄せていた勢い以上の速さで後へ吹き飛んでいった。

まるで、夢であるかのようなありえない光景である。

彼は強い。

記憶を共有したのだから、そこは疑いようもない。



しかし、記憶に在る ” 彼 ” ではあの数のオーク鬼を押しとどめるなど不可能だ。

なぜならば。

如何に伝説のルーンをその手に刻んだとして。

如何に剣を極めたとして。

あんな、数で攻め寄せる獰猛なオーク鬼の群れを、たった一人で押しとどめる事は物理的にまず無理だからだ。

確かに七万の軍を足止めした経験が彼にはある。

しかし、目の前の敵はその時とは違い司令官の存在もハッキリせず、ただ数に物言わせ押し寄せるばかりの存在だ。

彼が七万の軍を足止めできたのは、道理に適ったからだ。

そう。

力でどうにかなる事柄には限界がある。

それは川の流れを一滴残らず押しとどめようとするような行為。

それは空から落ちてくる雨粒をすべて受け止めるような行為。

如何なる力があるとは言え、如何なる疾さを持つとは言え、それらを行う事は何人であっても不可能なのだ。

目の前で無秩序に押し寄せんとする数千を超えるオーク鬼の群れを、  
たった一人で押しとどめる行為も又同様である。

同様に、あるはずなのだ。

「きゃあー!!」

雷鳴のような音に、高い壁の上で眼下の戦いに魅入っていたニンフ  
達が一斉に悲鳴を上げた。

音に一瞬目を閉じてしまったものの、すぐに何が起きたかと確認し  
ようと瞬きを繰り返す。

どうやら砕けた門を守る彼が、一際厚くオーク鬼が押し寄せようと  
していた一角にあの槍を投げたらしい。

初めて見た時のように、彼の攻撃は真っ直ぐに筋を引いてオーク鬼  
の群れごと大地を裂いていた。

そう、槍だ。

”記憶” にはそんなもの、出ては来なかった。

最後に確認できるのは、ハルケギニアの月が輝く夜。

二度目の人生を歩む彼が、長年馴染んだ学院の外に足を踏み出した  
辺りまで。

その耳は音を失い、その目は視界を失いつつあった頃の記憶だ。

そこから先の記憶はポツカリと抜けてしまっている。

彼が ” ああなった ” のは、恐らくその抜けた記憶の中なのだろ  
う。

その記憶は彼がここに来るまで、外の時間でおよそ数ヶ月前の事  
である。

たった数ヶ月。

それだけの時間で一体、どのようにすれば ” ああ ” なるのだろ  
うか？

弓を射かけることも忘れ、眼下の暴風によような力の嵐にニンフ達は  
ただ驚愕を胸に見とれるばかりである。

「くそ、なんだよこいつら！ ” 普通 ” じゃねえ！」

一方、思うがまま力を振るっていた様に見えた才人は、身の丈もあるデルフリンガーを羽根ペンのように軽やかに扱いながら

どこか焦ったかのような声色で愚痴を吐いていた。

オーク鬼が三匹、才人へと襲いかかる。

ぴゅお、と風を斬り大剣が数筋の光閃を放ち僅かな時間を置いて、三匹のオーク鬼は十程の肉片となった。

そんな仲間の破片を一欠片の躊躇もなく踏み潰しながら、今度は五匹固まって才人へ突貫してくる。

才人は忌々しそうに舌打ちを一つして、新たに作り出していた槍の端を持ちデルフを振るように横へ薙いだ。

鋼鉄の槍は三日月のようにしなり、骨を砕く音を立てながら三百リール（百五十キログラム）はゆうにあるオーク鬼を

五匹まとめて吹き飛ばす。

吹き飛んだオーク鬼は、後方へ押し寄せる仲間を巻き込みながら大砲の弾のように飛んで、寄せるオーク鬼の群れの勢いを

僅かに押し返すのであった。

しかし。

オーク鬼は何事も無かったかのように息絶えた仲間を、仲間の残骸を踏み越えてひたすら才人と門の奥を目指し

雄叫びを上げて殺到してくる。

目の前の死をかたどったかのような力のことなど、お構いなしに。

なぜだ？！

なぜ、こいつらは怯まないんだ？！

動きに淀みが全くない！

こいつらは目的以外、何もみえちゃいない！

操られている？

落ち葉を掃くようにオーク鬼を駆逐していく才人は、その戦いぶりとは裏腹に疑問で思考を染めていた。

困惑に近いのかも知れない。

オーク鬼も白痴ではない。

亜人、という呼称の通り人間と同じように感情があり、時には破城槌のような物も作れるほど知能もある。

決して人とは相容れぬ存在であり一般には害獣のような扱いでは

あるが、二本足で立ち火や道具を使う歴とした知的生物である。

それなのに。

目の前のオーク鬼達は、才人の見せる力の暴威に全く怯んではいなかった。

一般的なオーク鬼であるならば、仲間がああも無残に斬られ派手に宙を舞えば怖じ気づくか、少なくとも怯んでも良いはずである。

その動きをみても、死を恐れぬ程練度が高いというわけではないよ  
うだ。

才人は魔法か何かで操られている可能性を疑ってはいたものの、それは違うとも肌で感じていた。

雄叫びを上げ、襲いかかってくるオーク鬼達からは、その精神を誰かに支配されている印象を受けなかったからだ。

彼らはどちらかというと、死や恐怖という概念がすっぱりと抜けてしまっている印象を才人に与えていた。

まさか！

そんな、一部の感情だけを消し去る魔法なんて……

戦意を高揚させる魔法や薬なら話はわかるんだけど……

剣閃を同時に何十も重ねながら、才人の困惑はますます深まっ  
ていく。

そんな才人の膨らみつつあった困惑を沈めたのは、一本の矢であった。

才人へと襲いかかってきた数匹のオーク鬼達が一瞬で細切れにされ、鮮血を撒き散らしながら崩れ落ちた後方から

再び数匹のオーク鬼が仲間の破片を乗り越えようとした時である。

ストーン、とその胸に矢が飛んできて刺さり、それを呼び水に無数の矢がオーク鬼へ襲いかかった。

戸惑いを打ち払おうとすこしやけくそ気味に槍を投げようとしたその手が止まり、才人は思わず矢が飛んできた方向を見上げる。

矢はやっと自失から回復したニンフ達のものであった。

「ちょっと！ もう！ あんた！ 援護するから、もうその槍投げるのはやめなさいよ！

もうもうもう！ 谷を荒れ地にするつもり?!」

村を守る壁の上、目があった一人のニンフが才人に向かって叫ぶ。

どこか見覚えのある顔（とは言っても皆同じ顔をしているのだが）と口調から、恐らくは才人が持ってきた乾燥ハーブを受け取った

あのニンフであろう。

才人はしばし呆然としてごめんと呟きかけたが、ふとある事を思い出し台詞と呟きを大声に変えた。

「援護はいい！ それよりも、魔法を頼む！」

「はあ？ もう！ もうもう！ ダメよ魔法は！ 私達じゃ、すぐにバテてしまうわ！」

あんなに沢山、魔法だけで相手にしてたらわたし、壊れちゃう！」

「ちがう！ 俺に魔法を撃つてくれ！ デルフに魔力を貯めるんだ！」

グオオオ！ とあがるオーク鬼達の雄叫びの中、才人は声を張り上げながらデルフを掲げて見せた。



それからすぐに振り返り、再び降り注ぎ始めた矢の嵐を抜けて殺到してくるオーク鬼を斬り伏せる。

才人と話したドリアー又は、その意図を理解出来ぬまましかし周囲の者に声を掛け指示を伝え始めた。

指示を伝えられたニンフ達は、口々に本当に？ 本当にあつちじゃなくてこつちに撃つの？ とかしましく確認をしていたが

下から才人が早くしてくれと催促の怒鳴り声をうけて、おずおずと才人に向かって魔法を撃ち始めるのであった。

たちまち風の刃や木の枝の矢が才人へと飛ぶ。

才人は器用に風の刃をデルフに吸わせかけたが、次いで飛んでくる無数の木の枝を見て慌てて横に跳んで逃げてしまった。

先住魔法によつて撃ち出された木の枝は、才人がつい先程まで居た場所へとなだれ込んできたオーク鬼達を無残にも貫いていく。

ニンフ達は最初に風の刃が吸収したのを確認して安心したのか、逃げた才人の事などお構いなしに次々と魔法を撃ち始めた。

「わ、わ、たいむ！ ちょ、ちょっとやめろ！ バカ！ やめろつて！」

「まあ！ まあまあまあ！ 言われた通りにやったのに、何よその言い草！」

「風の！ つと、刃とかなら吸収できるけど、木の枝の矢……っこの！ は吸収できねえよ！」

「始めにいいなさいよ！」

「知って……！ 行かせるか！ この！ お前ら、俺の記憶を知って” いるんだろ？」

「もう！ もうもう！ そんなどうでもいい細かい所、知った事じゃないわよ！」

わたしの記憶じゃないんだし、他人の記憶を見て印象に残る所なんて精々、夜な夜なあんたがいろんな女の人と

あーんな事やこーんな格好させて、たあつつつぷり楽しんでた記憶位よ！」

「わあああああ！！ 領域と一体になるとか大層なことって、何俺のプライバシー覗いてんだよ！！！」

「後！ オーク鬼が来てる！ 頑張つてれもんちゃん！」

「そつよ！ 頑張つてれもんちゃん！」

「れもんちゃん、これ終わつたられもんちゃんが好きな、犬のような体位で相手してあげるからね！」

「しっかり頑張るのよ！」

「もう！ もうもう！ あなたたち！」

「抜け駆けはするいわ！ わたしも混ぜてね、れもんちゃん！」

「うるせえ！ お前ら後で覚えてる！」

「この！ くそ、キリがねえ。もういいから、風の刃とか物を飛ばさない奴をたのむ！」

才人は耳まで赤くなりながらも、更に剣速を上げて押し寄せるオーク鬼を切り裂き半ばやけくそ気味にがなった。

ニンフ達は先住魔法を操るのであるが、デルフが吸収できるのは「魔法によって作られた存在」だけである。

すなわち、”ファイアー・ボール” や ”アイス・ジャベリン” のような魔法ならば吸収できるのだが、小石や岩を魔法によって

動かし撃ち出すような攻撃は吸収できないのだ。

果たして、間を置かず才人へと無数の風の刃が飛んで行く。

今度はデルフリンガーについての記憶を確認してから魔法を撃っているらしく、ニンフ達は一斉に魔法を撃たず

吸収しやすいよう順番に魔法を発動していった。

才人は迫り来るオーク鬼を斬り伏せながらも器用に大剣を振りかざし、デルフリンガーに魔力を貯めていく。

「この位でいいか……。もういいぞ！」

「なに？ なになになに？ あなた、何をするつもり？」

ソレ、イザと言う時に持ち主を操る魔剣でしょう？」

今のあなたには必要無いとおもっただけれど？」

「こっ、すんだよ！」

ニンフ達の間をわきまえていない質問に、才人は律儀にも声を張り上げて答えた。

同時に強く輝いていた左手のルーンが赤く禍々しく変わる。

門とそれを守る才人を押し潰すべく、にじり寄っていたオーク鬼達も目の前の怪物の変化に警戒も露わに手にした武器を構え直した。

周囲にキィイ、と高い耳障りな音。

赤い光は音に同調するかのように徐々に強く濃くなっていき、壁の上、あるいは所々で燃えているかがり火よりも強く辺りを照らす。

浮かび上がる才人の表情は苦しげであり、デルフリンガーを握る両手はカタカタと小刻みに震えている。

なに？

何をしようとしている？

異様な才人の変化に、双方共ある者は目を奪われ、ある者は警戒の動きを止める。

「いくぞ、デルフ」

眩きは合図であつた。

バガン！ と何かが炸裂するような音を立て、才人の姿が文字通り消える。

かわりに矢のように速く動く赤い光の筋だけが、夜の大地に映えて見えた。

岩の壁の上、ニンフ達が目にした光の筋は爆音を響かせながら紙の上でペンを奔らせるかのような疾さで

縦横にオーク鬼の群れを引き裂いていく。

「なに、これ」

高くそびえる岩壁の上、誰かがもう一度眩く。

眩きはなぜかビリビリと轟音が頬を撫で辺りに木霊する中、二度目

の自失に囚われた誰もが耳に出来た。

ニルフ達は赤い光の正体を ” 知って ” いる。

アレは ” ダブル ” だ。

二つのルーンを共鳴させ、ガンダールヴの力を何倍にもする能力。

そう、平賀才人の記憶を得た彼女達は誰もが知っているはずの力だ。

しかし。

目の前の光景は。

「なによ、あれ」

砂塵のように、あるいは水しぶきのように、オーク鬼が、オーク鬼の欠片が滅茶苦茶に宙に上がっているのが夜目にも見える。

光は血のように赤く、残像のような尾を引いて凄まじい勢いで無軌道に地を奔っていた。

オーク鬼達はある者は混乱の中赤い何かに首を跳ねられ、ある者は門を抜けようとして群れの一番後方へと去った筈の赤い光に

八つ裂きにされながら宙を舞う。

光は逃れられぬ死その物であった。

屠った者の血を浴びたかのような赤を纏い、恐ろしい音を立てながら敵対する者をことごとく斬り伏せ、砕き、磨り潰し、引き裂いてゆく。

オーク鬼を、数の有利を、道理をすべて飲み込みながら、赤い光は”ダブル” を使っている才人はオーク鬼の群れを蹂躪した。

時間にして一分にも満たない間での出来事か。

デルフリンガーに貯めた魔力を使い切ったのか、才人は群れの一番奥から門へとまっすぐに戻り再びその姿を現す。

赤かった左手は先程と同じように白く輝いて、しかし苦しそうに肩で息をしている。

この時完全に自失してしまったニンフ達の目に映る光景は、数千もあつたオーク鬼の群れは今や動く者は少なく

かがり火に無残な屍を累々と映し出す地獄のような光景であった。

所々でまだ動いているオーク鬼を数えても、数十ほどしか残っていないだろう。



「はっ、はっ、はっ、さすが、に、ルイズが、いないと、きつい！」

「ちょっと！ ちょっとちょっとあんた！ なに？ なに  
なに？ 何をしたの？！」

「はっ、なに、って、しってるだろ、うが。 ” ダブ、ル ” だよ」

「知らないわよ！ あんな事できるなんて、知らないわよ！」

「はっ、はっ、あと、に、しろよ！ 残りをなんと、か、しないと  
！」

才人は息も荒く、ゆっくりとデルフリンガーを青眼に構えた。

切っ先の向こうから残ったオーク鬼達が半狂乱になり武器を掲げて  
迫り来るのが見える。

やはり、どこか変だ。

これだけの力の差を見せつけられた後であっても、あいつらは怯まない”。

やはり操られている？

どこか、他にオーク鬼を操っている奴がいるのか？

考えて、才人はぎゅっと目を瞑る。

再び湧いて出てくる疑問と荒くなってしまった偽りの呼吸を鎮める為に。

まぶたの裏に映し出されるのは、愛らしい主人の笑顔。

才人は想う。

ただ一つ、己が決して見失うべきでない目的を。

何の為にここに居るのか。

誰の為に剣を振るうのか。

左手の輝きは、誰を照らす光なのかを。

「情けねえ。これ位で息が上がるなんてな、ルイズ。

俺、やっぱりお前が側にいないとなにも出来ないよ」

呟いて目を開いた才人の呼吸は、既に落ち着いていた。

左手のルーンは再び強く輝き、体が羽根のように軽くなる。

迫るオーク鬼までの距離は百メートルほど。

帰ろう。

あれを蹴散らして、主の下へ帰ろう。

才人はデルフリンガーを強く握りしめ、大きく息を吸った。

瞬間、ん？ と片眉を上げて辺りを見渡す。

オーク鬼の腐ったかのような臓物臭や血の臭いといった悪臭が胸に入ってくるはずであったが、鼻を突いたのは

覚えのある甘く濃い花の香りであったからだ。

この匂い……たしか……

思考は戦場に似つかわしくない匂いの正体にすぐにたどり着く。

香りはドライアドが発するあの匂いであった。

花の芳香はあれよという間に強くなっていき、辺り一帯に満ちていく。

これが、ドライアドの言った ” オーク鬼を追い払う香 ” ってやつか？ と才人が辺りを見渡しながら考えていると

ほんの十メートル程にまで迫ってきていたオーク鬼の残党が一斉に苦しみ始める姿が見え、そのままオーク鬼達は散り散りに踵を返してどこぞへ走り去ってしまった。

同時に後方と頭の上でわっと歓声上がる。

「やった！ やったわ！ オーク鬼を追い返した！」

「この匂い！ ドライアドの香よ！」

「んー、でもでもでも？ もう必要無かったんじゃない？」

「そう、そうそうそう！ そうよねドライアド。」

もう一度魔法をばーっと撃っちゃって、あたしのサイトがずいーごーって蹴散らしちゃえば終わってたものー！」

「まあ！ まあまあまあ、ドリアーヌ！ いつから彼、あなたのサイトになったのかしら？」

「だって、だってだってだって、だってそうじゃない？ 彼、間違  
いなくドライアドのモノになるんだし。

それに、あたし達ニンフはコノ世界の一部ですもの。

だから、だからだからだから、ドライアドのモノはあたしのもの、  
あなたたちのモノもあたしのもの！」

「ちょっと！ そんなの……ん？ と、いうことは、あたしのモノ  
でもあるわけ？」

「んー、ということとは、彼、あたしのモノ?!」

つい先程まで修羅場であったのがウソのように、村を守る岩壁の上  
でかしましく黄色い声を上げるニンフ達に才人は苦笑いを浮かべた。  
それから珍しく無口なデルフリンガーをザクリと地面に突き立て、  
それを背にずるずると腰を下ろしてしまう。

” グリムニルの槍 ” の体とは言葉、 ” ダブル ” の強烈な反

動が強い疲労感が体中を支配していた。

「おつかれさま。すごく驚いたわ、あなた、信じられないほど強かったのね」

地に突き立てたデルフリンガーを背もたれにして、目を閉じうつむいていた才人は顔を上げる。

いつの間にそこにやって来たのか、あの小さなドリアーヌが目の前に立っていた。

甘く濃い花の香りが混じった谷風が彼女の青みが所々に差した長い髪を揺らし、美しい顔に柔らかく微笑みを浮かべている。

夜空に散らばる星と相まって、その光景はハルケギニアの生活も長い才人が見ても幻想的な情景であった。

周囲に散らばるオーク鬼の残骸が無ければ、きっと夢か何かと疑ったろうな、などと才人は考えながらも

向けられた幼い妖精の微笑みに二力つと笑って答える。

「言っ  
てなかつたっけか？ 俺、こ  
う見えても結構強いん  
だぜ？」

「ふふん、その台詞、誰に  
でも言っ  
てたわよね？ ”知  
つ  
てるわ  
よ”。

「ま  
つたく、とんだスケ  
コマシよねえ、あ  
んた」

「ん  
だよ、その言い草」

「だ  
つて、そうじゃない？  
これだけの力を見せ  
といて、その笑顔  
でその台詞。」

「天  
然でやっ  
てたなら相当なも  
んよ、あ  
んた」

「う  
……そんな、こ  
と、ないよな？」

「そ  
んな事あるわよ、  
現にわたしも結構  
ドキドキしちゃっ  
てるし」

「う  
へ、からかうなよ。  
でもまあ、ここ  
では俺、ブサイク  
らしいし  
大丈夫だろ」

才人はそういうと、気怠げに再びうつむいた。

小さなドリアー又は何気なく胸の高鳴りを才人に伝えていたのだったが、疲労の為かはたまた全くの対象外であるのか

どうやら才人の方にまともに取り合う気が無いことを察すると一つ、おおきくスン！ と鼻を鳴らし頬を膨らませるのであった。

そんな少女の気も知らず、才人はうつむいたまま傍らにいる妖精に少し改まった口調で言葉を続ける。

「……色々ありがとうな。俺、ドライアドに捕まらない内にさっさとここを出て行くよ」

「……わたしこそ、助けてくれてありがとう。」

さ、こんな所でへばってないで行くならさっさと行きなさい。

じき他のドリアー又達が壁から降りてきてここへやって来るわ。きつと、ドライアドも。

絶対皆、あなたに夢中になってると思うから捕まったら大変よ？  
多分ミイラになるまでに二日とかからないわね」

「はは、そりゃ困るな。俺は帰らないといけないんだ」



「そうそう。」

黙ってたけれど、ニンフもドライアドと同じように惚れっぼいの。  
わたしの気が変わらない内に、早くお行きなさいな」

少女の姿をした妖精は、そう口にしてすこし寂しそうに笑う。

才人は再び顔を上げそんな彼女に意外そうな表情を浮かべたが、小さなドリアーヌの背後に人影を確認して慌てて立ち上がり

地に突き立てたデルフリンガー鞘に納めた。

「花の入った小瓶、もった？」

「ああ、ここにある」

「小瓶もこの領域の一部だから、あんた以外の人間に触らせてはダメよ？」

外に出る時に人が触れるようになるのは花だけだから、誰かに渡

す時はあんたが取り出しなさい」

「わかった。じゃあな」

別れの挨拶は短く、かわりに才人はドリアーヌの頭に手をあててくしゃりと撫でる。

それから悪戯っぽく笑い、もう一度じゃあなと声をかけ左手を白く輝かせながら走り去るのであった。

谷風は甘く花の香りを孕んで才人を追いかけるように吹きわたり、次いで壁から降りてきた他のニンフ達が息を切らせてやって来る。

「ぜえ、ドリアーヌ！ 小さなドリアーヌ！ サイトは？！ わたしのサイトは……ああん、行っちゃったあ」

「いいのよ、これで。あれは私達の手に残る人間よ？」

「そんなあ……ドライアドが怒るわよお？」

「怒らないわよ」

「なんでそんなこと、わかるのよ?！」

「だって……」

小さなドリアー又はそこで言葉を句切り、まだ才人が去っていった方角を名残惜しそうに見つめる他のニンフ達に背を向けた。

しかし彼女も又、すこしだけ振り返り返して寂しそうに、哀しそうに呟くのであった。

先程、言葉を口にする不思議なフクロウから聞いた事実を。

「だって彼、  
”大いなる意思を殺す槍”  
の持ち主なんですもの」

人の心には闇が潜む。

それは特別なことではなく、誰しもがそうなのだ。

そして、大概の者はその闇を直視してはいない。

否、認識すらしてはいない。

故に、闇は ” 潜む ” のである。

なぜか。

それは直視すべきでないからだ。

それは触れるべきではないモノだからだ。

それは、そっとしておいて欲しい心の一部であるからだ。

平賀才人が夢現に見たものは、そんな闇であつた。

戦士として、誰かを護り続けた男として、誠実な性根を持って逃げ  
てはならぬと彼は闇を直視してしまった。

勇者はその行為が傷口に塩を塗り込むような行為であると気が付か  
ない。

いつか、乗り越えられる強さが身につくと信じて疑わない。

心に潜む闇とは、暴れるほどに絡め取られるクモの糸のようなもの  
だ。

才人は甘く優しい夜の谷風を切り裂いて、主の下へ帰るべく花畑の  
中を風のように走っていた。

対峙し見てしまったが故、胸の奥心の深い場所で根を張りつつある  
闇に気が付かないままに。

闇はやがて心を砕き、その精神を蝕むであろう。

ただ、才人にとっての救いはその成長が非常にゆっくりとしたもの  
であつた事だ。

勇者は気が付かない。

眩しい程の主の光を、焦がれるように求め続けるばかりに。

使い魔は気が付かない。

その光が落とす濃い影が、己の闇であることに。

才人は走り続け遂にあの飛び降りた崖へとたどり着き、一息にフェルトン村で ”境界” だと教えられたあの小さな広場へと跳んだ。

辺りは星一つ見えない闇である。

よし。

あとは森を抜け、村で薬を調合して貰うだけだ。

どれ位の時間が経過しているのか分からないけれど、考えても始まらない。

今は目の前の目的を……

「またそうやって私達から目を逸らすのね。酷い父親」

森を矢のように駆ける才人は、ザザと木々がざわめく音の中確かにその声を聞いた。

思わず足を止めてしまい辺りを見渡す。

視界は全くの闇である。

才人はここで初めて異変に気が付いた。

夜の闇とは言え、つい先程まで走っていたにも関わらずあまりに”濃すぎる”のだ。

視界が黒一色で埋まり、自分がいままでそんな闇の中をどうやって疾走していたか判断も付かない。

いや。

視界だけでなく、音も無い。

地を駆ける音、耳にする風切り音、木々のざわめきすらも消えてしまっている。

ただ一つ、甘い花の香りだけは鼻を突いて消えはしなかった。

まさか……

才人ははっとして、香りがドライアドのものだと思い出し思わず背にしたデルフリンガーに手を掛ける。



「ちがうわ。ドライアドは力尽くで引き留めるようなことはしない」

「だれだ？ 何処に居る?!」

「目の前よ、お父様」

闇の中、返事と共にいつの間そこにいたのか青髪の美しい少女が立っていた。

眼鏡はしていなかったが、その顔はタバサとური二つである。

しかし背まで伸ばした髪が決して彼女ではないことを才人に示していた。

「お前……なんで……」

「まあ。自分の娘に ” お前 ” だなんて……

お父様、ちゃんと名前で呼んでくれなくてはイヤですわ。さあ、私の名前を呼んでくださいまし。

いつもの優しい声で と。

慈しむあの眼差しで、私を見てくださいまし」

少女はそう言っけてクスリと笑う。

対照的に、才人はゆっくりと頭を振って呻くように答えた。

「ごめん。その……覚えていないんだ」

「そう。酷い父親ね」

「ああ。でも、後悔はしていない。俺はその為に戻って来たのだから」

「あら。今度は開き直るの?」

「……好きに罵ってくれて良いよ」

「まさか！ 大好きなお父様をどうして罵れましょう。

例え裏切られても、憎まれていようと、必要とされなくても、私はお父様を愛していますわ」

「じゃあ！ じゃあ何故出てくるんだ？！

なんで俺を苦しめるような……くそ、ノルンの仕業か？！ それともドライアドか？！」

才人は思わず声を荒げてしまい、自身のその声に内心驚いた。

俺は何故こんなに激昂しているんだ？

おかしい、感情が制御できていない……

こんな事、言うつもりは無いの……

予想外の己の反応に困惑しながら、才人は心が軋む音を聞いた。

少女はそんな才人の剣幕にショックを受けた風に口元に両手を当てて、息を飲んでいる。

「あ……」

「そんな……ひどい……私はただ、お父様に会いたかったのに……」

「う、うめん……」

「お父様、ひどい……ひどいですわ」

少女の顔は既にぼやけてしまっている。

才人が思わず手を伸ばすと、少女はゆらりと揺れて手応えもなくそのまま掃き消えてしまった。

「まって！ まってくれ！ 俺、俺は」

「ふふ、お父様、安心なさつて。私は消えたりはしません。

お父様にどんなに疎まれようと、哀しい想いをさせられようと、決してお父様のお側を離れたりはしませんわ。

だって、私はお父様の……」

闇の奥から少女の声が才人の耳に届く。

その声は記憶の彼方で聞いた事があり、初めて聞くような声でもあった。

闇の中、再び一人で佇む才人。

視界を満たすのは黒、黒、黒。

漆黒の世界である。

外界のその色は己の心その物のような気がして、才人は思わずその場にへたり込んでしまった。

偽りの体に虚脱感が満ちていく。

目的を見失ってはいない。

早くルイズの顔が見たい。

しかし。

今だけは……

今だけ、少しだけ、休ませてくれ……

鼻をくすぐる甘い花の香りは、軋む心を静めて眠気を抱かせた。

才人は苦しい胸の内とは裏腹に、心地よい香りに身を委ねへたり込んだまま目を閉じる。

やがて睡魔が彼を支配するのに、それ程時間はかからなかった。

眠りに落ちていく感覚の中、闇の中で才人はもう一度今度は別の声を聞く。

「大丈夫。ソレは ” 領域 ” を出る時に見る、悪夢みたいなモノよ。」

ドライアドの領域で見聞きしたモノはすべてドライアドの物だから、それもじきに忘れるわ」

「ドリ、アーヌ？」

薄まる意識の中で才人はあえぐようにその名を呟いて、そのまま深く闇の中に落ちて行くのであった。

次に目を開けた時は、闇ではなく緑色の木陰の向こうに茜色の空が見えた。

鮮やかな朱色の空に渡り鳥の群れが見えて、なんともどかな光景である。

一瞬朝であるのか夕暮れであるのか才人は判断に迷ったが、日の傾いている方角から夕方であると認識するのに

それ程時間がかかりはしなかった。

それから地に腰掛けた体勢のまま辺りを見渡すと、そこは ” 囚われ谷 ” とこちら側の世界の境界であるあの広場であるとわかる。

徐々に増す現実味を帯びた覚醒が、今までの出来事が夢であったかのように思え才人は急に不安に駆られわしと懐をまさぐり

出て来たヒモの付いた小瓶と中の可憐な花を確認するや胸を撫で下ろすのであった。

「よく分からないな。俺、何時寝ちまったんだ？」

随分と板に付いてきた気がする独り言を吐きながら、才人はもう一度座ったまま空を見上げた。

ええと、俺は……

何故ここで寝てしまっただけで居たのか、どうやって妖精花を手に入れたのか、記憶をたぐる。

しかし、容易い筈のその作業は何故か上手くいかない。

あれ？

なんでだ？

詳しく思い出せない……

才人は茫と空を見上げたまま、まだ胸の奥に残るしこりを感じ取り強い脱力感を覚えてもう少しこうしていようなどと考えた。

すごく苦しい夢をみたような気がして、もう少しのどかな空を眺めていたかったからだ。

”妖精花” は手に入れた。



乾燥ハーブと引き替えに。

あ、そうそう。

オーク鬼に追われる女の子を助けようとして、  
” 囚われ谷 ” へと降りて。

そこから……そこから、なんだっけ？

才人は頭を振り、記憶にかかったモヤを振り払おうとする。

しかし、どうしても思い出せない。

何かすごく深刻で苦しい思いをしたような気がするんだがなあ、  
な  
どと考えながら視線を地に落としていくと

どこかで嗅いだ事のある甘く濃い花の香りがふわりと漂っているこ  
とに気が付いた。

えっと……なんだっけ？ この香り。

心地良いような、でも胸がざわめくような……

俺、まだ寝ぼけてるのかな？

どうも上手く記憶を取り出せないでいた才人は、  
気を取り直すべく  
立ち上がり大きく伸びをする。

谷の下へと降りた後はぼっかりと記憶に穴が空いてしまっていたが、

喪失感は小さくそれ程気にはならなかった。

んー、と伸びをした才人は元来のお気楽な性格である為か、次の瞬間には定かではない記憶の事など忘れてしまい

早く花を持帰らねばと村への帰路につくべく体を翻す。

その時である。

視界の端に映り込んだ赤が、才人の目を引いて思わず立ち止まる。

不思議と気になり足を止めて赤の正体を確認すると、それは小さな可憐な花であった。

なぜ今まで気が付かなかったのか、所々に青が差した赤いその花は懐の小瓶の中にあるものと同じ妖精花だ。

甘い花の香りと共に柔らかな谷風が下から吹き上げて、釣り鐘のような花弁を揺らしている。

才人は不意に寂寥感に襲われ、暫くその場でじっと花に魅入ってしまった。

花はまるで恥じるように、あるいは別れを惜しむようにゆっくりと風の中花弁を揺らしている。

「……じゃあな。色々ありがとう。」

なぜその言葉が口を突いたのかわからない。

しかし、それが特に間違ったことではないと才人は確信する。

最後に見た花は言葉に応えるように優しく風に揺れ、” 囚われ谷  
” の妖精はひっそりとその姿を才人の記憶に止めたのであった。

才人がヴァリエール城に帰って来たのは、それから丸一日と半日程  
過ぎてからの事である。

公爵とその夫人、長女のエレオノールは朝の日差しが差し込むサロ  
ンでの朝食の席にて、悩ましい表情を浮かべながら

才人が持ち帰った土産のハーブ茶を口にしていた。

対照的に次女であるカトレアはニコニコとしてハーブ茶を楽しみな  
がら、公爵の目の前に置かれた小瓶を見つめている。

公爵は目の前に置かれた小瓶の中身を知っているのか、苦虫をいくつもかみしめてうづむと何度も唸り続けていた。

ちなみにルイズとはと言うと、公爵の昼も夜もない”説得”に癪癪を起こして暴れた為、自室謹慎中である。

「ルイズの代わりと言うわけでは無いのですけれどお父様。

如何でしょうか？ これでルイズの言い分をお認めになって下さいますの？」

「うづ、む……」

「ねえ、カトレア。そ、そのお薬、一粒私に出来ない？」

「エレオノール。なんですか、貴女は。体の悪い妹の薬を何だと…

…」

「お、おおお母様、じよ、冗談ですわ！」

公爵夫人はきつく睨み付けられたエレオノールは、名残り惜しそう公爵の前に置かれた小瓶を見つめながら言葉を濁した。

そんな妻と娘の様子など目も入らないかのように、公爵はもう一度先程からそうしていたようにうつぶむ、と唸る。

「しかし、まさか彼がフェルタン村で作るいつもの魔法の秘薬じゃなくて、”花咲く妖精の妙薬”を持ち帰ってくるとはね。

この秘薬中の秘薬を一体どうやって手に入れたのかしら？」

「姉さま、フェルタン村の近くには精霊の住処である ” 囚われ谷 ” という場所がありますわ。

人間には立ち入りできる場所ではないのですが、恐らくはそこで手に入れたのでしょう」

「知ってるわ。

でも、それが本当なら良く生きて帰って来れたわね……

アカデミーも ” 囚われ谷 ” へ調査のために何度か人を送ってるけども、帰ってこれた人間なんて一人もいやしなかったもの」

「そのようですわね。

” 囚われ谷 ” の精霊はとても気難しくて、いくらかの交流の

ある村人達ですら滅多なことでは近寄ろうとしない場所だとか」

「うっむ……」

”花咲く妖精の妙薬”とは、ヴァリエール領となる遙か昔からこの地方伝わる幻の秘薬の名である。

その長い歴史の中、数百年に一度位の頻度でフェルタン村から時の領主へ献上される秘薬中の秘薬であった。

言い伝えではあらゆる病を治し、いかなる傷であってもたちどころに塞いでしまうとされ、古い文献では白痴をも治癒すると

書かれている伝説の薬である。

フェルタン村では年に一度やって来る精霊から入手する、ラ・カンパネラという酷い悪臭がする ”妖精花” で魔法の薬を作るのであるが

ごく、極々希に非常に良い香りのする ”妖精花” を精霊が持つてくる年があり、それを材料に作る薬が ”花咲く妖精の妙薬” と

呼ばれるようになると今に伝えられる。

伝承の通りに本来赤く仕上がる筈の小さな丸薬は、赤の中に青が差した模様を浮かび上げらせ薬を入れておく小瓶の中に所狭しと詰まっていた。

「お父様？」

「うづむ……」

「もう、先程からそればかり」

「仕方ないではないか。この私とて本物は見た事はないのだからな。カトレア、これは本当に”花咲く妖精の妙薬”なのか？」

「さあ。それが本物であるか、お父様でも見た事無いのですからわたしも確証を持つてはいませんわ。しかしなが」

「じゃあ、私がアカデミーに持ち帰っ」

「エレオノール？」

「なんでもないわ、カトレア。続けて？」

「ふふ、はいお姉さま。」

お父様、しかしながらそれを先程飲みましたが、まるで生まれ変わったかのように体の調子が良くなりましたの。

少なくとも、いつものフェルタン村のお薬よりもずっと効用が良い物でした。

村長が添えた書状にも、”花咲く妖精の妙薬” である旨記載されておりまして、わたくしは本物だと思います」

「おお、おお！ カトレア、お前体の調子が良くなったのか？」

「ええ、お父様。こんなに体が軽いのは生まれて初めて。」

効能が伝承にある通りならば、体の芯まで治癒しているのかも知れませんか。

そうでなくとも、これほど良く効く薬がこれだけあれば、しばらくはお薬の心配は必要ないでしょうし。

ふふ、今ならば社交界の会合にも顔を出せるような気すら致します。これも”彼が” 秘薬を持ち帰ったお陰ですわね」

珍しく強い生気に満ちたカトレアの笑顔と言葉に、公爵は目に涙を浮かべて幸せそうにうんうんと頷いていたのだが



彼が、とカトレアが強調したことによって再び不機嫌な、悩ましそうな表情に戻りうつむ、と口にするのであった。

そんな公爵の様子を夫人は呆れたような、それでいてすこし可笑しそうな表情を浮かべてただ黙って夫を見つめる。

エレオノールはというと、ハーブ茶が気に入ったのか何杯目かのカップを口に付けて物欲しそうに小瓶と公爵夫人の顔を交互に見ていた。

「それで、お父様。如何なさいますの？」

お父様のお気持ちは分かりますか、彼は……ルイズの使い魔はこちらの要求通りにフェルタン村から魔法の薬を持ち帰りました。

それも、最高のお薬を。

貴族として、ヴァリエール家の者として、今度は此方が約束を果たす番だと思うのですか……」

「……そうだな。確かに、”花咲く妖精の妙薬”を持ち帰った事については評価してやらねばならん。

私の部下として、貴族待遇で取り立ててやってもいい程だ。

なにより、その薬でカトレア、お前の病が治っておるのかもしれないのだ。

私情は持ち込むまい」

公爵はそう言ってカトレアに優しく微笑んだ。

同時にエレオノールはむせてしまい、口に付けていたカップを落としそうになる。

公爵夫人はそんな長女の様子に再教育の必要性を感じつつも、夫の真意を察してかほう、と優雅にため息をついて見せた。

「では……」

「だがな、カトレア。ルイズは私の大切な娘なのだ。

ルイズだけではない、お前やエレオノールもだ。

私はヴァリエール公爵として、約束を果たしルイズに出征の許可を与えなければならぬだろう。

カトレア、たとえそうであつてもだ。

私はヴァリエール公爵である前に、人の親なのだ。

あの子を一人前の貴族として扱ってやりたいお前の気持ちもわかるが、私はきつと死を迎えるその時まであの子やお前達の父であるのだよ。

これは公爵である私の体面や貴族の名誉などを気にする問題ではない。

親としてルイズを出征させるわけにはいかん。たとえば、約束を破る事になってもだ」

公爵は優しい声できっぱりと言い放つ。

その言葉に強い意志をカトレアは感じてか、少し影を差しながらも諦めたような表情を浮かべてそれ以上言葉を発することはなかった。エレオノールはと言うと、さもおりなんと優雅にハーブ茶のカップを口に運ぶ。

夫人もそれに続き、同時にカップから口を離れた所でエレオノール、あとで話があります。今日この席でのお前の態度の事です。と宣言し

彼女を酷く動揺させた。

「そんな……ひどい……お父様……」

声にその場にいた者が一斉に振り向く。

いつからそこにいたのか、ルイズが自室から抜け出してサロンの入り口に立っていた。

先程の公爵の言葉を聞いたのであろう、その表情は落胆と怒りに彩られている。

「約束したのに……お父様！ 酷い！

結婚しろだの、危ない使い魔だからもう会うなだの、お父様は私をなんだと思ってるの?!」

「ルイズ！ それは」

「親としてって言いたいんでしょう?! でも、私だって言い分はあるわ！

征かないと、この国が滅びるかも知れない。そうなれば結局戦火が領地に及ぶのよ?!」

何より、私は、私は、私、は……」

虚無の使い手なのよ！ と叫びたかった。

しかし、残った理性がそれを阻む。

果たして。

肩を振るわせ、ルイズが次に叫ぶように口にした言葉とは。

「サイトを愛しているのよ！」

「んな?!」

「ぶっ、ケホ、ケホ、る、るるるるるるるるるるルイズ?! 何を言い出すのこの子は?!」

「本気よ!」

「る、るる、ルイズ? 冗談だろう? パパに冗談だっていっておくれ、私の可愛いルイ」

「もういい！」

もう、あなたはあんで何を今更！ つべこべ言わずに、さつさとやんなさい！

いいから！ はやく！！」

同時にドゴン！ と派手な音を立ててルイズが立っていた場所に近い壁が崩壊する。

ドラゴンか何かを外へ向かって壁を壊しながら移動したように、一直線に大きな穴が各部屋を貫いているのが見えた。

そんな大きな穴から左手にシエスタを抱えた才人が、申し訳なさそうにヒョッコリと顔を出す。

「る、ルイズ！ 落ち着きなさい！ パパが悪かったから、落ち着いて！」

「衛兵！ すぐに門を閉じさせなさい！ ヴァリエール烈風隊に伝令！ 城門前に集結！」

「はっ、奥様」

公爵と夫人は外に向かつて一直線に貫かれた穴を見て、ルイズの使い魔が何をしたのか、ルイズが何をしようとしているのか理解する。

ルイズはイツ！ と歯を剥いて見せ、現れた才人の首に腕を回しあろう事か家族の前で使い魔と口づけを交わした。

その情熱的な様子はどう見ても、当てつけやおふざけには見えずエレオノールと公爵は息を飲みその場に固まってしまふ。

静寂の中、ぴちゃりと小さく音を立てて才人の口を強引に吸っていたルイズは、やがてぷはあと息を吐いてその口を離しキッと公爵を睨んだ。

あまりの出来事に、公爵夫人ですら目を丸くして沈黙の支配に身を委ねてしまっている。

いや、唯一カトレアだけは一切の動揺を見せずにコロコロと笑っていた。

「あ、あの……俺……」

「……って！ ミス・ヴァリエール！ ずるいです！ わたしも、えい！」

「あ、ちょ、こらー！！」

才人は複数の視線に段々と怒気が込められてくるのを感じて、弁明を試みようとしたのであったが

その口を今度はルイズを押しつけ左手で抱えていたシエスタにふさがれてしまう。

口づけは一瞬。

すぐにルイズがシエスタを引っぺがしたが、ちゃっかり舌まで入れられてしまった才人は己のふがいなさに肩を落とす。

しかし、状況はそんな才人を置き去りに険悪な方向へと加速していく。

シエスタとルイズが自分の体にまわりつきながら口論を始める中、視線に込められている怒気が更に……否、急激に強くなる。

特に夫人からの物が、暴君を彷彿させるような圧力だ。



「き、きき、貴様！ 成敗してくれる！ ルイズをは、離せ！」

「え、あ、お、落ち着いてくだ」

「いいのよサイト。さ、早く行きましょ！」

怒気と殺気を体中から噴き出させながら、公爵は杖を抜いた。

対照的に公爵夫人は内側に怒気を押し込めていき、強烈な圧力と意志を込めて才人を睨み付けている。

そんな夫婦の末娘は、才人の右手側から首に腕を回したまま、恨みがましく父親を睨み。

彼女の両親の怒りを一身に背負う少年のような老人は、困惑しながらも左手にシエスタをまわりつかせて

その怒りに油を注ぎ込んでいた。

「うっ、なんでこんな事に……」

「ルイズ！ そいつから離れなさい！ おのれ、よくも私の娘をたぶらかしおつたな！」

「ルイズ。そこをどきなさい」

「イヤよ！ サイト、モタモタしてないではやく!!」

言葉に才人は我を取り戻し、ルイズとシエスタを抱え上げて矢のように外壁に開けた大穴に駆け込んだ。

ルイズの台詞に我を取り戻したわけではない。

夫人の、暴君と同等かそれ以上に膨らみ内側に押し込めていた圧力が、殺気に変わりつつあるのを感じ取ったからである。

「まで！ おのれえ、だれぞ！ ボドワン！ ボドワンを呼んでこい！」

「公爵様！ ボドワン様は先日の決闘で未だその傷が癒えず……」

「ええい、くそ！ そうであつた！ もうよい、この私自ら……」

「おお、お父様！ いけませんわ、万一お怪我でもされたら如何なさるのです！」

もう！、ルイズ！ おまちなさい！」

才人が飛び出した壁の穴から、公爵は齒を剥き怒りも露わに身を乗り出す。

そんな父親の身を案じてか、比較的冷静であつたエレオノールが怪我でもされたら大変なことになると必死に制止していた。

外壁に開いた穴の先、まるで村娘をさらう山賊のように両手に女の子を抱えて馬のように走る才人が見える。

は、離せ！ と無茶をせぬよう娘に拘束される公爵の後方で、公爵

夫人は才人の背を見てため込んだ怒りを吐き出すように

一つ大きくため息をついた。

それからおもむろに踵を返して、座っていた席から立ち上がり一連の騒動をニコニコと眺めていたカトレアのもとに歩を進める。

「カトレア。あなた、こうなると分かっていたでしたね？」

「いいえ、お母様。

ある程度の予感はしていましたが、まさかこんな事になるとは夢にも思いませんでしたわ」

「まったく、我が家の娘達には本当にこまったものね」

「うふふ、だってお母様とお父様の娘ですもの、私達」

カトレアはそう言いながら楽しそうにコロコロと笑う。

そんな娘に夫人はもう一度大きくため息をついた。

背後では公爵が娘をととうと振り切り、ルイズの名を叫びながら穴から外へ飛び出してしまったようだ。

それを受けてか、夫人はやや呆れた口調でカトレア、と改めて娘の名を口にした。

「はい、お母様」

「今すぐにおまえの ” 馬車 ” でルイズを追いかけなさい。

無理に連れ戻そうとせず、一度城に戻るよう説得をします。

よいですか？ あれの使い魔はとても凶暴です。

決して無理矢理連れ戻そうとせず、 ” 説得 ” するのですよ？」

「お、お母様！ 私と一緒に行き」

「お前はその後、私の部屋でじっくりとお話をするのですよ？ エレオノール。

先程までの態度は、淑女としてすこし目に余るものがあります。バーガンディ伯爵との件もまだ詳しく聞いていませんしね？」

公爵夫人は優雅にエレオノールの方に視線を流しながら、そう口にした。

エレオノールは思わずひっと短く悲鳴を上げ、へびに睨まれたカエルのようにその場に硬直してしまう。

引きつった彼女の表情を確認した公爵夫人は、視線をカトレアに戻しわかりましたか？ と確認した。

「はい、お母様。

ふふ、いくらなんでもルイズを学院まで歩いて帰らせるわけにもいきませんものね」

「……急ぎなさい。公爵様は私の方で引き留めておきます。

だれぞ！ 烈風隊に伝令。公爵様に至急館に戻るよう伝えなさい。私の名を添えるのを忘れないように。

ああ、それとカトレア」

「？ はい、お母様」

「今回の一件、ルイズの肩を持つならちゃんと最後まで面倒を見なさい」

「どづいっ事でしょう？ お母様」

「恐らくはあの使い魔は……」

言いかけて、その台詞を遮るように雷鳴が轟いた。

う、と頬を撫でる轟音にカトレアは眉をひそめるも、公爵夫人は微塵も動揺せずそれどころかため息を深くつくのであった。

「……と、いった感じで城門を破壊して出て行くでしょう。壁よりも門の方が修理が難しいと言っのに、まったく」

「……そのようすわね、お母様」

「ですから、カトレア。 ”花咲く妖精の妙薬” を何粒か置いて

いきなさい。

ヴァリエールは此度の戦には兵を出さぬ故、莫大な税を戦費として払う必要があるのです。

城門の修理費など、出せようはありません。

ですからそれを売って、修理費に充てます」

「分かりました。ついでに、ルイズにも何粒か渡しておきますわ、お母様」

「……貴女は説得に赴くのですよ？ それを忘れないように」

「はい、お母様」

カトレアはコロコロと笑いながらも齒切れ良く返事をして、足取りも軽やかにルイズの後を追うべくサロンを後にした。

生まれた時から病弱で、いくら医者に診せても体の芯が良くないのか、治す手立てがなかったあの娘が……

夫人はそう思い、つい目に涙が浮かんでしまっていることに気が付いて慌てて小指で目尻をぬぐう。

それほどその時のカトレアは生命力に満ちて、華やかな雰囲気醸



し出していたのだった。

「では。私達もまいりましょうか、エレオノール？」

「ひ？！ ひゃい！」

胸の内の感情とは真逆の、鉄の錠を口にする時の声色で公爵夫人はコツソリ部屋を出て行こうとした長女に声をかけ

優雅にサロンの入り口へと歩をすすめる。

しかし一度だけ才人が出て行った外壁の穴へ視線を流して、この日何度目かのため息を大きく深く、胸の外へ吐き出す夫人であった。

かつて、『烈風』と呼ばれた頃の声色を伴って。

「まったく。あの子は一体、誰に似たのかしら？」

「姫さま、こんな時に一体何の用かしら？」

少し不安げなルイズの言葉は、才人にとっても同様に不可解な疑問でもあった。

ルイズと共にヴァリエール城から逃げ出し、カトレアに学院まで送って貰ってから丁度三日目の事である。

神聖アルビオン共和国との戦争は、総力戦となってゆく趣が出て来たトリステイン国内にあつて

学院にも学徒出征の勅令が届いた頃。

同時にルイズと才人にも女王アンリエッタから王宮に出頭せよと、命令書が届いていた。

夏に行った間諜任務以来、アンリエッタの私生活での慰めを目的として幾度か出頭命令書を受領していたルイズであったが

今回ばかりはいつもの息抜き目的ではないと感じ取り、緊張した面持ちで女王の私室に案内をする女官の後を歩く。

一体、なんなのかしら？

今は侵攻作戦の準備で姫さま、私なんかと会ってる暇なんてないでしょうし……

サイトの記憶にある、”アルビオン戦役”の内容はずっと前にお伝えしてるし……

て、いうか。

「ねえ、サイト。あんた、ちゃんと前々回に姫さまに謁見した時、”戦争”のことちゃんと全部話したのよね？」

「ん？ ああ、後年の研究によってわかった事も含めて、あれで全部だったぞ？」

「んー、じゃあなんで姫さまは私だけじゃなくてあんたも呼んだのかしら？」

「さあ？」

「……あんた、やっぱりなんか私に隠してない？」

「なんだよ、突然」

「夏の ” 狐狩り ” で姫さまと一緒に居た一件、私アレがどーも怪しいって思えてならないのよねえ？」

「だ、だから！ なんもなかったって！ 説明したろ？  
姫さまを探す兵士の目を眩ます為に、 ” 前 ” は………なんかあったけど、今回はなんも無いようにしたんだって！」

「じゃあ、なんで姫さまがあんたと目を合わせる度にあんなにむず痒そうにするのよ？」

「そんなこと、知らねえよ！ 大体だな、ウエールズ殿下が居る姫さまに俺がなんかできる筈がないだろ？！」

「それはまあ、そんなんだけど……なんか引つかかるのよねえ」

二人は前を歩く女官に聞こえぬようヒソヒソと言い争いを始めたのであったが、やがてそれも女王の私室の前に到着する事により

強制的に中断する事となった。

女官は二度大きな扉をノックをして、ミス・ヴァリエールをお連れしましたと室内に声を掛ける。

すぐに中から覚えのある細く可憐な声が返って来て、扉は厳かに開かれ果たしてルイズと才人はアンリエッタの私室の中へと

足を踏み入れたのであった。

「げ…」

「…げ」

同時に上がる、二人の気まずい声。

儀礼に則り、室内に数歩足を踏み入れ会釈した二人は頭を上げるや顔を引きつらせ、その場に固まってしまう。

その後方ではパタン、と静かに両開きの扉は閉められ、アンリエッタが持つ唯一の私的な空間はたちまちのうちに

沈黙と気まずい空気に満ちるのであった。

「二人とも、よく来てくれましたね。」

「さあ、そんな所に立ってないで此方にお座りになって？」

「姫さま！ これは……」

「ふふ。それも含めて、説明してあげるわ、ルイズ。さあ、サイトさんこちらに。」

今日のお茶はサイトさんが先日持ち帰った品だと聞いておりますが、これは凄く良い香りですわね。

たしか、ラ・フォンテーヌ女侯爵の領地にあるフェルタン村のものだとか。

今度もっといただけよう、お願いしてみようかしら。ねえ、公爵？」

「陛下！　このような者に、そのようなお言葉は！」

「良いのです。」

彼は私の命を、名誉を、そして今この国を護って下さる、かけがえない友人なのですから」

「し、しかし……」

そう。

ルイズ達を絶句させ、その場に立ち尽くす事となった原因は予想外の先客の存在であった。

恐らくは、今現在二人が最も会いたくない人物であろうその先客とは。



「お、おおお、お父様！ どうしてここに……」

「どうしても何も、ルイズ。

家を飛び出したお前が戦に参加させぬよう、陛下に直訴する為こうして推参したのだ」

「本当は戦が終わってから改めてルイズのご両親とお話をする予定だったのだけど……」

丸一日も待たせてしまつてごめんなさいね、ヴァリエール公爵。わたくし、どうせならルイズとサイトさんに同席して貰おうと思つたの。でも戦の準備で中々手配できなくて」

「いえ、陛下。そのお心遣い、誠に痛み入ります」

「姫さま！ 一体どういふおつもりですか?!」

「ルイズ！ 陛下の御前であるぞ！」

「よいのです、ヴァリエール公。

ルイズ、悪いようにはしませんから、まずはそこにお座りになさい」

広い私室に設えられた、豪華な応接の為の椅子に座っていたのはルイズの父親であるヴァリエール公爵であった。

アンリエッタはその正面にあたる己の隣の席に座るようルイズに促し、公爵が持参した豊かな香りのハーブ茶に口を付けた。

本来、女王の隣に座る事など家臣には決して許されぬことである。

しかしそれ程ルイズを信頼している、もしくはルイズを大切にしていると公爵に知らしめる意図がアンリエッタにはあり

その意図を汲み取った公爵も特に窘めも咎めもせず、ルイズも渋々ながらアンリエッタの隣の席に腰を下ろすのであった。

一方、才人はというと敵意丸出しの公爵の目を見ぬよう、必死に視線を泳がせながらルイズが座る席の後ろに直立不動の姿勢で控えて  
だらだらと偽りの体に冷や汗を流していた。

何より空いている席はルイズの正面、公爵のとなりの席である。

「あら？ サイトさんもお座りになって？」

「いつ、いいえ姫さ……陛下！ 俺、自分はルイ……ご主人様の後でござって控えております」

「うふふ、いつも通りでよいのですよ？ ほら、そちらに……」

アンリエッタは柔らかく笑いながら、空いた席に手を差し伸べる。

女王の私室にあって、応接に使われる椅子は四脚。

テーブルを挟んで二脚ずつ、片側にはアンリエッタとルイズが座り、もう片側にはヴァリエール公爵が鬼の形相で座っている。

公爵も憎き相手とすこしでも近くに居たいのか、才人が平民であることも忘れ、隣に身分違いの者が座る事に何も言わない。

『何してんのよ、話が進まないからさっさと座んなさいよ』

『いやだ！ た、たすけてくれルイズ！』

『ムリ。お父様の前でこれ以上姫さまになれなれしくしている所、みせたくないもの』

『そんな……』

「サイトさん？」

『ほら！ 姫さまにこれ以上お言葉を煩わせると、お父様が……うわぁ……あんな顔で怒ってるの、初めて見たわ』

心の昂ぶりが、ルイズとの意識の共有を可能にする。

才人は最後に縋るか細い糸のような繋がりに助けを求めるも、状況は刻一刻と悪くなるばかりだ。

娘をたぶらかし、大切な城を破壊し、子飼いの部隊を壊滅させ、目の前で主君に二度も言葉を煩わせた相手に対する怒りはどれほどの物か。

鬼の形相で睨み付けてくる公爵の隣に、才人は出来損ないのゴーレムのような動きで腰を下ろして決してその顔を見ぬよう

じっと正面に座るルイズの美しい顔を見つめる事に集中する事にし

た。

アンリエッタがその様子に少し可笑しそうに微笑んで、さてそれでは本題に入りましょうと宣言をするや公爵はいの一番に口を開く。

「陛下。先にお伝えした通り、娘の従軍をお認めにならぬよう、お願い致します。

我がヴァリエール家は此度の戦に派兵しない代償として、きちんと税を納めております故。

これをお認めになる義務は陛下にはあるはずです」

「お父様！ 私の従軍は命令されたからじゃないわ！ 私が自分の意志で従軍するの！」

「二人とも、落ち着いて。ヴァリエール公爵。あなたが娘を想うそのお気持ち、よくわかりましたわ」

「陛下、では……」

「しかしながら、ルイズには是が非にでも参加して貰わなければなりません。

……いいえ、何が何でも参加させます。

なぜならば、ルイズが居なくてはこの戦は必ず負けるからです」

「陛下！ お気は確かですか？！  
戦はまずは数です。次に物資と地の利、それから策と兵の質が続きます。」

一騎当千の兵が百人いるだけでは、到底アルビオンとの戦を決定づける理由にはなりません。」

ましてや、ルイズは最近やっと魔法が使えるようになった身。とても戦場でお役に立てようはずがございませぬ！

陛下はルイズの使い魔の力を当て込んでおられているのかもしれないがしかし、それならば尚更

使い魔だけを戦場に送り込めばよいではないですか！」

「お父様！ それはあまりにも」

「ルイズ、いいからここはわたくしに……。」

ヴァリエール公、違うのです。」

先程も申しました通り、この戦は ” ルイズが居なくてはならない ” のです。」

今からその理由を説明してさしあげましょう」

アンリエッタはそう言って一口フェルタン村のハーブ茶をすすり、おもむろにアルビオンでの手紙の一件やルイズの虚無の事

才人の正体に至るまで、彼女が知る全ての秘密を公爵に打ち明け始めた。

無論その中にはルイズを通じて、あるいは幾度か王宮に二人招き出される限り詳細に聞き取ったアルビオンとの戦争の行方もある。

その内容に誰よりも驚いたのは、公爵ではなく才人であった。

否、驚いたというよりも焦ったとする方が正確なのかもしれない。

何せこのような出来事は彼の知る ” 未来 ” では起こらなかったからだ。

俺は間違えた、のか？

それとも、ほんの少しだけ歴史が変わっただけなのか？

もし、間違えたのだとしたら……

いや、しかし、流れとしては特に変わっていない、と思う。

言い知れぬ不安が才人の体に染みこんでくる。

一方、隣に座る公爵は公爵で最初こそ出来の悪い作り話であると決めつけ、それでも黙って主君の話を聞いていたのだったが

ルイズの虚無によるアルビオン艦隊の撃退や女王誘拐の詳細と才人の活躍、 ” 狐狩り ” で得た情報に話が及ぶ頃には

目を開き絶句して、アンリエッタの言葉に聞き入るしか術を持たなかった。

「……と、いうわけなのですよ、ヴァリエール公爵。

サイトさんが未来から召喚されたという事実は、既にわたくしやルイズの目の前で幾度も証明されておりますわ。

彼がこれから起こる事柄を ” 知っている ” という事実は、ルイズが ” 虚無の担い手 ” である事と同等かそれ以上の国家機密ですの」

「……にわかには信じられぬ話ですな、陛下」

「しかし事実なのです、公爵」

公爵は主君であるアンリエッタ女王、その隣に座るルイズ、そして才人と半ば虚ろになった目で順番に見つめ大きく息を吸った。

傍目にも明らかに混乱をきたしている。

しかし、その混乱は同時にアンリエッタの話信じかけている現れ



でもあった。

才人の力を目の当たりにした事のある公爵にとっては、アンリエッタの話はむしろ得心のいく内容に思えたからだ。

ただ一つ。

話の中心人物が自分の末娘である事実を認めきれずにいるが故、公爵はどうしても話を真実として受け入れられずに視線をせわしなく動かす。

”メイジの実力を計るには使い魔を見る” という言葉が示す通り、もし、ルイズがあのアルビオン艦隊を吹き飛ばしたのだとすれば。

この使い魔の力は納得いくものであろう。

しかし……

理性と感情の狭間で公爵の混乱は続く。

そんな父親を見かねてか、あるいは分かかって貰えるよう必死であるのか、ルイズが声をかけた。

「お父様、黙っててごめんなさい。姫さまに……陛下に決して口外せぬよう、かたく口止めされていたの」

「ルイズ……」

「公爵。よいですか？」

先程話した ” 歴史 ” では、ルイズの虚無魔法を用いなければ我々はあの浮遊大陸に上陸できず、恐らくは敗戦を喫するでしょう。裏を返せばルイズが居ればこそ、無傷で軍をあの浮遊大陸に上陸させることが出来るという事でもありません。

ですから、ルイズには何が何でも戦に加わってもらう必要があるのです」

「……なるほど、お話はよく、わかりました。

正直信じられるような話ではございませんが、こやつ……この使い魔が召喚されたその時から

未来を言い当てていたという事実は信じましょう。

しかし。しかしですぞ？

仮にその ” 歴史 ” 通りに戦が動くとしてですな、我が軍は結局はロンディニウムを攻略出来ずに敗走しておるのでしょうか？」

「ええ、最終的にはロンディニウムの南、サウスゴータの町で大規模な裏切りが発生して、我が軍は敗走しております。

しかしながらその最中、突如現れたガリア艦隊によって敵主力は壊滅、それにより戦には勝利していますわ。

ねえ、サイトさん？」

「あ、え、ええ。そうですね。」

敗走にあたり、いくらか問題は発生していましたが、ルイ……」  
主人様は傷一つ負わずに戦は終わります」

「問題、だと？」

公爵は瞳から驚愕と動揺を一瞬で怒りに塗り替え、キッと才人をにらみつけた。

才人は思わず体をのけぞらしてひい、と情けなく声をあげてしまう。

才人の言う ” 問題 ” とは勿論……

「その事はわたししくしから。公爵、落ち着いて聞いて下さいね？」

「……御意、陛下」

「実は、サウスゴータからの退却時、七万に膨れあがったアルビオン軍の追撃を押しとどめ時を稼ぐ為

「司令部はルイズただ一人に殿を命じるのです」

「なっ  
」

「もっとも、サイトさんの機転によりそれは回避され無事退却に成功するようなのですが……」

「おのれ！ し、し、司令部……総司令官は確かド・ポワチエであつたな?!」

「お父様！ 落ち着いて！」

「公爵」

アンリエッタの前置き的事など忘れ、公爵はみるみる内に激昂し顔を赤くする。

主君の御前であることもすっかり忘れてしまい、杖に手を掛けながら押し取り刀で立ち上がるうとする公爵を

ルイズとアンリエッタは少し強めにたしなめた。

ルイズはともかく主君の強い口調は冷水のように冷たく、頭に血が上ってしまった公爵であっても我を取り戻させるには十分であった。

「はっ、も、申し訳ございません」

「もう。公爵、落ち着いてくださいまし。これから起るであろう”歴史”での話です。」

それに、もしその通りに事が運ぼうとも、ルイズには先程サイトさんが申しました通り怪我はありませんわ」

「陛下、たとえそうであっても、”今回”も無事で居られるとは私には……」

「ええ、わたくしも同感です。」

ですから、こうやって公爵と、ルイズと、サイトさんを交えてある提案をしようと考えたのです」

「提案？」

「はい。先程説明した通り、サイトさんが知る”歴史”ではわ

が軍はルイズの ” 虚無 ” を使い浮遊大陸へほぼ無傷で上陸を果たしたし

その後王都攻略の足がかりとして、サウスゴータへ至った所で大規模な反乱が起き、敗走しています」

「そうでしたな。その後、今は中立宣言を出しているガリアが突如参戦、とのようですが」

「ええ。しかし、この参戦は当てになどできませぬ。

なぜならばこの戦はそもそも、ガリア王ジョゼフの謀が原因であるからなのです。

なぜ ” 前 ” は参戦してきたのか理由は分かりませぬが、黒幕が彼である以上結果だけを見て安堵はできないでしょう」

「なっ?!」

「無論、この件につきましては此方でも調査しましたわ。

まだ確証は得られてはおりませんが、確かにいくつかそれと思われる情報などが入手できましたの。

それもまた、サイトさんから聞いた ” 歴史 ” の裏付けとなっておりますわ」

「うつむ……しかし、なぜジョゼフ王が……」

「ヴァリエール公爵。理由など、今は脇に置いておきましょう。ともかくです。ガリアの思惑がハッキリしない以上、たとえ歴史通りに事が運んだとて ” 今回も ” 参戦してくるとはかぎりません。」

「いいえ、もしかするとアルビオン軍への援軍として戦に加わる未来すら、我々に用意されているのかも知れないのです。」

「ですからわたくしは速やかにロンディニウム攻略を行えるよう、サウスゴータでの敗走、ひいてはルイズを危険な目に合わせる原因となる」

「反乱を押さえる計画を立てましたの」

「計画……でございますか？」

「ええ。わたくしは此度の戦に臨むにあたり、王室直属の秘密組織 ” ゼロ機関 ” というものを設立致しました。」

「これは我が国のどの組織にも属さず、わたくしの持つすべての権限を代行する組織です。」

「たとえ司令官であるド・ポワチエ大将であつてもこれに命令を下すことは出来ぬ故、ルイズとサイトさんを」

「このゼロ機関のエージェントとして従軍していただくつもりではあつたのですが……」

「が？」

「先程も申しました通り、軍部はルイズを ” 虚無 ” の兵器か何かとしてしか見なかつた結果となるようでしょう？」

そんな中でサウスゴータでの反乱を押さえる特殊任務など、こなせよう筈がありません」

「ふむ……つまり陛下。そのゼロ機関という組織をもって、サウスゴータで起こるであろう反乱を未然に防ぐ御心でありますか？」

「はい。この反乱はラグドリアン湖の精霊の秘宝・アンドバリの指輪によって引き起こされたもののようなのです。

そうですね？ サイトさん」

予想外にも急に話を振られ、才人は思わず裏返った声で答える。

アンリエッタの話は才人にとっても突飛で、未来が本当に変わってしまったのではないだろうかと考え事をしていたからだ。

未来が変わる。

それは、勝利で終わる筈のアルビオン戦役の結果が変わりかねないと言っことを意味する。

先程アンリエッタ自身が言っていたように、今回はガリアが神聖アルビオン共和国側につく可能性だっている。

いせ。



元々黒幕はあのジョゼフ王であるのだから、むしろその方が自然じゃないか。

何より、タバサの母親の事もある。

疑問は思案の中でグルグルと渦巻き、不安を煽ったが同時に今はそれどころではないと才人は気持ちを切り替えた。

胸に宿った不安は変わらず大きく膨らみ、裏腹に才人はそれを表に出さぬようにしてアンドバリの指輪について説明をはじめた。

「え、あ、はい。後年の調べによりますと、サウスゴータの水源にアンドバリの指輪を使われ

これを飲んだ兵士達が操られてしまったとの事でした」

「うむ……」

「と、言うことらしいのですよ、公爵。

サウスゴータの水源から連なる井戸や河を利用しなければよいのですが、それですと此方の軍の補給もままなりません。

さらにたとえこれを見破っていても、敵が他の手段で兵士を操るかもしれない。

そこで、です。

ゼロ機関……いいえ、ルイズとサイトさんには、このアンドバリの指輪の奪還任務に就いて貰うことにしました」

「んな?!」

「奪還任務、ですか？」

「ええ、そうよルイズ。

アンドバリの指輪は神聖アルビオン共和国の初代皇帝、オリヴァー・クロムウエルが所持しているとの情報を得ております。

あなたとサイトさんにはこれを奪還する任務についてもらうわ」

「陛下！　いくらなんでも無茶です！　ルイズと、その使い魔だけでそんな……」

「公爵。勘違いなさないで？」

アンドバリの指輪奪還作戦に、ゼロ機関のみであたるわけではありませんわ。

……いいえ。むしろ、奪還任務の応援のために加わる、と考えていただければよろしいかと」

「応援？」

怪訝そうな表情を浮かべ、身を乗り出していた公爵は自分と全く同じように身を乗り出し「応援？」と

呟いていた隣の席の少年に気が付いて思わず顔を見合わせた。

恐ろしい使い魔であるはずの少年は、何か見てはいけない物を見たかのように、あわててプイッと顔を逸らす。

胸の内に再び宿る、怒りの炎。

しかし、今はそれどころではないと冷静に主君の話の続きを待つ。

アンリエッタは言葉を切ったまま、そんな二人の様子を苦笑しながら眺めて、同じく身を乗り出し意外そうな表情を浮かべる

隣の席の親友に視線を移した。

「ええそうよ、ルイズ。

此度の戦は一点、”前回”とはまったく違う点があるの。  
貴女ならわかるでしょう？」

「……ウェールズ皇太子殿下、ですか？」

「そう。 ” 歴史 ” では本来皇太子殿下はニューカッスル城陥落時に死んでしまっている筈なのだけど、今回は存命しておられます。また、我が軍のアルビオン侵攻に際しては公式に ” 反乱軍の掃討 ” を依頼して頂き、大義名分の一助をお願いしております。そして我が方としてもこれに答え、皇太子殿下へ兵を送る義務があるのです」

「それで、殿下にゼロ機関をと言うわけですか？」

「ええ、そうです公爵。今現在、殿下には寡兵しかありません。しかし、大義名分と引き替えに増援をおくるべき我が方としても、殿下にそれ程多くの兵を預ける余裕はないのです。

幸い、殿下も今この場で話した ” 秘密 ” をご存じなので、殿下にはアンドバリの指輪の奪還をお願いしたのです。

いかが？ 公爵。

安全な任務とは決して言えないですが、何千もの軍と正面から戦う戦場に出るよりかはずっとましな任務ですわ。

なにより、ルイズにはサイトさんがついております。

たとえロンディニウムのお城の中で孤立したとて、サイトさんと一緒ならば逃げる事は容易いでしょう」

「それは確かに、そうですが……」

公爵は私情を必死で排除しながらアンリエッタの提案を吟味する。

真っ先に思い出されたのは、才人の力であった。

確かに、あれだけの力があればルイズ一人を護りその場から逃走する事など容易いであろう。

事実、ヴァリエール城ではカリーヌの部隊を蹴散らし、門をアツサリと破壊してそのまま逃げられてしまった。

何より、主君直々の要請でありこれに應えるのは臣下として……いや。いやいや、そうではない。

そうではないのだ。

私は、娘をあの血生臭い戦場へ送りたくないのだ。

飛び交う必殺の魔法。

目の前で死ぬ戦友。

人を殺す感触。

あんなものが日常的に溢れる場所へ、どうして可愛い娘を置いておけると言うのだ？

恐らく陛下は戦場ではなく、城にでも忍び込む任務にルイズを送る心づもりであろう。

だが、しかしだ。

そこもまた、戦場であることには変わりない。

見つければ命の保証などなく、捕まればどんな辱めを受けるかわからず、そこから逃げ出すには人を殺め、仲間を殺められねばならぬだろう。

公爵は考えて、チラリと才人へ視線を送る。

あれ程恐ろしい力を発揮していた使い魔は、目が会うと顔を引きつけて再びピッと視線を逸らしてしまう。

なんとも頼りないその姿に思わず体の力が抜けそうになる公爵であったが、そんな一面だけ見て人物の全てを評するほど、暗愚でもなかった。

果たして、公爵はしばしの思案の先に答えを見出す。

それは……

「分かりました、陛下。ルイズ、従軍をみとめよう」

「父様！」

「公爵……秘密をうちあけてよかったですね。わかっていただけた  
のですね?」

「ただし! ただしですぞ、陛下。条件がございませす」

「条件、ですか?」

「はい。ヴァリエール公爵としてのものでなく、ルイズの父親とし  
ての条件でございます」

「……して、その条件とは?」

「しばし、この者と二人きりで話をさせてください」

「へ?」

「げ!?!」

公爵の提示した条件とは、実に意外なものであった。

何を考えたか、才人と二人きりで話したいと言いだしたのである。

才人にとっては悪夢のものであったが、アンリエッタとルイズにとっては容易い事この上ない条件を公爵は願い出たのだ。

当然、その願いは即座に聞き届けられ、アンリエッタとルイズは女王の私室から一旦退室する運びとなった。

女王自ら部屋を貸してやると言い退室するなど、前代未聞の出来事である。

公爵は一瞬、それを諫め自らが才人を伴って出て行くと言いかけたが、機先を制したアンリエッタがこれはお礼ですわ、と口にした為そのまま頭を下げて主君と娘と縋るように主人に着いて行く使い魔を見送るのであった。

当然、使い魔は部屋の扉の所であきらめなさい！ と怒鳴られ蹴飛ばされて尻餅をつきながら部屋に押し戻される。

かくして女王の私室には公爵とその娘の使い魔が残された。

「何をしておる。こっちにいい」



声は厳しく、冷たい。

当然ながら敵意も混じっていた。

才人はおずおずと立ち上がって、席を立ち女王を見送った姿勢のままである公爵の元へ歩を進める。

同時に公爵も才人へと足早に歩を進め、手が届く範囲まで才人に近寄るといきなり胸ぐらを掴んでぐいと顔前に引き寄せたのだった。

その表情は鬼そのものである。

「名は？」

「あ、ひ、平賀才人ともうし、ます」

「ヒリガル・サイト？ 性を持つておるのか。貴族の出か？」

「い、いいえ。平民だけの国の生まれ、です」

「そうか、平民か。ふん、メイジ以上の力はあるようだからそこは  
どうでも良いわ。」

約束しろ。それが出来ねば、この場で殺してやる。

そうすればルイズも戦場に出ようなどと思っまい」

「約、束ですか？」

情けない表情で質問に答える才人の顔に公爵は、鼻の先が接触する  
ほど自分の顔を近づけて凄むように睨んだ。

掴まれた胸ぐらは万力のような力で固定され、才人は顔を近づけて  
くる公爵から身動き一つ出来ずにただ

その迫力に冷たい汗を背中に垂らす。

「二度は言わぬ」

「は、はい。約束します！」

「よいか。良く聞け」

「はひ！」

「決してルイズに杖を抜かせるな。」

「……はい？」

「決してルイズに命を殺めさせるな」

「え、あの……」

「立ちはだかる者は全てお前が殺せ。それが誰であろうとだ。

知己の者であろうと、友であろうと、恋人であろうと、ルイズの敵として立ちはだかる者が居たならば残らずお前が殺せ。

ルイズが敵をその視界に入れるよりも早く、すべてお前が殺せ。敵がルイズの姿を見る前にお前がこの全てを討ち殺せ。

一切の慈悲も無く、ルイズの敵となった者をすべて瞬きする間も無くお前が殺すのだ」

「……はい」

「決してあの子を ” 汚すな ” 。

白い肌に傷を付けないだけでは赦さん。

あの子の視界に汚らしいモノを入れてはならぬ。

醜い、人の悪意がむき出しになる戦場をルイズに見せるな。

血と臓物など、もつての他だ。

あの子の行く手に戦場が在ったならば、お前が目に映る全てを壊し、殺し、更地にして道を拓け。

よいか？

その血に濡れた穢らわしい躰を盾にして、ルイズをあらゆる穢れから護れ。

お前がルイズの代わりに全ての汚濁を飲み込むのだ」

「はい」

公爵の言わんとすることを察し、才人はいつの間にか強く短く返事を繰り返していた。

その目には先程までの感情は消え失せて、暗い闇と強い意志が宿る。ルイズを守る。

それはただ怪我をさせない、と言うことではない。

人の死は、むき出しの悪意は、理不尽な暴力は大きな爪痕を見た者にも残す。

つらい経験は人を大きく成長させるものではあるが、なにも戦場に出てこの世の地獄を見ることもない。

そんな経験など、ルイズの笑顔に影を差させるだけでしかない。

公爵はそれらすべてをルイズの代わりに才人に背負えと言っていた。

貴族としてではなく、親として。

口にした言葉は身勝手に、人としても最低であろう。

しかし才人に言うように、公爵も又この時ルイズの事を想う家族の分まで ” 汚濁 ” をその身に浴びていた。

胸ぐらを掴み目に憤怒を宿して殺せと口に出している男は、ヴァリエール公爵でも、貴族でも、父親ですらなく

純粹な ” 護る者 ” として才人の目に映るのであった。

否。

父親としての愛情が成せる姿なのかもしれない。

親とは、この位身勝手に、子の事を想う者なのだろう。

これが当たり前なんだ。

なのに、俺は……

俺、は？

「ええい！ 聞いておるのか！」

苛ついた公爵の声に才人ははっと我に返る。

反射的に聞いています！ とは答えたものの、胸の奥からにじみ出かけたナニカに酷く心を乱していた。

何か、とんでもなく大切なものを思い出しかけた気がした才人であったが、今はそれどころではないと再び目に意志を宿す。

公爵は半ば呆れながらもそんな才人の胸ぐらから突き放すように手を離し、ふん！ とルイズとよく似た仕草で鼻を一つ鳴らした。

「まったく、少しは良い貌になったかと思えばこれだ」

「す、すいません。でも、俺、ご主人様を守る為なら何でもするつもりです」

「当たり前だ。よいか？ 決して惑うでないぞ？」

「はい」

力強い才人の返事を受けて、公爵はほんの少しだけ表情を和らげ今度は優しく才人の肩に手を置いた。

それからほんの僅かに口の端を上げて、先程とは違って変わって穏やかな声を才人にかける。

「……持ち帰った薬の件は礼を言うべきであるな。

よくやった。父親として、心から礼を言おう。

お前のお陰でカトレアは健康な体を手に入れることが出来たのだ。

……ありがとう」

「へ？ あ、いえ、俺はその……」

公爵の意外な言葉に、才人は頭をポリポリと掻きながら照れてしま  
う。

先程までの様子とは真逆の優しい声であった為か、一層才人を安堵  
させ緊張をほぐして照れさせた。

瞬間。

頬に強い衝撃を受けて部屋の風景が視界を流れた。

「だ、だだだだが！ アレは、アレだけは許さん！ あ、あ、あの  
ようなキスなど 絶対に許さん！

カトレアの一件もある故、これで勘弁してやるがもし！ ルイズ  
に邪な感情を抱いてみよ！

如何なる手段を用いても、地獄に送ってやる！！」



不意打ちに頬を思いつきり殴られ、才人は無様に床に転がりながらもひい！と声を上げる。

そんな才人に再び鬼の形相となった公爵は、才人を殴った拳を突き出しこの日一番の大声で怒鳴りつけていた。

流石にこの大声は部屋の外にまで響いたようで、扉の前で待機していたルイズとアンリエッタがバタン！と勢いよくドアを開けて何事かと部屋に駆け込んでくる。

「公爵?!」

「父様?! サイト?! 一体……」

「おお、ルイズ！ それに陛下も。今丁度話が終わり、お呼びする所でしたぞ」

「そ、そうですね。しかし先程の剣幕は……」

部屋を出る前からは想像もできないほどにこやかになった公爵は、未だ床に尻餅をついている才人を助け起こし肩を組んでみせる。

その様子を見てアンリエッタとルイズは絶句し、陸に上がった魚のように口をパクパクとさせた。

「こ、公爵？」

「お、父、様？」

「なあに、先程の怒声は気にしないでください。

これこの通り、娘を守ってくれと男同士で話しておった所です。  
のう、ヒリガルよ？」

「お、俺はひ、ひらガア！！！」

お前は喋るな。

笑え。

そう言うがごとく、肩に回された公爵の腕が首へと及びギリギリと音を立てて締め付けられた。

要求に才人は顔色をカラフルに変えながらも、器用に歯を剥き、笑ってみせる。

笑いはどうみても引きつった表情であったが、いち早く状況を察したルイズはそれ以上何も追求せず

才人と同じように引きつった笑みを浮かべる。

アンリエッタも同様にここは空気を読むべきだと判断し、左様ですかと言って口に手を当ておほほと乾いた笑いを浮かべた。

公爵も場を取り持つように、ワハハと豪快に笑う。

一見、非常に和やかな雰囲気となった女王の私室を確認してか、廊下に控えていた衛兵は静かに乱暴に開いていた扉を閉めた。

パタンと扉が閉じる音と共に、偽りの笑いが一斉に消え去る。

後に残るのは気まづい沈黙。

それから数時間。

公爵が知ったルイズの虚無や才人の秘密などの ” 国家機密 ” の

取り扱いについてや、戦やアンドバリの指輪奪還任務についての  
詰めた話が行われたのであったが、その間才人の首に回された公爵  
の腕はほどかれることはなかった。

締め付けるその力もまた、一瞬たりとも緩むことなく。



世界は違えど愚かな争いを繰り返す人の営みを静かに見つめること  
く、二つの月は変わらず天に昇る。

ハルケギニアで最も力ある国、ガリア王国。

グラン・トロワと呼ばれ、王都リュティスの郊外にあるヴェルサル  
テイル宮殿にそびえるその城は月光に照らされて

薔薇色の大理石と青いレンガで出来たその体軀をその夜も誇らしげ  
に誇示していた。

魔法についても先進国であるこの大国を治めるのは、ジョゼフ一世  
と呼ばれる男である。

彼は幼き頃より魔法が使えず、王位に就いた今でも「無能王」の二つ名が示す通り政治を顧みない暗愚な王として国内外に知られている。

もつとも、政争の絶えないこの大国において何故彼が王座に座り続けられているのか、その理由を知る者はごく僅かであるが。

年齢は四十代も半ばだが、若々しく端正な顔立ちとその引き締まった体軀は十も若く見え、青い髪と髭は見る者にある種の威厳を感じさせる容姿の持ち主だ。

性格は気分屋かつ皮肉屋であり、恐らくはハルケギニアで最も美しい宮殿に在って、一人チエスや造園に勤しむ「無能王」としての姿こそ

彼の表向きの姿であろう。

しかしその裏側では狂気が渦巻き、絶望と空虚な愉悦だけが彼を維持していた。

同時にその事を知る者は、ごく僅かな人間だけである。

神算鬼謀をもってハルケギニアの国々を手玉に取り、「無能王」の評判を “ 上げること無く ” 政敵となりそうな者を鮮やかに消し去り

果ては “ 虚無 ” の魔法を使いこなし、長いガリア王国の歴史の中で最も才能に恵まれた王の姿こそ、彼の本来の姿であった。

だがガリア王国にとっての不幸は、そんな偉大な王を支配しているのが狂気だという事実である。

切っ掛けは彼が父王に次期国王として指名された時。

それは長年、愛情と劣等感を抱いていた己よりも遙かに優秀な弟を、憎んだ瞬間でもある。

小さな狂気は弟の謀殺を糧として喰らい、大きく膨れて今や宿主とこそか国を、ハルケギニアをも喰らい尽くそうとしていた。

そのような王であっても人には変わらない。

二つの月が夜空高く瞬く時刻、遊び疲れた狂王は仄かな疲労感を消し去る為、寝室にて一人ワインを煽り続けていた。

少し早い季節ではあったが広すぎる寝室を暖める為、暖炉には火が灯っている。

ゆらゆらと揺れる暖炉の明かりは、グラスを傾ける美貌の狂王の影をピエロのように揺らす。

「……………何用か」



狂王の声は冷たく、抑揚が無い。

暖炉の中で燃える薪がパチンと音を立てて爆ぜた。

「ご報告に。」

トリステイン王宮の奇妙な動き、未だ詳細がつかめませぬ故」

「放っておけ。それにその程度の報告ならば既に受けておる」

「シャルロット殿下の動向も妙です」

「あれはイザベラに任せておる。

……まあ、寝首をかきに来るなら来るで楽しい事になるのかもしれんがな。

それで？ 余の就寝前の一時をそんな下らぬ報告で邪魔しに来たのか？ シェフィールド」

いつからそこに居たのか。

入り口の扉の直ぐ側に、ローブを深く被った女の姿が在った。

彼女こそ、「神の頭脳・ミヨズニトニルン」と呼ばれるジョゼフの虚無の使い魔である。

伝説にある虚無の使い魔は四人。

曰く、「神の左手」ガンダールヴ。

あらゆる武器・兵器を使いこなす。

曰く、「神の右手」ヴィンダールヴ。

あらゆる幻獣を操る

曰く、「神の頭脳」ミヨズニトニルン。

あらゆる魔道具を扱える「神の本」

曰く、最後の1体。

記すことさえはばかれる者。

伝説に残る程強力な力を有するはずの使い魔は、ローブの中で僅かに動揺し形の良い唇を開いた。

「恐れながら。」

”直接お前の口から報告を聞きたい” と仰ったのはジョゼフさまでは……」

「知らん。シエフィールド、余を虚仮にするのか？」

「まさか！ しかし、私は確かにジョゼフさまのお声を……」

暖炉の薪がパチンと爆ぜた。

狂王の寝室は沈黙と思案に彩られる。

己の使い魔の性格からして、嘘はついてはいないと判断する狂王。

主との ”繋がり” を介しての会話は、確かな事実である筈なのに……と混乱する「神の頭脳」。

ジョゼフの性格からして任務中に突如呼び戻すことはあっても、帰って来た後に惚けるなどあり得ないことであった。

疑問が空気を一層重苦しく変えてゆく。

「くく、流石だの。もう少し互いを疑うかと思つたが、いやどうしてどうして。」

「どこの色ボケカップルのようには行かぬか」

本来部屋の主以外は誰も居ないはずの、第三者の女の声であつた。

瞬間、声のした方角とジョゼフの間にシェフィールドが割つて入る。

その額のルーンは輝き、手には何やら魔具が在つて声がした方角……  
… 暖炉の方に向けられていた。

暖炉の薪がパチンと爆ぜる。

しばしの静寂の後、再び暖炉の方からくぐもつた笑い声が室内に転がった。

「くく、おお、怖い怖い。」

その手にあるのは……ふむ、猛毒の毒針を無数に撃ち出す魔具か。ひひひ、有効範囲は狭いが狙った相手に必ず当たるといふ、なかなかえげつない暗器じゃな」

「な 何者！」

「何者、か。ううむ、そこが問題じゃな。ジョゼフ王よ、わしはなんと名乗れば良いかの？」

声の主はそう言って、暖炉の脇に出来ていた闇の中からゆっくりと現れる。

その姿は二人の想像を超え、闇色をした小さな体の持ち主であった。

「……猫？ 使い魔か？」

「ふむ、流石じゃの。白痴の真似事しておっても、中身まではそう簡単に染まりはせんか。」

いかにも、お主らが言う使い魔とはちと違うが、確かにこの体は

「使い魔じゃ」

「何者ぞ！」

「これこれ、大声を出すでない。わしはお主らの為に面白い話を持つてきたのじゃぞ？」

心配せんでも、お主の大好きなご主人様を誘惑したりはせんわ。くく、なにせ、今のわしの心は別の殿方に向いておるからの」

黒猫はくぐもった笑い声を発しながら、向けられた魔具には気にも留めずスタスタと音もなく二人に近寄り始める。

シェフィールドは黒猫が自分達に近寄ってくるのを確認するや、躊躇無く手にしていた魔具を発動させた。

彼女の手の中にある筒状の魔具は、シュと短く音をたてて無数の針を撃ち出す。

針は銃の弾丸よりも速く飛び、又魔法によってすべて対象を追尾し、幻獣由来の毒が瞬きする間も無く命を奪う筈であった。

しかし。

黒猫から僅かに離れた空間で水上に起こる波紋のような物が発生し、

それに触れた毒針は悉く消えさてしまう。

「無駄じゃよ。そんな物で殺される程度の者が、お主らに気付かれずここまで忍び込めるとでも思ってたか？」

くく、相手の戦力を見違えると後々エライ目にあつぞ？」

「おのれ！」

「ああ、もう、鬱陶しいのう。そうヒスを起こすでない。ほれ、主を見習わぬか。」

杖に手をかけるでもなく、ワイン片手に成り行きをゆるりと見守っておる。

王とはこうでなくてはの、くくく……よつと。

この体故、テーブルの上にて失礼するぞ？」

黒猫はシェフィールドをからかいながらもその足下を悠然と歩いて、ジョゼフがつくテーブルの下に至りひよいとその上に飛び乗った。

その様子を黙って見ていたジョゼフは、更に強力な魔具を取り出そうとしていた使い魔を手で制して無言の内に奇妙な侵入者を観察す

る。

黒猫は豪奢で長い毛並みを有して、よく手入れをされているようであつた。

他に特徴らしい特徴はなく、恐らくは貴族が飼つような種類であること以外は特に変わった所はない。

ジヨゼフは無言のまま、久々に心が動く音を聞いた。

それは無くした恐怖であるか。

それとも、薄まってしまった好奇心であるか。

目の前の相手が暗殺者であるならば、もしかしたら殺されるかも知れない。

それだけの技量は音もなくこの場に忍び込んだ事から判断するに、  
確実にあるだろう。

だが。

そうでないとするば？

狂王の虚無色の心は、得体の知れない興味と期待を宿し僅かに揺らいだ。

そんな彼の心情を見抜いたのか、黒猫は王を真っ直ぐに見つめ、器用に口の端を上げて微笑む。



その笑みはまるで悪魔のようであったが、ジョゼフは顔色一つ変えずワインを一口煽って口を開いた。

「名を名乗れ。何でも良い、大した意味は無いがこの場では不便であるからな」

「ふむ、確かにそうかもしれない。では ” 時の魔女 ” と呼ぶがよい」

「ふん、猫の分際で大層な名だな。

それで？ ” 面白い話 ” とやらを申してみよ。

つまらぬ話であったならば、その場でくびり殺してやるから覚悟してから話せ」

「ひひ、怖いおう。か弱い女をそう脅すでないわ。

そうじゃの、前置きから話すとするか。

薄々わかっていようが、お主の使い魔をここへ呼んだのはわしじやよ。

くく、しかし随分と使い魔に慕われておるようだの。

お主の声色で最後に優しい言葉をかけてやったら、人知れず飛び跳ねて喜んでおったわ」

「なっ?! き、貴様!」

「ひひひ、照れるなミヨズニトニルン。

ほれ、そんな所で茹で上がらずにこっちに来て一緒にわしの話を  
きかぬか?」

暖炉の薪がパチンと爆ぜ、くつくつと不愉快な女の笑い声が部屋に  
響く。

シェフィールドは動揺しながらも変わらずニタリと器用に笑う黒猫  
をローブの奥から睨んでいたが、ジョゼフが無言の内に指を立て

側に来いと二度三度と曲げて見せたので、不満を雰囲気に纏わり付  
かせ主の座る席の後ろへ移動するのであった。

黒猫はその一部始終相も変わらず嫌らしい笑みを浮かべて沈黙を続  
けていたが、シェフィールドがジョゼフ王の背後に控える姿を確認  
すると

おもむろに少し改まった口調で言葉を吐き出した。

「ジョゼフ王よ、単刀直入に言おう。

お主に相応しい”遊び相手”の情報が欲しくないかえ？」

「遊び相手、だと？」

「そうじゃ。

たとえばの、決して死なず、古き竜を、万を超える軍を滅ぼす力の持ち主であり、未来をも知っておる者など興味がわかぬか？」

「……何を言い出すかと思えば。興ざめだな」

「ひひ、真実じゃよ。ついでに言って置くが、その者はいずれお主を破滅へと導く者じゃて。

そう、今のお主が焦がれるほどに求める、破滅にな」

闇はくつくつと笑う。

まるで他者の不幸を予言する、不吉な存在であるかのように。

ジョゼフはそんな黒猫をほろ酔い気分で眺めながら、フンと鼻を鳴らしワインを一口煽った。

「そのような世迷い言を信じると言つのか？」

「信じなくても良いぞ？ 放っておいても信じざるを得ない状況になるからの。」

わしが今その情報を携えてここに来たのは、わしの言をお主らでも信じられるようにするためじゃて」「

「ほう？ どういうつもりだ？」

「何。お主と交渉事をするためじゃよ。」

いや、交渉、は少し違うかの？ ふうむ、たとえば、じゃ。」

狂王よ、お主チェスをやるじゃろ？」

「うむ？」

「での。他者がチェスをやっておるのを見物しておったとしてじゃ。一方は恐ろしく強く、もう一方は素人同然の実力であるでしょう。お主、素人の方に肩入れしたくはならぬか？」

くく、と黒い猫が笑った。

嘲るように。

己が提示した例えが、言い得て妙であるといわんとするように。

ジョゼフの寝室にくぐもった女の笑い声が満ちる。

一方「無能王」の二つ名を持つ王は、その様子をじっと見据えて思索にふけていた。

どうやら、この奇妙な侵入者は暗殺者ではないらしい。

では一体何が目的だ？

この会話によって俺があるいはこの者に、何の利益が生まれる？

言葉通りに受け止めれば、俺はこの先恐ろしい化け物のような相手と戦う事になる、のだろう。

馬鹿馬鹿しい話ではあるが、もし。

もし、それが本当であるならば。

パチン、と暖炉の薪が爆ぜる。

それは虚無に沈んだ狂王の心に、ほんのちいさな火が宿った音であったのかもしれない。

「く、くくく、貴様。

そんな事をするために、ここに忍び込んだと言っのか？

このガリアの無能王に助言をするために、態々寝室に忍び込んだと？」

「ひひ、事実じゃて。

お主の真の実力に疑いはいないがの。

相手は不死身の化け物な上に、これから起きる出来事の結果まで知っておるのじゃ。

言うなれば、必ず相手に勝てる定石を知っている相手とチェスをするような物じゃな。

勝てと言っ方が酷じゃろ？」

「面白い！ それ程の力を持つ者が余の前に立ちふさがると言っのならば、望む所ではないか！」

「ふむ？ 話を聞いてなかったか？ 勝負にすらならんのだぞ？」

勿論、お主の十八番である暗殺などなんの役には立たんような相手じゃ  
「

「わはは！ 勝負にならない？ すばらしいことではないか！

この、ガリアの無能王が勝負にならない相手とは！  
いや、言うな！ その者の名を言うなよ？

毒殺も刺殺もできぬ、それどころか未来まで知っておる相手と戦うのか、余は！

面白い。なんとも面白い！」

「左様。もっとも、おつむの出来は遙かにお主の方が分があるがの。くくく、どうじゃ？」

今のお主にとって、これほど素敵な遊び相手はおるまい？」

不愉快な女の含み笑いに、生氣に満ちた男の笑い声が混じった。

先程までの不機嫌な雰囲気とは打って変わって、使い魔でも希にか見ないような狂王の楽しげな笑いである。

唯一主の背後に控えていたシェフィールドはその真意を計り兼ねたまま、愛する者を自分を差し置いて楽しげに話す女の声に

嫉妬を覚えてじっと睨み続ける。

その胸に渦巻く炎は、哀しい女のサガでもあった。

そんな背後の様子などお構いなしに、美貌の無能王は心底楽しげに女の声で話す黒猫と会話を続ける。

「良いだろう！ 気に入った。」

お前の話を買ってやるう。望みは何だ？ 何でも言う方がいい」

「くく、望みなど。」

わしもお主と一緒にじゃよ。 ” 楽しみたい ” だけじゃ。

強いて言うならば、暫くここで厄介になりたいのじゃがな？ わ  
しはとも寒い季節は苦手での」

「わはは、面白い奴だ。お前！ チェスはできるか？」

「ジョゼフ様！」

シェフィードはたまらず言葉を差し込んだ。

得体の知れない喋る猫に入れ込みかけている主を諫める為ではない。

主と楽しそうに話す ” 時の魔女 ” に、嫉妬を覚えていることも  
確かであったが、なにより本能的に目の前の喋る猫に関わることは



”危険”　だと察知していたからだ。

それは女の勘、という物に近い。

しかしそんな女の想いなど一顧だにせず、言外に狂王は無粋はよせと手をひらつけせ、使い魔に黙るよう指示したのであった。

「ひひ、チエスカ。

生憎だが狂王よ、未来を知るわしに敵うはずがなかるう？

なにせ、”自分がチエスカに勝つ未来”　を探し出しその通りに駒を進めればよいのじゃからの「

「おお！　それはいい！

つまり、余が勝てばお前の嘘が証明され、お前が勝ち続けければ話が真実であるという証明にもなるな！

よし、明日よりここに居ろ。いいや、今夜からでもここに居るのだ。

そして日に一度、余と勝負せよ。

よいか？　余が勝ったらその時点でお前の首をねじ切ってやるから、覚悟せよ「

「くく、交渉成立かの。

ほんに、物わかりが良い王でよかったわい。

どれ、お近づきの印と言っては何だが、良い事を教えてやるうか

「？」

「何をだ？」

「将来、お主を殺す者の名じゃよ。ほれ、耳を貸せ」

黒猫はジョゼフの背後から強い敵意を叩きつけてくるシエフィールドの事など何処吹く風で、器用にも前足をひねり

ちよいちよいと曲げて見せて、あろう事がガリア王国の王に耳を貸すよう指示を出した。

ジョゼフはまるで子供の要求に応じる親のように、テーブルの上に座る黒猫の口元へ無防備にも己の耳を近づける。

その様は傍目には常軌を逸した行為であったが、当の本人達は心底楽しげに見えた。

「。。。どげじげや？」

「……実に、実に面白い結末ではないか！  
何故そんな……いやいや！ 言うな！ 興が削がれる！」

「ひひ、頼まれても言わぬよ。わしも興が削がれるのでは？」

「わはは、気が合うではないか。気に入ったぞ。

うむむ、しかし困ったな。お前、本当に何もいらぬのか？  
余は報酬を受け取らぬ者は信用できんのだが……」

「では、一つ望みを聞いて貰おうかの」

「うむ、なんでも言うのが良いぞ。玉座か？ それともこの宮殿か？  
どれも猫には過ぎた代物だぞ？

くつく、ガリア王国の玉座に猫が居座る……想像しただけでも面白くないか」

「阿呆、そんなものいらぬわ。

わしが望む報酬はの、アルビオンに対しての今後の対応じゃな」

「うむ？ 兵を挙げよとも言うのか？」

「いいや。国家的な判断は好きにしておればよい。いつものように、

サイコロでもふつとね。

ただの、わしも目的があつて「」におる」

「うむ」

「アルビオンで起こる戦の中、お主らを破滅に導く者の戦いぶりを見せてやるつ。」

だかの？ 戦が終わるまでは手を出すな。それが望みじゃ」

「うつむ？ 大人しく余の将来の宿敵を見ておれと申すのか？」

「うむ、そうじゃ。」

ひひ、美女をいきなり裸に剥いて押し倒すよりも、じっくりと眺めてから一枚づつ服を剥いていく方が興奮するであらうつ？」

「わはは！ そうかもしれぬな。」

いいだろう、アルビオンの戦が終わるまでは、そいつに手を出さずにおいてやる」

「いけませぬ、ジョゼフ様！ この者の言はまだ、何一つ証明されてはおりませぬ！」

それに、もし証明されたとして、そのような危険な者をわざわざ短い期間とは言え放置しておくなど……」

ジョセフが気前よく黒猫と報酬の話している所へ、シェフィールドはもう一度言葉を挟んだ。

当然であろう。

目の前の黒猫は、明らかにこちら側の事を知りすぎている。

どうせ未来が見える等と誤魔化すのだろうが、まともを考えればかなり近い所に密偵が入り込んでいる事を疑うべきだ。

正確な情報と偽りの情報を取捨選択する必要があったてある。

こんな、得体の知れない者を相手とマトモに話すななど……

いや、それどころかそれほど危険な相手がトリステインに居るのであれば、”手を出すな” など断じて承伏するわけにはいかない。

そもそも何故？

何故、ジョセフさまはこうも簡単にこんな者を信じようとなさるの？

揺らぐ女の思考は、混沌として疑問符だけが脳裏に増えていった。

そんな美しい貌に眉根をよせる使い魔に、ジョセフはさも詰まらなといった様子のため息混じりの言葉を転がす。

「ふふん、証明など明日チエスでも行えばわかる。」

なにせ、ハルケギニア中を探しても余に敵う者など居はしないのだからな。

のう、”時の魔女”よ。お前は未来を見て、選べるのであるらう？

なれば当然、圧倒的な強さでそんな余を打ち負かせるはずだ。なにせ余に勝つ未来を見ればよいだけなのだからな」

「当たり前じゃ。」

なんなら今からでも良いが……いや。

お主の考える時間の事も考えると明日にしておけばよからうな」

「ふん、明日にでもその鼻柱をへし折ってやる。覚悟せよ」

「ひひ、威勢がよいのう。」

……では今夜の所はお暇しようかの。そこな小娘。悪いが扉を開けてくれぬか？」

「な、なぜ私が！ いや、だれが小娘だ！」

「この体故、阿呆のように大きなその扉は開くことは出来ぬ。」

まさか、国王自ら扉を開けさせるさけにもいくまい？」

「開けてやれ、シエフィールド」

ジョゼフの言葉に、シエフィールドは渋々ながら国王の寝室の扉を僅かに開いた。

”時の魔女”と名乗った黒猫は、扉の隙間をすりりと出でて闇に沈む廊下の奥へと消えていく。

その後ろ姿を不審な眼差しでじっと見つめる使い魔に、闇の向こうから声がもう一度かけられた。

あの、忌々しい女の声で。

「くく、そう嫌うでない。むしろ今夜は感謝すべきとは思うがのう

……

それにの、わしから見れば女は皆小娘じゃ」

恩着せがましく憎々しいその台詞に、シェフィールドは眉間に皺を寄せて応えた。

その目には殺意すら宿っている。

やがて気配は完全に消えたのを確認すると、彼女は静かに扉を閉めて暫くはそのまま思案に耽た。

神の頭脳に奔るのは如何にジョゼフを諫めようか、という悩みである。

あの ” 時の魔女 ” は危険だ。

使い魔を通して尚、得体の知れぬ魔法を行使し終始隙を見せなかった。

根拠はないが、関われば禄な事にならない気がしてならない。

ジョゼフの性格を熟知しているシェフィールドはギリ、と歯をかんで知らず形の良い唇を歪める。

一度ジョゼフさまが言い出した事を翻意させるのはまず、ムリだ。

なんとか、なんとかして主の気まぐれを諫め思いとどまらせる方法はないものか。



「シェフィールド」

唐突に耳元でする、主の声。

思索を急いで中断し慌てて振り返ると、いつの間に背後に立っていたのか、狂王の姿が間近に見えた。

驚いたことに、ジョゼフはいままで使い魔に見せたことの無いような柔らかな微笑みを浮かべている。

ジョゼフさま？ とシェフィールドが口に出そうとした瞬間。

男の手が伸びて細い女の肩を乱暴に掴み、そのまま引きずられてあれよという間に絢爛な天蓋の着いた巨大な寝台に押し倒されてしまった。

いきなりの事にシェフィールドが混乱していると、今度は目の前が暗くなり体に重しがのしかかる。

「じよ、ジョゼフさま？ ー、体……」

「くくく、今宵は久しぶりに……そう、本当に久しぶりに気分がよい。

シエフィールド。先程 ” 時の魔女 ” から聞いた、俺の命を奪う者の名を聞きたいか？」

暖炉の薪がパチンと爆ぜる音。

シエフィールドはジョゼフに押し倒された体勢でいまだ混乱したまま、美しい赤黒の黒瞳に力強い意志を宿した。

被っていたローブは押し倒された時に脱げ、ベッドには彼女の豊かな黒髪が散らばっている。

「ジョゼフさま。そのような世迷い事は早くお忘れになってくださいませ。

決して、決してジョゼフさまのお命を奪うような真似は、何人たれどさせませぬ。

そう、如何なる者であろうと、決して。」

「くく、うははは！ シェフィールド！ そうか！ お前は余を守ってくれるか！」

「当然です。なぜならば、私は身も心も主であるあなた様に捧げた使い魔でございます。

ジョゼフさま。その名が気になるならば、言って下さいまし。

この ” 神の頭脳 ” がその者をたちまちに討ち滅ぼして参りましょう！」

「いいぞ。シェフィールド。それでこそ、余の使い魔だ。

よし、今宵は気分が良い。

お前の言う通り、その名は信じぬ事にしよう」

「ジョゼフさま……ありがとうございます」

「だが、シェフィールド。代わりに一つ、余の命令を聞け」

「は。なんなりと」

ジョゼフは己の使い魔を押し倒した体勢のまま、いつもの冷酷な無能王の貌となった。

シェフィールドも又、頭の中に混乱を残したままジョゼフへの忠誠を太く芯に残して気を張り詰めさせる。

果たして、忠実なる虚無の使い魔に下す、狂王の命令とは。

「伽の相手をいたせ。今宵はすごぶる、気分がいい」

「え？」

意外なその命令に、シェフィールドは驚愕の声を出す間もなくその唇を塞がれてしまう。

口中に、舌に、鼻の奥にねとりとした唾液とワインの香りが広がってゆく。

更には、体に纏う衣服の中へ主の暖かい手が蛇のようにうねって入り込んでくる。

シェフィールドは混乱を一層深めながらも特に抗う事もせず、不意にあの不快な声を思い出した。

” くく、そう嫌うでない。むしろ今夜は感謝すべきとは思っ  
づの  
う……”

” 時の魔女” と名乗った黒猫が、去り際に放った台詞である。

あの者は……今夜、こうなると知って？

それも私の心の内までを見通して、ああ言ったのだろうか？

分からない。

何一つ、理解出来ない。

そもそもジョゼフさまはなぜ急にこんな……

神の頭脳の混乱は続く。

しかしそんな思案もやがて歓喜と悦楽に塗り込められてしまい、押し寄せる幸せに身を委ねてしまうのだ。

少なくとも女はこの夜、誰よりも幸せであった。

才人とルイズがアンリエッタに新たな未来を提示されてから、およそ一月が過ぎた頃。

季節は秋から冬へと流れ、暦はギューフの月へと移っていた。

朝夜に吐く息は白くなるも年が明けるまでのつかの間に、秋が深まるのを感じさせる月である。

「ほええ、ここが港街シュトランドヤード……サイト！ みてみて、

あの町並み！

話に聞いた通り、どの建物も赤い屋根ばかりですっごく綺麗よ！」

「待ってくれ、ルイズ！ くそ、一個位荷物持ってくれたっていいじゃねえか」

「何よそれ位。情けない使い魔ねえ。

そもそもレディに荷物を持たせるなんて、紳士失格よ？」

「んな、こたあ、分かってるって！ だが、な。俺はこつ、小さな荷物を一つでも持とうという優しさが、おつとと、欲しいんだよ」

「ダメよ、軍の規律では上官の荷物は副官が持たなくてはならないもの。

それにこれからウェールズ様の使いの方と合流しなくちゃいけないでしょ？」

その辺キツチリしてお会いしなくちゃ、トリスティンの代表としてしめしがつかないわ」

「へえへえ、わかりましたよ ”ミス・ゼロ” どの」

「つむ、よろしい ”盾”<sup>バックラー</sup> くん」



ルイズはそう言って山のような荷物を抱える才人の目の前に立ち、むふんと鼻息も荒く胸を張って仰々しくエバってみせた。

愛らしいその仕草に思わずニヤケてしまう才人だったが、狭い棧橋の上で他の乗客とすれ違いバランスを崩しそうになってしまう。

そんな才人の後方では二人が今し方乗ってきた、ハルケギニアならではの乗り物である空飛ぶ船こと ”フネ” が停泊して

長旅を終えた乗客が次々と降りる姿が見えていた。

棧橋はラ・ロシエールの港町で見た世界樹棧橋とは違い、コの字に無骨な石造りの塔が並んで建てられ、内一つから木製の通路が

”フネ” に向けて張り出されて乗客はそこから乗降する仕組みだからか、非常に狭い物だ。

残る他の塔は係船用のロープを受け取り固定する為の物であり、係船索の固定作業を行う為の作業員がせわしなく動く姿が確認できる。

そのような塔が無数に立ち並ぶゲルマニアの港の景色は圧巻で、さらにその向こうには名物である赤い屋根の街並みが広がり

異国へ足を踏み入れたのだという感触を強く二人に印象づけた。

この日二人はトリステインを遠く離れ、ゲルマニアの西方に位置する港街シュトランドヤーデへとお忍びで足を運んでいたのであった。

丁度、 ” 歴史 ” ではトリスティンとゲルマニアの連合軍がアル  
ピオンへ艦隊を送り込む日の一月程前である、ギューフの月第一週  
フレイヤの週、マンの曜日での事である。

「それで？ 待ち合わせは何処なんだ？」

「この棧橋が取り付いている塔の上で待つようについて指示されてる  
わ」

「……他の乗客やその迎えの人らはもう全員塔を降りてしまって、  
ここには俺達しか居ないようだけど？」

「むー。でも、間違いなく姫様からいただいた指令書にはここでっ  
て書かれていたし……」

あ！ 誰か上がってきたわサイト」

言葉に才人は抱えていた荷物の隙間から覗くように塔の頂上から下

へと降りる階段の方を確認すると、確かに階段を上ってくる人影が見えた。

二人が乗ってきた旅客用フネは、補給物資の積み込みなどでまだ暫くは乗客が乗船出来ない。

従って、人物は恐らくは迎えの使者であることがわかる。

やがて階段を全て登り切った人影は、その姿を現し才人の予想通りに真っ直ぐと二人のもとへ近寄って来た。

人物は陽光に明るい金の髪を煌めかせ、身なりも瀟洒しやうしやな服装であり何よりもその腰の刺突剣のような杖が

貴族である事を現している。

キラキラと光る髪の毛は首筋程で小綺麗に切りそろえられ、凜々しくつり上がった眉が整った顔立ちを一層引き立たせ

特に白く細い首筋と大きなブルーの瞳が印象的な女性であった。

年の頃は才人と同年代程か。

「もし、失礼ですがレディ。」 トリステインから槍をお持ちになつていますでしょうか？」

「ええ。」  
” 剣と未来も一緒に持って来ましたわ ”

ルイズと女性がお互いに符牒会わせの合い言葉を口にする、女性は背筋を伸ばしかかたとをカツンと揃え、敬礼の姿勢を取って

ようこそ、シュトランドヤーデへと大きな声を発した。

「遅れて申し訳ございません、” ミス・ゼロ ” 殿。何分、他の乗客の目も在りました故」

「気にしないでいいわ。えっと？」

「申し遅れました。自分はアルビオン王軍所属、ケイト・ブラウ准尉であります」

「ではミス・ブラウ。早速で悪いんだけど、私達を目的地まで案内してくれる？」

「はっ！ では、こちらへ。下に馬車を用意してございます。」

ミス・ブロウはハキハキと答えながら、ルイズを案内すべく階段の方へと誘導した。

その間才人の方には一切の関心を寄せず、当然の事ながら荷物は彼が全て持ったままである。

どうやら才人の事は荷物持ちあるいはミス・ゼロの小姓か何かと思われたらしい。

重い荷物を長時間持ち続ける苦痛とは無縁であったものの、積み上げるようにして持っている為バランスを取るのが難しく

高くそびえる塔を降りていくには非常に神経を使う才人であった。

そんな一番後でよっ、ほっ、おとと、と荷物のバランス取りに腐心する才人を余所に、前に行くルイズをミス・ブロウは

螺旋階段を降りながら他愛も無い世間話を繰り広げている。

「 ”ミス・ゼロ” 殿。フネでの旅は如何でしたか？ さぞお疲れになりましたでしょう」

「それでも無かったわね。それよりも、この街の風景が凄く綺麗でビックリしちゃった」

「ははは、自分も初めて街を見た時はそうでした。

この街は元々ビットナー西方伯がアルビオンとの交易の為、特に力を入れて開発した街なんですよ？」

「へえ。それであんなに沢山の棧橋があるのね」

「はい。

もつとも、トリスティンやゲルマニアでは民間船まで戦に駆り出されてしまい、定期便の数が大幅に減ってしまっているようですが、本来ならば、もつとフネが空を埋め尽くす勢いで行き来していた筈なんですよ。

……あの、反乱さえ起きなければ……」

「……そうね」

「それはそうと ”ミス・ゼロ” 殿。伺った話では副官に  
バックラー  
”盾” 殿が随行すると聞いておりましたが……」

会話が暗くなりそうな所で、ミス・ブロウは少し強引に話題を変えた。

しかし、それは返ってルイズと才人の苦笑を誘ってしまつた。

ミス・ブロウは首を傾げ何か？ と少し心配そうな表情を浮かべた。

そんな彼女にルイズがピッと苦笑を浮かべたまま後方の才人へ親指を差し、才人が荷物の合間から引きつった笑い顔を覗かせること

ミス・ブロウは状況を正確に把握し、みるみる内に凜々しい顔を引きつらせて、大声を上げながら才人へと駆け寄るのであった。

「も、申し訳ありません」バックラー 盾” 殿！ わたし、いや自分、てつきりミス・ゼロ殿の従僕とばかり」

「や、や。気にしないでいいですよ、従僕でも間違いないし」

「そ、そんなつもりでは！ あ！ お荷物、お持ち致します！」

「いや、足場悪いから、いいです。降りたらおね」

「ささ、お荷物を此方へ」

「うわわ、と、いいですよ。バランスが……」

「こ、この一番大きな物をお持ちしましょう！」

「ちよ、やめ、ソレ抜かれたらあ、あ、あ、あああ！」

「きゃあ?!」

「あああ！ 私のお気に入りのカバンが！」

焦ったミス・ブロウが才人の制止も聞かず、強引に積み重ねた荷物を引き抜いた結果。

三者三様の悲鳴を背景に荷物の山は崩れ落ち、ルイズが特に気に入っていたカバンが音を小さくしながら下へと落ちていった。



一方バランスを崩した才人は、同じく大量の荷物が降りかかってきて体勢を崩したミス・ブロウと接触し、もみ合うようになり螺旋階段を転げ落ちていく。

塔の中程からの転落で在った為、その勢いは徐々に増していき直ぐにルイズの視界から消えてしまう二人であった。

お気に入りのカバンの行方に気を取られていたルイズは、目の前を転げ落ちる二人を見て拾い上げていた荷物を放り出し

急いで階段を駆け下り始める。

石作りの階段を転げ落ちれば、普通の人間であれば只ではすまない。才人はともかく、ミス・ブロウに怪我でもされたならば自分達の立場も悪くなるだろう。

更に打ち所が悪ければ、死んでもおかしくはない高さだ。

「サイト！ ミス・ブロウ！ 怪我は」

「うっ、うっ……」

「い、いちち……俺はだ、大丈夫だルイズ。ミス・ブロウ？」

「は、はい。何処も痛む所は……きゃあ！」

息を切らせながら階段の下まで降りてきたルイズが見た物は、才人とミス・ブロウが折り重なって倒れている姿であった。

才人がミス・ブロウの下敷きとなっており、彼女の背にその腕が回されている事から途中から才人が彼女を庇っていた事が伺える。

多少妬心を沸き立たせながらも、ルイズが声をかけると才人の返事と共にミス・ブロウの悲鳴が上がった。

それは怪我による呻きではなく、年頃の女の子特有の羞恥による声である。

「は、離せ下郎！」

「わ、ごめん！でも」

「離せ！ ええい穢らわしい！ この身に触れて良いのはウェールズ様だけだ！」

「わかった！ わかったから暴れ……うご……！」

メキリ、という音を聞いてルイズは思わず目を瞑ってしまった。

才人に抱きしめられ、混乱したミス・ブロウが暴れた拍子に……あるいは狙って繰り出したのか彼女の肘が才人の顔面にめり込んだのだ。

くぐもった悲鳴を上げながら顔面に両手を当てる才人からミス・ブロウはしなやかな動きで離れ、直ぐに立ち上がり

今度は才人の股間目がけてその細い足で蹴りを繰り出して見せる。

もう一度、今度はメキョという音をルイズは耳にし、思わず肩を跳ね上げて目を瞑ってしまった。

再びその目を開くと、ミス・ブロウのつま先が才人の股間にめり込んでいるが見える。

才人は声にならぬ悲鳴を上げ、プルプルと体を震わせてまるでサナ

ギのようにつづくまり、そのまま動かなくなってしまった。

ふー、ふー、と興奮し息を荒くしたミス・ブロウは仁王立ちに才人を睨み付け、そんな彼女にルイズは背後から恐る恐る声をかける。

「……み、ミス・ブロウ？」

「どうだ！ この破廉恥な痴漢め！ わたしの……わた、し、あの？」

「……！！」

「ミス・ブロウ。えっと、その……怪我は無いようね？」

「え、あ、ミス・ゼロ殿？ あの、わたし……自分……うわあああああ！  
盾バックラー殿！ 申し訳ございません！  
だ、ただ、大丈夫ですか？！」

「……！！」

「大丈夫、じゃないみたいね。まあ、こいつは怪我しないからその内復活するでしょうけども。」

でもサイト……<sup>バックラー</sup>盾がここまで苦しんでるのって久々に見たわ」

「ももも、申し訳ございません！ 自分、男の人には免疫がなくて、その……」

「……みたいね。」

とりあえず、<sup>バックラー</sup>盾が復活するまでは荷物を拾って貰えるかしら？」

「は、はははい！ 申し訳ございません、ミス・ゼロ！」

呆れ半分、才人に暴行を加えられた怒り半分のルイズの声色から逃げるように、ミス・ブロウは凄まじい勢いで

散らばってしまった荷物を回収すべく階段を駆け上って行き、すぐに姿が見えなくなってしまった。

後に残されたルイズはため息混じりに未だうずくまる才人を見下ろし、すこし不機嫌な表情を浮かべる。

先程目に飛び込んできたミス・ブロウを抱きしめる才人の姿を思い起こし、今更ながらに妬心が膨らんで来たからだ。

だがいつもなら罰と称してヤキモチをぶつけるルイズであるが、先程のミス・ブロウの姿を見てすっかり気を削がれてしまっていた。

「大丈夫？ まったく、咄嗟に庇ったのは褒めてあげるけどやり過ぎよ？」

「だ、だ……って、さ」

「そりゃ、ルーンを女の子の前で無闇に使っちゃって言ったのは私だけ……」

もう。いいから、とっととルーンを発動させなさいよ」

「わ、わか……ふう。ああ、すっげえ痛かった！」

「んー、これ、良し悪しよねえ」

「なあ、気にしすぎじゃねえのか？」

「あにがよ」

「俺が女の子の前でルーンを使おうが使うまいが、別にそれだけで惚れたりするもんじゃねえんじゃないのかな？」

「あんたねえ。学院でギーシュと訓練みたいな事やって、それを目撃された時の事、もう忘れたの?!」

起き上がり服に付いた砂埃を払う才人を見上げて、ルイズは腕組みをしながら頬をプクッと膨らませた。

少し前の出来事であるが、任意での学徒出陣の勅令が学院に届いた後、才人はギーシュの戦闘訓練に付き合っていた折。

調子に乗って派手な戦闘を繰り広げた才人の姿を幾人かの生徒が目撃し、その噂を聞きつけた女子生徒のギャラリーが日増しに増え

更にその中から才人に興味を持った幾人かが、何かと才人の世話を焼きたがるようになってしまう出来事があった。

つまり、まるで絵本の中の勇者のような動きを見せる才人を見て、黄色い声援を送ったり、汗を拭くタオルや手作りの甘味の差し入れを

行う者が現れたのである。

当然それはルイズやシエスタにしてみれば面白くない。

かといって、授業や仕事がある二人が四六時中才人に張り付いて居るわけにもいかず、苦肉の策として才人に人前では

特に女の子の前ではルーンを使うなと堅く約束をさせていたルイズであった。

「うーん、でもさ。今更隠したってもう遅いんじゃないか？ どうせ戦闘になればばれるし」

「そうだけど！ あんた見ると、どうもそのパターンで女の子惹き付けてる気がしてならないのよねえ」

「うっ。でも、仕方無いだろ。それに、大概は能力使わないとヤバイ時ばっかだぞ？」

「それは分かってる、けど。不安になるじゃない」

「……悪い。でもさ。俺、見過ごせないんだ。ごめんな？」



「それも、分かってるわよ。だから……」

こうやって落ち着かせて欲しい、とばかりにルイズは才人の腰に手を周しつつま先立って軽く口づけを交わす。

しかし、才人が自分の腰に手を回すよりも早く、その身を翻して距離を空けるルイズであった。

少し物足りなさそうな才人にルイズはイ！ と歯を見せて、頬を再び膨らませミス・ブロウが消えていった階段の方にプイッと向いてしまう。

そんな彼女に才人はつい苦笑いを浮かべ、ミス・ブロウがレビティションを使い荷物を回収して来るまでの間

愛しげにその後ろ姿を眺めつづけた。

ウェールズ皇太子を人知れず支援するゲルマニアの貴族、ビットナ  
ー西方伯はアルビオンでのニューカッスル城陥落時に

娘婿といずれ自領の跡取りとなる孫を一度に喪ってしまった。

元々目に入れても痛くないほど可愛がっていた一人娘とアルビオン貴族の縁談には反対であったが、優先貿易の権利や男子が生まれた場合

ビットナー家の跡取りとする事を条件に渋々若い二人の結婚を認めたいきさつが西方伯にはあった。

やがて可愛い娘は二男一女を産み、その存在はあれ程厳しく利にどん欲であった西方伯を優しい祖父へと変貌させてしまう。

西方伯は特にビットナー家の跡取りともなる長男を可愛がり、その成長を非常に頼もしく、又楽しみにして

遂には彼自身の生き甲斐へと変わっていた。

しかし。

長男が一通り学を修め、各国の見聞を広める留学も終えいよいよ西方伯の元に ” 里帰り ” をして、領地経営を学ぶ段になった時。

アルビオン王国で貴族派による反乱が発生する。

長男はその誇り高い志を胸に、父や弟と共に不忠者どもと杖を交えた。

そして、王党派が全滅するニューカッスル城の陥落。

戦死者の中に、娘婿と二人の孫の名を認めた西方伯の悲しみは如何

ほどのものか。

やがて悲しみは憤怒へと変わり、憤怒は激しい憎悪となって空に浮かぶ大陸へと向かった。

程なく生き甲斐を奪われた老人の憎しみは、フネでニューカッスル城を脱出し、自分を頼ってやって来た娘や孫娘と共に居た

ウェールズ皇太子へと託される。

ビットナー西方伯は生き恥を晒す想いで脱出船に合流したと言う皇太子を匿い、密かに支援を施したのであった。

当時のゲルマニア国内はトリステインとの同盟を結んではいたものの、虚無に連なる王家を持たない事もあって

アルビオンの貴族派を容認する動きもあり、内乱が終息して尚大きな軍事力を有するアルビオン新政府と事を構えるのは

得策ではないという論調が蔓延していた。

そんな情勢の中でウェールズ皇太子を密かに匿い支援する事は、西方伯の立場を非常に危うくする行為である。

しかし、ビットナー西方伯は微塵の迷い無く、ありとあらゆる支援活動を秘密裏に行うのであった。

全ては、復讐の為に。

「とは言っても、西方伯の兵を借りて表立って動かすわけにもいかないしね」

「それで私略による補給路の攻撃ですか」

「うむ。」

なんとも、情けないはなしではあるがね。

それに情勢がトリステイン王国との連携による神聖アルビオン共和国との決戦になると、今度は西方伯もそちらに軍を出す必要があるし

必然、そうなれば私の役割は国土奪還の御輿位しなくなるだろう

「う」  
迎いの馬車の中、才人とルイズはなんと自ら出迎えにやって来ていたウェールズ皇太子との再会を果たしていた。

驚く二人にウェールズはにこやかに馬車へ乗るよう促し、その車中にて彼が今まで何をしていたのか二人と話していたのである。

「しかし、殿下。そうならば、何故未だに公の場にそのお姿を現して御身の正統性を主張し、兵を募らないのですか？」

「ミス・ヴァリエール。事はそう簡単ではないのだよ。私がもしそうしたとして、損をする者がいるのだ」

「……ゲルマニアですか」

「うむ。流石だね、サイト君。ワールドが一目置くだけのことはあるよ」

「どっぴう事？ サイト？」

「だってさ、戦争なんて勝つ為にやるもんだろ？」

「うん」

「アルビオンとの戦争に勝ったとして、姫さまはともかくゲルマニアは何を考えると思っ？」

「…………あ！」

「そういう事だよ、ミス・ヴァリエール。

彼らは神聖アルビオン共和国を解体し、戦利品として少しでも多くの賠償金や領地を得たくもあるのさ。

国家間の同盟なんて、所詮己の利益が発生して初めて機能するものだしね」

「だけど、ウエールズ皇太子殿下が公に出してしまうと……………」

「…………大義名分が ” 殿下の失地回復 ” になるから、領地分割が難しくなるって事ね」

「うん。まあ私の兵は軍と呼べるほども居ないから、それでも多少は領地を取られてしまうだろうが

ゲルマニアにしてみれば私が ” 居ない ” 方がもっと沢山領地を得られるのは間違いないだろう？

ビットナー西方伯はそんなお人ではないが、アルビオンの貴族派の仕業に見せかけて…………と言つことも十分にありえるのだよ」

ウエールズはそう言って、苦笑いを浮かべた。

ガタン、と馬車は揺れ僅かな沈黙が馬車の中を支配する。

馬車の中は広く、ウエールズと対面するように才人とルイズ、そしてミス・ブロウが座席に着いていた。

カッポカッポと整備された石畳の上を馬がゆく音が唯一車内の静寂を打ち消している。

「まあ、でも幸い」結果” はわかっているし、私も今更領地に未練があるわけではないしね。

それに公の場に出てもし暗殺されでもしたら、あのお転婆な従姉妹が今度はゲルマニア相手に戦争を始めるかも知れないだろう？」

「そ、その時は自分も参戦します！」

「ありがとう、ミス・ブロウ」

「……殿下、それ、洒落になりませんよ」

「ははは、サイト君にはそうだろうね」

快活な笑い声を発してウェールズは、二人にウィンクをして見せた。才人の ” 秘密 ” に暗に触れ、しかし深くは話題に出さない所を見るとミス・ブロウは ” ゼロ機関 ” の秘密は知らないと判断できさる。

故に、ウェールズの冗談は才人やルイズにとってはある種火遊びのようであった。

思えばウェールズ皇太子は随分と雰囲気が変わったのでは無かろうか。

無精髭にも似たあごひげを生やし、優美で線の細い王子様といった雰囲気は微塵もなく、茶目ツ気たっぷりに話すその姿は

どう見ても亡国の皇太子には見えない。

「しかし、アンリエッタ姫……失礼、女王にはいつも驚かされるよ。まさか切り札である君達をエージェントとして送り込んでくるのはね。

私は精々、腕の立つメイジを数名送ってくれば良いと考えていたんだ」



「俺も、驚きましたよ殿下。まさか、”予想と違う”結果になるとは……」

「ああ、その辺は気にしなくてもいいよ、サイト君。以前、君から聞いた”話”に沿うよう、取りはからっておくからね。」

「必要なのは結果であり、多少の過程の差異は気にしなくても良いつて、あの時一緒に居た猫が言っていただろう?」

「それは、そうですが……」

「? 殿下、”盾”バックラー殿とは以前もお会いになった事が?」

「ん? ああ、まあ、ね。ミス・ブロウ。」

此方のミス・ヴァリエールとサイトくんは私にとって個人的な付き合いもあるのだよ。」

ミス・ヴァリエールはアンリエッタ女王の信頼も厚く、親友であると聞く。」

ならば、私にとってもそうであると言える存在だ。」

サイト君に至っては、間接的ではあるが私にとって命の恩人同然だしね」

ミス・ブローはウーエルズの言葉に目を開いて驚いた。

まさか、そのような大物だとは露程も思っても見なかったからだ。

無論、ウーエルズの言う ” 付き合い ” とは一般的な交際のことではなく、才人が女王誘拐事件の折にウーエルズの元へ立ち寄り

色々と話した時の事を差しているのだが、ミス・ブローにはそんな事など知る由もない。

ミス・ブローは暫く驚いた表情のまま、しげしげと二人を見つめていたのだったがしかし。

そんな表情もつかの間、今度はじつとりと嫉妬混じりの視線をルイズへ送り始めた。

どうやらルイズを親友同然だと言ったウーエルズの言葉に、妬心を刺激されたらしい。

先程からの態度を見ても、ミス・ブローがウーエルズへ想いを寄せているのはありありと感じ取っていた才人とルイズだったが

当のウーエルズといえばアンリエッタ以外は目に入らないらしく、ミス・ブローの様子などお構いなしである。

ルイズはこの方もどこか姫さまに似ていらっしやる所があるのね、などと考えながらも、真横から向けられる痛い視線に耐えかねて

話題を多少強引に変えることにした。

「ところで、殿下。この馬車は何処に向かっているのですか？」

「ん？ ああ、そういえば言ってなかったね、ミス・ヴァリエール。この馬車は私のフネに向かっているのだよ」

「フネ？ イーグル号ですか？」

「いや。ビットナー西方伯に建造していただいた、私の新しいフネだよ。

つい先日ドックアウトしたばかりだね。

君達とはそのフネに乗って、任務に就いて貰うことになっているんだ。

もともと、私も同行するのだけど」

「え？ 殿下も一緒に行くんですか？」

「ああ。私の兵は少ないし、部下も本当に数える程しかいないしね。フルドは……あの通り信用ならないから、いつも別行動させてるし」

「あいつ、ほっといいんですか？」

「うむ。今のところお互いの利益が一致してるから、大丈夫だよ。ミス・ヴァリエールにはすこし、申し訳ないけどね」

「……いえ。でも、かえって居なくてほっとしましたわ」

「そう言っただけだと助かるよ。ミス・ヴァリエールにはそこだけが負い目だね。」

「ともあれ、兵が居ない以上、私も一緒に行かねば示しが付かないだろう？」

「それに、此度の戦は私が安全な場所について眺めているわけにはいかないのだよ」

「そこまでウェールズが話した所で、馬車はガクンと揺れて停止した。どうやら目的地に着いたらしい。」

「一同は御者が扉を開けるのを待ち、程なく開かれた扉から全員降りると、同時に才人とルイズから知らず歓声が漏れた。」

「馬車が止まった場所は街から随分と離れた海沿いの崖の上であり、」

そこからどこまでも伸びる水平線と空が見え

その風景は絶景の一言に尽きたからだ。

崖は高く入り江をぐるりと囲み、遙か向こうに水平線が見えてキラキラと宝石のように水面が光り輝く。

しかし、才人やルイズがあげた歓声はそんな美しい風景に対してではない。

一行の目の前には純白の帆と船体を持つ、とても美しいフネが浮かんでいたのであった。

その美しい姿に見とれる二人にウェールズは少年のような笑みを浮かべ、得意げに、そして愛しげに船名を告げる。

「どうだい？　これが私の　”麗しのアンリエッタ号”　さ」



空を行く純白のフネ ”麗しのアンリエッタ号” は、美姫のごとく凜然としてその帆に風をはらませる。

雲の合間をぬって優雅に空を奔る彼女の美しい姿とは対照的に、甲板の上ではせわしなくクルー達が各々の持ち場の作業を行っていた。遠目に見える空に浮く帆船は小さくとも、間近で見ればかなり大きい。

”麗しのアンリエッタ号” は戦船の中では小さな方であり、前に一門、左右に上下二列で五門の砲が並び、数百門も大砲を積む戦列艦や

ガレオン級戦艦よりも遙かに少ない砲門を搭載するフリゲート級の中では最小クラスである。

純白の船体を貫く三本のメインマストは同じく白い縦帆帆装が施されており、舳先に陣取っている掌帆長ホースンと呼ばれる者が

見定めた進路へフネを進めるべくかけ声を駆ける度に、大勢の男達によってロープが右へ左へと引つ張られた。

才人とルイズはそんな水夫達のかけ声を遠く耳にしながら、船尾にあるウェールズ皇太子の私室……船長室にて難しい表情を浮かべる。

二人は同じ感情を抱いている訳でなく、才人は困惑を、ルイズは憤慨をそれぞれ体の外へ漏れ出させていた。

「どうしてですか？ トリステインからの代表として、その扱いは承伏しかねます」

「しかしご理解頂きたい、ミス・ゼロ殿。只でさえ軍船に女性士官が乗り込む事は希有なことなのです。

その上その女性士官と異性の平民の従僕が同室で生活するなど、本船の規律が保てませぬ」

「サイトは私の副官です。」



それに平民だからって、何故サイトが士官じゃなくて ” 部員 ” 待遇になるのですか?!”

ルイズは怒りも露わに少し声を荒げて、その秀麗な眉をつり上げながらウエルズ皇太子の隣に立ついかつい副船長の老人に抗議を行う。

老人はかつて二人がアルビオンヘアンリエッタの手紙を受け取る為に赴いた際、イーグル号船内で部屋を貸して貰ったトット・ハル卿である。

当時とは違い小綺麗な軍服を身に纏っているハル卿は、しかし左目の眼帯とじやもじやの髭だけは相変わらずであった。

ニューカッスル陥落時、ハル卿は脱出者をまとめフネを指揮して脱出する役を ” 押しつけられた ” が為に、生き残っていたのである。

二人は当初意外な再会にその無事を喜んでいたのだが、彼がサイトの待遇についての要請を口にした途端険悪な空気となってしまう。

「ハル卿。彼は、私にとっても大切な友人なのだ。なんとかならぬ  
いのか？」

「殿下。特例を認めてしまうと他のクルーの士気に大いに影響が  
出ます。」

我々は寡兵であり、しかも長期に渡って空を征く必要があるの  
でぞぞ？」

「うづむ……それは、そうなのだが」

「あの、俺、その ” 部員 ” ってやつでもいいですから……」

「ダメよサイト。副船長、サイトが私と一緒に居ることを拒んで  
いるクルーはどなたでしょうか？」

私がトリステインの代表として、直接抗議と説得を行きましょう」

「ミス・ゼロ殿。このフネに乗り込んでいるクルーの殆どは平民  
です。」

しかし、彼ら無くしてはフネの運行は不可能であり、いわば我々  
は一蓮托生、大きな家族のようなものです。

そんな、相手が萎縮するようなやり方は承伏できません」

「家族なら一緒にいたっていいではないですか！」

「ミス。男ばかり、長期に渡って航海を続ければその状況は必ずクルー達の不満に繋がります。

それはこのフネの運行に必ず支障が来す事となり、戦闘にもなれば大きな不安要素となってしまうのです。

それに貴族でもない彼が士官待遇で乗船し続けるには無理がある。どうか、ご理解頂きたい」

「承伏しかねます。サイトは立派なトリステインの代表の一人ですよ?」

「えっと、俺」

「あなたは黙ってて！ 殿下、お願い致します」

「殿下、いや船長。彼がいかなる重要人物であるとは言え、空の上ではクルー達の士気が最も重要です。

たとえば王侯貴族とて、フネの上において身分など関係無しにクルー達と同じメニユーを口にし、同じ苦楽を共に航海を行う事こそハルケギニア随一、アルビオン海軍の強さの秘訣なのです。

そのことは船長が最も分かっておられるはず。どうか、お間違えなきよう」

ハル卿とルイズにそれぞれ威圧的な表情でずい、と迫られウェールズは思わず引きつった苦笑いを浮かべた。

そんな彼を才人はすこし気の毒そうに見ていたのであったが、ルイズの好意を無碍にも出来ず妥協の言葉で助け船を出したりはしない。

皇太子はうづむ、とその場で少し考えた後ルイズに向き直り口を開いた。

「ミス・ヴァリエール。こうしようではないか。

サイト君を一旦”部員”として扱い、これからの戦闘時に彼が手柄を上げれば即座に士官待遇として君と同衾する事を認めよう。ハル卿が心配するのは、他のクルー達の目と感情だ。

私はともかく、何も知らない彼らが君達を見るときどうしても納得出来ないだろうしね。

私は船長としてそれを放置出来ないし、対処する義務も負う。

それに、もしいきなりそれを認めてある日悶々とした欲求が爆発し、君の身に何かあつてはアンリエッタ女王に申し訳も立たない。

どうだろうか？ それで納得してくれないだろうか？」

ウェールズの提案はルイズとハル卿はうづむ、と唸らせる。

双方共に納得が行かない内容ではあったようだが、譲歩した場合お互いに丸く収まる内容でもあった。

ハル卿はウェールズの提案に概ねは納得できるようだったが、他のクルー達が認めるほどの活躍とはどの程度か明らかにされてはいないので

多数のクルー達の同意があれば、と提案に付き足した。

ルイズとしても、才人の力を思い起こせば戦闘時に活躍するならば、という条件は悪くはない。

ここで一切の妥協を行わず、アンリエッタの想い人でもあるウェールズ皇太子をこれ以上困らせるのは気が引ける。

暫くは考え込んでいた彼女は、ウェールズを真っ直ぐ見つめ、僅かに不満を表情にのこしつつも小さく頷くのであった。

「ふむ、きまりだね。ではサイト君」

「あ、はい」

「君には悪いが、当面は ” 部員 ” 待遇で本船に乗船してもらう

よ。

本来ならば客人待遇で迎えたいのだが、生憎本船は戦列艦よりもずっと小さく、”狭い”。

それにクルー達の大部分は私の兵というよりも、ビットナー西方伯が雇った水夫なのだ。

彼らの感情に配慮しなくちゃ、航海は上手くいかないのも確かな事だしね」

「わかります。俺の事は気にしないで下さい」

「ありがとうございます。それでハル卿、彼の配置なのだが……」

「は。トリステインの方々に与えられる船内の地位としましては、ミス・ゼロ殿は事務員パーサーとして士官待遇を。

”盾”バックラー 殿には甲板員マテロとしての待遇を致します」

「まっして下さい！ サイトにフネの作業なんてできません！ それに、私達はそんな事の為に」

「ミス・ゼロ殿。

クルー達と一緒に過ごせば、それだけ手柄を立てた時に彼らからの士官待遇に対する同意も得やすくなるのですぞ？」

「うぐっ」

「女性であるミスならともかく、人手が足りない本船で彼がブラブラとするのはあまり良い結果にはなりませんまい。」

何、甲板員マトゥロは？帆や操舵程難しい仕事は割り振られませぬ」

「あの、ハル卿。その、まとうろ、つてのは何ですか？」

「空兵の事だよ、”盾”バックラー殿。」

砲戦においては砲に弾を込め、砲長ガンナーのかけ声と共に砲に火を入れたり、白兵戦になれば先陣を切つて戦うのがマトウロだ。

フネは如何なる時もその運行に人手を取られるのでね、戦闘職と運行職に分けられているのだよ」

「へえ、そうなんですか」

「うむ。もつとも、平時に雑用を行うのも甲板員マトゥロだから戦闘行為以外何もしないと云うわけでもないぞ？」

「雑用つて、俺ロープを結んだりとか出来ないですよ？」

「その辺は心配無用。」

直ぐに覚える事であるし、本当に専門的な仕事は専用の水夫が割り当てられている。

作業内容も都度指示されるから迷う事も無いだろう。  
せいぜい、体力が要求される程度だ。」

ハル卿はそう言って才人に笑って見せた。

笑顔はそれまでの無愛想な彼からは想像が付かない程人なつっこく、  
才人はつられて笑い返してしまう。

その様子を見たルイズは、才人の身分について差別的に扱ったハル  
卿が才人に何かしら胸に一物を持って接していたのではなく

単に船内の秩序を維持する為、先程のような言動を行ったのである  
うと理解して少しほっとしたのであった。

「わかりました。殿下、俺はそれでいいです」

「私も不満は残りますが、殿下のご提案に沿いたいと思います」

「ありがとう、二人とも。」

しかし、情けない話だね。アンリエッタ姫が託してくれた大切な



友人二人を客人として持て成すどころか働かせてしまうなど」

「殿下。我々は戦をしているのですぞ？」

「分かってるよ、ハル卿。」

卿の説教はいつも長く困る。あとでゆっくり聞くから、先に二人を案内してやってくれられないか？」

「御意。ではミス・ゼロ殿。盾殿。<sup>バックラー</sup>こちらへ」

「ああ、ハル卿。ミス・ヴァリエールの部屋なんだが……」

「心得ております。ミス・ゼロ殿は女性であり、トリスティンからの重要人物でも在ります故、個室としておきます」

「うむ、頼んだぞ」

「では殿下。我々はこれで」

船長と副船長、主君とその忠実な家臣の少々気安いやり取りとは対照的に、ハル卿は背を真つ直ぐに伸ばしてウエールズへ敬礼を行うとそのまま才人とルイズを促して船長室を退出するのであった。

船長室を後にしたハル卿は二人を連れて士官用のサロンを通り、まずは未だ不満げにしているルイズを個室へ案内する。

部屋は学院のそれとは比べものにならないほど狭かったが、内部は小綺麗にしてあり、元々その予定であったのかルイズが持つて来た大量の荷物が運び込まれていた。

部屋の奥には明かり取りの丸窓が一つあり、そこから雲と空の青が均等に混じった光が差し込んでいる。

「ここがミス・ゼロ殿の部屋です。盾殿はバックラーこちらへ」

「ちょっとまってください、ハル卿。サイト、時間が空いたらちゃんとここへ戻って来てよ?」

「ああ、そうする」

「ミス・ゼロ殿。できればその、彼と会う時は当面士官用サロンを使用して頂きたい」

「どうしてですか？」

「先程も申しました通り、彼に甲板員マトロをやって貰うのは他のクルーの感情に配慮しての事。

本来ならば部員はこの居住区おろか士官サロンに立ち入る事すら禁じられています。

無論、彼はトリスティンの代表の一人であり、ミス・ゼロ殿の副官故立ち入りを許可されるわけですが……」

「……妙な噂が広まっても困る、って事ね？」

「はい、ミス」

「わかったわ。……サイト、早く手柄を立ててね？」

「おう。じゃ、あとでな」

「では盾殿バックラー、行きましようか」

才人はハル卿に急かされ言葉を手短に交わしてルイズと別れて、やがて船尾にある士官用の居住区から甲板へと出るのであった。

甲板では幾人もの作業員が帆を張る巨大なマストから伸びるロープをかけ声を掛け合い操作したり、マストによじ登ったりしている。

ハル卿はそんな忙しそうに作業を行っている乗組員の中で、甲板を磨いていた一人を呼び止め、何やら指示を出した。

指示を出された作業員は敬礼を一つすると、どこぞへと去って行き、程なくもう一人矢鱈体つきの良いいかつい中年の男を連れて戻ってくる。

「盾<sup>バックラー</sup>殿。いや、ここからは名前で呼ぼう。サイト殿、彼はこのフネの砲長<sup>ガンナー</sup>であるトマソン砲長だ。

君が所属する甲板員<sup>マストレット</sup>をとりまとめる甲板長でもある。以後は彼の指示に従うように」

「はい、わかりました」

「トマソン、あとは頼むぞ?」

「アイ・サー！……ところでチーフ、こい……彼はトリスティンの客人じゃなかったのですかい？」

「うむ。船長の大事な客人だ。だが、それ以上にこのフネの規律も大事である。

従って、彼も甲板員として働くことになったのだよ。元々兵士としての従軍であつたしな」

「なるほど。しかし……失礼ですが使えるんですかい？　こう、ヒョロくちやなあ。

いくら甲板員つつつても、船長の大事な友人を三日で使い潰しちやこつちも面目が立ちませんや」

「あの、トマソンさん」

「砲長だ、坊主。俺の事はそう呼べ」

「す、すいません。えと、砲長。俺、こう見えても腕っ節と体力は自信があるんです」

「ふうん？　その背のデカイ剣振り回すからってか？　言っとくが、剣振り回す筋肉と大砲の弾詰めたりデッキ（甲板）を磨く体力は

まったくの別もんだぞ?」

「大丈夫です」

「ふつむ」

トマソン砲長はまじまじと才人の体を眺めながら、腕組みをして考え込んだ。

組んだ腕は肩口からのシャツがパンパンに張り付き、筋肉が隆起してまるで岩のようである。

「よし、じゃあその根拠を見せてもらおうか」

「へ?」

「なあに、簡単なこつた。船首に行って、船速計測の風を引っ張るんだ」

「タコ？」

「ああ、凧だ。そいつをロープにくくって飛ばしてな、巻いたロープが全部出るまでの時間を計ってフネの速度を計測するんだが、どういふ計算をするのかって言うところ……いや、それはどうでもいいな。」

で、そのロープの途中をお前さんが握って何秒持つて居られるか試すんだ。

気を付けるよ？ 凧が送り出される時の力は凄くて風が強い時は牛位ならワケ無え持つて行くぞ。

チーフ、かまいやせんね？」

トマソン砲長は難しい表情を浮かべたまま、ハル卿に同意を求めた。

一応同意を求めた当たり、それなりに危険な行為であるらしい。

ハル卿はすこし躊躇したのだったが、才人と目が合うと言外に大丈夫ですと言われ、よろしいと許可を出すのであった。

かくして才人は船首へと案内され、その目の前には巨大な凧とわずたかく積まれたロープが用意される。

ロープの端はこれも又巨大な巻き取り用のホイールへと取り付けら

れ、凧を送り出した後はそれで凧を回収する事が伺えた。

辺りには才人とトマソン砲長、ハル卿を遠巻きに眺めるように、いつの間にか多くの見物人達が現れ、此方を興味深そうに観察している。

「いいか？ やり方を説明するぞ？

ロープのここをしっかり握って凧を保持するんだ。で、ここから後のロープが送り出されない様にする。

まあ、ずっと保持するのは無理だからきつくなったら手を離せ」

「わかりました」

「大体目安として、二秒位持ち堪えることが出来れば一人前だな。だが、凧が引っ張る力は坊主の想像以上だろうから気を付けるよ？ 舐めてかかるとロープに体を持って行かれて空中に放り出されるか、手の平の皮を一枚剥く事になるからな」

「あの、ちなみに今までの最高記録は？」

「ん？ わはは、そうだな。イーグル号での記録だが、フリオって奴の八秒が俺の知る最長記録だ。」



ほら、あそこで見物している奴さ」

そう言ってトマソン砲長が遠巻きに才人達を見ているクルー達の一角を指さすと、やたら体格の良い大きな男がヒョッコリと顔を出し

ニヤリと笑いながら丸太のような腕を上へ突き出してみせた。

「まあヒョロいその体格じゃフリオみたいにはいかねえ所か、一瞬でロープにふりほどかれるだろうがな。

おう、お前えら！ 何人がこっち来て凧の用意をしな！」

トマソン砲長の指示に見物人の中から幾人かが前に出て、巨大な凧を数人がかりで持ち上げた。

才人は舳先に移動して行く重そうな凧を見ながらも、足下のロープを拾い上げる。

手にしたソレは指が回らないほど太く、ずしりとして思いの他重か

った。

「準備はいいか？」

「はい、トマソン砲長」

「よし、良い返事だ。せいぜい、怪我だけはしないようにな。  
計測開始！」

「アイ・サー！」

トマソン砲長の合図の下、風を持ち上げ舳先で準備していた男達は一斉かけ声を上げて風を宙に放り投げた。

風は直ぐに空の上、絶えず風が動くフネの航路の風を捉えてみるみるうちにフネの前方へと上がっていく。

空へ吸い込まれていく風に呼应して、才人の足下にうずたかく巻かれていたロープも唸りを上げて送り出されて行った。

才人はその様子を興味深く眺めて、しかしロープを片手に持ち上げたまま特に足を踏ん張る気配を見せない。

その様子にトマソン砲長は少し焦った口調で声を張り上げた。

「おい！ なにしてやがる！ もうすぐ持ってるロープが引っ張られるぞ！」

「大丈夫ですよ、俺、こう見えても腕っ節は結構自信あるんです」

「バカ野郎！ 手前え、舐めんじゃねえ！ 死にてえのか？！」

「大丈夫ですって」

焦燥が混じったトマソン砲長の怒鳴り声に、才人はなんとも暢気な返事を返して減り行く足下のロープを見ていた。

見物していたクルー達はそんな才人に野次を飛ばし、又はトマソン

砲長と同じように才人を窘め罵倒し始める。

やがて才人の足下にあったロープは全て送り出され、遂には才人が手にしていたロープが引つ張られた。

トマソン砲長はああ、やった！ と悲鳴に似た声をあげ、思わず体を強ばらせる。

猛烈な勢いで上がってゆく凧に引つ張られるロープは、才人をなぎ倒し暴れ、骨の一つでもへし折る筈であった。

あるいは、手の平の皮をこっそりとはぎ取りってしまう筈であった。

ロープ 特に送り出されているロープは、船乗りにとってそれ程危険な存在なのである。

故に、才人の無防備な行動はたとえ熟練した者であっても、いや熟練しているからこそ絶対にしない非常に危険な行為なのだ。

果たしてロープはバアンと大きな何かにぶつかったかのような音を立てて、見る者全員目を閉じさせた。

そして。

「うそ、だろ？」

「おい、あれ……」

「なっ」

見物人達の口から漏れる、驚愕。

最も間近で見ていたトマソン砲長も口をあんぐりと開けて、瞬きすら忘れ一点を見つめる。

才人はそんな周囲の視線などお構いなしに、ロープを拾い上げた体勢のまま左手のルーンを輝かせて、握ったロープをまるで重さなど感じさせない糸を引っ張るようにつぐいと二度三度、気安く引っ張って見せた。

「あの……トマソン砲長？」

「！ 坊主、おめえ、すげえ！ すげえな、お前！ 名は？！」

「え？ あ、んと、平賀才人です。それより、トマソン砲長？」

「ヒルガリ・サイトンか！ 長年船乗りやってるが、その凧をそんな凧に扱っ奴なんて見た事ねえ！

わはは！ 船長が平民を客人扱いしてるっていつからどんな奴かと思えば……こいつは最高だ！」

「いや、ヒラガ・サイ」

「おおおお！ ガンナー！ そいつ、甲板員になるんですかい？！」

「バカ！ 凧のロープを引かせたって事は？ 帆員セイラーに決まってるだろ！」

「んなこたああるかよ！ それだったらガンナーじゃなくて、掌帆ホー長スがあいつを試すだろうが」

歓声が才人の台詞をかき消す。

見物していたクルー達は口々に憶測を語り始め、その騒ぎを聞きつ

けた他のクルーも集まり数は次第に増えていった。

挙げ句の果てに？帆作業を行うべき？帆員セイラーまでも加わって、船首甲板の上ではちよつとしたお祭り騒ぎとなってしまう。

遠巻きであつた見物人の輪もかなり狭まり、才人が何を話そうとしても興奮した彼らの声にかき消されてしまった。

「静まれ！ お前達、いい加減にせぬか！」

やけにドスの効いた大声が轟く。

事態を收拾したのは、他のクルー達と一緒に見物していたハル卿の落雷のような大声であつた。

「？帆員セイラー！ ？帆中の持ち場を離れるとはいいい度胸だな。船規じゃ鞭打ち五回だぞ？」

さつさと持ち場に戻れ！ 船規違反には目を瞑ってやる」

「ア、アイ・サー！ チーフ！」

「トマソン。サイト殿は甲板員コウブツクとして扱う。特別扱いはしなくても良いが、一応客人だということも頭に入れて置いてくれ」

「アイ・サー！ チーフ！ ……しかし、お言葉ですがチーフ」

「む？」

「特別扱いするなっついていいやすが、無理ですぜ。何せ、こいつは”特別” な事をやりとげやしたからね。」

おつ！ お前ら！ 新しい家族だ！ 貯め込んでる酒持って砲室に集合しろ！」

トマソン砲長は才人に一つウインクして見せ、残っていた見物人達に指示を飛ばす。

ハル卿に凄まれ、脱兎の勢いで持ち場に戻って行った？ 帆員とは別に、残って居た見物人は恐らくは甲板員コウブツクであろう。



彼らは再び歓声を上げ口々にトマソン砲長や才人に言葉を浴びせかけた。

「砲長！ おいら、司厨員コックに掛け合って食いもん貰ってきやす！」

「バカ！ チーフの目の前でお前」

「おう、坊主！ お前、俺の班にこいよ！」

「何言ってるんだよ、お前。お前ん所じゃ欠員なんて出てねえじゃねえか」

「うるせえ！ 非力なハリーの奴が一人で砲弾運べねえんだからうちが決まってるんだろ」

「いやっほう！ 出航早々に酒たあ、おいらついてら！」

「ウェイン。てめえらは甲板の掃除が先だ。仕事はキッチリ片してから砲室に降りてこい」

「そんなあ、トマソン砲長。そりやないですぜ……」

再び收拾がつかなくなる船首甲板の上、ドッと笑い声が纏まった。

才人はその様子を眺めながらも、なぜか以前も感じたことのあるような居心地の良さを覚えていた。

それは、竜騎士隊第二中隊の少年達を思い返すような。

あるいは、遠い未来、多くの家族に囲まれていた時のような。

そんな暖かい居心地が、そこにあった。

やがてハル卿が後はたのんだぞ、と言い残しその場を立ち去ると甲板員トットロの枷も本格的に外れ才人を少し遠巻きにして

陽気に歌を歌ったり踊ったりし始める。

未だロープを握る才人に不用意に近寄らない辺り、彼らもああ見えて船乗りとしてはしっかりしているらしい。

そんな彼らをトマソン砲長は苦笑いを一つ浮かべた後、ハル卿に負けず劣らずの怒声を発して制し、さっさと才人の持つ風のロープを

巻き取るよう指示を出した。

甲板員達はまるで父親に怒られた子供のような表情を浮かべ、慌てて巻き上げ機の準備をして才人の持つロープへと数人が取り付こうとする。

「あ、もういいんですか？」

「ああ、十分だ。しかし坊主、よく片手で持つて居られるな。

だが、流石に凧を引っ張り込むのはキツイだろ？」

「なんせ、何百年か前のフネなんかは何頭かの牛を並べて引き込んでたからな」

「おい、巻き上げ機の準備が終わったぞ」

「アイ・サー！ 坊主、疲れたろ？ もう離していいぜ」

「あー、大丈夫ですよ、そんなもの使わなくても。俺一人で十分です」

「は？」

ロープの端を巻き上げ機に取り付ける間、才人の持つロープに取り付いていた甲板員は一瞬言葉を理解できず、呆気に擧られた。

そんな彼の目の前で、才人は思いっきりロープを引っ張って見せる。

その光景はトマソン砲長はじめ甲板員達にとっては凧を片手で保持する以上に衝撃的な光景であつたらしい。

飛び交つていたかけ声やさめやらぬ興奮と酒宴への期待の会話は消え失せ、奇妙な静寂が船首甲板を支配した。

人一人軽く吹き飛ばす凧を、巻き上げ機でないと巻き取れない程の力がかかるロープを、目の前の少年は容易く、釣り糸を巻き取るかのように

ぐいぐいと甲板上に引っ張り込んでいる。

しまいには何度も強い驚愕に襲われ、目と口が大きく開かれてゆく彼らに対して、更に追い打ちをかけるかのように調子に乗った才人が強くロープを引っ張った際、なんと凧の骨が音を立てて折れてしまった。

「あつ！ …… たはは、す、すいません。こわしちゃいました、た」

少し間延びした、申し訳なさそうな声に応える者は居なかった。

真つ二つに折れた凧は視界から消え、前方へと伸びていたロープは  
だらんとフネの下へと垂れ下がり、そんなロープを手にしたまま

才人は困ったように頭を掻いてトマソン砲長に苦笑いを浮かべて見  
せる。

その後間を置かずに発せられた歓声は、自室で頬を膨らませながら  
荷ほどきを行っていたルイズの耳にまで届いたのであった。



「おうい、坊主、起きろ」

才人達が ” 麗しのアンリエッタ号 ” に乗り込んで二日目の事である。

個室や相部屋ではあるがしっかりとしたベッドを与えられる士官達とは違い、窓もない真つ暗な砲甲板でハンモックを吊しただけの粗末な寝台で寝ていた才人を起こす者が居た。

才人が割り振られた甲板員マトロの中で、同じ班に所属するベンである。

彼は元イーグル号のクルーであり、 ” 麗しのアンリエッタ号 ”

に乗り込む数少ないアルビオン人であった。

戦闘や砲戦もこなす甲板員マツロだけあって、他の者と同様に筋骨隆々とした肉体を持っていたのであるが

生来の性格は大人しくむしろ気弱でさえあり、その風貌は他の者と比べても今一逞しさを感じられない。

「うう？ あ、ベン？」

「起きろって。頼むぜ坊主」

「なんだよう、もう俺達のワッチ（当直）なのか？」

「違う違う。坊主にお客さん。」

どういうわけか、こんな小汚い砲甲板に事務員パーサーの、しかも女の子がやって来てあつちで坊主を出せって怒鳴り散らしてるんだ。

……それに、その子、すっげえおっかない顔でオイラや皆を睨むんだ、早く起きてくれよう」



少々間延びした野太いベンの説明に、才人は八つとして、慌ててハンモックから降りようとして転げ落ちてしまう。

どて、と音を立てて派手に砲甲板の上へ転げた才人だったが、そのような事は意にも介さずデルフを拾い上げながら砲室へと走り出した。

才人の脳裏に過ぎっていたのは前日での事。

骨組みをヘシ折ってしまった大砲を回収した後、才人は大砲が並ぶ砲甲板ガンナーデッキと呼ばれる、帆船の中層に降りて

他の甲板員達ロウマとささやかな酒宴を楽しみ、そのままワッチ（当直）と呼ばれるフネでの仕事へ就いて様々な作業を行っていた。

そのどれもが力仕事であったり、または技術よりも身体能力が求められる物ばかりであったが、フネでの作業が初体験であった才人にとって

新鮮で楽しいものであった。

才人はそのまま約四時間程のワッチ（当直）をこなして、再び砲甲板に戻り、その奥にある薄暗く狭い一室に通されて

ハンモックを割り当てられ、それを揺らしながら体を横たえていると、いつの間にか寝てしまって居たのである。

背中に冷や汗を流しながら、才人はやつちまった！ と焦り歩を急がせる。

窓とは言えない、拳ほどの小さな明かり取りから砲甲板に差し込む光は、恐らく朝の物だろう。

昨日、大風を上げた時は夕方だった。

まる一晚、ルイズを放っておいた事になる。

才人は勢いよく砲室への扉を開く。

船倉兼砲兵室と同じく、薄暗い室内に所狭しと居るむさ苦しい男達が目に飛び込んで来た。

その隙間から覗く、小さな仁王立ちの憤怒と目があつ。

思わず才人は勢いよく砲室の扉を閉めた。

あれは久々に見る、本気で怒っている顔だ。

超怖い。

「サイト！ あんた、いままで何してたのよ！！」

怒声と共に、背にした扉がガゴン！ と揺れた。

砲室の扉は大砲の発射に伴う振動や衝撃にも耐えられるよう、かなり厚い。

その扉を怒りにまかせて蹴飛ばし揺らすなど、余程の事である。

「ご、ごめん！ わ、わわ、忘れてたわけじゃないんだ！」

「嘘おっしゃい！ 私、あんたが戻ってくるのを一晩中まっていたのよ?!」

「一体今の今まで何やってたのよ?!」

もう一度、ガゴン！ と分厚い砲室の扉が揺れる。

どうやらルイズは相当頭に血が上っているらしい。

才人はどうやって怒り狂うルイズを宥めようか、必死に寝起き間も無い思考を回転させた。

そんな彼を置いてけぼにするかのように、背にした扉の向こう側が一層騒がしくなる。

「は、離して！ 離しなさい無礼者!!」

「勘弁してくださいませ**事務員**！ 砲甲板での魔法は自殺行為でさあ！」

「う、五月蠅い！ このドアを壊すだけよ！」

「ダメですって！ この向こうにや、山盛り砲弾と火薬がしまっているんですから！」

「大丈夫よ！ ちゃんとドアだけ吹き飛ばす……ちよ、何処触ってるのよ!! あんたから灰にするよわ?!」

「ひ?! す、すいやせん！」

「バカ！ 手を離すなああ!? イダイ！ ぱ、**事務員**！ 噛みつかないで！」

「おねげえします、どうか、どうか杖をしまってください！」

どうやら扉の向こうでは、ルイズが杖を取り出しそれを慌てて甲板員達が取り押さえているらしい。

恐らくは、このままだと騒ぎが大きくなってしまふ。

才人は意を決し扉を再び開けて、大勢の男達に羽交い締めになされているルイズの前に立った。

「お、落ち付けて！ お前も船内で騒ぎ起こすと色々マズいだろう？ な？」

「何よ。あんたが……離しなさい！ もういいでしょ！ ……もう。あんたがコソコソ隠れるのが悪いんじゃない」

「だ、だってさあ」

「だってもへちまもないわよ！ いいから、とつとついついてくる！」

「へ？ ついてこいって、何処に？ 俺、もうすぐワッチ（当直）なんだあだだだだ！ 耳！ 耳引つ張らないで！」

いまだ怒りが消えないルイズの表情に怯え、その言葉の意味も今ひとつ理解出来ないでいる才人の耳を、ルイズはぐいぐいと引つ張った。

才人はなんとも情けない姿を甲板員達に晒しながらも、そのままハシゴを登って暴露甲板へと

消えていくのであった。

砲甲板に残された屈強な水夫達は、その様子をぼかんと見送り続ける。

「……なあ、だれかこの中にトリステイン人いたっけ？」

「アロワ、お前たしかトリステインの出だったよな？」

「ああ、そうだけど？」

「……トリスティンの女は皆、ああなのか？」

「んなわけねえだろ。貴族にしたって、もうちょっとおしとやかだぜ？」

「坊主、ちよつと可哀相だったな」

「そうかあ？ おいらが家に帰った時のかみさんとそうかわらねえぞ？」

「なんだ、じゃあ坊主の奴はもう尻にしかれちまってたのか。あんなだけ力があるのにもったいねえったらねえやな」

砲甲板にドつと笑いが起きて、空気が一気になごむ。

やがて、ワッチ（当直）の途中で騒ぎを聞きつけ降りてきていた甲板員達は元の配置に戻り、残った非番の甲板員達はというと

どの国の女性が一番おしとやかで良いか？ という話題で盛り上がるのであった。

ちなみに、半ば冗談半分であったが、今回の一件でトリスティンの女だけはやめておくと満場一致で決まったのは言うまでもなかった。

フネの組織は主に管理職である士官と作業員である部員に別れ、海に行く船と同じく厳格な階級が存在する。

”麗しのアンリエッタ号”の場合、船長であるウエルズ皇太子を頂点に、三人の筆頭士官がそれぞれの組織をとりまとめられた。

その一つは航海長チーフオフィサーであり副船長でもあるハル卿がとり仕切る航海部。

航海部は主にフネの運行や砲戦・海兵戦がその役割であり、ここが一番水夫を多く擁する組織である。

チーフオフィサー オフィサー  
航海長と航海士である部下二人が、四時間おきに一名ずつワッチ（当直）に就いて

水夫達の指揮を取りながら船の運航にあたるのだ。

水夫達もそれにあわせて三つのグループに別れ、こちらも交代しな



がらフネの運航作業を行う。

更にこの部員である水夫達も細かく役割分担され、その組織も士官と同じく三つに分類された。

まずはフネの運行その物を司る掌帆。

掌帆ボースン長と呼ばれる士官から直接指示を受ける？帆作業長が三名配置され、彼らは？帆員セイラーと呼ばれる部下を

それぞれ十名程統率し、三本ある ”麗しのアンリエッタ号” のマストに各自配置されていた。

次いで指示を受けてフネの舵を切る操舵手クォーターマスター。

これも一日中誰かが作業を行う必要がある為、三名の熟練した？帆員から選ばれた操舵手が、交代を行いながら持ち場に当たる。

最後は戦闘時に大砲を直接扱う砲兵を率いる甲板長ガンナーとその麾下の甲板員マテロ。

彼らは水兵でもあるため、？帆員セイラーや操舵手クォーターマスターらとは少し違って、通常航行時には決まった仕事を

割り振られたりはしない。

無論、戦闘時には十六門ある砲にそれぞれ三名づつ配置に付き、砲長ナヒと名前を変えた甲板長の合図の元

一斉に大砲を発射する作業を行ったり、フネに乗り込んできた敵や、

あるいは敵のフネに乗り込んで白兵戦に当たるのが彼らの役割だ。

しかし戦闘用のフネにおいて最も構成人数の多い彼らは、戦闘の発生しない通常運航時においても甲板の掃除、索具や砲の整備

高いマストの上での見張りに各種測量と、実は一番忙しい持ち場に割り振られていると言えよう。

そんな彼らとは対照的に、フネの運行に当たり決して持ち場を離れてはいけない専門の仕事もまた在った。

フネを空へ浮かべる風石を扱う、魔導機関部だ。

魔導機関部を取り仕切る機関長は、チーフプロダクターフネでは船長に次いで身分が高い筆頭士官の一人でもある。

非常時には船長に変わり指揮を取る副船長の方が身分が高そうに見えるのだが、フネを空へ浮かべるといふ大前提を司っている事から時には船長ですら彼の言に従う必要があるほどチーフプロダクター機関長の発言力は強い。

航海長と同じく機関長にも二人のプロダクター機関士と呼ばれる士官が部下に付き、風石やフネに備えられた様々な魔具の

維持管理を行うのであった。

もつとも、民間船の場合通常はメイジの士官などフネには乗り込まない為、魔具の維持整備など殆ど無理な話である。

よって、平民で構成された士官が乗り込む民間のフネの場合、機関部の仕事はフネの浮き沈みを調整する風石の管理を魔具を通じて行う程度だ。

無論戦船である ”麗しのアンリエッタ号” での士官は、全員メイジであるからして、航海部より伝令を受けて風石の出力を調節しフネの浮き沈みをコントロールする以外にも、魔具の修理や砲戦で傷ついたフネの修理なども担当することとなる。

その為か彼ら機関部の人間はメイジの士官、平民の部員共に職人気質の者が多く、また民間のフネと比べても軍籍のフネには

多くの機関部員が乗り込むのであった。

機関長及び機関士からなる三名の士官も航海部と同じように、二十四時間浮き続けるフネに対応すべく四時間おきにワッチ（当直）を行

機関部所属の部員である水夫を率いるのであるが、この水夫達は主に機関部士官の指示の元、フネの修理や風石の運搬を担当している。

そもそも、フネを浮かべる風石は船体を貫くマストの柱を巻くように取り付けられた魔具の中に格納され、 ”麗しのアンリエッタ号” の場合

三本のメインマストを持ち上げる風石の出力を調整し、フネの傾きや浮き方を調整するのであるが、その調整の為に風石の交換や運搬予備の風石や各種魔具の管理などは、繊細かつ肉体的にも厳しい作

業であつた。

したがつて、メイジが乗り込む戦船であつても肉体的な作業は主に  
マインワーカー  
掌石員と呼ばれる魔導機関部員が士官の指揮の下に行い

メイジの機関士達はもっぱら風石の品質チェックや魔具の調整を主  
な仕事としていた。

一方、機関部の実務の大部分を担当する掌石員達は、三本のメイン  
マストにそれぞれ三名づつ配置され

掌石長ナンバンと呼ばれる彼らを取り仕切る班長と共に、フネの運行を裏か  
ら支える要とも言えよう。

彼ら魔導機関部員はほぼ昼夜の区別なく暗いフネの船底で、敷き詰  
められたバラスト（フネを安定させる為の重しの為の石や鉄）の上を

重い風石や魔具、工具を持ち歩きその姿はよく ” 鉱山夫 ” と擲  
揄されていた。

しかしは当の本人達はそのような呼び名は気にもせず、一度酒が入  
れば陽気に歌つたり踊つたりして騒ぐその姿は、上で運行作業を行う

荒っぽい甲板員や？帆員達とまったく変わらない歴とした船乗りで  
ある。

さて、残る組織は恐らくはフネの中では最も地味であり、船乗り達  
にとつて最も切実な持ち場とも言える事務部であつた。

船長に次ぐ筆頭士官である事務長チーフパーサーと二人の部下である事務員パーサーが士官

を勤め、主に経理や補給計画

その他書類作成や雑事などを司っていた。

商船などはここに商人や会計士が所属し、また軍船などは参謀や通信兵などが所属する部署である。

その仕事は多岐に渡るが、フネに乗り込むクルーにとって、最も重要で逆らいがたいのが実はこの部署の士官でもない、部員であった。

ステュアート  
司厨長とその部下である司厨手……いわゆるコック達である。

フネに乗る者すべての胃袋を司る彼らは、その身分の低さからは想像も付かないほどの権力を手にしていた。

コック長である司厨長<sup>ステュアート</sup>が提出するメニューは補給計画の最重要項目になるし、司厨手と仲良くなっておけば

ワツチ中、司厨手達からの秘密の差し入れを貰えるようになる為、如何に彼らと懇意になるか、士官も部員も皆文字通り血眼になる為である。

何より、物資が限られるフネにおいて通常は士官も部員達も、食事のメニューは全て同じとする風習があった。

身分差のあるハルケギニアにおいて、フネの食卓は唯一 ” 平等 ” な場である。

無論例外は存在するのだが、海に行く船同様に長期に渡って空を行くフネも、ある程度の船員の身分を保障しておく必然性が存在し

その結果が厳格な船内での身分差と食事であった。

極端な話、フネの中では例えメイジであっても平民の船長には逆らうことが許されないのである。

尚、船医も<sup>ドクター</sup>ここの所属となるのであったが、その特殊な職能故、基本的に水メイジであろうと平民であろうと

士官に準ずる身分が保障され、医療に関わる発言に限っては船長と同格の権限が保証されていた。

以上、”麗しのアンリエッタ号”は一般的なハルケギニアの空飛ぶフネと同じく、そんな三つの組織から運行されるのであるが

その様は正にウェールズ皇太子を元首とした一つの小さな国家なのである。

そんな、国家で言う所の政府高官とも呼べる士官達が一堂に会した士官用サロンにて。

才人は未だ不機嫌に事務部士官用の椅子に座るルイズの背後に立ち、これから何が始まるのか注意深く室内を見渡していた。

ルイズの隣にはケイト・ブラウ准尉も座っている。

どうやら彼女もルイズと同じく<sup>パーサー</sup>事務員待遇での乗船らしい。

上座の壁にはアルビオン王家の紋章が象られたフラッグが張られており、その前の船長席にはウェールズ皇太子の姿があった。

士官達は皆、船長であるウェールズの方を向いていたのだが、場違いに唯一の部員である才人の存在も気になるのかチラチラと才人の方へ視線も投げていた。

「船長。全員揃ったようです」

「わかった、ハル卿。では始めるとするか。

諸君、本日集まって貰ったのは本船 ”麗しのアンリエッタ号”  
のこれからの進路についてである。

これまで、機密保持の為に一部高級士官にしか知らせていなかったが、無事出港できたので情報を開示する運びとなった。

本船はこれより、進路をスニソート・ビーク空域へと向ける」

「スニソート・ビーク空域ですと！ 船長、正気ですか！」

ウェールズが進路について言及した瞬間、ガタン、と椅子を倒して航海部の士官の一人が、なかば取り乱して立ち上がる。

表情には焦りと恐怖が浮かび上がっていた。

「オフィサー・ベンノ。君は今、重大な船規違反を犯している。分かっているのかね？」

「チーフ！ スニソート・ビーク空域ですぞ?! ああ、魔の空域ではないですか!！」

「オフィサー。これ以上船長の発言を遮るならば、私は船規に基づき君に鞭を五十回打ち、下船させねばならない。」

本船は特殊任務中故、この空の上からの下船となる。

大人しく座ってはくれないかね？ このような事で可愛い部下を失いたくはない」

ハル卿の言葉に、立ち上がり焦燥をみせていたオフィサー・ベンノは口をつぐんで、そのままゆっくりと座った。

しかし不安と不満は変わらずその表情に張り付けたまま、彼はじつと船長席に座るウェールズにその視線を送る。



ウェールズはそんな彼の様子に苦笑して、しかし特には咎めず言葉を続けるのであった。

「皆、オフィサー・ベンノと同じような感想を持っていることだろう。」

しかし、とりあえずは話を最後まで聞いて欲しい。

その前に……ミス・ゼロ。君はスニソート・ビーク空域の事を知っているかね？」

「いいえ、殿下。……我々は存じてませんわ」

「わかった。ではスニソート・ビーク空域の説明も絡めて皆に説明するとしよう。」

先程も言ったが、本船はスニソート・ビーク空域……我々フネに乗る者なら誰もが知っている ” 魔の空域 ” へと進路を取る。

我々の任務はアルビオン本土へ極秘に侵入し、彼の地で皇帝を僭称しているオリヴァー・クロムウエルから

とあるマジックアイテムを奪取するためだ。

しかし皆も知っての通り、ハルケギニアからアルビオン浮遊大陸への侵入は非常に困難である。

なにせ、ただ浮いているのではなく、ハルケギニア各地の上空を移動し続けその影響でフネで進入できる空路がその時々で

限定されてしまうからね。

それは相手にとって、すこぶる侵入者の発見をしやすい状況と言

えるだろう。

だが何事にも例外という物がある。それがスニソート・ビーク空域だ」

ウェールズは言葉をそこで一旦切って、皆を見渡した。

士官達は変わらず猜疑が混じった視線を投げかけて来ている。

無理もない。

魔の空域とも呼ばれるスニソート・ビーク空域はそれ程危険であるからだ。

アルビオン大陸への進入空路は実はそれ程多くは無い。

ハルケギニア大陸上空を浮遊し、周回するアルビオン大陸へ上陸する為には各地の特定の場所からそれぞれに特殊な条件の下

限定された空路を使う必要があるからだ。

たとえば、トリステイン王国の場合はラ・ロシエールの港町より、二つの月が重なる夜を利用するように。

スニソート・ビーク空域もそんな空路の一つであった。

ただし、とびきり不吉な日く付きの。

ウェールズは士官サロンを見渡していた双眸をルイズと才人に向けて固定し、その不吉な曰くの説明を始めることにした。

何も知らない彼女達を、そこへ連れて行くには説明をしておかねば公平でないと感じたからだ。

なにより、魔の空域を突破するためには彼女らの力が必要であった。

「……ミス・ゼロ殿。なぜスニソート・ビーク空域を皆が恐れるのか、分かりますか？」

「いいえ、殿下」

「あの空域には、恐ろしい空の魔物が住まうのです」

「魔物？ そんなの、退治してしまえば……」

ルイズの台詞に、ウェールズは頭をゆっくりと振った。

それからその場に居る者全てが知るスニソート・ビーク空域の  
魔の空域” たる所以を口にする。”

とても苦しそうに。

「ミス・ゼロ殿。スニソート・ビーク空域に入って、生きて出てこ  
れた者は未だ居ないのでよ。」

長い、何千年もあるアルビオン王国史の初期からその空域の名が  
記されているにも関わらず、今日までそう、誰一人として「



”魔の空域” と呼ばれるスニソート・ビーク空域は、ゲルマニアからはるか北東の海にあった。

常に黒雲が立ちこめ、嵐のような風が上昇気流となり吹き上げている空域である。

高度三千マイル程もあるアルビオン大陸よりも、はるか上空へフネを押し上げるその空域にははるか古の頃から

アルビオンへ到達できる空路があると言われてきた。

事実、長年の研究の結果空路は確かにあると結論が出されすでに数千年が経過していたのだが、証明は未だされてはいない。

何せその空域に入ったフネは、悉くが行方知れずになるのだ。

空域の内部の様子を唯一窺い知る事ができる物と言えば、遠目に見える巨大な黒雲の固まりと、何百年か前にゲルマニアの海岸に漂着した

ある小瓶だけであつた。

小瓶は ” 魔の空域 ” に入り込んだフネの乗組員が残した物であつたらしく、中には一枚のメモが入っていてメモには一言

” 巨大なサーペント（蛇）のような魔物がフネを襲つた ” とだけ書かれており、以後 ” 魔の空域 ” には恐ろしい魔物が棲むとされ

フネに乗る者ならば誰もが決して近づこうとはしない場所となつたのである。

「しかし、空の上でそんな魔物を俺達だけで倒せるもんかな？」

「サイトが槍を投げれば一発じゃない？」

「どんな魔物つても分からないんだぜ？」

地上じゃともかく、空の上だし攻撃はともかく攻撃を避けたり出

来ないってのはなあ」

「気にしすぎよ。それにもう軍議で大丈夫です任せて下さい！ て  
言っちゃったし」

「……そりゃ、俺達はアルビオンになんとしても行かなきゃならん  
し、コツソリ行くにはそこしかないならな。

殿下に”あの空域を突破する為にトリステインからミス・ゼロ  
に御足労頂いた”なんて言われたら、そう言っしかないだろうさ」

「あによ、軽率だとも言いたいわけ？」

「そうじゃないけど……ん？」

軍議は多少紛糾しながらも終わり、才人とルイズは甲板に出てこれ  
から向かう”魔の空域”について語っていた時。

ルイズの後方で見覚えのある甲板員が、才人を手招いている姿が目  
に入った。

才人と同じ班でトリステイン出身のアロワである。



「ん？ 何？」

「あ、いや。向こうで同じ班の甲板員が俺を呼んでる」

「ほつときなさいよ。ハル卿からは必要な時には私の用事を優先させて良いって許可は得てるでしょ」

「そうなんだけど、ゴメン。そこら辺はあの人らにまだ説明して無かったつけ」

「もう。じゃ、さっさと行って説明してきて。まったく、ここは見晴らしが良いけれど落ち着かないわね。」

私は士官用サロンで待ってるから、先に行ってるわね」

「はいよ」

貴重な才人との会話の時間に水を差されたルイズは少し不機嫌な様

子で、そう言うと土官用サロンのある居住区へと戻っていった。

ルイズが才人に背を向けて立ち去ったのを確認してか、アロワは手招きをやめルイズを見送る才人の元へ走り寄って来る。

その表情は真剣その物であり、才人に何かイヤな予感を覚えさせた。

「おうい、坊主。あ、いや。ヒルガリ、さん」

「サイト、でいいよ。て、いうかヒルガリじゃなくてヒラガ。……  
そんなに難しい発音かな？」

「悪い、じゃない、すいません。あの、サイトさん？」

「……アロワ、お前確か前のワッチ（当直）で一緒だった時、敬語  
じゃなかったよな？」

「え？ あはは、やだなあ、サイトさん。元からだよ、元から！」

「……俺、行くわ。土官用サロンに来るようルイズに言われてるし。  
なんかイヤな予感するし。」

急に敬語とかどう考えても変な事押しつけられる前ぶれだし」

「わー！ まった！ 待ってくれ坊主！ わかった、わかったから俺の、いや俺達の話聞いてくれ！」

甲板員アボウトの例に漏れず、筋骨隆々としたアロワは、その逞しい背中を丸め、もみ手をしていたごつい両手で

立ち去ろうとする才人の腕をがしとつかみ、馴れない敬語を早速放棄してブンブンと首を振り哀願した。

その表情はやはり必死である。

「はあ、やっぱり厄介事か。やめてくれよ、急に敬語なんて……  
て、俺達？」

「ああ、そつだ。俺達、甲板員全員の頼み事があるんだ」

「ぜ、全員?! 俺に? 頼み事?」

「そつだ。お前にしか頼めない事だし、お前にしか出来ない事なんだ……」

「一体なんだよ、その、頼み事って」

才人は驚きながらも頼み事の内容に興味を抱いた。

荒くれた甲板員であるアロワが急に敬語で頼み事をしてくるなど、ロクな内容では無いと薄々感じ取っていた才人だったが

甲板員全員が自分に望む内容とは一体何か、見当も付かなかったからである。

一方、アロワは岩のような体を不気味にくねらせ、モジモジとして中々頼み事の内容を切り出せずにいた。

「あの、な？ 坊主……いや、サイト？ でいいんだっけ？」

……えつとな、サイト。さっきスニソート・ビーク空域へ進路を取るよう、船長命令が発令されただろ？」

「ああ、 ” 魔の空域 ” って呼ばれてるんだってな」

「そつだ、 ” 魔の空域 ” だ」

「なあ、やっぱり船乗りとしては怖い空域なのか？」

「正直に言えば怖い。だけど、俺達は水兵だ。戦うのが本来の仕事だし、フネの上じゃ船長に逆らえない。

……そりゃ、ひでえ船長の下とかだと反乱も起きたりするけれど、ウェールズ船長は違う。

きつと、何か ” 魔の空域 ” を突破する策があるんだろうと俺は思ってるよ」

「そつか。……と、それで？ 頼み事となんか関係あるのか？」

「お、大ありなんだよ！！」

本題を思い出してから、アロワは大声で怒鳴るように台詞を口にした後、再びモジモジとして唇をとがらせ視線を泳がせる。

その様は非常に不気味であったが、”魔の空域”に臨むに当たつての、甲板員全員が自分に頼み事をしてくるならばと才人は思いもう少しサロンでルイズを待たせることにしたのだった。

やがて、背を丸めいかつい甲板員のアロワは上目遣いに才人を見てぼそりと呟くように本題を口にした。

「……その、お前、あの事務員パーサーの娘つこと仲が良いだろ？」

「ルイズの事か？ まあ、仲が良いというか、主従というか……」

「ああ、隠さなくてもいい。うん、お前らが付き合ってるのはあの娘つこの態度見てりゃ、なんとなくわかる。

うん、お似合いの二人だと思うぞ？ 皆もそう言ってる」

「そ、そうか？ はは、なんか、照れるな」

「そう照れるなよ。本当の事言つたまでだしな。とっ、とっころでや、お、おお、お前ら、もうヤったのか？」

いきなりの質問に才人は思わずぶっ、とむせてしまった。

質問してきたアロワの表情は変わらず真剣そのものである。

長い航海 男だらけのフネ ガチムチな男達 溜まる性欲 迸る汗  
唸る筋肉 溜まる性欲 一人細い体の俺 迸る性欲 男色 穴  
男の世界

不吉な単語が流星群のように才人の脳裏によぎる。

「な、なんだよアロワ！ 何いきなり?!」

「だ、大事な事なんだ！ お、お前ら、やったのか?!」

アロワは必死の形相のままずい、と才人ににじり寄ってくる。

才人はそんな彼の表情に気圧され、貞操の危機を少し感じ取りなが

「らも、いざとなったら力尽くで逃げればいいか、などとボンヤリと  
考えて

引きつった笑いを浮かべながらアロワの質問を否定してみせた。

「そ、そうか！ 二人はまだ、そんな関係ではなかったか！ ああ、  
よかった！！」

「え？ よかった？」

「あ！ いやいや、誤解しないでくれ。あんな、気の強くてすぐき  
ーってなる娘は俺の好みじゃねえし。

「俺はどっちかって言うと、アンリエッタ女王陛下みたいなおしと  
やかあな女がいいんだ」

「……姫さん、外面はいいものなあ。と、それより。俺とルイズの  
関係が頼み事となんか関係あるのか？」

「あと、あんまりルイズの事悪く言うとブン殴っちゃうぞ？」

「ちよ、まで！ その拳をおろしてくれよ！ 俺が悪かったって！  
関係なら大ありさ！ ……なあ、サイト」



ぐい、と急に丸太のような腕が肩に回され、才人はアロワの胸の中へ引き込まれた。

アロワは周囲を二度三度と警戒するように見渡した後、才人の顔に己の顔を近づけて小声で話の続きを囁く。

「俺達甲板員からの、一生の頼みがあんだ」

「な、なな、なんだよ急に。お、俺、そんな趣味ねえぞ？」

「あ？ ああ、誤解すんな。俺は男なら逞しい奴しか興味無い。お前は力はあるが……ってそんな事は今はどうだっていい。

なあ、サイト。お前、あの嬢ちゃんとやりたくないか？」

「そつ、そりゃ……でも、時期つてもんがあるし、今はほら、任務中だろ？」

それにハル卿からも誤解を招くような事はしないよう、釘を刺さ  
れてるし」

「その件についてちゃ、きにすんな。少なくとも、トマソン砲長含めた甲板員全員はお前の味方だ。

俺達がお前を認めれば、あの嬢ちゃんと同じ部屋でお前が過ごせるようになる事も知ってる」

「え？ そうなの？」

「ああ。そりゃ、いきなり女連れでフネに乗り込んできて、イチヤつきながら戦場に行くような奴とは一緒に戦えないけどな。だけど、お前は特別さ。だから、協力してやる」

「協力？」

「何、チーフにバレなきゃいいんだろ？ その、”何か” あつてもさ。」

俺達が黙ってりゃ、噂になることもねえ。

掌帆員セイラーどもにゃ、俺達をごまかしくからよ、だから、サイト。

お前、あの嬢ちゃんと一発ヤってこい」

「な、何を言い出すんだよ、アロワ！」

アロワの頼み事が、突然の展開を見せて才人は動揺してしまった。  
万力のような力で肩を組まれたまま、慌てる才人にアロワは声が大  
きいとばかりに指を一本、口先にあててもう一度辺りを見渡す。

大きなアロワの背中の方こうでは、掌帆員セイラーが目まぐるしく帆をコン  
トロールするためにロープを引っ張っていた。

「いいか、サイト。俺達はお前をあの嬢ちゃんと一緒に居れるよう、  
協力する。」

「ま、手柄立てないと不自然だからな、いきなりは無理かもしれん  
が……」

「ちょ、どういう事だよ？ 話がみえないぞ？」

「なに、その代わりにほんの少しだけ、俺達にも協力して欲しいん  
だ」

「ワケわかんねえよ」

「えっと、な？ その、つまりだ。お前がああの嬢ちゃんといたすだ

る？」

「……うん」

「すると、まあ、その、一番擦れ合う部分の……た、体毛が抜け落ちる。」

そいつが必要なんだ。その、お前じゃなくて、嬢ちゃんの方の「

「体毛、って……え？ えええ？！ ヤだよ！ なんで俺がお前らにそんな」

「しー！ 声がでかたって！ 説明すつから！」

「いや、いやいやいや、説明されようとも無理だつて。うん、無理。無理無理無理！」

「頼む！ 話だけでも聞いてくれサイト！ やましい目的じゃないんだ！ ”魔の空域” で、俺達にはどうしてもそれが必要なんだ！！」

アロワは才人を逃がすまいと一層肩に回した手に力を入れ、必死に哀願を続けた。

もし肩を組んでいなければ土下座をしていたであろう勢いである。

しかし、流石の才人もいかに懇願されようと恋人の陰毛をなんとか手配してやる程にはお人好しではない。

いや。

それを実行するのは、お人好しではなく、最早白痴の領域である。

よって、これ以上話を聞くまでも無い頼み事ではあったが、しかし才人は、アロワの必死な様子を受けて

話だけは聞いてやることにした。

「……聞くだけだかな」

「あ、ありがてえ！ 話も聞いて貰えなかったなんてトマソン砲長に報告したら、俺アぶっ殺されちまう。

あ、あのな。フネ乗りには、魔除けのお守りつてのがつきもんでな。伝統、つてやつだ。

こう、これ位の袋に干したネズミのしっぱ、故郷で採れる薬草、そして女の体毛を入れておくんだ」

「へえ。てか、トマソン砲長も一枚噛んでるのかよ！  
大体、それならルイズのじゃなくても、それもアソコの毛じゃなくともいいじゃねえか！」

「まあ、聞いてくれ。」

ネズミのしっぽは食いもんにならなくなる意味が、薬草は病気にならぬようにって願いがかけられてる。

で、女の体毛は ” 命 ” を司っててな、航海の無事を意味するんだ。

特に処女やメイジのそれは強い効果があるって言われててさ、その中でも命を生み出す場所に近いほど強い魔力を宿してるんだ」

「話は終わった？」

「まだ。ほんと、頼むぜ、坊主！」

「頼まないでくれよ！ 大体、恋人や嫁さんので作るもんだろそれ！」

「スニソート・ビーク空域だぞ！？ ” 魔の空域 ” だ！」

そんな、普通のお守りなんかでどうにかなるもんじゃねえ！ なにせ、何千年の間あそこを抜けたフネが居ないんだからな！  
きつと、とんでもねえ魔物が潜んでいるにちげえねえんだ！」

「そんなもん、俺がなんとかしてやるよ!! 大体、魔除けなんて迷信にきまつてるだろ!」

「うるせえ! フネ乗りにや、迷信でも大事な真実なんだ! なあ、頼むようサイト。甲板員、五十人全員の頼みなんだ!」

「絶、対いやだ! 大体、もしそんな事引き受けて、一緒の部屋に居られるようになったとしてもだぞ!？」

『なあ、ルイズ。君の陰毛、五十本程くれない?』なんて言つた日にや、俺が殺される!」

「五十本もいらないうて。あの嬢ちゃん、ちっこいからそんなに筆つたら無くなっちゃうだろうし。」

数本ありやいいんだよ、それを細切れにして皆で均等にわけるか。

も、勿論恋人であるお前の心情を考慮して、臭いを嗅いだり舐めたりする不届き物がいたら、俺達が責任持って袋叩きしておく!」

「臭い言うな! ルイズのは匂いだ!! じゃねえ、そんなの、お断りだ!」

才人は肩に回された、岩のように筋肉が隆起しているアロワの腕をたやすく振り払い、話はここまでだとばかりにさっさと背を向けた瞬間、背後で取り残されたアロワがうおおおん、とこっつい声を上げる。

驚いて振り返ると、うずくまり、両手を顔に当てたアロワが泣き崩れていた。

大の男が女の子のような格好で泣くその様は非常に不気味で、何とも見苦しい姿であったが、先程までの話がそれだけ切実な物であったのだと

才人はこの時はじめて理解する。

アロワの鳴き声は大きく、遠巻きに？帆作業を行っていた掌帆員の視線を集め始めた。

それ程間も置かず掌帆員達が片手間に、おう、痴話ケンカか？坊主も罪なやつだな！となどと茶化してくるようになり始めた頃。

才人は意を決してうずくまり、衆目を気にせずむせび泣くアロワの肩に手を置いた。

アロワはビクツ、と肩を震わせ、泣くのを一旦辞めて涙と鼻水にまみれた顔を上げる。

その様は一層不気味であった。



「わかったよ、俺の負けだ」

「ほ、本当か?!」

「だけど、アッチの毛は無理だぞ。だからさ、髪の毛でいいか？  
それなら頼んでやるよ」

「と、トリステイン人ってのは、生えてたらあまり手入れはしない  
奴多いし、腋とかでも」

「じゃ、おつかれ」

「わー！　　まで！　　サイト、髪でもいい！　　わかったよ、それで我  
慢する！」

交渉成立である。

いや、交渉というよりも泣き落としてであったが。

才人ははあ、とため息をついて肩を落とし、今更ながらに後悔を始めながらルイズの待つ居住区へと向かう事にした。

一方、アロワも才人への感謝を口にしつつ一緒に隣を歩き、土官用の居住区の入り口までついてきていた。

アロワはこの時間ワッチ（当直）であったが、砲甲板の入り口が居住区に近い為である。

何度も礼を伝えてくるアロワに別れの挨拶をし、軽快に雲海を進む”麗しのアンリエッタ号”とは対照的に、すっかり重苦しくなった心を

抱えたまま才人は居住区の入り口の扉に手をかけた。

果たして、ルイズになんと切り出そうか悩みながら歩く才人はすぐに土官用サロンへとたどり着き、設えられた大きな会議用テーブルの一角で

少々むくれた表情を浮かべるルイズと再び二人きりとなる。

「ずいぶん時間がかかったわね？」

「悪い、ちよつと厄介な頼み事をされちゃってさ」

「もう、サイトもサイトよ。いくらお人好しだからって、ちよつとくらい断ることも覚えなさいよね」

「で、でもさ。その頼み事ってのは甲板員マトロ全員たつての頼みだったんだ。

うまくいけば、俺とルイズが一緒の部屋にいられるよう協力してくれるって話だったし、さ」

「うそ！ こつしてはいられないわ！ すぐにその依頼を受けなさいよー！」

どこか気まずそうに話しながらルイズの隣の席に座る才人とは対照的に、不機嫌な表情を一瞬で輝かせ思わずルイズは立ち上がった。

そんな彼女を才人は顔をほんの少し引きつらせながら見上げて、まあ、座ってくれと促す。

ルイズは小首をかしげながらも何か、才人だけではどうにもならない問題があるのかもしれないと思いついて

言われるままに再び椅子に腰を下ろした。

「話はそう、簡単な事じゃないんだ」

「何？ ぶじいじいこと？」

「えつとな、フネ乗りつてのは信心深いそうなんだ」

「ぶづん？」

「で、お守りとかすごく重要らしくて。

ほら、今俺たちはスニソートなんか空域っていう、危ないところに向かっているだろ？」

「そうね。陸の人間である私たちにはピンとこないけれど」

「でさ、そのお守りに使う材料を調達してくれって頼まれて、さ」

「なあんだ、そんなこと！ そんなの、ちゃっちやとそろえちやい

なさいよ。……あ、お金がたくさんいるとか？」

「うんにゃ。その、えっと、な？」

「……あによ、急に私の事、上から下までジロジロと見て」

「その……けが必要なんだ」

「ケ？」

「体毛っていうか、なんていうか……その、お前の毛がほしいから、貰ってくれないかって頼まれたんだよ」

才人の気まずそうな、語尾を消え入るような声はしっかりとルイズの耳に届いた。

せわしなく視線を移動し、しかし一度も自分とは目が合わないところを見ると、どうやら必要な体毛はアノ部分の体毛らしい。

ルイズは少し顔を引きつらせて、そのあまりに下品な要求に絶句しながらも、もう一度才人にもかして、下？ と尋ねた。

才人はうつむき、明後日の方角に視線を固定させてルイズの問いかけにはうん、下。とだけ答える。

瞬間、イヤよ！ とルイズが声を荒げ同時に才人がでも！ と彼女の台詞を遮った。

「で、でもさ！ 別にアッチの毛じゃなくてもいいって言われてるから！ 髪の毛一本でいいんだ」

「当たり前よ！ そもそも、なんで私の……そんなものが必要なのよ！ そんなの、自分たちの奥さんや恋人からもらうもんでしょっが！」

「なんでも、処女やメイジのソレが特に効果があるんだそうだ」

「バツカじゃないの?! あんたもあんたよ。なんでそんな話を受けるのよ!」

「そりゃ、お前、一緒の部屋にいられるよう、協力してくれるって言っし。泣いて頼まれちゃうと、さあ。

あ、でも流石に俺でもお前の、その、アッチの毛を渡すのなんて

イヤだから、髪の毛ならって事で引き受けたんだ」

たはは、と頭を掻きながら申し訳なさそうに笑う才人をにらんで、ルイズは腕を組み口を不機嫌に結んだ。

基本、ふざけた話である。

今の自分たちの関係は恋人同士だから、サイトが必要ならば性毛位は……イヤだけでもやぶさかではない。

だからといって、流石に他人の為に用意する気にはなれない。

当たり前だ。

向こうは必死なのかもしれないが、自分にだって羞恥心位持ち合わせている。

髪の毛ならって事でサイトは引き受けたようだけれど、どうもこいつは私ならなんでもわかってくれると思っっている節がある。

私だって、好きな人の為にできることは何でもしてあげたいけれど、デリカシーの無い話は嫌いだし。

そう。

よくよく考えてみれば、サイトは大事の前にはいつも私の事を脇に

置いているような気がする。

今朝だって私の事なんて放っておいて、大砲のある甲板で寝てたし。何かあるとすぐごめん、ルイズ。でもな？ だし。

恋人同士よね？ 私たち。

だったら、もう少し優先してくれても……ふざけんな！ ルイズは毛一本まで、俺のものだ！ 位は言ってくれてもいいじゃない？

ルイズの思考はいつのまにか才人が持つてきた話から、才人への不満の整理へと変わっていた。

年頃の女の子には珍しい事でもなく、特に恋愛中であるならばどうしても独占欲と相手への幻想が強くなるので無理からぬ話である。

腕を組んだまま何事かを考えるルイズの表情は、みるみるうちに陰しくなり、才人は才人でやはり髪の毛の毛であろうと提供するのを

ためらうのは女の子なんだからだろうな、などと暢気にずれた事を考えながら成り行きを見守る。

沈黙と静寂が士官用サロンを支配し、たまに外から薄く飛び込んでくるクルーのかけ声がそれに抵抗していた。

そんな空間にあってルイズの長考はやがて、寄り道しながらも収束していく。

思い浮かべるのは以前、才人の故郷へ行った時の事。



珍しい宿に宿泊した折、才人にやるべき事があるからまだお前を抱かないと宣言されてしまい、内心では凹んだあの時。

抱いてと口にしたのは逃げであったが、抱かれないと思う気持ちは本物である。

その気持ちは今でも、あの時よりもさらに強く不安を伴って胸に渦巻き、彼女の慕情をかき立てていた。

つまり、できることなら……：チャンスがあるならば、ルイズは”  
したい”と考えているのである。

いつもはあのメイドやタバサに邪魔をされているが、今ならば誰にも邪魔されない。

加えて、あてがわれた部屋のベッドはとても狭い。

揺れるフネの中で寝るには、とても狭いベッドに取り付けられたベルトで体を固定させる必要がある。

そんな、ベッドで才人と二人っきりで過ごせるならば。

……”間違い”が起こりやすいのではないか？

なにせ、狭いあのベッドならばどうしてもお互いの体が密着してしまっ

広い学院のベッドでは、毎朝体の一部が堅くなってしまったサイトがさりげなく離れてしまっただが、あのベッドならばそれも無理だ。

あ、あそこが堅くなってるってこと、ことは、”そういう気持ち”  
になっているというわけで。

きつと、体を離さないと我慢できないから、サイトは毎朝そうして  
いるんだと思う。

だったら、きつと、絶対、あのベッドならば、ま、ま、ま、”間違  
い”が起きてしまう!

それは自分が心から望む事態であるわけで。

その為ならば、髪の毛の一本位、気前よくあげてもいいんじゃない?

「……………い！　おーい！　ルイズ?!　大丈夫か?」

「え?!　あ、サイト?」

「なんか険しい表情になったり、急に悲しそうになったり、にやけ  
たりしてたぞ?　話しかけても全然反応ないし」

「ごめん、ちよつと、考え事をね。えと、髪ね。髪の毛位なら協力  
するわ、サイト」

「本当か?! でも、イヤならいいんだぞ? 下は論外だけど、女の子にとつての髪の毛ってそんなに悩むほど大事だって俺もわかるし」

「ううん、大丈夫。どれくらい必要なの?」

「ルイズの髪は結構長いから二本もあれば十分だよ。それを切つてみんなで分けるんだつてさ」

「そう、わかつたわ。……っ、はい、大事にしてね?」

「あ、ナイフ位用意したのに……ありがとな、ルイズ」

「いいわよ、このくらい。ところで、ねえ、サイト?」

「ん?」

「あんたもその、お守りが必要? サイトになら、その、えっと……」

「い、いや！ おれはいい！ そういうの、お前好きじゃないだろ？ 俺だつてさ、好みじゃないし」

「そう。じゃあ、別のお守りをあんたにはあげる」

ルイズはそう言うや、不意打ちのように才人の唇を自分の唇でふさいだ。

先ほどまでの甘美な思考がそうさせたのか、それとも一緒のベッドで寝る時に才人をその気にさせる為の打算であったのか。

いつもよりも濃厚で激しい彼女の口づけに才人は戸惑ってしまふ。

やがて息が続かなくなったルイズがふは、と口を離し、驚いたような表情を浮かべる才人にエヘヘ、と笑った。

それからいぶかしげる才人に一言、がんばってね、待ってるから！ と伝えさつさと背を向けて自室へと戻るルイズであった。

後に残された才人はコロコロと変わる恋人の態度に頭をかしげながらも、手にした二本の髪を見つめる。

ピンク色の少しウェーブがかかったその髪は、絹糸のような滑らかさで手の中にあり、先程のキスの味と彼女の甘い体臭を思い起こさせた。

”麗しのアンリエッタ号” が港街シュトランドヤードを出航してより幾日か過ぎ去ったある日。

”魔の空域” ことスニソート・ビーク空域に進路を取る彼女の航海は、天候にも恵まれ実に順調であった。

特にフネのあらゆる場所で雑事を行う甲板員<sup>デッキ</sup>達は陽気な歌を口ずさみ、暗い表情を浮かべる掌帆員<sup>セイラー</sup>達とは対照的にキビキビと甲板を歩き来していた。

才人も彼らに混じって色々な雑事に追われ、四時間ほどのワッチ（当直）が終わると見計らったかのようにルイズが迎えにやってきては

士官用サロンへ連れて行かれ ” 会議 ” を行う事がすっかり生活リズムとなりつつあった。

フネに乗り込む船員、それも下つ端とも言える甲板員の生活は決して楽ではない。

しかし、偽りの体を持ち人間離れた膂力を得た才人にとっては特に苦になることもなく、むしろ新鮮で楽しい毎日を送っていたのだ。

たとえば、朝。

日の出の少し前、寒さに震えながらハンモックから起き出して、厨房の近くにある質素な食堂へ同じ班の仲間と駆り出す。

食堂ではすでにささやかながら食事の用意ができており、朝食として大ぶりのビスケットと暖かいスープが用意されていた。

ビスケットとは言っても地球で食べるような菓子ではなく、どちらかと言えば乾パンのような趣で、これをかじり

カップに入ったスープで胃に流しこむのがフネ乗りの流儀らしい。

厨房では才人達の班と入れ替わりに、遅すぎる ” 夕食 ” を摂る深夜から朝にかけてワッチを行った班の為に、別のメニューが準備される。

その、何とも言えないいい香りにかき立てられた食欲を、堅いビスケットとスープを使ってなだめてから甲板員達は寒い甲板に出るの

だ。

それからすぐに班長同士の引き継ぎを行い、才人達がまず行つのは  
暴露甲板デッキの掃除である。

暴露甲板とはいわゆる外部に面した床の事であり、幾重にも魔法が  
かけられ、鉄板が張られた船殻（せんこく・船の外側の壁）と比べて  
構造上非常に脆く、風雨にさらされ放っておくとすぐに痛んでしま  
う部分なのだ。

砲戦においてもこの甲板を狙つのはセオリーであり、相手より高い  
位置にフネをとり、この甲板を狙って当てる事ができれば

たとえ戦列艦であろうと案外アツサリと沈んでしまう。

無論、過去にはこの甲板を鉄板などで補強した戦船が出現したこと  
もあるのだが、いかんせん雨でぬれると滑る為

運行に支障がきたしてしまい、結局ハルケギニアでは今の形で落ち  
着いていたのだった。

さて、この甲板の掃除を才人達がおこなうのであるが、デッキブラ  
シなどといった物は支給されず

手渡されるのはもっぱらレンガのような石ころ一つ。

石は軽石のようであり、これをつかって甲板を隈無くゴシゴシと擦  
っていくのだ。



しかしいくら甲板が弱いとはいえ、雨ざらしになる甲板の床である。当然、石で磨いた位ではビクともしない。

これが雨や雪の日にもなると最悪で、感覚の無くなった指先をしらず床に擦り続けて指先から骨が見えてしまった者がいるなどと言う嘘か誠かハッキリしない逸話まで存在する程の重労働である。

果たして、甲板員達はハルケギニアの上空に吹きすさむ冷たい風に震えながらも、必死に甲板を磨くのであった。

そんな重労働が終わりを迎えるのは、日が昇り本格的な朝を迎える八時頃。

才人を除き、筋骨隆々とした男達も流石にヘトヘトとなり、班内で取り決めた順番で小休止を行って司厨部へと暖かいスープを摂りに向かう。

この ” 休憩 ” は本来食事の時間以外は飲食を禁ずるフネにおいて、当然船規違反となるのであったが、甲板員達の行う作業の過酷さを

考慮してか黙認されていたのであった。

これは ” 麗しのアンリエッタ号 ” に限らずどのフネにも言えることで、民間の商船だと船規に特例として認めるフネまで存在する程だ。

逆にその特例が船規として明記されず、黙認されている船の場合は

彼らの待遇の鍵を握るのは司厨部員……コック達である。

つまり、高空朝早くから作業に取りかかる甲板員達を暖める飲料が、湯となるのかスープとなるのかのさじ加減は船規に無いが故にすべてコック達が握っていたのである。

もし彼らに嫌われでもすると、スープでなくお湯となったり、ひどい場合にはぬるい水が出てくる時もあるのだ。

その為、甲板員とコック達は非常に仲がよい場合が多い。

しかし、その力関係は歴然としていて、中には王のように振る舞うコックが居るフネまでハルケギニアには存在する。

幸い ”麗しのアンリエッタ号” の場合はそういったこともなく、疲労困憊で身体を震わせる甲板員達は常に暖かいスープに

ありつけることができるようで、才人も他のクルーに混じって ”特別メニュー” に舌鼓を打つのであった。

さて、日課となっている朝の甲板磨きが終わり、小休止を取ると今度はいくつかのグループに分かれて本格的な雑事を割り振られる事になる。

才人の場合はその人間離れした力を買われているらしく、特に力が必要な作業を割り振られた。

その日は一際体格の良い者何人かと一緒に砲室へ降りていき、砲弾磨きや大砲の手入れを行った。

大砲は普段船内に格納され、戦闘時に窓を開けて砲身を船外に突き出すのだが、この窓を開閉する蝶番の手入れや大砲の分解調整など行うのだ。

特に分解調整などは釣り具を使い、大の男が数人がかりでパーツを持ち上げたりするのであったが、才人の場合は一人でこれを、しかも

道具など一切使用せず鉄塊とも言える大砲を持ち上げ、作業の手伝いを行えるので、同じグループに割り振られた者達は非常に喜んだ。

「一方才人の方も ” グリムニルの槍 ” の身体のおかげで力仕事や体力仕事等を行うにあたり特に苦痛もなく、長い人生の中で

まったく触れたことのない体験の数々に、どちらかと言えば心を踊らせることの方が多かった。

やがて、ワッチ（当直）交代の時刻を知らせる鐘が打ち鳴らされ、才人達の班はその日最初の休憩時間に入る。

時刻は十時程であり、それから四時間は各々が自由にして良い時間となるのであった。

しかし、才人にとっては真の意味での自由時間は与えられはしない。

この当直交代の鐘が鳴る頃、士官居住区から暇を持てあましたルイズが才人を迎えにやって来て、士官用サロンへ連れ出すからだ。

トリスティン王国所属ゼロ機関による ” 会議 ” を開くためである。

もちろん会議とは名ばかりであり、その内容は人恋しくなったルイズが才人に甘えるための場でしかなかった。

ただ、甘えるとは言っても他の士官の目もあるサロンである。

構造上士官用の居住区の通路にもなり、他の非当直の士官も利用するため大びらに抱きついたり、キスをしたりはできない。

船内では事務員としての地位を与えられていたルイズだったが、それは便宜上のものであり実際は仕事を割り振られせず

もっぱら才人が居ない間はアンリエッタへの報告書をしたためたり、日記をつけたり、編み物をしたりして時間をつぶしていた彼女であった。

その為か、才人にも分かるほどフラストレーションが溜まっていたようで、やたらと肩を寄せてきたり、手を握ったり

体に触ったりしてくるルイズに才人は何かとやきもきさせられた。

そうこうしている内に昼食の時刻となり、才人はルイズと連れ立って食堂へと向かう。

”麗しのアンリエッタ号”では食堂は士官も部員も同じ部屋で摂るのだが、流石に席は別々に分けられていた。

しかし、ここでもルイズは才人の側から離れようとせず、普段ならば嫌がるであろう、むさ苦しく薄汚れた男達に混じってちょこんと座り

茶化そうとしてくる同席した甲板員達に向け、なかば八つ当たり気味の怒気を込めた視線で睨みつけて牽制を行うのであった。

その日のメニューは芋のスープとパンに、フルーツの塩漬けでどれも少々塩気の濃い味付けだった。

これは作業を行う部員達にあわせた物であり、士官も同じメニューが供されるのだがあまりルイズの口には合わないらしく

少ない量にも関わらず彼女は残してしまい、才人に皿ごと差し出す。

才人はそれを受け、黙々とルイズの分まで平らげるのであったが、その間ルイズはいじましくも才人の服の端をずっと掴んでおり

同席していた甲板員達メソウキを大いに苛つかせるのであった。

欲求不満となったルイズの甘えるような、不満げな視線と同じ班の仲間達による刺すような視線に耐えながら、才人は食事を終えると

再び士官用のサロンへ引きこもり、ルイズととりとめもない話に付き合うこととなる。

それはルイズにとって（多少の不満があるが）貴重で、楽しい一時であったが、才人にとってはあまり変化のない話が延々と続くので少々食傷気味となり、いささか退屈してしまう時間となるのであった。

なにより。

このところ急に見せるようになった、彼女の甘えるような仕草やボディタッチは知らず、才人をじわりと蠱惑して少々体にも毒となっていた。

やがてそんなルイズの憩いの一時を終わらせてしまふ当直交代を告げる鐘が打ち鳴らされ、才人は主の拘束からやっと解放されることとなる。

時刻は夕方の六時。

才人が前のワッチ（当直）を行ってから、他の二つの班がワッチを終えた八時間後の事であった。

名残惜しそうにする主をなだめ、甲板へ上がるとそこには雲の合間から朝とは違う、美しい茜色が視界いっぱいに広がって才人の心をとらえる。

その美しい光景に一瞬目を奪われそうになりながらも、才人はトマソン砲長より作業の指示を受けて、その日二度目のワッチでは

船の中央、二番マストに上つての見張りを同じ班のアロワと共に行う事となつたのだった。

マストは地上から見上げるよりも上に登って見下ろす方が遙かに恐怖をかき立てるほど高かったが、その分雲海の眺めは最高であった。

ただし、高空に在って風を受け航行するフネである。

季節も冬に差し掛かっており、遮蔽物無く吹きすさむ風は刺すよう

に冷たく、二人は見張り台に備えられていた厚手のマントを羽織り  
背中合わせにして震えながらも見張りを開始した。

視界に広がる美しい景色からは、ぴゅおと音をたてて北風をたたき  
つけられる。

アロワはその冷たさに思わず悲鳴を上げて、その身を縮めさせるの  
であった

「うああう！ つ、冷てえ！」

「寒いな、ここ。景色はいいんだけど……」

「サイト、お前、なんだか平気そうだな？」

「そうでもないぞ？ すっげえ寒いけど、このマント暖かいし。こ  
れ、内側に毛布仕込んでいい感じだな。下でも使いたいくらいだ」

「はは、アーヴァンク（ビーバーの幻獣）の毛皮使ってるからな。  
高級品だぞ？」

「アーヴァンク？」

「アルビオンにいる、でっかいネズミみたいな奴さ。女好きで、可愛い子ちゃんの誘惑をエサに捕まえるんだよ」

「……なんか、マヌケな話だな、それ」

「わはは、たしかにな。」

乱獲はできないらしくてよう、年に一度狩猟を行う村では同時に美人コンテストを行うって話なんだ」

「へえ。一度見てみたいな」

「俺もだ、相棒。」

でな、そのコンテストに出る女どもは皆、必死になっているらしくてな。」

なにせ、村の女達は全員強制参加らしいんだ」

「珍しいな、そういうの。普通は推薦とか、立候補してやるもんじやねえの？」

「そう思うだろ？　だが、その村じゃ違うらしい。」



元々、昔の王様がアーヴァンクの狩りを行うために国中の美女を集めた村って伝承が在るくらいでな。

そりゃあ、美人が多いらしいんだが……

面白い事に女達はこぞって ”落選” を狙うんだそうだ」

「へ？ なんてまた？」

「なんでも、アーヴァンクの方もかなり目が肥えているらしくてな。そりゃ、何百年、もしかしたら千年以上も ”美女釣り” で狩りをおこなっているんだ。

だから、飽きているらしくてよう。で、たまにだがアーヴァンクに選ばれない娘つこが出るらしい」

「あー、そりゃ、シヨックだろうな」

「そりゃ、シヨックだろうよ！ 美人好きのネズミの幻獣ごときに、『お前は美人じゃない』って烙印押されるんだぜ？

だからかな、年々その村じゃ毛皮がとれなくなつてて。

そのマント、本来なら俺たち甲板員にやもつたいなくて着れない代物なんだぜ？」

「そうなのか。そんな高級品を用意してくれる殿下って、結構太っ腹なんだな」

「ああ、全くだ。」

もつとも、このフネにや他にも色々太っ腹な所があるんだが、どっちかと言えば”魔の空域”へ向かうからなんだろうけどな」

アロワはそう言って、ぶるぶると震えた。

それは寒さのためか、はたまた恐怖のためか。

「ええい、畜生！ 高級なネズ公の毛皮のマント羽織っても寒いぜくそ！」

「アロワ、お前もしかして寒がり？」

「うつせえ。マトウロは皆、寒がりなんだよ。筋肉ばかりが身に付いて、脂肪がつかないからな。」

「……そういやサイト、お前あんだけ力あんのに体細っせえよなあ。胸の辺りなんてほとんど筋肉ついてねえし」

「……俺、お前の前で服着替えたことないんだけど？」

「気にすんな相棒。それより、飲むか？　ここでなら多少の飲酒は許されてるんだ。暖まるぞ？」

アロワは何やらマントの中をまさぐり、わずかに腕をふるわせながら才人に少し小さめの酒瓶を差し出した。

才人は酒に頼るほど寒くはなく、いざとなればルーンを発動して”グリムニルの槍”の体を感じる寒さを断ち切る事もできたのだが

ここは彼の好意に甘えることにした。

ビンを受け取り、栓を抜いて傾けると喉にトロリとした液体が流れ込み、同時に胸が焼けるような熱が渦巻く。

熱は強い刺激を伴って、あまりに急激なその刺激に才人は思わずむせてしまい、酒瓶を落としそうになりながら咳き込んでしまった。

「わはは、すげえだろ？　水メイジが錬金魔法に使う触媒に水を混ぜただけだからな、それ」

「ケホ、よくそんなの、ゲホ、手に入ったな」

「フネに乗り込む船医は水メイジである事が結構あるしな。連中、お貴族様ではあるが、意外と話は通じるんだ。

陸のメイジは平民の事なんざ、歯牙にもかけねえが職業柄船医やつてるメイジは案外、頼み事を聞いてくれるのさ。

まあ、多少金はかかるが」

「へえ。このフネにも水メイジの船医が乗ってたりするのさ？」

「なんだ、お前、しらねえのか。ミス・ブラウ准尉がドクターやってんだよ」

「へ？ そうなのさ？」

「まったく、違うねえ。フネの上でいちやつける相手が居る奴つてのは。

ブラウ准尉は治癒の魔法は使えるが、船員の健康管理は知識が無くてできなくてな。

もっぱら、俺たち部員の怪我の治療をまかされた、船医の一人だよ。

当然士官様つてこつたな。多少男嫌いの気があるが、綺麗だし皆に人気あんだぜ？

……もつとも、このフネに乗り込んでいる女なんて、彼女しかいねえが」

「おい、ルイズの事忘れてないか？」

「ばっか、あの嬢ちゃんは別だろ？俺たちがお前さんの恋人をカウントしてもいいのかよ？」

アロワの正論に、才人は反論できず慥然として酒瓶を乱暴に差し出した。

対照的にしてゆったり顔のアロワは酒瓶を軽やかに受け取って、ぐいと一口酒をのむ。

熊のような甲板員は豪快なその仕草が示すとおり、あれほど強い酒を大量に喉に流し込んでからぶはあ！と息継ぎをした。

「くうじじじ！……やっぱり効くな、じね！」

「飲み過ぎじゃねえか？ 降りる時に足踏み外してもしらねえぞ？」

「大丈夫だつて。即死しなきゃ、天使のような准尉に診てもらえるんだ。願ったり叶ったりじゃねえか」

冗談とも本気ともとれる台詞を吐いて、アロハはガハハと笑う。

才人はそんな彼に半ば呆れながらも、分厚いマントに身を来るんで凍てつくが美しい景色に意識を向けた。

夕焼けの茜に染め上げられた雲海は何処までも美しく、そしてどこまでも広がっている。

アロワが見張っている方向では二つの月が太陽を追いかけるように昇ってきて、こちらは藍色の空を雲に写し込んでいた。

その光景は地上では決して見れるようなものではなく、不意に才人は下に降りてルイズと一緒にその光景を眺めていた気持ちに襲われてしまう。

アーヴァンクのマントは実に暖かく、刺すほどに冷たい風を受ける顔が心地よいほど体を温めていた。

才人はしばしの間、これからのことやこれまでのことについて思いを巡らせる。

アンドバリの指輪の奪還作戦。

” 魔の空域 ” に住まうとされる、魔物の正体。

ハルケギニアのこれからの ” 歴史 ” 。

学園に残してきた、友人達。

アンリエッタとウェールズの未来。

それぞれが、才人の感情をいろんな色でかき回し、薄くなりつつある才人の「一度目の人生」との差異を示していた。

そしてそのどれもが才人の過去の記憶を、まるで塗り重ねるように薄く、うっすらとぼやけさせていく。

自覚して才人はぶるりと一つ身震いをした。

なんだか、別の自分が今までの自分を浸食しているかのような錯覚を覚えていたからだ。

そこに不快感は無かったが、それでよしと思えぬ程には ” 前 ” に対して抱いていた拘りを捨てきれぬ才人であった。

そつえば、こここのところ夢を見ていないな。

昔の、妻であったルイズの、あの夢を。

ルイズを泣かさなくなったからだろうか。

はたまた、ルイズと無事恋人よ呼び合えるような仲になれたからだろうか。

ぼんやりと才人は考えながら、胸の内で一番おおきな、ルイズとのこれからについて想いを巡らし始めた。

辺りはすでに藍色の世界が広がりつつある。

そこで、才人ははっとする。

藍色の闇の向こう、太陽が未だ沈みきって居ないのに気がついたからだ。

否。

闇はうつすらと沈み行く太陽にかかり、その光をたしかに遮っている。

それは明らかな異変であった。

なにせ、闇の向こうにはいまだ茜色に輝く雲海が広がっていたからだ。

「アロワ！」



「サイト！」

アロワもその異変に気がついたのか、二人は同時に顔を見合わせた。間を置かず、アロワは監視台の手すりから身を乗り出して、下に向けて大声を張り出す。

しかし、その声は口からは出なかった。

彼の視界に ”ソレ” が出現した為である。

藍色の夜空というよりも、どす黒い雲のような闇がいつの間にか辺りに色濃く立ちこめるのと同時に、 ”ソレ” はどこからともなく出現した。

”ソレ” は天高く、まるで城の塔のような太さで ”麗しのアンリエッタ号” を取り囲んでいた。

頭は見えず、尾も見えない。

数は三。

上空側が尾なのか、雲の下側が頭なのか、はたまたその逆であるのかが全く分からないほど巨大な存在であった。

大きさだけで言えば、恐らくはかつて才人が戦った暴君よりも遙かに大きいだらう。

まるで天地を支える柱のような ”ソレ” は一つ、また一つと増えてゆき、それと共に辺りを覆う闇も濃くなる。

いや、闇だけではない。

生臭い、アンモニアに近いような異臭もあたりに立ちこめ始めた。

”ソレ” は生き物のようにうねって、徐々にフネへと近寄ってくる。

相変わらず頭がどちらにあるのか判別がつかないまま、その圧倒的な大きさにアロワおろか才人すら言葉を失っていた。

そして。

ガクン！ とフネが揺れた。

何かがフネの下に取り付いたらしい。

才人とアロワはマストから身を乗り出して下をみると、太い ”ソレ” がフネの底を押している姿がみえた。

瞬間、アロワが正気に返って悲鳴を上げた。

その声は、恐怖に震えて闇の空に消えてゆく。

才人も緊張した面持ちでどこか見覚えのある ”ソレ” を睨み、

記憶の糸を必死でたぐっていた。

なぜか、”ソレ”を知っているような気がしたからだ。

険しい顔で考え込む才人の隣で、アロワの叫びは続く。

今度は悲鳴ではなく、後悔と恐怖の入り交じった叫び声で。

「出た！！ ”魔の空域”の魔物だ！俺たちはスニソート・  
ビーク空域に到達したんだ！」



「はあ?! なによそれ?!」

ランプが灯された ” 麗しのアンリエッタ号 ” の士官用のサロン。  
ルイズは才人の言葉に驚いて、士官が集まる会議の席にもかかわら  
ずつい、大きな声を上げてしまった。

いや、ルイズだけではなく他の士官やウェールズですら、その言葉  
に目を丸くして驚いている。

ただ何名かの士官……主に事務員だけは才人の言葉にそういえば、  
などと呟いて、一定の納得はあったようだが

それでも才人のその言葉はにわかには信じがたいものであった。

才人がソレの正体に気がついたのは、黒雲が立ちこめるスニソート・ビーク空域にて謎の魔物に襲われてよりすぐのことだ。

そのあまりに巨大な柱のような姿に驚き、フネの底に取り付かれ、その正体に心当たりを思い浮かべながらも ”グリムニルの槍” で迎撃すべく

マスト・トップから甲板に飛び降りて、手近なものを槍の材料にしようとした時。

突如フネがガクン、と傾いて悲痛な叫び声がどこからか、下から聞こえて来た。

「か、風石が！ こいつ、風石の魔力を喰うぞ！」

「誰か！ 甲板員、下に降りてきてくれ！！ 化け物が船内に入り込んだ！」

悲鳴混じりの叫びに、才人は ”グリムニルの槍” を作るのを一端諦めて、フネの下へと下る階段目がけて駆け出した。

砲甲板よりも更に下のエリアは、フネを空へ浮かべるための魔具と風石が置かれており、滅多に甲板には上がってこないが

魔導機関部に所属する乗組員達が働いている。

悲鳴はその魔導機関部の部員である、マインワーカー掌石員達のものだった。

才人が現場である、風石の備蓄庫にたどりつくと、あの柱のような魔物の ” 先端 ” らしきものがフネの外殻を破ってきて進入し

ぶよぶよしたその体をつねらせて器用に風石を取り込み、船外に運び出している姿が見えた。

更に魔物は一体だけでなく、入れ替わりに風石の備蓄庫に進入して風石を運び出す魔物とは別に、メインマストに取り付けられ

現在 ” 麗しのアンリエッタ号 ” を空に浮かべている「浮き」の役割を果たす魔具にもソレは巻き付くようにとりついて

内部の風石の魔力を吸い出していたのだ。

幸い魔導機関ルームは広く、背にしたデルフリンガーを振るうには十分な広さが確保できたので才人はその姿を見るや

背の大剣を抜き放ち、一刀のもとに魔具に巻き付くソレを切り伏せる。

バツサリと切断されたソレは、白い切り口から血を流すでもなくアツサリと斬れ、根本の方は慌てて船外に退散したたものの

巻き付いた部分は依然魔具に取り付いたまま離れなかったが、しばらくするとポトリと音を立てて下に落ちるのだった。

それを見て、掌石員達が一斉に魔具に近寄り無事を確認すべくあちこちを調べはじめ、すぐに悲鳴に近い声を上げた。

「くそ！ 風石の魔力が殆ど喰われちゃってる！」

「ダメだ！ こっちもやられた！」

「不味いぞ！ 備蓄庫の風石が……」

掌石員達の悲痛な会話を聞いた瞬間、才人は事態の深刻さを察し脱兎のごとく備蓄庫の方へ駆けた。

備蓄庫の入り口では士官である プロダクタイ 機関士が杖を振り、懸命に風石を守ろうと魔法を撃っていたのだったが

ソレは意にも介さず入れ替わり立ち替わりに開けた大きな穴からや



つて来ては、風石を器用に運び去っていた。

「どいて！」

「な、なんだお前は！」

才人はルーンを輝かせ、機関士を押しつけながら矢のような速さで備蓄庫の中に飛び込み、うねるソレを先程したように

バツサリと切断してみせる。

船外から進入して来ていたソレは、やはり血を流すでもなくうねりながら自らが開けた大穴から外へ這い逃げて

やがてその姿を見せなくなった。

未だ警戒し続け剣を構える才人の後方ではワッと士官と部員達の歓声があがり、掌石員達が急いで魔物が開けた大穴から落ちぬよう

近くに散らばっていた風石を拾い集め始める。

才人は一瞬、危ないから離れているようにと口に出しかけたが、大穴からは黒い風が吹き込んで来るばかりであり

ソレの気配もすっかり消えていたので言葉を呑み込み、デルフリンガーを鞘に収める事にした。

周囲では備蓄庫から残った風石を掌石員達がせつせと運び出していて、むこうでは彼らを取り仕切る掌石長ナンバンと機関士が

被害の全容を調査して、顔を青くしていた。

才人かというと、先程切り落とした魔物の一部を見ながらソレの正体に確信し、何故こんな所にいるのかと内心首をかしげる。

「サイト！」

「ルイズ?! バカ、なんで此処に来たんだよ」

「それは後! はやく上がってきて! あんたの槍が必要なのよ！」

「なんかあったのか?!」

「魔物の本体がフネの上に現れたの！ ……恐ろしく大きな奴よ。  
このフネを丸呑みできる位に」

ルイズの言葉に才人は慌てて甲板に戻ろうとしたのだが、あることに気がついて側にいた機関士を呼び止めた。

フネのあちこちからはあの魔物が取り付いているのか、ギシギシと船体が軋む不気味な音を立てている。

呼び止められた機関士は、今それどころではないといった表情を浮かべはしたものの、魔物を撃退した才人を無碍にもできず

投げられた問いかけに耳を渋々傾けた。

「すみません、あの！ 風石、どれくらいやられました？！」

「……反対舷の備蓄庫はまだ無事だが、あつちは既に殆ど使っちゃまってるからな。正直、かなりやばい！ 浮かせるだけでも危うい！」

「げー…じゃあ……」

「何やってるのよ、サイト！ 早く！」

「あの！ じゃあ、じゃあですよ？！」

「その風石はメインマストの ” 浮き ” にもってけ！ …… ああ？ なんだよ、まだあるのか？ 今どんな状況かみりゃわかんたろ？！」

「これで最後ですから！ 今、もしこのフネを捕まえてる奴を撃退したら、どうなりますか？」

「……しばらくは飛べるだろうが、多分ゆっくりと落ちる。  
下は海だが、フネは翼が付いているから、直ぐに波で船体がイカレてそのまま海の藻屑……だろうな」

「ちょっと！ それって……」

「くそ……とにかく、上に上がろう！」

才人とルイズは機関士の言葉に息を飲みつつも、踵を返して甲板に向かって走った。

機関士の話が本当であるならば、迂闊に ” グリムニルの槍 ” は使えない。

かといって、このままでは ” 魔の空域 ” の魔物の餌食となってしまう。

どうすべきか判断は付かなかった二人であったが、とりあえずは甲板に出て事態の成り行きを確認することにしたのだった。

果たして甲板に出た才人とルイズが見た物とは。

辺りに一層濃く立ちこめる生臭い黒い霧のような雲の合間から、巨大な柱のような魔物の触手らしきモノが数本 ” 麗しのアンリエッタ号 ” に

絡みついており、その伸びてくる先には魔物の本体と思わしきソレが空一杯に広がっていたのだった。

ソレはまるで、下から間近に見上げるアルビオン浮遊大陸のようであり、おぞましい程ビッシリとイボのような突起物が生えて

黒い雲の合間からその姿を見たルイズは、思わず息を飲んで眉根を寄せた。

どうやらフネはその本体側に引き上げられて居るらしく、次の瞬間、空の中央に魔物の口らしき大きな黒い穴が出現して

乗組員達の悲鳴ごと、 ”麗しのアンリエッタ号” は魔物に呑み込まれてしまう。

その間、才人はどうすればよいか答えが出せず、ただただ、成り行きを見守ることしか出来なかった。

”グリムニルの槍” を投げれば撃退出来たかもしれないが、それだとフネは海の藻屑となってしまう。

最悪、ルイズを抱えて下に飛び降りる事も考えたが、ウェールズやフネに乗る者達を置いて逃げ出すことも出来ず、結局は魔物の為すがまま

”麗しのアンリエッタ号” ごと丸呑みにされた才人であった。

幸い、魔物は牙を持たず獲物を丸呑みする習性を持っているようで、一層濃く立ちこめる闇の中 ”麗しのアンリエッタ号” は 広い魔物の体内を明かりを灯しながらなんとか航行し、やがて胃袋と思わしき場所で航行用の風石の浮力が尽きて座礁してしまった。

一応はまだ幾ばくかの風石が残ってはいたものの、本格的に機関停止に陥ると翼があり、背の高いマストもあるフネは

その姿勢を維持できず倒れて二度と空に浮くことが出来なくなってしまう。

したがって、ウェールズは姿勢が制御出来る内に船底を地に付けてわざと座礁させたのだ。

魔物の胃袋は広く、おびただしい程のフネの残骸が散らばっており、さながらフネの墓場のようであった。

が、その光景は同時に魔物の胃が呑み込んだ物を消化するために強い酸等を分泌しないことを意味して

それだけはフネに乗る乗組員達の胸をなで下ろさせた。

しばらくして、絶望的な状況を打破すべく船員達が落ち着いた頃に、士官用サロンに士官達と共に才人とルイズが招集され

対策会議が開かれていたのだが。

その場で ” 魔の空域 ” の魔物の正体についての話題となった折、才人は心当たりを口にして皆の奇異な視線を集めていた。

「多分、間違いないと思うぞ、ルイズ」

「嘘おっしゃい！ こんな大きな ” タコ ” が、しかも空の上に居るなんて聞いたこともないわ！」

「確証はあるのかい？ サイト君」

「はい、殿下。俺の生まれた国ではタコを食べる習慣がありません。機関部で見た、風石をさらっていたあの触手は間違いなくタコのそれでした。」

「船長、自分もいいですか？ 自分は ”盾”<sup>バックラー</sup> 殿の所見には頷けません。

以前乗り込んでた下を奔る船で、遭難してしまった時、食うものが無くなって釣り上げたタコを捌いた経験があります。

言われてみればありゃ、確かにタコの足でした」

才人の発言に手を上げて、同調してみせたのは食料の調達等を担う<sup>パーサー</sup>事務員のジョンであった。

が、しかし。

一同は例え正体がそうであっても、タコが何故空の上、ああも巨大な姿でフネ……いや恐らくは風石を狙って襲うのか理解出来ず

うつむ、と考え込んでしまう。



「しかし。たとえば、魔物がタコであったとして、我々はこれからどうすべきかをまず考えねば。」

先に行った周辺の探索では、フネの残骸からは風石は見つかず脱出の目処も立ってはおりません」

「そうだな、ハル卿の言うとおりだ。魔物の正体はひとまず置いておこう。チーフ・パーサー事務長、残りの食料は何日もつ？」

「は。緊急配給体制に移行しておりますので、一月半はなんとか」

「そうか。チーフ・プロダクター機関長、フネの修理は？」

「現状では問題ありません。材料もそこらにいくらでも転がっていますし。」

船長、それよりも脱出策の提示を最優先してやってください。幸い、うちの船員にはそこらのフネを漁って

金目の物を探すバカはいやしませんが、その分周囲のフネの残骸は不安を煽っていますね」

「で、あろうな。しかし……」

「あろう」

ウェールズと士官達の会話に割り込んだのは、才人であった。

遠慮がちに手を上げて発言を求めるその顔に、一同の視線が集まる。

「ここから出るだけなら、多分大丈夫だと思います」

「なんですと!？ それは本当ですか ”盾”<sup>バックラー</sup> 殿?!」

「ええ。この下にフネが通れるだけの大穴を開ければ良いんじゃないでしょうか。それくらいなら俺に出来ると思います」

「それく、らい、ですか?」

「ええ、ミス・ブロウ。サイトならこともなげにやると思っわ」

才人の大言に、ルイズの隣に座っていたミス・ブロウが驚いたような顔をしてヒソリと主であるルイズに確認してきた。

ルイズは半ば我が事のように得意げになって、ニッコリと微笑み才人の言葉を肯定してみせる。

室内は才人の脱出案にざわめき、しばし色々な言葉が飛び交った。

が、ただし！ と才人が話しを続けると再び静寂は戻り、視線ももう一度才人へと集まる。

「ただし、です。このフネが再び航海出来るようになって居ることが条件だと思います。

さつき機関士の人に聞いたんですが、使える風石が残り少なくて浮くのも危ういとか。

下は海ですし、俺はよくわからないのですが、このフネだと波によつて翼とか壊されて沈んじゃうんですよね？」

「ああ、そうだ。サイト君の言うとおり空に行くフネは海に行く船と似てはいるけれど、機構がそもそも違うからね」

「ですから、まず風石の確保をなんとかしてからでないか。

穴を開けて出る、だけなら今すぐにも出来ますが、海に落ちて

沈んでは意味がないですから」

「うつつむ……」

「船長。ではこうしましょう。海兵をいくつかの班に分けて、風石の探索に当たらせるのです。」

周囲にあれだけフネの残骸が残っていれば、一隻位はまだ風石を残している物があるかもしれません」

「失礼します！」

ハル卿の話を遮って、突如サロンの扉が開かれた。

そこに血相を変えた掌帆長ポースンが立っており、彼の背後からは何やら怒号が飛び交って聞こえて来ている。

「何事だマルタ掌帆長?!」

「敵襲です！ それも、見たことも無いトカゲのような青い亜人がフネに這い上がってきてやす！」

言葉に一早く反応したのは才人であった。

才人はマルタ掌帆長の言葉を聞くや、ルーンを輝かせながら細い通路を走り室外へと飛び出て、デルフリンガーを抜き放ちながら辺りを伺った。

狭い甲板の上はかがり火に照らされて、その上を武装した甲板員と真っ青なトカゲの亜人が戦っている姿が見て取れる。

亜人は頭部がトカゲで、体も人のそれに近かったが体躯が熊のように大きく、全身に青い鱗がビッシリと覆われて

甲板員達が持つ短槍を掠めた位では、傷一つ負わせられないようだ。手には武器は持っていないかったが、その爪はまるで短刀のように鋭く長く、それを武器に襲いかかってくる姿はなんとも不気味であった。

トカゲの亜人達の数は少なかったが手強いようで、甲板員達は数名一組で組織的に迎撃をしているにもかかわらず、劣勢に陥りつつある。

「あぐ！」

「アロワ！」

抜いたデルフリンガーで直ぐには参戦せず、敵を居住区に入れぬようまず位置関係を把握していた才人の目の前で

戦っていたアロワがトカゲの亜人の鋭い爪に槍を折られ、肩口からその厚い胸にかけて大きな傷を負って倒れた。

才人は直ぐに斬りかからなかった己の判断ミスに舌打ちをしつつも、一層ルーンを輝かせてアロワにとどめを刺そうとするトカゲの亜人へと

一気に距離を詰めて手にした魔剣を横一文字に振るった。

同時に、金属を叩くような音がして、青いトカゲの亜人は真っ二つになりその場で崩れ落ちる。

才人はその様子など見向きもせず、さらに速度を上げて他の甲板員達と交戦しているトカゲの亜人を瞬きをする間に斬り伏せて回り

やがておっとり刀でルイズや士官達が居住区から出てくる頃には戦闘は終焉を迎えて、実にアツサリと甲板は静寂を取り戻していた。

「サイト?!」

「俺は大丈夫だ。粗方敵も排除しといた。それよりも、けが人を頼む！」

べっとデルフリンガーに付いた血を払いつつ、才人は駆け寄るルイズに手を上げて無事をアピールした後

続いて居住区に通じる扉から出てきたミス・ブロウを見つけて、倒れたアロワを指さす。

ミス・ブロウはその意味を素早く理解し、懐から杖を出しながら倒れ込んだアロワに駆け寄って ” 治癒 ” の魔法をかけ始めた。

アロワの他に傷を負った甲板員達は居るようだったが、幸い死者は出てはいないようだ。

才人達から少しはなれた場所では、いまだ少し浮き足立っている甲

板員達をトマソン砲長が的確に指示を飛ばし

いくつかの班を再編成して周囲の警戒に当たっている。

才人自身に声が掛からないのは、戦闘時はルイズの指揮下に入る旨ハル卿から伝えられているのだろう。

「こいつ……一体なんなのかしら。こんな亜人は見たこと無いわ」

才人の直ぐ側で、ルイズは真二つに斬られたトカゲの亜人の遺骸を見ながら呟く。

才人自身もこのような亜人は見たことも無く、なんで”魔の空域”の魔物の体内にこのような生物が居るのかと首をかしげた。

「おい、相棒」



「ん？ なんだデルフ」

「こいつら、”ブルーマン” だぜ」

「知ってんのか?!」

「ああ。以前どっかでやり合った記憶があんな。結構古い種でよつ、最近じゃとんと見なくなった連中だな」

「なんでそんなのがこんな所にいんのよ？」

「さあ、知らね。ただ言えるのは、こいつらが居るって事は ” 連中 ” が居るかもしれねえってことだな」

「連中？ どういう事だよ、ちゃんと説明してくれよデルフ」

「そう急かすなって相棒。別に勿体付けてるんじゃないやねえだろ？ 連中ってのはだな、このブルーマンを使役している……」

デルフがそう言いかけると突如ズン！ と地が揺れた。

甲板の上で様々な作業を行っている乗組員達もその振動を感知したようで、皆一様に顔を上げて辺りを見渡している。

もう一度、今度は少し近い位置でズン！ と船体が揺れた。

辺りを警戒する甲板員達は、皆手にしたたいまつを四方に掲げて、迫り来る ” ナニカ ” を探したそうと躍起になる。

更に、もう一度。

今度はかなり近い位置で地が揺れた。

周囲はブルーマンと呼ばれたトカゲの亜人達の死骸が臭うのか、はたまた魔物の体内に充満する黒い雲のような霧が臭うのか

生臭い臭いが充満している。

「こつちだ！ 3時の方向！！」

誰かが振動を起こしている主を発見したらしい。

甲板上にいた者達は皆、武器を、杖を構えて才人達が居る位置から外側を見やった。

奇遇にも ”ソレ” は才人が居る右舷の中央部に向けて闇の奥底から近寄ってきていたらしい。

やがてそれは、地響きを更に上げてその輪郭を現した。

その、あまりに巨大な姿に皆一様に息を飲む。

そこに、 ”麗しのアンリエッタ号” のメインマストの中程もある大きさの、一つ目の巨人が立っていた。

幻獣亜人が跋扈するハルケギニアにあってもその異様な姿に言葉を失うルイズと才人、そしてその場にいた全ての者は

等しく魔剣の言葉を耳にする事になる。

「やっぱり居たか。巨人族のゴグ・マゴグだ。相棒、連中は韻竜並に古い種族だから手強いぞ?」



「ついてえこい」

ゴグ・マゴグという巨人は、そう言って ”麗しのアンリエッタ号” を抱え上げ歩き始めた。

向かう先は彼が居を構える、フネを呑み込んだ魔物の ”二つ目の胃” だという。

”麗しのアンリエッタ号” はまるで嵐をやり過ごす為のように、全ての帆を畳み大砲も砲室内に引っ込めてワイヤーで固定されている。

甲板を忙しなく行き来していた乗組員たちも、今は皆船室に引っ込み激しい揺れと恐怖に耐えていた。

「きゃあ！ ちょっと！ もうすこしゆっくりと歩きなさいよ！」

「無理言つなよ、ルイズ。折角フネごと運んでくれてるのに」

「ん〜？ 何か言つたかあ？」

「何でもねえ！ 気にしないで前に進んでくれ！」

「はいよお」

遠雷のような巨人の声に、ルイズとただ二人、甲板に出ていた才人は大声で応じながら振り

落とされそうになる恋人の腰を抱き留める。ルイズは巨人が歩を進める度に小さな身体を激し

く上下させながら、しかしその度に強く才人に抱きしめられ満更でもない様子であった。

蒼い鱗を持つ、ブルーマンとデルフが呼んだトカゲの亜人達の襲撃後、彼らを使役して居るであろう巨人が現れた後。

”グリムニルの槍”を構えようとしていた才人に、巨人は意外にももう大丈夫だ、と恐ろしく大きな声で語りかけてきたのである。

ゴグ・マゴグはその後、元々使役していたブルーマン達が在る理由から支配を離れ、魔物が呑み込んだフネを襲うようになってしまったと語り、次いで、お前達が外へ出られるよう手助けをしてやると持ちかけてきたのだ。

申し出は果たして、異形の怪物を信頼できるかどうかなどの問題を孕みつつも、他に選択肢が見つからないウェールズはこれを承諾し、とりあえず一行は、ブルーマンが近付かないという彼の住処へと移動し、話をする運びとなったのである。

才人はその間、怯えに怯えている乗組員達に代わり、巨人に不審な点が無いか等を見張るために甲板に出て。

またルイズはそんな才人を心配して、彼に同行を申し出ていたのだった。

「いひゃい！ ひゃいと、ひたひゃんひゃつひゃ」

「……こんなに揺れてるのに喋るから舌噛むんだよ。ほら、舌をみせてみ？」

甲板上はゴグ・マゴグが一步踏み出す度に激しく揺れる。

遠目には（異様であるうが）巨人がフネをかかえ慎重に歩いているように見えるのだろうが、

実際はその巨体故歩幅も身体の上下幅も大きく、ゴグ・マゴグにと

って僅かな距離であつても

才人達にとつては揺れ幅は非常に大きく感じられるのだ。

幾度目かの苦情をゴグ・マゴグに出そうとしたルイズが、折悪く巨人がフネを抱え直した時

に口を開けてしまい舌をしこたま噛んでしまった。

才人はメインマストと己の身体をくくりつけたロープを握り、同じように縄をくくりつけて

いるルイズの腰に回した腕に力を更に入れて、苦悶を浮かべるその小さな顔をのぞき込む。

ルイズはそんな才人に目の端に涙を一粒ためながら無防備にも、ほわぁ、と口を開いて噛ん

でしまった舌を差し出してみせた。その柔らかでピンク色の舌は、端に赤く小さく血が滲んで、

才人は大丈夫、そんなに傷は深くない、と声を掛けようとする。

が、その刹那。

鼻先にルイズの吐息が掛かり、目を閉じ、舌を出して口を開ける彼女の姿がここの所色々と

”おあずけ” を喰らっていた使い魔には酷く艶めかしく見えて。何を想起させたのか、才人は思わず顔を背けてしまった。

「ひゃいと？」

「ご、ごめん。傷は小さかったから、後で塩水でゆすいどけば大丈夫だ、ルイズ」

「そう。ねえ、サイト」

「な、なに？」

「お願い。もうすこし、しっかり抱いてくれない？ ゆれっ……って、また舌噛んじゃいそう」

言葉は、使い魔を僅かに惑わせる。

が、躊躇も一瞬、細い腰に回した腕を更に力を込め、才人は主の

命令通りにしつかりとルイズを抱き止めた。

指示は謀つてのものであったか、ルイズはむふんと才人の胸に顔を埋めて、久しぶりに恋人の匂いを堪能する。

一方、才人の方もルイズの甘い体臭を間近にかぎながら、抱き止める柔らかな感触と先程の表情も相まって、不謹慎な感情に苛まれた。

考えてみれば、フネに乗り込んでからというものの、まともにルイズを抱きしめたりは出来なかつたのである。

無論、肉体関係の有無の話ではなく、所謂ハグという奴なのであったが、この所お互いの気持ちを確認かめ合い、何時 ” 間違い ” が起きてもおかしくはない状況下で、フネに乗り込む前は頻繁に抱きしめ合ったり、キスをしていた二人であったのだ。

当然、イチヤつく隙も余裕も限られた状況下、このように堂々と密着出来る機会など久々であつた為か。

「……サイト。当た、当たっててているわ」

「……ごめん」

「あ、あや、謝る事、ないと思う、わ？」

「バカ。私の方、が、はずかしい、わよ」

続く会話は甘く気まずく、なんとも白々しい物で。

この場にギーシュがマリコルヌが居れば、ファイヤーボールのいつでも飛んできそうな程、

二人は見る者にもどかしく不快な空気を醸し出していた。

幸い、外の様子を見ていたのは限られた士官達だけであり、遠目



には巨人に怯える主を庇う  
使い魔にしか見えなかった為、火球が飛んでくるような事は無かつたのだが。

「おおい、おまえら、オイラの目の前でイチャつくのはやめるよお」

抱えあげたフネの甲板上にいる、己の小指程の大きさの二人の様子を見ていた巨大な一つ目の巨人に大声で窘められ、以降二人は言葉少なくもそのまま抱き合っていたのであった。

「そんな……あんな、あんな戦い方を……それも魔法も使えない平民が……」

「ふふん。ミス・ブロウ、勘違いしてはダメよ？ サイトの力はあんな物じゃないわ」

「まさか！ ミス・ゼロ殿！ いくら彼が凄腕の剣士だとしても、あれ以上なんていくら何でも！」

「そのまさかよ、ミス・ブロウ」

ルイズはそう誇らしげに言っ胸を張り、むふう、と鼻を鳴らして見せた。

彼女の隣ではミス・ブロウが信じられぬといった表情を浮かべつつ、只一人で無数の青いト

カゲの亜人、ブルーマンの群れの進撃を押しとどめている少年の姿を必死に追う。

彼女達と才人は現在、  
”麗しのアンリエッタ号”  
を離れとある場所を目指していた。

とある場所、というのはいつ目の巨人ゴグ・マゴの住処ではなく、その先にあるフネを呑み込んだ魔物の”墨袋”だ。

その、”墨袋”の手前に至った三人は百に近い数のブルーマンの襲撃を受け、才人が一人で撃退している所である。

幸い四方を囲まれる前に襲撃を察知できた為か、才人は相手が左右に展開するよりも速く攻撃を開始できて数の不利すら物ともせず、確実にその数を減らしていく才人であった。

ただ、才人の攻撃は”グリムニルの槍”の投擲ではなく、デルフリンガーでの近接戦闘中心であった為か、僅かな数ではあったが才人の背後に抜ける事に成功した者が出て、彼らの標的であるルイズとミス・ブロウに襲いかからんと、幾人かのブルーマンが二人に殺到してしまう。

「ひゃっ！」

「ひゃう！ ちょ、こら！ サイト！ ちょっとは考えなさいよ！ 私達を呑み込んだ魔物まで殺すつもり?!」

「わりい！ っとと、この！」

「もう！ ……大丈夫？ ミス・ブロウ」

「は……はい。いま、のは……?」

「ん、サイトの”槍”よ。本当ならもおちよっと、派手に音が出るんだけどね、アレでも一応手加減してるつもりみたいんだけど、あいつ……」

悲鳴は、才人が思わず投擲してしまった槍の爆風によってのものだ。

”魔の空域” の魔物の体内に居る以上、迂闊に魔物を傷つける事は辞めておこうと決めていただけに、その破壊の跡はいつもの才人にしてみればかなり小規模な物であった。

ルイズは愚痴を吐きつつも、もう一度誇らしげに顔を綻ばせ、圧倒的な力を見せる己の使い魔を見詰める。

その表情は非常に自慢げであり、ミス・ブロウに才人の力を見せつける機会を得る事ができ嬉しくてたまらないといった様子だ。

故にか先程の才人への苦情や愚痴はどこかわざとらしく、常軌を逸している才人の力を前にして彼に毒づく事により、いかに才人と自分が親しいかをミス・ブロウにアピールしたい思惑の方がルイズには強くあった。

一方、戦闘が始まってよりずっと驚きっぱなしのミス・ブロウの表情は、そんなルイズのプライドを痛く満たし続け、今も目の前で示された ”グリムニルの槍” の力の一端に更なる驚愕を重ねる。

何せ、つい先程まで二人に襲いかかるうとしていたブルーマンは、跡形もなく消し飛んでいったのだから。

オークであれリザード・マンであれ、魔法も使えない平民が数匹の亜人を跡形もなく消し飛ばすなどまずあり得ない話であるのだ。

ミス・ブロウの自失に近い驚愕は当然と言えば当然であろう。間もなく才人とルイズには当たり前の、ミス・ブロウにとってはあり得ない戦闘はあっけなく終わり、三人は再び ”墨袋” に向かって歩き始める。

才人は驚き未だ呆然とするミス・ブロウと、才人のアラを見つけては何かとつつかり、しかし内情は甘えてくるルイズに少し苦笑いを浮かべつつも、周囲を警戒しつつ”目的”であるそれが何処にいるか、思考を巡らせた。

果たして思い出したのは一つ目の巨人の住居で語られた話である。ゴグ・マゴグの住まいは才人達の予想を遙かに超えたものであった。

幾つかあるという魔物の胃をまるまる一つ住処としているためか、扉などは無かったもののどうやって作ったのか巨大な調度品の数々が甲板に居た才人とルイズのみならず、フネの中で怯えていたクルー達にさえ感嘆の声を上げさせていたのである。

ちよつとした山ほどもありそうなテーブルに、小さな貴族の館一つがすっぽりと入りそうな程広いベッド。

どういった仕組みなのか、広い胃の中を燦々と照らす巨大なランプに誰がどうやって作ったのか、ページをめくる事すら出来そうにない大きな本。

目に映るすべてのものが巨人の持ち物であったので当然と言えば当然であるが、それでも非現実的な光景は才人達の目を奪っていた。

なにより……

「チ、チーフ！ あれだけ風石があれば……」

「うむ。フネを浮かべ航行するには必要十分な量だ。しかし、オフイサー・ベンノ。決めるのは船長だ」

とりあえず異形の巨人は害が無いと見た士官や乗組員達は、甲板

に恐る恐る出てゴグ・マゴグが取り出していたソレに息を飲む。

フネすら抱え上げるその大きな手のひらには、うずたかく風石が盛られていたからだ。

「して、ゴグ・マゴグ君。君が我々を助けてくれるかわりに頼みたい事とは一体なんだね？」

「かあんたんな話だあ。さっき話した、逃げ出した ”ブルー・キング” を見つけて、退治してくれればいいんだあ」

巨大なテーブルの上で、なんとか船内に残った風石で姿勢制御を行う ”麗しのアンリエッタ号” の舳先にて、ウェールズはううむと考え込む。

彼の直ぐ背後では才人が同じく難しそうな表情を浮かべて、その横顔をルイズは心配そうに見詰めるのであった。

巨人は ”麗しのアンリエッタ号” とその乗組員達を自宅へ招いた後、事の経緯を呆気なく、多少舌足らずであったが饒舌に語っていた。

彼の話によれば、元々アルビオンがまだ浮遊大陸となる以前からその地で暮らしていたらしい。

ある時、大陸が夥しい程の風石の魔力によって浮かび上がり始めた。

それこそが現在のアルビオン浮遊大陸の始まりであたのだが、やはり浮かび上がったばかり

の当時は大陸も不安定で高空に上がりすぎたり、大陸そのものが傾いたりして幾度となく大きな被害を出していた。

ゴグ・マゴグは運悪くもそんな大陸と共に上空へ浮かび上がってしまった古の種族の生き残

りで、そういつた災害から逃れる為偶々内海に入り込み、大陸と共に浮かび上がっていた ” 魔物 ” の体内へと居を移したのだという。

そう、 ” 魔の空域 ” の魔物とはゴグ・マゴグと同じく、古の世に生きていた、そして今

日のハルケギニアの海では割とポピュラーな海の魔物である、クラ―ケンだったのだ。

「おまえらは知らねえかもしれねえがあ、 ” こいつ ” は悪食でなあ。特に、プカプカと空に浮

いてるのが気に入ったのか、風石には目がねえんだあ」

「それでフネを……」

「んだあ。おいらとしてもお、 ” こいつ ” の体内で暮らす前から既にニンゲン達とは折り合い

が悪くてなあ。なにせ、浮き島は狭いのに、おいらこの図体だろう？」

浮島、というのはゴグ・マゴグにとってのアルビオン大陸の呼び名らしい。

巨人はそういつて、一つしかない目をウインクするようにパチリと一度瞑って見せた。

その不気味な様に交渉に当たっていたウェールズは思わず苦笑いを浮かべ、背後でマストの

影に隠れるように成り行きを見守っていた船員達からは思わず悲鳴が上がる。

「まああ、その点、ここは年々広くなっていくしい、おいらを追い払おうとするニンゲンもい

ないだろう？ だから、そういうわけでおいら、ここに住み着いたんだあ。ブルーマンどもと一緒になあ」

「ブルーマン？ そういえば、君は先程ブルー・キングを退治してくれって言うていたなあ？」

「ああ、そうだったあ。ブルー・キングってのは、ブルーマンから希に、何百年かに一度ごく希に生まれるブルーマンの王でなあ。あ、ブルーマンってのは、おいら達巨人族……といっても、おいら以外に巨人族が生き残ってるのはしらねえけどなあ。

……とにかく、ブルーマンってのは巨人族の僕として品種改良したりザード・マン（トカゲの亜人）でなんだあ。連中、繁殖力も強くて労働力にも、おいらの ” 食いもん ” にもなる優れものなんだぞう？」

「……して、なぜそのブルーマンが我々を？」

「だあかああ、ブルー・キングだあ。あれが生まれると、ブルーマンどもはおいらのいう事を聞かなくなるんだあ。だから、ブルー・キングが生まれたらすぐに食っちゃうんだけど、何

百年か何千年か前に居眠りしてた隙に生まれた奴が逃げ出してなあ。そのせいで、ブルーマンどもはみいんな、いなくなっちゃったんだあ。お陰でおいら、腹あ減って、腹あ減って……」

台詞と同時に、ぐるる、と大きな音が辺りに響いた。

ゴグ・マゴグが苦笑いを浮かべる様子から、どうやら彼の腹の虫の鳴き声のようだ。

そのすこし気恥ずかしげで不気味な笑みはどこか愛嬌も見え隠れして、他に選択肢も無かつ

た事もあり、ウェールズはやがて彼の申し出を承諾してブルー・キング討伐に乗り出す事となる。

「で、俺が討伐する事になったのはまあ、わかるけど、なにモルイズやミス・ブロウまで来る事は無かったんじゃないか？」

「バカ言わないでよ。あの巨人の話によれば、ブルー・キングって代替わりの為には人間の女の子に子供を産ませないとダメって話じゃない。そんな変態が私達目当てにいつ襲って来るか

もわからないのに、サイトと離れるなんていやよ！」

「はあ?! 俺今からそのブルー・キングが潜んでそうな所に潜り込むんだけど?!」

的確な才人のツツコミにルイズはうぬ、と一瞬眉根を寄せかけたが、何故かミス・ブロウの顔を一別してから才人の腕を取り歩いている方向へ引つ張りつつ、小声で語りかけてきた。

「だからこそよ。これはチャンスじゃない! ミス・ブロウにあんたの活躍を見せとけば、一緒の部屋で過ごせる要件をクリアするための証言が得られるでしょう!?!」

「なんでミス・ブロウなんだよ! 殿下は無理でも、他の士官でもよかつたろ?!」

「私はともかく、ミス・ブロウがあのままフネに残ってたならブルー・キングがそつちを襲おう

としてサイトと行き違つかもしれないじゃない。あの巨人だってどこまで信用出来るかわから



ないわ。それにどうせあんたに敵う奴なんていやしないんだし、側に居た方がずっと安全でしょ？」

才人はどこか納得が行かなかったものの、ルイズの言に一理あるような気がして思わず口を

つぐんだ。どちらかと言えばゴグ・マゴグからブルー・キングが逃がっている以上、巨人の元に居た方が安全であるのだが、確かにあの巨人を信用しルイズを残して行く事には気が引けたのも事実だったからだ。

何より、才人自身も男ばかりのムサイ寢床で寝るよりも、手を出す訳にはいかないとはいえず、美少女に抱きつかれながら眠りに就いた方がずっと良いのは確かであった。

『大丈夫よサイト。私はイザとなったら ”瞬間移動” で逃げる事が出来るわ。あんたはその分ミス・ブロウを守る事に専念だって出来るでしょ？ 心配する事なんてないのよ』

『んー。そりゃ、そうだけど……』  
『お願い、ね？』

いつもは強気で、時に優しい声を掛けてくる主人の、滅多に聞けない甘えた声。

声は才人の判断能力を一瞬ではあったが根こそぎ奪う。

その一瞬は特別な物ではなく、何気ない日常の中に幾度も才人に訪れる瞬間ではあったがこの時ばかりは決定的なミスとなった。

「きゃああ！ ミス・ゼロ！ ”盾”<sup>バックラー</sup> 殿！」

悲鳴に弾かれたように振り向いた二人が見た物は、何処に潜んでいたのかブルーマンが一匹

こちらに背を向けて、ミス・ブロウを担いで走り去る姿であった。

才人は先程背にしまったばかりのデルフリンガーを抜き放ち、左手を輝かせながら瞬時に距離

離を詰めて、躊躇無くミス・ブロウを連れ去ろうとするブルーマンを両断してみせる。

が、次の瞬間。

突如才人とミス・ブロウの二人とルイズの間に四方から壁がせり上がり、双方を分断してしまふ。

「サイト！ ミス・ブロウ！」

予想だにしなかった事態にルイズは焦った声を上げて、己と二人を別つ壁に駆け寄った。

ルイズには知る由はなかったが、両者がいた場所は丁度幾つかあるクラーケンの胃と食道の

境目で、噴門部がせり上がり壁を作り出していたのだ。

慌てて ”瞬間移動” を唱えようとルイズは杖を構えたが、不意に背後からなにやら蠢く物の  
気配を感じて、振り返る。

そこにはどこから沸いて出たのか、7体程のブルーマンが居て器用にもニタリと笑い舌なめ

ずりをして見せながら、ルイズの方へとにじり寄ってくるころであつた。

ルイズは壁の向こうの二人に気を残しつつも、目の前の脅威を排除すべく久しぶりに ”毒竜

の牙” を鞘から抜き放った。

歯を噛み、チャンスを目の前にどこか浮かれていた先程までの自分を呪いながら。

7-7:extra | episode / 美姫は空を征き、英雄は地を逝く（後書

幾つか練習作に手を出す      FONVにハマる      肺炎になる      私生活

が忙しくなるのコンボで

更新がかなり遅れました。

今回からちよっとレイアウトを変える実験。

主と繋がる才人の左目に映し出されるのは、迫り来る無数のブルーマンの姿であった。

彼らの目的は明らかに捕獲であるようで、その手には武器は無い。無論、見えている景色は才人が見る物でなく、突如現れた壁の向こうにいるルイズの物だ。

視界の先で差し出されてくる腕をかくぐり、白い短剣を突き立てようとして青い鱗に阻まれ、鋭いかぎ爪が生えた腕により捕まりそうになると、すんでの所で ”瞬間移動” を使い回避する。

「くそ！ まってるルイズ！」

才人は己の迂闊さを呪いつつも、その辺の壁に手を当て ”グリムニルの槍” を作り出そうとした。

凶悪な破壊力を持つ槍とて、全力で投擲しなければ、魔物の胃に一つ穴をあける程度で済むはずである。

今ルイズを襲っているトカゲの獣人の目的は、彼らの王が繁殖するためのメスを確保するためだ。

よって、ルイズの命が危ういわけではないが、それとは別に彼女の貞操が危うい事は間違いなく、当然、才人には想像すら許せる事ではない。

目に見えて強くなっていく焦りも、必然と言えた。

『ダメ！ サイトー！』

突如脳内に響いた声が、才人の壁に押し当てようとしていた手を  
ぴくりとさせ、動きを止めた。  
声の主は使い魔と心を繋げている主のものである。

「ダメ、つてルイズ?!」

「私達の任務はブルー・キングの討伐よ。幸い、こいつらは私を無  
傷で捕らえようとしているみたいだし、もうすこし抵抗したらワザ  
と捕まるわ」

「な?! 何バカな事言つてんだよお前?!」

「いい? サイト。あんたはそこでミス・ブロウと大人しくしてて  
それから、しばらくしたら私を追って来てちょうだい。この壁は生  
物の器官だから、多分時が経てば開くはずよ。間に合わないときは  
仕方無いけど、出来るだけ魔物を傷つけないようにしなくちゃ」

「バカ! もしもの時はどうすんだよ!」

ルイズのいきなりの提案に、大声で声を荒げる才人。

ミス・ブロウはそんな彼をいぶかしげるように見詰め、しかし状  
況としては心細いのか僅かに距離を置くのだった。

傍目には主と使い魔との会話は、只の気の触れた者の独り言にしか  
見えず、更には使い魔との念話も珍しくないハルケギニアの魔法使  
いにとつても、人の主と人の使い魔の念話は流石に思い至らないら  
しい。

故にか、ミス・ブロウは才人が錯乱したのではないかと疑ってし  
まったのである。

そんな、傍らの彼女の様子などお構いなしに、才人は必死にルイ  
ズを説得しようと試み続けていた。

が、アンリエッタの、トリスティンの代表として表向きは私情を挟  
む事を許さない主に対して、無茶しないよう説得する事はやはり叶  
わず、やがて”盾”<sup>バックライ</sup>は情けなく肩を落として頂垂れた。

「あの、ばつ、 ”盾”<sup>バックラー</sup> 殿？」

何かをわめいていたかと思えば、突如静かに肩を落とした才人にミス・ブロウは恐る恐る話しかける。

才人はギギギと音を立てて首を回し、濁った視線を彼女に向けて、少し引きつった笑いを浮かべた。

「…… 罠になるんだそうだ」

「ひ?! え? どういうことですか？」

「ルイズが罠になって、ブルー・キングの居場所を突き止めるつもりらしい」

「え? あの、どうして……」

すこし噛み合わない会話と雰囲気、才人はやっと我を完全に取り戻して、己とルイズの ”関係” をミス・ブロウに改めて説明する事にした。

勿論、虚無に関わる事はボカすつもりである。

なにせ、目の前の壁が再び開くまでにはそれなりの時間が必要かもしれないし、左目に見えていた、忙しく動く不快な視界は既に落ち着いてゆっくりと景色が流れていたからだ。

「そんな…… まさか、 ”盾”<sup>バックラー</sup> 殿がミス・ゼロの使い魔だなんて

……」

「まあ、珍しい事らしいけどね。ルイズの系統は国家機密に属するから言えないけど」

「では…… あれ程の力を持つ ”盾”<sup>バックラー</sup> 殿を使役するミス・ゼロの

力を持つてすれば、罠など買って出なくても」

「ミス・ブロウもそう思うだろ? まったく、アイツ何考えてんだ

よ……」

才人はそう愚痴を吐き、もう一度深く大きくため息をつく。

左目の視界は担ぎ上げられているのか、すこし高い場所を悠々と奥へ 恐らくは巨大なタコの魔物、クラーケンの ” 墨袋 ” の方へ向かって居るようだ。

” 墨袋 ” とは、読んで字の如く、タコやクラーケンが吐く墨を体内に溜めて置く器官である。

ゴグ・マゴグの話によれば、タコの墨はイカのソレとは違い、粘度は低いのだとか。

特に今才人達を体内に収めている程の極めつけの大きさであるクラーケンにもなると、吐く墨は黒雲となり辺り一体をまるで黒い霧のような墨が立ち込めるのだ。

それこそが、 ” 魔の空域 ” スニソート・ビーク空域の正体であり、この魔物を隠し続けていた存在なのである。

そんな、墨を溜め込む ” 墨袋 ” は正に隠れるには最適で、身体の高いゴグ・マゴグが魔物の体内で暮らすにあたり、唯一立ち入れない場所の為、恐らくはそこにブルー・キングが居るのだろうという話であった。

つまりは、少なくとも今の段階ではルイズが無理に囿になる必要は無かったとも言える。

無論、彼女がなぜそんな無茶をするのか、才人にはなんとなく解っているのだが。

「解っちゃいるけど、どうも落ち着かねえ。ミス・ブロウ」

「はい？」

「ルイズの身に何か起きそうになったら、俺、この壁ぶち抜いて先に行くつもりなんだけど」

「はあ……」

「その間、一人になると思うんだけど、自分の身は自分で守れそう？」



「い?!」

才人の問いは、ミス・ブロウにとって意外なものであったらしい。貴族であると同時に軍人であるためか、日頃はツンとした雰囲気と比較的冷静な印象を抱かせる彼女ではあったのだが、この時ばかりは目に見えて取り乱していた。

「そ、それは……確かに、自分は軍人ではありませんが、どちらかと言えばその、軍医志望といいますが、メイジとは言え、あんな数の巫人を一人で、その、えつと」

「うーむ、やっぱり無理、ですよ。じゃ、悪いけどその時が来たらミス・ブロウの身体を抱えて移動しますけれど、かまわない?」  
「な?! そ、そそそれもダメ! わた……自分は、身も心も、ウェールズ様に捧げるつもりです! 絶対、ダメ!」

ミス・ブロウは、軍人らしからぬ態度をとり続けながら、時折地を交えて才人の提案を二つとも否定した。

……この様子だと、軍に入って間もないのだろう。

まあ、王党派の主立った軍人は ”あの日” 殆ど討ち死にしていたみたいだし、生き残って ”しまった” 者達で再組織した軍だから、王党派の正規アルビオン軍にこういった子が所属するのも無理ない事かもしれない。

自分とルイズの事は棚に上げながら才人は、日頃の雰囲気とは裏腹に初々しくもウェールズへの想いをつい吐露するミス・ブロウに疲労感を覚え、もう一度深く更に大きくため息をつく。

さて、どうしたものか。

ルイズの身に少しでも異変を感じ取った時、問答無用で彼女を抱え上げ、ルーン全快でルイズの元に走るつもりではいる。

が、ミス・ブロウをわざわざ伴わせてのブルー・キング討伐は、ルイズの意向でもあるのだし、できれば、双方納得する形でこの話

をまとめたいと考える才人であった。

「でも、ミス・ブロウ。俺としては、どちらかを選んで貰わないと。他に方法があるなら話は別だけど……」

「う……」

才人の言葉に、ミス・ブロウは言葉を詰まらせる。

確かにこの場は彼女にとって、才人を先行させ単独行動を取るには危険すぎる場所だ。

先程のブルーマンの襲撃を思い出すに、オーク鬼と遜色無い戦闘力を持つていそうな彼らは集団で襲いかかって来る。

元々軍医志望であり、戦闘向きでないミス・ブロウ一人では間違はなく、ブルーマンの群れを退ける事は出来ないであろう。

では、やはり才人に抱え上げられての移動を選ぶしかないのか？

「バックラー盾” 殿、その、移動速度を自分にあわせて貰う訳には……」

「ダメ。もし間に合わなかったらどうすんだよ？」

「それはそうですが……そこをなんとかありませんか？」

なんとも、才人にとっては無茶な注文である。

そんなに俺に身体を触られるのが嫌か。

いくら貴族とは言え、軍人だろ？！

身体に触られる位、何だって言うんだよ！ 状況を考えてくれよ！

心中でそう一人ごちながら、才人はしばしうむと何か妙案が浮かばないか考え込んだ。

勿論、左目の視界の先でブルーマンにわざと連れ去られているルイズにも、先程とは違い今度は才人の方も念話を使って相談はしていたのだが。

主はミス・ブロウの不興を買い、折角の使い魔の力に対する好印象をフイにしたくないためか、なるべく彼女の要望に応えるようにと、

無茶な返答を返して来ていたのだった。

「あー！」

声はミス・ブロウの物。

それは何か妙案が浮かんだのではなく、彼女と才人が立つ魔物の胃と食道の境目が振動を始めたからであり、やがて二人が結論を出す間もなく、せり上がっていた噴門部が再び開いて道が開けたのだ。ミス・ブロウはもこれはいよいよ答えを出さねばと眉根を寄せ、開いていく噴門部を忌々しげに睨んでいたのだが、壁の向こうの景色を見るや、みるみる内にブルーの瞳に恐怖を宿らせ、一歩後ずさる。

また、才人もげんなりとした表情で開く噴門部を見ていたが、ミス・ブロウと同じ景色をその視界にいれた途端、デルフリンガーを抜き放ち、視線も鋭く手短にミス・ブロウに指示を出した。

「ミス・ブロウ！ 俺が道を開く！」 フライ（飛行） は使えるな？！」

「は、はい！」

「よし、じゃあ」 フライ（飛行） で俺の後をついてきてくれ！ 後は振り返るな！」

才人は手短に緊迫した声色でそう言うや、未だ開ききれていない噴門部の向こうへ勢いよく飛び込んだ。同時に、ミス・ブロウも慌てて”フライ（飛行）”の詠唱を始める。

果たして、噴門部の向こうには無数のブルーマンが待ち構えていたのだった。

それも、十や二十ではなく、数えるのもばからしくなる程大量に。恐らくは、ブルー・キングの”繁殖”の効率を上げるため、残るミス・ブロウを狙ってやって来ていたのだらう。

魔物を傷つけぬようにする為にあまり派手に立ち回る訳にはいかないとはいえ、才人は抜き放った長大なデルフリンガーを振るい、竜巻のような勢いでトカゲの亜人をなぎ払い、ひたすら前を目指す。ルイズと繋がった視界は未だ移動中で、危害を加えられそうな雰囲気ではないものの、ここで勢いに任せて合流するにはすこし早いと感じられた。

また、ミス・ブロウとどうやって移動するのか、という問題もあり、才人はとっさに目の前の敵を蹴散らしながら、一定の速度でルイズの後を追う事にしたのだった。

「ま、まって！」

「ミス！ 捕まりそうになったり、追いつかれそうになったら声を上げてくれ！」

「わ、わ、わかりまし……おいてかないで！」

何処にこれ程のブルーマンがいたのかと思う程、才人の行く手には次から次へと亜人が現れて、ミス・ブロウを奪わんと襲いかかって来るそれらを、まるで紙細工を薙ぐようにミス・ゼロの使い魔は剣を振るい、次々と敵を屠りながら駆けていく。

ただし、先程の戦闘とは違い剣は行く手を塞ぐ者のみを両断していたので、”フライ（飛行）” で必死に才人の後をついて行くミス・ブロウの後や横からは剣嵐から免れたブルーマン達が追いつがって来ていた。

”フライ（飛行）” 自体は本来もつと速度が出るのだが、先導する才人の速度に合わせざるを得ず、また、咄嗟の小回りも利かない。

故に、才人はルーンを全開にしての移動時にはついてはこれないと考え、先程は提案しなかったのだが、敵の集団に飛び込み、血路を開く程の速さで移動する分には問題は無いと言えよう。又、宙を舞うので足を取られ転ぶ事も無い。

「わあああ！ ばっ、 ”盾”<sup>バックラー</sup> 殿！ 早く！ お、追いつかれて  
しまいます！」

徐々に己に向けて伸びる青い手が多くなるのを感じたミス・ブ  
ロウは、たまらず才人にもっと早く進むよう声を上げる。

才人は舌打ちを一つして、 ”グリムニルの槍” で一掃できな  
いもどかしさを感じつつも、手近にいたブルーマンに右手を当てて  
短槍を作り出し、背後に迫るブルーマンの内最も近い者へと投擲し  
た。

短槍は目一杯加減をしての投擲である為か、爆裂する程の勢いや  
轟音は無かったものの、軌道上のブルーマン全てを巻き込みながら  
飛び続け、ミス・ブロウに僅かながら、恐怖以外の感情をかき立て  
させる。

「ミス！ 次、曲がるぞ！」

「ええ？！ 右ですか？！ 左ですか！？」

「右！ あそこ！」

才人はほんの少し前進する速度を弱めながら、ミス・ブロウに指  
示を飛ばした。

その先にルイズの視線を辿った折に確認した、唯一の分かれ道が  
あり、 ”フライ（飛行）” で自分の後を追う彼女が確実にそち  
らへ曲がれるよう、気を利かせたのだ。

ミス・ブロウはそんな才人の心遣いに気がつく余裕もないまま、  
進行方向の先、右手に今までとは違い少し狭く天井も低い道を認め  
て、はい、と声をあげる。

あの胃の入り口からその分岐点まではかなりの距離があつた為か、  
その時には流石に前方にはブルーマンの姿は無く、替わりに背後か  
らは夥しい数の亜人が迫り来ていた。

「曲がったら ” ウォーター・シールド ” で通路に蓋をしてくれ  
！」  
「わ、わかりました！」

二人は短く会話を交わし、背後に迫る亜人から逃れるように進行方向から右にそれた枝道へと飛び込む。

背後に迫る亜人との距離はそれ程開いてもなかったが、ミス・ بروウが ” ウォーター・シールド ” を詠唱するには十分で、程なくすこし狭めの通路全体に水の塊が出現し、蓋をするように通路を塞いだ。

「……ふう。まさか、こんなに居るとはな」

「は、い……あの、 ” 盾 ” <sup>バックラー</sup> 殿」

「ん？」

「少し、休んでも、いいで、しょうか？ ” フライ（飛行） ”

に、これだけ大きな ” ウォーター・シールド ” と、立て続け、  
だったので……」

肩で息をしながら、すっかり弱気な調子で休憩を訴えるミス・ بروウに、才人は苦笑いを浮かべた。

冷静になって考えてみれば、今の状況は熟練の魔法使いであつてもかなり危険な状況である。

才人自身としては切り抜けられたのは ” 当たり前 ” であるのだが、ミス・ بروウにしてみれば薄氷の上を歩く心地での突破であつたのだ。

加えて、実戦経験が乏しい分、精神的負担は想像以上に大きかつたのだらう。

故に、本来の彼女の實力であればこれくらいの魔法ではへばつたりはしないのであろうが、状況が必要以上に彼女を疲労させていた

のだった。

「ああ、いいよ。ルイズの方もまだ特に動きは無いようだし。俺が見張ってるから、その辺で休んでなよ」

「すいま、せん。」 ウォーター・シールド” は外に居るブルーマンが居なくなったら、解除します」

ミス・ブロウはそう言うや、へたりと腰を砕けさせて、その場に座り込んでしまった。

一方、才人は息一つ切らせもせず、デルフリンガーを鞘に収めつつも、未だ透明な水の壁の向こうでなんとか突破しようとする亜人達を睨む。

が、流石に魔法の壁を突破する事ができないと判断したのか、ブルーマンは次第にその姿を減らし、やがては全て居なくなってしまった。

「もういいかな。ミス・ブロウ。」 ウォーター・シールド” を解除してもいいと思う。もし、またやって来たら俺が食い止めるから、その時はもう一度 ” ウォーター・シールド” を張ってくれ」  
「は、はい」

「で、このまま少し休んだら奥に向かおう。ルイズの方は……どうやらあいつを担いでるブルーマンは歩いて移動してるみたいだ。これなら直ぐにでも追いつけ……」

言葉は最後まで続かない。

ミス・ブロウが ” ウォーター・シールド” を解除し、ばしや！ と大量の水が地に落ちる音がすると同時に、才人は声を荒げた。

「ルイズ！」

突然の大声に、ミス・ブロウは地面にへたり込んだまま、肩を跳ね上げて驚く。

見上げた才人の表情は厳しく、焦りさえ色濃く伺える。

「どうしたんですか？　もしや、ミス・ゼロの身に何か?!」

「……わからない。突然、”繋がっていた”　視界が真っ暗に…

…」

才人はその言葉を返して、今度は念話で恋人の名をもう一度呼ぶ。

『ルイズ！　どうした！？　何があった?!』

『大丈夫よ、サイト。どうやら”墨袋”　の中に入ったみたい』

『直ぐ行く。流石にそんな闇の中じゃブルーキング所じゃねえだろ?』

焦る程真っ暗なルイズの視界とは裏腹に、しっかりとした調子で返事が返ってきて才人は胸をなで下ろしつつ、やんわりとルイズに囷を辞めるよう声を掛けた。

使い魔の提案にルイズはしばし感情と道理をせめぎ合わせ、声に出してか、それとも、思考の中だけなのか、うーと唸る。

間を置いて出た答えは、彼女にしてはよく我慢でいたものであった。

『うっ……それもそうね。合流するにもできないだろうし……でも、急がなくてもいいわ。入り口はわかる?』

『ああ。その少し手前まで移動してる。今、ミス・ブロウがへばってるから休憩中だけ』

『じゃあ、そこでまっつて。頃合いを見てそっちに移動するわ』

『どっやって?　そんな闇の中……』



『今なら、”墨袋”の入り口からそう離れてないだろうし、”瞬間移動”で一気に外に出られるわよ。こっちもあんたの視界からミス・ブロウの様子が見えてるけど、もう少し休ませてあげた方が良いと思うから、私の方からそっちに向かうわ』

『大丈夫か？』

『ん。そこから”墨袋”まではブルーマンはいなかったし。外に出たらそこまで歩くわ。精神力を温存しときたいしね』

『気を付けるよ？』

『うん』

最後の返事は、才人にとってとびきり甘い声に聞こえた。

そこに、日頃彼女が見せまいとしている不安や、あからさまな甘えといった感情を感じ取れたからだ。

会話の終わりに聞こえた、只一言の返事ではあったが、脳裏に響いた甘えるような声は才人の心を落ち着かせる。

「ごめん、ミス・ブロウ。とりあえず、ルイズは無事だったよ。俺の」

程なく、刹那の夢想から我に帰った才人は、座り込むミス・ブロウに何があったかを説明しようとすこしバツが悪そうに声をかけた。しかし、伝説の使い魔は言葉を詰まらせ、替わりにすん、とルイズがたまにするように、鼻から軽いため息を一つ抜く。

ミス・ブロウが座り込んだ格好のまま、極度の緊張と疲労からか眠ってしまったからだ。

「やれやれ。どうしてこう、女の子に振り回されるのかな、俺。情けねえ」

才人はそうごちて、少し迷った後、彼女の隣に腰を下ろしそのま

ま主人が戻って来るのを待つ事にしたのだった。

ケイト・ブロウはニューカッスル城陥落の様を、脱出するフネの甲板で見っていた。

ルイズと才人がアンリエッタの手紙をウェールズ皇太子から受け取る為、白の国アルビオンに赴いた時の事である。

軍人であった彼女の父と母は、忠誠と誇りを胸に最後まで戦って城と運命を共にした。

遠く砲撃の音と立ち登る黒煙は、ケイトの胸に敗北の屈辱と両親の死を強く刻む。

彼女はその宝石のようなブルーの瞳から幾筋も涙を溢れさせ、強く黒煙を上げる城を無言の内に睨み、やがて誓いと共に自慢であった長い明るい金の髪へ短剣を押し当て、バツサリと切り取ってしまった。

その手からするりと落ちる髪の毛は、甲板上に落ちながらも風に散らされ、キラキラと煌めきつつ雲海に飛び去っていく。

決意は復讐と憎悪に彩られ、何より力無き己の不甲斐なさにか弱いレディーであった彼女を変える。

そんなケイトを乗せたフネはその後、幾つかの港を経由してゲルマニアの港街シュトランドヤーデに碇を降ろし、脱出した者達はそこで散り散りとなった。

ある者はトリステインやゲルマニアの親族を頼り、またある者はいつかニューカッスル城を取り戻さんと、城を脱出し恥を忍びフネに合流したウェールズ皇太子の麾下に集う。

ケイトは後者の方で、しかし、ウェールズがゲルマニア西方伯の

支援の下、レコン・キスタ相手にゲリラ的な私掠を行う事には当初否定的であった。

いや、むしろウェールズ皇太子本人に否定的であったと言った方が正確なのだろう。

両親や仲の良かった同年代の友人達は、いや病に冒された老齢の国王でさえ、城で最後まで立派に戦い、誇りと忠誠を貫いて散つていった。

なのに、何故、このお方はのうのと生きて居られるのか。

想いは彼女に限らず、誇りを重んじる貴族としては至極当然である。

ぶつけるべき相手がある怒りはやがて、手の届かぬ敵の替わりに恥辱の皇太子へと向かっていく。

それはケイトに限った話ではなく、同じように不本意ながら命を捨てた者達も同様であった。

ある時、ワインや食料を運んでいた神聖アルビオン共和国の補給艦を私掠し、久々に宴が催された折。

何かのキツカケでケイトは身分を忘れ、ウェールズに食ってかかった事があった。

酒の席とはいえ、天地程も身分違いである彼女の行為は、仮にも主君に対して行って良い物ではない。

同時に、ケイトが口にした呪詛のような非難は、その場にいた生き残りの者達にとっては皆胸のどこかにある物でもあり、だれも彼女を止める事は無かった。

そんな彼女の不敬に、ウェールズは怒りも宥めもせず、ただじつと聞き続けて。

やがて、堰を切ったかのように泣きながら想いを叩き付け終えた彼女に、皇太子は胸の内を吐露した。

「ブロウ准尉。君の言は最もだ。私は貴族の、アルビオン王家の誇りを踏みにじり、のうのと生き存えている卑怯者だ。だが、

これだけは知って欲しい。私は命が惜しいんじゃない。無能とそしりを受け、後指を差され、無様に生きているのは、ニューカッスル城で、数多の戦場で王党派の貴族として散っていった者達の無念を晴らす為だ。

あの、恥知らずで不忠な貴族派の者達を打倒するためならば、命だけでなく、名誉も、誇りも全て差し出そう。

ブロウ准尉。

もし、君が少しでも私の言を信じられぬと思うならば、遠慮は要らない。君の杖を私に向け、この命を絶ちニューカッスルで散った君のご両親に捧げたまえ。君にその権利を与えよう」

静かに語った皇太子の言葉は、ケイトだけでなく、その場に居る全ての者に語りかけるかのように響いた。

ウェールズの落ち着いた言葉に、激高したケイトは勢いに任せて腰の杖を抜いて、先を震えさせながら主君へと向ける。

同時に、側に居たハル卿が血相を変えて杖を抜きかけたが、それをウェールズ自身が制してじっとケイトの青い瞳を見つめ、柔和に笑ってみせる。

痛い程の沈黙が沈む場に、ケイトの、鼻を嚙りながらの荒い呼吸だけが響き、やがて。

からん、と乾いた音と共に彼女は杖を取り落としその場に崩れ落ちて、まるで幼子のように声をあげて泣いたのである。

それが、才人達と会う少し前、彼女の転機となった出来事。

「で、結局その次の日から罰として1月程、私掠に使っていたフネの便所掃除をさせられました。勿論、士官用のみならず、部員のトイレも」

「うへえ……よく殿下が女性にそんなきつたねえ事させたもんだね」

「いや。ウェールズ様ではなく、チーフの発案でした」

「あー、ハル卿かあ。あの爺さん、堅物だもんな」

僅かな微睡みの後、ミス・ブロウはすぐに目を覚ましていた。

が、やはりそれまでの出来事はかなり精神的に負担が大きかったのか、直ぐには動ける状態までには回復せず、才人の判断でそのま  
まルイズの到着を待つ事にして、なんとなく他愛ない会話に興じて  
いたのである。

通路を塞いでいた彼女の ” ウォーター・シールド ” は既に無  
く、今ブルーマンの襲撃に遭えば少々困った事になるであろうが、  
幸い亜人が姿を表す気配は無い。

「所で ” 盾 ” <sup>バックラー</sup> 殿。貴殿の出自は一体どこなのでしょう？」

「ん？ 出自って……なんで？」

「その……貴殿の剣技、体術は正直な感想として、並のメイジでは  
太刀打ち出来ない程の物かと。とてもそこらにいる平民になせる業  
ではありますまい」

「いやあ、それ程でも……はは、そう正面から言われると照れるな」

「ご謙遜を。 ” 盾 ” <sup>バックラー</sup> 殿、貴殿はミス・ゼロに召喚される前はさ  
ぞ、名の通った ” メイジ殺し ” だとお見受けしているのですが、  
どこの国の出なのですか？」

打ち解けて来たからか、ミス・ブロウは己の過去の、ほんの一部  
を話したのだから次は貴方が、とばかりに彼女には少し珍しく才人  
へ質問を投げかけてきた。

問いかけは才人を一瞬悩ませる。

刹那の後、結局彼は地球ではなく、東方の出身だと答える事にし  
た。

一応、ルイズと共に詳しい素性は国家機密扱いであったからだ。

「東方、ですか」

「ああ。こっちの言葉でロバ・アル・カリイエって所」

「そんな遠くから！」

「うん、まあ。だからさ、こっちじゃ俺の名は別に通ってないよ」

そう言つて才人はすこし気恥ずかしそうに頭を掻いて、照れたように笑つた。

その雰囲気は落ち着いていて柔和で、頼りなくはあつたが見る者をどこか落ち着かせるような物であり、ミス・ブロウも釣られてまあ、と頬を緩ませる。

しかし、才人の解答自体は納得出来なかつたのか、続けてそんな事はないと否定し、きちんと名を聞かせて貰えないだろうかともう一つ質問を重ねるのであつた。

勿論、ミス・ブロウはウェールズやルイズ、フネのクルー達が一  
「ジェント」盾<sup>バックラー</sup>の事を「サイト」と呼んでいる事は知っている。

この場合、彼女が聞かせて欲しいと言っている名とは、才人のフルネームないし、通り名の事だ。

彼女は才人の实力を見て、きっと有名な傭兵かメイジ殺しに間違いない、と心中で断じているのである。

青い瞳の奥を好奇心で輝かせ、才人の口から己が知る幾人かの有名な「メイジ殺し」の名が出てくるのを期待して返答を待った。

「まあ、名前位ならいいか。今更だけどさ、俺、平賀才人つて言うんだ。俺の国じゃ姓が先に来るから、家名がヒラガで、名前がサイトね」

「ヒリ」

「ヒラガ！ ヒ・ラ・ガ！」

「失礼しました。ヒラガ・サイト、ですか」

ハルケギニアの人間には何故か間違つて発音される名字に、才人は素早く反応して恐らくはそれまでの自己紹介の中では最も速く訂

正させる事に成功する。

そんな才人のすこし必死な剣幕にミス・ブロウは面食らいつつも、その名に心当たりは無く、いよいよ目の前の強力な平民使い魔に好奇心を募らせた。

だがそんな好奇心も、先程までの才人の戦いぶりを反芻していくにつれて徐々に小さくなっていく。

”麗しのアンリエッタ号” に乗り込んできたトリステインの援軍は、ただ二人。

数の上では援軍と呼ぶにはあまりにも少なく、頼りなさげな若い二人で、内心ではトリステインはアルビオン王家の正統を見捨て、形の上だけでの援助だと思っていた。

それがどうだ。

バックラー

”盾” というエージェントネームを持つ、ヒラガ・サイトと名

乗りもした少年の方は、魔法も使わず 錬金のような事をしていたが 剣術のみで夥しい数の亜人をいとも容易く屠って見せた。

更には彼の上官であり、主である ”ミス・ゼロ” は、自分よりも年下であるにもかかわらず、あっさりと己を囿にする大胆な作戦を決行し、しかしそれが完遂出来そうにないとわかるや、単独で敵地を引き返してくる程の胆力と力量を持っている。

恐らくは、あれ程の力を持つヒラガ・サイトという少年を使い魔として従える彼女なのだから、本来は自分の想像を遙かに超えたメイジなのであろう。

よくよく考えてみれば、このような状況下、あれ程の、それも得体の知れない相手によくそんな事が出来たものだ。

しかも、敵の目的は……女の身体であるというのに。  
自分だったらとてもあんな真似は……

いや。

例え手練れの戦闘メイジであっても、 ”こう” は上手くはいかない。

そうだ。軍人になり立ての自分と彼らとでは、潜ってきた修羅場



がそもそも違うのだと思う。

だから、だから、気にする事は無いというのは理解出来る、の、だけでも。

「どうした？ ミス・ブロウ。急にうずくまって……もしかしてどつか怪我してたとか?!」

才人はそれまで見せていた僅かな笑顔を急に消して、己の肩を抱きかかえるように小さく蹲ったミス・ブロウに慌てた調子で声を掛けた。

ハルケギニアの亜人は程度に差があれど、毒を使用する事がよくある。

ブルーマンのように、獣の割合が大きな種になるとその爪や牙から毒を分泌することは珍しくはない。

もしま、先程の乱戦の中、僅かに引つかかれてもしたのだろうか？  
才人の心配は当然であった。

しかし、真実は。

「いえ。その、自分が情けなくなってしまうって……」

消え入るようにミス・ブロウは答えて、顔をスッポリと腕の中に隠し、それから間もなく鼻を嚙り始めた。

悔しかったのだ。

力無き己が。

恥ずかしかったのだ。

恐怖を覚えた心が。

あの時、ウエールズ殿下の笑顔に心奪われ、忠誠を誓い、命を投げ出しても惜しくはないと誓ったのに。

二人に万一の事があってはと、水メイジの自分が指名され、主君について行くように言われたのだと思っていたのに。

真実は、多分違う。

自分は ” 守られていた ” のだ。

巨人の言葉はどこまで信じられるかわからない。

ただ、ハッキリしているのはあのおぞましい亜人は女の身である自分やミス・ゼロを狙っているという事。

故に、皇太子殿下はこの二人についていく事を命じた。

なぜならば、この二人の側に居る事こそが、今の状況下で一番安全だからだ。

そう。

二人に万一の事があつては、というのは嘘だ。

甘い、あの方らしい優しい嘘なのだ。

この二人に ” 万一 ” などあり得ない。

彼らの実力ならば、その気になれば何時でもこの魔物の体を破つて外へ出て行けるのだろう。

それに引き替え、自分は。

迫り来る敵の数に動揺し、伸びてくるあの腕に恐怖し、僅かな時

間 ” フライ ” と ” ウォーター・シールド ” を唱えただけで、

立てぬ程へばつてしまつとは。

なんて、惨めなんだろう。

比べる事は無意味であるとはわかっていても、ミス・ブロウはそうせずには居られず、結果悔し涙を流す。

傍らに座る才人はそんな彼女の心の機微が解るはずもなく、途方にくれながらも言葉を探した。

「俺、さ。初めて戦った時、ドットメイジの奴に腕の骨を折られるわ、アバラ折られるわでさ」

才人は随分昔の事を思い出しながら、隣で泣くミス・ブロウでなく天井を見上げた。

台詞に彼女は何の反応も見せず、ただ、ぐず、と鼻をすすする音だ

けがする。

「すっげえ怖くて。でも、意地張ってさ。まあ、ルイズに貰った力でなんとか勝てただけど、その後も調子に乗ったり、ズタボロにされたりの連続で。自分が情けないって気持ちは、よくわかるつもりなんだけどさ。その、なんて言うか」

そこで才人は一端台詞を切って、上手く言葉に出来そうにない思考を整理した。

何となくではあるが、自分が言っている事はミス・ブロウの自分が情けないと思う心に沿っているような気がして、ちゃんと伝えたかったからだ。

「参考になるかわかんねえけどさ。自分が情けないって思う時は、いつこ、成長したって事なんだと思うぜ？」

「成長、ですか？」

ミス・ブロウは顔を埋めたまま、少し鼻声でそう聞き返して来た。声は小さかった物の、凜としたいつもの彼女の雰囲気を払拭してしまう程には振るえてはいない。

「ああ。情けない、って思う事は今までの自分じゃダメだっていう現実を知ったって事だろ？ そっじゃねえと、そうは思わないだろうし。だからさ、そういうの、チャンスなんだと思うよ」

「チャンス……」

「そ。死んだワケじゃないんだ、次から少しずつ頑張ればいいじゃないか。誇りとか自信とかはその後についてくるもんだと俺は思う。殿下だって、恥を忍び誇りを投げ捨ててまで戦ってるんだしさ。その部下のミス・ブロウが意地見せないでどうするんだよ。な？」

ウェールズを例に出され、ミス・ブロウは思わず顔を上げ才人をみつめた。

そうだ。

殿下も、今の自分とは比較にならぬ程屈辱を心に秘めて、それについて圧倒的な戦力の差が在りながらも諦めず、戦っておられるではないか。

そう考えると、尚己が矮小で情けなく感じられ、ミス・ブロウは才人を見詰めたまま、表情を崩しその青い瞳から再び大粒の涙を流し始めてしまった。

軍人とは言え、すこし前までは年頃の貴族の娘として生活していたのだ。

言葉や生活は軍人然として鍛えられているのかもしれないが、やはり根の所は未だ娘の部分が大半を埋めているのである。

才人はそんな涙でくしゃくしゃとなった彼女に、涙を流すルイズにいつもやるように歯を剥いて二力と屈託無く笑って見せた。

笑みは照れ隠しであったが、ミス・ブロウは釣られて同じように笑ってしまい、それでも涙は止まらず。

「もう少しだけ、こうさせて下さい」

そう言つて、ミス・ブロウは両膝を立てて地に座り込んだ姿勢のまま、再び顔を伏せてしまったのだ。

その隣で困つたように頬を掻く才人であったが、ミス・ブロウは先程の才人の言葉に気持ち落ち着かせることが出来たのである。彼女なりの照れ隠しなのか、年頃の男子がじゃれるように腕を伸ばして、すこし離れた位置に座る才人の脇腹をちよいと突いて見せた。

彼女の行為の意味する所を感じ取った才人は、なんだよ、とすこし嬉しそうにに応じて、同じようにちよい、とミス・ブロウの脇腹を突く。

ミス・ブロウはすかさず才人の脇腹に反撃を返して、応酬はやがて速度を上げ、二人は脇腹に刺さる相手の手刀のこそばゆさに声を上げて笑い出してしまった。

「くあ！ ちょ、今2回突いたな?!」

「今のでおあいこですよ、”盾”<sup>バックラー</sup>殿」

「うそつけ！ ミス・ブロウから突いてきたんだから……」

「こういう時は、レディーに勝ちを譲るものです」

「きつたねえ……。ま、いいか。なあ、ミス・ブロウ」

「はい？」

「俺の事、サイトでいいよ。フネで”盾”<sup>バックラー</sup>って呼ぶ人、殆ど居ないしさ」

「しかし、トリステインのエージェントの方にそれは……」

「いいって。仲間には名前で呼んで欲しいしな。それに」

「それに？」

「人前では最後まで俺の事”盾”<sup>バックラー</sup>殿って呼びそうなハル卿より先にミス・ブロウに名前呼ばれなかったら、いよいよ俺、冴えない男だなんて甲板員<sup>マトロ</sup>の皆に笑われちゃう」

才人のおどけた物言いに、ミス・ブロウは想像して顔に涙の跡を残しながらも思わず吹き出してしまった。

ハル卿としてはある程度才人の素性を知る為、乗組員の前でなければ既に才人の事をエージェントネームでは呼んでいなかったのだが。

そんな事は知る由も無いミス・ブロウは、確かにいかにもお堅い軍人であるハル卿よりも後に打ち解けるのは、嫌っているか、それとも自分が彼以上に硬い人間であると思われるであろうと想像し、すこしだけ今までの態度を変える事にした。

「……では、自分の事もケイトと」

「わかった、ミス・ケイト」

「あ、呼び捨てでも大丈夫です、サイト殿」

「そっか。じゃ、俺の方も呼び捨てでいいよ。ま、改めてよろしくな」

「はい、こちらこそ。そろそろ、行きましようか。私の方は大分回復してきました」

ケイトはそう言って、すくと立ち上がって見せる。

その仕草に疲労は見えず、いつもの彼女らしいキビキビとした動きであった。

どうやら、彼女なりになにか一つ吹っ切れたらしい。

そう考えながら才人は立ち上がるうとして、脇腹に軽く鋭く何かが刺さり身体をくねらせた。

どうやらケイトがまだ、ふざけて手刀を作り才人の脇腹を突いたらしい。

交差する視線の先、彼女の青い瞳が悪戯っぽく照れを隠して輝いている。

「ケイト！ この！」

才人は、しかし今度は彼女に勝ちを譲らず。

甲板員の仲間にするように、肩に腕を回して一方の手で拳を作り、至近距離で脇をぐりぐりと押すのだった。

無論下心はなく、一連のやり取りから錯覚したのか、男友達や戦友にするような感覚で。

「ひゃあ！ ちょ、ダメです！ サイト、やめ！ ま、参りました！ 参りましたから！」

「うっせ！ くのくの！」

「随分と楽しそうね、あんだ達」

背後から聞こえた、第三者の声にそれまで無邪気にじゃれ合っていた男女は、まるで彫刻のように固まってしまった。

ちがうんだ。

そもそも、ミス・ブロウのじゃれ方って、なんか男っぽいというか、その。

すいませんでした。

いや普通、男女間でボディ・タッチをするようなじゃれ方ってしないだろ？

つい、男友達とするようにしちゃったというか。

すいませんでした。

幾千の言葉が脳裏によぎり、そのどれも口にする事ができず。

才人は出来損ないのゴーレムのような動きで、ミス・ブロウの頭を強く抱いたまま、背後へ振り向いた。

そこに、天使の様に愛らしい恋人が鬼の様な表情をして立っていたのである。

ケイトは以前誰かが、トリステイン人の女性は怒りっぽく、嫉妬深いと話していた事を思い出していた。

記憶を呼び起こさせたのは、彼女の前で肩を怒らせて歩くトリステインのエージェント、”ミス・ゼロ”　ことルイズ嬢その人の更に前を歩いている、ボロ布のようになった才人である。

才人とケイトの ” ちよつとしたふざけあい ” により、誤解を（あるいは当然の反応を）したルイズは、愛情の裏返しなのかはたまた強い嫉妬を燃やしたのか。

その激しい怒りと暴力に ” 盾 ” バックラー は曝され、先程の超然とした逞しさは見る影もなく、今では痩せこけた惨めな野良犬のように、いまだ怒り醒めやらぬ主の命令を背にして先導していたのだった。

そんな才人を後から、遠巻きにぼんやりと眺めながらケイト・ بروウ准尉は、噂話は正しかったのかと苦笑を浮かべそうになりながらも、先程までの修羅場を思い起こす。

始まりは嵐の前の静けさのような、優しい声。

ただし、同性のケイトから見ても幼さが残るが愛らしい彼女の表情には、鬼気迫るものが混じっていた。

当然、才人は必死に弁解を試みる。

まず、違うんだこれは！ と何度も何度も主張し、声だけは天使のような優しさで何が違うの？ と、返して寄こしたルイズはその美しい鶯色の瞳を鈍く光らせた。

次いで、僅かな活路を見たかのように、才人はただのじゃれ合いである事を事細かに説明して。



結局、全ての説明を聞き終えたエージェント ”ミス・ゼロ”

は、ゆつくりと杖を取り出してケイトの目の前で才人をボコボコにして見せたのである。

驚いた事に、彼女が振るった暴力は痴話喧嘩というレベルの物ではなく、目で追えない程の

それも先程才人が見せた動きよりも遙かに速い速度と正確さで、蹴りや打撃を何十も加えたのだった。

「な、なあ、ルイズ。あと、どの位で ”墨袋” に着くんだ？」

「ワン、は？」

「……あと、あとの位で ”墨袋” に辿り着けそうですかワン？」

「ご主人様、も抜けてるわよ？」

「うう、あとどの位で ”墨袋” に辿り着けそうですかワン？」

ご主人様」

先を歩く才人の質問に答えるルイズの声は、朗らかでいてしかし不機嫌な物だ。

なにせ恋人とすこしでも一緒に過ごしたいと思い、（勝手にではあるが）危険な囹役を途中まで引き受け

やっとの思いで才人と合流を果たした時に見た物が、他の女とイチヤつく恋人の姿であったのだから。

肉体はまだとはいえ、心を繋げた恋人のその姿はどれ程彼女を落胆させ、激怒させたか。

良い思い出ばかりでは無かったが、ルイズと一度、人生を共にした才人にはそんな彼女の心の動きが痛い程わかっていた。

よって、才人は少々きついお仕置きや言動には何一つ不満を抱かず、ただただ黙って従い続け、しかしそんな才人の真摯さがルイズを更に苛立たせてしまう。

「……所々魔法で移動したからもうちょっとかかるわ」

「そうですかワン、ご主人様」

「……何よ？　なんか言いたげね？」

「ブルー・キングが居る場所に近付いている割に、敵の気配が無い  
ですワン、ご主人様」

「あ、確かに。」　「ミス・ゼロ」、これは何か、ワナである可能性があるかもしれません」

「そんな事わかってるわよ！」

ルイズはケイトの遠慮がちな台詞に忌々しそうにして振り返り、  
声を荒げてギロと彼女を睨んだ。

勿論、彼女にも怒りの矛先は向けられ続けている。

ケイトは激しい敵意の込められた視線にうつ、と怯んで一步後ず  
さつてしまい、そんな彼女を見たルイズはピッと再び前を向いて、  
肩を怒らせながらスタスタと再び歩き始めた。

なによ。

なによなにによ！

サイトもミス・ブロウも取り繕ったかのように私に気をつかつて！

”あれ”　がただのふざけ合いだってくらい、私だってわかってるわよ！

そりゃ、過剰なスキンシップだったし？

見た瞬間は頭に血が上りもしたわよ？

でも、だからって。

だからって、そんな態度とられたら、引つ込みがつかないじゃない  
い！

サイトもサイトよ。

そんなに従順に出てるんじゃないわよ。

キリの良い所で「俺が悪かった、もういい加減許してくれよ、な  
？」とか優しく囁いて、無理矢理にでも抱きしめる位の度量は無い  
の?!

いくら私だつて、そんな事されたらきつと、……許してしまうに決まってるじゃない。

前を歩く使い魔の逞しいが小さくした背を睨みながら、ルイズは苛立ちを募らせ愚痴を小さな身体に溜め込む。

思考を占めるのは思うような反応をしてくれない、恋人への不満。勿論、意識的にその思考が使い魔へと流れ込まないよう、心の奥深くにしまい込んでいた。

そうよ。

今からでも遅くないわ。

才人に今すぐ振り返つて、「悪かった」っていいながら私を強引に抱きしめてもらおう。

そして、私は僅かに抵抗して見せるの。

それでも、あつという間に力が抜けてしまうのだけど、でも、抵抗するの。

サイトはそんな私の耳元で優しく囁くわ。

ルイズ、いい加減機嫌を直せよ、な？ っ、甘く小声で。

吐息が耳の中に入り込む程、直ぐ側で囁くの。

耳から入った吐息はきつと、背筋を通って体中へと流れ込んで、私の意識を縛ると思う。

それから、反論しようとする私の唇を無理矢理にでも塞いで、残った全ての力を奪うの。

それも、ミス・ブロウに見せつけるように。

「ご主人様？」

「どうしました？」 ミス・ゼロ”。突然立ち止まったりして？」

知らず甘い想像に没頭してしまっていたらしい。

ルイズを呼び戻したのは、想像の世界での平賀才人ではなく、怯えたような瞳でのぞき込んで来た使い魔の、どこかマヌケな顔であ

った。

理想の才人とは違い、茫としたその表情を見てルイズは直ぐに黙っていては己の内なる希望は叶いはしないと悟り、落胆して肩を落とす。

次いで、ならばこっそりとそうするよう命令して、それで許してあげるわ、と持ちかけようかと考えたのだが。

「何か気になる事でもあるのか？、ワン、ご主人様？ 随分と虚ろな目をしていたけど」

「う、うるさい！ 何でもないわよ！」

「休憩しますか？ ”ミス・ゼロ” 。すこし疲れていらっしやるようですよ」

「何でもないったら！ ほら、さっさと行くわよ！」

なぜか、どうもこの時ばかりは素直になれず、照れ隠しにすこし優しく才人の尻を蹴り上げて、再び歩き始めるルイズであった。

「ここか」

才人達が進んでいた巨大なクラーケンの体内の道、その行き止まりには小さな孔がぼっかりと開いていた。

ルイズは才人の独り言のような、機嫌を伺うかのようなつぶやきに、変わらずむくれたまま小さく頷く。

そこにたどり着くまで小一時間もかからなかったが、その間ルイズはとうとう機嫌を直す事もなく無言で、気まずい道のりであった。才人はそんなルイズにはあ、とため息をついて一瞬ケイトと視線を交わした後、再び目の前に開いた孔を見る。

孔の中は巨大な ”墨袋” であるらしく、うっすらと光るクラ

ーケンの体内であつても漆黒の闇が広がって見えた。

恐らくは、スニート・ビーク空域を覆う黒雲を作り出している器官であるため、中はかなり広いのであろう。

人一人がやつと潜れる程の孔からは、黒いもやのようなものが漏れ出たり吸い込んだりしながら、まるで洞窟に開いた通風口のように、中からはビュオ、と空気が流れ込む音が聞こえる。

「ここから先は俺一人で行く。ケイト、元来た道とこの孔に」ウ  
「オーター・シールド」で蓋をすればしたら、どの位持ちそうだ？  
「そうですね。もって十分くらいでしょうか」

「十分か……」

才人は十分が長いのか、それとも短いのかと考えながらうとうと腕を組んだ。

一方、ルイズは才人がミス・ブロウの事を『ケイト』と呼び捨てにしたことを聞き逃さず、うぬ、と気色ばむ。

が、状況的に才人に食ってかかるわけにもいかず、何も言わずにただ不機嫌な雰囲気をもっと濃くしたに止めていた。

「じゃ、とりあえず中に入ってブルー・キングを探してみるから、その間ブルーマンに襲撃されたら」ウオーター・シールド」で  
「この通路に蓋をして凌いでくれ」

「……私も行くわ」

「駄目だ」

「なんでよー!」

「中は真つ暗だろ？ そんな状況じゃお前やケイトを守れねえよ。  
それにブルーマンの襲撃にあつたら、お前が知らせてくれなきゃ俺  
戻れないし」

主に対して気が引ける所があるものの、才人は私情を交えずびし

やりと言いつつ放った。

ルイズは才人の判断に反論できず、私的な不満と事実そうであるという現実の狭間に言葉を紡げず、ぐむむと唸り睨む。

「そんな顔してもこればっかりはダメだつて。な？ 戻ったら埋め合わせするからさ。ルイズはここで待つてくれ」

少し困ったような、苦笑するような笑顔で才人はそう言い残し、やっと人間一人が入れそうな漆黒の孔へと身を投げ入れた。

背後では、ルイズが何かを言おうと声を出しかけたが、闇の中へと消えていく才人の背に口を強く結ぶ。

”墨袋” の中からちらと振り返り見たその顔は、やり場のない苛立ちと不安が混じって、才人の後ろ髪を引いた。

が、未練に似た想いを二度強く頭を振って振り切った才人は、自身が入ってきた入り口から差し込む僅かな光を頼りに、奥へと歩を進めるのであった。

”墨袋” の中は生臭く、視界は奥に進むにつれて失っていく。才人はデルフリンガーを抜き放ち、周囲の状況を探らんと全神経を研ぎ澄まして、この場では役に立ちそうにない目を閉じた。

静寂が耳に痛い。

嗅覚は……だめだ、この臭いの中じゃ役に立たないだろう。

頼れるのは

瞬間。

空気が動く感覚が右側で感じられ、才人は咄嗟にデルフリンガーをそちらに差し出す。

同時に、強い衝撃と共に火花が散って、虚空へと身体が舞った。火花により一瞬見えたのは、巨大な鉄の板である。

「が！」

ワケが解らぬ状況のまま、才人は再び闇となった。 ” 墨袋 ” の中でしこたま背を打ち付け、次いで体の前面に硬い何かがつつかった。

どうやら何物かの一撃によって才人は吹き飛び、 ” 墨袋 ” の壁にぶつかりその後床へと落下してしまったらしい。

” グリムニルの槍 ” の身体であるとはいえ、その衝撃は凄まじく、ボキリとどこかの骨が折れる音を聞きながらの激痛に、才人は思わず呻いた。

「相棒！ 大丈夫か?!」

「ぐ、う、ああ、大丈夫」

デルフリンガーの声に応じようとしたその時。

槍による身体の再生を終えて起き上がろうとした才人は、頭上の空間から一瞬だけ風切り音を聞いた気がして、思い切り横へと飛んだ。

轟、と音が追隨し、ついさっきまで才人が居た空間に何か重量物が叩き付けられる音がする。

何かいる。

それも、ブルーマンじゃない!

「サイト！ こっちに戻ってこれる?! ブルーマンに襲撃されたわ!」

「ルイズ?!」

「言われた通りミス・ブロウが水の壁を作ってるけど、ちょっとまズいわ! 凄い数!」

「くそ!」

やっぱり畏だったか?!

思わず声に出して毒づきながら、才人は歯を噛んだ。

予感はしていたが、ブルーマン達は才人と女達が離れるのを持っていたらしい。

才人は慌てて元来た方向へと戻ろうとするが、すぐに愕然としてしまった。

先程の一撃により ” 墨袋 ” の奥へと吹き飛ばされたのか、僅かに遺された入り口からの光による視界が完全に失われていたのだ。いや、それだけでなく、これがブルーマン達の罠であるならば、あの胃の時と同じように入り口そのものが閉じられてしまっているのかもしれない。

しまった！ 知能の低い亜人だと見くびっていたか？！

もつと他に方法があったかもしれない……

そこまで考えると同時に、才人は胸に強烈な衝撃を受けて、視界のとれない闇の奥へと吹き飛んだ。

今度はまともに受けてしまい、デルフリンガーではなく、目から火花が出たような錯覚を覚えて。

才人は二度、三度と恐らくはボールのように体中を打ち付けて、最後には地に叩き付けられた。

『 サイト?! ！』

あまりに強い衝撃により一瞬飛んでしまった意識を素早く引き戻したのは、ルイズからの念話であった。

先程の一撃によって、使い魔の危機が彼女へと伝わったらしい。

『 大丈夫?! サイト! ！』

『 なんとか、な。そっちはどうだ?! ！』

『 ミス・ブロウの ” ウォーター・シールド ” ならもう少し持ちそう。』

才人はその身を起こしながら、状況を素早く整理して、思考を束



ねる事にした。

無論、意識を聴覚へと集めて何物からかの攻撃に備えながらである。

兎に角、ルイズとケイトの身の安全が最優先で確保しな……

思考はそこで途切れた。

同時にゴキン、と重い金属音がして、火花がもう一度飛ぶ。

才人が暗闇からの一撃を今度は正確に察知して、デルフリンガーで受け止めたのだ。

攻撃をしてくれている何者かは、どうやら鉄製の板のようなものを使用しているらしい。

一瞬の火花によって見えたソレは、少なくとも刃物ではなかった。そもそも、刃物であったならば先程の一撃により勝負は決していたであろう。

「相棒！ ルーンだ！」

「デルフ?!」

「相手は相棒のルーンを目印にしてやがる!」

デルフリンガーの台詞に、才人は初めて光る左手のルーンへと視線を落とした。

その先には強く白くルイズとの絆とも言えるそれが、光輝いて闇を照らしている。

……なるほど、よく目立つ。

才人は慌てて袖を破り、左手に布を巻き付けた。

しかし、その行為は決定的な隙となり、もう一度、先程よりも遙かに強烈な一撃が横薙ぎに才人へと叩き付けられる。

今度は複数の骨が砕ける音がして、耐え難い激痛と共に浮遊感が才人を包んだ。

「あ がっ」

「相棒！！　しっかりしろ！」

返事はない。

流石の才人も声すら出せず、呻く事しかできずに地に倒れていた。視界を奪われ、常人であれば即死するような攻撃を意識の外から受けたのだ。

むしろ、生きて居る事が奇跡であると言えよう。  
否。

持ち主の死すら認めぬ魔槍によって、再び立ち上がる事を強要すべく、才人の身体はこの時むしろ急速に元に戻りつつあった。

だが、そんな才人の様子は光るルーンを隠しているにも関わらず、相手に筒抜けであるらしい。

やっとの事で状態を起こせそうな程に回復した才人に向かって、闇の向こうからもう一度、おぞましい程の風切り音と共に重量物が振り下ろされる気配が襲いかかる。

そして、三度目の火花と共に、重苦しい金属音が闇の中に響いた。

「ぐ、ご、の……」

才人は仰向けに寝たまま、その一撃をデルフリンガーで受け止めていたのである。

以前 ” 土くれ ” のフーケのゴーレムを持ち上げた事があったが、その一撃の重さはそれ以上であるらしく、才人は徐々に押し返されて、地にその体をめり込ませていった。

『サイト?!』

『こいつ！　強い!』

『ちよ、ちよつと大丈夫?!』

『俺の心配はいい！　それより、ルイズ！　ケイトを連れてなんとか逃げてくれ!』

『何言ってるのよ！ 何処の誰が相手かは知らないけど、そんな奴さっさとやつつけてこっちに來なさいよ！』

『無茶言うなって！ 流石に視界を奪われたままじゃ無理だ。それに、そっちに帰ろうにも、 ” 墨袋 ” の奥に吹き飛ばされたのか、方向が全然わかんねえ！』

才人との念話にルイズはこの日幾度目か、口の端を引いた。

目の前ではケイトが必死に ” ウォーター・シールド ” を維持すべく、目を閉じて杖を掲げている。

その向こうには無数のブルーマンが居て、彼女の精神力が尽きるのをまっっているのかじっとこちらの様子を伺っていたのだった。

このままではまずい。

使い魔と繋がった左目からは漆黒の闇だけが見えて、しかしその危機が手に取るように伝わってくる。

なんとか……私がなんとかしなくては。

ルイズは目の前の通路と同じように、 ” ウォーター・シールド

” で蓋をされた ” 墨袋 ” の中へと続く孔を睨み付けて、意を決した。

最悪、自分一人だけでも逃げられるし、そうなれば才人も手当たり次第に暴れる事ができよう。

だが、その時は目の前にいるケイトや、ゴグ・マゴグの所に残してきたウェールズ皇太子達の身の安全が何一つ保証されない。

よって、そのような選択肢は誇り高いルイズにとり、無きに等しいものであり、果たして彼女の採った選択とは。

「ミス・ブローウ！ あとどの位もちそう?!」

「 ” ミス・ゼロ ” 、あと、二、三分が限度、かと」

「五分持たせて！ お願い！」

「わかり、ました」

ルイズは杖を取り出しながら、無理を承知でケイトへの要求を口にした。

”ウォーター・シールド” の維持の為、ケイトは必死に精神力を魔法に注ぎ込みながらも無茶な要求を肯定する。  
彼女にも又、何か思う所があるらしい。

ケイトはルイズの方へ振り返り、その瞳に強い意志を宿して一度だけ頷く。

任せて下さい。

意志は炎となり、確かにルイズの瞳へと燃え移って。

そして、虚無の担い手は己の杖に意識を集中する。

紡ぐ唄は初歩の初歩の初歩。

心を研ぎ澄まし、爆散させる対象を明確なイメージへと変えていく。

それは広範囲に渡って存在する敵意。

己と、己の愛する者を蝕むかのような意思是、不思議と手に取るように隅々まで探り当てる事ができた。

だめだ。

才人の話ではこの後、特大の ”イリユージョン” を使う必要がある。

この規模だと、今持つてる私の精神力すべてを使い果たすかもしれない。

ルイズは精神を己の内側へ潜らせながら、一際強い敵意を放つ存在と暖かな存在を感じ取り刹那に惑う。

ならば。

その小さな唇は遂に開かれ、虚無の唄は静かに ”魔の空域の魔物” の体内に満ちていった。

それはまるで吟遊詩人の唄のようで。

大きく、小さく、さざ波のように場に満ちて。

ケイトは聞いた事もない詠唱に思わず振り返り、それから直ぐに注意を ”ウォーター・シールド” の維持に戻した。

その表情には焦りはない。

なぜか彼女は振り返った時、確信を得ていたからだ。

きつと、自分は限界を超えて ”ウォーター・シールド” を張り続けられるだろう。

きつと、 ”ミス・ゼロ” はものすごい魔法でこの状況を打破してくれるだろう。

根拠はない。

しかし、背後に聞こえるルイズの詠唱は、なぜかそんな事を考えさせるものであった。

そうだ。

もし、それらがうまく行かなくても。

きつと、あの逞しい友人が自分と主である少女を助けてくれるの  
だろう。

そう思った時、ケイトは心が震えるのを感じた。

ウェールズを想う時のようなその高揚は、勇気であったかもしれないし、友情のようなものであったのかもしれない。

震えは彼女の確信を喰らい、強い精神力となって目の前の水壁へと注ぎ込まれる。

ケイトはこの時、知らず笑みをこぼしていた。

彼女は悟る。

そうか。

きつと、サイトや ”ミス・ゼロ” はこんな感じで心を繋げながら戦場に立っていたのか、と。

なんて、なんて素敵に

そこまで考えた時、背後で何かが弾けていた。

そして、虚無の魔法 ”エクスプロージョン（爆発）” は

二人の乙女の意志を乗せて完成する。



ブルー・キングは漆黒の霧が充満した ” 墨袋 ” の中、勝利を確信していた。

姿はブルーマンと大差なかったが、体躯は遙かに大きく5メートル程もある。

もし明るい場所で見たらならば、全身は青い鱗で覆われ、裂けた口からはゾロリと尖った歯が並びみえたであろう。

しかし、その深い青の鱗は ” 墨袋 ” の中では保護色のような機能を果たし、黒い霧の中で潜むブルー・キングを視認できる者はいない。

故に、 ” 魔の空域 ” を満たす黒い雲を溜め込む ” 墨袋 ” の中は新月の夜のような闇が広がっていたのだった。

更には、生物が作り出す為か、漆黒の霧は生臭く、そこに居る者の感覚を狂わせる。

唯一頼りになるのは音だけであるが、音だけを頼りに戦える人間など、どこにしようか。

” 彼 ” は闇の中で笑っていた。

その足の裏からは骨が砕ける感触が、心地よく伝わってくる。

ブルー・キングは笑いながら、一層力を足に込めて、人の耳には聞こえない周波数で部下であるブルーマンに指示を出した。

間を置かず、墨袋の外で女達を捕らえんとしていた彼らから返事が戻ってくる。

追い詰めてはいルが、水の壁に阻まれているのか。ふん、小賢しい。

いや。

放っておけ。

ソレは人間が使う、魔法というものだ。

精神力が尽きれば直に水の壁も消えル。

ソうなれば、抵抗スル力も失セルだ口ウシ ”種付け” モシヤ  
スくなルカラナ。

そう部下達に指示を出し、ブルー・キングは鋭く並んだ歯を剥いて笑った。

もし ”彼” が人であったならば、その表情は醜く好色な笑みを浮かべていただろう。

無論、指示も笑い声も人の耳に届くような音ではなく、ただ暗い ”墨袋” の中でシュウとだけ空気が漏れるような音だけが響いていた。

不意に。

ブルー・キングは足裏から何かが蠢く感触が残っている事に気がつく。

どうやらあのすばしっこい人間の戦士は、まだ生きているらしい。シブとい奴め。

亜人の王は毒づきながらも嗜虐心を昂ぶらせ、ブルーマンと同じ地球の古代爬虫類の足を想像させるその巨大な足に力を込め直して虫を踏みにじるように左右に捻る。

足のつま先が左右に振れる度、盛大に骨の碎ける音が響いて、今度こそ煩わしい敵の絶命をブルー・キングは確信した。

そして亜人の王は闇の中、生まれて初めて行つ繁殖への期待を膨らませていく。

ググ……もうスコシだ。

もうスコシで我が一族はソの数を増やし、あの忌々しい巨人に対抗スルことができる。

我ラの長き時に渡ル、 ”食料” としてノ歴史に終止符を打つ事が出来ル！



歡喜はブルー・キングの全身を強く包み、確信が用心深い”彼を鈍らせた。

”そう。

ゴグ・マゴグに決して見つからぬよう、視界のとれぬ”墨袋”の奥深くへと身を隠し続け。

気の遠くなる程長い年月をかけて、時折”魔の空域”の魔物に呑み込まれた人間を襲い、ひたすらに、ただただひたすらに繁殖の機会をうかがい続け。

僅かな可能性の果てに、今、目の前にその機会を得んとしていた哀れな亜人の王は、気が付く事ができずにいた。

”そう、”彼”は気が付かない。

追い詰めた二匹の雌達の内、水の壁を作り出していない方が何かを詠唱している事に。

その詠唱が、人間が使う魔法にしてはやけに長い事に。

何よりも、足の裏で僅かに残る蠢きが小さな脈動に変わりつつある事に。

脈動はやがて亜人の王にとって、破滅の種が息吹く感触となる。

が、勝利を確信したブルー・キングにはもやは注意深くそれらを観察する余裕はない。

一方、どのような思惑があるのか、大きな足で好き放題にされている才人の方はというと。

その声が聞こえてきた一瞬、全てを忘れてしまっていた。

戦う事も、抗う事も、護る事すらも。

全身の骨という骨が砕かれ、再生し、そしてまた砕かれているにもかかわらず、ただ為すがまま、何もかもを忘れ身をゆだねてしまっていた。

激痛が絶えず襲いかかり、親友とも呼べる知性ある愛剣が何か叫んでいるにもかかわらず、才人は茫としてその声に聞き入り続けてしまう。

それは、力の濁流に意識が流されるかのような感覚。

声は遠く細く、聞こえるはずのない場所からしかし耳元で聞こえて。

それは唄であった。

それは呪いであった。

それは理であった。

それは、才人が生涯を賭して守り抜いた声であった。

それは才人がすべてを投げ出して護るべき声であった。

”グリムニルの槍”の体となってより、その唄を聞くのは二度目の事である。

否、それ以前にも幾度も死線の中で聞いた唄でもあった。しかし。

才人はしばし、全てを忘れ虚無の唄に聴き入ってしまった。

まるで、儀式のように。

戦う理由を再確認するかのように。

心が、震える。

自覚は力となり、力は嵐の大海の如く才人の体内で荒れ狂いはじめた。

力の渦とも呼べるそれがあまりに大きく強く、今までに無い程体の中で暴れていた為に、才人はブルー・キングに為すがままとなつてまで、力を従えようとしていたのだ。

やがて荒れ狂う力の中、才人はなんとかバラバラになりかけた己をつなぎ止める事に成功して、唄に込められた想いに応える。

「わかったよ、ルイズ。まかせとけ」

声に出した独り言は、果たして主に届いたのか。

独白の後、才人は己の体を押し潰さんとしているブルー・キングの足裏に手をかけて無造作に押した。

刹那。

ブルー・キングの巨体が上方に吹き飛び、轟、と天井に当たり次

いで地に落ちる轟音が響いた。

巫人の王の巨大な足による拘束から解放された才人は、左手でデルフリンガーを拾いあげゆっくりと体を起こす。

立ち上がりながら、左手を覆っていた袖が内側からの圧力に押されるようにして解けて、強いルーンの光が漏れだし辺りを照らし出した。

光は白く才人を中心に渦を巻いて、周囲の漆黒の霧を吹き飛ばして行く。

「おおお！ 相棒、すげえな！ わはは、こんなに心震わせるんなら、最近なかつたのに一体全体、突然どうした？」

「……俺にもよくわかんねえよ、デルフ」

「うーむ、嬢ちゃんの詠唱を聴いているからか？」

「それもあんだけど……」

才人はそこで言葉を切り、右手を真横につきだした。

同時に恐ろしい風斬り音と共に巨大な鋼鉄の板がその手の中に納まり、ガオン、と重い金属音が ” 墨袋 ” の中に響く。

鋼鉄の板は ” 魔の空域 ” の魔物が呑み込んだフネの巨大な舵の一部であるらしく、その端部は才人の前方、暗闇の向こうにのびていた。

どうやらブルー・キングが体勢を立て直し、攻撃を繰り出してきたらしい。

闇に紛れての攻撃は得意であるらしく、ルーンの光が届かぬ間合いからの攻撃は小さな人間を砕いて木の葉のように吹き飛ばす筈ではあったのだが。

「ばかな！ なんだ、この人間は！」

ブルー・キングは戦慄する。

つい先程まで思うように蹂躪していた小さな人間が、叩き付けた鉄を小さな掌で受け止めたばかりでなく、鉄塊の端を掴むやそのま

ま手の内に固定してしまったのだ。

この小さな身体のどこにこのような力が、と混乱しつつもブルー・キングは、必死に武器に使っている鉄の舵の端を力一杯押したり引いたりする。

が、鱗の下で音が出るのではないかと思える程盛り上げた筋肉も、相手の数倍もある体格も役には立たず、舵はまるで岩にでもめり込んだかのようにびくともしなかった。

「そろそろか」

呟くと才人は不意に右手の拘束を解き、丁度舵を引き抜こうとしていたブルー・キングは勢い余って後方へと飛んでいく。

亜人の王は無様に転がり、しかし直ぐに起き上がって猛獣のような咆哮を上げた。

雄叫びには矜持を傷つけられた怒りと憎悪が込められて、ビリビリと空気を揺らす。

才人は変わらずその場に立ったまま、ブルー・キングの雄叫びを涼しい顔で受け流しながらデルフリンガーを構えるでもなく、その場に佇んで。

そして名残惜しむかのように、完成しつつあるその唄に今一度、心を傾ける。

敵を前に目を瞑り、震える心に刻み込むのは果たして

そんな才人の隙を亜人の王は身逃さず、地を揺らしもう一度、今度は脳天に分厚い鉄塊をたたき込まんと突進を始める。

漆黒の霧によって作り出される闇を利用し、才人の周囲に渦巻く光の外から鉄塊をたたき込む為。

何ノつもりだかわかんが、今度は！

まるで短剣のような歯を食いしばりながら、ブルー・キングはその巨体を支える筋肉すべてに力を込め、力を溜めて大きく舵を振りかぶる。

しかし、その渾身の一撃は才人に届く事は無かった。  
突如として才人のルーンの光よりもはるかに膨大な光が辺りを、  
世界を支配したからだ。

それはルイズの ” エクスプロージョン（爆発） ” が完成した瞬間であった。

ただ、虚無の魔法は激しく輝きながら ” 墨袋 ” 内に満ち、全てを呑み込んだかに見えたのだが。

才人とブルー・キングの視界が戻った時、果たして魔法によって消し去られたのはただ一つ、漆黒の霧だけであった。

虚無の使い魔がゆつくりと目を開くと、その視界の先にはうつすらと巨大な人影が残されたルーンの強い光に照らし出されている。

一方、ブルー・キングは度重なる非現実的な出来事に、この時はじめて事態の深刻さを理解しつつあった。

地の利を生かしあらゆる攻撃を加え、骨まで粉微塵にしたはずの敵は未だ立ち続けて。

かと思えば渾身の攻撃を受け止められ、数倍はある体格差にもかかわらず、膂力は及ばず。

そして今、地の利すら失ったのだ。

なんだ！ 何なノだ、お前は！ 何故、何故、どうして！

何が！ あノ光は一体？！

答えは見つからない。

その縦に長い瞳孔が捕らえられるのは、目の前の現実のみ。

巨大な亜人の瞳に映り込むのは、 ” 神の左手 ” と謳われた伝

説の使い魔の輝きである。

「いくぞ、デルフ。ルイズとケイトが待っている」

台詞は黒い霧の無くなった空間に冷たく響く。

呼応してブルー・キングは威嚇するように、また恐怖を打ち消そうとするように凄まじい咆哮を上げた。

その音圧は才人の耳にビリビリと破れた音を叩き付けたが、勇者は意に介す風でもなく、瞬きひとつせず敵を睨んで。

そして亜人の王が振るう、巨大な鋼鉄の舵が唸りを上げてその場に振り下ろされると同時にふっとその場から消え失せる。

響き渡るは重い金属が何かにぶつかるとような大きな音。

”墨袋” の地面にめり込む鉄塊を確認したブルー・キングが、流石に今度は受け止められなかったようだと思ひ、ほくそ笑んだ。瞬間、何か肩の辺りに居ると思つた後、突如として視界が前のめりに移動していき、そのままぐるりと何度か世界が回りはじめた。次いで漆黒の霧が立ちこめる中でもよく見えていた視界が急速に暗くなりはじめ、意識までもが遠のいていく。

回り続ける視界の中、一瞬見えたのは首の無い、巨大なブルーマンのような体とそれを照らし出すあの忌々しい光。

やがてブルー・キングは声を出す事も体を動かす事もすでに叶わず、ただ、何が起きたか理解出来ぬまま絶命に至るのであった。

それから僅かな時を置いて、首のない亜人の王の体が倒れる音が

”墨袋” 内に響き、才人は亜人の王の最期を確認する間もなく、出口目指して疾駆する。

恐らくは立つ力も残されて居ない程疲弊してしまつていよう、主の元へ帰る為に、だ。

## 日誌

0725

”体の大きな男” の協力もあり、本船は風石を補給し無事出港した。

進路は私達を通つた道とは別ルートで ”墨袋” へ侵入。そのまま ”魔の空域” の黒雲を送り出す漏斗から脱出予定であつた。

速度・スロー。

風・無し。

操船要員は各自持ち場にて待機した。

0755

本船を呑み込んでいた巨大な魔物の体内を脱出に成功した。

”体の大きな男” の助言により、進路11時高度上げで微速前進。

言葉通り、魔物は襲っては来なかった。

船規によりコメントを記す事は禁止されているが、あえて記したい。

久しぶりに見る朝日は素敵だった。

0830

士官会議に出席。参加者は船長以下全士官、及び部長3名。

内容：トリスティンからの客人である、”ミス・ゼロ” と <sup>バックラー</sup> ”盾” の待遇について。

結果、”魔の空域” での <sup>バックラー</sup> ”盾” の功績を讃え、士官待遇とする事が満場一致で決まった。

尚、船内は比較的会話が筒抜けとなる程防音が良くないので、公的良俗に反する行いは禁止との条件付きであった。

同時に罰則を課す場合は本船のトイレ掃除とする旨、チーフ・オフイサーより伝達された。

0915

進路アルビオンに向け10時に修正した。

操帆、舵、魔導機関いずれも問題なかった。

風力3

雲海高く視界不良

速度・ハーフ

0930

密航者（ブルーマン等）入り込んでいないか、サイトと共に船内検査を行った。

船内、異常なし。

ただし、巡回時に負傷者1

痴話喧嘩であったが、船長権限により船内でのかれらの行動にはほぼ干渉できず。

尚、負傷者の治療は必要無いと判断した為、チーフへの報告のみの対応とした。

風力4

速度・フル

1030

船長は操船指揮権をセカンド・オフィサーへ委任した。

進路12時に修正。

すでに”魔の空域”の魔物の姿は見えない。

第一種警戒体制から第二種警戒体制へ移行した。

1125

スニート・ビーク空域からの離脱を確認。

戦闘配置を解除。

船長の指示により特別休息命令が発令された。

操船員以外にはフルーツと菓子支給され、夜からのワッチの者のみ飲酒が許可された。

本時刻をもってワッチをオフィサー・ベンノと交代する。

罰を受ける事を覚悟でもう一度、コメントを記す。

我々は何千年の間、誰も突破できなかった”魔の空域”を  
ついに突破した。

これは皆の力あってのものだろう。



だが、特記すべきはトリステインからの客人の活躍が大きかったという事であった。

私は忘れない。

”ミス・ゼロ”の勇気を。

”盾”<sup>バックラー</sup>の光る左手を。

アルビオンの貴族の末裔として、”麗しのアンリエッタ号”のクルーとして、そして友人として。

彼らには深く、感謝を捧げる。

記録者・ケイト・ブロウ

ケイトは最後にそう署名し、それからしばしログ・ブックを見つめてから杖を取り出した。

唱えた魔法は”コンデンセイション”を応用したもので、書き込んだばかりのインクを集めるものである。

その範囲は極小で、やがて彼女は消した”盾”<sup>バックラー</sup>という文字の跡、白くなっている部分に「サイト」と書き込んだのだった。

程なく航海日誌は無事次のワッチの者へと引き継がれ、その後には彼女が船規違反で罰せられる事は無かった。

”魔の空域” と呼ばれるスニソートビーク空域を抜けてより一週間。

”麗しのアンリエッタ号” は順調に航海を続けて、遂にアルビオン大陸の北端、スノーウォール諸島の小島の一つにたどり着いていた。

スノーウォール諸島は元々浮遊大陸の一部で、脆い地盤が分離しそのまま浮遊島となってアルビオン大陸と共にハルケギニア上空を周回する小島群である。

小島は浮遊大陸とは違い非常に不安定で、島同士がぶつかり合い砕けて散って、周辺は航路がはつきりしない非常に危険な場所であった。

又、唯一の大陸からの進入路も、スニソートビーク空域からのものしかなく、その為か浮遊大陸側にある防衛拠点の規模も、非常に小さな地域でもある。

その為、スニソートビーク空域の突破に比べれば、アルビオン大陸の領空内への侵入自体は難しい物とはならなかった。

「もっとも、わざわざここに住む人間も居ないけれどね。浮島となつた小島は大陸とは違って何時落下を始めるかわからないんだ。だから、補給するにも一苦労さ」

ウェールズはそう言って、船尾に設えたナビゲート甲板の手すりに手を置き、雪がちらつく中、隣に立つ才人とルイズにニヤリとし

て見せた。

眼下にあるナビゲート甲板の下、様々な道具が置かれている暴露甲板では、甲板員達が係留索具を慌ただしく運び、上陸の準備を進めている。

才人はつい先日までは彼らと一緒に働いていた為か、どこことなく居心地の悪さを覚えて、誤魔化すかのようにウェールズへ質問を投げかけた。

「ここは大丈夫なんですか？」

「ある程度の大きさの浮島なら比較的安定してるしね。それに、ここはこの辺の空域を根城としている、ネルソン一家の拠点の一つなんだ。簡単に浮力が無くなったりはしないさ」

「殿下、空賊なんて本当に信用できるのでしょうか？」

才人の隣にぴたりと陣取っていたルイズが、二人の会話に割り込んで来た。

長いピンクブロンドの髪は冷たい風に激しくなびき、その頬は赤くなっている。

スノーウォール諸島の空域はかなり寒い為、暖かそうなコートを羽織ってはいたものの、女性には非常に辛い気温には間違いない。

しかしルイズは歯の根が合わなくなる程の寒さの中、甲板上で係留作業の指揮を採っていたウェールズに用がある言い出した才人と共に、何故か外へと出ていたのである。

ウェールズはそんなルイズの様子に苦笑いを浮かべかけながらも、一度、才人に同情の視線を送りながらゆっくりと頷いた。

「片目」のネルソンは私のおじい様の代に私掠に使っていた空賊でね。先の戦では王党派、貴族派どちらとも付かなかつたけれど、信用できる老人さ」

「信用できるって……そのネルソンって人は何故王党派として参戦

しなかつたのですか？」

「そこはほら、空賊だからだよ。私掠許可を与えていたとはいえ、空賊であることには変わりない。王家や貴族のいざこざに肩入れする義理までは無かつたのだろう」

「……殿下、そいつ本当に大丈夫ですか？ 金を掴まされて貴族派に通じているっていう保証は無いんでしょう？」

「そうですね、殿下！ なにも空賊なんか頼らなくなつて」

「大丈夫だよ、サイト君。ミス・ヴァリエール。まあ、見ていてくれたまえ」

そう言つてウェールズは意味深に笑い、係留作業の報告にやつてきたオフィサーの対応を始めてしまい、会話はそこで途切れてしまつた。

船長という役職は普段でん、と構えていてヒマそうに見える物であるが、実のところ中々に忙しい。

特に必要最小限の人員しか乗せていない ”麗しのアンリエッタ号” はそれだけでなくも人手不足なのだ。

それは士官であつても変わりなく、ウェールズも又、指揮を採るワッチ（当直）のシフトの中に組み込まれているのである。

結局、それ以上ウェールズの仕事を邪魔する訳にも行かず、才人とルイズは疑問府を共有したまま、その場は大人しく部屋に帰るのであつた。

「あああ、さささ寒い！ すすすごく、寒いわね、ここ！ 毛布！ 毛布毛布毛布！」

「だったら、無理について来なきゃよかつたのに……」

「う、ううう、うるさいい！ あああんた、ちちちよつと目を離したらすすすぐどっからか女の子を連れてきそつだもんんん」

ルイズは部屋に戻るや否や、コートを着たまま狭い寝台に飛び込

んで分厚い毛布の下へと潜り込み、くるまりながら顔だけを外に出して少し不機嫌にぷくりと頬を膨らませた。

体の芯まで凍えてしまったのか、台詞に歯の根が合っていない。才人はルイズの台詞に何かを言い返しかけたが、言葉を呑み込みルーンのある左手でわしわしと頭をかきむしって、室内に設えられた木製のロッカーの扉を開きコートを仕舞った。

”魔の空域” でのミス・ブロウとの一件から日が経ってはいたが、未だルイズの気はそれ程晴れてはいなかったのだ。

と、いつものも、晴れて同じ部屋で過ごせるようになった二人ではあったのだが、空間が限られているフネの船室は士官待遇であつても非常に狭い。

更に航行中は揺れる為、部員達よりかはマシなものの、ベットはまるで棺桶の様に狭苦しい造りとなっているのである。

そんな非常に狭いベッドで、曲がりなりにも恋人同士であるという認識の男女が共に使用したらどうなるか。

「女の子ってお前、こんな空の上で一体どうやって連れてくるんだよ」  
「よ」

「ミス・ブロウがいるもん」

「だから、ケイトとは何でもないって！ ”あの時” だつてじやれただけだし、あれ以来だつて気を使ってあんま近寄らないようにしてるだろ？ 大体あの子、ウェールズ皇太子一筋っぽいし」

「その、ケイトって呼び捨てるのが気に入らないもん」

「んな事いっただつてさあ。学院でも、キュルケやタバサ、シエスタにモンモンとか呼び捨てにしてんだろ？」

「それはそうだけど……あんだ、気が付けばいつも他の娘の影がちらつくもん。あの白い韻竜の子はともかく、チキュウに言った時だつていきなりキスされてるし、妖精亭のあの姉妹の時だつて」

「あれは不可抗力だ！」

「あれ、つてどれの事？ いっぱいあつてわからないわ。……ああ、

そういえば、ちい姉様とも急に親しくなつてたわね、あんだ」

まるで針のムシロである。

毛布にくるまった顔からじつとりとした視線と共に浴びせかけられる言葉は、嫉妬の炎となつて才人に襲いかかった。

これではまるで、古女房に浮気を疑われる夫のようだな。

……いや。

ちゃんとした夫婦ならば、そんな事ないよと抱きしめたり、キスをしたり、夜を共にしたりしてそれなりの絆が強めやすい分、まだマシなのかもしれない。

才人はそう考えながらも、未だに浴びせられ続けるルイズの疑いの言葉を否定し始めた。

少々行きすぎたルイズの態度ではあつたが、きちんと相手をして言葉を否定しなければ更に機嫌が悪くなる事が目に見えていたからだ。

と、いつものも、才人もルイズも惹かれ合い心を強く結びつけているとは言え、肉体関係は未だ結んでは居ない。

これは才人がタバサの母親を無事救出できたという歴史を変えぬよう、それまではなるべく以前と同じ行動をしようと決めたが故であつた。

もし性交を行えばルイズが妊娠でもしよものならば、大きく歴史の流れが変わつてしまう事もありえるのだ。

又、才人がこの時代に送られるにあたり、妻であつたルイズからの手紙の中に歴史を大きく変えようとするとその時空から拒絶される恐れがある為、大きな流れは変えようとしてはいけないという記述されていた事もある。

よつて、その気がありながら毎夜、お互いに強固な理性を要求される状況となり、その反動によるストレスがルイズをより嫉妬深く、より独占欲を強く、より不安にさせていたのであつた。

それは才人も同じではあつたが、幾分ルイズよりかは人生経験が

豊富な為、早々にやはりここは男の方が我慢するべきである、という結論に達して。

「頼む、勘弁してくれよ。ほら、コート。ロッカーにちゃんと仕舞わないと、皺になるぞ?」

「……またそうやって誤魔化す」

「誤魔化してねえって。俺はお前一筋だからさ、その、他の女の子にはその分ぞんざいになっちまって、逆に親しげにしているように見えてしまうんだよ」

「……ほんと?」

お前一筋、という言葉が何かの琴線に触れたらしい。

ルイズはそれまでに険悪な雰囲気を一転、どこか甘えた声で再度尋ねながらくるまった毛布を全身に被って、毛布の中でゴソゴソとコートを脱ぎ始めた。

それから間を置かずにとっとコートを掴んだ彼女の白く細い腕が、毛布の中から才人の方へ伸びる。

ルイズに気取られないよう、才人はため息を一つついてからコートを受け取り、再びロッカーの扉を開いて自分のコートの隣にルイズのコートを掛けた。

「ホント。大体、そうじゃなきや” もう一回やり直す” 為に戻

ったりはしねえよ」

「……ほんとに、ほんと?」

毛布の塊の中から聞こえる声は甘く、棘はもう無い。

もう一息、かな。

才人はどこか、聞き分けのない娘をあやす親の心地になりながら、両手を腰に当てもう一度ホント、と短く答えた。

しばしの沈黙。

既に毛布の塊から威圧感のような物は感じられないあたり、才人の返答は一定の効果を上げ続けているらしい。

やがて再びにゅっと毛布の中から手が伸びて、無言のままこっちやこい、とルイズは手招きをした。

どうやら機嫌を直し、毛布の中で共に暖まりたいようだ。

その行為は互いの全てを求め合う心を昂ぶらせ、自らの首を絞めるだけであるとわかりきってはいたが、才人は忠実にも主の命令に従い、狭いベッドの中ルイズと肩を寄せ合って毛布を頭から被る。

同時に胴に腕が回され、才人はあわてて動いてしまった毛布の位置を直し、熱が逃げないように隙間を潰す。

毛布の中はルイズの甘い体臭で満たされており、彼女の吐く息のお陰か中々暖かった。

「サイト、ちべたい」

「もう一つ、俺の分の毛布を出して来ようか？」

「ううん、このままでいい」

形式上はルイズが寝台を使い、サイトは床、もしくはハンモックを吊して寝る事になっていた為、毛布は2枚支給されていた。

が、当然というか、同じベッドで眠りたいルイズの希望により、才人に支給されていた毛布は早々に小さなベッドの下に設えられた物置に放り込まれていたのである。

ルイズはいつもそうするように才人の胸に顔を埋め、むふう、と大きく息を吐いてしばしの安心感を得ながら脱力した。

一方、才人もやっとルイズの機嫌が直った事に安堵を覚えて、その頭を優しく撫でてやりながら、わき起こりつつある劣情を忘れようとこれからの事に思いを馳せた。

事はここまで一応は歴史の通りに進んでいる。

前の人生の中で経験した事のない事件に巻き込まれて来たが、大きな歴史の流れは変わってはないようだ。



ただ一つ、本来ならば死んでいるはずのウェールズの存在だけが才人にとって気がかりであった。

勿論、彼が存在しているが為にタバサの母親救出が失敗すると考えているわけではない。

が、ウェールズの生存が才人とルイズのアルビオン戦役を大きく変えてしまっている事は事実である。

アンリエッタはアルビオン戦役の要となる、ルイズの虚無”イリュージョン”による陽動そのものは遂行させるつもりではあるようだったが、言い知れない不安が日増しに大きくなるのを才人は感じていたのだ。

無論この先もウェールズを死なせるつもりは毛頭無い。

しかし、その事がどう歴史に関わってくるか。

改めて今考えてみると、彼の生存は後世に大きな影響があるような気がして、どうにも落ち着かないのである。

歴史の大きな流れを変えてはならない。

それだと、ウェールズを生かしておく事はどうなのか？

タバサやアンリエッタに未来の記憶を話す事は？

今までに経験した、数々の”巻き込まれないはず”の事件は？

才人はルイズの頭を撫でながら、数々の疑問に答えを見つける事ができず悶々としてしまう。

「サイト？」

「……なんだ？」

「何を考えてるの？」

才人の様子を察したルイズが、胸に抱きついたままそう尋ねてきた。

考え事に没頭するあまり、ルイズの頭を撫でていた手がいつのまにか止まり、そこから敏感になにかを感じ取ったらしい。

一瞬、才人はギクリとしてまた機嫌が悪くなるのかと思ったが、

その声色に棘は無い事に気が付いて、安堵しながらもなんでもないと簡単に返答した。

「……あんまり一人で悩んじゃ、いやよ」

「ん。わかってるよ」

「……偶にね」

「ん？」

声色は変わりなかったが、胴に回された腕の力が強くなるのを才人は感じた。

「私、あんたの事、わからなくなる事があるの」

「わからないって……」

「なんていうか、言葉じゃ言い表しにくいんだけど、私の使い魔なのにそうじゃないっていうか」

「なんだ、それ。俺はお前の使い魔だし、今だって視覚とか共有できるだろ」

「ううん、そういうんじゃないってね。なんか、ふといきなり居なくなりそうなの、そんな不安があつてね。……嫉妬とかそういうんじゃないって、時々なんだけど」

そこで一度言葉を切ったルイズはまるで自身をそれで満たそうとするように、腕に力を込め直し、才人の胸に押しつけていた顔を更に押しつけた。

服は才人と地球に行った際、大量に買い溜めていた内の一着で、柔らかなフリース生地が心地よい体温を伝えてくる。

「なんだか、サイト、時々すごく遠い目をして考えてる時あつて。きつと、これからの事とか考えて居るんだろうな、ってその時は思うんだけど」

「うん」

「後になってふと、思い出すの。そして、なんとなく、不安になるのよ」

「考えすぎだよ。俺、お前の側しか居場所無いし」

「ううん。あんたなら、きつと誰もが居場所を用意すると思うわ」

「そんな事ねえよ。考えすぎだって。戦争に参加してて、その中で重要な任務与えられて、少し参ってるんだよ」

「……そうかな？」

「そうさ」

それきり二人は黙り込んでしまった。

何となくであったが、なぜか交わす言葉が見つからなかったからだ。

共に潜り込んだ毛布の内側は二人の吐く息により暖められ、互いの体温も心地よい。

しかし、言い知れない不安も又、毛布の内側に留まって二人を包むのであった。

「ねえ」

「ん？　なんだ、ルイズ」

果たして、小一時間程の沈黙を破ったのはルイズである。

声はやはり甘えたような物であり、少し、遠慮がちで。

「何処にも行っちゃ、嫌だからね？」

「何処にもいかねって」

「約束だからね？」

「あいよ、約束な」

会話は短く、何気ないものではあったが。

ルイズは才人の胸にまわしていた腕を解き、寒さを忘れ毛布がズリ落ちるのも構わず、恋人の顔を見るべく上体を起こした。

それから自身の内に巢食う不安を追い払うかのように、いつもよりも少し長い口づけを交わす。

この時の締めくくりに交わした幾度目かのキスは、何故かルイズの心に強く残り続けて行くのであった。

”片目” のネルソンは才人の予想に反して、やせ細った老人であつた。

”麗しのアンリエツタ号” を無事係留し終えたウェールズは、かねてより予定していたネルソンとの会談を行う為、アジトの中へと案内されていた。

ウェールズに同行したのは、ルイズと才人の2名だけである。

これは相手を刺激せぬ為に最小の人数でと言う訳ではなく、単に才人が何があつても守れそうな最大の人数であるという事で決まつた数字だ。

無論、当初はウェールズと才人の二人きりの予定ではあつたが、ルイズがごねた為、3名で ”片目” のネルソンと会談に臨む運びとなつてしまつていた。

だがしかし、空賊達はそのような事情は知る由もない。

それにウェールズ達が ”魔の空域” を抜けて来たという噂も相まつて、その勇氣には相応の敬意が払われ、丁重に扱われてもいた。

「よく、きたな。皇太子よ」

「ご無沙汰しております、ネルソン提督。約束通り、 ”魔の空域” を抜け参上しました」

「ククク、まさかお前さんのようなひよっこが、あの空域を抜けるとは、ゲフ！ゴフ、ゴォフ！」

空賊の頭領の寢室に通されたウェールズは、天蓋付きの、やけに豪華なベッドに横たわる老人とそのような挨拶を交わした。

直後、老人は激しく咳き込みはじめ、苦しそうにしたまま、枕元の水差しからカップに水を入れて飲もうとする。

ウェールズは思わず前へ出て手を出しかけたが、当のネルソンはそれを制止し、自分でカップに水を入れ一気に飲み干した。

「お体の具合が思わしくないようですね」

「ああ。君の父上が亡くなってからこっち、特にな。……ハルは元気にしているか？」

「ええ。私もまだまだ教えを請う事も多く、引退もできぬと常々小言を言われております」

「ふん、あの青二才が偉そうに」

「ははは、先々代のアルビオン国王の治世から活躍しておられる空の男にかかれば、何人も青二才でありましょう？」

ネルソン老人はウェールズの言葉にふん、とつまらなそうに鼻を鳴らし、もう一度カップに水を注いで一口、口を濡らす。

部屋は暗く、昼間であるにも関わらずカーテンは締め切られているためか、才人はこの時始めて目の前の老人が片目であることに気が付いた。

つまりその左目には黒い眼帯が覆われ、そこに描かれている鬮體の紋章が見えたのである。

「片目」のネルソンという二つ名から予想できようものではあったが、空賊の二つ名は大概、相手に脅威をあたえる事が多い。

従って、才人のように「抵抗した相手の片目をえぐる」から

「片目」のネルソンと呼ばれる、と勘違いする者はハルケギニアでは珍しくはなかった。

「……まあ、俺も空の男だ。二度と王家の飼い犬になるつもりはな

かったが、約束は守るとしよう」

「では……」

「ラックスフォードへの侵入の手助けと、お前のフネの留守を請け負ってやる」

「ありがとうございます。作戦の成功の暁には、相応の礼を……」  
「まで。俺の話はまだ終わっちゃいねえ」

声は低く厳しく、交渉の成立に胸をなで下ろしかけていたウエルズは心中に冷や水が浴びせられた。

また、ルイズと才人にも、皇太子と空賊の首領の会話の全貌が見えなかったものの、どうも雲行きが妖しくなりそうだという緊張が走る。

そんな3人の事など気にも留めず、ネルソン老人は話を始めるでもなく、ベッドに横たわったまま、水差しの隣に置いてあったハンド・ベルを鳴らした。

しばし間を置いて、才人達が入ってきた入り口とは別の部屋の奥にあった扉がゆっくりと開く。

それから、一人の人物が入室して来てネルソン老人の枕元まで歩み寄って来た。

人物はルイズよりかは身長は高かったが小柄で、男物の服装に力ツトラスと小銃を腰に下げてはいたがウェーブがかかった金髪を首元で束ねており、女性であるとわかる。

「……紹介しよう。俺の右腕で孫娘のメアリだ。今は俺の代理をして手下をまとめている。なにせ、俺はこのザマなんでな」

ネルソン老人の言葉の真意がつかめず、才人達は少し会釈を送ってそのまま説明を待つ。

しかし、老人の紹介に続いたのは説明などではなく

「覚悟！」

突如、メアリはカットラスと小銃を抜きながら、ウェールズに突進したのだ。

カットラスとは空賊や海賊がよく使う片手用の曲刀で、狭いフネの甲板上でも振り回せるよう、取り回しが重視された武器である。

特に狭い室内などで振り回す分には、かなり有利になる武器の一つだ。

これには流石のウェールズも虚を突かれ、腰の杖を抜く事すら忘れて反射的にその腕を上げ、既に振り上げられたカットラスを受け止めようとしてしまう。

しかし、振り下ろされたカットラスは肉を断つことはなく、代わりにギーン！ と鋼と鋼がぶつかる音がした。

「いきなり何をするんだ?!」

「殿下！」

「ネルソン提督?!」

まず何時の間に移動したのか、ウェールズとメアリの間に身を滑り込ませた才人が、デルフリンガーで振り下ろされたカットラスを受け止めながら叫び、その後ルイズとウェールズの言葉が続く。

一方、メアリは少し驚いた表情を浮かべはしたものの、振り下ろしたカットラスから力を抜こうともせず、あるう事が更に攻撃を加えるべく後に飛びながら銃を構えた。

銃は単発式で威力はそれ程でもなかったが、それでも至近距離から発砲されれば致命傷は免れない。

その銃口は正確にウェールズの眉間に狙いが定められて

刹那の後、部屋に轟くは、火薬の炸裂する音と同時に先程と同じような金属がぶつかる音。



「……嘘……そんな……」

この時、何が起きたのか理解していたのは二人だけ。  
才人とメアリである。

メアリは今度は信じられないといった驚愕を表情にありありと浮かべながら、見かけよりもずっと若い声の独白を口にする。

無理もない。

引き金を引くと同時に、彼女が定めていた必殺の射線には白い剣閃が煌めき、火花が散ったのだ。

その一瞬、タイミング、距離、狙いともに、いかなるメイジを屠るにも万全の状況であった。

にもかかわらず、まさかその弾丸を剣で打ち落とされるとは誰が想像できよう。

「い！ 聞いているのか？ 武器を捨てる」

その一瞬、メアリは呆けてしまっていたらしい。

気が付くと喉元にはあの剣士が使う大剣の切っ先が突きつけられ、武器を捨てるという声が耳に届いていた。

「メアリ、武器を捨てる。お前の負けだ」

緊張感が急速に膨らみ、対峙する二人にネルソン老人はやつと声をかけた。

同時に、ポトリと音を立ててメアリの手から武器が床に落ちる。

しかし、才人はデルフリンガーを降ろさず、警戒を解かず、神経を研ぎ澄ます。

武器を降ろした瞬間、隠し扉が開いて空賊の手下がなだれ込んで来ないとはかぎらないからだ。

「皇太子、すまねえな。この子の親は貴族にとっつかまって、縛り首にされちまったもんで、こうしねえと気がすまねえって聞かねえんだ」

「ちよつと！ 殿下は危うく死ぬ所だったのよ?! そんなの納得」

ネルソン老人の言葉に噛みついたのはルイズであった。

しかし、その言葉を遮ったのは命を狙われた当のウェールズ本人である。

彼は隣で怒鳴ろうとするルイズを制止ながら、一步前に出てじつとデルフリンガーを突きつけられたメアリを見つめた。

メアリは未だ信じられないといった表情をしていたものの、剣を突きつけられているにもかかわらず恐怖は感じていないようで、向けた視線に強い意志を込めた眼差しを返して来る。

「私が憎いのかね？」

「……いや。あたいのオヤジやオフクロが縛り首にされたのは、他人の命だつて奪つたりもした空賊だったからだ。アンタを憎むのはお門違いさ」

「じゃあ、なぜ？」

「一つは八つ当たり。ジジイも言つてたろ？ 一回、貴族のぼつちやんに死ぬ思いさせねえと気が済まなかつたんだ。残りはあの”

魔の空域” を抜けた、空の男の腕試しさ」

「……気はすんだかね？」

「……ああ。後はこの化け物みたいな剣士の気が済むのを待つだけさ」

言つて、メアリの口の端をつり上げながら大仰に肩をすくめた。

ウェールズはもう一步前に出て、長大な剣を突きだしたまま、微動たりともしない才人の腕に手をやって、もういいとばかりに頷く。

才人はその合図を受けて警戒を解かず ゆっくりとデルフリンガ  
ーを降ろし、背にした鞆に納めた所で緊張は一気にしぼんだのであ  
った。

「ネルソン提督。説明きちんとしていただけるのでしょうか？ 先  
程、約束は守ると確かにおっしゃっておりますが？」

「……ああ。それは、ゴフ！ ゴホ、……失礼」

「いい、ジジイ。あたいが説明する。大人しく水でも飲んでろ」  
「君が？」

「ああ」

そう言つて、メアリはニヤリとした。

彼女の背後では、ネルソン老人が再び水差しからカップに水を注  
いでいる。

また、手にしたカップの水を飲み干しても何も言わない所を見る  
と、どうやら後の説明をメアリに任せるつもりのようなようだ。

「最初にジジイが言ったとおり、ネルソン一家はあんた達との約束  
は守る。まあ、さっきのはあたいのワガママだったんだが、これか  
らの本題にも関係があんだ」

「是非、その本題を聞きたいものだね」

「ああ、今説明してやんよ。なに、話は簡単だ。ジジイは見ての通  
りこのザマだろ？ で、その跡目があたいみたいいな小娘と来てる。

つて、わけで、今ネルソン一家は大変なんだ」

「大変つて、どういうことだ？」

「なに、王子様のお家と一緒にさ。昔かたぎのジジイやあたいが気に  
いらねえ、つて大勢の手下連れて出て行ったクソつたれが居るんだ  
よ。でな？ そいつらがいなきゃ、守れる約束も守れねえんだわ」

「な、なんですつて！ そんな言い訳、通るとでも思ってるの?!」

その、あまりに無礼な物言いと先程の仕打ちにルイズが思わず、暴発してしまった。

ウェールズは今度は制止せず、ただ困ったような視線を才人に送り、才人の方もあっちゃあ、と頭をかきむしる。

しかし、怒りに瞳を曇らせたルイズにはそんな二人の様子など目に入らない。

「そつちにどんな事情があるかはわからないけど、約束は約束でしょう？！ 大体何よ！ 偉そうにふんぞり返ってるくせに、不意打ちをしてくるなんて！ 恥を知りなさい恥を！！」

「へっ、お貴族様は言う事が違うねえ。お前、立場わかってんのか？」

「何がよ！」

「俺達は確かに恥知らずかもしれないねえ。だから別に約束だって守らなくても困りやしねえんだぞ？」

メアリはそう言って、ニヤリと口の端をつり上げた。

対して、怒りに身を焼くルイズは思わず口を結び、罵倒の言葉を呑み込む。

幾ら頭が白く焼けているとはいえ、メアリの言葉の意味を理解出来る程度には思考が働いているらしい。

「やめねえか、メアリ。天秤にお前のワガママと一緒に俺の約束を乗せるんじゃないねえ。……皇太子、すまねえな。約束は守る。そつちの嬢ちゃん言葉も水に流すから、どうか孫の無礼を許してくんな」

「それは、まあ……けが人も居ない事ですし」

「殿下！ こんモゴモガ」

八つ当たりで命を狙われた事と、自分の無礼が釣り合うはずがない。

ルイズはそう訴えようとして、才人に取り押さえられ口を塞がれてしまった。

バタバタと暴れるルイズに耳元で囁くようにして必死に大人しくするよう、説得を試みる才人。

先程のやり取りを見て、力関係が決して対等ではないと感じ取っていたからこそその行動である。

「バカ！ やめろ！ 殿下の立場を悪くしてどうすんだよ！」  
「でも！」

「冷静になれ！ ここで相手の体面をへし折って誰が得するんだ？」

「……元気のいい部下だな。羨ましいこった」  
「いえ、彼女達は私の友人です、ネルソン提督」

ウエールズの言葉にネルソン老人は一つしかない目で才人とルイズを順番に見つめた。

視線は鋭かったが、どこか羨望が混じり、小声で言い争っていた二人は居心地の悪さを覚えて、思わず動きを止めてしまう。

やがて何を感じたのか、ネルソン老人はくくと喉の奥で笑い、視線をウエールズへ戻した。

「そうか。 その若い剣士といい、皇太子、あんた中々いい友人を持つているようだな」

「自慢の友人ですよ。それで……メアリ殿。続きの説明をお願いしても？」

「……ああ、いいぜ。どこまで話したっけか？」

「手下が大勢居なくなつたと話しておいででしたが」

「ああ、そうだった。少し前までは若頭にドレイクって野郎を使つてたんだが、じじいがこの有様になった途端、好き勝手始めやがったんだ。で、頭領代理のあたいと衝突した後、唾つけてた部下をこ

つそり引き抜いて出て行きやがったんだよ」

「では私との約束は……」

「果たしたいが、数が足りねえ。そこで、だ。あんた達に頼みがある」

そう言いながら、メアリは落とした銃とカッタラスを拾いあげ、鮮やかな手つきで納刀と納銃を行い、何故か才人の方を見てニヤリと笑う。

才人とルイズはなんとなくイヤな予感を覚えつつも、メアリの頼みとは何か、もみ合う姿勢のままじっとして、次の言葉を待った。

果たして、メアリの頼みとは……

「野郎共！ 聞け！」

時がほんの少し流れた、 ” 片目 ” のネルソンのアジトである

浮島。

島の一部をくりぬいて作られた館の外には、数十人からなるネルソン一家の手下達が集められていた。

そんな手下達の視線の先には、彼らを纏めるメアリと、才人にルイズ、ウェールズと特殊な椅子に座るネルソン老人が在った。

ネルソン老人は既に自力では歩けないらしく、大の男が二人で担げるよう、取っ手が付いている椅子に座り、膝に毛布が掛けられている。

「ここにいる3人は、お頭との賭けに勝ってあの ” 魔の空域 ” を抜けて来た英雄だ！」

メアリの言葉にどよめきが走る。

空賊に限らず、空の男達にとって ” 魔の空域 ” とは絶対不可侵の空域であるからだ。

なにせ、そこを通り抜けてくると言う事は数千年の間、だれも成し遂げては居なかつたのだから。

「お頭は約束した！ もし、ここにいる連中が ” 魔の空域 ” を抜ける事が出来たなら、ラックスフォードへの侵入の手助けをしてやると！」

再び、手下達の間にとよめきが走る。

しかし今度は驚愕ではなく、不安の色が濃かつた。

「お嬢！ ラックスフォードっていや、この辺りを取り締まる空軍基地がある街ですぜ！」

「おう、それがどうした?!」

「無茶だ！ あそこは警備は厳重だし、高速哨戒艇が3隻もいるんですぜ?! それに、こつちの手の内だつてドレイクの野郎があそこに居る限り、近寄る事すら難しい！」

「へっ、この ” 北風 ” メアリが ” 人喰い ” ドレイクを恐れるかつてんだ！」

「しかし!」

「まあ、話を最後まで聞け！ あたいが今まで、お前達の意見一つ聞かずに物事を決めた事があるか？」

メアリの言葉に、手下達のどよめきがしぼんでいった。

彼女は手下達の信頼をそれなりには得ているらしい。

やがて無言となつた手下達をメアリは見渡して、少し声の音量を落としながら演説を再開する。

「いいか？ ネルソン一家は約束は絶対を守る。それに、この仕事

がうまくいきや、この辺りの通商権をまるごとあたいた達が手に入れられるんだ。そうすりゃ、こんな危ねえ浮島ともおさらばさ」

「お嬢！　そ、そりゃ本当ですかい?!」

「本当だ。それに、諸君らにかけられた賞金と今日までの罪状をすべて、撤回しよう。このウェールズ・テューダーの名において、約束する」

答えたのはメアリではなく、ウェールズであった。

手下達は再びざわめき、口々にあのプリンス・オブ・ウェールズが、と近くの者と話し始め、ある者は色めき立ち、ある者は疑いも露わに皇太子を見つめる。

「どうだお前達！　この仕事の見返りはでかい！　危険を冒す価値はあるだろう?」

「　しかしお嬢！　”人喰い”　ドレイクはどうするんですか  
い?!　あいつ、大勢の仲間を引き連れてまんまとラックスフォードの総督に取り入って、今じゃ空賊を取り締まる空軍気取りだ!」  
「そうですね、お嬢！　あいつが居る限り、空戦は無理だ！　あいつ程空賊の戦い方を熟知している奴はいねえ！　当然、こつちのやり口は全部しつてやがる!」

「心配すんなつつつてんだろうが！　今、手前らのフニヤチンを蹴り上げるようなもん、みせてやるからまってる!」

メアリはそう啖呵を切るや、くるりと回れ右をして、才人とウェールズの方を向いた。

それからニヤリと笑いながら、さあ、と手を差し出し、前に行くよう促す。

才人はウェールズと思わず顔を見合わせてから、その真意を測りかねてメア리를問い詰める事にした。



「……どういうつもりだ？」

「なに。頼みつてのは、こいつらの説得さ」

「はあ?! なんで俺達が?!」

「話聞いてたろ? あたい達は今、とてもじゃないがラックスフォードに近寄れる状況じゃねえんだ」

「でも約束したんだろ？」

「ああ、約束は守りたい。が、その力がねえつつつてんだよ。今のままじゃ手下を無理に働かせても、どうせ誰かが裏切る」

「じゃあ、どうしようもねえじゃねえか！」

「そうだ。そこで、だ。あんた達に ” 魔の空域 ” を抜けて来た力を見せて欲しいんだ」

「……はあ？」

「空賊つつつても迷信深い連中ばかりだからな。なんでもいい、こいつはすげえ! って思えるようなもん、見せてやってくれ。そうすりゃ、根は単純な連中だ。皆、死力を出して働いてくれる」

つまり、こういうことか。

こいつは、約束を守るうにも守れない状況になったから、俺達に部下を説得しろとけしかけてるのか？

……きつたねえ。そんなもん、無理に決まってるじゃねえか。

いや、それをネタにして諦めさせようというわけか。

才人はさあ、早くと急かすメアリを見ながら、途中でそう毒づいてウェールズにどうするのかアイコンタクトを取った。

視線が合ったウェールズもまた、メアリの真意に気が付いているようで、しかしその表情には迷いがありありと浮かんでいる。

ウェールズにしてみれば、なんとしてもアルビオン大陸への上陸を果たしたいはずだ。

それに、この旅の目的はアンドバリの指輪の奪還にある。

そう考える才人にとっても、アルビオン大陸への上陸はかならず成し遂げる必要があった。

「サイト?」

「サイト君?」

「おお、やっぱお前か。ただ者じゃねえって感じてたんだ。よし、なんでもいい、一発派手な芸でも見せてやってくれ!」

そっだ、迷う事は無い。

才人は一歩前に出て、メアリに導かれるまま、集まった手下達の前に立った。

メアリと手下達の会話から察するに、問題は ” 人喰い ” ドレイクという人物と、空戦の戦力にあるらしい。

ならば

「なあ、ミス・メアリ?」

「呼び捨てでいいぜ。あたいは強い奴は好きだしな」

「そっか。じゃあ、メアリ。あの浮島ってさ、使ってるか?」

才人はそう言って、アジトのある浮島の少し上方に浮かぶ他の浮島を指差した。

「ん? いや。ありゃ、使いもんになんねえし」

「誰か住んでたりとかは?」

「んなわけあるか。誰もいねえよ」

「そっか。じゃあ、みんなにあの浮島を見るよう、言ってくれないか?」

「わかった。お前ら! あの島を見る! 今から ” 魔の空域

” を抜けた勇士が、その不安が吹き飛ぶようなもんみせてくれるそっだ!

台詞とは裏腹に、メアリは不審そうな表情で一度才人を見て、上

を向いた。

また、ウェールズも不安な表情のまま、才人の言うとおりに上方に浮かぶ島へと視線を向ける。

ただ一人、ルイズだけは自慢げな表情を浮かべて、才人が地面から槍を作り出すのを確認し最後に上を向いた。

そして。

寒いが抜けるような青い空に一筋、銀光煌めく槍が飛び、周囲に幾つも雲のリングを作りながら多くの視線が集まる島へと吸い込まれ 次の瞬間。

まるで何百もの落雷が同時に起きたかのような轟音と共に、島は派手に爆散したのだった。

その、久しぶりに行った ”グリムニルの槍” の全力投擲の威力は凄まじく、爆音に遅れて爆風がその場に居た者達を襲い、次いで静寂が辺りを包んだ。

勿論、さっきまで見上げていた浮島は跡形もなくなっている。

「これでどうだ？」

あまりの出来事に自失して、いつまでも空を見上げていたメアりに掛ける声があった。

慌てて視線を戻すと、そこには才人の茫とした顔があつて。

思考がやつと現実を追いついた時、何を思ったか。

気が付くとメアリは目の前の黒髪の男に抱きつき、激しいキスをしていた。

その行動はその場に居た誰もが予想だにしていなかったらしい。

ただ一人、ルイズだけが怒りの声を上げてはいたものの、メアリはお構いなしに才人の唇を、舌を貪り、他ならぬ才人自身の手によって引き剥がされた時、その瞳はすっかり、恋する乙女の物となっていた。

その行動の一部始終は衆人環視の元で行われ、才人の体を奪い返

し、歯を剥き威嚇するルイズの事など目に入らないかのように、人目を憚らず”北風”メアリは言い放つ。

「お前、あたいの婿になれ！ お前こそ、ネルソン一家の跡取りに相応しい男だよ！」

7-14: *extra episode* / 美姫は空を征き、英雄は地を逝く(前)

100話目。

頑張ったなあ……

そこにあつたのは、恋心だとか、運命だとか、そういった物では無かった。

物心がついた頃より甘い夢を見る事を諦め、代わりにカットラスと小銃を与えられ。

同年代の友人も無く、恋をする事もなく、乙女はひたすらにローブワークと剣技を仕込まれる毎日を過ごしてきた。

両親どころか周りはずべて空賊という環境下で育ったメアリは、両親の死と頭目の腹心の裏切りにより、この時追い込まれていたのである。

唯一の肉親は余命幾ばくもなく、己に期待されるのは頭領としての役割。

しかし現実には袋小路のように行き先も出口も見えぬ毎日で、そんなある日、突如差し込んだ強い光こそ才人であった。

この男を手に入れる事ができれば、ネルソン一家は必ずや安寧の時を得られる！

あり得ない光景にこみ上げて来た物は、強者への憧れや怪物への恐怖でなく、打算であつたのだ。

「お前、あたいの婿になれ！ お前こそ、ネルソン一家の跡取りに相応しい男だよ！」

そう言い放ち、メアリはもう一度強く熱く才人の唇を吸おうといや、更に深く舌を絡めようと唇を開いて、目を瞑り顔を近付け

た。

が、今度は強い力で突き飛ばされてしまい、同時にボム！と音がして小さな爆発が起こる。

「こおの、浮気ものお！」

突き飛ばされ、尻餅をつきながら小さな混乱を来しているメアリの目の前に躍り込んできた者は、皇太子に付き従い会談の場にいた、あの生意気な貴族の娘であった。

小柄な自分より更に小柄な娘は、よく手入れされたピンクブロンドの髪を振り乱し、杖を手に衆人環視の元、まず罵倒の言葉を発して。

それから謎の小爆発によって倒れていた少年に馬乗りとなり、その胸ぐらを掴み上げ、空賊も思わず引く程の剣幕で暴行を加え始めたのである。

「おい！ やめろよ！ そいつはあたいの婿にするんだぞ？！ 傷物にするんじゃない！」

「な？！ なにを言ってるのよ！ ”コレ” は私の！ 私の物よ？！ あんたなんかに渡すものですか！」

メアリの制止にピンクブロンドの娘は更に逆上し、既にボロ布のようになつた少年を今度は大事そうに抱き上げ、餓狼のように歯を剥き威嚇する。

「どうやら少年と娘は ”そついう” 関係らしい。

しかし、それがなんだというのか。

あたいは空賊。

奪う事を生業として生きてきたんだ。

欲しい物は力尽くで奪う。

それが、ネルソン一家の掟。

「うるせえ！ そいつはあたいのもんにするんだよ！ こつちによこせ！」

「嫌よ！ なんでアンタみたいなのにサイトを渡さないといけないのよ！ サイトは私の使い魔なのよ?!」

「知るかそんな事。おい、あんちゃん、聞こえるか？ そんな嫉妬深い奴、さつさと捨てちまってあたいに乗り換えな！」

「なんですつてえ?! あなた」

「あたいなら、浮気も好きなだけさせてやるし、いきなりはたいたりしねえぞ？ 見てくれだって、小綺麗にすりゃちよつとしたもんになるしな。なにより、こう見えて尽くすタイプなんだぜ？」

「ちよつと！ 何言ってるの?! ちゃんと聞きなさいよ！ サイトは、私の物だっていつてるでしょ!」

「お前こそあたいの言葉をちゃんと聞いているのか？ 知るかつつてんだよ」

「このお！」

「やるかあ?!」

激情のあまり、貴族の娘 ルイズは美しい顔を歪め、ぺつと抱き上げていた才人を地に捨てて杖を左手に持ち、右手で腰に差していた短剣”毒竜の牙”を抜いた。

同時にメアリもカットラスと小銃を引き抜いて、女豹のようにしなやかな動きで腰を落とし戦闘態勢に入る。

餓狼と女豹の殺気がぶつかり始めた場は一気に緊迫した物へと代わり、その場に居たネルソン一家の手下と”麗しのアンリエッタ号”のクルー達は固唾を呑んだ。

そして、流石に放置すべきでないと判断したウェールズとネルソン老人が制止の声を掛けようとしたその瞬間。

突如、二人の頭に青白い雲が発生してまわりつき、程なく二人は仲良く地に倒れ込んでしまうのであった。



「……やれやれ。ネルソン殿、お孫さんへの無礼、どうかご容赦を」  
「お前さんがやったのかい？ 皇太子、この娘は……」  
「部下のミス・ブロウです。先程の会見の時は同行させておりませんでした。私のフネで船医見習いを。ご心配なく、あの魔法は彼女が唱えた ”スリープ・クラウド” です」  
「そうかい。いや、気にしないでくんな。どのみちブン殴ってでも止めねえと収まりやしねえようだったしな」  
「恐縮です」  
「……だが、ちつとばかり、あの坊主を婿に迎え入れ損なつたのはいたいかもしれんな」

ネルソン老人はそう言つてがはは、と豪快に笑い、ウエールズも釣られて苦笑いをうかべる。

一方、ケイトはというと ”麗しのアンリエッタ号” のクルー達に運ばれるルイズと才人を見ながら、ばか、と小さく呟きため息を深く吐くのであつた。

その罵倒は誰の耳にも入らず、本人でさえ誰に向けたものかは定かではない。

ただ、得体の知れぬ脱力感だけは、彼女に実感できる確かな物であつた。

ルイズが目覚めたのは、それから小一時間程経つた ”麗しのアンリエッタ号” の自室である。

小さな寝台の傍らには才人が座っており、鞘から抜いたデルFRINGERと何やら話し込んでいた。

それ故にか、才人はルイズが目を覚ました事には気が付かない。ルイズはそんな才人に何となく気が引けて、声を掛けずそのまま

じつと聞き耳を立てる事にした。

いつもの事ながら、頭に血が上り手を上げてしまった事が恥ずかしかったからだ。

「　　って、いつも言ってるだろう？　相棒。そんなんじゃ、嬢ちゃん可哀想だぜ」

「う……だつてさ。殺気とか敵意込められてりゃ、咄嗟に反応出来るけど」

「ったく。そんなんだから、チキユウに行った時の帰りみたいにキスされちまうんだ。二度目となりゃそりゃ、嬢ちゃんも怒るわな」

デルフリンガーの言葉にルイズは寝台の中、寝たふりをしながらうんうんと頷いた。

いつも思うのだが、才人は兎に角、脇が甘い。

あれ程の体術と剣技を持ち合わせながら、どうして女の子のキスを避けられないのか。

もしか、ワザとなのでは？　とさえルイズは思っていたのだ。

「お、俺は別にそうしたくて……」

「相棒にそのつもりがなくても、嬢ちゃんはそうは思わねえんじやねえか？」

「う……」

「大体、相棒。お前さんはソツチ方面は隙だらけなんだよ」

「そうよ！　ボロ剣、中々良い事言っじゃない！

もっとよ！　もっと言っつてやりなさい

寝たフリをしながら、ルイズはデルフリンガーにエールを送る。

「どうやら才人とデルフリンガーは、先程の件の事を話しているよ  
うだ。」

「いや。」

先程の件だけでなく、サイトの周りの女性についての話をしているかもしれないわね。

ここはもう少し寝たフリをすれば、そこら辺、サイトがどう思っているか本心が聞けるかもしれないわ。

そう考えて、ルイズは耳に神経を研ぎ澄ます。

「何を言うんだよデルフ！ 俺はルイズ一筋だぞ?!」

「相棒、そこ。そこだよ」

「どこだよ、そこって」

「嬢ちゃん一筋のつもりでそこしか見てねえから、かえって他の娘を引き寄せてんじゃないか？」

「そんなこと……」

才人はデルフリンガーの言葉を否定しつつも、言葉尻を窄めた。

「どうやら、多少は思い当たる節があるらしい。」

ルイズはそんな才人の様子に、以前キュルケから聞いた話を思い出していた。

『微熱』いわく、女という生き物は他人の物を欲しがると一面があるらしい。

それは猛獣の狩りに似て、手の届きそうにないモノ程美味に思え、結果他人の恋人や夫がひどく欲しくなる事があるのだとか。

勿論、そういった感情は道徳や美意識によっていくらかでも駆逐できる。

しかし、根の部分ではそういった感情が燻り続けて、ひよんな事から燃え広がるのだそうだ。

それを ” 魔が差す ” と言うらしいのだが、もしかしたら才人に言い寄る女の子は、そう言った ” 女の部分 ” を刺激されたのかもしれない。

ルイズはそう思い至って、一人納得をした。

「でもさデルフ。じゃあ、俺、どうすりゃいいんだよ？」  
「んー、そうだな。会う女すべてに『俺はルイズ一筋だから惚れな  
いように！』って言うとか？」「やだよそんなの！ 初対面でそん  
な事言い出す奴が居たら俺でもドン引きだぞ?!」  
「じゃ、逆に他人が近寄れ無い程、常に嬢ちゃんとイチャつくとか」  
「……デルフ、真面目に考えてくれよう」  
「わはは、悪いな相棒。だが、何処まで行っても俺様には他人事だ  
ぜ？」

ちよつと！

他人事とか言っていないであんたもどうすればいいか考えなさいよ！  
役に立たないボロ剣ね、まったく。

寝たフリをしているルイズがそう叫ぶわけにもいかず、呑み込ん  
だ言葉である。

ルイズは感情が顔に出る事が恐れ、ん、と少しわざとらしく呻い  
て才人とは反対側に寝返りを打った。

その動きに才人は反応して立ち上がり、ベッドにのぞき込みなが  
らルイズ？ と呼びかけてくる。

しかしルイズはつい、その首に手を回し抱き寄せたくなる衝動を  
覚えつつも寝たフリを続けて、やがて遠ざかる気配に後ろ髪を引か  
れるのであった。

「どうした、相棒？ 嬢ちゃん起きたんじゃないのか？」

「いや。眠りは浅くなってるからもう少しだと思っ」

「ふうん。もう起きても良い頃だとおもうんだがな」

「ケイトが言うには、”スリープ・クラウド” はそんな長続き  
しない筈だって話だしな」

「案外、目覚めのキスでも待っているかもしれないねえぜ？」

言葉に、トクン、と一つ、ルイズの心臓が大きく跳ねた。

キスはことある事にしていたのだが、そのようなロマンチックなキスはまだされた事がない。

いや、過去にもして欲しい、とは思った事はあったが、強請るようにはしたくない真似を貴族の誇りが許さなかったのだ。

「……やめとく」

「なんでまた？」

「ルイズ、多分起きたらすっげえ勢いで怒り始めると思うし」

「わはは、多分そうだろうな！」

「そんなごまかし方はしたくねえもん」

「おお！ 男だね、相棒」

「デルフ、お前……気楽でいいな」

才人の台詞は落胆となつてルイズの耳に届いた。

それからふと、ルイズはある事に気がつく。

今、才人に足りないモノ。

それは、他者をぞんざいに扱える、鈍感さではなかるうか。

どうも、才人は自分の事を思いやるあまり、気を回しすぎて裏目に出ている気がしたのだ。

自分としては、多少、もっと、強引であつてほしくもある。

「おう。他人事だしな。だからこそ、ちょっといい案が浮かんだぜ？」

「本当か?!」

「ああ。なえ、相棒。嬢ちゃんと一発、” やって ” みちやどうだい？」

「……はあ?! お前、真面目に」

どうも、話は奇妙な方向に向かい始めたらしい。

ルイズは耳まで赤くなるのを感じながら、必死に漏れ出そうにな

る言葉を呑み込み続けた。

い、いきなり、何を！

と、叫びたくもあつたのだが、それよりも話の流れで、もしや才人が自分に襲いかかってくれるのかもしれない、という甘美な期待が大きく膨らんだのである。

「まあ聞けよ、相棒。そもそも、キスされたりや言い寄られて、嬢ちゃんがなんで相棒に辛く当たると思う？」

「そりゃ、俺がシツカリ断らないからで……」

「いいや、違うね。嬢ちゃんは不安なんだよ」

「不安？」

「相棒が盗られちまうんじゃないかってさ」

「まさか」

「かぁー！ これだから女心のわからねえ奴は。一回死んでもまだわからねえとか、相棒も筋金入りだな！」

「う……」

「いいか？ 相棒。女つてのはな、相手だけ見てりゃいいってもんじゃねえ」

「それはないだろ。ちよつと他の子に目が行くだけで、すっげえ怒るし、俺もそれが当たり前だと思っぜ？」

「ふん。それが違うんだな。つまりだ？ 相棒は早い話、嬢ちゃんが不安にならねえようにすりゃいいんだよ」

「すりゃいいんだよって、お前……」

「考えて見る。抱きついたり、キスしたりは隙あらばだれでも出来る。相棒にその気がなくてもな。だが……」

「だが？」

デルフリンガーは勿体ぶったように、そこで意味深に言葉を切った。

才人もルイズもその言葉の先は予想できていたが、何故、そんな

るかが理解が及ばず聞き耳を立てる。

「だが、”アレ”は違う。なにせ、服脱いで、じっくりたつぷりと”もつれ合う”ひつようがあるからな。相棒がその気にならねえかぎり、そんな事にはならんだろ？」

「……まあ、そうだけど。でも、その何処が良い案なんだよ？」  
「まったく、まだわからねえのか？ 嬢ちゃんとアレをやっとけば、他の女がいきなり抱きついてきたりキスしてきたりしても不安にならねえだろっが」

「なんでそうなるんだよ!？」

「つまりだ、相棒。逆に考えて見る。嬢ちゃんに惚れてる男が沢山居るとしよう。相棒はそんな嬢ちゃんの体を好き勝手にできる。相棒だけだぞ？ 当然、優越感が沸く」

「う、うん」

「その事実がありや、嬢ちゃんが多少他の男に色目使われても、気にならないだろ？」

お、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおお。

呑み込んだ言葉は、感嘆の雄叫び。

ここで寝たフリがばれては、元も子もないルイズである。

なにせ、口の悪いボロ剣と想っていたデルフリンガーが、今、とても良い事を言っているのだから。

冷静に考えれば穴だらけであるが、茹で上がったルイズの頭では光り輝く完璧な魔法としてその言葉は既定事項のように受け入れられていた。

つまりは、このまま寝たフリをしていればサイトが  
考えて、ルイズは先程の怒りなどこへやら、気持ちが高ぶっているのを実感した。

ああ、何処まで寝たフリをしていよう！

布団を剥ぎ取られた時？

それとも、ルイズって囁かれた時？

ううん、だめ。

せめて、服をゆっくりと、慎重に脱がせられる位までは寝たフリをしていよう。

うう、でも服を着たまま、下着だけ脱がされたらどうしよう？

流石に初めては、体温を確かめ合いたいし、服を着たままはや

……

ああ、あと、キュルケが言っていた男の人の悦ばせ方！

じ、自信がないけれど、ど、どどど、やっぱり、り、リードされるだけじゃ、ご主人さまとしては失格、よね？

ああ、でも、口でそんな……舌を突き出すようにするだけでも恥ずかしいのに……

何時の間にかルイズの思考は幼くも淫靡な物へと変わり、期待だけが小さな身体にひろがりつつあった。

しかし。

「……デルフ、だめだそれ」

「なんでだよ？ 相棒？」

「だって、”前”のルイズの時、嫉妬が激しくなったのって結婚してからなんだぜ？」

「うへっ！ 本当か？」

「ああ、ホント。記憶が結構抜けちまつてるけど、そこだけは間違いない」

「わはは、じゃあ、今のままで我慢するしかねえかもな！」

「ここまで引っ張っついて、何だよそれ！」

「そこまで引っ張っついて、何よそれ！！」

重なった言葉は、しかし定められた物が違つて。

結局、寝たフリがばれたルイズはそのまま才人に八つ当たりをし



てしまい、才人も又、反省しきりにご主人様の照れ隠しのような折檻に甘んじるのであった。

才人達が ” 麗しのアンリエッタ号 ” をネルソン一家に預け、 ” 北風 ” メアリと共にラックスフォードへ向かうほんの、一時間前の話である。

7-15:extra episode / 美姫は空を征き、英雄は地を逝く(前

101話目。

前回多くの拍手やメッセージをありがとうございました。

非常に嬉しく、励みになりました。

感謝です、マジで。

” シューティングスター・サーペント号 ” は空賊、ネルソン一家の旗艦である。

とはいっても、つい最近腹心の部下が多くの手下を連れスノーウオール諸島方面を統括する貴族に寝返った為、たったの2隻しかない空賊艦隊の旗艦となっていた。

就航当時はアルビオンには珍しいジーベック級の戦船で、貧乏貴族からたたき上げで北方特別艦隊提督まで登り詰めたネルソン卿が翔るフネとして、空の男達を震え上がらせた歴史がある。

その船体はフリゲート級では最小の ” 麗しのアンリエッタ号 ” よりかは一回り大きく、船腹は狭い。

4本のマストは全て縦帆で、砲門の数こそ2列40門と少ないが快速を誇るフネであった。

「なにより、操帆作業や風石作業はほとんど、ジジイが作ったゴレムがやってんだ。お陰で、あたいらの仕事は少なくて済むって寸法さ」

メアリは操船甲板の上、才人の腕をぶら下がるようにして抱えながら、自慢げにそう説明した。

上目遣いに向けられるその好意はしかし、才人に引きつった笑いを浮かばせる。

なにせ反対側の腕には彼の恋人が、メアリと同じようにしてぶら下がっているからだ。

「……そんな事よりサイト。私、寒いわ。中に入りましょ？」  
「はっ、一人で部屋に引っ込めよ。サイトはあたいの説明をもっと聞きたいにきまつてら！」  
「なっ?! ……いきましょ、サイト」  
「あつちにいこうぜ、サイト。このフネ自慢の快速の秘密、見せてやるからよ！」

お互い良く自制していると見える……のだろうか。  
餓狼と女豹は ” 獲物 ” を巡って衝突しないよう、お互いに努めて意識せぬようにしながらも、綱引きのように獲物を引っ張り合った。

これが肉の塊や金貨の山であれば半分に分ける事が出来たのだろうが、生憎獲物は生きた人間である。

「お、おい! やめろって! 服が破れちゃう!」  
「だってよ! チビ助、離してやれよ!」  
「誰がチビ助よ! あんたが離せばいいでしょ?!」

やり取りはまるでオモチャを奪い合う子供のものであったが、傍目には滑稽な物として映っているらしい。

いつの間にやらガラの悪そうな手下達が周囲に集まって来て、誰と無く下品な野次が飛び交い始めた。

才人としてはルイズの肩を持ちたくはあったのだが、なるべく穏便に収めたい事情があった為メアリを強く拒否する訳にもいかず

「もが?! ムゴ!!」  
「ぼお?! ブボ!」

結局、見かねたケイトが二人の口中や鼻に魔法で水塊を飛ばして、

一瞬ではあるが呼吸を阻害して引き離す事のであった。  
ちなみに彼女が魔法を使うタイミングがやけに手慣れているのは、  
数十分おきに似たような事が起きる為である。

「ゲホ！ ゲホ、ゲホ！ くそ！ 気管に水が入っちゃった！」

「ケホ！ ケホ、ケホ！ うう、ミス・ブロウ、なんで私まで……」

「ウェールズ様の命令ですので……喧嘩した場合は私が仲裁を行い、  
その際には両成敗、ときつく申し渡されていますから……その、ご  
めんなさい」

ケイトの言い分はもつともではあるが、その声色は呆れが混じり、  
どこか他意さえルイズには感じられ、反省をするどころかムっとし  
た表情を浮かべた。

メアリにしてもそれは同様に受け取っているらしく、こちらは怒  
りも露わにキッとケイトを睨み付け、今にも飛びかからんばかりと  
なって罵倒の言葉を探し始める。

そんな二人を窺めたのは、たまりかねた才人だ。

「もう、いい加減にしてくれ！ メアリ、任務が終わるまでは殿下  
に迷惑かけるなってネルソンさんから強く言われてただろ？」

「そりゃ、そうだけど王子様は関係無えし」

「あるよ。お前が俺にちよっかい出して、ルイズの気が散り魔法が  
上手く行かなかつたら、全部台無しになるかもしれないじゃないか」

「む……」

「そうよ！ だから」

「ルイズも煽るなって。この任務にはメアリの協力が必要不可欠だ  
る？」

「う……でも！ サイトは私の」

「わかってる。……だけど、今は時と場合を考えるべきじゃないか  
？」

サイトは私の恋人なのよ、と言いかけていたルイズは、間髪いれずピシヤリと言い放った才人によって、台詞を途中で切ってしまった。

かわりに強く唇を結び、才人を睨みつけながらもその瞳にはじわりと涙が浮かび上がらせる。

才人に見ればルイズを特別扱いし、キツパリと言い寄ってくるメアリに迷惑だ、と宣言したくはあった。

しかし、彼女の気性からそんな事をしようものならば、臍を曲げウエルズへの協力も拒否しかねないとも見ていたのだ。

それは数時間前、ネルソン提督とウエルズ皇太子の会談での席でみせた彼女の態度を見れば容易に想像が付く。

あの時、メアリはネルソンの ” 約束 ” を己の天秤にかけて、ワガママを通しかねない所があると見て取れたからだ。

恐らくは、縮小したとは言えネルソン一家の実権を跡継ぎとして多くの部分を握っているからであろう。

だからこそ、この場では 少なくとも、アルビオン大陸に無事上陸を果たすまでは、ルイズとメア리를平等に扱う必要があったのだ。

いや、下手をすればメアリの機嫌を損ねよう、ルイズでなくメアリの肩を持つ必要があるのかもしれない。

無論、譲れぬ一線は厳然と存在する。

しかし現状、才人の目に自分達はその一線からは遙か遠い位置に居るように映っていたのであった。

何より、戦の準備が進むトリストインを離れ、アンリエッタの名代としてウエルズと共にアルビオン大陸へ隠密裏に上陸し、 ” アンドバリの指輪 ” の奪還する任務こそ、才人とルイズが今ここにいる理由でもあるのだ。

「 そんなこと、あんたに言われなくても、わかっているわよ 」

「はっ、どうだか！」

「メアリ、あまり俺のご主人様を煽らないでくれ。俺、どうやら二人の任務への集中を邪魔してるみたいだから、ちょっと一人になつてくるよ」

「あ！」

「サイト！」

才人はそう言い残し、ケイトとメアリの声を背にしながらルーンを輝かせ、フォア・マストまで移動し、その一番上まであつという間に登ってしまった。

フォア・マストは最も高いメインマストよりも少し背が低く、見張り櫓が取り付けられているものの、そこに乗組員が陣取り見張りを行う事はない。

大概の見張りは最も背が高いメインマストで二人一組で行われ、何らかの理由で此処が使えなくなった時に、他のマストの見張り櫓が予備として使用されるのだ。

つまりは、そこには常時人がいない。

もし、メアリが才人を追いかけてこようものならば、才人はマストから飛び降りてフォアの反対、アフト・マストに直ぐに移動する心づもりだ。

なぜならば、幾らメアリが空賊家業の傍らマスト登りに手慣れていようが、数往復もすれば諦める程マスト登りは難儀する行為であるからだ。

それに彼女は船長でもある。

いくらなんでも、四六時中才人を追いかける程ヒマではないはずだ。

又、メインマストよりも背が低いとは言え、フォア・マストは魔法が使えないルイズが登つてこれるような高さではない。

つまり、二人とも才人には近寄れない事になる。

ルイズが側に寄り添って居なければ、メアリも妙な焦りを覚える

事はないだろう、という考えが才人にはあった。

『……ごめんな、ルイズ。メアリに臍曲げられて困るのは、殿下だし。今は我慢してくれ、な？』

才人は宙を舞うように大きく跳躍し、魔法のような身軽さでマストに登りながら、使い魔の念話でルイズに謝罪と理解を求める言葉を送った。

しかし、主からの返答は無い。

どうやらふて腐れているらしい。

やれやれ、と才人は大きいため息をつくのであったが、一方、ルイズはルイズで思うところがあった。

それは彼女にとって、この時何より大事な事であったのかもしれない。

何せ、才人は生まれて初めての真の理解者であり、使い魔であり、恋人である。

それは ” 前回 ” もそうであったのだが、 ” 今回 ” はそこから更に心の底から誇れる半身で、彼女の矜持を隅々まで満たせる者として才人は心に在ったのだ。

ルイズにしてみれば、そんな才人の隣に立つのに相応しいメイジとなるべく、日々彼女なりに努力はしてはいる。

が、この所恋人としての認識が強まるにつれ、どうしても甘えてしまう部分が生まれていた。

だからこそ。

だからこそ、このような時、彼女は才人に自分を優先してほしかった。

勿論、頭では才人の意図は理解している。

しかし。

彼女の中で日増しに大きくなる恋人への甘えは、それを許さないルイズは才人に、衆目の前でハッキリと他の女の子を拒否して見



せて欲しかった。

才人に堂々と自分の肩を持って欲しかったのだ。確かに今は任務中である。

何より私情を挟むべきでなく、必要となれば互いに距離を置き、多少の”トラブル”位、大目に見るべきだろう。

それはウエールズの為でもあるし、アンリエッタへの忠誠の証にもなる事だ。

だが、誰よりもそれがうまくできると確信していたルイズであったが、この時初めて、それは才人あつての物であると確認させられたのであつた。

つまり、ルイズはこの時初めて任務と才人を天秤にかけ、才人の方を優先してしまっている己に気が付いたのである。

その事実は彼女の態度をより意固地にしてしまい、結果更に屈辱感と自己嫌悪が彼女の小さな体を苛む事になった。

才人の使い魔の念話に答えなかったのも、そんな感情が邪魔をしたからだ。

「なによ」

ちがう。

言いたい言葉はこんなものではない。

ルイズは才人とは逆の方向、足早に宛がわれた自室に戻りながらそうつぶやき、思考はそれを否定した。

本当は才人に念話で、しょうがないわね、多少の事は大目に見るけれど唇だけは護りなさい、と余裕を見せたかったのだ。

しかし、彼女自身御し得ぬ激しい嫉妬が、そんな生ぬるい余裕を赦しはしない。

やがて自室にたどり着いたルイズは、硬く狭い寝台の中で蹲りながら毛布を頭から被り、ぐちゃぐちゃの思考を纏めるべく目を閉じた。

毛布は空賊のものなど使えるかと ”麗しのアンリエッタ号” から持ち込んだ物であった為、才人の匂いがして。

それ故か、ルイズは安心した心地と共に涙がこみ上げてきて、一つ、鼻をすする。

それでも涙をこぼさなかったのは、せめてもの彼女なりの維持であった。

それからどれ程の時が経ったか。

視界はすっかり暗くなり、ただでさえ寒いスノーウォール諸島の空では風が強くなっていた。

フォア・マストへと陣取った才人はその後、メアリにもルイズにも会う事はなく、しかし毛布も何も持たずにそこへ陣取った事を後悔しきりに体を凍えさせていたのである。

「うつつ、隙を見て毛布をももも、貰おうかな……ささ流石にこれは……つつつ、つらい！」

日が高い内は風を避けるようにして座り込めば我慢できたのだが、流石に限界なのか、才人は齒の根が合わぬ独り言をつぶやき辺りを伺った。

後方に見えるメインマストの見張り櫓には人影がみえるものの、下方の暴露甲板までは視界が届かぬ程闇は濃い。

又、その暴露甲板からは帆を操る為のロープワークの音こそ聞こえて来た物の、かけ声は一切無く、作業を行っているのはゴーレム達であることがわかる。

どうやら今人間で外に居るのは自分と、メインマストで見張りをしている者達だけらしい。

いや、それと操船を行う為の当直ワッチに出ている者がもう一人いるは

ずか。

無論、才人以外の彼らは防寒バッチリな装備をしているはずだ。

「……サイト？」

ルイズやメアリに見つからず、どうやって確実に毛布をどうやって貰おうかと思案に暮れていた才人に話しかける者がいた。

才人はぎよっとして声のする方をふりむくと、そこに分厚いマントを羽織ったケイトがふわふわと浮いていた。

刺突剣のような杖を片手に握っている所から、恐らくは”レビテーシヨン”を使っているであろう。

アルビオン大陸へ秘密裏に上陸するにあたり、”シューティングスター・サーペント号”に乗り込んでいたのは4名。

”ミス・ゼロ”ことルイズと才人、それにウエールズとケイトである。

ハル卿以下他の士官達は合図を待つて作戦行動に移る必要がある”麗しのアンリエッタ号”の指揮を執る為、その殆どのクルーが残る事と決まっていた。

ただ、メイジの存在はフネの運行上なにかと都合が良い上、空賊のフネには船医など乗りあわせてなどいないので、本人の希望もあってケイトが同行する事になっていたのだ。

杖を持つケイトの反対側の手には、何やら沢山の荷物が抱えられてその中には毛布も見えた。

「ケイト？」

「ウエールズ様の命で、食事をお届けに。あと、”ミス・ゼロ”殿から伝言が。『ごめんね』と伝えてくれ、と仰せつかって来ました」

「……あいつ、素直じゃねえなあ。直接言えば済むことなのに」「ふふ、彼女らしい話ではありませんね。あ、さあ、これを」

ケイトはそう微笑みながら、見張り櫓に降り立ち、才人に毛布を手渡した。

毛布は冷たかったが重く風を遮り、非常に心地よい肌触りで才人は冷え切った顔を押し当てて深く息を吐き一心地つく思いに更ける。次いで、ケイトが差しだしてきた物はスープが入った金属製の筒だ。

これは人員が足りぬフネで見張りを行う際、マストの上でも暖かい食事が出来るように作られた魔法瓶のような物である。

無論、地球製の魔法瓶の性能には遠く及ばず、どちらかと言えば保存よりも温かいスープを入れて直ぐに野外へ持って行き、その場で飲む為の用途であった。

「おおお！ 助かるよ！」

「パンもあります。空賊のフネで供されたものですから、質は……」

「いいって！ 俺、前にもっとひでえ飯くってた時期があったし」

「まあ。サイトは貧民の出なのですか？」

「いんや。初めてルイズに在った時、他のトカゲやカエルの使い魔と同じ扱いでね。塩の味しかないスープを食わされたんだよ」

才人はそうおどけるように言っつて、ぐい、と筒を傾けた。

同時に、予想以上に熱いスープが喉を流れ込み、思わずぐお！と悶えてしまう。

そんな才人にケイトは声を上げて笑ってしまい、極寒とも言えるフォア・マストの見張り櫓に和やかな空気が流れるのであった。

「しかし意外ですね。あの ” ミス・ゼロ ” 殿がサイトをそんな風に扱うなんて」

「いや、最初はほんと、大変だったよ。俺、平民だろ？ で、あいつは 貴族でも身分の高い方だったしな」

「あ……なるほど」

「それにトリストインって保守的だし。それこそ、人間扱いして貰えるまで結構時間掛かったんだぜ？」

「はは……なんとなく、わかります」

ケイトはそう言いながら、才人の隣に少し距離を開けて座った。どうやら少し才人と話をするつもりらしい。

だが、僅かな沈黙の後に再開した会話は、才人にとって意外な方向へと向かう事となる。

「私ならどう扱ったのでしょうか」

「ん？」

唐突に語ったケイトの言葉の意味を、才人は理解出来なかった。

ケイトはしばし無言でほう、と白い息を口元まで覆ったマントの内側に吐いて、首筋へと暖かい空気を流し込み一息いれる。

まるで、何かを躊躇するように。

「私が……サイトを喚び出したのがもし私なら、私はサイトをどんな風に扱ったのでしょうか？」

「んー、どうかな。平民の、なんの取り柄もない男を喚び出したんだから、やっぱり小姓や使用人みたいに扱ってたんじゃないか？ ルイズもそうだったし」

「そう、かな」

声色は、いつもの彼女と比べほんの少し幼い物であった。

流石の才人も彼女の雰囲気は一瞬、” 妙な告白 ” でもされるのでは無かるうかと警戒をしたのだったが、そこに甘い雰囲気は感じられず、少なくともこれは違うと受け取れた。

なにより座り込みうつむくケイトの整った横顔は、年相応の女の

子の雰囲気が見えていた物の、恥じらいや慕情は浮かんではない。

「……あの日」

「ん」

「もし、あのニューカッスル城が落城した日、サイトが私の使い魔であったなら 私はみんなを、両親を守る事ができたのでしょうか」

「ケイト……」

「……ごめんなさい。サイト程の力があれば、と考えずには居られぬ時があるんです」

ケイトはそう言って、少し悲しそうな笑顔を浮かべた。

才人はこの時、今更ながらに彼女の身の上とこの任務の意味を再確認する。

任務はケイトにしてみれば、両親を殺した仇敵から祖国を取り返し、屈辱を晴らす為の旅でもあるのだ。

そんな中、自分はルイズといかにじゃれ合っていたか。

勿論、ケイトやウエルズはそんな自分達を見て悪く受け取ったりはしていないだろう。

しかし、今更ながらにそこに考えが及んだ才人にはなんとも苦くそれまでの自分に恥じ入るような心地であった。

「ごめん、ケイト。俺……」

「えっ？ あ、ううん。違うんです。そういうつもりじゃないの。ただ……」

言葉を切り、ケイトは一度自分が何をサイトに伝えたいのか考えを整理した。

彼女の思考によぎるのは、ブルー・キングと戦う才人の姿と、浮島一つを消し去った圧倒的な力の発現である。

それはまるで

「ただ、サイトがもし、私の使い魔であったなら、私は ” ミス・ゼロ ” のようにサイトを心から信頼し、恋に落ちて、そしてあそこで貴族派の軍勢を退けられたかな、って思ってた」

「む、ムリムリ！ 殿下に聞いてない？ 俺、実はニューカッスル城陥落の時あそこにいたんだぜ？」

才人はケイトの ” 恋に落ちて ” というフレーズを極力意識しないよう、少しわざとらしく、大げさに明るく答えて首をぶんぶんと左右に振った。

一方、ケイトも才人がニューカッスル城陥落時にそこに居た事実を初めて知ったのか、ブルーの瞳を大きく見開いて驚きの表情を浮かべ、思わず、と才人の方へ顔を寄せる。

「本当ですか?!」

「うん。いろいろあって、スクウェアメイジとやり合ってた、半殺しにされてたし」

「……意外。」あの力” を使えば絶対、スクウェアメイジだろうと一瞬でやつつけられると思ったのに」

「その時は今程力が無かったし、それに力がどんなに強くとも案外使いどころが無いんだぜ？」

「そうなんですか？」

「ああ。特に俺の力は強すぎて、仲間を巻き込んだり、殺すつもりのない相手を殺す事になりかねないし」

「ふうん」

会話はそこで途切れてしまう。

才人に見れば、先程のケイトの悲しげな笑顔にそれまでの浮ついた己が恥ずかしくなってしまうていて、かける言葉が出せずに

いて。

又、ケイトの方はというとこちらも、自分が才人に何を言いたいのかはりまとまらず、いたずらに沈黙を積み重ねてしまう。

実は元々、彼女としては己の中で急速に膨れつつある感情を確かめる為、ここへとやって来ていた。

異性について敬愛や憧憬、恋慕は今もウェールズへと向いている。

最近ではそこに友情が加わり、こちらは ”盾”<sup>バックラー</sup> こと才人へと向いていたのだが。

が、ふとした切っ掛けで才人に因んだ羨望や嫉妬が ”ミス・ゼロ” にも向いている事に気がついたケイトは、こここの所ある種混乱を覚えていたのである。

勿論、原因はメアリの出現であった。

いや、才人の力を目の当たりにし、過去の屈辱と重ねて彼に全てを捧げてでも、復讐を成したかったのかも知れない。

ともかく、ケイトは軍人としてではなく、年相応の女性として心を惑わせながらもこの場にやってきて、他愛のない会話の中、己を取り戻ろうと試みていたのであった。

そしてその試みは。

「……そろそろ行きます」

「あ、うん。スープとパン、ありがとうな」

「いえ。こちらこそ、長居しちゃって。 ”ミス・ゼロ” にきつと嫌われてしまうでしょうね」

「そんな事無いよ。あいつはああ見えて、意外と物わかりがいいんだぜ？」

「ふふ、信頼しているのね。……ごちそうさま。じゃあ、サイト。お休みなさい」

「ん、おやすみ」

得るものがあつたのか、それともただ混乱が深まっただけなのか。



ケイトはすくと立ち上がり、就寝の挨拶を才人と交わすや、あつさりとし”レビテーション”を唱えて闇の中、暴露甲板の方へ消えて行ってしまう。

残された才人は一人、先程までの会話を反芻しながらケイトが持つて来てくれたスープが入った筒の蓋を開け、火傷しないよう慎重に啜る。

果たしてスープはかなり冷めてしまっており、僅かに暖かいだけであった。

その温もりは人肌に近く、才人は不意にルイズの体温を思い浮かべてしまう。

それから、思い出したかのようにもう一度、念話を送る事にしたのだった。

『なあ、ルイズ。機嫌、直してくれたか？』

『……まだ、ちょっと悪い』

『そ、か。さつき、ケイトがメシを持って来てくれたんだ』

『うん。私が殿下にお願いしたの』

『そうなのか？ ありがとうな』

『ううん。ねえ、サイト』

『なんだ？』

才人の返答に、ルイズの言葉は続かなかった。

念話による会話であったが、なんとなく言い出しにくそうな雰囲気。気が才人に伝わって来る。

『あのね。私、上手く言えないけど……本当はわかってるの。サイトが私だけを見ていられる状況じゃないって』

『ルイズ……』

『でも、ダメなの。わかってるけど、直ぐに頭が真っ白になって……』

『…その、ゴメン』

『……気にするな。俺が情けないのもあるんだしさ』

約半日ぶりの仲直りの会話は、才人とルイズに安心感をもたらす物であった。

この時、双方共に思った事は、今夜は暖かい寝台で眠れそうだということだ。

しかし、そんな淡い期待はけたたましい鐘の音によって儂くも打ち砕かれてしまう。

鐘は見張りをしていたメインマストの見張り櫓に取り付けられた物で、規則正しく打ち鳴らされた後、状況を知らせる大声が極寒の夜空に吸い込まれて行った。

「敵影！ 3時の方向、雲海の中！ 哨戒艇に見つかった！  
」

海を行く船とは違い、空を行くフネ同士での砲撃戦は高所の方が有利だ。

というのもフネが搭載する大砲はかつて地球で使われていた物と大差なく、飛ばす砲弾の種類に差異があれど、弧を描いて敵艦に飛んで行く所は同じである。

そしてフネも又、帆走する戦船と同じくその外壁は鉄板などで装甲されるのだが人々が歩く甲板はそうはいかず、そこに砲弾を着弾させる事が砲戦の目的となり得た。

更に海上とは違い、フネは空を縦横に奔る乗り物だ。

よって、その殆どが船体の横に取り付けられる大砲の砲角に限界がある以上、相手より高い位置を取った方が一方的に砲撃を加えることが出来るのである。

もつとも、各国の正規軍が採用している主力級である戦列艦ともなると、すこし話が変わる。

戦列艦は砲戦は元より、対フネも考慮されて竜騎士を多く配備される。

これはフネよりも更に小回りと速度が出る飛竜をメイジが操り、近接戦闘を相手のフネにしかけて帆や舵、あるいは直接船上に乗り付けて制圧する戦法も採る為だ。

とはいっても、戦列艦はその巨大さや動員兵力の関係からもつぱら、国同士の衝突や主要な港や空域の守備哨戒に使用される為、辺境の警備部隊に配備される事は稀である。

ましてや、トリステインが総力戦を仕掛けてくる情報が飛び交う

神聖アルビオン共和国において、いくつかの空賊が跋扈する程度のスノーウォール諸島空域にそのようなフネがある筈がない。

” シューティングスター・サーペント号 ” を発見した哨戒艇は、竜騎士も乗っていないであろう小さなフリゲート級であった。船長であるメアリは報告に、とりあえずは白兵戦を強要させる事が無い事に胸をなで下ろし、砲戦の準備に入るよう慌ただしく部下に檄を飛ばすのであったのだが……

「なんでだよ！ サイトの力を使えばあんなのいちころだろ?!」

いかつい男達が慌ただしくゴーレムと共に砲甲板で砲弾の準備をしている最中、指揮とフネの舵取りを行うブリッジ甲板にあって

” 北風 ” メアリは声を荒げた。

相手はアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーその人である。

ウェールズの隣にはケイト・ブラウ准尉が無表情で立っており、メアリの剣幕に冷たい視線を浴びせていた。

才人とルイズはそんな二人とメアリを仲裁するように、その間に立って厳しい表情を浮かべ立ち尽くしている。

「ミス・メアリ。我々の目的は、アルビオン大陸本土への極秘潜入だ」

「んなもん、あのフネを沈めちまう事となんの関係があんだよ！」

「大いにある。サイト君の力は我々にとって切り札の一つだ。それをたかが哨戒艇一隻を沈める為に使い、情報が相手に漏れる事は看過出来ない」

「墜としちまえばわかりやしねえよ、そんな事！」

「ミス・メアリ。力の正体がわからなければよい、と言うわけではないのだよ。いいかい？ 我々は戦争をやっているんだ」

諭すようなウェールズの台詞は、強固な意志を聞く物に感じさせてメアリは思わず口をつぐんだ。

考えてみれば、ここに至って才人の力を使えば ” 麗しのアンリエッタ号 ” に乗っていても強引にアルビオン大陸に上陸を果たす事ができるだろう。

しかし、それでは敵の過剰な警戒を誘い脱出するルートを得る事が難しくなってしまう。

更に、 ” 今後の予定 ” を知るウェールズにとって、なんとしてもトリステインとゲルマニアによるアルビオン侵攻作戦までに任務を終え、作戦に参加する必要があった。

詳細はルイズおるか才人にもまだ話してなかったが、それを阻害する可能性は彼の愛する女王を困らせる事になる為、何があるうと引く訳にはいかない事情があるのだ。

「お頭！ 砲戦準備、ととのいやした！」

「砲兵待機い！ 後続の ” ラ・コンコルド号 ” に伝令コマドリを放て！ 指示はE！ レイス！ 敵の位置は？！」

「敵艦4時の方向！ 距離1000！ 高度プラス300！」

「くそ、先越されたか 舵！ 2時の方向！ 砲弾をケツにブチ込まれたくなかったら同じ上昇気流に乗るんじゃねえぞ？！」

「アイ・サー！」

「……なあ、王子様。見ての通りの状況だ」

「私も船乗りの端くれだ。状況はわかってるよ」

「ありがたいねえ。どうもウチの連中は軍人様とちがって愚図でねえ。で、どうしてもだめかい？」

「ダメだ。ネルソン一家との約束は ” 我々を極秘裏にアルビオン大陸へ上陸させ、その一週間後にこれを回収する ” と言う物だ。過度の戦闘行為は約束していない」

「そうかい。じゃあ、こんな所で空の藻屑になってもいいんだな？」

「君たちならばそうはならないのだろう？ なにせ、泣く子も黙る

ネルソン一家だ」

戦闘準備に入り怒号があちこちで飛び交う中、二人の沈黙と苦惱は奇妙にもよく才人にはわかった。

が、それも一瞬の事でメアリは舌打ちをして踵を返し、じゃあ大人しく船室にひっこんでると言い残して、報告にやってきていた手下と共に暴露甲板の方へ降りて行ってしまふ。

残されたウエルズは、じゃあ我々も、とケイトやルイズに声をかけて戦闘の邪魔にならぬよう、船室へ移動を始めた。

しかし才人だけはその場から動こうとせず、それに気が付いたウエルズはやっぱり、といった表情を浮かべて足を止め、苦しそうに口を開く。

「殿下、俺……」

「サイト君。……理由は先程言ったよ？」

「はい。でも、メアリの言うとおり、このフネが沈められては元も子も無いですから」

「しかしだね」

「そうよ、サイト」

「すいません、殿下、ルイズ。俺、この場に残ります」

才人はそう言って、背にしたデルフリンガーを納める鞘の釣り具を外した。

それから、なにか言おうとしたウエルズとルイズを制止しながら、かわりにルイズの胸にデルフリンガーを押し込むようにして手渡して、ウエルズをじっと見つめる。

その黒瞳は強い意志と決意が渦巻き、見る物に何かを伝えた。

「サイト君。何か考えがあるのかね？」

「ええ。とは言っても、単に派手な事はしないって話ですけど。メ

アリの手下のフリをして戦闘に参加するだけですよ」

「じゃあ、私も」

「ダメだルイズ。空賊のフネにメイジが乗っているとこ見られちゃ、後々面倒な事になるかもしれない。それに……」

「それに？」

「最悪もし、このフネが沈められそうな時は俺の力で敵を撃退する事になるでしょう？ そんなギリギリな時に部屋にいちゃ、間に合わなくなるかもしれないですから」

ウェールズに向けた台詞は最後まで聞こえない。

言い終わると同時に恐ろしい風切り音が轟かせ、才人達の頭上を大砲の砲弾が黒煙を上げ通過したからだ。

黒煙は相手との距離を計る為の物で、下手をすると次の砲撃で着弾する可能性を示している。

この砲弾が激しい音も発するように作られているのは、警告と威圧を兼ねている為であろう。

つまり、砲撃は測距を行うと共に”次は無い”という最後通告でもあった。

「……仕方無いね。君は意外と頑固なようだ」

「すいません。ルイズ、デルフを頼むな。デカイ剣を背負っていると目立つだろうし」

「ちょ、ボロ剣無しで何ができるって言うのよ?! あの槍だって使う訳にはいかないでしょ?!」

「白兵戦になりそうになったら部屋まで一度戻るさ。それまでは状況の把握と砲弾運びでも手伝うから心配すんな」

「……ほんと、あんたってこういう時頑固になるわよね」  
「さあ、行きましょう”ミス・ゼロ”。此処にいては危険です。

殿下も……」

「わかった、ブラウ准尉。……サイト君。私が言うのもなんだが、

あとはよろしく頼むよ。また君に頼る事になるのは少々心苦しいがね」

「いえ、お気になさらず。見返りに ” 例の件 ” をお願いしているんで、これくらい安いもんですよ」

例の件？

なに、それ

ルイズは思わず才人に問い正そうとしたがそれより早く才人が砲甲板の方へ走り去った為、結局その時は聞きそびれてしまった。

主人と使い魔の念話で聞いただせば良いだけの話でもあるのだが、この時、戦闘に臨む才人の気を逸らさぬよう気を利かせたのも不味かったのかもしれない。

そう。

この時、念話が使えるかどうかをルイズは確かめておくべきだった。

原因は無意識に燻るメアリの一件であるのか、焦がれる思いがあらぬ疑いと呼び込んでいるのかはわからない。

才人の女性関係において、現状では自分を愛してくれている事、信頼に足る事は頭ではわかっていた。

だが未だその結びつきを確かめられずにいたルイズに ” 手を出して貰えていない ” 事實は、強い愛情の裏返しとして強い不安を抱かせる。

勿論、その理由も頭では解っていた。

が、これは理性ではなく感情の話なのだ。

故に、ルイズも才人も気が付かない。

どちらかの心にほんの少し、暗い感情が染みこんで揺れるだけで念話が使えなくなってしまう事に。

そしてこの時、ルイズは才人に対して心の底からの信頼よりも疑いが強くなっており、正に念話が使えなくなってしまうていたのだ。そうとも知らずルイズは才人が消えた砲甲板への入り口を一瞬眺



めた後、ケイトに導かれるままデルフリンガーを抱えて自室へと消えていく。

その背はどこか不安そうで、砲戦準備の怒号が閉じる扉を後押しするのであった。

「黒煙弾！ 牽制射撃用意！ 久しぶりの砲戦だ、測距を忘れるなよ?!」

「お頭あ！ 本当に軍の連中とやりあうんですかい?!」

「バカ！ 相手の上手に回ってそのまま雲海に突っ込むんだ！ その為には距離を開けてもらわにやらねえだろうが！」

「敵艦砲撃を確認！ 第二射きやす！ ……やべえ！ 鎖弾だ！」  
「くそ！ マストをブチ折って拿捕するつもりか?!」

メアリは砲甲板で指示を出した後、再びブリッジ甲板に戻り操舵手の後で指揮を執っていた。

敵艦の位置は未だ ” シューティングスター・サーペント号 ” の上方であり、砲戦では圧倒的に有利となる位置に就けている。

更には敵艦の測距砲撃の後ということもあり、第二射の報に流石の彼女も顔を青ざめさせた。

測距手の報告にある鎖弾は、砲弾と砲弾の間に鎖を張り巡らせた特殊な弾である。

これは点よりも線や面の攻撃力を高め、相手のフネのマストや帆を破壊する目的があるのだ。

つまり、敵艦は ” シューティングスター・サーペント号 ” の機動力を奪い空賊を纏めて捕らえるつもりなのだろう。

砲弾は遠目にその間隔を広げながら正確に ” シューティングスター・サーペント号 ” へと迫る。

その数は二十程か。

本来ならばどんなに熟練した砲手であっても第二射で命中する事は殆どないのだが、運悪く幾つかの鎖弾は正確にマスト目がけて飛んできていた。

そしてあわや命中するかとおもわれたその時。

数筋の銀光が上空から迫る砲弾へと奔って、その鎖を断ち雲の合間に消えたのだった。

鎖を失った砲弾は互いを繋ぐ物を失い、そのまま外側に大きく逸れて地上に向け落下していく。

「つぶねえ……。あ、敵砲撃・第二射、回避成功！」

「何が回避成功だバカ！進路二時つつつたるーが！そっちは一時！敵の砲射線にモロ入ってるじゃねえか！」

「す、すいやせん！ここんところ舵がどうも重くて……」  
「整備しとけつつつたる？！てめえは後でメシ抜きだ！」

メアリはそうがなり、銃を取り出しその銃底でゲシ！と操舵手の頭を殴った。

哀れにも操舵手は舵輪を離す訳にも行かず、激痛にたえながらも進路を必死に修正する。

同時にフネが傾いてギギギ、とロープが張る音がそこかしこから響き操帆手のかけ声が上がった。

「メアリ！」

「サイト？！さっきのはお前か？！」

「ああ。そう何度もやるわけにはいかないけど、一回くらいならバシないだろうし」

「はは！いや、助かったぜ！二射目で喰らっちゃ、恥さらしも良い所だしな！おう、おめえの事だよ、このバカ！」

思わぬ助力にメアリは年相応の笑顔を満面に浮かべ才人の手を握

りつつも、操舵手の尻に蹴りを入れ罵りの言葉を吐く。

彼女の口ぶりからどうやら測距砲撃後、すぐ命中させられる事は非常に不名誉な事らしい。

その証拠に、あまりにあまりな扱いを受ける操舵手に、周囲からはそうだこのグズ！ などと罵倒が飛び交っている。

才人も一時はフネの組織の中にいたから知っていたのだが、操舵手というのはかなり腕っこきの水夫が就く持ち場だ。

空賊だからといって、皆から無碍に扱われるような者が任される場所ではない。

恐らくは、第二射を受けるような進路を取っていた彼の権威が今、一時的に失墜してしまっているのだろう。

その扱いに少々目を丸くする才人であったが、すぐに目的を思い出し手を握るメアリにある頼み事をするのであった。

「メアリ。俺、殿下にはお前の部下っぽく振る舞うかわりに戦闘参加の許可を貰ったんだ」

「おお！ じゃあ、やっとあたいのもんになる気になったのかい？」

「んなわけあるか。あと槍はもう当てにしないでくれ。変わりに、砲弾運びや白兵戦になった時手伝うよ」

「ちっ。ケチくせえ王子様だよな。見てくれはいいつてのにとんだ見かけ倒しかよ」

「そう言うなよ……。だからさ、目立つ訳にはいかねえんだ。でかい剣背負うのもアレだし、剣を貸してくれないか？」

「そりゃあ、かまわねえがカットラスなんて使えんのか？ 　オラ、おめえのを貸しやがれ！」

メアリはそういぶかしげながら、操舵手の腰にぶら下がっていたカットラスを強引に取り上げて、才人に手渡した。

受け取ったカットラスを才人が鞘から引き抜くと、その刀身はお世辞にも手入れが行き届いているとは言えず、錆と刃こぼれがそこ

かしこに見える。

唯一、少し厚い刃は折れにくそうで、これならばなんとか使用に耐えるだろうと才人は判断し鞘に戻すのであった。

「まあ、俺、武器はなんでもちよつとしたもんだぜ？」

「ふうん？ ま、そうだろうな。砲弾運びは……人手の足りねえ班はねえし、いいよ」

「あ、ちがう。俺一人で砲弾を運ぶんだ」

「はあ?! ぷ、ははは! ああ、そうだろうな! 考えてみりゃ、あんな風に槍を投げられるんだ。砲弾くらいワケねえか。おい! サイトを砲甲板の……4番に案内しな! 4番砲の砲長様をしてみらうんだよ?!」

へい、と命令を受けた手下の一人に案内され、才人は再び砲甲板へと足を踏み入れた。

先程はメアリが砲甲板にいるものばかりに考え、ここへ真っ先に来ていたが姿が見えず、外に出た所で鎖弾を確認し”グリムニルの槍”で迎撃したのである。

「測距・牽制砲撃準備! 各位黒煙弾装填!」

砲甲板に砲長の伝令が飛んだ。

同時に、砲手達がそれぞれの持ち場に就き、ある者は黒煙砲弾を、またある者は砲角を調整し始める。

その動きは統一感があつたが、4番砲に就いた者達だけは違つていた。

「あのう……」

「ん。おじさん、砲角34度でお願いできる?」

「え? あ、ああ。そりゃ、できるが……」

4番砲を担当する空賊の男達は、突如、あの浮島を消し飛ばした少年を特別砲長として連れてこられ、その指示に戸惑っていたのである。

才人は砲窓から敵艦の位置を確認し、砲身に左手を添えて輝かせながらその角度を指示したのだ。

通常、第一射目の測距・牽制射撃は文字取り相手との距離と威嚇射撃が目的である。

今回のように砲角の指示がない場合、各々が勝手に砲角を設定し、その弾道を観測した砲長が一番良い弾道を船長に報告し、それを基準に修正した複数の砲角を使用して第二射を行うのである。

特に今は敵艦に頭上を取られている為、一層砲角を導くのは難しい状況であった。

故に砲撃は測距よりも威嚇・牽制に重点を置いた物でだと皆判断していたのである。

にもかかわらず。

才人の指示はあまりに具体的で、しかも彼が一人で抱え上げてきた砲弾は……

「?! く、鎖弾ですかい?! 黒煙弾でなくて?」

「ああ。いきなり当てちゃいけないってワケじゃないんだろ?」

「そうでやすが、いきなりってそりゃ、無理な話でさ! 測距も無しに第一射で命中させる砲手なんて聞いた事もねえですぜ?!」

「いいからいいから。砲長様に逆らうと、メアりに頭をブン殴られるぞ?」

砲手達は一人で鎖弾を抱えて持って来た才人に目を丸くしながらも、そこから更に黒煙弾でなくいきなり実弾を持ってきた事に驚いていた。

勿論、砲弾は人間一人で持ち上げられるような物ではない。

しかしなにより彼らを驚かせていたのは、才人が本気で第一射を当てようとしている事に驚いたのである。

それ程測距も無しに相手のフネに当てる事は至難の業であるのだ。

「……坊主、お頭の命令だから拒否はしねえが、そりゃ無理だぜ」

「いいから、いいから」

「いいからじゃねえ！ 砲戦は初めてだろ？！ おいら達を空賊だからってバカにしてるのか？！ そんなんで当たる訳が」

「いいから。これ一回だけ付き合ってくれよ、な？」

才人はそう言つて、かけ声を上げ苦労しながら砲口に黒煙弾を詰める周囲を尻目に、バスケットにパンを放り込むような気軽さで重い鎖玉の塊を4番砲に放り込んだ。

砲手達はいえば空賊に身をやつしているとはいえ、空の男としての誇りはある。

あまりに砲戦を簡単に考えていそうな才人の言動に、なかば呆れ、ムっとしながらも言われた通りに砲角を設定し、砲撃の合図を待った。

「……おじさん、ゴメン。角度33度に変えてくれる？ 船体が浮いてきてる」

「ああ、上昇気流に乗ったようだな。いいぜ！ だが坊主、俺は絶対当たらないと思うぞ？」

「そうだ。いくら坊主がバケモンみたいな事出来るとは言え、砲撃はそんな甘えもんじゃねえ」

「そもそも、なんであの力つかって敵を墜としてくれねえんだよ？」

「う……それは、アレ、内緒にしておかないといけない力なんだよ……あ、撃つ時は一番最後に頼むよ。黒煙弾の砲が弾速速いし」

「かあ、お貴族様つてのは勿体ぶるもんなんだな！ 空賊ごとき、砲戦で何人死んでもかまわねえってか？！」

「そ、そんなことないぞ！ だからこうして手伝ってるんだし、それに俺、平民だし！」

「へっ、どうだか」

砲手の男達は口々に愚痴を垂らしながらも、才人の言うとおりに砲角度を調節し、4番良し！ と声を上げた。

続いて、1番良し！ 5番良し！ といった風に次々と割り当てられた砲手達が声を上げ、やがて全ての大砲の砲撃準備が整う。

「お頭あ！ 準備ができたあ！」

砲長のだみ声が、砲甲板を抜けブリッジ甲板へと届いた。

メアリは自船の位置と敵船の位置を見比べ、刹那の後。

「砲撃開始！ てえ！」

と少女にしては大きな声で叫ぶ。

砲甲板では同時に爆音が連続して轟き、砲窓からは黒煙が入り込んで砲手達は一斉にむせ始めるのであった。

そんな煙で視界の悪くなった中、才人は砲甲板を後にして暴露甲板へと登り、自分が指示した砲弾の行方を確認すべく敵艦の方を見上げる。

果たして、その結果は。

「うそ、だろ……」

「め、命中！ 第一射、鎖弾が敵艦メインマストに命中してやす！」

「す、すげえ！ 誰だ？！ 第一射から鎖弾撃ったバカは！」

「4番砲だ！ あのバケモンみたいな坊主の砲だ！」

「やった！ これで逃げられるぞ！」

才人は砲甲板とブリッジ甲板から歓声を聞きながら、己の撃った砲弾にほつと胸をなで下ろす。

相手のマストを破壊してしまえば、少なくとも逃げる分には苦勞はしない。

白兵戦になる事もないし、何より双方共に死者は出ない事が強い安堵を覚えさせるのであった。

”グリムニルの槍” の力も、あれ位ならばバレはしないだろう。

つまり、最小限の被害で窮地を脱出できたと言う訳だ。

「サイト！」

「わっぷ、メアリ?!」

「すげえ！ お前、すげえよ！ 第一射でマスト叩き折るなんざ、神業も良い所だ！」

何時の間に暴露甲板に降りてきたのか、メアリは才人に飛びつくように抱きついてきて、そのままびよんぴよんと跳ね始めていた。

いや、メアリだけでなく他の手下達も集まって来て、二人を囲み口々に賞賛の声を上げている。

そのままだといつまた唇を奪われかねないと感じた才人は、少し強引にメア리를引っぺがしたものの、今度はヒゲもじゃで臭い男達にもみくちやにされて祝福をされるのであった。

一同は一時、奇跡のような砲撃に状況を忘れ誰しもが興奮に打ち震える。

それが仇となった。

才人おろか、見張りさえも気が付かない。

敵の哨戒艇から一騎の竜騎士が飛び立っていた事に。





はじめに

このお話は、本作の100話到達記念に書いた物です。

ついでにバレンタイン企画的に。

過去のIFものと同じように「ガンダールヴは夢を見る。」の設定を使った別作品の短編だと思っして下さい。

一応、本編と整合性は取っておりますので本編の一部としてみても問題はありません。

ただ、あくまでお遊びなので、不快に思われた方がいらしたらご一報を。

「被告人、ヒラガ・サイト」

トリスティン魔法学院の女子寮の一室に、バンバン、と二度机を叩く音が響く。

本来ならば、華やかなりし貴族の女子が住まうその部屋は、厳粛な裁判の場となっていた。

裁判長兼、検事兼、被害者の会長（会員1名）兼、原告は部屋の主であるルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールその人である。

彼女は脇にずらしたテーブルを袖起きとして、左手に乗馬鞭を持ち、それを裁判などでハルケギニアでも使う木槌の代用としていた。その、幼さが残る秀麗な表情は冷たく暗く濁り、内に想像だにしたいくはない怒りが渦巻いているのが見て取れる。

一方、被告である才人はそんな主を下から見上げ、如何にしてこの場を切り抜けようかと必死に頭を働かせていた。

なにせ部屋には二人きり、弁護士役を買って出る者はいない。

正座させられた石畳みの床は冷たく、今の状況をより鮮明に才人に認識させる。

キツカケは別にあつたが、火種を炎にしたのは些細な事から。

遡る事、約一時間前。

ルイズと二人で偶々食堂に向かって廊下を歩いていると、これまた、偶々反対側から1年生のジゼール・エームラントが2、3名の女友達を伴って歩いてきた。

それだけならば別にどうと言う訳でもなかったが、ジゼルはスレ違いざま、才人にニツコリと微笑んでその後にきやあきやあと女友達に詮索される声がルイズの耳に入ってしまったのである。

ジゼルにしてみれば以前世話になった才人とルイズに愛想良く会釈したただけだったのだが、ルイズからしてみれば才人に色目を使つたようにも見える行為であつた。

が、それだけならばまだいい。

食堂に着くと、今度はシエスタが ” 才人を ” 出迎えて、自分を差し置き料理長の新作を味見しろと言いながら厨房へ連れて行つてしまつたのだ。

ルイズはその行為を強く咎めたかつたが、生憎他の者の目もあり、そこはぐつと堪えて何事も無かつたかのように自分の席へと移動するのであつた。

既に学院では以前とは違い、才人もルイズもただ者ではない、といった認識が生徒達の間で広まつている。

故に二人の行動は何かと注目を集め、貴族が平民の娘に嫉妬をする、などと思われたくはないが為にルイズは極めて平静を装つたのであつた。

が、それだけならばまだいい。

不幸は重なる物で、本来才人が座るはずであつたルイズの隣にキユルケが腰を下ろして、やや不機嫌なルイズに話しかけてきたのだ。話題は勿論、才人の事である。

タバサが一時帰国をしている時期であつた為か、話し相手が欲しかつただけなのかもしれない。

が、それだけならばまだいい。

この時キユルケはよりにもよつて、夏休み、 ” 魅惑の妖精亭 ” での事を口にしたのだ。

曰く、ダーリン、ほんとモテるわよねえ。みてくれは冴えないけど、なんていうか、大人びてるっていうか。

ねえ、ルイズ、見た？

” 魅惑の妖精亭 ”

の女の子達の熱っ

ぼい視線。

あんな情熱的な視線を向けられて平然と知らんぷりできるダーリンって、ほんと、なんていうか ” 慣れている ” のねえ。

あたしがいくら誘惑しても簡単にはなびかないはずだわあ。

ねえ、聞いている？ ルイズ。

あら。

もういらないの？

そいえばダーリンは何処？

うふ、また喧嘩したんじゃ

といった具合の会話である。

結局、その会話が元々思う所があったルイズの火種を炎にしてしまった。

厨房で食事をしていた才人を半ば強引に連れ戻し、苛つきながら自室に戻ると、ガンダールヴの主はその場で正座を命じて簡易裁判を始めてしまったのだ。

「罪状！ 被告人は浮気の疑いが有り！ 更には主人に恥をかかせている！」

「あの……ご主人様？」

「だまらっしゃい！」

ばんばん、と静粛にするよう鞭を二度、机に叩き付けるルイズ。

形の良いその口は三角に歪み、怒りの炎を背にして凄むその迫力はどこか見覚えのある物であった。

フラッシュバックするのは、かつての結婚生活である。

無論、本人にはまったく身に覚えがない所までうり二つだ。

「キュルケ。それにタバサ。あと、シエスタとかいうメイド」

「はい？」

「それにジゼル」

「え？」

「あの子、銀の髪で可愛いわよね。家は貧乏みたいだケド」

「ルイズ？」

「ル」。あの韻竜もすつごく、かわいい。真つ白な髪に真つ白な肌。男はみんな、あんな惚げな子が好きなのよね。結構大食いだったケド」

「ごっつ、ご主人、様？」

「それと、えつと……あのチキユウに行った時に会った子。名前、何だっけ？ たしかコシバって言ってたわよね」

「一体、何を……」

「だまらっしやい！」

再びばんばん、と静粛にするよう鞭を二度机に叩き付けるルイズ。口どころか目まで三角形にして、ルイズは才人に対する圧力を強めた。

その威圧感は何の ” 暴君 ” を才人に思い出させ、これは下手に刺激しない方がいいと今更ながらに認識させる。

「で……そう、コシバ。あの子も中々綺麗だったわよね。髪なんてどんな秘薬を使ってるのかすつごく綺麗だったし？ ま、今はアンタの事なんて覚えてはいないだろうケド」

「ルイズだって髪はきれ……」

「そうそう、 ” 魅惑の妖精亭 ” を忘れちゃいけないわね。ジェシカにエメにトマ。特に、女の子の格好したトマは可愛かったわよねえ。私より胸がないケド！」

バシン！ と強く机を叩く鞭の音。

その音の大きさは、ルイズの怒りの大きさでもあった。

才人は思わず目を瞑ってしまったが、再び目を開いた時、主の背後にあった怒りの炎はゴゴゴと音を立て黒い竜巻のような火柱へと

変わっている。

幻影であろうが、その炎の迫力はまるで地獄の審判のようであった。

「そおおお言えば！　ちい姉様もなああああんか、あんたには優しい目をしてたわ、ね！」

バシン。

音だけならそれだけの表現で済むだろう。

しかし才人にとっては、世界の終わりを告げるラツパのような恐怖感がわき起こっており、勇者には似つかわしくない恐怖をかき立てるには十分であった。

「ねえ、ワザと？　冴えない外見してるのに、女の子を惹き付ける魔法でもかかっているんじゃないのあんた？」

「んなわけあるか！」

「判決！　あんた、この部屋から一生外出禁止！！！」

審議らしい審議もなく、判決はあっさりと下った。

勿論、被告による答弁や証拠の提示どころか罪状認否すら行われない。

流石に被告はあまりに理不尽な判決に抗議の声を上げる。

「ま、待ってくれ！　トイレはどうすんだよ？！」

「おまるを用意してあげる」

「やだよ！　そんなの！　だれが処理すんだよ？！」

「ここに性悪……未来の私が置いてあった、ルーン付きのゴーレムがあるわ。あのヒコーキを動かせるもの、あんたのシモの処理位できるでしょ」

「そんな！　これからの事はどうすんだよ！？」

「し、しらないわよ！ 何とかしてみせるわ！」  
「タバサの母ちゃんの事とか、アルビオンとの戦争とか洒落にならねえんだぞ?!」

才人の台詞に、ルイズは思わず口をつぐむ。

流石にタバサの母親の事やアルビオンとの戦争の事を出されると、言葉が出てこないルイズであった。

しかし納得はしていないようで、三角になった目尻に涙を浮かべつつも、おなじく三角にした口を食いしばり、うぬぬと不満の唸りを上げている。

なまじ、才人にしてもルイズの言い分はわかる為それ以上は責める事は出来ず、しばし部屋には奇妙な緊張と沈黙が漂った。

「……じゃあ、私はどうなのよ?」

絞り出されるように発した声は、先程までの迫力はない。

本人もそれがワガママであるとわかつてはいるものの、言わずにはいられないといった風情である。

「ルイズ……」

「物事には優先順位があるって位わかってるわよ……でも……」

「そうだけど、さ」

「でも……モンモランシーが何時も言うの。『愛する者同士が行うキスは、特別』だって」

「……ルイズ?」

「それで、自慢するの。昨日だって、ギーシュとどんな甘いキスをしたとかって。知ってる? 恋人同士、本当に愛し合っているなら甘酸っぱい味がするそうよ?」

「え、っと? そういや、昨日デザートに出た果実は結構酸っぱ」  
「なのに才人とキスをしてそんな事ないし! あんた、実は他の



女の子に気があるんじゃないかって疑っても仕方無いじゃない?!」  
「あの、ご主人様?」

ルイズは再び、怒りの炎を背にして目と口を三角に変化させながら、鞭を両手でへし折らんとするようにグニヤリと曲げ興奮し始めた。

何の事はない。

不満は確かにあれど、要はモンモランシーに惚気られ、対して（表面上は）一向に進展しない自分達の関係に業を煮やしたただけなのだ。

そりゃ、才人としてもやれるものならばやりたい。

若い肉体を存分に貪りたい。

しかし、それは地球に行った時、少なくともタバサの母親を助けるまでは辞めておこうと心に誓った事でもある。

それはルイズ自身もわかっている。

しかし才人は兎も角、年頃の夢見がちな少女にはそんな生殺しの状態は辛い。

かくして、このように爆発するのであろう。

今回の場合、大元のキツカケはモンモランシーが言ったキスの話が原因らしい。

ならば、と才人は如何にルイズの自尊心を満たせるか一計を案じることにした。

「なあ、ルイズ」

「あによ! 兎に角、あんたは」

「 ” 大人のキス ” って奴を試してみないか? 」

借りてきた猫、という比喻がある。

ルイズは才人の言葉に、一瞬でその状態となった。

怒りのあまりに三角となっていた目は興味に輝き、口は小動物の

ようにも「も」と言葉を探す。

「お、おお、大人の?」

「キス。俺、一回人生を最後まで送ってるの、知ってるだろ?」

「う、うん」

「そんだけ生きてりゃ、まあ、色々と ” 経験 ” してる」

「そ、そそそ、そうよね、うん」

「だけど、今はダメだろ? でもさ。キス位なら……な?」

ポツと音が鳴るほどルイズは顔を赤らめて、才人の提案にコクコクと頷いた。

そう、才人の策とは他の者に自慢出来るような ” 大人のキス ” を教える事である。

それは、唇を重ねるだけでなく、お互いの唇を甘噛みするようなものでも、軽く舌を差し込むようなものではなく。

「いいか? ルイズ。肝心なのは、羞恥心に負けない事だ」

「う、うん……」

才人とルイズはベッドの上に腰掛け、互いに向かい合い顔を近づけた。

キス程度ならば日頃隙あれば行って居た二人であったが、まるで結婚初夜のような雰囲気は甘くルイズをとろけさせて、耳まで赤く染めている。

「まず、口をあけて舌を思いっきり突きだして、お互いの舌の先端を触り合うんだ」

説明に、ルイズは目を瞑ったまま、ほわあと口を開けてその短い舌を突きだして見せた。

きつと、はしたない表情を浮かべているのであろうと想像する程、羞恥が体に満ちてえもいわれぬ感覚に襲われる。

やがて才人も同じようにして来たのか、ぬるりとした感触が舌先に伝わり、優しく這うようにルイズの舌を摩り回すように動き始めた。

ルイズは思わずあふ、と吐息を漏らし、才人にその息がかかったのではないかと心配しながらも。

才人の舌は徐々に舌の根の方へ近寄って、その感触に思考を焼かれ全身の力が抜けるかのような錯覚を覚えた。

気が付けばルイズも又、強請るように才人の舌を舐め這わせ、そのヌルヌルとした感触に胸を高鳴らせる。

必死で差し込む感覚はまるで、相手を求める心のように。

逆に自分の体内に差し込まれてくる舌は、自分の全てを奪い去るかのように蹂躪していき。しかしその感触は被虐心を煽り、ルイズに雌の本能のような女の部分を強く意識させ焼かれた思考が真っ白に染めあげていくかのような感覚を与えるのであった。

気が付くと、ルイズは夢中で才人の口の中に舌を入れ動かし始めていたのだが。

「あつ……」

「……ここまで」

時間にして一分ほどであったか。

突如、才人は舌を引き抜いて、引いた唾液の糸を切りながらもそう宣言したのである。

ルイズの方も消え入りそうな声で応じながら、唇から垂れかけた唾液を取り出したハンカチで拭き取り、先程よりも更に赤く茹で上がりながら才人から目を離すのであった。

「ルイズ、ちょっと舌を動かすのは速かったぞ？ もっと焦らすよ

うに、ゆっくりと動かさない」と

「う、うん……」

「本当はこの後、お互いの唇を着けて、唾液を交換しながら相手の歯の裏をか舐めたりするんだけど」

「そ、そそそそ、そう、なの?!」

「ん。だけど……すまん、俺の方がガマン出来なくなりそうだから」「い、い、いいいわよ、そんなこと」

気にするな、と言いたいのか、それとも続きを構わずやれ、と言いたいのか。

ルイズは理性も言葉も纏められぬまま、出来損ないのゴーレムのように不自然に身繕いを始める。

しかし才人は「ちよつと”冷やしてくる”」と言い残し、そんな風になってしまった主を置いて後を振り返りもせず足早に部屋を後にしてしまう。

後にのこされたルイズは、舌先に残る感触を反芻しながらも”

大人のキス”の味を思い出し蕩けながら、久しぶりに広がる胸一杯の幸福感に体を投げ出すのであった。

そして後日。

ルイズの話聞いたモンモランシーが、ギーシュに”大人のキス”を強請り一騒動あったのは又別のお話。

一般的に、空に行くフネに乗り込む船乗りにとってメイジとは大変貴重な存在である。

無論メイジの船乗りが、と言う意味であるがこれは正規軍に所属する貴族をさしているわけではない。

フネという乗り物は風石を扱う性質上、たとえ乗組員が全員平民であっても必ずメイジが絡んでくる。

国から国へ、港から港へと移動した時に利用するバース（フネが乗り付ける施設）には税関を扱う貴族やメイジの衛士がいるし、魔導機関に風石を設置する時も専権を持ったメイジ立ち会いの下で補給する事が殆どだ。

更には、港を取り仕切り交易を行う貴族は例外なく大貴族であるため、所属する商船団にはメイジが多く乗り込むのが常である。

そういったわけで、フネに乗り込むメイジというものは軍関係に因らず意外と普遍的なのだ。

彼らの背景も様々で、貴族の次男坊であったり、商船団の陣頭指揮を取る為に代々船乗りの家系であったり、脛に傷を持つ者であったりした。

”人喰い” ドレイクの場合は果たしてどうであるか。

歳は三十七。

妻も子も無く、背は高い。

濃いブルネットの髪と目が少し痩せた印象を抱かせる外見は、どこか鋭利な刃物のようである。

元々メイジの傭兵であった彼は、ひよんな事からゲルマニアで罪

を犯し逃げるようにして船乗りとなった。

勿論、最初は罪を犯したゲルマニアの港に入港しない航路を行くフネに雇われて働いていたのだが。

生来の気性の激しさからすぐに他の船員とトラブルを起こし、そんな事を繰り返す内に気が付くと空賊に身をやつしていた。

ドレイクは空賊となった後もプライドの高さ故か、次々とめ事を起こしその度に所属を変え、やがてたどり着いたのがネルソン一家である。

そこでドレイクは元々メイジであったネルソンの目に止まり、その右腕として一時は若頭にまで上り詰めた。

が、それも長くは続かない。

折しもアルビオン王国が王党派と貴族派に分かれ、内乱が勃発した頃。

アルビオン大陸北部、スノーウォール諸島一帯ではそれまで乗り気でなかった地方空軍が突如、空賊狩りを激化させたのだ。

これはスノーウォール諸島を治める貴族が貴族派であった為、かつて先代アルビオン王に仕えていた大空賊・ネルソンと王党派の合流を警戒した為である。

実際の所、たたき上げであったネルソンはかつての主君への忠誠が未だ胸に燦つてはいたが、当時肩を並べた身分の高い貴族達との確執もあり合流するつもりは毛頭無かった。

勿論齢を重ね体が思うように動かぬ事情もあったし、空賊である手下達を名誉という実体の無い報酬では、死地に向かわせる事が出来ない判断した事もある。

にもかかわらず、スノーウォール諸島方面軍基地のあるラックスフォード港に流れた噂は、それらとは正反対の物であった。

同時に一人のメイジがネルソンの情報を携えて、秘密裏にラックスフォード空軍基地に出入りするようになる。

その人物こそドレイクであった。

彼はその野心を満たす為、情報と引き替えに空軍での地位を得ん

として、恩を忘れネルソン一家を売り渡していたのだ。

王党派と貴族派の戦いは既に収束に向かっていたとはいえ、その後の事を考えると戦力は少しでも欲しい。

そんな思惑がスノーウォール諸島方面軍司令官に働いた背景もあった。

ドレイクにしてみればこのまま空賊として一生を終えるつもりは更々なく、最も己を高く売り込める時期に良い買い手を見つけたに過ぎなかったが、義理を重んじるネルソンとメアリにしてみれば恩を仇で返された格好となる。

しかしドレイクの思惑に気が付いた時には、何もかもが手遅れであつた。

とある日。

スノーウォール諸島から南に3日程の場所にある空路をゆく、貴族派の密貿易船団の情報を仕入れたネルソンは杖を突きながらも、いつものようにこれを襲撃し。

そこで待っていたのは商船団に偽装したスノーウォール諸島方面艦隊と、部下の裏切りであつたのだ。

ネルソンは周囲に浮かぶ、文字通り反旗を翻した元仲間のフネを歯がみし睨みつつも、その人生の大半を費やして培った操船技術や砲撃戦闘技術を駆使し、命からがら脱出に成功したのだが。

ドレイクにも知られていない隠れ家に逃げ込んだ時には、あれ程多くいた手下は50に満たず、フネも二隻しか残らなかつたのである。

以後、流石に精神的なショックからかネルソンの体はみるみる内に衰弱していき、ネルソン一家はかつての力を失って、弱小空賊にまで落ちぶれてしまう。

こうしてドレイクは功績と共にラックスフォード空軍基地所属の大尉として、神聖アルビオン軍所属となつたのだが

「くそ、ついてねえ」

愚痴は風に乗れ、騎乗している飛竜の後方へと流れた。

ドレイク大尉こと ”人喰い” ドレイクは、偶々乗り合わせていた哨戒艇がかつての恩人であるネルソン一家の旗艦 ”シューティングスター・サーペント号” を発見したが為、不本意な空戦を挑む羽目に陥っていたからだ。

発見当初は砲戦を行うにあたり、哨戒艇は有利な位置にあつて勝利はほぼ確実と思えた。

砲性能もこちらの方が高性能であつたし、彼が知る限りネルソン一家の砲兵は熟達してはいるが一射目から無茶はしないはずである。故に、艦長から相手の情報を請われた時も、過不足無くの確にその情報を提示して楽勝ムードで成り行きを見守っていたはずだったのである。

信じられない事に哨戒艇は、相手の最初の反撃でマストを折られ、何とこちらが航行不能となつてしまつたではないか。

驚愕は計り知れない物であつたが、同時に感じたのは艦長の白い視線である。

その視線は雄弁に「貴様の提示した情報とは違つ」と語られ、元空賊で裏切り者への蔑みが込められていた。

ドレイクに言わせれば被害と提示した情報とは無関係で、八つ当たりも良い所であり事実八つ当たりであろう。

そもそも、第一射目で測距も行わず砲撃を命中させてくるとは誰が予想できようか。

しかし、艦長の方にも彼なりに理由がある。

只でさえ空の軍人にとって接敵から短時間で被弾する事は不名誉な事だ。

その上長いアルビオン空軍史の中で不意打ちを除けば、第一射目に命中させられた ”事故” の事例など、数える程しかない。

更に、相手は空賊。

しかも明確に第一射目からマストに ”当てる” 意図を持った、



鎖弾による砲撃だ。

そんな話は聞いた事がない。

測距を行おうとして ” 当ててしまっ ” 事はあっても、当てるつもりで当てるなど

そしてその砲撃は成功し、空軍史に残るであろう砲撃の被弾船として、自分の名が永劫残る事は間違いない。

その事実は如何に艦長のプライドを刺激したか想像するに余りある。

いや、誇りを著しく傷つけられたのは艦長だけではない。

哨戒艇に乗り込む軍人すべてに言えた事であった。

よってドレイクへ降り注ぐ複数の無言の罵倒は、必然であったとも言えるのかもしれない。

兎も角。

救援要請を託した軍用伝書鳥を放った後、ドレイクは艦長に出撃の許可を申し出る事にした。

空賊上りの彼は、軍内でも評判がすこぶる悪い。

気にはしていなかったものの、後々の出世にその状態を放置する事は不利だ。

だからこそ、こっやって哨戒任務にもマメに同行し、自分の価値を知らしめる必要があった。

つまりはその価値を……： 辺境にあつて飛竜を駆る事が出来る竜騎士の価値をこの時、証明する必要が生じたのである。

そもそもは竜騎士自体、辺境の地に配備される事はあまりない。

飛竜の調教やそれを駆る魔法衛士の育成には莫大な労力が掛かる為だ。

故に竜騎士は都や要所でない限り見る事が無いエリートと言えた。しかし、ドレイクの場合は違う。

如何なる方法を用いたのか彼は軍への恭順後、どこぞの森から野生の飛竜を捕獲し、しかも調教も無しに乗りこなしてしまったのである。

空賊からいきなり大尉待遇となったのも、その辺りの事情が強かった。

「腐ってもネルソンって事かよ。畜生、まさか一発目で当てて来やがるとは……」

ドレイクは誰に聞かせるでもなく呟いた。

それから専用の鞍を着けた飛竜の上にあつて、傭兵時代から愛用している刺突剣のような杖を抜きながら、迫る見慣れたフネを見据える。

フネは空賊ネルソン一家の旗艦 ” シューティングスター・サーペント号 ” 。

彼が唯一、一時的ではあつたが尊敬した男が駆るフネであつた。距離は未だ数百マイルは離れていたが、甲板の様子を見る限りどうやらいまだ発見はされていないようだ。

「 お頭。最後まで油断するなつって、口酸っぱく言つてたのはあんただぜ? 」

呟きは僅かに寂寥がまじり、しかしドレイクの口の端は凶暴にっり上がつて。

その凶暴な意志を受けてか、飛竜は雲を千切りながら速度を更に上げるのだった。

「 竜騎士だ！ 連中のフネに竜騎士が乗つていやがつた! 」

” シューティングスター・サーペント号 ” に近付いて来る影に、最初に気が付いたのはメインマストにいた見張りの者である。

叫びは甲板の上で浮かれる空賊達に冷や水を浴びせ、それぞれが慌てて思い思いに空を見上げさせた。

同時に大きな影がザッと横切つて、同時に甲板上に巨大な空気の塊が横薙ぎに叩き付けられ操船作業を行っていた幾体かのゴーレムが船外にはじき飛ばされた。

空気を固めて不可視の槌とする ” エア・ハンマー ” である。

「各員持ち場に戻れ！ 迎撃砲撃準備！ 各自判断でぶどう弾を撃つて良し！ 砲長！」

「へい！」

「五人、腕の落ちる者を甲板に残せ！ 白兵戦に備える」

「し、しかし……相手はメイジですぜ?!」

「大丈夫だ。あたいの他にサイトも居る。あの槍はケチくさい王子様に禁止されちゃあいるが、剣の腕の方も折り紙付きの化け物さ。

オラ！ もたもたすんじゃねえレイス！」

「ひい！ す、すいやせん！」

メアリは抱きついていた才人を解放しつつも、砲長に指示を飛ばし、オロオロと遠くを旋回する飛竜を見上げていた手下の一人にケリを入れた。

レイスと呼ばれたヒゲもじやの男は、その厳つい風体とは想像もできぬほど情けない悲鳴を上げ、詫びを入れ始める。

しかし視線は飛竜から離れないようで、その行為にメアリの苛立ちは一層募るのであった。

「てめえ！ あたいはもたもたすんじゃねえって言ったんだぞ?!」

「で、でもお頭！ あれ、あの飛竜！ 乗っているの、ドレイクの野郎でしたぜ?!」

「なに?!」

レイスの台詞に、メアリは怒りもそのままに表情をガラリと変えて再び迫る飛竜へと向けられた。

その瞳に宿るのは、憤怒の炎。

無理もない。

今、目の前に憎つくき裏切り者が再び姿を表したのだから。

「ドレイクラウ!!!」

気が付けばその名を叫びメアリは迫る飛竜の前に躍り出て、銃の引き金を引いていた。

銃弾は正確に飛竜の足へと命中したが、個人で携帯できる小銃ではドラゴンの鱗を貫く事が出来ようはずが無く。

チュン、と軽い音と共に火花が一瞬あがっただけで、飛竜は何事も無かったかのように ”シューティングスター・サーペント号” の上空をよぎる。

同時に ”エア・ハンマー” が再び甲板上で発生し、今度はゴレム達と一緒にメアリも巻き込まれ船外へと吹き飛んでいく。

「メアリ!」

彼女を救ったのは、丁度飛竜の前に躍り出たメア리를制止しようとしていた才人であった。

目の前で吹き飛ばされた空賊の少女の手を、才人はその辺のロープを拾いあげながらフネの外にまで身を投げ出し掴みとる。

二人は遙か下方の地上へむけて落下を始めたが、幸いにも才人が拾いあげたロープの端は帆と繋がっていたらしく、十五メートル程送り出した所でビンと張り詰めた。

瞬間、ロープを握る才人の腕に二人分の体重と落下の勢いが掛かる。

常人ならばロープを握る握力がその衝撃に耐えきれず、手を離し

てしまったであろう。  
だが才人は違った。

「あ、が！！」

上げる苦悶はメリメリと肩から音がするほどの衝撃を受け止めた証である。

激痛の中、才人はもうしばらくすれば痛みは肩や肘に受けたダメージと共に消え、直ぐに上へと戻れると言い聞かせ耐えた。

「サ、サイト……」

「す、すこし待っててくれ。もう少し休めば上に引っ張り上げられるから、さ」

「バカ！ そんな体勢でお前……」

流星に落下の恐怖からか、メアリの声にいつもの威勢はない。

だが彼女の言葉を遮ったのは恐怖ではなく、才人の向こうに迫るソレであった。

「サイト！ あたいを離せ！」

「はあ？ 大丈夫だって。心配すんな。ほれ、こっやってちよっとくらいなら持ち上げられるまでには回復してるんだし」

「う、わ！ バ、バカ、バカバカバカ！ 危ねえ！！ じゃ、ない！ 違う！ 後！ ドレイク 竜騎士がこっちに向かって来てるんだよ！」

「え？ くそ、フネじゃなくて俺達を狙うのか！？ 性格悪いなアイツ！！」

メアリの言葉に振り返った才人が見た物は、迫り来る飛竜とその上に乗るメイジが杖を掲げる姿。

メイジ　ドレイクは既に何かしらの魔法を詠唱を終えているよ  
うで、丁度才人が振り返った瞬間に杖を才人達に向け掲げている所  
であった。

その一瞬、才人は迷う。

今この瞬間にメアリの手を離せば、魔法の回避もできようしフネ  
の上まで一息に戻れる。

だがそうしてしまえばメアリは間違いなく助からない。

下は海なのか陸なのかは雲で分からなかったが、落下の間恐怖を  
たっぷりと味わいながら死ぬ事となるだろう。

かといって、このままでは魔法を受けては即死はしないまでも結  
局二人とも落下してしまう。

勿論確証はないがそれでも　”グリムニルの槍”　を持つ自分は  
死なない、とは思う。

しかしその場合任務は、ウェールズは、ルイズは果たしてどうな  
るか。

……いや、迷う事など無い。

極限状態で才人が選ぶ物など分かりきっていたし、なにより今こ  
そ、その極限状態だ。

既に放たれたと思われる魔法は不可視。

それが　”エア・ハンマー”　なのか　”エア・カッター”  
なのかはわからない。

刹那の逡巡の後、才人は選択をする。

それはメア리를掴む手を離すのではなく……

歯を食いしばり、強くメアリの手を握ってやがて訪れる衝撃が斬  
撃に備えたのだ。

そして、魔法は才人達の元へ。

「え？　……うわ！」

「きゃあ！」

果たして二人を襲ったのは、風の鎚でも刃でもなく浮遊感。

ドレイクが放っていたものは ” エア・カッター ” で、風の刃が切断した物は才人ではなく、ロープであった。

浮遊感はすぐに下方への物と変わり、才人は悲鳴を上げるメアリを空中で自分の胸の中へと引き寄せて、思考を巡らせた。

無理かも知れないけれど、自分がクッションになれば

いや、落下先が地上であるならば、途中どこかに手を引っかける事ができるかも

思い浮かぶ可能性はどれも成功するとは思えず、しかしそれでも才人は諦める事が出来ない。

胸の中ではメアリが恐怖と無念と絶望に彩られた悲鳴を上げ続けている。

せめてその恐怖を紛らわせてやろうと抱きしめたのだが、さほど効果は無いようだ。

くそ！

こんな所で……

この期に及んでもメアリに愚痴を聞かせぬ余裕を見せる才人であったが、流石に高所からの落下には打つ手が在ろう筈もなく心中で毒づく。

それからルイズへの申し訳ない気持ちが出してきて、激しい自責の念が彼の心を苛んだ。

が、それでもメアリの手を離さなかった事については後悔の念は湧かぬ所は、才人らしいと言えよう。

「ぐー！」

「あう！」

「痛……な、なんだ？」

突如。

二人の浮遊感は横薙ぎの衝撃によって打ち消され、程なく下方へ

の浮遊感は上昇へと変わる。

才人は抱きしめるメアリごと強く拘束されている事に混乱しながらも、何が起きたのか確認すべく首を捻り、予想外の事実を目を開いた。

なんとメア리를抱きしめる形で落下していた才人を、飛竜がその巨大な足で掴み取っていたのである。

つまり、才人とメア리를助けたのは意外にもドレイクであったのだ。



「どういっつもりなのか説明して貰おうか」

アルビオン大陸の北方、港街ラックスフォードにある空軍基地にて。

空軍司令官の執務室に呼び出されたドレイクは司令官にそう問われ、肩をすくめた。

勿論、哨戒任務に就いた折、空賊ネルソン一家の残党と交戦し捕虜を二名連れ帰った事についてである。

「司令官、おっしゃっておられる言葉の意味が。どういっつもり、とは？」

「とぼけるな。たかが空賊に哨戒艇のマストをヘシ折られ、竜騎士であるお前までも出撃しておきながら相手のフネを沈める事すらできんとはどういう事だ？」

「お言葉ですが司令官。当基地所属の艦艇が空軍史に残るような砲戦の敗者となったのは、私のせいではございません」

「話を逸らすな。私は何故、相手のフネを沈めなかつたと聞いている」

重苦しい基地司令官の言葉は、ドレイクの少し斜に構えさせた姿勢を正すには至らない。

本来ならば一介の軍人が司令官の前でそのような態度を取っていれば、即刻懲罰房行きである。

しかし「竜騎士」という貴重な戦力である為か、ドレイクがその

態度の為に咎められる事はない。

くそ、忌々しい空賊め。

少しは使えるかと思つて使つて見れば、こちらの足下を見るようになりおつた。

日増しに調子に乗りおつて……

既に老人の域にある歳経た司令官は怒りを隠そうともせず、そんなドレイクを忌々しく見上げ内心ではそう毒づいた。

「沈めなかつたではなく、沈められなかつたのですよ、閣下。記録ではネルソン一家が残すフネは二隻。あのまま戦闘を続けければ沈められたでしょうが、その間別のフネに母艦が攻撃でもされてはたまりませんからね」

ドレイクは司令官の強い視線を真つ向から受け止めつつ、そう説明してもう一度肩をすくめる。

それから最後に、何せ最初の砲撃でメインマストをヘシ折られるほど頼りないフネが母艦でしたので、と付け加えた。

彼のその態度は、温厚で知られる司令官に火を点けてしまう。

司令官はたまりかねた様子でバンと巨大な執務机を叩いて立ち上がり、ドレイクを指差しながら声を荒げ始めた。

「それが何故！ 捕虜を二名連れ帰る理由になる？！ ネルソンなら兎も角、報告によれば小僧と小娘ではないか！ 貴様、今どんな時期が分かつておるのか？！」

「司令官、落ち着いて」

「落ち着いていられるかバカ者！ ロンデニウムからはトリステインからの侵攻に備え、艦船派遣の要請が来ておるのだぞ？！ 今は空賊の相手をしている場合ではないと言つのに、派遣できるフネを減らしておつて！」

「ですから、マストを折られたのは」

「うるさい！　そもそも貴様が同行せねば、艦長は無理な戦闘など仕掛けはしなかつたわ！」

荒げた声は、遂に怒号のような物となる。

司令官にしてみれば、中央から要請されている艦船の破壊自体はそれほど重要ではない。

問題はその経緯だ。

トリステイン・ゲルマニア同盟軍のアルビオン大陸侵攻作戦の存在が噂される昨今、その迎撃任務に備え南方の基地へと所属艦を送る命令書が各地の司令官の下に届けられていた。

つまり集結地には各地の基地に所属する軍艦が集まる事となる。

そんな中、たかが空賊に沈められかけたなどという不名誉な話は格好の噂の種となる事は、容易に予想できる事だ。

当然、その話はその場に居合わせるはずである元帥や提督に知れ渡る運びとなり、間違いなく自分の出世に関わってくるだろう。哨戒艇の艦長も高級軍人故、その辺の事情はよく分かっているはずであった。

故に、ドレイクが居なければネルソン一家などという危ない空賊には、迂闊に手を出さぬはずだと司令官は理解していたのである。

事実、哨戒艇の艦長は ” シューティングスター・サーペント号 ” の発見当初、砲戦を行うに辺り有利な位置に就けていたにもかかわらずドレイクに情報の提示を要求した。

これは、僅かな ” 事故 ” の可能性と、ネルソン一家の旗艦を撃墜する栄誉を天秤に掛ける為なのだ。

勿論艦長としても基地を離れるに当たり、できれば華々しい武勳が欲しい。

空賊の中でも得に有名なネルソン一家の旗艦を沈めたとなれば、各地のフネが集結する場で自慢出来るだろうし、中央の高官の目にとまる事もあり得る。

そんな思惑が働いてか、ドレイクの情報を吟味し、己の名誉と司

令官の体面が秤に乗せられて結果

「司令官殿。艦長が下した判断の責任を私に求められましても……。結局決断したのは彼ですし」

「ふん。知っておるかね？ 基地内では君は実はまだネルソン一家と繋がっているのだという噂が立っておる事を」

「濡れ衣も良い所ですな」

「僕もそうでないかと疑い始めておるよ」

「これは心外な。先日ネルソン一家を追い詰めた折での功績で、クロムウエル皇帝陛下直々に勲章を授与していただいたのは、閣下ではございませぬか。その為の下ごしらえをしたのは誰か、よもや忘れた訳ではございませんまい」

「だからどうした！ 恩を売ったから今回は大目に見るとでも言うのか?!」

激昂と共にもう一度、今度は強く机に拳は叩き付けられた。

余程興奮しているのか、司令官は耳まで赤くして憤怒の表情を浮かべている。

しかしドレイクは上官の不興も何処吹く風、涼しい表情のままあの提案を行うのであった。

「閣下。こうしては如何でしょう？ あの砲撃は大空賊ネルソンの神業であったと認め、哨戒艇の艦長を更迭するのです」

「な?!」

「次に、ネルソン一家の力はいまだ衰えてはおらぬ、と噂を流し内外にその強大さを広めます。なに、多少誇張してもよいでしょう」

「貴様！ 何を」

「まあまあ。そんなに怒るとお体に触りますよ？ で、次にです。ここからが重要なのですが、あの捕らえた捕虜をエサにネルソンをおびき寄せ、今度こそ一網打尽にするのです」

「……ふん。たかが手下の一人や二人にあのネルソンがおびき寄せられるものか」

「閣下。そこがあの人を捕虜とした理由です。捕虜の内の一人、女の方は次期頭目であり、ネルソンの孫でもあるのですよ」

「なに?!」

立つたまま憤怒から驚きの表情へと変えた司令官に、ドレイクはそこで言葉を切つてゆっくりと頷く。

これだから欲に目がくらむ馬鹿は御しやすい。

ドレイクは内心でそうほくそ笑みつつも、表面上は先程までの不敬な態度を改め、恭しく司令官に座るよう促した。

「だからきつとネルソンは我々の誘いに乗ります。そこを今度は閣下直々に誅するのです」

「ふ、む……」

「幸い、先のネルソン一家討伐作戦も閣下の作戦による功績として、皇帝陛下からお褒めの言葉を賜っております。そこを利用すれば今回も閣下が乗り出した途端、見事ネルソンを撃退したという印象を世間に与える事ができるでしょう」

「……つまりは、ネルソン一家を持ち上げれば持ち上げるだけ、それを撃破した儂の名声も上がるという事か」

「は。少なくとも、砲戦に入るなりいきなり航行不能とされたのは、閣下ではなく艦長が無能であつたと印象付けることができましょう」

ドレイクの説明が終わる頃には、司令官の怒りは完全に消え去つていた。

彼の脳内には既に出世の為の打算が渦巻き、己が得る利を賢くはじき出している。

その様子をドレイクは眺めながら、己の野心を人知れず滾らせ目を細めた。

表情は相変わらずどこか軽薄であったが、瞳だけはギラついて、しかし司令官がそこに気が付く事は無い。

やがて司令官はいくつかの指示をドレイクに出して退室を許可した後、後日行う予定であった査問対象をドレイク大尉ではなく、哨戒艇の艦長とする指令書を作成し始めるのであった。

才人とメアリはドレイクによって捕らえられた後、手を縛られて基地まで護送され牢へと放り込まれていた。

時刻は深夜であろうか。

砲撃によりマストを折られた哨戒艇は才人とメア리를捕らえたまま、まる一日ほど漂流した後救援に駆けつけた他の軍艦に曳航され、ラックスフォードの基地まで無事たどり着いていたのであった。

牢は地下に作られ、石が敷き詰められた床や壁はじめじめとしており、入り口近くの見張りが使うかがり火以外には明かりはなく、日中も光は殆ど差し込まない作りとなっている。

その明かりも僅かに才人達がいる牢に届くばかりで、視界は外より悪い。

通常の牢ならば男と女は分けて入れられるのだが、何故か才人とメアリは一緒に閉じ込められていた。

「……あいつ、どういうつもりなんだ？」

「ドレイクとか言う奴か？」

「ああ。あたいらを助けただけでもおかしいってのに、こんな風に雑に閉じ込めるなんて……」

「雑？」

「考えてみるよ。普通、男と女を一緒に牢に入れたりしはしねえぜ？ 捕まえたのが若い女なら尚更な」

言つてメアリは床に腰を下ろし、縛られたままの手首を眺めながら少し眉根を寄せた。

才人はその意図をくみ取つて、それ以上質問を返さず確かにかかしいな、とだけ言葉を返す。

ドレイクの真意は測りかねたが、メアリは囚われの身になったと理解した瞬間からある覚悟を決めていた。

”それ” は護送中のフネの中で始まるのか、それとも陸に移送され ”専用” の牢に入れられてから始まるのかはわからない。が、少なくとも若い娘の空賊が軍に捕らえられればどうなるか、想像に難くはなかった。

なぜならば、空賊に若い娘が捕らわれた場合どうなるかを考えると、それはある意味当然の話であるのだから。

しかし実際はメアリの体を求める者などおらず、ここまで至つて何事も無く護送されていたのである。

「くそ、気味悪いな。素直に服の一つでも引き裂いてくれりゃ、サイトも気兼ねなく暴れられるつてのによ」

「……悪いな、メアリ。出来るだけ騒ぎを大きくしたくないんだ」「いいつて。むしろ、お前が助けに来てくれて嬉しかったぜ？ 何、お前がいりゃ何処にいたつて怖かねえさ」

メアリは努めて明るくそう言いながら、隣に腰を下ろす才人に元気よくすり寄り肩をぶつける。

しかしその肩は僅かに震え、才人に心の内を晒してしまう結果となった。

怖くない、というのはウソだ。

空賊は海賊と同じく、取り締まる軍と交戦すれば基本的にはその場でフネごと墜とされる。

また、運良く捕縛されたとしても地上に降りてすぐに吊し首にさ

れるのが常だ。

だからこそ、空軍基地の牢は狭く数も少ない。

これに加え、希有な存在ではあるが若い女性である場合、兵士達が飽きるまで慰み者にされ続けるという話もある。

つまりは、理不尽な事に女空賊の場合は過酷な運命が待ち構えているのだ。

それを年若いメアリが怖れていない筈は無い。

才人はそんなメアリに僅かだが申し訳なさを感じつつも、気を紛らわせるべくそれまで少し気になっていた事を尋ねる事にした。

「そりゃ、俺だって空賊が捕まればどうなるか位少しは知ってるけどさ。確かに妙な話だよな」

「だよな。ドレイクの奴、何考えてるんだか」

「なあ、メアリ。お前らつてさ、もしかして義賊だったりするのかわ？」

「ああん？ どういう意味だ？」

「だから、その。お前らつてさ。女の子捕まえても乱暴だけはしなかったとか」

「ああ、そういう事か。はは、まあ、ネルソン一家は普通の空賊じゃねえしな。確かに襲うフネは貴族の抜け荷や危ねえもん積んだフネが主だし、殺しや犯しはしねえ。巷じゃ義賊って言い方する奴も確かに居るらしいな」

「だからじゃないか？」

「……いや、軍の連中にそんな分別はねえよ。空賊は空賊。義賊もクソもねえ。特に下つ端ほどお貴族様特有のプライドなんてねえし。義賊だろうが空賊だろうが、若い女捕まえりゃ精々”ポーナス”が出た位にしか思いやしねえよ」

「う……そうなのか……」

「まったく、義賊つてのも割にあわねえんだぜ？ 手下が女に飢えないよう、定期的に陸に揚げて上等の娼館連れて行って腹一杯女抱



かせたりよ。なのに捕まれば他の空賊とおなじ扱いと来たもんだ」  
「そ、そうなんだ？」

「ああ。そもそも、ネルソン一家の強みは陸に上がれる事だな。だからこそ、王子様の依頼を受けた位だし。その為にも義賊って評判を落としちゃならねえんだ。貴族様の事を良く思っつてねえ平民の協力者がいなくなっちまうからな」

「へえ」

「他にも色々」とらしくねえ” 事をしたもんさ”

そう説明をしてメアリは青くため息をついた。

犯罪者の荒くれた空賊の男達を纏める苦勞を思い出したのだろう。だが寄せられた肩の震えは収まったようで、才人の目論見は達成出来たようだ。

さて。

これからどうしようか。

考えて才人は幾度も試していた念話をルイズに送る。

しかし、返答はない。

理由はわからなかったが、何時の間にか主であるルイズと念話が出来なくなっていたのだ。

基地へ護送される間、メアリに聞いた話では ” シューティングスター・サーペント号 ” は港街ラックسفোর্ド近郊の村を目指していたらしい。

そこで秘密裏に皇太子一行を下船させ、任務が終わるまで近くで潜伏する予定だったのだとか。

メアリによればもし、今回のような想定外の事が起きた場合でも、軍の追跡を振り切れているであろうあの場合はそのまま目的地へと向かっているはずとの事。

たからか、才人はウェールズが上陸を果たすであろう日時までは大人しく捕まっただままでいることにしていたのであった。

勿論その間、目の前でメアリの身に何かが起こりそうならばその

限りではなかったが。

なんだかんだと言っても、女の子には弱い才人である。と、いうわけで。

才人にとって当面の問題は、ルイズと念話が出来なくなってしまう事であろう。

一応、”シューティングスター・サーペント号”が目指していた場所へは、あの日から2日もあれば到着する予定だったらしい。しかしウェールズ達が直ぐに上陸出来るかどうかは定かでなく、更にはそこからアルビオン大陸を秘密裏に移動する必要がある。

それらの理由から才人が迂闊に脱獄すると、道中やラックスフォード近隣の警備体制が厳しくなってしまう事が予想できた。

だからこそ、情報の入手先としてもルイズとの念話が必要であったのだが……

「……ルイズ、どうしてるかなあ」

「あん？ 忘れちまえよ、あんなヒス女のことなんざ」

「んだよ、そんなこと言うなよ」

「だって本当の事だろ？ あたいだったら浮気位4人までなら許してやるし、見てくれも 着飾ればそこそこだし、脱いだらアイツよりずっとスゴいし、それに、なんてたってま、まだしょ、し……処女、なんだぜ？」

最後に何を想像したのか、言葉尻に彼女には珍しく頬を染めそう宣言しながら才人を見上げるメリリであった。

そのギャップの威力は計り知れないもので、不覚にも才人は一瞬、心を惑わせてしまう。

元々彼の嗜好として、芯が初心な女が好みである所も大きかったのである。

「なあ。本当にあたいたいじゃイヤなのか？」

「い、イヤとかじゃなくて、な？ 俺、ルイズの事が……」

「比べなくてもいいんだぜ？。どうせ、王子様の作戦がうまくいきや、あたい達は真つ当な職業にありつけるんだ。空賊がイヤだったんならそれからでもいいし、なんだったら愛人でも良いんだ」

「そ、そんな、愛人だなんて……はは、冗談きついで」

「冗談なんかじゃ、ないぜ？ あたいとしちゃサイトの子供を授かって、たまゝに愛してくれりゃそいれでいい。なにせ、年中フネの上にいるからな。知ってるか？ 空の女はそうだからこそ、浮気には寛容なんだぜ？」

何時の間に近付いたのか、メアリの唇は才人の耳の直ぐ近くに移動して甘く囁く。

攻撃はそれまでの強引な物とは打って変わり、狡猾に才人の心へと忍び寄っていった。

才人は思わずメアリから体を離しつつも、引きつった笑いを浮かべて防御を計る。

しかし、メアリの積極さの前ではそのような消極的な防衛は意味を成さず、それどころかずいと顔を近付けてくる彼女に、何時の間にか押し倒されるような格好となってしまった。

流石にその状態に至ってまずいと感じ、拒否の意志を見せようとした才人であったのだが、ハッキリと態度を示す前に二人を引き離す者が現れる。

「やつぱり！！ ちょっとあんた！ なにやってんのよ！！ は、な、れ、な、さ、い、よ！！！」

薄暗い牢には似つかわしくないほど、生氣に満ちたその声は。

いきなり牢の中に現れ、才人を押し倒すメア리를引きはがしたのは果たして、ルイズであった。

つまり彼女は、いかなる手段を用いてか才人とメアリの後を追って来ていたのである。

才人とメアリが連れ去られる姿を見たのは、偶然である。

デルフリンガーと不満を胸に抱えつつ自室に戻っていたルイズは、直ぐに他の場所へ移動をしていた。

部屋に戻る途中、砲戦が始まるならば外板側にある自室よりも装甲の厚い船倉に降りた方がいい、とウエルズに誘われたからだ。

しかし砲戦は長くはすぐに終わったようで、ルイズは安堵して自室が被弾した時の為に持ち出していた手荷物を一旦置きに戻った時、ふと視線を投げた小さい丸窓の中に、それを確認してしまったのだ。

「な?! サイト?!」

思わず声に出した名の使い魔は、気に入らないあの海賊の娘と共に飛竜の蔽つい足によって掴まれて飛び去って行く姿を晒していた。ルイズは直ぐに念話を送ろうとしたが、そこで初めて才人とは”繋がらなくなっている”事に気がつき、混乱を深めながらも慌てて甲板の方へ駆け上がる。

甲板では突然の事で右往左往している空賊がそこかしこに居て、その内の一人を捕まえ、なかば脅すように何があったのか説明させて初めて事の顛末を知ったルイズであった。

無論、すぐさま後を追うべく”瞬間移動”<sup>テレポート</sup> を使おうとしたが、僅かに残った理性が彼女を引き留める。

と、いうのも”瞬間移動”<sup>テレポート</sup> での移動距離は精々数百マイルだ。

連続して唱えれば敵のフネまで移動はできようが、その後はどうするべきであるか？

才人とともに敵船を制圧をする？

それとも、なんとか逃げ出す？ 空の上から？

自問に対する答えはいずれも否、であった。

先程もメアリを言い含めたように、そもそもは極秘任務の為にここまで来たのだ。

敵のフネに乗り込んで制圧をするような派手な暴れ方が出来るなら、最初から才人があの槍を使い相手のフネへ攻撃を仕掛けていたであろう。

幸い、捕らえられた二人は捕虜として扱われていると判断できる。どんなつもりなのかはわからなかったが、もし捕らえるつもりが無いならばあの竜騎士はその場で二人を投げ落としていた筈だ。

ならば、どうするか？

「それからが大変だったの。その後、フネが目的地に着くまでずっとガマンして、でも殿下より先に上陸してね？ 勿論、殿下に反対されたけれど、一生懸命説得して」

「ル、ルイズ？ 今はそれどころじゃ……」

「なんだ騒がし 誰だお前?! 一体どこから?!」

「やべえ! 見つかったぞサイト!」

ラックスフォードにある空軍基地にある、その牢内にて。

状況を忘れ、才人を押し倒さんばかりに迫っていたメア리를強引に引きはがしたのは、突如現れた ”ミス・ゼロ” ことルイズであった。

彼女は杖とデルフィンガーを手にしたまま、己の恋人を押し倒すメア리를ぎゃあぎゃああと騒ぎながら引きはがした後。

息が整うのを待ってから、突如誰に話しかけるでもなく、落ち着き払った声となりそれまでの道程を説明しはじめたのである。

勿論メアリを引き離す際に少々騒いだ為、様子を見に来た衛兵に見つかっていたのだが。

「でね？ 結局なんとか殿下を説得して別行動をとらせて貰う事になつてね？ 私、フネがバースに陸着けされるのも待てずに魔法使つて上陸しちゃって」

「ルイズ？ えっと」

「お、おいサイト。コイツ突然どうしたんだ？ 様子がおかしいぜ？」

「おい！ 応援呼んでこい！ 侵入者だ！ くそ、一体どこから…  
…おい貴様！」

「で、目的地まで ”瞬間移動”<sup>テレポート</sup> や ”加速” とか、この基地に入る時なんか ”イリユージョン” で気を逸らしたりしてとても苦勞 うるさい！」

語尾はそれまでの静かな物とは違い、憎悪が込められた怒声であった。

ルイズは台詞を邪魔する衛兵に向かって罵声を一言言い放ち、杖をピツと向け短く詠唱を口にする。

瞬間、ボンという音と共に小規模な爆発が起きて、煙が牢内に充満した。

程なく煙が晴れると、綺麗な真円状の穴が鉄格子に開いていて、その向こう、通路では爆発の衝撃により衛兵が伸びている姿が見える。

「ええっと。どこまで説明したかしら？ ……そう、とにかく、すつごく苦勞してここまで来たのよ、サイト？」

声は静かなものへと戻っていた。  
が、その圧力はいかほどの物か。

才人はルイズが放った ” エクスプロージョン ” の威力に目を見張りながらも、その見覚えのある迫力に戦慄して言葉を失う。その声、その迫力、その魔法に凝縮された破壊は、見事なまでにかつての妻と同じものであったからだ。

そもそも、このの所いつも才人により守られているイメージの強いルイズではあったが、彼女は彼女なりに修羅場を潜り抜けている。 ” 前 ” とは違い虚無の魔法を一通り扱えているし、タバサと戦闘訓練を何度も行い、実戦経験をも重ねているのだ。

よくよく考えてみれば、今のルイズにとって辺境の軍事基地に侵入する事など容易い事なのであろう。

「 さっきだって、見つかってしまつてね？ もう、ダメね、私だったら。あ、発見されたけれど ” 加速 ” を使って騒がれる前にこの ” 毒竜の牙 ” で気絶させたから安心して？ 」

「 あの、ルイズ？ 今はそれどころじゃ……な？ 」

「 大丈夫よ。ちゃんと ” 忘却 ” だつてかけといたんだから 」

「 いや、そうじゃなくてだな…… 」

「 ん？ ああ、どうしてここが分かつたかつて？ うふ、前もつてサイト達を連れてつた軍艦が何処に入港するか、空賊の手下に聞いておいたのよ 」

少し乾いたような微笑みは、才人の本能に呼びかける。

決してこれ以上彼女を刺激してはならない、と。

その天使のような笑みは、過去何十年もの間幾度となく恐怖と共にすり込まれたあの笑みであつたからだ。

記憶が薄れているとはいえ、それだけは決して忘れられない。

忘れようも、ない。

気が付けば口中の水分が全て失われ、喉が渇くような緊張が才人の全身を包んでいた。

隣で呆然とするメアリもその鬼気迫る静かなルイズに圧倒され、



何時もの威勢は消え去っている。

更に緊迫した牢の出口からは、先程応援を呼びに出た衛兵が戻って来たのか、多数の兵士がやって来る気配。

才人はその気配を察し、どうこの場を切り抜けようか必死に思考を巡らせた。

かつては自身の身の安全の為。

そして今この時は、隣に居るメアリと近付いて来る兵士達の安全の為にどうルイズを宥めようかと考えていたのである。

正直。

元々盲目的な所があったルイズであるが、ここまで ”キている

” 状態は ” 今回は ” 初めてだ。

その恐怖を知るが故、足りない時間がなにより才人を焦らせていく。

「ルイ、ルイズ？ 落ち着け、な？ とりあえず、ここを出よう」  
「？ おかしな事を言うわね、サイト。私は落ち着いているわ。そう、とつても」

屈託の無い笑顔は花のよう。

傾げた首は可憐で、肩に散らばるフワフワのピンクブロンドはこの所手入れを怠っているとは思えない程きめ細かい。

どこからどう見ても美少女である。

ただ一つ。

欠点があるならば、その優しげな声色の裏に渦巻く憤怒がそれらすべてを恐怖の対象に変えてしまっている事であろう。

「そ、そう、なのか？ ルイズ。はは、いや、それなら、いいんだけ……ど」

「だって、そうでしょう？ 貴女がその女に押し倒されていたけれど、今はもう、ほら。怒鳴ったり、叩いたりしないじゃない」

声はやはり冷たく、ゆつたりとしたもの。

ただ圧迫感が増すばかりで、『その女』というフレーズにメアリはビクリと肩を跳ね上げた。

相手がだれであろうと、痴話喧嘩になろうが取っ組み合いになろうがメアリは一步も引かない、負けん気の強い性格である。

しかし今回ばかりは勝手が違うらしい。

理由はわからなかったが、今のルイズを見ていると背筋に激しい怖気が走り、動悸も早くなってしまうのだ。

それはまるで、猛獣の檻の中に閉じ込められたような感覚と言えるのか。

止まらぬ冷や汗は、彼女もまた、それなりの修羅場を潜ってきたからかもしれない。

まずい。

いま、コイツを刺激するとまずい。

知らず、ゴクリと生唾を飲みながらメアリもまたそう判断していた。

その思いは先程の ” エクスプロージョン ” を見て強固になる。捕らえられた時に当然ではあるが武器を取り上げられていた事もあるが、例え武器が手元にあったとしてもなぜか、今のルイズに敵う気がしないメアリであった。

一方、才人はと言うと焦りを更に募らせ、言葉を必死に探している。

牢の外から迫り来る大勢の人の気配はかなり近くなっていたからだ。

早く。

早く何とかせねば。

「ルイズ！ き、聞いてくれ！ 敵がもうすぐそこに」



否定したかった声は、裏返ってしまふ。

鼻をルイズの甘い乙女の香りがくすぐったが、やはり今の才人には恐怖をかき立てる香りではなかった。

そんな才人にルイズは相変わらぬ怒りを表すでも無くクスリと微笑んで、ゆつくりとその可愛らしい唇を才人の耳の側に持って行く。

「ううん、いいの。その度に私怒ったりしてたけれど、今はもう、いいの」

「……ルイ、ズ？」

「いいのよ、サイト。考えてみれば、あんたって私が夢中になつてしまう位の男だもの。ヒゲも生えてない、見てくれが冴えない位じゃ、あんたの魅力は隠しきれないのよ。だからね？」

尋常ならぬルイズの様子に恐怖し硬直する才人の耳元で、ルイズは優しく息を吹きかけながらそう囁き、キッとこの時初めて瞳に敵意を宿しメアリを睨む。

メアリはそれまでの雰囲気完全に吞まれていた為か、思わずひつと声を上げ手を前に差し出した。

差し出した手は、鳶色の瞳に宿る憎悪と怒りの業火を直視しないようにした為か。

「だから……言い寄ってくる女の子が居なくならないのは、きっと私が悪いのよ」

「ルイズ?!」

「うふ。だってそうでしょう? サイト。きっと私が相手なら奪えるかもって思われちゃうから、みんなあんたに手を出すんだわ。だから、ね?」

杖がゆつくりと上がり、メアリへと突きつけられる。

その瞳には強い敵意が滾るものの、表情そのものはゾっとするほ

ど白く無表情だ。

「だから……私が近寄って来る子を片っ端から排除すれば、きっとみんなあんたの事諦めるとおもムグ?!」

台詞は最後まで続かない。

極まった才人がいきなり己の口でルイズの唇を塞いだからである。最早、言葉では止められぬと判断した才人が精一杯頭を回転させ、思いついた方法が暴力でも言葉でもない、いきなりのキス、だった。ルイズは突然の事に最初は抵抗するそぶりを見せたものの、最近の才人には珍しく、差し込まれた舌が情熱的に動くにつれ、メアリに向けた杖がゆっくりと垂れて下がる。

その様子をメアリは呆然として眺めつつも、才人が手の届かぬ場所に居る事をまざまざと見せつけられた事よりも、生命の危機を脱した事に安堵を覚え肩の力が抜けていく。

これが普段の彼女ならば負けてなるものかと二人を引きはがしにかかったであろうが、先程までのルイズの鬼気迫る様子を見ては、とてもそんな気にはなれなかった。

やがて。

「ぶあつ、は、ふ……サイ、ト……」

「ルイズ、落ち着いたか？」

長らく呼吸を封じられていたからか、それとも羞恥のあまり才人の顔をまともに見えなくなったからか。

ルイズはそれ以上言葉を紡ぐことなく、トロンとした雰囲気のままうつむき、才人の問いかけに小さくコクンと頷く。

そこに先程までの恐ろしい雰囲気はすでに無く、いつものどこか才人に甘えたような空気を纏う彼女の姿があった。

しかし予断は許さない状態であると才人は知ってか、間髪入れず

現在最も重要な現実についての話題を振る。

「よし、ルイズも落ち着いた事だし、とりあえず脱出するか」

「え？」

「ルイズ。殿下から何か言付かつてる事、あるんだろう？ 計画が変わったし」

「あ……うん。えっと、ね？ 殿下が『サイト君の事だから、どうせ脱出する時ある程度派手になるだろうし、それを利用して我々はロンディニウムへと先に潜入させて貰うよ』って」

「と、言う事は俺達は一旦北に逃げた方が良さそうだな。ロンディニウムはここから南だし」

「そうね。今の時期騒ぎが起きれば間違いなく、トリスティンかゲルマニアの密偵かと疑われるもの。北に逃げた方が巡視隊の目をそちらに向けられるわ」

「サイト、なら北西にあるクルーナスの町に向かうのはどうだ？」

「クルーナス？ なんでだメアリ」

場の緊張感が薄れた為か、メアリが取り繕うように会話に割り込んでくる。

そんな彼女にルイズは少し不機嫌な視線を浮かべはしたものの、先程の余韻がある為かそれ以上の敵意は向けはしない。

「どうやら完全にいつもの分別ある彼女へと戻っているらしい。」

メアリはまだ少し視線に怯えつつも、その後続く自分の言葉に自信があるのか極力ルイズの方を見ないようにして説明を続ける。

「い、いやな？ お前、らも後でロンディニウムに向かう予定なんだから？」

「ああ。とりあえず、殿下達が見つからないよう北に逃げて、そっちに非常線を張らせたいんだ」

「ラックスフォードからクルーナスへの街道はロンディニウムへの

街道と正反対なんだが、クルーナスからロンディニウムにも古い街道があるんだ」

「あ、そうか！ 一旦派手に暴れてクルーナスに向かった後、殿下がロンディニウムに潜入出来た頃合いに俺達もロンディニウムに向かえるって事か」

「そういう事。な？ あんたもそれがいいと思うだろ？」

プライドよりも実益を選ぶあたり、彼女らしいと言えるのかも少しれない。

メアリは先日までの険悪さはどこへやら、やけにフレンドリーにルイズへ同意を求め、顔を引きつらせながらも笑顔を作った。

才人を諦めたかどうかまでは判断がつかなかったが、この場では争う事が色んな意味で自殺行為であると理解してはいるらしい。

「……そうね。わたしもそれが良いと思うわ」

「よし、決まった！ じゃあ、さっさとここを出るとするか！」

とにかく今はトントン拍子に事を進めねば。

才人は手を縛られていた縄をあっさり引きちぎり、受け取ったデルフリンガーを抜きメアリの手を縛っていた縄を斬って、二人に牢の奥に移動するよう指示を出す。

それから、軽口を叩き愚痴を訴えようとするデルフを宥めながら鞘に押し込め、先程ルイズが鉄格子に開けた穴から通路に出て、壁に手を当てた。

同時にボゴと音を立てて石の壁がえぐれ、その手の中には一振り of シンプルな投げ槍が出現する。

「ルイズ。メアリ。耳を塞いどけ。塞がった出入り口の風通しを良くするぞ」

台詞は力強く、先程までの情けない空気は既に無い。

メアリは一瞬そんな才人に見惚れながらも、これから彼が何をするのか理解して、その場に蹲り耳を塞いだ。

一方、ルイズはというと耳だけを押さえ、立ったまま才人を見続けている。

そんなルイズの姿を見上げ、メアリははつとして唇を噛む。

何となくであるが、今の自分と彼女の差が、才人への想いの強さを現しているような気がしたからだ。

つまり、才人は耳を塞げとは言ったが危ないとは言っておらず。

ルイズはその言葉を無条件で信じられるからこそ、あの槍がこんな近くで炸裂しても小石一つ飛んでこない事を確信しているのだと理解したが為である。

その小さな敗北感は、メアリの瞳に意志を宿らせ再び立ち上らせる事となり。

才人やルイズの思惑を余所に、本人さえ知らぬ乙女の心は勇気を取り戻す。

しかし勇気はなぜか甘く胸を締め付け、今までとは別の場所を焦がすのであった。



時節は少し遡り、才人とルイズがウェールズと再会し ” 麗しのアンリエッタ号 ” に乗り込んだ頃か。

曆をケンの月からギューフの月へと移した、神聖アルビオン共和国首都・ロンディニウム。

その南側に建つハヴィランド宮殿に、かつては貴族派であり今は浮遊大陸を支配する将軍や閣僚達が招集されていた。

彼らは荘厳な白一色のホールに会し、巨大な一枚岩で作られた円卓について、皆一様に不機嫌な表情を張り付かせ落ち着かない様子で腰掛けている。

もうかなりの間自分達を招集した人物を待ち続けている為か、中には苛つきを隠せず腕を組んで脚を揺する者までいた。

果たして名だたる貴族である彼ら呼びつけ、待たせる人物とは如何なる者が。

その者はいふ二年前までは地方の一司教に過ぎなかった男である。メイジの血筋では無かったが、ある日伝説の系統に目覚めた人物でもある。

何より待ち人は、彼ら貴族派の盟主として王党派との戦いを勝利に導いた人物であった。

突如。

ホールに幾つもある扉の内、かつて王族専用であったものを衛士が開いて、呼び出しの声を上げる。

「神聖アルビオン共和国政府貴族議会議長、サー・オリヴァー……」

名の呼び上げは最後まで行われぬ。

当の本人が衛士に翳し、にこやかに遮ったからだ。

「サ、サー？」

「無駄な慣習は省こうではないか。ここに集まった諸君で、余の事を知らぬ者は居ないはずなのだから」

貴族連合レコン・キスタの総司令官、オリヴァー・クロムウェルは衛士にそう言いながら円卓を見渡した。

高い鷹鼻と理知的な碧眼は慈愛に満ち、カールした金髪はよく手入れがされていたものの痩せた体軀からは威厳は感じられない。

しかし彼こそは間違いなく神聖アルビオン共和国の初代皇帝である。

その証として、クロムウェルはかつて国王が座していた一際豪華な作りの椅子に座すと、起立して彼を迎えていた閣僚や将軍に座るよう促し会議の開催を宣言した。

議長席の背後には秘書であるシェフィールドが控えており、会議が真の主の意に添うよう目を光らせる。

そこまでは才人が過ぎた”前”と同じであったが、ただ一つ、場にワルド子爵と土くれのフーケの姿は見当たらず、かわりにシェフィールドの隣にもう一人。

漆黒のローブを纏った女性らしき人物が幽鬼のように立っていた。特別な許可があるのか神聖政府の会議の場にあっても深く被ったフードは脱いでおらず、内部に闇その者を湛えているかのように顔おろか口元すら見えない。

そのせいであろう。

彼女の周りはどこか異質な空気が漂っていると見る者に錯覚させ、得体の知れない不安を煽るのだった。

「閣下にお尋ねしたい」

会議の開催と同時に挙手をしながら声を挙げたのは、白髪と白髭が見事なホーキンス将軍である。

歴戦の将軍は少しきつい目を皇帝に向け、発言の継続許可を待つ。

「続けたまえ」

「は。我が軍はタルブの地で一敗地に塗れた後、艦隊再編の必要に迫られました」

「うむ」

「その時間稼ぎの為秘密裏に行われた、トリステイン女王の誘拐作戦も失敗に終わっております」

「そうだ」

「……閣下。それらが招いた結果を閣下のお耳に入れても？」

「もちろんだ。余はすべての出来事を耳に入れなくてはならぬ」

「では……。敵軍は、ああ、トリステインとゲルマニアの連合軍は突貫作業で艦隊を整備し終え、二国合わせて六十隻もの戦列艦を進空させました」

「ふむ……」

「これは我が軍が保有する戦列艦に匹敵する数です。しかも再編にもたつく我が軍と比べ敵は艦齢も新しく士気も上がっております」  
「ハリボテの艦隊だ。奴らの練度は我々に劣る」

ホーキンス将軍の言葉を遮るように反論したのは、クロムウェルではなく他の将軍であった。

将軍は指摘にゆっくりとかぶりを振り、重苦しい口調のまま不快な報告を続ける。

「それは昔の話です。練度で言えば我らも褒められたものではございませんぬ」

「何故だね？ ホーキンス將軍」

「我々は革命時に優秀な将官士官を多数処刑した上、残ったベテランもタルブで殆ど失ったからです、閣下」

説明にクロムウエルは黙り込んでしまった。

難しく顔をしかめてはいたが、不興を覚えている様子は無い。

「彼らは現在、船の徴収を盛んに行い諸侯の軍にも招集をかけ、尚も戦力を増強しております」

「ふむ……まるでハリネズミだ。これでは攻め手が見つからない」

「攻める?! これだけの情報がありながら、貴殿は敵の企図する所を読めぬというのか?!」

ホーキンス將軍は悠長な物言いで発言した太った將軍を睨み付け、声を荒げながら円卓を叩いた。

怒声は雷のように響き、場の緊張感が冷たく増すのがわかる。

「よろしいか?! 彼らはこのアルビオンに攻めて来るつもりですぞ?! 閣下」

「続けよ」

「は。以上を前置いて閣下に質問致します。閣下の有効な防衛計画をお聞かせ下さい。本日我らを招集したのはその為だとか」

「いかにも」

「では是非。小官が愚考するに、艦隊決戦で敗北したならば我らは丸裸となります。更に敵軍を上陸させれば泥沼の戦となります。革命戦争で疲弊した我が軍が持ちこたえられるかわかりませぬ」

「それは敗北主義者の思想だ！」

声を荒げホーキンス將軍の言葉に噛みついたのは若い将官である。クロムウエルは手を翳して怒りも露わに立ち上がった彼をにこや

かに制し座らせ、ホーキンス將軍に向き直った。

「彼らがこのアルビオンを攻める為には全軍を動員する必要がある」「おっしゃるとおりです。しかし、彼らには国に軍を残す必要はありませんせぬ」

「なぜかな？」

「彼らには我が国以外に敵はございませぬ故」

「將軍は彼らが背中を疎かにするつもりであると？」

「は。既にガリアは中立声明を発表しております。それを見越しての侵攻なのでしょう」

將軍の言葉に場はざわめき立つ。

中にはこの場に及んで動揺を隠しきれぬ者までいたが、クロムウエルは焦るでもなく悠然と背後に控える秘書に目配せを送った。

秘書 シエフィールドは合図にコクンと小さく頷いて返し、傍らに居た黒いローブの女に何やら囁く。

「その中立が偽りだとすればどうかな？」

「……まことですか？ 閣下。ガリアが我が方の味方として参戦するなど……」

「そこまでは申しておらぬ。なに、ことは高度な外交機密であるのだ」

場のざわめきはクロムウエルの意外な言葉に一層増した。

ホーキンス將軍もまた、顔色を変えてクロムウエルを見つめている。

その表情は信じられぬといったものだ。

周囲では閣僚や將軍達が思い思いに話し始め、もっぱらクロムウエルがどうやってその協力を取り付けたか、ガリアの意図する所が話題となっていた。

外務大臣すら慌てふためいている様子から、事はクロムウエルの言つとおりかなり高度な外交機密であるらしい。

將軍はそう判断しながらも、同時に彼の思考は戦略について回転を始める。

参戦するまでいかなくとも、もし、ガリアが味方であつたならば艦隊戦に入る前、いやもし敗れた場合でもいい。

ガリアが軍をトリステインやゲルマニアの国境に動かすだけで、彼らの前線は動揺し戦況はあつという間にこちら側に傾くであろう。彼らにしてみれば少なくとも撤兵は免れない。

本当にガリアがハルケギニアの王政に弓引く自分達の味方に付くのなら、であるが。

「閣下。疑うわけではございませぬが、それがまこととするならばこの上ない朗報ですな」

「だから高度な外交機密であると申しておる」

「しかし、その話、如何様にして？ 見たところ外務大臣も知らぬ話のようですが」

「なに。ガリア国王は今の腐りきつた王家よりも伝説の ” 虚無 ” 、ブリミル様の直系を選ばれただけの話じゃて」

答えたのはクロムウエルでなく、シエフィールドの隣に控えていたローブの女。

その声はよく通り、広い白のホールにべつとりと張り付くような凄艶さであつた。

「 貴殿は？ 」

「彼女はガリアからの ” 客人 ” だよ、ホーキンス將軍」

「なんと！」

「くく、密使故名も顔もこの場では明かせぬがの。皇帝陛下の言葉に華をもたせようと、証人としてこの場に同行した次第じゃ」

女のくぐもった笑いは場に居た者達に不吉な印象を抱かせたが、クロムウエルだけは悠然と構え満足げに胸を張っていた。

彼の様子から女の素性が信用できるだけのものを、何かしら提示されているらしい。

「諸君、そういうことであるから案ずる事無く職務に励みたまえ。攻めようが守ろうが我らの勝利は揺るがない。私はこれから　”客人”　と高度な外交を行う必要があるのですね、失礼するよ」

「は！」

「あと、今後の対トリステイン・ゲルマニアの作戦立案は君達に任せる。ガリアは動かない事を前提に話を進めてくれたまえ」

「御意」

クロムウエルはそう言って立ち上がり、秘書と密使を伴ってホルを後にした。

ホーキンス將軍は敬礼をして彼らを見送ったが、その折にガリアの密使が深く被ったフードからちらりと口元が見え、年甲斐も無く生唾を飲んでしまう。

一瞬見えた女の唇があまりに艶めかしく、雄の本能に訴えかけてくるように笑みを浮かべ

たまらなく恐ろしいものに見えたからだ。

そして現在。

ギューフの月も半ばにさしかかった、ハヴィランド宮殿の執務室にて。

時刻は昼頃であるがカーテンが閉じられた室内は暗く、クロムウ

エルはかつて国王が使っていた執務机に向かっていた。  
机の真向かいには秘書のシエフィールドが立ち、冷たく神聖アル  
ビオン共和国の初代皇帝を見下ろしている。

「ミス・シエフィールド。これで……本当にこれで良かったのです  
か？」

男の声に余裕は無く、不安と恐怖がありありと見えた。

シエフィールドはクロムウエルを見下ろしながら、口元に笑みを  
浮かべゆつくりと頷く。

「ええ、なんの問題もないわ司教殿」

「しかしワルド子爵とフーケが消えたのは……」

「こちらの情報では、離反した彼らがトリスティンやゲルマニアに  
与した形跡はないわ。情報が漏れたとしても大した事ではないし、  
裏切り者の言を信じる者はいないでしょう」

「なるほど……」

「それに雇ったうでっこきの傭兵に魔法学園を襲撃させた後、二人  
を始末させるよう手配もしてあるから大丈夫よ」

「ですが……ワルド子爵が居ない今、どうやって暗殺者をトリス  
ティンに？ 諜報員の報告によれば、彼の国の ”協力者” はどう  
いったわけか皆あぶり出され、粛正されてしまったと……」

「くく、案ずるな。儂が手引きしてやるうて」

粘り着くようなくもった女の笑いが、執務室に転がった。

笑いはシエフィールドのものではない。

秘書と皇帝の視線が向けられる部屋の隅、もっとも闇が濃い場所  
にあの黒いローブの女が立ち、そう口にしたからだ。

「本当にごぞいますか?!」



「本当も何も、 ” 我が主 ” がそう望まれるならば是非も無い。ひひ、そうであろう？ 秘書殿」  
「……そうよ」

不快な笑い声を上げ協力を請け負った女に、シエフィールドは恐ろしく冷たい声で答えた。

クロムウエルはそこに侮蔑と不審を多分にくみ取り、戸惑いを覚えたが触らぬ神にたたりなしとばかりに愛想笑いを浮かべ、うわずった声で女に礼を述べる。

そんな彼にシエフィールドは内心舌打ちをしながらも、それ以上女に構う事無く皇帝の秘書として仕事の話に戻る事にした。

彼女の主であるガリア王に最近取り入った得体の知れない女ではあるが、その実力は確かであると知っていたからだ。

いや、正確にはその力がどのような物であるかは全く検討も付いていないのだが、彼女が「やる」といった事は必ず成し遂げられる事だけは確かであると知るシエフィールドであった。

「じゃあ話を元にもどしましょうか、 ” 閣下 ” ？」

「あ、は、はい」

「北部のラックスフォード方面空軍の件だけど、やはりトリステインかゲルマニアの艦隊がスニートビーク空域を越えて来た形跡はなかったわ」

「と、言う事はラックスフォードの艦船が何隻か破壊されたのは…

…」

「基地司令官の報告通り、大空賊 ” 片目 ” のネルソン一家の報復のようね」

「うづむ……たかが空賊にラックスフォードの司令官は一体何を」

「さあ？ あの白髭の将軍が言っていたように、練度の問題では無くて？」

「……ミス・シエフィールド。本当に大丈夫なのでしょうんか？」

「あら。 ” あの方 ” の案が信じられないと？」

声は急に氷のように冷たくなった。

クロムウエルは秘書が纏う空気が変わったのを敏感に察知し、飼  
い主に怒られる事を怖れる犬のように執務机から立ち上がり、彼女  
の足下に跪く。

「め、めめ、滅相も無い！ 私がこのような地位に就けたのも、す  
べてあの方の言う通りにしたお陰でございます！」

情けない台詞の音色は媚びと諂いと恐怖。

古き王政を見事打倒してみせた皇帝の真実は、臆病な犬そのもの  
であった。

シェフィールドはそれからしばらくの間、冷め切った視線を蹲り  
必死に美辞麗句を並べ立てる憐れな男に向けていたのだったが。

ふとクロムウエルの言葉が途切れても尚、蹲り続ける事に疑問に  
感じて片眉を上げる。

「……………司教殿？」

「くく、気にするな。 ちとその五月蠅い阿呆の時を止めただけじ  
ゃ」

返答はまたもや部屋の隅にある闇から。

黒いローブの女の言葉を受け、シェフィールドは足下の男を軽く  
蹴飛ばしてみる。

感触はなるほど、まるで岩のように硬くなっておりどういった魔  
法を使ったのかは不明であるが確かにクロムウエルの時間は止まっ  
ているように思えた。

「……………何のつもり？」

「何。あの狂王ではなく、お主と直接取引をしたい事があっての  
「貴様！」

「怒るな。ひひ、あの一夜は夢のようであつたらう？」

愛する主を狂人呼ばわりされ、シエフィールドは瞬時に怒りも露  
わにして黒衣の女を睨んだ。が、いつぞやの一夜のことを持ち出  
され怒りで朱に染まりかけた頬を羞恥で更に色濃く染める。

その様子に女はいたく満足してか、再びくつくつと笑い出した。

「くく、中々良い表情をするの」

「っ！」

「だから怒るなど言つたらう？ 前も言ったが、僕はお主の味方じ  
「や」

「……信じられるわけないでしょう？」

「そうか？ ではこれならどうかの」

黒いローブを羽織りフードを深く被った女 『時の魔女』ノル  
ンは、くぐもつた笑いを発しながら言葉を続ける。

その様はまるで、部屋の隅に湧き出る闇から取引を持ちかける悪  
魔のようだ。

唯一いつから見えるようになったのか、フードから覗く唇は常に  
柔らかな笑みを湛えて、同性のシエフィールドでさえ淫靡な妖艶さ  
を感じる程赤く美しく。

そして ” 神の頭脳 ” と謳われる伝説の使い魔は、主と同じよ  
うに悪魔との取引に応じるのであつた。

地震、津波、そして原発。

その全てにおいて救助に当たる関係者の方々は皆、地獄を見ているのではないかと思えます。

勿論、被災され一瞬で家を、家族を、自分の命を無くしてしまった方々の事を思えば

こんな文章をアップロードするどころか、自分自身が暖かい布団に入り、美味しい物を食べ

ゲームなどをして楽しみ、家族との一時を過ごす事自体罪悪感が湧き出てたまらない気持ちになります。

被害者の方々に共感すれど、結局は日々の生活に変化無く過ごしてしまう自分とはなんだろう？

自分に出来る事はきつとあるのだろうけども、それは全て今の生活を維持できる範囲でしか

やらないのだろうという罪悪感はどうすべきか、考えさせられます。

勿論、募金や援助物資収集に協力できるのだけど、状況的にそれらを行える段階じゃ無い。

そんな中で、こんな素人のお遊びを追ってくれている方の中に被災してしまった人が居るのかも知れないと思った時

自分に出来そうな事は、ネットが繋がる被災地にあつて、もし、もしだった一人でもいい。

自分が書いた物で一時的に辛い現実を忘れられるなら、と思いつつ更新した日でありました。

まとめに使っているブログからの転載ではありませんが、被災された方

月並みな、力無い言葉だけど希望を捨てず頑張ってください。

はじめに

単に明るいお話が書きたかっただけな作者の自慰行為です。

このお話は本編とは関係ありません。

過去のIFものと同じように「ガンダールヴは夢を見る。」の設定を使った別作品の短編だと思って下さい。

設定は才人が死んだ世界でのアフター物で、IF設定となります。また、すこし説明が曖昧な部分があります。

はじめに

単に明るいお話が書きたかったただけな作者の自慰行為です。

このお話は本編とは関係ありません。

過去のIFものと同じように「ガンダールヴは夢を見る。」の設定を使った別作品の短編だと思って下さい。

設定は才人が死んだ世界でのアフター物で、IF設定となります。また、すこし説明が曖昧な部分があります。

唐突ですが、私は時々自分の才能が恐ろしくなる事があるので、わたくし

名前はアンネロゼ・シモーヌ・オルレアン。

ガリア王国の由緒ある公爵家の姫君であり、虚無の系譜との系譜” を併せ持つ由緒正しいメイジの家柄です。” 剣

有り余る魔法の才能と眩いばかりの美貌は『ガリアの蒼い星』と謳われております。

そんな私が。

そんな、超絶美少女で天才で、出会った全ての男の妄想の中で一度は陵辱されてしまうほど魅力的な私が。

何故、こんなトリスティンのド田舎の、更に奥地の森の中に居る理由とは？

「こっちです、タバサさん」

『お嬢様？ ルーさんが呼んでますよ？ 突然立ち止まってどうしたのですか？』

五月蠅いのです、アラン。美少女には時に立ち止まり、黄昏れなくてはならぬ宿命があるのです。

何が悲しくてこんな雌と一緒にオーク鬼退治に出かけなきゃならんのです？

『自業自得ですよ。なにせお嬢様のご先祖様である『タバサ』になりすまして、かの英雄、サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ公のお屋敷に潜入してしまったのですから』

仕方ないのです。

本来、天才メイジである私には杖が必要無いのですが、タバサのフリをする為、わざわざ同じような棒つきれを手にし、メガネまで用意したのは全て使命の為。

それは最近特に改竄されつつある ” 剣 ” の歴史を編纂する為、この時代まで遡りあのチン公の生態ならぬ性を暴く事こそ、私の使命なのですから。

『チン公はおやめ下さい、チン公は！ 仮にも私やお嬢様のご先祖様なのですよ？！』

まったく、アランは小姑のように五月蠅いのです。

シエスタとかいう貴方のご先祖から、命を救ってあげた恩をもう忘れたのですか？

『それ、潜り込んだヒラガ公のお屋敷で、お嬢様が私をゴキブリの姿に変えたからじゃないですか！』

だから、ちよつとだけ悪いと思ってさりげなく箒の中に匿ってあげたではないですか。

大体、お前は愛くるしい幼なじみの、ほほえましい悪戯に目くじらを立て過ぎなのです。

『どこがほほえましい悪戯なんですか！』

半端なチャバナじゃなくて、大きく厚く、ヌラヌラとした黒いぼでいにしてあげた当たりが？



うふ、お前が憧れていた英雄サイトの髪と同じ色なのです。

『シヤレになつてませんよ！ まったく、どういうおつもりですか？！ こんな事で貴重な” 確率操作” 使つてしまつて……これじゃ何かあつた時どうするんですか！』

五月蠅いのです。黙らないとお前を格納している小瓶の蓋に開けた、空気穴を塞いでしまうのです？

『さあお嬢様、先を急ぎましょう』

わかれば良いのです、アラン。

何時もながらお前の変わり身の速さは感心させられるのです。

お前が聞き分けの良い召使いでよかつたのです。

ああ、ちなみに、その小瓶から脱出したらただじゃ置かないのです？

『なぜですか？』

流石の私もキモいから、です

『うう、泣けて来ました』

元気を出すのです。懐に居る分、空気穴から私の乙女特有の甘い香りが入ってきて役得なのでしょう？

「あの、タバサ、さん？」

きにしないで、です。 ちょっと考え事、なのです。

「そう。サイトさんが言つてたオーク鬼の群れが出る場所つてもうちよつと先だから、疲れたら言つてね」

わかつた、です。

それより、ルー、さん？

「はい？」

あのチン公とはどんな関係なのです？

『お嬢様！ もうちよつとそれらしく取り繕う努力をして下さい！

！ 流石に偽物だとバレバレですよ！』

面倒くさくなつたのです。

何、あとで” 忘却” でもかけておけばいいのです。

「え……前に話してませんでしたっけ？ それにチンコウって何で

すか？」

私がサイトにつけたニックネーム。古ハルケギニア語で”いきり立つ勇者”を意味する

『……なんでそういう事言う時だけは真面目になりきるかな』

「へえ。私も結構古くから生きてるけど、そんな言葉があったのね。東方の言葉かな？」

そう、なのです

「ああ、ごめんなさい。私とサイトさんの事よね？ うふ、気になる？」

それはもう。

あのチン公が貴女を夜な夜などのような格好をさせているのか、興味津々なお年頃、なのです

「あ、大丈夫よ。私とサイトさんはそういう関係じゃないから。ふふ、タバサさんってルイズさんと一緒に、結構サイトさんの女性関係が気になってるみたいね」

……むむむ。この女、中々手強い気がするのです。

『そうですか？ お嬢様のバレバレの演技に疑問すら持ってないようですよ、ほわつとしてどっちかかっていうと抜けているように見えますが』

だまらっしゃい。

お屋敷を出る前シルフィードを締め上げて聞いた所、こいつはこう見えても相当古い韻竜なのです。

油断は大敵。

あのチン公を独り占めせんと何時この愛くるしい私に牙を向けるか、わかったものではないのです。

『お嬢様。そろそろその、チン公っての、辞めませんか？ 流石に下品ですよ、下品』

む。アランは一見、純情可憐な私が下品な言葉を使う事に興奮しないのですか？

『いたしません。そもそも大元からして……じゃない、お嬢様、チ

キユウ産の薄い本の見過ぎですよ」

今何を言おうとしたのか気になります？

「さあ、なんの事でしょう？ うわ！ お、お嬢様？！ 突然なにを？！」

ふふん。

この愛くるしい私を ” 大元からして下品な上に胸が無い ” などと考えた不埒な召使いに罰をあたえるのです。 ころやって、小瓶からその辺にポイっと。

「罰ならもう十二分に受けているじゃ無いですか！ それに胸が無い濡れ衣です！ や、やめ……わああ！」

ざまあ見るなのです。

精々、はぐれないように必死に付いてくるのです。

だけどゴキブリは凄くキモいので、もしお前が視界に入ったら私、なにをするかわかりません。

注意なさい、なのです。

「非道！」

「あの、タバサ、さん？」

気にしないで、なのです。 ちょっとついでだから秘薬の失敗作を捨てただけなのです

「うう、その、秘薬の失敗作って……ゴキブリが、ですか？」

見てたのです？

「そりゃ、突如黙りこくって徐に懐から生きたゴキブリが入った小瓶を出せば、目も逸らせなくなるもんですよ」

……気にしないで、なのです。

「……気になりますよ。私、ゴキブリって苦手で。ほらほら、見てこの鳥肌！」

……ビククリするほど白い肌なのです。

「え？ ああ、私、ほら、生まれつきこうなの。サイトさんによると白子症<sup>アルビノ</sup>って言う病気？ みたいなものなんだって」

あ、知っているのです。

私、天才ですし。

生まれながらに色素を持たない個体、それが白子症アルビノなのです。免疫機能が弱く良い事ばかりではないのですが……しかしその白さはやっぱり羨ましいのです。

”元の姿” も白いのです？

「あれ？ タバサさん、前に私の元の姿を見た事なかったでしたっけ？」

うあ、えっと。

その、あの時はアレがソレでその……うわっと！ いきなりでっかい石が飛んできたのです！

「危ない！ オーク鬼だわ！」

うぬれ！ 下等生物の分際でこの私に不意打ちとは。

わたくし今私謹製オリジナル魔法 ” エターナルフォースブリザード ”

でクオークも残さず分解してや……ルーさん？ どうして服を脱ぐのです？

もしかしてこのオーク鬼と ” お楽しみ ” になるつもりなのです？

いや、いやいやいや。

相手はちゆう、ちゆう、たこ、かいなつて沢山いますです？

その、私、流石にそういうハードな奴は遠慮したいというか、初めて位はその、きちんと手順を踏んで、心を繋げた相手がいいというか、えっと ……！？

ほええええ？！

も、ものすごくでかい韻竜になったのです！！

「タバサさん！ 少し離れてて！ 焼き払います！」

や、焼き払うって！

はっ？！

アラン！

アランは何処です？！

逃げないと巻き込まれ……いた！

アラン！ 早く逃げるのです。  
何ですか？ お前、でっかい韻竜になったルーさんの脚にへばりついたりして。

私に対する当てつけですか？！

「タバサさん！ 足下でなに……を？ ……ひえええええ！ ゴ、ゴキブリイ！」

あ！

こら！

その巨体でいきなり気絶するなです！

ゴキブリ位で大げさなのです！

わ、わ、倒れて……わあ！

……

……ケホ、ケホ。

ビツ、ビツクリしたあ……なのです。

まったく図体ばつかデカイくせに小心すぎるのです。

さて……アランは……ああ、まだ脚にへばりついているのです。

まったく、お前は何を考えているの……うおっと！？

またでっかい石が飛んできたのです？！

なんだ、オーク鬼ですか。

さつきまで怯えまくってた癖に何を息を吹き返してるのですか。

倒れた韻竜にそんな石ころやほっそい槍なんて投げつけても、硬い鱗に傷一つ付けられないのです。

これだから下等生物は。

さて、ちやつちやと駆除するか、なのです。

それからマヌケな韻竜起こして、色々聞き出した後に ” 忘却

” かけて帰るのです。

” つと、そんな投擲じゃこの私わたくしに石など当たりはしないのです。

さ、アラン。

今から派手な花火を上げるので、一旦その韻竜の影にでも隠れ

石が

石が、アランに当たって  
うそ……アラン……？  
そんな……そんな！

「うう……は？！ こ、ここは?!」  
気が付いたのです？

「タバサさん？ あ、私……足にゴキブリがいて……そうだ！ オーク鬼は!？」

オーク鬼はもういないのです。

「え？ あれ、私、人間の姿に……わ！ な、なんですかこれ！ 森の奥が無くなってる?!」

覚えてないです？

ルーさんが混乱して気絶する前、特大の火球で大地をえぐったのです。

その後最後の力を振り絞り人の姿に戻って、後の事を私に託したのです。

「そんな……これを私が？ でも、私の火球はこんな威力なんて……いや、”暴君” だってこんな……」

火事場の馬鹿力ってやつなのです。

『本当は我を失ったお嬢様が手当たり次第に魔法を使った結果なんですからね』

う、うるさいのです。

『まったく、どうするんですか？ これ。特大の”エクスプローション” を使ってもこんな大きな谷なんて出来やしないですよ？

底が見えないし』

……とりあえず ”忘却” で凌いで、 ”確率操作” で元に戻しておくから問題ないのです。

『はあ……こりゃ、帰るのは当分先になりそうですね』

元はと言えばお前が悪いのです。

『そんな！ 私はまだ、オーク鬼が現れた時点で巻き込まれないよ  
う、近くの茂みに隠れていたただけなのに！』

なら一言あつてしかるべきなのです。

『……あんな取り乱した口ゼ、初めて見たな』

う、うるさいのです。お前なんかこうしてやるのです

『あ！ やめて！ 空気穴塞がないで！ くら！ 振るな！ やめ  
ろつて！』

「タバサさん？ 何を振ってるんですか？」

無粋な召使いが入った小瓶なのです。

「え？ それ……ふう」

『あ。また』

よっほどキライなのです。図体がデカイ癖に気の弱い奴なのです。

『……』

アラン？ どうしたのです？ いきなり黙り込んで。

『アルビノ白子症アルビノって本当に白いんですね』

うん？ そりゃ、白子症だから当たり前の話なのです。

これこのように、唇や乳首など常人でも色素が濃い部分は流石に  
色素が少しあるようですが体毛はすべて、陰毛に至るまで白……

『……あ、ルーさんの服、あつちで見かけましたよ？ あれ？

お嬢様？ 如何なさいました？ そのような恐ろしい形相になら  
れ』

ギューフの月第四週であるティワズの週はエオーの曜日。

以前はアルビオン王国、今では神聖アルビオン共和国の首府であるロンディニウムの下町、イースト・ロンディニウムでの事。

数ある平民の居住区画の中でも、特に治安の悪いこの下町に  
赤竜の鱗亭” はあった。

店は勇ましい名前とは裏腹に、チンピラや柄の悪い傭兵のたまり場となっており、宿となつてゐる2階も大半の部屋は昼間から客の相手をする娼婦が陣取つてゐる有様だ。

そんな ” 赤竜の鱗亭 ” の2階、もつとも奥まつた部屋にて。

「これは……む、なかなかくるね」

「む、無理です殿下。こんな、大きいな……口に入れるなど、自分にはとても……」

「うつぶ……ドロっとして気持ち悪い」

「うわ！ 俺の方を向いて吐き出すんじゃねえ！ メアリ、お前最初の勢いはどうしたんだよ？」

「サイト……私も、もう……！」

「な、なんだよルイズまで……あんなにメアリと張り合つてたのに」

妖しげな会話は、先んじてロンディニウムに潜入したウェールズ皇太子とケイト・ブロウ准尉、そして彼らと無事合流できた才人とルイズ、 ” 北風 ” メアリらによるものである。

室内は日中であるにも関わらず雨戸を閉め切つており、闇に近い。



唯一の光源は雨戸の隙間、あまりに乱暴な建付の為に大きくそこから漏れ入る太陽の光だけだ。

果たして一行はそんな部屋の中で何をしているのか？

「噂には聞いていたけれど、アルビオンの平民の食事って本当にすごい” のね あ！ も、申し訳ございません、殿下」

「いや……謝る必要はないよ、” ミス・ゼロ” 殿。これも我々アルビオン貴族の政が行き届いていないせいなのだから」

「しかし、ここまでとは……これでは航海終盤にフネの上で供される、腐りかけの肉の方がまだマシですね」

「うえ、ぺっ！ ペっ！……同感。こんなもん、空賊のフネで出してみる。その日の内に反乱が起きるぜ？」

メアリはそう言いながらまだ残っていた口の中の物を、部屋の隅に向け文字通り吐き捨てた。

はしたないその行為を咎める物はいない。

テーブル一つない部屋の中、一同は床に直接車座に座りこんで中央に鎮座した大きな鍋の中に、まるで腫れ物を見るかのような視線を注ぎ込んでいる。

鍋からは大きな魚の尾が無造作にはみ出しており、それだけでもかなり雑な料理である事が伺えた。

いや。

ただ雑なだけであるならばどんなに良かったであろう。

この場に居る全ての者が抱いている感想だ。

問題は鍋の中、即ち食材であった。

才人達が食していたものは、アルビオンでは 下町、特に貧民街ではありふれた料理である。

材料はたった一つで済む簡単な料理で、下ごしらえの後、塩や香草で味を調べてひたすら煮込み冷やしたものだ。

料理の名は ” ウォーターリーパーのにごり” 。

ウォーターリーパーとは、アルビオン大陸全域で見られる生き物で、主に淡水の沼地に生息する両生類である。

その外見はお世辞にも良い物とは言えず　いや、かなりの部分をオブラートに包んだ言葉で言い表しても、グロテスクな外見をした生き物であった。

なにせ、手足の無い巨大な白いヒキガエルに魚の尾が生えており、本来備わっているはずである前足の位置には、2枚の発達した羽状のヒレが生えている外見なのだ。

いくら農地面積に限りあるアルビオン大陸とは言え、先人は何故にこれを食そうと思ったのか。

100歩程譲っても、何故白いヒキガエルを茹でた後冷やして、豊富なゼラチン質故にゼリー状になったソレを完成としたのか。

少なくとも、アルビオン人ではないルイズや才人には理解出来よう筈がない。

否、このような食物を絶対に口にする事が無い王族であるウェールズ皇太子も理解出来る事はないだろう。

「んだよ、ケイト、メアリ。お前らだつてアルビオン人だろ？」

「私はその、一応は貴族でしたし……」

「あたいは物心ついた時からじじいのフネに乗ってたからな。陸の食いもんじゃあんま縁がなかったんだ。それに陸に上がる時は大概どんちゃん騒ぎで御馳走ばっかだったし？」

「……サイト君はその……平気なのかね？」

「俺ですか？　見た目は……まあ、良くは無いですけど我慢できない程でも無いです。　食感を意識しなければ」

才人は先程から顔を引きつらせたままのウェールズにそう答えて、取り皿に乗せられているゼリー状の物体にコーティングされた白い肉片を、あむ、と口に運んだ。

そこに注がれる4つの視線の色は、全て嫌悪。

ともすれば悲鳴が上がりそうな空気ではあったが、「どうせなら名物を食べてみたいな」と言い出した手前怯むわけにはいかない。

味の方は意外にも淡泊で不味くは無かったが、如何せん肉よりもその周囲に付着したゼラチンがえもいわれぬ食感を醸し出して嫌悪感となり、背筋を凍らせる。

が、過去に様々な経験をした上、『時の魔女』ノルンによって過去に送られた折に似たような”ひどい食事”を経験していた才人にとっては食べられない程では無かった。

「すげえ……サイト、お前よくそんな生ゴミみたいなもん食えるな。きつと今までロクなもん食ってこなかったんだな」

「ちよつと！ 私はちゃんと才人に美味しい物食べさせてきてたわよ?!」

顔をしかめながらもモクモクと咀嚼する才人を見て、メアリは思わず呟いた。

ルイズは彼女の台詞に一瞬だけ、才人を召喚したての頃の食事を思い出し、罪悪感からか少し焦ったかのように食ってかかる。

才人はそんなルイズをフォローしようかと考えるも、召喚された後、最初にルイズから与えられたあの薄い塩味がするお湯の事に思い至り、余計な事は言つまりと苦笑した。

それから、何時ものように顔を付き合わせてにらみ合うルイズとメアリにため息を一つついて、口中の肉片を飲み込んだ。

二人はラックスフォードの空軍基地を脱出した後、ロンディニウムへの道程の中で相も変わらず衝突を繰り返してはいたものの、その関係は少々変化していた。

あれ程才人に対して積極的であったメアリが、アプローチは行うものの直接的な誘惑はしなくなったのである。

恐らくは牢での一件がメアリにある種のリミッターとなっていたのだろう。

その為ルイズの方も幾分か心に余裕を取り戻し、かつてのキュルケとの関係のような微妙なぬるい緊張感と妙な馴れ馴れしさが、二人の間に横たわるようになったのだ。

とはいっても、ラックスフォードからクルーナスを経由するロンディニウムへの道中は、才人にとって追っ手を躲す事よりも遙かに困難な旅路であった。

ウェールズとケイトはそんな才人の苦勞を感じ取ってか、共に苦笑しながらも助け船を出すのである。

「そうよメアリ。」ミス・ゼロ「は貴族なのよ？ その直属の部下にマズイ物を食べさせるわけ無いじゃ無い。しかも恋人、だし？ まさかそんな、変な物を食べさせようとするはずが無いわよ」「そ、そうよ！ バカにしないでよね！」

「へえへえ、流石お貴族様でやんすね。じゃあなんでサイトだけこんなもん、平気で食ってんだ？」

「流石だね、サイト君。一流の剣士ともなればこれくらいの食事にも動じない、と言う事か。私も見習う必要があるね」

「えつと……まあ、なんていうか。一時期、ロクに飯を食えない時期があつて。それ……で……」

取って付けたかのようなウェールズとケイトのフォローに才人は頭を掻きながら応じかけた時。

”赤竜の鱗亭”の薄い壁の向こうから、悩ましい声が聞こえてきて才人の言葉を遮った。

声はやけに艶っぽく、しかしどこかわざとらしくも有り、非常に気まづい空気を場に作り出す。

一同はそれがなんの声であるかはわかる程には大人であったし、無視出来る程大雑把な性格でも無かった。

つまりは、”赤竜の鱗亭”の2階を利用している娼婦達の一  
人が、”仕事”を始めたのである。

「　　また、始めましたね」

「ま、ままままた？ さつき終わつたばつ、ばかりなの？！」

「あー、こりや二つ隣の部屋だわ。さつきより声が高いし」

「ちよ、ちよつとメアリ！ あんた何壁に耳を押し付けて聞いているのよ！」

「いいだろ？ お前はどうかは知らねえけど、あたいはこう見えて

” おぼこ” なんだ。いつかサイトの相手する時の為に参考になる事があるかも知れねえだろ？」

「そんな時は来ないわよ！ それに私だつてマダだし！」

「　　”ミス・ゼロ”、メアリさん、お二人ともはしたな　　？！」

「……おおう、すつげえ叫び声だな。『すごいすごい』って声の方がすげえよ」

「……なな、なにが『すごい』のかかかしら？」

「そりや、お前」

「だあ！ やめるメアリ！ ルイズ！ ケイト！ 殿下の御前だぞ？！」

女三人寄れば姦しいとはよく言った物ではあるが、その会話の内容にたまりかねた才人が三人を止めに入った。

普段は反目し合い、或いはそれ程仲の良いとは思えぬ三人であったが、そこはやはり年頃の娘である。

やはり、こういう事には興味が津々であるらしい。

茹で蛸のように腕まで赤くしたルイズはメアリに食つてかかりつつも意識を壁の向こうに向けている。

ケイトも頬を染め、二人を窺ってはいるもののやはり壁の向こうが気になるのかモジモジとして。

更にあばずれた態度をとるメアリも、言動とは裏腹に顔を真っ赤にして聞き耳を立て続けていた。

「……なんというか……サイト君。すまないね、落ち着かない部屋で」

「いつ、いえ……」

「我慢してくれよ。じじいの息がかかった、信頼できる宿手配しろって言ってきたのは王子様だぜ？ ……うお？ なんだ？ 尻でも叩いてんのかな、あの音」

「し、ししし、尻？！ お尻を、叩く？！ どういう事？！」

「……どんな事をしているんでしょう、か」

「知るか。俺だって手下共の猥談聞いた範囲でしか知らねえし。ブロウ准尉様は知ってるんじゃないやねえか？」

「なっ？！ なんで私が！」

「だって、どつかカマトトぶってそうだし？」

「しっ、失礼ですね！ 私だって侍女がしていた話位でしか、その、まだ経験は……あの……」

「そうよ！ あんた急に何を言いだすのよ！」

「そういうお前はどうかんだよ？」

「わ、私い？！ そりゃ私だってマダよ！ 声や音じゃなくて実際見た事ならあるけれど あ！」

「み、見ただあ？！ お前、両親のアレでもコッソリのぞいてたのか？」

「のぞきなんてするわけないでしょ！」

「では……では、”ミス・ゼロ” はどのような状況で？」

「……たまたま、そういった行為を記録してる魔具を見ちゃったのよ。たっ、たまたまだからね？！」

「あー、はいはい。ガッツリみたからこれくらい、なんでもないってか」

「違っつたら！」

「……なんというか……サイト君。すまないね、落ち着かない部屋で」

「いつ、いえ……」

居心地が非常に悪いのか。

何時の間にかウエルズは才人の隣に移動して、女性陣の会話をただ黙って聞いていた。

その表情は非常に困ったといった体であったが、ここで本格的に彼女達を窘め会話を控えさせると、ひたすら喘ぎ声を聞き続ける羽目に陥ってしまう。

だからであろう。

ウエルズは才人と ” 男同士 ” の会話を交わす為、隣にやってきたらしい。

「む、むこうは放っておいて殿下。これからの事なんですけど」

「ああ、そうだね。とりあえず……コホン。その話をしようか」

「 ” アンドバリの指輪 ” を奪還するに当たって、具体的に何か作戦があるのですか？」

「うむ。実はハヴィランド宮殿で働く者の内、幾人かはこちらに内通している者がいるのだよ」

「へえ。その辺は抜かりないんですね」

「まあね。で、数日以内に内通者と渡りをつけ、レコン・キスタの指導者クロムウエルから ” アンドバリの指輪 ” を奪還すべくハヴィランド宮殿に潜入する予定なのだが……」

「……何か気になることが？」

才人の問いかけに、ウエルズは眉をしかめほんの僅かな時間ではあったが何かを考え込んだ。

「サイト君。君たちがここに来るまでの間、道中はどんな感じだったかい？」

「道中、ですか？ 追手はかけられていましたが……そういえば検問所みたいな物は無かったですね」

「うつむ……やはり……」

「どういことですか？」

「先行してロンディニウムに入った我々もそうだったのだが、他国と戦争状態にもかかわらず街の警備は穴だらけで、間諜に対して警戒をしているように見えぬのだよ」

「……畏、つてことですか」

「わからない。私が直接ロンディニウムに潜入しているという情報は漏れては居ないと思うが……」

ウェールズはそう言つて、再び黙り込んだ。

確かにおかしな話である。

ロンディニウムは戦時中であるアルピオンの首府で、当然敵対国からの間諜に備えて警備は厳重であるのが自然だ。

更に、ラックスフォードで派手に暴れた才人達についても、敵国の工作員である可能性を疑われ広範囲に渡つて非常線を張られていてもおかしくは無い。

しかし、その両方もどこか不自然に見えるほど警備が手薄く見えて、ウェールズにはどうにも腑に落ちなかつた。

「殿下。その内通者つてのは……信頼できるんですか？」

「一応はね。あまり知られてなかつたけれど、父上が生前目を掛けていた侍女がいてね。その娘の奉公先を内密に父上が世話をした事があつたんだ」

「へえ！ それは凄いですね」

「うん。一国の国王が平民の為に便宜を図るなどと知れたらそれこそ大騒ぎだったのに……まったく、父上も困つた物だね。いくら愛人だからつて……私がまだ幼い時分の話さ」

「あ、愛人?!」

「む?」

「あ、いや。国王陛下でも、平民の女性を側室にする事があるんで



すね」

「はは、すこし違うよ、サイト君。側室にしてしまうと身分まで保障する必要が在るだろう？ 父上の場合には単に肉体関係の見返りに

” 多少の ” ボーナスを払ってただけさ」

「……で、愛人、ですか」

「そう。身分が高くなると正は勿論、側室の数も多くなるしね。それこそ、夜を共にする順番所か交わした会話の数、果てはどのような格好でまぐわるかまでキッチンと管理されてしまうんだ」

ウェールズの説明に、才人は ” 以前 ” の記憶を掘り起こして顔を引きつらせた。

それは薄い記憶の彼方、王配として過ごした日々。

才人の場合は王 ” 達 ” の相手は自分只一人であったものの、彼女達は皆独占欲が強く、よく ” 前 ” の時はどのような事をしたのかと根掘り聞かれていた事を思い出したのだ。形や身分は全く違うとはいえ、複数の女性を相手にする立場ともなれば悩みは大体似たような物となるらしい。

「その……高貴な方ってのは大変ですね」

「まあ、ね」

「……そういえば、殿下はアンリエッタ女王陛下と結婚した場合、側室とかどうするんですか？」

「む？ サイト君、何を突然?!」

「いや。ほら。殿下ってアンリエッタ女王陛下一筋って感じじゃ無いですか」

「サイト君だって、ミス・ヴァリエール一筋のように見受けられるが？」

「そうですよ。でも俺の場合殿下と違って世継ぎとかそういうの、気にしなくて良いし。側室っていうのは、血が途絶えないようにする意味もあるじゃないですか」

「うつむ、たしかにそうなのだが……うん。もしそうなたとして、その時は国を取り戻した時だしね。やはり側室所じゃないと思う」「ああ、そうでしょうね。確かにそれどころじゃ無い状況になるでしょう」

「そうだろう？ だから私は精々、アンリエッタとの間に沢山の子供を……」

そこまで話した所で、ウエルズは三つの視線に気が付いた。

何時の間に興味をこちらに変えたのか、ルイズとケイト、そしてメアリが興味を露わにこちらをじっと見つめていたのだ。

あの娼婦の声も何時の間にか消え失せている。

ウエルズは気まずさを覚え、言葉を途切らせたまま、コホンと咳払いをして一言。

「失礼。レデイの前でする話では無かったね」

「そんなこと！ 殿下、やはり国家安泰の為、側室は多い方が……」

「だ、ダメよ！ そんなことしたらきつと殿下は後悔する事になる

わ！ ね、サイト！？」

「俺にふるなよ、ルイズ」

「妾かあ。……うーん、それもアリっちゃありなんだろうが……」

「ダメ！ 妾もダメ！」

「あんだあ？ お前、随分と食いつくな。あれか、本当、トリステイン人つてのは嫉妬深いな」

「そんなの関係ないでしょ！」

「おちついて、”ミス・ゼロ” 殿。今は殿下の側室のお話です。

私はその、愛人でも構わないというか……」

「ほ！ お貴族様のブrou准尉の言葉にしちゃ過激だな」

「な？！ み、ミミ、ミス。ブrou？！ 貴女やっぱりサイトの

」

「え？！ ち、違います！ 殿下の話です、殿下の！ あ、い

やその、殿下、これは私の、その、なんだったらっというか、例え  
ばのはなしでして……サイトさんまでそんな目で！」

女三人寄れば姦しいとはよく言った物である。

才人とウエールズは眼前で膨らみ行くかつて自分達が所有してい  
た話題を眺めながら、顔を見合わせてはあ、とため息を深くつく。

なんとなく彼女達がこれから未来に関わってくる女性の象徴に思  
え、目の前の困難な任務よりもそちらの方が遙かに気が滅入るよう  
な気がした二人であった。

それからしばらくの間女性3名による会話が続いたが、隣室の娼  
婦が新たな客を取るに至り会話は終わりを迎えて。

結局 ”ウオーターリーパーのにごり” はそれ以上食べられ  
る事は無かったのである。

ギューフの月・第四週、マンの曜日。

その日は丁度、トリステインとゲルマニアの大艦隊がアルビオンに向けて出撃する一週間前である。

” 史実 ” ではウェールズは既にこの世の人ではなく、ルイズと才人も魔法学院で縮みそうで縮まない互いの距離にやきもきしたり、コルベールにゼロ戦の燃料を作って貰ったりしているはずであった。

” 今回 ” はどうか。

場所は神聖アルビオン共和国・ロンディニウム。

平民の中でも多くの貧民が居を構えるイースト・ロンディニウムにある、” 赤竜の鱗亭 ” の2階の一番奥の部屋の前にフードを深く被った女と男の姿があった。

女は ” 赤竜の鱗亭 ” で働く給仕と同じように胸元が大きく開いた服を着て、一目で娼婦であるとわかる。

一方、男の方はというところからは未だ幼さを残す顔立ちで、アルビオンでは少し珍しい黒髪を除けば、何処にでもいそうな田舎者といった風情だ。

男の腕を強く胸に抱く女の様子から、恐らくはこれから二人は目の前の部屋で ” お楽しみ ” なのであろう。

” 赤竜の鱗亭 ” は ” そういう ” サービスもしていたし、昼間から酔っ払いがくだを巻くような店である。

その光景はとくに珍しい物ではないし、彼らが2階の一番奥の部屋に幾度か出入りしている事を疑う者はいなかった。

いや、幾人かはあるいはフードの女が特殊なノックをしている事や、彼女が”赤竜の鱗亭”の給仕でないと気が付く者が居たのかも知れない。

「が、生憎店の2階は奥の部屋ほど”危ない”部屋である事をそこに通う誰もが知っていた。

不思議な事に各地の都市部にある、最下層の娼館や酒場には大概こういった特殊な部屋がある。

部屋はヤクザの大物やお忍びで貴族が使うような目的で供され、当然中の様子を伺おうとした酔っ払いは対価として命を請求されてしまうのだ。

したがってたとえフードの女の不自然さに気が付いた者が居ても、大方どこぞの貴族のドラ息子が屋敷のメイドやお気に入りの娼婦を連れ込んでいる、と勝手に決めつけ見なかつた事にするであろう。

貧民街で暮らす者達であっても、あえて危険に首を突っ込むような愚か者はいないのだ。

「戻りました」

部屋に入るなり女はそう言って、被っていたフードを脱ぎ捨てた。娼婦の衣装を身に纏ったケイトである。

大きく空いた胸元を恥ずかしそうに隠すその仕草は、貴族らしい気品が滲んで妙な色気を醸し出していた。

「お疲れ様、ブラウ准尉。報告は後でいいからとりあえずそちらで着替えてくれたまえ」

彼女の心情を察してか、それともただ落ち着かないのか。

ウェールズは逸る気持ちをおさえつつも、ケイトに部屋の奥に設えた脱衣室に視線を投げそのまま目の前にいる部下を直視しないよう視線を泳がせた。

脱衣室は単に部屋の一角をベッドのシートで間仕切りしただけの部屋ではあったが、女性陣にとつては唯一のプライベートな空間であり、着替えなどに使用されていた。

ケイトはウェールズの心遣いに胸を打たれながらも、軍人らしく背筋を伸ばして敬礼を行う。

すると胸元が大きく空いている、着用者の胸を殊更強調する矯正具が仕込まれている娼婦の服を着用している為か、ぶるん、と双丘が派手に揺れた。

思わず隣にいた、ケイトの護衛兼相手役として街に出ていた才人はその動きに目をとられてしまい

只でさえ、他の女の相手役として才人を送り出していたルイズである。

才人の視線の先が己に向いて無い事を身逃すはずが無い。

敬礼の後、不穏な空気を感じ取ったケイトは不動の姿勢のままその原因にすぐ思い至り、短く声を上げ再びその胸元を隠すのであった。

「あ！」

「すげえ……。なあ、ブラウ准尉。それ使い終わったらあたいくれないかい？」

「……サイト。ちょっと、こっちにいらっしやい？」

「……ゴメン」

「コ、コホン。ミス・ブラウ。その、次からはその服を着ている時は敬礼しなくて良い、ぞ？」

「はっ！ も、申し訳……」

軍人として男も女も関係無くたたき込まれた、条件反射としての敬礼。

ぶるん。

ケイトは決して　そう、決して胸が豊かな方では無い。

にもかかわらず、この動き、この揺れ、この重量感は。

”赤竜の鱗亭”の娼婦の服はある意味『魅惑の妖精』亭でルイズが着た、魅惑のビスチエのように魔法が掛けられているのかも知れない。

と、白いこめかみに青筋を立てたルイズに部屋の隅へと引つ張られながら、才人はぼんやりと考えた。

それから、これから起こる事から逃げるようにぼんやりと、お説教よりも殴られた方がいいなあ、とか、最近怒り方が妻であったルイズに似てきているなあ、などと考えてどう申し開きをしようかと悩み始める。

勿論”今”も昔も、魔法が掛けられているんだ、とは言い訳として通用する相手ではない。

「わわ、も、申し訳　きやあ?!」

「ほんと、すつげえなこの服。ブラウ准尉ってさ、胸は普通位なのにどうやりゃこんなにでっかく見せられるんだ?」

メアリはケイトが来ている服の胸元をつまみ、しげしげと中をのぞき込もうとした。

当然、ケイトはメアリの行為に抵抗するそぶりを見せるのだが、体術自体は圧倒的に優れているメアリが相手である。

ふりほどこうとするケイトの腕を器用にかいくぐりながらメアリは、更に服の構造を見極めようとつまんだ服を引つ張った。

その為、ケイトの胸は今にも服の中からこぼれ落ちそうになる。

ウエールズの目の前で、だ。

「ミス・メアリ。その、ここは他人の目があるからして、その、着替えの手伝いならあちらで……」

「おっと、そうだったな。ほれ、ここは王子さまの目の毒だつてよ。さ、行こうぜブラウ准尉。あたいがその服を脱ぐの、手伝ってやる

よ！」

「あ、あ、あの、ちょっと!？」

「きにすんなって! 脱ぐの手伝ってやるって言ってんだよ。どういった仕組みで胸が ” そう ” なってんのか知りたいしさ」

「あ、え? いえ、その、結構で……」

「いいっていい。お貴族様ってのはこういうのが当たり前なんだから?」

「サイト。私、じっくり貴方と話し合いたい事、あるの」

「わ、わかった! わかったから、とりあえず、杖をしまえ! な?！」

二人の様子は才人も見ていたらしい。

只一人、部屋の中央で取り残されたウエールズは知らず、はあ、と小さなため息を吐く。

彼の両の耳には、左右からそれぞれの修羅場らしき会話が飛び込んできている。

それらはとても重大な任務を前にした、緊張感溢れる会話には聞こえない。

むしろ何処にでもいそうな少年少女達のはしゃぐ会話のようだ。

ウエールズは祖国の奪回が成功するかどうかの瀬戸際にあって、少しだけ疲れたようにもう一度ため息を小さく吐いた。

才人から ” 本来の歴史 ” を聞かされていた彼ではあったが、例えそうだとしても今回も必ず同じように事が運ぶと盲信するような愚かな皇太子では無い。

ここまで上に立つ者として悠然と構えて居る事が多かったウエールズだが、やはり不安と重圧は誰よりも強く感じているのである。

しかしながら今の弛緩しきった空気は 不思議と居心地が良く、作戦の失敗を皇太子に予感させたりはしない。

それはウエールズが才人の力の一端を知る為であろうか?

だとすれば、これこそが慢心と言う物では無かるうか?



どこか、見落としてしまっている材料があるのではないか？

聡明な皇太子はそう自問するに至り、その内に気が付くとケイトの着替えは完了していたのであった。

やがて才人もまたルイズとの ” お話 ” を終え、外に出た二人の報告が始まる。

果たして、二人が敵地の街で危険を冒して外にでた理由とは。

「 そうか。ではクロムウエルの予定はちゃんと掴めているのかな？ 」

「 はっ。先程連絡を付けました。 ” ザ・ウィッチ ” からの使者によれば、クロムウエルは明日一日、宮殿に籠もりきりとなるそうです。 」

” ザ・ウィッチ ” とは、ハヴィランド宮殿に潜伏しているという密通者の暗号名である。

ケイトと才人はその密通者と連絡を取る為、娼婦とその客に扮して ” 赤竜の鱗亭 ” から外に出ていたのであった。

「 丁度一週間後はスヴェルの月ですから、予定通りなら…… 」

「 あんだ？ サイト。何が予定通りなんだ？ 」

「 邪魔しないで。あんたは黙ってなさいよ。 」

「 ちえ、なんだよ。ここでも平民はのけ者か？ 」

「 ミス。すまないね。 」

「 へえへえ。じゃ、お邪魔虫は下で酒でも飲むかな。揚げ物は塩を振りかけりゃなんとか食えるから、それを肴にでもすっか。 」

「 メアリ？ 」

「 わあってるよ、サイト。目立たねえように、だろ？ ここの親父とは一応は顔見知りだしな、厨房で飲むから心配すんなって。 」

メアリはそうごちて、さっさと部屋を出て行ってしまった。

話の内容が重大な物となる事を察して、彼女なりに気を利かせてくれたらしい。

己の立ち位置を弁え、必要以上に首を突っ込もうとしない彼女の意外な一面は少なからず才人を驚かせた。

同時に、そうであるにもかかわらず才人の事に関してはルイズの存在も構わずアプローチを書けてくる辺り、それなりに本気であるという証となつて。

「 続けよう。ブラウ准尉。 ” アンドバリの指輪 ” について何か言伝は？」

「 指輪については、クロムウェルは週に一度ラーグの曜日に籠もりきりとなつた時、秘書にそれらしき指輪を渡して何かしら作業をさせているそうです」

「 ふむ？」

「 秘書が指輪をどのように扱うかまではわかりませぬが、作業自体は一夜かかる事なのは確かなようです。それと、指輪がどのような物であるか絵に書かれた物を頂いて参りました」

そう言つてケイトは、ウェールズに恭しく小さなハンカチ程の布きれを差し出した。

ウェールズが受け取つた布きれには指輪の形の絵が描かれており、隅には色などがしたためられている。

絵と文字は中々美しく、内通者は平民でありながらそれなりの教育を受けている事を伺わせた。

……もしかして、内通者の侍女は前アルビオン国王とその愛人の間に出来た子供だろうか？

それとも、前国王が娘を宮殿に奉公させるに辺り、それなりの仕事を任せられるよう教育まで手を打つたのだろうか？

才人は湧いた興味に僅かに思考を乱されながら、ウェールズが差し出してきた布きれを受け取ってしげしげと書かれた絵と文字を見

つめた。

「して、その秘書の部屋は？」

「はっ。クロムウエルの秘書はかつて……その、陛下の執務室の隣である書斎を使用しているとの事でした」

「父上の書斎、か」

「……は」

「殿下……心中、お察し致しますわ」

「ああ、気にしないでくれたまえ、”ミス・ゼロ”。今、正にそれらを取り返す戦いを挑んでいるのだから」

ウエールズは柔らかく微笑みながらルイズに言った。

穏やかな表情には暗い影は無く、しかしその瞳には闘志と決意が炎をなり渦巻いている。

今の皇太子には慰めの言葉など、かえって邪魔な存在でしかないのかもしれない。

ルイズはウエールズの目を見てそんな印象を受けて、無言で頭を垂れて会釈を返した。

「では殿下。作戦の決行は明日、ラーグの曜日の夜と言う事です？」

「うむ。予定通り明日の夜、”アンドバリの指輪”の奪還を行う」

「腕が鳴るわね！」

「おい、ルイズ。言っとくけど、お前の出番はまだ後だぞ？」

「なんでよ？ 宮殿に忍び込むなら私が一番適任じゃない」

「いや、”ミス・ゼロ”。ここはサイト君にお願いする予定なのだよ。今はまだ君の魔法は温存しておきたい」

「殿下まで！」

「まあ、聞けよルイズ」

少しだけ興奮しかけたルイズを才人はぐい、と少し強引に肩を抱き寄せて、そのふわふわのピンクプロンドに隠れた小さな耳に何やらゴニョゴニョと耳打ちを始めた。

耳打ちは全てを知る訳では無いケイトの手前、ルイズの役割を伝える目的であった。

実際の所は、簡単には納得しそうに無いルイズを一瞬で大人しくさせる目的の方が大きい。

そんな才人の機転は確かに効果はあったのだが。

それを見たケイトはほんの少しだけ、胸が苦しくなるような錯覚を覚えるのであった。

錯覚は嫉妬とは思えなかったが、羨望や憧憬のような感触でウェルズに心を寄せる乙女を惑わす。

一方、いきなり才人に抱き寄せられたルイズは一瞬だけ取り乱したが、才人の耳打ちの内容を聞き進める内に表情は羞恥から喜びのような物へと変化していった。

「と、いうわけなんだよ。だから、お前の力を温存するのは仕方無いだろ?」

「そ、それもそうね! それならそうと、早く言ってよ!」

「仕方無いだろ。俺も作戦の詳細を殿下からコツソリ教えて貰ったのは最近だったし」

「すまない、”ミス・ゼロ”。サイト君の”経歴”を思えば、ギリギリまで秘すべきであるとアンリエッタ女王と決めて居た事なんだ」

「姫さまと?」

「うむ。元はといえばこの作戦、サイト君の話を元に彼女と二人で立てた作戦なのだよ」

言葉尻はすこし恥ずかしげで、皇太子ははにかむように笑い、後頭を掻く。

その表情は優しく幸せそうな物だ。

アンリエッタとの関係を誰よりも知る才人とルイズは、ウェールズの笑みに釣られて微笑むのであったが、ケイトは違った。

この時彼女の胸の中では、先程感じた錯覚が明確な痛みとなり心の一番柔らかい場所を刃が貫いていたのである。

痛みの名は失恋ではなく、『孤独』であった。

『人喰い』ドレイクが思いがけず、北の果てラックスフォードの基地からロンディニウムへと呼び出されていた。

最初は基地から逃げた空賊を捕まえられなかった責任を追及する為だと思われた。

しかし指定した場所が軍部の施設では無くハヴィランド宮殿であった事から、それは違つとすぐにわかった。

彼が通されたのは、神聖アルビオン共和国の初代皇帝・クロムウエルの秘書の部屋。

そこでドレイクを待ち受けていたのは二人の女である。

一人は長い黒髪が印象的な美女で、皇帝の秘書であるシェフィールドと名乗った。

もう一人は黒いフード付きのローブを羽織り、頭まですっぽりとフードを被っている。

黒いローブの女の顔はわからなかったが、やけに癪に障る不快な笑い声から少なくとも若い女であると判断できた。

「ラックスフォード基地所属の竜騎士、か。アルビオン出身ではないようね？」

「はっ！ 仕官前は傭兵をしておりました！」

「……経歴はどうでもいいわ。時間も無いし、単刀直入に行きましようか」

シエフィールドはそう言って、手にしていたドレイクの経歴書を机の上に放り投げた。

「どうやら、面白い事になりそうだ。」

ドレイクは内心ではほくそ笑みながら、直立不動の敬礼を解いて僅かに体を弛緩させた。

「あなた。普通の ” 竜騎士 ” じゃないわね？」

「……は？ それは」

「言ったでしょう？ 時間が無いの。陛下直属の魔法衛士になって任務に当たる気が無いのなら部屋を出て行きなさい」

「な?!」

何か後ろめたいような任務を言い渡されると予想して居たドレイクも、シエフィールドの言葉には流石に絶句した。

大貴族の後ろ盾も無い辺境の、しかも傭兵上がりの自分がいきなり皇帝直属の魔法衛士に抜擢されると言うのである。

申し出は身分の低いドレイクにとってチャンスどころか、夢物語に近い物であった。

勿論、その裏には死の危険と隣り合わせの任務が待っているだろう。

しかし傭兵上がりのメイジにとって、それは間違いなく断る理由の無い申し出だ。

「……部屋を出て行かない、と言う事はやる気はあるわね？」

「いや、まだだ。甘い話に釣られて捨て駒にされるのはゴメンなんぞでね」

「ふふん。急に態度が変わったわね？」

「それだけヤバい任務なんだろう？ 何せエサが皇帝直属の魔法衛士ときているからな。普通ではあり得ん」

それまでの態度を一変させ、ドレイクは不敵に笑った。

目の前の秘書の不興を買えば魔法衛士どころか軍籍すら危つい。

しかし彼の嗅覚が告げる。

わざわざ、アルビオンに数多居るメイジの中から自分を選ぶには理由がある、と。

家柄ならもつとマシな者がごまんという。

捨て石にするには、もつと阿保なメイジも多く居る。

何故、ロンディニウムから遠く離れた最果ての基地に居る自分を選んだのか。

どうして、自分に声を掛けたのか。

何か、自分で無くてはならない理由がこの女にはある、と。

だからこそ、下手に出るのでは無く対等に振る舞わなければ。

「くく、なかなか鋭いの。いや、そうでなくては。お主が察しておるとおり、”お主でなくてはならぬ” 任務があるのよ」

まるでドレイクの心を見透かしたかのように突如語りかけてきたのは、黒いローブの女であった。

僅かに見える口元は妖艶な笑みを浮かべており、くつくつと不快な笑い声を発している。

ドレイクは思わずぎょつとして、ローブの女を睨んだ。

「貴殿は？」

「さて、の。お主の才を見つけ、皇帝陛下に推挙した恩人、とでも思って貰おうか。ひひ、何感謝の言葉はいらぬぞ？ どうせ感謝などするタマではなかるうしの」

「……どこかで会ったか？」

「いや？ それより……秘書殿の話が聞かぬか」

「そう。いまは任務の話をしなないと、ね。なにより」

「時間が無い、だったな」

「そう。安心して？ べつに捨て石にしたりはしないから。ただ、ちよつとだけ貴方の力を貸して欲しいのよ。野生の飛竜を直ぐに飼いは慣らした、”貴方だけの力”を、ね」

シエフィールドは微笑みながらそう言うと、ドレイクの眼前に小さな指輪を差し出した。

同時に彼女の額が光り始める。

なんだ？！ とドレイクは一瞬だけ腰に差していた杖に手を伸ばしかけたが、直ぐに必要な無いとわかった。  
否。

長年の経験から反射的に抵抗を試みようとした本能が、一瞬にして変わってしまったと言うべきか。

やがてシエフィールドが”アンドバリの指輪”を降ろした時、そこに立っていたのは『人喰い』ドレイクであつて『人喰い』ドレイクでない魔法衛士であつた。

「それじゃあ、内容を説明するわ」

シエフィールドの言葉にドレイクはコクリと無言の内に頷く。

その表情には相も変わらず不敵な笑みが浮かんでいたが、瞳の奥だけは暗い水の底のように濁り澱んでいる。

そんなドレイクの背にくく、と女のくぐもつた笑いが纏わり付いたが最早気にならなかつた。





“アンドバリの指輪”奪回作戦は、ギューフの月・第四週、ラーグの曜日の深夜に決行された。

内通者“ザ・ウィッチ”の情報と手引きにより、ハヴィランド宮殿に忍び込んだ才人は、拍子抜けするほどあっさりアンドバリの指輪を奪還出来ていた。

才人は当初、内通者の暗号名にどこか『時の魔女』をイメージしており、どこか不安を胸に抱きながらの潜入となっていたのだが。そんな不安もクロムウエルの秘書の部屋を出、街の外で待機していた馬車の中、ルイズの顔を見た途端綺麗に消え去ったのである。

「殿下、無事目的の品を奪取致しました」

「ご苦労様。首尾は上手く行ったようだね」

「はい。“ザ・ウィッチ”も我々とは別行動で早々に宮殿を離れるそうです」

「そうか……」

ウエールズは才人に手渡されたばかりの“アンドバリの指輪”を眺めながら、少し表情を曇らせ呟いた。

彼にそうさせたのは、危険を顧みず協力してくれた密通者の安否を想ったのか。

アンドバリの指輪が消えた事は、早晚明らかになるだろう。

侵入者の手口から、内部の者の犯行もしくは手引きは真つ先に疑われる筈だ。

そうなれば、その夜の内に姿を消した侍女が犯人と断定され追っ手をかけられる事は想像に難くない。

勿論、当初の計画では彼女と共に馬車で逃げる予定ではあった。しかしながら“ザ・ウィッチ”はウエールズの申し出を拒否し、あるうことか己を捨て置くよう申し出ていたのである。

「……その密通者、大丈夫かしら？ もし捕まったりしたら……」

「ミス・ゼロ”。私も同じ事を考え、彼女に我々と一緒に逃げるよう申し出たのだよ。しかし……彼女はそれを拒否してね」

「何故でしょうか？」

ゴトン、と馬車が大きく揺れ、更に続けようとしたウエールズの言葉を切った。

馬車の中には何時ぞやと同じように、ウエールズと才人、ケイトとルイズがそれぞれ向かい合わせに座っている。

深夜であるが馬車の内部はケイトの杖先に灯された“ライト”で薄暗く照らされ、外へ光りが漏れぬよう車窓には厚いカーテンが掛けられていた。

淡い光は照らし出されたウエールズの沈んだ顔を浮かび上がらせ、表情は“ザ・ウィッチ”が何故共に逃げるのを拒んだのかを知っていると才人達に語りかけてくる。

「……今夜彼女が我々と共に逃げたとして、残される家族はどうなるか。“アンドバリの指輪”が消えた夜、同時に侍女が一人消えたとなれば、本人の搜索と共に家族や親類に追及の手が伸びる事は想像に難くない」

「たしかに……」

「だからこそ、あえて宮中に残り白を切り通す道を選んだのだろう」

「しかし……それではあまりに危険です」

ゴトン、と馬車が揺れる。

震える一步手前の声で指摘したのは、ケイトであった。

無理も無い。

作戦の参加に当たり聞かされていた話では、“アンドバリの指輪”は間違いなくレコン・キスタの首領・クロムウエルの切り札である。

その指輪が無くなるという事は、彼の破滅を意味していた。なれば当然、追求は苛烈なものとなるう。

その日八ヴィランド宮殿に居た者、出入りした者の行動を文字通りネズミ一匹まで調べ上げ犯人を突き止めようとするはずだ。

ケイトの心配は、あのまま宮殿に留まっていれば三日と逃げ切れる事など無理だろうと容易に想像できたからである。

「だが“ザ・ウィッチ”はそれでも我々に協力してくれたのだよ」

「殿下……失礼ながら、尚更理解出来ませぬ。なぜ“ザ・ウィッチ”はそのような危険を承知で我々に協力をしたのでしょうか？」

「わからない。理由は頑として教えてくれなかったのだ。幸い“予定”ではあと一週間もすればレコン・キスタは指輪どころじゃ無くなる。今我々が出来る事は、一刻も早くこの指輪を持って“麗しのアンリエッタ”号に戻る事さ」

楽観的な物言いで説明したウエールズであったが、声色だけは沈んでいた。

彼も又、わかっていたのだ。

宮中に残った“ザ・ウィッチ”が捜査の手から逃げ切れる事など無理である、と。

だからこそ、連絡をつける度に幾度も共に逃げるように説得を試みていた皇太子であったのだが、結局彼女の意志は最後まで変わらなかったのである。

そんな“ザ・ウィッチ”の行動は、国を取り戻す為には彼女の協

力が是が非でも欲しいウエルズにとって、どのように映ったのか。

己の大義に自身の命を捧げてくれていると見えたのか。

大義の為には彼女が犠牲になってもやむなしと見て取ったのか。

それとも、彼女が命をかけてまで協力する理由などどうでも良く、目的さえ達成できれば良いと考えたのか。

恐らくはそのどれもが当てはまらない故に、若き皇太子は心を痛めているのだろう。

才人達はそんなウエルズの心情を察してか、それ以上は“ザ・ウィッチ”の話題に触れることは無かった。

かわりに気まずい空気が狭い馬車の中を支配する。

しかし静寂は、すぐに破られる事となった。

ゴトン。

馬車がまたもや揺れた時である。

今度は同時に、中に居た才人達の体が進行方向へと投げ出されそうな程力がかかった。

どうやら御者役をしていたメアリが、何らかの理由で馬車を止めたらしい。

敵か？！

考えるより早く、才人はデルフリンガーの柄に手を掛けながら馬車の戸を開け外に飛び出した。

中に残されたルイズ達は未だ、急制動をかけた馬車の勢いから体勢を崩している。

馬車は既にロンディニウムから離れ、郊外の森の中に差し掛かっていた。

辺りは闇。

空には月が二つ昇っているが雲がかかっており、そうで無くとも暗い夜道である。

検問を警戒し、才人との合流は予めロンディニウムの外で落ち合っていたので追っ手が才人の後をつけて待ち伏せしていたとは考え

にくい。

“ガンダールヴ”のルーンを使い、夜陰に紛れて行動する才人の後を追える事ができる手練れはそうは居ない為だ。

と、なれば最初から計画がばれており、この場所で待ち伏せを行っていたと言うことであろうか？

目を閉じ辺りに違和感が無いか探る才人であったが、不穏な気配は感じられなかった。

遅れてルイズとケイトが杖を抜きながら馬車から降り、両側で警戒をしている。

しかし特に異変が起きる気配は無い。

「どうした?! メアリ! 敵か?!」

「ちがう! サイト、人が……人が道のド真ん中に倒れてんだ」

刹那の思考と気配の探知の後、メアリに声をかけた才人は彼女の言葉に更に警戒を強める。

人気の無い道の真ん中に倒れた人間を配置し囷とする襲撃方法は、ハルケギニアでは割とよく行われる手法であったからだ。

「メアリ! 一旦馬車の中に入れ! ルイズ、ケイト! 矢と魔法に気を付けるよ!」

「わかつたわ!」

「あたいらの事がば、ばれたのかサイト?!」

「わからない。人の気配はしないけど……倒れた人の様子は俺が見てくる」

言つて才人は辺りを警戒しながらも、ゆっくりと馬車の進行方向に足を向け歩き始めた。

森の闇は濃く、馬車の御者台に設えたランプの灯火は数メートル先程度しか照らし出しては居ない。

その光が届く少しだけ先に、よくよく目をこらすとメアリが言っていた通り、人が仰向けに倒れている姿がぼんやりと確認できた。船乗りであるメアリは夜目が利く。

彼女が御者をしていなければ、馬車はこの人物を轢いてしまっていたかもしれない。

才人は更に近寄った時、初めてこの人物が女性であると気が付いた。次いで、その衣服には見覚えがある事に気が付き、そこから芋づる式について先程刻み込まれたばかりの記憶が呼び起こされていく。

「おい！ 大丈夫か！ しっかりしろ！」

才人はその事実気が付くと、慌てて女性の元へ駆け寄り抱き起こしていた。

女性の背に回した手の平からは体温が伝わってきて、少なくとも彼女が死んでは居ないとわかり、焦りの一部が安堵に変わる。

「おい！ しっかりしろ！ 何があつたんだ？！ いや、そんな事より“一体どうやってここに”？！」

「サイト？ どうしたの？」

「サイトさん？」

才人の台詞から異変を感じ取ったルイズとケイトが、馬車の両側からそれぞれ声を掛けてきた。

彼女達も才人同様に警戒を解いてはいなかったものの、どうもおかしい状況に戸惑っているようだ。

しかし問いかけは聞こえていたが才人は応えず、表情に焦りと困惑を浮かべながらも腕の中の女性の状態を一つ一つ確認していた。

着衣や髪に乱れは無い。

傷らしい傷や打撲の跡もなく、出血もしては居ないようだ。

何らかの方法で眠らされている？

しかし、なんで又……一体誰が彼女をここに

「サイト君？」

動きを見せない状況に痺れを切らしたのか、馬車から顔を覗かせたウェールズの呼び声に才人はやっと我に返った。

警戒は解いてはいなかったものの、一時状況を忘れ“彼女”が何故ここに居るのかを考え込んでしまったらしい。

才人はもう一度辺りに人の気配が無いか伺い、やはり誰もいない事を確認してから女性を抱きかかえ馬車の方へ戻った。

「すみません、殿下。辺りには人は居ないようです。それよりも……」

「サイト君、その女性は？」

「あ！ その人……」

「ああ。ケイトは見覚えあるよな？ 殿下、この人は“ザ・ウィッチ”です」

「え？ だつてサイト、“ザ・ウィッチ”はハヴィランド宮殿に残るつて……」

「人違いではないかね？ サイト君」

「いや。確かにこの人は“ザ・ウィッチ”です。宮殿で手引きして貰った時に見た格好そのままですし、顔も……」

「いや、おかしいぜサイト。そいつが宮殿に居る筈なら、なんであたいらより先にここに居られるんだ？ 少なくとも、サイトや馬車よりも速く移動しなきゃ無理だろ」

よく事情は聞かされていないとはいえ、才人達の会話から女性がハヴィランド宮殿に居る筈の人物であると見て取ったメアリの指摘に、反論する者はいない。



しかし女性は間違いなく、才人がハヴィランド宮殿のあまり使われていない使用人用の通用口で会った密通者“ザ・ウィッチ”であった。

女性はウェールズよりも五つ程は年上であろうかという外見で、濃い金髪は才人が先に会った時と同じくアップにして纏められている。

抱きかかえられた彼女の胸が緩やかに上下していることから、ただ単に気を失っているだけであるようだと思受けられた。

「……サイト君。彼女が“ザ・ウィッチ”であることは間違いないのだね？」

「はい」

「殿下、私も先日“ザ・ウィッチ”に会っており顔を拝見しておりますが、この方で間違いありません」

「ふむ……では、とりあえず馬車の中へ。とにかく今は先に進む事が先決であろうし」

「お、おいおい！ そんな得体の知れない奴連れて行くのか?!」

少し声を荒げ異論を差し込んできたのはメアリであった。

大声を出してしまうほど取り乱してはいなかったが、ウェールズの判断があり得ないとばかりに表情を強ばらせている。

「彼女は協力者だよ、ミス・メアリ」

「見たところ、その姉ちゃんはいまメイジじゃないよな？　メイジでもない奴がどうやってあたいらよりも早くここに来て寝てたんだよ？　どう考えてもおかしいぜ」

「でもこのまま置いて行くわけにもいかないじゃない。この人は私達に協力してくれたのよ？」

「畏だつたどうするんだよ。いや、畏だろ、これ」

「だつたら尚更置いては行けません。畏であれば置いて行かれた彼

女は確実に殺されてしまいます」

「その通りだ。ミス・メアリ、それに例え罷であったとしたならば、以後我々の行動は相手にバテている事が前提となる。そうなれば、一層彼女をこのままここに置いて行く訳にはいかないさ」

「決まりだな。ケイト、念のため妙な物持たされてないか見てくれるか？」

「はい」

言いながら、才人は抱きかかえていた女性を馬車の中、自分が座っていた場所に座らせた。

その隣にケイトが座り、意識の無い女性がパタリと倒れないように体を支えながら、何か妙な物を持っていないかと服をまさぐり始める。

ウエールズもその向かいに座り、彼の隣にはルイズが再び馬車に乗り込んできて腰掛けた。

「ルイズ、馬車の中は任せたぞ。俺はメアリと一緒に御者台に乗るよ」

「わかったわ」

「お、おい……ちくしょう！　なんでこう予定通りにいかないかね。只でさえ陸は落ち着かねえつてのに」

「愚痴るなよ、メアリ。そんな事よりもロープないか？　操られる可能性も考えて、念の為その人の手を縛っておきたいんだけど」

「ああ、それなら御者台の座席を開いたら」

「きゃー！」

突如上がった小さな悲鳴はケイトの物である。

見ると彼女は口に手を当て、膝の上には体を調べていた女性の頭を乗せている格好となっていた。

「どうしたケイト!？」

「あ……いえ、その……誰かと間違えたのか、“ザ・ウィッチ”に急にキスをされまして……」

「へ？ なんだそれ？」

「意識が戻ったの？」

「いえ。直ぐに再び気を失ってしまったようです」

「……ブロウ准尉。何か口移しに飲まされたかね？」

「いいえ」

馬車の中から才人と反対側、窓の外を警戒していたルイズとは違い、唯一キスを目撃していたウェールズの問いをケイトはキツパリと否定した。

「そうか。ならばいい。それで、彼女の持ち物でおかしな所は？」

「特には。ポケットの中に銅貨が数枚入っていた位です。装飾品の類も持っていないません」

「わかった。念のため銅貨は全部捨てていこう」

「と、あった、これが。ケイト、すまん、こっちにその人の手を回してくれるか？」

ルイズが乗り込んできた方と反対側、未だ開いたままの馬車のドアの方に御者台の下からロープを見つけ出してきた才人がやって来た。

ケイトは言われた通りに意識の無い女性の背を才人の方へ向け、手をとって縛りやすいよう差し出してみせる。

程なく女性は後手に縛られた格好で馬車の中に座らされ、メアリと才人は御者台に乗り込み、再び馬車は進み始めるのであった。

その時、二つの月を隠す雲の合間から飛竜の姿が現れ一瞬だけ照らし出されたが、気付く者は居なかったのである。



ウェールズ達がオーナム・バーバリという鄙びた港町にたどり着いたのは、三日後の早朝であった。

この日はウインの月第一週であるフレイヤの週、虚無の曜日である。史実では丁度、トリステインとゲルマニアの連合軍がアルビオンへ向けて出征を開始する日より、三日前である。

暦の上ではギューフの月からウインの月へ入り冬も本格化してくるとされていたが、温暖なハルケギニアの気候では深夜や朝を除けばまだまだ薄着でも過ごせる時節であった。

港町オーナム・バーバリはロンディニウムの北西に位置し、北部最大の港町であるダータルネスより南に一日ほどの距離にある港町だ。

かつてはフネを作る造船で栄えた町であったが、大規模な造船技術の確立による他方への造船拠点の移転により、今ではすっかり寂れてしまっていた。

そんな港町の街道沿いにある“ユニコーンの鎖亭”という宿にて。

「どう考えてもおかしいと思います」

「うむ……もしかこれは偽物であろうか？」

才人とウェールズは向かい合ってテーブルに着き、神妙な面持ちで唸った。

それぞれの目の前には暖かな湯気が立つカップが置かれており、中には味の薄いスープが入っている。

ウェールズは久々に供されるスープなど目もくれず、懐から取り

出した“アンドバリの指輪”をしげしげと眺め、眉根を寄せた。

木戸で締め切られた窓からは柔らかな朝日が差し込み、僅かに指輪を輝かせる。

室内は暗かったが広く、恐らくは貴族用の部屋がらかであるう、見事な装飾が施された調度品がそこらに飾られていた。

広い室内には大きな寝台が一つ設えられており、天蓋から垂れたヴェールが僅かな光りを反射してゆらゆらと揺れている。

その、ヴェールの内には女性が五名、雑魚寝同然に体を横たえていた。

夜を徹し交代で馬車の御者を行ったメアリにルイズ、ケイト、そしてクララと名乗った“ザ・ウィッチ”である。

残る一人はクララの唯一の肉親である母親で、とある事情によりウエールズの逃避行に同行する事となっていた。

彼女らが同行する事になった経緯はこうだ。

あの夜、何故か道の真ん中で倒れていた“ザ・ウィッチ”が目覚めたのは夜が明けてからだだった。

クララと名乗った彼女は、何故あそこに倒れて居たのかわからないと説明した後、今更ハヴィランド宮殿に戻る訳にもいかずウエールズ達に同行する事になったのだった。

彼女の説明では記憶は確かに才人を手引きした所までであったのだが、その後自室に戻ろうとした辺りでスッポリと記憶が消え失せ、気が付くと馬車の中に居たのだという。

当初、ウエールズは計画通り港町オーナム・バーバリへ向かう予定であったのだが、“ザ・ウィッチ”ことクララがハヴィランド宮殿から消えた以上、彼女の母親の身もまた危なくなる事は容易に予想できた。

その為、急遽才人が別行動で彼女の母親の身柄を確保しに向かったのである。

クララの実家は港町オーナム・バーバリから南に半日程の距離にある村にあり、官憲の手が伸びている事を警戒しながら彼女の実家

にたどり着いた才人が見た物は、果たして暢気に洗濯物を干している彼女の母親の姿であった。

勿論、別行動を行って居た道中では検問や、警邏に駆り出された兵士の姿など見かけてはいない。

才人は畏である可能性も考えつつも、クララに聞いていた彼女とその母親しか知り得ない出来事を話したりして本人である事を確認し、事情を説明しその身柄を保護したのであった。

再び才人がウェールズらと合流したのは、港町オーナム・バーバリにある“ユニコーンの鎖亭”にウェールズ達が到着した直後である。

才人がいない間、ルイズは寝ずにずっと起きて帰りを待っていたようで、才人の姿を確認した途端、彼女は寝台に倒れ込むようにして寝てしまった。

また、メアリは寝ずの御者を行って居た為、ケイトはその間“デイケクト・マジック”を定期的に使い周囲の警戒を行って居た為、クララとその母親は心労の為眠れなかった為に睡魔に襲われ、不敬ではあったがウェールズ皇太子を残し一人を除いて皆直ぐに寝台に倒れ込んでいたのであった。

勿論、寝なかつたのは才人である。

「……俺には魔具の事はわかりません。ただ、もしそれが本物なら、もつと動きといますか、街道を見張る警邏の兵士の数が増えていてもおかしくないと思います」

「いや……偽物、にしてもおかしい。この指輪からは確かに強い力のような物が感じられるからね。もしこの指輪が偽物だとして、これ程見事な品をわざわざ身代わりの品として用意するのはすこし考えられない」

「そうなのですか？」

「王家の宝物でさえ、これだけの品はないからね。精巧な偽物を作ろうとて、一朝一夕にできるものではない。まして、“アンドバリ

の指輪”は強い力を秘めた魔具でもある。私の見立てではこれは本物だよ”

「しかし殿下。クララさんの事もありますし、やっぱり何かがおかしいと……」

「うむ。それはわかっているのだが……我々にはもう時間も余裕も無い。予定まではあと三日、“麗しのアンリエッタ号”とは明日か明後日にでも合流することになるだろう”

「今更計画は変えようもない……と言う事ですか」

「そのとおりだよサイト君。真贋の精査はやっておいても問題ないだろうが、その為に予定を変える訳にはいかない。我々はこのまま進むしか選択肢はないのだ”

そこまで言うてから、ウェールズは指輪を再び懐に仕舞い目の前のカップを手にとつて口に運んだ。

含んだスープはまだ熱を帯びて、薄い味付けながらも香草の爽やかな香りが強く鼻に抜ける。

港町である為新鮮な食材が得やすいからであろう、スープは魚介類と香草を煮たものである。

もともとアルビオン大陸は空を浮いている為、魚介類といっても海のことを指すわけではない。

浮遊大陸から地上や海上に降りるには、特定の日時に特定の航路を使ってフネで降下する必要がある為、アルビオンに住む人々にとつての魚介類とは一般に内陸部にある湖や川でとれるものを指すのだ。

そんな事は才人に知る由はなかったが、港町オーナム・バーバリの近くには川が流れており、スープの食材は毎朝そこで漁師が獲ってくるものであった。

「だが……サイト君の言うとおり何かおかしいのも事実だ。すまないが、“麗しのアンリエッタ号”と合流するまでは一層の警戒を頼



むよ」

「わかりました」

「ひゃ！」

短い悲鳴は一つしか無い、大きなベッドから。

見ると、天蓋から垂れるヴェールの向こうでメアリがノソリと上体を持ち上げていた。

その様子からどうやら寝ぼけているわけでも無さそうである。

異変に素早く反応した才人が、デルフリンガーを手にベッドに駆け寄りヴェールをめくる。

「どうした?!」

「あ……いや。寝てたら急にその、クララに……寝ぼけたクララにキスされたもんで、驚いちまって」

「……はあ、脅かすなよ。今こそ殿下とどっかおかしいなって話してた所だったから。ビックリしたぜ」

「はは、悪い。しかし、くそ、すっかり目が覚めちゃった。まったく、コイツ寝相悪いな」

「まあ、一つのベッドをみんなで使ってるんだから仕方無いだろ」

「そりゃ、そうだが。この前もプロウ准尉に寝ぼけてキスしたみたいだし……一体日頃どんな生活送ってたんだろうな？」

「そりゃお前、恋人と、その、よろしくやってんじやないか？」

「そうか？ そんなことはねえだろ」

「なんでわかんだよ？」

「だってお前、ここに来るまで母親の心配はしてたが恋人の話なんて全くしてなかったんだぜ？」

「そんなの普通だろ？」

「普通ってんなら、お上に疑われるような事して、親にまで捜査の手が伸びるかも知れないって状況なら恋人の心配もするもんだろ」

「そりゃ、そうだが……」

確かにメアリの言うとおりである。

ならばクララには恋人などおらず、キスをしたのも単に寝ぼけたか癖のような物であろうか？

才人は腕組みをしながらベッドで寝ているクララを見下ろした。

彼女はどうも収まりが悪いのか、もそもそと動き今度は近くで寝ているルイズの方へ手を伸ばそうとしている。

やがてルイズの隣へ移動した彼女は、才人の目の前で己の唇をルイズの口元へゆっくりと近付けて行った。

どうやら寝ている時に誰かかまわずキスをするのは、寝ぼけているわけでなく彼女の癖のようなものらしい。

「ふえ……」

ルイズは寝ぼけたクララに抱きつかれ寝苦しい為か、甘えるような、しかし不機嫌な声で喘いだ。

才人が別行動を取ってより丸一日以上、碌に睡眠を取って居なかった為か、傍目からでもかなり強引に抱き寄せられているにもかかわらず目を覚ます様子は無い。

「まったく、仕方ないな」

呟いて、才人はルイズに纏わり付くクララを引っぺがした。

同性とはいえ、流石に恋人の唇を目の前で奪われるのは良い気がしない才人である。

しかし、眠るクララもかなりのもので、頑として寝入るルイズを離そうとしない。

抵抗は本当に寝ているのかを疑ってしまうほどのものだ。

「まったく、大人しそうな顔して寝相の悪い奴だな。こいつもしかし

てレズビアンとかじゃねえか？」

「しら、ねって！　この！　ふう、こんな細い手足なのにすげえ力だな。見かけによらないってこういう事なんだろうな」

やっとの思いでルイズからクララを引っぱがした才人は、そのままルイズを抱え上げ少しだけ広くなったベッドを見下ろした。

クララはベッドが少し広くなったことに満足したのか、次の犠牲者を探すこと無くそのままの姿勢で変わらず睡眠を貪っている。

一方、才人に抱え上げられたルイズも目を覚ますことは無く、むしろ慣れ親しんだ体臭に心地よさげな表情を浮かべ、クークーと安らかに小さな寝息を立て続けていた。

「ふむ、流石に五人ものレディが寝るにはこのベッドは小さすぎるか」

「あ、殿下」

「どうだろう、サイト君。“ミス・ゼロ”にはそのままあちらのソファで寝て貰っては？」

「いいのですか？　殿下の座る場所が無くなりますが……」

「構わないさ。私は食事をするテーブルの席に座っているから。それに、彼女達は私の身分を思い、ここの所何かと働いてくれたからね。今日一日位、ゆっくりと休んで貰いたいものだよ」

言って、ウエールズはすこし恥ずかしそうにはにかんだ。

才人に遅れて様子を見に来たまではよかったものの、つい目に入ったベッドの有様に羞恥を覚えたらしい。

高貴な身分であるだけに、女性の寝姿　それも複数の女性が疲労の為とは言えあられもなく寝ている姿を見て、“見てはいけない物”と認識しているようである。

才人はふと、ウエールズが旅の間にケイトやルイズに対して隠密行動の割になにかと気が利く、というか便宜を過剰までに計ってい

た事を思い出しああなるほど、とこの時悟ったのであった。

彼は自分とは違い真の紳士なのだ。

あるいは高い教育の賜というよりも、アンリエッタへの強い愛情が一片の「誤解」すら抱かれぬよう、行動に表れているのかも知れない。

見習わなきゃな。

こここの所、不可抗力であるとは言え色々とルイズに気を揉ませていると感じ取っていた才人はそう自省し、ソファへと移動して腕に抱えた恋人をゆっくりと降ろした。

寝顔は過去何度も見ているにもかかわらず、ついみとれてしまう程愛らしい。

才人は思わず優しい笑みを浮かべながらも、彼女を起こさぬようゆっくりとその場を後にしようとした。

が、しかし。

何時の間に掴んだのか、ルイズの手は才人の袖を掴んで硬く握られている。

もしかして起きているのだろうか？

一瞬そう考えたが、どうも違うようだ。

ルイズが寝かされているのはソファであるとはいえ、それでも貴族用の家具である。

それまでのフネでの寝台や平民用のベッドとは、比べものにならぬ寝心地だ。

だからか、ルイズの睡眠は魔法を掛けられたかのように深く、起きている風にはみえない。

恐らくは、学院に居た頃は才人と共に寝ていたが為に、抱え上げられた拍子にその感覚を思い出し無意識に離すまいと袖を掴んだのであろう。

「まったく。クララさんの事言えねえな」

呆れたように、しかしすこし嬉しそうに才人は言つて、袖を掴まれたままルイズを寝かせたソファに腰掛けた。

流石に貴族をもてなすソファは大きく、背の低いルイズが寝ていても才人が座るスペースは余裕を持つてあつた。

室内は静寂の色が濃かつたが、幾人かの女性の寝息だけがかすかに漂つてくる。

久しぶりに感じる、ゆつたりとした時間。

雨戸まで閉め切られた窓の向こうからは、時折馬車が通る音が響いて程なく朝の喧噪が本格的に始まる予感を才人に覚えさせた。

数日後、トリステインとゲルマニアの反攻作戦が始まる。

のどかな時間に影をさすように考えて、才人は緊張で体を強ばらせた。

“結果”は既に知っているとは言え、今回は過程がまるで違う。

果たして今回も同じ“結果”となり得るのだろうか？

「ん……」

甘く呻いて答えたのは才人の袖を掴んで離さぬ、眠る恋人だ。

思考の中に湧いて出た疑問に、偶然のタイミングで答えられたそれは不思議と才人の不安をぬぐい去っていた。

そんな彼らの様子をテーブルからウエールズは優しげに見つめ、メアリは才人が飲み残したスープを煽りつつジットリと睨んでいたのである。

嵐の前の静けさのような平穏な朝の一時は、それから二日後の工オアの曜日まで続いた。

船体を褐色に偽装した“麗しのアンリエッタ”号が港町オーナム・バーバリに入港して来たその日の夕刻、それまでの短い平穏を破るようについに事件が起きたのだ。

スヴェルの月を迎え、トリステインとゲルマニアの連合軍六万を

乗せた大艦隊が、アルビオン大陸に向けラ・ロシエールの港より出航を行う丁度一日前の出来事である。

久しぶりに見た“麗しのアンリエッタ”号は、目立つ純白の船体に夥しい量の泥を塗りたくられ、酷くみすばらしい姿となっていた。

同じく純白の帆もボロボロの古めかしい帆に変えられており、さながら幽霊船のようである。

時刻は夕暮れ。

暦はウインの月第一週・フレイヤの週、エオーの曜日。

夕暮れではあったが既に日も沈もうかという時刻であった為、港には“麗しのアンリエッタ”号のバース作業を行っている者を除けば、才人達しかいない。

バース（荷揚げ岩壁）の“空”側、その先端には灯台がそびえて、尖塔の先に彫り込まれたガーゴイル像が沈み行く夕日によってシルエットが浮かび上がり、長い夜を予感させた。

先程までは港湾警邏の役人が“麗しのアンリエッタ”号に乗り込み色々を見て回ってはいたが、元々ネルソン一家の息がかかった役人で賄賂を受け取るとそそくさと下船して、今頃は酒場にも繰り出しているはずだ。

つまり、港にはウエールズ皇太子の手の者しかおらず、計画はすべて完璧に遂行されて居たはずだったのである。  
にもかかわらず。

ここへ来て、大きな問題が発生していたのだった。

「辞めるケイト！ メアリ、殿下を離せ！」

「殿下！ おのれ下郎！ ブロウ准尉、血迷ったか！」

「動くな！ うごかば、お前達の大事な王子様の命は無いぞ？ 杖を捨てる！」

ウェールズを後から羽交い締めにしたまま、気色ばむ才人とルイズ、そして一行を出迎える為に下船していたハル卿から離れるようにして、メアリはバースに建てられた船具倉庫の壁に寄り添った。

その隣では彼女を庇うように刺突剣のような杖を構えたケイトと短剣を構えた“ザ・ウィッチ”とその母親が鋭い視線を辺りに油断無く撒き散らしている。

何故彼女達がこのような行動に出たのかは不明であった。

事は一瞬。

出迎えに下船してきたハル卿を見て、ウェールズ皇太子が久しぶりの再会に相好を崩した瞬間、突如メアリがウェールズの背後から喉元に短剣の刃を押し当て、彼を羽交い締めにしたのだ。

同時にケイト、“ザ・ウィッチ”ことクララ、そしてその母親までもがメア리를庇うように動いてそれぞれが武器を取り出し、あるう事か才人達に向けてきたのである。

「お前！ あのフネのチーフだな？ 一人でもフネから降りようとする者があれば、この喉を掻っ斬る。今の内に命令しておけ」  
「くっ、皆！ フネから降りるんじゃない！ キャプテンの命が危ない！」

ウェールズの喉元に短剣の刃を押し当てたメアリの命令にハル卿は素早く応じて、背後に係留する“麗しのアンリエッタ”号に向けて怒鳴り声を上げた。

“麗しのアンリエッタ”号の甲板上では眼下のやり取りが目に入っただであろう、一部士官達が杖を抜いて降りてこようとしていたが、ハル卿の声にすぐさま状況が飲み込められない。

誰一人降りてこようとせず、しかしマストやウィング・デッキに



降り立ってこちらの様子を伺っている。

「ブロウ准尉！ メアリ！ 一体どうして！」

「だまれ！ お前も早く杖を捨てる！ その男も背負った剣を捨てるんだ！」

「男？ メアリ、お前……」

「早く！」

鋭く濁った目でルイズと才人を交互に睨み付けながら、メアリはウェールズの喉に押し当てている短剣の刃を少しだけ引いて見せた。口惜しさからか、それとも喉の熱く不快な感触の為か、ウェールズがぐ、と短く呻くと白い喉から一筋赤い血が流れ落ちる。

どうやらメアリは本気であるようだ。

否。

才人の事を名で呼ばず、『その男』と口にした“何者か”は本気である、と言った方が良かったらう。

才人はゆっくりと背にしていたデルフリンガーを手にとって、辺りを観察しながら地に置いた。

ほぼ同時に、ルイズとハル卿もそれぞれの杖を同じようにゆっくりと地面へ置く。

その間、クララとその母親、そしてケイトは一部の間もなく腰を落として不意の反撃に備え続けている。

彼女達の豹変ぶりから見ても、何者かが彼女達と入れ替わって居るのでは無く、何らかの方法で操られているのは間違いない。

思い当たるのは、あの夜才人達と合流した“ザ・ウィッチ”と奇妙なキス。

今して思えば彼女のキスはかなり不自然な行為だった。

多分、クララのあのキスが何者かが人間を操るキツカケとなっているのだらう。

そう才人は“当たり”をつけながら、もう一度メアリへと視線を

戻して思考を進めた。

さつき、メアリは俺の名を呼ばなかった。

と言う事は、メアリ達を操っている奴はその記憶までは利用できないらしい。

しかし……

ふと動かした視線が隣に居たルイズとぶつかる。

主は美しい鳶色の瞳に緊張を走らせ、険しい表情のままかすかに頷いた。

使い魔とその主の念話が行って居なかったが、その一瞬だけで互いの疑問を確認しあうのに十分だった。

メアリ達……いや、“敵”の目的は何だ？

殿下の暗殺？

“アンドバリの指輪”の奪還？

……いや、それにしておかしい。

暗殺なら殿下をわざわざ人質に取るような真似をしたって意味は無い。

かといって、“アンドバリの指輪”の奪還が目的であったとしてこの場に及んでの行動はあまりに“雑”だ。

「……剣を捨てたぞ。メアリ、殿下を離せ」

「黙れ！ お前とお前！ そのまま後へ下がれ！ その男は両手を頭の後に組んで前に出てこい」

言つて、メアリはウェールズの喉元に押し当てた刃を更に動かす。短剣は良く手入れが行き届いているらしく、ほんの僅かな動きであつたがウェールズの喉の皮を裂いた傷口が更に開き、赤い筋が一つ、二つ増えた。

メアリがあとほんの少しだけ力を込めれば、あっさりとウェールズの喉を掻き斬ってしまうだろう。

そして今の彼女は間違いなく、そうする事を躊躇わない。

それはルイズやハル卿にも正確に伝わっているようだ。

二人は言われた通りゆつくりと後退し、入れ替わるようにして才人も又、指示通り両手を頭の後で組みながら前に進み出た。

どういうつもりだ？

今から“アンドバリの指輪”を出せとでも要求するのか？

その為に殿下を人質にしている？

いや。

恐らく、“敵”の目的は“アンドバリの指輪”の奪還でもない。

なぜならば、もしそうであれば俺達を畏にはめる為あの夜、あの場所にクララを寝かせて置くのは意味が無いからだ。

タイミング的に俺達が“アンドバリの指輪”を奪う為にハヴィランド宮殿へ忍び込むことを知っていなければ、こんな回りくどい事は出来るはずがない。

そもそも、指輪の奪還が目的ならば最初から盗難を防ぐべく動いてしかるべきだ。

でも……

わざわざ手間をかけ、俺達を畏に嵌める準備をしておきながらここへ来て何故？

『サイト。気付いてる？』

思考に割って入って来たのは、ルイズからの念話である。

『ああ。メアリ達は操られている。だけど、目的がわからない。指輪でも、殿下の暗殺でもなさそうだ』

『殿下さえなんとかなれば“ディスプレイ”を使うけど……』

『いや。操っている奴が多分近くにいる。目的もハッキリしないし、もう少し様子を見よう』

『そうね。だけど、あくまでも殿下の身柄の安全が最優先なの、わすれないでよ？』

『わかってるさ』  
「そこで止まれ」

メアリの指示に従い、才人は立ち止まった。  
同時にケイトが杖を才人に翳して、太もみにいくつものつららが突き立った。

水の系統魔法、“アイス・ニードル”である。

「ぐっ！」

「サイト！」

「動くな！ 大事な王子様の命が惜しかったらな。黙って見ている」

「何が目的なの？！ 居るんでしょ、でてらっしゃい！」

苛立ったようなルイズの声に、応える者は居なかった。

才人はふとももの激痛の為に、膝をついてその場にしゃがみ込んでしまっている。

両脇には何時の間にも移動したのか、クララとその母親が護身用に持っていたナイフを手に立っていた。

「卑怯者！ 近くに居てメアリやブロウ准尉を操っている事はわかっているのよ！」

行き場の無い、ルイズの罵倒は尚も続く。

口調は厳しくもそれまでの道中に幾度も見たケンカ腰の態度であり、傍目には屈辱に濡れた負け犬の罵倒にみえるであろう。

しかしこの時、ウェールズは彼女の態度にどこか違和感を覚えていた。

いや、ルイズと才人の態度に不自然なものを感じた、と表現した方がいいのかもしれない。

例えば、人質を取られている状況下で相手を刺激する言動を行う

ルイズを、いつもなら真つ先に諫めそうな才人が無言である事。

例えば、悔しげに罵倒を続けながら少しずつ前に身を乗り出して、先程地に捨てた杖に近寄るルイズと何度もぶつかる視線。

例えば、太ももに何本もつららを突き立てられ、地に膝をつきながら痛みを身をよじるようにして、両脇に立つクララとその母親を影に辺りを伺うそぶりを見せる才人。

彼らには何か考えがあるのだろうか？

ウェールズが喉に食い込む刃先の痛みなど忘れ、真意を探らんと更に思考を走らせようとした時である。

不意に頭上で大きな幻獣が羽ばたくような音がした。

メアリが背にしていた船具倉庫の屋根に、一頭の飛竜が降り立っていたのだ。

勿論、野生の飛竜などではなく竜騎士が駆る飛竜だ。

飛竜から降り立ったのは、“人喰い”ドレイクその人である。

「ふん、コソ泥のような真似をした己を棚に上げてよく言っぜ」

「あなたがブrou准尉達を操っていたのね?!」

「おまえ……たしか、俺とメア리를捕まえた……」

「これはこれは。覚えていたか、まったく後悔したぜ？ お前がこつも“大物”だとわかっていたら、あの時に殺しておけば良かったな」

「何が……目的だ？ 指輪か？」

「いんや？ 今のところ、指輪には興味ないね。俺の仕事は……」

言っつて、“人喰い”ドレイクは才人の両脇に立っていた二人に顎をしゃくって合図を送る。

瞬間、深紅の鮮血が宙に舞った。

クララが一瞬のうちに才人の喉を深く掻き斬り、その母親が心臓に短剣を突き立てたのだ。

才人は喉から派手に血を噴き出させながら、そのまま後へ倒れて

しまつ。

間を置かず、夥しい血がバースの石畳に広がって血溜まりを作り出した。

「サイト！」

「サイト君！」

「俺の仕事は……お前さんの始末さ」

“人喰い”ドレイクはそう宣言し、屋根の上に飛竜を待機させたまま自身は地に降り立った。

それから仰向けに倒れた才人と言葉と表情を無くしてしまったルイズを一瞥して、メアリが拘束しているウェールズへの前まで移動したのである。

「お初にお目にかかります、殿下。私はドレイクと申します。姓は捨てたのでご容赦を。ふふ、かわりに“人喰い”の二つ名をご記憶に留めてください」

「……何故だ？」

「何がですか？ 殿下」

「何故、君の任務が奪われた指輪の奪還や私の抹殺でなく、何故サイト君の殺害なのだ？」

「さあ？ そう命令されたから実行した。それだけでございます」

「そうか。ならば、君の任務に私の抹殺は無いのだな？ ならばもういいだろう。皆を元に戻して立ち去りたまえ」

要求はドレイクにとって意外なものであつたらしい。

まさか、誇りある王族が命乞いとれる無茶な要求をしてくるなど予想だにしていなかったからだ。

いや。おめおめと生き恥をさらし、こうして再びアルビオンの地に足を踏み入れているのだ。

このふてぶてしさがこの王子様の本性なのだろう。  
ドレイクはそう考えて、嘲るような笑みを浮かべた。

「ははは、殿下は楽観的な思考の持ち主ですな！ 任務は任務ですが、殿下のお命と指輪を持ち帰れば私の評価も上がるのは当然。見逃す手など、ございますまい？」

「逃げ切れると思うてか？」

「勿論。殿下のお命を一番最後に頂ければ」

「……指輪は私の懐の中にある。せめて、彼女達を元に戻したまえ」「それは無理な話ですな、殿下。我が使い魔、“コマンダー・モスキート”の支配下にある者はそう簡単には呪縛から逃れられませぬぞ」

「コマンダー……モスキート、だと？」

「左様。稀少な、それでいて面白い昆虫でしてな。これに吸血された生物は普段自我を保ちながらもここぞと言う時は意志を奪われ、操られてしまうのですが……」

「ご託はよい。早く彼女達を元に戻せ！」

感情的に怒鳴ったウェールズであったが、その拍子に喉に押し当てられた短剣の刃がまた少し食い込んだ。

なんと無様な。

命乞いをしておいて、なにをこの期に及んでかつこつけているのだ？

ドレイクは邪に、そして心底侮蔑するように笑いながら、ウェールズの醜態に嗜虐心が満たされていくのを感じ取った。

思えばその矛盾する言動こそ、ドレイクにとって唯一の“気付くチャンス”であったのかもしれない。

「ふふ、そう焦らずに。我が使い魔の面白い所は、操った者の唾液が一種の秘薬になる所です。これを飲んだ者は同様に意のまま操

ることができるとですよ、殿下」

「ふん、それで操った“ザ・ウィッチ”にキスをさせていたというわけか」

「ええ。しかし、それでも野生のコマンダー・モスキートに操られるよりは彼女達は幸せでしょうな。なにせ野生のものに吸血されると、深夜に操られ、人気の無い場所に移動させられて死ぬまで血を吸われ拳げ匂に卵を体内に産み付けられますからな」

「……頼む、彼女達を元に戻してくれ」

今度は弱々しい、惨めな懇願。

そこに王族としての誇りなど微塵も感じられない。

傭兵として時に泥をすすり、血と汚物のなかで眠り、常に権力者に媚びへつらってきたドレイクはウェールズのその姿に痛く満足していた。

故に。

気を良くし、増長したドレイクは決して教えてはいけない事をおこなってしまう。

ルイズや才人、ウェールズが一番知りたかったものを。

「心配せずとも、女どもはその内元に戻りますよ。それまで私のおもちや”になって貰いますがね。ふふ、たつぷりと殿下の“お古”を堪能させて頂きます故、どちらが良かったかあの世で再会した時に聞くと良いでしょう」

「おのれ下郎！ そのようなこと」

「ふむ、随分とご執心なご様子ですな。この中に愛人でなく、側室でもいるのですかな？」

「貴様……」

「ま、今更未練を残しても仕方無いでしょうが、丸一日我が使い魔に再び吸血されたり唾液を体内に入れなければ元に戻れますがね。それを見逃してやる理由も無い訳です」



「……彼女達を置いて立ち去るつもりはないと？」

「勿論。ああ、でも飛竜には殿下ともう一人くらいしか乗せられないな。どれを連れて行くか、早いとこ決めておかねば」

「その必要はないぜ」

背後からの言葉に、ドレイクは慌てて振り向いた。

そこで見た物は、夥しい血溜まりと黒い風。

風はドレイクの視界を横切ると同時に、操っていた女達へと吹き荒んで、彼女達の意識をあれよと奪い地に倒れ込ませる。

何が起きたのか理解出来ぬその一瞬の中で、唯一把握出来たのは死体となった筈の“あの男”が消えていた事。

ドレイクは歴戦の傭兵らしく、反射的に杖を掲げ呪文を唱えようとしたまでは良かったが、一時でも緩めていた緊張の代償は大きかった。

「がつ！」

背後からの言葉に異変を感じ振り向いてより数瞬、思考が走るよりも先に体が横殴りに吹き飛ばされた。

まるでドラゴンの尾を横殴りに受けたかのような衝撃は、ドレイクを呻かせる。

なんだ？！

アイツか？！ 確かに殺したはずの、心臓を貫き、喉を掻き斬ったはずの、アイツの反撃か？！

馬鹿な！

いや、そんな事より今は

加速する浮遊感の中、ドレイクはやっと思考を取り戻し地に体を打ち付けるより前に、懐に飼う使い魔を通じて操っている人間に命令を送った。

『喉を掻き斬れ』と。

しかし、ドレイクがたたかに体を打ち付けた後見た物は、当て身を受け倒れているメアリと無事に解放されたウェールズ、そして短剣を刃の部分握り潰す黒髪の少年の姿であった。

「殿下、お怪我は……してますね。すいません、俺……」

「いや、よくやってくれた。その気になれば直ぐに制圧できただろうに、ブラウ准尉達を元に戻す方法を探っていたのだろう？」

「はい……」

「ならばこの位の傷、大した事は無い。目を覚ましたブラウ准尉にでも治して貰うさ」

「逃げるぞ！」

叫び声は“麗しのアンリエッタ”号から。

声に改めてドレイクの方へ視線を向けると、船具倉庫の上に居たままであった飛竜が丁度そのごつい足でドレイクを掴み上げ、上空に向けて飛び立とうとしている所だった。

どうやら状況は不利と判断し、一旦引くつもりであるらしい。

「どうするかね？ サイト君」

「別になにも。ケイト達を元に戻す方法はわかりましたし、時間だつて惜しい。後はルイズに任せますよ」

「“ミス・ゼロ”に？」

「はい。もう詠唱に入っていますから」

才人はそう言ってニヤリと笑い、身を翻した。

彼の後方では何時の間にか杖を拾いあげたのか、ルイズが茫としてなにやら詠唱を始めている。

一つ瞬きをした後ウェールズが見た物は、詠唱を続けるルイズを抱きかかえ、飛び立とうとしている飛竜の元へ黒い疾風のように疾駆する才人の影であった。

飛竜は既に翼を羽ばたかせて地上数マイル程の空に浮かんでいる。しかし才人は構わず奔り、ルイズを抱えたまま、まるで翼が生えたかのように高く跳躍して飛竜の背に飛び乗った。

同時にルイズの詠唱が完成する。

放たれる虚無の魔法は“忘却”。

他者の記憶を消し、新たな記憶を書き込む虚無の魔法。

才人はその効果を示す光が飛竜ごとドレイクを包んだのを確認すると、飛竜の背に飛び乗った時と同じくルイズを抱えたまま地に向けて飛び降りた。

高度は既に地上十数マイル程もあり、常人ならば落下するとまず助からない高さだ。

数瞬後、ズン、と“神の盾”が鈍く着地する音がバースに響き、やがて全てが終わった。

「……大丈夫か？ ルイズ」

「ええ、どこも。でも、本当にこれで良かったの？」

「ああ。あいつがウソの記憶を報告してくれた方が助かるからな」

「あいつ、目的がサイトの抹殺って言うてわね」

「……だな。指輪の奪還じゃなく、“虚無”のルイズでもなく、俺の抹殺が目的、か」

「考えたくないけれど、むこうにサイトの事を知っている奴がいるって考えた方がいいのじゃうね」

囁くように呟いて、ルイズは才人の胸に抱かれたままぎゅっと才人の服を握った。

才人の秘密を知る人物がレコン・キスタの中に居る？

それとも、アンリエッタ女王やウェールズ皇太子に近い人物が裏切った？

考えてルイズはふとワルドの事を思い出す。

ワルドは元々レコン・キスタ側の人間だ。

才人の秘密も知っている。

もしかして、彼が再びレコン・キスタに寝返ったのだろうか？

それとも、あの性格の悪い『時の魔女』が何らかの理由で加勢している？

いや。

それよりも深刻なのは才人の正体がばれた挙げ句、計画の全容が敵に漏れてしまっているかも知れないという事実だ。

最悪、この先の未来が変わってしまうのかもしれない。

疑惑は直ぐに不安へと変わり、ルイズの心を黒く塗りつぶしていった。

「サイト君！ “ミス・ゼロ”！ 大丈夫かね?!」

「殿下。この通り、ピンピンしてますよ」

「それは良かった。……しかし一体、“ミス・ゼロ”はあの者に何をしたのかね？」

「ルイズ？」

ウェールズの質問を受けても尚なにやら考え込むルイズは、才人の呼びかけに初めて我を取り戻した。

才人に抱かれた格好から地に降ろされながら、えう?! と珍妙な声を上げてしまう。

それから自身が気が付かぬ内に近寄ってきていたウェールズと才人の顔を交互に見渡し、頬を染め下を向くルイズであった。

「も、申し訳ございません。少々考え事をしていましたもので」

「まったく……ルイズの“虚無”で記憶を奪い、偽の記憶をすり込んだのですよ殿下。やっつけるのは簡単ですが、どうやら計画が相手にバれていたような節もありましたし」

「成程、偽の情報を与えようというわけか。……しかし、何処まで計画が漏れていたのだろうか？」

「わかりません。殿下、“この先”の計画を知っているのは？」

「ふむ。現状では私とアンリエッタ女王、サイト君、そして……」

「俺がこの前ルイズに話しましたから、ルイズを入れて四人、ですか？」

「そのようだね。計画の一部ならワールドも知っているが、ここから先は知らないはずだ」

「ね、ねえサイト。あの、『時の魔女』が敵に回っているとは考えられない？」

「ん？ ノルンが？ なんでだ？」

「だって、どう考えてもおかしいもの。殿下、ワールドがもし、再びレコン・キスタに寝返っていたとして、ここまで周到な罠を張れるでしょうか？」

「……いや。それは無理だ。ワールドが知っているのは、我々が“麗しのアンリエッタ”号で極秘にアルビオン大陸に乗り込み、何らかの秘密作戦を実行する、といった程度だからね」

「じゃあやつぱりあの性悪魔女が敵に回っているんじゃない？ あいつ、未来が見えるんじゃない？」

「魔女……とは、以前サイト君がゲルマニアで私の下を訪れた折一緒に居た、あの黒猫の子とかね？ 矢鱈無礼な口調の」

「ええ、アイツの事ですよ殿下。んー、でも本人はそう言っていたが……なんでアイツが俺達の邪魔をするんだ？ ついこないだまでは協力してくれてたんだぞ」

「わかんないわよ、そんな事。でも、情報が漏れて居ないとしたら、一番可能性があるのがアイツだって気がするのよ。何より、サイトにちよっかい出すのが好きそうだし」

沈黙が場を支配する。

たしかに、ルイズの言い分も一理ある。

しかし、それは証拠も何も無い、推論でしかない。

「……今は考えても仕方無い。確かに敵の目的が指輪や私の命で無く、サイト君にあったことは気にかかるが……我々はもう引き返せないのだ」

「そうですね。とにかく今は考えても仕方無いですしね」

「キャプテン船長！ 新手が現れない内に早く乗船を！」

ウェールズ達に乗船を促したのは、ハル卿であった。

彼の背後では“麗しのアンリエッタ”号の士官達が手に杖を持ち、“レビテーション”を使って気を失ったケイトやメアリ達をフネまで運んでいる。

ウェールズはわかったとハル卿に合図を送って、才人とルイズに続きはフネの上でしようと言って会話を打ち切り、“フライ”を詠唱し始めた。

果たして入港したばかりの“麗しのアンリエッタ”号には棧橋を架けられておらず、乗り込む為には“レビテーション”か“フライ”を使う必要があるのだ。

「いこうルイズ。一緒にフネに乗るか？」

「……ううん、“瞬間移動”が使うからいいわ。サイト、先に行つてて」

「わかった。あ、デルフを忘れる所だった！ ……あんま、考えすぎるなよ。相手が誰であれ、俺達は出来る事をやるだけなんだからな」

「うん」

納得が行かない様子で小さく頷いたルイズを確認した才人は、走ってケイト達が倒れていた場所まで戻り、先程地に捨てたデルFRINGガーの行方を捜し始めた。

デルFRINGガーは作業を行っていた士官の内の一人が回収していたらしく、無事受け取りそのまま彼らの眼前でバースから十マイル

の高さにあろうかという“麗しのアンリエッタ”号の暴露甲板に飛び移る。

ルイズはその様子を遠目に眺めてながらも、胸の内の黒く渦巻く不安が口の奥で苦く滲んでいることに気が付く。

それから、陰気なそれを振りほどかんと頭を振った時、ふと背後に誰かの視線を感じた気がして振り向いた。

勿論、彼女の背後にはだれもおらず、バースの端に建てられた灯台があるばかりである。

灯台はが港町オーナム・バーバリがかつて活気のあるで出会ったことをしめすように見事な装飾が彫り込まれ、尖塔の先には町の守護を司るガーゴイルの彫像が佇んでいる。

「……気味が悪いわね」

なんとなく、ガーゴイルの彫像と視線が合ったような気がしたルイズはそう呟いてから頭を二度振った。

それから改めて“麗しのアンリエッタ”号を見上げ、気持ちを切り替える。

そうだ。サイトの言うとおり、今は考えても仕方無いじゃない。

私は私の、出来る事をやるだけだ。

ルイズはそう考えながら瞳に強く意志を宿し、“瞬間移動”を唱えたのである。

その姿を灯台のガーゴイルの彫像は、沈み行く夕日を背にじっと見つめ続けていた。

トリステインとゲルマニアの連合軍がアルビオン大陸に攻め込んだ『アルビオン戦役』が始まる一日前での出来事である。





ウインの月第一週であるフレイヤの週はマンの曜日。

スヴェルの月を迎えたその日、ラ・ロシエールよりトリステイン・ゲルマニア連合軍六万を乗せた大艦隊が飛び立った。

目的地はアルビオン大陸。

六十の戦列艦とはじめとした参加隻数五百を越える大艦隊は、真っ直ぐに主都ロンディニウムの南部に位置する、空軍基地ロサイスへと向かって居たのである。

「ド・ポワチエ将軍。それは本当なのですか？」

「うむ、ハルデンベルグ侯爵。確かにアンリエッタ女王陛下はそうおっしゃった」

「しかし、ウエールズ皇太子殿下が生きておいでだとして、どうやってダータルネスで陽動をかけるのでしょうか？ 我々の上陸を助ける陽動となれば、敵の地上軍や戦列艦を引きつけておかねばなりません」

「ウインプフェン参謀長の言うとおりだ。敵はタルブでかなりの戦列艦を失っているとは言え、それでも四十隻程は健在である筈だが……もしや皇太子殿下は内密にガリアの援軍を取り付けて？！」

「いや、ガリアは中立を宣言している。そうであるからして、無理な話とは思えません。我々でさえ、戦列艦を急ごしらえで六十隻用意するのが精一杯でしたのに、それだけのフネを引きつける戦力を殿下が用意できているとは思えない」

アルビオン侵攻軍総司令部が置かれている、艦隊旗艦“ヴェセンタール”号の会議室にて。

総司令官であるド・ポワチエ將軍とゲルマニア軍司令官ハルデンベルグ侯爵の下、麾下の参謀達は口々に総司令官より聞かされた女王陛下の勅命を否定していた。

“作戦”はアンリエッタ女王の勅命として総司令官へと事前に下知されており、それを否定する事は恐れ多いことではあったのだが、しかしその内容は明らかに非現実的なもので、事によっては連合軍の壊走を招きかねない為、急遽軍議を開かれていたのだ。

果たしてアンリエッタ女王の勅命とは、『アルビオン王党派盟主であるウェールズ皇太子殿下が、北部ダータルネス港にて敵空軍に対し陽動を行う故、貴殿は速やかに軍を空軍基地ロサイスへと進めよ』という内容であった。

「やはり貴君もそう思われるか、ハルデンベルグ侯爵」

「うむ。ガリアを除けば、今ハルケギニアにアルビオンの艦隊と渡り合える戦力は我々の連合軍をおいて他に無い。陛下には申し訳ないが、この命を信じて艦隊を進めるわけにはいくまい」

「しかしながら総司令官殿。そうなれば、我々には解決すべき大きな問題が二つある事になります」

「わかつておる、ウインプフェン参謀長。あの浮遊大陸への上陸と敵艦隊であろう？」

「は。我が兵を降ろせそうな港は現在の目的地である空軍基地ロサイスか、それとも北部ダータルネス港しかございませぬ」

「そうだな。上陸はロサイスが望ましいが……敵艦隊に対しても艦隊規模としてはこちらが上だが如何せん混成艦隊だ。練度は依然あちらが上であるし戦力は五分とみて良いだろう」

「ポワチエ將軍。このままロサイスに強襲をかけられないだろうか？」

「ハルデンベルグ侯爵、それは私も考えたのだが……もしそこで勝

利を収めても、その後には控えるロンディニウム攻略戦の為に兵が足りなくなる恐れがある。参謀長？」

「は。ハルデンベルグ侯爵閣下、現状では我々は敵艦隊に対して陽動をしかけ、奇襲という形でロサイスを陥落させる事が望ましいかと」

ウィンプフェン参謀長の説明にハルデンベルグ侯爵は自慢の角のついた鉄兜の下、苦く口元を結びながらカイゼル髭を指先でしごいた。

浮遊大陸であるアルビオンは攻めるには非常に難しく、如何に初戦で被害を出さずに上陸出来るかが勝敗の行方を決めるからだ。

「ポワチエ将軍。女王陛下より賜ったという“虚無”は使えぬのか？ タルプでアルビオン艦隊を壊滅せしめたあれだ。このフネに積んでいるのであろう？」

「“アレ”は竜の羽衣という、魔法の竜騎士のような物だ。本来ならば“虚無”を乗せ、敵軍に突っ込む用途らしいのだが……いかにせん、肝心の使い手が数ヶ月から数年の時を置かねばアルビオン艦隊を壊滅させた“虚無の光”が撃てぬらしくてな」

「なんと……肝心な所で役に立たぬ兵器とは、敵以上に厄介ですな」

「うむ。しかし、政治的な使い道はありましたな」

「ほう？」

「実は此度の戦いの準備の最中、わがトリステイン王国はウェールズ皇太子より援軍の要請を極秘裏に受けていたのです」

「ふむ……初耳ですな」

「私もつい最近知ったのですよ、侯爵。しかし我々としても自分の事で精一杯な状況であり、出せる戦力など殆どない。かといって、アルビオン大陸への侵攻の大義名分は“火の粉を払う”以外にも欲しい。そこで陛下は強力な魔法が撃てなくなったトリステインの秘密兵器……“虚無”を皇太子殿下への援軍として使わしたので

す

「なるほど。事實はどうであれ、精強なアルビオン艦隊を壊滅させたメイジならば、一人であっても殿下は喜ばれましょう」

「総司令官殿、ハルデンベルグ侯爵閣下、よろしいでしょうか？」

ド・ポワチ工將軍とハルデンベルグ侯爵の話に割って入ったのは、ゲルマニア軍の若い参謀であった。

ピンと拳手をした体軀は痩せており、つり上がった切れ目が印象的な背の高い軍人である。

「うむ、発言を許可する」

「ありがとうございます。総司令官殿にお尋ねしたい事がございます。先におっしゃられていた“虚無”の話、果たして本当でしょうか？」

「どういう事かね？」

「実は“虚無”の強力な力がまだ發揮できると考えれば、アンリエッタ女王陛下が下知なされました、ウエールズ皇太子殿下の陽動の話は得心が行くかと」

「む……確かにそうであるが」

「だが將軍。肝心のタルブの時に使った虚無を運ぶ竜の羽衣はこのフネに積んであるのだろうか？」

「一応、“虚無”は我々の上陸後に合流する予定となっておりますからな。今回は使わないのかも知れぬぞ、ハルデンベルグ侯爵」

「と、なれば……」

「総司令官殿、侯爵様。“虚無”は敵を討ち滅ぼさぬまでも、陽動としてはまだ使える状態であると考えられるのかもしれないと本官は愚考した次第でございます」

「そういう事ならば、アンリエッタ女王陛下の勅命はわかる。我々はこのままロサイスへ向かうべきだ」

「だが、今の話はあくまでも推論だ。ハルデンベルグ侯爵、推論で

兵を動かすのは現状では避けたい」

「総司令官殿、陛下からその辺りの話は聞いてはおられないのですか？」

「うむ。実は此度の遠征に臨むにあたって陛下から軍の全権をいただいているものの、“虚無”についての情報は殆どただけでなく。挙げ句、“虚無”が属する陛下直属の組織“ゼロ機関”だけには一切の干渉を禁ずると厳命されておるのだ」

「なんと……女王陛下は戦をなんと心得ておられるのだ！ 味方司令官にも開示できぬ機密などと言っていられる状況か」

すこし困ったような、嘲るようなポワチ工將軍の説明に、ハルデンベルグ侯爵は感情も露わにして公然とアンリエッタを批判した。

そんな彼を誰も窘めないのは、彼がゲルマニア軍の司令官だからで無く、軍人としてやはり納得の行かない話であった為だ。

勿論、彼らに貴族特有の驕りやアンリエッタを侮る部分が無いとはいえない。

能力以上に高いプライドや世襲してきた地位は往々にして目を曇らせるものであるが、それでもこの時、アンリエッタの思惑を正確に把握出来なかったことを責められはしないだろう

ド・ポワチ工は会議室に並ぶ軍人を代表するかのように深いため息と共に、首を振り主君の不明を愚痴として吐き出した。

「まったく、陛下には困ったものだ。大方以前から噂のある皇太子殿下に、すこしでも花を持たせたいお心があるのだろうか……」

「……陛下はまだお若い。いや、せめて私情を挟み貴君らの兵を皇太子殿下の為に裂くような真似をなさらなかつただけでも、立派であつたと見るべきかも知れぬぞ、將軍」

「そうですね。そうかもしれないませぬ」

「まあしかし、我らとて使えるかどうかともわからぬ兵器を当てにし、失敗でもしたら目も当てられぬ。それに現時点でも我々の手元には

敵より多くの戦力がありますからな」

「確かに、わけもわからぬ兵器に拘るよりも兵の数を気にした方が良いですな。いや、“虚無”が殿下の元にあるならばかえって好都合かもしれないせぬ」

「“虚無”を利用出来れば僥倖、そうでない場合でも皇太子殿下が泥をかぶり我々には被害は及ばぬ、というわけですか」

「そういう事になりますかな、ハルデンベルグ侯爵。そう考えれば陛下の思惑も悪くは無い。どの道あと一日で結果はわかります故、我らとしては竜騎士を斥候に飛ばし、情報を集めておきましょうぞ」

「もし、駄目であつたならば……」

「その時は斥候の情報を元に改めてロサイスを落とすか、それともダータルネスかを決めましょう。何、陽動をかけるのはウエールズ皇太子ご本人です。“虚無”がもし失敗しても十分、アルビオン軍を引きつけるエサとなるには変わりないかもしれませんぞ？」

言つて、ド・ポワチ工將軍はニヤリと笑つた。

物言いは不敬ですらあるように見えたが、誰も咎めはしない。

いや、むしろ戦の素人であるアンリエッタや亡国の皇子であるウエールズを侮るような空気が広がり、自分達こそが戦場の主役と信じてさも当然とばかりに將軍の言葉に追従する有様である。

しかし、それは仕方の無い事であつた。

なぜならば、彼らは知らないからだ。

“虚無”と“槍”が作り出す暴風の形を。

翌、ウインの月第一週であるフレイヤの週はラーグの曜日。

時刻は午前九時よりすこし前、ダータルネス港の沖に四十リーグの位置で発生していた雲海の中。

“麗しのアンリエッタ”号は純白の船体と帆を取り戻し、いよいよ

よ作戦の総仕上げに取りかかっていた。

つまりルイズの虚無の魔法“イリユージョン”を使用して連合軍のロサイス上陸を助けるべく、ダータルネス港へ陽動をかけるのである。

ルイズはウエールズ皇太子と才人を伴って、視界の悪い船首楼甲板に立ち緊張した面持ちでじつと雲の向こうを見つめていた。

「……今頃は連合軍がアルビオンの哨戒艦隊に見つかって、戦闘が開始されている頃だな」

「サイトの記憶が正しければ、ね」

「なんだよ、今更疑うのか？」

「ううん、まさか。でも、“前”とは随分と状況が違っただけ？だから、もしかしてって少し、思ってしまっただけ」

「サイト君。もし良かったら、“前”の時の今日の状況を詳しく聞かせてくれるかい？」

「ええ、いいですよ。たしか“前”は八時過ぎに敵の哨戒網に引つかかって、ダータルネスに向けてゼロ戦 “竜の羽衣”で飛びましたので予定通りならば今頃は……」

「戦闘が始まっている、か。ロサイスから王宮までの伝令の速さを考えれば、今頃は慌てて艦隊が迎撃の準備を行って居るだろうね」

「こちらの作戦……って言っても、殆ど前と同じものですが、それが漏れて居なければ良いのですが」

不安げな才人の言葉にルイズが何かを言おうとした時、けたたましくカンカンと木槌で鐘を叩く音が響き渡った。

標準時午前九時 作戦の開始時刻を告げる鐘の音である。

同時に各所で「総員！ 第一種戦闘配備！」と士官や部長の怒鳴り声が飛び交う。

「“ミス・ゼロ”、時間だ」

「はい」

「俺はここに」

「わかった。トモの方にプロウ准尉を待機させておくから、何かあったら呼んでくれ。私は操船指揮に集中するよ」

言つてウエールズがブリッジに戻るべく身を翻した時、ボフ！と巨大な布が風を孕む音を立ててメインマストの帆が張られた。

一瞬の浮遊感の後、“麗しのアンリエッタ”号はゆっくりと雲海の中を進み始める。

泥塗れであった純白の船体は僅か一日で綺麗に磨き上げられ、雲海から出た瞬間まるで宝石のように煌めいた。

士官・部員総出で磨いた船体は正に美姫の如く、空を征くのである。

そのマストに初めて掲げられた軍旗は、アルビオン王家の紋章。かつての国旗でもあったその旗には、縦長の赤地に三匹の竜が並んで横たわっていた。

視界が晴れ、フネの船首から見る景色は絶景で遠目にはダータルネスの港が見える。

しかし、ルイズはその美しい景色を見ても無反応であった。

なぜならば、彼女はこの時既に“イリュージョン”の詠唱を開始していたのだからだ。

曰く、描きたい光景を強く心に思い描くべし。

なんとなれば、詠唱者は、空をも作り出すであろう、とされる呪文である。

才人は一心に詠唱を続けるルイズの隣に立ち、体中に力がみなぎって来るのを感じた。

紛れもなく虚無の詠唱の効果であるが、やはりどこか必要以上に心で荒れ狂う力に戸惑ってしまう。

いよいよ始まる。

今回もまた、“前”と同じように人が沢山死ぬだろう。



いや。

俺は、俺はルイズの為に　ちがう、自分の為にこれから“前”とは比べものにならぬ程の命を奪うのかも知れない。

長い才人の人生の中で幾度も自問し続けてきた問いが、苦い唾液と共に才人の喉へと降りていく。

しかし、虚無の歌を聴いている為か嫌悪感は薄く、それ故に才人を苛立たせた。

敵を打ち倒すことに今更自己正当化や自己否定をするような弱さは無かったが、それでも心には相応の負担がかかる才人である。

その事實は才人が未だ優しさを纏う人間である事の証明でもあったのだが、生憎これからの戦場には無用な物でもあった。

やがて勇者の愛しい女主人が謳う詠唱が終わり、虚無の魔法“イリユージョン”が完成する。

瞬間、“麗しのアンリエッタ”号の背後の雲間から無数のフネの幻影が次々と出現して、あれよと見事な陣形を組んでゆく。

先陣を切る“麗しのアンリエッタ”号を除けば、規模、船種共に“前回”と同じ大艦隊である。

ただ一つ、“前回”とは違うのは

「敵影！　三時の方向！」

「なに？　くそ、なんだあの量は！　見張りは……広域哨戒任務の連中は何をしていた？！」

「わかりません！　哨戒ガラスからの反応報告もありませんでした！」

「直ぐにダータルネスに信号を送れ！　文面は“我、敵艦隊ヲ発見シタリ……お前！　敵の旗はどこだ？　トリステインか？　それともゲルマニ　　うわ！　な、なんだ？！」

ダータルネス港より沖に三リーグの位置にたまたま居た、フリゲート級哨戒艦“サプライズ”の船橋は激しく揺れていた。

部下の報告に怒声をもつて答えた艦長は、突如出現し、要所であるダータルネス港に肉薄する大艦隊発見の報を受けすぐさま緊急信号として報告する為、士官に書き留めさせていた時である。

あわてて艦の被害状況を確認すべく船橋から甲板の方を見ると、信じられないことに三本あるメインマストが二本も消え失せていたのだった。

「な……なんだこれは！？ 何が起きた？！ 敵は何時測距砲撃を行つた？！ いや、そもそもあの距離から届く砲撃など……ありえない！ おいお前！ 一体、何が起きたのだ？！」

「敵艦の砲撃……だと思われませう！」

「思われる、とはなんだ！ 正確に報告せんか！ まさか敵の新型砲か何かか？！」

「そ、それが……」

遮るように轟、と風を切り裂く音。

艦長と状況を尋ねられた士官がソレを耳にした時、大木がなぎ倒されるかのような音を伴つて、彼らの目の前で残るメインマストが小枝のようにヘシ折れたのである。

遅れて嵐のような突風が吹きすさみ、“サプライズ”号は大きく揺れた。

「うおおお？！ なんだ！ なんだこれは！」

「敵艦からの砲煙は確認できません！ しかし、これは何らかの『砲撃』であると“思われませう”！」

「まさか……いや、そんなバカな！ 彼我の距離は三十リーグは離れておるのだぞ？！」

艦長が半ば自失しながら呟いた時、もう一度暴風が“サプライズ”号を襲つた。

バギン、と今度は不吉な金属音が響いて恐怖を更に駆り立てる。

「操舵不能！ 繰り返す、操舵不能！」

「なんてこった！ 舵が丸ごと吹き飛ばされた！ 大砲の直撃受けてもこうはいかねえのに敵は何をやったんだ？！」

「艦長！ 本船はもはや航行不能です！」

気が付くと、“サプライズ”号の艦長の周囲には士官やクルー達が集まってきていた。

無理も無い。

あり得ない距離からあり得ない正確さで、フネの命と呼べる帆と舵を一瞬で破壊されたのだ。

帆と舵を破壊されてしまったフネなど、空に浮かぶただの的ではない。

彼らに出来る事と言えば、敵に降伏するかこのままフネと運命を共にする位しか残されていなかった。

敵の攻撃は得体の知れぬ物であるが、その正確さから明らかに“遊ばれている”ようである。

『いつでも沈めることができる』という意志が明確にクルー達にも伝わっているようで、この時の艦長にはもはや選択肢など残されては居なかった。

「……副長、白旗をあげる……と、マストが無かったな。ここに居る全員でシーツを出して降伏の合図を送れ」

「……サー、キャプテン」

「だがその前に！」

艦長は悔しげに未だ遠くに見える大艦隊を睨んで、懐から望遠鏡を取り出しのぞき込んだ。

確認するのは敵軍の旗である。

「降伏の前にダータルネスに信号を……伝書カラスを送れ。文面は  
“我、敵大艦隊ト遭遇シタリ。数は数百。旗印ハ……スベテ王党派  
！ うそだろ、敵は王党派の大艦隊だ！”

トリステイン・ゲルマニア連合軍によるアルビオン侵攻作戦において、最初の戦闘が行われたウインの月第一週であるフレイヤの週はラーグの曜日、正午をすこし回った頃。

“ 前回 ” と同じように発生した、連合軍のアルビオン侵攻艦隊とロサイス所属の哨戒艦隊の戦闘は未だ続いていた。

戦力では連合軍が圧倒的ではあったものの、戦闘が長引いてしまっている事には理由がある。 まず、連合軍は上陸部隊を満載した輸送船団を抱えており、攻撃に専念する訳にもいかないにも関わらず、中央突破を目論むアルビオン艦隊に対して肉薄を許す包囲殲滅作戦を採った事。

それから、ド・ポワチ工将軍が危惧していたとおり混成艦隊故に連携が上手くとれなかった事。

更にはスヴェルの月にあわせて連合軍が攻め入ってくることを予想していたアルビオン軍が、ロサイスの空域を哨戒する艦隊の戦力を増強していた事。

そして何より、いまだハルケギニア随一を誇るアルビオン空軍の練度が、兵力の差を補っていた事にある。

故に連合艦隊は当初の予想以上に苦戦してしまい、艦隊旗艦“ ヴェンタール ” 号では総司令官ド・ポワチ工将軍が、艦隊指揮をとりつつも奇立ちを隠せずにいた。

彼はこの時、敵主力がダータルネスへ誘引されたとの報を今か今かと待っていたのである。

「ええい、斥候に出した竜騎士隊はどうしておる！ 敵主力の動きはまだわからないのか?!」

「ト軍戦列艦“ルポリュシオネール”より信号！ 『我、戦闘不能。後退ノ許可ヲ求ム』」

「何を寝ぼけておる！ 後方の地上軍を降ろす前に陛下の輸送船団を沈めてしまつつもりか！ そのまま敵砲撃の盾となれと返信してやれ！」

「將軍！ 本艦所属竜騎士第二中隊より報告です！」

「おお！ やつと敵主力が動いたか！ それで!? 無事ダータルネスに向かったのか?!」

「いえ、それが……」

「なんと！ ロサイスに向かったのか?! くそ、作戦は失敗したのか！」

「いえ！ それも違います。報告では敵右翼後方、我が軍の包囲網の端を突つ切る形で所属不明艦が一隻、戦闘に参加しているのと……」

「何？ なんだそれは。そんな事までいちいちオレに報告するんじゃない！」

「い、いえ。それが、どうやら王党派の旗が掲げられたフネのよう……」

「なんだ！ ハッキリ言わぬか！」

「はっ！ この所属不明艦が異常な戦闘力を発揮しながら、我が艦に向かっているそうです！」

通信士官と將軍の間で一瞬の沈黙が横たわった。

総司令官であるド・ポワチ工將軍は怒気をすこし納めて、おもわず側に居たウインプフェン参謀長と顔を見合わせてしまう。

その間、外からは轟音が近く遠く、無数に響き渡っていた。

得体の知れないフネが只一隻、この激戦の中敵陣を突つ切りまっすく旗艦に向かつて進むなど、どこの命知らずか。

將軍はいつものように嘲りそうになったが、すぐにその行為がどれだけ難しい事であるかを悟った。

我が連合軍にウェールズ皇太子が参加する事は、先の会議で各艦長に通達してある。

よつて、王党派の旗を掲げるフネに攻撃は加えないことになってはいるのだが

幾ら王党派の旗を掲げれば我が軍からの攻撃を受けないとはいえ、敵の真つ只中を単艦で進むのはやはり自殺行為と言えよう。

何せ常に敵艦隊に向け背と腹をみせながらの航行となり、当然四方八方から砲撃を受け十分と持たずに沈められてしまうからだ。

と、言う事は。

総司令官であるド・ポワチ工將軍がしばしの思考を追えたのを見計らい、参謀長のウインプフェンが声を掛けてきた。

「將軍、これは敵軍の罠である可能性がありますぞ？」

「うむ、参謀長。オレもそう思う。よし、その艦にはそのまま左翼の艦隊に合流するよう、第二中隊の隊長を使って連絡を入れさせる。

そうだな、“レドウタブル”号の指揮下が良い」

「はっ！」

「左翼の艦隊には少しでも妙なそぶりを見せたら即刻沈めるよう、連絡を入れておけ」

「は。それでは！」

命令に通信士官は敬礼を残して駆け足で持ち場に戻っていった。

間髪入れず、將軍と参謀長の下には戦況を知らせる報告と、右翼艦隊から竜騎士の増援を要求する通信報告が飛び込んで来る。

いくつもの不利な要素があるとはいえ、数の上ではやはり圧倒的に連合軍が多い。

その為か、指示を仰ぐ通信の数は先程よりも徐々に少なくなってきた。はいた。

しかし大部分は複数の参謀達に任せているとはいえ、緊急通信の数はいまだ総司令官自ら参謀長と共に指示を出さねば、艦隊指揮が行き届かない量でもあった。

これはトリスティン艦隊の練度の低さを物語るものであったが、大艦隊同士の戦闘など百年に一度あるかないかという程にしか起りはしないのだ。

よってアンリエッタにすら凡将という評価を下されていたポワチ工將軍であるが、案外、太平の世を過ごしてきた将とは大なり小なり、この程度であるのかもしれない。

「なに?! 母艦が吹き飛んだ?! ええい、その竜騎士隊には戦が終わればいくらでも我が艦に受け入れてやると伝える!」

「伝令! 右翼ゲルマニア艦隊より負傷兵の後方移送艦に対する援護が要請されております!」

「ト軍戦列艦“ルボリュシオネール”、撃沈! クルーの救援要請が入っております!」

「ゲ軍フリゲート級戦艦“ヴィルヘルム”より信号! 『負傷者ヲ後方移送スル為、一旦戦線ヲ離脱スル』との事!」

「クソ、参謀共は何をしておる! なぜ総司令官であるオレがこんな指示を出してやらねばならんだ!」

元々ゲルマニアやアルビオンと比べ軍事力に劣るトリスティン王国である。

先のタルブでの一件から今回は艦隊指揮権をゲルマニアより譲られてはいたものの、小国の軍に大艦隊の運用ノウハウなどあるう筈も無く、指揮系統に乱れが生じつつあった。

早い話が將軍が率いるトリスティン王国の幕僚は地上軍出身の者が多く、艦隊規模の割に艦隊戦に明るい参謀が極端に少なかったのである。

必然と言つべきか、参謀達が処理しきれぬ事案などがド・ポワチ



工將軍の下へ舞い込むようになり、やがては所属不明艦の事など忙殺されてゆくのであった。

ルネ・フォンクは艦隊旗艦“ヴュセンタール”号所属である竜騎士隊の第二中隊長だ。

トリステイン王国では下級貴族の出身であり、金髪と小太りの体型が印象的な貴族の少年である。

歳は十七でつい最近までは竜騎士見習いであったが、今回の遠征に臨むに当たり、急遽編成された竜騎士隊の中隊長として抜擢され、アルビオン侵攻作戦に参加していたのだった。

彼とその部下達は“前回”ではダータルネスに向けて敵陣突破する才人の駆るゼロ戦を護衛し、その後は良き友人としての関係を築いていたのだが。

今回もまた形は違えどこの戦いを通じて才人と関係を築いてゆく事となる。

後日才人は彼らとは何か強い縁が存在し、友人となることは案外強固な運命であるのかもしれないと思う事になるのではあるが、やはり細部は“前回”と違う事柄も存在していた。

特に、前回とまったく違ったのは

「なんだよ、このフネ……」

ルネは騎乗する飛竜“ヴィルカン”の背で自失しかけながらそう呟いた。

眼下には染み一つ無い純白のフネが、悠然と砲火飛び交う空を征く。

正体不明の白いフネはフリゲート級の中でも小型の艦で、勿論連合軍の主力である戦列艦とは比べようも無い程砲門は少なく、頼り

ない。

軍属で無い者であってもこの戦場を見渡せば、このような小さな戦艦が敵陣の真っ只中を突っ切るなど無理であると評するであろう。しかしそのフネは間違いなく敵陣の真中を突破してきており、その上白い船体に傷一つとてついでには居なかつた。

これではポワチ工將軍や參謀長が敵の罠を疑い、ルネに先鋒を務める艦隊への誘導中、つぶさに観察すると命令された意図もよくわかる……はずであるのだが。

だがこの時既に、ルネをはじめとした竜騎士隊第二中隊の少年達は誰一人としてその白いフネを敵とは疑って居なかつたのである。その理由として、白いフネの信じられない戦い方が挙げられた。何せ、白いフネは敵艦や竜騎士、果ては砲弾に至るまで如何なる者も“近寄せない”のだ。

「隊長！ 正面、敵竜騎士隊です！」

「よし、散……る必要は無くなつたな」

「……敵の方が散り散りに蹴散らされちゃいましたね」

「なんだってんだ、あいつ！ あの、白いフネの船首にいるやつ！」

第二中隊の竜騎士の少年が興奮気味に指差したのは、白いフネ“麗しのアンリエッタ”号の舳先に、まるで水先案内人のように立つ才人であつた。

その後方では手の空いたメイジの仕官達や甲板員達が忙しなく砲弾や石塊を積み上げている。

「今度は二時！ やばい、あれは戦列艦だ！」

「砲撃来るぞ！ 散開しろ！」

戦場である筈の空で、若き竜騎士達は大声で会話が出来るほど“麗しのアンリエッタ”号の周囲は平穩であつたが、そこへ長距離射

程を誇る戦列艦の砲撃が襲いかかった。

互いの艦隊が入り乱れる混戦の様相を呈していた為か、測距砲撃など行なわないお構いなしの砲撃だ。

戦列艦は百を越える砲塔が並んだ横腹を晒したかと思えば、次の瞬間には轟音を規則正しく轟かせ砲煙を空に滲ませる。

しかし先程の竜騎士の時と同じように、砲音とは少し違う風斬り音を上げながら、“麗しのアンリエッタ”号から幾筋もの銀閃がほとばしり、迫り来ていた砲弾を一瞬ですべて粉碎してしまった。

更にはルネ達が驚く間も無く、視界の先にあつた戦列艦にまで銀閃は届いて、あつという間に全てのマストと舵、竜骨の一部を破壊してゆつくりと空の下へ沈めてしまうのである。

ルネをはじめとした第二中隊の少年達は、そうやって僅かな時間で轟沈してゆく敵のフネを見る度に、己の頬をひねり上げ現実を疑う。

無理も無い。

何処の世界に小型戦艦の単艦で精強な竜騎士隊を、駆逐艦を、特攻を仕掛けてきた焼き討ち船を、戦列艦を、拳げ句には砲弾すらただ一つ漏らさずに打ち落としながら航行するフネがあるつか。

それも最新鋭の大砲を積んでいたり、特別な魔法を打っているのでは無い。

只一人、フネの舳先に立つ男が何やら槍の様な物を投げているだけなのだ。

あいつ、何者だ？

背後に山積みにした砲弾から槍を作り出している所から、土系統のメイジのようだが……

いや、それよりもアレはなんだ？

どんな錬金を行えばあのような凶悪な槍を……

それにどうやって投げれば……

ルネは戦慄と疑問で思考を埋めつつも、まるで河原に小石を投げ込むかのように槍を投げ続ける才人の姿に知らず見とれてしまって

いた。

見れば見るほどに現実味を無くしてゆく光景の中心に居座る人物は、よく見れば自分とそう変わらぬ年頃の少年である。

しかし、彼が目の前で上げ続ける戦果は間違いなく戦史に残る超一級のもので、それ故に少年達の視線を捉えて離さなかった。

その様はまるで絵本の中から出て来た古の勇者のようであり、初陣の緊張と恐怖を忘れさせるほどの荒ぶる力を少年達に見せつけていたのだ。

不意に。

如何なるキツカケであったのか、ルネと勇者の視線が合った。

遠目にもわかるその髪と同じ色の黒瞳は、どこか吸い込まれそう  
で居て、不思議とルネの高揚をさらに昂ぶらせ武者震いを起こさせ  
る。

と、いうのも近くを飛ぶ竜騎士がルネであると気が付いた才人が、  
人懐こい笑顔と共に手を振ったせいでもあったのだが。

百戦錬磨、人の領域を超越した力を持つメイジに手を振られたと  
勘違いした少年達は、英雄に憧れる幼心もそのままについて、興奮し  
てしまうのであった。

一方才人はと言うと、ルネの姿を確認しつかの間の懐古に心を温  
めてはいたものの、直ぐに左舷側より迫る敵砲撃を察知して、背後  
に山積みされた砲弾に手を添える。

左手のルーンが一瞬強く輝き、やがて右手の中に数本の細い槍が  
出現した。

才人はその槍を一旦甲板上に刺してから、目にも止まらぬ疾さで  
もって一本ずつ“グリムニルの槍”を投擲したのである。

魔槍は唸りを上げ、精密機械のような正確さでもって砲弾へと飛  
び、派手に爆砕する。

「おう、サイト！ 派手にやるのは良いが、当たりそうもねえ奴は  
ほっとけよ！ そろそろ残りの砲弾と積んで来てた石くれが心許な

「なつて来やがったぜ？」

「ホントですかトマソン砲長？」

「ああ、砲弾管理もしている俺がウソついてどうするんだ。この山積みにした砲弾の半分位しかもう残っていいえよ」

「う、わかりました。なるべく節約しますけど、ダメだったら……」  
「そんな時は仕方ねえな。なるべく甲板の端っこから槍に変えてくれよ？」

「わはは、サイト！ どうせ甲板を材料にするんなら、その槍をブツ刺した床から使ってくれや！ あとで張り替える為にひっぺがす手間がはぶけらあ！」

「そりゃあいい！ おう、どうせ槍に変えちまうならソイル樽（便などの汚物が詰まった樽）も持つてくるか？」

「バカ、あんなくっせえもん、誰が持つてくるんだよ？ 士官様はぜつてえ運んじやくれなぞ？」

トマソン砲長はドゴ！ と音を立て、手にしていた小ぶりの砲弾をその場に置いて笑った。

その背後では同じような笑顔のマトウロ（甲板員）達が冗談を言い合いつつも、やはり手に大小の石塊や小さな砲弾を抱え、行儀良く並んでいたのである。

彼らは皆誇らしげに才人を褒め称え、順番に手にした重量物を置きながら、まるで家族のように親しげに声を掛け船倉に戻っていく。才人はそんな彼らに思わず笑みを浮かべてしまいつつも、忙しく魔槍を作り出し投げ続けた。

懐かしい顔を見つけた為か、それとも陽気な“麗しのアンリエツタ”号のクルー達のお陰か、先程までは暗澹としていた心が僅かに温かく震えている。

それでも投擲した槍が幾人の命を奪ったのかと意識しなくても無かったが、それが才人の手を止めることは無かった。

そういえば。

才人はふと、“前回”での事をその薄い記憶の中から掘り出した。思い出すのは、ゼロ戦を操縦していた時にルイズに読んで貰った、コルベールからの手紙の内容だ。

思えばあの手紙は丁度この戦いの最中に読んだ物では無かったか。内容は東に行きたいというもので、それから……そう、いまでも自分の中心に大切に仕舞っている言葉を貰った手紙だった。

戦に慣れるな。

殺し合いに慣れるな。

“死”に慣れるな。

……俺は、慣れてしまつて居るのだろうか？

ただルイズを、皆を守りたいから剣を取っているだけのつもりでも、実はこの槍の力に酔っているのではないか？

疑問は戦場で抱くにはあまりに危険な代物であった。

なぜ今頃になつてこのような事を思い出し、悩み始めるのか。

才人は自覚しては居なかったが、“前回”と同じ時間に似たような出来事を体験する事によつて虫食いである記憶の一部が刺激され、思い出してしまふのかもしれない。

まずい！

悩みを抱いたのも一瞬、才人は直ぐに思考の中に呆けてしまつていた己を見つけ、背に冷たい汗を噴き出させた。

時間にしてもほんの数瞬での事であるが、我を取り戻して見ると明らかに槍を投げるペースが落ちていたのである。

だがそれは、才人の油断が引き起こしたのではなく

「見る！ 敵が引いて行くぞ！」

「やった！ “ミス・ゼロ”の魔法に敵が騙されたんだ！」

「サイト！」

認識するより疾く状況を察し動きを止めていた体に、甘い温もりがぶつかってきた。

危険であるからと船室に置いてきた彼の女主人が、何時の間にか外に出て来ており、体当たりするように抱きついてきたのである。才人は少しだけ体勢を崩しながらも、首からぶら下がるルイズの腰に手を添えつつもゆっくりと周りを見渡した。

周囲には困った顔のウエルズとハル卿、そしてケイト。ムっとした表情のメアリ。

先程まで砲弾を運んでいた部員と士官達は、ニヤニヤしてこちらを見ている。

最後に最も近い位置にある顔をのぞき込むと、そこには満面の笑みを浮かべた恋人があつた。

「ルイズ？」

「サイト！ やったわ！ 私達、勝ったのよ！」

「おう、そうだ！ 俺達は勝ったんだ！」

「ああ！ それも圧倒的な大勝利だ！」

「フラー・アルビオン！（アルビオン王国万歳）！ フラー・ウエルズ！（ウエルズ皇太子万歳！）」

「ヴィヴラ・トリステイン！（トリステイン万歳！） ヴィヴラ・アンリエッタ！（アンリエッタ女王万歳！）」

それぞれの国の言葉による、皇太子とトリステインからのエージエントを讃える万歳が“麗しのアンリエッタ”号の甲板中に広がって行く。

歡喜の渦はただ戦に勝利した喜びだけでなく、新たに誕生した英雄への祝福に満ちていた。

しかし、等の本人は照れながらも祝福をどこか素直に受け入れられず、ついやり場の無い視線を合流しつつあつた連合艦隊へと向ける。

艦隊の損害は“前回”程では無かったが、それでも痛々しく損壊したフネがそこかしこにあって才人を陰鬱とした気持ちにさせた。

もし、俺がもつと躊躇無く力を振るっていたら、もつと味方の犠牲が少なかったのかも知れない。

そう考えてもう一度、先程思い出したコルベールの言葉を思い出す。

戦に慣れるな。

殺し合いに慣れるな。

“死”に慣れるな。

慣れるな、とは躊躇う心を忘れるな、と言う事であろうか。しかし、それでは

「サイト？」

優しい声に才人は我を取り戻す。

視線を戻すと、そこに優しく微笑むルイズが居た。

同じように笑うウェールズやどこか苦しげに笑うケイト、ふて腐れたようなメアリや歓喜の湧く“麗しのアンリエッタ”号のクルー達が居た。

それは正に才人が守りたい物であり、先程の疑問に対する答えでもあるような気がした。

「敵アルビオン艦隊より点滅信号！ 『貴・艦・ノ・健・闘・ヲ・讃・エ・ル』！」

「返礼！ 『貴艦ノ航路ニ武運ガ共ニアランコトヲ』と返せ」

「サー・チーフ！」

「チーフ！ 連合艦隊旗艦“ヴェンタール”号所属の竜騎士が、旗艦にて話を伺いたいと言ってきます！」

「キャプテン？」

「うむ、ハル卿。招きに応じようか」

「は。マルタ掌帆長！ 竜騎士に先導するよう伝えろ！ 総員持ち場に戻れ！」



「サー！」

チーフ・オフィサーのハル卿のかけ声をキツカケに、いまだ醒めやらぬ熱狂を抱えたまま、才人を囲んでいたクルー達は蜘蛛の子を散らすようにそれぞれの持ち場に戻っていった。

ウェールズやケイト、メアリも又、思い思いにその場を後にした為、残ったのは才人とルイズの二人だけである、

「サイト、どうしたの？　なんだか浮かかないみたいだけど」

「ん、ちよつと、な」

「隠し事はイヤよ？」

「ああ。あとで話すよ」

会話はそこで途切れ、二人はそのまま無言で眼前に広がる連合艦隊を眺め続けた。

後方の地上軍を乗せた輸送船団は無傷であった物の、それを護衛している艦隊は皆どこかしら傷ついて戦闘の激しさを物語っている。そんなフネの間をぬうように、目立つ純白の“麗しのアンリエッタ”号はゆつくりと護衛艦隊の中央へ向け進路を変更した。

やがてロサイスへ向け進軍する艦隊に合流した純白の美姫は、その名の通り女王のような気高さをもって空を征くのである。

空軍基地もある港町ロサイスは、アルビオンの都ロンディニウムから南に三百リーグ程の位置にあった。

トリステイン・ゲルマニア連合軍は敵主力艦隊がダータルネスへ誘引されている間、ロサイスに無事降下するや素早く陣を敷く事に成功していた。

大軍を無傷でみすみす上陸されてしまったアルビオン軍が次に企図するのが、大軍をもつての大反撃であると予想していた連合軍首脳部は、これに備え円陣を強いたのであるが。

しかしダータルネスへ向かったアルビオン主力艦隊は彼らの予想に反して、なんと都であるロンディニウムに立てこもってしまった。いた。

実はこの時、アルビオン軍としては連合軍に敗れた防衛艦隊の被害が予想外に大きく他に選択肢が無かったのである。

なぜならば、トリステインの侵攻に備えロサイスの空域に配備していた艦隊は兵力こそ主力に及ばぬ物の、最精鋭の人員を多く配備しており、その被害が予想を大きく超えて甚大であったからだ。

故に防衛艦隊は兵力では劣っていたものの、連合艦隊相手に互角の戦いを繰り広げ、多大な損害を与えていたのだが、終わってみればアルビオン軍の方が傷が深かったというわけだ。

だからこそ、アルビオン軍としてはロサイスに揚陸した連合軍との決戦を避け、守るに有利なロンディニウムへ立てこもったのだが。一方そうとは知らず、決戦に備えロサイス周辺に布陣した連合軍はいたずらに兵糧を始めとした物資と時間を浪費してしまい、総司

令官ド・ポワチ工將軍は今後の作戦を、当初のものから大幅に修正する必要に迫られていた。

何せ今回の侵攻作戦は、元々短期決戦ありきで企図されたものなのだ。

補給物資も六週間分しかなく、それが尽きれば長期戦にそなえトリスティンやゲルマニア本国から物資を運ばなければならなくなる。それはギリギリの財政の中で遠征軍を編成した両国にとっては是非でも回避したい事態であり、だからこそド・ポワチ工將軍は年が変わる降臨祭までに戦を終結させたい意図があった。

そんな状況下、かつては王立アルビオン空軍司令部、先日までは神聖アルビオン共和国空軍本部、そして現在ではトリスティン・ゲルマニア連合軍総司令部が設けられたロサイスの空軍基地にある、由緒正しい赤煉瓦作りの建物の二階、大ホールにて。

曆は連合軍が上陸を果たしてより八日後、ウインの月第二週であるヘイムダルの週はイングの曜日。

開かれていた会議は遅まきながらも今後の作戦を巡り、大いに紛糾していたのだった。

「進軍です、進軍！ 進軍あるのみですぞ総司令官！ 我らには残り四週間しか兵糧は残されておりませぬ。更に降臨祭までに戦が終わると言って兵を連れてきた以上、今年中に戦を終結させねば兵の士気が下がりますぞ！」

「しかしハルデンベルグ侯爵閣下。途中の砦や城は如何なさるのです？ そのままにして真っ直ぐにロンディニウムへ進軍すれば、背後を突かれる形になりますぞ」

「ウインプフェン参謀長、われらは空を制しておるのだぞ？！ 何を怖れることがあるうか！」

窓を背にした円卓の上座に座る連合軍総司令官ド・ポワチ工將軍を挟み、白いカイゼル髭を

揺らしながら進撃を主張するハルデンベルグ侯爵と慎重論を唱えるウインプフェン参謀長がにらみ合っていた。

両者はまるで火と水のようにいがみ合い、杖を抜きかねない勢いで真つ向から意見を対立させていたのである。

間に挟まれた將軍は二人の意見にじつと耳を傾け、しかし答えを出せずにはむむと美髯をつり上げ腕を組み唸っていた。

「閣下。ハルケギニアの歴史上、降臨祭までに戦が終わると言いつて終わった戦がありましたかな？」

「無いと言いたいのなら、我らが先例となればよい！」

「……よいですか？ 閣下。ロンディニウムを包囲するのはよろしい。しかし、このまま進撃してただ包囲するだけでは、補給路も延びてしまい放置した途中の砦や城に我が軍の柔らかな喉元を晒すようなものです。只でさえ兵糧が心許ない上これだけの大軍ですぞ？ もし補給路を叩かれでもしたら、それこそ我らの方が降臨祭までもちませぬ」

「ならば物資はどうする？！ 貴国にはこれだけの大軍を越冬させるほど潤沢な補給物資を用意出来てか？ まさか、我がゲルマニアを当てにしておられるわけではあるまい？」

「それは……我々はアルビオン大陸をレコン・キスタの手から解放する為に来ておるのです。占領下に置いた都市や村、攻略した敵施設から徴用すればよいかと」

「貴様！ 殿下の御前でよくもそのような事を！」

ウインプフェン参謀長の言葉に怒声を上げたのは、ウェールズ皇太子の副官として軍議に参加していたハル卿である。

ウェールズ皇太子は連合軍に合流後、トリステイン、ゲルマニア両国には属さぬ第三の勢力として扱われ、このような会議には必ず参加していたのだった。

本来ならば彼が総司令官となり、トリステイン・ゲルマニア両国

の兵を借りる形で連合軍を率いるのが筋なのかもしれないが、今回の連合軍はアルビオン王家とは関係の無い場所で成り立った軍である。

主導したアンリエッタの思惑は別にあるのかも知れないが、軍を預かるポワチエ将軍は当然指揮権を渡すつもりなどなく、ウェールズも又その事は重々理解していた。

従って、上座にポワチエ将軍が座り、亡国の王子であるウェールズが下座に座らされていても異論を唱える者は誰も居なかったのではあるが。

しかし、それでもウェールズはこの場に居る誰よりもアルビオンの地に縁ある王族でもあるのだ。

身分の高さならばこの場にいる誰よりも高く、彼が下座に甘んじているのは単にそのような事に拘らない人柄とそんな事を気にしては居られない状況、そして連合軍の幕僚達が抱える驕りと打算がそうさせていたのだった。

だが実際にそうであっても、ウェールズ皇太子の前では口にしてはならぬ禁忌という物はやはり存在する。

物資の現地調達という名の略奪行為はまさにそれで、暗にほめかけたウィンプフェン参謀長にアルビオン貴族であるハル卿が声を荒げたのも無理からぬ話であった。

「参謀長、口を慎み給え。殿下の御心がわからぬ貴君ではあるまい」  
「……は。殿下、申し訳ございません」

「殿下、私からもトリステイン王国を代表し謝罪致します。何分、戦時故あらゆる可能性を議論する必要があるからして、どうぞご容赦を」

「いえ。参謀長のお言葉は一日でも早く戦を終結させる軍略家としての意見であり、決して無法を愉しむ侵略行為を目的とした意見で無いと私は信じております故、お気になさらず」

「恐縮です、殿下。改めて謝罪をいたします。そちらのハル卿にも

この通り、お許しください」

「しかし参謀長殿。例え“現地調達”が円滑に行えてもこれだけの  
大軍、恐らくは焼け石に水では無いですか？ 落とした砦や城か  
ら物資を調達するにしても、敵が素直に渡すとはおもえませぬ！」  
「殿下の言つとおりだ！ 大体、街一つ、城一つ攻略するのにどれ  
だけの損害が出ると思っているのだ！ ここは一気呵成に攻めてロ  
ンディニウムを降臨祭までに落とす他ない！」

「我らは侯爵閣下が先程おっしゃったように、空を制しているの  
で  
すぞ？ 各砦や街の攻略により発生する損害は最小限に抑えられま  
す。物資も敵の補給用の砦を割り出しそこを急襲すればよいではあ  
りませんか」

「……トリスティンでは系統が“風”だと、すぐに臆病風が吹くよ  
うだな。ここにおわす殿下と同じ系統とは思えん」

「……威勢ばかり良いかわりにあつという間に燃え尽きる“火”よ  
りかは数段マシかと」

二人の議論は口論へと変わり、とうとう罵倒を吐き出してそれぞ  
れが杖を抜く事態へとなった。

会議室の空気が一瞬で凍り付き、幾人かは衛兵を呼ぶタイミング  
を計っている。

「臆病者のトリスティン人に戦場で使う勇気を教えてやる」

「野蛮人に教わる作法などありません」

「やめぬか！ 殿下の御前ぞ！ 我らが争ってなんとする！ 侯爵

！ ゲルマニアの勇気は戦場で示されい！ ウィンプフェン！ 私  
に恥をかかせる気か！」

怒号は静寂を連れ戻した。

ハルデンベルグ侯爵とウィンプフェン参謀長はしばしにらみ合っ  
た後、冷静さを取り戻してそのまま椅子に腰を落としたのである。

將軍はふう、とため息を吐き、二人が口を開かぬ内に提示できるよう、先程からまとまりそうであった己の軍略を整理し始めた。

実は二人の衝突には、そのままトリステインとゲルマニアの内情が背後にある。

この戦は単に反王制を掲げるアルビオン革命政府打倒だけが目的では無い。

戦が終わった後、アルビオンの地にウェールズ皇太子による王制を復活させた後の戦後賠償を如何に多く得られるようにするかという、政治的側面もあるのだ。

その為、ゲルマニアとしては現時点でトリステインに総指揮権を握られているので、なんとしても突出した華々しい戦果が欲しい内情があった。

またトリステイン側もド・ポワチ工將軍“率いる”連合軍として確実な戦果を上げ、戦後賠償に莫大な戦費および協力金をせしめ、次期国王であるウェールズ皇太子への影響力を残す為に失敗は許されぬという思いが幕僚達にあったのだ。

勿論、これはアンリエッタ個人の考えとは違い、戦に勝ちそのままアルビオン“解放軍”司令官として政治の表舞台に立ちたいポワチ工將軍と本国の貴族達のシナリオである。

「……とりあえず当初の計画が崩れ去った事自体は認めねばなりませんまい。ロサイス降下後アルビオン軍主力を決戦で打ち破り、その余波をかってロンディニウムへ進撃、攻略。クロムウエルの首とトリステイン、ゲルマニア、そして王党派の旗をハヴィランド宮殿に掲げる……。しかし、戦とはやはり計画通りには行きませんな」

「で、どうするのですか？ 將軍。私とハルデンベルグ侯爵の意見は真っ向から対立していますが」

「決戦は無くなったが計画は実行されねばならん。一気呵成にロンディニウムへ攻めるには危険が大きすぎる。かといって、一つずつ城を落としていたのではこの戦、十年はかかる」

そう言いながら、ポワチエ将軍は杖を掲げてペンを操り、円卓の上に広げられた大きな地図の上に一本の線を引いた。

それから宙に浮くペンをロサイスからロンディニウムを繋ぐ線上の一点に立てて、杖でもって改めてその点を指し示す。

「シティ・オブ・サウスゴータ。観光名所の古都だな。ここを落としてロンディニウム攻略の足がかりとする」

「……成る程、南部の街道の集結点であるサウスゴータならば他の城や街にも睨みが効く、か」

「それにもし持久戦となったとしても、大都市ならば体勢も立てやすいですな」

「そうだ。五千をここロサイスに残し退路と補給路を確保する。残りは攻略に参加させ空軍をもってこれを支援。いかがかな？ 侯爵」

「うむ……悪く無い。しかし参謀長殿はどう考えるか」

「私も悪く無いと思います。ただ……」

ウィンプフェン参謀長は先程抜いた杖の先をトン、と地図のある点を示す。

そこはサウスゴータから更に南の、丁度ロサイスからサウスゴータの間にある砦であった。

古都であるサウスゴータは街道が集結する為、出城のような形で街道沿いに砦が多く築かれている。

ウィンプフェン参謀長が示したウォリクサー城もそんな砦の一つだ。

「情報ではこのウォリクサー城には亜人の軍勢が駐屯しているようなのです」

「亜人の？」

「はい。ウォリクサー城は元々、街道の西にあるスノードニス山脈



の端に広がる森に多く潜む亜人対策で作られた城です。恐らくは我々の上陸を許した折に発生した混乱に乗じて、亜人どもに落とされたのでしよう」

「……厄介だな」

ポワチ工將軍と侯爵はそれぞれの自慢の髭をしごき唸った。

兵力としては亜人の立てこもるウォリクサー城を墜とす事は容易い。

しかし、サウスゴータへの進軍途中にウォリクサー城で足止めを食えば、敵にこちらの意図を悟られ対策を練られる時間を与えてしまうかも知れない。

ここは気取られぬよう、足場固めと思わせる為に幾つかの部隊にわけウォリクサー城の他にも陽動として攻め込むべきか。

それとも敵にこちらの作戦がばれる事も意に介さず、進軍を行うべきか。

再び悩み始めるポワチ工將軍に一人、進言する者が居た。

ウエールズ皇太子である。

「將軍」

「なんでしょうかな、殿下」

「ウォリクサー城の件が無いとして、軍を再編成しサウスゴータに向け進軍するまで何日位かかりますか？」

「ウインプフェン？」

「斥候をすぐに飛ばすとしても、およそ……一週間程かと。」

「ではその間に私がこの城を落としておきましょう」

「な、なんですと！？ 失礼ながら殿下の軍は……」

「フリゲートが一隻と海兵が数十名、あとアンリエッタ女王陛下より預かる“虚無”の使い手がおります」

「無茶だ！ たったそれだけの兵で城を落とすなど！」

「なに、ウインプフェン参謀長殿。軍が無事通過できればそれで良

いのでしょうか？ 占領するならばかなりの兵が必要ですが、落とすだけならば」

「僭越ながら、それが無茶だと申し上げておるのです、殿下。アンリエッタ女王陛下より殿下にお貸ししている“虚無”を当てにしておられるのかもしれないが……」

「問題ありませんよ、参謀長。いくら“虚無”とはいえ、使える魔法に制約が存在することは私も存じております。ロンディニウム攻略に向けいたずらにこれを浪費するつもりはありませんよ」

「しかし……」

「心配ご無用。なに、トリステインに“虚無”という切り札があるように、我がアルビオン王党派にも切り札がありますからな」

「それはもしや……先日の会戦で武功を上げたという？」

「ええ。“虚無”殿の使い魔ではありますが、彼も立派な“アルビオン王国の臣民”です。いえ、先日の武功により略式ながら『ナイト』の称号を授け、いまや立派なアルビオン王党派の貴族であり戦力でもあると言えますな」

『ナイト』とは名誉貴族である称号・シュヴァリエに当たるアルビオンでの呼び名である。

ウェールズの言う切り札とは勿論才人の事であるが、真実は才人がウェールズの臣下となったわけではなく、武功をウェールズに還元する為の処置としての叙勲であった。

勿論この叙勲には戦後を見越したアンリエッタの思惑が深く絡んでいた。

というのも、ウェールズの下へ送ったルイズや才人が如何に活躍しようとも、結局は二人ともトリステイン人である。

その為、そのままであれば二人の個人的な武功は戦後に王党派ではなくトリステインに帰する物として見られかねず、ウェールズが作戦に参加した意義が薄れてしまう可能性があった。

そこで才人をアルビオン貴族に列し、表立ってはウェールズに剣

を捧げることによって彼の功績を“アルビオン貴族による武勲”となるようアンリエッタは取りはからったのだった。

勿論、才人から“前”の事を聞いたアンリエッタの思惑はそれだけでは無かったのだが……

「良いではないか参謀長！ 僅かな手勢で城を落とさんとする殿下の勇氣、まこと感服いたしましたぞ！ 殿下の“風”はどこぞの臆病風に吹かれる“風”とは大違いですな」

「……如何致しましょう？ 将軍？」

ハルデンベルグ侯爵にムっとする参謀長に問われ、ポワチ工将軍は考えを巡らせた。

戦後を考える連合軍の性格上、あまりウエールズ皇太子には前線に立たせたくは無い。

皇太子とアンリエッタ女王との良好な関係もあり、できれば大した武勲を上げずにこのまま“お飾り”で居て欲しいのが実情だ。

何より、我が軍の切り札でもある“虚無”をいつまでも彼の手元に置くべきでは無いのではなからうか。

オレの元帥昇進もかかっていることでもあるし、出来れば頃合いを見て“虚無”をお返し願う事を考えねばなるまい。

……そうは言っても、ウォリクサー城の件は放置するには少し問題が大きい。

ここは好きにさせ、無事城を落とす事が出来ればそれでよし。

出来なければやはり、全軍を持って踏みつぶし一気にサウスゴータに迫ることになるだろう。

なれば

ポワチ工将軍は素早く打算と軍略をまとめ、無難な結論を導き出した。

「元々殿下は遊軍として扱おう、アンリエッタ陛下より承ってお

ります。殿下の申し出、ありがたく受けましょう」

「では……」

「あいや、お待ちください！」

ポワチ工將軍の言葉に満足げに頷き席を立つたウェールズに、將軍はすこし慌てたように呼び止め念を押した。

「ただし！ ただしですぞ？ 今後の作戦に“虚無”殿の力も必要となるやもしれません。できれば使用はお控え願いますでしょうか？」

「大丈夫ですよ。“彼女”の力は今回の作戦では使いません。ご安心ください」

「では殿下の兵に竜騎士の中隊を一つ同行させても良いでしょうか？」

「竜騎士の中隊を？」

「はい。彼らにはついでにサウスゴータの偵察任務に当たって貰います。“虚無”殿にはそれに同行し、地形を頭にいれて置いて欲しいのです」

「成る程、サウスゴータ攻略に彼女の“幻影”を使う訳ですか。かまいませんよ、先にも申しましたが彼女の力は使う予定では無いので」

「そういうことならば安心です。殿下、ご武運をお祈り致します」「ありがとうございます、將軍」

返してウェールズ皇太子はニコリと笑い、ハル卿を伴って会議室を後にした。

この時の彼の心中にあったのは、亡国の皇子故に末席に追いやられた屈辱ではなく心躍る高揚である。

今回の作戦が終わった時、彼らはどんな顔をするだろうか？

国を失い、名誉を失い、権力を失い、あるのはただ己の血と肉の

みとなつた王子はまるで悪戯をしかける子供のように胸を躍らせる。

「ハル卿、次に連中の顔を見るのが楽しみだな」

「はい、殿下。早晚、彼らは我々の切り札である“黒騎士”を“虚無”の一部と見なさなかつた事を後悔するでしょう」

「その呼び名はサイト君の前では言うなよ？ 恥ずかしいらしい」

「臣下にと殿下の好意を退け、遍歴者として家紋を塗りつぶす“黒”を選んだ彼が悪いのです」

「はは、まああれ程の武人を手元に置けないのは確かに惜しいがな。しかし、私とアンリエツタ姫の策が上手く行けば、そんな事はどうでも良くなるさ。それよりも出航の準備を急げよ、チーフ」

「御意」

楽しげな二人の会話は果たして才人に届いていたのか。

同刻、ウエールズより下賜された貴族のマントに刺繍されたアルピオン王家の紋章の隣に、必死でトリステインとヴァリエール家の紋章を刺繍しているルイズの隣で。

英雄は暢気にもえつきし、とくしゃみをしながらも久しぶりの穏やかな時間を満喫していたのであった。

7 - 29 : e x t r a | e p i s o d e / 美姫は空を征き、英雄は地を逝く(前)

予定では本エピソードは30話でしたが、5話〜10話程オーバー  
しそうです……

「きみは本当に彼に夢中なんだね」

金目銀目の少年は愛騎である風竜を操りながら、背に居るルイズへ呆れたようにそう言った。

戦場には似つかわしくない、まるで女性のような美貌は苦く微笑んでため息が風に散る。

細長く色気を含んだ唇と長い睫毛、そして金糸のような髪はどれをとっても完璧で、年頃の娘ならば彼が側に居るだけで虜になってしまうだろう。

しかし、彼の背にしがみつく娘はおよそ神官に似つかわしくない爽やかな香に鼻をくすぐられながらも、純白の戦艦で自分達を見送る黒髪の少年から険しく視線を外そうとはしなかった。

黒髪の少年の傍らには二人の女性の姿があつて、ルイズにはそれがどうしても気がかりであるようだ。

金目銀目の少年はそれが嫉妬である事にはとうの昔に気が付いていたが、よもや自分が口にする美辞麗句がまつたく届かぬ程激しい物だとは思つても見なかつたらしい。

予想外な関係を築いていた“虚無の主従”に内心戸惑いつつも、美貌の少年は少しでも“担い手”の事を知るべく華美に裝飾された言葉を吐き続けた。

少年の名はジュリオ・チェザーレ。

ロマリア連合皇国から義勇軍として個人で連合軍に参加し、外人部隊である第三竜騎士中隊の中隊長を務めている。

平民の出でありながら騎乗する竜の扱いにかけてはかなりの腕前

であり、サウスゴータの偵察について“虚無”を同乗させ任務に就く程の実力を備えていた。

もっとも“虚無”とその任務は軍事機密である為、彼には単騎でとある人物を同乗させ飛ぶ、という任務内容しか知らされては居ない。

その正体はルイズと同じ“虚無”の担い手であり、ロマリア皇国の支配者、ブリミル教の全神官と寺院の最高権威者である教皇、聖エイジス三十二世ことヴィットーリオ・セラヴァレの使い魔である。虚無の使い魔である彼は“神の右手・ヴィンダールヴ”のルーンを持ち、あらゆる幻獣を操る事が出来るのであるが、主の思惑に添える為正体を隠しての従軍であった。

彼の目的はトリスティンに出現した“虚無”の担い手を戦で死亡させぬよう影ながら保護する為と、その人となりを見極める為であったのだが……

「あ！ やっぱ私が居なくなつた途端、才人の手を取つたわ！

あれは……メアリね！ うぬれえ……」

「……よく見えるね、この距離で」

「ああ！ ブロウ准尉まで！ なにさりげなく寄り添ってるのよ！  
ちよつとあんた、引き返して頂戴！」

「無理だよ。それに、任務はどうするんだい？」

「う……そうだけど……あー！ メアリあんた、何腕を抱いてるの！？  
離れなさいよ！」

「……ルイズ、きみは本当に彼に夢中なんだね」

「悪い?!」

可憐な見た目とは裏腹の、凶暴な敵意をむき出しにした反応にジユリオは思わず顔を引きつらせてしまった。

彼ほどの美貌の持ち主である。

男女を問わず、他人の嫉妬を目にする機会は数知れずあった。



が、しかしそれでもルイズ程の美少女があられもなく醜く激しい嫉妬を表す事など、彼の記憶には無かったのだ。そのギャップがジュリオを困惑させたのである。

「い、いや悪くは無いさ。恋する女性はすごく輝いてずっと素敵に見えるしね」

「そう？ 私は忌々しく見えるわ。まったくどいつもこいつもサイトを狙ってさ。もっと他に男はいるじゃない」

「……サイト、つてきみの恋人かい？ さっき少し話したけれど、中々優しそうな人だね」

ジュリオの問いにルイズは一旦言葉を切る。

琴線に触れたのは、“優しそうな人”というフレーズだ。

確かに、ルイズも才人は“優しい”とは常々思っていた。

すごく気が利く上、困っている人を見かけたら文字通りその身を削ってでも助けずに居られぬ程にである。

ただ問題は、何故か才人の前に現れる“困っている人”が女の子ばかりであると言う点だ。

それが並の容姿の女の子ならばまだいい。

ルイズとて、年頃の女の子である。

客観的に見て、相手の魅力が自分より遥かに劣るならば、嫉妬も長続きはしないだろう。

しかし。

しかし、である。

何故に才人の前に現れる“困っている女の子”が、美しい少女ばかりなのか。

運が良いのか悪いのかはともかく、ルイズにとっては運命の嫌がらせ以外何物でも無い事実であった。

ある者は自分より若い。

ルイズとてまだ花も恥じらう十代であり、齢を気にする年齢では

ないのだが、往々にして女性は年下の女の子に『年齢による不利』を覚えてしまう部分があるものである。（限度はあるが）

また、ある者は自分より遥かに肌が白い。

またまた、ある者は自分よりずっと胸が大きい。

つまり、何故か才人の前に現れる“困っている可愛い女の子”は、皆何かしら自分には無い強力な武器を持っているのだ。

気にするな、と言う方が無理な話であろう。

それどころか、何時先を越されるかと気が気でないルイズであった。

「……優しくなければいいって物じゃ無いわよ。そんなんだから隙だらけなの！」

「彼、そんなにモテるのかい？ そうは見えないけれど……」

「なあに？ その言い方、気になるわね。ま、確かに見てくれはアంతと違ってパッとしないけど」

「そういうつもりで言った訳じゃ無いさ！ 皆それぞれが持っている魅力なんて、一概には言えないしね！」

「どっちでもいいわ。事実、あいつはモテてるもの」

「不安なのかい？ 見たところ、彼はきみしか見ていないようだったけれど」

「それ位、私だってわかってっているわよ。……うーん、でも不安じゃ無いとも言えない所はあるのよねえ」

「はは、妬けるね。きみのような美しいレディをそんな風に悩ませるなんて、彼はなんて罪作りな男なんだ！」

「ふん、薄っぺらい事言っただけで、もっと速度を出してよ。“できる”んでしょ？」

「ふふ、了解致しました、レディ。アズーロ！」

かけ声に風竜はきゅい！ と鳴き、飛行速度が更に上がった。

速度はハルケギニア随一を誇るアルビオン竜騎士のそれよりも遙

かに速い。

“ヴィンダールヴ”の能力により風竜の力が引き出されたのだ。ジュリオの正体は才人は当然、ルイズも才人から話を聞かされ知っている。

決してその本質が悪人では無いとは言え、時に敵に回り将来は自分と才人を陥れる片棒を担ぐ事を知るルイズは、当然ながら彼に良い感情を抱いてはいなかった。

かといって、今の段階では必要以上に敵視したり彼らの存在を知っている風な態度をとることは、後々不味い事になりかねない。

おどけてみせる彼の態度は偽りで、その実中々鋭い感性を持っていることも才人より聞かされており注意する必要がある。

だからか、ルイズは才人のことをいつも以上に気に掛け、意識して嫉妬を表に出し漏れやすい豊かな感情を隠そうとしていたのだった。

……少なくとも、任務の為サウスゴータに向けて飛び立つ瞬間まではそう、思っていたルイズである。

「見えてきた。サウスゴータだ」

「できる限り街の上空を長く旋回してちょうだい。地形を頭にしっかりと入れたいの。あと街の様子も知りたいわ」

「ふうん？ 切り替えがはやいね。とりつく島も無い程怒っているかと思えばどうして、冷静な部分をちゃんと残してるんだ？ 女の子だからかな、それとも……」

「任務に私情は持ち込まないものよ。切り替え時くらい、弁えてるわ」

やけに慣れたようにキザったらしく話しかけてくるジュリオに、ルイズは少々ぶっきらぼうにそう返した。

美貌の竜騎士の声色は、キザな物言いで相手を不快にするどころかそれが当たり前のように耳に心地よく響く。

はずであつたが、本気で燃え広がり始めた嫉妬の炎には疎ましい水でしか無い。

そんな彼女にジュリオは懲りもせず、大仰に手を開いてまるでこの世の終わりのように悲しんでみせながら、謝罪を口にし始めた。

「そうなんだ。いや、きみを侮るつもりは無かつたんだ。この通り、謝るよ！」

「いいから。貴方もさっさと切り替えなさい。無駄話している暇なんて無いはずよ」

「そうだね。ルイズの言うとおりだ。流石は単騎で偵察を任されるだけあるね！」

「……私の任務が何なのか、貴方には言っていないつもりだけど？」

警戒するようなルイズの少し低めの声に、ジュリオは人差し指を一本建てて、背に居るルイズへ流し目を送りニヤリとして白い歯を剥く。

チラと見える表情は変わらず美少年のそれであつたが、悪戯っぽい笑みはどこか油断ならぬものを感じさせた。

「腕の立つ竜騎士に下される単独任務なんて、大体は偵察さ。しかも僕はアルビオンの竜騎士が味方識別につかう“ダンス”を使えるからね。アズーロ！」

ジュリオのかけ声と共に、風竜は奇妙な動きを始めた。

アルビオンの風竜だけが行う、翼を交互に振り体を揺すって伴侶を探す行為である。

「どう？ ちょっとおもしろいだろう？ これが出るのはぼくだけなんだ」

「へえ。あなたのアズーロはアルビオン産なんだ？」

「まさか！　ぼくが仕込んだのさ。それだけじゃない。任務がきみのような女の子を乗せて飛べと来ている。普通に考えれば、きみの方に“何か”あって、サウスゴータを上空から見なくてはならないって考えるのが自然だろう？」

「ふうん、顔だけってわけじゃないのね」

「ふふ、好意的に見てくれている、と受け取っていいのかな？」

「逆よ。警戒しているの。私、こう見えても王家直属の秘密機関に属しているから、あなたのような人は出来れば避けたいのよ」

「へえ！　きみはとても凄いいメイジなんだね！　でも、変だな。口サイズで見たきみに接する士官達は、まるできみ自身が強力な兵器か何かのように見ている節があつたけれど？」

「よく見ているのね。でも、好奇心は身を滅ぼすわよ？」

「安心しておくれ！　ぼくはルイズの“味方”さ！　自分の事ばかり考える將軍達と違って、利用したり、陥れようとはこれっぽっちも考えちゃいないよ！」

「ウソおっしやい。貴方だって、なにか隠し事をしていそうだし。」

大体私、軽薄な言葉を吐く男の人はキライなの」

「これは参った！　きみのような、妖精みたいに可憐な女の子に嫌われたら、ぼくは一体どうしたら良いんだ！」

ジュリオは先程と同じように、手を自身の胸と天に向け掲げながら芝居がかつた仕草で悲しみを露わにした。

それが様になって見える美貌は息を飲むほどである事を除けば、中身はギーシュがよくやるアレと大差なく、痛々しい程にキザったらしい行動である。

冷静に見れば、頭の中身は案外カラではなからうかという印象を抱きそうになる雰囲気ではあつたが。

しかしルイズにとっては、油断のならない相手である事に間違いは無い。

才人以外の男の背にしがみついている罪悪感と共に、先程から意

図的に冷たくあしらっていてもこの反応である。

余程の自惚れ屋であるのか、それとも計算しての態度なのかは、  
真実を知るルイズにはどちらであるかは直ぐにわかっていた。

互いに自分を偽りながら接するなんて、まるで茶番ね。

またも出しかけた言葉を呑みながら、ルイズは少しでも気が紛れるよう話題を才人の物へと変えることにした。

「何をしたらいいのかわからないなら、黙って言うとおりに飛ぶか、  
サイトみたいに何か気を利かせる事ね」

「はは、きみは本当にサイト君に夢中なんだね！ 帰ったらどうすればきみのような綺麗な女の子の心をそこまで掴めるのか、尋ねるとしよう！」

「……ね、良いことを一つ教えてあげる」

「ん？ なんだい？ 女神様はこの迷える子羊にどんな導きの手を差し伸べてくれるのかな？」

「もし、私を“思い通り”にしたかったら、最低でもサイトより強くないとダメよ」

「ルイズは強い男が好みなんだ？」

「ヒゲも生えてたら完璧だけどね。……そうね、もし、あんたがサイトよりも強かったら、その軽薄なおしゃべりも、沢山隠し事することも全部ひっくり返して受け入れてあげるわ」

「いいのかい？ そんな約束をして。ぼくはこう見えて腕っ節は結構な物なんだよ？」

「かまわないわ。“そうなる”ことはあり得ないと思うから」

「随分な自信だね！ サイト君には悪いけど、戻ったらきみを掛けて決闘でも申し込むのも悪く無いのかも知れないね！」

「ええ。 さあ、そろそろサウスゴータ上空みたいだし、任務に集中しましょ」

どうせ任務から戻った時には私の自信の理由がわかるでしょ

うし。

心の中でそう付け足して、ルイズは眼下に広がるサウスゴータの街を見やった。

それから羊皮紙のノートを取り出し、おもむろに情報を書き込み始める。

上空から見る街はやけにオーク鬼やオグル鬼といった亜人の姿が多く見られた。

どうやら才人が言っていたように、“前”と同じくレコン・キスタには亜人となんらかの形で交渉し軍の戦力としている者が存在するらしい。

ただ、その数は想像していたよりも遥かに多く、来るサウスゴータ攻略には大きな障害となりそうだと戦の素人であるルイズでさえ思えるほど、至る所で彼らの姿が見受けられた。

だがしかし。

人間よりも圧倒的に強力な亜人の軍隊を目にして、ルイズは不思議と安堵を覚えた。

自軍の不利には間違いないが、かなりの数の敵軍が人でないという事実は幸運であると思えたからだ。

なぜならば、相手が人で無いのなら それはつまり才人がなんの躊躇も無く存分に暴れられることを意味していたからである。

彼女が誰よりも知る才人は、確かに“優しい”。

勿論、必要があれば人を斬ることに躊躇したりはしまいが、反対に必要が無ければ たとえ自分が傷つこうとも極力他人を傷つけないとするのが彼女の知る才人でもある。

優しすぎるのも考え物かもね

ルイズはそう考えて、ふと先程同じく才人を“優しい”と評したジュリオの言葉を思い出してしまった。

君は本当に彼に夢中なんだね。

今更ながらに認識したそれは、知らず彼女の頬をうっすら朱に染めた。

よくよく考えてみれば、ここの所……いや、才人を恋人とハツキリ認識した頃からか。

自分の態度はジュリオの言うとおり、“夢中”と見られても仕方無いものである。

いや、事実そうなのだ。

どうしようも無いほど才人のことが好きであるし、それ故に激しい嫉妬の炎で己を焦がし続けているのだ。

想いは日々果ても無く膨らみ続け、どうにかかなりそうな時だって少なくない。

それはあの日、初めて才人を見た日にあって想像だにできなかった気持ちだ。

事實は少し複雑であるとはいえ、大貴族の令嬢と平民の少年がそのような関係になるなど、だれが想像出来ようか。

あまつさえ、己がこれ程無様に嫉妬を露わにするようになるとは。

「いやだわ、私……」

呟きは誰の耳に入ること無く、空を切る音に掃き消えた。

戦場での大事な任務の最中、自分は一体何を考えているのだろうか。今の自分の姿を見る者が居れば、如何にはしたなく映るのだろうか。

想像してルイズは甘い感情を散らすべく、何時の間にか上気した顔のままぎゅっと目を瞑った時である。

「……どうやら、時間切れのようだね」

「え?! もう? あなた、アルビオンの竜騎士に偽装できるんじゃないの?」

「敵に見つかったようだ」

言葉と共にジュリオは右手をまっすぐ前に差し出した。



ルイズが彼の肩越しに前を覗くと、遠目に竜騎士が多数見える。数は九騎。

それが菱形のような編隊を組んで整然とこちらに近寄ってきていた。

「逃げて！」

「む、このままでは無理っばいな。少々おしゃべりに夢中になっていたようだ」

「じゃあ、突破ね」

「はは、簡単に言うね！」

「出来るんでしょう？ “あなたなら”」

「その通りだ！ きみは本当に凄いな！ 感情と理性が別々に働いていて、理性の部分は本当に冷静だね！」

「違うわよ。ただ私は……辞めましょ。今はおしゃべりをする時じゃないでしょう？」

「それもそうだ！ ルイズ、乗馬は得意かい？」

「ええ」

「じゃあしつかりつかまって！ ギャロップで柵や植え込みを飛び越える時みたいだね！ アスーロ！」

風竜はきゅい！ とジュリオの声に応じ、猛烈な速度を出して竜騎士の編隊に突っ込んで行く。

瞬く間に敵陣のど真ん中に入り込んだ二人に、四方から魔法が飛んだ。

火の矢に氷の槍、風の鎚に不可視の刃と様々だったが、どれも一撃必殺の威力を持っている。

だが、風竜は大きな飛竜とは思えぬ動きで魔法を次々と避けて、敵竜騎士達の度肝を抜いた。

更に驚愕で一瞬動きが鈍った所へ、およそ風竜とは思えぬ程巨大なブレスを飛ばす。

ブレスは一騎の竜騎士に当たり、騎乗していた飛竜ごと地面へと落ちていった。

更にはあわや接触かと思われるほど接近していた他の竜騎士が駆る飛竜に、すれ違いざま鋭い爪で翼を裂いて地に墜として、あつという間に二騎撃墜してみせたのである。

これには流石のルイズも驚きを隠せなかった。

才人から聞いていたとはいえ、実際に風竜の能力を遥かに超えた力を引き出す姿は想像以上であったからだ。

やがて、それ程時を経ずしてジュリオは敵の竜騎士は一騎残らず撃墜し、二人は悠然と帰路に就いたのである。

「さあ、早く帰ろうか」

「すごい……竜がこんな動きをする生き物だったなんて……」

「いや、これが竜の本来の能力だよ。ぼくはその能力を引き出してやっただけさ。みんな、竜に無駄な動きをさせすぎているんだ」

「……あなたがメイジでもないのに第三中隊の隊長をしている理由、よくわかったわ」

「ふふ、光栄だね。これで少しは信頼してもらえるようになったかな？ さあ、あの白く美しい貴婦人のようなフネに戻ろう！ いろんな方法を使うつもりかはしないけれど、単艦で出城を攻略するなんて普通に考えれば無茶も良い所だしね。助けにいかなきや！」

「心配ないわ」

「どうしてだい？」

「だって……」

しかし、ルイズはそこで言葉を止め、なんでもないと言い換えてしまった。

いくら言葉で説明しても恐らくは信じられぬであろうし、あえて才人の脅威をこの場で教えてやる事も無いからだ。

それに“麗しのアンリエッタ”号まで戻れば否応なく、心配ない

と言った理由がわかるであろう。

そして“それ”を目にした瞬間の驚愕は、間違いなく先程自分がジュリオに抱いた驚愕とは比べものにはならぬのだ。

ルイズは飲み込んだ言葉を反芻しながら、その時のジュリオの表情を想像してつい薄く笑ってしまった。

果たして、単艦でウオリクサー城攻略に乗り出している筈の“麗しのアンリエッタ”号に戻った二人が見た物は。

瓦礫の山と化したウオリクサー城と、既に終結した戦場の傷跡に浮かぶ美姫であったのだ。

ウインの月第三週であるエオローの週はラーグの曜日。

連合軍がアルビオン浮遊大陸に上陸してより十五日目のこの日、シテイ・オブ・サウスゴータ攻略戦が始まった。

古都であるシテイ・オブ・サウスゴータは小高い丘の上を利用して作られた城砦都市で、外周部には円形に城壁を張り巡らされ、その内部には五芒星を象るように大通りが造られている。

始祖ブリミルがアルビオンに足を運んだ折、初めて築いた都市であるという伝説が残っている街であるが、真偽の程は定かでは無い。綺麗に描いている五芒星の大通りを一歩外れると、迷路のように裏通りが張り巡らされている当たり、少なくとも古代より都市建設に明るい領主には恵まれてはいないようだ。

そんなシテイ・オブ・サウスゴータは朝靄の中、殺気が立ちこめる空気に震える。

その様はあと数刻で戦場となってしまう事を知っているかのよう  
に、日の出を待ち続けていた。

だがすでに息吹いた戦場は、いまだサウスゴータには至っていない。  
ない。

まだ日が昇りきらぬ早朝、サウスゴータの南城門より二リーグほど離れた街道上。

連合軍の先鋒を務めるボーヴォール大隊は、打って出てきた敵  
オーク鬼とトルル鬼の大隊と遭遇戦を開始していたのである。

“以前”ではこのような事は無く、才人の予定通りに事が運ぶなら  
ばアルビオン軍はサウスゴータの街に籠城して居なければならな

い。

だが“今回”は才人が防衛拠点であるウォリクサー城を破壊した為、多少の戦術の変更があったらしい。

つまりアルビオン軍の指揮官に、籠城する前に進軍してくる連合軍の先陣に強力な一撃を加え、動揺を誘おうという意図が働いたのである。

またサウスゴータ周辺の気候もその作戦を後押ししていた。

サウスゴータ周辺では朝に雲が上がってくるが多く、早朝には視界が悪くなることが多い。

その機に乗じて、数では劣るサウスゴータ駐留軍は連合軍に対し強襲を仕掛けようというのだ。

果たして敵軍の狙いは成功し、遭遇戦の序盤ではサウスゴータ駐留のアルビオン軍有利に展開していた。

連合軍としてはこの強襲は予想だにしていなかったらしく戦線は混乱気味に伸びており、またアルビオン軍が濃い朝雲を利用し速やかに連合軍に肉薄した為、上空の戦列艦による支援が行えなかった事も一因と言えよう。

その為前線となった部隊は強力なオーク鬼とトルル鬼の攻撃に無防備に晒され、一時は戦線が瓦解してしまい、予想以上に連合軍は苦戦するかと思われた。

「シモン！ イーヴ！ くそ、どこだ！ このままじゃ」

「軍曹殿！ このっ、う、うわあ！」

「死ぬなジャン！一緒にトリスタニアに帰るって約束したじゃないか！」

「いやあ！ 誰か！ もう魔法が……」

「くそ！ もう矢が無い！ だれか！ だれか矢を持って」

最前線となったボーヴォール大隊の、更に最も前列で戦う数ある部隊の一つ。

ミレイユ中隊は凶暴なオーク鬼とトルル鬼の猛攻を受け、メイジの士官を始めとした兵達は善戦虚しく次々と命を落としていた。人よりもはるかに体が大きく、力も比べものにならない亜人の攻撃は凄惨の一言に尽きる。

振るう巨大なメイスの直撃を受け体がぐちゃぐちゃになってしま  
う者。

無残にも槍に串刺しにされたまま次の犠牲者が加わるまで、武器の一部として振り回される者。

激しく戦い、ついには捕らえられ生きたまま四肢をもがれる者。

数こそ少ないが女性の軍人が居た場合、時には生きたまま攫われ慰み者にされたりもする。

長年に渡り人と対立してきた亜人達にとって、人間など家畜や憎むべき害虫程度の認識でしかないのだ。

そんな亜人達の慈悲無き攻撃は、人間への憎悪に塗られ、見る者には恐怖を与えながらまるで嵐のように押し寄せて中隊を蹂躪していた。

「ミレイユ中隊長！　すぐに後退してください！　わが隊はこれ以上戦線を維持できません！」

「オーク鬼ごときになんですか！　ここは堪えて隊を立て直すよう、各小隊の隊長に　」

中隊を預かるミレイユ陸軍大尉が、魔法を詠唱する手を止めて戦況の不利を報告してきた副官に叱咤した時だ。

なんとかメイジを軸に部隊を立て直すべく指示を出そうとしたその時、ゴツと風を斬って巨大なナニカがミレイユ中隊長の脇を通り過ぎた。

同時に三十路も手前程の才女でもある、彼女の白い頬と知的な眼鏡にピチャリと赤い血しぶきが貼りつく。

血は先程までミレイユ中隊長に報告を行って居た副官の者で、彼

は憐れにも頭が跡形も無く吹き飛び、噴水のような血しぶきを上げ倒れてしまったのである。

その向こうにはトロール鬼がまるで攻城兵器のような巨大なボウガンを構え、グググ、と低く唸るように笑い次の矢をつがえる姿が見えた。

更にはトロール鬼の足下からは十数名程のオーク鬼達が地から溢れるようにして飛び出していった。

獣面の亜人達は歪な武器を手に周辺に残る兵達を蹴散らし、真つ直ぐにミレイユ中隊長の所まで猛進してくる。

ひっ、誰か！

思わず叫ぼうとするが声は出ない。

彼女は声を出す瞬間、周辺を一度見渡し直ぐに誰も いや皆既に殺されてしまったのだと認識できて、じわり絶望に顔を歪めたからだ。

だが、彼女とて軍人である。

恐怖にすぐむ心とは裏腹に、体は気丈にも杖をかけた彼女が得意とする風の魔法をオーク鬼の群れに放とうとした。

瞬間、再びゴツ、とおぞましい風切り音が彼女の頭上を通過する。慌てて見上げると運の悪いことに、魔法を唱える為に掲げていた杖がポキリと折れているではないか。

どうやらあのトロール鬼が放った巨大なボウガンの矢が直撃したらしい。

小賢しいことにあの亜人の軍は、メイジなどの強力な兵に対しては後方からトロール鬼の放つ巨大なボウガンによる矢で牽制し、一般の兵に対しては人間よりも遙かにどう猛で強力なオーク鬼らが蹂躪して回る戦法をとっているようだ。

先の矢がミレイユ中隊長に当たらず杖に当たったのは、偶々か、それとも捕らえてたつぷりと陵辱する為かまではわからない。

が、確かなことは彼女にはそれ以上、戦う武器がないと言う事である。

周囲の兵は先程確認したとおり、既に皆後方に下がったかオーク鬼に殺されてしまったらしい。

立ちすくむミレイユ中隊長をみてオーク鬼らが醜く笑い、ゆっくりと輪になり近寄って来た。

くそ。せめて、杖さえあれば。

ミレイユ中隊長は絶望にうちひしがれながらも軍人らしくそうこちて、せめて自害できるよう足下に倒れる副官の装備を物色しようとした時である。

三度、彼女の耳元をゴオ、とナニカが風を斬り裂いて通過した。ただし今度は前から無く、後からである。

「わう！ な、なんだ?!」

今度の“風”は先の二つとは比べものにならなかった。

恐ろしい風斬り音の後、轟音と共にやって来た吹き戻しに思わず目を瞑る瞬間。

彼女は木の葉のように散り散りに吹き飛ぶ敵の姿を確かに見て、僅かな混乱と安堵を覚えたのである。

援軍か？ 味方の魔法か？！

覚えた小さな混乱の中冷静にそう判断しつつ、再び目を開いたミレイユ中隊長は

「これは」

言葉を失い、更なる混乱を抱え込んでしまう。

何せ先程まで眼前に迫っていたオーク鬼の群れと巨大ボウガンを携えたトール鬼が、綺麗に視界から消えてしまっていたのだ。

一体、いかなる魔法を行使したのか。

部下達と共に辺りに散乱する亜人達の死骸を確認するに、どうやら強力な風の魔法か何かでまとめて引き裂いたらしい。



混乱の最中に彼女はやっと我を取り戻した時、何時の間にそこにいたのか前方にただ一人立つ人物に気が付いた。

黒髪のその者は剣士であるらしく、左手に長剣を携え腰程もあるハーフマントを僅かにはためかせている。

後ろから見る黒髪の剣士のマントは確かに貴族の物であったが、出で立ちが傭兵のようであり手にしていた長大な剣からメイジで無いとすぐにわかった。

「大丈夫か？」

「え？ あ、ああ。私の部隊の者はみなやられてしまったが……」

「そっか……くそ、殿下を先陣に加えるよう、もっと強くルイズに訴えて貰えば良かったぜ」

忌々しそうに剣士はミレイユ中隊長に背を向けたままそうごちて、おもむろに地に空いた右手を着いてみせる。

不思議な事に次の瞬間、その手の中には長大な槍が現れてミレイユ中隊長を大いに驚かせた。

黒髪の剣士が呪文を唱えた節はない。

となれば、それは先住の魔法と言うことになる。

だが、目の前の少年はどう見てもエルフなどでは無く

もしかしてなにか特別な魔具を使ったのだろうか？

メイジでも無い彼が？

右手に現れた槍と、長剣を握る光る左手に目と思考を奪われてしまったミレイユ中隊長は、ふと彼が羽織る黒いハーフマントに刺繍された、アルビオン王家の紋章に気が付きはつとした。

ここ数日軍内で噂になっていた、連合軍に合流した王党派の“黒騎士”の話思い出したからだ。

曰く、上陸作戦の折、只一隻、只一人で敵戦列艦を数十も沈めたという噂。

曰く、先日進軍に先立って工作部隊のゴーレム隊が先行したのは、

“黒騎士”により灰燼と化したウオリクサー城の瓦礫を片付け、軍が通過出来るようにする為であったという噂。

たしか、彼の名は

「君は……もしや噂の“アルビオンの黒騎士”ことサイトーン卿か？」

「違う！ 頼むからその恥ずかしい呼び名は辞めてくれ！」

「え？ ちがうのか？ でもそのマントの刺繍……ほら、アルビオン王家の紋章の横に刺繍された、奇妙な魔方陣は“アルビオンの黒騎士”の力を増幅する王家の秘術なのだろう？」

「だから違うって！ これはルイズが刺繍してくれたトリスティン王家とヴァリエール家のだな、て、今俺の噂はそんな事になってんのか？！」

「？ 違うのか？ ま、とにかく助かったよ。ありがとう。私は」

そこでミレイユ中隊長の言葉を途切れさせたのは、寄せてくる亜人の軍勢であった。

先程の一撃で先陣を退けたものの、敵はまだまだ後方に無数に存在するのだ。

亜人達は仲間の血を見て猛り、瞬く間に剣士とミレイユ中隊長を取り囲んでしまった。

だめだ！

いくらなんでも、彼一人であんな数、一度に相手にするなんて無理だ！

ここは一旦どうにかして引いて……

そう言いかけた時、ミレイユ中隊長は黒髪 of 剣士の異変に気が付いた。

先程から激しく輝いていた彼の左手が更に激しく輝き始め、やがて光は禍々しい赤へと変わっていく。

「ここは俺が引き受ける。あなたは後方に下がってて」

「お、おい?!」

「……ごめん、間に合わなくて。その、やっぱり命令違反でも前に居るべきだったよ、俺」

「何を……きゃあ!」

思わず上げた悲鳴は、突如黒髪の剣士の足下が爆ぜたからである。ミレイユ中隊長は思わず腕を翳して顔を隠しながら、一瞬敵軍の砲撃が着弾したのだと勘違いするもすぐに亜人の軍勢は野砲など使わぬ事を思い出した。

敵の砲撃で無いならば一体？

恐る恐る目を開いたミレイユ中隊長が見た物とは。

「な……ばかな……」

眼前に広がる光景は、まるで出来の悪い夢のよう。

二メートルもあり人の五倍も体重があるはずのオーク鬼が、血しぶきを上げ落ち葉の様に宙に舞っていたのである。

いや、オーク鬼だけではない。

オーク鬼の二倍はあろうかという巨躯を誇るトルル鬼すら、天高く舞って文字通り血と肉の雨を降らせていたので。

それも、彼らはただ何かの力によって弾かれ宙に舞っているのではない。

ある者は胸を両断され、またある者は四肢を引きちぎられながら、またあるものは大砲の直撃を受けたようにバラバラになりながら吹き飛んでいたのである。

何という力の奔流であろうか。

ミレイユ中隊長は戦慄し、何が起きているのかわからぬまま呆然と立ち竦んで、その力の正体を探し始めた。

まるで地獄の顕現のような光景を作り出すそれは、果たしてすぐに見つかる。

亜人の軍勢を切り裂いているのは、先程目にしたあの赤く禍々しい光が暴力の渦を作り出していったのだ。

視認できなかったが恐らく、あの黒髪の剣士が眼前の地獄絵図を作り出しているのだろう。

「これは、何という……」

呟いて、ミレイユ中隊長はあることに気が付く。

あれ程居た後方の亜人達までもが、一人残らず消え去っていたのである。

信じられないことに、この短時間の間で敵の亜人部隊を全滅させてしまったらしい。

何時の間にかあの禍々しい赤い光も見えなくなっている。

眼前には無残に横たわる部下の死体と、それ以上に無残に引き裂かれた亜人達の死体が転がって生きて居る者はミレイユ中隊長一人となっていた。

つい先程まで、杖を失い死を覚悟していたというのに。

あの黒髪の剣士が現れてより、時間にして数分であろうか。

どうやらあの剣士はここへは戻らず他の部隊の救援の為、既に戦線を移動してしまったようだ。

只一人その場に残ったのはミレイユ中隊長は茫として、そのあまりに凄絶な戦いぶりにいまだ熱を帯びたような興奮と衝撃に支配されながらぼそりと呟く。

「あれが……“アルビオンの黒騎士”……」

声は震えており、それが恐怖の為なのか、それとも人智を越えた力への憧憬なのかはわからない。

だがこの時、彼女はその光景が間違いなく一生忘れられぬ物となるだろうと予感して、思わずその場に膝をついてしまった。

今更ながらに、それが自分にとって初めての实战であったと思いだしたからだ。

やがていまだ副官の血がへばりつく頬に、涙が伝い始めた。

生き残った事に対する安堵や部下達を全滅させてしまった無念さが、先程の剣士の戦いぶりを見た興奮と溶け合い、激しい渦となって彼女の全身を揺さぶる。

激しい感情の渦は次々と涙を溢れさせ、ミレイユ中隊長の心をぐちゃぐちゃにして声を上げさせた。

戦場はそんな彼女の泣き声を糧に成長し、やがては古都サウスゴータへと到達するのである。

古都シティ・オブ・サウスゴータ攻略戦は、異様な雰囲気の中で進んでゆく。

朝日と共に連合軍兵士達が目にしたモノは、まるでお伽話のような光景であった。

サウスゴータの城壁と攻城戦の為の陣を組む連合軍の間には、約一リーグ程の距離が横たわる。

昨夜に連合軍の戦列艦による砲撃を行った為か、城壁は所々が崩れかけており今もあちこちから黒煙が上がっていた。

城壁に設えられた大砲を潰す為の砲撃であったのだが、サウスゴータの街には未だ市民が暮らしている為、大々的な砲撃を行う訳にはいかなかった結果である。

そんな城壁と連合軍の陣の間に、たった一人でぽつんと立つ者がいた。

連合軍の先陣から城壁側に約三百メートル程の位置に立つその者は、黒髪の若い剣士。

うつすらと光る左手に片刃の長剣を携え、右手には槍を持ち、何処から持って来たのか同じような槍が彼の周囲の地面にいくつも突き立っている。

端から見れば連合軍側の作戦か何かだろうと皆思うであろう。

しかしそれも連合軍側から高級士官らしき人物が彼に向かって、早く陣に戻るよう叫んでいる事から、彼自身の意志によりそこに立っていると伺えた。

遠く少年と対峙する城壁の上には、大小の巨人達が無数に立ち並

び、人では扱うどころか、持ち上げることさえ困難な巨大ボウガンを構えて連合軍の攻撃に備えている。

「もどれ“盾”<sup>バックラー</sup>！ 君は重大な命令違反を犯している！」

士官の叫び声は朝の空気によく通った。

艦隊戦で消耗したとはいえ、ここまでほぼ無傷であった連合軍六万の兵達は誰一人として言葉を発せず、固唾を呑んで成り行きを見守っていた。

なぜならば、“盾”<sup>バックラー</sup>と呼ばれた少年の事を皆既に知っていたからだ。

只一人で敵の艦隊を打ち落とし、障害となる城を破壊する力を持つ者。

魔法も使えないただの平民の出自でありながら、メイジですら肩を並べられぬ程の功績を上げた者。

つい数刻前も後方にて待機するようにといい命を無視して、自分達の為に前へ出て来て戦い、多くの戦友の命を救った者。

そう、彼は間違いなくこの戦において英雄と呼ばれる者であろう。英雄は合流したアルビオン軍に所属し、軍内では“黒騎士”<sup>バックラー</sup>と呼ばれているようであるが、トリステイン軍人からは“盾”<sup>バックラー</sup>とも呼ばれたりもしているようで、その正体は不明である。

そんな彼が何故サウスゴータ攻略戦では後方での待機を命じられていたのか。

兵達の間流れている噂では、先の艦隊戦やウオリクサー城での戦いで“王党派”に属する彼が只一人大きすぎる戦功を上げ続けたものだから、“戦後”を想う幕僚達が自分達の手柄を確保する為、皇太子に圧力を掛けて彼を後方待機にしていた、というものであった。

事実、本来は皇太子が率いる兵は遊軍として扱われ、その身分はトリステイン女王アンリエッタによって保証されていたはずである。

よつて総司令官であつてもこれに圧力など掛けられないはずではあつたが、実際の所“王党派”の軍はいくら強力であつても寡兵であり、占領や補給といった任務はどうしても連合軍に頼らざるを得ない事情もある。

そこに“交渉”の余地があつた為、連合軍司令部は“トリステインの虚無”の一時返還と“黒騎士”の後方待機を勝ち取つていたのだつた。

しかし、連合軍司令部はこの“交渉”の結果、いくつかのミスを犯してしまつた。

一つは“黒騎士”こと平賀才人が、彼らの切り札である“虚無”の使い魔であることを知り得ず、トリステイン人であると主張しなかつた事。

もう一つは才人の人となりをかが平民の出であると目を曇らせ、見誤つた事であつた。

兵士達が命を散らす戦場に、司令部が己の立場や功名を考えた政を持ち込んでいるのは誰の目からも明らかである。

そんな命令に対して、才人がとつた行動は。

「はっ！ 相棒、あいつらとつて付けたかのように相棒のことを“盾”<sup>バックラ</sup>って呼び始めたな！ よほど、相棒が嬢ちゃんの使い魔だつて事を見逃したのが惜しいらしいや！」

「俺としては“黒騎士”よりかはマシなんだけどな」

「いいじゃねえか。“神の左手”、“神の盾”、“我らの剣”と豪勢なもんだ」

「その上“アルビオンの黒騎士”だぞ？ 恥ずかしいつたらねえよ」

「ははは、ちげえねえ！ でもよ、嬢ちゃんは満更でもないようだつたぜ？ 鼻歌交じりに相棒が羽織つてるマントによなべして“魔法陣”を縫い込んでたし」

「ルイズの前じゃ言うなよ？ 気にしてるんだから。宥めるのも大変なんだぜ」



「わはは、とつと押し倒さねえからだよ、相棒！」

「そ、それがどうしてそうなるんだよ！」

「そりやおめ、相棒がいつまでたつてもイッパツがつんとヤんないから、嬢ちゃんも色々溜め込みまうんだよ。結果、癩癩も酷くなる」

才人は六万の視線と一人の士官の怒声に晒されながら、彼らに背を向けたままじつと城壁の方を睨み、デルフリンガーの言葉に口をへの字に結んだ。

ルイズの事をよく知る彼にとつて、デルフリンガーの指摘は遠からず真実であると理解出来ていたからだ。

ただし、ヤつたらヤつたで宥めやすくなるかわりに、嫉妬も更に酷くなる事も知る才人でもある。

「押し倒したいのは山々なんだけど、なまじ何時でもオツケー！な空気だとやり辛いもんなんだぞ？ まあ、タバサの母親の事もあるんだけど」

「何いつてんだ相棒。もう随分と相棒の言う未来つてのが変わってるんじゃないのか？」

「いや。まだ、大筋じゃそうは変わってないよ」

「そうなのか？ まあ、俺にはどっちでもいいや。しかしなあ、相棒。だつたら尚のこと、目立つような真似はしない方がいいんじゃないかねえのか？ “前”はこんな、派手に注目を浴びたりはしなかったんだろ？」

デルフリンガーの言い分はもつともであった。

才人としてはタバサの母親の救出にどんなイレギュラーが発生するかわからない為、あまり先の未来を変えたくは無き事情がある。

又、そもそも“今回”はルイズ只一人を愛する為に戻って来ており、その際、妻であったルイズから迂闊に歴史を大きく変えたとそ

の流れからはじき出されてしまいかも知れない、と警告されていた経緯もあった。

その為、ルイズを愛し他の女性と関係を持たないようにする事以外は全て“前回”と同じ歴史が紡がれるよう、一時はウェールズの死すら容認しようと決心していた才人だったのだが。

「……そっぴや“前”にデルフに話した時も、こんな感じの状況だったな」

「あん？ なにがだ？」

「いやな。俺、前に……そう、ずっと前にさ。破落戸に絡まれているお婆さんを見たことがあって。その時、見て見ぬフリをしたんだ」

「ふむ？」

「そんな時は何の力も無いガキの頃でさ。自分に『力があれば』って思いつつも、ホっとしててさ」

「そりやお前さん、相手は大人だろう？ ガキに何ができるんだってんだ。いや、大人であっても、力がなけりやその婆さんの代わりにブツ殺されるかも知れねえ。見て見ぬフリしたって責められやしねえよ」

「ああ。だけどな？ 今の俺は力がある。なんたって“ガンダールヴ”だ。言い訳は出来ねえ」

「まあ、な」

「だけど“前”の時は俺、力だけあっても怖くてさ。まあ、状況もずっと悪くて今とは違うんだけど。柄に無く誰かを ルイズを守る為に覚悟もしないまま、震えながら命を投げ出したりしてさ」

「相棒はてんで義理がてえからな。その話も俺は信じるぜ？」

「ありがとよ。で、だ。“今”はこの通り、力がある。死ぬ心配が無い位に“前”よりもずっと強い力だ」

「まあな」

「心も強くなつたし、こっちの世界の事だって“前”の時とは違大大分理解出来る」

「だな。それで、そいつがどうしたってんだい？」

「けどなあ、デルフ。俺、やっぱり柄じゃねえ。“同じ”ような流れにしようと欲張っても、やっぱり目の前で殺されそうな奴が居れば助けてしまうし、手の届く所でドンパチ戦争をやられたら味方にも、敵にだってなるべく死なれたくねえよ」

「相棒は甘えからなあ」

「そりゃ、俺だってこんな綺麗事を言えるような人間じゃ無いさ。手だって血まみれだ。けどさ」

才人はそこで一旦言葉を切り、右手の槍を握りしめた。

強く握りしめたからか、左手のルーンが更に強く輝き始める。

いや、握りしめたからで無く、才人の心が強く震えて居る為か。

槍は馬上槍であり、円錐状の槍身はかなり長い。

その槍を才人はゆっくりと構え、徐に遙か彼方にそびえるサウスゴータの南城門に向けて投擲した。

手から槍が離れた瞬間、槍を中心に雲で出来た輪が幾重にも広がって、後を追うように耳をつんざくような凄まじい音が轟く。

遠目には水面に小石を投げ入れたかのような綺麗な波紋に見えたであろう。

やがて一拍置き、恐ろしい速度で飛んだ槍は正確にサウスゴータの巨大な南城門に命中し、派手に爆砕したのであった。

その様はまるで砂山を蹴飛ばしたかのようなあっけなさで、僅かな静寂が戻ったのもつかの間、背後の六万の兵達が一斉に歓声をあげた。

会話もままならぬ程の六万の歓声を背にしながらも、才人は元の調子のまま、デルフリンガーに再び語りかけるのである。

「……だけど、俺が精一杯暴れてそれで片が付くなら……俺一人が派手に汚れてそれで済むのならきつと、俺は戦うべきなんだ。なんたって俺にはそれだけの力を持つちまつてるからな」

「割にあわねえ性分だな、相棒。損すぎる」  
「まったくだ、デルフ。俺もそう思う」

才人はそう言いながら苦笑を浮かべ、脇に突き立てた槍を一つ取った。

城壁を守る敵に得体の知れない剣士の脅威がハッキリ伝わった為か、城壁の上から無数の矢が才人が射掛けられて、既にそこかしこに巨大な矢が突き立ち始めている。

矢は大小、才人が立つ位置まで届く届かないなど考慮されてはならず、かなり城門に近い場所にまで突き立っていた。

やがて時をそれほど置かず、地に突き立つ矢が大地を覆いまるで藪のようになってきている事から、城門を守る亜人の部隊は恐慌に陥っていることが伺えた。

その矢が突如、凄まじい強風になぎ倒されて木の葉のように宙に舞う。

追隨する爆音は、才人が槍を再び投擲した事を示してやはり一拍置き、城壁の一部が吹き飛ぶ光景を作り出した。

そして背後の歓声は更に熱狂的な物へと変わって行く。

才人に後方へ戻るよう説得に当たっていたトリストイン軍の士官も、兵達に混じり熱気にあてたれたように杖を振り上げ英雄を讃えていた。

対照的に才人は興奮とは対極の位置に気持ち静め、心の底に意識を集中させた。

繋がるのは、司令部の命令により予めサウスゴータに潜入している彼の主の心である。

「ルイズ、そっちはどうだ？ 大丈夫か？」

「うん。サイトの攻撃に気を取られて、路地の警備どころじゃ無くなってるし大丈夫よ。 あっ！」

「ルイズ?!」

「うん、違う。大丈夫よ。サイト、敵の司令部の位置がわかったわ。大通りに面した大きな古い宿を使っているみたい。そこだけ人間のメイジが入りしてるから、多分間違いないわ」

「場所、わかるか？」

「えと、南門から北門の方へ大通りを進んで、東西の大通りと交差する所の角。その近辺だけ亜人じゃなくて人が警備してるからわかりやすいわ」

「わかった。じゃあ、その建物の中で合流しよう。“今からまっすぐ、そこまで行くよ”。それまで無茶はするなよ？」

「うん。サイトもね」

「相棒？」

表面上は黙り込む才人にデルフリンガーが声をかけた。

才人は何でも無い、と返してまだ脇に幾つも突き立つ槍を掴み、立て続けにすべて投擲する。

六万の歓声を轟音が打ち消し、槍は正確にすべて強力なボウガンを扱うトルル鬼へと命中し城壁の一部ごと粉碎した。

やがて予め作り出していた槍を全て投擲し終えた才人は、デルフリンガーを強く握り一度空を斬りつける。

長剣はまるで木の枝のように軽やかに振るわれ、切っ先からはピウと音が鳴って朝日に剣閃が煌めく。

「いくぞ、デルフ。街の中じゃ槍を使うわけにはいかないからな、頼りにしてるぜ」

「ふん、やっと俺様の出番かよ」

「とっておきつてのは勿体ぶって出すもんだろ？」

「へっ、調子の良いもんだぜ。……なあ、相棒？」

「うん？」

先程までの才人の話に何か感想があるのか、デルフリンガーは拗

ねたような口調を突如変えた。

愚痴が良い足りない、というわけではないらしい。

才人は左手を輝かせたまま、今にも地を蹴らんと足に力を溜めたまま愛剣の言葉を待つ。

「まあなんだ、どうせならかつこつけな相棒」

それは、デルフリンガーがいつか死を覚悟した才人に言った言葉であつた。

思い出深い言葉は不思議と才人の心を激しく揺さぶる。

懐かしさとともにかつての勇気を思い起こした老人は、ふと今の自分はその時のような勇気を今も同じように持ち合わせているのであろうか、と自問した。

あの時。

七万の敵軍に単騎で挑んだあの時。

間違いなく死ぬであろうあの状況で、しかし己はその命を投げ出して戦うことが出来た。

今はどうか。

今ならば敵が幾らいようと、死ぬ事は無い。

力だつて当時よりもずっと強くなっている。

では勇気は？

心はどうであろうか。

才人は当時の自分を振り返り、名誉の為に命を投げ出すことを否定しておいて、ルイズの為、己の信念の為に命を投げ出した自身の心を尊い物であつたと確信している。

しかし、今の自分が抱えている勇気はどこか、それとは違う物であると思えた。

そっか。

違うのは、勇気の向かう先だ。

俺は今、あの時のように想いを貫く為に勇気を出しているんじゃない

無くて、覚悟を貫く為に勇気を振り絞る必要があるんだ。

それは“前”とは比べものにならない程、己が血で汚れてしまうことを意味する。

なぜならば、“前”のように成り行きで戦争に駆り出されるのではなく、自ら進んでその中に入っていく事を選んだのだから。

自問に答えを得た才人は、デルFRINGERにかつてと同じように尋ねた。

デルFRINGERの答えはわかっていたが、どうしてもその言葉をもう一度聞いてみたくなったからだ。

新たな勇気を絞り出す為に。

「なんで？」

「もったいねえだろ」

言葉は“前”と同じように、英雄の背を押すのであった。

7-32: extra episode / 美姫は空を征き、英雄は地を逝く(前)

本エピソードで何気に100万文字突破。

応援してくださいました皆様のおかげです。

ありがとうございます。



サウスゴータ陥落の報は瞬く間にロンディニウムへと届き、貴族連合レコン・キスタの將軍達を大いに驚愕させた。

同時にダータルネスへの陽動、ロサイス空域での迎撃戦、そしてサウスゴータ防衛戦と悉く遅れをとった彼らはその焦りを募らせる。必然、首都へ肉薄する連合軍に対応する為の軍議は紛糾し、その矛先は不信となつて一人悠然と構える神聖アルビオン共和国初代皇帝オリバー・クロムウエルへと向かつていた。

「閣下。状況は我が軍にとって非常に不利です。敵軍は先の艦隊戦で航空戦力に消耗はあるものの、驚くべき事に……そう、驚くべき事に陸戦力は殆ど無傷です」

「うむ」

「更には、閣下の指示通りシティ・オブ・サウスゴータに残した軍亜人の部隊も全滅。わずか三日で陥落してしまいました」

「やはりサウスゴータの住民から食料を取り上げ、敵軍の消耗を誘う作戦はまずかつたのでは……」

ハヴィランド宮殿の白の間に、不信のざわめきが起こる。

ダータルネスでの陽動に引っかけたまま、クロムウエルが提示していた作戦はすべて消極的な物であった。

アルビオン軍としては当初、空際で連合軍を迎え撃ち上陸を許さぬ内に戦を終わらせる腹つもりだったのだが。

しかし連合艦隊の上陸を許してしまった以上、決着は陸上でつけ

ねばならない。

すぐさま軍議にて提案された作戦は二つ。

一つは地の利を生かし、敵の補給路が整わぬ内に速やかに決戦を行うというホーキンス将軍の作戦。

もう一つは敵を領地深く誘い込み、亜人を利用してこちらの人的被害を押さえつつ連合軍の補給を徹底的に攻撃し自壊するのを待つ、というクロムウエルの作戦であった。

結果採用されたのは後者。

アルビオン神聖共和国は元と言えば、アルビオン王国の貴族派で構成される国である。

その為、他国に比べ絶対的にメイジの数が少なかった。

これは広大な領地を得やすく代わりに、支配が行き届かなくなる恐れがあることを意味する。

只でさえ先の内乱での人的被害が顕著となっている今、メイジの損害が大きな作戦はどこか忌避したいといった空気が軍中にあったのだ。

「諸君らが懸念していることはわかっておる。だが、それでもまだ状況は余の予測を超えてはおらぬ」

「恐れながら閣下。あのサウスゴータが……大都市がたったの三日で攻略されてしまったのですぞ？ それも、報告では一人……王党派の得体の知れない剣士によって都市の防衛機能を破壊し尽くされての陥落です！ この事実には既に我が軍にも広まり、その影響は無視できません」

「ホーキンス将軍、兵達の士気にもすでに影響がでておりますぞ。特に亜人共の部隊では“アルビオンの黒騎士”の名を出すと怯えて行軍すらままならぬ有様だ」

「サウスゴータに潜伏させている密偵の報告では、連合軍に合流したのは王党派の新たな盟主、ウエールズ・テューダーとの事」

「皇太子め……どこでそのような化け物を手懐けたのだ」

「諸君、おちつきたまえ！」

クロムウエルの少し強い制止に、白の間はしん、と静まりかえり視線が只一人へと収束した。

静寂を皇帝はうおほん、と咳払いをして追い払い言葉を続ける。

「先程も言ったとおり、諸君らの懸念はわかっておる」

「閣下、では……」

「余に考えがある。ここまで連合軍を精強たらしめているのは、その“アルビオンの黒騎士”とやらとタルブやダータルネスで見た我々にとって未知の魔法であろう」

「おっしゃる通りです。そして、我らにはそれらに対抗する術はいまだ持ち得てはおりませぬ」

「將軍。それは君たちにとっての話だ。“虚無”である余にとってはいささか違う」

そう言つてクロムウエルは、右手を挙げ合図を後方に控える秘書のシェフィールドに送った。

シェフィールドは一步前に出て、用意していた羊皮紙を広げ涼やかな美しい声で内容を読み上げる。

その美しい声は男ばかりの軍議の最中、清涼に響いた。

「報告ではダータルネス港沖に出現した“幻影”は、十時間以上遊弋し、その後忽然と姿を消しました。これは敵陽動による新魔法の行使と考えられ、同時に敵軍はかつてタルブで我が軍の艦隊を殲滅した魔法の光を使えない状態であると推測されます」

「どついう事だ？」

「使用できるのであればそもそも陽動など必要無く、最初から艦隊決戦で使用し当方の艦隊を殲滅する作戦を採るのが合理的です。温存するにしても、上陸に失敗したら後がない先の防衛戦でまったく

使用しないのは不自然です」

「ふむ……」

「以上の事から、敵軍の使用可能な新魔法は“幻影”ではあるものの、切り札そのものはタルブで見せた魔法の光でなく、連合軍に合流した王党派に所属する“アルビオンの黒騎士”であることが推測されます」

「そして余は、その“アルビオンの黒騎士”を仕留める術をもって  
おる」

「なんと！ それは真でしょうか！」

シエフィールドの説明を引き取り自信たっぷりに宣言したクロム  
ウエルに、將軍達はざわついた。

“アルビオンの黒騎士”の常軌を逸した戦闘能力の報告は、彼ら  
の耳にも届いている。

その内容はもやは個人おるか、軍ですらどうにかなると思えぬ  
ものだ。

だからか、にわかには信じられぬといった体でホーキンス將軍の  
隣に座っていた若い将官が発言の許可を求める拳手をした。

「閣下。失礼ですが、本当にそのような事が可能なのでしょうか？」

「うむ。実はその答えは歴史の紐を解けば自ずと示されていたのだ  
よ」

「と、いいいますと？」

「諸君、思い出してくれたまえ。長きに渡るアルビオンの歴史の中、  
古来敵味方を問わず英雄と呼ばれる者達がどのような最期を迎えて  
来たのか。幾人かは戦場で更なる英雄の手によって討たれたが、そ  
の殆どは……」

「暗殺、ですか」

一早く答えを導き出していたのは、ホーキンス將軍である。

誇り高い歴戦の將軍である彼にとって、暗殺という卑劣な手段は受け入れがたいのか不機嫌な声色だ。

「うむ。誇り高い諸君らには甚だ不本意である事は承知している。が、只一人で大軍を蹂躪するような者を相手に正面から挑むのは愚の骨頂であろう。なにせ相手は籠城戦すら許してはくれぬのだから」  
「たしかに……」

「閣下の言うとおりで。我らの誇りは来る決戦で示せば良い。化け物のような兵器に正面から挑むのは貴族ではなく愚か者の行いだ」  
「ですが閣下。それ程強力な“英雄”を果たしてそう易々と仕留める事ができますかな？ 敵も警戒しておりますし、何より軍でも殺せぬドラゴンの巢に好きこのんで入り込む狩人などおりますまい」

にわかに見えた希望に縋る将官達のざわめきの合間から、ホーキンス將軍は水を差すように疑問を投げかけた。

確かに強力すぎる敵が個人である場合、暗殺は有効な手段ではある。

しかしそれは誇り高い軍人である彼にとって、やはりどこか矜持が許さないようであった。

「その辺りは心配無用だ、ホーキンス將軍。何、諸君らは従来の作戦通り硬くロンディニウムを守っておれば良い。誰もが認める“英雄”の暗殺という不名誉な誹りは、余が一身に引き受けよう」

「……御意。しかし閣下、“アルビオンの黒騎士”の方は何とかなるとして、やはり我々も敵を迎え撃つべきです。敵主力はサウスゴータを落として尚、ほぼ無傷なのですぞ」

「まだ主力はロンディニウムから動かさぬ」

「座して敗北を待つおつもりか？」

「それは違う、將軍。敵に“アルビオンの黒騎士”や“魔法の光”

があるように、余にも“切り札”がある。その準備に必要なのは時間だ。それに、悪戯に交戦して貴重な兵を減らすのは余の本意ではない」

「閣下の言われる切り札とは、ガリアの事でしょうか？」

動かぬ忠誠とぬぐえぬ不信故に、気に入らない作戦を受け入れる事に苦勞しているのか。

ホーキンス將軍はクロムウエルの言葉一つ一つを慎重に吟味しながらも、真意を問いただし続けた。

クロムウエルはそんな彼に嫌な顔一つ浮かべず、瞳に慈愛を宿らせて大仰に首を横に振る。

「いや。余の“虚無”だ。　　そうだな、將軍。少し想像の翼を広げてみるとしよう」

「閣下？ それは一体どのようなおつもりで」

「もし、余が魔法で敵と同じ　　いや、敵の何倍もある軍隊の“幻影”を作り出し、しかもそれを実際に戦える戦力として扱えるなら……どうであろう？」

ゆっくりと場を見渡しながら口にしたクロムウエルの台詞に、將官達は騒然となった。

程度の差こそあれ、魔法は無から有を作り出すことができる。

しかし軍隊を作り出す魔法は彼らの常識では大きく逸脱したものであった。

「そんなことが本当にできるのですか？！」

「はは、諸君落ち着きたまえ。私が今まで嘘をついたことがあったかね？」

「それはそうですが……失礼ながら何故そのような強力な魔法を今までお使いにならなかったのです？」

「この魔法には膨大な下準備が必要でな。時を置いてもそう何度も使える代物ではない、真の“切り札”なのだよ。そう、まさに今のような時が来ぬ限り、使われることのない“切り札”なのだ」

そう言つて、クロムウエルは立ち上がり一同を悠然と見渡した。表情は相変わらず自信に満ちあふれ、笑みは慈愛に満ちている。

「諸君。ロンディニウムを守るという作戦に変更はない。余とて敵ながら天晴れな英雄を卑劣な方法で手に掛けるのは不本意だが、“アルビオンの黒騎士”の始末はこちらで行う故心配無用だ。ホーキンス將軍！」

「は」

「兵を集めてくれ。余が直々に鼓舞しよう。我らは道理を知る故士気を保てるが、兵達の不安は拭わなければならぬ」

「御意」

「諸君は唯一残る懸念、敵の“幻影”に惑わされぬよう注意を払っておいてくれたまえ。余の“虚無”の準備にはまだ時間がかかる。早くて年明けになるであろう」

「ではそれを見越して“降臨祭”を前に休戦協定の交渉の準備を進めるとしましょう。連合軍の連中はさびしい年越しとなりましような」

「うむ、では交渉はバークレイ將軍に頼むとしよう。諸君、今は我慢の時だ。だが準備が整い次第、神聖な我らの領土を汚す連中を一気呵成に地べたへ追い落とそうぞ」

言い残し、神聖アルビオン共和国初代皇帝オリバー・クロムウエルは身を翻して颯爽と白の間を後にした。

ホーキンス將軍の困惑を除けば、背を見送るいくつもの視線からは不信の色は消え失せている。

向かう先は皇帝の執務室。

恐らくは先程話した“虚無”の準備に戻るであろう。

その姿は実に威風堂々としたものであった。

やがて執務室に戻った二人の内、最初に口を開いたのは秘書のシエフィールドである。

「見事な采配でしたわ、司教殿」

言葉は先程のものと変わらず美しく清涼であったが、ゾットするほど冷たかった。

クロムウエルは弾かれたように背後のシエフィールドの方へ振り向き、その足下にひざまずいて体をガタガタと震わせはじめた。

「おおおおお！ ミス、ミス・シエフィールド！ 本当に、本当にこれで良かったのですか？！」

「何を今更おっしゃるのです？ 司教殿には力があるではありませんかぬか」

それまでの態度を一変させ、シエフィールドの綺麗な足にすがりつく男に先程までの威厳は微塵も残ってはいなかった。

見上げるその眼は恐怖に濁り、まるで刑を執行される直前の咎人のようである。

「しかし、しかしです！ もうあの指輪は…… “アンドバリの指輪” は手元にはなく、敵もすぐそこまでやって来ているのですぞ？！」  
「代わりにもつといい “新しい指輪” があるでしょう？ さっさと使えば良いじゃない」

「そんな！ これは…… これを使えばロンディニウムは……！」

「いいじゃない、司教殿。所詮他人よ。王になりたいんでしょう？ 何を躊躇うの」



取り付く島もないシェフィールドの反応に、クロムウエルはすぐりついていた手を離してそのまま蹲った。

程なく嗚咽を上げ始め、すすり泣くように鼻を鳴らし声を震わせる。

そんな憐れな男を見下ろす“神の頭脳”の瞳は、冷たく静かに輝いていた。

「おおお、そもそも小物のわたしにはこの大陸など過ぎたものでありましたのに……」

「何を今更。あの酒場で『王になってみたい』と申したのはあなたじゃないの。我が主があなたの率直な言葉に感じ入り、折角この国を手に入れる手助けをしてあげたというのに」

「一介の司教の身で見るとは過ぎた夢であつたのです。あなたと“あのお方”の言葉を信じ、アンドバリの指輪を手に入れ、王家に不満を持つ貴族を集めてわたしに恥をかかせた王家に復讐した所まではそれは楽しい日々でしたのに……」

「結構なことじゃない」

「ですが今、夢のような日々は終わりを告げました！ 敵が攻めてきたのです！ かつて無いほど強力な化け物を引き連れて！ ああ、一体、只一人で城を破壊するような怪物を相手にメイジでもないわたしになにができましたようか！」

「だから、その指輪を使えば良いとさっきから言っているでしょう？」

冷静なシェフィールドの指摘にクロムウエルはガバと上体を起こして、涙と鼻水でドロドロになった顔のまま、左手にしていた指輪を掲げて見せた。

指輪は銀のリングに黒い宝石がついた質素な物で、一国の主が身に付けるにはいささか地味に見える品である。

「これは！ あの“お方”の使いの方に頂いたこれを使うと言う事は！ ロンディニウムに住まう人々を生け贄に悪魔と取引するも同然では無いですか！」

「知らないわよ、そんな事。この国の民がどうなるのがあの“お方”には関係ない事だわ」

「……魔法学院の貴族の子女を誘拐する計画も失敗に終わりました」「そのようね。腕の立つメイジだと思ってたんだけど……やはり野良犬は野良犬だったって所かしら？」

「そもそも、報告にあった“アルビオンの黒騎士”を暗殺することなど、本当にできるのですか？！ 相手は力も数もものともしない、正真正銘の化け物です！ そんな、本当に」

クロムウエルの口から漏れる言葉は、支離滅裂に疑問だけが吐き出されていた。

余程今の状況に耐えかねているのだろう。

シェフィールドが半ばウンザリして口の端を結び、視線を逸らした時である。

声を詰まらせたかに思えたクロムウエルが突如、足下にすがりついたまま動かなくなっていた。

これは……

何が起きたか理解すると同時に、自分と皇帝しかいないはずの部屋の隅から彼女に話しかける者が現れたのである。

あの、不愉快な女の声で。

「ひひ、取り込み中であつたかの？」

「……なんの用？」

「ふむ？ なんじゃ、その男はまだ儂が貸してやった“ナグルフアルの指輪”をつこつてはおらんようじゃの。まったく、小心者にも程があるわい」

「なんの用？」

二度目は感情が隠しきれず、苛立ちと嫌悪感が言葉に乗った。

『時の魔女』ノルンはそんなシェフィールドの言葉など意にも介さず、ひひ、といったものように笑いながら漆黒のローブとフード奥で闇の笑みを浮かべ一歩前に出た。

「なに。“ナグルファルの指輪”と引き替えに“アンドバリの指輪”の盗難を身逃してくれた礼にの」

「ふん、より強力な魔具との交換だったもの、別に礼を言われる筋合いはないわ。丁度良い目くらましにもなったしね。お前が裏切らなければのはなしだけど？」

「くく、裏切るなど。お主こそ、僕とお主の主人の約に反して、僕の“お気に入り”に手を出そうとしておるではないか。して、どうじゃ？ 調子は」

「？！ 貴様……」

「ああ、心配せんでもええ。あの無能王には告げ口はせぬよ。前にも言ったであろう？ 僕はお主の味方じゃよ。ただ……」

「……ただ、何よ？」

「ひひ、今のお主にアレを殺せるかの？ あやつが持つ“グリムニルの槍”はその阿呆に貸してやった“ナグルファルの指輪”とは比べものにならない代物じゃぞ？」

ノルンは声を弾ませながらそう言つて、執務机の脇においてあつたワインをグラスに注ぎぐい、と一息に飲み干した。

なんとも浅ましい仕草ではあつたが、フードの奥覗かせた白い喉は同性であるシェフィールドが見てもゾツとするほど白く、強烈な色香を匂わせている。

「ふん、お前には関係の無い話だ」

「くく、関係無い事も無かるう？ お主にはあの無能王にもまだ見

せておらぬ、あやつの力を見せてやった上、儂と無能王の約束に反して“今”手を出そうとしている事すら黙認してやるのじゃぞ？」

そう言つてノルンは再びひひ、と笑つた。

シエフィールドは苛立ちを募らせながらもそれ以上は反論せず、ノルンの言葉をどう受け取つたのか、徐に懐から二つの品を取り出した。

一つは単発式の短銃であり、所々が金で装飾を施され実に見事な設えである。

もう一つはその短銃で使う弾のようで、こちらは何の変哲もない丸い鉛玉であつた。

「……これよ」

「ほう？ これは……ふむ、中々面白い品じゃの」

差し出した品をのぞき込み、感心したような声をノルンはあげた。どうやらシエフィールドが見せた品がどのような効果を持つのか一目で理解したらしい。

勿論ハツタリである可能性もあつたが、なぜかそうでないと思えるシエフィールドであつた。

「銃の方は……そうね、“魔狼のアギト”とでも名付けましょうか」

「くく、では弾の方はさしずめ、“魔狼の牙”じゃの」

「好きに呼びなさい。弾はオーナム・バーバリで回収した“黒騎士”……いえ、“ガンダールヴ”の血液を調べて造つたものよ。……

驚いたわ。“ガンダールヴ”の肉体がまさか、あんなに小さなゴレムみたいな魔法物質の集合体で構成されているなんて。一体誰がどうやって造つたのかしら？」

「ひひ、さあの。いつの時代にも天才と呼ばれる奴はいたもんじゃて。もっとも、アレはそんな生易しいものではないがの。ま、如何

に“神の頭脳”とて、万能ではないと言う事じゃな」

ノルンはそう言って、楽しそうに可可と笑った。

声は妖しく粘りつくような妖艶さを伴って、不快感と共にシエフ  
イールドの耳に届く。

「言ってくれるじゃ無い。でも、忘れていたのではなくて？ 私が  
“ガンダールヴ”の肉体に少しでも触れることができれば、同じ物  
が作れなくともその身体を意のままに操る事が出来るのよ？」

「くく、無理じゃろうな。近付く前に挽肉にされるのがオチじゃろ  
うて」

「まあね。今の私では無理なのも確か。だから殺すことにした  
の。いいえ、この場合は破壊、かしら？ “ガンダールヴ”の体の  
組成に干渉する、同じような品を用意したのよ。それが……」

「魔狼のアギト」と“魔狼の牙”、というわけか。くく、この短  
期間でよくそこまでアレを理解したの。流星は“神の頭脳”と言う  
事にしておこうかの」

「私が作り出した魔銃、“魔狼のアギト”は打ち出した弾丸を必ず  
標的に命中させるわ。この二つを持ってすれば……」

「英雄に死を与えることができる、か」

自身の台詞を取って呟いた魔女の一言は、それまでと同じでいて  
ゾットするほど冷たかった。

そこから感じ取れたのは、無機質な憎悪と狂気、そして僅かな感  
傷に覆われた激情である。

シエフイールドは思わず体を強ばらせながらも、やはりこの女は  
“ガンダールヴ”に通じているのではなからうかという疑念を更に  
強くしてしまう。

この女、何を考えているのかまったくわからない。

ただ言えるのは、信用は絶対に出来ないということだ。

持つてくる魔具はどれもが恐ろしい程強力な品ばかりで、確かに敵に回すのは得策ではない。

得策ではないとわかってはいるが……それでも、どうにかしてこいつをジョゼフ様から遠ざけねばならぬ。

“神の頭脳”の思考はそう結論付け、『時の魔女』にとある切っ掛けを提示することにした。

「そうよ。どう？　ここで尻尾を出して入れ込んでいる彼にこの事を教えに行く？　私は止めないわよ。貴女に“借り”もあるしね、身逃してあげる」

切っ掛けとは選択であった。

入れ込んでいる“ガンダールヴ”に危急を伝えに行くのか、それともこのままジョゼフの下に留まるのか。

本人に選ばせてどのような行動に出るのかを見極めようというわけである。

シエフィールドの見立てでは魔女は間違いなく、“ガンダールヴ”の下へ赴くと見ていた。

ここで見捨てる程度の関係性ならば、端から自分とジョゼフにアルビオンの地において彼ら虚無の担い手とその使い魔を静観せよとは交渉しないはずであるからだ。

しかし、魔女の答えは意外にも……

「儂が？　何故じゃ？」

「え？　あなた、何が目的かは知らないけれど、彼……“ガンダールヴ”には随分と入れ込んでいるじゃない。私が“あの方”と貴女の約束を反故にして、この魔具で“ガンダールヴ”を殺そうとしているのを止めないのも、どうせこの事を“ガンダールヴ”に教えてその反応を楽しむ為なんでしょう？　いいのよ、隠さなくても」

「くく、見くびられたものじゃのう。儂や、そんな事はせんわ。ま、

あやつをえらく気に入っている事は事実じゃがの。僕は人をたぶらかし謀る事はするが嘘はつかん。ひひ、お主の好きにするが良いぞ？」

「その結果、お気に入りの“ガンダールヴ”が死ぬ事になっても？」

シェフィールドの質問に、魔女はくつくつと笑って答えた。

いつもの悪魔のような、他者の不幸に幸福を見出すかのような、不快な妖艶さを伴って。

魔女は間違いなく、答えたのだ。

冷たく甘い声色で。

「くく、好きにするがよい。その魔具ならば確実に仕留められるであろうな。ひひ、入れ込んだ男の葬式は何年ぶりかのう」

その日、シティ・オブ・サウスゴータの街は戦時にもかかわらず、盛大な祭りが執り行われていた。

始祖暦六千二百四十三年、ヤラの月第一週はフレイヤの週、虚無の曜日。

ハルケギニアで最大の祭りである“降臨祭”が戦地であるサウスゴータでも始まったのだ。

“降臨祭”から十日は全ての戦闘行為は中止される慣例に則り、連合軍とアルビオン軍もまた一時的に休戦協定が結ばれていたのがある。

当初、圧倒的に戦局を進めていた連合軍司令部は、アルビオン側より申し入れられた休戦協定には否定的であった。

しかし、サウスゴータを手中に置いてより数日後、司令部は本意ながらこの申し出を受け入れる決断を下すこととなる。

ほぼ無傷で手に入れたサウスゴータとその周辺の村々にいざ糧食の配給を開始してみると、その後の兵糧が不足してしまう事がわかったのだ。

これはアルビオン軍が事前にサウスゴータとその周辺の村々の民衆から食料を取り上げていた為でもあるのだが、自軍の兵の消耗が殆ど無かった事も予想外に食料の消費が増大した事の一因となっていた。

戦争を数週間で終わらせるならばサウスゴータを始め、占領地において食料の配給を行わない選択肢もある。

しかし、王党派が合流する連合軍にとって戦時下における占領政



策を考えるに、そのような選択肢を選ぶようはずもない。

特に絶対的な戦力である“アルビオンの黒騎士”擁するウェールズ皇太子の手前、この一般市民の惨状は流石に無視する事はできないと司令部は判断したのであった。

必然、大都市であるサウスゴータを中心とした食料の配給を行うに至り、気が付いた時には年内にロンディニウムを陥落させた所で、略奪無しに軍を維持することが出来ない所まで連合軍は追い込まれてしまっていたのである。

こうして、連合軍が至急本国からの補給線を構築するまでの間の三週間。

“前回”と同じように、才人とルイズに平穏な一時が訪れたかに見えていたのだが。

「来たぞ！ あれが“イーヴァルデイの勇者”だ！」

時刻は正午をすこし回った、サウスゴータの大通り。

かねてより予定されていた、連合軍による軍事パレードが開始されていた。

表向きはシティ・オブ・サウスゴータ解放の英雄達を讃えるパレードである。

集まった市民は一晩たつぷりと“降臨祭”の乱恥気騒ぎを楽しんだ後にもかかわらず、大通りに殺到して一目サウスゴータ解放の英雄を見ようとパレードの最後尾を待ちわびていた。

何故サウスゴータの街が連合軍により占領されてから二週間も近く経ったこの時期、今更ながらパレードが行われているのか。

その理由に、サウスゴータ陥落後より八日の間。

兵も市民も不足しがちな食料に不安を抱えていたが、“降臨祭”を前にして到着した最初の補給部隊によりその不安は解消された。

トリスティン本国からやってきた最初の補給部隊が供したものは、

“降臨祭”の為の酒やささやかな馳走、そして慰安を目的とした芸人や艶やかな酌婦達であったのだ。

連合軍司令部はアンリエッタ女王とウェールズ皇太子の連名で、これらを兵のみならずサウスゴータ市民にも供した。

前線の兵達が異国で年を越すに当たり、娯楽は非常に重要な要素となる。

又、ロンディニウム攻略に当たりサウスゴータは大部隊の拠点として非常に重要な都市だ。

その為、占領に際しては市民達の感情は非常に重要な要素となり得た。

幸い市民達は連合軍に協力的で、市内に潜むレコン・キスタに与する者や亜人の残党などの情報提供も活発に司令部へ寄せられる程、好感情であった。

街の防衛に亜人を用い治安を著しく悪化させた上、年の瀬に食料をすべて取り上げるような支配者に忠誠を誓う者など、誰一人として存在しないのは当然の結果である。

そんな市民達が暮らすサウスゴータは連合軍にとって、当然ながら統治しやすい要所と言えたのだが。

ただ一つ、総司令官であるド・ポワチ工將軍を悩ませる要望が市民達から沸き上がっていたのである。

それはサウスゴータを占領してより三日後。

街の中央広場で戦功をあげた者を叙勲し、サウスゴータ解放宣言を行っていた時である。

衆目の中立ち並ぶ戦功者の中に“アルビオンの黒騎士”の姿がないことをみとめた市民達の代表が、司令部になぜサウスゴータ解放の大功労者を叙勲しないのかと詰め寄ったのだ。

“彼”は秘密機関に属しており、しかも重大な命令違反を行った為だという司令部の回答は、果たして民衆を納得させる事は出来なかった。

結局、再三に渡る市民からの要望により、叙勲は無理であるが新

年に予定されている軍事パレードに“アルビオンの黒騎士”を参加させ、皆に紹介する事をポワチ工將軍は約束せざるを得なかったのである。

「あれが？ え？ どっち？」

「どっちで、黒髪の方だろ？ なんだって“黒騎士”なんだし」

「バカ、それは貴族様を使う方の呼び名だろ？ 本人は“イーヴァルデイの勇者”って呼ばれる方がいいって話さ」

「本当かそれ。最近、みんなそっちの方で呼んでるけど」

「ああ、本当さ。なんだって、“イーヴァルデイの勇者”様は平民出身らしいしな」

「お前知らないのか？ ほら、トリステインの慰安部隊が開いてる酒場で“魅惑の妖精亭”って所あるだろ？ その女の子に俺も教えて貰ったんだぜ？」

「ああ、あそこ！ 俺も行ったことあるぜ。店長は気色悪いが、女の子は中々だよな」

「なによー、あの女。なんで“イーヴァルデイの勇者”様と同じ馬に乗ってるの？」

パレードの最後尾、馬に乗りゆっくりと大通りを行く才人は、民衆の歓声に表情を硬くさせながら応え、内心では苦笑を浮かべていた。

その理由として自分へ集まる視線の半分を奪い取る、前に座る小さな主人の存在があったからだ。

サウスゴータ解放から二週間近く経った、その日までの間。

トリステイン本国からの補給部隊に同行してきた“魅惑の妖精亭”の女の子やシエスタ、そしてどこからともなく才人の事を聞きつけ近寄って来る街の女の子の存在に、ルイズは必要以上に神経質になっていたのである。

結果、四六時中才人の側を離れようとしなくなり、挙げ句パレー

ドにまで同じ馬に乗って同行を申し出ていたのであった。

申し出は才人を“トリステイン人”として扱いたい連合軍司令部の利害と一致し、ルイズの常軌を逸した行動を承認する運びとなる結果。このような奇妙なパレードが実現してしまったのだった。

「ルイズ。俺、恥ずかしいよ……」

「う、五月蠅いわね。私だって、恥ずかしいわよ」

「だったら……」

「いいの！ こ、こうでもしなきゃ、あんたが誰のモノか、みんなに伝わらないもの」

「……俺、そんなに信用無い？」

「無い」

取り付く島もない程、見事な即答であった。

“今回”に限り、全く心当たりのない才人は馬上で激しく動揺し、どうルイズを説得しようかと思考を巡らせる。

流石にサウスゴータの全住民が注目するパレードの最中、ルイズを馬の前に乗せた二人乗りで練り歩くのは恥ずかしいにも程があった。

何より、ここの所何かとルイズと二人きりになれなかった反動か、まるで睦むように体を密着せざるを得ない馬上で香る乙女の香りは、飢えた体には毒となる。

しかし当のルイズはそんな悶々としつつある才人の事など意にも介さず、徐に懐から手の平大の羊皮紙で造られたメモ帳を取り出した。

メモ帳は自作したのか表紙にヴァリエール家の家紋を手書きで書き込まれた品で、革製の糸で端に開けられた穴を通したシンプルな作りである。

ルイズが才人の目の前でメモ帳の表紙を一枚ペラリとめくると、小さく綺麗な字がびっしりと書き込まれたページが才人の目に飛び

込んだ。

「ウインの月、エオローの週、ダエグの曜日。サウスゴータ解放宣言の後、サイトに話しかけて来た街の女の子の数、十五。メアリに手を、ミス・ブロウにはマントの端を持たれたわ」

「……へ？」

「他は……似たようなものね。でも、シエスタ達が到着したティワズの週、ユルの曜日はちよつと酷かったわよ？ ジエシカに抱きつかれるし、シエスタにはほつぺたを許してたじゃない。街の女の子に話しかけられた数だつて三十だつたわ」

「え、あの、えっ？ ルイ、ズ？」

才人の困惑も余所に、ルイズはもう一度ペラリとページをめくる。

一瞬見えたメモ帳には“いつか”や“そのうち”、果ては“殺”などの不穏な単語がチラリと見えて、才人は思わず目を逸らしてしまった。

そんな才人の事など相も変わらず気にも留めず、ルイズは淡々とした口調でメモを再び読み上げ始める。

「おなじくティワズの週、マンの曜日。竜騎士の人たちと一晩中、“出張・魅惑の妖精亭”で飲み明かしてたわよね？ 私をずつつと、一晩中放つておいて」

「あ、あれはだなあ！」

「されたキスの数、二十五。手を握られた数、左が五十、右が四十。勿論、スカロン店長の分は抜いた数字ね、これ」

「あの……ご主人様？ もしかして、一晩中、俺を見張ってた、の？」

「ええ。あの時ばかりはつきまってくるジュリオに感謝したわよ。杖を預かって貰ってなきゃ、街ごとあんた達を消し飛ばしていたかもしれないし」

「すみませんでした」

才人としても反論は無い訳ではない。

しかし、淡々としたルイズの声色は本能に“刺激してはならぬ”と訴えかける。

それは長く連れ添った“前”があつたからこそ、才人に働く第六感なのかもしれない。

兎に角、こういう時は一旦自分が折れるしかない。

“前”も今も、ルイズには感情が高ぶっている時は話が通じないことが多いからだ。

彼女に限らず人にはどこかしら欠点があるもので、ルイズにとつてのそれがまさに沸騰しやすい感情がそうだと言えよう。

だからこそか、彼女を愛する才人はそういった所も含めて受け入れており、理不尽な謝罪に不快感はそれ程湧かなかつた。

誤解や言いたい事があるならば、話を通じる状態の時に伝えて解決すれば良いのである。

そういった懐の広さが才人の美点であり、他者を引きつける元凶でもあつた。

「ええと、まだあるわよ？ そうね、一昨日と昨日なんかは……」

「わかつたわかつた！ 俺が悪かつたよ！ ごめん、ほんつとうにごめん！」

「……反省してる？」

「うん、反省してる！」

「一緒に乗馬してパレードに参加せざるを得なくなつた私の気持ち、わかつてくれた？」

「わかつた！ よーつくわかつた！」

必死の才人の声に、沿道からクスクスと笑い声が聞こえて来た。

“英雄”の情けない姿は失望よりも、微笑ましさと親近感にじ

み出ていたらしい。

ルイズはそんな才人の態度に気を取り直したのか、取り出したメモ帳をしまい込んで少しだけモジモジとした。

先程から才人の鼻腔をくすぐる彼女の髪は甘く、主の機嫌をある程度鎮めた安心感からか、仕草を見てにわかには愛らしく感じる才人である。

「……でもこれ、恥ずかしいな」

「な、なによう。まだ、罰は終わってないんだから」

「へ？」

「反省、してるんでしょ？」

「あ、ああ。そりゃ、もう。でもさ、あの」

「私だってね、仕方無いつて部分があるのは心得ているわよ。それでも、許せないものは許せないの。だから」

「だから？」

「もうちょっと、こう、後から抱きしめて、そのままパレードして欲しい……」の

「……えっ？」

「そうしたら、全部は無理だけど、あんたが誰を愛しているか一目瞭然じゃない」

ルイズは消え入りそうな声でそう言うと、再びモジモジとし始めた。

才人はしばし絶句して、視線を泳がせる。

よくよく考えてみれば、ルイズは嫉妬深いだけでなく色々とアレな所があった。

才人自身、“若かりし”頃はレモンちゃんなどと囁いた身悶えするような記憶があったが、ルイズのそれは現在進行形で更に上をゆく。

勿論、結婚してからはそう言った部分は寝物語において非常に燃

え上がる要素ではあったのだが、何分、今この時は真っ昼間の大通り、多くの人の目が自分達を注目している状況である。

明らかなインモラルな要求は、恥ずかしいといったレベルで収まる筈がない。

だが才人にとって、選択肢などはある筈は無く。

こここの所ルイズの事を後回しにしてしまった事に激しく後悔しながらも、手綱を握る手をそっと優しく、彼女の腰に回したのである。

「こっつ、こっつか？」

「も、もも、もうちよつと強く」

「うっつ、こ、こっつ？」

「どっ、どこ触ってるの！ 今はダメ！ もっと下！ ひゃつ、ダメ！ もっと上！ 下すぎだって！ もっと上よ……そっ、それくらいでいい、わ」

レモンちゃん、恥ずかしい。

いつかソレを言った時に匹敵するような恥じらいを見せて、ルイズは頬を染めた。

勿論、それ以上に才人も恥ずかしいのであるが。

“アルビオンの黒騎士”を見ようと集まった沿道の人々からは、最初のような黄色い歓声ではなくヒソヒソとした囁きが聞こえて来る。

才人はルイズを放置してしまっていた事に幾度目かの後悔をしながらも、現実を直視しないよう、なぜこうなったのか記憶を整理し始めた。

まず、竜騎士第二中隊の面々ともう一度出会えて仲良くなり、連日のように酒盛りを行っていた事が原因の一つ。

次に、多大な戦功に対して名誉爵位以外にウェールズから下賜された報奨金で、“麗しのアンリエッタ号”の仲間達と“魅惑の妖精亭”で何度も飲み明かした事も原因と言えよう。



それと、成り行き上“虚無”を連合軍に取り上げられたウェールズ皇太子の立場を守る為、何かと彼に同行し軍議や会合に付き合っていたことも思い当たる。

更には“アルビオンの黒騎士”という（才人にとって）恥ずかしい二つ名が定着せぬよう、竜騎士第二中隊の面々や“麗しのアンリエッタ号”の仲間達と共に、“アルビオンの黒騎士”でなく“イーヴァルデイの勇者”という二つ名を広める為、街のあちこちにテントを張る連合軍兵士達の野営場を回り、彼らと交流していた事も原因だ。

うう、どうすりゃよかったよ畜生。

つい、見上げた空は青い。

そして空の上は平和その物であった。

才人を現実に取り戻したのは、ルイズの細い腰を抱きしめる腕に手を重ねられてからである。

戻って来た現実には、甘く厳しい。

注がれる大量の視線は憧憬や尊敬ではなく、侮蔑と軽蔑、好奇心であった。

果たして、才人が集めたそんな視線に耐えきれず頭を抱え込みそうになった時である。

突如、群衆の中から一人の男が出て来て何かを才人に向けた。

誰よりも早く才人はそれが銃口であると認めて、咄嗟に抱きしめていたルイズを庇うように身を捻り、デルフリンガーの柄を掴む。

同時にパン、と乾いた発砲音が響き、一発の銃弾が才人へと飛んだ。

弾丸はそのまま才人に命中すると思われたが、意図してか、それとも偶然か。

才人はルイズを庇うようにして背が見えるほど身をよじっていた為、弾丸はデルフリンガーの鞘ごしに刀身へと命中し、ギインと金属音を響かせて在らぬ方向へ跳ねたのである。

「きゃあああ！」

「曲者！」

「なんだ！？」

遅れて沿道で見物をしていた誰か、女性の悲鳴が上がり、発砲した男はすぐさま警邏に当たっていたメイジに取り押さえられた。場は騒然としていたが幸い怪我をした者は居ないようで、混乱には至っていない。

「大丈夫かルイズ？！」

「え、ええ。サイトは？」

「俺も大丈夫だ。もつとも、弾丸位食らった所で何ともないけどな」

「クク、ククク……ワアツハハハハ！」

二人の互いの無事を確かめ合う言葉を聞いていたようなタイミングで、狂ったような笑いが辺りに響く。

笑い声の主は地に押さえ込まれている男のものだ。見ると男は見覚えのある顔であった。

「お前は……」

「あなた！ オーナム・バーバリの！」

「くふ、ははは！ そうさ。“人喰い”ドレイクだ。覚えてくれて光栄だよ、“英雄”さん？」

「黙れ狼藉者！」

ガコツ！ と鈍い音と共に、押さえつけていた警邏の一人がドレイクの頭を殴りつけた。

しかしドレイクは意に介さず、地に血反吐を吐きつつも才人を見上げて笑い続ける。

「ひひひ、なあ、“英雄”。俺が、他人を操れる俺が、なぜ自ら姿を晒してお前さんを狙ったと思う？」

「お前、何言ってるんだ？」

「それはな、歴史に名を刻む為だ。英雄殺しの名をな。はははは！俺は傭兵じゃ終わらねえ！魔法衛士でもだめだ！俺は歴史に名を刻む男なんだよ！」

ドレイクはそう言って、気が狂ったかのように再び笑い始めた。取り押さえている複数の警邏の者に殴られ続けても尚、笑い続けた。ていた。

才人とルイズはその様子を憐れむように馬上よりじっと見つめて、言葉を探す。

だが、それが二人にとって致命的な隙となった。

二人は知らない。殴られながらも決して離そうとしなかった、ドレイクが持つ銃の名を。

二人は気が付かない。

メイジであるドレイクが何故、魔法でなく銃を使ったのか、その不自然さを。

二人に知りようもない。

魔銃“魔狼のアギト”より放たれた魔弾は、決して標的を外さないと言ふ事を。

先程才人が弾いた魔弾は果たして宙高く跳ねたものの、その勢いを殺さず鳥のように軌道を変え、この時既に人の目には止まらぬ弾速で二人の正面から迫っていたのだ。

そして魔弾は

英雄を屠る為に“神の頭脳”が作り出した魔弾は、ルイズの左胸を貫通し才人の体内を深くえぐる。

「ひぐつ」  
「がつ!?」

才人とルイズは突如襲われた前からの衝撃に、落馬してしまう。  
ルイズを抱き止めていた姿勢のまま、咄嗟に地と彼女の間に身を  
挟み込んだ才人であったが、地に落ち慌てて上体を持ち上げた時、  
ルイズの傷を見て愕然とするのであった。

弾丸が貫通していたのは、彼女の左肺であったのである。  
服には既に夥しい鮮血が滲んで、一刻の猶予も許さぬ状況である  
と誰の目にも明らかだ。

「だれか！」

血泡と共に助けを呼ぶ。

弾丸がルイズの体を通じた時に弾道が変わったようで、肺はや  
られていないらしい。

突いて出た叫び声は、よく通った。

これだけのメイジが警邏に駆り出されていれば、誰か水メイジが  
近くに居る筈だ。

才人の判断は正しく、叫びにすぐさま警邏のメイジから水メイジ  
と思わしき女性がやって来て、秘薬を取り出しながら彼女は治癒の  
為短剣でルイズが着る衣服の胸元を切り裂いた。

「ルイズ！ しっかりしろ！」

「サ……イ……」

「喋っちゃダメ！ 肺をやられてる！ 大丈夫、これ位ならこの秘  
薬と水の魔法で直ぐに治せるわ！ もう一人！ “黒騎士” 殿もや  
られてる！」

「俺は後回しで良い！ 直ぐに塞がる！ それよりも早くルイズを  
たのむ！」

女性は才人の剣幕に一瞬吞まれかけながらも、一つ頷いて取り出していた秘薬が入った小瓶の蓋を開け、ルイズの左胸に小さく開いた傷口に垂らし呪文を詠唱し始めた。

しかし、詠唱を遮るように　そしてあざ笑うかのように、笑い声が差し込まれる。

いまだ取り押さえられているドレイクだ。

「ククク、無駄だ。お前のような化け物を始末する為に“まともな”銃と弾丸を使うと思うか？」

「て、めえ！」

「教えてやるう。弾丸の名は“魔狼の牙”。こいつで貫かれたら、どんな傷も決して癒えることはねえ！　そんな小娘の心配より、てめえの心配をするんだな！　ひひ、はあはははははははははは！」

再びドレイクの狂ったような笑いが辺りに響き渡る。

そこで才人は初めて己の傷が全く塞がる気配が無い事に気が付き、それからルイズへ治療の魔法を掛けている女性メイジの顔を見やっ

た。  
女性はドレイクの言葉を裏付けるようにして、悲しそうな表情を浮かべ視線を合わせた才人に二度首を振る。

「ルイズ！　しっかりしろ！　ルイズ！！　死ぬな！！！」

才人はゆっくりとルイズを抱き起こし、揺らさぬようにしながら必死に声をかけた。

しかしルイズは既に意識を失っているようで、ヒューヒューと口から不吉な呼吸音と血を漏らし続けている。

過去、幾度も戦いの中に身を投じていた為か、才人は彼女の傷が致命傷であると理解し目眩を覚えた。

しかも魔法による治癒も効かない傷である。  
今までに味わった事の無いような大きな絶望が、才人の全身に広がってゆく。

ルイズ！

ルイズルイズルイズルイズルイズルイズルイズルイズ！

くそ、くそくそくそ！

くそお！ 死なせるもんか！

死なせてたまるかよ！！

ルイズの左胸に開いた小さな孔から吹き出る血を押さえつつ、才人は思考を後悔と憎悪で焼いた。

止まらぬ血はまるで自身の絶望そのものあるかのように、容赦無く彼女の身体の外へ流れ出て行く。

死なせるものか！ 死なせるものか！

想いは只一点、自分ではなく恋人の命の存続。

だが、ただ敵を打ち倒す事しか出来ぬ“英雄”に何が出来よう？  
今、ルイズに必要なのは命を繋ぐ力だ。

それが魔法でも、秘薬でも、奇跡でもなんでも良い。

何か、誰か、この消えそうな命を救える存在は

そこまで思考を混乱させて居た時、不意に騒ぎを聞きつけ駆けつけてきたウェールズ皇太子の顔に、才人はある面影を……希望を見つけた。

そうだ！

テファだ！！

テファの持つ指輪なら！

一度死亡した俺を生き返らせた、あの指輪ならば！

「わっ！」

「うわっ！ なんだ？！」

「き、消えた！！！」

才人がティファニアの指輪の事を思い出した直後、場に突風が吹き荒れ次の瞬間には才人と瀕死のルイズの姿は消え去っていた。

勿論、二人が向かった先はティファニアが身を隠すようにして暮らす、サウスゴータ近郊の森の中にあるウエストウッド村である。

もう少しだけ我慢してくれ、ルイズ！

心の中でそう念じながら、才人はルイズを抱えて矢のように駆け出していたのである。

自身も決して治癒せぬ傷を負っているとは思えぬ速さで、“神の盾”はサウスゴータの街に立ち並ぶ家々の屋根の上を駆け抜け、一足飛びに城壁すら飛び越えて行く。

肺から逸れているとはいえ、才人の負った傷も決して浅くはない。しかしこの時、実は傷の浅い深いはさほど問題ではなかった。

問題は、傷口から吹き出る筈の血が出ず、代わりに傷口がじわり才人の全身にひび割れのような形で広がって居る事であったのだ。

そのひび割れから漏れ出ていたのは、赤い血ではなく乾いた砂である。

まさしくそれは才人にとって破滅の足音であったのだが、ルイズの命を想うこの状況下、彼がその異変に気付くことはない。

そして後に残されたのは、“人喰い”ドレイクの狂ったような笑い声だけであった。

夢を見た。

それはいつか見た夢。

横殴りに雨が降る嵐の中、体中が引き裂かれる夢。

巨大な韻竜の炎にこの身を焼かれる夢。

歪に組み上がる人形達と戦う夢。

強力な風のメイジに、五感を失いながらも立ち向かう夢。

悔しさに涙を流しながら、哀れな狼を両断する夢。

青銅のゴーレムに殴られ、朦朧とする夢。

そう、これは只一人愛する者が経験してきた戦いの記憶だ。

自分の為。

誰かの為。

己の為に戦い続けている夢だ。

浮き上がる大地を止めようとエルフと戦い。

手練の暗殺者を魔剣を砕かれながらも追いつ返し。

青髪の虚無の使い手に腹を裂かれ。

巨大で強力なゴーレムを屠り。

エルフの先住魔法に貫かれ。

大地を埋め尽くす軍隊に命が尽きるまで魔剣を振るい。

そして、横殴りに雨が降る嵐のような竜巻の中、体中が引き裂かれ。

強力な風のメイジに、体中を切り裂かれながら立ち向かい。

そして、青銅のゴーレムに殴られ、朦朧とする。

手に持つ魔剣で斬り、貫き、薙いで、命を奪い。



向かってくるのは刃、魔法、拳、剣、槍、岩石、鋭利な矢。そう、これは自分と出会ってから、そして“私”と出会ってからの、彼の記憶の一部。

幾度も傷つき、常に隣で暖かな笑顔を向けていた、男の記憶。

「サイト！」

ルイズはいつかそうしたように、叫びながら覚醒した。

胸は早鐘のように高鳴り、喉がカラカラに渴くほど息も荒い。

まだ朦朧とする意識の中、視界が捕らえたのは豪華な天蓋ではなく粗末な小屋の天井であった。

この時期のアルビオン大陸には珍しく外では雨が降っているようで、ポツポツと屋根を叩く音がしている。

「……」

声を掠れさせながら上体を起こすと不意に激しい頭痛が襲ってきて、思わず呻くルイズであった。

痛みに耐えながらゆっくりと部屋を見渡すと、やはり記憶にない場所であり自分は寝ていたのだと認識できる。

私、何故……

確か、パレードで……そうだ！あの、ドレイクって奴が銃で私とサイトを！

私、胸を撃たれて、それで

自身の胸に銃弾を浴びた事を思い出したルイズは、慌ててベッドの上で上体を起こしたまま体をまさぐった。

果たして左胸には傷一つ残ってはおらず、見る度に物足りなく思っていた優しい膨らみが、いつも通りに見て取れたのである。

寝汗でぐっしょりと濡れていた衣服はパレードの時に着ていた物では無く、質素な服へと着替えさせられていた。

どうやら気を失った後、自分は誰かに治療を施されてここへ寝かされていたらしい。

頭がいまだハッキリしない事から、それなりに長い間寝込んでいたようだ。

「助かつ……た？」

呟いてルイズはベッドの脇を宛てもなく何かを探し始めた。

今寝ている場所が連合軍の医療用の建物であるならば、私物……特にメイジにとって大切な杖が側に置いてあるはずだと考えたからである。

きっと、サイトは心配しているわ。

早く戻らなきゃ！

それにこうしている間にも、誰にチョツカイを出されているかわかったもんじゃ無いし。

そう、ルイズがいつもの焦りを取り戻した時である。

不意に部屋の扉がノックも無しに開かれて、ドアの向こうから信じられないような存在が姿を表した。

それは、一言で言い表せば『美』そのものである。

見たことも無いほど美しい、輝くような金髪。

小さく端正な顔立ちは女神のような神々しさと慈愛を湛え、それらを憂いのヴェールで覆い見る者を魅了する。

細く長い手足と首は、彫刻のように均整がとれて白く輝く。

何よりその大きく前へ、そして上へとせり出した胸は、服の上からでも崩れぬ形と綺麗なラインを維持し続け、同性であるルイズでさえ奇跡と思える代物であった。

だがしかし。

たった一目でルイズに絶望的な敗北感を植え付けた美の持ち主は、只一点、驚愕をもって彼女の感想の全てを塗りつぶす。

その、金糸の髪から覗くつんと尖った耳をもってして。

「あ……目覚めたんですね」

「あ、ああ、あな……た……エルフ?!」

「え……? ええ。あ、ごめんな……さい。大丈夫、危害を加えたり、しないから」

少女はそう言って、少し怯えたように俯いた。

その仕草すらまるで魅了の妖精が宿っているかのように、可憐その物である。

一方ルイズはというと、初めて見るエルフに口をパクパクとさせ、沸き上がる恐怖を必死に押さえつけようとしていた。

無理もない。

エルフはハルケギニアに住まう人々にとって、宿敵であると同時に恐怖の代名詞でもあるからだ。

しかし、目の前にいる少女はそういった印象とは対極の存在でもある。

「あの、私、ハーフ……なんです。あなたに危害を加えたりはしないから、安心して」

「え、う……あ……」

「傷、大丈夫ですか? 随分と深かったから、まだ……痛む、かもしれないとおもっていますが」

遠慮がちに、半ば怯えながらそう声を掛けてきた少女の言葉に、ルイズはやっと我を取り戻した。

どうやら彼女が自分の怪我を治療してくれたらしい。

得心は停止した思考を再び動かし始め、とりあえずは危険は無さそうだとルイズを安心させた。

だが、同時に腑に落ちない点も見えてしまう。

ハーフとはいえ、エルフの水メイジが連合軍に従軍しているなど

聞いた事も無い話だ。

いや、トリスティンやゲルマニアで暮らしているという話すら聞いた事も無い。

それがたつた一人であっても噂になってしまふほど、エルフやハーフェルフはハルケギニアの人々にとって注目をせざるを得ない存在だからだ。

ルイズは未だ見慣れぬ尖った耳を見つめながら、ふむ、と考え込み始めてしまった。

そんなルイズを置いて少女は何を思ったのか、いそいそと部屋を後にしてしまう。

後に残されたルイズはしばし困惑を続けたが、やがて少女が一陣の見覚えのある大剣を抱えて戻って来るのを認めると、幾分か元の調子を取り戻しあつと声を上げるルイズであった。

「よう、嬢ちゃん！ 目覚めたみたいだな！」

「ボロ剣！」

「ひでえ！ 言うに事欠いてボロ剣かよ！」

「ちよつとこれどういう事?!」

「まあ、落ち着けて。ほら、この娘さんも怯えているだろ？」

デルフリンガーの言葉に、ルイズはそつと視線を少女の顔に向けた。

確かに恐ろしいエルフであるはずの少女は、蒼く大きな瞳を潤ませ恐怖に肩を震わせている。

しかしその表情は世の全ての男達に「守りたい」と思わせるもので、決して才人にだけは見せてはならぬとルイズは人知れず焦ってしまった。

「……わかったわよ。ごめんね。で？ デルフ、説明してくれる？」

「ああ、そのつもりで嬢ちゃんが目覚めたら連れてきてくれてこ

の娘さんに頼んでたからな」

デルフリンガーはそう応え、僅かに鞄から抜かれた状態のまま力チカチと鐺を鳴らそうとした。

しかし少女の破壊的な胸の谷間に埋められるようにして抱かれていた為か、上手くは鳴らない。

いや、それはそれでデルフの動きに合わせて胸が轟感的に振動し、男性には希望を、女性には憎しみを抱かせる動きとなってしまうた。その様子は平静を取り戻しつつあったルイズを大いに苛立たせ、先程才人に見せてはならぬと決めた少女の表情だけでなく、少女そのものを才人に決して見せぬようにしようとして心に誓わせるのである。

「まず最初に、この娘さんの事だな。なあ、嬢ちゃん。前に相棒が“ティファニア”って娘の事を話してたの、覚えてないか？」

「ティファニア……あ！」

「この娘さんがそうさ。嬢ちゃんの傷が水メイジでも治せなかったんでな、相棒が彼女が隠れ住む村まで嬢ちゃんを運んだんだ」

「貴女が……」

「あの、はじめ……まして。大体の事情はこの、デルフリンガーさんに聞いてはいますが、その……わたし……」

言いかけてティファニアは声を萎ませ、再びふにやとつつむいてしまった。

只でさえ、幼い頃より森の奥に隠れ住み、同年代とは話したことのない少女である。

会話をするだけでも恥ずかしいのに、その上他人の話を信じられぬと否定する事に慣れておらず気が引けたのだ。

そんな彼女にデルフリンガーは胸の奥底に挟まれたまま、カタカタを鐺を鳴らそうとして口を挟み込む。

揺れる胸はルイズを更に苛立たせた。

「まあ、いきなり信じろって話しても無理だわな」

「い、いえ！ わたし、信じます！ ただ、その、あまりに突然な話でしたので……」

「……それで？」

「ん？ ああ、そうだな。で、だ。相棒は嬢ちゃんをかかえてここへ来た後、驚くこの娘さんに頼み込んで嬢ちゃんの傷を治したまでは良かったんだ。けどよ、特殊な傷だったらしくてな。嬢ちゃんの意識が戻るのに丸二日かかったというわけさ」

「あの時は、すごく……驚きました。いきなりあの方がやってきて、“外”の人はだれも知らないはずのわたしの名を叫びながら『助けしてくれ』って……血まみれのあなたを抱えて、すごい剣幕で」

「そうだったの……」

「でも、わたしの両親の事やマチルダ姉さんの事とかも全部知っていて。悪い人ではなさそうでしたし……」

「相棒に話を詳しく聞いておいてよかったぜ！ 嬢ちゃん、この娘さんに感謝しろよ？」

デルフリンガーに言われ、ルイズはベッドに上体を起こしたままじっとティファニアの顔を見つめた。

以前才人から聞いていた話の通り、妖精と見まごうほどの美しい容姿である。

彼女こそ、自分と同じ伝説の系統である“虚無”の担い手。

そして、“前”では才人を巡り……

ルイズはそこで視線を外して、黒い情念を追い払うべく頭を振った。

それから、気高い誇りと感謝の念がハッキリとしている内にもう一度、ティファニアを見上げ微笑むのである。

「……ありがとう。改めて自己紹介をしなきゃね。私はルイズ・フ

ランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。よろしくね、  
ティファニア。多分、長い付き合いになると思うわ」

「あ、あの……わたし、ティファニアと申します。もしよかったら  
テファ、と」

「じゃ、私のこともルイズでいいわ。仲良くしましょう、テファ」

ルイズはそう言って、右手を差し出した。

才人の事はあるとはいえ、彼女の不幸な生い立ちや純朴な人とな  
りは聞いてもいた。

ティファニアはかつての自分と同じく、味方よりも遙かに敵の方  
が多い未来を歩む事になるだろう。

いや、もしかしたら目の前の少女が才人の記憶にある娘と同じ人  
生を歩むとは限らないのかもしれない。

しかしルイズは才人から話を聞いた時、この先ティファニアと出  
会うならば友人として付き合っていこうと心に決めていたのであっ  
た。

同じ“虚無”の担い手として。

同じ孤独の苦しみ知る同志として。

一方ティファニアは差し出された手にきよとんとしてしまい、つ  
いで驚きの表情を浮かべ、おずおずと右手を差し出した。

やがてルイズの右手を握る頃には嬉しそうな表情を浮かべ、照れ  
たように白い頬を高揚させるのである。

同年代の友人が居ない生活を送ってきた彼女にとって、それは夢  
のような瞬間であったのだ。

「よ、よろしくね、ルイ、ズ」

「ふふ、私こそよろしく、テファ」

「あ、あの！ 着ていた物は胸元が裂かれていたので、ルイズが寝  
ている間に縫って直しておきました、から。今、杖も一緒に持って  
来ますね」

時間にして数分間の握手の後。

照れてしまったのか、ティファニアははにかみつつ急に思い出したかのようにそう言っ、握っていたルイズの右手を離れた

その時の表情はやはり天使のようであり、同性のルイズでさえ見とれてしまいそうになってしまう。

同時に、確かに彼女との友情は育むつもりではあるが、あまりに強大な敵の出現に焦りを覚えてしまい、嫉妬を表に出さよう気を回した時である。

ルイズはある重要な事を思い出してしまい、つい、服と杖を取りに部屋を出て行くこうとする彼女を呼び止めてしまった。

「ありがとう、テファ。あ、ちょっとまって」

「はい？」

「サイトは今どこ？」

「サイト？」

「私をここに連れてきた奴よ。あいつから目を離したくないの。ついでにここへ呼んで来てくれない？」

「あの……」

意外にもティファニアはルイズの要求にモジモジとして、困った表情を浮かべた。

当然、ルイズの胸の奥がざわつく。

もしかやコイツ、すでに才人の事を？！

嫉妬は焦りとなり、ルイズの心に渦巻いた。

「どうしたの？　もしかして、アイツ、またなんか妙な事に首を突っ込んでるの？！」

「いえ、その……言いにくいんですが……」

「何よ？　言いにくい事って。わかった！　あいつ、また私を放っ



て置いてどっかいつちやったのね！」

え？

ルイズは困惑してしまう。

口を突いて出た予想外の台詞に、だ。

そこは「貴女、サイトの事気に入っちゃったものだから、隠しているんじゃないでしょうね?!」でしょう？

私、何弱気になってるのかしら？

鼓舞するように自身へ突きつけた疑問は、どこか白々しかった。

ルイズ自身、気が付いてはいない。

知らず、あえてその話題に触れないようにしていたことに。

いや、本当は気が付いていたのだ。

だからこそ、これまでその事には触れなかったのだ。

その証拠に、今こそこの期に及んでそうであってほしいという願望を口にしたではないか。

やめて。

そして逃げられぬ現実、彼女を捕らえる。

口を開かないで。

見よ、目の前の妖精の貌を。

悲しそうな、しかしそれがどれだけ大切な物かを理解せぬまま、

悲しみを湛えてしまった貌を。

お願い、やめて。

願いは虚しく、非情な現実、妖精のような少女の口が発する、天上の音色で告げられる。

「違います。その、サイトさん、ルイズをここへ連れてきた直後に死んでしまったんです」

とうとう、その時が来た。

時は一瞬、永遠の長さで止まる。

バクンと一度跳ねた心臓の痛みは、生涯忘れることができないだろう。

「嘘」

己が絞り出したの否定の言葉さえ、聞き取れなかった。

視界が真っ暗になり屋根を叩く雨音だけ、やけに五月蠅かった。

「本当だ、嬢ちゃん。ここにたどり着く前から相棒の体はもうボロボロだよ。あちこちが砂みたいになって崩れて、片手片足になっちまってよ。それでも相棒は、嬢ちゃんをここまで連れてきたんだぜ」

「流石にわたしが持っていた治癒の指輪でも、その状態からは……」

「嘘よ。だって……」

「どんな怪我なのかはわからなかったけれど、その、ルイズを治療している間にもどんどん体が砂みたいになって……サイトさん、それでも先にルイズをつて……」

「う、そよ。そんな……そんなの……」

「その、ごめんなさい。わたしにはどうすることもできなかったの」

「そんな……サイト……サイトオ！」

弾かれたようにルイズはベッドから飛び起きて、わけもわからぬまま部屋を飛び出した。

そのまま小屋の外へと走り出て、使い魔の名を呼ぶ。

外は雨。

愛しいあの背中は何処にもない。

しかしルイズは才人の名を何度も叫び、雨に濡れながらそこかしこを探し続け、そしてついに見つけてしまうのである。

そこは物干し場の近くであった。

大きな木が一本近くに生えており、その一帯だけ不自然に目新し

い小さな砂の山が盛られていたのだ。

砂山は雨に濡れ、地に流れる水と共に森の奥へと流れ出ていく。ルイズには、すぐにそれが才人であったモノだと理解出来た。

たまらずその場に駆け寄り、恋人の名を何度も呼びながら必死に砂をかき集めるも、少女の手は流れ出る砂をせき止めるにはあまりに小さい。

水に流れる砂をなんとかせき止めても、その脇から流れ漏れる水によって砂は儂く散って行く。

しかしルイズは諦めず、同じ作業を何度も何度も繰り返した。愛しい名を口にしながら、何度も何度も。

やがてどれ程の時が経ったであろうか。

砂はすっかり水によって散らされ、ボロボロになってしまった手の中にほんの一握、恋人の残骸が残るばかりとなった時。

少女はやっと、現実を認めてしまうのである。

「いやあああああああああ！！！」

慟哭に雨は、より強く降り注いだ。

サウスゴータの街にルイズが戻って来たのは、“降臨祭”のパレードから五日も経ってからである。

彼女を発見したのはジュリオであった。

パレード中の暗殺騒ぎの時より姿を眩ませていた“ミス・ゼロ”と“盾”<sup>バックラー</sup>の捜索任務に就いていた彼は、サウスゴータ郊外の森をフラフラと幽鬼のように歩く彼女を誰よりも早く発見できたのである。元々ジュリオは主の命により“虚無”であるルイズを影ながら守る為、そして彼女の使い魔である才人の事を見極める為に二人からは目を離さないようにしていたのだったが。

傷ついたルイズを抱え凄まじい速さで街の外へ走り去った才人を見失って以来、久しぶりに見る彼女は見る影もなく憔悴しきっていた。

保護した当初は呼び声になんの反応を示さない有様で、ジュリオは何があつたかを聞くよりも先に風竜に彼女を乗せ、いつもの軽薄な喋りを見せる事無く、そのまま一言も喋らずにサウスゴータに向かうのだった。

サウスゴータに帰投後、彼はルイズを駐留する連合軍の医療部隊の元へ運び、何も言わず何も聞かずにその場を立ち去ったのである。それは真の彼が持つ優しさであつたか、それとも今は何を言っても不興を買うだけであると狂信からくる冷徹さで判断したのかはわからない。

只言えたのはルイズはその間、まるで魂の抜けた人形のように忙と中空を見つめるだけで一言も話そうとしなかつたのである。

医療部隊が使用していたサウスゴータの病院に運び込まれたルイズは、傍目からも判る程衰弱していた。

白い手足は擦過傷だらけ、顔や髪には泥がへばりつき、着ている服はパレードの時と同じ物で酷く汚れボロボロであったのだ。

軍医はそんなルイズの様子を視診して急を要する事もないだろうと判断を下し、とりあえずの治療と健康診断の為看護兵の女性に着替えを手伝うように命じた。

だが、看護兵がルイズが胸に抱え込んでいた荷物らしき品を受け取るうとした時。

彼女は半狂乱になり叫び暴れて、それは軍医のメイジが魔法で眠らせるまでの間続いたのである。

果たしてやっとの思いで眠らせた彼女が守るようにして抱えていた持ち物とは、“アルビオンの黒騎士”が着ていた衣服と小瓶に入った砂、そして自分の杖であった。

報告を受けたポワチ工將軍はルイズの錯乱は直ぐに収まると判断し、何があつたか無理に聞き出そうとはせず、彼女が落ち着くまで査問は行わないとしたのだった。

そして三日後の朝。

ルイズは突如世話をしていた看護兵に湯浴みをしたいと申し入れ、身なりを整えてから司令部に出頭したのである。

「以上があの日<sup>バックラー</sup>の出来事です」

「……そうか。“盾”<sup>バックラー</sup>は“虚無”殿の命と引き替えに死んでしまったのか」

「しかし、何故彼はその場で“虚無”殿を助けず森の奥などに？」

「“盾”<sup>バックラー</sup>はウエールズ皇太子殿下の部下とはいえ、一時は私と同じくアンリエツタ女王陛下の秘密機関“ゼロ機関”に属し、メイジで無いにしても様々な秘術を扱うことが出来るよう訓練しております。特殊な方法で私に己の命を分け与え傷を癒すには、その秘術が衆目に晒されぬよう配慮したのでしょう」

嘘である。

しかし真実を知るのはルイズ只一人であり、本当の事を話す気にはなれなかった。

「いや、しかしだね。たとえそうであっても、君は何故直ぐに戻ってこなかったのだね？」

「ウインプフェン参謀長」

無表情で査問に応じるルイズに次々と質問を投げかけていたウインプフェン参謀長の言葉を遮ったのは、同席していたウエルズ皇太子である。

参謀長の名を呼んだ声色はやや棘が含まれていた。

「彼と彼女の関係を知らぬ貴官ではありませんまい。それ以上は無粋でありましょう」

「……失礼。小官は粗忽な軍人で殿下のような紳士でない故。だが何があつたかを把握しなければ、今後の作戦にも影響がでるやもしれませぬ。なんといつても、彼女は我がトリスティンの“切り札”ですからな」

「……直ぐに戻ってこなかったのは、あの　素晴らしい使い魔を失った悲しみに暮れてしまっていたからです」

今度は真実を口にしたルイズであった。

ルイズは目を覚まし、雨の中才人の欠片を集めた後。

心配したティファニアに付き添われ小屋に戻った彼女は、枯れぬ涙を流しながら才人の形見を受け取り手の内に残った砂を長い間眺めていた。

それが丸一日続いた後、ルイズは涙が涸れたのを機にフラリとウエストウッド村を後にしたのである。

そのまま居てはいずれ連合軍による搜索部隊がやって来るかも知れなかったし、才人亡き今、ティファニアの静かな暮らしを脅かす気にもなれなかったからだ。

本心では才人が眠る地にずっと居たかったが、僅かに残った理性をギリギリの所で働かせ、歩いてサウスゴータの森を抜けたのであった。

途中、亜人に会わなかった事は彼女にとって幸運であると言えよう。

自暴自棄になり、デルフリンガーを置いて一人森を歩いた彼女の心では、きつと戦うよりも死を易く選んだであろうからだ。

「なるほど。私もメイジとしてその気持ち、よくわかりますぞ。良き使い魔との出会いはブリミル様の贈りものでありますからな。どうだろう、参謀長。査問はこの位にして彼女をゆつくり休ませてやるうではないか」

「ポワチ工將軍の言うとおりだ参謀長。ロンディニウム攻略作戦を明後日に控えたこの時期に、くだらぬ査問を開いて“虚無”殿を消耗させてどうする」

ルイズの説明にポワチ工將軍とハイデンベルグ侯爵は同情の意を表し、表面上ではウエンプフェン参謀長を責めた。

しかしその表情の裏では、戦の終盤において目の上の瘤である“英雄”が居なくなり、ほくそ笑む貌がルイズには見えていたのである。

いままでのルイズならば、そのような貌を見つけるや激しい怒りに身を焼き、反発していただろう。

だがこの時のルイズは違った。

不思議と心は平坦で暗く、自分でも信じられぬ程冷静でいられたのだ。

否。

暗く冬の朝のような静寂に支配された心の奥底に張る氷の向こうでは、激しい憎しみの炎がマグマの塊のようになって胎動していたのである。

憎悪は煉獄の炎を生みだし、それ以外の感情をすべて焼き尽くしてルイズに生きる力を与えていたのだ。

そう。

才人を失ったルイズはこの時、失っていた生きる力を取り戻していた。

それは暖かな、包み込まれるような希望と甘い肉欲や愛情に彩られた希望によるものではない。

恋人を殺した相手に復讐する意思が、彼女を前に進ませていたのである。

そんなドス黒い憎悪を前に、目の前の茶番など気にもならないルイズであったのだ。

結局、幾日も延期を重ねた末の査問は早々に終わり、ロンディニウム攻略作戦に向けて十分な休養を命じられたルイズは最後まで表情を見せぬまま退室した。

その背を只一人、憐憫の視線を投げっていたウェールズは何もできぬ己の無力を一人噛みしめていたのである。

その日の夜。

回復を聞きつけたシエスタや“妖精亭”の面々、それにケイトやメアリの訪問からやっと解放されたルイズは、やはり感情を表に出



さぬまま一人部屋に閉じこもっていた。

与えられた部屋はサウスゴータでもっとも豪華な宿の一室で、部屋は実家の自室と遜色無い程広く煌びやかであった。

そんな広い部屋の中央、ルイズはテーブルに突っ伏してワインが注がれたグラスをじっと見つめていた。

側には空となったワインのビンがいくつも転がり、就寝前に嗜むには明らかに過ぎた量を飲んでいる事を示す。

相変わらず平坦な心のまま、ルイズはグラスを揺らしユラユラと揺れる注がれたワインの水面を眺めて、ぼんやりとその日の出来事を思い出していた。

その日面会にやって来たシエスタや他の女の子の顔を思い出していたのである。

どの顔も心配そうな顔から泣き顔に変わっていた事が印象的であった。

どうして！ どうしてサイトさんが死ななきやいけなかったんですか！ 答えて！ ミス・ヴァリエール！ どうして！

シエスタのくしゃくしゃになった泣き顔。

そんな……サイトが死んだなんて……

ジェシカとスカロンの悲しそうな顔。

なんでだよ！ なんて嘘をつくんだよ！ アイツが死ぬ訳ね

えだろ！！

メアリ。……“ミス・ゼロ”。お気持ちはお察し致します。

私も、残念です。

涙を堪え激高するメアリと、同情ではない悲しみの涙を一筋流したブロウ准尉の顔。

「誰も彼もサイト、サイト、サイト……」

何となくとはいえ、その名を口にしたのが不味かった。

憎悪の炎に焼かれたはずの感情が再び息を吹き返し、新たな炎と

なつて彼女の凍つたはずの心を焦がすのである。

サイト……サイト、サイト、サイトサイトサイト！

会いたい。

逢いたい。

サイトに逢いたい。

サイトの声が聞きたい。

サイトの匂いを嗅ぎたい。

サイトの手に触れたい。

サイトにキスをしてもらいたい。

サイトに抱きしめて貰いたい。

サイトと一緒に眠りたい。

サイトに抱いて貰いたい。

溢れる感情は涙となつて、突つ伏したテーブルに止めどなく流れていった。

もう一度サイトに逢いたい。

もう一度サイトの声が聞きたい。

もう一度サイトの匂いを嗅ぎたい。

もう一度サイトの手に触れたい。

もう一度サイトにキスをしてもらいたい。

もう一度サイトに抱きしめて貰いたい。

もう一度サイトと一緒に眠りたい。

サイトに抱いて貰えばよかった。

叶わぬ想いは切なさとなつて、彼女の精神を苛む。

何故、私はもつとサイトと話さなかつたのだろうか？

何故、私はもつとサイトに触れなかつたのだろうか？

何故、私はもつとサイトにキスを強請らなかつたのだろうか？

何故、何故、何故。

酔いと激情でぐちゃぐちゃになつた頭の中で、幾つもの後悔と昼間見たシエスタやケイト、メアリ達が泣き顔のままルイズを責め立てた。

流れ出る涙は止まらず、軋みを上げた心が嗚咽となって口を突く。

「ルイズ……」

不意の呼び声にルイズは泣き顔のまま、気怠げにそちらへ視線を移した。

侵入者に対しての警戒は見られない。

ワインと自棄になった心の為、心底どうでも良かったのだ。

声の主はいつからそこに居たのか、部屋の入り口に立っていたのはなんといつか見た白いローブを纏った女。未来の自身であった。

ルイズは意外な、そしてもっとも会いたくない人物の訪問に、突っ伏していたテールブルからゆっくりと上体を持ち上げて涙が溢れる瞳に敵意を込めた。

「ルイズ……時間が無いの。私の話をそのまま」

「何しに来たの？ サイトを死なせた私を責めに来たの？！ それとも笑いにきた？！ アンタの顔なんて見たくも無いわ！ 出て行って！！」

相手の言葉を遮るようにルイズは叫んでいた。

まるでそれまでの激情を吐き出すかのような怒声は、自身を更に刺激して八つ当たり同然の怒りを増幅させ、罵倒を紡ぐ。

扉の向こうには見張りの兵が居る筈であったが、部屋に踏み込んで来ないのは音が外に漏れないよう未来のルイズが何かした為であるのか。

「お願い。ルイズ、話を聞いて。私の……時間が残っている内に」

「うるさい！ うるさいうるさいうるさい！！」

「 サイトは、まだ、死ん いないわ」

ルイズの時間は止まった。

静寂が部屋に戻ってくる。

白いローブを着た未来のルイズは一拍置いて、口をひらく。

しかしその声は途切れ途切れで聞き取れず、よく見れば“幻影”なのだろう、その姿も所々が透けてまるで幽霊のようであった。

「私のルーンは イズ、あなたが居る限り消えな」

「聞こえないわ！ 何を言ってるの？！ サイトが生きているって どういうこと？！」

「ねがい。思い出して。貴女の使える“虚無”で は再び」

「“虚無”？！ 私の魔法でサイトは生き返るの？！」

「サイ 傷は、体の修復が出来なく を取り除けば」

「わからない！ 何を言ってるの？！ わからないわ！ お願い！

私はどうすれば」

虫食いのような未来の自分の言葉にルイズは業を煮やし、より近くで聞こうと酔いが回る頭のまま立ち上がった時である。

目の前にいた白いローブを着た自分は、まるでろうそくの火を吹き消すかのように呆気なく消えてしまった。

「まって！ お願い！ 行かないで！」

先程までの憎悪を忘れ消えた自分が立っていた所まで駆け寄り、思わず呼び止めたルイズであったがしかし。

二度と未来の自分が目の前に姿を表す事はなかった。

ルイズは僅かに見えかけた希望を取り上げられたような気がして、全身の力が抜け思わずその場にへたり込んでしまう。

美しい鶯色の瞳からは先程よりも大粒の涙があふれだし、カーペットを濡らした。

遅れて漏れ出した嗚咽と恋人を呼ぶ声は絶望に彩られている。

「ふむ。たまにはこういった貴腐ワインも良いな」

背後でどこか聞いた事のある声があった。

矢継ぎ早に現れる予想外の訪問者に、ルイズは驚く間もなく意思を酔いと絶望に痺れさせながら声のする方へ頭を振るのである。

そこに居たのは見覚えのない、漆黒のローブを纏った女であった。女は深くフードを被り、先程まで自分が座っていた椅子に腰掛け飲みかけであったワイングラスを煽っている。

「誰？」

「ひひ、久しぶりじゃの。儂じゃ。『時の魔女』じゃ」

「……なんの用？ 私、今誰とも会いたくないの」

「何。あの男の様子を見に、の」

魔女はそう言うと、ゾットとする程白く艶めかしい指でテーブルの上に置いてあった小瓶を摘み上げた。

ルイズは慌てて駆け寄り、ひつたくるようにして魔女から小瓶を取り返し瞳に憎悪を込め睨み付ける。

しかし魔女は気にもせずひひと笑い、ローブの中の闇に手を引っ込めてゆっくりと立ち上がった。

「流石は“神の頭脳”が作り出した魔弾じゃの。きつちり、“グリムニルの槍”の活動を抑えこんどるわ」

「な?! あなた、今なんて!？」

「くく、良いのか？ 今はそんな“些細”な疑問を満たす為、儂を問いただす余裕がお主にあるのかえ？ ひひ、次の瞬間には儂は消え失せてしまっやもしれぬのに」

魔女の言葉にルイズは喉まで出しかけていた言葉を飲み込んだ。

つい先程、未来の自分の言葉をキチンと聞こうとせず、見えかけた希望を手放したかも知れないと後悔したばかりであったからだ。

『時の魔女』ノルンはそんなルイズの態度にふん、と鼻を一つ鳴らして、くぐもった笑いを発しながら空になったグラスにワインを注ぎ、一口口を付けた。

「む。こちらは辛口じゃの。ちゃんぽんに呑むと口をバカにするぞ？」

「……用件は何？ 話したい事があるんでしょ」

「ひひ、一瞬で随分と聞き分けが良くなったの。まあ、お主がしておる想像の通りじゃ」

「さつさと終わらせて」

「くく、そうあわてるな。ちよいと、義理を通しに来たのよ」

「義理？」

「左様。あのお人好しには随分と世話に“なる”からの。礼といつてはなんだがいくつかお主に教えてやろうとおもつての」

「だから、何をよ？」

「一つ。先程のルイズは儂が連れてきてやったのよ。本人にはもう、力は残っておらなんだからの」

「どういう事？」

「何。死期がすぐそこまで迫っておるで。色々と楽しませてもらうた礼に最後の願いとやらを叶えてやったんじゃよ。ひひ、どうじゃ？ メッセージは伝わったかえ？」

ルイズは言葉を無くしてしまった。

まさか、先程のあれが未来の自分の最期の言葉であろうとは夢にも思わなかったからだ。

自分勝手な行動に嫌悪感さえ覚えた相手を想い、ルイズは苦く眉をしかめた。

今ならばわかる。

サイトを失う辛さを。

きつと自分もまた、それが世界中の人間に自分勝手だと誹られようともしその命を繋ぐべく、如何な非道な手段に手を染める事になるうともがくであろう。

まして添い遂げ、他の女性の元へ夫を送り出し、それでも愛を貫いた一生を送り、その最期において二度も愛しい人を失う辛さは想像を絶する。

なのに

私はそんな大切な彼を、死なせてしまった。

「その様子からすると、メッセージはまともに伝わっておらんようじゃな。くく、まったく人のさだめとは儂いものじゃのう」

「言葉は途切れ途切れだったわ」

「なんじゃ、まるつきり無駄でもなかったか。……いや、今際の際の精神力でようやくたたと褒めてやる所か。ひひ、仕方無いの、では一つ良い事を教えてやろう」

言つてしかし、ノルンはその身体を徐々に透かせていく。

どうやら彼女も又、早々にこの場を立ち去るつもりらしい。

「よいか？ 儂は以前“グリムニルの槍”をあのお人好しに与えた折、寿命を迎えるまでは“絶対に死なぬ”と言つた。そう、“絶対に”にの。儂はウソはついておらん。そして先程の“ルイズ”の言葉。その二つをしかと噛みしめるが良い」

「まっつて！」

「くく、これ以上はダメじゃ。“神の頭脳”にも甘い希望を舐めさせてやらねばの」

やがて『時の魔女』はくぐもつた笑いを残してその姿を完全に消し、再び部屋にルイズ一人が残されたのである。

ルイズはしばしそのまま抱え込んだ小瓶の中に納められた、恋人の欠片を見つめた。

しばらくそうして立ち尽くしていた彼女であったが、徐に空になったワイングラスを手に取ってベッドの脇に置いてある水差しから水を注ぎはじめた。

それから、ワイングラスに注がれた水を一気に煽り、更に三杯ほど継ぎ足しながら喉に流し込むのであった。

悪い酔いはそれでも晴れなかったが、意識は少しだけ明瞭になった事をルイズは確認し、徐にテーブルの上に散乱していたワインのビンを思いつきりその手でなぎ払う。

いくつかのビンは中に入っているワインを派手にまき散らし、床に落ちて高価なカーペットを血の色に染めていった。

そんな事など気にも留めずルイズは再びテーブルについて、羊皮紙とペンを用意し必死に何やら思い起こし書き留めて行くのである。

近くおぼろげな記憶の中、未来の自分が確かに遺した言葉を探し出して。



始祖暦六千二百四十三年、ヤラの月第二週はヘイムダルの週、イングの曜日。

“降臨祭”の休戦協定が開けた三日後、連合軍はロンディニウム攻略戦を開始していた。

連合軍六万の兵を迎え撃つはアルビオン軍五万の兵である。

それまでは消極的な戦略を採っていたアルビオン軍であったが、連合軍の予測に反し意外にも籠城せず打って出たのだった。

結果、主戦場はロンディニウム南部に延びるサウス・ケートナム街道となり、両軍は遂に決戦を開始する運びとなる。

しかし、そこに“アルビオンの英雄”の姿はなかった。

「報告！ 我が軍は作戦通り敵前衛を包囲殲滅中です！」

「敵後衛に動きは？」

「ありません。こちらの包囲網の外から攻撃を行う気配すらみせておりません！」

「むう……」

伝令兵からの報告を聞いて、総司令官であるポワチ工將軍は美髯をしいて唸りをあげた。

戦局が悪いわけではない。

アルビオン軍のあまりに稚拙な用兵になにか裏があるのではなからうかと疑って居るのである。

「將軍！ 何を迷っておられる？！ ここは一気に後方部隊の一万余も包囲網の中に投入し、敵を早急に殲滅するべきですぞ！」

「私もハルデンベルグ侯爵の意見に賛成です。敵が何を考えていようと、兵を二分し、こつも距離を明けて布陣しては如何なる策を用いようと挽回する事は不可能かと」

そう。

戦況は連合軍にとって圧倒的に有利に進んでいた。

両軍が激突した当初、アルビオン軍は兵を二分し、一方の二万を突出させる形で布陣していたのである。

当然連合軍はこれを包囲する形で布陣し、もたつき鈍い動きをみせるアルビオン軍後衛三万を尻目に四万の軍で一所に固まる二万の兵を包囲攻撃をしかけ、各個撃破に出ていたのだった。

「うむ、私もそう思うのだが……どうも敵軍になにか意図があるのでしょうか思えなくてな」

「確かに、敵軍の用兵は素人以下であろう。しかしポワチエ將軍、それが罫であるとしてこの状況、以下にしてひっくり返せると？」

「ハルデンベルグ侯爵の言うとおりです將軍閣下。サウス・ケータナム街道は草原を突つ切る形で伸びております。付近に大部隊を隠せる地形ではございませぬ。また、敵後衛は主戦場より後方十二リグの位置にあつて、殆ど動いておりませぬ」

「うむ。だからこそ、敵の意図を掴むまでは後衛を投入したくはないのだ。幸い、現状でも我が軍は有利であるからな」

「だがポワチエ將軍。用兵は速さが命ですぞ。敵を殲滅するには炎のように速い程良い」

「侯爵。情報も重要です。いくら炎のように速く敵を殲滅させようとて、水の中に行軍しては元も子もありませんまい」

「ふん。情報に振り回されすぎては勝てる戦も勝てぬわ」

「では將軍、こうしてはいかがでしょう？ 敵軍が何かを謀つ

ているとして、それは伏兵の一種であろうと思われる。たとえば直接この司令部を襲撃するといった具合です」

「うむ」

「そこで、我々も後衛と一緒に包囲線に参加するのです」

「しかしウエンプフェン参謀長、後方の守りはどうする？ 別働隊が居るならば司令部が挟み撃ちに遭う可能性が出てくるぞ？」

「そこは抜かりありませんよ、將軍閣下。それこそ、“虚無”を使用すればよろしいかと。つまり、後方に別働隊を補足した場合、“虚無”にこれを攪乱させ、その間に我々が体勢を整えればよろしいではありませんか」

ウエンプフェン参謀長の提案にド・ポワチエ將軍は再び唸った。

確かに侯爵やウエンプフェン参謀長の言うとおりだ。

この戦況をひっくり返すとしたら、司令部の強襲を行う以外にはありえぬだろう。

とすれば、敵軍は我らの油断を誘っている？

……いや、それでも無理だ。

サウス・ケートナム街道周辺の草原は兵を隠すなど不可能であるうし、空から突破を謀ろうとてこちらの航空戦力は数の上では敵を凌ぐ。

いや、しかし……

……さて。おれはもしかして、元帥杖を目の前に慎重になりすぎているのか？

あの“アルビオンの黒騎士”はもう居ない。

この戦、残る戦果はロンディニウムとクロムウエルの首だ。

その二つを押さえれば、わがトリステインの取り分は大きな物となるだろう。

そうだ。

ここは迷うべきでないのではないか？

「……わかった。参謀長、後衛の部隊に連絡だ。これより司令部と共に前線にむけて移動する。“虚無”はどうか？」

「サウスゴータにて待機中です」

「使えそうか？」

「与えた室内にて奇行が目立つとの報告があり、それ故後方待機としておりましたが概ね落ち着いているようです。現在は第三竜騎士中隊が護衛に就いております故、戦場に投入するとして一時間以内にも可能です」

「よし。出撃の準備をさせたまま待機させておけ。もし敵の別働隊がなんらかの方法で我が軍の後方に現れた場合、“幻影”をサウスゴータ側から使って牽制させよ」

命令を下しながらポワチエ將軍は席を立って、足早に軍議用の天幕を後にした。

心は既に戦功殊勲式に向けて想いを馳せている。

それは彼に続くハイデンベルグ侯爵やウエンプフェン参謀長も同じであった。

そして軍議の決定はルイズにも伝えられ、戦局が動き始めるのである。

一方、その頃。

アルビオン軍の司令部が置かれている後衛の陣中では、開戦からひっきりなしに伝令兵が皇帝専用の天幕へ出入りをしていた。

驚いた事に神聖アルビオン共和国の命運を左右するこの一戦において、なんと皇帝オリバー・クロムウェル自らが兵を指揮すべく戦場に玉体を置いていたのである。

皇帝自らが前線に立つ事を意味する皇帝の天幕は一際豪華で、忠誠を誓う兵達の士気を大いに盛り上げるのであった。

しかし、その天幕に出入りする伝令兵の表情は時を追うごとに暗く、厳しい物となってゆく。

無理もない。

彼らは最前線で連合軍により、包囲されている前衛部隊の戦況を伝えていたからだ。

「報告！ 敵後衛部隊、前進の動きを見せております！」

片膝をつき報告を行う兵の表情はいよいよ青ざめて、当初のような覇気は見当たらない。

しかし、そんな伝令兵の報告にクロムウエルは総司令官の席に腰を落としたまま、満足げに頷いた。

対照的に傍らに立つホーキンス將軍は、苦々しく口の端を結ぶ。いくら“切り札”の為とはいえ、兵達を半数以上も見殺しにするような作戦を選択していたからである。

「包囲した我が軍前衛部隊にトドメを刺すつもりか。前衛部隊の被害状況は？」

「正確な数はわかりませんが、敵艦隊と交戦中の哨戒艇からの目測による報告では、半分は既に……」

「……この短時間に我らは一万の兵を失ったというのか」

苦く呟きホーキンス將軍は奥歯を音がするほど食いしぼり、目を強く閉じた。

歴戦の將軍とて前例の無い程の数の兵を、囷として使う事に耐えるには相応の忍耐を必要としていたのである。

そんな彼の様子を察してか、クロムウエルはホーキンス將軍を見上げ慈愛を込めて、慰めるように話しかけた。

「將軍。気持ちわかるがもうすこしの辛抱だ。余も兵達を失うのは辛い」

「……は」

「“アルビオンの黒騎士”はもういない。前衛部隊にだって極力、

亜人の部隊や囚人部隊を配置している」

「……それでも、彼らを率いる部隊長達は我らレコン・キスタの貴族です」

「それもわかっておる。だが、勝利の為だ。古戦場でもあるサウス・ケータナム街道を決戦の地として選んだ理由、忘れたわけではあるまい？」

「は。忘れてはおりませぬ」

「余の“切り札”は生者を贄に“鋼鉄の死者”を呼び出すものだ。

その数は多い程よい。かつてサウス・ケータナム街道の会戦で命を落とした者達は、記録によれば十万は下らないそうだ。そこに前衛を囿として敵軍を集結させ、なるべく多くの命を捧げる必要がある」

「囿となった兵達もろとも、ですか？」

「ホーキンス将軍。先に申した通り、余も辛い。だがこの戦、絶対に負けるわけにはいかぬ」

「承知しております。……しかし」

「大丈夫だ。戦が終われば余の“虚無”で死んだ兵達は生き返らせよう。何年かかろうとも、な」

流石のホーキンス将軍も、クロムウエルの言葉には黙らざるを得なかった。

彼はクロムウエルの“虚無”により人が生き返る所を確かに見ていたからである。

勿論事實は違う。

クロムウエルは“アンドバリの指輪”の力により、死者を操っていたに過ぎない。

だが、ホーキンス将軍をはじめレコン・キスタに属する者達にはそれが奇跡にしか見えぬ、現在に至っても未だその力を疑う者は居なかった。

「報告！ 包囲中の我が軍前衛部隊に向け、敵後衛部隊の前進を確

認いたしました！」

報告にクロムウエルは勢いよく立ち上がる。  
待ち望んだ時が遂に訪れたからだ。

万を超す大部隊を動かすとなれば、進行方向を早々に変える事は  
難しい。

敵軍を丸ごと死者の軍にする事も出来たが、それでは陰に恐怖と  
辛酸を舐めた傲慢な小心者の気は収まらなかった。

見ておれ愚か者ども。

余が作りだす死の軍隊に何も知らず、無防備に突っ込むが良いわ。  
そして死ぬ。

余に杖を向けた事を後悔しながら、生きながらに地獄を見て死ぬ  
がよい！

「頃合いだ。全軍に伝令。南の方角を見よと伝えよ」

「はー！」

「ホーキンス將軍。いよいよ反撃の時だぞ。余の“虚無”が完成次第、軍を進めたまえ。余の“鋼鉄の死者”の軍に襲われぬよう、まじないの札を持たせてな。土足で我らの国土に踏み入った者らを一  
人残らず殲滅せよ。慈悲をかけるのはここまでだと言つ事を教えて  
やるのだ」

「御意」

ホーキンス將軍は深々と頭を下げた。

クロムウエルは高揚する気持ちを抑えながらもそのまま天幕の外  
へ出て、天を仰ぐ。

時刻は午後二時位か、太陽は高く先日の雨が嘘のような快晴であ  
る。

視線を戻すと目の前には整列する兵達の姿があった。

皆、前線の戦況を知っているのだらう。

どの顔もすがるような表情で、皆の視線が“虚無”を扱うという皇帝に集まる。

そんな彼らにクロムウエルは余裕を湛えた表情を変える事無く、徐に大仰な仕草で左手を天に翳した。

握った拳、中指に見えるのは銀の土台に設えられた黒い宝石の指輪である。

指輪の名は“ナグルファルの指輪”。

『時の魔女』ノルンが“アンドバリの指輪”の替わりとして用意した品だ。

古の言葉で“死者の行軍”を意味するその指輪は、持ち主の意思を汲み取って妖しく輝き始める。

すると突然、太陽の光が何かに遮られ、辺りは一瞬で夜のような闇に覆われてしまった。

驚いた兵達が空を見上げると、あり得ない事に太陽が黒く塗りつぶされたように輝いていたのである。

日食が起きたかのようなその光景は見る者に言い知れぬ不安を煽り、不吉な何かを予感させた。

最も早く予兆に気が付いたのは、最前線で戦う連合軍の兵士と包囲され窮地に陥っていたアルビオン軍の兵士達だ。

突如太陽が黒くなり夜になったかと思えば、今度は地面が赤く光り始めたのである。

赤い光は禍々しい血の色をしており、命の奪い合いを行っていた者達が思わず手を止めてしまう程、そこかしこで光が地の底から漏れ出していたのだった。

その様子を空から見ていた戦列艦のある士官が、大地から漏れ出す光が繋がり、点から線となって何かの魔方陣を象っていると叫んだ時。

地上は一瞬で地獄と化した。

信じられない事に、命を落として地に倒れ伏していた兵が次々と起き上がり始め、敵味方関係無く、周りの者に襲いかかってきたの



だ。

否、それだけではない。

地の底から夥しい数の白骨と化した死体が湧き出て、こちらも生者に攻撃をしかけてきたのである。

しかも驚いた事に、彼らはアンデッドのような単なる“動く死体”などでは無かった。

仮初めの生を得た彼らは立ち上がるや、まるでメイジの“錬金”のような魔法を杖も無しに使い、全身を覆う鋼鉄の鎧と歪な武器を作り出して武装したのである。

死者達が纏う鎧は皆同じデザインで、中身が新鮮な死体であろうが、白骨化した死体であろうが区別無く、まるでオーク鬼のような力強さと俊敏さで動き次々と兵士達を屠っていった。

しかも鎧は硬く強固で、マスケット銃おろかゴーレムの一撃にも耐え、炎や氷の矢も通さずましてや魔法も使えぬ人や亜人の攻撃など全く歯が立たたず、兵達は為す術も無く蹂躪されてしまうのである。

「なんだ?! こいつら」

「ひ、退け! 退けえ!」

「くそ! 弓も槍もきかねえ!」

「魔法もだ! 鉄砲も……一体どうなって　うがあ!」

「ひ、ひ、やめろ! やめてくれジョージ!」

「助けてくれ! 誰か!」

“鋼鉄の死者”達は至る所で湧き出て、虚ろな目に映る生ける者を串刺し、両断し、引き裂いて血を浴びる。

ある者はかつての友人に、またある者は先程トドメを刺した敵に、古戦場で散った古の勇者に、殺され、立ち上がり、鉄を纏って新たな犠牲者を作り出していく。

手足を失った死者であっても鋼鉄の鎧の籠手やレギンスブーツで

補い、殺戮の宴に身を投じて死の連鎖は瞬く間に広まっていった。その数はみるみる内に膨らんで行き、司令部を含む連合軍の後方部隊一萬が前線に到着した頃には、“鋼鉄の死者”の軍勢は十五万に達しようかと言う程の数となっていたのである。

サウスゴータの北、五リーグの地点。

ロンディニウムへと続くサウス・ケートナム街道上に一人佇む少女が居た。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールその人である。

彼女は只一人、壊走した連合軍の殿を務める為、“前”と同じように万軍に挑もうとしていたのであった。

決戦に敗れた連合軍はクロムウエルが作り出した“鋼鉄の死者”の軍勢に為す術無く、その数を大幅に減らしながらも、サウスゴータまで撤退を余儀なくされていたからだ。

不幸中の幸いか、“鋼鉄の死者”が現れたのは決戦の序盤であった為、連合軍の航空戦力にはまだ余力があった。

撤退戦の最中、味方戦列艦による砲撃の支援を受けた連合軍の地上部隊は、なんとかサウスゴータにたどり着く事が出来、そのまま艦隊と共にロサイスへ向けて進軍していたのである。

ルイズには戦死し、“鋼鉄の死者”の一員となってしまうたポワチエ将軍の後を引き継いだウエンプフェン参謀長によって、連合軍の撤退を支援すべく迫り来るアルビオン軍に只一人、その行軍を食い止めるよう命令が下されていた。

“鋼鉄の死者”の軍勢の行軍を最後まで戦場に残り押し止めていた戦列艦が沈んだ為、敵の進軍は疾さを取り戻し、既に遠目にも夥しい数の死者達が確認できる。

“前回”ならばルイズの替わりに才人がこの役を引き受け、その命と引き替えに成し遂げるのだが。

しかし今、彼女の隣には“ガンダールヴ”の姿は無かった。才人が生き返るかも知れないと教えられ、その答えを求め続けたこの数日間。

ルイズは遂に解答を得る事が出来ず、才人の欠片が入った小瓶を胸に抱え戦場に立ってしまっていたのだった。

「ごめんね、サイト。情けないご主人様で」

呟きは前方から吹く生臭い風に散らされる。

己の無力に散々泣いた後なのだろう。

声はかすれ、漏れ出した言葉には絶望が纏わり付いていた。

「でも、一人にしないから心配しないで。いまからそっちに行くから。案外、天国の方が楽しいかもね。だって、サイトを盗ろうとするライバルは居ないもの」

言って、ルイズは懐の奥にある小瓶を服の上から愛しげに撫でた。先程までは力尽くでも彼女を連れて行こうとしていたジュリオが居たが、ルイズの“忘却”により偽りの記憶を与えられ、今頃は口サイスに向けて撤退中の連合軍に合流している事だろう。

結局、未来の自分と『時の魔女』が示したもものから、サイトの復活に繋がる答えを導き出せなかった。

未来の自分は言った。

サイトは体を再生させる事ができない状態である事。

“虚無”を使えば元に戻せるだろうという事。

ルイズは最初、才人の再生を妨げる何かを特定し、“エクスプロージョン”を使ってそれだけを消し去ろうと考えた。

しかし対象があまりに小さく、またソレがどのような物なのか検

討も付かなかつた為に断念したのである。

かといって他の“虚無”はどうかと言えば、どれも才人の復活につかえそうなものではなかつた。

ここ数日そうしたように、ルイズは目を閉じて未来の自分から託された杖に尋ねる。

すると杖は彼女の脳裏に、いつもと同じように“虚無”の魔法を提示したのであつた。

爆発により、物体を破壊する“エクスプロージョン（爆発）”。

魔法効果を打ち消す、“デイスペル”。

幻影を作り出す、“イリユージョン”。

異世界と行き来をする、“ワールド・ドア世界扉”。

人の記憶を操る、“忘却”。

物に込められた他者の記憶を顕現させる、“リコード記録”。

人智を越えた速さで動く、“加速”。

文字通り空間を瞬時に移動する、“瞬間移動”。

任意の場所にルーンの反動によるダメージを集める“犠牲”。

ゴーレムなどに使い魔のルーンを刻む、“使役”。

精々、使えそうなのは“デイスペル”位な物だ。

当然、ルイズはこれを試したが小瓶の中の砂は何の変化も起こらなかった。

「 サイト。本当に、ごめんね。もしかしたら生き返るかもしれないのに、助けてあげられなくて。何も、してあげられなくて。でも……」

視界が滲む。

一向に枯れ果てる気配の無い涙があふれ出てきたからだ。

しかしその涙は拭われる事無く、ルイズは強く握った杖を前に突き出した。

視線の先、随分と近くまで“鋼鉄の死者”の軍勢は迫っている。

その数はおよそ十五万。  
後方にはアルビオン軍の兵士三万が追隨して、文字通り地を埋め  
尽くす大軍勢だ。

「でも……そんなあなたに報いるとするのなら、私はこの命をあなたに捧げるわ。戦場で死ぬのは姫様の為、国の為、貴族なら当然の事だけど……でも、今、この時だけはサイト、あなたの為だけに」

呟いてルイズは目を閉じ“エクスプロージョン”を詠唱し始めた。  
敵軍との距離はまだ大分開いている。

長い詠唱を行う必要のある“虚無”とはいえ、十分な時間は用意されていた。

ルイズは体中の精神力をかき集め、己の命をも使い切らんと詠唱の先にある力の奔流へ意識を向ける。

悲しみ、怒り、憎悪、後悔、嫉妬、嫌悪と様々な感情が渦巻き、力となってゆくのが感じられた。

そして、敵の姿が数百メートルにまで迫った時。

超特大の“エクスプロージョン”は完成し、“鋼鉄の死者”達を包み込んだ。

虚無の光はまるで地上に落ちてきた太陽の如く巨大で、目に入る景色全てを包み込む。

強烈な光は視界を消し、音を消し、敵消し、そこにある全てを消し去って、吹き戻しの暴風を発生させた。

ルイズは短く呻き、膝をつく。

命まで投げ出す勢いで“エクスプロージョン”を唱えた彼女だったが、以前未来の自分より貰っていた半分の精神力で魔法を行使できるという“反響の指輪”のお陰か何とか意識を繋いでいたのである。

しかしルイズは体力も相当使ったのか、膝をついたまま動けずに

居てじつと吹き戻しによつて発生した土煙を睨み付けて……その向こうから鎧を纏った死者達が勢いもそのままに迫り来るのを確認し、歯を嚙むのであった。

“エクスプロージョン”が“鋼鉄の死者”に通用しなかったのは無い。

“鋼鉄の死者”の数があまりに多かつた為、いかに特大の“エクスプロージョン”であっても、彼らを殲滅するどころか先頭の一部を消し去つたにすぎなかつたのだ。

膝を折つたルイズに向かって“鋼鉄の死者”達が殺到する。

その距離は既に百メートルを切つていた。

精神力が底を尽きかけている事を除いても、“エクスプロージョン”をもう一度詠唱する時間は無いだろう。

もやは、これまでか。

ルイズは諦めの境地に至り、せめて最期は才人の事を想い過ぎそうと目を閉じた。

瞼の裏にはすぐ、あの愛しい笑顔が鮮明に浮かぶ。

だが、この期に及んで笑顔は暗く曇つてしまった。

大丈夫よ、サイト。

私、後悔してないわ。

うつん、あなたに出会えて良かったと心から思つてる。

シエスタや殿下は最期まで付き合つてくれようとしてたけど、私に付き合わせることもないから必死にお願ひして逃げて貰つたわ。

サウスゴータの人たちだって、一人の犠牲者も出ずに街の外へ逃げ出しているはずよ。

だから何の心配も

そこでルイズの思考は止まった。

もう一度だけ、才人の笑顔を思い出そうとした事が、彼女に閃きをもたらしたのである。

目を開くと“鋼鉄の死者”達がすぐそこまで迫つて来ていた。

ルイズは急いで才人の欠片が入つた小瓶を取り出し、蓋をあけて

地に撒いた。

それから枯れかけた精神力を使い、短く詠唱を口にしながら地に撒いた砂に指を埋めて一本、縦に線を引く。

そんな彼女の頭上に迫るのは、“鋼鉄の死者”が振るう大きな先頭斧。

だがその斧は彼女の小さな頭どころか、ふわふわのピンクブロードの髪の毛一本すら、切断する事はできなかった。

「わっぷ！ な、なによコレ?!」

突如頭上から降ってきた砂にルイズは思わず目を閉じて頭を振った。

それから次に目を開いた時、信じられない光景を目の当たりにするのである。

だがしかし、その景色にどこか既視感を覚えたルイズは、止まらぬ涙の味とソレを見て全てを理解した。

なぜならば。

目の前にあつたその背は流れ出る涙を止める為に幾度も立ち上がってきた背中なのだから。

闇の中、才人は虚ろに漂っていた。

そこに在るものは多くは無い。

光りは無く、五感も無く、過去も無く、未来も無く、音も無く、苦痛も、安らぎも無い世界。

かろうじて認識できているものは、僅かな自我と耳の奥で響き続ける虚無の唄。

ここへ来る前、激しい焦燥と失う事への恐怖、そして薄れる意識の中で覚えた安堵は確かに才人を突き動かす力であったのだが、今はもう綺麗さっぱり消え去っていた。

唐突に。

目の前に周りの闇よりも更に濃い闇が現れた。

闇は如何なる形を象っているのか見当もつかなかったが、不思議とその声だけはよく聞き取れた。

「答えは出た？」

聞き覚えのある声。

遙かな昔、“彼女”が赤子の頃からずっと何度も聞いてきた声である。

彼女は母親譲りの蒼い髪が自慢の、美しい娘であった。

君は……

「ねえ、貴方は今満足してる？ 幸せ？」



わからない。よく、思い出せないんだ。

「まあ！ 非道い！ 私達だけでなく、ルイズおばさまも忘れてしまっ  
まうなんて！」

ル……イズ……

「本当、人でなしね、貴方つて。私達が生まれてくる必要はないつ  
て事にしようとした上に、散々泣かせたルイズおばさまをもう一度、  
沢山泣かせるつもりなのね」

俺は……

言葉は出ない。

思い出せない。

何か大切な事であるのは確かだが、思考が働かないのである。  
闇は呆れたように揺らめいて、才人の耳元で何かを囁いた。

「なに？ とうとう自分の名前すら忘れちゃった？ いいわ、教え  
てあげる。貴方はヒラガ・サイト。シャルロット・エレヌ・オル  
レ안의夫となる者よ」  
「ちがう！」

突如、闇色の少女を否定する幼い少年の声が上がった。

つい先程まで耳元で囁いていた闇が、己の発した言葉を自身で否  
定したのである。

その声も又、聞き覚えのある声であった。

遙かな昔、幾度も“彼”とラグドリアン湖で釣りを楽しみ、戦い  
方を教え、“彼”と同じ年月を経たワインを共に味わい、笑い合っ  
た声である。

彼は母親譲りの心の強さが自慢の、快活な少年であった。

「ヒラガ・サイトはアンリエッタ・ド・トリステインの夫だ！」

「あら？ そうなの？」

「違うわ！ お父様はティファニア・ウエストウツドの夫となる方よ！」

「えー！ パパ、シエスタの旦那様になるんじゃないの？」

闇は、目まぐるしく姿を変える。

そしてそのどれもが、聞き覚えのあるかけがえのない思い出の中にあつたはずの声だ。

たった一人の彼らの声に、才人は何かしら感情を取り戻す。

それが愛情なのか、後悔なのか、嫌悪であるのかはわからない。

ただ、彼らの声を聞きハッキリとしてきていたのは、何かを取り戻さねばならないという事だけだった。

俺は……平賀、才人……

「そう。貴方はヒラガ・サイト。自分の人生を否定する為に過去へ戻った、愚か者よ」

「父さんの人でなし！ 僕なんか生まれなくてもいいって思っているんだ！？」

「見損ないましたわお父様！ あれ程私に愛しているとおっしゃっていたのに、どの面をさげて『ルイズだけを愛する』と言えたのかしら？！」

「パパのバカ！ どうしてママを泣かせるの？！ ルイズおばさまはよくてどうしてママはダメなの？！」

闇達は、一斉に才人を罵倒し始めた。

その、一言一言はむき出しとなった才人の心を深く鋭くえぐる。

才人は思わず耳を塞ごうとしたが、手の感覚も無く、果たして自分分は耳を塞いでいるのかそうでないのかもわからない始末である。

結局、闇以外に見えるものは更に濃い闇の中、ただ苦しむ以外になにもできなかつた。

違う。俺は……そんなつもりじゃ……

「じゃあ、どんなつもりだったの？」

それは……

「答えられないでしょう？ だって、事実だもの。たとえば、私達の存在を否定するつもりはなかったとしてもね」

「いい気味だ！」

「無様ね」

「ふーんだ！」

「くく、苦しいか？」

もう一つ、闇の声が増えた。

周囲の闇よりも濃い闇達よりも、更に濃い、絶望を体現したかのような闇である。

声は聞き覚えのある不快な含み笑いを伴って、そこら中に響いた。女の美しくも妖しい含み笑いは才人の大切な記憶を犯すようにしつぱし続き、刹那の静寂を置いてから優しい、慈母のような言葉を紡ぐ。

妖婦の吐息を伴って。

「この苦しみから逃れる方法が一つ、ある」

「やめて！」

「黙れ！」

「なによ、いきなり！」

「やめてよ！」

お前は……どうし、てこご、に……

「何、簡単なことじゃ。自分を疑えば良いのじゃよ。のう、”イーヴァルディの勇者”よ」

絶望の闇は周囲の制止などお構いなしに語り続けた。

才人はその闇が自分を罵倒していた小さな闇達よりも遥かに危険

で、邪悪であると知っていながらも言葉に耳を傾けてしまつ。  
その、苦しさ故に。

「ひひ、自問するがよい。己の体は何処にある？ 己の意思の入れ物は何で出来ておる？」

俺の体は……“グリムニルの槍”で……

「そうじゃな。最早人のそれでは無い。ではお主の心は何処にある？ あの、愛しい女と繋がる心の在処はどこじゃ？」

この、ルーン……で、俺と……

「ほう？ なぜ“そう”だとわかる？ なぜ、自分は儂に“作られた”存在で無いと思えるのじゃ？」

それは、あの時……

「思い出せ。お主に“グリムニルの槍”を与えたのは誰じゃ？ 平賀才人の体から二つのルーンを取り出し、その槍に刻んだのは誰じゃ？」

やめろ……

「ひひ、ようく考えよ。自問するのじゃ。あの時、ルイズが召喚の儀式に臨んだ時。平賀才人は本当に“二人”いたのかえ？ 元々一人であったものを、儂が“ガンダールヴ”のルーンに人格と盗んできた記憶を与えただけじゃと、どうして疑わない？」

やめてくれ……

「何故この子らの顔が浮かばぬ？ 何故、この子らの名が思い出せぬ？ 何故お主は平賀才人だと言い切れるのじゃ？ ひひ、どうした？ 心を持った平賀才人で無い者よ」

やめてくれ……たのむ、やめて……

「何を苦しんでおるのじゃ？ こんなもの、偽りの記憶にすぎんではないか。元々お前の物などでは無いからの。お前は、苦しんでいる“フリ”をしているだけじゃ」

「やめろおおおお……！」

叫びは確かに口から出たものであった。

同時に、胸に激しい炎のような感情が渦巻いて、手足の感覚が記憶と共に戻って来る。

視界は変わらず闇の中にあつたが、濃い闇の人影は只一人となつていた。

「答えは出た？」

再び問いかけられた質問は、才人の激情を落ち着かせる。

声は子供達のものでも、邪悪な魔女のものでもない。

しかし、才人はその声も知っていた。

誰よりも愛しいと思つてきた、その声を。

耳の奥ですつと虚無の唄を歌い続けてきた、その声を。

そして才人は理解した。

次々と変わる、闇の正体を。

皮肉にも最も愛しく最も怖れ続けた声を聞き、やっとそれが己の中にある闇その物であると理解したのである。

かつて抱いた、タバサ、アンリエツタやティファニア、シエスタ、そして子供達。

彼女達に対する“やり直す”事への後ろめたさが闇となつて才人の前に現れていたのだ。

かつての妻の声を聞きその事に気が付いたのは、ルイズにも又、ある種の後ろめたさを感じていたからなのだろう。

そう。

答えなど最初からありはしない。

自分が今ここに居る事自体が過ちだったとして、いや、それどころか偽りであるのかも知れないとして、過去は過去であり決して変えられぬものであるからだ。

確かに、“虚無”の奇跡は時を遡り人生の“やり直し”が出来るのかも知れない。

しかし、それでも“過去”からは決して逃れられないのである。  
遡った時の果て、如何に未来を操ろうとて、それは当事者にとっ  
ては新たな“未来”なのだ。

「答えは……無い」

「まあ、非道い」

声はタバサとの間にもうけた子のものに戻っている。  
才人は今度は目を開いて、目の前の闇を直視し答えた。  
その顔は母親によく似て理知的であり、とても美しい。

「だけど……」

「だけど？」

「俺はお前達を愛していた。卑怯にもルイズへの罪悪感に逃げなが  
ら、お前達も母さん達も愛していた」

「私達はここでは“生まれてこなくてもいい”？」

「お前達は“もう生まれている”。ここは……過去であると同時に、  
俺の“未来”なんだ」

「……都合の良い言い訳ね。卑怯だわ」

「ああ。なにせ、ルイズをもう一度キチンと愛すると言いながら、  
俺は“別のルイズ”を愛しているんだからな。卑怯な男と言われて  
も仕方無い」

「……私達を生んだ母達の事は、もうどうでもいい？」

「いや。今でも愛しているよ。タバサも、アンリエッタも、テファ  
も、シエスタも。でも、彼女達はここに居る“彼女達”じゃあない  
「ルイズおばさまも？」

「ああ。ルイズも、だ。でも、俺が一番愛していた彼女もまた、こ  
こには居ない。ここに居るルイズは、彼女であって彼女ではないん  
だ」

「……結局、みんな好きだった事？」

「ああ、そうだ」

「人でなし」

「そうだな。その上で今更、たった一人を愛そうとしているんだ」

才人の言葉に蒼い髪の少女を象った闇が崩れた。

闇は次々と子供達の姿を取り蠢きながら、尚も才人に語りかける。

「捨てないで」

「捨てるものか。お前達は俺の“過去”だ。もう“未来”にはなれないけれど、それでも大切な愛しい思い出だ」

「そしてお父様は行ってしまわれるのね」

「ああ。立ち止まるわけにはいかないからな。それにもう、あいつを泣かせたくないんだ。わかるだろう？ “ルイズ”」

言って才人は笑った。

少しだけ、寂しそうに。

闇は何時の間にか表情を持ち、色を纏って才人の前に立つ。

そこに立っていたのはかつて妻であったルイズであった。

「とうとう、この時が来てしまったわ」

「ルイズ、俺は」

「私はタバサであり、アンリエッタであり、ティファニアであり、シエスタでもあり、そしてルイズでもある。だけど、そのどれもが私で無いわ。私は貴方の思い出。貴方の失った記憶その物。“ガンダールヴ”が見ていた夢の残滓」

「許してくれなんて言えない。後悔や罪悪感だつてある。だけど、俺は前に進むしか無いんだ」

「夢から醒めた貴方は何を想うのかしら？」

「さあな。きつと、“過去”と“未来”を夢に見ながら、“現在”を生きていくんじゃないか？」

「本当、身勝手な人ね」

「ああ。そうやって汚れないと、前には進めやしない。生きるって事は汚れるって事さ」

「もう、行くの？」

「行かないと。ルイズが呼んでいる」

「待って」

背を向け、何処かへと立ち去ろうとした才人をルイズは呼び止めた。

何だろう？ と才人が振り向くと、その鼻先に剣の柄が差し出されている。

剣は片刃の大剣で、よく知った品であった。

その、才人の眼前に柄を突き付けるようにして大剣を持っていたのはルイズではなく

「くく、持って行け。コイツが無くては様にならんだろう？」

「ノルン……お前」

「あん？ なんじゃ、阿呆のような顔をしておって。そこは慌てるなり怒るなりするところじゃろうが」

「……聞きたい事がある」

才人は差し出されたデルフリンガーを手に取りながら、低く冷たい声でそう言った。

しかし魔女は相も変わらずくつくつと笑い、才人の心を逆撫でするのである。

「さっき言った事か？ くく、自問しても良い。しなくても良い、じゃ。結果としてお主はお主として“夢”とやらを見続けるでの」

「お前、一体何が目的なんだ？」

「勘違いするなよ？ “コレ”は儂ではない。お主がまどろみの中



で見ている夢にすぎぬ」

「話を逸らすなよ。俺はお前の目的がなんなのかを聞いてるんだ」

「ひひ、それを知りたくば戦い続けよ。俺は一足先に青髭の王の元で待っておるで。精々、良い夢を見てくれよ？」  
“ガンダールヴ”

言いながら、魔女はその姿を闇に消してしまった。

その後を追うように、闇が散り白い光が辺りに満ちて行く。

覚醒が近いのだろう、才人は急速にそれまでの出来事を急速に忘れて行き、慌てて記憶に刻み込むのである。

そしてガンダールヴは夢から醒めるのだ。

ルイズが才人の欠片に使った“虚無”は“犠牲”であった。

“神の頭脳”が作り出した魔弾は、“グリムニルの槍”の活動を阻害する効果を持つ。

そこで任意の場所にルーンの反動によるダメージを集める“犠牲”を使い、その効果を一所に集めれば、と土壇場で思いついたルイズは、果たして正解を導き出していたのであった。

勿論、“犠牲”がルーンの反動だけで無く、マジックアイテムや普通の怪我などにも効果があるかどうかは知らず、どちらかと言えば賭けに近かったのだが。

「サイト……」

絞り出した言葉は、それでも実感を伴わなかった。  
目の前に立ちふさがる背の向こうからは、“鋼鉄の死者”達が武器を手に襲いかかって来る。

しかし、彼らはルイズおるか、才人に近づく事すら出来ずにいた。才人が鬼神の如く、“鋼鉄の死者”達を斬り伏せている訳では無い。

“グリムニルの槍”を投擲しているわけでも無い。  
異様な空気を湛える敵に、攻めあぐねて取り囲んでいるわけでも無い。

夥しい数の“鋼鉄の死者”達は、間違いなく才人とルイズの命を奪おうと殺到し、しかし近寄る事すら出来ずにいた。

その異常な事態は、もう一度恋人の名を呼ぼうとしたルイズをも驚愕させて言葉を奪い去る。

「なに、これ。一体どうなってるの？」

「これが“グリムニルの槍”の本当の姿さ」

「サイト……？」

「ルイズ、ごめん。随分と苦労かけちゃったな」

才人はそこで初めて振り返り、ルイズにニカと笑いかけた。

少しバツの悪そうに、歯をみせて。

笑顔はルイズのあらゆる理性を吹き飛ばし、大粒の涙を溢れさせた。

それからルイズはふにやりと表情を崩したかと思うと、タックルをするかのように才人に飛びつき、胸に顔を埋めて大声で泣き始めたのである。

そんな二人の周囲には大地を埋め尽くすばかりの敵が取り囲み、その包囲を徐々に“広げつつ”あった。

“鋼鉄の死者”達は逃腰になっているわけでは無い。

その反対に、無機質な殺意を滾らせ、才人達目がけて殺到しているのである。

にもかかわらず、只二人を取り囲む幾万の包囲網は徐々に広がり続けていた。

泣きじゃくるルイズを抱き止め、優しく背を撫でる才人が剣すら抜いていないのに、だ。

「サイト、サイト、サイトオ！」

「ルイズ、傷はもう良いのか？」

「サイトこそ、わた、私、ずっと後悔、して　！」

「いいんだ、ルイズ。ごめんな、不甲斐なくて」

「私、サイトが、あ、あああ、うわあああああああ！」

言葉にならぬ激情は、泣き声に換わり戦場に響き渡る。

抱き合う二人に対峙するのは、“鋼鉄の死者”の軍勢十五万とアルビオン軍三万の兵である。

しかし、ハルケギニアの歴史上でも類を見ないほどの大軍勢はたった二人、抱き合う恋人達に触れる所か近付く事すら出来ず、静かにそして恐ろしい疾さでその数を減らしてゆくのであった。

サウス・ケータナム街道の地を急速に広がり行く、かつてサハラを作り出した“砂”によって。

7-38: extra episode / 美姫は空を征き、英雄は地を逝く(前)

長編エピソード完結までもう一息。

全四十話よ予定。

才人の復活により我を忘れ、一体どれ程の時間その胸の中で泣いた事であろうか。

“それ”に気が付いたのは、心の片隅で状況を思い出し止まらぬ涙もそのままに才人の胸から顔を上げた時であった。

元々万を超す軍を迎え撃つ為にその場に居たルイズは、一息ついた瞬間に我を取り戻し、いつまでも抱き合っているわけにはいかぬと焦りを覚えたのである。

聞きたい事や伝えたい事は星の数程湧いてしかし。

とにかく今は、迫り来る大軍勢に対処せねばと目まぐるしく思考を切り替えかけ、そこでふとある事実に気が付いた。

地平線の彼方まで埋め尽くしていた敵の包囲網が、何時の間にか引き潮のように遠ざかっていたのだ。

それだけでは無い。

自分達より後方に、敵はただの一兵たりとも進んでは居なかったのである。

それは空を征く戦列艦も同じで、自分達の上空を進もうとするフネは悉く蛇行し、ゆっくりと地に墮ちていくのであった。

更に視線を再び地上に向け目をこらせば、遠ざかる包囲網の先頭に居る“鋼鉄の死者”達は決して才人に臆して居る訳ではなく。

それどころか彼らは勇ましく前に進み、そして唐突に体をサラサラとした砂のようにしてその場に崩れ去っていたのだ。

ルイズはそこで初めて、自分と才人がサウス・ケートナム街道に敷かれた石畳の上でなく、広大な砂地に立っている事に気がついた

のである。

砂地は遠くに見える森の手前にまで達して、大軍勢が移動する街道一杯に何時の間にか広がっていたのだった。

「……サイト、あなたなの？」

「ああ。かつて、エルフ達の土地を砂に変えた“グリムニルの槍”の力って奴らしい」

「大丈夫、なの？ これ」

「まあ、な。妙な弾丸の効果をルイズが取り除いてくれた時、一緒にノルンの奴がかけていた“制限”まで外れたみたいだ」

才人はルイズの涙の跡を拭いながら、静かに、落ち着いた声でそう説明した。

見つめる黒瞳は吸い込まれそうな程深く、思わずルイズは頬を染めてしまう。

一切の迷いが無くなった才人の表情に、不覚にも強く胸をときめかせてしまったからだ。

改めて見上げる愛しい使い魔は一見、いつもと同じように見えてはかしまったくの別人のような空気を湛えていたのである。

「サイト？」

ルイズは思わずその名を呼んだ。

纏う空気があまりに変わって居た為、実は別人では無いかと急に不安になったからだ。

それまでに幾度も見た悪い夢の続きであるかとさえ思えて、声に不安が色濃く宿る。

才人はそんなルイズの心の動きを察してか、涙を拭った手を朱に染まる頬に添えたまま、ゆっくりと優しく小さな唇を甘噛みするようにしてキスをした。

「大丈夫だ。俺は、ここにいます」

「うん」

「だけど、先にあいつらをどうにかしなきゃな。ルイズ、俺、行くよ。すぐに終わらせるから後から追って来てくれ」

「え？ まって！ 私も……」

「心配するな。俺は“側に居てルイズを守る”からさ」

言い残し才人はどのようにしてティファニアの家から持って来たのか、背にあるデルフリンガーの柄に手をかけて、矢のように走り去った。

後に残されたルイズは才人の言葉の意味を理解出来ぬまま、心を共有すべくその場で目を閉じる。

直ぐに才人の視界が瞼の裏に映し出されたが、奇妙な事に不思議な感覚も同時に感じられた。

それはまるで、大地と一体になったかのような感覚。

すごい……なに、これ。

感覚が……この辺り一帯の全てが知覚できている？

私 ううん、この砂は……サイトに触れるすべての存在を認識して、敵だけを選び取って砂に変えているんだわ。

だが、ルイズの驚愕は始まりにすぎなかった。

猛烈な勢いで触れる存在全てを砂に変えながら進む才人の視界を切り替え、言われた通りにゆっくりと砂地となった街道を前に進み始めたルイズは程なく、才人の“側に居て守る”と言った言葉の意味を識る事となる。

この時の彼女は究極にまで使い魔と主の感覚共有を為し得ており、才人の五感や意思その物までも知覚できていた。

当然、その知覚は才人の一部として砂を形取り、街道一杯に広がる“グリムニルの槍”にまで及ぶ。

大地に広がる魔槍の砂は、自分を中心にして共に移動している事

まで詳細に感じ取れた。

どうやら“グリムニルの槍”は、かつてのサハラのように無秩序に物質を砂に変えているのではなく、浮遊大陸の地表部に留まって“鋼鉄の死者”達のみを選別して分解し、砂に変えているようだ。

更に驚く事に、魔槍はルイズに仇成すと判断した存在 例えば、死者達が投擲した武器や空に浮かぶフネなどに向かつて、地の中から無数の槍を作り射出し、確実に命中させ対象を砂へと変えているらしい。

恐らくは先程見た戦列艦が、ルイズ達を越えて行けなかった姿の理由はこれであろう。

ルイズは少し戸惑いながらも、才人の知覚を利用して不時着した戦列艦の行方を感じし“見てみる”事にした。

果たして乗務員達は普通の人間であり、堕ちた後の艦をゆっくり砂に変えて行く中、まるで生き物ののように足を砂に取られ恐怖に震えている姿が確認できる。

その姿にルイズは大きな安堵を覚えた。

それは世界を滅ぼしかねない力を得た才人が、しかしその力に呑まれておらず心優しいお人好しそのままである事の証であったからだ。

「よかった……もう、すこし雰囲気が変わってるからびっくり、したじゃない……」

呟いてルイズは先程の才人を思い出す。

姿形は記憶にある才人と同じであったが、どこか吹っ切れたといつか、迷いが綺麗に消え去っていたというか、強く清々しさを感じさせる雰囲気はそれまでの才人には無かったものである。

もう。

もう一度、今度はすこしむくれたような愚痴を心に向かつて吐く。間違いなく、今までよりも更に強く女性を惹き付ける要素が加わったのだと思いつたからだ。



「まったく。帰ってくる度にいい男になるのは良いけれど、少しはこっちの身になってよ。隣に立つだけでも大変なの、わかっているのかしら」

弾むような独白は、幸せと不満がない交ぜとなり空へと消えて行く。

だが不思議と不安は感じられなかった。

ルイズはしばしそのまま思案に耽った後、ふと才人が『後から追って来てくれ』と言っていた事を思い出す。

それから彼女は、ある事を思いついて悪戯っぽく笑い心を高揚させた。

「サイト、“側に居てルイズを守る”って言ってたわよね。ふふ、じゃあ、ちゃんと守って貰おうかしら。いい？ サイト。しっかり“ついて来る”のよ？」

言ってルイズは杖を取り出し、“加速”を詠唱し始める。

目的地は勿論、才人の側であった。

詠唱は程なく完成し、ルイズは高速で移動を開始する事になる。

果たして、尽きかけていた魔法を唱える為の精神力はすっかり元通りとなっていた。

心が軽い。

敵を蹴散らしながら、才人はそう感じた。

過去と今の事で悩んだ末、一つの答えにたどり着いたからか。

それとも、改めて自分が愛すべき者と理由を見出したからか。体は羽根のように軽く、意識と同じ速度で前へと進んだ。

向かう先は敵の司令官である、オリバー・クロムウエルの居場所。何故、司令官がクロムウエルであり、“そこ”にいるとわかるのか、才人にも理解出来なかった。

それが“グリムニルの槍”が砂に変えた物から情報を得ている為なのか、それとも『時の魔女』ノルンが残したもののかは定かではない。

しかし根拠が無いにもかかわらず、確かに才人は“そうである”と確信し、自身を前へ前へと駆り立てた。

視界を埋め尽くすは敵、敵、敵。

全てが魔法をも阻む鋼鉄の鎧を身に纏い、様々な武器を只一人、己に向けて振るい、射ては投げ、突いてくる。

果たして勇者は未だ鞘の中にある魔剣で応じるのか。

それとも左手を白く赤く輝かせ、右手で魔槍を作り出し蹴散らすのか。

否、そのどちらでも無い。

力を籠めたのは、大地を蹴る足である。

如何なる判断であるのか、矢のように疾く才人が更に加速せんと地を蹴った瞬間、才人を中心とした空間に波紋のような歪みが現れた。

直後、その後を追うように轟と空気が爆裂する。

大砲よりも恐ろしい音を立て才人を追う衝撃破は“鋼鉄の死者”達を鎧ごと引き裂き、風に舞う木の葉のようになぎ払った。

勿論密集する敵の中、恐ろしい疾さで駆け抜けるのであるからして、才人自身敵を避けながら走るのとは不可能である。

しかし、進む先にある槍や剣、飛んでくる矢、あるいは敵そのものは、今の才人にとって障害物どころか敵にすらなり得なかった。

なぜならば、真に力を解放された“グリムニルの槍”は暴走せぬよう二つのルーンで制御されながら、触れる者を一瞬にして砂に変

えてしまうからだ。

更にその魔槍の砂は才人が起こした衝撃波によって暴風と共に空中へと散らばり、“鋼鉄の死者”達の頭上に降り注ぐ。

砂には“グリムニルの槍”の一部が含まれており、結果才人から離れた場所に居ようとて大部分の死者は消滅を免れず、被害は加速度的に増していくのであった。

だが、解放された“グリムニルの槍”の恐ろしさはそれだけに留まらない。

すべてを呑み込む砂は才人の制御の下、生き物のように自律して獲物を求め“移動”するのである。

それは一見、かつてハルケギニアを滅ぼしかけた悪夢の再現のようでもあった。

魔槍は無慈悲に才人が指定した対象のみを選び取って足下から、或いは風に乗って降りかかり、或いは“槍”を地中から打ち出して憐れな死者達を砂に変えていく。

「そろそろ死人の軍隊から抜けるな。後続の部隊は……やっぱり人間か」

呟いて才人は少しだけ速度を落とした。

今のまま生身である人間の集団の中を奔れば、その衝撃破で多くの死者が出ると判断した為だ。

しかし、彼らとて敵である事には変わりない。

圧倒的な力の差があり、生殺与奪はすべて才人の手の内にあつたが、それを知るのは才人とルイズだけである。

彼らも軍人である以上、恐らくは死にもの狂いで抵抗を仕掛けて来るであろう。

では、どうするか。

「……急がないとな。ルイズが追いついて来てしまう」

僅かな思案を経て、才人は立ち止まる。

“鋼鉄の死者”達の軍勢の中央を切り裂くようにして駆け抜けた才人は、既にその陣を突破し、後方のアルビオン軍三万を目の前にしていたからだ。

眼前に広がる新たな軍勢は、紛れもなく生者の軍団である。

彼らは既に前方を征く“鋼鉄の死者”達の異変に気が付いて居るらしい。

遠目にも慌ただしく動いて陣を形成しているのがわかった。

だが、その動きは軍隊にしてはかなりぎこちない。

才人には知る由もなかったがこの時、先遣の戦列艦より異常が伝えられたアルビオン軍内では、偶然にも“アルビオンの黒騎士”は生きていたという噂が駆け巡っていたのである。

そこへ次々と奇妙な砂に吞まれてゆく死者達の中から才人が出現し、その姿を確認した前衛部隊は恐慌を起こしていたのだ。

アルビオン軍とて、兵士はすべて練度が高い者ばかりではない。

眼前で只一人、無敵と思われた軍隊を蹂躪して突破してきた怪物を前にして、一般の兵が平静を保つなど無理な話である。

むしろ混乱した兵をまとめ、陣を整えさせた現場の指揮官こそ優秀であると言えよう。

そんなアルビオン軍の後衛の動きを目の当たりにしながらも、才人は徐に、それまで柄を手にしたままであったデルフリンガーを抜き払った。

「おう！ おうおうおう！ 相棒！ やっと俺様を抜いたな！ 遅

えよ畜生！ 言いてえ事が山程あるつてのによ！」

「悪い、デルフ」

「相棒はいつもそれだ！ 悪い、デルフ。すまん、デルフ。怒るなよデルフ。畜生、ワケわからねえ所につれてこられたと思ってたら、気がつきゃ相棒は生き返ってるし一体どうなってんだ？」

「後でゆっくり説明してやるよ。とりあえず、アレを止めないと」  
「へっ、忘れんじゃねえぞ？ 相棒。あとで嬢ちゃんと一緒にとっちめてやる」

魔剣の言葉は辛辣であったが、声は喜色に満ちていた。

才人は苦笑いを浮かべながらもデルFRINGERを一度空に斬りつけ、黒瞳に強く意思を込める。

睨む先は数万の敵の中、その奥で指揮を執るクロムウエルだ。

自分自身も悪かったとは考えていたが、やはりルイズを泣かせる事になった元凶に怒りが湧かないと言えば嘘になる。

否、暗殺を企てるとしてルイズまで巻き込むやり方は絶対に許せるものではない。

それがクロムウエルの手によるものなのか、それとも側に居るであろう狂王の手による者なのかまではわからなかった。

が、才人の怒りはその首謀者が手の届く距離に来た時、遅まきながらも沸騰してしまっていたのである。

二度とこんな手は通用しないとわからせてやる。

瞳に宿る意志は更に鋭くなり、烈火の意識は“グリムニルの槍”を通じて戦域全体に広がってゆく。

そして、獯猛な戦意は才人がデルFRINGERを敵陣に向かって差し出した時、形となった。

付近に居た“鋼鉄の死者”達を粗方砂に変え終えていた“グリムニルの槍”が、砂地の中より無数の槍を作り出し一斉にアルビオン軍に向けて打ち出したのである。

槍はまるで空を黒く埋め尽くさんばかりに夥しい数で飛び、空に浮かぶフネにはそのまま船底へと刺さりゆっくりと砂に変え、地に広がる兵達には頭上で爆ぜて破滅の砂が降り注いだ。

「お……おいおい、相棒。いくら頭に血が上ってるからって、そりゃあ無えんじゃねえか？」

「勘違いするなよ、デルフ。武器と杖を取り上げるだけさ」

「その必要も無えんじゃねえか？ 相棒の体に触れた物もみいんな砂になっちまうんだらう？」

「それはそうなんだけど……」

言つて才人はチラリと背後を見た。

まだまだ距離はあるが、追つて来るその存在は確かに近づいて感じられる。

「ルイズの奴、結構速いんだ。こうやって砂を撒いとかなないと、あつという間に“置いて行かれちまう”」

「わはは、惚気るじゃねえか相棒！ 怒り狂つてるかと思えばしつかり嬢ちゃんの心配をしてら！」

「ま、な。だから急がないと。あいつが来る前にクロムウエルとはケリをつけたい」

「？ どうしてまた？」

「俺自身も許せないが、暗殺を企てた奴はもつと許せねえからな。経験上、実行する奴よりもずっと卑怯でしつこいし」

改めて怒りを口に出した才人は、思いの外ドス黒かった自身の憎悪にいささか戸惑つた。

今、クロムウエルを前にしたら自分はどうなるのであろうか。

怒りにまかせ剣を振るう？

それとも罵倒しながら頭を砕かぬよう、加減して殴るにとどめる？  
どちらにせよ、あまり人目には良い姿ではないだらう。

そんな姿を才人はルイズに見られたくは無かつたのである。

「ま、気持ちはわかるぜ、相棒。なに、俺は否定せんよ。たまには人間らしく感情を吐き出すのも悪かあない」

「姫さんの時の事もあるし。大体、やり方が気にいらねえ。死人を

オモチヤにしゃがって……」

吐き捨てて才人は左手のルーンを輝かせ、アルビオン軍に向かって矢のような速さで“ゆっくりと”駆け出した。

武器を砂に変えられ、あがらう術を奪われた兵士達が恐怖の為、道を空ける暇が出来るように。

そして才人の思惑は現実と成り、英雄の行く手を阻む事ができる者は一人として居なかったのである。

クロムウエルはその人生の中、絶頂を迎えていると確信していた。

ルイズが才人を取り戻す少し前。

王族が戦に臨むに当たり使用する豪華な小屋が設えられた馬車の中、神聖アルビオン共和国皇帝は揺るぎない勝利を確信し、傍らに侍る腹心と戦後に想いを馳せていた。

ふふふ、やった、やったぞ！

あの忌々しい地虫どもを見事追い返してやった！

それも、この俺の力でだ！

見よ！

あの無敵の軍勢を！

敵が多ければ多い程増えて行く、あの鋼鉄の軍勢を！

「前線の様子はどうかね？」

クロムウエルは鷹揚に、しかし少し声を上ずらせて傍らに侍るホーキンス将軍に尋ねた。

勿論、将軍は直接指揮を執っているわけではない上、逐一報告を受け取ってはいたので即答は返ってこない。

生真面目な将軍は少々お待ちを、と返答し、近くにいた護衛兵に主君の質問に答えられる者と呼んでくるよう指示を出した。

ホーキンス将軍としては既に前線になにかしら動きがあれば即報告が入ってくる体制を指示しており、圧倒的な兵力差を前に逐一の報告は不要であると判断していたのだがどうやら皇帝は違うらしい。



「報告します！ 我が軍前衛・“鋼鉄の死者”は敵の新魔法により一時足止めをされたものの、再度の前進を確認致しました！」

「新魔法？」

「タルブにて使用された魔法であるようです」

「ほう。てつきり使えないのかと思っていたら温存していたのか。

だが戦列艦からの砲撃の次はあの新魔法で足止めとは、ふふ、無駄な事を」

「新魔法による攻撃はまだ続いているのか？」

「いえ。先程哨戒艇より伝えられた報告によりまずと、既に攻撃が止み、“鋼鉄の死者”の前進を確認している次第です」

「今の速度で前進した場合、一時間以内にサウスゴータに到着致しますな」

「うむ。このままゆつくりと敵を追うとしよう。すぐに壊滅させてしまつては余の領土に攻め入った事を後悔する暇もないであろうし……サウスゴータの住民は如何なさいますか？ まじないの札を持たぬ人間にはあの死者達が……」

「ふむ、そうだな……。 “鋼鉄の死者”はサウスゴータを迂回させよう。本隊の半分もあれば再度の占領も可能であろう？」

「は。しかし、それですと敵の追撃が……」

「なに、彼らは疲れを知らぬ。昼夜を問わず敵を追い詰めるのだ。

直ぐ敵軍に追いつくであろう。……おお、そうだ。バークレイ將軍！」

「は、ここに」

「君に連合軍との交渉を再度任せろ。そろそろ戦後賠償の事も考えておかねばな」

「御意。しかしゲルマニアはともかく、トリステインに今回の戦の代償に見合う賠償ができませんか？」

「出来ねば国を取り上げれば良いではないですか。おあつらえ向きに女王は妙齡の女性です。遠からず賠償金の減免と引き替えにその

身を差し出す事となりました」

早くも連合軍との停戦協定の交渉を任せた將軍に、同じく同行していた外務担当をしている政務官の一人が具申した。

その嗅覚が戦争も終わりに近づいているとかぎ取り、今の内とばかりに皇帝の御前にあつて下卑た提案を示し、すこしでも点数を稼ごうという腹づもりである。

クロムウエルはそんな提案に満更でも無いような表情を浮かべ、しかし困ったように唸った。

「うつむ、弱った。余は敵国の王を正室とするつもりは無いぞ？

側室でも此度の戦で散っていった者達に申し訳が立たぬ」

「陛下。そのような場合、形だけの側室でよいではありませんか。

女王にしてみれば、己の命と国を差しだしてしかるべき所を陛下の慈悲に縋るのです。“どのように扱った所であろうと”本望でありましょう」

そう言つて政務官と同じくへつらうように笑つたバークレイ將軍の言に、ホーキンス將軍は眉根を寄せクロムウエルは好色な笑みを返した。

己を袖にした王族への復讐心は既に満たされている。

一時は危うかつた連合軍との戦も、今やつと溜飲を下げる結果となり肥大したプライドを心地よく刺激していた。

そして、未来。

見えるのは勝利に湧く街、全ての者が己の足下にひれ伏し、讃える声。

やがて己の元に納められる“戦利品”。

打ちひしがれるその美しい顔と体をたつぷりと汚す、勝利者のみに与えられた特権と果てる事の無い嗜虐心。

あれ程己を怯えさせていた全てが消え去り、前途は正にバラ色で

あつた。

加えて、いつも自分を見張るようにして側に居たシェフィールドの姿も無い。

恐らくはあのガリア王の使いの者と共に一時帰国し、“あの方”に勝利の報告でもしているのだろう。

クロムウエルは深く考えもせずになんかそう考えて、美しいが耐え難い圧力を背にする事も無く、真実を見誤ってゆくのである。

そう、彼は正にその人生の中、絶頂を迎えていると確信していた。生まれてよりこれ程高揚し、すがすがしい時を過ごした事はただ一時たりも無かったのだ。

だが、そのような時はすぐに終わりを迎える事となる。

夢の終わりを告げたのは、果たして血相を変え巨大な馬車に入ってきた、クロムウエルが呼んだ者とは別の伝令兵であつた。

「報告致します！ 前衛の“鋼鉄の死者”及び空軍に、敵の攻撃による被害が急速に拡大中です！」

「なに？」

「馬鹿者！ なんだその報告は！ 詳しく話さぬか！」

「も、申し訳ありません！」

新たに現れた伝令兵は正確な情報を伝達するという職務を疎かに成る程、焦りを露わにしていた。

そんな彼にホーキンス將軍は落雷のような怒号を発し、その迫力に伝令兵のみならず室内に居た全ての者が肩を跳ね上げてしまう。

伝令兵は將軍の喝にかしこまり、一つ生唾を飲んで気持ちを落ち着けてから、視線を床に落としたまま伝えるべき情報を整理した。

「正体不明の……空軍の支援部隊からの報告では正体不明の“砂”らしきモノが街道一杯に広がっており、前進する“鋼鉄の死者”を全て呑み込んでしまつていくとの事です。」

「な、なんだと?! 真か?!」

「は。“砂”らしきものが敵軍の魔法であるかどうかまでは確定しておりませんが恐らくは……」

「……随分と曖昧な報告だな。空軍は何をしている?」

「それが……どうやらその“砂”は風に乗って舞い上がり、フネにまで届いて街道のみならず空路を行くフネまでも呑み込んでいるよ  
うなのです」

「ふむ……それで、“呑み込む”まれた者達はどうなるというのだ?  
? 脱出できた者はいないのか?」

「不確定な目撃情報ですが……“砂”は生き物のように蠢いて、触  
れる者やフネを全て同じ砂に変えてしまう、という話です」

「ばかな! そんな魔法など……そんな大規模な魔法など、聞いた  
事も無い! サウス・ケーナム街道がどれだけ広いと思っている  
のだ! 本当にそんな物が街道一杯に広がっているのか?!」

「は。それだけは間違いないかと。現在陸と空からサウスゴータへ  
の迂回路を捜索中ですが見つかったという情報は入っておりますぬ」

改めて行われた伝令兵の報告に、場にいたレコンキスタの高官達  
は絶句してしまった。

十万を越す死者の軍と空中の艦隊を押しとどめるのではなく、逆  
に呑み込んでしまう正体不明の“砂”など聞いた事も、ましてや想  
像することも困難であったからだ。

にわかには信じられぬ内容ではあったが、直ぐに彼らは知る事と  
なる。

自分達は誰と戦い、敗北したのかを。

その光景は異様なものであった。

戦場に展開する万を超す軍隊の中央、矢のように速く、疾く、陣を切り裂くように奔る者が居る。

彼は古の勇者のように剣を振るい、敵をなぎ倒して前に進んでいる訳では無い。

手にした長剣は只の一滴も血を吸わず、求めず、人のそれにしては速すぎる速度を除けば脅威を感じさせるものなどないだろう。

にもかかわらず、数万の兵達は彼一人を屠るところか止める事すら出来ずにいたのである。

なぜならば。

「き、きた！ “アルビオンの黒騎士”だ！」

「鉄砲構え！ メイジは各自魔法で応戦！」

「うわ、じゅ、銃が！」

「くそ！ 私の杖も砂に……！」

「に、逃げる！ すぐ体も“砂”に変えられるぞ！」

「ま、まで！ 逃げるな！」

只一人、魔剣を手に敵陣に飛び込んできた剣士と共に迫り来る砂煙は、近づく者全てを砂に変えてしまう。

そして風よりも疾く陣中に広がっていた噂を裏付けるように、兵達が手にした武器が、杖が、鎧が、勇者に近付きすぎた者は衣服までもが砂に変わって行くのである。

当然兵達の間には自然と恐怖が生まれ、才人の進む先、アルビオン軍の兵達は蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い、結果として無人の道が出現していた。

やがて、才人の視界に戦場には似つかわしくない、巨大で豪華な馬車が飛び込んで来る。

「あれか」

呟いて、才人は強く地を蹴った。

体はまるで“フライ”を唱えたかのように軽やかに宙を舞い、馬車まで二百メートルはあった距離を一足飛びで縮めてその屋根に着地する。

馬車を中心に展開する周囲の兵達は近衛兵なのだろう。

それまでの兵達とは違い逃げようとせず、しかし砂となった武器の変わりを探して慌てふためいていた。

そんな彼らを尻目に才人は意識を戦域に展開する“グリムニルの槍”に乗せる。

直後、巨大な馬車を中心として砂の竜巻が出現した。

「ひい?! な、なんだ?!」

「陛下!」

「か、壁が砂に!」

「床もだ! 砂にさわってはならん!」

「た、助けてくれえ!」

武器を失いつて尚、他の兵とは違う強い忠誠がその場に繋ぎ止めていた皇帝の親衛隊が見守る中。

皇帝が乗る馬車は小さな砂嵐のような竜巻に覆われ、中からの悲鳴が強い風音と共に辺りに響いた。

その後、砂による竜巻が消えて視界が晴れた時、地に立っていたのは果たして三名の人間と巨大な馬車を引いていた何頭もの馬だけであった。

「……お前がクロムウエルか」

親衛隊の兵達が遠巻きに見守る中、才人は静かにそう言った。睨み付ける黒瞳は鋭く、静かな敵意と怒りが垣間見える。

一方、才人の他に立っていた二人はクロムウエルとホーキンス將軍であった。

他の將軍や政務官らは竜巻に襲われた恐怖からか、あるいは才人に当て身でも食らったのか、視界が晴れた時から地に倒れ伏していた。

「ひ、ひい?!」

「陛下! ここは私に任せ、お逃げください! お前達! 何をしている! 陛下をお守りしろ!」

「逃げるな!」

怯えるクロムウエルと才人の間に立ち、ホーキンス將軍が滅多に抜かぬ腰の杖を抜いて、遠巻きに様子を伺っていた親衛隊に声を櫛を飛ばした時。

才人には珍しく声に強い怒気を含ませ荒げて、ホーキンス將軍の言葉により動きかけたクロムウエルと親衛隊の兵達にむけ右手を振った。

直後にゴツと音がして叩きつけるような風が吹きすさみ、周囲に砂煙が再び舞う。

才人はそれ以上何も言わず、ただただ強くクロムウエルを睨みつけていただけであったが、周囲の者には明確に『動いたら跡形も無く砂に変えてやる』というメッセージが伝わっていた。

ホーキンス將軍の杖を砂に変えないのは、そんな余裕の現れであるのだろうか。

「……貴殿が“アルビオンの黒騎士”殿か」

文字通り手も足も出ない怪物を前にして、ホーキンス將軍が口を開いた。

表情は硬く、圧倒的な力を目の当たりにして動揺を隠せずに居た

が、それでも口をきけたのは流石は歴戦の將軍と言われるだけの胆力である。

「……うるせえ。その呼ばれ方はキラいなんだよ。“イーヴァルデイの勇者”と呼ばれる方がまだマシだ」

「そうであるか。しかし、貴殿がたった一人で我々を敗北に追いやった事実は誰の目にも明らかであろう」

「しょ、將軍！ 何を？！ 早くそいつを殺せ！」

「……陛下、この後に及んでは認めざるを得ないでしょう。我々の負けです」

「ホーキンス將軍！ 何を言い出すのだ！ き、貴様！ 余を見捨てるつもりか？！」

「“アルビオンの黒騎士”殿。いや、“イーヴァルデイの勇者”と呼んだ方が良いですか？ わがアルビオン軍は君に降伏を申し出る。願わくば、兵達の命は助けてやって欲しい」

「將軍！！」

万策尽き、“虚無”である主君もこれ以上はあてにならぬと判断したのか。

ホーキンス將軍は忠誠を誓う主の前で、苦々しく降伏を申し出たのであった。

そんな老兵に縋るようにして、クロムウエルは悲痛な声をあげる。戦争で負ける、という事は支配者たる彼や高官達が処刑される事を意味するからだ。

勿論その事はホーキンス將軍自身、よくわかっている。

だが彼は誇り高いアルビオンの軍人であった。

己の命を惜しみ、それまで命を賭け軍令に従ってきた兵達を見捨てるような真似は、誇り高い軍人である老將軍には到底出来なかったのだ。

しかし才人の返答はそんな老將軍にとって、予想外のものではあ



た。

「……断る。降伏はまだ受け入れられない」

「……では我らは死ぬまで戦うしか道は無い」

「その必要も、無い」

「どういふ事だ？」

怪訝な表情を浮かべる將軍に、才人はその背後に隠れるクロムウエルを指差した。

「降伏より先にそいつに用があんだよ」

「ひい?!」

「それはだめだ。この方は私の主君故、みすみす敵に渡すわけにはいかぬ。命が欲しいのならば降伏を受け入れ、しかるべき手続きの後に奪うがよかるう」

「ちがう」

「違う?」

「そいつを殺そうってわけじゃ無い。正直、腹が煮えくりかえる程ムカついちゃいるが、それはウェールズ皇太子殿下に任せる事になっているしな」

「では何を求めようというのだ」

「俺からは一言。『アイツを泣かすんじゃねえ』」

場の雰囲気が変わった。

目の前に居る怪物の怒りの正体が、誇り高い戦士のそれでも、憎悪に燃える復讐者のそれでもない事に將軍が気がついたからかもしれない。

「……何を言っている?」

「それと、アイツも用があるんだとよ。どうしても一発殴らなきゃ

気が済まないらしい。くそ、俺だつて思いつきりブンなぐりてえけどさ、それしたら首が吹っ飛んじまう。……だから、まだ、降伏は受け入れられねえ」

「……意味がわからない。アイツとは誰だ？」

質問は才人の怒気をほんの少しだけ和らげた。

ホーキンス將軍は辛うじて口にした台詞を最後に、言葉を失い続ける。

才人が口にした理由があまりに理不尽で不可解であつたからだ。

自分達は皇太子にとって、不倶戴天の怨敵である。

この場で私怨を晴らそうというのならまだ納得が行くのだが、しかし目の前に立つ少年は、怒りを瞳に宿らせながらも取るに足らないような理由で降伏を拒否した。

降伏すら許さず皆殺しにするつもりなのかもしれないが、それにしては様子が変である。

人智を越えた力を振るい、戦う目的は別として、敵の総司令官の前にまさか言葉通りの意図しかもたぬとは考えもしないホーキンス將軍であつた。

老將軍はその真意を計りかねながら片眉を上げ、じつと才人の口からであるう人物の正体を待ちわびる。

そしてしばしの沈黙の後、將軍は勇者が当たり前のように答えたソレを聞いて再び絶句する事になるのだ。

つまりは、大国の軍隊を一方的に蹂躪し、戦争にまで勝ってしまった英雄に。

たった一発、敵の司令官を殴りたいが為に、申し出た降伏を拒否させた人物とは。

「そいつが泣かした、女の子の事だ」



「そいつが泣かした、女の子の事だ」

ホーキンス將軍は最初、目の前の小さな怪物が言った言葉の意味を理解出来なかった。

いや、將軍の背に隠れるクロムウエルも、武器を失って尚主君を守ろうと取り囲んでいた親衛隊の兵達も、誰一人理解出来なかった。否、言葉の意味はわかっている。

彼らが理解出来なかったのは、これ程の力を振るう理由が只一人の女の子の為であったという真実だ。

あの、十万を越す死者の群れに飛び込んだのも、ハルケギニア随一を誇る空軍と、亜人を含む陸軍を只一人斬り裂いたのも、その“女の子”の願いを叶える為だというのが。

緊迫した空気は才人の台詞により、どこか弛緩して、数瞬の時間が流れた。

場にある全ての目が強くホーキンス將軍とクロムウエルを睨む才人に注目している。

しかし才人は誰かを待つようにして動かず、ただただ、怒りを内包した表情のまま口をつぐんでいた。

周囲の者達には知る由もなかったが、この時才人は自分自身と戦っていたのである。

内面に渦巻くのは、これまで抱いた事が無い程大きな怒りの炎だ。そう、才人はクロムウエルを前にして、怒りに我を忘れ手を出さないよう、必死に自制していたのだった。

死人を操り、暗殺を企て、その上ルイズをも巻き添えにした首謀

者。

その首謀者が目の前に居る。

『いいこと？ 私が到着するまでまって！ 一発殴ってやらないと気が済まないわ』

繋がった心にそう言ったルイズの言葉が無かったら、自制などせずこの場で思いっきり殴りつけていたかも知れない。

勿論、その時は“グリムニルの槍”の能力が解放されている状態であるからして、クロムウエルの体は無残な事になるだろう。

それ故に才人は、ルイズが追いついてこない内にクロムウエルの前に立ちたかったのである。

その手で、愛する者を死の淵に追い込んだ者を引き裂く為に。が、しかし。

いざ本人を目の前に見てみると、怒りを解放するよりも先にまずルイズの言葉で踏みとどまり、次いでクロムウエルに人生を狂わされたケイトやウェールズらの顔が浮かび上がった。

気が付けば身動きがとれなくなって、拳を振り上げる事すら出来なかった才人である。

その背後にはガリア王が潜み、クロムウエルでさえも操られているにすぎない事は判っている。

しかしそれでも、クロムウエルを許せないと思える程怒りは激しいものであった。

かろうじて繋いだ理性により、クロムウエルを庇うホーキンス將軍には「殺さない」と宣言できたのだが、ちょっとしたキツカケで我を忘れそうになりそうな才人であったのだ。

唯一ホーキンス將軍の杖を砂に変えなかったのも、もしもの場合にすこしでも自分を止める手段となり得るよう、考えての事である。

もうすぐ、ルイズがここまで追いついてくるな。

才人が“グリムニルの槍”を通じてルイズの存在を近く感じた時。

突如、ホーキンス將軍の後に隠れていたクロムウエルが才人とは反対方向に駆け出して、十マイル程も離れた所で立ち止まり、狂ったように笑い始めた。

「ひ、ひひ、ひひひ！ お前達、みんな死ね！」  
「陛下！」

ホーキンス將軍の制止は最早聞こえてはいない。

クロムウエルは恐怖の為に気がおかしくなってしまったからか、不気味に笑いながらその指に嵌められていた指輪 “ナゲルファールの指輪” を外し、口中に放り込んでしまった。

直後、クロムウエルの五体が何者かに内側から叩かれているかのように、痙攣をはじめた。

痙攣はすぐに激しくなり、いまだ続く笑い声と相まって尋常ならぬ空気を作り出していった。

「陛下?!」

「ひひひ、この“ナゲルファールの指輪”にはもう一つの力、“死者を連れ出す”のではなく、“死者として迎え入れる”力、みせてやるぞ！」

「……無駄だ、クロムウエル」

「ひひひひひ、無駄かどうか試すと良い！ 術者本人を死の門とするこの力を！」

全身をガクガクを震えさせながら、クロムウエルは焦点定まらぬ瞳と両手を天に翳す。

瞬間、漆黒の霧がクロムウエルより噴き出して辺り一面に広がっていった。

周囲はすぐに才人が巻き起こし、いまだ薄く舞う砂煙から黒い霧へと塗り替えられ、やがて異変が顕現し始める。

クルシイ

「なんだ……？ おい、何か言ったか？」

「……いや。お前じゃないの……か？」

タスケテ

「ひっ？！ なんだこれは！」

サムイ……サムイヨ……

「く、来るな！ やめろ！ 俺の体の中に入って来るんじゃない！  
！」

才人達を遠巻きに見守っていた親衛隊の兵達がクロムウエルが出した黒い霧に包まれた時。

どこからともなくか細い声があふれ出して、気が付くと無数の死霊のようなものがそこら中を飛び回っていたのである。

周囲はすっかり霧に覆われ、闇同然の濃さで日の光を遮っていた。飛び交う死霊達は白い布きれのような体であり、洞ウツロのように暗く開いた目と口から何かを囁き、唯一備わっている両手で生者に取り憑きじわりと体内に入り込もうと、逃げ惑う兵達を追い回している。一体、死霊に取り憑かれるとどうなるのか。

答えは、気を失い倒れていたクロムウエルの側近達が示した。

何の抵抗もなく体内に死霊が侵入されてしまった彼らは、みるみる内に老化して行き、体中の生気を失って一時も経たずミイラの様になってしまったのだ。

唯一、杖という武器を保持していたホーキンス将軍はそれを見るや表情を青ざめさせ、纏わり付こうとする死霊達に向かい“ファイアー・ボール”を闇雲に放つ。

果たして魔法はある程度の効果を持ち、死霊達は“ファイアー・ボール”の火球を怖れるかのように一時は霧散するも、すぐにまた集まって来て将軍に纏わり付くのであった。

「おのれ！ 下がれ下郎！」

ホーキンス將軍は目の前にいる筈の才人の事などすっかり忘れ、必死に魔法を放ち続けたが如何せん多勢に無勢、間を置かず体中に死霊を纏わり付かせる結果となった。

そんな彼を救ったのは、皮肉にも敵である才人である。

ぞつとするような感觸と共に体内に死霊が入り込んでくる感覚は、突如巻き起こった烈風により霧散する。

死霊より解放された將軍が顔をあげると、丁度才人がデルフリンガーで死霊を斬り伏せている姿がみえた。

「ぐむ、はあ、はあ、これは……陛下、何故……」

「大丈夫か?!」

「あ、ああ。しかし何故……貴殿は……」

「知るか！ 俺だって助けたくはねえけど、目の前で死なれるのはもつとやなんだよ！」

忌々しく叫びながら才人は、デルフリンガーを軽やかに振るう。

刀身が長い大剣であったが、その剣閃は文字通り目にも止まらない速度である。

さながら剣の結界があるように、才人の周辺を飛ぶ死霊は一瞬で細切れとなった。

又、どのような理屈であるのか不明だったが、どうやら死霊は本物ではなく、魔法生物の一種であるらしい。

デルフリンガーに斬りつけられた死霊は小さく悲鳴を上げながら、その刀身に吸い込まれてゆく。

だがそれでも死霊達はクロムウエルが作り出した霧の中、次々と生み出されて行き焼け石に水といった様相でもあった。

更にクロムウエルを止めようにも、その姿は既に濃い闇の向こうに消えて、一体何処にいるのか判別ができない状況である。



ホーキンス將軍はもはや人の手には負えぬ状況になりつつあるのではないか、と考え始めた頃、不意に死霊を斬りつけていた才人が鋭く声をあげた。

「おっさん！ “ライト”だ！ さっきの“ファイアー・ボール”みただろ？ こいつらは光に弱い！」

「そ、そうか。しかし、追い払うだけでは……」

「いや、追い払うだけでいい！ 死にたく……部下を死なせたくないかったら、“ライト”を使った杖で部下に取り憑こうとしている死霊を追い払ってやるんだ！」

言って才人はあつ一方を指差す。

その先には武器を失った親衛隊の兵達が死霊から逃げ惑う姿があった。

幾人かは既に体内に入り込んで来ているようで、まばらに倒れて居る者も居る。

「……わかった。だが、貴殿の言うとおり死霊を追い払ってその後はどうするのだ？」

「多分、クロムウエルを止めればこいつも止まる！」

「そうは言っても、この闇の中一体どうやって陛下を探すというのだ。探しだし殺すとしても我らが死霊に取り殺される方が先であろう。……貴殿ならば生き存える事が出来るであろうが」

「クロムウエルが何処にいるのかは俺には“判る”。だけど、殺すつもりはねえ。先約もあるしな。それにどうせ、コレもそう長続きはしない」

「どういう事だ？ なぜわかる？」

「あと五分もすればわかる。“追いついて、もう始めている”からな。それより、急げ。部下が死んじまってもいいのか？」

その声をはりあげながらも、才人は澱む事の無い動きで次々と死霊を斬り伏せていく。

言葉は荒くいまだに怒りが収まらぬといった様子であった。

が、自分の周囲を飛ぶ死霊を斬った後、倒れて死霊に集られ虫の息となつてゐる敵兵を優先的に助けている辺り、憎悪に捕らわれてはいないようである。

ホーキンス將軍も様々な疑問を内にしまい込みながら立ち上がり、思考を切り替えて“ライト”の呪文を詠唱した。

それから光る刺突剣のような杖を振り回しつつ、倒れている部下達の元へと駆け寄る。

死霊達は才人の読み通り、やはり光が苦手であるらしい。

光る杖の先を取り殺されようとしている部下の体に翳すと、おぞましい呻きを上げながら死霊が体内から出て来て、周囲の闇に逃げ込むのであった。

將軍はその様子を見てやっとこの状況に希望を抱いたのだが、しかしそこから中から聞こえる死霊達の呻きと部下達の絶叫がそれを打ち砕く。

数が圧倒的に違うのだ。

光が灯った杖は確かに希望となつたが、ここまで数が違つと焼け石に水といった風情である。

くそ、光だ。

もつと光さえあれば

そう願いなながら数え切れない程部下を助け出し、助けられなかった部下を視界の端に捕らえながら死霊を追い払っていた時である。

ホーキンス將軍が願つた光が辺りに満ちた。

光は想像を絶する程強く、そこかしこで悲鳴があがる。

將軍は突如出現した光に一時視界を奪われ、目を押さえながら耳を澄ませて辺りの様子を伺つた。

兵達のうめき声は聞こえて来るが、悲鳴は上がっておらずあの死霊のおぞましい囁きは聞こえない。

どうやら先程の光により、すべて消え去ったらしい。  
視界が徐々に戻って来る。

うすぼんやり見える景色は想像通り日光が満ちており、あの黒い霧は綺麗に消え去っているようだ。

一体なにが起きたのだ？ あの少年は……

矢次変わる状況の中、ホーキンス將軍はその中心に居るであろう人物の姿を探した。

恐らくは、先程の強い光も無関係では無いだろう。

果たして、直ぐに才人の背は見つかった。

將軍達より数十メートル程離れた位置に、ぽつんと立っている。

主君であるクロムウエルも一緒だ。

同時に、見覚えの無い背もその隣にちょこんと立っていた。

背は低い。

背に流した薄ピンクの長い髪から、女性である事が伺えた。

クロムウエルは予想外の出来事に加え、悉く己の野望を打ち砕いた勇者を目の前に遠目にも判る程酷く狼狽えている。

もし、彼が陛下の命を絶つつもりならば、もう間に合うまい。

ここからでは距離がありすぎる。

老將軍は苦く敗北感を噛みしめ、諦めと小さな安堵を覚え肩を落とした。

そして、かろうじて命を取り留めた者達は戦の終焉を目にする。

只一人の勝利者、その隣に立っていた小さな少女が勇者の宣言通り、皇帝を殴り飛ばしたのだ。

才人とルイズが見つかったのは、ハガルの月に入ってからだった。

二人はルイズがクロムウエルを殴り飛ばした後、ホーキンス將軍

より降伏を受け入れて暫くはその場に留まっていた。

奇妙な話ではあったが、降伏の使者を逃げる連合軍に送るまでの間、その場に才人達が留まる必要があったからだ。

やがて、最も早くその場に駆けつけたのは、ジュリオであった。

ジュリオはルイズから“忘却”をかけられ、しかし周囲の士官達の会話から一人足止めとして戦場に残っている事を知り、せめて結果はどうなったのか確かめるべく駆けつけたのである。

しかし、戦場は彼の予想を大きく裏切る形で消え去っていた。

最初に気が付いたのは、降伏旗を上げて浮かぶフネの存在。

よくよく見てみれば、いくつかのフネは地に落ちて“座礁”している。

この時のジュリオがまず思い浮かべたのは、あの“ガンダールヴ”の事であった。

いくら“虚無”が強力であるとはいえ、使い魔も無しに単身で軍隊と渡り合える筈は無いからだ。

もしかしたら、あの使い魔が生きて居て、戦場のどこかで主を守り続けているのかも知れない。

だとしたら、早く助けに行かねば。

いくら彼とて、十万以上に膨れあがったあの死者の群れと戦い続けるのは不可能だ。

ジュリオは己の任務を遂行できる喜びと焦りを胸に、愛騎に速く飛ぶよう命じた。

そして程なく、彼は信じられぬ光景を目の当たりにする。

なんと二人は敵陣奥深く、皇帝クロムウエルの元に居てこれを捕縛していたのだ。

さらには敵は既に降伏を二人に伝えており、信じられない事にとつやら二人は十万を超えるアルビオン軍を相手に勝利を納めていたらしい。

絶句しながらも事の経緯とクロムウエルの身柄を受け取ったジュリオは、この時一つの過ちを犯してしまう。

想像を遙かに超えた“虚無”の主従を目の当たりにして、やや興奮気味に来る聖戦へと想いを馳せて居た為か。

ルイズと才人に言われるがまま、クロムウエルの身柄と降伏の申し出を連合軍に持ち帰ったのだ。

思えばこの時、二人から目を離すべきで無かった。

それが二人の最後の目撃情報と成り、以後、現在に至るまで二人は行方をくらませてしまったのであった。

「まったく。陛下の慌てようといったら無かったぞ。で？　いままで何処にいたのだ？」

シテイ・オブ・サウスゴータ。

かつてこの街に駐留していた連合軍の司令官が使っていた、豪華な宿の一室にて。

才人とルイズは正座をさせられ、それを取り囲む者達が居た。

気まずそうに下を向く二人を取り囲むのは、アニエスとシエスタ、そしてケイトとメアリである。

アニエスはアンリエッタ女王の名代として極秘に二人を搜索しに来ており、またシエスタは行方不明になった二人を探す為、学園には戻らず二人の知己として軍の搜索隊に加わっていたのだった。

又、ケイトの方はウェールズ皇太子の名代として、メアリはケイトの護衛役という名目での搜索隊に参加していたのである。

彼女達を含めた銃士隊がサウスゴータを拠点に搜索を開始しようとした矢先、ひょっこり才人とルイズが戻って来たのだ。

「そうですよサイトさん！　わたし、すっごく心配したんですよ？」

「う、ごめんシエスタ……」

「彼女だけではありません。ウェールズ皇太子殿下だって、それはもう心配してありました」

「そつだよサイト。オレだって、ブラウ准尉だって心配したんだぜ？」  
「ミス・ヴァリエール。貴女が付いていながら一体何故？ アンリエッタ女王陛下も非常に心配しておいででした」  
「ごめん、なさい……」

二人は肩を寄せ合い、小さく縮こまるように正座をして、しゅんとした。

だが、何処で何をしていたのかは決して喋ろうとしないのである。と、いうか、実際の所とても人に話せる内容ではなかったのだ。

ジュリオにクロムウエルの身柄を渡して見送った後。

二人はここ最近起きた事や愚痴、そしてそれぞれの無事を喜び合いい、しばしその場で語り合っていたのだったが。

話がティファニアに及ぶに至り、彼女にも事情をきちんと説明しておこうという事になったのである。

幸い、“虚無”であるルイズにいつも目を光らせていたジュリオはここには居ない。

今ならば彼に気取られず、同じ“虚無”であるテファニアの元へ行けるだろう。

いまだアルビオンの軍の兵は数多く居たが、才人が粗方武器を砂に変えていた為、再び戦闘を始める心配も無い。

と、いう事で二人は早速、ホーキンス將軍の制止を無視してティファニアの住むウエストウッド村へと向かい、改めて謝礼と自己紹介を行ったのだが。

流石にいきなりティファニアに全ての未来を話し、ウエストウッド村を離れて暮らすかどうかの決断を迫るわけにも行かず、時が来るまではそつとしておこうと決めた二人はティファニアにある事を勧められていたのである。

それは、突如消えてしまった同年代の友人が笑顔で戻って来た事を嬉しく思ったティファニアの、ささやかな提案であった。

つまり、しばらく村に逗留していかないか、というものだ。

この提案を受け、真つ先に食いついたのはルイズである。

今、才人と共に連合軍へ帰ればものすごい騒ぎと成り、ゆっくり二人きりで過ごせなくなる事が明白であった。

それ故、しばしの“休暇”代わりにここへ留まる事にしたのだ。

幸い、ジュリオに無事である姿を目撃されている。

よっていきなり戦死や行方不明者扱いにはならないだろう、という才人の判断もあった。

果たして、ティファニアの提案は二人に受け入れられ、しばしの安息に体を横たえる事となる。

しかし。

しかし、である。

ルイズにしてみれば、才人は一度失った温もりである。

それを失う辛さは想像を絶し、打ちのめされる日々を思えば夜二人きりになった時、今度は安堵の涙となって才人の胸を濡らすのだ。その後、ルイズが落ち着くのを待って二人は、それまでの分を補うかのように何度もキスを重ねて

「ミス・ヴァリエール。なぜ二週間以上、何処にいたのかを言えないのですか？」

「それは　その、ひ、秘密よ！　これは女王陛下に関する機密なんだから！」

「ならばその機密をお教え願いたい。私はアンリエッタ女王陛下より、全権を委任されここに派遣されております」

「う……」

「サイトさん、サイトさんからも何か説明してください！　ミス・ツェルプストーも心配していたんですよ?!」

「う、ごめんシエスタ」

「サイト。何か、言えない事情があるのですか？」

「あ、ああ。そうなんだよ。ケイト、お前なら、判ってくれるだろ

「？」

継るような才人の表情に、他の者と共に正座する二人を見下ろしていたすケイトはふう、とため息を一つ吐いた。

呆れたような表情であったが、安堵の色が強い。

同様の雰囲気はアニメスやシエスタにも見られ、どうやら説教ももうすぐ終わりそうである。そう感じて内心、胸をなで下ろした才人とルイズであったのだが。

「なあ、おまえら。なあんか、おかしくねえか？」

何時の間に背後に回り込んだのか、メアリがしゃがみ込み、二人と視線の高さを合わせてそう言ったのである。

二人がギギギと背後に振り向くと、そこにあるのはじっとりと睨むメアリの顔。

「どういう事？ メアリ」

「そうだなあ……プロウ准尉、シエっちゃん、なんかちょっとおかしって感じない？」

「私は特に……」

「うーん、わたしもサイトさんとミス・ヴァリエールにおかしい所は感じませんが」

「メアリ殿。何がおかしいのですか？」

「隊長さんに言われたように、何がって言われるとなあ……」

言って、メアリはううむ、と考え込む。

対するサイトとルイズは、顔を引きつらせながらもじっとメアリを見つめ続けて居た。

「なんつうか、こっ、近いんだ」



「近い？」

「ああ。微妙に、二人の距離が。何するにしても体が接触するみたいなの？ ほら、正座しているけど、こうやってちよくちよく肩が触れ合ってるだろう？」

「んー、そりゃ、二人はその……恋人、同士ですし」

「わ、わたしはそれでも構いません。二番目でもいいんですし！」

「うーむ……ああ！ そっか。……なあ、サイト」

「な、んだ？ メアリ」

「お前、ルイズとやっただろ？」

ピシリ。

空気に亀裂が入る音を、その場に居る全ての者が聞いた。

長い沈黙と静寂が時を固定する。

かろうじて時が流れていたのはルイズである。

才人と共に後を振り返っていた彼女は正座をしたまま、ゆっくりと前に向き直り、それから俯いて全身を深紅に染めていく。

放っておけばその内火でも噴きそうな勢いだ。

「ナンデスト？」

「だからあ、お前、ルイズとやっただろ？」

「そ、そそ、それは……」

「ほ、本当ですかミス・ヴァリエール？！」

「う、そ、それは、さ、サイトとはその……えっと、その……ね？」

「サイト?! 戦後処理に追われる殿下を放つといて、あなたは何を！」

「……やれやれ。そんな理由か」

正座をする二人にずい、と詰め寄るシエスタとケイト。

その目は血走って、憤怒の色が見え隠れする。

対照的に二人を見下ろしたままであったアニエスは、呆れたよう

に深く深くため息をついた。

「まあ、傍目にも火が付くのは時間の問題だったけどな。でもくそ、オレ、見事にフラれちまったってわけか。いや残念だったなあ、ブ口ウ准尉！」

「な、なんで私に?!」

「隠すなって」

「わ、わたしは別に……その……」

「しょぼくれるなよ。なあに、サイト程の男だ。その内愛人やら側室やら募集し始めるだろうから、一緒に予約いれとこうぜ」

「な、なにをそんな!」

「答えてください! ミス・ヴァリエール!」

「えと、あの……だから、その……」

「やったの!? 貴女、サイトさんとやったんですか?!」

「シエスタ、その、な? おちつけって」

「サイトさんはだまって! ミス・ヴァリエール! やったんですね?!」

微妙に話が脱線し、詰め寄っていた姿勢を正して立ち上がり、モジモジとするケイト。

一方では歯を剥き、鬼の形相でルイズに詰め寄る、シエスタ。場に混沌とした空気が漂い始めていた。

「うう、その……」

「やったな?!」

「あう」

「やったんだな?!」

「う……そうよ! やったわよ!! サイトとやったわよ! 悪い?! サイトは私のものだもん、外野にとやかく言われる筋合いはないわよ!」

ルイズの絶叫は、耳鳴りを引き起こす程の物であった。  
恐らくは、営業を再開したサウスゴーターを誇る老舗宿に泊まる、他の客の耳にまで届いているはずだ。

「る、ルイズ！ それはいかん！ それだけはいかんぞ！」

「きい！ やっぱりやったんですね！ あんなにミス・ツエルプストーと一緒に、ミス・タバサの件が解決するまではやらないよう、釘をさしたのに！！！」

「仕方ないでしょ！ ガマンできなかったもの！」

「盛った犬や猫じゃなるまいし、ガマンできなかったとはなんですか！」

「うっさい！ だれが盛った犬よ！」

「じゃああれか、猿ですか！ 猿ですね！」

「猿ってなによ猿って！」

「あー、シエっちゃん、それアルビオンでも言うわ。オレの子分にもいたけどよ、覚えては発情した猿みてえにそこからパコパコと始めやがって、そりゃあ気まずいのなんのって」

「やめてメアリ！ ちよつとは言葉をえらんでよもっ！」

「怒るなよ准尉。同じフネに乗る仲じゃねえか。もうコツソリ航海術教えてやらないぞ？」

「“麗しのアンリエッタ号”の正式なクルーになるんなら、下品な言葉遣いは厳禁です！」

「は！ お上品な船乗りがいるかよ。上には男同士でやりあってる現場に出くわしても動じねえ度量つつもんが必要なんだぜ？」

「うっわ、ドン引き。メアリさんそれ、実話ですか？」

「まあな、シエっちゃん。三回ほど見た事あるぜ？ 陸じゃ珍しいかもしれないが、フネの上じゃ珍しくない」

「な、なな、なんと……」

「ちよつと！ きいてんの？！ だれが猿よ！ 撤回しなさいよ！」

混沌はさらに深まり、一人取り残された才人はただただ、羞恥のあまりうつむき続けるしか無かった。

タバサの件が解決するまで、ルイズとは肉体関係を持たない。そう、固く決意していた筈である。

しかし流石の才人も、長い航海と戦場での生活の果てにあのよう  
にルイズに迫られては

「まあ、なんだ。無事で何よりだ」

落ち込む才人の肩にポン、と手をおきアニエスは薄く笑った。

強い瞳にはどこか、優しげなものが混じっている。

仰ぎ見た才人も薄く笑って応じ、一時心の平穏をとりもどした。  
が。

「サイト……あなた、誰に今色目を使ったの？」

「ルイズ?!」

直ぐに厳しい現実が勇者に襲いかかる。

心と体を繋ぎ、一層独占欲を肥大化させた恋人の千里眼によって、  
何時の間にもこちらの方をみていたのか、シエスタとの口論を辞め、  
ルイズはゆらりと立ち上がった。

その声は恐ろしい程冷たい。

前髪によって隠れた奥の瞳は妖しく輝き、どこか懐かしい黒い才  
ーラが全身を包んでいる。

勿論、才人は決してアニエスに色目を使った訳では無い。

「お、おちつけ、ルイズ!」

「そんな笑い方……普通、恋人が居る男の子が、他の女の子にした  
りしないよね?」

「気のせいだ！ 普通だつてこんなの！」

「ミス・ヴァリエール。私、見ましたわ。サイトさん、アニエス隊長に色目を使つていました」

「私にもそう見えましたが」

「サイトお、浮気すんならオレがいいぜ？ 後腐れねえし」

「やめさない、いや、やめて！ シエスタ！ ケイト！ メアリ！」

「サイト？ ちょっと、こっちにいらつしやい」

「ひ？！ 助けて！ アニエスさん！」

むんず、と才人の腕を掴む力は、かつての妻のそれとなんら変わらない。

いや、力だけで無く、仕草、表情、圧力といずれも見覚えのある“ソレ”だ。

万軍を蹴散らす勇者は、まるで死刑囚のように情けなく隣の部屋に向かつてズルズルと引きずられて行く。

その姿にシエスタ、ケイト、メアリは冷たく笑つて見送るばかりだ。

「悪いが、痴話喧嘩は自分で解決してくれ。……それに私は巻き込まれたくはない」

そう言つて、アニエスはひらひらと手を振つた。

これで勇者を助ける者が完全に居なくなつてしまった。

才人は情けない顔をして、腕を引くルイズを見上げる。

綺麗な顔には怒りの色が滲み、暫くは言葉が届きそうに無い。

落ち着かせる為には強引にでも押し倒し、“そうでない”と体で示すのが一番であるが

流石にこの場で“ソレ”をやると、本当に犬や猫とかわらないではないか。

ぎい。

隣の部屋の扉が開く。

過去、何度も経験した辛く厳しい“ルイズのお説教”の始まりだ。いや、“未来”（いま）から先は、もしかしたらもっと辛いものになるのかもしれない。

「さあ、サイト。話し合いませんか？ 今、何が行けなかったのか、たつぷりと教えてあげる。お互い、もっともつと理解しないとね」

いつも聞いていた愛らしい声もそのままに、かつて恐怖した音色をルイズは吐き出す。

それから、ズルズルと才人を少し引きずって、ぎい、と音を立て扉が閉じられた。

その直前、才人は確かに見たのである。

珍しくいつと歯を剥いて英雄を見送る、ケイトの不機嫌な表情を。

## 8 - 1 : 白の国から来たるは幻影（前書き）

本話より第二部です。

基本的に四話程度のオリジナルエピソード中心にお話が進みます。原作進行ではありませんが、原作イベントはキンクリする予定。

## 8 - 1 : 白の国から来たるは幻影

そろそろ冬の終わりも見えてくる、ハガルの月の中程でのこと。

約八ヶ月に渡る神聖アルビオン共和国との戦争は、トリステイン王国と帝政ゲルマニアの連合軍による勝利によって幕を閉じ、ハルケギニアに一時の平穏が戻って来ていた。

戦後、ロンディニウムに各国の代表を招いて開かれた“諸国会議”は滞りなく進み、程なくトリステイン王国、帝政ゲルマニア、ロマリア連合皇国、そしてガリア王国の承認の元、ウエールズ王の即位が承認されアルビオン王国は無事復権したのであった。

しかし“諸国会議”においてアルビオン王国の復活を心から祝う者は、出席していたトリステイン王国女王を除き、誰一人としていない。

なぜならば、“諸国会議”に出席していた各国の代表は皆、大幅に国力が弱ったアルビオン王国への支援と引き替えに、ある者は自国に有利な通商条約を、またある者はアルビオン大陸の一部領有や権利譲渡を目論んでいるからだ。

アルビオン王国としてもハルケギニア随一を誇っていた艦隊や竜騎士隊の多くを失い、長期にわたる内戦と先のトリステイン遠征によって国内は疲弊しきっており、これらを断る事は難しい状況である。

当然、多少不利な条件であっても国力の回復を最優先したいアルビオン王国側は、呑まざるを得なくなるのではあるが。



ただ唯一アルビオン王国にとっての救いは、トリステイン王国と帝政ゲルマニア間に結んだ講和条約において、割譲された領地が遠い将来に返還されるという内容であったことであろう。

無論返還の為の条件として莫大な賠償金を必要とするが、それでも先祖伝来の地を取り戻せる道が残された事は、ウエールズ王にとって希望であり得た。

この、恐らくは“諸国会議”においてアルビオン王国にとり、唯一有利な部分を有する条約を締結できたのは、“アルビオンの英雄”による所が大きかったと言えた。

と、いうのも浮遊大陸に飛び地として領地を有する場合、当然そこに統治者として貴族を封じ、軍隊を置く必要がある。

勿論、平時は飛び地からの税金や交易による収入が得られようが、有事の際、あるいはそうで無くてもウエールズ王の気持ち一つで簡単に奪還される恐れが常につきまとう。

これが陸続きの領地であれば援軍を送り領地を守れるのであろうが、浮遊大陸であればそうはいかない。

先の遠征に見るように、いざ援軍を送るにしても莫大な戦費と準備期間を必要とするのだ。

一方、アルビオン王国側としては陸、空軍共に甚大な損害を出し、軍隊そのものは大幅な弱体化をしていたものの、“アルビオンの英雄”が未だ王国を軍事強国たらしめていた。

何せ、たった一人で城を破壊し、十万以上の軍隊を壊滅させる事ができるのである。

正体はトリステイン貴族の使い魔であるが、各国の要人らには知る由などなく、英雄は彼らにとって間違いなくアルビオンの貴族であり、“諸国会議”で交渉を行うに辺り無視はできぬアルビオン王国の軍事力であった。

その“アルビオンの英雄”を相手にしては、万一の有事の際飛び

地である領地では防衛おろか時間稼ぎすら不可能に等しい。

結果永続的な領地の獲得よりもアルビオン王国と友好的な関係を築き、かつ税収や利権だけは確保しようとする動きが主要国で見られ、今回の講和条約と成ったのである。

特にトリステイン女王、アンリエッタはうら若き外見とは裏腹に、講和条約において強欲な暴君のごとく貪欲に発言し、自国の利益になるよう働いて、各国の代表を大いに驚かせていた。

アルビオン戦役において、連合軍に参加した国々には兵を派遣した費用等を規模に応じ、アルビオン王国に請求する権利があつたが、それらに上乘せされるべき賠償金は戦果に因る。

しかし、大きな戦果といえは直接的にレコンキスタの軍を殲滅した“アルビオンの英雄”を除けば、トリステインの秘密兵器によるものが殆どで、故にアンリエッタは講和条約においての発言力は強かつた。

結果、飛び地の無償借り上げ領地とは言え、トリステインがアルビオン王家から得た領地は浮遊大陸の五分の一にも及び、その中にはロサイス空軍基地を始めとした主要な港も含まれていた。

帝政ゲルマニアやロマリア連合皇国も一部の港や借り上げ領地を得はしたが、トリステインと比べると規模は小さく、二国合わせてトリステインの半分といった所であろうか。

この結果に連合軍へ兵を多く出してた帝政ゲルマニア側に不満が噴出したが、ウェールズ王へ“個人的に”支援していたゲルマニア貴族であるビットナー西方伯が講和条約とは別に、いくつかの物資の専売権を獲得した事によって、丸く収まる結果となった。

と、いつもの帝政ゲルマニアの皇帝アルブレヒト三世には政敵が多く、ビットナー西方伯は彼の数少ない、信頼に足る支援者であったからだ。

アルブレヒト三世としては、帝政ゲルマニアが権益を得て政敵が

含まれる国内が富むよりも、自分の支援者が富み力をつける事が望ましかった面もあったのである。

以上のような経緯を辿り“諸国会議”は二週間にもわたる交渉の果てに閉会し、最後にアルビオン王国、トリステイン王国、帝政ゲルマニア、ロマリア連合皇国、そしてガリア王国による王権同盟が締結されたのであった。

ハガルの月、第二の週・ヘイムダルの週が終わりに近いオセルの曜日での出来事である。

「で、なんでそこでクルデンホルフ大公国が出てくるのよ」

ルイズは不機嫌にそういつて、ジロリとケイトを睨んだ。

場所は魔法学院にある女子寮の自室である。

時刻は朝の十時を回っていたが、アルビオン王家の特使がトリステイン女王の手紙を携え、ルイズ ではなく才人を訪ねて来たので、授業には出席せずその対応をしていたのだった。

才人も又、アルビオン王家とは別にアンリエッタからトリステイン王国の名誉貴族号である“シュヴァリエ”に叙せられた後配属された、魔法学院の生徒を中心として編成される“水精靈騎士隊”<sup>オンドレイヌ</sup>の訓練を抜け出しての応対である。

才人は兎も角、ルイズの強い視線に真新しい軍服に身を包んだケイトはう、とたじろいで一歩下がりがりながらも、アンリエッタ女王から賜った手紙を差しだして見せた。

「あによ、これ。ニセモノじゃないでしょうね？ なんで姫さまの

手紙が私じゃなくてケイトに渡されてるのよ？」

「し、しりませんよ！ 私だって、ウエールズ陛下の命でトリステインの王宮に寄ってからここへ来ただけですし！」

「ま、ま、二人とも。落ち着けよ。ケイト、ルイズじゃなくて俺に用ってことは……」

「はい。ウエールズ陛下から、アルビオン貴族である“黒騎士”殿への依頼があります」

「うう……やっぱ俺、貴族社会向けには“黒騎士”って事になってるのか？」

「？ ええ、サイトとルイズさんの希望により“アルビオンの英雄”の詳細は国家機密としましたので……それに伴う呼称は我が国では自由騎士を意味する“黒騎士”<sup>ブラックナイト</sup>としておりますが……不都合ありませんでしょうか？」

「ある！ なんだってそんな恥ずかしい名前にすんだよ！ 折角、

“イーヴァルデイの勇者”の方を広めようと妖精亭のみんなや、“麗しのアンリエッタ号”のみんなに頼んで広めて貰ったのに！」

意外にもルイズより先に暴発した才人は、うがと叫び、頭をかきむしり始めた。

余程“黒騎士”というアルビオン貴族として“表向き”の名が恥ずかしいらしい。

「そんな事言いましても……貴族にとつて“イーヴァルデイの勇者”は平民向けの物語であり、あまり良い心証は抱かれなれないかと思えますよ？」

「それでもいいって！ 今からでも訂正できないか？！ 頼むよケイト！ 俺が貰ったサウスゴータ地方の関税権、お前にやるから！」

「な？！ い、いりませんよ！ サイトが陛下に貰った関税権って塩の関税権じゃないですか！ そんなの、私みたいな小娘が貰ったら命が幾つあっても足りませんって！ 大体、“麗しのアンリエッ

「夕号」の船長代理だけで一杯一杯です！」

「頼む！ この通りだ！ なんだったら“麗しのアンリエッタ号”をお前にやっても良い！」

「王国空軍の旗艦フラグシップの船長職を猫の子みたいに譲渡しようとししないで下さい！ 大体、サイトが乗らない“麗しのアンリエッタ号”なんてフリゲート以下の戦闘能力しかないじゃないですか！」

「そこをなんとか！ な？ “黒騎士”だけはイヤなんだ！」

「お断りします。って、いうか、無理ですよ。陛下を含めて一部の人間しか知らない機密扱いですし」

「あああ！ いやだ！ “黒騎士”はいやだ！」

「なによこれ！」

ダダをこねる才人の叫びに割って入ったのは、ルイズであった。

突然の事に才人もケイトもひとまずはじやれ合っ事を忘れ、恐る恐るルイズへ視線を投げかけると、彼女はアンリエッタの手紙を持ったまま怒りに肩を震わせていたのである。

「ルイズ？」

「ケイト……あなた、サイトを迎えに来たのよね？」

「え？ ええ、ウエールズ陛下より依頼を伝えた後、“黒騎士”殿の了承を得られましたら速やかに“麗しのアンリエッタ号”でクルデンホルフ大公国へ送り届けるよう仰せつかっております」

「ふざけないで！ なんでサイト“だけ”なのよ！」

「う……そうはいいいまして、私が決めたわけじゃ無いもので……」

語尾を荒げるルイズにケイトは少し俯いて、困ったような顔をした。

どうやらアンリエッタの手紙にはケイトが才人を迎えに来た理由の詳細と、ルイズが納得できない何かを書き記されているらしい。

そもそも、如何なる理由でケイトが魔法学院に訪れたのか。

事の始まりは“諸国会議”が終わった、数日後の事。

平穏を取り戻し新たな始まりを迎えた白の国に、とある国からの外交使節が訪れていた。

トリステイン王国内にある、クルデンホルフ大公国からである。

クルデンホルフ大公国は元々トリステイン王国の一部で、名目上は独立国であるが外交や軍事はトリステイン王国に依存している新興国だ。

大公国を治めるクルデンホルフ家はハルケギニアでも有数の資産家で、巨万の富の一部をトリステイン国内の貴族へ貸し出し、王政に対して政治的な影響力も強い名家であった。

“諸国会議”に出席しなかったのは、外交を担うトリステイン王国に憚ったの事であるのだろう、“諸国会議”が閉会するや計ったかのようにアルビオン王家に謁見を申し出てきたのである。

果たして、珍しくトリステイン王国とは別に外交使節を送り込んできたクルデンホルフ大公国は、アルビオン王家に対して多額の資金援助を申し出たのであった。

それも、破格の条件で、だ。

勿論クルデンホルフ大公国側にはある意図があるのだが、財務の方々から早くも火の手が上がっていたアルビオン王国側は、これをいとも容易く呑んでしまったのである。

大公国が示した“条件”とはどのような物であったのか、この時の才人やルイズには知る由もない。

しかしその結果、ケイトが“アルビオンの英雄”を極秘裏に迎えに来たと言う事実は、他ならぬケイトの口から説明が成されていて、冒頭に至るのである。

才人は悪くなる場の空気に嫌な予感を感じつつも、怒りの理由を説明してもらおうべく、優しくルイズの肩に手を添え落ち着けよ、と少し低い声をかけた。

だが、愛らしい彼の主は怒りを鎮めるどころか更に激高して、齒を剥きケイトに食ってかかったのである。

「これが落ち着いていられるものですか！ 只でさえなんでサイトだけ、クルデンホルフ大公国に行かなきゃならないのかわからないのに、どうして私がついて行っっちゃいけないのよ！」

「なぬ？」

「それを私にいわれましても……」

「どういう事だ？ ルイズ？」

「どうもこうも、姫さまの手紙にはクルデンホルフ大公国はアルビオン王国のみならず、トリステイン王国にも先の戦費として貸りたお金の棒引きを申し出てきた事が書かれていたわ。 あんたが一人で大公国に来られるよう、“便宜”を図るのを条件にね」

吐き捨てるようにそう言って、ルイズはべつとあるう事が女王陛下からの手紙を机の上に放り投げた。

それだけでも十分不敬であるが、本当ならば床にたたきつけ踏みつけたかった彼女の心情を汲めば、十分己を押さえていたのであるう。

なんで、クルデンホルフ大公国が俺を呼び寄せたいんだ？

それも、アルビオン一国だけでなくトリステイン王国にまで資金援助を申し出てまで……

才人は腕を組み首を傾げながらも、その意図を推測できずうむと唸ってしまふ。

ただ一つ、言えることと言えば

「……つまり、姫さんも条件を呑んだって事か？」

「む……そうなりますね。大公国は何を目的としているのでしょうか？」

「知らないわよ！ サイト、とにかく、行っっちゃダメよ！」

「こ、困ります！」

アルビオンで才人と一層“仲良く”なっていたルイズの、当然の反応に焦ったのはケイトであった。

その焦り様は任務を遂行出来ぬ為というよりも、もっと重要な何かを成し遂げられなくなるという悲壮感が漂い、聞く耳も持たず否定するつもりであったルイズの興味を知らず引いた。

「なんでよ！ サイトは“自由騎士”の筈よ？！ アルビオンとトリスティン王国の貴族籍は持っているけれど、叙勲の時忠誠は誓わなかったわ！ つまり、サイトに命令なんて誰も出来ないはずよ！」

「それはその……そうなんです……」

「あによ！」

「その……もう、お金を貰っちゃったんです」

耳にいたい、沈黙。

ケイトの台詞は“引き返せない”という意味も含まれていた。

というのも、個人とは違い国家間では約束が果たせないならば貰ったお金はすぐ返せば良い、という単純なものではない。

今回の場合を例に出せば、一度約束の金子を受けとらばそれは“契約成立”を意味し、必ず約束は果たさねば成らないのである。

それが誇りや面子を重んじる貴族である所か、国家間の物ならば尚更だ。

事は、復権したばかりのアルビオン王家にとって、その威信に関わる話となっていたのだ。

勿論、名目上はアルビオンの貴族である才人ではあったが、ルイズの言のとおり忠誠を誓ったわけでない以上、これに従う道理は無い。

無いのだが……



「……ルイズ」

「嫌」

「いや、話は最後まで聞こう?」

「聞かなくてもわかるもん」

「いいから。俺が行かないと、殿下 じゃない、ウェールズ陛下が困るし、ウェールズ陛下が困ると姫さんが悲しむだろう?」

「そんなの、私とサイトには関係無いもん」

「あるって。お前、今のアルビオン王国が苦しいのはわかるだろ? あそこが安定しないと、姫さんがいつまで経ってもウェールズ陛下と結婚出来ないじゃないか」

「え?! 陛下とアンリエッタ女王陛下って、結婚するんですか?」

「ん? 知らないのか? ちゃんとした話じゃないけども、そういう話はあるんだぜ?」

「……迂闊に喋り過ぎよ、サイト」

「たはは……悪い。ケイト、今のは内緒、な?」

「え? え、ええ……。そうですか……。陛下と女王陛下が……。あ、それでアンリエッタ女王陛下はあんなにも貪欲に領地や権利の獲得に……」

「そ。結婚しちまえば、アルビオン王国から見ればトリステイン側からのいい持参金になるし、トリステインが得られるアルビオンの権益も、更にデカくなるしな。何より姫さんの想いも成就できる。

よく考えたものさ。そんな事より、な? ルイズ」

「嫌ったら、嫌」

ルイズはまるでだっ子のように、ぷくりと両頬を膨らませぴいと明後日の方向を向いてしまった。

一見甘えているように見えるこの仕草ではあったが、最早道理で無く感情で否定しており、何が何でも受け入れない、という意思が

明確に才人へと伝わるのである。

つまり、こうなってはどのような説得も意味を成さない状態であるのだ。

才人はほとほとに困った表情を浮かべし、何かを考え込んで居たが、苦いたため息を吐いた後、複雑な表情でその場に立ち尽くしていたケイトに声を掛けた。

「すまん、ケイト。明日まで待つてくれるか？ ルイズは説得しておくから」

「え？ ええ、まあそれ位ならば……」

「説得なんて意味ないもん」

「ほんと、悪いな。俺もルイズも、ウエールズ陛下を困らせるような事はしたくはないんだ。 だけど、次からはちゃんと相談してくれよ？」

「それはもう。陛下からも、くれぐれもサイトに謝っておいてくれと仰せつかってきましたし」

「そか。なら、今回だけはなんとか陛下と姫さんの顔をたてて行くから。後でそう伝えておいてくれ」

「……いかないもん。サイトはいかないもん」

「はい。では明日、この時間にお迎えにあがりますので。“船長”」

「ああ、頼むぜ“副長”」

ケイトは俯きむくれ続けるルイズを一瞥してからそう言って姿勢を正し、綺麗な敬礼を残して部屋を後にした。

残されたのは、苦笑いを浮かべ続ける才人と、小動物のよいうに頬を膨らませ小声でダダをこねるルイズだけである。

相も変わらず頬の内に空気を張るルイズは、唇を尖らせ不機嫌な表情を浮かべているが、先程とは違い青白く怒りを湛えていた頬には薄紅色の朱が差していた。

怒りの為ではない。

裏腹に大きく膨らむ、期待の為である。

ルイズとしても、やはりアンリエッタやウェールズを困らせるのは本義ではない。

二人の幸せを心から願ひ、親友として、忠臣として、アンリエッタの意向に添えるのは吝かではないのだ。

しかし、そんな貴族としての彼女とは別に、女として譲れないものもまたあった。

大切な使い魔を、愛しい恋人を、一人旅立たせ離ればなれとなる事は今の彼女には耐えられないのである。

そして、そんな今のルイズをどう説得しどう穴埋めをすべきか、その術を才人はよくわかつていた。

同時にルイズも又、それをよく理解していて、故に何時までもむくれ、だだをこねていたのである。

つまり、いけない奴だとなじらる為。

または、急速に飢えた心を満たす為。

あるいは、夜の孤独を越えられるよう体中に才人を刻み込む為。

翌日、ケイトが迎えに来るその時まで、愛しあう時間はたっぷりあった。

## 8 - 2 : 白の国から来たるは幻影

ベアトリス・イヴオンヌ・フォン・クルデンホルフは園遊会などでしか着ない艶やかなドレスに身を包み、不機嫌に空を見上げていた。

冬も終わりに近い空は抜けるように青く、視線の先薄い雲に混じって純白のフネが浮かんでいる。

遠目にもわかる優雅なフネの姿は成る程、流石はハルケギニアでも他の追隨を許さぬ程洗練されているとされたアルビオン船である。

先の戦により、ハルケギニア最強の名をほしいままにしていた艦隊と竜騎士隊は壊滅状態となったアルビオン王国であるが、今日では只一隻の、あの小さなフリゲート艦の存在がアルビオン王国空軍を未だに最強たらしめている。

そして、もう一つの最強の称号はクルデンホルフ大公爵唯一の港ベケリクの棧橋立ち大公爵が招いた客を待ち続けるベアトリスの背後に控えた、ルフト・バンツァー・リッター空中装甲騎士団へと移っていた。

つまりはこの日、奇しくもハルケギニア最強を担う空軍力がここ、クルデンホルフ大公爵へと集結していたと言えよう。

否。

この日空軍力のみならず、陸軍力も、ハルケギニアにはあまり馴染み無いが恐らくは海軍力さえも最強の戦力が“やってくる”のである。

「……どんな殿方かしらね？ ううん、きっと、オーク鬼のように  
いかつい殿方なのでしょう。なにせ、魔法も使えないのにたった一  
人でメイジを含めた十万以上の軍隊に打ち勝つんですもの」

クルデンホルフ大公の娘であるベアトリスは白い息と共にそう吐  
き捨てるように呟いて、徐々に近付いて来る純白のフネを見上げた  
まま眉根を寄せた。

まだ十代の半ばにも届かない彼女の年を考えれば、稀代の英雄を  
迎えるに当たって期待を口にしてもおかしくは無いはずであったの  
だが。

しかし美しく着飾ったベアトリスの表情には嫌悪と侮蔑がありあ  
りと浮かび、そんな彼女の空気は背後に控える空中装甲騎士団の面  
々にまで伝播していたのである。

「殿下。今日の風ですと、客人のフネが入港するまでまだまだ時間  
がかかります。しばしコートを羽織ってお待ちになってはいかがで  
しょう？」

「いらないわ。お父様から“アルビオンの英雄”を招くに当たり、  
わたしのもっとも美しい姿のまま出迎えるよう、強く言いつけられ  
たから。望遠鏡を使えばあの距離からでもわたしの姿は見えるので  
しょう？」

「は  
」ならば、このままで。寒いけれど、これも貴族の嗜みよ。名門貴  
族なら尚更、ね」

もう一度、白い息と共に内心とは真逆の言葉を吐き出してベアト  
リスは強く冬の空に浮かぶ美姫を睨む。

その表情は気を取り直したかのように柔和で、しかし瞳だけは行き場の無い苛立ちを内包し輝いていたのである。

その日、クルデンホルフ大公国の中心都市・クルデンホルフの表通りは、“アルピオンの英雄”を一目見ようとする人々でごった返していた。

いや、本当に一目見ようとする者はどれ程いたのかは甚だ疑問ではあるが、それをダシにして皆陽気に酒を呑んでいたのは間違いないであろう。

街はトリスタニアにも勝るとも劣らない程賑やかで、まるで祭りのような騒ぎである。

クルデンホルフ大公はゲルマニアにルーツを持ち、その潤沢な財力は“成金”と揶揄されながらもトリステインの王宮のみならず、金融の世界にまで深く根を張っていた。

その為か膝元であるクルデンホルフの街は大公と取引のある大商人や貴族、銀行の拠点が点在し、それらに従事する者あるいは当人を泊める豪華な宿が軒を連ね、その宿に勤める者も一流かそれに近い者達が集められ、といった調子で人々が自然と集まり、規模を大きくした都市である。

時刻は既に夜も半ばであったが、街中の酒場という酒場には人々が溢れ、酒の卸を商う店までも客の多さにてんでこ舞いとなっていた。

酒が無くなった酒場からの注文は途切れること無く、どここの卸業者の商会であつても荷車と人の列が見受けられる有様だ。

そんな、街をあげての乱恥気騒ぎとなっているクルデンホルフの

貧民街にて。

「ちよつと！ あんた、もうちよつとマシな場所はないの?! こ  
こ、臭いんだけど!」

「警沢言つなよ……」

「……変な事考えてないでしょうね？ わたしを誰だと」

「わー！ こんな所でお前何言いだすんだ！ 誰かに聞かれたらど  
うずんだよバカ!」

「バカとは何よバカとは！ あんたねえ、わたしがその気になれば  
あんたなんか直ぐにでも死刑にできるのよ?」

「わかつたわかつた！ 俺が悪かつたから、ほら、いくぞ？ 城の  
連中に見つかりたくないんだろ?」

「……ふん」

空き瓶や空の酒樽が散乱する酒場の裏で、深くフードを被った男  
女の人影が二つ。

貧民街にあつてはさして怪しい人物とは言えなかつたが、二人は  
内緒話もそこそこにイソイソと細い表の道に出て来て酒場の中をの  
ぞき込んでいた。

女の方はフードの上からも、酒場に入りにするには些か若すぎる  
とわかる程場違いな雰囲気を醸しだしており、本人はそのつもりで  
無いようだが見る者が見ればその所作の端々から貴族の娘である事  
が伺えよう。

それもそのはず、彼女こそ知る人ぞ知るクルデンホルフ大公爵姫  
殿下である、ベアトリス・イヴオンヌ・フォン・クルデンホルフそ  
の人であつた。

そしてもう一人は

「どう？」

「だめだ。ここも一杯。やっぱ、もう少し宿の質を落とさない tonight は泊まれそうにねえぞ？」

「なんでよ！」

「なんでって、貴族用と違ってこういう酒場兼宿屋は“つれこみ”も商ってるからな。こういう祭りの時は娼婦のねーちゃん達もかきいれ時なもんで、そこそこの部屋から埋まっていくんだよ」

「な……あ、あんた、この、わ、わわ、わたしをそんな所に連れ込もうとしてるの?! 不潔! 分をわきまえなさい！」

「仕方無いだろ! 貴族用だと流石にバレちまう！」

「そんな事ないわよ！」

「あるよ! お前、領……有名人の娘だろ? ここらじゃ、特に貴族界隈じゃ当然有名人だ。その、娘が貴族用の宿にお忍びで平民の男とお泊まりしたとか、噂話が広がってみろ！」

「……お父様が卒倒しかねないわね。当然、あんたは八つ裂きの刑「だろ? 今夜の舞踏会を抜け出せればいいんだし、一晩位ガマンしてくれよ。な?」

「……そんな事言っつて、あんた、わたしに悪戯でもしようと思んでいるんでしょ?」

「企むか! 大体、俺には恋人がいるし」

「ふん、どうだか。わたしの美しさにいつ理性のタガが外れるか、わかったものではないもの。……ま、いいわ。ともかく、平民と名家の貴族であるわたしじゃ釣り合いなんて最初からとれないんだし、変な気だけはおこさないでよね? イザとなったら魔法でとっちめてやるんだから」

「あい、あい。わかったから、次行くぞ。もしかしたらお前さんが抜け出した事がもうバレてて、城から追っ手がかかっているかもしれん。早いとこ見つけないとな」



才人はそう言って、店の外にまではみ出し寝込んでいる酔っ払いを跨ぎながら、暗い貧民街の路地を進み始めた。

その後をベアトリスが追い、やがて二人は闇の中へ消えていく。向かう先はやはり、まっとうな貴族は利用しない貧民街の宿だ。

二人がなぜこのような事を行っているのか。

その理由に、クルデンホルフ大公の企みと才人の誤算があった。

事の起こりはこうである。

“アルビオンの英雄”を領内に招いたクルデンホルフ大公の狙いは、自身の娘との婚約であった。

つまり才人を招いて歓待し、なんとかベアトリスと婚約させ、強大な軍事力を自国に得ようと考えての事である。

と、いうのも、たった一人で軍隊を殲滅できる戦力は才人が考えている以上に何処の国にとっても脅威で、同時に魅力的な存在なのだ。

特に力のない小国にしてみれば、彼一人をどうにかして獲得するだけで、一夜にしてハルケギニアで最強の武力を得ることになる。

またクルデンホルフ大公国には空中装甲騎士団があるとは言え、外交や軍事面ではトリステイン王国の庇護を受けねば立ちゆかない立場でもあった。

経済的には自立しており、名目上では独立国として扱われてはいたが、トリステイン王国の庇護下にあつては他国との様々な取引も思うように出来ない面も同時に存在する。

故に大公は才人の武力に目をつけ、他国の者が接触するよりも早く潤沢な資金を背景に“アルビオンの英雄”の獲得へ乗りだしていたのだ。

もし“アルビオンの英雄”程の軍事力を手に入れることが出来れば、それを背景として名実共に独立国となれる道も夢では無いので

ある。

だが、英雄を籠絡する策を周到に練っていた大公であったが、手始めに行った歓待の為の舞踏会においてその計画が早くも狂ってしまった。

どのような拍子か、腹心と計画の打ち合わせをしていた所をうっかり娘に聞かれてしまったのだ。

この時、ベアトリスの“アルビオンの英雄”に対する印象が良い物であったならば、ロマンチックな一夜に心を馳せさせる結果になっただけであろう。

しかし、わざわざベアトリス自身が出迎えた“アルビオンの英雄”は彼女の想像を遥かに越え、とてもでは無いが恋愛どころか政略結婚すら受け入れられぬ姿であり、それが大公にとって誤算となっていた。

なにせ彼女自身が出迎えた“アルビオンの英雄”は、“黒騎士”の二つ名の通りに漆黒の甲冑を身に着け、同じく黒鉄の鉄仮面をしていたからである。

それも、趣味の悪い薔薇の装飾がふんだんにあしらわれた品だ。それだけならまだしも、“アルビオンの英雄”は国家機密であるとして片時も鉄仮面も愚か鎧すら脱がなかった。

拳げ句、同席した城へ案内する馬車の中、これまた趣味の悪い言葉で自身の美貌を褒め称え、見え透いた下心を持ってベアトリスを口説いてきたのである。

これでは良い印象を抱いて居られるはずは無いではないか。

結果ベアトリスは断固として結婚（の為の既成事実作り）を拒否すべく、形式上での一方的な“見合い”を兼ねた舞踏会を抜けだす事を決意し、城を抜け出す協力者を物色しはじめたのであったのだが。

城内の衛兵や使用人、それに空中装甲騎士団に所属するメイジは

全て父の息がかかっており、信頼に値するような相談できる者もおらず、ベアトリスは早々に途方に暮れてしまうものの、やっこの思いで協力者を見つけることに成功する。

幸か不幸か彼女の眼鏡に叶ったのは、下船の際“アルビオンの英雄”の従者として只一人付き従うことを許可されていた平民の小姓に扮していた才人であった。

「ギーシュの奴、上手くやってるかな……」

「あに？　なんか言った？」

「いんや、独り言。と、あの看板……この先だな。ここで待っててくれ」

才人は酒場の様子を覗くべく路地を出るに当たり周囲に兵士がいないか見回しながら、今頃城で“アルビオンの英雄”の身代わりを務めているギーシュについて思いを巡らせた。

ギーシュは今頃、“黒騎士”の異名通りに自身が“練金”した竜騎士が身に付けるような漆黒の甲冑に身を包み、アルビオン王国の国家機密という触れ込みで仮面を着用して舞踏会に出席しているはずだ。

いまだクルデンホルフ大公の企みを知らない才人であったが、“有名”な貴族として舞踏会に出る以上、様々な誘惑が待ち受けている事はよく“知っていた”のである。

だからこそ、身代わりに立てたギーシュがどのような振る舞いをするのか、少々不安に思い心配をしていたのであった。

そもそも、なぜギーシュが才人のフリをしているのか、話は数日前、学院にケイトが才人を迎えに来る直前に戻る。

早朝、自室の前で寝不足から足をふらつかせながらも才人を見送

るルイズは、嫉妬から“悪い虫”を寄せ付けないう既に一計を案じていた。

つまり自分としては才人に他の女の子が近寄らなければそれで良いと考え、“アルビオンの英雄”に代理を立て才人をその小姓とし、誰かを同行させる事にしたのである。

勿論小姓すら同行を認められない恐れはあったが、その時はそのまま代理の者が“アルビオンの英雄”として振る舞えば良い。

幸い、“アルビオンの英雄”の正体はアルビオン王国及びトリステイン王国の機密であるからして、顔を隠していれば本物かどうかなどわかるはずも無かった。

無論、ルイズの企みはアンリエッタやウェールズに対する裏切りであるが、そもそもルイズにしてみれば自分の使い魔を勝手に持ち出し、交渉の材料にしてしまった行為など受け入れられる筈がない。めくるめく一夜で肉体的には満たされていたものの、その分出かける才人を見て心が急速に飢えてしまったルイズは、苦し紛れに知恵をしばったのである。

その、“アルビオンの英雄”役として白羽の矢が立ったのがギーシュだった。

当初ギーシュは“アルビオンの英雄”に成り代わることを渋っては居たが、英雄として国賓扱いされる心地を問われるに至り、やがては満更でも無いといった調子で甲冑や仮面を“練金”し始めるに至るのである。

が、ルイズの目論見は結果的に外れ、才人は変わらず女難に遭っていたのは皮肉な事であろう。

「よっし、兵士は居ないな。じゃ、ちよっくら様子見てくる」

「ちょ、こんな所にレディを一人置いて行くつもり？」

「直ぐそこだからガマンしてくれよ。もう城を抜け出して相当時間が経ってる。追手がかけられていると考えた方がいいだろうし」

「うっ……そ、そんな事、わかってるわよ。わたしはただ、この臭い

路地から早く出ただけだし」

「酒場で酔っ払いに絡まれるよりかはマシだろ？」

「もしそんな不届き者がいたら、魔法でやっつけてやるわ！」

「勘弁しろよ……それこそ、大騒ぎになるじゃねえか」

才人は呆れたような台詞を残して酒場兼宿の方へ走り、そのまま中へ入って空き部屋が無いか確かめた。

幸いその宿では娼婦を雇ってはおらず、その為か部屋は空いていてやっとな落ち着けると胸をなで下ろした才人であったのだが。

ベアトリスを借りた部屋に通した後、やれベッドが固いだのやれほこりっぽいだのと我が儘を言われ、その度に彼女に部屋を出ないよう釘を刺して、貧民街の外にまで柔らかな枕や“まとも”な食事を買い求める為、足を運ぶ羽目に陥ってしまうのである。

まったく、ツいてねえ。

幾度目かの愚痴を吐きつつも毛布一枚で寝転がる床からベッドを見上げ、やっとな寝付いたベアトリスの背をじつとりと覗む。

同じ部屋に同衾する男に対して無防備なのは、彼女がまだ幼い為か、それとも才人を同じ“人間”として見ていない為か。

それまでのワガママな態度も目に余ってはいたが、才人にとっては何となく以前のルイズを思い起こさせ、つい世話を焼いてしまっていた。

元々そういう素養はあったのであるう、甘えて来るルイズの愛くるしさも捨てがたいながら、最近は特にツンとした態度を取るルイズをあまり見なくなった事は案外寂しく感じていた才人である。

否、最近は何もルイズの魅力を引き出すには、日頃ツンとしていて最後の最後で蕩けるような甘さをさらけ出す“意地っ張り”な部分が必要なのだ、とも才人は考えていた。

勿論才人自身の嗜好の話であり、例えば四六時中甘えて来るルイズ

であつてもその愛は強く変わりはないのであるが、どこかルイズを連想させる女の子を見るとつい甘く接してしまう所は才人の悪い癖と言えよう。

だがこの時不幸にも、その才人の悪い癖によって奇妙な事態は悪化の方向へ進んでしまうのであつた。

次の日の朝、目覚めた才人が見たのはカラになつたベッドであつたのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7624i/>

---

ゼロの使い魔 i f / ガンダールヴは夢を見る。

2011年9月5日02時05分発行